國文注釋全書



東宮侍講　本居豐頴
文學博士　木村正辭　校訂
文學博士　井上頼圀

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

緒言

一枕草紙傍註ハ一時軒岡西惟中ノ著ニシテ十一卷トス、一名枕草紙拾穗抄トモ傳ヘタリ、本文ヲ校訂シ其ノ傍ニ註釋ヲ加ヘタルモノナリ、黑川家所藏本ニハ十一卷ノ外ニ圖式一卷アリ、本書ハ此ノ黑川家本ヲ底本トシ、井上博士(頼圀翁)所藏ノ拾穗抄本ヲ以テ校合セリ、

一淸少納言枕草子抄ハ加藤盤齋ノ著、十五卷ナリ、一名枕草子萬歲抄トモ呼ベリ、盤齋ノ註セルモノナルカ故ニ盤齋抄ト云ヘルヲ、イツシカ訛リテ万歲抄ト俗稱シ來レルモノ、如シ、本書ハ傳本ニ依テ本文ニ多少ノ異同アルヲ示シ一段每ニ評論註釋ヲ施シ、マタ更ニ語句ヲ摘出シテ(イ)(ロ)或ハ(一)(二)等ノ合附號ヲ附シテ頭註トセリ、然レトモ今ハ印刷ノ便宜上之ヲ評論註繹ノ次ニ掲載シタリ、黑川家所藏ノ万歲抄本ヲ底本トシ、內閣文庫本ヲ以テ校合セリ、

明治四拾一年十月　編者識ス

目録

以上

枕草紙旁註

全

清如[illegible]之[illegible][illegible]
北窗北[illegible][illegible][illegible][illegible]
江河[illegible]才[illegible]及[illegible][illegible]
又[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]
[illegible][illegible][illegible]百[illegible][illegible]

筆端瀉出人
胸懐之一笑寓不平
乙酉之年十一月之
録一絶詞　惟中自序

枕草紙旁註凡例

一、清小納言篇帙有多少區別也所謂三巻五巻七巻也其中三巻之本少而見者亦少七巻之本書林風月堂開板多行于世今此旁註者有元本五巻自細川玄旨法印傳來而直見授因州士宮本氏孝庸余亦傳受之

一、舊本新本一二之脱落文字之差異混雑而難讀難通今此旁註者考諸本有少々之謬者全隨傳本五巻之正字而定之

一、清少納言所出本文之詩肩歌材隨余拙才委解之且亦近來之鈔義理之謬出所之不明往々解説之

一、枕草紙之題號所謂枕者枕詞之意也草者草案之意而且謙退之謂也一説枕者臣之字也私之謂也

一、一部大意者一統詞華言葉一辨有職之故實也

作者の事

一、續世繼にかの皇后宮の女房肥後守元輔と申すがむすめ清少納言とてことになさけある人にて侍りしがはつとしにまかりかよひなどしてかの宮の事もうけ給りなれ侍りき爲長十訓抄に一條の院雪いとおもしろくふりたるあしたはしちかく出させ給ひ御覽じけるに香爐峯のありさまいかならんと仰られければ清少納言御前に候ひけるが申事はなくてみすをまきあげたりけるいまの世までもめでたき例にいひ傳たり彼清少納言は天暦の御時なしつぼ五人の歌仙清原元輔が女にてやまと言の葉家の風吹つたへたりけるうへこゝろざまわりなく優にて折につけたるふるまひいみじ事おほかりける

草紙賞翫の事

一、清巖茶話に云枕ざうしは何のさほうもなく書たるもの也三巻ある也つれ／＼草はまくらざうしをつぎて書きたるもの也

一、八雲御抄の學書の篇にのせられ所々に詞をも用られし也

清少納言系圖

○天武天皇―舍人親王―貞代王―有雄―通雄―海雄朝臣―房則―深養父―顯忠―一爲泰光

―元輔肥後守―女清少納言

一、まくらざうしは人ごとにもちたれどもまことによき本はありがたきものなりこれもさまではなけれども能因が本ときけばむげにはあらじとおもひてかきうつしてさぶらふぞざうしがらも手がらもわろければこれはいたく人などにかさでをかれさふらふべしなべておほかるなかになのめなれどなをこの本もいとこゝろよくもおぼえさふらはずさきの一條の院の一品の宮の本とてみしこそめでたかりしかと本にみえたりこれが書たる清少納言はあまりゆうにてなみ〳〵なる人のまことしくうちたのみしつべきほどをばかたらはずたんになまめきたることをのみ思ひてすぎにけり宮にも御世おとろへにける後には常にもさふらはずさるほどにうせ給ふければそれをうきことに思ひてまことにまたことざまに身をおもひこともなくてすぐしけるにさるべくしたしくたのむべき人もやう〳〵うせはてゝ子などもすべてもたざりけるまゝにせんかたもなくとし老にければさまかへてめのとでのゆかり有てあはの國に行てあやしきかや屋にすみけるつゞりといふものをぼうしにてあをなといふものほしにほかに出て歸とてむかしのなをしすがたこそおもひ出られたれといひけむこそなほ古き心ののこりけるにやとあはれにおばゆるされば人のをはりのおもふやうなることわかくていみじきにもよらざりけるとこそおぼゆれ

玄旨法しの百人一首の抄清少納言の傳の下にまくらさうしかける人老ののちには四國の邊におちぶれてありきと云々

枕双紙段分目錄

一くるしげなるもの
一ゐせものゝ所うるおり
一とくゆかしきもの
の事
一むかしおぼえてふようなるもの
一ちかくてとをきもの
一うらやましきもの
一井は
一こゝろもとなきもの
一大夫は
一たのもしげなきもの
一風は
一とをくてちかきもの
一しまは
一受領は
一うらは
一したりがほなるもの
一心にくきもの
一だらには
一あそびは
一はたは
一引ものは
一寺は
一ふえは
一どきやうは
一おほきにてよきもの
一まひは
一人のいへにつき〴〵しきもの
一しらべは
一見るものは
一むまやは
一みじかくてありぬべき
一やしろは
もの
一河は
一日は
一岡は
一ほしは

一ふるものは
一さはがしきもの
一月は
一ことばなめげなるもの
一雲は
一上達部は
一ないがしろなるもの
一法しは
一さかしきもの
一みやづかへ所は
一公達は
一たゞすぎにすぎぬるも
一女は
の
一いみじくきたなきもの
一身をかへたらむ人など
一たのもしきもの
一かくやはあらむとみ
一たうときもの
ゆるもの
一ことに人にしられぬもの
一さしぬきは
一せめておそろしきもの
一ひとへは
一うれしきもの
一下がさねは
一歌は
一檜扇は
一かりぎぬは
一崎は
一わろきものは
一きら〳〵しきもの
一扇のほねは
一うちとくまじきもの
一神は
一からぎぬは
一屋は
一見ならひするもの
一女のうはぎは
一裳は

一おりものは
一病は
一見ぐるしきもの
一かざみは
一あやのもんは
一いひにくきもの
以上百五十段

清少納言系圖

△天武天皇—舍人親王（日本紀撰者）—貞代王（サダヨノヲホキミ）—有雄（アリヲ）—通雄（ミチヲ）（賜二清原姓一）—海雄朝臣（ウミヲノ）（筑前守）—房則（フサノリ）（豐前守）—深養父（フカヤフ）（内匠允藏人所雜色）—顯忠（アキタヽ）（イニ泰光（ヤスミツ）下野守）—元輔（モトスケ）（肥後守）—女（清少納言）

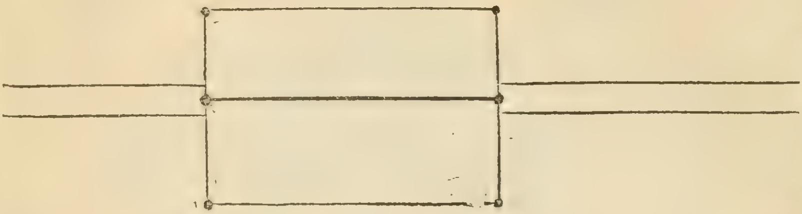
此草紙作者也

題號を枕草紙といへる心は此草紙にこと〴〵なるものめでたきものなど枕詞をかきてさてそれ〴〵書つらねられたれば枕双帋といへるにや但此草紙の奥に云宮のおまへに内のおとゞの奉り給へりしを是に何をかゝましうへの御前には史記といふ文をなむかゝせ給へるとのたまはせしを枕にこそはし侍らめと申しかばさはえよとて給はりたりしをあやしきをこよや何やとつきせずおほかる紙の數を書つくさんとせしにいと物おぼえぬ事ぞおほかるやと云々枕にこそし侍らめとて申うけたるものにかゝれたる草帋なれば枕草紙と申侍る歟

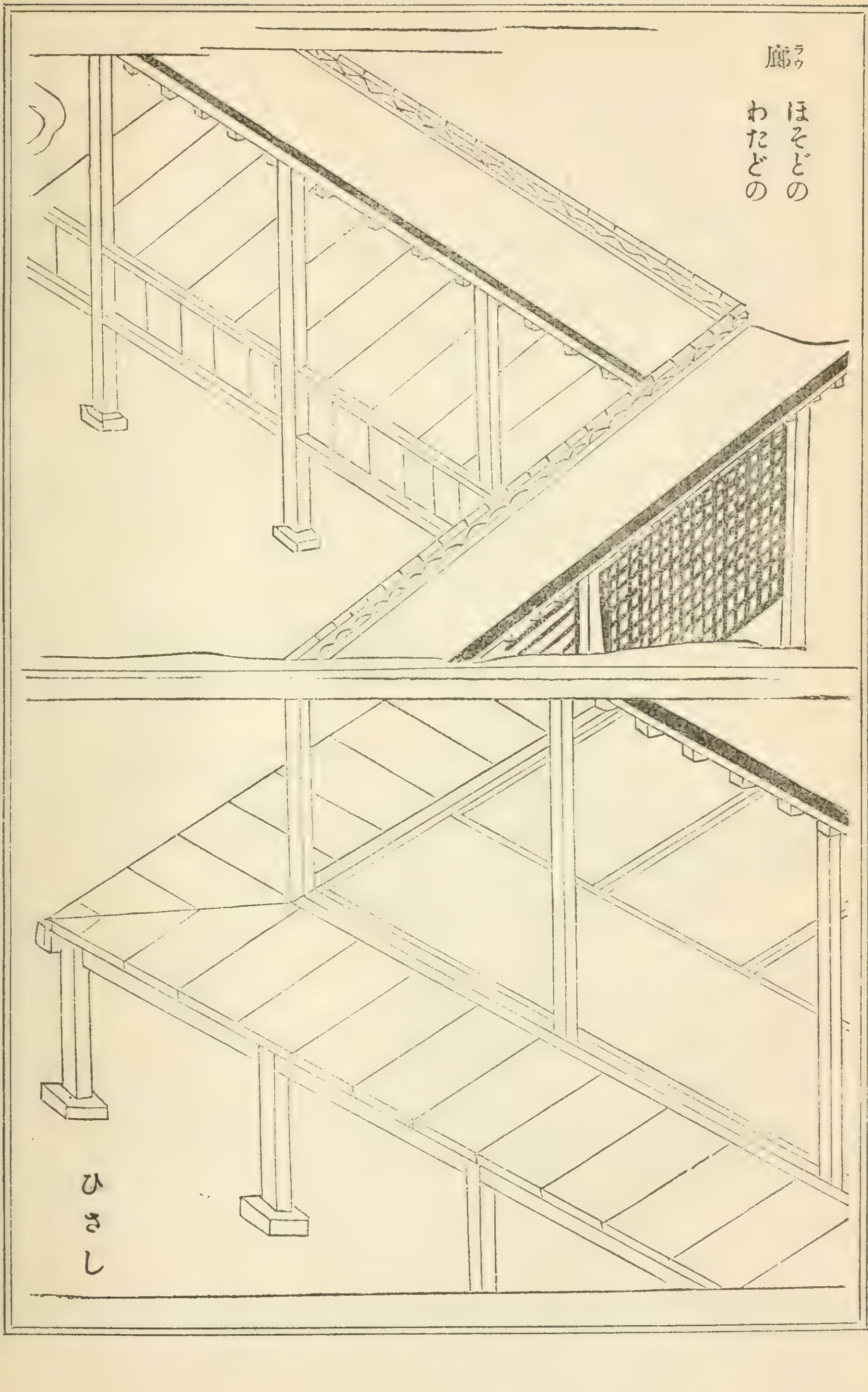
草紙は双帋ともかけり物の下書を草案草藁などいへる心にていまだ清書をもしあへぬを草紙といへり又双帋はかみをならべてかきつらねし心なるべしいづれもむかし物がたりなどの惣名をいふ也

（重複なれども委しければ追補したるもの歟黑川家本のまゝ）

四脚の門

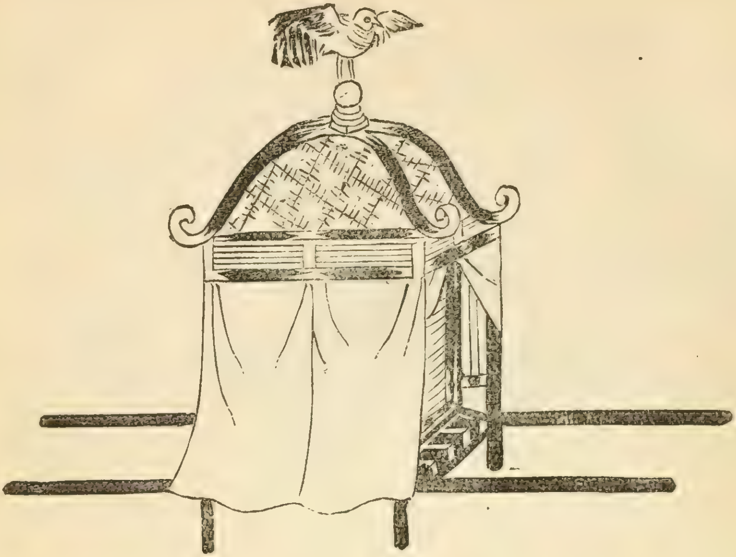






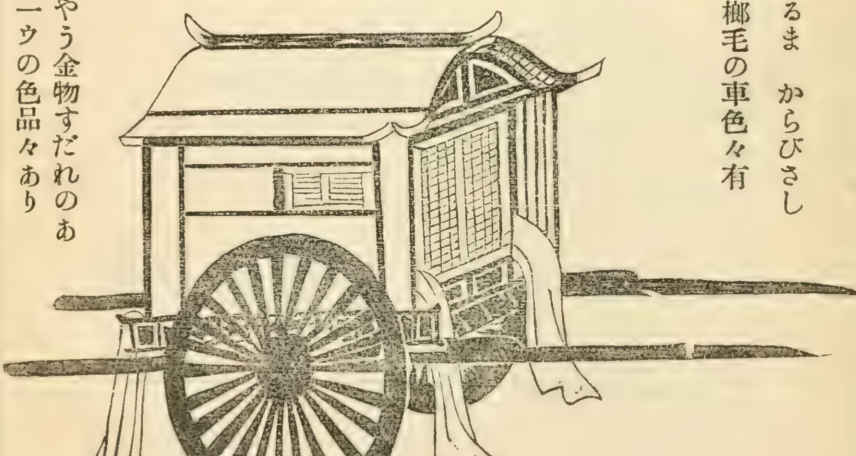
廊（ラウ）
ほそどの
わたどの
ひさし

こし

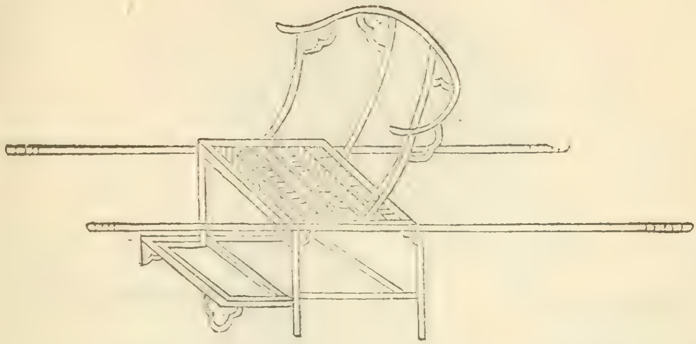


くるま　からびさし
檳榔毛の車色々有

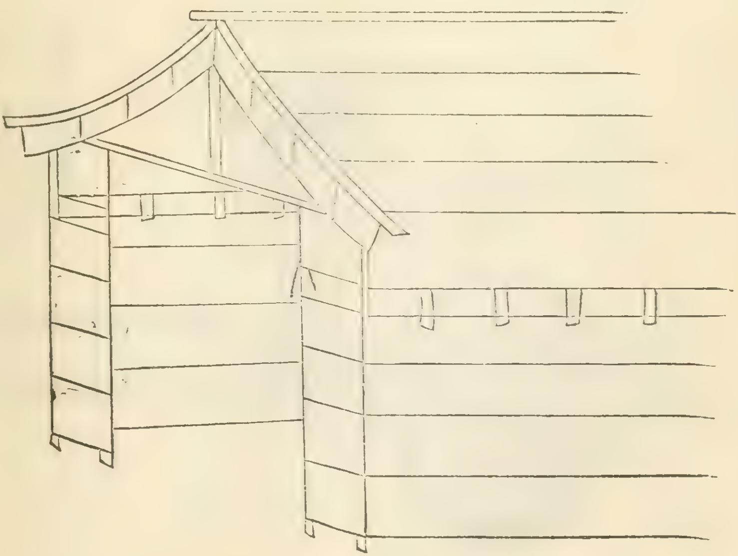
ぬりやう金物すだれのあみ糸一ウの色品々あり



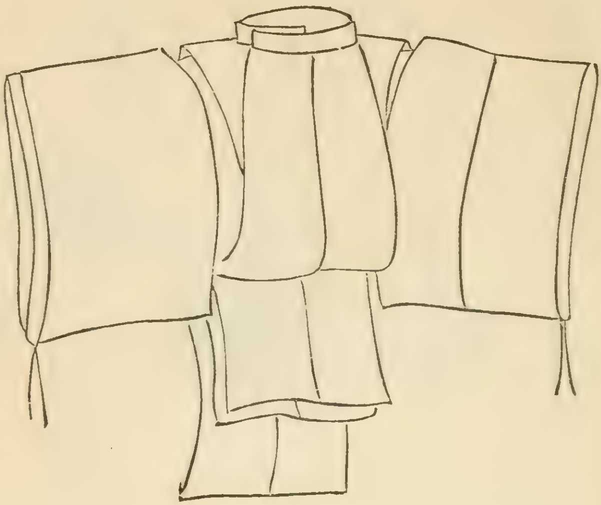
たごし



あげはり



布衣下官の服也



紋のあるはかりぎぬもんなきは布衣と云

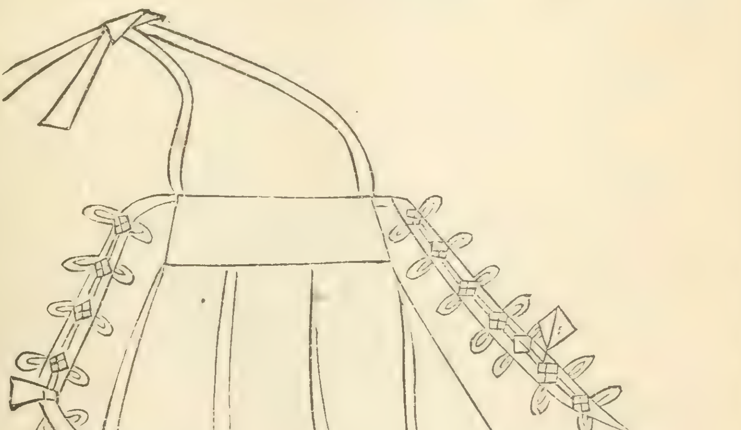
さしぬきのはかま



はかま

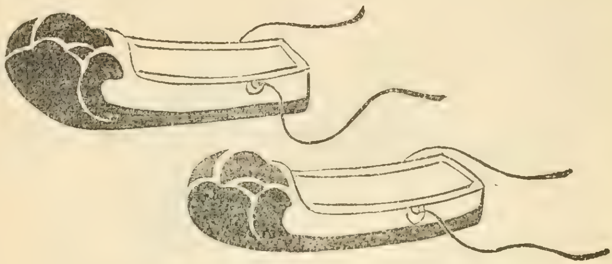


中少將より大臣大將に至まで若年の時は白縮緬あや窠（クハ）にあられのうきもんを用ゆ裏は紅打平絹也最年齢官によりてかはるべし

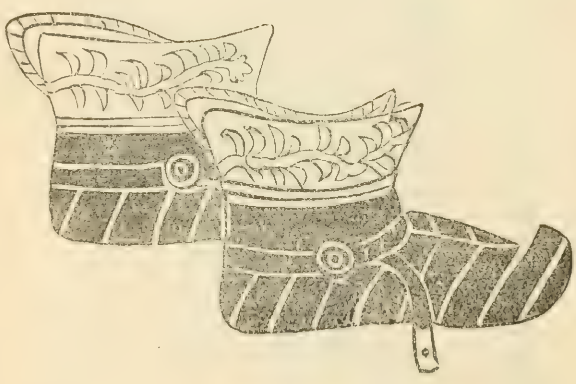


裙（クン）。裳といふ婦人のかざりなり

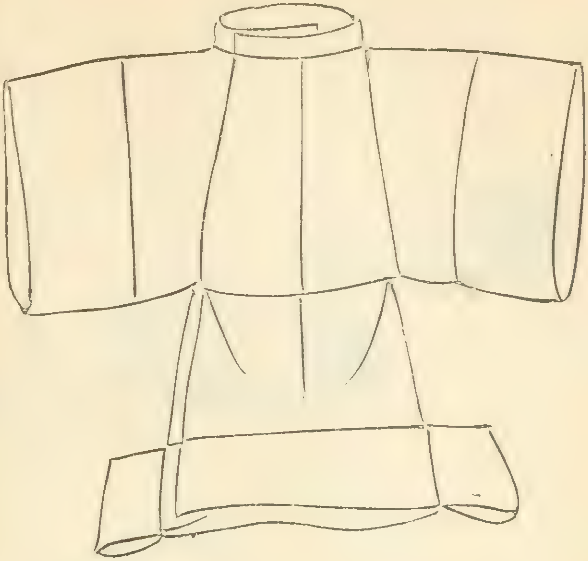
履（クツ）しなぐあり



靴（クワノクツ）



袍うへのきぬしなぐの色あり



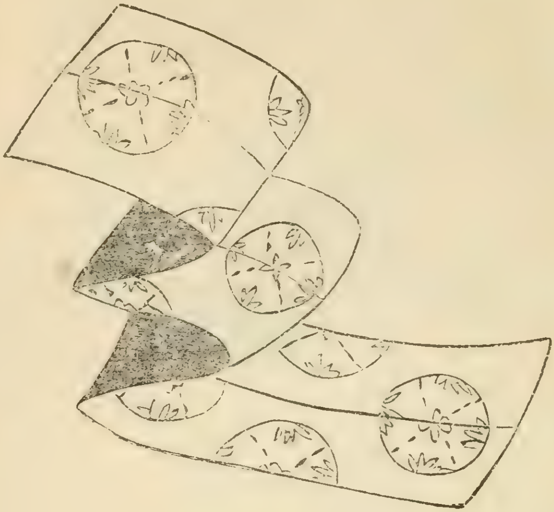
大臣まで袍の文丁子丸杏葉也攝關よりなり雲立涌の文大閤の時雲につる地はこれもしゞらの綾也猶色々あり

半臂（ハンピ）



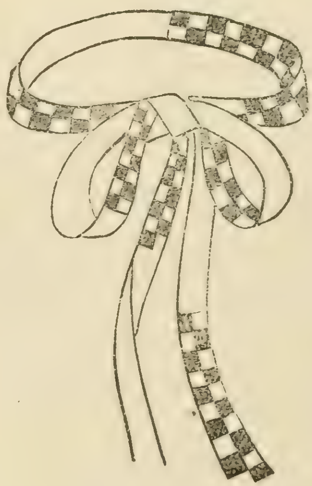
冬は綾をふしがねにそめて板引にして着レ之夏はすゞしの縠文又ふしがねにて染レ之

裾（キヨ） きぬのしりむかしはつゞけて着すれば煩はしきによりてきりはなして着レ之



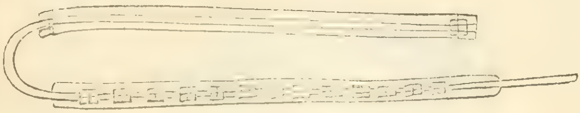
攝家に納言以前八尺大臣一丈關白の時一丈二尺許也
又時にしたがふべし

帯（おび）



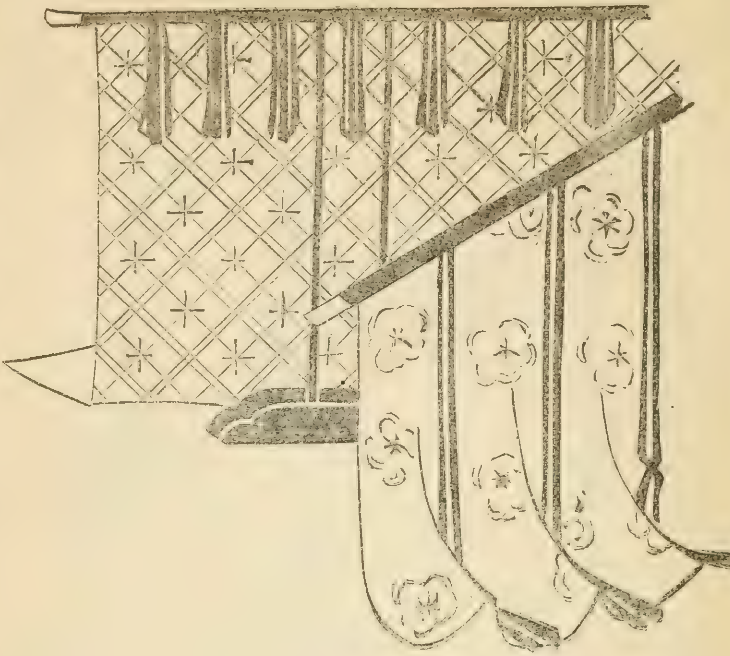
馬瑙帶。犀角帶。烏犀帶。官の高下により色々有

おび



汗衫（カザミ） 幼女のきるものなり





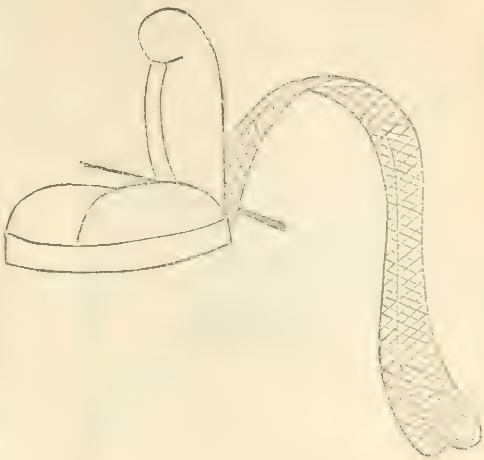
綺帳几帳

三尺四尺きぬはぐもの等品々あり



しとね世俗の蒲團なり

かふり大小其人の頭に[illegible]べし



十五歳まてうす額十六歳已後に厚額を用ゆ舊記に若年賤官の人は十六已後薄額を用ふべし

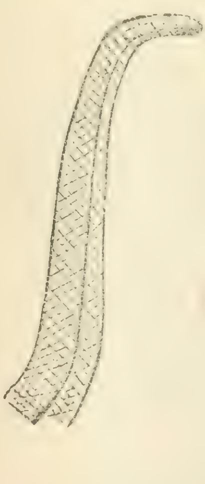
纓ト緌

冠糸也今緌ヲ爲ス二燕尾一亦因テ謂フ二之ヲ纓ト一別ニ設テレ糸ヲ爲スレ緌

緌

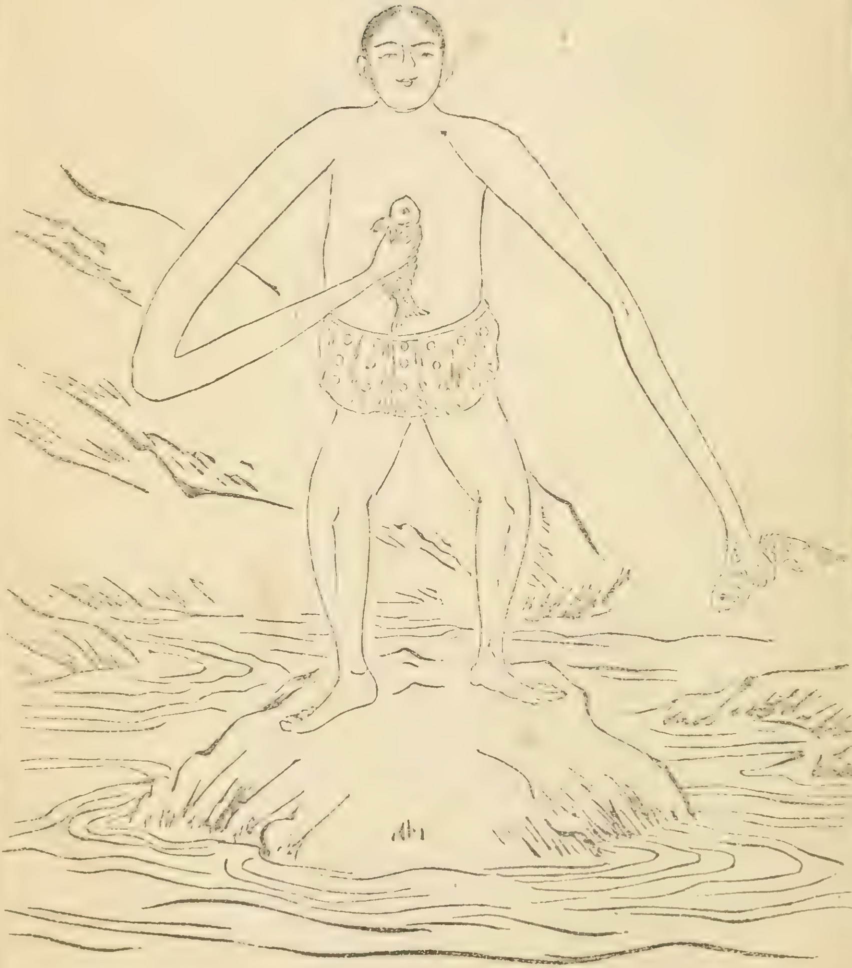


纓



長臂之圖在二焦僥東一
捕二魚水中一兩手各操レ魚

是手ながなるべし



長股之圖在ニ赤水東ニ一曰ニ長脚ト

是あしながなるべし右二圖山海經ニ有



枕草紙旁註卷一

春はあけぼの（曙）やう／＼（漸）しろくなりゆく山ぎは（峯の事也ふもとにはあらず）すこしあかりて（明りて也二說上りて也）むらさきだちたる雲のほそくたなびき（靉靆の二字）たる

○是は序分の樣に四季折々のおもしろきありさまを書きたり草紙ものがたり等の一體也紀貫之が古今の序源氏まぼろしの卷雅（ガ）俏齋（セウサイ）が詞東坡が四時の序晋（シン）の淵明が四時の詩近くはつれ／″＼草の十九段皆四季の風景を筆にまかせて各こゝろをやり侍る也借天地一元の春の景氣ことにあけぼのを賞する事古今の詩賦文章かぞふるにいとまあらずあけぼの白くと書し白の字はかの蘇子瞻（ソシセン）が前赤壁（セキヘキ）の賦に不レ知ニ東方之既白一と書たる筆法和漢心のかなひたる奇妙の事也これより後淸少納言が書たる本文の本歌叶歌のほか詩歌引用る事おほくせずたゞ此草紙の文章の明らかなるをみるべき也殊には山川土地鳥獸草木よろづものゝ名おほやけわたくしの故實（コジツ）をしらしむるさうしなればその事その物を明らむべき也

なつはよる、月の比はさら（殊さらおもしろしと也）也 ○晝は炎熱をくるしむものなればみなよるの景氣をのべたり

やみもなを（心アリ）ほたるとびちがひたる、雨のふるさへ（副の字也）おかし（ものをそへたる心也） ○月の夜は殊更也やみとても景氣ある事也

秋はゆふぐれ、ゆふ日はなやかにさしてやまのはちかくなりたるに、からすのねどころへゆくとてみつよつふたつなどとびゆくさへあはれ也 ○こゝもとの躰は丁直卿（テイチョクケイ）が詩に茅檐隱レ背數ニ歸鴉一冷淡思量到ニ日斜一とつくれるにさながら似かよひたり

まいて（ましてと也）かりなどのつらねたるがいとちいさく見ゆるいとおかし、日入はてゝ風のをとむしの音などいと（いふべき）あはれ也（などはなんどゝはれてこの後よむべし）

冬は雪のふりたるはいふべきにもあらず（やうもなき也）、霜などのいと白く、又さらでも（さなくても也）いと寒き（似）に（にの字入て見るべし）、火などいそぎおこして（熾）、すみ（炭）もて（持）わたるもいとつき／″＼し（似合しき也）、ひるになりてぬるく（溫）ゆるび（綏）もてゆけば、すびつ火おけの火（火爐の字炭櫃ノ二字モ（イロリ也））もしろきはいがちになりぬるはわろし ○齋部正通說 春之言本牙（コトハコノメハル）張也夏之言熱（アツ）也秋之言野山緋（アケ）也冬之言冷（ヒユ）也晝（ヒル）之言干（ヒル）也夜之言寄（ヨル）也 是

皆和訓の心也是までの一節に四時のありさまを事ずくなにあらはしたり
これは正月三月五月七月九月十月十二月すべて節につけつゝひとゝせながらおかし 〇下の段の例日を書むとて序文に月をすべたり二月六月十一月の三ケ月を除したり文の一體也異本に四五月七八月と書て十一月の入たるもあり〇正月たかきいやしきゆきゝする故むつび月といふべし〇三月草木彌おふる故に彌生月といふ也〇四月うの花月といふをあやまる〇五月さなへ月といふべし〇七月たなばたにかすとて文どもをひらく故也〇八月木の葉もみぢしておつる故に葉おち月といふべし〇九月夜なが月といふべし〇是まで清輔奥義抄の説也〇十月六陰にして陽なき月なればかみな月といふとぞ猶此事說々あり十二月師走と書もろ〳〵いそがはしくはしりありく月也又萬事しはつる故しはつといふこゝろ也とぞ萬葉に極の字をはつるとよませたり
正月一日はまいて空のけしきうら〳〵とめづらしく（和ノ字）霞こめたるに 〇說文曰月一日始蘇故月初一日爲

〻朔 月と日とおなじく立はじまる故に月日たちといふべきをついたちといふ也〇唐衣はるたちきぬときゝしより日のうら〳〵となりにけるかな（夫木抄）
世にありとある人は、すがたかたちこゝろことにつくろひ、君をも我身をもいはひなどしたるさまことにおかし、七日雪まの若菜つみ青やかに、例はさしもさるものの目ちかゝらぬ所に、もてさはぎたるぞおかし 〇公事根源に供二若菜一内藏寮幷に内膳の司より正月上の子日是を奉る也寛平年中よりはじまれる事也延喜十一年正月七日に後院より七種の若菜を供す又天暦四年二月廿九日女御安子の朝臣若菜を奉るよし李部王の記にみえたり若菜十二種供する事あり常は若菜は七種の物也なづな、はこべら、せり、あをな、ごげう、すゞしろ、ほとけのざ也、正月七日に七種の菜羹を食すれば其人病なく邪氣を除く事侍る也とぞ
白馬みむとて 里人はくるまきよげにしたてゝ見にゆく（公事ノツトメニアツカラヌイトマアル人也） 〇公事根源云此節會の事大かた元日におなじあるひは青馬の節會とも申也其故は馬は陽獸也青

は青色なり是により正月七日に青馬をみれば年中の邪氣を除くといふ本文あり三七廿一疋ひかるゝ也三は三才にかたどり七は七日にあへるよし寛平の御記にのせられたりけふの毛づけの奏にもみな（奏時にては青馬今は白馬）あし毛と計ありて是白馬を本とする故也

年中行事五十番歌合 〇根の葉の色にかはらぬ青馬をひけばこれといふべし もや子の目なるらん 頓阿法師

中の御門のとじきみ 関 引いづるほど（白馬見物の車を引イヅル也） 〇拾芥抄云春華門（建禮門也）謂二之白馬陣一也 是今下立賣に當る也 〇内裏の南面に當りて春花門にいたる筋也これ中の御門也

同車ニ三人乘ルモノハ車ノ中ノカシラ也 擾頭

かしらどもひと所にまろびあひて、さしぐしもおちよういせねば、おれなどしてわらふも又おかし 〇一説さしぐしは下女のたちまじひせり合白馬みるさま也しかれどもこゝはいまだ車にのりて中門のとじきみのたかき所に引出とて同車の女どものさしぐしのそうたい也

左衛門の陣などに 〇職員令云弘仁二年改二衛士府一曰二左衛門府一衛門府ハ禁門奉行也東建春門左衛門陣也西宜秋門右衛門陣也 〇愚おもふ衛士三百二十人門部等この衛門府の下にあり凡宮門はみな衛門府のしる所なり門々の開閉は門部これを役す

殿上人あまたたちなどして 〇逍遥院殿の説に四位五位までも昇殿をゆりたる人をば殿上人といふなり是を雲客ともいふ

舎人の弓どもとりて、馬どもおどろかしてわらふを、わつかに（わつかに也こなたより）はつかに見入たれば 〇舎人 職原抄可レ然之侍任レ之攝政關白給二内舎人隨身一殊撰二其器一召二仕之一若二寺任レ之時二姓内一又任二左衛門尉一此時或呼二平内左衛門源内藤内一（是舎人の字をきらひてなり）左衛門の官の子官なければ衛門太郎衛門二郎とよぶ也 〇隨身有二兩樣一一ハ本府隨身謂二御免一召仕也將曹府生番長府生隨身相當七位下 小隨身武官家召仕也不レ謂二御免一 職原抄二帶レ刀舍衛供奉雜使一若駕行發衛前後 〇弓の事 大舎人式云正月七日節會兵部省進二弓矢一舎人即レ門其詞云御弓事申給率止

内舎人隨身等寄事

門ノ外ニ向フ方よりいる也 白馬いつかで内裏のたてじとみな

たてじとみなどの見ゆるに、とのもりづかさ女官な

みるなり
どの行ちがひたるこそおかしけれ　○職原主殿寮頭一人掌供御輿輦蓋繖帷帳湯沐洒掃殿庭及灯炭燎等之事女官同○凡主殿司に五位を給ふ赤袴を着しぬひはくの小袖をきるなりされば職原抄主殿司者美麗之女也丞人之内可然者補此職 公人とは下﨟をいふ
ふり美麗とはあかぬ　女官は職原云主所女官御装束物沙汰不可入日供御 御装束とは御器などいふなり不可日入とは御ぜんなどとらざる事也又の譏もその所ならざるを装束といふ也○女官ニヨルクハント引べし
多くの人也
いかばかりなる人九重をならしてらむとおもひやらる
る宮中をなりとはいすへて宮中の御事也　○九は陽數重は四町をいふなり四九三十六町の帝都也是天の三百六十日にかたどるなり詩にも九重城闕とつくれり
車の内よりなり
内にも見るは、こゝにて心に何をきるなりげんじにも此筆法あり　いとせはきほどにて舎人がかほもきぬもあらはれ ぜりあげて舎人がかほついみのぬけあらはれ
白張きたるがだゞくさにきなしたるをいふ也 たとへ也
しな
しろきもの丶ゆきつかぬ そらはぬ心也　所は、まことに
り
舎人のはだへ也 白にくりにたとふ
くろき庭に雪のむらぎえたるこゝちしていと見ぐる
沛艾ノ二字チドリアガルとよむなり
し、馬のあがりさはぎたるもおそろしくおぼゆれば、
馬のさはぐに車をよけて引入なり
引いられてよくも見やられず

齋ノ字
八日、人々いもゐしてはしりさはぎ、車の音もつねよりはことに聞えておかし　○公事根源云八日御齋會これは大極殿にて八日より十四日まで七ヶ日の間最勝王經を講ぜられて朝家を祈申なり 異本にいはひしてとあれども余が傳來の本又世上のむかし本いもゐとあり
十五日は、もちかゆのせくまいる 餅 粥 節供 進　○節供とは正月三月などの節ごとに何にても天子へ供へ進るを云なり公事根源十五日獻ニ御粥ニ寛平の年中よりとしごとに是を奉る七種の粥とは白穀大豆小豆粟栗柿小角豆など也九條右丞相の御記にみえたり
尻ハリノ事也
かゆの木引ぐして　○十五日の祝儀に尻うつ事たしかなる來由はしらず異苑云紫姑本人家妾也爲ニ大婦ニ所レ逐正月十五日感激而死○紫姑姓何名媚字麗卿萊陽人也壽陽の李景といふものむかへて妾とす本妻これをねたみてをひうつ正月十五日に死す後に厠の神に封す氏族譜にも出たり
おとこの尻うたんとてなり
家のごたち女房などのうかゞふを　○後達　禮記云后之言後也在ニ夫後ニ故女曰ニ後達ニ○女房上﨟中﨟小上﨟等都謂ニ之女房ニ

うたれじと用意して、つねにうしろをこゝろづかひしたるけしきもおかしきに、いかにしてけるにかあらむ、うちあてたるはいみじう興ありとうちわらひたるもいとはへ〴〵し(最栄にさはしき也)、ねたしとおもひたるもことはりなり(うたれたる人なり)、そこ〳〵りあたらしうかよふむこぎみの(そんじやうそこ也 初むこなり)、うち(内裏)へまいるほどを、心もとなく所につけて(道のほどたり)、われはとおもひたる女房ののぞき、おくのかたにたゝずまふを(むこた)、前に居たる人はこゝろへてわらふを(うたんとする人の)、あなかま(穏ノ字)(あらかし)とまねきかくれど(ましだまれなり)、君しらずがほにて(むこ)、おほどかにてゐたまへり、こゝなるものどもとり侍らむなど(うたんとてのはかりごとなり)(むこのもとへ)(みな〳〵なり)いひより、はじめてうちてにぐればあるかぎりわらふ、おとこ君もにくからずあいぎやう(愛敬)づきてゑみ(咲)たる、ことにおどろかず、かほすこしあかみ(赤面)て居たるもおかし　○むこ君のさまのどかにもてなしはらだつけしきもなくさすがに愛らしくいさゝかはぢたる體おとなしき心づかひなり

またかたみにうちておとこをさへぞうつめる(たがひに也 女を)(女はいふに不及となり)、いかなるこゝろにかあらんなき(泣)はらだち(敦圀)、うちつる人を

のろひ(呪詛)まが〳〵しく(悪の字枉ノ字)いふもおかし　○是又いはひ事のならひなるをさまあしく腹立人の上をいひあらはしたり

うち(内裏ヲハジメアリケ也 貴人也無上ノ字)わたりなどやんごとなきも、けふはみだれて(入みだれ何の)かしこまりもなし(おそれもなしとなり)　○この一節の心は内裏より里々まである事をおとこ女うつとて入みだれうちありく事なればいからずして興ずべきとの結語なり

除目(ヂモク)(前官ノ名ヲノゾキテ當官ノ名ヲシルス心也)のほどなど内わたりはいとおかし　○公事根源十一日あがためしの除目縣召は外官をむねと任せらるゝ也外官とは諸國の司也田舎を縣といふ外國の人をめして任官を授らるればかく名付るにや

雪ふり氷などしたるに、申ぶみもてありく　○除目の書樣執筆の大臣參て御殿のひろびさしにて事を行なふ申文など色々多く侍りて大間にかくに尻付とていとわづらはしく執筆の難儀にて家々の口傳流々の故實どもさま〴〵ならば四ケの大事にて有職(ユウソク)の家にて殊にさたするなるべし○江家次第云除目其日大臣參上着(ク)レ座納言以下執ニ筥(ハコ)文一下略○續文粹六云叙位從五位上大江朝

臣時相遇以讒臣言時頼…恩依安芸國任
中將…功…許…任…可…狀云々
當時…去恩…拜…任…一…儒者之貴
一…之道…寛仁四年正月
十五日 …中文…
四位五位わかやかにこゝちよげなるはいとたのもし
げなり 四位五位に下らうなれどもわかきものな
ればゆく末…がたきにあふて辛勞したりともす
ゑたのもしき心なり
下らう
老いかしらしろきなどが、人にとかくあないいひ、
わが才能文家の先例などいひたつるなり
案内
女房のつぼねよりて、をのが身のかしこきよしなど
こゝろをやりてときこゆるも、わかき人々はま
老人が
奏聞なり
ねをしてわらへどいかでかはしらむ、よきにそうし
たまへけいし給へなどいひても、得たるはよし、えず
啓ノ字中の心なり
除目のあつかり得たるはよし
なりぬるこそいとあはれなれ
さなきはあはれなりといふ心也
二月三日うら／＼とのどかにてりたる ○杜甫詩
三月三日天氣新長安水邊多麗人
三日にけふさきしは折からおもしろし
もゝの花のいまさきはじむる ○紀中納言桃始花詩

序 曉風緩吹千音之唇先咲
柳などいとおかしきこそさらなれ ○何景明 三月
長安…風吹…
それもまだまゆにこもりたるこそおかしけれ、ひろ
ごりたるはにくし ○青柳のまゆにこもれるいとな
ればはるのくるにぞ色まさりける 躬恒
花もちりたる後はうたてこそ見ゆれ、おもしろくさき
心付 うたてしきなり
たるさくらをながく折て、おほきなるはながめにさ
心あり 心あり
したるこそおかしけれ
みな花をもてあそぶにいろあることば也
さくらのなをしに
よみかたになふしとよむ
折ふしの装束時節のけはひなどいろ／＼の
上の文をうけて
およそかして おそれ…
○…直衣…色也冬春著之 ○
當…用…直衣…時…綾織物直衣 文小葵
裏…也…服…後…年齢
いだしうちぎして
一襲…
○うちぎは
漢語…婦人の上衣也上…あるじのきるものなり
大うちぎ小うちぎとて大小あり
賓客
まらふどにもあれ、御せうとのきんだちにもあれ、
中宮ノ兄弟 公達
そこらなり
そこちかくゐて物などいひたるおかし ○職原抄

公達者三家等花族也稱二三家一者中院閑院花山院又大臣大將子至二中將納言一皆公達也

鳥虫のひたい(額)つきいとうつくしうてとびありくおかし　○白氏文集井底引二銀瓶一詩嬋娟兩鬢秋蟬ノ翼宛轉雙蛾遠山色是人のまゆひたいのうつくしきをたとへてつくりし也　とびありくは鳥むしの繪に書しなるべし文集この句の上に舉動有二殊姿一かゝるおもかげもうかびたる筆法なり

祭のころはいみじうおかしき　賀茂の祭四月中の酉の日行はる欽明天皇よりはじまるなり是を國祭といふなり關白の賀茂詣といふ事あり攝政右大臣謙徳公よりはじまる○諸社記云欽明天皇御宇天下擧テ吹レ風雨零ル而時勅ニ卜部ニ令レ卜ニ賀茂崇ヲ撰ニ四月中祀ニ馬繫鈴人蒙ニ猪影ヲ而馳騁ヲ爲レ祭天下豊年始ニ乘馬ニ兼敦云於ニ造社ニ者天武六年也於レ祭者自ニ欽明ニ被ニ始行ニ

木々の葉(茂ノ字)のまだいとしげうはなくて、わかや(嫩ノ字)かに青みたるに、霞も霧もへだてぬ空のけしきの、(夏の景なり)(無小大ノ三字)なにとなくそゞろにおかしきに、すこしくもりたるゆふかた、よるなどしのびたるほとゝぎすの遠うそらみゝかとおぼゆるまで、たどたどしき(初音を聞なれぬ心也)を聞つけたらんなにごゝちかはせん　○時鳥なきつるかたのしのひ(新古今)音に心ゆるすなゝをまたれつゝ

祭ちかくて青くちゝ葉ふたあひなどのものどもをしまきつゝ(祈ふしの装束なまつりのための用意にするなり)　○覺悟抄云青朽葉者表青赤色黒裏青老人着レ之四五月用レ之當家裝束書同○源氏弄花　紅と青花とにて染るを二藍といふとぞ當家の書同四位以下夏の下がさねの色とあり

ほそびつのふたにいれ(ヌリチケトいふものなり源語の説)紙などけしきばかりつゝみ(衣裝ヲ)てゆきちがひもてありくこそおかしけれ、(祭ノハレニモト、又カリナドスル體也)すそご(下濃)む(村)ら紺ごまきぞめ(卷　染くゝしぞめなり)などつねよりもおかしうみゆ、わらはべのかしらばかりあらひつくろひて、(頭をきよめたるなり)なりはなをほころびたへみだれかゝりたるもあるが、けいしくつ(系鞋)などのを(緒結)すげさせ、うらをさせなどもてさはぎ、い(くつのうら)つしかその日(祭の日)にならむといそぎはしりありくもおかし　○けいしにくつの緒すげさせとありそれは關白(異本に)の家の家司(ケイシ)に也

祭にわたる人のわらはげにさはぐさま也　装束しありく也又さはあやしうおどりてありくものどものさうぞきたてつぐ心にや也

集れば、いみじうちやうざといふ法師などのやうにね呻りさまよふ　○ちやうさ長者と書也法師の長の心也僧綱也

子どもを祭にわたす親の心也
いかにこゝろもとなからんほどにつけて、おほやう供扇行はゝね女などのともして、つくろひありくもおかし

異本におやうば女あねなどのとあり

總　ことゞゝなるもの　題ノ心きゝ耳ことゞゝしきもの又言のことなる心又すべて事々とす

耳にはげたきこゆ　法しのことば　○栂尾明恵上人の阿字の詞又證空上人の四部の詞などつれゞゝ草にもあり法師の詞やゝもすれば經文語になる也ことゞゝしき物也

男のはつよく女のはやはらか也
おとこ女のことば、げすのことばにはかならず文字あまり文字也したらぬこそおかしけれ是等は聞みゝことなるものなり

思はん子を法師になしたらむこそいとこゝろぐるしけれ　○雜阿含經云何名法師佛云若於色說是生厭離欲滅盡寂靜法者名法師於受想行識同句チキリテシルベシ

さるはたのもしきわざを、たゞ木のはしなどのやうにおもひたらんいとおしけれ　○さるはたのもしきとは思はん子を法師にするはくるしけれどもまた一子出家すれば九族生天の理ある事をいへりこゝにて何をきるされども人には木のはしのやうにおもはるゝと落着したる也○梵網經云一切衆生眼不欲見犯戒之人畜生無異木頭無異この經の上の文に若出家者入房舍城邑宅之中鬼復掃其脚跡一切世人罵言佛法之中賊

精進　さうじものゝあしきをうちくひ　○知度論云一身精進爲小一心精進爲大又勸精進則爲佛道

寢、字女ノいる事也出家ハ戀ちの事
いぬるをもわかきはものもゆかしからん、女など忌のある所をもなどかいみたるやうにさしのぞかずもさしのぞかいではといふてには也　たまゝゝのぞけばよくもいはぬとなり　わかき出家ハあらん、それをもやすからずいふ、ましてげんざな云ニ不足老々。げんじやは心もちくるしきとなりどのかたはいとくるしげなり　○驗者の源は役の小角より代々傳はれり又醍醐の聖寶古今の作者也は中興一流の祖也

御嶽　修行に
みたけくま野、かゝらぬ山なくありくほどに、おそろげんじやのしるしなりはやる也しきめも見、しるしある聞えいできぬれば、こゝかし

こによばれ、ときめくにつけてやすげもなし　○みたけはよし野金峯山也神名帳大和國吉野郡吉野水分社吉野山口神社金峯神社世にいふ藏王權現句大兄廣國押武金日天皇也是卽安閑天皇也○くまのは神名帳紀伊國牟婁郡熊野早玉神社　按速玉男事解之男伊弉冊尊是熊野三所權現也古今皇代圖云崇神天皇六十五年始建二熊野本宮一景行天皇五十八年建二熊野新宮一

いたく（強つよく也）わづらふ人にかゝりてもの（つきもの也）のけてうずる（調伏也）もいとくるしければ、（困クタビレル也）ごうじてうちねぶれば、ねぶりなる（人の評判する詞也）どのみしてとがむるもいと所せく（所せばき也　きうくつなる心）、いかに思はん（出家の心なり）とこれはむかしの事也、いまやうはやすげなり　○是まで法師の上のきゝみゝこと〳〵しうて心の安からぬをいへる也されど今はやすげなりと古今の法しのけちめをあかせり所詮おもはん子を法師になしたらんこそ心ぐるしといふ所に落着したり

大進生昌が家に宮の出させ給ふに　○大進　職原名家五位任レ之尤可レ撰二其人一也大進奉二行宮中諸公事一如二禁中職事一仍非二器用者一不レ任レ之

令　大進一人　無レ權禁中職事ハ藏人之事也○東宮の大進といふは東宮のもとにてめしつかはるゝものなり

生昌　平民系圖云

●桓武天皇…葛原親王─高棟王─惟範─時望─珍材─惟仲中納言從二位
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└生昌播磨守正四位下藏人

○宮は中宮定子也法興院攝政兼家公男道隆の女子也○なりまさが家に宮のいで給ふ事　長保元年六月十四日内裏燒亡十六日行二幸一條院女院御所一也十一月一日女御入内七日中宮（定子）皇子誕生長保二年二月十日女御彰子立レ后宣旨之後退出廿五日立レ后十一月中宮定子入御十八日一宮御百日三月廿七日出二御生昌宅一

ひんかしのかどはよつあし（四足ノ門ノ立ヤウ外ニ圖アリ）になして、それより御こしはいらせ給ふ、北の門（たゞのもん也）より女房の車ども、陣屋の（公家ノ番所也）ゐねは入なんやとおもひて（亥子の比は也　又ハ衛士番ノモノ居ネバともみるべし）　○大進生昌が宅へ夜半ばかりに入御なれば近衛の陣に宿直するものはやの内へ入てねぬらんとなり○北山抄云亥子時左陣毎

剋夜行壯宵剋右陣勤(ツトム)レ之
(夜ルナレバ人モ見ズトツクロハヌ躰也)かしらつきわろき人もいたくもつくろはず、よせて(車ヲ)
おるべきものとおもひあなづりたるに、(強)(清濁兩義也)びらうげの
車などは、門ちいさければさは(障)りてえいらねば　○
檳榔毛(ビラウゲ)赤色ノ簾錦ノヘリ　江記云執柄(シツペイ)以後(ノ)紫織物以前(ニ)
蘇芳織物(スホウノヲリモノ)ノ蘇芳末濃(スソゴ)下簾(シタスダレ)雲繝緣(ウンケンベリ)或時被レ用ニ青簾革(オヘ)
緣(ベリ)一也青末濃(スソゴ)下簾金銅金物(コンドウカナモノ)、(シテ)榻○西宮記云檳榔毛太
上皇以下四位以上通ニ用之一非參議不レ立レ榻○紹巴
法橋の說はびらうげの車びんろうじの葉をまなび
てかざる也　この車にひさしざし(のひさし色々の故實あり事おほき故略之)　からびさし　たゞ
(莚道むしろの道に設事也)例のゑんだうしきておるゝに、(車より　門ノちいさきに車のすぐにいられば也)いとにくゝはらだゝ
しけれどいかゞはせん、(車よりおりて行を　にくしなり)殿上人地下なるもちんにた
ちそひみるもねたし　○殿上人右に註す地下はす
べて四位五位の人昇殿(セウデン)ゆるされぬをいふなり
(中宮の　女どもノ車より下リタル事なり　中宮の御門ヲ入時計)
御前に參て有つるやうを啓すれば、こゝにても人は
(にあらずとなり　前ノいたくつくろはぬニあたりて)
見るまじくやは、などかはさしもうちとけつるとわ
(なり　清少詞コヽハ見ナレタル容ナレバはづかしからず)
らはせ給ふ、されどそれはみなめなれて侍ればよ
(となり　車ヲ一キハシズテ、けつかうならば見玉フモコトハリト也)
くしたてゝ侍らむにしこそ、おどろく人も侍らん、

さてもかばかりなる(是ホドナル也)家に車いらぬ門やはあらん、み(大進ノ)
(進が)えばわらはんなどいふほどにしも(さいふ内ニといふ詞也　大進詞)是まいらせんとて
(車ノ中ニアリツラン)御すゞりなどさしいる、いで(乞ノ字發語ノ詞大進ニ云カケタル)いとわろくこそおはし
(詞也)けれ、などてか(なにとてかなり)、(大進)その門せ(狹)ばくつくりてすみ給ひける
ぞといへば、わらひて、家のほど身のほど(ヘリクダリタル詞也)にあはせ
て侍るなりといらふ(應答なり)、されど(少納言詞)門のかぎりをたかくつ
くりける人も聞ゆるはといへば、(大進)あなおそろしとお
どろきて、それはうこう(于公)が事にこそ侍るなれ　○前
漢于定國(カンノウテイ)字曼倩(マンセン)東海人也其父于公爲ニ縣獄吏(ケンキヨクリ)郡決(ケツ)
曹一決レ獄平(タヒラカ)レ羅(カヽル)ニ文法一者于公所レ決皆不レ恨郡中爲
レ之立レ祠(シ)始其閭門(リヨモン)壞(ヤブレ)父老共治レ之于公謂云少高(シク)ニ大
閭門一令レ容ニ駟馬高蓋車一我治レ獄多ニ陰德一未ニ嘗有(ラル)一
レ所レ冤子孫必有ニ興者(ヲコル)一至ニ定國一爲ニ丞相一封ニ西
平侯一子孫永爲ニ御史大夫一封レ侯(ラル)(●是を蒙求ニ于公高門と標題にあげたり)
老(タル)心　學者の官なり　于公の故事を
ふるきしんじなどに侍らずはうけたまはりしるべく
も侍らざりけり　○進士　大樂正論ニ造士之秀者(ヒデタル)一以(テ)
告ニ於王一升ニ諸司馬一曰ニ進士一其事見ニ於王制及周
官樂正之職一此進士之始也事物紀原三卷

ひげの詞なり　儒道也　立入也
たま〳〵この道にまかり入にければ、かうだにわき　かやうにうかゝう事と
心得しと自賛なり　清詞門ノツクリヤウあしければ儒道モかゝ
まへられ侍るといふ、その御みちもかしこからざン
しこからじとなり　つちの上ニ
めり、ゐんどうしきたればみなおち入てさはぎつる
大進いひわけなり雨ゆへにさはかしかりつらんと也
はといへば、雨のふり侍ればげにさも侍らん、よし
門の事だ　退去也大進事也
〳〵又おほせかくべき事もぞ侍る、まかりたち侍な
中宮詞　大進がにげて去リシ事
んとていぬ、なに事ぞ、生昌がいみじうお
去なり行ノ字モよむ
也恐ノ字　別の事にあらず清少詞
ぢつるはととはせ給ふ、あらず車のいらざりつる事
つぼねへ　生昌の家ニテ一所ニ居ル事也　上ろ
いひ侍るト申しおりぬ、おなじつぼねにすむわかき
う中ろうまじりて也　戸のかけがねのかゝらぬも何もしらずと云心
人々などしてよろづの事もしらずねぶたければみな
女房たち　タイ　廂　伊勢モノ
ねぬ、ひがしの對の西のひさしかけてある　○愚見
カタリノ詞也
抄云南の寝殿にあひならべてにし東につくりて各
タイ
中門をたてなどしたるを西の對東の對といふ也
曹子なりつぼねの事也　鎰匙ノ二字
北のざうしにはかけがねもなかりけるを、それもた
大也　案内　さけがねの
づねず　案内しなればあないをよくしりてあけてけ
所なり　ひょんなな心也、ぬれたる蔵並ゐごゐなど也ばみはてには也大
り、あやしうかればみたるものゝこゑにてさふらは
進事也　それへ参さうらはんに也　大進が女房ども
んには、いかゞとあまたゝびいふこゑにおどろきて
灯臺　コノ光ニテよく
みれば、木丁のうしろにたてたるとうだいのひかり

ノ丶内の躰のみゆるなり
もあらはなり　○几帳春夏の間はひとへのきぬのす
ゞし秋冬の間はうらのある織ものを懸る三尺或
は四尺
障子　大進が
さうじを五寸ばかりあけていふなりけり、いみじう
好色の心なり　おとしめた
おかし、さらにかやうのすき〳〵しきわざゆめに
大進が　中宮の　清少が
せぬもの、、我家におはしましたりとて、むげに心
る詞也大進がほこる躰なり　大進チサシテ也コゝヘ見
にまかするなンめりとおもふもいとおかし、我かたは
起
らなる人をおこしてかれ見給へ、かゝるみえぬもの
ヘヌモノガ來タト也　塗　あたまをあげてなり
あンめるをといへば、かしらをもたげて見やりていみ
清少詞　懸想らしとの心又淫の字の心にて
じうわらふ、あれはたぞけさうにといへば
あやしやといふ心とがめし心なり
くろしうもあらずなり　かけがれなどしめに参しとなり
あらず、家のあるじ戸さだめ申べき事の侍るなりと
清少詞かの門ハあらためで今障子あけ給ふはなに事ぞと也
いへば、門の事をこそ申つれ、さうじあけたまへと
大進詞その門のコトハリ申さんと也　それへ也　参りさふらはん也
やはいふ、なをその事申侍らん、そこにさふらはん
女どもの所へ來る事也　大進
はいかに〳〵といへば、いと見ぐるしき事さらにえ
にいひさけし詞也　大進詞
おはせじとてわらふめれば、わかき人々おはしけ
障子を　行　大進いにて後なり　さうじあ
りとて引たてゝいぬる、後にわらふ事いみじ、あけぬ
けたほどならば　内へ　音づればかりにたれかはいれ
とならばたゞまづ入ねかし、せうそこをするによかン

晨の字あさとく
といはんと也
なりとはたれかいはんと、げにおかしきに、つとめ
也 宮の　申上るなり　サヤウノ好色人トハ聞シメサ
て御前に參りてけいすれば、さる事ときこえざりつ
ヌト也　かの門の事に也　かんじ給ふ也　宮
るを、よべの事にめでゝ入にたりけるなゝめり、あ
の詞　大進ノ　つよく也
はれあれをはしたなくいひけんこそいとおかしけれ
とわらはせ給ふ　○是まで男女の詞のきこえことな
るものこゝろをつけてみるべし
姫宮の御かたのわらはべのさうぞくせさすべきよし
裝束チトヽノヘヨトノ詞也　大進ニソヲハ二玉ハッ
おほせらるゝに

●一條院┬敦康(アツヤス)親王　一品式部卿母中宮定子
　　　　├女子　號二一品宮一母同二敦康一
　　　　└女二宮　母同

大鏡に大姫君(定子也)は一條の院の十一にて御元服せさせ
給ひしに十五にて參らせ給へるやがて其としの六
月一日に后にたゝせ給ふ中宮と申き關白殿などう
せ給ふて後におとこみこ一人女みこ二人うみ奉ら
せ給ふ女宮は入道殿の一品の宮とて三條におはし
ます女二の宮は九條にてうせさせ給ふおとこみこ

式部の宮敦康の親王とぞ申(下略)
童　衵　袍　コノ詞チわらひ給ふな
わらはのあこめのうはをそひは、なに色につかうま
り大進ホドニナシトなり
つるべきと申を、また笑ふもことはり也　○衵(アコメ)舞ぎ
ぬのやうなる着也上に打懸る者也又衵すがたと云
は裳の上を云也是は女の童にて着る者也(此說こゝにかなふべし)
又裝束の下に織たる者の綾なとのやうに有者を重
ぬるを衵ともいふ又法師の式正の下に白き綾をか
さぬるも云也○當家着用裝束抄衵不可二着用一
御器
又姫宮のおものは、例のやうにてはにくげにさふら
ちいさき也　折敷　高坏かけばんなり
はん、ちうせいおしきちうせいたかつきにてこそよ
大進　也
くさふらはめと申を、さてこそうはをそひきたるわ
常ていの人のごとくなり
らはべも參よからめといふを、猶例の人のやうにか
チギナル大進ナレバなり　謹厚
くないひわらひそ、いときんかうなるものをと、いと
制　宮のいましめ給ふ也
をしげにせいし給ふもおかし是まで大進が日ごろのうはさしてそのことなるさまをいふ
中間うはさいふ中になり　モノイハントの詞なり
ちうげんなるおりに、大進ものきこえんとあり、人の
宮の　何條の字何事ないひて也　又大進
つぐるを聞しめして、またなでう事いひて、わらは
清少ニ
れがんとならんとおほせらるゝもいとおかし、ゆきて
中宮の　清少が　大進詞かの門
きけとのたまはすれば、わざと出たれば、ひとよの

のあいさつの事なり
門の事を、○後漢書李充傳一日聞註一日猶二昨日一
一日はきのふといふやうの事なり
中納言にかたり侍りしかば　○長保元年同三年の中
の中納言藤原の時光同實資さては平の惟仲也　公卿補任
の考
也　生昌が兄の惟仲なるべし
いみじうかんじ申されて、いかでさるべからむおり　感なり中納言ノ　首尾のよき時になり
對面也
にたいめして、申うけたまはらむとなん申されつる
とて、またこともなし、ひとよの事やいはんとこゝろ　此外又こと葉もなしと也　大進障子あけてきたりし事也
好色の事などいはれんと也
時めきしつれば、いましづかに御つぼねにさふらは　大進　少納言宮の前ニ
辭シテなりコトハリテ也
んとじゝていぬれば、かへり參りたるに、さてなに　大進が　中宮の詞なり
事ぞとのたまはすれば、申つる事をさなんとまねび　さやうに也　清少
けいして、わざとせうそこしよびいづべき事にもあ　わざ〳〵音ヅレテよぶべき事にあらずとなり
らぬを、をのづからしづかにつぼねなどにあらんに　自然　清少がひまなろ時も申せかしとなり
もいへかしとてわらへば、をのがこゝろにかしこし　中宮の詞大進チタスケテ也
とおもふ人のほめたるを、うれしとや思ふとてつげ　中納言なり　譽　少納言ニ
しらするならんとのたまはする御けしきもいとめで
たし　○是又なりまさが自贊いひてきゝみゝことご
としきさまをつゐでにいひあらはしたり

おのこどもめせば、藏人たゞたか參たるに　○藏人　上ノ
近習職也武家方の扈從のごとくなり頭扈從がしら
なり藏人所嵯峨天皇御宇弘仁年中初置レ之　○所と
は官舍也
清和源氏系圖云
●清和天皇―貞純親王―
　―經基公―滿仲
　―滿政―忠重
　―忠隆　藏人駿河守左衞門尉正五位下
このおきなまろ、うちてうじて　打　挺　てうちやくのこゝろなり　又懲の字のこゝろにてこ
らさしむこゝろもあり　犬島といふ所にしてざれてのたまふこゝろもあり又いぬと
いぬしまにつかはせ
句をきりてしまにつかはせともみるべきか
たゞいまとおほせらるれば、　あつ
まりてかりさはぐ、　駈　騷　むまの命婦もさいなみて、　罪　めの
とかへてん、　影護ノ字心モトナキ心也　いとうしろめたしとおほせらるれば、　れこの
かしこまりておまへにも出ず、　畏也チソレテノ心也　めのとはさいなまれ犬計出
ていぬばかりいでゝた
てなり　侍の官也　追
きぐちなどしてをひつかはしつ　○禁秘抄云瀧口員
數廿人無二有官一大略同二所衆一但白地不二昇殿一若二

布衣一旦暮候レ御○職原註番所在二清涼殿後其邊一也
寬平御宇被レ置レ之○西宮記云瀧口武者以二名簿一下二
給先試二其藝一依二善射一被レ定二下藏人一對仰二諸陣一
陣官書二名旨一押レ陣
あはれいみじくゆるぎありきつるものを三月三日に
頭の辨　○職事補任云藏人頭左少辨正五位下藤榮
通又左近權中將
うへにさふらふ御ねこは　○格物論貓捕レ鼠獸也斑
文不レ一目晴旦暮圓及午豎斂如レ綖其鼻端冷惟夏至
一日暖也
かうぶり給りて、命婦のおもとゝていとおかしければ
叙爵　ねこの名也　作也
ばかしつき給ふがはしに出たるをめのとの馬の命婦
寵　ねんのはしなり　ねこあつかりし人也
○令義解云婦人帶二五位以上一曰二內命婦一五位以上
曰二外命婦一○小右記云長保元年九月十九日內裏御
猫產レ子女院左大臣右大臣有二產養事一有二衡重垸飯一
給二宮之猫乳母馬命婦一時人笑レ之奇怪之事也
あなまさなや、入たまへとよぶをきかで、日のさしあ
無正の字　ねこを
たりたるに、ねぶりてゐたるをおどすとて、おきな
ねこの　威　犬の名
丸いづら、命婦おとゞくへといふに、まことかとて、
ドリャ也　犬ニ

おきな丸
しれものはしりかゝりてければ、をびえてみすのう
ねこの　刧
ちに入ぬ　○源氏箒木しれもの、物がたりをせん○
花鳥餘情にしれものとはざれものなどいふがごと
し又韻註不レ分二黑白一有二痴者一左傳杜預註曰痴と
書てしれものとくんずみなおろかなる心あり
あさがれゐのまにうへはおはします　○朝餉の間
天子なり
淸涼殿の內にあり天子食をなし給ふ所なり　○禁
秘抄　朝餉二間南平敷二枚　東北立二屏風一夜御殿方
有二副障子一屏風內外案二御調度一下略
御覽じて、いみじうおどろかせ給ふ、ねこは御ふと
上ノ　上ノ
ころに入させたまひて　○藤實賢三代頭　これらの
トウ也
うちなるべし
柳のかづらをせさせ、もゝの花かざしにさゝせ、さ
柳の木のかはにきてしたる也　挿頭ハ二字あたまにさす
くらこしにさゝせなどしてありかせ給ひしおり、か
事也　腰　犬ナ
ゝる目みんとはおもひかけんやとあはれがる、おも
犬の心ニ　御膳
の、折は、かならずむかひさふらふに、さう〳〵しく
犬の　御膳のむかひさゝ
こそあれなどいひて、三四日になりぬ、ひるつかた
びしきとなり　犬のうはさして三四日ニナル
いぬのいみじくなくこゑのすれば、なにぞの犬の、
つよくなり　いづれの犬のなり

かく久しくなくにかあらんときくに、よろづのいぬ
□間也犬のなく所へ　御厠用いやしきものなり
どもはしりさはぎ、とぶらひにゆき、みかはやうなる
打　死
ものはしりきて、いぬを藏人ふたりしてうち給ふ、し
ナンズルといふ詞也　てう
ぬべし、いぬをながさせ給ひけるが、かへり參てて
ちやくの心也　みかはやうの詞也　二
うじ給ふといふ、こゝろうの事や、おきな丸なり、た
人の藏人也　清少とゞめニヤ
ゞだか、さねふさ　なんうつ　といへば、せいしにや
ルなり　李ノ字ヤウノヽシテ也犬の
るほどに、からうしてなきやみぬ、門のほかに引す
ソコラノ女房ドモなり
腫
てつといへば、あはれがりなどする夕つかた、いみ
かなしげになり
じげにはれ、あさましげなるいぬのわびしげなるが
戰ノ字フルフ心也　翁丸かとよびかけし心也
わなゝきありけば、あはれまろか、かゝるいぬやは、
犬の　女房たちの評判也　呼
このごろはみゆるやなどいふに、おきなまろとよべ
とみゝにも聞いれず、それぞといひあれぞといひ、く
ちぐち申せば右近ぞ見しりたる　○右近右少將從五
位下季繩（スヱツナ）號ニ片野少將ーたかの名人也この人の女
上ノ右近
よべとてめせば參りたり、是はおきなまろかとて、
右近ニ　翁丸ニ　死ハヅレニあひいま
みせさせ給ふに、似て侍れども、これはゆゝしげにこ
しげになり　犬ノ
そ侍るめれ、又おきなまろとよべば、よろこびてま

參クル也　けふは　犬ノ　翁丸ニハアラズト也
うでくるものを、よべどよりてこず、あらぬなゝめり、
ぞ　藏人
それはうちころしてすて侍りぬとこそ申つれ、ふた
中宮の
りしてうたんにいきなんやと申せばこゝろうがらせ
日暮テ也　犬ニ
給ふ、くらうなりてものくはせたれど、くはねば、
翁丸にあらずと治定シテ　夙ノ字早朝也
あらぬものにいひなしてやみぬ、つとめて御けづり
カミアゲノウネメ　ハイゼンノ
ぐしに參り　○髮上采女　陪膳采女　陪膳に參る時
髮をたるれば恐らくは御膳をけがす事あらん故に
一説ニ天子の　コツ　髮を肆とぞ　クハゾク
かみをあぐるなり　又の說御即位節會の
時女中の髮を肆とぞしかれども花族のむすめなれ
ば女中のかみをゆふべからずこゝは天子の御ぐし
をゆふ役なるべし上のめしおろしの紫小袖をきて
上の御ぐしけづるものとぞ則清少納言御けづりぐ
しに參たるとぞ猪職原の得選の下につまびらか也
進ジテノ心也
御てうづ來りて、御かゞみもたせて御らんずれば
○禁秘抄　御手水間ー間兼ニ朝餉ー爲ニ中障子ニ立ニ
置物廚子（ヅシ）一ニ其北立ニ大床子ー一上有ニ圓座ー凡主上
御座不レ可レ向レ北之由也在ニ江記ー御手水可レ向レ北
也○九條殿師輔公遺誡云先起稱ニ屬星名字七遍ー次
取レ鏡見レ面見レ曆知ニ吉凶ー次取ニ楊枝ー向レ西洗レ面

云々次梳レ頭（クシケヅルナ）
別ノ
げにいぬのはしらについ（ツクバヒイタルナ也）ゐたるを、こゝにて句を切也か
下の句の
心なり
あはれきのふ、おきなまろをうちし、死にけ
の犬のうはさの給ふ
んこそかなしけれ、なにの身にか、このたびはなり
死シテ又生レカハルニコノタ
ビハ何ニカナリツラント也　翁丸ガ心チチシハカリ玉フ詞也
ぬらむ、いかにわびしきこゝちしけんといふほど
翁丸也　寒戦ノ二字
に、このねたるいぬふるひわなゝきて、なみだをた
上ノウハサシ玉フチ
犬モかんじてなり
ゞおとしにおとす、いとあさまし、さはこれ、おきな
サテハなり
まろにこそあれ、よべはかくれしのびてありけりと
よんべの心宿ノ字モトウタレシニヨリテ也
あはれにもありおかしくもありといふ心なり
あはれにておかしき事かぎりなし、御かゞみをもう
さてはなり　平臥也
ちをきて、さはおきな丸といふにひれふしていみじ
中宮の
くなく御前にもうちわらはせ給ふ、人々参りあつま
ハジメ見ソコナヒシチ今ノ玉フ也
りて右近の内侍めしてかくなど仰らるれば、わらひ
右近見ソコナヒシト笑ワメク也　中宮ノ方へ
のゝしるを、うへにも聞しめしてわたらせおはしま
して、あさましう、いぬなどもかゝる心ありけるもの
なりけりとわらはせ給ふ、うへの女房たちなどの、き
右の様子チ　犬チ　起動
ゝに参りあつまりてよぶにも、いまぞたちうごく、
犬ノ　騒　業モノ也　詞なり　りやうしなしてや
猶かほなどはれたゝめり、ものてうせさせばやといへ

ば、つゐにいひあらはしつるなどわらはせ給ふに、忠
らんとなり　洗ヒトヤなふにモタセテ書タリ
たか聞て、臺盤所のかたより　○禁秘抄臺盤所三間
キベリノタヽミ　ノヘ　ノフダ　カラヒツ
北間朝餉方敷ニ黄縁疊ニ東倚子其南女房簡入レ袋　辛櫃
ヌリ　チソノヽタナ
朱染臺盤上有ニ御膳棚ニ下略
犬チ　清少
まことにや侍らん、かれ見侍らんといひたれば、あ
詞いまくしと犬チかくす心也　人ニ　さうありともなり
なゆゝしさるものなしといはすれば、さりともつゐ
どこぞにも見つけんとなり
に見つくるおりも侍らむ、さのみもえかくさせ給は
畏ノ字かたじけなく也勘事也かんど
じといふ也、さてのち、かしこまりかうじゆるされ
う也　はじめのごとく御前へ出ル也　かはゆがられて　身ぶる
て、もとのやうに成にき、猶あはれがられて、ふるひ
ひ也
なき出たりしほどこそ、世にしらずおかしくあはれ
人々モカハユヤくと云也　是マデ犬猫な
なりしか、人々にもいはれてなきなどはすれ、
どの上ニ聞みゝこ　是五節ノ景氣ナリ
となるものなり　つゆのころ也
なる、正月一日三月三日は、いとうらゝか
なる、五月五日もくもりくらしたる、七月七日はく
もりて、ゆふつかたはれたる空に、月いとあかく、
二星也　ナカ
ほしのすがたみえたる、九月九日は曉がたよりあめ
巨ノ字多ク也　覆
すこしふりて、菊の露もこちたくぞおぼゆる、おほ
綿　強　濡　サツクシキなり又ワタニウ
ひたるわたなどもいたくぬれ、うつしの香もてはや
ウツリシ香也もては賞早朝　動ノ一字
やされて、つとめてはやみたれど、猶くもりてやゝ

もすれば、ふり(雨)おちぬべく見えたるもおかし ○菊のきせ綿は菊のしほれぬやうに綿をおほひて置なり、九日のためなり後撰集に隣にすみ侍りける時九月八日伊勢が家の菊にわたをきせにつかはしければと書たり

前五節句ノヨロコビなり奏也

よろこびそうするこそおかしけれ、

後ノ裾ヲ弓ニテ巻セテ也又ツシロチカマハヌ心モアリ中官

うしろをまかせてしやくとりて御前のかたにむかひてたてるをぶた(舞踏)

テニハの文字也

うしさはぐよ ○起居して天子を拜するなり笏の事拜賀の時京極殿の御笏を用ゆるなり是を慶賀の笏と名づく名目抄慶賀笏者奏慶時用之 ○江次第抄笏者備忽忘之義也在君前記事恐忽忘粘紙笏上記其頭緒今笏紙之意也○式部判官記云笏長一尺二寸上廣二寸七分下廣二寸四分厚三分○式云凡五位以上通用牙笏白木笏前詘後直六位以下官人用木前詘後方○禮記玉藻天子以球玉諸侯以象大夫以魚須文竹士以木

やけて後立たる也

いま内裏のひんがしをば、きたの陣とぞいふ、○今内裏一條院長保元年六月十四日内裡回錄十六日行幸一條院女院御所同二年十一月十一日行幸新造内裏不考長保元年内裡炎上事且以敎秀卿勘物註之 林氏王代一覽長保三年十一月内裏炎上元年三年両度焼亡乎

ならの木(楢)のはるかに(遙)たかきが、たてるを見て、いく(幾尋ヘ尋ハ八尺也)ひろかあらむなどいふに、權中將の、もとよりうちて(木ノ伐の字)

源氏系圖

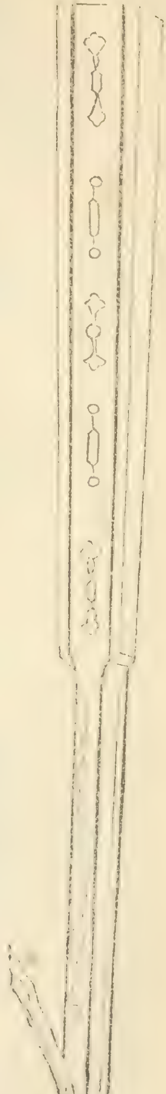
村上天皇━致平親王━┳成信 從四位上左中將法名眞舜
　　　　　　　　　　┗致信 從四位下右中將

四品兵部卿

定澄僧都の ○長保二年三月十七日以定澄僧都補興福寺別當○僧都准四位殿上人日本僧都僧正の初は日本紀推古天皇三十二年夏四月百濟觀勒爲僧正以鞍馬德積爲僧都

枝あふぎにせさせばやとのたまひしを ○枝扇は大ぼねを木の枝ある所にてかなめのかたにして法師の組にかくるなりならの木を用るは納凉の便もあるなるべし

興福寺也
山階寺の別當(トウ)になりて、(一寺ノ長官也別當の從ナ六千ハ中上ル日なり)よろこび申の日　○興福寺
は淡海公の氏寺なり四十三代元明天皇和銅三年庚
戌建立之始大織冠孝德天皇三年丁未十月山城國山
階郷(サウ)草創也仍爲ニ山階寺ニ十一年して齊明天皇三年
十月同山城陶原(スヘハラ)家設レ移此南度鎌足の計略也其後
五十三年して元明天皇御宇和銅三年三月移ニ和(ハル)
州平安城ニ今興福寺也同五年十月維摩(ユイマエ)會當寺行
本尊鎌足大織冠皇極四年六月造丈六釋迦像也是日
本の最初佛像也願主淡海公不比等社稷(シヤシヨク)神天兒屋根
命廿二世孫藤氏諸家先祖也○拾芥云山階寺法相爲
レ宗
近衛つかさ(司)にて、(權中のコノ日定澄ニ慶あひ給ふ也)この君の出たまへるに　○權中將
相當從四位下職原云元近衛中衛也平城天皇大同二
年勅次ニ近衛ニ爲ニ左近衛ニ以ニ中衛ニ爲ニ右近衛ニ嵯朝



殊重ニ是職ニ統ニ領(トウリヤウ)諸衛衛禁(シユクエ)軍ー故也本朝爲ニ重任(テウニン)ー
定澄(系図)(要)たかきけいしくつをさへはきたれば、(ぎやうさんなる心なり)ゆゝしくたか
し、(定澄の内裏より)出ぬるのちこそ、(權中の詞)などその枝おふぎはもたせた
まはぬといへば、(僧都の詞)(僧のせいたかければもとより)ものわすれせずとわらひ給ふ
(うらきるならの木なおもひ出せり)是まで權中將の枝扇の詞僧都の詞などのきゝみ
ゝこと〴〵しき事なりこと〴〵なるものといふ題
の心よくうしなはずして文法をみるべし

枕草紙旁註卷二

●山は

山城小倉 をぐら山　大和三笠 みかさ山　奥州木晴 このはれ山 イ本このくれ山とあり万葉に古能久禮田と書奥
り　未勘忘山 わすれやま 但わすれず山と歌に　みちのくのちくまの川のあなたなる人わすれずの山はさかしき入
州　たち山　山城鹿背山 かせやま　同國比叡 ひえの山 イ本ひはの山とあり
奥州片下 かたさり山こそいかならんと、おかしけれ　○かたさりはかたさがりの心也いづれも山はまろなるものをこの山をかたさがりの心に名付しはいかならむとなり
越前五幡 いつはた山　若狭後瀬 のちせ山　山城笠取 かさとり山　江州比良 ひらの山　同 とこのやまは我名もらすなとみかど天智天皇のよませ給ひけんいとおかし　○いぬがみ犬上のとこ鳥籠の山なるいさや不知哉河いさとこたへて我名もらすな○この歌ある人あやの帝の近江の采女にたまへると古今の詞書也 清輔袋草紙に聖武天皇可然と云々古今目錄には智天皇とあり
攝州 朝くら山よそにみるこそおかしけれ　○この山朝くらき心にいひそめけんはおかしと也朝はいづこもはれやかなるものなればいかゞと不審したる也
江州 いぶき山　山城岩山 いはだ山　攝州大俣山 おほひれ山もおかし、りんじのまつりのつかひなど、おもひ出らるべし　○賀茂の臨時の祭に女藏人の時おびにひれかけて禁中よりの使に行にひれのひら〳〵とする事おもひ出たるなるべしひれといふものはおとめの裝束のうちに裙帶(クンタイ)ひれとてあり肩にもうちかくるもの也領巾(ヒレ)とも書て婦人のいたゞきのかざりともみえたり今の世の懸おびのごとくなるもの也
又三月中の午の日石清水臨時の祭の時天子の前につらなり陪從近衞(ベイジウコンエ)のめし人もとめこうたひ琴笛ひちりき音をあはす舞人まひをはりて大びれ返しうたふとあり　愚考賀茂臨時の祭のこゝろ得前說を用べし
大和手向 たむけ山　同 三輪の山いとおかし　○神代のむかしより名づけし、三わげのいとの事おもひよするなるべし
山城音羽 をとは山　攝州待兼 待かね山　同玉坂 たまさか山　大和耳無 みゝなし山　奥 末

州の松山　みの丶お山（美濃御山）　はゝそ山（山城柞山）　くらゐやま（飛騨位山）　きびの中山（備中吉備）　あらし山（山城）　さらしな山（信州更科山）　をば捨山（同姑捨）　をしほ山（山城小鹽）　あさま山（信州淺間）　かたゝめ山（未勘）　かへる山（越前歸山）　いもせ山（紀州妹背）

●みねは
ゆづりはの峰（攝州櫟葉の嵩同し）　あみだのみね（山城）　いやたかのみね（備中彌高）

●はらは
たかはら（大和竹原）　みかの原（泉州甕原）　あしたのはら（和州朝原）　そのはら（信州曾原）　はぎ原（紀州萩原）　粟つの原（江州）　なしはら（和州奈志原）　うなゐこが原（髫子未勘）　○名におへばいづれもかなしあさな／＼なでゝおふしゝうなゐこか原（六帖山上憶良）
あべのはら（攝州阿倍）　しのはら（江州篠原）

●京は
たつの市（和州辰）　つば市（同椿市）はやまとにあまたある中に（市の名の）、はせ寺にまうづる（詣）人の、かならずそこにとゞまりければ（つば市也）、觀音の御緣あるにやと心こと也（常とは心かはると也）　○長谷寺者比丘道明沙彌德道勠レ力建レ之其像材者自二江州高嶋郡三尾山一流出木也漸流至二和州葛下郡神河浦一道明欲下取二是木一刻中佛像上而無二資力一、専レ心禮レ木祈求中書侍郎藤房前奏賜二和州租稲三千束一乃刻二十一面觀音像一高二丈六尺破二巖石一爲レ座方八尺
つば市にとゞまる例は　小右記云正暦元年九月八日參二長谷寺一午時至二椿市一令レ交二易御灯明土器等一參二御堂一修二諷誦布廿端御明三萬燈一
つば市いま一所は豐後にあり　豐後風土記景行紀云採二海石榴之樹一作レ椎之處曰二海石榴市一
おふの市（伊勢生市）　しかまの市（播磨飾磨）　あすかの市（和州飛鳥）　○是まで山峰原市などの歌のよせにつき所の義につき淸少納言のあつめられし事不可思議のあぢはひこゝろをつくべし

●淵は
かしこぶち（賢淵未勘）　いかなるそこのこゝろをみえて、さる名（さあるか）をつきけん（しこき名を）といとおかし、ないりそのふち（莫入淵と書）、たれにいかなる人のをしへしならん（な入そとはなしへしならん）
○つれなくば身をしづめんとかこつよのそなたの（爲尹千首）
月よな入その淵
青色の淵こそ又おかしけれ、藏人の身にしつべくて（書すて）（し文法也）
○藏人は六位藏人也　○職原云六位藏人奉レ行禁

中細々公事朝夕御膳等事稱之日下﨟四人分日令奉行故也六位職事又聽禁色至極﨟者着麴塵袍是申下御服之義也　○麴塵の袍は天子の御服也世に山鳩色といふ黄櫨染共いふ下は黄にして上は青色也衣色の書にかゝりやすと紫とにあくをさすとあり

和州稲淵
いなぶち　同かくれの淵　未勘のぞきのふち　同たまぶち

●海は

江州湖を中のふせのうみなど也
みづうみ　○いづこにても水海よしと也非名所たゞへたる景色誠に面白し

丹後與謝
よざの海　攝州河口の海　伊勢のうみ　勢州ふたみのうらなるべし

●わたりは

三河志賀須香渡
しかすかのわたり　源順家集○行かよふ舟路はあれどしかすかのわたりはあともなくぞ有ける

越中
みづはしのわたり　伊平卿千首○もみぢ葉のうつろふ水のわたしもり風はゆきゝにいとふのみかは

攝州須磨の事か
こりずまのわたり　○是まで三段水邊のおもしろき所ども也

●みさゝぎは　陵とは帝を葬たる御はか所也もろこしにも是を山陵と云也

うぐひすのみさゝぎ　○人皇第十七代仁德天皇葬于河内國百舌鳥野　愚考に百舌鳥と書てうぐひすとよめれば、もしこれなどにや、江次第の十陵のうちに不見

かしはばらの陵　○拾芥云栢原桓武天皇在伏見山自東邊二町許入在稲荷南野城州の内

天
あめのみさゝぎ　○天智天皇在山階中内府忠親卿云ある時みかど御馬にたてまつりてやましなへおはしまして林の中に入てうせ給ひぬいづこにおはすといふ事をしらずたゞ御くつの落たりしをみさゝぎにこめ奉りし也

●家は

近衛の御門　○拾芥云近衛北烏丸東云々　陽明門の事也

二條　一條もよし　○拾芥云二條院二條北堀河東天暦母后御領　一條院一條南大宮東二町鎌德公家法住寺大臣為光家也

そめどのゝ宮　○拾芥云正親町の南忠仁公のすみ給ふ所也

せがゐ　○清和井は正親町の南京極の西清和の母后

后の御在所

すがはらの院　○菅原院勘解由小路南烏丸西一町菅贈太政大臣御所或云参議是善家也當時號ニ歡喜光寺一北野祭日社氏來ニ此所一取ニ枇杷一供レ神云々

冷泉院　レイゼイゐんとよむべし　○拾芥云　大炊御門南堀河西嵯峨天皇御宇此院累代之後弘仁亭本名ニ冷然院一而依ニ火災一改ニ然字一爲ニ泉字一天暦御記

朱雀院　スザクゐんとよむべし　○三條北朱雀西四町四條北西坊城東

洞院　トウヰンとよむべし　○むろ町より西へ二町ゆけば洞院通在所未レ詳　三條通也

小野の宮　○大炊の御門南烏丸の西惟喬親王家定頼傳ニ領之一清愼公も領レ之

紅梅　大宮通也　○紅梅殿五條の坊門の北町の西、北野御子ノ家或天神の御所

あがたの井戸　○一條の北、東の洞院の西角ナリ　大膳の守公平のむすめども縣の井戸といふ所にすみけりとやまとものがたりにあり

東三條　トウサンデウとよむべし　○四條院誕生の所或重明親王の家云々二條ノ南町西、南北二町忠仁公の家貞仁公の大入道殿傳ニ領之一長久四年四月燒失　○本朝文粹卷十江匡衡の詩に洛城有ニ一形勝一世謂ニ之東三條一

小六條　○北院堀梅北烏丸西又號ニ小六條一小六條院御領今小六條殿

小一條　○近衞南洞院西師尹公の家一説云山吹殿清和天皇誕生所貞信公家

淸涼殿のうしとらのすみの、北のへだてなる御さうじに、あらうみのかたいきたるものども、おそろしげなる、手ながあしながをぞかゝれたる　○清涼殿　板敷四方緣御上段繪常盡圖御上段奥間四季ニ之間四愛堂陶淵明菊周茂叔蓮山谷蘭林和靖梅鶴三之間十雪之圖四之間同三之間下段板間竹虎金花鳥也杉戸雪降竹蘆鷹芦鷺松鶏雪松鳳凰紫垣菊田雀竹鶴垣夕顔東西十一間南北九間半有ニ欄干南面也謂ニ之ニ御殿一

○禁秘抄清涼殿五間北一間母屋爲ニ御帳一次御帳間第三間大床子第四ノ奥有ニ御厨子一第五四季御屏風母屋有ニ日記ノ御厨子四面有ニ几帳帷ヲ夏生以レ粉畫ニ蘆雀一冬朽木形疊ニ二帖繧繝御座敷ニ東上一

弘廂板九枚　北有ニ荒海障子一南方手長足長北面障

子宇治綱代墨繪也二間與上御局之間立昆明池
障子閑院無御局仍荒海障子副二尺爲路立
之南昆明池北嵯峨野小鷹狩南切妻有鳴板號見
參板不打付也
うへのみつぼねの戸をしあけたれば、つねに目にみ
事也 ゆるをにくみなどして、わらふほどに ○上御局
禁秘抄十四日錄號藤壺御局后女御更衣參上所也
近代爲御所十六日錄號弘徽殿御局是御行ひな
どの有所也女御更衣へ參上すべし
上のつぼねのふんみはしの前也 かうらんのもとに、青き瓶の大きなる、すべてさく
らのいみじくおもしろき枝の、五尺ばかりなるを、
いとおほくさしたれば、高欄のもとまで、こぼれさ
きたるに、ひるつかた大納言殿 ○法興院入道兼家
の嫡男道隆のむすこ儀同三司帥内大臣伊周公也左
京大夫從三位道雅の父也
さくらのなをしの ○おもて白うらあかし冬春の裝
束の色也直衣の事右に委し
すこしなよらかなるに、こき紫のさしぬき ○指貫下にくゝりのあるは
かま也 濃紫ふしいれこきむらさき さしぬき 文に巾とりたすき藤也 年齡により官位

により色々の差別あり
白き御ぞども、上にこきあやのあざやかなるをいだ
ぬ女ふりなど して參給へる、上のこなたにおはしませば、戸口の
前也 前なるほそきいたじきにゐたまひて、ものなどさう
し給ふ、みすのうちに女房さくらのからぎぬども、く
女の上にきるもの也 つろかにぬぎたれて、ふぢやまぶきなど色々にこの
しかく也 もしく ○藤はおもてうす紫うら青し花やまぶきは
おもてうす朽葉うら黄也うらやまぶきはおもて黄
うら紅也
あまたこはじとみの、みすよりをし出たるほど ○
きぬのはしくヽ外へ出たる也 源ゆふがほの卷に、かみはじとみ四五間ばかり
あげわたして○頑問兩說に、常はしとみをみなお
ろすやうにするにこれはなからおろすやうにすれ
ばかくいふなり能想なる事也○花鳥の心はしたに
はかうしはたいたをうちて上にしとみをつりてほ
かへあぐるやうにしたるをいふ車にもはじとみと
てありうへのしとみばかりをあぐればはじとみと
いふなり○押出之事 胡曹抄ニ押出等薄綿衣等補

不レ出レ妻是定例也是女房御所也云々蠧時押出不レ出ニ妻幷裳ニ要月五節之時押出禁中出ニ妻幷裳ニ要月計也

晝（御座ヨルノおとゞと云所の南に有）ひのおましのかたに、おもの（進）まいる、（供御さゝぐる由云て女官のさはぐ足音也）あしをとたかし、けいひつなどをし〳〵といふこゑ聞ゆ、○漢書孫伏伽傳天子之居禁ニ衛九重ニ出警入蹕云々○江談抄云近衛司謂ニ蕃人ニ之義也雲圖抄賭弓之下云御供膳簾外稱ニ警蹕ニ簾中不レ稱也○源氏やどり木の巻に御さかづきさゝげてをしとのたまへる聲づかひとありこの時は（かほる大将のいたゞかる時也）天盃をいたゞくおりふし祝すること葉也今清少納言が書るは足音を制する心也

（和）うら〳〵とのどかなる日のけしき、いとおかしきに、はての御ばん（盤　もちたる也）もたる藏人參て、おもの（御膳）そう（奏）すれば、中の戸（二の間よりひのおましより渡る間の障子也）よりわたらせ給ふ、（主上の）御供に大納言殿參らせ給ひて、（主上の供して又中宮の前へ參給ふ也）ありつる花のもとに歸りゐ給へり、中宮（定子也）の御前の、（花を御らんじ給ふ體也）御木丁をしやりて、なげし（上だんのそばへ）のもとに出させ給へるなど、（上に何の御心にかゝる事もなく御遊興のさま也）たゞなに事もなく、よろづにめでたきを、さふらふ人も（女房たち也）おもふ事なきこゝちするに、（思ふ事もなく宮をめでたゐ體也）（主上中宮を祝しての詞也）月日もかはりゆけどもひさにふる、みむろの山のといふ古ことを、○（萬葉十三）月も日もかはりゆけどもけさ（久）にふ（歷）るみむろの山のとつ（遠）みや（宮）所　宮にて吟じ給ふはとつ宮所の何より思し召よりたる成べし

ゆるゝかに、うちよみ出して（大納言の）ゐ給へる、いとおかしとおぼゆる、げに（清少心）ぞちとせもあらまほしげなる御ありさまなるや、はいぜん（陪膳）つかうまつる人の、おのこども（藏人などなど也）などめすほどもなく、わたらせ給ふ（もとのおましへたちかへらせ給ふニク）○禁秘抄云凡御膳大床子御膳（朝夕　近代一度供レ之）朝餉御膳（朝夕　夜侍）皆一度供レ之此御膳等近代主上不レ着只御膳等三度是只女房サバヾカリ取レ之只内々稱ニ小供御ニ乳母沙汰供御三度所レ着也大床子御膳（爾ハ）時々可レ有ニ着御ニ其作法藏人奏ニ御膳ニ時御直衣自ニ帳後ニ着ニ大床子ニ懸レ膝着レ之東面陪膳人警候昔正食レ之近代只立ニ箸計ニ　愚考朝がれいは女房のはいぜん大床子のおものは殿上人のはいぜん也しかれば爰は大床子のおものなるべし

御すゞりのすみすれ（清少に）と仰せらるゝに、目（清少の）はそらにのみにて、たゞ（天子の）おはしますをのみ、見たてまつれば、（千年もと守りし中宮にも見ろ日をはなづべしと也）ほどとをき日もはなちつべし、しろきしきし（色紙）をしたゝみて、これに只いまおぼえんふること（古歌を也）、ひとつづゝかけと、仰らるゝ（主上の）に、とに（外也）ゐたまへる（大納言殿）に、これは（清少詞）いかにと申せば、（大納言殿清少に）ともかくもかきてまいらせ給へ、おのこは、ことくはへさふらふべきにもあらず（言加助言すべきにあらずと也）とて、御すゞりとりおろして（主上の前より）、とく／＼おもひまはさで（あんじずに也）、なにはづもなにも（何事成とも也訳をふくみて也）、ふとおぼえん事をとせめさせ給ふに、などさは、をくせしにか（われと不審したる詞也）、すべておもてさへあかみて（赤面也）ぞ、おもひみだるゝや、春の歌花の心などさい（さやう）ふ／＼（にいふ／＼也）も、上臈ふたつみつかきて、これにとある（此のつぎにと也）に

としふれどよはひはおいぬしかはあれど花をしみればものおもひもなしといふ事を、君をしみれば（主上の批判也）と、（操）かきなしたる（清少の）を御覧じて、たゞこのこゝろばへども（叡感の心也）の、ゆかしかりつるぞと仰らるゝ　○斐の歌はそめどのゝ后のおまへに（太政大臣の事也）花がめに櫻の花をさゝせ給へるを見てよめるさきのおほきおほいまうち君と古今の春の上にあり　○此昭宣公の歌いまの折ふしによくかなひ侍れば少納言のおもひよられたるぞの頓作をうへ（上也天子）にもいみじくかんじおぼしめしける也

つゐでにゑんゆうゐむの御時（清少の作意をほめ給ふつゐでに關白道隆の事をかたらせ給ふ也）　○圓融院六十二代の帝也村上第五の皇子也御諱は守平（モリヒラ）母は中宮安子也安和二年九月即位歳十一在位十五年一條院の前也

御前にてさうし（紙の事也）に、歌ひとつかけと、殿上人に仰られけるを、いみじう（いかう也）かきにくゝ、すまひ（鼠まひ也）申人々ありける、さらに手（手跡也）のあしさよさ、歌のおり（時節也）にあはざらんをも、しらじと（かまはぬ心也たゞ即興によめと也）おほせければ　○殿上人名家殿上人或云ニ雲客ニ五位殿上人亦四位未ニ昇殿ニ曰ニ地下（ヘタリ）四位諸太夫ニ見ニ弘安禮節ニ又清凉殿ハ天子之常居也其南有レ殿曰ニ殿上ニ則上ニ此殿ニ人曰ニ殿上人ニ今清凉殿西相並有レ之地下之人不レ得レ上ニ其殿ニ

わびて（人々のひげ也）みなかきける中に、たゞいまの關白殿の三位の中將ときこえける時　○公卿補任云藤道隆右大臣兼家公一男母從四位攝津守藤中正女永觀二年正月

七日叙(ラル)二従三位一右中將如レ元

しほのみついづものうらのいつも〳〵君をばふかくおもふはやわが」といふ歌のするを、たのむはやわがとかきたまへりけるをなん、いみじくめでさせ(圓ゆうゐんの)給ひけると○この歌赤人が家の集にいづものうらの歌のよしあり但この歌河上のいづもの浦のいつも〳〵きませ我せこたえずまつはたと異本にみえ侍りぬ

いづれかよろし(皆)・

(中宮の)仰らるゝも、すゞろにあせあゆるこゝちぞしける(はれがましう思ふなるべし)、若からむ人は、(清少年よりて昔たる文也)さもえかくまじき事の、さまにやとぞ覺ゆる、例はいとよくかく人も、あいなくみなつゝまれて、(はづかしくて也)かきけがしなどしたるもあり、(書そこなひ也)古今のさうしを御前になかせ給ひて、(中宮の)歌どものもとを仰られて、(上の句を也)これがすゑはいかにとおほせらるゝに、すべてよるひるこゝろにかゝりておぼゆるもあり、(歌のおぼえのはげみ也)げによくおぼえず、申出られぬ事は、いかなる事ぞ、宰相(かたの)の君ぞ十ばかり、(ごとくの歌の學者なれ共それもやう〳〵十計也その十首などかおぼゆるうちかといふ心也)それもおぼゆるかは　○宰相は女房の名なるべし下に宰相二人あり一人は輔正の女なり一人は藤原の重輔の女也この二人のうちなるべし

(ましくて也五首六首ども申し分ニテは申上られぬと也)まいて五ッ六ッなどは、たゞおぼえぬよしをぞけいすべけれど、(皆)さやはけにくゝ(さやうには也)仰事をはへなくもてなす(いひにくい也中宮の)(いひなく也)べきといひ、くちおしがるもおかし。しると申人(仰らるゝ歌の)なきをば、(末を)やがてよみつゞけさせ給ふを、(下の句ヲ中宮の)さてこれはみなしりたる事ぞかし。(何として)などかくつたなくはあるぞといひなげく、(拙也おろかに也)中にも古今あまたかきうつしなどする人は、(地也)みなおぼえぬべき事ぞかし　○古今集延喜五年四月十五日奉レ詔紀貫之爲ニ棟梁一撰レ之友則躬恒忠岑助也

村上の御時　(又大納言のものがたり也)○扶桑略記云村上天皇諱成明醍醐天皇の第十四子也母關白太政大臣藤原基經四女皇后穏子延長四年六月二日丁亥降誕生ニ於桂芳坊ニ云々康保四年五月廿五日崩

宣耀殿の女御と聞えけるは(芳子也)　○宣耀殿は麗景殿の北七間四面也　○女御　河海には色々の義あり略レ之先一位より四位まで女御にもちゆるよしいへり

たとへば常の上らうの御かたなどいふ位なるべし
宗碩聞永聞說　〇一條禪閤の說に女御は后よりつぎの人なりとあり周禮曰女御者御妻也女御掌レ敘ニ御于王之燕寢ニ也

小一條の左大臣殿の御むすめにおはしければ　〇藤原譜云關白太政大臣忠平號ニ小一條殿一貞信公と諡す　忠平の五男師尹公の事也

たれ〳〵もしりてかくれなき也

たれかはきこえざらん、まだ姫ぎみにおはしける時、（内裏へ入内せし時の事也）父（師尹公）おとゞのをしへきこえさせ給ひけるは、ひとつには、御手（ものかくこと也）をならひ給へ、つぎには、きん（琴）のことをいかで（なにとぞして也）人にひきまさんとおぼせ、さて古今の歌はた（廿）卷を、みなうかめさせ給はんを、御學文にはせさせ給へとなん、聞えさせ（小一條どのゝ）給ひけると、聞しめし（村上の）をかせ給ひて

〇古今の二十卷は春上下　夏　秋上下　冬　賀　離別　羈旅　物名　戀　一二三四五　哀傷　雜上下　雜躰　短歌　旋頭　俳諧　大歌所〇さてこの宣耀殿の女御の御かたちの事大かゞみに見えたりおほかゞみの二卷に左大臣師尹このおとゞ忠平五郞小一條のおとゞと聞へさすめる御母九條殿におなじ大臣の位にて三年康保四年十二月にうつり給ふ事西宮のつくしへ下り給ふ御かはりなりその御事のみだれは此小一條のおとゞといひ出給へるとぞ中略　御むすめ村上の御時宣耀殿の女御かたちおかしげにうつくしうおはしけりうちへ參給ふとて御くるまに奉給ふければ我御身はのりながら御ぐしのすそ（末）はもやのはしらのもとにぞおはしけるひとすぢ（おみすぢ也）をみちのくがみにをきたるにいかにもすぢみえ給はずとぞ申つたへたゞめる御目のしりのすこしさがりたまへるがいとゞ（かたしけなくもと也）らうたくをはするをみかどいとかしこくときめかせ給ひてかく仰られける

生ての世死ての後ののちの世もはねをかはせる鳥となりなん　御返し女御　秋になることの葉だにもかはらずは我をかはせる枝となりなん　古今うかめ（正本の古今）させたまへりと聞かせたまひてみかどこゝろみにほんをかくして女御には見せ たてまつりたまはでやまとうたはとあるをはじめにてまづの句（上の句也）のこと葉をおほせられつゝとはせ給ひけるにいひ

たがへたまふこと葉にてもうたにてもなかりけりかゝることなどちゝおとゞはきゝたまひて御さうぞくし御てあらひなどしてところ〴〵に續經（等）などし念じいれてぞあそばしける、みかど御さうのことをめでたくあそばしけるも、御こゝろにいれてをしへなどかぎりなく時めきたまふに（きはもなく也）冷泉院の御母后ののぼらせたまひてこそなか〳〵ごもなくおぼえおとり給へりとはきこえしか、故宮（コミヤ）のいみじくめざましくやすからぬものにおぼしたりしがおもひいづるにいとおかしくやさしきなりとぞ仰られける

御ものいみなりける日　○禁秘抄曰御物忌之時惣不レ出二御他殿舍中一諸事於二簾中一有レ之或出二御廣廂一不固之時例也凡如二四方拜一者雖二御物忌一或出二御東庭一於二小朝拜一不二出御一是匡房卿申依レ敬二神明天道一

古今をかくしてもてわたらせ給ひて、（主上の女御のかたへ）御木丁を引たてさせ給ひければ、女御あやしくおぼしけるに、御（古今也）さうしをひろげさせたまひて、そのとしその月、なにのおりその人のよみたる歌はいかにと、（女御の角々を答給ふ心也）問きかせ給ふに、かうなりとこゝろえさせたまふに、おかしきものゝひがおぼえ（僻覺）もし、わすれたるなッどもあらでいみじかるべき事とわりなくおぼしみだれぬべし、（歌道）そのかたおぼめかしからぬ人二三人ばかり召出て、（碁石）ごいしゝてかず（おぼえぬ數に也）ををかせ給はんとて、きこえさせ給ひけんほど、いかにめでたくおかしかりなん、御前（せつく事）にさふらひけん人さへこそうらやましけれ、せめて（也）申させ給ひければ、さかしう（女御の賢知のほど也）やがてすゑ（歌の）などまではあらねど、すべてつゆたがふ事なかりけり、いかで（作字也）猶すこしおぼめかして、ひがこと見つけてをやまん（村上）と、ねたきまでおぼしける、十卷（廿卷の内）にもなりぬさらにふようなりけり（無用也退屈の體也）とて、御さうしにけうさん（俗にけさんの事也）して　○けうさんはさうしにをくおもし也壓尺（アッシャク）と書也古人の云界方（カイホウ）也

みとのでもり（御寢なりし事也）ぬるもいとめでたしかし、いとひさし（御寢なる間也）うありて、おき（起）させ給へるに、猶この事（古今の事）さうなくて（何の事もなくて也）やまんいどわろかるべしとて、下の十卷を、あすに

もならば（異本也古今のよの本をも姫の見合せ給はんと也）、ことをぞ見給ひあはするとて、こよひさだめんと、おほとなぶら（きり灯臺也）まいりて、よふくる迄よませ給（主）ひける、されど、まけきこえさせずなりにけり（覺忘て負給はぬと也）、うへ（上女御をこゝろみ給ふて後也）わたらせ給ひてのち、かゝる事なんと、人々とのに（小一條殿に）申たてまつりければ、いみじう（うれしく也）おぼしさはぎて、御ずきやう（誦讀姫君の行末のいのり也）などあまたせさせ給ひて、そなたに向ひてなんと、ねんじくらさせ給ひけるも、すき〴〵しく（歌道に）あはれなる（あはれなる心也）事なりなど、かたり出させ給ふ（中宮の）、うへ（主上）もきこしめし（主上の詞）でさせたまひ、いかでさおほく（村上の氣）、よませ（愛）たまひけん（根つよく）、われは（中宮）三卷だにも、えよみはてじと仰らるゝ（主上ヲ初わつかなるものも也女房の批判也やさしうこそ）、むかしはえせものゝも、みなおかしうこそ有けれ（今の時はむかしにかけりたると也）、このごろかやうなる事やはきこゆると、御まへにさふらふ人々、うへの女房の、こなたゆるされたる（臺盤所の女が上へゆるされて入事也）など參りて（地）、くち〴〵いひ出などしたるほどは、まことに（の詞也）おもふ事なくこそおぼゆれ（眞實に也）、おいさき（主先）なく、まめやかにえせざいはひなどみて（なま中のおとこもつ事也）、ゐたらむ人は（おろかなる心也）、いぶせくあなづらはしく、おもひやられて（心の句チきる）、なをさりぬべからん（可然也）人のむすめなどは、さしまじらはせ（禁中へ）、よの中のありさまも見せならはせまほしう（事に預る宮仕これにして内の事しらせたしと也）、ないし（萬内裏の）などにても、しばしあらせばやとこそおぼゆれ　○内侍（ナイシ）者掌侍也掌侍は小上らうの品也相當五位也おりものを著る也尚侍は宮中の中の上﨟にして大臣の嫡任レ之又奉レ公の勞により下官のむすめたりといへどもないしの例もあり○典侍は禁秘抄此職尤重爲二御乳母一之人は諸太夫の女といへども是をゆるすいなゝれば公卿侍臣の女也凡ないしといふは掌侍也掌侍四人の内第一を勾當（コウタウ）の内侍といふ今の世は勾當宣傳奏請（センデンソウセウ）をつかさどる也將軍家より内書を奉ずる時はかな文にして勾當の内侍にあづかる近代の例也

宮づかへする人をば、あは〳〵しうわろき事におもひゐたる（宮仕人は人に見られて心にくからぬ事もあればあは〳〵しと也）おのこそいとにくけれ、げにそもまたざる事ぞかし、かけまくもかしこき御まへ（かけて申も恐ある天子の事也）をはじめたてまつりて、上達部殿上人、四位五位六位、女房さらにもいはず（いふに及ばずと也）　○上達部（カンダチメ）とは公卿也攝政關白及三公是公也散一位及三位以上は是卿也

見ぬ人はすくなくこそあらめ、女房のずんざ（従者）とも、女房の里より也 その里よりくるものども、をさめみか（下女）はやうど（御厠用人）、民氏河原 たいしかはらといふまで、いつかは、それをはぢか（宮仕すればさやうの下人にも見らるゝと也）くれたりし ○水源抄長部曹司也八雲御抄下女也 ○仙源抄におさめみかはたとておほきなるおけにものをいれていたゞきありくひさぎ女也（ものうりありくばいた也） ○御厠用人ある說におさめみかはやうどひすまし也禁中にものをおさむる下女也不淨のあるを生絹のきぬふたはゞをぬひたれて雨のはしをぬひあはせてこの丸をひぢに懸いづる也この女をひすましといふ也 ○民氏河原 貫之の白河大相國の歌子日の會の序に草枕たいしがはらまで松のちとせを君にとのみいのりとあり

とのばらにはかくるゝ事もあれば見ぬ事もあらんそれも宮づかへしとのばらなどはいとさしもあらずやあらむそれもあて侍るほどは大方みるにて、あらんと也 北の方お上などゝかしづかるかぎりはさぞあらむ、うへなどいひて、かしづきすゑんには人に見られし人はこゝろにくからず思はんもことはりと也

へたるにこゝろにくからずおぼえんことはことはり（內裏）なれど。（諸大夫の妻內侍に成て也）ないしのすけなどいひて、おりおりうちへ参り、（內侍が）まつりのつかひなどに出たるも、おもたゝし（めんぼくらしき）からずやはある（心也） ○江次第賀茂の祭路次の次第に內侍車といふ事ありそれなどの事にや

一度ないしやうの官女にてのちに緣に付ゐたる人也

さてこもりゐたる人はいとよし、ずりやうの五節などいだすおり、さりともいたうひなび、見しらぬことなど人にとひきゝなどはせじと、こゝろにくきもの也 受領は任國にゐて禁中の事うとけれど北の方宮仕なればこゝろにくしと也 ひなび田舍びて也

○受領は大納言宰相國守などのむすめを五節の舞姫に出すなり十一月中丑の日常寧殿にて天子五節の舞姫を御覽ある事なり ○五節の事は淸見原天皇吉野の宮にましましける時に神女下りて琴の音を感じて五節袖を返して舞うたふ是を五節のはじめとや ○愚考是までみさゞきといふより聖天子の御廟をしらせ家はといふ條下によろしき宮室をあらまし書顯しさて淸涼殿のうしとらといふよりは禁中のいみじき事までのあたり少納言が見及しおもむきを書つらねたるなりよくこゝろをつけてみるべし

○すさまじきもの おそろしき心又興なき心もあり

ひるほゆる（吠）いぬ、春のあじろ（網代）、三四月の紅梅のきぬ

○守レ夜一犬迎レ人吠といふ古詩のごとくいぬはよ

るこそしらぬ人をむかへてほゆべきにひるはつき
なきほえやうすさまじきものなり○あじろは冬の
ものなるに春はみるもすさまじと也○紅梅のきぬ
装束の衣色に十一月より十二月にいたるまで着す
べし三四月はその色似合しからずすさまじきな
り
ちご（兒）のなくなりたるうぶ屋（産）、火おこさぬひおけすびつ（炭櫃）、うし死にたるうしかひ（牛飼）、はかせ（博士）のうちつゞき女
子むませたる、○職原　陰陽（テンミヤウノ）博士　相當正七位下　曆（リヤクノ）博士　天
文〻〻　漏刻〻〻　文章〻〻　音〻〻　書〻〻
明法〻〻　算〻〻　色々の博士あり爰は陰陽の博
士のうらかたに男子々々といへどもうちつゞき女
子むませたるはすさまじ
かたゝがへに行たるに、あるじせぬ所（留守つかふ事也あるじもうけせぬ所也）、まして節分
はすさまじ　○方違とはいづくにてもゆかんとおも
ふかたの金神にあたり又臨時に天一神太白神など
のふたがれば其方へゆかで先ことかたへ行て其か
たをたがへて其心ざしたる所へゆく事也
ひと（他）の國よりおこせたる文のものなき（みやげものなき也文のみ也）、京のをもさ

（京より田舎へやる文の事也）（京の色々書事也）
こそ思らめども、されどそれはゆかしき事もかきあ
つめ、世にある事をきけばよし、人のもとにわざとき（めつらしき也近所への文の事也）
れい（きれい也）よげにかきたてゝやりつる文の返事見ん、いまはき（文の返事に）
ぬらむかしと、あやしく（怪何とてと不審の心也）をそきとまつほどに、ありつ
る文のむすびたるも、たて文も、いときたなげ（惡）にもち
なし、ふくだめて（ぼゞけて也）うへ（上）に引たりつるすみ（ふうじ目也）さへきえた
るを、おこせたりける、もし（若）はものいみ（物忌）とてとりい
れずなどいひて、もて歸たる（その文を）、いとわびしくすさま
じ
○服忌令云穢（エ）所（ショ）ヨリ來ル書狀ヲバ封ジ目ヲ門戶
ノ外ニシテ使ニトカセテトリイルレバ不レ汚（ケガレ）コナ
タノ奏者ハ不レ可レ解（トク）文箱ニイレタル狀ヲモカノ使
門外ニテ取出シテ封目ヲトキイダセバ不レ汚コナ
タノ奏者出セバ汚ル、也折紙拈（ヒネリ）文ハ封目ナキニヨ
リテ不レ汚也タヾシ文箱ニハラバ於二門外一トリ出
スベシ
またかならずく（來）べき人のもとに、くるま（むかひの）やりてまつ
に、入くるをとすれば（車の）、さななり（さやう也と也）と人々出てみるに
車やどり（舍）にいれて、なかえ（轅）ぼう（牛（部））とうちおろす（下）を、い

あるじのといふ詞也　使の答也
かなるぞととへば、けふはおはしまざずわたり給は
牛の分をといふ心也
ずとて、うしかぎり引いでゝいぬる　○ぼうはうし
のなく也牟説文牛鳴也又韓文第八云征蜀聯句推牛
牛呼レ牟とあり牛かひの牛にとゞまれといふ時の
但ぼうとくたびれてうちおろしたる心か
言葉にぼう〳〵といふ事也
動　不來
また家ゆすりてとりたるむこの、こずなりぬるいと
かのむこを　許　遣
すさまじ、さるべき人の宮づかへするがりやりて、
いつかさかり給はんと待也本意　小兒　乳母
いつしかとおもふもいとほゐなし、ちごのめのとの
白地しばし也　めのとの　兒の尋れは也
たゞあからさまとて、いぬるをもとむれば、とかく．
兒を　慰　疾　來よと也
あそばしなぐさめて、とくこといひやりたるに、こ
むかひのものを
よひは、え參るまじとて、返しおこしたる、すさまじ
清少の心也　めのと待さへまして
うのみにもあらず、にくさわりなし、女などむかふる
女をむかへんはと也
おとこましていかならむ、待人ある所に、夜すこしふ
更　敲　逼
けて、しのびやかに、門をたたけば、むねすこしつ
さもあらぬ　由緒もなき也
ぶれて、人出してとはするに、あらぬよしなきもの
何がしと
ゝなのりしてきたるも返す〳〵すさまじといふもお
驗者　物怪　調伏
ろかなり、なかにもげんしやのものゝけてうずとて

いかさましろしみせんの體也　獨鈷　念珠
いみじうしたりかほに、とこ、ずゞなどもたせて、
○獨鈷　行法所要抄云五鈷三鈷一鈷金佛蓮三部杵
也五鈷五部之金剛故爲二金剛部一三鈷三部一躰故爲
二佛部一獨鈷摧破杵也西方爲二通調伏妙觀察知說レ法
斷レ疑是摧破也又西方蓮華即理也理獨一法界故爲二
一鈷一○念珠　數珠經略云其數珠躰種々不レ同ニ校
量ニ乃至槵子掐ニ一遍ニ得ニ福千倍一蓮子得ニ福萬倍一
水精得ニ福千億倍一若菩提子或掐或手持得ニ福無
量一
蟬の聲の如くあとばりに經をよむこと也　もの、げ
せみごゑにしぼり出しよみゐたれと、いさゝかさり
さろけしきなく也護法　よりのつかぬ也　人を　いのりれんじて
けもなく、ごほうもつかねば、あつめてねんじゐた
どれぞによりつけかしと也　いなことゝ也　時刻のうつ
るに、おとこも女も、あやしとおもふに、時のかは
るまで也　經を　困也くたびれて也　よりに　しりの人を
もまでよみこうじて、さらにつかず、たちねとて、
もたせて置しずゞを也　われと也　しろしなしと也
すゞとりいたして、あれとげんなしやとうちいひて、
額　けんざのいのりくたびれし體也　欠
ひたゐよりかみざまに、かしらさぐりあげて、あく
けんざの　國司
びをおのれうちしてふしたる、除目につかさえぬ人
もとよりありし　家人
の家、ことしはかならずときゝて、はやう有しもの
片田舍
どもの、よそ〳〵なりつる、かたゐなかにすむものど

もなど、みな(京へ)あつまりて、出入くるま(たがひに賀しとふ心也)のながえも、
ひまなく見え、ものまうでする(任國すべき人の)供にも、我も〳〵と(司になり給はんといはひする也)
まゐりつかうまつり、ものくひ酒のみのゝしり(わめく心)あへ
るに、はつる(除日の終る曉也)あかつきまで、門たゝくをともせず、(隱蜂の二字公卿職事などの)
(不審也)あやしなどみゝたてゝきけば、さきをふこゑ〳〵し(國司あづかりたるかと聞)
(除日過て退出の時を云也)て、かんたちめなどみな出給ふ、ものきゝに、よるよ
(にやる也正月の時分也職 居)りさむがりわなゝきをりつる、げす(下女)おのこなどいと(主人の受領)
(せぬに力をおとす體也)ものうげに、あゆみくるを、みるもの(内に居てみるもの)ども、とひだに
(他)もえとはず、よそよりきたるものなどぞ、とのは(たれとのは也)な
(何の官にか也)にゝかならせたまへるなどとふ、いらへ(除目にあづかる人の答也)には、なに
(もと受領して其後何の國をも給はらぬを云ふ)のせんじにこそはと、かならずいひふる(いひふらす也)、まことに(殿の國)
(司に成給はゞ何の官の下づかさにもとおもひしもの也)たのみけるものは、いみじうなげかしとおもひたり、
(晨)つとめてになりて、ひまなく(所のせばき程居る也)おりつるものも、やう(そろ〳〵)
(也 外より入し人何のかひもなく退出のさま也 譜代の者也)
〳〵ひとりふたりづゝすべりいでぬ、ふるきものゝ、
(さても也 外に主どりせぬものゝ事也 何の國司にならんと評判也)
さもえゆきはなるまじきは、來年の國々を手をおり(除目にあづからぬ)
て數へなどして、ゆるぎありきたるもいとおかしう
(ものゝ體を脇より見たるはすさまじと也)
すさまじげなり、よろしうよみたりとおもふ歌を、

人のもとにやりたるに、返しせぬけさう文はいかゞ(懸想文はむつかしく思)
(ひ返しせぬも理と也雪月花の時節也)(あはれをもしらぬ)
せん、それだにおりおかしっなどある返事せぬはこ
(やうなれば也)
ゝろおとりす、
(世間の事にまぎらはしき方也)(世をすて又世にすて)
またさはがしうときめし所に、うちふるめきたる人
(られし事也)(古めかしく)
の、をのがつれ〳〵といとまあるまゝに、むかしお
(しかも何の興もなき歌也)(何ぞ)
ぼえてことなる事なき歌よみ(作め字也)しておこせたる、もの
(の節會の時節也)(はれにおもひて也)
ゝおりの扇、いみじと思ひて、こゝろありとしりたる
(思出の外似合ぬ繪)
人におらせたるに、その日になりて、思はずなる繪
(也)(接の字又産養)(餞別也旅人にもや)
などかきて得たる、うぶやしなひ、馬のはなむけな
(ろ也)(その使也)(かならずもらふべきにとらせぬす)
どの、つかひにろくなどとらせぬ ○祿の字の心は
(さまじと也)
說文福也とあればなにゝよらず位あるかたより給
はるものをいふ也
(藥玉)
はかなきくすだま ○公事根源に云五月五日の節會
天皇武德殿に出御ありて安坐を行はれ群臣に酒を
給ふ也内辨なども元日七日十六日豊明(トヨノアカリ)の節におな
じ人々皆あやめのかづらをかく日かげのかづらの
ごとし典藥寮(テンヤクノカミ)あやめのつゝみを奉る群臣に藥だま
を給ふ五色の糸をもて臂に懸れば惡鬼をはらふと

いふ本文荊楚歳時記にあり
うぶやしなひ具のはなむけは不及申はゝなきくすたま卯づちの祝
卯づちなどもてありくものなどにも、猶かならず
ひ使にのもものとらすべしと也
とらすべし、○源語類聚云正月乙卯大學寮獻二
杖八十枚一也卯杖同事也年中の惡氣を逐ふ
心に杖を用ゆ。江次第二絲所進二卯槌一藏人取レ之
結二付晝御帳一懸二角柱一副二立細木一爲レ柱槌末出五
尺計可レ用二桃木一 又四方可レ削 近代丸也○文德實
錄云仁壽二年正月乙卯諸衛府設レ杖逐二精鬼一也
おもひがけぬことに得たる（ろくを）をばけう（興）ありとおもふべ（可然也）（一かどろくを得んとおもふにさ）
し、これはさるべき使ぞとこゝろときめきしてきた
るに、たゞなるはまことにすさまじ、むことりて、（もなきはすさまじと也）（聟入也）
四五年までうぶやのさはぎせぬ所、おとなゝる子ど（子うまぬ所也）
ものあまたようせずば、むまごなども、はひありき（這行）（もしはの心也）
ぬべき人の、おやどち（共）のひるねしたる、かたはらなる
子どものこゝろにも おやのひるねしたるは、より（さひしくすさまじと也）
所なくすさまじくぞ有し。ねおきてあぶるゆはしはら（頼む方もなく也）（沐浴の二字湯）
きにあぶるはつきなしと也 元日もはれましきかと也
だゝしくさへこそおぼゆれ、しはすの晦日のなが雨、

一日ばかりの精進（程也）のけだい（解怠也）とやいふべからん、八月（時分に）
のしらがさね ○白重は四月一日なるに八月はすさ（懈せぬ也）
まじと也寶治百首に俊成 夏くれば衣かへして山
がつのうづき垣根もしらがさね也
ちあへずなりぬるめのと（乳母）（乳のあがりたる也）
◉たゆまるゝもの（おこたる心也）
さうじの日のおこなひ 遠きいそぎ、寺に久しく籠
精進日の修行かならずゆだんになる也 ろしき心もあり 何事も末遠き事はゆだん也
りのいみの時の寺こもりたゆまるゝ也
たる、
◉人にあなづらるゝもの
家の北おもて、あまりこゝろよきと人にしられたる（淡の字心のあとなき女也）（無用心なれば也）
人、年よりたる翁（いニおいたる） あはあはしき女、ついぢのくつれ
○玄旨法印の説つゐんちとすこしもつ心ありてよ
むべし六條宮の御撰の伊勢物語眞字本に築墻（ツイカキ）と書
てつゐぢとよむ實澄の御説についひぢのひの字い
とよむべし文章の法に世俗をきらふ故につゐいち
とよむ也
◉にくきもの
いそぐ事あるおりにきて、長ごと（長物かたり也）するまらふと（客人也）、あ
なづらはしき人ならば、後になどいひてもをひやり（逐遣）

つべけれど、さすがに（流石の二字）心はづかしき（恥）人、いとにくゝむ（悪）
つかし、硯にかゝみ（髪）の入てすられたる（摩）、又すみのうちに（硯墨）
石のこもりてぎしぎしときしみて（軋）なりぬる（鳴）、にはか（遽）
にわづらふ人のあるに、げんざ（驗者）もとむる（求）に例ある所
にはあらで、ほかにある、たづねありくほどに、待（げんざの）
どをに久しきをからうじて（辛勞）まちつけて、よろこびな
がら、かぢ（加持）せさするに、このごろもの丶けにあづか
りて、ごうじ（困の字くるしむ心也）にけるにや、ゐるまゝに、すなはちね（すはると早眠る也）
ぶり聲になりたる、いとにくし　○冊身義曰加持者
表如來大悲與衆生信心佛日之影現衆生心水曰
加、行者心水能感佛日名持秘藏記の心は加は
諸佛の三密也持は行者の三業也かの佛の三密を衆
生の三業にたもちたるを加持と云ふ也

なんでう（何條也　何の態もなき人）事なき人の、すゞろにえがち（得たる顔して也）にてものいと（笑）
いたう（強）いひたる。火おけすびつ（爐）などに、手のうらう
ちかへし、しは（皺）をのべ（推伸）などして、あぶり（炙）おる（居）もの、い（老）
たる人な（いましめ也）つかはわかやかなる人などの、さ（さやうに也）はしたりし、老ばみ（テニハ也）
たるものこそ、火おけのはた（縁）に、あしをさへ（副）もたげて（擡　あげて）
ものいふまゝにをしすり（揺）などもするらめ、さやうの（の心也）
ものは、人の許にきてゐん（居）とする所を、まづあふぎし（下に居も定めず也）
てちり（塵）はらひ（拂）すて丶、ゐもさだまらず、ひろめきて（廣がりく也）、
かりぎぬのまへ、しだざまにまくり（揚）入ても居るかし
○裝束の書にかりぎぬいろは不定也袖ぐゝりあり
わかき人はうすひら（薄平）のくみ（組）もえぎ（萌黄）紫などのうちま
せなりいろいろの差別あり大納言まで着用のもの
也と見えたりかりぎぬの時もちろんゑぼしをきる
也

かゝる事は、いひかい（言貝）なきもの丶きは（分際おとしめたる心也）にやとおもへ
ど、すこしよろしきものは、式部の大夫駿河の前司（ゼンジ）な
どいひしが、させし（さやうにせし也）也　○式部丞の敍爵したる也式
部の丞は相當六位なるが五位に成たるをいふ也
また酒のみて、あかき（赤き侍也）くちをさぐり（口なめずり也）、ひげ（髭）あるもの
は、それをなで（撫）ゝさかづき人にとらするほどのけし（醉タハレテ人ヲそゝのかし）
き、いみじくにくしとみゆる、又のめ（のますろ也）などいふなる
べし、身ぶるひをし、かしら（頭）ふり（掉）くちをさへ引たれ（ただながし口ゆがめ抔したる也）
て、わらはべ（童）の、この殿に參てなと、うたふやうに（この殿といふうたひものなどうたふなるべし）

さやうにしたまひしな
する、それは（休め字也）しも誠によき人の、さしたまひしより、
清少直に見たるなるべしよき人のするさへにくしと前へあたりて也
心つきなしとおもふ也
ものうらやみし、身のうへなげき、人のうへいひ、
つゆばかりの事もゆかしがりきかまほしがりて、い
我しらむ事を也　うらみ也怨の字也
ひしらぬをはえんじそしり、またわづかに聞わたる　他
從來　誹謗
ことをば、われもとよりしりたることのやうに、こ
人也　批判也　憂也
と人にもかたり、しらべいふもいとにくし、ものき
間の心也
かんとおもふほどになくちご。からすのあつまりて
とびちがひなきたる、しのびてくるひと、見しりて
さうあるまじき也
吠
ほゆるいぬは、うちもころしつべし、さるまじう、
強　おもひ懸ぬ所に也　伏　鼾したる也
あながちなる所に、かくしふせたる人のいびきたる、
密　長烏帽子
またみそかにしのびてくる所に、ながゑぼしして、
惑うろたへ也
さすがに人にみえじとまどひ出るほどに、ものにつ
障　戳そよりと也
きさはりて、そよといはせたるいみじうにくし、い
伊豫簾　懸　被
よすなどかけたるをうちかづきて、さら〳〵となら
すだれた　帽額とも木瓜とも書也　剛
したるもいとにくし、もこうのすはましてこはきも
こは〳〵しきもの〻引かづきておつる音する也
の〻うちをかる〻いとしるし　○いよすにもかうの

つきたるを云也○西宮記云撤二尋常御簾一改レ簾以二
ドンジキ　ハシノモカウ
鈍色細布一為二蟷帽額一
そろりと也　すだれた
それもやをらひきあげて出入するはさらにならず、
またやり戸など、あらくあくるもいとにくし、すこし
もちあぐるやうに也　ならぬといふてには也
こしもたぐるやうにて、あぐるは、なりやはする。
障子　撓たは〳〵する心也
あしうあくれば、さうじなどたほめかし、ごほめくこ
と〳〵となる心也　蚊
こそしるけれ、ねぶたしとおもひてふしたるに、か
彼蚊の身の程也　なりにも似合はぬとの心也
のほそごゑになのりてかほのほどにとびありく、羽
風さへ身のほどにあるこそいとにくけれ、ぎしめく　軋
行
車にのりてありくもの、耳もきかぬにやあらんと、い
かりたる車なればその車をといふ也
とにくし、我のりたるは、そのくるまのぬしさへに
くし、ものがたりなとするに、さしで〻われひとり
才也かしこだてする也　部　童　長
さいまぐるもの、すべてさし出は、わらはもおとな
こいとにくし　○論語郷黨篇二孔子於二郷黨一恂々如タリ也
似二不レ能レ言者一朱子集註恂々信實之貌似二不レ能レ
言者一謙卑遜順不レ以二賢知一先人也清少納言がお
もはくこの所の趣に似がよひたる也おそらくは賢
女ともいふべし

むかしものがたりなどするに、我しりたるけるは、
ふと（不圖）出ていひくたし（言腐）などするいとにくし、ねずみの
はしりありくいとにくし、あからさまに（白地の二字かりそめに也）きたる子
どもわらはべを、らうたがりて（かはゆがりて也）、おかしきもの（おもしろくやさしきもの也）など
とらせたるに、ならひて（なれての心也）、つねにきて居入て、てうど（調度）
やうちちらしぬるいとにくし、家（私の家）にても、宮づかへ所（公の内）
にても・あはで（あはずして也）ありなんと思ふ人のきたるに、
そらね（空寝）をしたるを、我もとにあるものども（内の者也）おこし（起）、
よりきて（寄來）は、いぎたなし（れごいと思ひて也）とおもひがほに引ゆるがし（動）
たる、いとにくし、いま參の、さしこえて（もとよりの人に）ものしり
がほに、をしへ（なをしへだて也）やうなる事いひ、うしろみたる（後見がましくふるまふ也）いと
にくし、我しる人にてあるほとは、はやうみし女の（はじめてあひし人の事今の妻也）（もとのつまの事）
こと・ほめいひ出しなどするも、過てほどへにけれ（いまなるゝ女の事ほむるましてにくし）
ど、猶にくし（しと也）、ましてさしあたらんこそ、おもひや
らるれ、されどそれはさしもあらぬやうもありか（されどさやうの事はいはぬ人もあるぞと也）（事によりてにくからぬと也）
し、はなひて（嚔）じゆもんする（誦文まじなふ事也）人おほかたの家のおとこ（一家の男主也）
しうならでは、たかくはなひたるものいとにくし（こゝもとは無禮をにくむ也）

○四分律云　世尊嚏諸比丘咒願言二長壽一時有二居士一嚏及禮二拜比丘一佛令三比丘咒願言二長壽一○容齋隨筆云今人噴嚏不レ止者必噀レ唾祝云有レ人說レ我婦人甚　○袖中抄云　今俗正月之日若早旦嚔即稱云千秋萬歲急々如律令是緣也何只在二元日一乎尋常禱レ之

のみ（蚤）もいとにくし、きぬ（衣）の下におどりありきて、もたぐる（つれなき也）やうにする（むくくする心也）、いぬのもろこゑにながくとなきあげたる、まがくしく（惡の字いまくしき也）にくし、あけて（戸明て）出ぬる所、たてぬ人いとにくし

●こゝろときめき（鳳の字）するもの（時めくは、うごく心、あやふむ心、うれしき心あり）（所々にてみるべし）

すゞめの子がひ（養）（ふむ心也）、ちごあそばする所の、まへわたり（前などなる心也あやぶむ）たる、からのかゞみのすこしくらきみたる（くらきを見たる心もとなき也）、よきおとこの車とゞめて、あないし（案内）とはせたる（薫とふ人あれかしと心時めく也）、よきたきものたきてひとりふし（伏）たる、かしら（頭）あらひ（洗）て、けさう（化粧）して、かう（香）にしみ（染）たるきぬきたる、ことに見る人なき所にても、こゝろのうちはいとおかし、待人など

ある夜、雨のあし風の吹ゆるがすも、ふとおどろかる

●過にしかたこひしきもの

ひゐなあそびのてうど　○調度よろづの道具をいふ也　源順和名調度部佛具僧具武具圖書衣服器財など入たり、

二藍前に記す　ふたあゐ、ゑびそめなどの、さいてのをしへされて、をしくさになりて也

曹子たんすの類也　さうしのなかにありけるを見つけたる　○ゑびぞめ覺悟抄云經帝緯紫亦云おもてすほううらはなだ冬より春にいたる　○徹正記物語云ゑびぞめの下がさねはえひづるの色したるもの也ぶどうのうみたる色は。紫黑色なるものなりこの色をゑびぞめといふ日本紀葡萄○さいて後撰秋の下にもみぢと色こきさいてとを。女のもとにつかはしてとありきれ〴〵のやうなるきぬをいふ也うるしこすきぬ紅おゐすゐのなどいまもさいてといふ也

おもしろき心也　あはれなりし人の文、雨なとのふりて、つれ〴〵なる日さがし出たる、かれたるあふひ　○賀茂の祭の日人々あふひかづらを懸る也賀茂松尾の社司前の日より可レ然所へたてまつる四月中の酉の日なり諸道具にもあふひ懸るその祭すぎてあふびのかれとゞまりたるをかれたるあふひとかきたりそのあふひをなさけなくとりすつる事こゝろある人のうへにはさはあるまじきよしつれ〴〵草にも書たり

てのかはほり、月のあかき夜　○扇は舜王の五明殷宗高の雉尾扇　周昭王の時の鵲翅其外桃葉扇芭蕉扇九花七輪などもゐこしの事にさま〴〵おほかり今の扇は日本にてつくりたる也蝙蝠の羽をみて是をまなぶと也かるがゆへにそのかたち蝙蝠の羽に似たる也源氏にもかはもりと書り其比はをしなべてみなかくいひけるにや

清少納言旁註卷三

●こゝろゆくもの（なぐさむ心氣味のよき心あり）
よくかいたる女繪のこと葉（詞がきの事）おかしうつゞけておほか
る、ものの見のかへさにのりこぼれて、おのこどもい
とおほく、うしよくやるもの（舍人也）ゝ車はしらせたる、し
ろくきよげなるみちのくがみ（奧州より出ル檀紙の事なり）に、いとほそうかくべ
くはあらぬ筆して文かきたる、（かゝれまじき筆にてしなよく書たる也）（の事也）てうばみ（重食ヿ休め字也）にてうおは（おりは）（二筋を一筋に合たるなり）
くうちたる、うるはしき（美）いとのあはせぐりしたる、
河舟のくだりさま、はぐろめのよくつきたる　○文
選註云黒齒國在二東海中一其土俗以レ草染レ齒故曰二（五倍子也）
黒齒（ハグロ）一今の婦人のふしかねの事也
ものよくいふをんやうじ（陰陽師也　相當從七位上）（みやうじとよむべし）して、河原に出て、すその（兕咀）
はらへ（祓）したる、○是は人に職神をふせられなどのろ
はれたる事の災難なきやうにと解除（テジョ）するなり中臣
祓を兕咀怨敵疾病消除祓と卜部家に用る類なるべ
し
よるねおきてのむ水、つれ〳〵なるおりに、いとあ

まりむつましく（睦）はあらず、うとく（疎）もあらぬまらうと（客）
のきて、世中のものがたり此ごろある事の、おかし
きもにくき（惡）もあやしき（怪）も、これにかゝり、かれにかゝ（懸の字なり）
り、おほやけ（公）わたくし（私）おぼつかながらず（不覺束）、きゝよき程
にかたりたる、いとこゝろゆくこゝちす、社寺など
にまうでゝ、もの申さするに（祈念を佛神に申也）、寺には法師社にてね
ぎ（禰宜）などやうのもの、、おもふほど（頼む人のおもはくよりも也）よりもとゞこほり（滯）
なく、きゝよく申たる、（のつとの詞をすら〳〵と申也祓欄毛第一巻に委し）びろうげはのどやかにやりた（行）
る、（おも〳〵しくせよとなり）急ぎたるはかろ〴〵しくみゆ、あじろ（と讀べし）は（只の人もつるものなれば早く行てたれならんとおもはる、よしと也）はしら
せたる、人の門の前などわたりたるを、ふと見やる（門の内より）
ほどもなく過て、供の人ばかりはしるを、たれなら
むとおもふこそおかしけれ、ゆる〳〵と（あじろ車の）久しくゆけ
ばわろし、うしのひたゐ（額）ちいさくしろみたるが、はら
のした（下）あしのしも（下）尾のすそしろき　○網代　鑾之時
召レ之下簾如レ常上白綱如二半蔀一立レ板大八葉○格
物論牛大牲數種赤色曰二騂特一黄曰レ特白曰レ犛黒曰
レ犉純色曰レ犧牲雜曰二[illegible]一（斑）（句盧毛）（句）
馬は紫のまだらづきたるあしげいみじくくろきが、

あし(足)かた(肩)のわたり(あたりの心也)なとに、しろき所、うす紅梅(紅梅月毛)の毛
にて、かみ(髪)尾なども、いと(最)しろきげにゆふかみ(木綿紙)とし(て)
のやうにみゆるとなり
いひつべし　○躬恒家集に馬の毛をよみたる歌の中
に
戀すればやせこそすらめものゝその(馬の尾也)ゆふがみ
じかくおもほゆるかな
うし(牧)かひはおほきにて、(庭也きつとしたる也)かみあかしら(赤白髪)がにて、かほ
のあかみてかとかとしげなる、ざふしきずいじんは、ほそ(ほそ)
ほそやかなる、よきおのこも猶わかきほどは、さる
やかなる也
かたなるぞよき、いたく(強)こえ(肥)たるは、ねぶたからん
人とおもはる　○職原抄　雜色良家子補レ之○禁秘
抄　本員數(インシユ)八人代々皆轉ニ藏人一仍公卿子孫又可
レ然諸大夫補レ之雖レ爲ニ諸院宮判官代藏人ニ不レ可レ着
ニ指貫一只狩袴躰也　○東鑑治承比出雲時澤爲ニ雜
色長一此時分時澤度々自ニ京都一爲ニ御使一下ニ鎌倉一
侍の官にして御使をつとむるなり○隨身は第一卷
に記す
小舍人はちいさくて、かみのうるはしきが、すそさ(さは)
やかに也
はらかに聲おかしうて、かしこまりてものなどいひ

たるぞりやうりやうしき(旦々也よしといふ心也)　○職原抄　小舍人六人近代
十二人　裝束白張狩衣立烏帽子殿上人之出納御倉
等下雜事召仕也常居ニ校書殿一也有ニ御用一召ニ昇ニ殿
上一　校書殿在ニ殿南一殿上横板敷坤角柱付ニ蕪芳
綱一付レ鈴召ニ小舍人一之時藏人引レ之自ニ二條院時一
始
ねこはうへ(背)のかぎりくろくて、ことは(異也)しろからん(よの所也)
說經師(說法也)はかほよき、講師のかほをまぼらへ(守りながら法ヲ聞也)たるこそ、
そのとく事のたうと(尊)さもおぼゆれ、ひがめ(僻目よそ目也)しつれば、
說法ナ
ふとわするゝに、(講師のかほの)にくげなるは、つみやうらん(にくゝ思ふは罪にならん)とお
んと也
ぼゆ、(地也悪き法師のかほなと、云詞はとゞむべしと也)此ことばはとゞむべし、すこし年(若年也)などのよろ
しきほどこそ、かやうの罪はえ(得)、かたのごと(形のごとく也草子に書も)き
せめと也
出けめ、今は罪いとおそろし、(今老の身ニなりてはつゝむべしと也)又たうとき事(行)道心お
ほかりとて、說經すといふ所に、(講師ヲニクム心ナラバ說法聞ニゆかであれかしと也)さいそ(最初)にいきぬる
人こそ、なほこのつみのこゝちには、さしも(官ヲのきし也)
うに也
あらでみゆれ、藏人(藏人の)おりたる人は、むかし(句)に御せん(供奉の時)
馬にて前駈する事也
などいふわざもせず、そのとしばかり、內わたりに
其年計はとかくしけるが藏人ヲリテハ內わたりニハ影もみえぬと也
はましてかげもみえざりける、今はさしもあらざめ

る、藏人五位とてそれをしもいそがしうつかへど、な（藏人の職つとむる時計急がしうつかうまつれど也　藏人チリタレバ事もなくさびしと也）
をなごりつれづれにて、心（藏人の心也）ひとつはいとま有こゝち
ぞすべかゝめれば、　○六位藏人四ヶ年の後巡爵にあ
づかりて地下におりたる人也六位は藏人は殿上す
る也五位にても藏人をさりては地下におるゝなり
○職原抄　五位藏人　唐名仙郎　五位殿上人中ノ名家譜
代殊撰ニ其器用ニ被レ補也　中略　頭及五位藏人必聽ニ禁
色ニ
さやうの所（說法の場也）にて、　ひとたびもふたゝびも（說法事）聞そめつれ
ば、つゐに（いつまでも）まうでまほしうなりて、なつなどのいとあ（たへがたき暑氣ニモ聽聞したきと也）
つきにも、　かたびら（藏人五位）いとあざやかに、うすふたあゐ、
青にぶのさしぬきなゝどふみちらしてゐたゝめり　○
覺悟抄　青鈍者花田濃色又もえぎのくろ色に見ゆ
るをいふともあり
ゑぼしにものいみつけたるは　○物忌といふ字を書
て或は身におび又は門に懸御殿のみすの間ごとに
ものいみをつく　○迦毘羅衛中ノ有ニ桃林ニ其中有ニ
一丈鬼王ニ號ニ物忌ニ其鬼王邊他鬼神曾以不レ得レ寄
爰彼大鬼神王發ニ誓願ニ云利ニ益六趣有情ニ實ニ吾名

號ニ人宅物怪屢現惡夢頻示可レ豪ニ諸凶害ニ時臨ニ其
日ニ書ニ吾名ニ門立其故他鬼神不レ令ニ來入ニ亦書ニ吾
名ニ令レ持人々如レ影可レ令ニ守護ニ
けふ（もの忌なれども也）さるべき日なれど、功德のかたには（佛事のためには也）さはらずと
にや、急ぎ來て、その事するひじりとものがたりし（もの忌の時は法師にあはすものもいはぬ法也）
て、くるまたつるをさへぞ見いれ（車どもみて法を信仰せぬ也）、ことにつぎたる（次也事の次に）
けしきなる（來るやうの體也　聽衆の內ニテ知音にあひ雜談の體也）、ひさしくあはざりける人などのまうで（詣）
あひたる、めづらしがりて、ちかくゐより、ものが
たりし、うなづき（頰）おかしき事など語出て、扇ひろう
ひろげて（攤）、くちにあてゝわらひ、さうぞくしたるず（金銀のかざり也　念珠）
ゞ、かいまさぐり（弄つまぐる也）手まさぐりにし、こなたこなたう
ち見やりなどして、車のよしあしほめ（譽）そしり（毀）、なに
かして、その人のせし（そんてう其所にて也）は講經供養にといひくらべた（今きくとくらぶる也）
るほどに、此說經（今きく說法也）の事もきゝいれず、なにかつねに
きく事なれば（說法聞入ぬ藏人五位か事を淸少の推量の地也）、みゝなれてめづらしうおぼえぬにこ
そはあらめ、さはあらで（藏人五位か樣にあらで也講師）、かうじゐて、しばしあるほ（禮盤倚子）
どに、さきすこしおはする車とゞめておるゝ人（車より）、せみ（うすく）

きよらなるさま也 の羽よりもかろげなるなをし 直衣 ○覺悟抄蟬の羽衣う
らなきすゞしの惣名也拾遺に鳴聲はまだきかねど
もせみの羽のうすき衣にたちぞきてける
さしぬき ○指貫可レ依二年齡一事 當家裝束の書に
十五歲中納言大將時濃紫浮文 十七歲大納言薄色
固織物 十八歲同官薄色綾固文 廿八歲左大臣
綾淺黃 卅才歲關白直衣始薄色堅織物
生絹 すゞしのひとへ 單 などきたるも、かりぎぬ 狩衣 すがたにて
其出立は若き人々にて也
も、さやうにては、若くほそやかなる三四人ばかり
侍ども也 しばしさやうにてゐれは也 早く詣し
さぶらひのもの。またさばかりしてゐれは、はじめ
人の時宜の體也
にゐたりつる人も、すこしうち身じろきくつろぎて 退 穴居くつろげて也
高座 かうざのもと近きはしらのもとなどにすへたれど、 かの人々を罷ス
ル也 念珠な
さすがになしもみなどして伏おかみ聞ゐたるを、講
榮はれがましく思也 いかにもして也說法
師もはへ〴〵しうおもふなるべし、いかでかたりつ
をかたりつたふるやうにと說給ふ也
たふるばかりとき出たるなり、ちやうもんすなど
禮拜也 聽聞するものなど說法はてぬうちに歸るとて
たちさはぎぬかづくほどにもなくて、よきほどにて、
立さわぐ也 右の三四人の者他の車を見をこす也 人のせりあはぬよき
たちいづとて、車どものかたなど見おこせて、われ
比とて也

どちいふ事も、なに事ならむとおぼゆ、みしりたる 清少心也
人をばおかしとおもひ、見しらぬはたれならん、それ
にやかれにやと、目をつけておもひやるこそおかし 逸興な
れの心也 參詣の人ものがたり也
けれ、そこに說法しつゝ八講しけりなど人のいひつた
そんでうその人は也 何に參けいせられんなどそ
ふるに、その人はありつや、いかゞはなどさだまり
しりていふ詞也 說法の場に無下に參らぬはい
て、いはれたるあまりなり、などかはむげにさしの
かゞと也 いやしき也 說法ヲ
ぞかではあらむ、あやしき女など、いみじく聞める
昔 さりとて女の寺參にむかしはかちはだしにて參事は
ものなれば、さればとてはじめつかたは、かちありき
なかりしと也 邂逅たま〳〵かちにて參る人もあれば也
する人はなかりき、たまさかにはつぼさうぞくなど
ばかりして ○俊成卿の女の說に市女笠にきぬきて
中ゆひたるをいふ也
嫋 化粧 寺社への參詣に
なまめきけさうじてこそありしか、それもものまう
參しと也 男タル人の集ル說法の場に
でをぞせし、說法などはことにおほくきかざりき、こ
は女のかちはだしニテハ入ざりしと也 此さうし書たる人の今の體
のごろそのかき出たる人の、いのちなくてみましか
を見たらば也 行儀正しからぬを誹謗せんと也
ば、いかばかりそしりひほうせまし、
ほだいといふ寺に、けちゑん 結緣 八かうせしが ○菩提
樹院也 拾芥に神樂岳のひがしにて上東門院の御
願也今は舊跡もなし○八講の事 元亨釋書勤操 ゴンサウ 傳

云初操居二大安寺一隣房有二榮好者一養二老母一於寺
側一操與レ好善常見レ之貴二好之篤一レ孝也好已死矣操
潛葬二好于野一蓋謂二好之母有一レ聞也使二童謂一レ人云吾師
佗(ユク)之次日操飯分(テツ)猶二好之爲一レ母聞レ之慟絶不レ起操大
嘆乃共二同志七人一葬二好母於岩淵寺一後操及七人反
レ寺操語云吾代二榮好一養二其母一養不レ艾(ミカラ)命已斷未
レ足レ酬レ好欲下薦二冥福一補上ヒ養我等八人分二法華八卷一
逢二媼忌一各講二一卷一爲二追福一公等許否七人皆諾
設二四日二座講席一修レ之名曰二法華八講會一于レ時延
曆十五年也每年不レ缺諸寺名二岩淵八講一矣

(清少の)きゝにまうでたるに、人(清少の夫なるべし)のもとよりとく歸たまへ、いとさうざうしといひたれば、はちすのはなびら(英)に、
清少の家集ニアリ千載集にも入タリ
もとめてもかゝるはちすの露を置てうき世(濁世の俗中へ)に又は立歸るまじと也
はかへるものかは」とかきてやりつ、誠(清少心)にいとたうとくあはれなれば、やがてとまりぬべく(通夜せんと也)ぞおぼゆる、つねたう(經任)が家のもどかし(家事を忘れて菩提に入し事なるべし)さもわすれぬべし
小白河といふ所は、小一條の大將殿(師忠公也)の御家ぞかし、それにて上達部結緣の八講し給ふに、いみじくめでたき事にて、世中の人のあつまり行てきく ○寬和

二年の六月中旬に八講有し也刻下にその廿日餘り中納言の法しに成給ふと有これ則義懷(ヨシチカ)中納言寬和二年六月廿四日に花山院の御供して出家せられし事なればこの前かたの事を六月十餘日といふ也

をそからん車はよるべきやうもなしといへば、露とともにおきてぞ、げにひまなかりける(すきまなく車のある體也)、ながえ(轅うしの首にかくる所也)の上にまたさしかさねて、よつ(車三輛也)ばかりまではすこしもの(三つ車のならぶ迄は八講も聞ゆると也)きこゆべし、六月十か餘(みなづきとたかあまりとよむ)にて、あつき(暑)事世にしらぬほど也 池のはちすを見やるのみぞ、すこしすゞしき(清少心)こゝちする、左右(サウ)のおとゞたちを措奉りては、おは(八講)せぬ上達部なし(聞に參られぬはなしと也) ○この所の左右の大臣おほつかなしもし公卿補任の第六にのせらるゝ左大臣正二位源雅信右大臣正二位藤原兼家これらの事にやなをたづぬべし

ふたあゐ(是ヨリ義懷チしるす也)のなをしさしぬき、あさぎ(淺黃)のかたひら(帷子の直衣の)をぞ、すかし(うすきに透となる也)たまへる、すこしおとな(老)び給へるは、あをにびのさしぬき、しろきはかまもすゞしげなりや

○衣類の色裝束の躰前にしるす 表袴(ウヘノハカマ)下袴布袴等

位々により地色紋色々差別あり略レ之
若き人とおなしやうに也寛和二年
やすちかの宰相なども、わかやぎだちて、すべてた
の比五十七歳也　八講のたうときにもあらす公家の
うとき事の限にあらず、おかしきものゝみ也
居なみたる體よきもの見と也
藤氏系圖云參議正三位安親中納言山蔭孫從四位上
攝津守仲正三男也　母は伊勢守源友貞の女也長德
二年三月六日卒六十七歳　職事補任曰　一條院藏
人頭散位從四位上藤安親寛和二年六月廿三日補ニ
前坊亮ニ永延元年十一月十一日任ニ參議ニ
廂ふんがはの事也籠高欄　長押上だんの心也
ひさしのみすたかくまきあげて、なげしのうへに上
居ならびたる也
達部おくにむかひて、ならびゐたまへり、その
狩衣也
しもには、殿上人わかき公達、かりさうぞくにをし
など、いとおかしくゐもさだまらずこゝかしこに
吟呻也
たちさまよひあそびたるもいとおかし、さねかたの
兵衛の佐　○藤家譜云小一條左大臣師尹子大將貞
時の息左中將藤實方也母は左大臣源雅信の女也
長明　未考　小一條の
ながあきらの侍從などいへの子にて、いますこし出
八講チとりもち給ふ也
入なれたり、まだわらはなる公達などいとおかし
いつれも露と共にいそき給ふに道隆はおそくわたり
うておはす、日たけたるほどに、三位中將とは關白殿

給ふと也
をぞ聞えし　○中關白道隆公也大入道兼家公の男母
は攝津守藤原仲政女天暦七年生康保四年從五位
下同十二月昇殿花山院永觀二年正月七日參議從三
位一條院永祚二年五月八日詔關爲ニ關白ニ十三日
爲ニ氏長者ニ同廿六日更令ニ攝政ニ睦日辭ニ大將ニ同六
月剃給ニ隨身內舍人左右近衞府生番長一人近衞各
四人ニ聽ニ牛車ニ
香羅
かうのうすものゝふたあゐのなをし、おなじさしぬ
濃蘇芳　はへあひたる也
きこきすわうの御はかまに、はへたるしろきひとへ
上ノ上達部のすゝしき衣類の中に也　あつくれたる也
に、いとあざやかなるを、き給ひてあゆみ入給へる
道隆チほめて也　細塗骨
さばかりかうびすゞしげなる中に、あつかはしげな
れど、いみじうめでたしとみえたまふ、ほそぬりほ
人々の　地紙は同じと也
ねなどほねはかはれど、たゞあかきかみをおなじな
並　扇チタトヘタル也
みにうちつかひもち給へるは、なでしこのいみじう
高座へ　懸盤
さきたるにぞ、いとよく似たる。まだ講師ものぼら
此のち出家し給ふを云はんとて書出したる也
ぬほどに、かけばんどもして、なにゝかあらん、も
御膳也
の參るべし、よしちかの中納言の御ありさま、つね
よりもまさりてきよげにおはするさまぞかぎりなき

や　○藤氏家譜云九條右大臣師輔の孫謙徳公伊尹の子義懷（ヨシアキラ）母代明親王女○公卿補任云故攝政太政大臣伊尹公子母者中務卿四品代明親王女天祿三年正月七日從五位下圓融院永觀二年參木從三位花山院寬和二年權中納言從二位同六月廿四日於二花山一出家依二天皇御出家一也法名悟眞卅歲受戒後名二寂眞一寬弘五年七月十七日五十二歲而逝去○おほかゞみに一條攝政の御おのこゞ花山院の御時帝の御おぢにてよしちかの中納言と聞えし少將たちのおなじ御腹よその御時はいみじうはなやぎ給ひしみかど出家せさせ給ひしかばやがてわれもおくれ奉らじと花山までたづねまいりて（飯室）なか一日はざめて法しになり給ひきいひむろといふ所にいとたうとくおこなひてぞかくれ給ひしその中納言もむまごにはおはせしかど御こゝろたましゐいとかしこくおはして花山院の御時のまつりごとはたゞこの殿と惟成の辨としておこなひ給へればいといみじうし給ふぞかし

（地也）上達部の御名などかくべきにもあらぬを、たれなりけむとすこしほどふれば（聞かあれば也）、いろあひ（上達部の衣裝の）はな〴〵といみじくにほひあざやかに（鮮也）、いづれともなき中のかたびらを、これは（よしちかの事）まことにたゞなをしひとつをきたるやうにて、つねに車のかたを（上達部の）見やりつゝ、ものなどいひおこせ給ふ（女車のこづみし也）、おかしとみぬ人なかりけん（花々しければ皆人見とがむる也）、のちにきたるくるまのひまもなかりければ、地に（イ本ニ池と有）よせてたてるを見給ひて（よしちかの句）、實方のきみに人のせうそこ（音づれ也消息の字也）ひしく、いひつべからむ（口上を）ものひとりとめせば（實方にの給ふ也）、いかなる人にかあらん、えりて（撰也ゑらびて也實方の口上よく云べきものを）出おはしたるに（連出して參られし也）、いかゞいひやるべき、ちかくゐたまへるばかりいひあはせて（よしちかの女車へいひやり給ふ詞を人々に談合也）、やり給はんこと葉はきこえず（清少のもとへは也）、いみじくよそひして（口上いひて參入のけしき也）、くるまの（使の）もとにあゆみよるを、かつは（且也）笑ひ給ひ、しり（車の）のかたによりていふめり（使の）、久しくたてれば（使のもの返事まちて也）、歌などよむにやあらむ、兵衛の佐返し思ひまうけよ（返歌を用意せよと也）などわらひて、いつしか返りごときかんと、おとなかんだち（おとなしき也）めまで、みなそなたざまに（かの女車の方ナ也）見やりたまへり（顯證也見所也外の人なさして也）、げにけさうの人々までみるもおかしうありしを、返事聞

使の　かの女車より
たるにや、すこしあゆみくるほどに、扇をさし出て
文字　誤
よびかへせば　歌などのもじをいひあやまりてばか
呼　清少心也　歌の不足台共あれ體使の待へき事
りにこそよびかへさめ、ひさしがりつるほどにある
にあらしと也　清少心也　直さずともあれかしの心也
べき事かは、なをすべきにもあらじものをとぞおぼ
かの使ヲ待かれたる體也
えたる、ちかく参つるもこゝろもとなく、いかにい
よしちか也
かにとたれもとひたまへどもいはず、權中納言見た
よしちかのもとによりて也　道雅也
まへば。そこによりてけしきばみ申す。三位の中將
ウシン心ありすきて興なきさせんとの心也　清少の方
とくいへ、あまり有心すぎてしそこなふなどのたま
使に也　申ても申さでも同前との心也
ふに、これもたゞおなじ事になん待るといふはきこ
へ　爲光公也　勝也　車より使の方ヲ
ゆ、藤大納言は人よりもげにのぞきていかゞいひつ
すぐれて也
るぞとの給ふめれば。〇勘物云爲光七月廿日右大將
年四十五　公卿補任云右大臣師輔公九男母延喜第
九女前齋宮四品雅子内親王天慶五年生天曆十一年
正月七日從五位下云々貞元二年四月廿四日任權
中納言寛和二年七月廿日右大臣永延二年從一位
正曆二年九月廿日太政大臣同三年六月十六日薨年
五十一移葬法住寺贈正一位恒徳公封相模國
使の返事聞て也　すぐなる木をおし折たるやうに興もなき返事のたと
三位中將、いとなをき木をなんをしおりたゝめるとき

へ也　爲光　いづれも
こえ給ふに、うちわらひたまへば、みななにとなく
颯　かの女車の内へ也　よしちか也　使ニとひ
さとわらふこゑきこえやすらむ、中納言さてよびか
給ふ也　はしぬは也　この詞がなをして
へされつるさきにはいかゞいひつる、これやなをし
後むと也　使の詞也
たる事ととひ給へば、ひさしうたちて侍りつれど
返事のなき也　さらばり歸侍らんと也
も、かくも侍らざりければ、さは参なんとてかへり
この返事を申せしと也
侍るを、よびてとぞ申。たれが、くるまならん、見
よしちかの　高座へ
しりたりやなどのたまふほどに、講師のぼりぬれば、
居定　八講の方ヲ也
みなゐしづまりて、そなたをみるほどに、このくる
女車は消うせたるにおらぬ也　車の體也　あたらし
まはかいけつやうにうせぬ、したすだれなど、けふは
き也
じめたりとみえて、こきひとへがさねに、ふたあゐ
織　上着
のおりものすはうのうすもの、うはぎなどにて、し
あとに引たる裳いすそ也
りにすりたるも、やがてひろげながら、うちかけな
車の後に也　清少の心也
どしたるは、なに人ならむ、なにかは人のかたほな
なまじゐのおろかなるふしよりたゞすらりとしたるよしとの批判也
らむ事よりは　〇延喜式細流云かたほは頑なる也
是を説法の場にて心ゆくもやう也
げにと聞えて中々いとよしとぞおぼゆる、あさゞの
威儀道徳の殊勝なる體也
講師せいはん高座のうへもひかりみちたるこゝちし
て、いみじくぞあるや　〇勘物云　清範法相宗播磨

國人號二清水律師一長德四年權律師　○東齋隨筆云

清範律師は播磨の國の人興福寺の法相宗なり空晴僧都の法孫守朝以後の上定說法無双にて文殊の化身といはるふしぎなることあげてかぞふべからず御堂入道殿實否を知りたまはんとて佛事を修して百僧を請せらる僧の座には皆半疊をもうけらるるひとつの半疊に文殊と書きたるふだを、へりの中にかくして百座にしきまじらへこの律師我座は候とてかき分て彼半疊のうへに座せられたりそのゝち決定文珠の化身とはしりたまふ卅八にして遷化淸水寺の上綱と號せり○大鏡に淸範律師いぬのために法事しける人の講師に請せられて行を淸昭律師おなじさだめの說法者なればいかゞするゝ聞にかしらつゝみてたれともなく聽聞しければたゞいまや過去聖靈は蓮臺のうへにてほとほえ給ふらんとのたまひけるをされはこそこと人はかくおもひよるまじやなほかやうのたましゐある事はすぐれしる事ぞかしとこそほめ給ひけれ

○六十二代村上の御時淸涼殿にて南北の名匠二十人を請じ應和三年八月二十一日より五日十座の御講あり

初日朝座講師南都觀理　問者園城慶祚
夕座講師南京安鏡　難者北京慈恵
二日朝導講師南都安秀　問者北嶺賀秀
夕座講師南京法藏　難者天台覺慶
三日朝導答者北京良源　問者南都平州
夕座答者北嶺禪愉　難者南京千到
四日朝講答者三井智興　問者南都眞義
夕座答者南京湛然　難者北嶺崇壽
五日朝導天台ノ壽肇（チウ）　疑者法宗仲算
夕座講師天台聖救　問者法宗圓藝

かゝる事も記錄にあり淸範の朝座の講師つとめれし次第も記錄にあるべき事なり未レ考

（暑）あつさのわびしさにそへて、しさすまじき事の（淸少の用事なやめて也）けふすぐすまじきをうちをきて、たゞすこし聞て（入講）歸りなんとしつるを、しきなみに（なみなやりて立たる車也）つどひ（集）たる車のおくになんゐたれば（淸少）いづべきかたもなし、あしたのかう（朝座講）はてなば、いかで（何とぞして也）出なんとて、（出用意のあんない也）まへなるくるまどもにせうぞこすれば、ちかくたゝむ（近くに車ヲ立て聞かんとて也）うれしさにや、はやく〱

所ヲ　清少の草ヲ上達部など
と引出あけていだすを見給ふ、いとかしかましき
清少をなといふ也　老　清少ヲ
まで人ごといふに、おいかんたちめさへわらひにく
清少　返答もせず也　然所を出ル也
むを、聞もいれず、いらへもせで、せばがりいづれば
よしちか也　やれ／＼也退出スルモ由と也法花の事を思ひよりて也
權中納言や、まかりぬるもよしとて、うちわらひた
まへるぞめでたきそれも耳にもとまらずあつきにま
どひ出て、人して五千人の中にはいらせたまはぬや
五千人法花の座を立し其中ニそなたも入給はんと也
うもあらじと聞えかけて歸りにき　○方便品曰其時
世尊告ニ舍利弗ニ汝已慇懃三請豈得ニ不ニ説汝今諦
聽善思ニ念之ニ吾當爲ㇾ汝分別解説説ニ是語ニ時會中
有ニ比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等ニ即從ㇾ座起
禮ニ拜佛ニ而退所以者何此輩罪根深重及増上慢未ㇾ
得謂ㇾ得未ㇾ證謂ㇾ證有ニ如是失ニ是以不ㇾ住（トマラ）
八講の　是又よの
八講
そのはじめより、やがてはつる日まで、たてるくる
寄來ともみえずとなり人の音づれぬ心也
車也
まのありけるが、人よりくともみえず、すべてたゞ
うごかぬ心也一所にゐる心也
あさましう、繪などのやうにて過しければ、ありが
たくめでたくこゝろにくゝ、いかなる人ならん、い
清少の　爲光　初中後
かでしらんととひけるを聞たまひて、藤大納言なに
のかぬとて何がめでたいぞと也
かめでたからんいとにくし
死人同前のものと也
ゆゝしきものにこそあなれと、のたまひけるこそお

よしちか也
かしけれ、さてその廿日あまりに中納言の法師に成
給ひぬるこそ哀なりしか　○榮花もの語に寛和二
年六月廿二日の夜俄にうせ給ひぬとのゝしるうち
のそこらの殿上人上達部あやしの衞士仕丁にいた
るまで殘所なく火をともしていたらぬくまもなく
もとめ奉るにゆめおはしまさず云々中納言や惟成
の辨など花山にたづね參たりそこに目もつゞらか
なるに小法しにてついゐさせ給へるものかあなか
なしやいみじやとそこにふしまろびて中納言も法
しになり給ひぬ惟成の辨もなりたまひぬあさまし
うゆかしうあはれにかなしとはこれよりほかの事
あッべきにあらずかの御ことゞさの妻子珍寶及王
位もかくおぼしとりたる也けりとみえさせ給ひて
さても法しにならせ給ふいとよしやいかで花山ま
でみちやしらせたまひてかちよりおはしましけん
と見奉るにあさましうかなしうあはれにゆゝしく
なん見たてまつりけり
さくらのちるはおどろくべきにあらず唯このよしちかの世をすて給
櫻などのちりぬるも、なをよのつねなりや、おいを
ふこそおしけれとの心なり　三十歳の時の發心なれば也
まつまのとだに、いふべくもあらぬ御有さまにこそ

哉也すみてよむ也
みえ給ひしか　○古今雜の下平定文有はてぬ命まつ
殘暑のころ也　しとみもやり戸もあけ
まのほどばかりうき事しけく歎かずもがな
フヅキ
七月ばかりいみじくあつければ、よろづの所あけな
しなり
がら、夜もあかすに月のころはねおきて見いだすも
よもすがら月を友
いとおかし、やみもまたおかし、有明はたいふもお
としていれんはまたさらにいふに不及と也
ろかなり　○もしほに　有明の月は十四日十五日以
後の事也又の説有明は廿日のちともいふ也
光
いとつやゝかなるいたの、はしちかう、あざやかな
緣のはし也　ちいさき
一帖也一疊とも
るたゝみひとひら、かりそめにうちしきて、三尺の
暑ければ也
木丁也
木丁のおくのかたに、をしやりたるぞあぢきなき、
影護心元なきと云詞也　句
外也おくに立るはうしろぬたしと也
とにこそたつべけれおくのうしろめたからむよ、人人
かの男は歸しと也　木丁チをしやりはしゐするはしのびのかたへ入
はいでにけるなるべし、うす色のうらいとこくて、う
紫の　紅
の行たるらんとなり
へはすこしかへりたるならずは、こきあやのつやゝ
うはしらけたる也　きぬに髮を着こめてふしたるさまなり
かなるが、いたくはなへぬをかしらこめて引きてぞ
濃
ねためる、香そめのひとへくれなゐのこまやかなる
生絹　腰のひも也　衣の下より引いでたる
すゞしのはかまのこしいとながく、きぬの下よりひ
やうの心也　かの帶紐むすばぬ也　ふしたるかたはら
かれたるも、まだとけながらなゝめり、そばのかたに

に也彼女の髮のたゝまれわがりたる也　ゆるゝゝとながき躰也
かみのうちたゝなはりて、ゆらゝかなるほど、なが
他のおとこの外より歸りきたるさま也
さをしはかられたるに、又いづこよりにかあらん、
充　かのおとこの衣裳の
躰
朝ほらけのいみじう霧みちたるに、ふたあゐのさし
色いうすき心也
ぬき、あるかなきかに、かうぞめのかりぎぬ、白き
白きすゞしの下に重れる紅のすきとほりたるにや
すゞし紅のとをすにこそあらめ、つややかなるかぎ
しどけなきさまなり
りにいたくしめりたるを、ぬぎたれて、びんのすこし
鬢鬆の二字そゝけたる心なり
ふくだみたれば、ゑぼしのをしいれられたるけしき
四度解無　後朝
もしどけなく見ゆ、あさがほの露おちぬさきに文か
の文也　歸さの道すがら思ふ躰也　生
ゝむとて、みちのほどもこゝろもとなく、おふの下
弄　おとこの方へ也　万
草など、くちずさみてわがかたへ行に　○櫻麻のおふ
人
の下草露しあればあかしてはゆけ母はしるとも　丸
○仙覺抄に櫻麻とはさくら色なる麻也おふのかは
ら下野の國也
かの女の局の格子也
かうしのあがりたれば、みすのそばをいさゝかあけ
行　他のおとこ也　我露を哀とく　おとこの
てみるに、おきていぬらむ人もおかし、つゆをあは
ちずさびしたぐひに人もあはれと思ふかと也
れと思ふにや、しばしみたればさくらがみに匂ふ紫
檀紙也
のかみはりたるあふぎひろごりながらあり、みちの

疊紙　花紅
くがみのたゝうがみのほそやかなるも、はなかくれ
色のかはりし也
なゐかすこし匂ひうつりたるも、几帳のもとに
簾中のみゐるを女の惜しむ心也　古歌に
ちりぼひたる人のけはひあれば　紫野みかりはゆ
かしましろなるくちのはかひに雫ちりほひて伯頼
よるのものなどの中より也　おとこの
きぬの中より見ゆるに、うちえみてなげしにをしか
もとよりしる人にてある也　隔心の
かりゐぬれば、恥なとする人にはあらねど、うちと
簾也このおとこに見られた
問也
くべきこゝろばへにもあらぬに、ねたうもみえぬる
ろ後悔也　男の前後の体　簾
かなと思ふ、こよなき名残の御あさゐかなとて、す
おとこの半身なり　女の容也　露より先に
のうちになからばかり入たれば、つゆよりさきなる
おき出し人のもとにおしさに我はかく例は久しくするゝ也　清少が
人のもとかしさにといらふ、おかしき事とりたてゝ
かくべきにあらねど、かくいひかはすけしきどもに
句　扇
くからず、枕がみなるあふぎを我もちたるして、お
及かゝりて也　後ひろごりたる扇を女の心也　おとこの
よひてかきよするが、あまりちかうよりくるにやと
女の引入てはづかしがる躰也
こゝろ時めきせられて、ひきぞくだらるゝ、とりて
扇をおとこの　おとこのうらみの詞也
見などして、うとく思したる事などうらみなどする
日のたけし躰也
に、あかうなりて、人のこゑ〳〵し日もさしぬべし、
この女とかくたはぶれて後朝の文の延引たるをくやむ心也
霧のたえまみえぬほどにと、いそぎつる文もたゆみ

この女のこの夜かたらひし人
ぬるこそ、うしろめたけれ、出ぬる人もいつのほど
也前に入はいでにけると有し人の事也文をいつのまにかとりつくろ
にかと見えて、はぎの露ながらあるにつけてあれど、
ひしと也いまたはふるゝ人の心なにばかりて也文に
えさし出ず、かうのかへ香いといみじうしめたる匂ひい
夜明過てまばゆければ也　その所を
とおかしゝ、まゐ　はしたなき程になれば、たち出て
かゝ扇をおもひて也　のちのおと
我をきつる所もかくやとおもひやらるゝもおかしか
この語りし女のもともかくあらんと清少がおもはく也
りぬべし、

●木の花は

萌
こくもうすくも紅梅、さくらははなびらおほきに、葉
あかき心也　こゝかしこかれ〳〵にさきし也
色こきが、えだほそうかれ花にさきたる、ふぢのは
藤
なしなひながく、色よくさきたるいとめでたし、う
品をとりてと入タルモアリ
の花は、なにとなけれど、さくころのおかしうほとゝ
ぎすのかげにかくるらむとおもふに、いとおかし
新古
○なくこゑのえやはしのはぬほとゝきす初うの花
のかげにかくれて人丸
賀茂の　いやしき也
祭のかへさに紫野のわたりちかきあやしの家ども、
荊棘
おどろなるかきねに、いとしろうさきたるこそおか
しけれ　紫野はいま宮大徳寺のほとりを皆紫野と
いふ也

おとろの垣の青きに卯の花の白きたとへ也
あを色のうへに白きひとへ（似たる也）、かさねかづき（被）たる、青
くち葉などにかよひておかし　○青色は麴塵（キクヂン）也前に
委し○覺悟抄に青朽葉青丹黑（アヲニニクロミ）あり裏青｜老者多
着レ之四　五月の式也
卯月のつごもり、五月のついたちなどのころほひ、
たちばなのこくあをきに、花のいと白くさきたるに、
雨のふりたる、つとめて（晨也早朝の心也）などは、よになくこゝろあ
るさまにおかし、花の中よりこがねのたま（しべの中に黄金の色あり）かとみえ
ていみじくあざやかにみえたるなど、朝つゆにぬれ
たる櫻にをとらず、ほとゝぎすのよる（やどる心也）とさへおもへ
はにや、なをさらにいふべきにもあらず（いはんやうもなき心也）　○後中書
王橘の詩に枝繫二金鈴一春雨後花薫二紫麝一凱風程
我やどの花たちばなの色みれば金の鈴をならすな
りけり

なしの花よにすさまじく（もてはやさぬ也）、あやしきもの（いやしき心也）にして、日
にちかく（ゑん書也なしの花には歌も文も付ぬ也）、はかなき文つけなどせすあいぎやう（愛敬）をく
れたる人のかほなどみては、たとひ（譬也）にいふも、げにそ（只白クシテスゲナキ心也）
の色よりしてあいなくみゆるを、もろこしにかぎり
なきものにて、文（詩文）にもつくるなるを、さりともあるや（いかさま）
うあらむ（子細あらんと也）とてせめて（しゐてや）みれば　○李白　梨花白雪香
東坡　梨花淡白　李遵遥レ梨表　此花開所擅二美春
林一韓退之　闘說郭西千樹雪　この外もろこしの詩
文あまたしるすにいとまあらず
はなびら（蘤）のはしにおかしき匂ひ（すこしあかき心也）こそ、こゝろもとな
くつきためれ、楊貴妃みかど（玄宗皇帝）の御つかひ（蓬萊への使方士也）にあひて、
なきけるかほに似せて、梨花一枝春の雨をおびたり
などいひたるはおぼろけ（大かたの事にてはなしと也）ならじとおもふに、猶いみ（よの花より）
じうめでたき事は、たぐひあらじとおぼえたり　○
楊貴妃　弘農楊玄琰か女也貴妃死して後方士
に命じて魂魄のありかを尋しむるに　方士歸り
て仙宮のありさまを奏せし時の心也　玉容寂寞
淚闌干梨花一枝春帶レ雨　白樂天長恨歌ニアリ
桐の花紫にさきたるはなをおかしきを、葉のひろご
りさまうたてあれども、またこと木どもとひとしう
云べきにもあらず　○本草綱目三十五桐樹有二四種一
青桐梧桐白桐一名椅桐與二崗桐一無レ異但有二花子一二月
開レ花黃紫　周書云淸明之日桐始華　桐若不レ華歲

有二大寒一
もろこしにことぐ\しき名(鳳凰也)つきたるとりのえりてこ(桐ばかり)
れに(ならびて也)のみゐるらむといみじうこゝろこと也　○韓詩
外傳鳳備二五采一高四五尺翔二翔四海一天下有レ道則
見鳳若レ竿其聲若レ簫不レ啄二生虫一不レ折二生草一不二
群居一不二侶行一不二梧桐一不レ捿非二竹實一不レ食非二醴
泉一不レ飲
ま(まして也)いて琴につくりて、さまぐ\になる(鳴)音の出くるな
どおかしとは、よのつねいふべくやはある、いみじ
うこそはめでたけれ　○柳宗元琴序　琴莫レ良二於桐一
桐莫レ良二於生一石　琴のことの絃十三げんを一二
三といひて終りの三つを斗爲巾(トイキン)といふ、第一を仁
といふ第十を商といふその中八の名も一々
ありといへども人の秘する事とてかたらざりし
也もとは琴の緒は十二也阮隔箏賦云箏長六尺應二
律數一絃有二十二一象二四時一柱高三寸象二三才一傅玄
箏賦絃柱擬二象十二月一それを秦の時に潤月の分な
からんやとて一絃をくはふれば十三絃と成たる也
借琴と名づけて引こゝろは琴は禁(キン)也と解して邪氣
を戒とゞめて人のこゝろのたゞしきにおもむくを
本意としたるもの也是則白虎通の心也

木のさまぞにくげなれど、あふち(せんだんの事也)のはないとおかし、
かれぐ\にさまことにさきて、かならず五月五日に
あふもおかし　○莊子云有二大本一人謂二之樗一其木擁
腫不レ中二繩本一小枝曲拳不レ中二規矩一也　證類本草
五月五日俗人取二樗葉一佩レ之避二惡氣一　和名棟云二
阿布知一

◉池は

かつまたの池　○袖中抄云かつまたの池を人みな
美作の國とおもへり　これ則かの國にかつまたの
温泉あり　その故か能因が歌枕に總州にも作
州にも入たり　抑不審故にみまさかの湯にまかり
下りし時、かの土民にたづねしかどさる池あり
と申ものなかりきしかるに或人の云かつまたの
池はならにしの京藥師寺のあとを中傳しといふ
勝股(カツマタ)の池は我しるはちすなししかいふ君がひげの
なきごと萬葉良玉集にものへ參ける道にむかしの
かつまたの池とていゐのあとばかりみえけるに
道濟法師　朽たてるいゐなかりせばかつまたのむ

かしの池とたれかしらまし

いはれの池（大和磐余）にえのゝ池（同州贄野）はつせ（泊瀬）へ參りしに水とりの
ひまなくたちさはぎしがいとおかしくみえしなり

○魚鳥を贄の供物とすれば池の名にちなみておか
しと也

水なしの池、（大和）あやしうなど（奇異也）てつけるならんといひし
かば、五月などすべて雨いたくふらむとするとしは、
この池に水といふものなくなんある、またいみじう
てるべきとしは、（旱魃）春のはじめに、水なんおほくいづ
るといひし也、げになべてかはくにてあらばこそ（池のあたりの人のなしなへて水なくかはきたらはこそ水なしの池ともいはんと也水の）
さもつけぬ、出る折もあるなるを、ひとすぢにつけ
ゝるかなといらへまほしかりし、（應答也）さるさはの池、（大和）う
ねめ（釆女）の身をなげゝるをきこしめして、（帝の）みゆきなど有
けんこそいみじうめでたけれ、ねくたれ（寢腐髮）がみをと人
まろがよみけむほど、いふもおろかなり　○大和もの
がたりにむかしならの帝につかうまつる釆女あり（心なかくる事也）
けるかほかたちいみじうきよらにて人々よばひけ
れどもあはざりけりそのあはぬ心は帝をかぎりな
くめでたきものになんおもひ奉けるみかどめして
のちまたもめさゞりければ限なくこゝろうしとお
もひけりよるひるこゝろに懸りておぼえけれど帝
はさはおぼしめさずさすがに常に見奉ればなを世
にあるべきこゝちもなかりければみそかにいでゝ
さるさはの池に身をなげてけり帝はかくもしろ
しめさゞりけるを事のついでに人のそうしければ
聞しめしていといたうあはれがり給ひて池のほと
りに御幸し給ひ人々に歌よませ給ひける時人丸が
よめる　脇母子がねくたれがみをさるさはの池の
玉もとみるぞかなしきとよめる時みかど　猿澤の
池もつらしとわきもこがたまもかづかば水ぞひな
まし　愚考みゆきしたまふ帝（ならあめ）の帝說々おほし、
天智天皇又聖武天皇とも云へり天智天皇をあめ
の帝と申は御諱を天命開別天皇と申せし故也聖武
の御諱は天璽（キヨキ）押開豊櫻彦天皇也又ならの京におは
せし故天城の帝ともいふ也　古今序平城天皇詔ニ
侍臣ニ令レ撰ニ萬葉集一とあるを仙覺の抄に聖武天皇
と定めぬ又二條家にはならの帝を文武帝ともちゆ
る子細あり○人丸の事敦光卿人麿賛仕ニ持統文武

聖朝遇二新田高市之皇子一云々大夫姓柿本名人麿萬葉第二柿本人麿在二石見國一臨レ死時自賜作二歌一首一人丸忌日三月十八日と續日本紀にあり　人丸塚は歌塚とて殘けると長明が無名抄にあり猶まちくの說ある事也

上州御前おまへの池、又なにのこゝろにつけゝるならむとおかし、濃州かゞみの池さやまの池、みくりといふ歌のおかしくおぼゆるにやあらん　○狹山　類聚に武藏一說河內　六帖むさしなるさやまが池のみくりこそ引ばたえすな我やたえすな　夫木○さやまなる池の三稜草のねもみねどうちはへ人のくるぞまたるゝ莫苑

未考こひぬまの池、野州はらの池たまもはなかりそといひけんもおかし　へ風俗上野の歌に乎志多加那、加毛佐戶支非留、波良乃伊介乃、多萬毛波萬禰奈加利曾、於比毛須加禰也萬禰奈加利曾六帖　○はらの池におふる王ものかりそめに君を我思ふ物ならなくに貫之

和州益田ますだの池

● 節供也せちは

五月にしくはなしさうぶよもぎなどのかほりたるもいみじうおかし　○拾芥云五月五日主殿寮着二內裏殿舍菖蒲一　○歲時記云午日楚人採レ艾懸二於戶上一以攘二毒氣一

九重のうちをはじめて、いひしらぬ民のすみかまで、人のしらぬいやしき心也いかで我もとにしげくふかむとふきわたしたる、よの折はせぬと也猶いとめづらしく、いつかことおりはさやうには也さはしたりし空のけしき五月時分の天氣也のくもりたるに、后定子の方也きさいの宮などにはぬい殿より御くすだまとて、色々の糸をくみさげて參らせたれば、御帳たてたるもやのはしらに、身屋とも延喜式に書たり左右につけたり　○職原　縫殿寮頭一人掌二女王及內外命婦宮人名帳考課及裁縫衣服之事一藥玉の事者に委し　○御帳衣桁のやうなる者にきぬをはりつけたるものなり○母屋まんなかの家の事也子びさしまごびさしに對する詞也世俗にほん屋と云是也○西宮記糸所獻二藥玉一流一綾生絹送二諸寺藏人所一結二付母屋南北柱一

九月九日の菊をあやとすゞしのきぬにつゝみて參らせたる、藥玉つけし柱に也おなじはしらにゆひつけて月ごろあるく菊に也すだま、とりかへてすつめる　○公事根源　九月九日

は菊花の宴行はるゝ也是を重陽の宴といふ也むかし天子南殿に出御なりて節會おこなはる又群臣に菊酒を給はるおほかた五月の節に同じ、御帳の節右に茱萸のふくろをかけ御前に菊瓶を置又茱萸の房にて頭にさしはさめば惡氣をさるといふ本文あり昔費長房といふ仙人海南の桓景にかたりて云九月九日汝が家にわざはひあるべし茱萸のふくろをぬひて臂にかけ山にのぼりて菊酒をのまばこの災きゆべしと申ければ其日に到てをしへのごとくせしかばその身はつゝがなくして家中の雞犬みな死たりかやうの事よりけふは菊酒をのむといひつたへたり

また藥だまは、（藥だまなくゝりし糸也）菊のおりまであるべきにやあらむ、（いろ〳〵のものを也）されどそれは（五月の節供也）みな糸を引とりて、ものゆひなどして（刺櫛ニ）しばしもなし、御せく參りわかき人々は、さうぶのさ（菖蒲などかざれる也　百官參内して拜賀する事也）しぐし　〇催馬樂にさしぐしたうばり七つありしかどとあり後恩成寺殿の註にひたいにさすくし也とあり

（物忌）ものいみつけなどしてさま〴〵からきぬ（背衣）かざみ（汗衫）　〇からぎぬは女の裝束のみじかきものなり〇かざみは衣裳の上にきるうすきもの也、女童の裝束なりからきぬに裳をきるは下仕までもきる也かざみは上臈のきるものとぞ

（あやめの）ながき根おかしき折枝（藥玉のかざり也）ども、むらご（村濃）のくみ（組糸）して、むすびつけなどしたる、めづらしういふべき事ならね（古來の事あたらしき事ならねども也　清少が卑下の詞也）ど、いとおかし、さて春ごとにさくとて、さくらをよろしう思ふ人やはある、つぢ（十字和名）ありくわらはべの、ほど〳〵に（大かたに也）（分際々々に也）つけては、（よもぎさうぶを）いみじきわざしたるとおもひて、つねにたもとを（さうぶつけしたもと也）まもり、人に見くらべえもいはずけ（興）うありとおもひたるを、そばへ（ざれたる）たることねり（小舍人）わらはなどに（童の袖などにつけたるを）引とられなくもおかし、紫の紙に（その花其葉の色につゝむ也）あふち（樗な）の花、青き紙にさうぶのほそきまきて引ゆひ、またしろきかみを根にして、ゆひたるもおかし、いとながき根など文の中にいれ（文につゝみ歌などよみつかはす也）などしたる人どもなども、いとえむなる（艶やさしき心也）返事かゝむといひあはせ、かたらふどち（同志）はみせあはせなどするおかし、人のむすめやんごとなき所々に、御文聞え給ふも、けふは（端午には也）心ことにぞ、な

まめかしうおかしきゆふぐれのほどに、ほとゝぎすの名のりわたるもすべて、おかしういみじ

●木は木の賞翫あるをいふ也

かつら　ごえふ　○桂は木犀(モクセイ)の事也かつらの花とあるは月の事也かつらを折などいふは及第の事也○五葉　唐詩鼓吹に李賀五粒松(五葉の事也)の歌つくるとあり

かきたちばな　○かぎたちばなとて香のふかき橘也又柿橘の二にもみる也

そばの木(狐稜也四方木也)はしたなき(時ならぬころの紅葉をいふ也)こゝちすれども花の木どもちりはてゝをしなべたるみどり(夏木立)のなかに時もわかず(もみぢの時ともなく)こきもみぢのつやめき(光)て思ひがけぬあを葉(もしは草)の中よりさし出たるめづらし　○ありとてもすさめぬからはそばの木のたゞかたはらに過すべきかな

まゆみ(檀)さくらにもいはずそのものともなけれども(なけれども也)やどり木(その木こそやどり木とて定めたる事はなけれども也)といふ名あはれ也　○東方朔傳在(レ)樹爲(ニ)寄(ヤドリ)生(リギ)在(レ)地爲(ニ)寠藪(ホヤ)　薬に桑寄生(サウキセイ)といふもの也桑の木に生ずまた楓樹にも生ず源氏には深山にやどりたるつたの色とあり是は木にかゝれるものなれば名をかりていふ也

さか木臨時の祭御神楽のおりなどいとおかしよに木(外ニ也)どもこそあれ神の御前のものといひはじめけんもとりわきおかし　○賢木は天照太神天の岩戸をとち給ひし時もろ／＼の神達とこやみにまどひていかゞせんとうたひまひさま／″＼の祈し給ひし時眞榊のかみつ枝に玉をかけ中つ枝には鏡を懸しもつ枝にはぬさをかけし也是あまの香久山の眞賢木也　○公事根源に賀茂の臨時の祭先兼日に試樂調樂といふ事あり當日の式石清水におなじこの祭の起りは宇多の帝王侍從と申奉りし時狩し給ひけるに賀茂大明神現し給ひて臨時の祭を給ふべきよし申されけるにわれはさやうの事しり侍らず帝へ申させ給へとのたまへばやうありて申なりとてあがらせ給ひけるがいくほどなくしておぼしめしもよらぬくらゐにつかせ給ひければ寛平元年十一月より臨時の祭をたてまつらせたまふその時の使は本院の大臣時平公未右中將にてつとめ給ひけるとなん古語拾遺云掘(ニ)天香山五百箇眞賢木(一)　○忌部正通云五百箇眞賢木繁列之言不變之象也

楠
くすの木は木だちおほかる所にもことにまじらひた(諸木の中に)てらず、おどろ〳〵しき思ひやりなどうとましきを、(おびたゞしき心也　深山にあるた　疎)
千枝
ちえに別れて戀する人のためしにいはれたるこそたれかはかずをしりていひはじめけむとおもふにおかし　○いづみなるしのだのもりのくすの木の千枝(拾遺)にわかれてものをこそ思へ　我おもふ事のしげき(詞花)にくらぶればしのだのもりの千枝はかずかは
ひの木人ぢかゝらぬものなれどみつばよつばの殿づ(深山にある心也　三棟四棟)くりもおかし　○陳后山詩ニ緬ニ懷萬仞巔千丈蔚蒼翠蟠ㇾ根泉石下用ㇾ意雪霜外寧須ニ大廈材一坐待ニ斧斤至一○神代卷檜可ㇾ以爲ニ瑞宮之材一この殿はむべもとみけり幸種の三葉四葉にとのつくりせり
五月に雨のこゑまなぶらんもいとおかし　○古詩に夜靜聲疑ㇾ雨秋深影勝ㇾ雲(細)
柏
かえの木さゝやかなるに、もえ出たる木ずゑの赤み(萌)て、おなしかたにさしひろごりたる葉のさま、はなもいとものはかなげにてむしなどのかれたるやうに(むしのからにたとへし也)ておかし、この世ちかくもみえ聞えず　○木ずゑの(柏も深山のもの也)あかみてとあるは柏の葉の上に微赤毛のある也(スコシアカキケ)
本草
おなじかたにさしひろごりたる葉のさまは○本草綱目萬物皆向ㇾ陽而柏獨西指陰木也故字從ㇾ白白者西方也埤雅云柏有ニ數種ニ入ㇾ藥唯取ニ扁而側生者ニ故曰ニ側柏(ソクハク)也一　かの柏ひとり西にさすとある側柏の事也三月に花を開き九月に實をむすぶもの也是皆本草の趣也然るを季吟子楓(カヘデ)の事に註せし殊外のあやまり也　異本にかえでとありそれも楓にあらず柏(ハク)の事也柏をかえでとよみたる證歌あり　塚の上に松とかえでのおひんまでまたむと契る妹のかし(ハ)こさ松柏　塚上に生ずるもの也陶隱居說柏忌ニ塚上一されば柏は塚の上に生るものにや
よしの御嶽
みたけにまうでゝ歸る人のもてくる枝ざしなどのい(家つとに　えだつき也)と手ふれにくげにあら〳〵しけれど何のこゝろあり(あらこましき也)てあすは檜の木とつけんあぢきなきかねごとなりや(兼言也)たれにたのめたるにかあらんとおもふにしらまほし(あすといふ詞によりて也)
○本草綱目柏葉松也身者檜也(爾雅同)これを檜柏圓柏といふなり　一木のうちにてその品をわかてり、また側柏の和訓をあすならふとつけたる名目あり、側柏の摸樣かの檜柏圓柏にあまり似たれば

あすならふと俗につけし心をあすは檜の木とつけんと書きたるなりこの穿鑿皆愚の忖也多才の贅辨はしらず

ねずもちの木人のなみ〳〵なるべきさまにもあらねど、葉のいみじうこまかにちいさきがおかしき也　○時珍云是木凌レ冬青翠有二貞守之操一故以二貞女一狀レ之○蘇頌頌序云女貞木一名冬青負レ霜葱レ翠振レ柯凌レ風故清士欽二其質一而貞女慕二其名一是也　○源順が和名に拾遺本草を引て又女貞をたつの木とよませ楊氏漢語抄を引て又女貞をひめつばきとよませたり然どもいづれも冬青といふ一名をあげたればおなじ木とみえたり　○四聲字苑に楰の字をねずもちと訓じたりもしほ草の歌に　かた山のおどろにまじるねずもちのひく人ありとたのむべき世か

あふち　せんだんの木なり
玉篇云楝其子如二樆類一白而粘可二以澣一レ衣者也　○歳時記蛟龍畏レ楝故端午以レ葉包レ粽投レ江中祭二屈原一

やまたちばな　○藪柑子の事也一説に非レ木石の間に生る草のやうなるものとぞされども少納言木の部に入たれば別に不レ可レ論

前にいふはその事也
なしの木　しるの木は常盤に何れもあをそれしもばかり也　外の木もときはなれ共也　しぬ
葉がへせぬためしにいはれたるもおかし　○古試はし鷹のとかへる山の椎柴の葉がへはす共君は忘れじ　人氣ハナレ

白樫
しらかしなどいふもの、まして深山木の中にも、いと　タル深山ニアル也
けどをくて三位二位の袍うへのきぬ染る折ばかりぞ、葉をだに人のみるめる　○樫一名　椎柴也そのかしの葉皮をせんじて二位三位の上のきぬをそむる也しゐ柴の袖といへば服衣也されば歌に　椎柴の露けき袖は七夕にかさぬにつけてあはれとやみむ　まれ〳〵に葉なも見又服衣をそむるものなれば也
めでたき事おかしき事にとりいづべきにもならねど、いつとなく雪のふりたるに見まがへられて、そさのおのみことの、出雲の國におはしける御事をおもひて、人丸がよみたる歌などを思ふにいみじうあはれ也　○素戔烏尊は出雲の大社也いざなぎいざなみの第三の子也是杵築大明神也日本記略之○風土記云所三以號二出雲一者八束水臣津命詔二八雲立一故曰二八雲立出雲一　拾遺　あしびきの山ぢもしらず白樫の枝にも葉にも雪のふれゝば
世にいふ詞にても　時節の景ニつけても也
いふ事にても折につけても一曲ふしあはれともおか

しとも聞をきつるものは、清少の草も木も鳥むしもおろか
にこそはおぼえぬ
ゆづり葉紅のいみじうふさやかに、つやめきたるは、
いとあをうきよげなるに、思ひがけずにるべきにもくきのあかきないふ也
あらずくきのおかうきら〳〵綺羅の二字しうみえたるこそいや
しけれどもおかしけれ、なべての月ごろ常の月也は露もみえ
ぬもの丶、しはす師走つごもりにしも時めきて、ゆづり葉のなき亡
人のくひものにもしくにやとあはれなるに　報恩經
十二月盡日午時來正月一日卯時歸同經一年六度聖
靈來　拾遺玉祭る年の終りに成にけりけふにはまたや
あはんとすらむ好忠なき人のくる夜ときけど君もな
し我すむ宿はたまなしの里和泉式部
又よはひのぶるはがためのぐにもしてつかひたゝめ
るはいかなるにか　○歯固ハカタメはよはひをかたむる心也
元三の事也高築六本に折敷をすへ一の臺に餅大根
橘をもる也それにゆづり葉を敷也委掌中曆にあり
内膳自二青瑣門一供二御歯固具一盛レ瓷大根一坏瓜串刺河海
二坏○押鮎一坏煮鮎一坏猪宍イノシシ以二雉代一之鹿宍カノシシ以二鴨代一之以

上七坏之精進物供二於第一御臺一魚類供二第二御臺一
もみぢせん世やといひたるもたのもし　○旅人にや六帖
どりかすがのゝゆづりはの紅葉せん世や君を忘れ
んよみ人しらず
柏かしは木いとおかし葉もりの神のますらん在也いますらんも也もおかし
○後撰かしは木に葉守の神のましけるをしらでぞ折し
たゝりなさるなやまともの語に仲平と有　○顯昭
袖中抄に葉守の神は樹の神也萬木を守る神也　○
基俊云葉守の神かしは木に限るやうにいふめれど
さもなきにや俊頼の歌に　嵐をや葉守の神もたゝ
るらん月に檜の手向しつれば
兵衞の佐ざう様などをいふらんもおかし　○月卿雲客
を草木になぞらへよぶ事あり有職家に委さたある
事也河海に兵衞衛門をかしは木と云と云々八雲同
風土の委也すがたなけれど、すゝの木唐ものめきて也からめきて、わろき家のも
のともみえず　〈古歌〉禰寺秋興題　拼櫚葉戰水風涼白樂天
是すろの木也　朝まだき木末ばかりに音づれてす
ろの木過るむら時雨かな　○禁秘抄　棕櫚延喜五
年栽二東殿一清涼殿前有二是樹一而枯乎　寺二舊跡一被レ
栽是貞親王樹也又應和被レ栽二中殿前一

枕草紙旁註卷四

異國の事也
こと所のものなれどあふむいとあはれなり（あつはれの心也）　○山海經云青羽赤喙能言名曰鸚鵡又禰衡賦に書きたるはあふむ喙は赤く頂に青く羽は翠にて眼は金の玉を入たるやうとぞ

杜宇
ほとゝぎす　水鷄くゐな　鴫しぎ　巫鳥みこどり　鶸ひは　鶲ひたき　都鳥みやこどり　○みこどりは俗にいふみこあいさといふ鴨の事也すゞかもともいふ也水上にてよく舞鳥なればみこどりと名付ぬるとぞ○宮古鳥はもとより角田河によめりたゞの河にもある鳥なり白き鳥のはしとあしとなかき鳥也不及引歌

河千鳥は友まどはすらむこそ（この下におはれなれといふ心を入てみるべし）
拾遺
ゆふされはさほのかはらの川きりに友まどはせる千鳥なくなり　紀友則

かりのこゑはとをく聞えたるあはれ也　○待えても　遠聞鴈
さだかにはみずむら雲の隔つる中のかりの玉章　實教卿

鴨ははねの霜うちはらふらむと思ふにおかし　○霜はらふおのが羽風のさむけさも身にさふものとかもやなくらむ　延文百首　座主宮

鶯はよになくさまかたちこゑもおなじきものゝなつ秋のすゑにまで老こゑになきたる（外ニナシ也）　○梅聖喩詩最好音聲最好聽似調歌舌更叮嚀高枝抛過低枝亞金羽脩眉黑染綃　この詩淸少が筆法に似かよひて聞ゆ事たるべきにや

内裡の内にすまぬぞいとわろき又よる（夜）なかぬぞいぎたなし（寢ごい心也）と覺ゆる十とせばかりさふらひて聞しかど（清少）更におともせざりき　○開元遺事明皇於禁苑中見黄鳥呼金衣公子　○王汝玉出左掖聞鶯落絮飛花滿禁城萬年枝上一鶯鳴　○宮鶯轉曉光題　西樓月落花間曲中殿灯殘竹裏音　西樓は霽景樓也中殿は紫宸殿也　續古　百千鳥けさこそ來なけさゝ竹の大宮人に初音またれて今上和漢の詩歌あげてかぞふべからず十年ばかり中宮定子につかへ内裏に侍りしかどもきかざりしと書る少納言が筆法いかなりけむおぼつかなし

(さるほどに也)さるは竹もいとちかくかよひぬべき枝のたよりもあ
りかし　○禁秘抄云中殿(清涼殿也)東庭竹臺二云々
(禁中を退出)まかでゝきけばあやしの梅の中などにははなやかに
ぞなき出たるにや、時鳥は淺ましくまたれて(初音)ようう
ち待出られたる心ばへこそいみじくめでたけれみな(鶯の郭公の)
月などにはまことに音もせぬが空目ならば鶯さしも
(夏ばかりなくものならばよかるべしと也)おぼえざらまし春のとりとたちかへる(春の)よりまたるゝ(人らしくなき人)
ものなれど猶(夏秋の末迄なく事也)おもはずなるにくちおし人げなき人を
(は人もしらぬといひて鶯のだぐさになくたとへ也)ばしる人やある　○あらたまのとしたちかへるあし
たよりまたるゝものは鶯のこゑ素性
(是もむさと鳴聲へ也)鳥の中にからすとび(鵄　鳶)のこゑは見きく人やはある、鶯(雛)
笛などにつくりたれど(笛は鶯に似ぬ心也)こゝろゆかぬこゝちする、に
はとりのひな(雛)ゝき(鳴)、水とり(すべての事也)、山鳥は友をこひてなくに(わか〳〵しき心也)
かゞみを見せたればなぐさむらむ、いとわかうあは
れなり、谷へだてたるほどなど、いとこゝろぐるし
○山鳥のおろのはつをのかゞみかげ。となふべみ
こそ名によそりけめ　此かゞみの事俊頼のいへる
は見えたる事なしむかしとなりの國より山鳥を
たてまつりてなく聲たえにして聞くもの愁を忘る
といふ帝これを得てかひたまふにさらになく事な
しあまたの女御にこの山どりなかせたらむ人を后
に立てんと仰られければさま〳〵なかせんとし給
ひけるにひとりの女御友をはなれてなかめぬなめ
りとおもひて明らかなるかゞみを籠のうちに懸た
りければよろこべる氣色にてなくことを得たり尾
をひろげてかゞみのおもてにあてゝなきけりそれ
によりこの女御后に居たまふ又いはく山鳥よるは
めどりとかならず峰をへだてゝぬる(寢)也くれにいた
れば雄(ヲドリ)の尾をもたげてまろくしてみればめどりの
ねたるところの見ゆるをかゞみともいふ也又山鳥
の尾のしだりおのとよめるを。山鳥の雄のしだり
尾といふべきなりと古人申けるとかや峯をへだて
ゝよるは雌雄ふす鳥也さればひとりぬる心にもよ
せてよめる也又この歌のなかによそりけめはよる
といふ言葉也よそりともよされともよめりとなふ
べみは唱の字也(巨の字大キナル心也)
つるはこぢたきさまなれども、なくこゑの雲ゐまで
聞ゆらんいとめでたし、

李浮丘伯相鶴經ニ躰尙潔故其色白聲聞レ天故頭赤食ニ於水一故啄長翔ニ於雲一故毛豐而肉疎大喉以吐レ故修頸以納レ新故天壽不レ可レ量下署鳴則聞レ天飛則一擧千里鶴百六十年雄雌相視孕一千六百年也

かしらあかきすゞめ（入内雀の事也）　○かしらあかきを上の文へつけて雀と句をきりてみる心もあり

いかるがのとり　○崔禹錫食經云鵤（伊加留加）貌似レ鵲而白喙者也　○兼名苑註斑鳩（和名同日本紀）　○一說（猪子鳥）にあとり也またある人の云まめしといふ鳥にて地におりおとりあゆむ鳥なりとぞ　春の日ののどかにかすむ山里にものあはれなるいかるがの聲

たくみどり　○啄木鳥也爾雅鴷斵木一名鴷（和名天豆々木）食ニ樹中虫一也ある詩に無レ從ニ爾啄摧ニ我棟梁一又王元之が七言の句に觜長數寸勁如レ鐵丁々亂鑿乾枯査などと番匠の事につくれゝはなくみどりの名いたづらならず但源順が和名に巧婦鳥をたくみどりと付ぬされど本草に巧婦鳥をさゞきと訓じて鷦鷯とあり自ニ關一東謂ニ之巧雀一又謂女匠一ともに巧といふ字をつけたればたくみどりまがひなきかこの鳥の性たくみなる故この名を得たる由也されど又もしほにたくみどりは啄木の事とありしかれば爾雅陳己齊王元之もしほのせつ和漢引合て啄木を巧鳥と定べきにや本草も和名も細註まで考みれども啄木巧婦鳥一物の鳥ともみえず目錄にも喙木巧婦と分て入多識篇同じ愚意をつくして考る所也

鷺はいとみめ（眉目）わろしまなこゐ（眼睛居の字眼ざしの事也）などもよろづにうたてなつかしからねど、ゆるぎのもり（万木森近江高嶋郡）にひとりはねじとあらそふらんこそおかしけれ　○高嶋やゆる木のもりのさぎすらもひとりはねじとあらそふものを（夫木）　鷺の美目わろきやうに書るゐたらしき筆法なりいにしへより鷺を屬玉といひて玉になぞらへ雪衣と名付この鳥の高格を雪の潔きにたとへたりいかなる所にてみめわろしと書るにや又眼ざしの事わきて書たるはいかならむ事とおぼつかなしもしは變化論に鷺以レ目盼而受レ胎と書たり。かゝる事やおもひよりけむ

をしいと哀也、かたみに（たがひに也）ゐかはりて、はねの上の霜をはらふらんなどいとおかし　○本草鴛鴦終日並遊

有ニ宛在ニ水中央ニ之意也　○古今註雌雄未ニ相離一人得ニ其一ニ則一相思而死　かたみにやうは毛の霜をはらふらむともねのをしのもろ聲になくはこどり　○八雲抄に定家もしらざるよし云りたゞうつくしき鳥なり雄略天皇の御時美作の國に相見の乙人（オト）といふ人の婦子をおひて山中を行くとて鷲にとられてはやこ〳〵（早來）とよびじにゝ死たりける故（早來）はこどりといふはこははやことといふこゝろ也　二（名寄）むらの山のはしらぬしのゝめに明ぬとつぐる箱どりのこゑ

●あてなるもの（貴勝妙の三字ながらあてとよむ也すぐれし心也）

うす色にしらがさね（白重）のかざみ（汗衫）　○薄色　裝束の書に經（タテ）紫緯（ヌキ）白又說經（タテ）白緯（ヌキ）青○白重（ウヘノキヌ）　更衣の時のしろきかさね也凡夏の物也是は袍の青白を重たるを云也白襲（カサネ）表裏白平絹更衣時上下着ㇾ之　○かざみは衣上にきるうすきもの也

けづりひのあまつらにいれて、あたらしきかなまりにいれたる　○けづりひ紹巴の說干（ヒ）のおものを削たる也　○江次第廿新任大臣大饗云羞（スヽム）ニ着物一署月削氷甘瓜等云々同五列見首書云粉熟又加ニ削氷一列見延引及ニ暑月一如ㇾ之○あまつら千歳蘽汁本草味甘平無ㇾ毒續ニ筋骨一長ニ肌肉一一名蘽蕪　蘇敬註即今之蘡薁藤汁是也和名阿末豆良○本朝式云甘葛（アマツラ）煎也あまた味ひあるもの也　○かなまり和名金椀日本靈異記云其器皆椀俗云加奈末利古語謂ㇾ椀爲ニ鋺利一宜ニ用爲ニ金椀一也

梅のはなに雪のふりたる（すぐれてあてなるもの也）、いみじううつくしきちごのいちごくひたる　かものこ（鴨の子也）　すいしやう（水精）のずゞ（念珠）

●むしは

すゞむし（金鐘虫）　松むし　はたをり（促織　絡線娘）　きり〴〵す（蟋蟀）　てふ（蝶）

われから（もにすむ貝也）　ひをむし（蜉蝣虫とも書也）　○蜉　唐韻比平無之朝生暮死虫也

ほたる（螢）　みのむしいとあはれなり、鬼のうみければおやに似て、これもおそろしきこゝちぞあらむとておやのあやしききぬ引きせて（みのむしのみの事也）、いま秋風ふかんおりにぞ、こん（來）ずるまてよといひて、にげていにけるもしらず、風のをと聞しりて、葉月ばかりになれば、ちゝよ〳〵とはかなげになく、いみしうあはれ也（鬼とんぼうの）

八雲の説鬼の子みのむしとあり（もしほ草同じ）　或人の云み
のむしは鬼とんぼうのうみしかいこ變じて成と
也　契（夫木）けむ親のこゝろもしらずして秋風たのむみ
のむしの聲（寂蓮）
ひぐらし（蜩せみの大きになりし也）　ぬかづきむしまたあはれ也（佛神禮拜の心に似たれば也）　○傅咸（フカンカ）叩頭
虫賦云虫之細微者觸レ之叩レ頭叩頭虫（奴加豆木）
さるこゝろに道心おこしてつきありくらん。（はかなき虫の心也）（ぬかづく心也）　またお
もひかけずくらき所などにほどめきありきたるこそ（うごく心也）
おかしけれ、はへ（蠅）こそにくきものゝうちにいれつべ
けれ、あいぎやう（愛敬）なく、にくきものは、人々しうか（外の虫のなみ〳〵にいふべきにあらずといやしむ心也）
きいづべきものゝ、やうにあらねど、よろづのものに
ゐ（居）、かほなどにぬ（露）れたるあしゝてゐ（居）たるなどよ、人の（列子に甘蠅といふ名あり）
名につきたるはかならすかたし（堅又ありあたしの心なれば難の字也又かたくなしき心也）　○楊子方言云陳楚
之問謂二之蠅一（和名波閉）すべてこゝの文章はかの歐陽公
が憎蒼（ソウ〳〵）蠅賦の心也　蠅のにくき事に蒼蠅々々吾
嗟二爾之爲一レ生なり萬の物にゐと有は逐レ氣尋レ香
無二處不一レ到かほなどにぬれたるあしゝては尋レ頭
撲レ面とある文勢也和漢の筆法あやしきまでに似

かよひ侍る事也
なつ虫いとおかしく、樓の上とびありくいとおかし
○夏虫は凡四色也火とりむし螢蟬蚊也いづれも歌
のやうによるべき也こゝのなつむしは螢にあらず
すでにひをむし螢と書つらねたり蟬と思へば樓の
上とびありく似つかはしからず蚊といふ虫は詩文
古歌まで人のはだへをさしてものうきやうにこそ
侍れ爰のなつむしは火蛾の事とするべし
ありはにくけれど、かろび（輕）、いみじう水の上などを
たゞゆあみありくこそおかしけれ
○此蟻水馬水黽といひて世にいふしほうりといふ
むしの水上をあゆむものなり本草水黽の下に水黽
羣遊二水上一水涸飛長寸許四脚非二海馬之水馬一也
○また蟻の下に大なるを馬蟻といふとあり水馬
ト馬蟻一名の心に似かよひたれば水馬を蟻と計
書るにや
七月（フツキ）許（バカリ）に風のいた（强）うふき、雨などのさは（騷）がしき日、
おほかたいとすゞしければ、扇も打忘れたるに、汗
のか（香）すこしかゝ（抱）へたる、きぬのうすきを引きて、

ひるねしたるこそおかしけれ

〔物〕にげなきもの（もの、似合ぬふつがうなる心也）

かみ（髪）あしき人の、しろきあや（綾）のきぬきたる、しゞかみ（ちゞりがみの事也）たるかみにあふひ（葵）つけたる　あしき手をあかき紙に書たる　〇もろこしに赫蹏（カクテイ）といへる事ありこれあかき紙の名なり孟康云蹏猶レ地也染ニ素紙（ロシキ）一令レ赤書レ之是赤き紙にもの書く事をいひたる也誠に少納言の書るごとくに惣筆にして赤き紙に筆をそむるすみ色文字のやう見にくきこと也余がさきに編集せる心正筆法論に書きたるごとくすみをうすくちゞむがちに書く事これあかき紙の書やう秘藏の事也

げすの家（心なきもの丶家也）に雪のふりたる、又月のさし入たる（是もげすの家の事也）もいとくちおし月のいとあかきに、やかた（車蓋の二字）なきくるまにあめうし（黄牛也うしの下品也車をかけし也）かけたる、おいたる女のはらたかく（はらみたるなり）てあばき（散）ありく（行）、またわかきおのこもちたる（おとこのしのび妻のある心也）いと見ぐるしきにこと人のもとにゆくとてねたみ（嫉妬）たる、老たるおと（しのび妻の方など也）このねまどひ（寝惑）たる、またさやうにひげがちなるおのこのしゐつみ（椎摘）たる、はもなき（歯）女の梅くひてすがり（酸）たる、げすのくれなゐのはかまきたるこのごろはそれのみこそあれ（さやうのたぐひ多しと也）、ゆげいのすけのやかう（夜行）かりぎぬすがたいといやしげ也　〇花鳥餘情云左衛門日ニ靫負（ユキイ）一靫負は矢を入るゝしことといふもの也左衛門は弓箭（セン）を帯するつかさなるによりてゆげいといふ也このゆぎ看督長（カドノヲサ）の負もの也かどの長は赤き狩衣白布の袴を着以ニ白杖一雑人を追拂（オヒハラフ）もの也〇車駕出行先按行及ニ道邊隠映處一撿ニ察非常一前後叱呵　觀レ人大言登レ高者使レ下若在レ所レ幸皆先防ニ禁門巷一是外諸門警固（ケイゴ）之役也

人におぢらるゝうへのきぬ、はた（将）おどろ〳〵（恐）しくたちさまよふも、人見つけばあなづらはし（侮）、けんぎ（嫌疑）（疑はしき者をあやしむ心也）のものやあるとたはぶれ（戯）にもとがむ（尤かりそめにもとがむる心也）　〇弓箭を帯して御門を守り非常をいましむるつかさなれば人に恐らるゝ也衛門佐は相當從五位なればその袍（ウヘノキヌ）赤色にて目おどろく色なればおどろ〳〵しくといふ也源氏水尾づくしの巻によし清もおなじ佐にて人よりことにもの思ひなきけしきにておどろ〳〵しき

赤ぎぬ姿いときよげ也とあるもこのゆげいの佐の事也

六位藏人うへの判官とうちいひて、（藏人判官のなみ〳〵ならぬ事也）よになくきらゝきらしきものにおぼえ、里人げすなどは、（上の判官より下官の事）この世の人とだにおもひたらず、（おもはず也）目をだに見あはせでわなゝく（戰）人の、内わたり（禁中也）のほそとの（廊）などにしのびて入ふした（上の判官の）るこそ、いとつきなけれ（似合ぬ心也）　○六位藏人とは靱負の尉などの六位藏人を兼たるなり上の判官とは彼藏人の衛門尉の檢非違使（ケンビイシ）のせうに成たるをいふ也上のとは殿上せし事也檢非違使の尉の昇殿（セウ）はまれなる事なれど是は藏人なれば昇殿もち論也勘解由判官修理（スリ）宮城使の判官など侍れどもそれにはあらず檢非違使の事と治定すべし

空だきもの（風流なる所のさま也）したる几丁に、うちかけたるはかまの、（かの檢非違使の袴のあら〳〵しきさま也）おもたげにいやしうきら〳〵しからむもと、（はづかしからんと也）をしはからるゝなどよ　○たとひきら〳〵しきはかまにても藏人の衛門などはあなづらはしくてたきものしたる几帳にはにげなからんにましておもたげにいやしきはとの心也

さかしらに、（かしこげに也）うへのきぬ（袍）わきあけ（闕腋の袍の事）、ねずみのお（みじかくみだてなきさま也）のやうにて（縮）わがねかけ（几丁に也）たらむほどぞ、似げなきやかう（夜行）の人々なり、（藏人上の判官いやしき司なれば内わたりのしのびありきは堪忍せよかしとの心也六位藏人のみならず五位の藏人も、ほそとの（廊））このつかさのほどはねんじてとゞめよかし、五位の藏人もほそとのに人とあまたゐて、あ（そこた通る人）りくもの共身やすからず、（身づくろひの體也又見やすからずとも）よびよせてものなどいふに、きよげなるおのこ小舍人わらはなどの、よきつゝみふくろに（調度也ばんふろなど也）きぬどもつゝみて、（きるもの也）さしぬきのこしな（腰）どうのみえたる（ばんふくろよりさしぬきのはしのもれたる也）ふくろに入たる、弓矢たて（楯）ほこ（戈）たち（太刀）などもてありく（大將武官の調度也）を、たがぞととふに、（藏人が）ついゐて、（對居つくばひて也）なにがしどのゝと（○いひて）行は（こゝろありげに也）よしけしきばみ、（うちほゝゑむ體也）やさしがりてしらずともいひ、（又一向にとりあはぬ心也）きゝもいれで、いぬるものは、いみじうぞにくし、月夜にむなぐるま（空車人ののらぬから車也）ありきたる

きよげなるおとこのにくげなるめ（妻）もちたる、ひげぐろににくげなる人のとしおいたるが、ものがたりす（ものがたりする）る人のちごもてあそびたる、（〳〵愛する體也）とのもりづかさこそなをおかしきものはあれ　○禁秘抄主殿司六人云々○職原抄云近代十二人華族幽玄撰レ之按華族幽玄者華族末流幽微之ノ女任レ之

下すの中にとのもづかさほどなるはなしと也
しも女のきはゝきばかりうらやましきものはなし、
とのもづかさに也
よき人にせさせまほしきわざ也、わかくてかたちよ　容也みめ也
形也すがた也
くなりなどつねによくてあらんはましてよからむか
萬事の古例也　面づよく也　もの
し、としおいてもの丶例などしりて、おもなきさま
にはぢぬさま也　似合しく見にくからずと也
したるもいとつきづきしうめやすし、とのもりづか
妻に　裝束
さのかほあいぎやうづきたらむをもたりてさうぞく
時にしたがひて、からぎぬなどいまめかしうて、あ
りかせばやとこそおぼゆれ　○袖口大廣ニキテ曰レ衣袖口ヘ
小限ク二手出入一曰二小袖一唐衣者大單事也女孺不
レ着レ袴惣一切女房不レ分二高下一不レ帶二踏皮ヘナタビ一素足アシ也
凡刀自トジ衣上着二唐衣一女孺者不レ着レ衣小袖上着二唐
衣一也唐衣者袖行身長皆短者也女孺ハ駈使者也故
着二唐衣一女孺御所中掃除指油等ノ役也
男はめし具する随身ちからこそそのさまらしけれと也　攝家の子花族
おとこはまた随身こそあンめれ、いみじくびゞしう
の人など也　さびしきと也
おかしき公達も、随身なきはいとしらじらし　○随
身前卷に委随身に兩様あり本府の随身と小随身也
小随身は家々に御免なけれどつれらるゝ也本府随
身は御免なくてはつれられぬ也中將少將諸衛の督
佐スケなどにて花族ゾクのかたがたの御免ノ蒙らぬをさして

公達も随身なきはわろしと也
辨などおかしきよきつかさとおもひたれども　○職
原　辨七人官中事大辨所二執行一也仍爲二重職一名家
譜代ノ雀殊依二清撰一任レ之花族之中有二才名一之輩參
議之時兼レ之爲二規摸一無二文才一不レ居レ之也　名家者廣橋烏丸柳
原甘露寺萬里小路中御門也　左右大辨二人左右中辨二人左右小辨二人又
中少辨之間權官一人必任レ之仍謂二之七辨一
したがさねのみ、しりみじかくて、随身なきぞいと
わろきや　○裾キヨ下襲オホネの尻なりむかしはつゞけたるを
着する時煩あるによりてきりはなして着レ之仍一
として下がさねにかはることなし、長さは代々の
制符不レ同也但近代攝家には用來る分は納言已前八
尺なり大臣は一丈關白の時は一丈二尺なり大槩か
くのごとし尤時によるべし下がさねのいろ段々位
あり
立蔀
しきのみさうしのたてじとみのもとにて　○職御曹
子　中宮定子の御座の御殿也御もの忌などの時に
ましさす所也
ある女房と也
頭の辨の、人とものを、いと久しくいひたち給へれ
ば　○左中將從五位下義孝タカの子息に正三位太宰帥權ソツゴン

大納言行成卿後一條院萬壽三年二月薨五十六能書三蹟内號ニ權蹟一

職事補任　散位從四位下藤行成長徳元年八月廿九日補ニ藏人一前左衛門權佐同二年正月廿五日民部大輔四月廿四日權左中辨

（清少）さし出てそれはたれぞ（さやうに也）といふに、（清少詞）辨内侍なり（行成卿の答也）とのたまふ、なにかは、さもかたらひ給ふ（辨内侍のかたらふ男也）大辨みえば、（行成の）うちすて奉りていなんものをといへば、（行成を）いみじくわらひて

〇職事補任曰左大辨藤原懷忠永延二年二月廿七日補レ之又右大辨藤有國永祚二年五月十四日補レ之

右の大辨はこれらのうちなるべし

（行成の詞也）たれかかゝる事をさへいひきかせけん（大辨に内侍の中の事也）（清少に）それなさせそ（われを見すつるなとかたらふとざれての給ふ也）とかたらふなりとのたまひ、（行成と清少との中）いみじくみえて、おかしきすぢなど（定たる夫婦にはあられど也）たてたる事はなくて、たゞあるやうなる（平生睦しくかたらふと也）を、みな人さ（さやうに也）のみしりたるに、猶おくふかき御心ざま（行成の心中の事）を見しりたれば（清少が）、をしなべたらず（行成をほめて也）などおまへ（中宮へも）にもけいし（啓也中心也中宮にもさやうに也）又さしろしめしたるを、つねに女はをのれをよろこぶものゝためにかほづくりす、士（シ）はをのれをしれる人のためにしぬといひたるといひあはせつゝ（行成清少の中の事に右の古語をいひあはせ給ふ也）申給ふ（豫讓が）〇戰國策曰晉豫讓云士爲ニ知レ己者一死女爲レ悦レ己容（カタチツクリス）　この語の心を先儒の解に是其眞情也（マコトノゼウナリ）〇爰に引心は清少納言に我懇志（コンシ）をいはんとての詞也

とをたあふみ（遠江也）のはまやなき（無）などいひかはしてあるに

〇この奥に遠江介則光といふ人を清少のかたらひし事ありさればいま行成卿のかくのたまへども

この遠江の濱あればわがかたにはうけびきがたし（なびかぬ心也）

との心也

若き人々は、たゞいひにくみ（行成清少の中のよきを）、見ぐるしき事どもなどつくろはずいふに、この君こそ（行成を）うたてみえにくけれ（そしる詞也）、こと人のやうにどきやう（讀經）し歌うたひ（今やう也）などもせず（女をさして也）、けすさまじ（氣にいすさまじくちかづきがたき心也）などそしる、さらにこれかれに物いひなど（行成の）もせず、女は目はたて（竪）さまにつき、まゆ（眉）はひたい（額）にをひ（生）かゝり（懸）、はな（鼻）はよこさま（横）にありとも、たゞくちつき愛ぎやうづき、をとがひ（頤）のした、くび（首）などおかしげにて、こゑ（ものごし也）にくからざらむ人なん（やさしき心）、おもはしかるべきとはいひながら（さうはいひながら也）猶かほ（みぬのわろきなり）のいとにくげなるは、

こゝろうしとのみのたまへば（行成の）、まいて（まして也）をとがひほそく、あい（愛）ぎやう（敬）をくれたらむ（欠は也）人は、あいなう（あいそうもなく）かたき（敵）に（中宮へ）して御前（中宮也）にさへ、あしく（行成を）けいする（申上る也）、もの（句）などけいせさせんとても（みめよき女を取次にたのむ行成の心也則清少也）そのはじめいひそめし人をたづね、しもなるをも（清少下になりてゐたまふもよびて也）よびのぼせ、つぼね（行成の）にもきていひ、里（清少の）なるには文かきても、みづから（行成の）もおはして（清少の里へ）、をそく（清少の）まいらば、さなん（さやうに也行成の）申たると申に（留守居の者に）、まいらせよなどのたま（行成の）ふ、その人のさふらふなどいひいづれど（清少詞我おらずともその人にけいしたまへと也）（たゞある人にとりつぎもたのみてこそと也）、さしもうけび（行成承引なき也）かずなどぞ、おはする、あるにしたがひさためずなに事もてなしたるをこそよき事にはすれと、うしろみきこゆれど（行成にいけんする詞也後見の二字）、わがもと（行成の）のこゝろの本性とのみのたまひつゝ（あらためてもあらたまる事なきは心也といふ心也）、あらたまらざるものはこゝろなりとのたまへば（清少の詞也）、さてはゞかりなしとは、いかなる事をいふにかと（雖をうっての給ふ也）、あやしがれば　○論語學而篇過則勿レ憚レ改この句の事也

わらひつゝ（行成の）、中よしなど人々にもいはるゝ（清少と）かうかた（いやうに）らふとならば、なにかはづる、みえなどもせよかし（行成に清少の）

とのたまふを、いみじくにくげなれば（清詞）さあらむ人は（かほのうつくしからぬと也前に行成の詞にかほのにくげなるは心うしとの給ひしゆへ也）えおもはじとのたまひしによりて、えみえ奉らぬと（行成詞それならばにくうもならんとの戯れ也それならば）のたまへば（清少の）げににくゝもぞなる、さらばなみえそと（行成の）てをのづから（清少を）みつべきおりもかほをふたぎなどして（正直なる行成ぞと也）まことに見たまはぬも（清少を）まご（眞）ゝろ（心）にそらでとしたまはざりけりと思ふに、やよひ（彌生）つごもりのころ、冬のなをしの、きにくきにやあらむ　○冬の直衣とは四季の装束ある故に冬春にわたる装束なれば更衣のころやゝあつくして着にくしと也

うへのきぬがちにて（袍也衣冠ばかりにて也）（平生の束帯にはうへのきぬに下がされあり是は袍に下がされなのぞきてさしぬきなるべし）

○装束の書に元服ののち大臣までは袍の紋丁子の丸杏葉だすきなり攝關になりては雲立涌（ワキ）の紋太閤の時雲に鶴也地はいづれものしゞらの綾前途（い）後宿老はしゞらなきのしめの綾を着する也夏は穀文は冬におなじ色はいづれもふしかねにてそむ濃紫也但五位中將は朱の色但ふしかねはくさくてくつるにより近代故實の女巧（コウ）ありて下を蘇芳（スホウ）にてそめ上をふしの枝或は薬をせんじて染る色も

うつくしくさくもなき也ふしの木なければざく
ろの皮にてそむるなり冬は平絹のうらあり色はお
もてにおなじ攝錄の時夏の文浮線綾（フセンレウ）下襲（カサネ）の文（モン）の由
嘉禎（カテイ）四年四月の記にあり
宿直姿は直衣着給ふ折も有と也晨也
殿上人どものとのゐすがたもあり、つとめて日さし
中宮の方の女房也　清少の
いづるまで、式部のおもと〻、ひさしにねたるに、
中宮の　一條の院　中宮
おくのやり戸をあけさせ給ふて、うへの御前、宮の
定子也　式部と清少と
おまへ出させ給へれば、おきもあらずまどふを、いみ
中宮の　さげ髮の上にいさゝかの纔義
じくわらはせ給ふ、からぎぬを髮のうへにうちきて、
也　よるのもの也　なしへ〻に成たる心也
とのゐものもなにもうづもれながらあるうへに、お
中宮の
はしまして、陣より出入ものなど御覽ず、殿上人の
天子中宮のおはすを　女房へたはぶれ也
つゆしらでよりきてものなどいふなどもあるを、け
中宮の居給ふ樣子を　天子中宮の
しきなみせそとわらはせ給ふ、さてたゝせ給ふに、
式部清少を　中宮の　清詞
ふたりながらいざと仰らるれど、いまかほなゝどつく
二人ながら也　中宮のおくへ　中宮のかたちの
ろひてこそとて參らず、いらせたまひて、猶めでたき
式部と清少と
事どもいひあはせてゐたるに、南のやり戸のそばに
木丁の手のさし出たるにさはりて、すこしすだれの

行成の袍の色也　敦隆也藏人の心や
あきたるに、くろみたるもの〻、見ゆればのりたかゞ
すさなるべし　のりたか方を　中宮の事也又
ゐたるなゝめりとおもひて、見もいれで、猶事どもい
何やかやの事也　行成の笑がほ也
ふにいとよくえみたるかほの、さし出たるを、のりた
それはとて也　のりたかにあらず行成也
かなゝめりそはとて見やりたれば、あらぬかほ也
よごれがほたはちて也　隱
あさましとわらひさはぎて几丁引なをしかくるれど
行成也
頭の辨にこそおはしけれ、見え奉らじとしつるもの
くやむ心也　式部也
をと、いとくちおし、もろともにゐたる人はこなたに
行成のかたへ　行成の　清詞
むきてゐたればかほもみえずたちていでゝ、いみじく
すつきりと見たる心也
なごりなくも見つるかなとのたまへば、のりたかと
思ひ侮りて見られしと也　我がほを見まじといひながら
思ひ侍ればあなづりてぞかしなどかはみじとのたま
なにとてつらく〳〵見給ひしと也　行成の詞
ひしにさつく〴〵とはといふに女はねをきたる顔な
垣間見
んいとよきといへば、ある人のつぼねに行て、かいば
清少の寢起のかほつもし見えやするとて也
みしてまたもしみえやするとて、きたりつる也、まだ
天子中宮　行成の見てあるを也
うへのおはしつるながらあるをえしらざりけるよと
清少の　たれの内へ入也
て、それよりのちは、つぼねのすだれうちかづきな
どし給ふめりき
名謁　是より名對面の事につきまさひろが似げなき事を
いふ也
殿上のなたいめんこそなをおかしけれ　〇名對面と

は殿上にとのゐせる侍臣たがひに名をとはれて名
のること也〇北山抄云六府次將以下一員近衛供奉（クブ）
裝束同行幸 其外宮司衆ニ中少將一者帶ニ弓箭一供奉入御
之後王卿名對面宮司問レ之諸衞不レ脫ニ弓箭一着ニ纓
座一
侍臣の名を
御前にさふらふおりはやがてとふもおかしあし音も
名のりはてゝ　中宮也
してくづれいづるを、うへの御つぼねのひんがしお
清少也耳をさゝへて也　しのびてあひし人也
もてに、みゝをとなへてきくに、しる人の名のりには
心ときめくなり　常にしらぬ人の名也
ふとむねつぶるらんかし、またありとも、よくきか
名對面に耳をすましてきく時にたれとしる名也人も
ぬ人など、この折に聞つけたらんは、いかゞおぼゆ
何とかおもふと也　よき名あしき名也　評判也
らん、なのりよしあしきゝにくゝなど、さだむる
名對面の刻限也
もおかし、はてぬ也ときくほどに、たきぐちの弓な
ゆみのつるをならす也
らし 〇源夕がほの卷にかう申すものは瀧口なれ
弓絃
ばゆづるつきぐしくうちならしてとあり河海に
亥の一刻に侍臣の名對面延喜九年よりおこる同亥（ク）
の一刻侍臣奏レ之〇瀧口の事第一卷に委　五
さゝめく心也　沓を
くつの音そゝめきいづるに藏人のいとたかくふみご
跪　南殿の　のびあがりひざまづ
ほめかして、うしとらのすみの高欄に、たかひざまづ

まづく體也　主上の
きゝかやいふ、ゐずまひに、御前のかたにむかひて、
藏人の間て瀧口のなたいめんする事也
うしろざまにたれくか侍るととふほどこそおかし
名のる聲也　名のりきかぬを何とてみえぬと
けれ、ほそうたかうなのりまた人々さふらはねばに
尋る心也瀧口故障ありて參られば名たいめんせぬよし也
や、なだいめんつかうまつらぬよしそうするも、
藏人のとへば名たいめんのさゝはる子細を申也　藏人は
いかにととへば、さはる事ども申に、さきゝてかへ
るを、まさひろはきかずとて 〇源氏家譜 近衛右
大臣能有（ヨシアリ）五代孫從五位下伊賀守方基（マサモト）子方弘 文藏
前阿波守致明爲レ子　致明は正ひろの伯父也　方弘腹立也
名たいめんのなきよしを　叱
公達のをしへければいみじうはらだちしかりてかう　考テ也
方弘がかんがへ也　副の字ニテ公達ニモワラハル、心也
がへてたきぐちにさへわらはるみづし所のおものだ
なに 〇調ニ朝夕御膳一所曰ニ御厨子（ミヅシ）所一拾芥云御厨子
所四位殿上人爲ニ別當一以ニ民部大輔五位一爲レ預也
在ニ後涼殿西廂（ヒサシ）一以ニ内膳内藏造酒（クラサケ）大膳及諸御厨
備ニ府御熟一供ニ朝飯及朝夕御膳一用ニ土器一有ニ別當
所衆一有ニ年官預熟食進月奏一
方弘沓置て也　人々に罵　方弘ヲイタハリテ也　沓の
くつをきていひのゝしらるゝをいとおしがりて、た
ぬしをいひかくして也　やれくゝ也　人はかくすに正弘がわれといひあら
がくつにかあらむ、えしらずと、とのもりづかさ人々
のいひけるを、やゝまさひろがきたなきものぞや、と
句

はす也、正弘が沓とり歸しあとものゝしる聲のさはがしく也
りにきてもいとさはがし、わかくてよろしきおのこ
その名の半分ないふはよ
のげす女の名いひなれて、よびたるこそいとにくけ
れ、しりながらも、なにとかやかたもじはおぼえて
しと也
禁中に奉公の人の局に也
いふはおかし、宮づかへ所のつぼねなどによりてよ
かた文字を　それさ
るなどぞさおぼめかんはあしかりぬべけれど、との
へみつからよばずとも人によばせよかしと也　禁中
もりづかさ、さらぬ所（禁中ならぬ所也）などはさふらひ、（瀧口の侍也）
にては　將也つれて也
藏人所にあるものをゐて行て、よばせよかし、手づか
攝家ニモ有也　下女童などはかた文字もくるしからずと
らはこゑもしるきに、はしたもの、わらはべなどはさ
也　又の品につき似合しきと似合しからぬと也　受領の國
れどよし、わかき人とちごはこえたるよし、ずりやう
の守也　長
などおとなだちたる人は、ふときいとよし、あまりや
痩殼　心せはくしからん推せらるゝ也
せからめきたるは、こゝろいられたらむと、をしはか
形
らる、よろづよりはうしかひわらはのなりあしくて、
もちたるこそあしけれど也　よのものは也　あとにつき
もたるこそあれ、こともの（ど）もは、されどしりにた
て行也　牛かひはさきにたつもの也
ちてこそいけ、さきにつとまもられいくものきたな
後也　すがたも何もあしきもの也
げなるはこゝろうし、車のしりにことなる事なきお
のこどもの、つれだちたるいと見ぐるし、ほそらかな
すゝけてく
るおのこ、ずいしんなどのみえぬべきが、くろきは

ろき也　末濃　みな／＼古けたる也
かまのすそごなる、かりぎぬはなにもうちなればみ
かたはらに也　ゆる／＼と供して行人の
たる、はしる車のかたなどに、のどやかにてうちそ
躰也　やとひ人と思はるゝ也　形
ひたるこそわがものとはみえねなほおかたなりあ
車を　うちいふ
しくて、人つかふはわろかりき、やれなど時々うち
だれど也　誰ならんとて也　見也　心よくとがなきは名は申さぬ去が
したれどたれとなればみてつみなきはさるかたなり
たと也　又やれなとよりさるかたなりまで衣服のやれなとしたれど
や　つかひ人などこそはありて、わらはべのきたな
着なれてつみとがなきはさる風躰ぞと也　其家に居る人也　その所
けなるは、あるまじく見ゆれ、家にゐたる人も、そ
にゐる人也　使者　賓客　その
こにある人とて、つかひにてもまらふとなどのいき
家に
たるにも、おかしきわらはのあまた見ゆるはいとお
清少の
かし、人の家の門の前をわたるに、さふらひめきた
鄙也いやしき男也　辻又土也
るものなどして。ひめきたるおのこつちにおるもの
などして、おの子ごの十ばかりなるがかみおか
延　あばき出タル也
しげなる、ひきはへても、こばきでたるも、また
いつゝむつばかりなるが、かみはくびのもとに、か
膨
ひくゝみて、つらいとあかう、ふくらかなる、あや
すはへの事也
しきゆみ、しもとだちたるものなど、さゝげたる、
車の内へ入たしとの清
いとうつくし、くるまとゞめで、いだきいれまほし

少の心也
くこそあれ　○笞　唐令云笞大頭二分小頭一分半
是漢の世よりも起りて科人をうつもの也棘あるは
山楸にてする杖也
またさていくにたきもの丶香の、いみじくか丶へた　薫
る、いとおかしけれ、よき家の中門あけて、びろうげ　檳榔毛也第一
卷ニ委シ　あたらしき也
のくるまの、しろうきよげなるにはしすほうのした　蝫䋝芳之下簾
色よき心也
すだれのにほひ、いときよげにて、しぢにたちたるこ
そめでたけれ　○榻　唐韻云和名之知床也字彙云榻へ
狀狹而長者也　車をすへてをくもの也くらかけの
やうなるもの也うしをはづして置とき車のながえ
をもたせてをくもの也
車供奉の人也
五位六位などのしたがさねのしりはさみて、さ丶の　下襲　裾ヲ帶ニはさみて也　もの忌な
どつけてかざしもつなるべし
いとしろきかたにうちをきなどして、とかくいきち　左右
がふに、またさうぞくし、つぼやなぐゐをひたる、隨
規摸の隨身を供につれられしよとみえてよしと也
身の出入したる、いとづきく＼し　○西宮記諸衞將
佐有ニ御出ニ之時負ニ壺胡籙ニ也○毛氏傳云棚所ニ以
覆レ矢也　玉篇簶胡箭之室也
厨也みづし女也
くりや女のいときげなるがさし出て、なにがしどの　供奉の者めしたまふ
をくりや女がよびし也
丶人や、さふらふなどいひたるもおかし

㊇たきは
山城也小野山の上より落る也
音なしのたき　ふるのたきは法皇の御覽じにおはし　布留和州
ましけんこそめでたけれなちのたきは熊野にありと　那智紀州
きくがあはれ也　○いままた行ても見ばや石上ふ　續拾遺
るのたきつせあとを尋て　後嵯峨院　これは寬平法皇のふ
るのたき見に御幸ならせたまふそのあとをしたひ
たまへる御歌なりとぞ○宇多天皇は光孝天皇の第　五十九代
三の子也母は皇后班子仲野親王のむすめなり寬平
九年七月三日天皇位を太子敦仁にゆづりて朱雀院
に閑居す時に御年三十亭子院とも申す後に御髮を
そらしめ寬平法皇とも申す在位十年也とぞ又の說
に花山院三山順禮諸國勤行したまふ時御覽ずるよ
しなり
花山院は冷泉第一御子母は皇太后宮懷子攝政太政
大臣伊尹女也寬和二年六月廿二日おりゐさせその
まゝ花山寺にてかざりおろしこゝかしこ深山に入
佛道行ひ給ひし也兩說不明たゞしなちの瀧を花山
院の御覽じ給ふ事元亨釋書に明らかなれば法皇の

御覧じにおはしましけんこそめでたけれなちのたきは熊野にありと聞が哀なる也と下へつゞけてみるべきか猶智者の評をまつ也 とゞろくといふ名によりて也

奥轟瀧 とゞろきのたきはいかにかしかましくおそろしからん

●はしは

越前又飛驒にあり あさむつのはし ○余十年ばかりさきに越前の國笑種といへる俳諧のすき人にあまたゝび會合の事ありしある日の席にてこのはしの事尋しに今はあさうづのはしととなへ侍る文字には淺生づと書よし慥にかたられしもしほ催馬樂の律のうちに淺水と書てあさむつとよませたりあさむつのはしはあさうつのはしの事也

攝州長柄 ながらのはし　飛驒天彦 あまびこのはし　近江濱名 はまなのはし　攝州也又只何くにても ひとつばし　上野佐野 さのゝ舟はし　大和歟卜 うたじめのはし　作州轟橋 とゞろきのはし　奥州緒革又小河 をがはのはし　梯いづくにても かけはし　江州瀨田 せたのはし　信濃岐岨路 きそぢのはし　攝州堀江 ほりえのはし　かさゝぎのはし　行合 ゆきあひのはし

鵲のはし八雲抄に津の國也夫木抄周防土佐也但非二名所一か淮南子に烏鵲塡レ河成レ橋度二織女一とある事也家持のよめるかさゝぎのはしはたゞ天の事也百人一首にてさたする事也　行あひのはしはもとより名詮也非二名所一されども宗惠が松葉集に未勘の國に入れたり

八雲未勘 をのゝうきはし　下野山菅 山すげのはし　一すぢわたしたる、たなはしこゝろせばければ名をきくにおかしき也、

大和轉寢也 うたゝねのはし　○たなはしもしほに高欄のやうなるものしたるはしかまた棚に似たるはしと云々余このはしの事つゝしみて烏丸大納言資慶卿にうかゞひしにたゞたなのごとくうちわたしたる橋也はしぐゐもなききみじかきはしの事也とつたへさせ給ひぬ

●里は

あふさかの里　○八雲の御說に淸少納言を引て近江とあり玄旨法印の傳來の本宮城氏孝庸といへる人の所持せられたるはあさかの里とあらためて奥州の國付あり

ながめの里（長雨未勘）　いさめのさと（去來見伊勢）　人づまの里（他妻未勘）　たのめの里（賴里信州）
あさふの里（和州一本朝風の里）　ゆふ日の里（丹後夕陽）　とをちのさと（大和十市）　ふしみのさと（伏見山城）　ながゐの里（攝州長居）　つまとりのさと（奥州妻取）、人にとられたるにやあらん、わがまうけたるにやあらん、いづれもおかし

◯草は
さうぶ（菖蒲）　こも（蔣）　あふひ（葵）いとおかし、祭のおり神代よりしてさる（さやう也）かざし（挿頭）となりけん、いみじくめでたし、ものゝさま（諸道具につけたる葵のさま也）もいとおかし　○賀茂の祭に、人々あふひかづらを懸る也賀茂松尾の社司前日よりしかるべき所へ奉る四月中の酉の日也このあふひは二葉草もろ葉草といふ也
おもだか（澤瀉）も名のおかしき也、こゝろあがりしけんと思ふに　○面高といふ故心あがりしけんとおもはれておかしと也　曲禮曰凡視上於面則敖　呂氏註知其不能下人
みくり　ひるむしろ（蛇床子）　○もしほに莎草　三稜　實九利と書たり　和名類聚本草を引三稜草　本草には荊三稜其次莎草と訓じたりその下に圖經を引て水香稜を一名にあげたり水香稜をも荊三稜をも合て莎草をみくりとさだむべきにやもしほに莎草三稜一名に定め本草和名の二書に三稜莎草とならべてあれば是非ともに一名と見えぬこの外に萍蓬草みくりとよませその下に水栗子と一名あり
ひるむしろ　本草蛇床子也俗にいふやぶじらみといふ物也もしほに繼子草の字をひるむしろと訓じたり
こけ（苔）　こだに（苦丹）　雪まのあを草　○くだに苔に生まじりてまろきもの也蘿の類なり源氏宿木の巻にこだになど引とらせと云々河海に木蔦の類なりちりぬればのちはあくたにとよめるは苦丹と書るをこだにと同前のよし飛鳥井の榮雅卿はのたまへり又の説苦膽りんだうの一名ともあり是もしほの説なり
かたばみ　あや（綾）のもん（紋）にてあるも、ことものよりはお（外のもんよりおもしろきと也）かし、○和名に本草を引て、酢漿の字をかたばみとよませたりいま本草には酸摸の二字あり酸母草と

も三葉酸ともいふ世にいふ山大黄也とぞ俗にいふ
すいもの草と名付たるもの也
あやふ草は、(うとよむべし)きしのひたいにおふらむもげにたのも(根をはな)
しからず哀也(れさうにて也)　○岸の額(ヒタヒ)に生る故あやうき草の心也
必あやふ草の實(ジツ)をたづぬるにおよばず觀レ身岸ノ額ニ
離レ根草と無常の題にて羅維(ライ)が作れる草也
いつまで草(生壁草)は、おふる(生)所いとはかなくあはれ也、き
しのひたい(壁の事也)よりもこれはくづれやすげなり、まこと
のいしばい(白灰の事也)などにはえおひずやあらんと思ふぞわろ
き、ことなし草(無事)はおもふ事なきにやあらむとおもふ
もおかし、またあしき事をうしなふにやといづれも(もの忌などをつけて簾冠につくる心にや)
おかし
しのぶ草(垣衣と書也)いとあはれ也、屋のつま(家也　軒端)、さし出たるもの丶
つまなど(はしの心也)にあながち(強也)におひ出たるさまいとおかし
○大和物語にはしのぶ草わすれ草同じ物也たゞし
わらくとあるはわすれ也しのぶはほそながにて
ほしのやうなるもの丶あるなり　戀しさをいはで
ふるやのしのぶ草しげさまさればいまぞほに出る

また昔はしのぶ草にもの忌をかきてみすにもかふ
りにもさしけるなり是はしのぶ草の一名ことなし
草といふにつきて用ゆ無事の由也　(後撰)かすさともた
ちとたちにし我名にはことなし草のかひやなから
む　貫之君まさでほとのふるやのひさしにはあふ事
なしの草ぞおひける　これを考ふれば事なし草し
のぶ草うたがひもなく一草也事なし草の名おかし
しのぶ草と名づけたるもまたあはれ也といふ心也
二色に見るべからず
よもぎ(蓬)いとおかし、つばな(蘡)もおかし　はまちの(濱茅)葉は
ましておかし(よのつねのよりも也)　まろこすげ(荊三稜)　うきくさ(萍又蘋)　あさぢ(淺茅)　あ
をつゞら(青藾草)　とくさ(木賊)といふは、風にふかれたらんをと(とくさの上にわたる風の音は)
こそいかならんと、おもひやられておかしけれ、な(さはくとなるもの也)
づな(薺)　ならしば(楢柴)いとおかし　はすのうき葉のらうた(臈也)
げにてのどかにすめる(澄)池のおもてに、おほきなると(ゆふくとしたる躰也)
ちいさきと、ひろごりたゞよひて(漂)ありく、いとおか
し、とりあげてものをしつけなどしてみるもよにい(もの丶ふたなどにおほふ心也)
みじうおかし、妙法蓮花のたとへにも、花は佛に

奉り、實はずゝ(念珠)につらぬき(貫)、念佛して往生極樂の緣とすれば　○玄義云妙者妙名ニ不思議一法者十界十如權實之法也　釋云十界諸法本來本妙法甚深微妙之法也　蓮花は前にいふ所の妙法のたとへ也　生ニ淤泥中ニ不レ染ニ淤泥一妙法在ニ妄情中一不レ染ニ妄泥一全如ニ蓮花一是其譬諭也　花は佛に奉り　方便品云乃至以ニ一花一供ニ養於畫像一漸見ニ無數佛一

また花なき比(もろ〳〵の花のなき時也)、みどり(綠也青き心也)なる池の水に、くれなゐにさきたるもいとおかし翠翁紅(スイアウコウ)とも詩につくりたるにこそ　○翠蓋(スイカイ)臨レ風迥(ハルカナリ)とも貪着翠蓋擁(ヨウス)ニ江粧一などとも古詩にあれども翠翁(ナウ)といふ詞なし翁と蓋(カイ)と書たがへるにや

やますげ(山菅)　やまゐ(山藺)　○やますげ童蒙抄に麥門冬(バクモントウ)と書也せうがひげといふ草也山ゐは玄の手ねの事也

ひかげ(蘿 日蔭)　はまゆふ(濱木綿)　○ひかけ(もしほに)手向草同じ古本にかゝる草也　和名に唐韻(タウイン)を引て　蘿の字ひかげと訓じたり女蘿の事也又はまゆふは　みくま(拾遺)のゝうらのはまゆふ百重なるこゝろはおもへとたゝにあはぬかも人丸　このみくまの紀州也もしほに志摩の國とあり大臣の大饗の時は　志摩の國に獻(ケン)ずる事舊例(キウレイ)也是をもつて雉(キジ)の足をつゝむ也抑このはまゆふは芭蕉に似たる草のくきのかいのうすくおほくかさなれる也又伊勢の國といふ說もありいづれにても紀州にあらず

あし(葦)くず(葛)の風にふきかへされて、うらのいとしろくみゆるおかし

●草の花は

なでしこ、から(唐)のはさら(殊更也)也、やまと(和)もめでたし(愛)　○杜甫が詩に麝香眠ニ石竹一鸚鵡啄ニ金桃一と作るもなでしこ也　から(古歌に)國に有ける事はいさしらずあづまのおくにおふる石竹

瞿麥(クバク ナデシコ)　本草に日本本草を引て一名石竹とあり

をみなへし(女郎花 女倍芝)　ききやう(桔梗)　菊の所々うつろひたる　かるかや(刈萱)　りうたん(りんだうの)枝(えだつきの事也)ざしなどむつかしげなれど、こと(よの花也)花みなかれはてたるに、いとはなやかなる色あひにて、さしいでたるいとおかし

○本草十三龍膽葉如ニ龍葵一味苦如レ膽因爲レ名　是

草龍膽也又有二山龍膽一味苦其葉經レ霜雪不レ凋
またわざととりたてゝ、人めかすべきにもあらぬど 上らうらしき心也
も、かまつかのはならうたげ也、名ぞうたてげなる、 鴈來草
鴈來 かりのくる花と文字には書たる、かにひのはな色は 萱草 今の世に岩ふ
ぢといふ濃 こからねど、ふぢの花に、いとよく似て、春とあき 拾遺抄名
とさく、おかしげ也 ○わたつみの沖なかにひのは
なれ出てもゆとみゆるはあまのいさり火伊勢
壺菫 つぼすみれ この二色みればしれぬ也 すみれおなじやうのものぞかし、おひ 生そだ
ちて行ば也 ていけば、おなじなどうし おなじやうにいへどもそれは心うしと也 玄もつけの花 ○玄も 花うすむ
らさきにて小でまりに似たる也 つけやまかきにましるあちさゐの四ひらにみれば
八重社はさけもしほ
ゆふがほは、あさがほに似で、いひつゞけたるおか
しかりぬべき花のすがたにてにくゝて、 悪 みのあり様 實也長々しき
瓢のさま也 こそいとくちおしけれ、などてさは なにとて也さやう おひ出けん、 也 ぬ
糠 粹 かつきなどいふものゝやうにだにあれかし、 きれの事也ゆふがほのなりの見たて也 されど
なをゆふがほといふばかりはおかし ○末の詞はか
の源氏にゆふかほと申侍る花の名は人めきてかう
あやしきかきねになんさき侍ると申かやうの心ば

へもありげ也
芦の穗也 あしの花さらに見所なけれど、みてぐらなどいはれ 幣帛
たるこゝろばへあらんと思ふにたゞならず 子細あらんの心也 ○信濃
の御射山祭七月廿七日芦の穗にて幣を作るあしの
花のみてぐらといふ
萌出タル躰也 薄 もえしもすゝきにはをとらねど、水のつらにてお 面
かしうこそあらめとおぼゆ、これにすゝきをいれぬ、 この段の事也いとあやしとい
ひて又書たりおもしろき文法也 いとあやしと人いふめり、秋の野をしなへたるおか
しさは、すゝきにこそあれ、ほさきのすほうにいと 蘇芳 最
濃 こきが朝ぎりにぬれて、うちなびきたるは、さばか 是ほど
のもの何かあるとおさめて書し文法也 りのものやはある ○ますうのすゝきとは、ますは 眞蘇芳
うの心也越前色濱にて西行 玄ほのまにますうの
小貝ひろふにていろの濱とはいふにやあるらん 十寸穗
その外ますほのすゝきまそほのすゝきとてあり 眞麻 穗さきのたけろ時也
あきのはてぞ、いと見所なき、色々にさきみだれたり
しほなどかたちもなく、ちりたるのち、ふゆのすゑ
まで、かしらいとしろくおほどれたるも玄らで ○ すゝきの穗の白髮に似たれば也 とりみだしたる也

源氏あづまやにおほどれたるこゑしてとあり孟津抄におほどげたる也とあり
(初秋の事也)むかしおもひいでがほになびきて(手ひろげたるやうにばつとしたる事也)手ひろぎたてるは(思ひよそふる事ありて也)人にこそいみじく似たゝめれ、よそふる事ありて、そ(のすゝきを老はてしさまにおもひよそへばあはれならんと也)れこそあはれともおもふべけれ、はぎ(萩)はいと色ふかき、枝たをやか(婀娜)にさきたるが、あさつゆにぬれてなえ〳〵(柔也和かなる心)とひろごりふしたる、さをしか(棹鹿)のわきて(とり分て也)たちならす(立馴)らんも心こと也 ○行かへり折てかざゝむ朝な〳〵しかたちならすのへの秋はぎ　貫之(後撰)
(唐葵)からあふひは、とりわきてみえねど、日のかげにしたがひて(日向葵といふものい事也)、かたふくらんぞなべての草木のこゝろともおぼえでおかしき ○說文黄葵常傾葉向ㇾ日不ㇾ令ㇾ照二其根一
韓忠獻詩 炎天花蕊歎錦綉獨成ㇾ林不ㇾ入二當時眼一
其知二向ㇾ日心一
花の色はこからねど、さゝ(助字)やまぶき(ちいさき山吹也)には、岩つゝじもことなる事なけれど(かはりし事はなけれど也)、おりもてぞみるとよまれたるさすがにおかし 〳〵この歌諸抄に不考 後拾遺和泉式部か歌に ○岩つゝし折もてぞみるせこかきし紅そめの色に似たれは
(薔薇)さうびは、ちかくて(人家に)、枝のさまなどは、むつかしけれどおかし(そさうなる心也)、あめなどはれゆきたる水のつら、くろ木のはしなど(階)のつらにみだれさきたるゆふばへ(映) ○本草薔薇夏草早花開者也 白氏文集十七甕頭竹葉經ㇾ春熟階下薔薇入ㇾ夏開

◉集は

古萬葉集　古今　後撰

拾芥抄云萬葉集廿卷四千三百十五首(長歌二百五十首此内也)部立錯亂不ㇾ定 古今眞字序平城天皇詔二侍臣一令ㇾ撰二萬葉集一愚考このならの帝說々多支覺律師云平城之號者凡以二聖武並桓武太同之朝一號二平城帝一見二國史一 撰者稱二山上憶良一或稱二橘大臣一或稱二藤原眞楯一或稱二大伴家持一 愚考時代は聖武天皇撰者橘諸兄左大臣大伴家持と決定すべし 紹巴云古萬葉集とて四卷あり神代ちかき人々の歌也嵯峨天皇の御撰也源氏むめがえの卷にも嵯峨帝の古萬葉集と有と云々花鳥に萬葉一部廿卷平城天皇詔二侍臣一

撰レ之又萬葉抄五卷貫之撰之一說なしつほの五人抄レ之同廿卷抄不レ知二撰者一この外嵯峨の天皇の御撰四卷目錄不レ見但うるはしき撰定の抄にてはなくして手本のために所々かゝせ給へるにや弄花問云いにしへの萬葉といふ義か一禪合點　細流さがの天皇の手本のために歌をえらひて書たまへる也萬葉の全部に非ず永閑說に古き集なれば古の字を付たるか　古今眞字序云　詔二大内記紀友則御書所預紀貫之前甲斐目(サカワン)凡河内躬恒右衛門府生壬生忠岑等一各献二家集幷古來舊歌一曰二續萬葉集一於レ是重有レ詔部二類所レ奉之歌一勅爲二二十卷一名曰二古今和歌集一　貫之集に延喜の御時やまと歌える人はむかしいまの歌奉らしめ給ひて承香殿のひんがしなる所にてえらましめ給ふ　拾芥古今集廿卷千百首

後撰　中納言入道抄云於二昭陽舍一被レ撰レ之時被レ下二宣旨一云　謙德公藏人少將奉行云々　天曆五年辛亥十月於二梨壺一以二藏人少將伊尹一爲二和歌所別當一和歌所撰本是也　坂上望城源順紀時文大中臣能宣清原元輔等撰レ之奏覽無レ所見

拾芥云後撰集廿卷千二百廿首　或千三百五十六首

榮花物語にむかし孝謙女帝の御代天平勝寶五年に左大臣諸兄卿諸卿大夫集て萬葉集をえらませたまひ醍醐の先帝の御時は古今廿卷えりとゝのへさせ給ひ世にめでたうせさせ給ふこの御時にはその古今にいらぬ歌をむかしのもいまのも撰せ給ひてのちに撰ずとて後撰集といふ名をつけさせ給ひてまた廿卷せんじ給ひけるぞかし

●歌の題は　萬葉集古今後撰のうちよゝかたき題をえらせたり

みやこ（都）　くず（葛）　みくり（海草）　こま（駒）　あられ（霰）　さゝ（篠）

つぼすみれ（壷菫）　ひかげ（蘿）　こも（菰）　たかせ（鵜高瀬とも）　をし（鴛）

あさぢ（淺茅）　しば（芝）　あをつゞら（青葛草）　なし（梨）　なつめ（棗）

あさがほ（槿但朝顏よし）

●おぼつかなきもの　世にこゝろもとなきといふと心おなし

十二年の山ごもりの法しのめおや　○山門などに三年十二年の山ごもりとて禁足する事也父は行てもあひみるべきを母は登山かなはねばそのうちこゝろもとなく思ふべし

あらぬ所に（ひそかなる所也）やみなるにいきたるに、あらはにもぞあ（あまりけざ〳〵とし）

てあしきと也　ならひ皆々也　この比
るとて、人をもともさでさすがになみゐたる、いま
の従者の事也　た事に思ふもの也
出きてるもの丶、こゝろもしらぬに、やんごとな
許也
きものもたせて、人のがりやりたるにをそくかへ
二三歳のちご也　反覆
る、ものいはぬちごのそりくつがへりて人にもいだ
不抱　虫いばらなどありて心もとなき也　たれともし
かれずなきたるくらきにいちごくひたる、人のかほ
らぬ人をれりものにみる也
見しらぬもの見

●たどしへなきもの
たとへられぬ心也　相違のこゝろ也
なつとふゆと、よるとひると、雨ふると日てるとわか
きとおいたると、人のわらふとはらだつと黒きとし
藍　黄蘗
ろきとおもふとにくむとあゐときはだと、あめとき
こゝろざしかはりたる也
りと、おなじ人ながらも心ろざしうせぬるはまこと
はじめの人にあらぬ也
にあらぬ人とぞおぼゆるかし、ときは木おほかる所
寝聴いれのわろき也　落
に、からすのねて夜中ばかりに、いねさはかしくおち
轉　切　一聲はなちてなく也
まろび木づたひてねをびれたる、かたこゑになきた
寝聲に昔也　からすのきごつなるみゝにたゞひておかしと也　人にあ
るこそ、ひるのみめにはたがひておかしけれ、しの
のひてあひたる所也
びたる所にてはなつこそおかしけれ、いみじうみじ
かき夜の、いとはかなくあけぬるに露ねずなりぬ、
戸障子也
やがてよろづの所みなあけながらなれば　すゞしう

見わたされたり、いますこしいふべき事あれば、か
たがひに也　ものいひかはし返答などする也　居
たみにいらへどもするほどにたゞゐたるまへより、
夜あけの躰也　顯證也あらはなる心也
からすのたかくなきてゆくこそ、いとけせうなるこ
よるのものひとつにふして也　雪霜に
丶ちしておかしけれ、冬のいみじうさむきに、思ふ
人とうづもれてふしてきくに、かねの音のたゞもの
聲のふつみたる也
丶そこなるやうに聞ゆるもおかしとりのこゑもはじ
めははねのうちに口をこめながらなければ、いみじう
次第に明かたほとみだれなく也
ものふかくとをきが、つぎ〳〵になるまゝに、ちか
くきこゆるもおかし
懸想われに心をかけてくる人也　評判すべきにあらずと也　常のか
けさう人にてきたるは、いふべきにもあらずたゞう
是は常の友にもあらず自然にくる人也
たらひ人也
ちかたらひまたさしもあらねど、そのづからきなと
なみゐて
する人の、すのうちにてあまた人々ゐてものなどい
簾　すの内へ頓の字也早速也　かのきたりし供人也
ふに入てとみに歸りげもなきを、供なるおのこわら
柯也　朽　長居するをはらだつ心也
はなど、をの丶えもくちぬべきなゝめりと、むつかり
たいくつげに也
ければ、ながやかにうちながめて、みそかにとおも
たのれはひそかにいふと思ふにあどこなた、よくきこゆる也すのうちの人ともいもの
ひていふらめどもあなわびし〇壊異記云王質石室
心とたとへられぬ心也
山見ニ數童子圍レ棊與ニ質一物ニ如ニ棗核一人含レ之不

頭書 銀扇未レ終二柯闇一已歸無二復時人一
ぼんなうくなうかな、いまは夜中にはなりぬらんな（ともの人也）
どいひたる、いみじうこゝろづきなく、かのいふも（もの、あおはひなしらぬ也）（やうの下人いれし人こそ也）
のは、とかくもおぼえず このゐたる人こそおかし（不斷與ありと思ひしするやう也との心）
う見聞つる事も、うすやうにおぼゆれ、また世に聞
也又今のたゞ一帯に何事も身にしきぬ心もありいのほんたうゝな
てはえ言ずあると、たかやかにうちいひうめきたる
うなどいひたるやうの事也清少心也いはぬは、ふにさまの心也
も、した行水のほどいとおかし ○心には下ゆく水
立部 のわきかへりいはて思ふぞいふにまされる六帖
たてゐとみ、すいがいのもとにて、雨ふりぬべしな（透垣）（ともの人が主人をは）
やくかへらせんとていふ詞也
ど聞えたるもいとにくし、よき人きんだちなどのと
もなるこそ、さやうにはあらね、たゞ人などさぞあ（さやうにはいはぬと也）（下官のとも人也）
さやうにわぬゝ也
る、あまたあらむ中にも、こゝろばへみてぞゐてあり（いれこ也）
内のものゝ
くべき
●ありがたきものまれなる心也
舅 ゐうとにほめらるゝむこ、またゐうとめにおもは（譽）（姻）（姑）
嫁 はかれなければぬけぬもの也（鑷）
るゝよめのきみ、ものよくぬくるしろかねのけぬき
主人 從者 鑷の方はなくて也 又片
しうそしらぬ人のずざ つゆのくせかたはなくて、

輪なくてともの
かたちこゝろありさまもすぐれて、世にあるほど、（瑕瑾也）（たがひに也）
いさゝかのきずなき人 ほうばい又友たち也 おなじ所にすむ人のがたみ（本性のわろき所のみ）
にはむかはしたると思ふが、つゐにみえぬこそかた（えかたありかたし也）（正本也）
けれ ものがたり集などかきうつすほんにすみつけ（ものがたり）
さうし也
ぬ事 よきさうしなどはいみじくこゝろしてかけど
もかならずこそ、きたなげになるめれ ○顔氏家訓
云借二人典籍一皆須二愛護一先有二缺壞一就爲二補治一是
亦士大夫百行之一也 濟陽江祿讀レ書未レ竟雖レ有二
急速一必待二卷束整齊一而後得レ起故無二損敗一人不レ
厭二其假一或有下狼二藉几案一分中散部秩上多爲二童幼婢
妾一所二點汚一風雨蟲鼠所二毀傷一實爲レ累レ德吾每讀二聖
人書一未二嘗不一肅敬對レ之其故紙有二五經詞義及聖
賢姓一名不二敢他用一也
おのこも女も法しも、ちぎりふかくて かたらふ人（中のよき也）
のすゑまで中よき事、つかひよきずんざ かいねり（打殿にて打）
てつや出す也
うたせたるに、あなめでたとみえてをこせたる ○（よくとゝのへてこし）
たるなりこの下にありかたしといふ心あり
皆練はおもてうら紅のうちたるものにて中重なき
女の裝束也摺練とも書也練色ともいふとぞ

うちつぼね（内局）ほそとの（廊）は、いみじうおかし、かみのこゑとみ（上小蔀）あけたれは、かせいみじうふき入て、なつもいとすゞし、ふゆは雪あられなどの風にたぐひて入たるもいとおかし、せばくて（ほそとのゝ）わらはべなどののぼりたるもあしければ、人してみせたるに、いひあて（あんのごとくわらへのゐる心なり）たるは、さればこそなどいふもおかし、有明のいみじう霧わたりたるに、をりて（庭に）ありくを、聞しめして御前にもおきさせ給へり、うへなる人々（内にさふらふ人々也）のかぎりはをりなど（庭に）してあそぶに、やう／＼明もて行、左衛門の陣に、まかりみん（清少）とてゆけば、われも／＼とをひつきて行に、殿上人あまたこゑして、なにがし（たれともなし）一聲の秋とずゞじて、參るをとすれば、にげ入て（女房の）ものなどいふ、

○朗詠夏日閑避暑源英明　池冷水無二三伏夏一松高風有二一聲秋一　かゝる名詩を折ふしの興に吟詠したる也

月見給ひける（殿上人の女房たちの月みるにめでゝ歌よみかけしもありと也）などめでたまふもあり、よるもひるも殿上人のたゆる（女のにげたる人のあいさつ也）夜なし、かんだちめまかって（上達部退出也禁中を出たる也）參給ふに、おぼろけ（大かた）にいそぐ事なきは、かならず參給ふ（中宮へ也）、

わざとおもひたちて、宮づかへ（宮つかへをうむじたる也）に出たる人の、ものうがりてうるさげに思ひたる、人にもいはれ（人にもいひたてらるゝ也）、むつかしき事もあれば　いかでかまかでなん（何とぞして里へ）といふことくさ（言種也いろいろのかこつけをして也）をして出て、おやをうらめしければまた參なんといふよ、

とりこのかほにくさげなる（養子のかほの我にやさしからぬ也）　ゑぶ／＼におもひたる（はしめよりむこにならんともおもはざりし人也　堪忍したる也）人をしのびてむこにとりて、おもふさまならずとなげく人（むすめのおやの心也）

◉いとをしげなきもの（ゑゐてにくむにもあらずかりそめにあいなき心也）

人によゝみて（人の代歌也）とらせたるうたのほめらるゝ、されどそれはよし（そのかひあればよしと也）

とをありきする人（遠國へ下る人也）の、つぎ／＼えんたづねて（次第／＼人の縁々たつれて也）　文えんといはすれば（もと也）ゑりたる人のがりなをざりに（等閑也平生に書て也）かきてやりたるに、なまいたはり（文とりて行しさきの人の事也）などはらだちて、返事も（腹立の上に返事もさせすにたゞかへりてさん／＼にいふ也）とらせでむとくにいひなしたる（無德の二字せんもなき心也）

◉こゝちよげなるもの

うづえのことぶき（祝言）　○卯月上の卯日東宮を始奉り左

右の兵衛府作物所（ツクモ）より大内へ奉る事也　公事根源云仁壽二年正月に諸衛祝杖を献じて精魅を追ふすはまを造物にしてその上にいはほの中に御生氣のかたのけものを作て卯杖にあはしむたとへば生氣東にあらば龜南にあらば馬なるべし

神樂のにんぢやう（人長）　○人長は神樂の舞人陪從なとの長也　内侍所の御神樂には韓神其駒などの時起て舞もの也猶公事根源に委し　禁秘抄云自二一條院御時一十二月有二御神樂一多隔年行レ之近代毎年有レ之　江次第云次御拜兩段再拜女官引レ網鳴レ鈴次主上還二御圓座一次將以二御劔一授二内侍一退下殿上人着座本末着座以二勸盃三獻一頭以下相分勤之藏人所雜色取二瓶子一次人長起處レ事先鳴高次名對面次人々令レ起云々人長起召二才男一數人一々進奉仕畢人長退次左井（サイハリ）八利次朝倉地下陪從歌次其駒人長起舞是間人長給二腰挿一

池のはちすのむらさめにあひたる　すゝしき心ちよき景也

御りやうゑの馬おさ　祇園の御靈會六月十四日也公事根源云この祭の日は禁中はことなる事なし馬長なともよほしつかはさるれども御覽はなし祇園の社は貞觀十一年に託宣の事ありて山城の國にうつし奉りしにや素盞烏尊のわらはべにて牛頭天皇とも武塔天神とも申也下略　圓融院天祿元年御靈會初る也

御りやうゑのふりはた（振幡）　○御靈會の祭の時もとははたをつけ兩方の人を制したるをふりはたといふとぞいまは棒をふることになりけるまたこの祭のさしほこはこのころ五十年ばかり事たえ侍る也古老の町人はおぼえ侍るとぞ

枕草紙旁註卷五

㊀とりもてるもの（とりはやす心也 賞翫の心もあり）

くゞつの小鳥　○わなくゞつとて俗にいふこぶちの事なり筌蹄（センテイ）の二字をわなくゞつと通じてよむなり

くゞつにかゝる小鳥は人のとりもつもの也

除目に第一の國えたる（何の守かの守になる事也）　○除目の事第一にくはし受領の國に上中下ありその中によき老長の人を上國の受領とする尤賞翫也

御（ア）佛名のあした（あくる日也）ぢごく繪の御屏風とりわたして、（中宮のかたへ）宮御らんぜさせ給ふ、いみじうゆゝしき（おそろしき也）事かぎりなし　○江次第云仁壽三年十一月十三日格改定從（ノテ）二十九日ニ到ニ廿一日ニ三ヶ夜也云々○公事根源に仁壽殿の御本尊をうつして御帳のうちに懸て南の額の間に又南北に机をたてゝ佛像をおく佛前に香花などそなふひさしに地獄繪の御屏風をたつ初夜後夜中夜各御導師かはるさしあぶら藏人これをつとむかつげわたい事あり下略

○佛名經云若有（ニクシテ）ニ善男善女人ニ聞（テ）ニ是三世三劫諸佛世尊名號（ノ）ニ歡（ヲ）喜信樂（ケウス）云々○榮花もの語に云十二月の十九日になりぬれば御佛名とてぢごくの繪の御屏風などとうでゝ（とり出しての心也）しつらふも目とゞまりてあはれ也○是は地獄のありさまを書きたる屏風立て三世の佛名をきかしめて濟度すべき心也

これ見よかしとおほせらるれど、（中宮の清少に）さらに見侍らじとて、ゆゝしさ（おそろしさに也）にうつぶしぬ、雨いたう（強）ふりて、つれぐ＼なりとて、殿上人上の御つぼね（后宮の局）にめして（清少を）御あそびあり、道方少納言琵琶いとめでたし、濟政の君の箏のさうの琴、行成の笛、經房中將のさう（笙）のふえなど、いとおもしろし、○職原補任云源道方正曆六年正月廿一日補ニ少納言從五位上ニ同補任云源濟政（ナリマサ）長保二年正月廿七日阿波守權守從五位下道方は字多天皇の末正二位左大臣重信の子母は師輔の女濟政は道方の弟母參議安親（ヤスチカ）の女○公卿補任云參木正四位下源經房故左大臣高明公四男母右大臣師輔公五女○公卿補任云藤原行成故太政大臣伊尹公孫但爲（レ）子右少將義孝一男母中納言源保光卿女

樂一反也
ひとわたりあそびて、琵琶引やみたるほどに、大納（伊周公）
也　詩を吟じ給ふ也
言殿の琵琶ノ聲はやめて、ものがたりする事をそし
といふ事を、ずむじ給ひしに、〇白氏文集忽聞水上
琵琶聲主人忘レ歸客不ノ發尋レ聲暗問彈者誰琵琶聲
停欲レ語遲
うつぶしぬる清少也
かくれふしたりしもおき出て、つみおそろしけれど（ぢごくの繪は見ずしてこの詠）
に感ずる也　音樂
なをもの丶めでたきは、えやむまじとてわらはる、（びはのやみたる折か）
大納言どの丶詩の吟聲也
御こゑのすぐれたるにはあらねど、折のことさらに
らこの詩うたひしはつくり付しやう也といふ心也
つくり出たりしやうなり、頭中將のそゞろなる空そ
とをき丶て　勘物云齊信卿正暦五年八月廿八日藏
人頭　廿八長德二年四月廿四日任ニ參木一
清少を
いみじういひおとし、なにしに人とおもひけんなど
頭中の　清少の
殿上にてもいみじうなんの給ふと、きくにもはづか
頭中の
しけれどまことならばこそあらめ、をのづから聞な
をし給ひてんなどわらひてあるに、くろ戸のかたへ
清少の
などわたるにも　〇黑戸清涼殿の北の瀧口の戸の西
也

清少の
こゑなどする折は、袖をふたぎて露見せこせず、い（頭中の　清少がたを）
清少を　清の頭中を
みじうにくみたまへば、ともかうもいはず見もいれ
禁中の　頭中の女房達と同じく籠りて也
ですぐす、二月つごもりがた、雨いみじうふりてつ
れ〲なるに、御ものいみにこもりて、さすがにさう
びしければ也　清少のもとへ
〲しくこそあれ、ものやいひにやらましとなんの
清少へ女房たちの　何かさやうにあらんと清少の返
たまふと、人々かたれど、よにあらじなどいらへて
答也　清少の局に　中宮へ　中宮は御寢な
あるに、一日しもにゐくらして參たれば、よるのおと
りし也
ゞにいらせたまひけり　〇禁秘抄云夜御殿四方有ニ
妻戸一南大妻戸一間也帳同ニ清涼殿一東枕御座敷也
御枕有ニ二階一奉レ安ニ置御劍神璽一皆有レ覆蘇芳也御
劍東南帳四角有レ燈又帳東北敷レ疊爲ニ女房座一
めくら數居をいふそれをへだて丶也　集
なげしの下に火ちかくとりよせて、さしつどひてへ
んをぞつぐ　逍遙院殿の說に文字の篇とつくりと（旁）
わけてつくりをかくし篇をもつてなにといふ字ぞ
といひあつる事也
清少を見て女房たちのよろこぶ詞也　中宮の
あなうれし、とくおはせなど見つけていへど、すさ
御寢なりてのちなれば也　參まじき所へ參たる也
まじきこゝちして、なにしにのぼりつらんとおぼゆ、
すびつのもとにゐたれば、またそこにあつまりて、

ものなどいふに、なにがしさふらふ（やれ少納言こそおれと頭中の使の詞也）といとはなやかにいふ、あやしくいつのまに（清少ふしんしていまきた間に也）、なに事のあるぞととと（清少の）はすれば、とのもりづかさ（主殿司）なり、たゞに人づてならで申べき事なん（直に申さんと也）といへば（使主殿司の詞也）、さし出て（清少の）とふに、これ頭中將殿の奉らせ給ふ、御返事とく（早速にと也）といふに、いみじくにくみ給ふを（文を）、いかなる御文ならんとおもへど、たゞいまいそぎみるべきにあらねば、いね（おくへ）、いまき（おくへ入）（使に今すこしありて返事せんと也）こえんとて、ふところに引いれて（文を）ふと入ぬ、猶人の（てそのまゝ）ものいひなどきくに、すなはちたちかへりて（使の）、さらばそのありつる文をたまはりて（さいそく也）、ことなん仰られつ（來れと也）る、とくといふに、あやし、くゐの物がたりな（くやしきものがたりぞと也）りとてみれば（文を）、青きうすやう（かみのもやう也）に、まんな（眞字也）にいときよげにかき給へり、こゝろときめきするさまにもあら（氣づかひしたるやうにもなしとて也）ざりけり、らんしやうの花の時きんちやうのもとゝ書て、するはいかにくとあるを、いかゞすべからむ（清少の心也）

○廬山草堂雨夜獨宿寄二牛二李七庚三十二員外一（白氏文集十七）

蘭省花時錦帳下廬山雨夜草菴中　蘭省本謂二太政大臣一近代辨官謂二蘭省一こゝの心は只禁中の事也

花の下月の影に錦の帳のあたりに時めき給よとの心也樂天はじめは朝廷にはしり後に廬山に住する心をのべたり

御所（中宮の御寢なりしのちなれは也）のおはしまさば御らんせさすべきをこれがすゑ（この句の末）しりがほにたどくしき（おほつかなき也）まんな（眞字）にかきたらんも、見ぐるしなどおもひまはすほど（清少の）もなく（そのまもなく也）せめまどはせば（使のもの）たゞそのおくにすびつにきえたるすみのあるして、草のいほりをたれかたづねん（頭中の日比にくみたまへばたれかわれな）とかきつけて、とらせつれど（霈れんの心也）、返りごともいはず（中將より又の返事也）、みなねて（女房たち）つとめて（あくる朝也）、いとと（清少の）くつぼねにおりたれば、源中將（前の御遊に笙ふきし源の經房也）のこゑして、草のいほ（清少の）りやあるとおどろくしう（異名にして呼るゝ也）（驚かして也又おそろしげに也）とへば、などてかさ人（清少の詞）（さやうに也草菴の名をとがめて也）げなきものはあらん（草菴といふに對して也）、たまのうてなもとめたまはましかばいで（いざさらば也）聞えてまし（中宮の御所）といふ、あなうれし（源中の詞）、しもに（下の局に也）ありけるよ、うへまでたづねんとしつるものをとて、よべ（昨夜也よんべとよむ也）ありしやう、頭中將のとのゐ所（殿上の番所也）にて、すこし人々しきかぎり六位まで集りて、よろづの人のうへ（頭中將の詞）、むかしいまとかたりて、いひしつゐでに、なをこのもの（清少事）むげに（無下也一向の心）たえはてゝのちこそ（清少と中絶してはさび）、さすがにえあらね、

しくてゐられぬ也　清少のかたより
もしいひいづる事もやと、までどいさゝかなにとも
清少が　にくき也　清少の
おもひたらず、つれなきがいとねたきを、いまあしと
この返事はむづか
さまを
もよしとも、さだめきりて、やみなんむつかしとて
清少の前にいそぎみるべきに
しきぞと
みないひあはせたりし事を、たゞいまはみるまじと
使の
あらればとありし言尾也
て、入たまひぬとて、とのもりづかさがいひしかば、
その使を　清少の　口才也りくつをいはせ
またをひ返して、たゞ袖をとらへてこうざいをさせ
ず也　返事を　こなたの文を
ず、こひとり、もてこずは文をかへしとれとて、い
使なしかりて也
ましめてさばかりふる雨のさかりにやりたるにいと
やう也　返事を　かの青きうす
とくかへりきたり、これとてさし出たるが、ありつる
皆一度に
どつとかんじたる也
文なればかへしてけるかと、うちみるに、あはせてを
返事を
めけばあやしいかなる事ぞとて、みなよりてみるに、
ほめたる詞也　御中の清少との中はえなれじと也
いみじきぬす人かな、猶えこそすつまじけれと見さ
草の菴の上の句を
ばきて、これがもとつけてやらん、源中將つけよな
に　のちまで　上の句を
どいふ、夜ふくるまで、つけわづらひてなんやみに
清少へ
し、この事かならずかたりつたふべき事なりなん、
源中の詞也　人々よりて
さだめしといみじうかたはらいたきまでいひきかせ
て、御名をばいまは草のいほりとなんつけたるとて、

清少のひとりごとに也　末代
いそぎたちたまひぬれば、いとわろき名のすゑまで
清少の
あらんこそ、くちおしかるべけれといふほどに修理
のり光の詞也　上局にやおはしま
の介則光いみじきよろこび申になん、うへにやとて
さんとて清少を尋きしと也　なんぞ也
參たりつるといへばなぞつかさめしありともきこへ
ぬに何になりたまへるぞといへば　○司召八月十一
日内にて、公卿殿上人官をすゝむるをいふ、敍
隆説官召者秋除目也號㆓京官㆒春除目者號㆓縣召㆒各
拜任之輩召㆑之春者太政官廳秋者於㆓外記廳㆒而仰
㆑之仍稱㆓官召㆒八月也　公事根源に委し
先也乞の字也　はや
いでまことにうれしき事の、よべ侍りしを、こゝ
く清少にいたらはではと也　いくばかり也
ろもとなくおもひあかしてなん、かばかり、めいぼ
清少のため面目ある事也　前にこよひあしと
くある事なりきとて、はじめありける事ども、中將
のかたりつる、おなじ事どもいひて、たゞこの返事
もよしともさだめてやみなんといふ事也
にえたがひて、さるものありとだにおもはじと、頭
徒に也主殿司の返事もとらずに也
中將のたまひしに、たゞにきたりしは中々よかり、
返事を　則光の
き、もてきたりしたびはいかならんと、むねつぶれ
則光の　兄弟の字
て、まことにわろからむは、せうとのためもわろかる
大かたといふやうにもあらで也
べしとおもひしに、なのめにだにあらず　○則光清少

と中よき故人々たはぶれに兄妹と申さるゝ事を今
もいふ事也實の兄弟にあらず
殿の心也源氏又さ衣
そこらの人のほめかんじて、せうとこそこれきけと
などにもあり見聞きされよ也
のたまひしかば、した心には、いとうれしけれど、
得ぬといふ卑下の詞也
詩歌の道也
さやうのかたにはさらにえさぶらふまじき身になん
言加の字この句を付よとにあらずと也
侍ると申しかば、ことくはへきゝしれとにはあら
ず、たゞ人にかたれとてきかするぞとのたまひしな
則光詩歌に不心得なれば也
ん、すこしくちおしきせうとのおぼえに侍しかど。
草庵の句の上の句を　何とも作意が出ぬ也
これがもとつけこゝろみにいふべきやうなし、こと
人々
にまた、これが返しをやすべきなどいひあはせ、わ
返歌せぬにはかへりてなとるべければ也
ろき事いひては、中々ねたかるべしとて、夜中まで
なんおはせし、これは身のためにも、人のためにも、
さていみじきよろこびには侍らずや、つかさめしに、
一説少々の司也又修理介が少將の司うろ心もあり
少將のつかさえて侍らむは、なにともおもふまじく
なんといへば　〇職原云少將相當正五位下　五位殿上人
中爲ニ諸第公達一者任レ之叙ニ四位一時去レ職三位少將
者執柄息當被レ任レ之亦藏人頭時爲ニ少將一是古例也
亦辨官兼レ之公達之中有ニ才名一者專也

清少心さやうにたばかられんとはおもはざりしと也
げにあまたして、さる事あらんともしらで、ねたくも　にくやとい
ふ心也
ありけるかなと、これになんむねつぶれておぼゆ
則光が物語に　清少のきもけしたる也
清少　則光　中宮にも
る、このいもうとせうとゝいふ事をばうへまでみな
修理の介とはいはで也　兄也
しろしめし殿上にも、つかさ名をはいはでせうとゝ
清少と則光と　中宮の
ぞつけたる、ものがたりなどしてゐたるほどに、まづ
清少に參れと也　清少の
とめしたれば參たるに、この事おほせられんとなり
后宮の詞也一條の院もこの草菴の事仰られしと也
けり、うへのわたらせたまひて、かたりきこえさせ
たまひて、おのこどもみなあふぎにかきてもたるな
清少詞　なにかつきてかい
ど、おほせらるゝにこそ、あさましう、なにのいはせ
ろ下の句はいはせしぞと也　頭中のかほ
ける事にかとおぼえしか、さてのちにぞ袖ぎちや
ふたぎし袖の事也　中をなをり給ふ也
うなどとりのけておもひなをり給ふめりし
春にたちかへる年也　職御曹子前卷にくはし
かへるとしの二月二十五日に、宮のしきの御ざうし
に出させたまひし、御ともにまいらで、梅つぼにの
清少るすせらるゝ也　廿六日也
こりゐたりしまたの日　〇梅つぼ五舍の一なり凝花
舍といふ御殿の名也梅をうへられしゆへの名とぞ
禁秘抄云梅壺梅西白梅東紅梅之由在ニ清少納言記一
とあるもこのおくにみえたる事也定子のおはしま
す所也

頭中將のせうそこ（消息）とて、（文の詞也）きのふの夜くらまへまうでたりしに、○拾芥抄云鞍馬山城毘沙門天延暦十五年田村丸造（北山三里也）

（きのふの消息なればこゝのひと言也くらまより清少方へ方のふたがれ）こよひかたのふたがれば（ばこゝのごに外へ行と也）かたゝがへになんゆく、まだたけざらんに歸ぬべし（強ゝ也）、かならず（清少に）いふべき事あり、いたくたゝかせで（戸な）、まてとのたまへりしかど、（清少に）つぼねにひとりはあるぞ、こゝにねよとて、みくしげどのめしたれば參りぬ（清少）　○御匣殿（中關白道隆公四女一條院御匣殿也定子妹也）

禁秘抄云是非二女御更衣之儀一唯御所中沙汰也上古不レ絕有レ之内藏寮外御匣殿縫所也後冷泉御時頼宗公女候其後絕無二其人一愚大内裏の圖を考ふれば貞觀后町町の北九間四面

（清少）ひさしうねおきておりたれば（わが局へ）、よるいみじう人のた（内のもの、詞也）（戸）ゝかせたまふ、からうしておきて侍りしかば（やう〳〵して也）、うへ（頭中）にかたらば（の詞清少いたへたとづれば、いやう〳〵に申せと也）、かくなんと聞えさせ給ひしかども（内のもの申つがずに）、よもおきさせたまはじとてふし侍りにきとかたる（清少ニ）（頭中の使）、こゝろもとなの事やとて聞に（ことづて也）、とのもりづかさきて、頭の殿のきこえさせ給ふなり、たゞいままかづるを（禁中を退出する也）

（清少に）聞ゆべき事なんあるといへば、（清少の返答也）みるべき事ありて、つぼね（中宮の方也）うへになんのぼり侍る、そこにて（中宮の所に也）といひて、つぼね（あふしな）（さ所に入給はんと也）は引もやあけんと、こゝろときめき（おもひさはぐ心也）してわづらはしけれは、むめつぼのひがしおもてのはじとみあけて（前卷にくはし）、（こゝにて頭中にあはんと也）こゝにといへばめでたくぞあゆみ出たまへる（頭中の）、さくらのなをし（頭中の装束也）、いみじく〳〵はなぐ〳〵と、うらの（なをしのうら也）いろつや（光）などえもいはず、きよらなる（清き也）に、ゑびぞめの（前にくはし）、いとこきさしぬきに（さしぬきの上もん也）、ふぢの折えだ、こと〴〵しくおりみだ（織亂）りて、くれなゐの色、うちめ（いし目也）などかゞやくばかりぞ（打目見し也）みゆる、次第にしろきうす色など、あまたかさなり（いたあし）たるせばきゑんに、かたつかた（身のながらは也）はしもながら、すこし（おゐしいたあしにてゐざりよる躰也）（下のたとへ也）すのもとちかく、よりゐたまへるぞ、まことにゑに（歌行語也）かきものがたりのめでたき事にいひたる、これこそ（の繪ものがたりの人もいやうならんと也）（むかし）はとみえたる、御まへのむめはにしはしろく、ひがしは紅梅にて、すこしおちかたに（花のちり方也）なりたれば、なを（おもしろき也）おかしきに、うら〳〵と日のけしき（景氣也）のどかにて人に（この）みせまし、すのうち（簾中也）にましてわかやかなる女房など

うつくしく也
の、かみうるはしくながく、こぼれかゝりなど、そ
頭中に
ひゐたゝめるやうにて、ものゝいらへなどしたらむ
最　央過としのなか
は、いますこし見所ありぬべきに、いとさだすぎ、
そへがみ也
ば過たる也清少の我事也
ふるぐ\しき人のかみなども、われにはあらねばや、
ちゝむ心也　そへがみと我かみとの色也
所々わなゝきちりぼひておほかた色ことなる事な
薄鈍　きぬのいろあ
れば、あるかなきかなる、うすにびども、あはひも
ひ也　清少の躰也
見えぬうはぎぬどもなどあまたあれど、露のはへも
后宮の様つぼにゐたまはぬ也　往也常の衣裳にて也宴
みえぬに、おはしまさねばも、きずうちきすがたに
は宮仕人のきる也　頭中のうつくしきも我見ぐるしきに興さましたる也
てゐたるこそ、ものぞこなひにくちおしけれ、しき
る也　頭中の　清少に
のみざうしへなん参る、ことづけやある、いつかま　職
へ
いるなどのたまふ、さてよゝべあかしもはてゞ、さり
頭中の詞也
いたくたゝかせでまてとのたまひし事也
ともかねてさいひてしかばまつらんとて、月のいみ
かの方たがへ所なるべし
じうあかきに　西の京といふ所よりくるまゝに　○
西の京是平安城西の京也いまの大宮通より西をい
ふ也大宮通より西へ八町北南は二條より一條まで
是大内裏のあと也
清少の局を頭中の
つぼねをたゝきしほど、からうしてねをびれておき
清少の内のものゝ躰也

應答　似あはぬ心　頭中の
出たりし、けしきいらへのはしたなさなどかたりわ
清少局の留守居に　清少心　慍也うらみいきとをる心也　頭中を
らひ給ふ、げにこそおもひうむじにしか、などさる
ものをばをきたるなど、げにさぞありけんといと
頭中
おしくおかしくもあり、しばしありて出たまひぬ、
頭中のかたちのよきを　さこそ内にうつくしき人のあらんと人
ほかよりもみん人は、おかしう内にいかなる人のあ
の思ふべしと也　清少の
らんと思ひぬべし、おくのかたより見いだされたら
外に頭中のやうなうつくしきにおるましと
む、うしろこそ、とにさる人やとも、えおもふまじ
推思はんと也　后宮の職へ　集
けれ、くれぬれば参ぬ、おまへに人おほくつどひ、
古の草紙ものがたり也
ものがたりのよきあしき、にくき所をなどぞ、さだ
あらそひ也　仲忠
めいひしろひすこしなかたゞが事など　○仲忠中納
言俊蔭が孫也うつぼものがたりに中將宰相中納言
までになりし人也としかげが琴の曲をつたへられ
し人也
后宮　仲忠の
御前にもおとりまさりたる事おほせられける、まづ
事也　童の生立也　よくあ
これはいかにとことはれ仲忠がわらはおひの、あや
やしき也　深切に　清少詞
しさを、せちにおほせらるゝぞなどいへば、なにか
琴　何もみなはゐた
はきんなども天人おるばかりに引て、いとわかき人

（る也）也、みかどの御むすめやはえたる（たはぶれて也）といへば（　）うつぼ物語七に、とのも仲忠をころし給はゞやみ給はずばこそあらましかそれも琴一こゑかい引てきかせたてまつらましかばにくみもはて給はざらましありし時だにあやまたずなりにしものをいとよくさりぬべきおりもありしかばみかどの御むすめもたまはらずやはある　同十の巻に心（ヒキヤ）とゞめて琴つかうまつりしに仲忠の朝臣に一の内親王すゝしの朝臣にまさよりのもにあたる女たまふべきよし宣旨下ぬ

（あまり仲忠をほめしゆへ也）仲忠が、かた人と、こゝろえて、（頭中の事）されば（人々のあいさつ也）よなどいふに、この事よりはひるたゞのぶが（職の御ざうしへ）参りたりつるを、（清少が）見ましかば、いかにめでまどはましとこそおぼゆれと仰らるゝに、（女房たちの詞也）人々さてまことにつねよりもあらましうこそなどいふ、（清少詞）まづその事をこそけいせんと（中宮へ申上んと也）おもひて参侍りつるに、ものがたりの事にまぎれてとて、（頭中のきまかたち也）ありつる事をかたり聞えさすれば、たれも〳〵（職にて頭中を）見つれどいとかくぬひたるいと（糸）はり（針）め（目）までやは、見（ここ）とをしつるとてわらふ、にしの京（是も頭中のかたりし也）といふところの、あはれなりつる事　みる人あらましかばとなんおぼえつる、垣などもみなやぶれて、こけおひて（苔生）などかたりつれば、宰相のきみ（后宮の女房たち也）のかはら（瓦）の松はありやといらへ（頭中の宰相の詞なり）たりつるを、いみじうめでゝ、にしのかた都門を（んじて也）される事いくばくの地ぞと、くちずさびつる事な（こゝにこたへの事な人々の）ど、かしがましきまでいひしこそおかしかりしか（　）

白氏文集驪宮高々驪山上有レ宮朱楼紫殿三四重遅々兮春日玉甃暖兮温泉溢嫋々兮秋風山蟬鳴兮宮樹紅翠華不レ来歳月久牆有レ衣兮瓦有レ松吾君在レ位已五載何不二一幸一乎其中一西去二都門一幾多地下略

（清少の里亭也退出）さとにまかでたるに、殿上人などのくるもやすから（清少のうはさた也）ずぞ人々いひなすなる（清少心にしのびたるあやまりもなければ也）いたうあまり心にひき入たるおぼえはたなければ、（将也）さいはん人も（かの名立る人も也）にくからず、ま（るすなどつかはんと也）たよるもひるもくる人をば、なにかはなしなどもか（けやけくの心也）ゞやきかへさん、誠にむつましく（親しき人ならで也）などもあらぬも、さ（清少に懸相人も来ると也）こそはくめれ、あまりうるさく（人のたづぬるがいやなれば也）もあればこのたび出（清少の）

大ていの人に也　經
たる所をは、いづくともなべてには忘らせず、つね
房 濟政　この君ハ前ニ琴笛の役者ニテ淸少ニ心よせし人也
ふさなりまさのきみなどばかりぞ忘りたまへる、右
則光
衞門のぜうのりみつがきて、ものがたりなどするつ
則光の詞也　たゞのぶの事　淸少の里
ゐでに、きのふも宰相中將どのゝ參給ふて、いもう
亭を則光にとふ也　いかにかくすとも也
とのあり所、さりともしらぬやうあらじと、いみじ
則光
うとひ給ひしに、さらにしらぬよし申しに、あや
わりなく也　強てといひし也　知てあるをなしと
にくに、忘ゐたまひし事などいひて、ある事あらが
あらがふ也　殆の字　わらひ出しさ
ふはいとわびしうこそありけれ、ほど〳〵えみぬべ
う也と云心　こらへ〳〵て也　和布
かりしに、わびてだいばんのうへにあやしきめのあ
臺盤
りしに、たゞとりにとりて、くひまぎらはしゝかば、
中間也　和布チくふ折ならぬにといふ心也
ちうげんに、あやしのくひものやと人も見けむかし、
和布くふにて也　まぎらかして申さずと也
されと、かしこうそれにてなんそことは申さずなり
不用也
にし、わらひなましかば、ふようぞかし、まことに忘
たゞのぶ卿の眞實に則光がしらぬと思したる也
らぬなゞめりと、おぼしたりしもおかしうこそなどか
淸少の有所チ　彌也　淸少の
たれば、さらになきこえ給ひなどいとゞいひて日ご
ろひさしくなりぬ、夜いたくふけて、門おどろ〳〵
淸少心也　門と家と
しうたゝけば、なにのかくこゝろもとなく、とをか

瀧口の
の間也
らぬほどをたゝくらんときゝてとはすれば、たきぐ
官の事前ニ委し
ちなりけり、左衞門の文とてもてきたり、みなねた
讀經のたての日
るに火ちかくとりよせてみれば、あす御どきやうの
也
けちぐはんにて　○江次第云季御讀經春秋二季請二
百僧一於二南殿一讀二大般若經一其內定二御前僧廿口於
御殿一讀二仁王經一納言參議各一人着二南殿一行レ事自
余皆倣二御殿一貞觀御時每季行レ之元慶天皇踐祚之
後二季修レ之　公事根源にも委し
たゞのぶ也　讀經のためのけつさい也　淸少事
宰相中將の御ものいみにこもり給へるに、いもうと
かくさんすぢなし也
のあり所申せとせめらるゝに、すぢなし、さらにえか
そんじやうそこと也
くし申まじきなんそことやきかせたてまつるべき、
何と成とも淸少の御次第と也　のり光詞也　淸少
いかにおほせに忘たがはんとぞいひたる、返事もか
和布也　則光方へ也
ゝでめを一寸ばかり、かみにつゝみてやりつ、さて
則光淸少所へ來て也　頭中將に
のちにきて、一夜せめてとはれて、すゞろなる所に
中將チ則光のひきつれて淸少チ尋ぬるてい也則光のものがたり也
ゐてありきたてまつりし、まめやかに（眞實に）さいな
罪の字なぶる心也辛也ぬいはくの心也　淸少の返事はなくて也
むにいとからしさてともかくもなくて　そゞろなる
のり光の　淸少詞
めのはしをつゝみて給へりしかば、とりたがへたる
にやといふに、あやしのたがへものや、人のもとに、

さるものつゝみてをくるやうやある、いさゝかもこ
のり
光がゝてんせぬ事也
清少
ゝろへざりけるとみるがにくければ、ものもいはで
すゞりのあるかみのはしに
あまのすなどりする事也
かならずいふな
かづきするあまのすみかはそこなりとゆめいふなと
と目ぐはせしたる心也
のり光詞也
やめをくはせけん」とかきて出したれば、歌よませ
かの歌の書し紙チあ
たまひつるか、さらに見侍らじとて扇返してにげて
ふぎ返す也
いぬ　○こゝの事後拾遺集に入詞書にむつのかみ則
光藏人にて侍りける時いもせなどいひつけてかた
らひ侍りけるに里へ出たらんほどに人々たづねん
にありかなつげそといひて里にまかり出て下略こ
の草紙と同じき故はぶきぬ
かくたがひに也　後見也ひいきの心也
かうかたみにうしろみかたらひなどするなかに、何
のり光と
のり光
事ともなくて、すこし中あしくなりたるころ、文を
より
びんなくうらめしくおぼすとも也　よろしからぬ事あ
こせたり、びんなき事など侍るとも、猶ちぎり聞え
りともと心うべし
し事は、わすれたまはで、よそめにても、さぞとは
のり光を清少に
のり光が
見たまへとなんおもふといひたり、つねにいふ事は
歌をわれに給はるなと也
おのれをおぼさん人は、歌などよみてえさすまじき、
怨敵
すべてあたかたきとなん思ふべき、いまはかぎりあ

りて、中たえなんとおもはん時、さる事はいへなど
歌の事也
のり光が文の返事に也
いひしかばその返しに
則光と清少とは兄いもとのごとく人はいへどもくづれし中なればよ
くづれよるいもせの山の中なればさらによしのゝ河
しい、河ともいはれずと也一説は下にあり
とだにみじ　○本歌は古今にながれてはいもせの山
の中におつるよしのゝ河のよしやよの中　さてく
づれよるいもせの山とは二人の中をいもせ山にた
とへたりいもせ山とわかれよしの河を中にへだ
てたえ〴〵なるやうなれどもこなたの心にはその
へだつる河はありともさはおもひ侍らじとのこゝ
ろ也
清少
といひやりたりしも、まことに見ずやなりにけん、
則光うたぎらひなれば也
のりみつが　叙爵せし也　受領の名也　いよ〳〵遠々しきこ
返事もせずかうぶりえて、とをたあふみのすけなど
いろにとりてかくいひし也
いひしかばにくゝしてこそやみにしか　哉也　○風土記云
近江始書㆓淡海㆒自㆓帝都㆒近有㆓大江㆒故名㆓近江㆒遠
江始遠㆓淡海㆒是國有㆓大江㆒自㆓帝都㆒遙遠故名㆓遠
江㆒　○　職員令　上國守一人介一人掾一人目一人其職同㆓
大國官位令㆒介従六位上
●ものゝあはれしらせがほなるもの

なき〳〵ものいふ也　眉　抜　是
はなたるまもなく、かみてものいふ聲、まゆぬく　さ
より后宮の清少ナまつはすもの　清少の
てその左衛門の陣にいきてのち、里に出てゐばしあ
后宮よりの文のはしに也
るに、とく參れなどおほせごとのはしに、左衛門の
前ニありし事也考べし
陣へいきし朝ぼらけなん、つねにおぼし出らるゝ、い
さやうに也　禁中チ　清少の里す
かでさ、つれなくうちふりてありしならん、いみじく
みはさこそおもしろからむとざれたる文言也
めでたからんとこそ思ひたりしかなど、おほせられ
清少の　畏の字かたじけなくおそれ有心也內證には也
たる御返事に、かしこまりのよし申て、わたくしに
かの朝ぼらけの事
は、いかでかめでたしと思ひ侍らざらむ、御前にもさ
うたひものなどの詞にや
りとも、中なるをとめとはおぼしめしけんと思ひ給
その文使又立歸也后宮の御詞也そ
へしと。聞えさせたれば、たちかへり、いみじく思ふ
れほどいみじくおもはゞ也　中絶はたが面目ぞそなたの面目ぞと也
べかめる也　たがおもてぶせなる事をいかでかけは
なに、懸てはいふぞと也　清少に
したるぞ、たゞこよひのうちに、よろづの事はすて
ゝまいれ、さらずば、いみじうにくませたまはんとな
ん、おほせ事あるとあれば、よろしからむにてだに
おそろし　いみじうにくませの詞　文の文字也　命の大事も捨
ゆゝし、まして、いみじくとあるもじには、いのちも
てまいらんと也
さながらすてゝなんとて參りにき
ゐきのみざうしにおはしますころ、にしのひさしに、

季の御どきやうの外に也　佛縮など也
ふだんの御讀經あるに、ほとけなど、かけ奉り、法
いふもことさらめでたしと也清少參ての
しどものゐたるこそさらなる事なれ、二日ばかりあ
二日　西のひさしの緣也　乞食也
りて、ゑんのもとに、あやしきもの〻こゑにて、猶そ
ブツ　佛のあがり物也　また佛にもそなへぬ
の御佛供のおろし侍るなどいへば、いかでまだきに
にと也　等也　清少何もの、何たらいふらんと也
はといらふるを。なにのいふにかあらんと。たちい
老　びくに也
でゝみればおいたる女のほうしの、いみじくすゝけ
常の平袴也　竹の筒のやうにみじかきもの也　衣
たるかりばかまのつゝとかやのやうに、ほそくみじ
かきを、おびの衣も五寸ばかりなるころもとかやい
牒　かの乞
ふべからん、おなじやうにすゝけたるをきて、さる
寅の坪也
のさまにていふなりけり　〇前漢項籍傳　說者曰人
ボクコウニシテ
言ニ楚人沐猴而冠ニ果然梁武帝歌曰沐猴而冠帶智小
而强謀也これらの事をおもひ合すべし
清少の詞也　尼が詞也
あれは何事いふぞといへば、こゑひきつくろひて、
ほとけの御弟子にさふらへば　〇佛四部弟子は比丘
比丘尼優婆塞優婆夷
この御房たちのおろし給ふといふ、はなやかにみや
き也　かやうのあまは也　その聲の　やさし
びかなり、かゝるもの、うちくんじたるこそあはれ
屈也うんじたる心也
その聲の　清少の詞也
なれ、うたてもはなやかなるかなとて、こともの

くはで佛の御おろしをのみくふがいとたうとき事か
なといふけしきをみて、(あまの詞)などかことものもたべざら
む、それがさふらはねばこそとり申侍れといへば、(よのくふものがなければこそ也佛のそなへを也)
(菓)くだもの(廣)ひろき(餅)もちゐなどを、(せんべいなど也)(うつはものに也)ものにとりいれてとあ
らせたるに、(まに)(いやしきもの丶くせになつきたる也)むげになかよくなりてよろづの事をか
たり、わかき人々いできて、おとこやある、いづこに
かすむなど、くち〳〵にとふに、(尼)(あまがものまれ口まれなどする也)おかしき事そへこと
などすれば、(女房たちの詞)うたはうたふやまひなどすかととひも
はてぬに、(あまがうたふ也)よるはたれとかねん(常陸介)ひたちのすけとねん、
ねたるはだもよし、(この歌の末いひのこしたる也是も)これがすゑ、いとおほかり、また
(あまの歌也)おとこ山の峰のもみぢ葉さぞ名はたつと〳〵とかし
らを(ふりまはす也)(掉)まろかしふる、いみじくにくければ、わらひにく
みて、(行け〳〵と追出す也)いね〳〵といふもいとおかしこれになにとら(あまに)
せんといふをきかせ給ひて、(后宮の)いみじうなどかくかた(おか)
(しき也)はらいたき事はせさせつる、えこそきかでみゝをふ(あまりおかしさに也)
たぎてありつれ、そのきぬひとつとらせて(疾)とくやり(遣)
てよと(いなせよと也)おほせ事あれば、(あまがきぬを)とりてかれたまはするぞ、

きぬす丶けたり、しろくてきよとてなげとらせたれ(よろこびて也)
ば、(あま)ふしおがみて(かのきぬを)かたにぞうちかけてまふものか、(なれたる也)
まことににくみてみな人に(女房だち)し、のちにはならひたる(しろぼひて也)
にやあらん、つねにみえしらがひてありく、やがてひ(あ)
(まが異名也)たちのすけとつけたり、きぬもしろめずおなじす丶(前ニ)
けにてあれば、(傳ある)(后宮のとらせしきぬの事也)いづちやりにけんなどにくむに、うこ
んのないし參たるに、(内へ)(女房たちの物語)か丶るものなんかたらひつけ
てをきたんめる、(かやう〳〵にて也)かうしてつねにくる事とありしや(そのありさま也)
うなど、(小の字も)故兵衛といふ人して、(志かたを)しゐねばせてきかせた
まへば、(右近が詞也何とてみんと也)あれいかで見侍らん　○作者部類　兵衛内
侍也后宮の方の若き女房也奥に五節の時あかひも
のとけしもこの人也　後撰の一新千載の一にもあ
り　系圖未考
かならずみせさせ給へ、(得意也ちいんの心)(清少へ内侍の詞)御とくいなゝなり、さらによ
(その方のちいんはとるまじと也)もかたらひとらじなどわらふ、その丶ちまたあまな(よのあま也)
るかたはの、(きれいなる心也)いとあてやかなるが出きたるを、また
よび出てものなどとふに、(ひたちがはなやかなると)これははづかしげにおも

ひて(ちかひたる也)あはれなれば、きぬ(后宮より)ひとつたまはせたるを、ふしおがま(禮拝したるさまの事)んはされどよし、さてうちなき(よろこびのなみだ也)よろこびて出ぬるを、はやこのひたちのすけいきあひてみてけり、そのゝち(ひたちのすけりんき心にて也)いとひさしくみえねどたれかはおもひ出ん、さて玄はすの十よ日のほどに、雪いとたかうふりたるを女房どもなどして、ものゝふたに入つゝいとおほくをくを、(山のやうにして也)おなじくは庭にまことの山をつくらせ侍らんとて、さふらひ(北面の侍也)めして、仰(后宮)ごとにてといへばあつまりてつくるに(雪山を) ○雪山の舊例 御記云應和二年閏十二月廿日令二右衞門志飛鳥部(サクワン)常則推レ雪作二蓬萊山於女房小庭一今日切手賜二常則及畫所雜色役者三人一○小右記花山院後涼殿の南の壺に雪山つくらせ作文あり寛和元年正月十日の事也 ○禁秘抄年内雪蒙レ催所衆瀧口參春雪沓ニ鼻隱必可レ參大内藤壺弘徽殿里内(ダイリ)依レ便藏人下知修理職儲二屋具一雪不レ足時被レ召二諸勅願寺一執行奉レ之瀧口相具來レ可レ及レ取殿舍上抛レ雪所衆作二雪山一瀧口於二棟板上一雪ヲ所衆作レ山瀧口上臈三人所衆上臈三人立レ庭奉行持二柄振一藏人頭候二簀子一奉行多直衣藏人候二便宜一傳レ事修理職作レ屋如レ是事上古不レ見自二中古一之事也事始大略一條院御時以後也淸少納言記在二其子細一初雪見參近代絶了初雪日仰二藏人一令二見參一藏人束帶或宿直召二朝餉一仰レ之内侍傳仰藏人進二見參一給レ祿内藏寮絹大藏省布也○女房藏人以上絹一疋主殿掃部女官(トモリノモリ)下各二段(信乃布四端) 御厨子所得選各一疋刀自(ミカワヤウドヲサメ)各三段是外御則人長女内竪(バイシユ)主殿官人史生安生(ウラ)占部(ベ)今良(ゴンリヤウ)諸陣府生番長舍人依レ差給レ之とのもりづかさの人(下人とも也)にて、御きよめ(庭の)に參たるなどもみなよりていと高くつくりなす ○延喜式主殿寮式云毎日早朝頭率レ僚下掃二除御前及宮掖一○とのも(拾遺)りのとものみやつこ(伴氏 御奴)心あらばこの春ばかりあさぎよめすな

宮づかさなど參あつまりて、ことくは(外の雪を加へて也)へことにつくれば所の衆三四(サウヨ)人參たる、とのもりづかさの人も廿人ばかりに成にけり ○禁秘抄藏人所衆貢(カズ)廿人也六位侍可レ然之輩補レ之里(下にチリテゐる人也)なるさふらひめしにつかはしなどす、けふこの山つくる人には、ろく(祿也)たまはすべし、雪山に參らざら

ん人には、おなじかずに（宮もすゝめず同官にしてなくべしと也）とゞめよなどいへば、きゝつけたるはまどひ（惑ふたく〳〵として也）參るもあり、里とをきはえつげやらず、つくり（雪山）はてつれば宮づかさめして　○皇后宮職の大夫亮大進小進などを宮づかさといふ也祿物の下知などする役也
きぬふたゆひとらせて、縁になげいづるをひとつづゝとりによりて、おがみつゝ、こしにさして（卷ものなれば腰にさす也）みなまかンでぬ（退出）、うへのきぬきたるは、さてかりぎぬにてぞあ（それには侍衣つかはされしと也）る、これいつまでありなんと、人々のたまはするに（雪山の事也）、十餘日はありなん、たゞこのごろのほど（十日のあとさきを申也）をあるかぎり申せば、いかにとゝはせ給へば（清少に后宮の）、む月の十五日（モチ）までさふらひなんと申を、お前（后宮の）にもえさはあらじとおぼすめり、女房などは、すべてとしのうちつごもりまでもあらじと申に（十二月十餘日より正月十五日まで卅日ばかり也）、あまり遠くも申てけるかな、げにえしもさは（雪山）あらざらん、ついたちなどぞ申べかりける（清少の心）と、したにはおもへど、さはれ（さもあれ也）さまでなくとも、いひそめてん事はとて、かた（堅）うあらがひつ、二十日のほどに雨などふれど、きゆべくもなし、たけぞすこし（雨に雪の山の高さ）へる也

をとりもてゆく、しら山の觀音、これきやさせ給ふなと、いのる（念願也）もものぐるをし　○宇佐緣起云第十四代元正天皇養老年中越前國與二加賀國一有二高岩一名二白山一有二寶池一滿レ水不レ常處也中略觀音說法之山也○神社考白山妙理權現者觀音之垂跡自在吉祥之化現也小白山大行事者妙理菩薩之輔而觀音之化也大己貴者妙理菩薩之弼而西刹教主阿彌陀也號二之白山三所權現一云々○神名帳云加賀國石川郡白山比咩神社云々
さてその山つくりたる日、式部の丞忠隆（第一卷ニアリ）御使にて（御使申上て也）（雪見廻の勅使也）參たれば、しとね（茵しきもの也）さし出してものなどいふに（忠たかの詞）、けふ雪の山つくらせ給はぬ所なんなき、おまへ（天子の）のつぼにもつくらせ給へり、春宮にも　○令義解曰東宮謂二太子所居一也　左傳云東爲レ春萬物生長在レ東西爲レ秋萬物成就在レ西以レ是君在二西宮一太子在二東宮一○爰の東宮は三條院也冷泉院第二の王子也御母贈皇后宮超子（テウシ）と申太政大臣兼家の第一の女子也このみかど貞觀元年正月三日に生る寛和二年七月十日東宮にたゝせ給ふおなじ日元服御年十一寬弘八年六月即

位御年卅六大かゞみに委し

弘徽殿にもつくらせ給へり　○榮花物語の系圖云義子一條院弘徽殿女御閑院太政大臣公季公女○藤氏譜云實成親賢信覺如源などの妹也萬壽三年十二月十八日出家天喜元年閏七月崩

京極どのにもつくらせ給へりなどいへば　○大かゞみに太政大臣爲光のおとゞこれ九條どのゝ御九郎ぎみ大臣の位にて七年法住寺のおとゞぞ聞えさす正暦三年六月十六日にうせ給ひき御諱恒德公と申き　愚考是東極の元祖也○拾芥抄京極殿は土御門南京極西南北二町被レ入ニ道長家ニ○愚考今出河通長者町中立賣までのよし東西はいまの柳の馬場より富の小路まで道長の屋敷也

清少の歌（后宮にのみとおもひしにあまた所にふりしよと也）こゝにのみめづらしとみる雪の山ところ〴〵にふりにけるかな」（直ニ申さず人して也）とかたはらなる人していはすれば、た（忠たか歌チかんじて也）び〴〵かたぶきて、返しはえつかうまつりけがさじ、（詞の内にたはぶれて也）あざれたり、みすのまへにて、人々にかたり侍らむとてたちにき、（忠隆）歌はいみじくこのむときゝしに、あ（ふし）（んなと也　后宮也）やし御前に聞しめして、いみじくよくとぞ思ひつら

（清少歌をよく〳〵めでつらんと也よき歌に返しせぬならひあれば也）むとぞのたまはする、（十二月の）つごもりがたに、すこしちい（雪山）さくなるやうなれど、なをいとたかくてあるに、ひるつかたゑんに人々出ゐなどしたるに、ひたちのす（かの乞食也）けいできたり、（女房だちの詞）などいと久しく見えざりつるといへ（ひたちが詞なにをのたまふと也）ばなにか、いとこゝろうき事の侍りしかはといふに、なに事ぞととふに、猶かくおもひ侍りしなりとて、ながやかによみいづ　うらやましあしもひかれず（蘆足かれたる也）わたつうみのいかなるあまにものたまふらむ」（海士尼かれて也藻をかくしたる也きぬもらひし事也）となん思ひ侍りしといふを、にくみわらひて、まめも見いれ（まむきの目にはみぬ也）ず、（ひたちの介かのあま）雪の山にのぼりかゝづらひありきて、（かゝりありく也）いぬるのちにうこんのないしに（内侍）（前に見たきといはれし也）かくなんといひやりたれば、などかは人そへて、こゝにはたまはせざりし、（右近がもとへ也）かれ（かの）（あま手にちあしくて也）がはしたなくて、雪の山までかゝりつたひけんこそいとかなしけれとあるをまたわらふ、（女房たち）雪山はつれなくてとしもかへりぬ、朔日のよるまた雪おほくふりたるを、うれしくもふりつみたるなど思ふに、（はじめの雪）（后宮の詞あまりあいそうなしと也）あいなしはじめのをばをきて、いまのをばかきすて

山をためして也
よとおほせらる　○勘物云長德元年正月一日乙卯雪
降
后宮にて也　清少の　早天に也　齋院の使　長の字か
上にてつぼねへいととうおるれば、さふらひのおさ
しらの心也　青色の直衣の事也
なるもの、ゆの葉のごとくなるとのゐぎぬの袖のう
卯づちつゝみしもの也　袖の上に　さむげなるさま
へに、あをきかみの松につけたるををきて、わなゝき
也　それはたれよりの進物ぞと也
出たり、そはいつこのぞとゝへば、齋院よりといふに、
清心　清少
ふとめでたくおぼえとりて參りぬ　○規子內親王選
子內親王など圓融院の御妹その比の齋院也又簾中
抄には選子內親王圓融院の時の齋院に立給ふしか
しながら圓融院よりいま一條院までの間齋院に立
給ふは選子（センシ）也
后宮の御寢なりし也　母屋　御格
まだおほとのでもりたればもやにあたりたる、みか
子　碁盤　さいかく也　清少ひとりはいかゞしてあ
うしをごばんなどかきよせて、ひとり念じてあぐる
げんと也　そばなれは也　后宮の
いとおもし、かたつかたなれば、ひしめくにおどろか
何とてさやうにするぞと也　清少詞
せ給ひて、などさはするとのたまはすれば齋院より
がうしを
御文の候はんには、いかでかいそぎあけ侍らざらむ
后宮の詞さうかとて也
と申に、かゝりけるかとて、おきさせ給へる、御文あ

前卷にゐるす
けさせたまへれば、五寸ばかりなる卯づちふたつを、
卯づちの　三草ながら前にゐるす
卯杖のさまにかしらつゝみなどして、やまたちばな
麥門冬
ひかげやますげなど、うつくしげなるにかざりて、
文言はなかりし也　これ計にてはあらじと也
御ふみはなし、たゞなるやうあらんやはとて御らん
すれば、うづちのかしらつゝみたるちいさきかみに、
卯づちきる所の緣によめり山のこたまたふくおもへは君がよはひの
やまどよむをのゝひきをたづぬればよはひの杖の音
杖きる音ぞと也
にぞありける
后宮の　この御音づれをはじめ
御返しかゝせ給ふほどもいとめでたし、齋院よりは
にてこののち申通じ給ふ也　后宮の返しもかきなをし給ふなるべし
これより聞えさせ給ふ、御かへしもなほこゝろこと
齋院の
にかきけがし、おほく御用意見えたる、御使にしろ
白き一重に蘇芳の色をかされてとらせ
きおりものゝひとへ、すはうなるは梅なめりかし、
たるは梅の花のやうにみえしと也雁頭の二字
雪のふりしきたるにかづきて參るもおかしうみゆ、
后宮の御返しは聞もらしたるとの心也
このたびの御返事をしらずなりにしこそくちおしか
前に白山の觀音是きやさせ給ふなといひし首尾也
消氣
りしか、雪の山はまことにこしのにやあらむとみえ
雪のすゝけて也　越路也
正月十五日
て、きえげもなしくろくなりてみるかひもなきさま
清少心
はえたれど、かちぬるこゝちして。いかでもちまちつ
正月七日
けさせんとねんずれど、七日をだにえすぐさじと猶

（女房たち）いへばいかでこれ見はてんとみな人思ふほどに、にはかに三日うちへいらせ給ふべし、（后宮の入内也）（清少心）いみじくくちおしくこの山のはてをしらずなりなん事と、まめやか（眞實に也）におもふほどに、人もげにゆかしかりつるものをな（女房たちもおなじくさ思ふ也）どいふ、御まへにも（后宮）おほせらる、御ものはこび（中宮入内の道具也）いみじうさはがしきにあはせて（とりまぜて也）、こもり（木守前の乞食也）といふもの、つゐぢのと（外也）にひさしさして（庇をさして也）ゐたるを、ゑんのもとちかくよびよせて、この雪の山いみじくまもりて、わらはべなどにふみちらさせこぼたせで、十五日（もち）までさふらはせ、よく／＼まもりて（この雪山を）、その日（十五日に）にあたらば、めでたくろくたまはせんとす（后宮よりの祿也）、わたくしにも（清少自分にも也）、いみじくよろこびいはんなどかたらひて、つねにだいはん所（臺盤也）の人げすなどにこひて、くる〱くだもの（菓）やなにやと（なにやかや也）いとおほくとらせたればうちゑみて（こもりが）、いとやすき事たしかにまもり侍らむ（清少詞）、わらはべなどぞ、のぼり侍らんといへば、それをせいし（制也）きかせざらむものは（このわがいぶチ細をいへと也）事のよしを申せなどいひきかせて、いらせたまひぬ（后宮の入内也）

れば、七日までさふらひて出ぬ（清少も中宮のともして七日に里へさがりぬ）、そのほどもこれがうしろめたき（心もとなき也影護の二字）まゝに、おほやけ人（禁中の奉公人）すましおさめなどして、たえずいましめにやり（こもりを）（遣）〇すましの事前に委し、日本紀專領二字讀二太宇乃乎佐女（タウノヲサメ）一八雲抄に、專下女也、細流にいやしき女也とあり

七日の御せく（節供）のおろし（たへおろし也）などをやりたれば、おがみつ（こもりが）る事などかへりてはわらひあへり、さとにてもまづ（すましおさめなど）あくる（夜明）、すなはち（るとそのまゝ也）これを大事にしてみせにやる、十日（正月）のほどには五六尺ばかりありといへば、うれしく思ふに、十三日の夜、雨いみじくふれば、これにぞきえぬらむといみじうくちおし。いま一日も二日もまちつけてと、よるもおきゐてなげゝば、きく人ものぐるをしとわらふ、人のおきてゆくに（十四日の朝）、やがて（清少）おきゐて（起居）、げにおこさするに（みせにやる下女を）、さらにおきねば、にく（やう／＼しに也）みはらだゝれて（腹立にあふて也）おき出たるを、やりてみすれば（雪山を）、わらうだばかりになりて侍る（下女歸ていふ詞）〇いせ物がたりにさる瀧のかみにわらうだのおほきさしてとあり圓座の事也　孫楯云圓草褥（シトネ）也

乞食
こもりいとかしこうわらはべもよせて、まもりてあすあさてまでもさふらひぬべし、祿（やくそくのろく也）給はらむと申といへば、いみじく（清少）うれしく、いつしかあすにならばいととう（早々也）歌よみで、ものにいれて參らせんとおもふも、いとこゝろもとなう、わびしう、まだくらき（句　十五日の朝也）におほきなるおりひつ（うづとよむべし）などもたせて、これにしろからむ所ひたものいれてもてこ（もて來れ也）　○折櫃　木をまげたる常の折也桐つぼの卷に見えたり
きたなげならむ（よごれし雪はすてよ也）はかきすてゝなどいひくゝめて（下女に）やりたれば、いととくもたせてやりつるもの、ひきさげ（入もの雪は入ずに引さげて也）て、はやううせ侍りにけり（下女の詞）といふに、いとあさましうおかしうよみいで（清少心）ゝ、人にもかたりつたへさせんと、うめきずんじ（吟誦の二字）つる歌も、いとあさましくかひなく、いかにしつるらん（清少の不審也）、きのふまで、さばかり（いかばかり也）ありけんものを、よのほどにきえぬらん事といひくんず（屈也氣が屈す）れば、こもりが申つるは、きのふいとくろうなるまで（る也　雪をとりに行し下女の答也）侍りき、祿をたまはらずなりぬる事と手をうちて申（あきれたる心也）

侍りつるといひさはぐに、うちより（后宮より）御でとありて、さて雪はけふまでありつやとのたまはせたれば、いとねたくくちおしければ（清少心也）、としのうちついたちまでだにあらじと、人々けいし（啓）給ひしに、きのふのゆふ（十四日也）ぐれまで侍りしを、いとかしこしとなんおもひ給ふ（清少まけずに也）る、けふ（十五日）まではあまりの事になん、夜のほどに、人のにくがりて、とりすてたるもやとなん、をしはかり侍れと、けいせさせ給へと聞えさせつ（清少の后宮への御返事を御取つぎの女房たちへ申也）、さて二十日に參たるにも（后宮のかたへ清少の）、まづこの事を御前にてもいふ、みなきえつとて（十五日の朝）、ふたの限り（入もの也）ひきさげてもてきたりつる、ぼうしのやうにて（帽子也ものゝふたをいたゞきしさま也）、すなはちまうできたりつるが、あさましかりし事。ものゝふたに、こ山うつくしうつくりて（しとかたる也）、しろきかみに歌いみじくかきて參らせんとせし事（かの雪に歌そへて參らせんと思ひ）などけいすれば、いみじくわらはせた（中宮の）まふ、御前なる人々もわらふに、かうこゝろにいれ（中宮のあかし給ふ心也）ておもひける事を。たがへたればつみうらん（罪にやならむと御おぼし給ふ也）、まことには、四日（十四日也）の夕さりさふらひども（北面の侍也）やりて、とりす

てさせしぞ、返事（清少の）にいひあてたりしこそ（人のにくみてとりすてしにやと清少いひし事）いとおかし
かりしか、その翁（かのこもり事）いできていみじう手をすりていひ（雪とりすてつるによりて）
けれぱ（迷惑がる心也）、おほせごと（中宮の）とぞ、かのよりきたらん人（清少事也）によし
きかすな、さらばやうちこぼた（雪山の屋也　覆）せんといひて　○雪
山の屋禁秘抄に有この事を清少につげたらばこの
筑地に廂かけたる家をこぼたせんぞと也
右近のつかさの、南のつゐぢのとに、みなとりすて（雪た）
ゝ、いとたかくおほくなんありつといふ也しかば、
げに二十日までまちつけでうせずは、ことしのはつ（清少）
雪にもふりそひなまし。うへ（天子にも）もきこしめして、いと
おもひよりがたくあらがひたりと（いひし事を）、殿上人などにも
仰られけり、さてもその歌かたれ（清少に）、いまはかくいひ
あらはしつれば（とりすてしぞと）、おなじとかちたり（勝たる同前也）、かたれなど御前（ヲマヘ）
にもおほせられ（后宮也）、人々ものたまへど、なにせんに（清少詞）、
さばかりの事を承はりながら、けいし侍らむなどま
めやかにこゝろうがれば、うへ（天子也）もわたらせ給ひて、
まことにとしごろは（勅言）、おほくの人なゝめりとみつる（清少たゞ人なみにおもひしに）
を、これにぞあやしくおもひしなど（と也このたびの事に也　奇妙也）おほせらるゝ

に、いとつらくうちもなきぬべき心地ぞする（清少心）、いであ（清少詞）
はれいみじきよの中ぞかし、のちにふりつみたりし（正月一日の雪の事也）
うれしとおもひしを、それはあいなしとてかきすて（あまりのことぞとて也）
よなどおほせごと（后宮の）侍りしかと申せば、げにかたせじ（勅言）
とおぼしけるならむと、うへ（天子にも）もわらはせおはします

●めでたきもの　（ほめたる心愛したる心などあり）

からにしき（天子の御しとねとばり帳にも用ひ殊に神の御戸代にもかくるものなればめでたきもの也）　○錦金也其功用重價如レ金故制レ字從レ帛
與レ金也錦織紋也出ニ於蜀ニ者爲レ上是說文の心也

かざりだち　○西宮記曰餝劔（ダチハ）東宮及參議已上節會時
着レ之　東山左府御說云餝太刀節會及御禊（ケイ）行幸供
奉公卿臨時祭使等着（ハク）レ之

つくりぼとけのもく（栴檀沉香なとの木像の木目也）、色あひよく、はなぶさ（英）ながく
さきたる、ふぢの松にかゝりたる、六位の藏人こそ猶
めでたけれ、いみじき公達なれどもえしもきたまは
ぬあやおりものを、こゝろにまかせてきたる、青色す
がたなどいとめでたき也　○職原曰六位藏人又聽（ユルサル）ニ
禁色ニ至ニ極臈ニ者着ニ麴塵袍ニ是申ニ上御服ニ之義也
第二卷にしるす

所の衆雜色たゞの人の子どもなどにて　○藏人所

在ニ校書殿一雜色侍之官也勤ニ御使等一也○禁秘抄員數八人代々皆轉ニ藏人一公卿子孫可レ然諸太夫多補レ之

藏人にならぬ間はこれらの官位の人の下座に居て物の數とも見えざりしも藏人になればめでたしと也
殿ばらの四位五位六位もつかさあるがしもにうちゐて、なにともみえざりしも、藏人になりぬれば、えも
あまりにめでたきといはんとて也
いはずぞあさましくめでたきや、宣旨などもて參り

○口宣宣旨法式

五位諸太夫給ニ口宣一

上卿　三條大納言

慶長四年八月十六日　宣旨

藤原　某

宜レ任ニ攝津守一

藏人頭右大辨藤原俊賢　奉

考云　藏人頭奉レ勅以ニ此書付一遣ニ上卿一是曰ニ口宣一上卿以ニ其口宣一収ニ吾家一爲レ留是曰ニ口宣案一故其上書口宣案近代位記法斷絶從五位下宣旨又其文法同ニ國司口宣一但除下宜レ任ニ攝津守一五字上書レ宜レ叙ニ從五位下一者也諸國掾目等口宣亦同亦云武家五位諸大夫成之時不レ給ニ外記宣旨一自ニ五位侍從一以上給ニ外記宣旨一又云頃與レ廢以立ニ位記式一給ニ諸大夫以上位記ニ文法如レ右　○內宣旨とて藏人奉勅の宣旨を六位藏人の持參也天子の勅を藏人頭承てその旨を直に宣下するを內宣旨といふ也

上ノ二字
大饗のあまぐりのつかひなどに參たるを、もてなし（藏人の）（饗應）
きやうようし給ふさまは、いづこなりしあまくだり
いづくよりぞとの心也六位藏人の事也天人のやうに思ふと也
人ならんとこそおぼゆれ　○大臣の大饗に蘇甘栗の使とてあるに六位藏人參る事なり大臣の大饗とは大臣に任せられたる人大納言以下官の外記まで饗應ある事也○江次第に云大臣家大饗正月四日左大臣大饗五日右大臣大饗藤氏一大臣用ニ朱器臺盤一以ニ其日一可レ行由以ニ職事一達ニ天聽一是非ニ式日一時依レ可レ遣ニ蘇甘栗使並纒綵樂部等事一歟

西宮記給ニ蘇甘栗一事以ニ六位藏人一爲レ使延喜二一年五位藏人衆樹爲レ使向ニ左大臣家一蘇四壺大二ツ小二ツ甘栗子十六籠上八ツ中八ツ已上盛ニ甲折櫃ニ一合居ニ高坏一入外居ニ一荷一使藏人青色率ニ小舍人一人一召所駕下擔レ之向ニ大臣家一云々下略位々に色々の故實略レ之

攝政家大臣家の事也
御むすめの女御后におはします　○女御周禮天官ニ女御者御妻也掌レ叙ニ御王之燕寢一云々註女御者八十一

御妻也御猶（チモトヒト）進也侍也　愚考女御（へ）位貴女御代其次也
女御者必作ニ女御殿ニ置レ之故以ニ女御代ニ爲ニ是替ニ
近代皆女御代也今仙洞御母後陽成院ノ女御代也後
任ニ准后ニ也近衞大臣女也今上皇帝御母雖レ非ニ大臣
ノ女ニ尊稱ニ女御代ニ也
入内なきほど也
まだひめぎみなどきこゆるに、御ふみの御使にて、　女御后まだ姫君の方へ取入る也　茵
藏人が
參たれば、御ふみとりいるゝよりうちはじめ、しと　しとねもてくる女のさま也　おとろく心也
ねさしいづる袖口など。あけくれみしものともおぼ　裾の尻也藏人がこゝい也　衞府藏人に
えず、したがさねのしり、ひきちらして、ゑふなる
て衞門兵衞など兼たる也
は、いますこしおかしうみゆ、御てづからさかづきな　使の心にも也　女御后又攝政の姫などの手づから
也
とさし給へば、わがこゝろにも、いかにおぼゆらん、　かたじけなき也　攝政の御家禮の公達をいふ也
いみじうかしこまり、べちにゐし家のこ、公達をも　家
心やすきてい也大かたのゐんぎん也
けしきばかりこそ、よういしかしこまりたれ、おな　天子の藏人なつかはせ
禮なれば隔心なきよし也
じやうに、うちつれありくよ、うへのちかくつかは
給ふ也
せ給ふさまなどみるは、ねたくさへこそおぼゆれ、　藏人ならぬ人の心也
天子の
御文かゝせたまへば、御すゞりのすみすり、御うち　藏人が　暑氣の比
藏人御うちは給りてあふぐ也
はなど參たまへば、われつかうまつるに、みとせよ　六位藏人に
て侍るほど也
とせばかりのほどを、ものゝいろよろしうて、まじ　大かたなる心也六位藏人に

てある程は衣裝などきらゝかしくてまじらへかしと也六位藏人巡爵
ろはんは、いふかひなきものなり、かうふりえて、
とて五位に叙して藏人サさりて地下におるゝ事也　地下に成ては御
おりむことちかくならんだに、いのちよりはまさり
前へ參る事もなくなれば也
て、おしかるべき事を、臨時の御給はりなど申て、　りくじの除目など也
まどひけるこそいとくちおしけれ、むかしの藏人は　藏人おりん事をなげ
く也
ことしのはるよりこそなきたちけれ、いまの世には、
官職をかろ／＼しくおもひて競望する儀也　才智
はしりくらべをなんする、はかせのざえあるは、め
でたしといふもおろかなり　○職原抄ニ大學寮博士
一人掌ニ教授經業ニ課ニ試學生ニ助敎二人掌同ニ博士學
士ニ四百人掌レ分ニ受經業ニ
逍遙院殿云紀傳の儒とて菅家江家藤氏の儒者の
任ずる官也翰林學士とて文道におゐて尊崇の官也
當時は菅氏また日野一流儒業を兼たる人任レ之最
貴褫の官也非ニ儒家ニ人は不レ任官也
官位ひきゝ事也　才智ある故に人にた
かほもいとにくげに下らうなれども、世にやんごと
つとまるゝ也
なきものにおもはれ、かしこきおまへにちかづき參　天子東宮などをさして也
學文の事
り、さるべき事などとはせ給ふ、御文の師にて　○禁
秘抄寛平小式巳時召ニ侍讀ニ次御膳也云々御學問
殊沙汰之時更不レ可レ及ニ時刻ニ也侍讀候ニ朝餉中間

縁ニ主上卷ニ御簾有ニ誦習ー
願文（祈禱追善書也）も、さるべきものゝ序などつくり出してほめらるゝもいとめでたし、
法師のざえある、すべていふべきにあらず、持經者のひとりしてよむよりも、あまたが中にて（才ある法師は也）、時など（日中日沒な）さだまりたる（とに經よむ事也）、御どきやうなどぞなをいとめでたき也くらうなりて（日くれ又ともしびなどくらうて也）いづら御どきやうあぶらをそし（さしあぶら也）などいひて、よみやみたるほど、しのびやかにつゞけゐたるぞ、后のひるの行けい（中宮の御ありきの事也）、御うぶ屋（中宮御產の事也）、宮はじめのさほう（作法）　○立后の作法禁中のごとくこまいぬ大床子をしつらふ事也こゝは定子の皇后宮にたち給ふはじめの事か又の說皇子の內へいらせ給ふ儀也御誕生は里にてあり忌あきて坊にいらせ給ふ也○又の說宮はじめ卅一日めに宮參といふとおなじ宮へは參らず座敷にてかざる也常のものゝ宮參を禁中にて宮はじめといふ
しゝこまいぬ、大しやうじなどもて參りて、御帳の前にしつらひすへ（こしらへ也）　○元日の節即位などに隼人（ハヤト）獅子狛犬（コマイヌ）の後（ウシロ）にていぬの聲をあげて君を守り侍る事延喜式にみゆ故にしゝこまたつるも守護の心也大床子禁中に大床子所とてありつくゑ（ツクヱ）をふたつたてゝ御膳すゆるもの也常に參る供御也
內膳御へついわたし奉りなどしたる（竈御膳御飯のため也）　○內膳司正一人相當正六位上唐名尚食奉御○職原令內膳司奉膳二人掌ニ下惣ニ知御膳ー進食先嘗ー事上　王子のましますところのくり屋也いまの御產所の用意也
ひめ宮などきこえし、たゞ人とこそつゆみえさせ給はね（いかにも嚴重にみゆると也）　○又の說に宮はじめの御かた姫宮にてましませばかろ〴〵しき人は憚てつゆみえぬと也
一ゞ人のありき（步行）　○職原抄ニ執柄必蒙ニ一座之宣旨ー故稱ニ一人ー是今の五攝（家）政也
春日まうで　○大かゞみに春日の行幸はさきの一條の院の御時よりはじまれるぞかしそれに代々おさなくおはしませどもかならずあるべき事にてはじめたる例になりたれば大宮御こしにそひ申させ給ひておはします
ゑびぞめ（葡萄染なるにつけて也）のおりもの、すべてむらさきなるは、なにも〳〵めでたくこそあれ（紫よしと也）、花もいとも紙も、紫の花

の中には、かきつばたぞすこしにくき（花のかたち）、色はめでたし、六位のとのゐ（宿直）すがたのおかしきにも、むらさき（禁色ゆるされたる六位蔵人也）のゆへなゝめり、ひろき庭に、ゆきのふりしきたる、今上一の宮まだわらはにておはしますが、御叔父に上達部などのわかやかに、きよげなるに、いだかれさせ給ひて　〇一條院の第一の皇子敦康（アツヤス）親王の御事にや御母は后宮定子なれば御叔父に内大臣伊周中納言隆家卿上達部也

殿上人などめしつかひ、御馬（今上一の宮の馬也）ひかせて御覧じあそばせたまへる、おもふ事おはせじとおぼゆる（榮にほこやかにしてこの上のたのしみなくみえさせ給ふさま清少目前めでたる體也）

枕草紙旁註卷六

●なまめかしきもの（最媚の二字）（ゆうびなる心也）

ほそやかにきよげなる公達（攝家清花の子息也）の、なをしすがたおかしげなるわらはは女の、うへ（表）のはかまなど（汗衫右にくはし）、わざとにはあらで、ほころび（綻）がちなるかざみばかりきてくすだま（藥玉前にくはし）などながくつけて、高欄のもとにあふぎさしかくし（かほかくして也）てゐたる、わかき人（女房也）のおかしげなる、夏の几帳のしたうち（かたびらのすそ也）かけて、しろきあや（女のきたるもの也）ふたあゐひきかさねて、手ならひしたる、うすやう（うすやうに書し草紙也）のさうし、むらご（村濃）のいとしておかしくとぢたる、柳（柳に）のもえたるに青きうすやう（柳とおなじ色也）にかきたる文つけたる、ひげこ（鬚籠）（ひげこを彩色したる也）のおかしうそめたる五葉の枝につけたる、三重がさねの扇、いつえはあまり（扇の）あつくて、もとなどにくげなり　〇檜扇の兩方の上三まいづゝをさくらうすやうにてつゝみ色々の糸にてとぢするゑをあはびむすびに結てたれたる也

よくしたるひはりご(檜破子)、白きくみのほそきあたらしく(三打四うちの糸也)もなくて、いたくふりてもなきひわだ屋(檜皮屋)にさうぶうるはしく(麗)ふき(葺)わたしたる、青やかなるみすの下より、朽木がたのあざやかに(鮮)、ひも(紐)いと(最)つやゝか(光)にてかゝりたるひものふきなびか(靡)されたるもいとおかし ○禁秘抄曰四面有ニ几帳ノ帷一夏ハ生絹(スヽシ)以ニ胡粉(ゴフン)ヲ一書蘆雀冬ハ朽木形也(木瓜有にくはし)

夏のもかうのあざやかなる、すのこのかうらんのわ(らんの事)たりに、いとおかしげなるねこの、あかきくびつな(猫の引綱也)に白きふだ(ねこの名札也)つきて、いかりの緒くひつきてひきあり(何ニテモチモ〳〵付テ體ニスル也)くもなまめいたり 五月のせちのあやめの藏人(是ニハ下薬玉の親也)(菖蒲ナドナル藏人也)、さうぶのかづらのあかひもの色にはあらぬを、ひれ(領巾)くたい(裙帯)などして(立)、くすだまをみこ(親王)かんだちめ(上達部)などのたち(並)なみ給へるに、奉るもいみじうなまめかし(羅殿介より献する薬玉を公達に給ハル時藏人とり渡す也)とりてこしにひきつけて(薬玉を)。ぶたう(舞踏)し、はいし(拜よろこぶ禮也)給ふもいとおかし ○赤紐(テイヱ)は五節などの時紗をたゝみてあふひなすびをして泥繪など書て、右の肩に二筋つくる事あり菖蒲のかづらはそのあか紐の色ならで青きをいふ也

火とりのわらはは(五節の舞姫參とき火とりなどもつわらは女也) ○江次第十云舞姫等次第參入先童女一人持ニ火取一次童女一人持レ茵

小忌(ヲミ)の君だちもいとなまめかし(舞人のさま也) ○花鳥十一月中夘日新嘗會辰日豐明節會出あゐにて摺れる小忌といふものを着する也この事也

六位のかを色のとのゐ(直宿)すがた(姿)(六位藏人前に注ス) 臨時の祭の舞人(マユウド)(賀茂八幡の臨時也)五節のわらは(舞姫也)なまめかし ○公事根源五節 丑の日ある時上の丑の日を用ゐ或は下の丑用也善相公異見曰五節舞妓者大嘗會の時五人皆預ニ叙位一其後年々新嘗會時四人又曰擇ニ良家子未レ嫁者置爲ニ五節妓一

宮(后宮定子より也)の五節出させ給ふにかしづき(かいしやくの人也)十二人 ○常は公卿受領より出す事なれども又かやうの方よりも取もち給ふにや江次第十五節の所童女(ドウニヨ)傅(カシヅキ)といふ是也

こと所(攝家清花などの所へは也)にはみやす。所の人出すをば、わろき事にぞす(臣下の方へ女院のや)るときくに(す所などの舞姫出し給ふことよからぬ事也) ○御息所御子うみ給ひて後いづれも御息御所といふ也爰にては中宮定子也

いかにおぼすにか(女院何とかおぼして也)、宮(中宮定子の方より)の女房を十人出させ給ふ、い

淑景舍　女院の舞姫としげいさ
まふたりは、女院しげいしやの人やがてはらから成
の舞姫とは兄弟ぞと也　定子の伯母也
けり　○女院　東三條院詮子也一條院の母后　法興
院攝政兼家公の御女　女院は是中宮の隱居也天子
の母也
桐つぼ也
淑景舍　三條の院の女御中關白道隆公御女母ハ高
内侍定子ノ妹也清少納言も後は此御方に候ずるよ
し榮花物語に見ゆ
小忌ノ事也
辰の日の青摺のからきぬ、かざみを着せたまへり
宮の出し給ふ舞姫の裝束のさま也
花鳥餘情云　舞妓の裝束　丑の日は赤色の唐衣寅
の日は青色ノ唐衣辰日ハ青摺唐衣赤紐日蔭かづら等
なり
女房にだにかねてさしもしらせず、殿上人にはまし
舞妓などかしづきまはる體也
ていみじうかくして、みなさうぞくしたちて、くら
かくししのふさま也　着する也　赤紐
うなりたるほどにもてきてきす、あかひもいみじう
樣子したる也　堅
むすびさげて、いみしうやうしたるしろききぬにか
かの小忌な
た木のかた、繪にかきたるをりもの、、からきぬの
うへにきたるは　○一禪宗祇へ御傳受の大嘗會の説
に　小忌といふは神事の衣服也白布を張て山藍と

いふ草にて櫟木を摺れるものなり大かた狩衣ので
とし
舞妓也
まことにめづらしき中に、わらはヽいますこしな
傅の字也　舞姫につきて行く也
まめきたり、下づかへまでつヾきたちてゐたる上達
かくして給へば
部殿上人、をどりき興じて、をみの女房とつけたり、
その日着璽の　外　舞姫のかり
小忌の公達はとにゐて、ものいひなどす、五節のつ
にゐたるつぼね也　舞果ぬればふたいもかりやもこぼつ也
ぼねを日もくれぬほどにみなこぼちすかしていとあ
舞妓どもを　異樣　辰の日の儀式果て夜ルまで
やしくてあらするいとことやうなりその夜まではな
はかりやもあらせたしと也　さのみざし
をうるはしくこそあらめと、のたまはせて、さもまど
きの體もいへず木丁のものみ窓也　まくなとにもあるものなり
はさず、几帳どものほころびゆひこぼれ出たり、小
五節の日の舞人也
兵衞といふがあかひものとけたるを、これをむすば
ヽやといへば　○小兵衞　是后宮の女房也前常陸介
が事を右近の内侍にまねばせし人也かしづき十八
の内にやイニ少辨ともあり
けさうの心あるなるべし
實方の中將よりてつくろふにたヾならず　○勘物云
實方正暦二年九月右中將元右馬頭五年九月八日左
中將長德元年正月十三日陸奥守其夜昇殿九月十七
日申ニ赴レ任由ニ居ニ御前ニ叙ニ正四位下ニ

あし引のやまゐの水はこほれるをいかなるひものとくるらん　○拾遺集雜五實方の歌也心は山の井の水の人の手ふれぬごとくこの小兵衛もそこゐふかくあるべきにいかなる人の手ふれしにやかくひものとくるととがめし心也是則人のけさうずる事あればひものとくるといふ本文をふくみてよめる歌なるべし

といひかく、（小兵衛か事也返歌なきを謂る詞也）としわかき人のさるけせうの（あらはなる所たればといふ心也）程なれば、いひにくきにやあらん返しもせず、（歌の返しを）（顯證也）そのかたはらなるおとな人だちも、（返歌を）うちすてつゝ、ともかくもいはぬ（返歌）を、（東宮の）宮づかさなどは、みゝとゞめて聞けるに、（せぬ間）ひさしくなりにける、かたはらいたさに、（笑止さに也）ことかたより（よの所より也）いりて、女房のもとによりて、（小兵衛なるべし又清少か）などかうはおはするなどぞさゝめくなるに、（さゝやく也）（淑景舍四人をへだゝる也是より清少心也）四人ばかりをへだてゝゐたれば、（返歌た）（聞へだゝれば也）よく思ひえたらむにもいひにくし、ましで歌よむとしりたらん人の、（大かたの返歌はなりかた）（實方事）おぼろけならざらむは、いかてかとつゝましき事はわろけれ、（しと也）（よくよむものは也）よむ人は、さやはある、（さはあるまじと也）（歌よまられども也）（つよく清少をはちしめたれ）いとめでたからねどねたふこそはいへと、つまはじきをしてありくもいとおかしければ（なにとて返歌せぬぞと也）（清少返し）

「うすごほりあはにむすべるひもなれば、かざす日かげもゆるぶばかりを　○彼實方の山の井は氷るにいかでとくるぞととがめしをうけて淡にむすべる氷なれば日影にゆるびとくるぞと理りたる也ひかげといふはさがりごけといふもの也是は清淨なるによりて神事にもちゆる草也

と辨のおもとゝいふにつたへさすれば、（后宮の女房也）（小兵衛が）聞入つゝえもいひやらず、などか〳〵と、みゝをかたふけてとふ（その）に、（歌た）すこしことどもりする人の、（辨の吃の字）（聲を）（どもりなれば）いみじうつくろひめでたしときかせむと思ひければ、えもいひつゞけずなりぬるこそ中々はぢかくすこゝちしてよかりし（そろりといひたるがはぢたるやうにて時の首尾よかりしと也）か、おりのぼるをくりなどに（この舞の時に）なやましといひ入ぬる（惱）（煩などゝ）人をも、のたまはせしかば、（后宮の御に）あるかぎりむれたちて、（大勢也群立）ことにも似ず、（こと所にも似ず也）（あまりにめでたく過ぐもうさるしと也）あまりこそうるさげなゝめれ、まひびめは、すけまさのむまのかみのむすめ、○菅原氏譜ニアリ公卿補任菅輔正右中辨淳茂孫勘解由長官在躬朝臣男母從五位上常陸助菅景行女正曆三年正月十五日叙從三位時朱雀院御遺賞式部太夫如元寛

弘六年十二月廿四日薨八十五
そめどの丶式部卿の宮の、うへの御おとうとの、四のきみの御はら、十二にていとおかしげなり　○紹運錄ニ村上天皇ノ子爲平親王爲ニ染殿式部卿宮一
はての夜も、（辰の日）をひかづき（追かさなりゆく體也）いくもさはかず、やがて仁壽殿（ジウデン）よりとをりて、清涼殿のまへのすのこ（ゑんの事）より、舞びめをさきにて、うへの御つぼねへ參しほど、おかしかりき、（此一節も次の段も五節の時ならず只なまめかしきものたいふ也）ほそだちのひらをつけて、きよげなるおのこのもてわたるも、いとなまめかし　○東山左府說云蒔繪細劔（ダチ）常所用レ之無紋丸鞆帶必用レ之白地平緒小忌之外不レ用レ之○或記に紫淡平緒節會行幸の時用レ之飾劔（カザリダチ）螺鈿を着する時は大路紫淡を用又若年の人は常用レ之紺地平緒は尋常の時用レ之叙位除目執筆などの時は紺地然べし此外色々略レ之
紫のかみ（紫紙の文也）をつ丶みてふんじて（封じて也）、ふさながき藤につけたるもいとおかし、內裏は五節のほどこそ、（又是より五節の事也）すゞろにただならで見る人もおかしうおぼゆれ、とのもづかさなどの、色々のさいく（細工）を、ものいみのやうにて（物忌つけたるに也）、さいしき（彩色）つけたるなどもめづらしくみゆ、清涼殿のそりはし（輪橋）に、もとゆひ（髻）のむらご（村濃）、いとけざやか（氣爽）にて、出ゐたるもさま〴〵につけておかしうのみぞある、うへ（上）のざうじ（雜事）のわらは（童）べども、いみじき色ふし（五節の色あや見事に思ふもことはりと也）とおもひたるも、いとことはりなり　○江次第殿上四角各ト二五節所一殿垣下四角各設ニ假切懸一自ニ清涼殿東廂北階下一到ニ承香殿坤（ヒツジサル）角一假作ニ長橋一云々○紹巴の云もとゆひは紫のそめもの也　又女をもいふと也
こ丶は五節のまひ姫（ヒメ）にや
やまあゐ（山藍にて摺れるもの日蔭の糸など五節の用意に柳は筥に入ありく也）ひかげなどやないばこにいれて、かうぶりしたるおのこ、もてありくいとおかしうみゆ　○柳筥は硯短冊（タンザクマリ）鞠冠又追善の時經卷等すゆる臺也柳にてつくる也上のけたの木三角にして重半の儀あり三光院殿の說に吉事には半にし追善などの凶事には重を用る也又すゆるものを竪にすへ横にすゆる故實ある也
殿上人（五節の時大みきたべたのしむ體也）のなをしぬぎたれ（脫垂）て、扇やなにやと、拍子（ひやうし）とりて（とりて也）にしてつかさまされどしきなみぞたつといふ歌（うたひもの也未考）をうたひて、局どもの前わたるほどは、いみじくそひたち（五節になれしたがふ人也）たらむ人の、こ丶ろもさはぎぬべしかし、まして一度

あまたの聲なれば也　搖
に笑ひなどしたるいとおそろし、行事の藏人のかひ
練　萬の物より　清　茜也
ねりがさね、ものよりことにきよらにみゆ、しとね
女中より藏人のためにしとはしく也　藏人か　藏人が評判也
などしきたれど中々えものぼりえず女房の出たる
褒　貶　五節のものがたり計也　中ノ丑ノ日チ
さまほめそしり、このころはこと事はなかめり、帳臺
五節の帳臺試ト云　亂入ナいましむ　五節のいしうき也
の夜行事の藏人、いときびしうもてなして、かいつ
火取の童前の童計也　殿上人など
くろひ、二人わらはよりほかは入まじとをにへて、お
のたぐひ也
もにくきまでいへば、殿上人など猶これひとりばか
つらにくきまで也　藏人が詞一人入れば他の恨ありと也　押凝いた
りはなどの給ふ、うらやみありて、いかでかなどかた
后宮の
くいふに、宮の御かたの女房二十人ばかりおしこり
まりて也　えとゝめぬ也
てこと〳〵しういひたる、藏人なにともせず、戸を
わめき〳〵入也　藏人が　最是は也
おしあけてさゝめきいれば、あきれて、いとこは、す
二十人計の女房に
ちなき世かなとて、たてるもおかし、それにつきてぞ、
付て下々も入也　藏人が心也
かしづきども、みないるけしきいとねたげなり、う
主上一條院
へもおはしまして、いとおかしと御らんじおはしま
すらん　○江家次第云天平十五年五月癸卯宴㆓群臣
於內裏㆒皇太子親舞五節中丑日張臺試寅日御前試
同童女御覽當寧殿西塗籠內帳臺上敷㆓長莚㆒其日可
㆑敷㆓舞姬座㆒其前各立㆓白木灯臺一本㆒舞殿戸下立㆓
床子㆒脚㆒東帳臺坤角引㆑幔爲㆓小歌座㆒北廂塗籠內
爲㆓大師宿所㆒大歌候㆓同殿東假屋
藏事頭行事藏人立㆓殿東戸下㆒開闔用㆓床子㆒舞間
禁㆓闌入㆒理髮童女陪從下仕之外不㆑可㆑入頭若藏人
之外不㆑能㆑伺㆓戸外㆒舞姬等次第參入經㆓馬道㆒入㆓
舞殿戸㆒
卯の日五節童御覽の夜の事にや
わらはまひの夜はいとおかし、灯だいにむかひたる
上らうらしき也
かほどもの、いとらうたげにおかしかりき
是より樂器の上になまめかしき事也　主上ノ
むみやうといふ琵琶の御ことを、うへのもてわたら
弄
せ給へるを、見なとして、かきならしなどすといへは
中上ルニ　后宮　無名を
ひくにはあらず、緒を手まさぐりにして、これが名よ
かくしたる返答也
いかにとかやなどきこえさするに、たゞいとはかな
く名もなしとのたまはせたるは、なをいとめでたく
こそおぼえしか　○無名　拾芥云上東門院名物也或
スミ
說㆓蟬丸琵琶㆒上東門院令㆑坐㆓淸時之亭㆒之時爲㆓回
シヌ
祿㆒燒失畢
后宮の御いもと也　后宮の方へ
しけいさなどわたりたまひて、御ものがたりのつゐ

でに、（しげいさの詞也）まろがもとにいとおかしげなる、さうのふえ（笙）
こそあれ、ことのゝ（故殿中の關白殿也）えさせ給へりとのたまふを、僧都
のきみの、それは隆圓にたうべ（我にたべよと也）　○勘物云隆圓隆家
兄弟也正暦四年權少僧都十五不レ經二律師一寛弘八
年四月權大僧都長和四年二月卒卅七○色葉集第二
隆圓大僧都ハ中關白御息母ハ馬内侍○或記に少年の
人の僧綱の初は六十二代一條院御宇正暦五年十一
月隆圓十五歳にして眞任の僧都となる是は左大臣
藤原道綱第六の子也とあり
（隆圓のもとに也）をのれがもとにめでたききん（琴）侍り、それにかへさせ（よのことをまきらはして也）
給へと申給ふを、（しげいさの）聞もいれ給はで（しげいさレ返答を是非きかんと也）なをことゝをの
たまふに、いらへさせたてまつらむとあまたゝび聞
（隆圓の）え給ふに、なをものの給はねば、（しげいさの詞心なき體也）宮の御前のいなかへ
じと思ひたるものをと、のたまはせけるがいみじう
おかしきことぞかぎりなき、○江談云不替（イナカヘジ）是笙名也
唐人賣レ之千石買伊奈加倍之云介禮波（イナガヘジトケレバ）以レ之爲レ名
この笛の名を、（いなかへじを）僧都のきみも、えしり給はざりけれ
ば、（隆圓の）たゞうらめしとぞ思したゞめる、これはしきの御

ざうしにおはしましゝ時の事也、（禁中の事）うへの御前にいな
かへじといふ、御ふえのさふらふ也、御前にさふら
ふものどもは、みなことふえも、めづらしき名つき
てこそあれ、琵琶は、けんしやう（玄上）ぼくば（牧馬）井手いけうむ（滑橋）
みやう（無名）など　○玄上禁秘抄云玄上累代寶物也置二中
殿御厨子一根源様人不レ知レ之掃部ノ頭貞敏渡唐之
時所レ渡琵琶二面其一也○或云玄象呑二青鉢之水一
所謂號二玄象一又玄上宰相獻二延喜帝一號二玄上一兩說
也但妙音院入道付二玄上說一乎○師時記曰玄上繪様
於二馬上一打レ毬者指二毬於腰一形也○牧馬　拾芥云牧
馬與レ玄上一雙名物也○故事談曰信義（時雅三位息）信明（博雅三位息）
兩人不レ知二勝劣一初信義彈二玄上一信明彈二牧
馬一更無二甲乙一信明彈二玄上一信義彈二牧馬一其聲雲
泥故時人皆云信明超二信義一玄上勝二牧馬一○井手江
談云井手ト云琵琶ハ高名者也延喜孫十五宮子二愛宮
申人琵琶ヲ傳レ今在二宇治寶藏一拾芥同○いけう江談云
滑橋一爲堯又高名琵琶也三條式部卿寶物也
また和琴なども、くちめ（朽目）しほかま（鹽竈）ふたぬき（二貫）などぞ聞
ゆ、すいろう（水龍）こすゐろう、うだ（宇多）の法し、くぎうち（釘打）はふ（齒二）

たつ、なにくれとおほく聞えしかどわすれにけり

○和琴　あつまごとゝなづくむかし神代には弓六張をくらべてひきけるを後に琴につくりて六弦をかけて彈ずる也日本樂器のかしら也 宮商角徴羽(キウシヤウカクチヨウ)に文武の緒といふものをそへたる也鎭座本記にもあり○朽目　拾芥曰朽目或朽部入ニ蒐褐袋一(和琴也)○鹽竈　拾芥曰承平四年九月五日入ニ目錄一(和琴也)○二貫　拾芥入勘物和琴也○水龍　江談云横笛者大水龍小水龍天暦御時寶物(拾芥同)○宇多法師　江談曰寛平法皇御和琴拾芥寛平法皇貴重ノ餘有ニ是名ニ或說以レ檜作レ之一條院御時内裏燒亡時燒亡○釘打　拾芥笛部○はふたつ　江談云葉二者高名横笛也號ニ朱雀門鬼笛一是也淨藏上人吹レ笛深更朱雀門鬼大聲感レ之自レ爾是笛給ニ件聖人一其後次第傳レ之在ニ入道殿後一一條院之御在位之時以ニ藏人某一召ニ此笛一藏人不レ知ニ笛名一只はふたつ參らせ給へと申に入道殿何事も可レ承に歯二こそえかくまじけれもしこの葉二の笛かとて令レ進給ふと云々

(言種)(この人のうよき樂器をほむる詞なるべし)

宜陽殿の一のたなにといふことくさは頭中將こそしたひ給ふ(口すさびといふ心也)たまひしか ○西宮抄云納殿累代御物在ニ宜陽殿一恒例御物納ニ藏人所一○源氏若菜の上にこの御琴は宜陽殿のものにて代々に第一の名ありし御琴云々細流に宜陽殿昔は樂器書籍(シヨジヤク)等ををかるゝ所也

(是より又別の事也)

うへの御つぼねのみすのまへにて、殿上人日ひとひ琴笛ふき、あそびくらして、まかで(退出)わかるゝほど、またかうし(格子をおろさぬ也)をまいらぬに、おほとなぶら(みじかき灯だい也)をさし出たればとの(外也よりみえたる也)あきたるがあらはなればびはの御ことをたゞ(徒也)さまにもたせ給へり、(后宮の琵琶引ておはせしも火影あらはなれば引やみてたゞもたせ給ふ也)くれなゐの御ぞ(后宮の御裝束也)のいふもよのつねなる(句)うちき(袿)、またはり(張)たるもあまた奉りて(着し給ふ也)、いとくろくつや(光)ゝかなる御琵琶に、御ぞの袖をうち掛てとらへさせ給へるめでたきに、そば(側)より御ひたゐのほど、しろくけざやか(あざやか也)にて、わづか(ほのかに也)にみえさせ給へるは、たとふべき方ぞなくめてたきや、ちかく(中宮のそば)ゐたまへる人に(淸少の)さしよりて、なかばかくしたりけんも、(かくのごとくはあるまじと也)えかうはあらざりけんかし ○琵琶行云千呼萬喚(倡家の女のさま也)始出來猶抱ニ琵琶一半遮レ面(倡家の女なれば也)あれはたゞ人にこそありけめといふをきゝて、(かの女房琵琶)こゝ

行なき〻しらさる也
ちもなきを、わりなくわけまいりてけいすれば、わ　中宮たちの中た　中宮へ
らはせ給ひて、われはしりたりやとなん、おほせら
清少へいひつたふるが也
る〻とつたふるもおかし
是より別の事也
御めのとのたゆふの、けふひうがへくだるに給はす　日向　中宮よりは
なむけに也
る扇どものなかに、かたつかたには、日いとはなや
かにさしいで〻、たび人のある所　○御めのとの大
輔は中宮の御兄弟周タカ家のつま也系圖前ニアリ
井手の中將のたち舘也などいふさまいとおかしうかきて
扇の
いまかたつかたには、京のかた雨のいみじうふりた
るを、ながめたる人などかきたるに　○右中將從四位
好親號ニ井手少將一系圖右ニ委シ
扇の雨めんの心をよみし也はれてもくもりてもわすれ給ふなと也
あかねさす日にむかひてもおもひいでよ、宮古はは
后宮の歌也
れぬながめすらむと　○詞花集に入　あかねさすと
は日出るにあかき光のさす也、日にむかひてに日
向をよみながめに長雨をそへたり
歌のやうにもなく文詞のやうに也
こと葉に、御手づからか〻せ給ひし、あはれなりき
さやうの君を也　このめのとの日向へゆくをあやしみとが
さるきみを置奉りて、とをくこそえいくまじけれ
めたる詞也
◎ねたきものにくむ心也

人のもとにこれよりやるも、人のいひたる返しも、　文
文字歌のてにはなとなるへし
かきてやりつる後に、もじひとつふたつなどは、おも
頓の字也急に也
ひなをしたる、とみのものぬふにぬひはてつとおも
引拔　もとより疾の字也
ひてはりをひきぬきたれば、はやうしりをむすばざ
りけり、またかへさまにぬひたるもいとねたし
是よりかへさまにぬひしものがたり也
みなみのゐんにおはしますころ　○拾芥云南院六條
北烏丸西小一條院御領又云四條北壬生西是コレ忠親王
家　愚考こ〻は中關白道隆公の家ときこゆ　道隆公
西のたいに殿のおはしますかたに、宮もおはしませ　中宮定子
寢殿　るすの女房たち也
ばしんでんにあつまりゐてさう〴〵しければ、ふれ　さびしければ也
なたあそぶ事也　廊下也　あなたこ
あそびをし　わたどのにあつまりゐなどしてあるに、
○禁秘抄渡殿二行各二疊敷ニ黄端ヘリニ公卿在ニ殿上ニ之
日不レ論ニ花族諸卿非色ニ又着レ之不レ然時不レ着レ之
北副ニ高欄ニ立ニ布障子ニ
南院より　頓のもの
是たゞいまとみのもの也、たれ〴〵もあつまりて、　手縫
不替
時かはさすぬひて參らせよとてひらぬきの御ぞを　衣片
挑の字あらそふ心也
給はせたれば、みなみおもてにあつまりゐて、御ぞか
身
たみづ〻たれかとくぬひいづるといどみつ〻、ちか

くもむか（違々とゐる時也）はずぬふさまもいとものぐるをし、命ぶのめのと　○中老の女房なるべし未レ考男ヲ曰レ命夫女曰ニ夫婦ニ命者有命爵ノ義也

いととく（最疾）ぬひはてゝうちをきつる、ゆだけ（弓長　在のかた也）のかたの（結目）御身をぬひつるがそむきざま（背）なるを見つけず、とぢめもしあへずまどひをきて（はやくさし置し也）たちぬるが、御せあはせんとすれば、はやう（もとより）たがひにけり　○あめがしたは（古歌）ぐくむ神のみぞなればゆたげにぞたつ神のひろまへ　○藏玉にゆたげは弓長也、弓長は七尺餘也みつのひろまへはぬはぬ衣也仙人の衣はぬはぬものの也

わらひのゝしりて（女房立より合て也）、これぬひなをせといふを、たれ（命婦のめのと陳じていへる詞也）があしうぬひたりとしりてかなをさむ、あやなどな（綾はもんありうらおもて見やすきもの也）らばこそうらを見ざらむ、ぬひたがへの人の、げになをさめ、むもんの御ぞなり（天子中宮后親王のは無紋也）、なにをしるしにてかなをす人たれかあらん、たゞまだぬひ給はざらん人になをさせよとて、聞もいれねば（ぬひなをせといふを）さいひてあらむやとて、源少納言、新中納言などいふ人の、ものうげにぬひ給ひしを、かほ見やりてゐたりしこそ（清少の見やる也）おかしかりしか、これはよさりのぼらせ給はんとて（今夕参内あるべきその御料のぬひものと也）、とくぬひたらむ人を、おもふとしらむとおほせられしか、

みすまじき人に（是より又ねたきもの也）、ほかへやりたるふみ、とりたがへてもてゆきたるに（使の）、ねたしげにあやまちげりとはいはで（使か）、くちがたうあらがひたる、人めをだにおもはずは、はしりもうちつべし（走り出てたゝきたしと也）、おもしろきはぎすゝき（萩　薄）などをうへてみるほどに、ながびつ（長櫃）もたる（持）もの、すき（鋤）などひきさげてたゞほりにほりて（むさとほる事也）いぬるこそわびしうねたかりけれ（妬）、よろしき人などのある折は（制すべきものゝある折はさやうにもせぬと也）、さもせぬものを、いみじうせいすれど（清少などが）、たゞすこしなどいひていぬる、いふかひなくねたし、○長明無名抄にため仲にんはてゝのぼりける時宮城のゝはぎをほりて長びつ十二合にいれてもちてのぼりければ人あまねくきゝて京へ入ける日は二條大路にこれを見ものにして人おほくあつまりて車などもあまたたてたりけるとぞ

ずりやう（受領國司の事也）などのきて、なめげに（無禮也）ものいひ、さりとて（受領とても我）

（たばたれと思ふぞと也）我をばいかゞおもひたるけはひ（形勢也）にいひ出たるいとねたげなり、みすまじき人の（人の）文をひきとりて庭（叢）におり（句）て見たて（立）るいとわびしうねたく、をひてゆけど、す（すのもとに立とまりえ追ゆかぬさま也）のもと（の下也）にとまりてみるこそ、とびもいでぬべきこゝち（させる事なきを也）すれ（身動してのく體也）すゞろなる事、はらだちて、おなじ所にもね（とらへしたふ體也）ずみじくりいづるを（女の同心せぬ體也）、しのびてひきよすれど、わりな（男もそれほどならば）くこゝろことなればあまりになりて、人もさばよかっ（よしよとの詞也怨じうらみて也よろのものなどかつきて也）なりとえじて、かいくらみてふしぬるのち、いとさむ（心よからぬ）きおりなどに、たゞひとへぎぬばかりにて、あやにく（事也）（下々など也）がりて、おほかたみな人もねたるに、さすがにおきゐ（起居るも）（いなものにて也 句）らんあやしくて（女の方よりこらへかねて）、夜のふくるまゝに、ねたくおきてぞ（外）（也 れんとの詞也）いぬべかりけるなッどおもひふしたるに、おくにもと（しんしとしたる也）にも、ものうちなりなどして、おそろしければ、や（そろ）（りと也）をら（韓）よろびよりて（おとこの）、きぬひきあくるに、そらねしたる（男の心詞也）（おとこの）こそいとねたけれ、なをこそこそはがりたまはめなッど（れたき心をふくみたる也）うちいひたるよ（風情なき事をいふ也）

◎かたはらいたきもの

まらうと（客人）などにあひてものいふに、おくのかたにうちとけたるなど、人のいふをせいせで（制しもせず也）、きくこゝち、おもふ人のいたくゑひて（酒）おなじ事（くりこと也）したる、きゝゐたるをもしらで（評判也）、人のうへ（人の上の）いひたる（下々にても心あしきと也）、それはいかばかりならん、つかひ人なれどかたはらいたし、たびだちたる所、ちかき所にて、げす（下部の）共のざれかはした（左體也）る、にくげなるちごを、をのれがこゝちに（むこゝろ也悲愛也）、かなし（いとをし）とおもふまゝに、うつくしみあそばし（愛してあそばす也）、これがこゑ（兒の）のまね（眞似）にていひける事などかたりたる、ざへ（オ）ある人のまへにて、ざえなき人のものおぼえがほに人の名（古人の名）などいひたる（なと也）、ことによしなッども覺えぬ、わが歌を人にかたりきかせて、人のほめし（譽）事なッどいふもかたはらいたし、人のおきてものがたりなどするかたはらに、あさましううちとけてねたる人、まだね（音）もひきとゝのへぬ琴を心ひとつやりて（彈）、さやうのかたしり（音樂調子など知たる人也）つる人のまへにてひく、いとゞしうすまぬむこ（むすめのもとにかよはぬむこ也）のさるべき所にて、しうと（舅）にあひたる

圏あさましきもの

さしぐし（かんざししたゝめ上のみがき計りにて折し也）みがくほどに、ものにさはり（障）ておりたる

○白氏文集樂府云石上磨ニ玉簪ヿ玉簪欲レ成中央折

くるまのうちかへされたる、さるおほのかなる（穆也大やうなる心也）もの

は、所せき（狭）、ひさしくなどやあらむとこそおもひしか、

たゞゆめのこゝちして（ノリタル車の内のものゝ心也）、あさましうあやなし、人のた

めにも、はづかしき事、つゝみもなく（つゝしみもなく也）、ちご（兒）もおとな（長子）

もいひたる、かならずきなんと思ふ人を、夜ひとよま

ちあかして（待うむじたる也）、曉がたに、たゞいさゝかわすられて、

ねいりたるに、からすのいとちかく、かゝ（甲々也）となくに、

うち見あげたれば、ひるになりたる、いとあさまし

○東方朔鴉經云第一聲即甲也以ニ十干ヿ數レ之辨ニ其

緩急ヿ以定ニ吉凶ヿ也　○續詞花集廿戲咲部大僧正

覺忠　あふ事はかたをとりするやまがらすいまは

かうとぞねはなかれける

てうばみ（重込前にくはし）にどうとられたる、むげにしらず、みずき

かぬ事を（無算をいひていひおほする也）、人のさしむかひて、あらがはすべくもな

くいひたる、ものうちこぼしたるもあさまし、のり

ゆみに、わなゝくゝひさしう（しつはりと引たもつ也）ありて、はづし（外）たる矢

の、もてはなれて、ことかたへゆきたる　○公事根源

に賭弓十八日是は天子弓場殿に臨み弓を御覽ずる

也仲春に弓をみる事は禮記より出たり左右の近衛

左右兵衛四府の人ども射侍る也左右大將射手を奏

せらる勝のかたはまけかたに罰酒を給ふまた勝の

かたは舞樂を奏すおほかた近衛の官領にてあれば

事はてゝのち大將射手に禄をあたふ是をかへりあ

るじといふ也　○江次第四人立レ其後射レ之在レ南者

二人射了後退出次者歩進又侍ニ次者到來ヿ退ニ出路ヿ

左近者從ニ射場北砌ヿ退右近者自ニ弓場東面北間小蔀

下ヿ退若弦斷者垂レ袖跪レ地取ニ斷絃ヿ挿ニ懷中ヿ以ニ替

弦ヿ掛レ之當ニ弓搦柱ヿ張レ之先弦引　次當ニ於兩三度ヿ

鳴レ之後取レ脇更立ッ

圏くちおしきもの

節會、佛名に雪ふらで雨のかきくらしふりたる　○

元日の節會白馬節會踏歌の節會是を三節會と申也

この外に豐明節會侍るいま本文の節會は元日の節

會か但佛名につゞけたれば十一月豐明の節會なる

べし

節會などに、さるべき折の御ものいみにあたりたる、いとなみ（そのもてなし用意也）いつしかと思ひたる事の、さはる（障）事出きて俄にとまりたる（その事のやみたる也）、いみじうする（寵愛の心也）人の、子むまで、としごろ（相そひたる也）したる、あそびをもし、見すべきこともあるに、かならずきなむとおもひて、よびにやりつる人の、さはる事ありてなどいひてこぬ、くちおし、おとこも女も宮づかへ所より、おなじやうなる人（くらゐのたとらぬ人也）、もろともに寺へまうでものへもゆくに、このもしうこぼれいで（うつくしく出たち車よりこぼれ出し也）、用意はげしからず（ゆふなる心也）あまり見ぐるしとも見つべくはあらぬに、さるべき人（しかるべき人也）の馬にてもくるまにても、ゆきあひ見ずなりぬる（このかたの體をみぬが口おしと也）くちおし、わびては（せめては也）、すきずきしからむげすなどにても、人にかたりつべからんにてもがなと おもふも、けしからぬなめりかし、

五月の御さうし（是より清少の郭公聞に行しものがたり也）のほど（年三とて正五九月に精進する事也　長濟經云若有二善男女等一修二年三之齋戒一忽脫二諸難等一獲二殊勝福利一）、しき（后宮の職也）におはしますに、ぬりごめのまへ、ふたまなる所（二間本尊安置の所なるべし）を、ことにしつらひしたれば、れいざまならぬ（例のやうならでめづらしと也）もおかし（一）稱名院殿說塗籠（スリゴメ）は帳臺のやうにしてをく所也

文庫などの體也私考土籠などの心なるべし

朔日（五月の）より雨がちにて、くもりくらすつれづれなるを、時鳥（都にむかしは大切なるにこそ）のこゑたづねありかばやといふをきゝて、われもわれも（清少につれられて）と出たつ、賀茂のおくに何がしとかやたなばたのわたるはしにはあらで、にくき名ぞきこえし　○賀茂去二王都一北一里山麓在レ宮曰二賀茂一別雷皇太神宮

そのわたりになん、日ごとになくと人のいへば、それはひぐらし（蜩）なりといらふる人もあり（答也）、そこへとて（賀茂のおく大内裏の何ばしへ也）五日のあした、宮づかさ（后宮職の大夫）車のあないいひて、北の陣（の朔平門より）より五月雨はとがなきものぞとてさしよりて、四人ばかりそのりてゆく（拾芥曰縫殿陣朔平門云二北陣一）（一）延

喜式云凡乘二輦車一出二入內裏一者妃限二曹司一夫人及内親王限二溫明後涼後一命婦三位限二兵衛陣一但嬪女御及孫王大臣嫡妻乘二輦車一限二兵衛陣一

ゆかぬ女房たちのうらやましがりて（われもゆかましと也）、猶いまひとつして、おなじくはなどいへば、いな（后宮の）とおほせらるれば、聞もいれずなさけ

なきさまにてゆくに、馬場といふ所にて、人おほくさはぐ、なに事するぞととへば　○河海抄云左近馬場者一條西洞院右近馬場者一條大宮也今代云々北野社南右ニ馬場ト云 車そへなどの答也 直弓 射 手つがひにてまゆみゐるなり、しばし御覽じておはしませとて、くるまとゞめたり　○袖中抄五月三日は左近あら手つがひ四日は右近のあら手結也五日は左近のまてつがひ六日は眞手つがひ也荒手結の日は射手の近衛舍人水干袴にくゝりをあげて褐(ヒラリ)の後(シリ)を女の中ゆひたる樣に引出てその上にむかばきをゆふ也眞手つがひの日は紅の下のはかま織ものゝさしぬきにくゝりをあげずそばをはさみて褐の尻を腋(ワキ)より前さまに引たをりて前にはさめりさればこのまてつがひの日はひをりの日といふ也

右近中將みなつき給へる 列座に着て次第する事也 といへど、さる人 中將たる人也 もみえず、六位などのたちさまよへば、ゆかしからぬ事ぞ、はやくすぎよとて、行もてゆけば、みち 道すがら也 も祭のころおもひ出られておかし、かくいふ所に 賀茂のおくのはしのあたりに也、あきのぶの朝臣家あり　○高階氏系圖云成忠助順信順明順(ノブザネ)　后宮定子の御母高內侍の兄也

そこもやがて見むといひて、くるまよせておりぬ、いべし 省略也 なかだちことそぎて、むまのかたかきたるさうじ 障子とよむ 事 殺 あじろ屏風　○禁中の下侍臺盤所などに馬形の障子あり禁秘抄に馬形號ニ渡(ハヘ)細馬(ニマト)かやうの事をなぞらへたる障子なるべし　○あじろ屏風昔は山里などのふるめかしき調度には定まれる事かうるしぼねに片面を張てほそき組にてとぢあはせたるもの也ひあじろの屏風といふもの也 實丸利のくきにてあみたるすだれ也 みくりのすだれなど、ことさらにむかしの事をうつ 古代の風也 したる、やのさまははかなだちて、はしちかく 奥ふかゝらぬ也 あさはかなれど、おかしきに、げにぞかしかまし 敖 と思ふばかりに、なきあひたる、ほとゝぎすのこゑを御前に聞しめさず、さはしたひつる人々にもなど思ふ 聞せいではと思ふ也、所につけては 田舍メキタル所にてはかゝる事みむと也 かゝる事をなんみるべきとて、いね 稻 といふものおほくとりいでゝ、わかき女どものきたなげならぬ、そのわたりの家のむすめ女などひき 引 將 引つ ゐてき

一説糸綿などくりて見せし
れて也　援
て、五六人してこかせ見もしらぬくるべきものふ
なるべし　うす引なるべし　又くる／＼とする田う
たりしてひかせて、歌うたはせなどするを、めづらし
すなるべし二人にあたりて然るべし
くてわらふに、ほとゝぎすの歌よまんなどしつるわ
あきのぶのもてなしの體也　懸盤
すれぬべし、から繪にかきたるかけばんなどして、
清少に　皆くばざる也　あき
ものくはせたるを見いるゝ人なければ、家あるじい
のぶのひげ也　鄙いやしき心也　わろうし
とわろくひなびたり、かゝる所にきぬる人はようせ
たらば也　有ほとのものなど責る也　無下にか
ずはあるもなどせめいだしてこそ參べけれ、むげに
やうに聽しては也
かくてはその人ならずなどいひて、とりはやし、こ
蕨
の下わらびは、手づからつみつるなどいへば、い
清少詞也　膏ならひては也
かでか女官などのやうに、つきなみてはあらむな
下わらびを　臺臥也身を自由にありなら
どいへば、とりおろして例のはいぶしにならはせ給
ふ心也　蹲
へる、おまへたちなればとて、とりおろしまかなひさ
供人の詞也
はぐほどに、あめふりぬべしといへば、いそぎてく
右にいふたるほとゝぎすの歌也
るまにのるに、さてこの歌は、こゝにてこそよまめ
さはあれ也
といへば、さばれみちにてもとなどいひて、卯のはな
傍
いみじくさきたるは、折つゝ車のすだれそばなどに、
葺　指　おもて白くうら青き
ながきえだをふきさしたれば、たゞうのはながさね

夏の衣也
を、こしにかけたるやうにて、みえける、ともなる
この所にまだうの花のさしたらぬ
おのこども、いみじうわらひつゝ、あじろをさへ
突
つきうがちつゝ、こゝまだし／＼とさしあつむなり
と也　このうの花車たへせたき心也　いやしくえしれぬ也是
人もあはなむとおもふに、さらにあやしき法師、あ
もいやしく也　邂逅　行あふ心也
やしのいふかひなきものゝみ、たまさかにみゆる口
京近く也　女房達の詞也
おし、ちかうきぬれば、さりともいとかうでやまん
やは、このくるまのさまをだに、人にかたらせてこそ
やまめとて、一條どのゝほどにとゞめて　○拾芥云
一條院二一條南大宮東二町爲二法住寺大臣爲光家一こ
清少の詞也　の爲光を號二恒德公一
侍從どのやおはします　○勘物云公信恒德公六男
母ハ謙德公女長德元年九月十九日侍從十九同年十月
兵衛佐長保元年三月少納言同年九月右少將卅三二
年二月七日聽二禁色一
ほとゝぎすのこゑきゝて、いまなむかへり侍ると、い
我君々々待給へとわぶ
はせたるつかひ、たゞいま參る、あがきみ／＼とな
る詞也　殿上の半也　間檐　侍從とのに指貫着
んのたまへる、さふらひにまひろげて、さしぬきたて
せ由と也
まつりつといふに、まつべきにもあらずとてはしら

せて、つちみかど（上御門也正親町の南）ざまへやらする（車）に、いつのまにか（侍從殿の事也）さうぞきつらむ、おびはみちのまゝにゆひて（結）、しば（侍從殿の供のもの追來る也）しく〜とをひくるともにさふらひざうしき（雜色）三人ばかり、ものもはかではしるめる、とく（疾）やれ（車を）どいとゞい（喘息す）そがしく、つちみかどにもゆきつきぬるにぞあへぎ（たく〜とする心也）まどひておはして、まづこのくるまのさまを（うの花さしたるゆへ也）、いみじくわらひ給ふ　○延喜式凡乘車出二入宮城門一者妃以下大臣嫡妻以上限二宮外一四位已下及內侍者聽出二入土門（ミカド）一但不レ得レ至二陣下一○考云土御門は一條より三筋いまの長者町にあたる也

（侍從の詞也）うつゝの人の（うの花にてかざりし故也）のりたるとなん、さらにみえぬ、なををりて（車より下るとうの花折と飾たる詞也）よみなどとわらひたまへば、供なりつる人ども（侍從）、（興）けうじわらふ、歌はいかにか（侍從の問給ふ也）、それきかむとのたまへば、いま御前に（清少の辞也）御らん（歌な）せさせてこそはなどいふほどに、あめ誠にふりぬ、などか（侍從の詞也異御門）ことみかどのやうにあらで、このつちみかどしも、うへもなく（助字也　屋根のなき也）つくりそめけんと、けふこそいとにくけれ（やれのなき土御門が雨ゆへににくしと也）などいひて、い（雨のふるゆへに也）かでかへらんずらむ、こなたざまは、たゞをくれじ（追つかんと思ふば）

かりにて人目もかまはす走り來ると也

とおもひつるに、人めもしらずはしられつるを、あ（あなう也　行也）ういかんことこそ、いとすさまじけれとのたまへば、（いざ參內あれ也）いざたまへかしうちへ（清少の詞也）といふ、ゐぼうしにては（侍從の詞也）いか（何）でか、とりにやり給へなどいふに、まめやかに（實に也）ふれば（雨の）（笠）かさなきおのこども、たゞ（車を急て土御門の內へ引入し也）ひきに引いれつ、一條よ（侍從の家より）りかさをもてきたるを（さしかけて）さゝげて、うち見かへり（侍從のさま也）く〜（追つき給ふゆへ也）このたびはゆるく〜と、ものうげにて、卯のはなばか（歌のあらましはむなしくなりて也）りをとりおはするもおかし、（淸少后宮の御前へ參たれば）ありさ（かの所の）まなどと（中宮の）はせ給ふ、うらみつる人々（のこりし女房たちの事）、えんじ（怨の字也）、こゝろうがりながら藤侍從一條のおほぢはしりつるほど、かたる（有の樣子を）にぞみなわらひぬる　○拾芥云大路弘（ヒロサ）十二丈幷次四大路廣各十丈左京式同

さていづら歌はと問はせ給ふ（この歌は何としたると后宮の問給ふ也）、かう〜とけいすれ（彼歌よまぬ首尾を申上ル也）ば、くちおしの事や、うへ人（殿上人）などのきかむに、いかでかおかしき事（歌の事）なくてはあらん、そのきゝつらん（郭公を）所にて、ふと（當意即妙に）こそよまゝしか、あまりぎしき事さめつ（儀式めき興さめつらんと也）らむぞあやしきや、こゝにてもよめ、いふかひなし

などのたまはすれば、（清少の）げにとおもふにいとわびしき（よまんと思へと歌のわろければわびしと也）を、いひあはせなどするほどに、藤侍従のありつるうのはなにつけて、うの花のうすやうに（紙の色也）

（侍從歌）ほとゝぎす鳴音尋ねに君ゆくときかば心をそへもしなまし（清少をさして也）」返しまつらん程（待也）つぼねへすゞりとりにやれば、（后宮の）たゞこれしてとくいへ（早くよめ也）とて御すゞりのふたにかみなどいれて、給はらせたれば、宰相のきみ（清少のつれ也）かき給へといふを、（宰相の詞也）猶そこになどいふほどに、（色々いふ内に也）かきくらし雨ふりて、かみ（雷）もおどろ〳〵（驚）しうなりたれば、ものもおぼえず、たゞおろしにおろす、しきのみざうし（みかうしを）は、

格子の上ニシトミチ下シタル也

しとみをぞみかうしに參わたし、まどひしほどに

○和名蔀（シトミ）周禮注云蔀音部亦作レ蔀覆（ヲヽヒ）レ曖障レ光者也

歌の返事もわすれぬ、たゞひさしくなりて、すこし（雷雨の）やむほどは、くらくなりぬたゞいまなをその御返事（せがむ也）たてまつらんとて、かゝるほどに（又歌のさまたげの事）人々上達部など、（雷）かみの事（奏）申に參り給ひつれば、（清少のあしらひに）にじおもてに出て、ものなどきこゆるほどに（歌の事）まぎれぬ、人は（將也たれと名ざし）たさしてえたらむ人こそしらめ（なしてこそ）とて（返歌を）やみぬ、おほかたこの事に、（縁なき也）すくせなき日なり、どうじて（動）、いまはいかでさなん（時鳥を聞に）いきたりしとだに人にきかせじなどぞ笑ふを、い（今とてもいかでか賀茂へ行し人々の歌よまであらんよむべしと也）まもなど、そのいきたりし人どものいはざらむ、され（后宮の詞也歌よむまじと也）どもさせじと思ふにこそあらめと、ものしげにおぼしめしたるもいとおかし、されどいまはすさまじく（清少詞 當座にこそよまばよめらんものをとの心也）なりにて侍るやと申す、すさまじかるべき事かはな（すべて是マテ時鳥尋に行歌もよまで歸しは口おしと也）ど、のたまはせしかば、やみにき、二日ばかりありて、（加茂へ行し日也）その日の事などいひつるに、宰相の君、いかにぞ手づから折たるといひしに、したわらびはとのたまふをきかせ給ひて、（后宮の詞也）思ひいづる事のさまよと、笑はせ給ひて、かみのちりたるに（后宮）「したわらび（下蕨）こそ戀しかりけれ」（上の句を申せと也）とかゝせ給ひて、もといへと、仰せらるゝもおかし（清少）「ほとゝぎすたづねてきゝし聲よりも」とか（承諾はかりなき心也）きて參らせたれば、いみじううけばりたるや、かうまでだにいかでほとゝぎすの事を、かけつらむ（いひつらんと也）と笑はせ給ふ、この歌すべてよみ侍らじとなん、おもひ

侍るものを、ものゝ（其時節也）折など人のよみ侍るにも、よめなどおほせらるれば、えさふらふまじきこゝち（其座に侍らじと思ふと也）なんし侍る、いかではもじのかずもしらず（三十一字をしらず）、春は冬の歌（時節たがひの歌をよむほどの事はあるまじと也）をよみ、あきは春のをよみ、むめの折にきくなどよむ事侍らむ、されど歌よむといはれ侍りしするゑ〴〵は、すこし人にまさりて、そのおりの歌は、これこそありけれ（末孫といへども元輔がむすめなればと也）、さはいへどそれが子なればなどいはれ（さして秀たる事）たらんこそかひあるこゝちし侍らめ、つゆとりわきたるかたもなくて（もなくてと清少の卑下也）、さすが歌がましくわれはとおもへるさまに、さいそに（最初也人よりさきにさし出たる心也）よみ出侍らんなん、なき人のために（元輔のため也）いとをしく侍るなど、まめやかにけいすれば（后宮へ）、わらはせ給ひて、さらばたゞ心にまかせよ、われは（后宮の心詞）よめともいはじとのたまはすれば、いとこゝろやすくなりぬ（清少心）、いまは歌の事おもひかけ侍らじなどいひてあるころ、かうじん（庚申）せさせ給ふとて　○拾芥云庚申人腹中有二三尸一爲レ人大害常庚申之夜上告二天帝一記二人罪過一絕二人生籍一庚申之夜不レ寢則不レ得レ上レ天　庚申の夜人皆ねふらずしてあしたにいたる○酉陽雜俎に守二庚申一則三彭滅（ホウメツ）の說あり是にもとづけるなるし袋草紙に庚申せで寢る誦文

しや虫はいねやさりねや我床をねたれどねぬぞねねどねたるぞ

內大臣殿（伊周公庚申の用意）いみじうこゝろまうけせさせ給へり、夜うちふくるほどに、題出して女房に歌よませ給へば、みなけしきだち（女房たちいかさま歌よまんとけしきだつ也）、ゆるがしいだすに、宮の御前にちかくさふらひて（清少）、物けいしなどことをのみ（よの事を也○いふ也）○おとゞ（內大臣）御覽じてなどか歌はよまではなれゐたる（かけはなれて也）、だいとれとのたまふを、さるまじくうけ給りて（清少心）、歌よむまじくなりて侍れば、思ひかけ侍らず、ことやうなる事（內大臣詞）（かはり事ぞと）、まことにさる事やは侍る（后宮の何とてゆるし給ふぞと也）（也實に御ゆるしが）、などかはゆるさせ給ふ、いとあるまじき事なり、よしこと時はしらず（內大臣殿の清少への詞也）、こよひは（庚申）よめなどせめさせ給へど、きよう聞もいれで（清也）（清少の）、さふらふに、こと人ども（女房たち）よみ出して、よしあしなどさだめ（后宮一品の宮など歌の褒貶し給ふ也）らるゝ程に、いさゝかなる御文をかきて、たまはせたり（后宮の歌）、「元輔がのちといはるゝ君し（清少事也）

もやこよひの歌にはづれてはをる」とあるをみるに、おかしき事ぞたぐひなきや、いみじくわらへば、なに事ぞ〱と、（内大臣）おとゞものたまふ、（少納言返し）「その人の後といは（いかやうにもよむべきものをと也）れぬ身なりせば、こよひの歌はまづぞよまゝし」つゝ（よみ）む事（つゝしむ事なくば也）さふらはずは、（后宮へ）千歌なりとも、これよりぞ、いで（出し侍らんと也）まうでこましと、けいしつゝ、（后宮の御兄弟たち也）御かたぐ〱きんだち、う（后宮の）へ人など御まへに人おほくさふらへば、ひさしのは（清少の）しらによりかゝりて、女房どものがたりしてゐたる（清少思ふ）に、（文なるべし投也）ものをなげたまはせたる、あけてみればおもふべ（かおもはぬかと也）しやいなや、（イニ第一ならずはとあり下へかけて然るべし）題ならずはいかゞとはせ給へ（歌ならで常のものがたり也）り。御まへにてものがたりなどするついでにも、すべて人には、一におもはれずは、さらになにゝかせん、（第一にあらずは一向にくまれんと也）たゞいみじうにくまれ、あしうせられてあら（第一の人にてあらんと也）ん、（第二第三）二三にてはしぬ（死也）ともあらじ、一にてをあらんなどいへば、（女房達のたはふれ也）一乘の法なりと人々わらふ事のすぢなンめり　○法華經云十方佛土中唯有一乘法無レ二亦無レ三除ニ佛方便説一

筆（フンデ）かみたまはりたれば、（清少答）九品蓮臺の中には、下品といふとも、書て參らせたれば　○極樂寺建立願文保胤（ヤスタネ）十方佛土之中以ニ西方ニ爲レ望九品蓮臺之中雖ニ下品ニ應レ足○觀經に九品の淨土をたて上品中品下品のかはりあり

・（后宮の詞也）むげにおもひくんじにけり、（屈也あまりおもひくつをれしと也）いとわろし、（始第一におもはれんといふ程ならば後までその心にてあらめと也）いひそめつる事は、さてこそあらめとのたまはすれば、人に（その人によりてこそと也）したがひてこそと申、（后宮の詞也）それがわろきぞかし、第一の人（后宮のみつからの事也）にまた、一におもはれんとこそ、おもはれめとおほせらるゝもいとおかし、（是より別也隆家の事也后宮の方へ也）中納言殿參らせたまひて、御あふぎ奉らせ給ふに、（たか家のみづから）隆家こそいみじきほねをえて侍れ（后宮）それをはらせて參らせむとするを、（おほかたの心也）おぼろけのかみは、（よき紙を）はるまじければ、もとめ侍る也と申たまふを、（后宮詞）いかやうなるにかあるととひきこえさせ給へば、（隆家詞）すべていみじく（よき骨と也）侍る、さらにまだみぬほねのさま也となん、人々申、（これほどのは也）まことにかばかりのは、見ざりつと、こと（言高）（きつとの心也）たかく申せば、（清少の詞也）さてあふぎのにはあらで、（めづらしき心也）くらげのなりときこゆれば、（隆家の詞也）これはたかいへが事にしてんと（清少がたはぶれを）

うらやめる心也
てわらひ給ふ　○海月稚禹錫食經云海月一名水母和名久良介
貌似レ月在二海中一故名レ之　○みつはさす八十あま 増賀上人の歌
りの老の浪海月のほねにあひにけるかな 自賛めきし事なれば也
かやうの事こそ、かたはらいたき物のうちにいれ 一言也 后宮の一言も落すなと仰
つべけれど、ひとことな落しそと侍れば、いかゞ
らるゝ也中宮在世の内に書たる詞也
はせむ
是又別のものがたり也
あめのうちはへふるころ、けふもふるに、御つかひ
中宮への御使に也
にて式部のぞうのぶつね參たり　藤原信經は中納
言兼輔の曾孫雅正の孫陸奥守爲長の子也尚物云信
經長德元年正月十一日藏人三年正月式部丞 其上ニ不居ヅ
茵
例のしとねさし出したるを、つねよりもとをくさし 清少の詞
やりてゐたれば、あれはたれがれうぞといへば、わ 茵也たれがためぞとの心也
きへヤリタル也
らひてかゝる雨にのぼり侍らばあしがたつきて、い 茵よごれんと也
のぶ經詞
とふびんにきたなげになり侍りなんといへば、など
清少の秀句ないへる詞也
せんぞくれうにこそは、ならめといふを、これはおこ 信經の秀句の詞也
清少のさしていふ也
へにかしこうおほせらるゝにはあらず　○氈褥料
和名云氈𣯎也今案毛席也
のぶつねが、あしがたの事を申さゞらましかば、えの
たまはざらましとて、かへすがへすいひしこそおかし

かりしか、あまりなる御身ぼめかなと、かたはらい 前段も自讃の事このだんも同しく自賛なれば也
例の書殘したる筆法也
たく、
是又別段のものがたり也
はやう大后おほきさいの宮に、ゐぬたきといひて、名た
昔也
かき下づかへなん有ける　○攝物云中宮安子康保
元年四月廿四日崩三十八右丞相師輔女子 中宮從三位安
子母同ニ參案ニ邦經女　村上后冷泉圓融母后天慶三年四月
廿八日爲ニ女御ニ天德二年十月廿七日應和四廿九日
崩贈皇太后又重皇太后宮
みのゝかみにてうせにけるふぢはらの時からの藏人
なりけるとき　ゝ攝物時柄康保五年正月廿八日美
濃守元兵庫頭東宮大進天延二年六月攝津守從四位
下長德二年五月三日藏人兵部少輔被レ補ニ作物所別
當ー
しもづかへともある所にて、これやこの高名のゐぬ 時柄が詞也 不得
名はめづらしくて形はさもみえぬの心也 名によ
たきなど、さもみえぬといひける返事に、それは時 わざ
せこの秀句也
からも、さもみゆる名なりといひたりけるなん、かた 相手
にうけたりともかくはあるまじと也めつらしき名の事也
きにゐりてもいかでかさる事はあらんと、殿上人上
撰也　ほむる心也　さありつるとのう
達部までも興ある事にのたまひける、またさりける

〔まて語りつたふる也〕なゝめりと、いまゝでかくいひつたふるはときこえた〔地に論じたる詞也〕り、それまた時からがいはせたるなゝめり、すべて題〔清少の〕〔詩〕〔よき事也〕出しからなん、ふみも歌もかしこきといへば、げに〔詞也〕さもある事なり、さらばだい出さん歌よみ給へとい〔時柄が詞也〕〔一首にてはやましと也〕ふに、いとよき事、ひとつはなにせむ、おなじうはあ〔后宮よりの出題也〕またをつかふまつらんなゝどいふほどに御だいは出〔時からも體也〕〔退〕〔是よ〕ぬれば、あなおそろし、まかり出ぬとてたちぬ、手も〔時柄がにげたることはり也〕いみじう、まなもかんなも、あしうかくを、人のわら〔眞字〕〔假字〕ひなどすれば、かくしてなんあるといふもおかし、〔かくのごとくにげまどふといふ義也〕〔是より時からが手もいみじうあしく、書事じものがたり也〕つくも所の別當するころ　○拾芥云作物所在二進物所西一有三別當預二熟食一　○考云内裏仙洞にあり右腋門武德門のすみの方也臺の物折なと作る所也〔造物所の用に也〕

たれがもとにやりけるにかあらん、もの〵ゑやうやるとて、これがやうにつかうまつるべしと、書たるま〔手蹟のあしき事也〕〔清少の〕〔眞字〕んなのやう、もじの世にしらず、あやしきを見つけ〔あしき也〕〔時からの書たる物に也〕〔清少の書し詞也〕て、それがかたはらに、これがまゝにつかうまつら〔是が様の詞によりての詞也〕ば、ことやうにこそあるべけれとて、殿上にやりたれば、人々とりて見て、いみじうわらひけるに、〔時からも立腹也〕おほきにはらだちてこそうらみし、

〔是より又別章也　三條の院の事也〕
淑景舍東宮に參給ふほどの事など、いかゞは(句)め〔いかなる事にかとの心〕〔也〕〔定子の事也〕でたからぬことなし、正月十日に參給ひて、宮の御かたに、御ふみなどは、しげうかよへど御たいめんなど〔后宮へしげいさの〕はなきを、二月十日、宮の御かたにわたり給ふべ〔居所のこしらへ也〕き御せうそこあれば、つねよりも御しつらひこゝろことにみがきつくろひ、女房なども、みな用意し〔琢〕〔繕〕〔宮の〕たり、よなかばかりにわたり給ひしかば、いくばく〔二月の十日の〕〔后宮のかたへ〕もなくてあけぬ、とうくはでんのひがしのふた〔夜の〕まに、御しつらひはしたり、○勘物云信經記云二月十八日渡二御登花殿一仰二掃部〔カモリツカサ〕寮一敷二莚道一午刻供二朝膳一未刻渡二御頭中將美信〔ヨシノブ〕朝臣持二御劔一於二南廂一有二侍臣盃酒事一申刻還御〔夙の字也十三日のあしたなり〕つとめていとく御かうし參わたしてあかつきに殿〔あげわたす事也〕うへ　○上は中の關白殿北方高内侍也號二貴子一儀同三司の母といふ是也

〔關東〕ひとつ御車にて參給ひにけり、宮は御さうしのみな〔殿の御曹子〕

みに四尺の屛風西東にへだてゝ、北むきにたてゝ、御たゝみ御しとねうちをきて、御火おけばかり參たり、御屛風の南、御帳のまへに、女房のいとおほくさ（后宮の御髮などつくろふ事也）ふらふ、こなたにて、御ぐし（清少に）など參るほど、しげい（清少の）さは見たてまつりしやと、（栄花）とはせ給へば、またいかで（答也）か積善寺供養の日　○見たてぬ夢の卷に攝政殿の法興院のうちに別に御堂たてさせ給ひて積善寺と名づけさせ給ひてその御堂供養いみじくいそがせ給ふ

（しげいさの）御うしろをわづかにときこゆれば、（后宮の詞）そのはしらと屛（清）風とのもとによりて、わがうしろよりみそかに見よ（清少）いとうつくしき君ぞとのたまはすれば、うれしさま（いつかみんと也）さりて、いつしかと思ふ。紅梅のかたもん、（后宮の御衣裳也堅紋らおりの）うきも（やう也）んの御ぞども、（衣）くれなゐのうちたる御ぞ三重がうへ（濃紅也）に、たゞ引かさねて（着する事也）奉りたる紅梅には、こききぬこそおかしけれ。（二月の比なれば紅梅きる時節也）いまは紅梅きてもありぬべし、（句）されど（紅梅珍しからねどもえぎなどは）もえぎなどのにくければくれなゐにはあはぬ也との見にくければ紅梅をめすとふくめたる詞也されど紅梅には似合はぬたまはすれど、たゞいまめでたくみえさせ給ふ、奉た

（と也　着したる也）る御ぞにやがて、御かたちのにほひあはせ給ふぞな（光つやのはへあひたる也）をこことよき人（異人の美也）もかくおはしますらむとぞゆかしき、（清少）（后宮の）さていざりいらせ給ひぬれば、やがて御屛風にそひつきてのぞくをあしかゝめり、（女房達ののぞくを心もとなきと也）うしろめてたきわざと聞えごつ人々もいとおかし、（高内侍の事也）御障子のひろうあきたれば、いとよくみゆ、うへはしろき御ぞども、（もはかま也）紅のはりたる、ふたつばかり女房の裳なゝめり、ひき（かりそめの禮）かけて（義計にも袴を）おくによりて、ひがしおもてに（高内侍の）おはすれば、たゞ御ぞすこし見ゆる、しげいさはきたによりて、南むきにおはす、（しげいさの出立也）紅梅どもあまた（濃）こく（薄）うすくて、こきあやの御ぞ、すこしあかき（蘇芳）すわうの、おりものゝうちき、（袿）もえぎのわかやかなる、かたもんの御ぞ奉りて、扇をつとさしかくし給へり、（いほた）いといみじく、げにめでた（直衣）くうつくしと見えたまふ、殿は（道隆公也）うす色の御なをし、も（句）えぎのおりものゝ、御さしぬき、紅の御ぞども、御ひ（直衣の入紐を）もさして、ひさしのはしらに、（よりかゝりて也）うしろをあてゝ、こな（清少）（のゝぞく方へ）たざまにむきておはします、めでたき御ありさまど

もを、(道隆い)うちゑみて、れいのたはふれごとをせさせ給ふ
しげいさのゑ(行義の正しき體也)にかきたるやうに、うつくしげにてゐ
させ給へるに、(后宮)宮いとやすらかに、いますこしおと(長)
なびさせ給へる御けしきの、紅の御ぞに匂ひあはせ(はへあひし也)
給ひて、猶たぐひはいかでかとみえさせ給ふ、御手水(翌朝の)
參る、(ありさま也)かゝ御かたは、せんようでん貞觀殿をとをりて
〇宣耀殿(麗景殿北七間四面)貞觀殿(常寧殿北俗曰御匣殿在是殿)
わらはふたりゝしもづかへ四人して、もて參るめり
からびさしのこなたの廊にぞ、女房六人ばかりさふ
らふ、(登花殿にこなたこなたの女房つどひたれば也)せばしとて(右にくはし)かたへは御おくりして、みな歸にけ
り、櫻のかざみ(長きもの也)もえぎ紅梅など、いみじく、かざみな
がくしり引てとりつぎ參らする(下仕などのもて來る手水な女房の取次)いとなまめかし、お
也りもの、からきぬどもこぼしいでゝ、すけまさのむ
まのかみのむすめ、少將の君、北野の三位のむすめ、
宰相のきみなどぞ　〇菅原輔正勘解由長官在(アリ)躬一男
(輔補任)現レ神北野殿是也正暦三年二月十五日叙二三位一公
(近習の心也)ちかくはあるあなおかしと見るほどに、こなたの御

手水は、番の釆女の(手水の番也)　〇禁秘抄云陪膳釆女尤可レ然事
也近代漸所レ令二零落一無レ極尤可レ有二沙汰一事也陪
膳釆女典侍(スケ)御レ之應和例也
(青末濃)青すそごの(釆女の衣裝也)、裳からきぬ、くんたいひれ(領巾)などして　〇
和名裙裳(裙帶同背子和名形如二半臂一無レ腰襴之袷衣也)
(眉ナドつくりたる體也)おもてなどいとしろくて、下づかへなどとりつぎて(釆女へ)
(御膳)參るほど、これはた(將)おほやけしう(公儀めきし也)からめいておかし、
おものゝ(時分)をりに成て、みくしあげ參て、藏人ども(女藏人也)まか(略)
(役義の心也)なひのかみあげて參らするほどに、へだてたりつる
(し事也)屏風(屏風とられ)も、をしあけつれば、かいまみの人、(清少の垣間見)かくれみ
のとられたるこゝちして、あかずわびしければ、(猶見たらぬこゝろ也)み
すと木丁の中にて、はしらのもとよりぞ見奉る、き
(清少)ぬのすそ裳などは、みなみすのそとになし出されたれ
れば、(道隆)殿のはしのかたより御らんじ出して、(清少ののそくを見付給ひ)たそやか
(し也)すみのまより見ゆるは(もれたるきぬのたとへ也)と、とがめさせ給ふに(道隆とのゝ)　〇古
(詞也)今貫之が歌の詞也　山櫻かすみのまよりほのかに
も見てし人こそ戀しかりけれ
(后宮の御詞也)少納言がものゆかしがりて侍るならんと申させ給へ

[illegible]ば、あなはづかし、かれはふるきとくいを、いとにくく 得意也ものになれたる
也見にくき也
げなるむすめども、もちたりとこそ見侍れなどの 后宮しげいさな
御むすめを自慢し給ふ也
給ふ、御けしきいとしたりがほなり、あなたにもおも
ど御膳參る也　關白どのゝ詞也
の參るうらやましうかたがたのはみな參りぬ。とく [illegible]の
聞しめしておさな女におろしをだに給へなど、たゞ
猿樂言也ざれ言也
日ひと日、さるがう事をし給ふほどに、大納言殿、
三位の中將、松君ゐて參給へり。大納言伊周公 [illegible]左 三位中將 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
一日[illegible]
大[illegible]松君[illegible]
うつくしきわざすみ給へれば[illegible]
どいみじきものにもてかしづき給ふ松ぎみとぞきこゆめる
關白殿 [illegible]孫也
殿いつしかと、いだきとり給ひて、ひざにすへたまへ
ことごとしき心也　晝
る、いとうつくし、せはきゑんに、所せきひの御さ
の裝束
しどけなき體也
うぞくのしたがさねなど引ちらされたり。大納言殿
上﨟らしく也
は、ものものしうきよげに、中將殿はいとらうらう いふに
しく、いづれもめでたきを見たてまつるに、殿を
[illegible]高内侍也[illegible]
ばさるものにて、うへの御すくせこそ、めでたけれ
[illegible]はぬ心也
御わらうだなどきこえ給へど[illegible]
[illegible]也　せばきゑんに[illegible]

白裝束られ給ふ
いそぎたち給ひぬ。しばしありて、式部のぜうなに
御膳たく所也
がし、御使に參たれば、おものやどりのきたにより
式部の丞御返事待居る間也
たるまに、御しとねさしいでゝすへたり、御返りは
けふはとくとく出させ給ひつ。まだしとねもとりいれぬ
三條の[illegible]しげいさの方へ　道隆の御子中宮の御兄弟
ほどに、春宮[illegible]御つかひ周頼の少將參たり、御文とり
也[illegible]の體はたれともしれず
いれてわたどのは、ほそきえんなれば、こなたのえん
[illegible]下也　登花殿にや　道隆后宮一品
にしとねさし出たり。御文とりいれて、殿うへ宮な
の宮　しげいさの宮へ
ど御らんじわたす。御返りはやなどあればとみにも
早速也
關白殿の詞也
見ぬ折は也
きこえ給はぬを、なにがしが見侍れば書たまはぬな
[illegible]
めり、さらぬ折は、まもなくこれよりぞ聞え給ふなる
など申給へば御おもてはすこしあかみながらすこし
中宮也
うちほゝゑみ給へるいとめでたし。とくなどうへも
しげいさの體也はぢたる姿也
中宮
聞え給へば、おくざまにむきてかゝせ給ふ。うへちか
くより給ひて、もろともにかゝせ奉り給へば、いとゞ
顯かくし
給ふ也
[illegible]への祿也
つゝましげ也。宮の御かたより、もえぎのおりもの
小[illegible]
ゝこうちき、はかまなしいだされたれば、三位の中
纏頭也　使の祿を辭したるさま也
將かつげ給ふ、くるしげにおもひてたちぬ。松君の

おかしうものゝたまふを、たれも〳〵うつくしがり（あいらしがる體也）聞え給ふ、宮の御子たち引出たらむに、わろくは侍ら（關白殿の御孫宮ノ皇子うませ給はゞの心也）じかしなどのたまはするを。げになどかいまゝでさ（實今まで何とて御產なきぞとの心也）る事のとぞ、心もとなき。ひつじの時（淑景舍の御歸の時）ばかりに、ゑ（莚）んだう（道也むしろな道にしく事也）參るといふほどもなくうちそよめきいらせ給へば、宮（一品の宮）もこなたにいらせたまひぬ、やがて御帳にいらせたまへば（中宮も淑景舍も）、女房も南おもてにみなそよめき出ぬめり。らうに殿上人いとおほかり。殿の御まへに（菓子など仰付て殿上人をもてなせと申給ふ也）宮づかさめして、くだものさかなゝめさす。人々ゑはせなどおほせらるゝ。まことにみなゑひて、女房どものいひかはすほど、かたみに（たがひに）おかしとおもひたゞめり、日のいるほどに（中宮のつかれさせ給ひなりしが起給ふ也）、をきさせ給ひて、やまの井の大納言めしいれて、御うちき（御ぐしあげに參る人の事也）まいらせ給ひて、かへらせ給ふ　○道頼公也后宮伊周公別腹の御兄弟也山井どのは三條の坊門の北京極の西なるよし拾芥抄にみえぬ紫花に大千世君とあり

さくらの御なをし（帝の御直衣也）に、くれなゐの御ぞの、ゆふばへ（映）な（恐てかゝざると也）どもかしこければいりたゝぬ御せうと（后宮など一腹の御兄弟にてなきを）にても、いとよく（いゝ也）おはすかし、にほひやかなるかたは、この大納言（伊周公也）にもまさり給へるものを、世の人（地の詞也）はせちに（深切也）いひおと（伊周公よりも）しきこゆるこそいとをしけれ、殿、大納言、山の井の大納言、三位の中將、内藏のかみなど　○内藏頭道隆公の子也頼親の内藏頭と藤原系圖にあり

みなさふらひ給ふ、宮のぼらせ給ふべき御使にて、むまの内侍のすけ參たり　○馬内侍大和守馬權頭時明女一條院皇后宮女作者部類　從五位下伊賀守方基（マサモト）前阿波守正弘（マサヒロ）などの兄弟也

こよひはえなどしぶらせ給ふを（后宮今夜はえのぼらせ給はじと也）、殿きかせたまひて（關白殿のいけんの詞也）、いとあしき事、はやのぼらせたまへと申させ給ふに、また春宮の御つかひしきりにあるほど、いとさはがし（噪の字）、御むかへに春宮の侍從（しげいさの東宮の御方の女房たち也）なども參て、とくとそゞのかし聞ゆ、まづさば（后宮の御上らばまさらば也）、かの君わたし聞え給ひてと（淑景舍を參らせてのちに參らんと也）のたまはすれば、さりとも（さはありとも也淑景舍の答也）いかでかとあるを、なを（后宮の詞）見おくりきこえむなどのたまはするほども（たがひの禮を）いとおかしうめでたし（ほめたる也）、さらばとをきをさきにとて（淑景舍は登花殿より遠ければ也）、まづしげいさわたり給ひてとの（關白殿）などかへらせ給ふ、みちのほ

ども、（關白殿也）との〻御さるがふ事も（ざれ言也）いみじくわらひて、ほ（殆）
ど〳〵うち（内階）はしよりもおちぬべし　○花鳥にわたど
の〻きりめんだうに板を打わたしてかよふを、内
はしといふ也
（背則段の事歟又前の段の體にもみゆ）
殿上よりむめの花のみなちりたるを、これはいかに（清少に）
といひたるに、（清少答い詞）たゞはやくおちにけりといらへた（前の落ぬべしといふにあた）
れば、（りて也）（殿上人が）その詩をずして　○朗詠大庾嶺之梅早落誰問ニ
粉粧一（紀納言の詩序也）
くろ戸に、（前に奏し）殿上人いとおほくゐたるを、うへの御前（一條の院）
に聞かせおはしまして、よろしき歌などよみて出し
たらむよりは、（時にあふたる吟詠を）かゝる事はまさりたるかしかういら（應）
へたりとおほせらる〻、二月つごもり風いたくふき（強）
て、空いみじくくろきに、雪すこしうちちりたるほ（がくの如くの用意に參）
ど、くろ戸に、とのもりづかさきてかうしてさふらふ（りしと也）（使うけ取に清少が）（たゞのぶ歟）
といへば、よりたるに、公任のきみ、宰相中將どの
〻とあるをみれば　○四條大納言公任小野宮實頼孫
從一位關白太政大臣頼忠子權大納言正二位能書和
漢才士也康保三年生萬壽三入道

ふところがみに、すこし春あるこ〻ちこそすれどあ（雪のふりあれて春のすくなき心也）
るは　○此詞を俊成卿のとりて（うつみ火にすこし春あるこちしてよふかきふゆなな）
（ぐさむるかな）
げにけふのけしきに、いとよくあひたるを、これが（清少の心）
（也上の句）（もとは、）いかゞつくべからんとおもひわづらひぬ。
（清少詞この下の句こしたる人の事也誰々一座にてと答る也清少心）
たれ〳〵かとゝへば、それ〳〵といふに、みなはづ
かしき中に、宰相中將の御いらへをば、いかゞこと（なんの難もな）
（きやうにとの心也）
なしひにいひ出んと、こゝろひとつにくるしきを、
（中宮定子にみせてつけさせ申さんと也）
御前に、御らんせさせんとすれども、うへのおはしま（一條の院）
（帝のわたらせたまふゆへ后宮の御寢なりし也）
して、御とのごもりたり、とのもりづかさは、とくと（返事をいそ）（ぐ也）
（付句のよかるまじき上に也）
くといふ、げにをそくさへあらむは、とり所なければ
（さもあらはあれと也　清少の付句）
さばれとて、そらさむみ花にまがへてちる雪に、わ
（あやぶむ心也）
なゝく〳〵かきてとらせて、いかゞ見給ふらんと思
（この付句のよしあし也）
ふに、わびしこれが事をきかばやと思ふに、そしら（付句あし）
（くはこのさたきかじと也）
れたらば、きかじとおぼゆるを、としかたの中將な
ど　○公卿補任曰源俊賢太宰權帥高明公二男母右大
臣師輔公三女長德元年八月廿九日參議從四位下

右兵衛督知ㇾ元
掌侍の官にせんと也清少をほめて也
なをないしに申てなさんと、さだめ給ひしとばかり
たれとも不知
ぞ、兵衛のすけ中將にておはせしがかたり給ひし、
少納言へそのうはさを
かたりし人也

枕草紙旁註卷七

●はるかなるもの

別行加行精進なと也修行の間はるか也
千日のさうじはじむる日　はんびの（緒）をひ（捻）ねりはじむる日　○桃花蘂葉曰或抄云近代半臂（ハンピ）以ㇾ小緒ㇾ結ㇾ之往古之例以ㇾ大緒一筋ㇾ結ㇾ之今世少ㇾ知人ㇾ又着ㇾ織物下襲ㇾ時用ㇾ同色半臂ㇾ襴緒皆織物也不ㇾ用ㇾ黑半臂ㇾ

みちのくにへゆく人のあふさかのせきこゆるほど、（續）むまれたるちごのお（長）となになるほど、大般若經御ど（經）きやうひとりしてよみはじむる　○大般若經一部六十卷　二百六十五品　大唐玄弉三藏飜譯なり
十二年の山ごもりのはじめてのぼる日　○十二因緣の觀法を心に得るをもとゝして十二年といふ緣覺位の修行地也
（方弘前注にあり）まさひろはいみじく人にわらはるゝものかな、（なぶらるゝ也）（方弘の）おや（人のわらふを）などいかにきくらん、（方弘が）供にありくものども、いと人々しきをよびよせて、なにしにかゝるものにはつか（外の人）

はるゝぞ、いかゞおぼゆるなどわらふ、ものよくす（呉服のたちぬひする所にて）るふたりにてしたがさね（方弘が下襲）の色、うへのきぬ（袍）なども、人よりもよくてきたるを、しそく（紙燭也方弘がそこつ也）さしつけやき、あるはこれはこと人（他の人に也）にきせばやなどいふに、げにまた詞（かた言まじりにいふなるべし）づかひなどぞあやしき、里（里へ）にとのゐもの（よるのもの也）とりにやるに、おのこふたりまかれといふに、ひとりしてとりに（男の詞）まかりなんものをといふに、あやしのおのこやひと（方弘が詞）りしてふたりがものをばいかでかもたるべきぞ一ま（一升入）すがめ（の瓶）に二ますはいるやといふを、なでうこと〻し（他人は何條こと〻も）（方弘のもとに）（しるしとも也）る人はなけれどいみじうわらふ、人のつかひのきて（方弘詞）御返事とくといふを、あなにくのおのこや、かまど（竈）にまめ（豆）やくべたるぞ、（せはしきたとへ也）この殿上のすみ筆（とのゐ所の墨筆也）なにもの〻ぬすみかくしたるぞ、いゐさけ（飯酒）ならばこそ、ほしう（欲の字）して人のぬすまめといふをまたわらふ、女院なやませ給ふとて　○榮花物語しはすにも成ぬればおほやけわたくしわかぬ世のいそぎにて所わかずいとなみたりかゝるほどに女院ものせさせ給ひてなやましおぼしめしたり殿御心をまどはして下略　○紹運錄曰

東三條院詮子也圓融院后一條院御母法興院入道二女母藤原中正女也正曆二年院號出家長保二年失給四十六歲

（方弘が）御使に參かへりたるに、院（女院）の殿上人はたれ〳〵かあ（方弘答）りつると人のとへば、それかれなど四五人ばかりい（院を退出の人々と也）ふに、またはとゝへば（その外はと也）、さてはいぬる人どもぞありつるといふを、笑ふもまたあやしき（あまりすげなき故に）事にこそはあらめ（人のなき間に）人まによりきて我が君（清少をかしつきて也）こそまづものきこえむ、まづ〳〵人ののたまへる事（人の言傳ともなるべし）ぞといへばなに事ぞとて（清少）几丁のもとにさしよりたれば、むくろ（軀殼）ごめにより給へと（わらふとてのいひなし也）いふを、五たいごめにとなんいひつるとてまたわらふ、除目の中の夜（三日ある中の夜也方弘が）さしあぶらするに、とうだい（燈臺）のうちしき（油單也下にしくもの也）をふみて、たてるにあたらしきゆたんなれば、つよう（強）とらへ（捕）られにけり、さしあゆみてかへれば、やがてとうだいはたふれ（倒）ぬ、したふづ（シタフヅ）は　○和名襪說文足衣也和名志多久頭　東山左府說襪錦禮服之時用レ之練貫上﨟及顯職之人用レ之平絹下﨟及老者用レ之（したふづはぬけてゆく也）うちしきにつきてゆくにまことに道こそしんどう（震動）し

どしめく也　頭の音塞なきに也
たりしか、蛩つき給はぬほどは、殿上の大はんには人　大盤　盤
もつかず、それにまさひろは、まめ一もりをとりて
小障子　そろりと也　方弘を引出して也
こさうじのうしろにて、やをらくひければ引あらは
して、わらはるゝことぞかぎりなきや

(圏)關は　月令章句曰關在境所以察出禁入也
近江相坂　攝津　奥州　同國
あふさかのせき　すまのせき　しらかはの關　ころ
同國　ふちのうら葉の卷にもりにけるくきたの
ものせき　くきだのせき　○能因が歌枕に菊多と書
關を河口のあさきにのみはおほせざらなん
てくきだとよむとあり
同國禅關　八雲に有楽号　伊せ　駿河
はゞかりのせき　たゞこえの關　すゞかのせき　よ
同　兼盛家の集
こばしりの關　清見がせき○よこはしり清見が關の
通ひぢにいつといふ事はながくとゞめつ　これな
れば富士あし高の關のあはひ也是仙覺師の註也
近江　奥州由々の關
みるめの關　よしくのせきこそ、いかにおもひ返し
奥州也よしく
たるならんと、しらまほしけれ、それをなこその關
の關の一名也
とはいふにやあらん、あふさかなどをまでおもひか
あふさかのせきよりよしくの關まできてあふさかまでおもひかへ
へしたらばわびしからんかし、○あふさかはこえに
したらばわびしからんと也
しものをいまはたゞなこその關の名こそ惜しけれ

伊豆足柄
あしがらの關
山城大荒木　(圏)もりは森音參采木貌
おほあらきのもり　河内　しのびのもり　伊豆　古々井
駿河木枯　和泉篠田　信太とも　こゝ井のもり
こがらしのもり　しのだのもり　攝州生田　いくたのもり　こ
山城木幡　八雲に有橘樓の森　未考菊多
わたのもり　うつぎのもり　きくだのもり　い
和州岩瀬　八雲に有　立聞　山城　未考黒槻
はせのもり　たちぎゝのもり　ときはのもり　くろつ
攝州神並　八雲ニ寝　山城浮田
きのもり　神なびのもり　うたゝねのもり　うきだ
未考植槻　山城岩田　伊勢讃具
のもり　うへつきのもり　いはたのもり　たれその
未考
もり　かうたてのもり　といふがみゝとゞまるこそ
あやしけれ、もりなどいふべくもあらず、たゞ一木
あるをなにゝつけたるぞ。う月つごもりに長谷寺に
參詣也
まうづとて、よどのわたりといふものをせしかば
○淀　山城久世郡自王城三里西南也　たつ時の
かさねかはらけなかりせばいくたびよどのわたり
奥　菖蒲　薦
せましや俊頼
舟にこしをかきすへてゆくに、さうぶこもなどのす
水上に見えたる體也
ゑみじかくみえしを、とらせたれば、いとながゝり
ける、こもつみたる舟のあるきしこそいみじうおか

しかりしか、たかせ（河内の名所也）のよどにはこれをよみたるなめりとみえし　○こもまくらたかせ（六帖歌）のよどのかるこものかるとも我はしらでたのまん

三日（長谷より）にかへるに、雨のいみじうふりしかば、さうぶかるとて、かさのいとちいさきをきて、はぎ（脛也あしはぎ也）いとたかき、おのこわらはなどのあるも、屏風の繪にいとよくにたり、

●ゆは博物志曰凡水源有二石硫黄一其泉則溫也

なゝくりのゆ（七久里信乃）　有馬のゆ（攝州）　たまつくりのゆ　○愚考玉造江は攝州也玉造河は江州たまつくりと計は津の國也もしこれらのうちに出湯などや有けんおぼつかなし

●つねよりもことにきこゆるもの（管絃也）

元三の車の音　とりの聲（是も元三のあした也）　ものゝねはさら也　曉のしはぶき

●ゑにかきてをとるもの

なでしこ（瞿麥）　さくら（櫻）　やまぶき（款冬の二字）　ものがたりにめでた（愛する也）しといひたるおとこをんなのかたち（草紙の内に也）　○東坡曰世多以二畫畫一山水竹石人物一者未レ在二以レ畫レ花者一也汴（ベン）人尹白能レ之　桐つぼの卷にゑに書たる楊貴妃のかたちはいみじき繪師といへども筆かぎりあればいと匂ひなしとある心也

●ゑにかきまさりするもの

松の木　あきの野　山さと　山路　つる　しか

歐公曰古畫畫レ意不レ畫レ形この語畫圖（ブワト）の至極也よく思ふべし

ふゆはいみじくさむき　なつはよにしらずあつき

○後漢の劉褒（リウホウ）　雲漢の圖を書に見るもの皆あつかりき北風をゑがくをみれば見る人さむかりきこの事博物志に有是を圖中の寒熱といふ也愛の心はいみじうさむきはくるしけれ共ふゆがれのけしき雪霜のさますみがまのやうすべて興ある事也また暑天も身にとりてたえがたけれども螢とびちがひくゐなのたゝくゆふがほの白くみえてかやり火ふすぶるたぐひ繪に書て景氣まさりぬるとぞよくその心をしるべき也

●あはれなるもの

孝ある人のこ　○爾雅善事二父母一爲レ孝　陳氏曰深意在二善字上一善事之中有二無レ限（窮）能之事一未レ易

ゝ言也
御嶽　精進
しかの音、よきおのこのわかきみたけさうじしたる、
引ゐて也　稽首也
ゐてゐたらむ、あかつきのぬかなどあはれ也、むつま
何　參詣路次の
しき人の目さましして聞らん、おもひやり、まうづる
行粧也
ほどのありさま。いかならんとつゝしみたるに、た
路次
金峯山
いらかにまうでつきたるこそ、いとめでたけれ、ゑ
のやつれに烏帽子の損じたる也
ぼうしのさまなどぞ、猶人わろき、いみじき人と聞
ゆれど、こよなくやつれて、まうづとこそはしりた
みたけの次でにのぶ方があはれを書し也
るに、右衛門の佐のぶかたは、あぢきなき事也　○
源氏家譜敦實親王の子正二位左大臣重信の子從四
上宣方なるべし母高明公の女
のぶ方の詞也人はやつれて參り共われはきれいにせんに何條事かあ
たゞきよききぬをきて、まうでんになでう事かあら
あしききぬにて參れと
らん也
ん、かならずよもあしくてよと、みたけのたまはじと
みたけはのたまはじと也　のぶかたの裝束也
て、三月つごもりに、むらさきのいとこきさしぬき
直衣の色表青裏黄也　目おどろく也
しろき青やまぶきのいみじく。おどろ〳〵しきなど
にて、たかみつがとのもりのすけなるは　○藤氏家譜
云三條右大臣定方より五代中宮大進宣孝の息主殿
助隆光長保三年歿八年廿九

藏人なれば也　給をきたる事也
あを色のきぬ、すりもどろかしたる、すいかんはか
まにて　○桃蘂華葉云水干の事紗にても平絹生にて
も又色は白くても何にても大納言の時まで内々に
着二用之一
のぶ方に　往來のものやつれぬすがたをあやしむ也
打つゞきまうでたるに、かへる人もまうづる人も、
めづらしくあやしき事に、すべて此山道にかゝるす
のぶかたの　あさましかりとよむべし
がたの人みえざりつと、あさましかりしを、卯月晦
のぶかたの　みなづきとをかあまりとよむべし
日に歸て、六月十餘日のほどに、筑前のかみうせに
のぶ方筑前の守に　のぶかたがきれいにして參詣せ
しかはりに成にしこそ、げにいひけんにたがはずも
んといひしにたがはぬ也
ときこえしか、これはあはれなることにはあらねど
みたけの利生也　ながづきつごもりかんなづき
もみたけのついで也、九月晦日、十月ついたち、たゞ
あるかなきかに聞つけたる、きり〴〵すのこゑ、には
家持家集
とりの子いだきてふしたる、秋ふかき庭のあさぢに
つゆのいろ〳〵玉のやうにてひかりたる、○松かけ
のあさぢがうへのしらつゆをけさずて玉にぬくも
のにかも
戀のみちのあはれさを書り
河竹の風にふかれたるゆふぐれ、あかつきにめさま
親にても誰にてもおもふまゝならぬ也
して聞たる、よるなども、すべておもひかはしたるわ
かき人の中に、せくかたありて、こゝろにしもまか

せり、山里の雪、おとこも女もきよげなるがくろき（衣服きたる也）きぬきたる、二十六七日ばかりのあかつきに、ものがたりしてゐあかしてみれば、あるかなきかに、こゝろぼそげなる月の、山のはちかくみえたる、秋の野、としうち過したる僧たちのおこなひしたる、○

朗詠香火一爐燈一盞白頭夜禮佛名經

あれたるいへにむぐら（蓬）はひかゝり、よもぎなどたかくおひたる庭に、月のくまなくあかき、いとあらうはあらぬ風のふきたる、（是より筆のすさび也）む月に、寺にこもりたるはいみじくさむく、雪がちに氷りたるこそおかしけれ、雨などのふりぬべきけしきなるはいとわろし、（寺にこもるついで也）はつせなどにまうで、（聽衆の局也）つぼねなどするほどは、くれば（擣階也だん〳〵のきざはし也　うつほもの類に）しのもとに、輿にのぼり給ふべきほどのくればしは色々の木をませ〳〵につくりて

車引よせてたてるに、（びやく衣の體也）おびばかりしたるわかき法師のあしだといふものをはきて、いさゝかつゝがもなくおりのぼるとて　○南史謝靈運、尋レ山陟レ嶺必造二（イタル）幽峻一、木履上レ山去二其前齒一、下レ山去二其後齒一

なにともなき經のはしをよみ、（倶舍頌）くさのじゆをすこしいひつゞけありくこそ所につけておかしけれ、○五時名目如來滅後九百年天竺世親菩薩出世作二倶舍論卅卷一翻譯名義曰倶舍是爲レ藏即包含攝持之義也

（清少）我のぼるは、いとあやうく、かたはらによりて、高欄おさへて（とりつく也）ゆくものを、（心）たゞいたじきなどの樣に（昔になれし僧の心安き體也）おもひたるもおかし、つぼねしたりなどいひて、（こしらへたる也）くつどももてきて（車より）おろすきぬかへさまに引かへした（よその參詣の體也）るもあり、（背子）裳からきぬなどこは〴〵しくさうぞきた（とりつくら）るもあり、（ふさまの也）ふかぐつ（深履）はうくは（半靴）などはきて、らう（廊）のほどなどくつすりいるも、（昔宮人の參籠とも書也）うちわたり（禁中）めきてまたおかし。○和名深履（フカクツ）其頭短者爲二半靴（ハウクハ）一　○桃花蘂葉靴深沓（フカクツ）同事也束帶の書に靴赤地の錦帶はひきはだの皮有二黄金物一節會の時内辨外辨公卿若行幸供奉の

時用レ之

（内外をゆるされつかはるゝ人也）うちとなどゆるされたる、（女房たちに）わかきおのこども、家のこなどまた立つゞきて、（道の高下の案内也）そこもとはおちたる所に（ひきゝ也）侍るめり、（高き所也）あがりたるなどをしへゆく、なにものか（外の參詣人）也あらむ、（清少もとへ）いとちかくさしあゆみ、（先立）さいだつものなどを

かの若き男家の子の下知する也
しばし人のおはしますに、かくはまじらぬわざなり（女におとこの）
などいふを、げにとてすこし立をくるゝもあり、ま
いやしき人の體也
たきゝ（疾也）もいれず我まづとくほとけの御まへにとゆく
もあり、つぼねにゆくほども、人のゐなみ（居並）給へるを
とをりゆけばいとうたてあるに、いぬふせぎの中を（佛だんの中しきゐ也）
見いれたるこゝち、いみじくたうとく、などて月ご
ろもまうでず過しつらんとてまづ心もおこさる、（殊勝なるにより發心せらるゝ）
也
みあかし常灯にはあらで、うち（内陣）に又人の奉りたる、お
御明
そろしきまでもえ（燃）たるに、○序品曰爾時有ㇾ佛號ニ日
月燈明如來燈明一○科註曰日是惠月是定定惠者是
自行德也灯明者是化他之德也
的歴の二字
佛のきら〳〵とみえ給へる、いみじくたうとげに、
手ごとに、文（願文など也）をさゝげて、らいはん（禮盤）にむかひ、てひ（手攤）
ろぎ、ちかふも、（回明むすぶ心也）さばかりゆすり（動）みちて、とりはなち
願文を
て、きゝわくべくもあらぬ、せめて（せめ聲也願文よむ聲也）しぼりいたしたる
の心歟
こゑ〴〵の、さすがにまたまぎれず、せんだんの（イ本千灯也栴檀香）御
こゝろざしは、なにがしの御ためと、わづかに聞
ゆ、火打かけて、（香の火也）おがみたてまつるに、こゝにかう（清少のこ）
もりゐし所へ法しなとのしきみなつかはす也
さふらふといひて、しきみの枝をおりてもてきたる
などの、たうとさも、なをおかし、いぬふせぎのかた（佛だんの方より）
より、法師よりきて、（清少の局へ）いとよく申侍りぬ、（願文の事をよく啓白せし也）いくかば
かりこもらせ給ふべきなどとふ、しかじか（かやう〳〵の心也）の人こも
らせ給ふなどいひきかせていぬる、（法しの體也）○文選註曰云々（云々の字也）シカ〴〵
謂ニ辭多略不ㇾ能ㇾ載ㇾ之也（師古註云々猶ㇾ云ㇾ如ㇾ是知ㇾ是也）
局にこもる人にかす心也
すなはち火おけくたものなどもてきつゞかす、はん
來
ざうに手水など入て、たらゐの手もなきなどあり、
○和名匯　桁中有ㇾ道可ニ以注ㇾ水之器也俗用ニ楾字一
未ㇾ詳但和名之義或說有ニ桁半挿ニ其内一故呼爲ニ半
ザウ
挿一也
法師の詞也清少のつぼねぜはけれはともの人々はそこ〳〵へと也
御ともの人は、かの坊になどいひてよびもてゆけば
かはり〴〵ぞゆく、すきやうの（誦經）かねの音、我名也と（願文にのせたる名也）
きけばたのもしくきこゆ、かたはらによろしきおの
このいとしのびやかに、ぬか（額突）などつく、たちゐのほ
ども、こゝろあらんときこえたるが、いたくおもひ
入たるけしきにて、いもねず（寝もねず也）おこなふこそいとあは
れなれ、うちやすむほどは經たかくは聞えぬほどに（地聲によむ也）

よみたるも、たうとげ也。(經の聲を)たかくうち出させまほし
きに、ましてはなゝどをけざやかに聞にてはあらで
すこしのびて。(いんろいして鼻かむ也)かみたるは、何事をおもふらん、
(あはれにみゆればかたはらよりおもふ體也)かれをかなへばやとこそおぼゆれ、(もとは也)日ごろこもりた
(しつかなるてい也)るに、ひるはすこしのどかにぞはやうはありし法し
(宿坊也)の坊に、(下人也)おのこどもわらはべなどのゆきて、(清少納言の)つれづ
れなるに、たゞかたはらに、かいをいとたかく、に
はかにふき出したるこそおどろかるれ　○法華經序
品曰世尊欲ㇾ説二大法一雨二大法雨一吹二大法螺一擊二大
法鼓一演二大法義一科註曰吹二大法螺一者警二大衆心喜
瑞一
きよげなるたて文などもたせたるおのこの、ずきや
うのもの、うちをきて、たう童子などよぶこゑは、山
ひゞきあひて、きら〳〵しうきこゆ。○江次第堂童
子行二(ハナハコ)華筥一北ノ上﨟堂童子行二講義座一下﨟者行二凡
僧講師南ノ一上﨟行二僧綱座一下﨟行二聽衆座一次散華
立二佛前一云々堂童子收二華筥一退出
かねのこゑひゞきまさりて、いづこなるらんときく(たれとのゝ願文ぞと也)
ほどに、やんごとなき所の名うちいひて、御さんた(產)

いらかに、(句)(おとこの僧にたのむ心也)敎化などする所に、(少氣づかひ也)いかならんとおぼつ
かなく、ねんせまほしく、これはたゞ(常なる心也)なるおりなゝ
めり、む月などには、たゞいとものさはがしく、(長谷寺へ)も
(立願の事也)のゝぞみなどする人の、ひまなくまうづる、みるほ
どに、(ほだいのつとめ也)おこなひもしやらず、日のうちくるゝに、ま
うづるは、(通夜也)こもる人なゝめり、小法しばらのもたぐ(擡)べ
くもあらぬ、(こもり所たしつらふさま也)屛風などのたかき、いとよくしんたい(進退也)
し、たゝみなどほうどたてを(置)くとみれば、たゞつぼ
ねに出て、いぬふせぎに、すだれをさら〳〵とかく
るさまなどぞ、いみじくしつけたるはやすげ也、そ
(こもりし人の歸るさま也)よ〳〵とあまたおりて、おとなだちたる人のいやし
からず、しのびやかなる御けはひにて、かへるにや(下人にいひつ)
あらむ、(くる心也)その(局の内)うちあやうし(火の用心也)火の事(制)せいせよなどいふ(これもこもりし人の子なるべし)
もあり、七つ八つばかりなるおのこゞの、(愛敬)あいぎや
うづき、おごりたるこゑにて、(つかひもの也)さふらひ人よびつけ
ものなどいひたるけはひいとおかし、またみつばか(氣色也)
りなるちごの(寢切)ねをびれて、(かの子の乳母)うちしはぶきたるけはひ
もうつくし、めのとの名、母などうち出たるも、こ

そのめのと母など是そとしりたき也　是より以下勤行の人の事也
れならんといとしらまほし、よひと夜いみじうのの
わめく也
しりおこなひあかすに、ねもいらざりつるを、後夜
などはてゝ、すこしうちやすみねぬるが、みゝにそ
その宗旨の經をよむ也　あま　あゝ〳〵と音聲によめは
の寺の佛經ないとあら〳〵しううち出てよみたたるに
殊勝になしと也
わざとたうとしともあらず、修行しだちたる法しの
よむなゝめりと、ふとうちおどろかれてあはれにきこ
ゆ、またよるなどは、かほしらで人々しき人のおこ　青鈍
なひたるが、あをにびのさしぬきのはたばりたる、し　幅ひろこりし心也
ろききぬどもあまたきて、子どもなゝめりとみゆるわ　裝束せし也童などぐした
かきおのこの、おかしううちさうぞきたる、わらはな　かしつく體也
る也
どしてさふらひのものどもあまたかしこまりいねう　圍遶
行ひのうちしはしかこふてい也
したるも笑し、かりそめに屛風たてゝぬかなどす
こしつくめり、かほしらぬはたれならんといとゆか
しりたるはさなゝめりとみるもおかし、わかき人と　又こもりし中に若き人
の遊興のてい也
もはとかくつぼねどもなどのわたりにさまよひて、　吟呻也
ほとけの御かたに目見やりたてまつらず、別當よど
さいやく内に又外よりよひいいぬる也た
よびてうらさゝめけば、よびていぬるゑせものとは
いものとはみえぬ也
みえずかし、二月つごもり、三月朔日ごろ、花ざかり

にこもりたるもおかし。きよげなるおのこどもの、
同行のてい也かりきぬの色也ゝ柳は表白裏青
しのふと見ゆる、二三人さくらに青柳などおかしうて
裏は表亦
くゝりあげたるさしぬきの、すそもあてやかに見な　括　裾　貴
よいころのおのこに也
さるゝ、つき〳〵しきおのこに、さうぞくおかしう　かざりの事
いたせて也
したるゑぶくろいだかせて　〇西宮記云着行縢借
袋　鷹の餌ないころゝもの也
小舍人わらはども、紅梅もえぎのかちぎぬに、色々　表紅裏紫　常の色　擣衣
のきぬすりもどろかしたるはかまなどきせたり、
花などおらせて、さふらひめきて、ほそやかなるも　つれて也
のなどぐして、ごんぐうつこそおかしけれ、〇金鼓（ゴング）
卯名比　真加■最勝王經云妙幢菩薩於夢中見大金鼓〇江
次第曰打金鼓唄伽發音聲定者隨音徐行
さそゆへあまた人ならんと也
さぞかしとみゆる人あれど、いかでかはしらん、う　それとも人はしらましと也
局の前を
ちすぎていぬるこそ、さすがにさう〳〵しけれ、け　行ひもせずにいぬるはすさましと也
たれとしられましと思ふ也
しきをみせまじものをなどいふもおかし、かやうの　寺ならでも也　内のものは
所にて寺ごもり、すべてれいならぬ所に、つかふ人
かりにて也
のかぎりしてあるは、かひなくこそおぼゆれ、なをお

なじほどにて、（同輩にて也）ひとつ心にて、おかしき事もさま〴〵いひあはせ（かたり合する知音也）つべき人、かならずひとりふたりあまたもさそはまほしそのある人の中にも、くちおしからぬもあれども、めなれたる（ぬつらしからぬ也）なるべしおとこなども（女のみならずおとこもさおもふかこの地の詞也）さおもふにこそあンめれ、わざとたづねよびもてありくめるはいみじ

●わびしげにみゆるもの（たえがたき心也）

六七月のむまひつじ（午未）の時ばかりに（暑気のかんにんならぬ時也）きたなげなるくるまに、ゑせうし（よからぬ牛也）かけてゆるがしゆくもの、雨ふらぬ日はりむしろしたるくるま（雨おほひ又服のある人の車也）、ふる日はりむしろせぬも、とし老たるかたゐ（乞食）、いとさむきおりもあつきにも、げす女のなり（びんぼうの女也）あしきが子をおひたる　ちいさき板屋（貧者の家）（屋也）のくろき（黑の字）がきたなげなるがあめにぬれたる、雨いたくふる日（前斷）ちいさきむまにのりてせんくしたる人の、かうふり（冠）もひしげ、うへのきぬ（袍）もうへのきぬも下がさね（褻）（あめにぬれて）裳ひとつになりたる、いかにわひしからん（雨にぬれても）とみえたり、されどなつはよし

●あつげなるもの

随身のおさ（長）のかり衣　○随身前に委近衛の番長也璟（クヘ）翠軒（ジヘイ）田近衛随身の上臈を番長といふ秦（ハタ）氏下毛（シモツケ）氏等いまに随身たる也裝束に褐衣（ホリキヌ）冠（カリテウ冠）又は狩衣に花をつく時により出立樣々也

そうのけさ（僧）　○悲華經曰袈裟聖人表式也隨ニ順寂滅行慈悲心一所レ應レ服也

でいの少將　○江次第云五月最勝王經講下云次出居（デイ）次將等參上昇殿自ニ青鎖（タイケン）門一帶劍持レ笏如レ恒

いみじうこゑたる人のかみおほかる、六七月のずほう（修法）のあざり（阿闍梨）日中の時などおこなふ　○菩提資糧論云阿遮（アサリヤ）梨夜隨曰ニ正行一　六十二代後一條院御宇長元七年十二月敎圓始任ニ阿闍梨一この宮の始也又或記曰安惠内供始任ニ此宮一是日本阿闍梨のはじめ也

またおなじころのあかがねのかぢ　○四聲字苑云鍛打ニ金鐵一爲レ器也治燒レ鐵錯鑠也鍛治の二字段野也かぢとは訛也

●はづかしきもの

いろこのむおとこのこゝろのうち、いざときよゐの（寢ごうはなき也）こ

のはつしきゆあとにあり　ヨイヰ
僧　○東山左府記曰夜居護持僧候二間加持二間
有観音夜居僧加持所也天台坐主寺長吏東寺長吏
也
密　かげに也
みそかぬす人のさるべきものゝくま〴〵にかくれゐ
ぬす人のだまるを
て、いかにみるらんをばたれかはしるべき、くらき
まぎれにしのびやかに、ものとる人もあらんかし、
みるもの〻もおなしぬす人なれは也　よゐの
それはおなじこゝろにおかしとやおもふらん、よゐ
僧のねずしてみる也
の僧は、いとはづかしきもの也わかき人々のあつま
りては、人のうへをいひわらひそしりにくみもする
熟　よゐの僧の　おとなしき人
を、つく〴〵と聞あつむるもはづかし、あなうたて
のよゐの僧のきくになといさむる心也
かしかましなどおまへちかき人々のものけしきばみ
わかき人の　人ごとのみいひ〳〵て也
いふをきゝいれず、いひ〴〵てのはてはうちとけて
拾遺
ねぬるもはづかし　○世の中をかくいひ〴〵ては
是よりむことの心中のはつかしき也　女を
〴〵はいかにやいかにならんとすらむ
おとこはうたておもふさまならず、もどかしうこゝ　女也
氣にいらぬ也
ろづきなき事ありとみれど、さしむかひたる人をす
賺の字あしらふ心也　よのつれのおとこさへ好色
かしたのむるこそはづかしけれ、ましてなさけあり
の心也むとこ也　猶よく女をすかす也
このもしき人にしられたるなどは、おろかなりと思
むとこ也

大切にしてみする也
ふべくも、もてなさずかし、こゝろのうちのみもあら
此の女の事はかの女にかたりなと也
ず　またみなこれが事はかれにかたり、かれが事は
身の上はしらで　それがはつかしと也
これにいひきかすべかめるを、我事をばしらで、か
情もしら
くかたるをば、こよなきなめりとおもひやすらむ、
女の心也　おとこを見かぎりて也
いであはれまたあはじとおもふ人にあへば、こゝろ
ぬおとこにははつかしき事なき心也
もなきものなめりとみえてはづかしくあらぬもの
ぞかし、
かのたのもしけなきおとこの事をいふ也　おとこの　女の心の
いみじくあはれにこゝろぐるしげに、見すてがたき
さやうになさけなきおとこの
事を、いさゝかなに事もおもはぬも、いかなる心ぞと
有　親兄弟のなき宮づかへ人を也　もど
こそはあさましけれ、さすがに人のうへをば、
ちぎりて也　懐姙したる也
き、ものをよくいふに、ことにたのもしき事もなき
宮づかへの人などを、かたらひて、たゞにもあらず
きれいにかまはぬはつかしきと也
なりたるさまなどを、きようしてなどあめるは
いひのこしたる筆法也
● むとくなるもの　無德無益にせんなき心也
潟
しほひのかたなるおきなる舟　○しほのみちひの事
余安道唐庶讚かれ是論するもの古今おほけれとも
程子邵子の説にすくへからす性理大全廿七に委
鬘かもじの事　梳　せ
かみみじかき人のかづらとりおろしてかみけづるほ

んなき心也
ど、おほきなる木の風にふきたふされて根をさゝげ
て也
てよこたはれふせる　すまひのまけているうしろで
いふ事せんなき心也
○相撲　日本紀曰垂仁天皇御時七年始有之又聖
武天皇神龜三年始諸國相撲人等被召云々
ゑせものゝずさかうがふる　おきなのもとゞりはな
老人の落髮時にかくれてせんなき也　心たらず也　怨也けたむ心也
ちたる　人のめなどのすゞろなるものゑんじして
女の
かくれたるをかならず尋さはがんものをとおもひた
さしも尋ぬ也
るにさしもおもひたらずねたげにもてなしたるにさ
女のほかに家出してもえゐぬ也いれと女のかへりきたる也
てもえたびだちゐたらねばこゝろと出きたる、こま
狛犬獅子
いぬしゝもふものゝおもしろがりはやり出ておどる
そのまふものゝ心にもむやくの事とおもふ也
おし音
修法
すはうは佛眼眞言などよみ奉りたる、なまめかしう
ブツゲン高上の法なればなまおろかなるものはせんなき事
と思ふべし
たふとし　○佛眼亦名二佛母尊一一切諸佛菩薩の功德
をこの一尊にすぶる也○曼陀羅圖には佛眼尊住二
中央一佛菩薩諸天圍遶し給ふ也　大日經釋云眞如言
語故名二眞言一　風雅水音有情依報皆悉出二音聲一
眞言阿字卽法也眞如言語卽論なる故眞言といふ
無中
●にしたなきもの似合ぬこゝろ也

外人
こと人をよぶにわれかとてさし出たるもの、まして
ものとらする折は、いとゞをのづから人のうへなど
きい
うちいひそしりなどもしたるを、おさなき人の聞と
すまして
りて、その人のあるまへにいひ出たる、あはれなる
愁のあるにの
事など人のいひてうちなくに、けにいとあはれとは
聞ながら、なみだのふつと出こぬいとはしたなし、
泣
なきがほつくり、けしきことになせどいとかひなし、
涙の出ねば也
めでたき事をきくには、まづすゞろにたゞいできに
なみだの
一條院
こそ出くれ、八幡の行幸の歸らせ給ふに　○一條院は
圓融院第一の子諱は懷仁永延元年十一月石淸水行
幸十二月加茂への行幸これを兩社の行幸といふ
東三條院行幸御覽のさじき也
女院、御さじきのあなたに　○一條院の母正曆二年
十月尼となる后の院號是よりはじまる
風輦
御こしをとゞめて、御せうそこ申させ給ひしなど、
院よりの　帝の
いみじくめでたく、さばかりの御ありさまにてかし
女院の消息を
畏せさせ給ふ也
こまり申させ給ふがよにしらずいみじきに、まこと
少しばかり也　少々ほ也　白粉の洗はれて也
にこぼるればけさうしたるかほもみなあらはれてい
宣旨也
かにみぐるしかるらんせんじの御つかひにて、た

齊信
ゝのぶの宰相中將の御さじきに參給ひしこそいとお（女院の）
かしうみえしか、たゞ隨身四人いみじう、さうぞき（宰相中將のめしぐせられし也　裝束したる也）
たる馬そひのほそうしたてたるばかりして〇江次第（御馬の口とり）
云若爲二非使別當一者馬副八人本府隨身四人
一條院の宅の二條京極ありその地なるべし
一條の大路ひろうきよらにめでたきに、むまをうち
はやめて也　女院の御棧敷より遠くより齊のぶ卿上馬
はやして急參りて、すこしとをくよりおりて、そばの
し給ふ也女院の
すゝまへにさふらひ給ひし、院の別當を申給ひし、（道祇卿也）
宣旨の取つぎ申給ふ也齊信卿也
御返しうけ給りて、またはしらせ、かへり參給ひて
鳳輦
御こしのもとにて、そうし給ひしほどいふもおろか
女院の前を帝の渡御也
なりや、さてうちわたらせ給ふを見奉らせ給ふらん、
女院の御こゝろおもひやり參らするは、とびたちぬ
べくこそおぼえしか、それにはながなきをしてわら（清少此日出たきに長泣す）
ろほど泪　むせぶと也　大方の人の事にさへ泪のうかふにまし
はるゝぞかし、よろしききはの人だになをこの世に
て天子の事には也　恐れ多し
はめでたきを、かうだにおもひまいらするもかしこ
と也
しや　關白殿のくゐ戸より出させ給ふとて、女房の（道隆公也　瀧口の戸の西也　侍ふ一宮也）
廊にひまなくさふらふを、あないみじのおもとたちや（居ならびし也　鳴呼　女房の中を）
女房達也
翁をばいかにおこなりとわらひ給ふらむと、わけ出
關白とゝ自分の事也

させ給へば、とぐちに人々のいろ／＼の袖口にして
みすをひきあけたるに、權大納言殿御くつとりては（道隆公の子伊周公正暦三年權大納言）
かせ奉らせ給ふ、いとものし／＼しうきよげに、したが（關白殿の　關白どのゝ）
さねのしりながく所せくてさふらひ給ふ　〇桃花蘂
葉抄曰御下襲の尻也代々の制不レ同近代攝家に用
來る分は納言以前八尺大臣一丈關白の時一丈二尺
許也尤時に隨ふ也
先あなめでた、大納言ばかりの人にくつとらせ給ふ（程　御弟也）
よとみゆ、山の井の大納言そのつぎ／＼さらぬ人々
公卿上達部の衣裝也
くろきものひきちらしたる　〇公卿補任曰道賴兼家
公爲二六男一實道隆子也兼家公爲二養子一
藤つぼのへいのもとより、登花殿のまへまでゐなみ（弘徽殿ゝ西五間四面　居並）
たるに、いとほそやかにいみじうなまめかしうて、御（關白どの）
太刀也
はかせなど引きつくろひ、やすらはせ給ふに、宮の（關白殿の體也）
道長公也
大夫殿の、〇勘物云御堂殿正暦二年權大納言中宮大
夫如レ元
清涼殿のまへにたゝせ給へれば、それはゐさせ給ふ（道長のつくばらせ給ふ）
ましとおもへは也
まじきなめりとみるほどに　すこしあゆみ出させ給（道隆公也）

道長公の
へば、ふとゐさせ給ひしこそ、猶いかばかりのむかし
関白との前世の因果いみじき故と思はるゝ也
の御行ひのほどならんと、見奉らしこそいみじかり
くすんで也
たれとも不知 齋日也
しか、中納言のきこえのいみの日とてくすしがり行ひ
給れ也 念珠 句 関白殿の榮花
給ひしをたべそのずゞしばし、おこなひてめでたき
なうらやみてかと也 わらふに似
身にならむとかとて、あつまりてわらへどなをいと
す関白殿は日出たしとなり中宮の
こそめでたけれ、御きへに聞しめして、ほとけにな
関白の榮花より也
りたらむこそ、これよりは、まさらめとて、うちえ
后宮のさまの又の心后宮の御にたくらへ給ふに
ませ給へるに、またもめでたくなりてぞ見参らする、
て関白との猶ありがたしと也
○梵佛曰ニ佛陀一譯曰レ覺所謂自覺覺他覺行圓滿令略
稱レ佛
ダイブ 前にありし事也 清少の
大夫どの丶ゐさせ給へるを、かへすがへすきこゆれば、
地に書し也関白との、事
れいのおもふ人とわらはせ給ふ、ましてこの丶ちの
后宮の
御ありさま、見奉らせ給はましかば、ことはりとお
ぼしめされなまし、九月ばかり夜ひとよふりあかし
たるあめの、けさはやみて、あさ日のはなやかにさし
前栽
たるに、せんざいの菊のつゆこぼるばかりぬれかゝ
透垣 羅紋 薄うすもののやうに
りたるもいとおかし、すいかいらもんずゝきなどの

もんのあるすゝき也 クモ
うへにかけたる蜘のすのこぼれのこりて、所々にい
蜘の糸也 蜘のすの露の
ともたえざまに、雨のかゝりたるがしろきたまをつ
見たて也 露 さきこほれたる
らぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれにおかし
けれ、すこし日たけぬれば、はぎなどのいとおもげな
さま也
りつるに、つゆのおつるに、えだのうちうごきて、人
露の落て萩の枝のはれしさま也
も手ふれぬに、ふとかみざまへ、あがりたる、いみじ
他の人は
ういとおかしといひたる、こと人のこゝろには、つ
ゆおかしからじと思ふこそまたおかしけれ、
是より又別也 躁
七日の若菜を人の六日にとりさばぎとりちらしなど
草の名也 子の字はやう也
するに、見もしらぬ草を、子どもの、もてきたるを、なに
引率也
とかこれをばいふととみにもいはず、いざなどこれか
いざ〳〵是々の詞也 耳無
れ見あはせて、みゝなぐさとなんいふといふもの丶
清少の詞也 耳なしくさならはきかぬかほも尤
あれば、むべなりけり、きかぬかほなるはなどわらふ
と也
に、またおかしげなる草のおひたるをもてきたれば、
清少歌也つめともさかぬはほかに等ぬはつれなしあまたの中にきく
「つめどなをみゝなぐさこそつれなけれあまたしあ
といふ草もあるものをと也 子供の事なれば
れば菊もまじれゝ」といはまほしけれど、きゝいるべ
聞もいれぬ也
くもあらず。

（又別段也）二月官のつかさにかうぢう（定考也）といふ事するはなに事にあらん、くじ（孔子）などはかけ奉りてする事なるべし

○定考　公事根原昔六位以上の加階をする人はかの藝能行跡を撰て榮爵を給ひける也上卿官の束の廊につきて事を行ふ次に朝所につきて三献の規式あり次に宴穩の座につくまたをの〳〵三献ありおほかた二月の列見におなし式兵の両省より諸司の輩の上日を選成する事を列見といふそれを書集めて奏するを擬階の奏といふこの人々を撰出して定侍るを定考と申也。

○列見二月十一日也公卿辨少納言外記史など參て太政官にておこなへる公事也六位以下の藝能あるものを撰て式兵の両省より卒し參れるを上卿めしよせて器量容儀をみる心也

（聰明也釋奠の昨也一條院后宮）そうめい（餅翅飯のたくひ也）とてうへにも宮にもあやしきものなとかはらけにもりて參らすを　○江次第五釋奠の所に寮官居二聰明一以二折敷高坏等一羞二公卿一註聰明者酢也餅梁飯粟黄乾棗也

（行成也）頭辨の御もとよりとて、主殿（使也）づかさゑなどやうのもの（繪をつゝみしやうに也）を、しろきしきし（色紙也）につゝみて、むめの花のいみじくさきたるにつけてもてきたる、（清少のもとへ）ゑにやあらんといそぎとりいれてみれば、へいだんといふものをふたつならべてつゝみたる成けり、和名類聚抄云餅餤中ニ納ルニ合鵝鴨等子ヲ并雜菜方截一名餅餤也餅餤者也猶此文章の躰西宮記にくはし

そへたるたてぶみに、けもん（花紋ちらし書也）のやうにかきて、進上へいだん一つ、（男文のやうにたはふれく清少に）み例によりて進上如レ件少納言殿にと（行成の送られし也任那トモ書也）て、月日かきて、みまなの成行とて、おくにこのおのこはみづから參らんとするを、○兼供自筆の姓氏錄の奥書に美麻那と書し也

ひるはかたちわろしとて參らぬなりと、いみじくおかしげに書給ひたり、おまへ（后宮の）に參て、御らんせさすれ（少納言の披露也）ば、めでたくもかゝれたるかな、（后宮の御詞也）おかしうしりなど、（へいたんのつゝみやうども也）ほめさせ給ひて、御ふみはとらせ給ひて、返事はいかゞすべからん、（清少の詞）このへいだんもてくるには、ものなどやとらすらむ、しりたる人もがなといふを聞しめして、（后宮の）

（惟仲）これなかゞこゑしつるよびてとへとのたまはすれば（后宮の）

（清少の）はしに出て、（惟仲）左大辨にものきこえも（后宮のめしかとおもひ）さふらひして、いはすればいと（麗の字也）よくうるはしうてきたり、○公卿補（て參りし體也）任并系圖曰平惟仲内藏頭（ゑりんつくりて也）大學頭勘解由長官參議左大辨中宮大夫太宰權帥中納言從二位寛弘二年五月於太宰府薨六十二備中國青河郡司女（めしにあらず）あらずわたくし事也、もしこの辨少納言などのもとに、（惟仲也）かゝるものゝまてきたる下部などには、（藤などゝゆる）する事や（かゝ也）あるとゝへば、（惟仲の詞也）さる事も侍らずたゞとゞめてくひ侍（太政官ノ外記史などをいふ也）る、なにしにとはせ給ふ、もし上官のうちにてえさせ給へるかといへば、（いかでさやうの事あらんと也）いかゞはといらふ、たゞ返しをいみじく、あかきうすやうに、（行成のみつからまいらんと）みづからもてもうて（するぞ）この下部は、（あろなうけてのたはふれ也）いと（一段消無禮の心也）れしたうなりなんみゆるとて、めでたき紅梅につけてたてまつるを、（行成清少所へ）すなはちおはし（行成の詞也）まして、下部さふらふとりたまへば、（清少の）出たるに、（紅梅に）さや（付しもしにや）うのものぞ歌よみして、（清少より）おこせ給へるとおもひつる、（歌はよますしていひしたはせ給ふなり）にびゞしくもいひたりつるかな、（世上の）女すこしわれはとおもひたるは、歌よみがましくぞある、さらぬこそかたらひよけれ、（行成の詞）まろなどにさる事いはん人はかへりてむ（無心）じんならむかしとのたまふ、（則光）のりみつなりやす（成康）（行成のものかたりに）などわらひてやみにし事を、（關白殿也）殿のまへに人々いとおほかりけるに、かたり申給ひければ、（關白殿清少をほめ給ふ詞也）いとよくいひたるとなんのたまはせしと人のかたりし、（女房たちのかたりせらるゝを）これこそ見（人のほめし事を語たれけ也）ぐるしき我はめともなりかし　○橘氏系圖云敏政則光（從四位上陸奥守歌人也吉原の祖也）（是ヨリ女房などのいひしろひしそゞろごと也藏人也歟）などてか、つかさえはじめたる、（任官の初也）六位しやく（一說笏）にしき（中宮職）の御ざうし（曹子）のたつみのすみのついぢのいたをせしぞさらににしひかしをもよかじ、まへ五位もせよかし（巽）（築地の位版につく事五位はしか）（らぬ事也又六位もせいてた位のみなせするぞとの心もあ）などいふ事を、いひ出てあぢきなき事どもを、（かゝるはしたなきものかたりの）きぬな（事也）どにすゞろなる名どもをつけゝんいとあやし、きぬの名にほそながをばさもいひつべし　○なをしのし（女房よともめし給ふものなり）りのながきもの也末通女いきる着もの也（何ぞとゝがめし詞也）なぞかざみはしりながといへかし　○西宮記云装束條女（ヒメミコ）親王對面者總角著汗衫（カザンヘンヒシタカサトウヘ・ヘカヤ）半臂下襲表袴玉帶等云々大かたびらとも云ふ也冬は白夏は紅也袖ひと

へ小袴などあり夏はかざみといふ也則上臈の上の
きぬ也
（半臂）おのわらはのきるやうに、なぞからきぬはみじかき
きぬとこそいはめ、○背子（ハイシ）上下に通じ用る也すそに
裳を別に着するゆへ上に許の服也（唐ぎぬと云名なことはる也）
されどそれはもろこしの人のきぬ物なれば、うへの（句ナキルベシ）
きぬのはかまともいふべし ○胡曹抄表袴（ウヘノハカマ）事浮線綾（フセンレウ）
霰（アラレ）地窠（クハノ）文帝王及童子用レ之公卿少年人聴ニ禁色一人
常用レ之又一日晴宿老人著レ之裏十五歳以前濃打堅
文藤丸公卿人常用レ之裏紅打染袴織物或唐綾唐綺
等其文多窠霰藤丸文隨ニ下襲ニ著用其色不レ定
下がさねもよろし ○餝鈔下襲ニ寸法大臣一丈四尺大納言一丈
二三尺中納言一丈二尺参木八尺四位七尺近代無レ存ニ寸法一也只以
其長ニ爲レ先 ○建久御記御下襲尻四尺餘（是も名ニ所ズレよ也）
また大くちなかさよりはくちのひろければ、はかま（何ナキルベ）
いとおほきなし ○名目抄大口生平絹（スゞシ）幼年白長年紅
西宮記袍大口袴中隔ニ上下ニ可レ同レ色不レ得レ交ニ紅
黄色ニ若人可レ用ニ黄色一（足ないろゝものなれば也）
さしぬきもなぞおしきぬ、もしはさやうのものはあ

じぶくろなどもいへかしなど、よろづの事をいひの（色々のものがたりせらる）
ゝしるを、（いと也）いでおなかしかまし、（清少の詞）いまはいはじねた
まひぬといふいらへに（女房の返答）よゐ（夜居）の僧のいとわろからむ、
夜ひとよこそなをのたまはめと、にくしとおもひた（夜ゐの僧の前ばかり）
るこゑざまにて（もなき心をにくしと也）いひ出たりしこそおかしかりしに（聞きてはしたなき心也）
そへて、おどろかれしか、
故殿（道隆公也）のために月ごとの十日（忌日也） ○扶桑略記長徳元年四
月六日壬午關白道隆依レ病入道年卅三中宮并東宮
女御行ニ啓彼里ニ廿一日丁亥子刻入道々隆薨ニ南院一
（中宮定子のつとめ給ふ也）御經佛供養せさせ給ひしかし 九月十日しきの御ざうし
にてせさせ給ふ、上達部殿上人いとおほかり、清範講
師にて、（説法也）とく事どもいとかなしければ、ことにもの
ゝあはれふかゝるまじきわかき人もみな聞めり、（イなく 説法）は
てゝさけなどのみ詩ずじなどするに、（追福の僧のありさま也）頭中將たゞの
ぶの君月秋ときして身いづくにかといふ事をうち出
したまへりしかばいみじうめでたし、いかでかはお
もひいで給ひけん ○爲ニ謙徳公修ニ報恩善一願文
菅三品 金谷醉レ花之地花毎レ春匂而主不レ歸南樓

既レ月之入月與レ稀期而身何去（ニカル）

（中宮の所へ参せんとて也）おはします所にわけ参ほどに、（中宮）立出させ給ひて、めでたしな、いみじうけうの事に（希有也）いひたる事にこそあれとのたまはすれば、（清少詞）それをけいしにとてものも見さして参侍りつるなり、たゞいとめでたくこそおも（中宮の詞也たゞのぶ清少に心有中なれば清少たゞのぶをめでたくおもふらんと也）ひ侍れときこえさすれば、ましてさおぼゆらむとおほせらるゝわざとよびもいでをのづからあふ所にて（是より斎信の遠ざかり給ふを中宮の惜い詞也）は、などかまろをまほにちかくはかたらひ給はぬさ（中宮の詞也うるはしく也）すがにゝくしなど思ひだるさまにはあらずとしりたるを、いとあやしくなん、さばかりとしごろになり（得意也いひかたらふ中の事也中宮とたゞのぶはいとこ也）ぬるとくいのうとくてやむはなし、殿上などにあけ（たゞのぶの）くれなきおりもあらば。なに事をかおもひいでにせ（たゞのぶ詞かしこき御位なればつゝしみて遠ざかると也）んとのたまへばさらなりかたかるべきことにもあら（中宮の上を人の前にてほむるもほめにくしと也）ぬをさもあらんのちにはえほめたてまつらざらんが口をしき也、上の御まへなどにてやゝとあつまりて（句）（ほめぬ）ほめきこゆるに、いかでかたゞおぼせかし、かたは（内にろ人たうたがひさくろ悪心出來ると也）らいたくこゝろのおに出きて、いひにくゝ侍りなん

ものをといへば、わらひて、などさる人しも（さやうの人也）よそめ（大ていにほむる也）よりほかにほむるたぐひおほかりとのたまふ。これ（したしき心也）がにくからずはこそあらめ、男も女もけちかき人を、（片贔負也）かたひきおもふ人の、いさゝかあしきことをいへば、はらだちなどするがわびしうおぼゆるなりといへ（中宮の詞そのことはりの分にてはたのもしからぬと也）ばたのもしげなの事やとのたまふもおかし、

（行成）頭の辨の（中宮職）しきに参給ひてものがたりなどし給ふに、夜いとふけぬ　〇公卿補任藤行成故太政大臣伊尹公孫爲レ子右少將義孝一男母中納言源（へ）光保卿女長徳三八月二十三右大辨

（内の）あす御ものいみなるにこもるべければ、（丑の時前に禁中へ参らんと也）うしになり（晨の字）なばあしかりなんとてまいり給ひぬ、つとめて藏人所のかやがみ引かさねて　〇河海に紙屋河とは北野と平野の中を南へながるゝ河也この所にて紙はすきはじめし也公家の料紙也俗に綸旨紙といふ也　〇延五記に紙屋河平野の明神へ参る時わたる高はし河也

のちのあしたはのこりおほかるこゝちなんする、夜（よも）（すらの心也）をとをしてむかしものがたりもきこえあかさんとせ

丑になりなばとて歸給ふ事ないふ也
しをとりのこゑにもよほされてと、いといみじうき
裏也
よげにうらうへに事多くかき給へる、いとめでたし、
孟
清少返事也
御かへりにいと夜ふかく侍りけるとりのこゑは、ま
嘗君
歸さを急てまことならぬ鳥をなかせ給へるかと也
うさうくんのにやときこえたれば、たちかへりまう
又行成卿の文に也
さうくんのにはとりは、かむこくくはんをひらきて、
やうやうのがれさりしと也　清少にあはんとの
三千のかくわづかにされりといふは、あふさかのせ
事也
きの事なりとあれば、
夜ふかきに鳥の音をたばかり給ふ共このあふさかは函谷のごとくに
よをこめて鳥のそらねははかるともよにあふさかの
ゆるすましきと也　行成の夜ふかく歸心あさきをまぎらはさんとて
せきはゆるさじ　○史記列傳第十五秦王因二孟嘗君一
鳥の音にもよほされしとかはかるとも其の分にては逢まじと也
君變二姓名一夜半至二函谷關一關法鷄鳴出レ客
孟嘗君ほどの才ありともゆるさぬせきもりはわれ也といふ心也
有下居二下座一者上能爲二雞鳴一於レ是群雞皆鳴遂出レ關
こゝろかしこきせきもり侍るめりと聞ゆ。たちかへり
行成より
あふさかの關は鳥のなかぬ時も通り侍ればいとやすしと也函谷關に
あふさかは人こえやすきせきなればとりもなかねど
對して也
行成の筆を執して也
あけてまつとか、とありしふみどもをはじめのは僧
定
子の兄弟隆圓也前にくはし
都いきみのいかをさへつきてとりてき、のちのちの
拜みて也
中宮の
清少のまけて返歌せざりしと也
は御前にてさてあふさかの歌はよみへされてかへし

もせずなりにたる、いとわろしとわらはせ給ふ、さ
清少文也
てそのふみは殿上人みなみてしはとのたまへば、ま
我手の見ぐるしきを人々にみせ給ふに　まことこそおぼし出しはちう
ことにおぼしけりとはこれにてこそしりぬれ、めで
らむる心也
是は
たきことなど人のいひつたへぬは、かひなきわざぞ
地にいふ也
かし、またみぐるしければ　行成の文の事也　御ふみはいみじくかく
しこと人につゆみせ侍らぬ、こゝろざしのほどをくらぶ
行成のわが文人に見せ給ふもまた行
成のあしき手の文を人にみせぬもひとつ心ざしぞと也
るにひとしうこそはといへば、かうものおもひしり
ていふこそ、なを人々にはにずおもへど、おもひぐ
かの人々に見せし事を遠慮なき事と清少のうらみんとおもひし
まなくあしうしたりなどれいの女のやうにいはんと
いかに
にと也
こそおもひつるにとて、いみじうわらひ給ふ、こには
も滿足せいでハといふ心也
行成の詞
なぞよろこびをこそきこえめなどいふ、まろがふみ
人にみせば
をかくしたまひける、またなをうれしき事や、いかに
こゝろうくつらからまし、いまよりもなをたのみ聞
經房の詞也
えんなどのたまひて、のちに經房の中將頭の辨はい
みじうほめ給ふとはしりたりや、一日のふみのつゐ
でにありし事などかたり給ふ、おもふ人々にほめら
清少のうらの詞を經房はしらず
るゝはいみじくうれしなどまめやかにの給ふもおか
眞實にの給ふ也
二色ありと也
ほめ給ふがうれしき
し、うれしき事もふたつにてこそかのほめ給ふなる

に又思ふ人々の中にてほめらるゝは猶うれしと也
に、またおもふ人のなかに侍りけるをなどいへば、
それはめづらしういまのことのやうにもよろこび給
ふなどのたまふ、
日より前の事也
五月ばかりに月もなくいとくらき夜、女房やさふら
后宮の詞也
ひ給ふと、こゑだゝしていへば、出てみよ、れいなら
これはたれぞ也
ずいふはたれぞと仰らるれば、出てこはたぞ、おどろ
〳〵しうきはやかなるはといふに、ものもいはでみ
そゝろ〳〵と也
すをもたげて、そよろとさしいるは、くれ竹のえだな
りけり　○和名類聚鈔竹譜語抄云　吳　竹也和名久禮太介似
レ葦而節茂葉叢也
竹の名也朗詠の詩にあり
このきみにこそといひたるをきゝて、いざやこれ殿
たれともしらず
上に行てかたらんとて、中將新中將六位どもなどあ
經房公信一敷也
りけるはいぬ、頭辨はとまり給ひて、やしくいぬる
去也
ものどもかな、御まへの竹をおりて　○順德院御抄曰
東庭竹臺近代ノ工頭役平氏德内匠寮作ニ吳竹架ヲ
中宮の職也
歌よまんとしつるを、しきに參て、おなじくは、女
女房たちもつれ〳〵ともに歌よまんと也　清少の
ばうなどよびて出てをといひてきつるをくれ竹の名
此君といひし事也　清少はた
をいととくいはれていぬるこそおかしけれ、たれが

れに習ひて此名をしりたるぞと也
をしへをしりて、人のなべてしるべくもあらぬ事を
清少の詞也殿上人たちなれば此君
ばいふぞなどのたまへば、たけの名とも、しらぬも
といひしものなど也
のをなまめかしとやおぼしつらむといへば　清少によしえこと
なまめかし也
しらじと行成の詞也
ぞとえしらじのたまふ、まめなどいひあはせてゐ
實の行成の心をいひし也
たまへるに、この君とせうずといふ詩をずんじてまた
はじめの中將など也
あつまりきたれば　○晉騎兵參軍王子猷栽稱ニ此君ヲ
官也
詞の名也
晋太子賓客白樂天愛而爲ニ我友ト
行成の詞也　評議也　后宮の女房と歌よまんといひし本意
殿上にていひきしつるほゐもなくては、などかへり
も遂ず何とて歸給ふぞと也
給ひぬるぞいとあやしくこそありつれとのたまへ
殿上人の詞也　かゝる名言に
ば、さる事には、なにのいらへをかせん、いと中々な
はなまじいの返答せぬがましと也　一條の院也
らん、殿上にてもいひのゝしりつれば、うへも聞めし
興也　行成也殿上人もろ共に也
てけうせさせたまひつるとかたる、頭もろともに、か
君といふ詩を　あまり朗詠す
へす〴〵おなじ事をずんじていとおかしがれば、人々
れば也
出てみなとり〴〵に、ものどもいひかはしてかへる
建門まで
とて、なをおなじ事をもろこゑにずんじて、左衞門の
詩の吟聲絕ゆると也　あくるあした也　最疾　別人也
ぢんに入まで聞ゆ、つとめていととく少納言の命婦
といふが御文まいらせたるに、この事を啓したれば

清少が職に居ぬを名て也
しもなるをめしてさる事やありしと、とはせたまへ
清少答 竹の事共詩の事ともしらずと也
ばしらずなにともおもはでいひ出侍りしを、ゆきな
宮の
りあそんのとりなしたるにや侍らんと申せば、とり
是より后宮の御心ばへ
詞也
なすとてもとうちゑませたまへし、たれかこゝをも
さやうにほめいはるゝ
をいふ也
殿上人ほめけりときかせ給ふをばさいはるゝ人をよ
一條院の父帝也
人を也
ろこばせ給ふもおかし。ゑんゆうゐんの御はてのと
一周忌二年也
し ○圓融院の傳右に有安和二年九月御即位永観二
年八月譲位於花山帝正暦二年二月十二日崩じ御
とし卅三
みな人御ふくぬぎなどして、あはれなる事をおほや
禁中
けよりはじめて、院の人も花のころもになどいひけ
圓融院
ん。世の事などおもひいづるに ○深草の帝の御時
五十四代仁明天皇の事也
に藏人の頭にてよるひるなれつかうまつりけるに
諒闇になりにければさらに世にもまじらずしてひ
えの山にのぼりてかしらをろしてげりそのまたの
としみな人御ぶくぬぎてあるはかうふり給はりな
古今哀傷
どよろこびけるをきゝてよめる僧正遍昭 皆人に
の部に
花のころもになりぬめりこけの衣よかはきだにせ

よ
あめのいたうふる日藤三位のつぼねに ○大かゞみ
一條の院の御めのとのよし後拾遺集の詞書にみえたり
に粟田殿は女君は故一條院の御めのとの藤三位の
はらにいできおはしましたりと云々
雨にみのきたる者也
みのむしのやうなるわらはの、おほきなる木のしろ
椎の枝に歌付て來れるなるべし
きにたて文をつけて。これたてまつらんといひけれ
藤三位方の女房の詞也
ばいづこよりぞ、けふあすは御もの忌なれば、御しとみ
蔀
も参らぬぞとて、しもはたてたるしとみのかみより
あけぬと也
入てきなんとはきかせたてまつらず。ものいみなれ
ものいみなれば藤三位殿にはまさぬ也
ばえみずとて、かみにつゐさしてをきたるを、つと
藤三位
蔀の上に華葉の文をさして也
めて手あらひて。いで、その巻數。とこひて、ふしおがみて
歌とはしらで唯念の巻數と思ひて也
あけたれば、くるみいろといふ色紙のあつこえたる
表は香色裏は白き紙也
厚肥
を、あやしとみてあけもてゆけば、老法しのいみじげ
なる手にて、
後拾遺哀傷の部に 是をだに故院のかたみに思ふに藤三位は服ぬぎ
これをだにかたみと思ふに都には葉かへやしつる
しかと也一條院の歌なり
しゐ柴の袖と書たり。あさましくねたかりつるわ
藤三位の心也
ざかなたれがしたるにかあらむ、仁和寺の僧正のに
やとおもひつれどよもかゝるのたまはじ ○仁和寺

は光孝天皇の御願寺本尊大日也仁和年中建立す故號二仁和寺一所は妙心寺の西鳴瀧の東也　〇源氏家譜敦實親王の三男寛朝仁和寺大僧正東寺一長者

なれたれならん、藤大納言ぞかのゐん圓融院のの別當におはせしかば　〇正暦二年中納言從二位藤顯光九月廿一日左衛門督爲二別當一

そのしたまへる事なゝめり、これをうへの御まへみやもはや人などに、疾也とうきこしめさせばやとおもふに、いとこの中上つらんと藤三位のこゝろ也ゝろもとなければなをおそろしういひたるものいみ大事のもの忌といふ心也を、しはてんとねんじくらして、またつとめて藤大納言の御もとに、この御かへしをしてさしをかせた無業の歌藤れば、すなはちまた返事してをかせ給へりけり、それ大納言の返事と二ッ也を二つながらとりていそぎ參て、かゝる事なん侍りしと、うへもおはします、后宮也　帝の御しわざを知ならしらぬさま也御まへにてかたり申給ふ后宮の詞也を、みやはいとつれなく御らんじて無業の歌の手跡の事也藤大納言の手のさまにはあらで、さては是は也藤大納言の詞也法師にこそあめれとのたまはすれものずきなる也ば、さはこはたれがしわざにか、すきずきしきかんだちめ僧綱などはたれかはある　〇令義解曰僧綱者謂二僧正僧都律師一　〇玄蕃式曰僧綱者必備二其八一奉レ勅定レ之

それにやかれにやなど、おぼめきゆかしがり給ふ、老法師の歌は帝の御方にある歌に似た天子うへこのわたりにみえしにこそは、るとて御厨子のもとなる草子を取出し給ふ也いとよくにたゝめ一つの心也厨子れとうちほゝえませたまひて、いまひとすぢ御づしのもとやけるを、とりいでさせたまへれば、藤三位の詞也いでおなこゝろう、これおぼされよ　いかなる事ぞすいゝ思しめせと也あなかしらいたや、きこえ侍らんと、たゞせめにせめ申て、うらみきこえてわらひ給ふに、いきたりけるおにわらはゝ、鬼童丸鬼童はみのむしとある大はん首尾也所のとじといふ者の供ともなりけるを　〇禁秘抄云刀自朝餉上臈女房候二朝餉南端一中臈内侍或小上臈候二障子外一取傳下臈又取傳中臈外臈得選又傳レ之刀自侍二御膳一往二反鬼間一　刀自　御膳宿臺所各別也

后宮の女房衆也小兵衛かかたらひ出したるにやありけんなどおほせらるれば宮もわらはせ給ふを、ひきゆるがしてまへ后宮を藤三位のかこちまいらせらるゝさま也　たばからせ也りて、などかくはからせおはします、巻數と思ひし故也なをうたがひもなく手をうちあらひて、ふしおがみし事よとわらひねたがりゐたまへるさまも、いとほこりがちにあい

ぎやうづきておかし、さてうへのだいばん所(女房の侍らふ所也)にも、わらひのゝしりて、つぼね(藤三位の)におりて、このわらは(みのむしのやうにいの鬼わらはを)たづねて(て來りしわらは也)ふみとりいれし人に見すれば、それにこそ侍るめれといふ、たれがふみはたれかしらせしぞといへば(藤三位のわらはにとひ給ふ也)しれ／＼とうちみゑみて、ともかくもいはではしりけり藤大納言のちにきゝて、わらひけうじ給ひけり、

㊢つれ／＼なるもの(しづかにさびしき事也)

所さりたるもの(家をはなれしもの忌也)いみ、むまおりぬすゞろく ○禮記投壺篇正爵既行請爲勝者立馬 註馬勝算也謂之馬者若云下技藝如是任爲將帥馬乘也莊子齊物論口義馬博塞之籌也 一二三四五六のかずなり

ぢもくにつかさえぬ家 雨うちふりたるはましてつれ／＼なり

㊢つれ／＼なぐさむもの

(何にても)ものがたり ごすぐろく みつよつばかりなるちごの物おかしういふ、またいとちいさきちごのものがたり(葉ゝ也)したるがゑみなどしたる、くだものおとこのうちさるがい(猿樂など也)ものよくいふがきたるに、ものいみなれ(つゝしむ折なれど)どいれつかし(も入たしと也)

㊢とり所なきもの

かたちにくげに、こゝろあしき人、みぞひめ(御衣)のぬれたる

(このさうしの卑下也)これいみじうわろき事いひたると、よろづの人にくむなる事とて、いまとゞむべきにあらず、またあとひの火ばしといふ事、などてか、○門燎火筋(カトビノヒバシ)あか相通和名曰周禮曰喪設門燎

世になき事ならねば、みな人しりたらむ、げにかきいで、人のみるべき事にはあらねど、このさうし(枕草紙の事也)をみるべきものとおもはざりしかば、あやしき事(みそひめの義)をもにくき事(あと火の事)をも、たゞおもはんことのかぎりをかゝむとて有しなり、

○なを世にめでたきもの

臨時のまつり(賀茂八幡を兼ていふ)のおまへばかりの事はなに事にかあらむ ○江次第臨時祭起天慶五年四月廿七日石淸水臨時祭平將門亂逆報賽也 ○おまへばかり主上出御あり倚子に着御あり藏人の頭召の由を告て公卿以下壁下の座につく又藏人頭仰を承使舞人以下

を召て一獻二獻過て大臣穩座につく三獻過て垣下の公卿も座有衝重をすゝむ次侍從音樂をなし歌曲の聲を發す四五獻にて舞人陪從に盃を給ふさて插頭の花を給て使は左の方にかざし舞人は右のかたにかざす江次第に委
試樂也音樂のならし也
しがくもいとおほし　○石淸水臨時の試樂祭の前一兩日に行レ之
春はそらのけしきのどかにてうら〳〵とあるに、淸涼殿の御前の庭に　○江次第若淸水臨時祭三月中午日在二午時用下午除國忌日
かゝもりつかさのたゝみどもをしきて、つかひは北おもてに舞人は御前のかたに、これらはひがしにもあらむ　○姓氏錄曰掃守首振魂命四世孫天忍人命之後也雄略天皇御代監二掃除一賜二姓掃守連一　○職原頭一人五位者大夫及諸道五位任レ之○江次第奉レ仰召レ使以下從經二公卿座後幷右橋一渡從二庭中北一渡至二瀧口一仰二召由行事藏人一更歸經二仁壽殿露臺之内幷南第一間一飯出レ自二仙華門一使以下着レ座
所の衆ども、つゐがさねどもとりて前ごとにすへわたし　○江次第一獻使料藏人頭勸レ盃雜色取二瓶子一陪從座五位藏人勸レ盃藏人所衆執二瓶子一又云大臣着二穩座一殿上五位二人取二衝重一居レ之
地下の樂人也
べいしうもその日は御まへに出入ぞかし　江次第陪從座勸レ盃四位瓶子所衆第一陪從放レ盃之後勸レ盃垣下著下陪從放二衝重一插頭之舞立二插頭一畢着
一獻二獻の式ある也
公卿殿上人かはる〴〵盃とりてやくかいといふもの
○錦貝　蘇芳貝　獨紅の錦に貝の紋あるを四角にきり　○網代　膳等の下にしかるゝなりそれをやくかいといふ也
御前の式は、さまにおのこわらは女などのどりひろふ事のかまびすしきをいふ也
おゝこなどのせんだに、うたてあるをおまへに女ぞ出てとりける、おもひかけず人やあらむともしらぬにひたきやよりさし出て　○炬火助鋪　神供などしたゝむる所也
多くとらんとひしめくものはなくれがろくそろ〳〵ととるものはかしこしとなり
おほくとらむとさはぐものは、中々うちこぼしてあつかふほどに、かたらかにふとゝり出ぬる物にはをくれて、かしこき納どのに　○拾芥抄納殿累代御物納レ之在二宜陽殿一恆例御物納二藏人所一綾綺殿御厨風在二仁壽殿一頭藏人雜色爲レ預以二藏人雜色出納

小舍人一爲ニ預人一　納殿有ニ後涼殿一
ひたき（炬舍なして也）をしてとりいるゝこそおかしけれ、かんもり
つかさのもの（幕）ども疊とるやをそきと主殿寮の官人ど
も、手ごとには、きをとりすなご（砂也）ならす（平也）　○江次第藏
寮撤（テッス）ニ饌物等一掃部撤レ座主殿掃除
承香殿の前のほどに、ふえをふきたて、ひやうしう
ちてあそぶ（音樂する也早くこよかしと也）をとく出こなんとまつに　○承香殿（九間四面也）は仁
壽殿の北清涼殿よりは東この前の間清涼殿の庭上
にて舞ある也舞果ぬればこの承香殿の馬道を經て
建春門にいたる也
うとばまうたひて（駿河舞の謳もの也）、竹のませのもとにあゆみ出て（江次第ニ進出至ニ吳竹臺下一とある事也）、
○賀茂の臨時の祭　ふる袖はみたらし川にかげみ
えて　空にぞすめるうと濱のこゑ
みことうちたる（御琴もちわりたるさま也）ほどだに、いかにせん（そゞろに面白き也）とぞおぼゆる
や、一の舞のいとうるはしく袖をあはせて、ふたり（本末の舞人也）は
しりいでゝにしにむかひて立ぬ、○江次第云一舞二
人先進上﨟者出レ自ニ露臺南四間ニ下﨟者出レ自ニ第
二間一拍子之後次舞人亦如レ是
つぎ〳〵（二の舞三の舞也）いづるにあしぶみをひやうしにあはせては

はんぴ（陪從半臂緒也）のをつくろひ、かうふり（冠）きぬ（袍）のくびなどつく（繕）
ろひて、あやもなき（聲のあやなき也）、こま山などうたひて、まひた
ちたるはすべていみじくめでたし　○催馬樂に　山
城のこまのわたりの瓜つくりなよやらいしな（歌のふし也後恩成寺の註也）
やさいしなや瓜つくり〳〵われ初段也二段三段
略レ之
おほひれ（大領巾）なゞどまふは、日ひとひみるともあくまじき
を、はてぬる（舞の）こそいとくちおしけれど、またあるべ（還り立の事也）
しと思ふはたのもしきに、みこと（御琴）かき返（昇）して、此た
びやがて竹のうしろ（竹の臺のうしろ也）から、まひいで（是より後退出のさま也）ゝぬぎたれつる
さまどもの、なまめかしさは、いみじくこそあれ、○
江次第袒（カタヌク）レ右只袒ニ袍袖許一不レ袒ニ半臂下重（下襲）一
かひねり（搔練）のしたがさねなど、みだれあひて、こなた
かなたにわたりなどしたる、いでさらにいへば（ことのほかほめたる事也）、よ
のつねなり、此たび（二の舞果たらばもはやあるまじと也）はまたもあるまじければにや、い
みじくこそはてなん事のくちおしけれ（臨時の祭のはてしさま也）、上達部など
のつゞきて出給ひぬれば、いとさう〳〵しうくちお
しきに、賀茂の臨時の祭は　○諸社記云臨時祭宇多帝

寛平三年十一月廿四日庚午之日於二賀茂明神一在二走馬事一勅使右兵衛督藤原高經奉二男廿人一參二上下社二歌舞

社より歸て天子の前にてまふ事也祭のあくる日也

かへりだちの御神樂などにこそ、なぐさめらるれ　○江次第今案還立儀至二近代一所レ行也但御前召二東遊等一事近代不レ行レ之但賀茂臨時祭還立在二庭座御神樂等事一

庭火のけふりのほそうのぼりたるに　○庭燎の事古語拾遺に詳あり古今集第廿大歌所の歌みやまには霰ふるらしとやまなる正木のかつら色付にけり

神樂の笛のおもしろうわなゝき（戰）、ほそうふきすましたるに、歌（本末の歌也）のこゑもいとあはれに、いみじくおもしろくさむくさえ氷りて（十一月の體）　○神樂作法に和琴笙の時にすがゞき笙の前はかたかき笙なる時にひちりき音取をふく

うちたるきぬ（のしめの事也）も、いとつめたう、扇もたる手（舞人の）のひゆるもおぼえず、ざえのおのこども（才男舞の役人也）めして、とびきたるも　○雲圖抄御神樂裏書歌二韓神一時人長舞次勸盃次人長進召二才男一

人長（舞人べいじうなどの長也）の心よげさなどこそいみじけれ、里なるときは（清少宮つかへせざりしときの事也）たゞわたるを（祭のわたるを）みるにあかねば、みやしろ（加茂の）までゆきてみるおりもあり、おほきなる木のもと（加茂にて）に、車（もの見の）たてたればまつのけふり（かゞり火也）たなびきて、火のかげにはんびの（舞人の）を、きぬのつや（光）も、ひるよりはこよなくまさりてみゆる、はし（加茂のはし）のいたをふみならしつゝ、こゑあはせて、まふほどもいとおかしきに、水のながるゝおと、ふえのこゑなどのあひたるは、まことに神もうれしとおぼしめすらんかし（感應の事也）

少將（實方也）といひける人のとしごとに、舞人にてめでたきものに（人々の）思ひしみけるに、なくなりて（少將の死して也）、上の御やしろの一のはしのもとにあなるを（はしもとの神といはゝれて也）きけば　○上賀茂は別雷の神也下賀茂は御祖（オヤ）の神也委は日本紀公事根源神社考等に有○一の橋のもとはかのはしもと也本社へゆく左の楠はしのもと也愚考はしもとは在二二鳥井北古屋西一神前在二流水架石橋一故名レ神

ゆゝしう（いまくしき也深切にものに執心すまじと也）せちにものおもひいれじとおもへどなをこのめでたき事をこそさらにえおもひすつまじけれ

八幡の臨時の祭名残こそいとつれ〴〵なれ（かへりたちなければ也） ○袋双紙に八幡臨時の祭は先朱雀院御時被始行などてかへりて、また舞わざをせざりけん、さらば（還立あらば也）おかしからまし ○むかしは南祭に還立なくて賀茂ばかりに有しよし雲圖抄に有

（祿）ろくをえて、うしろよりまかづるこそくちおしけれなどいふを ○江次第内藏寮以祿辛櫃昇立小板敷前次藏人頭以下取先使舞人次陪從内藏官人給人長祿匹絹次各退出

（一條の院）うへの御前に聞しめして、（舞人が明日禁中へ）あすかへりたらん、ましてまはせんなど仰せらるゝ、（清少の申にや）誠にやさふらふらん、さらばいかにめでたからむなど申うれしがりて、宮の（后の）御前にも。なをぞまはせさせたまへとあつまりて申まどひしかば、そのたびかへりてまひしは、うれしかりしものかな、（かへり立いにしへのごとくあるまじと思し也）さしもやあらざらんとうちたゆみつるに、（悦ふ心也）舞人まへにめすをきゝつけたるこゝち、ものにあたるばかりさはぐもいとものぐるおしく、（ものみにもうのぶる躰也）しもにある人々まどひのぼるさまこそ、人のずさ（從者）殿上人などのみるらんもしらず、も（裳也）をかしらにうちかづきてのぼるもことはりなり

故殿（道隆公死し給ひて也）などおはしまさで世の中に事いできものさはがしくなりて、宮またうちにもいらせたまはず、○長德元年三月道隆公病により關白を辭してかざりおろし奏聞して御子伊周公を關白とし給ひていく程もなく四月十日にさり給ひし後道長公を東三條院の御はからひにて關白になし給ふ道長公おほやけをほしいまゝにし給ふ故伊周公嫡流なれば心よからず思ひ叔姪の中よろしからざる也あくる二月花山院近國巡禮の後都へ歸て鷹司の四の君といふに密通したまふを伊周わがかよふ三のあねひめかと思ひおとゞの中納言隆家にかたられしかは隆家卿はからひて花山の院をねらひ法皇の馬に乘三の君の方へかよひ給ふ道にて月の夜法皇を射奉りしかば其矢法皇の御袖より腋にたちたり法皇逆し給へどもこのはぢをおぼし仰出されねどもこの事世にかくれなかりし也また大元の法は世に大切なる事をこのころ伊周の行ひ給ひしかば道長公この事を聞つけ是は女院關白等を調伏し給ふ故也其上花山を射侍りし罪色々の事など女院に申ふくめてお

なじ四月に道長のはからひとして源頼光同頼親等に禁中を守らしめ撿非違使をつかはし伊周をつくし公の宅をかこましめ其官位をけづり伊周公隆家へながし隆家を出雲の國へながす也中宮は同胞の御兄弟かくなり給ふをうらめしくおぼして御ぐしをおろし給ふこれらの事をものさはがしくなりてと書るなるべし榮花物語大かゞみ等にくはし

(前にくはし)小一條といふ所におはしますに、(清少納言心也)なにともなくうたてありしかばひさしう里にゐたり、御まへわたりお(里に計ゐて内わたりの事心もとなしと也)ぼつかなさにぞ　なをえかくてはあるまじかりける、(齊信)左中將(清少の里の亭へ也)おはしてものがたりし給ふけふは宮に(后宮へ)參たれば、いみじくものこそあはれなりつれ、(中宮の御里ずみのやうす也)女房のさうぞく、裳からきぬなどのおりにあひ、たゆまずおかしうてもさふらふかな、みすのそばのあきたるより(左中將の)見いれつれば、八九人(女房たら)ばかりぞいで、黄くち葉のからきぬうすいろの裳しをんはぎなどおかしうゐなみたるかな　○衣色書に紫苑表薄色裏青またもしほ九月の下に紫苑表紫裏蘇黄はぎ衣色書表すわう裏青

もしほ七月の條にはぎの衣表青し裏濃蘇黄

御まへの草のいと高きをこれはしげりて侍るはらはせてこそといひつれば、つゆをかせて御覽ぜんとて、ことさらに宰相の君のこゑにていらへつるなり。おかしくもおぼえつるかな、(清少の事也)御里居いとこゝろうし、かゝる所にすまゐせさせたまはんほどは、いみじき事ありともかならず(清少事)さふらふべきものに(后宮の)おぼしめされたるかひもなくなどあまたいひつる、かたりきかせたてまつれとなゝめりかし、參て見給へ、あはれげなる所のさまかな、(仁壽殿の邊也)ろだいのまへにうへられたる

○史記漢孝文帝本紀云嘗欲レ作二露臺一内裏御殿の名也玄旨法印の說宮廳の内也亦曰屋ねのなき廊下也○正治百首範光卿　雲の上のつゆのうてなは影ちかく月をやどさむためにぞ有ける

(牡丹)ほうたんの(唐)からめき(助語)おかしき事などのたまふ、(清少の詞也)いざ人のにくしとおもひたりしかば、(清少みづからも)またにくゝ侍りしかばといらへ聞ゆ、(左中詞おとなしやかに也)おいらかにもとて、わらひ給ふ、(清少の詞の上のみけしき別に前とかはられどもと也)げにいかならんとおもひまいらする、御けしきにあ

らで、さふらふ人たちの左大殿(ひたんのおほとの)のかたの人、しるすぢ(縁あるといふ詞也)にてありなどさゝめき、さしつどひて(清少事を)ものなッどいふに　○公卿補任曰長德二年七月廿日藤道長轉ニ左大臣ー

しもより(清少の)まいるをみてはいひやみ、(うはさを)はなちたてたる(清少を見すてたる也)さまに見ならはず、にくければ(后宮の)まいれなどあるたびのおほせをもすぐして、(聞過して也)けにひさしうなりにけるを、(ぶさたしたる也)宮の辨には、(一説宮の邊には也)たゞあなたこなたになして、そらごとなどもいでくべし、(ぬ故心もとなしと也)れいならずおほせごとなどもな(后宮の御文もくだされ)くて、日ごろになれば、こゝろぼそくてうちながむる程に、おさめ(長女也)文をもてきたり、おまへより左京のき(后宮の文の取つぎ也)みしてしのびてたまはせたりつるといひて　○宮の辨一品の宮につかへし女房小式部などゝ歌よみかはせし人なるべし左京の君こゝろもとなき段にこきでんとは閑院の太政大臣の女御とぞ聞ゆるその御かたにうちふしといふものゝむすめ左京といひてさふらひけるこれなるべし

(使のもの清少のもとにても也)こゝにさへ引しのぶもあまりなり、(清少心也)人づてのおほせごとにてあらぬなッめりと、むねつぶれてあけたれば、かみにはものもかゝせたまはず、やまぶきのはなび(山ぶきはくちなしいろなればいはでといふ心なるべし)らを、たゞひとつゞゝませたまへり、それにいはでおもふぞとかゝせたまへるをみるもいとといみじう　○

(引歌)こゝろには下ゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる

(清少心也)日ごろのたえま(ぶさた也)おもひなげかれつるこゝろもなぐさみて、うれしきに、まつしるさまを、(かたじけなきなみだを也)おさめもうちまほりて、(后宮の)御まへにはいかにものゝおりごとにおぼ(清少を)しいできこえさせ給ふなるものをとて、たれもあやしき御ながゐとのみこそ侍るめれ、などかまいらせ(かりそめに也白地の二字)たまはぬなどいひて、こゝなる所に、あからさまにまかりて、(おさめが事也)まいらむといひていぬるのちに、御返事かきてまいらせんとするに、この歌のもと(いはで思ふの上也)さらにわすれたり、いとあやし、おなじふることといひながら、しらぬ人やはある、こゝもとにおぼえながら(口にあるやうなれども思ひ出されぬと也)いひ出られぬは、いかにぞやなどいふをきゝて、ちいさきわらはのまへにゐたるがしたゆく水のとこそ申せとい

ひたる、などてかくわすれつるならん、これはをし
へらるゝもおかし、御返事まいらせてすこしほどへ 清少のぶさたをはやか
てまいりたり、いかゝとれいよりはつゝましうて 后宮の
りて也
御木丁にはたかくれたるを、あれはいま参かなどわ いはにて思ふの歌也
清少な后宮い
らはせたまひて、にくき歌なれどこのおりはさもい いはで思ふと執く思
ふが爰にもかなふべしと也
ひつべかりけりとなんおもふを、見つけではしばし、 木丁にかくれし故御對面
なくてはと也
えこそなぐさむまじけれなどのたまはせて、かはり 御機嫌も
前々と同じ事也と也
たる御けしきもなしわらはにをしへられたりしこと かの歌の上の句也
ばなどけいすれば、いみじくわらはせ給ひて、さると 后宮詞
ぞあまりあなづるふることはさもありぬべしなどお
ほせれてつゐでに、人のなぞ〳〵あはせしける所に
○謎ナゾ　玉篇未閉反隱語インゴ也
頭也愚にはあらで也
かたくなにはあらで、さやうのことにらう〳〵しか 勞々也なぞ〳〵に
功の入たる也
りけるが、左の一番はをのれいはん、さおもひたまへ 功者なればあしからじとたのむ也
などたのむるに、さりともわろきことはいひ出じ、
撰也
ゐりさだむるに、そのこと葉をきかむ、いかになど なぞの詞を也
とふ、唯まかせてものしたまへ、さ申ていとくちお 功者の詞

しくはあらじといふを、げにおしはかる、日ちかうな さもあらむと人々推する也なそあはせ
の日限なり
りぬればなをこの事のたまへ、ひざうにおなじ事も 非常也常ならぬおかしき事
もあらんと也
こそあれといふを、いさしらずさらばなたのまれそ 功者の腹立る詞也
などむつかればおぼつかなしとおもひながら、その
日になりて、みなかたう人のおとこ女、ゐわけて殿上 左右の方人也 居分りて
人などよき人々おほくゐなみてあはするに左の一ば 居ならびて也
んに、いみじうよういしもてなしたるさまの、いか
なることをかいひ出んとみえたれば、あなたの人も
こなたの人もこゝろもとなくうちまほりて、なぞな 功者の人のなぞ也
ぞといふほどいとこゝろもとなし、天にはりゆみと
いひ出たり　○釋名弦ユミハリハ月月之半名也其形一旁ハ曲一
旁ハ直若ニ張ニ弓弦一
左の方也
右のかたの人は、いとけうありとおもひたるに、こ 最 興 とけやすくして興あると思ふ也
と思ふ也
なたのかたの人は、ものもおぼえず、あさましうな むさとしたる事た
りて、いとにくゝあいぎやうなくて、あなたにより 愛敬なく也 左方にわざと負させんとする功者のたゝへなしら 右方に也
で也
てことさらにまけさせんとしけるを、などかたとき 嗚呼あまりの事に思ひて也
のほどにおもふに、右の人おこにおもひて、うちわ やれの詞也 閉口して也
らひてやゝ、さらにしらずとくち引たれて、さるがう 猿樂され言也

詞しかくるに、（勝の數也）かずさせ〳〵とてさゝ（かずさしの人に）せついとあや（右方の）
しきこと、これしらぬものたれかあらむ、さらにかず
さすまじとろんずれどしら（左の人々の詞也）ずといひいでんは、など
てかまくるにならざらんとて、つぎ〳〵（のち〳〵のなぞもこの座）のも、この
（がしらにゆづりたる也）人に論じかたせける、いみじう人のしりたる事なれ
どおぼえぬ事は、（しらずといふからは勝に定べきぞと也何とてしらず）さこそはあれ、なにしかはえしらず
（といひしぞと也）といひしと、のちにうらみられて、つみさりける事を
かたり出させたまへば、おまへなる（后宮の女房たち也）かぎりはさはお
もふべし、（負方をつめり恨るをたれもさあらんと也）くちおしくおもひけん、こなたの人のこ（左方のかの）
（あなつりし人々の心也）ゝち聞しめしたりけん、いかににくかりけんなどわ
らふ、（右の歌の上句いまなぞの事引あはせて清少の詞の断也）これはわすれたる事かは　みなしりたる事
にや、

む月十日、空（かすみの躰）いとくらう、雲もあつくみえながら、
さすがに日はいとけ（清の字也）ざやかにてりたるに、ゑせもの（曲者すくならぬ）
（人也）ゝ家のうしろあらば（荒畠）たけなどいふものゝ、つちもう（土也地心に）
（温氣ありて正直ならぬ也）るはしうなをからぬに、もゝの木わかだち（弱立）ていとし
（すはひ也）もとがちにさし出たる、かたつかたはあをく、いま
かたえだはこくつや（濃光）ゝかにて、すはう（蘇芳もゝのつぼみの躰也）の日かげにみ
えたるに、ほそやかなるわらはの、かりきぬはなげ（ぬけ）
（やりの心也）やりなどして、かみはうるは（うつくしき也）しきが、のぼりたれば、（ものゝ木へ）
（尻からげの躰也）引はさみたるおのこゞ、はうくは（半臂前にくはし）ゝきたる、木のもと（ものゝ木也）
にたちて、われによき木きりて、（やさしき也）いでなどこふに、（いでくれよの詞）
またかみおかしげなるわらはべに、あこめなどほこ（袙前に有）（綻）
ろびがちにて、はかまはなへたれど、いろなどよ
きうちき（打着）たる三四人、うづちの木のよからむきりて（卯杖はもゝの木を用る也）
おろせ、こゝにめすぞなどいひて、（なにがしとのゝ御用ぞと也）おろしたれば、（ものゝ木を）
はしり、かひとりわき、（ついとりて也とりわかち也）われにおほくなどいふこそ
おかしけれ、くろきはかまきたるおのこ、はしりき（わらはよくぼる心也）
てこふにまてなどいへば、（木にのぼりし童の詞也）木のもとによりて、ひき
ゆるがすに、（をおどす也）あやうがりて、さる（危）のやうに、かいつ（いだき付て也）
きておるもおかし、むめなどのなりたるおりもさや（梅のみのなりし時もかく有しとの詞也）
うにぞあるかし、きよげなるおのこのすぐろくを
日ひとひうちて、なをあかぬにや、みじかきとうだ（よるまでうちたる也）（あいての柔なあし）
いに、火をあかくかゝ（挑）げて、かたきの（相手也）さいをこひせ
（かれとせめて頓にゝ筒に入ずさまたぐる也）めてとみにもいれねば、どうを盤のうへにたてゝ、ま

づかりぎぬのくびのかほにかゝれば、かた手してをしいれて、いとこはからぬゑぼうしをふりやりて、（ふるくなへたる心也）さいいみじうのろふともうちはづしてんやとこゝろ（兇皿　いかほどあしくいふともよき目うたんと）也
もとなげにうちまほりたるこそほこりかにみゆれ、碁をやんごとなき人のうつとて、ひもうちとき、（蔑の一字入を何とも思はぬ也）ないがしろなるけしきに、ひろひをくに、（石を）（下手の事也）をとりたる人のゐずまゐもかしこまりたるけしきに、（おそれたる躰也）ごばんよりはすこしとをくて、をよびつゝ、（及ごしなればかた袖引かゝへて）袖のしたいまうつ也
かた手にて、ひきやりつゝうちたるもおかし

枕草紙旁註卷八

●おそろしげなるもの
（橡）つるばみのかさ（蔕　俗にへたといふ）〇和名橡　都留波美（ツルバミ）櫟實（イチイノミ）也とんぐりのかさのたぐひなるべし一說名目抄亮闇（リヤウアン）の時殿上人四位着ㇾ之袍の染色也かさは袈裟也どんぐりにてそむるとびいろのやうなるもの也
やけたる所　水ぶき（茨針ノアルモノ也）ひし（菱）かみ（髪）おほかる（多）おのこのかしらあらひてほすほど（乾）　くりのいが（栗梂）

●きよしと見ゆるもの
かはらけ　あたらしきかなまり（金鋺）　たゝみ（疊）にさすこも（薦）　水をものにいるゝすきかげ（透影）　あたらしき（小袖櫃など也）はそびつ

●きたなげなるもの
孟津抄にわたをむしりかけなどするもの也
ねずみのすみか（黒）　つとめて（夙早朝也）手をそくあらふ人　しろ（白痰）きつきばな（など吐體也）　すゞばなしありくちご　あぶらいるゝもの（不浴）　すゞめのこ　あつきほどにひさしくゆあみぬきぬのなへたる（和）は、いづれも／＼きたなげなる中に、

（練色）ねりいろのきぬこそきたなけれ

●いやしげなるもの

式部のざうのしやく　○式部丞爵百寮訓要云地下の六位可レ然もの任レ之考曰六位以下の叙爵をさたする事その品いやしきもの也

くろきかみのすぢふとき、ぬの屏風のあたらしき、ふ（古）りくろみたる（黒）は、さるいふかひなきものにて、中々なにともみえず、あたらしくしたてゝ櫻の花多くさかせて、ごふんさすなどいろどりたる（色トリタルチ下ノ文ヘツケテ見ルモアリ）

○博物志曰燒レ錫（ナマリ）成二胡粉一又和二牡蠣（カレイ）一爲二胡粉一

やり戸づしなにもゐなかものはいやしきなり、むしろばりの車のおそひ　○西宮記天祿四年十一月八日女御懷子（カネ）於二東河一有二除服一其儀御二檳榔毛車一其上張レ莚懸二鈍色簾并下簾鞦等一御秡之後取二張莚一懸二椿庇等一即以飯御云々

（撿非違使）けびいしのはかま　○職原曰當使補二看督長（カドノヲサ）六十六人一是爲レ遣二諸國一也別當屬附之者也著二赤狩衣白布袴一以二白杖一追二拂雜人一者也

（伊豫簾）いよすのすぢ（筋）ふ（大）とき、人の子に法し子のふとりたる、まことのいづもむしろのたゝみ　○延喜式民部式出雲國絹二百卅七疋四尺鹿革（カノカハ）廿張莚（ハリムシロ）三百枚

●むねつぶるゝもの

（競）くらべ馬みる、もとゆひよる、おやなどのこゝちあしうしてれいならぬけしきなる、まして世中などさはがしきころ（疫癘などのとき也）よろづの事おぼえず、またものいはぬちごのなき入て乳ものまず、いみじくめのとのいだくにもやまでひさしくなきたる、れいの所にて、ことにまたいちじるからぬ人のこゑ、（揭焉ノ二字誰とたしかに聞しられぬこゝろ也）きゝつけたるはことはり、人などのそのうへなどいふにまづこそつぶるれ

いみじくにくき人のきたるもいみじくこそあれ、よべきたる人のけさのふみ（後朝の文也）のをそき（取つぐ間の心もとなき也）、きく人さへつぶる、思ふ人のふみとりてさしいでたるもまたつぶる

●うつくしきもの

ふりにかきたるちごのかほ（いまの世の姫瓜にかく心也）、すゞめのこねずなきするにおどりくるまたへになどつけて（條也へたにつけて也）すへたればおや（含）すゞめのむしなどもてきてくゝむるもいとらうたし（いたいけ）

（にかはゆらしき也）ふたつばかりのちでのいそぎてはひくるみちに、いとちいさきちりなどのありけるを、目ざとに見つけて、いとおかしげなるをよび（小指たゞゆび也和名ニ指の一字チをよ）にとらへて、おとなゝどにみせたる（ひとす）いとうつくし　○白氏文集十觀ニ兒戲一詩曰　齠齔七八歳綺紈三四兒弄レ塵復闘レ草盡日樂嬉々　尼あまにそぎたるちごの目に、かみのおほひたるをかきはやらでうちかたふきて、ものなどみるいとうつくし、たすきがけにゆひたるこしの、かみのしろう（この所の傳授なり）おかしげなるもみるにうつくし　○髮置の時わたにて髮を作りて、白髮まであるやうにとさげさするをたすきがけといふ也、
おほきにはあらぬ殿上わらはの（元服以前の昇殿也）、さうぞき立られて（うつくしき装束を着て也）ありくもうつくしおかしげなるちごのあからさまに（白地の二字なりそめ也）いだきて、うつくしむ（寵）ほどに、かいつきて（かいそひて也）ね入たるもらうたし、ひゐなのでうど（雛の道具也）、はちすのうき葉の、いとちいさきをいけよりとりあげてみる、あふひのちいさきもうつくし、なにも〳〵ちいさきものはいとうつくし、いみじうこえたるちごのふたつばかりなるがしろううつくしきが、二あゐのうすものなどきぬながくて、たすきあげたるがはひ出たるもいとうつくし、やつ九つ十ばかりなるおのこのこゑ（讀書のこゑ也）おさなげにて文よみたるいとうつくし、鷄のひな（ひよこ也）のあし高（羽のみじかき也）にしろうおかしげにきぬみじかなるさまして、ひよ〳〵とかしかましくなきて、人のしり（後也）にたちてありくも、またおや（親鳥の）のもとにつれだちてありくもうつくし、かりのこ（鴨の子也）、まりのつぼ（玻璃ハと通ズル也）、なでしこ（撫子）の花

●人ばへ（人そばへの心也）するもの
ことなる事なき人のこ（賤）、かなし〳〵しならはされたる（いとおしくしならはされし也）しはぶき（せきはらひの心也）は、づかしき人にものいはんとするにも、まづさきにたつ、あなたこなた（隣家）にすむ人の子どもの四ッ五ッなるは、あやにくだちて（文悪すまじき事をする心也）ものなどとりちらしたる、そこなふを常はひきはられ（こちへなといひて引とりてしかりな）なんどせいせられて（どする也）、心のまゝにもえあらぬが（かの子の）、おやのきたる所えてゆかしかりけるものを（その子のほしく思ひしものを也）あれみせよやはゝ（子の詞也）などひきゆるがす（動）におとなゝどものいふとて、ふともきゝいれ

ねばてづからひき(捜)さがしてみるこそいとにくけれ、
それをまさな(正無也しかとしかりもせいで大やうなる體也)とばかりうちいひてとりかくさでさな
せそ、そこなふなとばかりゑ(笑)みていふ親もにくし、わ(亭主の身に成て也)
れえはしたなく(強の字つよくもいはで也)もいはで見るこそこゝろもとなけれ
◉名おそろしきもの
あをぶち　たにのほら　はたいた(鰭板)　くろがね　つち(塊)
くれ　いかづちは名のみならずいみじうおそろし
○雷胡氏曰陰氣凝聚(コリアツテ)陽在レ内而不レ得レ出則奮擊(フルヒウツテ)而
爲レ雷雖ニ聖人起一不レ能レ易
はやち(迅風暴風共　不祥)　ふさう雲　ほこぼし(戈星破軍星也)　おほかみ(狼)　うし(牛)　が(和名蠘)
ざめ(鋺似レ蟹色黄)　ろうざう(綠衫六位のうへのきぬ也)の名さへにくしそれも名こそはみる(イも)
おそろし　なはむしろ(縄莚)　がうだう(強盗)またよろづにおそろ
し　ひぢかさあめ(俄にふる雨也臂笠雨)　くちなはいちご(地楊梅)　いきすだま(窮鬼いきれう也)
おにどころ(鬼薢大きなるをいふ)　おにわらび　むばら(荊棘)　からたち(枳殼)　いり
ずみ(入墨やきじるし也)　ぼうたん(牡丹)　うしおに(牛鬼)
◉みるにことなることなきものもじにかきてこ
とゞしき物
いちご(覆盆子)　つゆくさ(鴨頭草)　みづぶき(芡實)　くるみ(胡桃)　もんじやう

はかせ　○文章博士(相當從五位下)翰林學士　愚考史漢歷代之
書并詩文讀書人也(位ひきゝ官なればかくいふ也)　職原抄華
皇后宮(皇后宮ハ帝王ノ妻也)の權太夫(タイフ)(權太夫は太夫のごとくにあらねど文字に見るほどゝなき也)
族納言參議及三位以上兼レ之
やまもゝ(楊梅)　いたどりはましてとらのつえとかきたる
がつえなくともありぬべきかほつきを　○本綱虎杖(イタドリ)
言ニ其莖一虎言ニ其斑一也田野甚多狀如ニ大馬蓼一
◉むつかしげなるもの(むさく\/しき心也)
ぬひもの(繡の絹の裏也)ゝうら　ねこのみゝのうち　ねずみのいま
だけもおひ(不生)ぬをす(巣)のうちよりあまたまろばしいでた(ころばしいだしたる也)
る、うらまだつかぬかはぎぬのぬひめ(縫目)　○西宮記皮
衣臨時祭舞人歸路服黑桔皮衣
まことにきよげならぬ所のくらき、ことなる事なき、(やう\/\世わたるほどの人也)
人のちいさき子など、あまたあつかひたる　いとふ
かうしも心ざしなき(男の思はぬ也)女の、こゝちあしうして、ひさし
うなやみたるも、おとこのこゝろのうちには、むづ
かしげなるべし
◉えせものゝ所うるおりの事(さしてもなき人の時により威勢ある心也)

正月一日大内にてもちの上になく大根也

む月のおほね　○江次第内膳供二御歯固具一采女取二傳之一自二第三間御几帳上一付二女藏人一女藏人傳二陪膳一

行幸のおりのひめまうちぎみ（姫大夫）　○職原東豎子（トウジュシ）の事也東豎司は内侍官の被官にして行幸の時姫松といふおかしき馬にのり供奉する也是用二三子一謂二三子護二天子一有二故事一也むかしより同し名乘相傳紀朝臣季明といふ　猶口傳ありこゝにしるさず

六月十二月（みなしはす）のつごもりのよをりの藏人　○取二天子御身長一禊レ之采女勤レ之故曰二節折（ヨヲリ）藏人一或人曰二節折命婦（メウブ）一　○公事根源に節折の命婦竹をもて參て御たけより初て所々の寸法を取果て宮主に切あてがはせて御禊（ハラヘ）を勤る也竹にて御たけの寸法を取て折あてがへば也

季の御どきやうの威儀師あかげさきて　御讀經の時の出家の使な威儀師といふ下官なれどもその日は所えがほ也　○江次第曰季御讀經春秋二季請二百僧於南殿一讀二大般若經一其内定二御前僧廿口於御殿一讀二仁王經一　○西宮記仁壽殿東座端威儀師候前居レ磬　○延暦寺供養記曰奉行僧二人威儀師始賜二赤袈裟一

僧の文どもよみあげたるいとらう／＼し　○江次第五季御讀經事曰例文置二上卿前一入二年々僧名名僧帳諸寺解文外任拜死去勘文等興福寺延暦寺等竪義者注文一近年去年僧名上押レ紙書下付今年可二請定一僧名上

御讀經佛名などの御さうぞくの所の衆　この出す藻物装束なと出し納る所をいふ也　○雲圖抄裏書曰季御讀經事初日行事藏人奉二仕御殿御装束一辨奉二仕南殿装束一

かすがまつりのとねりども　○公事根源云二月と十一月に行はる先未（ヒツジ）の日使たつ近衛の中將つとむ萬賀茂の祭のごとし貞觀元年十一月九日此祭はじまる○江次第於二七條堀川一有二除目一左右大臣各一人以二神宮人（クヂトリノ）一任レ之左右大辨各一人以二番長一任レ之

大饗の所のあゆみ　官に任ぜらるゝ時の饗應也あゆみとはその時の役人のねる體也　○西宮記云二日二宮大饗王饗以下參二本宮一拜禮近代二拜於二玄輝門邊一着レ靴着二中宮饗一中略次着二東宮饗一

む月の藥子　○公事根源曰藥子とて少女の未レ嫁を求て用ゆ屠蘇は少兒よりのむといふ本文あれば少女を撰て先のましむるなるべし　○屠蘇　本綱赤朮　桂心各七錢五分防風一兩菝葜五錢蜀椒　桔梗　大黄

各五錢七分烏頭二錢五赤小豆十四枚以二三角絳（アカキ）囊一盛レ之除夜懸二井底一元旦取出置二酒中一煎數沸擧レ家東向自レ少至レ長次第飮レ之藥滓還（ハ）二投井中一歲飮二是藥水一一世無レ病○白散貞德云白朮　桔梗　細辛各等分

御はいぜんのうねめ（天子の給仕する人也さしてもなき女官なれども節會の御陪膳に所をうる也）○職原に陪膳采女最可レ然事也近代零落無レ極尤可レ有二沙汰一事也

大饗の日の史生（シシヤウ）　○太政大臣左大臣右大臣 内大臣は勅任とて臨時に節會を行て任ぜらるゝ也是々の子細にて大臣になすといふ事を內記が宣命に書て內辨にわたすを內辨よむ也そのひろめのふるまひを大饗といふ○職員令有二左史生十八右史生十八一　太政官の史生は官中の細事を書記する人也さしてもなき官人なれども此時所をうる也

七月のすまひ（相撲）　あめのふる日の市女がさ　○考曰ゐにてあめる笠の上を手拭のたぐひにてむすびきる也しめ緒なしにおとがひにてむすぶ市に立女のかほかくし也

わたりする折のかんどり（揖取）

●くるしげなるもの

夜啼（よなき）といふものするちごのめのと（乳母）、思ふ人ふたり（詞花集ニいづくゑもよかるゝ事のわりなさにふたつに分るわが身ともがな）もちて、こなたこなたにうらみふすべられたるおとこ、こはき（強）もの ゝけ（物怪）にあづかりたる（たのまれたる也）、げんざ（驗者）けんだ（げんのなき也）にはやくは、よかるへきをさしもなきを、さすがに人わらはれにあらじと、ねんずる（觀念也）いとくるしげなり、わりなくものうたがひするおのこに、いみじう思はれたる女、一の所（關白家の臣下の事也）にときめく人もえやすくはあらねどそれはよかめり　○職原抄曰執柄者必蒙二一座之宣旨一故稱二一人一又云二一所一

こゝろいられしたる人（生つきのせは〳〵しき人也）

●うらやましきもの

經などならひて、いみじくたど〳〵しくて、わすれがちにて、返々おなじ所をよむに、法しはことはり、おとこも女も（俗人のよくおぼえたる也）、くる〳〵とやすらかによみたるこそあれ、かやうにいつの折とこそ、ふとおぼゆれ、ものゝ心ちなどわづらひてふしたるに、うちわらひ、ものいひ思ふ事なげにてあゆみありく人こそ、いみじく

うらやましけれ、いなりに思ひをこして參たるに、中（少納言の參詣の時也）のみやしろのほどわりなくくるしきを、ねんじて（坂の急なる也）のぼる程に、いさゝかくるしげもなく、をくれてく（來）とみえたる者共の、たゞ行にさきにたちて、まうづるいとうらやまし　○神名帳稻荷社三座上社土御祖神中社倉稻魂下社大山祇女　○神社考曰空海於ニ東寺門前一逢ニ負レ稻老人一空海祭レ之以爲ニ東寺鎭守一以ニ其擔レ稻故稻荷　この說不レ用たゞ荷田神地置ニ倉稻魂一故也

二月むまの日あかつきにいそぎしかど　○神祇拾遺曰二月初午者元正帝御宇當社影向之日偶二月初午日也故至レ今用ニ此日一

さかのなからばかりあゆみしかば、みのときばかり（半分）（巳）になりにけり　○堀河後百「をそくとく宿を出つゝいなり坂のぼれば下る都人かな

やう／＼あつくさへなりて、まことにわびしう、か（暑）（副）（このやうにくるしまぬ人）ゝらぬ人も世にもあらむものを、なにしにまうでつ（もあるものをと也）らんとまで、なみだおちてやすむに、三十ばかりなる女の、つぼさうぞくなどにはあらで、たゞ引はこ（市女笠にきぬきて中ゆひたるをいふ也とぞ）（衣裳のす）べたるが、まろは七たびまうでし侍るぞ、三たびは（そなど引する人也）まうでぬ四たびはことにもあらず、ひつじには下向（未）（坂を）しぬべしと、道にあひたる人に、うちいひてくだり行しこそたゞなる所までは、目もとまるまじき事の、かれが身に、たゞいまならばやとおぼえしか、（かの[illegible]なる身に也）

おとこも女も法しもよき子もちたる人、いみじううらやまし、かみながくうるはしう、さがりばなどめでたき（髮の）人、やんごとなき人の、うるはしうかしづかれたまふ（嚴重に）（寵愛せられたる也）もいとうらやまし、手よくかき歌よくよみて、もののおりにも、まづとり出らるゝ人、よき人のおまへ（上つかたをいふ）に女房いとあまたさふらふに、心にくき所へつかはすべき、おほせがきなどを、たれもとりのあとなど（鳥のあしがたのやうに）のやうにはなどかはあらむ（はかくべしとの卑下也）　○蒙求蒼頡黃帝臣下觀ニ鳥跡一作ニ文字一鬼夜哭龍潛藏

されど、しもなどにあるを、わざとめして、御すゞり（手のよきゆへ）（上の）おろして、かゝせさせ給ふ、うらやまし、さやうの事（女房の內の上﨟をいふ也）に所のおとなゝどになりぬれば、まことになにはわたりとをからぬも、ことにしたがひてかくをこれは（あまりよしあしのへだゝらぬほどに也）

さは、あらで　○筆もつゐゆがみてもの丶か丶る丶はなにはわたりのあしでなるらん和泉式部

かんだちめのもと、またはじめて參らんなど申さす（はづかしく思ふて也）る人の、むすめなどには、こ丶ろことに、うへよりは（女房たち）じめて、つくろはせ給へるを、あつまりてたはふれに（初心の人也）（文かく人をねたむ也）ねたがりいふめり、琴笛ならふに、さこそはまだしき（上手也）ほどはかれがやうにいつしかとおぼゆれ、三まいだうたて丶よひあかつきにいのられたる人　○遠法師云稱二三昧一者何專思二寂想一之謂也 思專則志一不レ分想寂則氣虚神朗也氣虚則智恬其照神朗則無二幽不レ徹是二乃是自然之玄符レ用一致レ用也（あひ手也）（闇の目きゝたる也）すぐろくうつにかたきのさいき丶たる　まことに世（聖）を思ひたるひじり

◉とくゆかしきもの（疾也）

（巻染）（村絣）（括物）まきぞめむらご丶りものなどそめたる、人の子う（産）みたるおのこをんなとくきかまほし、（時めく人也）よき人はさら（さしもなきもの也）なり、えせものげすのきはだにきかまほし、ぢもくの（除目）（翌朝）またつとめて、かならずしる人のなるべき折もきか（何の官ニナリタルゾト也）まほし、おもふ人のおこせたるふみ

◉こ丶ろもとなきもの

人のもとにとみに（頓）ものぬひにやりてまつほど、もの見にいそぎいで丶、（物見の所に也）いまや〳〵とくるしうゐ入つ丶、あなたをまもらへたる（くるまかたを也）こ丶ち、子うむべき人のほどすぐるまで、さるけしきのなき（うむべきさまならぬ也）、とをき所よりおもふ人のふみをえて、かたくふんじたる、そくゐな（續飯）どはなちあくるほど心もとなし、もの見にいそぎい（わびしうの詞にてみれ）で丶、事なりにけり、しろきしもとなど見つけたるに、（は罪人ヲ見ニ行事にや　警固の白杖ヲ以テ來ル體也）ちかくやりよするほど（もの見の車を）、わびしうおりてもいぬべき（車より）心ちこそすれ　○和名抄曰唐令笞（シモト）大頭二分小頭一分半又云杖皆削二去節目一長二尺五寸　しもとは犯（ボン）人をうつ杖也

（密通の事なるべし）しられじと思ふ人のあるに、前なる人にをしへて、五
ものいはせたる、いつしかとまちいでたるちごのいかも丶かなどの（十日）（百日）ほどになりたる、ゆくすゑいと心ろ（息災成人の行する也）もとなし、とみの（頓也）ものぬふに、くらきをり（日暮也）はり（針）にいと（針の穴の）つくる、されどそれはさるものにて、（ぬひ手にて）ありぬべき、所

をとらへてさしいれぬるを、いでたゞなすげそといへば、さすがになどてかは（とをさではとの心也）と思ひがほにえさゝぬ、にくさゝへそひぬ、なに事もあれ、いそぎてものへ（用ある方へ也）ゆくおり、まづわがさるべき所へゆくとて、たゞいまおこせんとて（いま車かへさんとて也）、出ぬる車まつほどこそ心もとなけれ、おほちいきける（他の車の大路ゆく也）に、さなりけれ（我車のかへるぞと）とよろこびたれば、ほかざまにいぬるくちおし、ましてものみにいでんとてあるに、事はなりぬらん（祭のわたらんといふ也）などいふを、きくこそわびしけれ

子うみける人ののこと（胞衣のとゝこほる也）ひさしき、もの見にや、また御寺まうでなどに、もろともにあるべき人を（同車の人をさそひにゆきし也）、のせにいきたるを、車さしよせてたてるが、とみにものらで、またするもいと心もとなく、うちすてゝもいぬべきこゝちする、とみにいりずみ（煎炭）おこす（チコリカヌル間の）いとひさし（心もとなき也）、人の歌の返し、とくすべきをえよみえぬほど（懸想人へは返歌いそぐともなけれ共也）いとこゝろもとなし、けさう人などは、さしもいそぐ（又急ぐ折もあるべきと也）まじけれど、をのづからまたさるべき折もあり、ましてて女もおとこもたゞに（常に也）いひかはすほどは、ときのみこそはと思ふに、あひなくひがこともいでく（暫く出合かたりしに名ノ立又懐孕などあるよし心もとなき也）るぞかし（歌は口ときこそよけれと思ふに急てよみそこなふと也）、またこゝちあしく、ものおそろしきほど、よのあくるまつこそいみじう心もとなけれ、まつはぐろめ（松葉黒は紙の地也又一説待歯黒目也）のひるほども心もとなし

故殿（中関白道隆公長徳元年四月十日に卒し給ふ凶服のはらへ也）の御ぶくのころ、みな月三十日の御はらへ（定子の出給ふ也）といふ事に、出させ給ふべきを　○令曰凡六月十二日卅日大祓東西（ヤマトカウチ）文部（フヒト）上ニ祓刀ニ讀ニ祓詞ニ訖百官男女聚ニ集祓所ニ中臣宣ニ祓詞ニ卜部為ニ解除ニ

しきの御ざうし（職御曹子也）は、かたあし（方角）とて、官のつかさ（太政官の司のあきし所へ也）のあいたる所に、わたらせ給へりその夜は、さばかりあつく、わりなきやみにて、なにごともせばう（狹）かはら（瓦）ぶき（芙）にてさまことなり、例のやうにかうし（格子）などもなく、たゝめぐりて（四方ニ也）みす（簾）ばかりをぞかけたる、なかなかめづらしうおかし、女房（中宮何公の）庭におりなどして、あそぶ、せんざい（前栽）にはくはんざうと草（萱草）を、ませゆひて（架垣結）いとおほくうへたりける、花きはやかにて（きつかりと也）、ふさなりて（花房なりて）、さきたる、むべ〳〵しき所（宜所のといふ心也）の前栽にはよし、時づか（時もり也）

さなどはたゞかたはらにて　○職員令曰漏尅博士二
人掌レ率二守辰丁一伺二漏尅之節一以レ時撃二鐘皷一
時もりの打鐘也　例也
かねの音も、れいにはにずきこゆるを、ゆかしがり
女房　其方
てわかき人々廿餘人ばかりそなたに行てはしりよ
高樓也　清少レ
り、たかきやにのぼりたるを、これより見あぐれば、
薄鈍　背子
うすにびの裳からぎぬ、おなじ色のひとへがさね、
くれなゐのはかまどもをきて、のぼりたちたるは、
天人とはいふまじけれ共也　点樓の縁語也
いと天人などこそ、えいふまじけれどそらよりおり
たちにやとぞおぼゆる　○三界義云色界天人有二淨
妙イ
名色一故名二色界一身端嚴是也　無色天人無レ有二形
色一唯有レ形故名二無色界一
中ニも位の高き上らうは也
おなじわかさなれど、をしあげられたる人は、えま
若女房をうらやむ也　上﨟は日
じらでうらやましげに見あげたるもおかし、日くれ
の中川捨して日くれてまぎれ出給ふ也
てくらまぎれにぞすぐしたる人々みなたちまじり
て、右近の陣へもの見に出きて、たはふれさはぎわ
らふもあめりしをかうはせぬ事也　○近衛陣者東青
瑣門内西月華門内也
公卿の歴々着座し給ふ所也　太政
上達部のつきたまひしなどに、女房どものぼり、上

官の官人辨外記など也　打あけ通したる也
官などのゐる障子を、みなうちとをしそこなひたり
女房たち　太政
など、くるしがるものもあれど、きゝもいれず、屋の
官の屋也　そと也
いとふるくて、かはらぶきなればにやあらん、あつさ
の世にしらねばみすのほかに、よるもふしたるもふ
蜂房　蜈蚣　大
るき所なれば、むかでといふもの、日ひとひおちか
蜂の
ゝり、はちのすのおほきにて、つきあつまりたるな
定子の御方の宿
ど、いとおそろしき、殿上人日ごとに參、よるもゐあ
直に也
かし、ものいふをきゝて、秋ばかりにや、太政官の地
野郊　場　誦
の、いまやかうのにはとならん事をと、ずじ出たりし
官廳のあれたるむさく
人こそ、おかしかりしか、秋になれどかたへすゞしか
としたる體也　古今
らぬかぜの所なゝめり　○夏と秋とゆきかふ空のかよ
ひぢはかたへすゞしき風やふくらん
さすがに、虫の聲などはきこえたり、八日ぞかへらせ
官廳にて七夕祭のあれは
たまへば、七夕まつりなどにて、れいよりはちかう見
近く見ゆると也
ゆるは、ほどのせばければなゝめり、宰相の中將たゞ
兩人同心して中宮へ見舞に參給ふ也
のぶ宣かたの中將とまいりたまへるに　齊信は恒
德公三男　宣方は六條左大臣重信公三男

（中宮の女房たち也）人々出てものなどいふに、（ふと也）つゐでもなく、あすは
いかなる詩をか（七夕の詩を）といふに、（清少詞）いさゝか思ひめぐらし、
とゞこほりもなく人間の四月をこそは（我ハ天上七夕の事は不レ思人間界の四月を忘れずと也）といで給へ
る、いみじうおかしくこそ、（道隆公の死去の月也）過たる事（道隆公の事）なれど心えて
いふは、おかしき中にも、女房などこそ、さやうの（たゞのぶの男の身にて殊勝也との心也）
物わすれはせね、おとこはさもあらず　○白氏十
六題ニ大林寺桃花一人間四月芳菲盡山寺桃花始盛開
長恨春歸無ニ覓處一不レ知轉入ニ此中一來
よみたる歌をだになま覺えなるは、まことにおかし、（道隆の事を下心にふまへし人間の四月をいへれの）
うちなる人も心えずと思ひたるぞ、ことはりなるや（詩ぞとふとは心得ずと也）
このころ三月三十日ほそとのゝ（廊下也）一のくちに　○弘徽
殿の南に廊ありそれをほそ殿といふその第一の戸
をいふ
殿上人あまたたてりしを、やう／＼とすべりうせな（殿上人の退出せし也）
どして、たゞ頭中將源中將、六位一人のこりて、（ほそ殿に）よ
ろづの事いひ、經よみ歌うたひなどするに、あ
けはてぬなり、かへりなんとて、（頭中）露はわかれのなみ
だなるべしといふ事を、頭中將うち出し給へれば、

○朗詠露應ニ別涙一珠空落雲是殘粧髻未レ成
源中將、もろ共にいとおかしうずんじたるに、（清少詞）いそ
ぎたる七夕かな（三月晦日に七夕の詩をとなへ給へば也たゞのぶの詞也）といふを、いみじうねたがりて、（別の詩を論せし心を理り給ふ也）あか
つきのわかれのすぢにとおぼえつるまゝにいひて、
わびしうもあるわざかなと、すべてこのわたりにて
は、かゝる事おもひまはさずといふは、（むさといふは口をしきと也）くちをしき
ぞかしなどいひて、あまりあかく（日高たる心也）なりにしかばか
づらきの神いまぞすぢなきとて、にげておはしにし（歸りし事也）
を　○大納言朝光下らうに侍りける時女のもとにし
のびてまかりて曉にかへらんといひければ春宮女
藏人左近がよめる（今案小大君家の集の歌なりいかゞ）　いはゝしのよる
の契もたえぬべしあくるわびしきかつらきの神○
神社考役小角棄レ家上ニ葛木山一居ニ巖窟一者三十餘
歲一日告ニ山神一云自ニ葛木峯一跨ニ金峯山一其間危嶮
雖ニ苦行者一猶或艱汝等架ニ石橋一通ニ行路一衆神受ニ
是命一而夜々運ニ嵒石一督ニ營構一小角呵レ神云何不ニ
早成一對云葛木峯一言主神其形太醜難ニ晝役一待レ夜
出以レ故遲也略

三月にずし給ふを也
たなばたのおり、この事をいひいでばやと、おもひし
たゞのぶの事也
かど、宰相になり給ひしかば　○愚考署位を書時參
議名をよぶ時宰相也こゝろ得べき也
宰相になりたまへば中將にてなはせし女房たちのあひみる事もか
かならずしも、いかでかは、その程に見つけなども
ならずさだめがたしと也
せん、文かきてとのもづかさしてやらんなど思ひし
清少の　詠吟の詩の事也
ただのぶの中宮のかたへ
に、七月に參給へりしかば、うれしくて其よの事など
いひ出ばこゝろもぞえ給ふ、すゞろにふといひたら
たゞのぶの忘れて不審し給はんと也
ばあやし、などやうちかたぶき給はん、さらばそれ
宰相さらば何成ともの
にはありし事いはんとてあるに、ゝゆおぼめかで、
たまへと也
いらへたまへりしかば、まことにいみじうおかしか
三月より七月まで　女房の心也
りき、月ごろいつしかと思ひ侍りしだに、わが心な
ものずきな事な也　なにとしてさやうにいはれて覺
がら、すきぐ\しとおぼえしに、いかでさはた思ひま
悟せし事のやうにおぼえて答へ給ひけんと也のぶかたたゞのぶをも
ゝけるやう、のたまひけん、もろともにねたがり
に清少にとがめられ且たがりし事也のぶかた忘給ふ也たゞのぶ詞也
いひし、中將ぼおもひもよらでゐたるに、ありしよ
露は別の詩の事をとがめらるゝはと也
かつきの詞いましめらるゝは　しらぬかとの給ふに
宣方の詞げにさやうにしたるが有と也　嘲嫉人をあざむきて
ぞ、げにさしつなといひ、おとはしうけんなとい
たゞよ　清少也
かくし詞にいふ也
ふ事を、人にはしらせず、この君と心えていふを、
のぶ方也

清少に
なに事ぞく\と、源中將はそひつきてとへどいはね
忠のぶにのぶ方の問也
ば、かのきみに猶これのたまへとうらみられて、よ
たゞのぶのいはれし也嘲嫉といふ詞を也　人が來たればくちなしこ
き中なればきかせてけり、いとおえなく、いふ程も
めし也
なく、ちかうなりぬるをば、をし小路のほどぞなど
いふに　○押少路　京二條一丁下る町也小路の名
はあれども通小路のなき所也
のぶかた詞也
我もしりにけると、いつしかしられんとて、わざと
たゞのぶに問て知しと清少にしられんと也
清少を　碁盤
よび出て、ごばん侍るや、まろもうたんと思ふはい
あひ碁也　まけ
がゞ手はゆるし給はんや、頭中將とひとしご也、な
まじと也　清少答也
おぼしわきそといふに、さのみあらばさだめなくや
たゞのぶに　露は別の詩の事也
といらへしを、かのきみにかたりきこえ給へば、うれ
しくいひたるとよろこびたまひし、なをすぎたるこ
前のうつりたゞのぶの事也
と忘れぬ人はいとおかし、宰相になり給ひしを、う
一條の院　清少詞也
への御前にて、詩をいとおかしう、ずんじ侍りしも
誦
のを、せうくはいけいのこびやうをも過にしなども、
今よりたれかいはんぞと也
たれかいひ侍らんとする　○蕭會稽之過ニ古廟ニ託
締ニ異代之交ニ　後江相公交友の詩也會稽の大守
蕭氏その賢を思ひて呉季札が古廟を過し故に異

代の栄といふ也
宰相にならずあれかしと也
しばしならでもさふらへかし、くちおしきになど申
帝　清少さいふとて宰相にな
しかば、いみじう笑はせ給ひて、さなんいふとて、な
さではならぬと也
さじかしなど、おほせられしもおかしされどなり給
たゞのぶ
ひにしかば、まことにさう〳〵しかりしに、源中将お
のさまにまけじとて也　ゆへ〳〵しく也
とらずと思ひて、ゆへだちありくに、宰相の中将の
清少詞
御うへをいひ出て、未だ三十のごにおよばずといふ
忠のぶの朗詠し給ふと也
詩を、こと人には似ず、おかしうずゞじ給ふなどいへば
宮方の詞
などかそれにをとらん、まさりてこそせめとてよむ
清少詞　のぶかたの詞
にさらにわろくも非ずといへば、わびしの事やいか
であれがやうにずんぜてなどの給ふ　○吾年三十五
未レ覺二形體衰一今朝懸二明鏡一照見二一毛姿一疑レ鏡猶未
レ信拭レ目重求レ髭可レ憐銀鑷下拔得數莖絲臨レ秋多二
愁緒一至レ是又重悲悲止思二事理一事理信可レ知十六
位四品十七職拾遺延長休明代久趍二白玉墀一承平無
事時曆數採二鶖衛一旗忝入二室籍一官位得二相待一顔回
周賢者未レ至二三十期一潘岳晉名士早著二穐興詞一彼
皆少二於我一可レ喜始見遲　本朝文粹見二一毛一源

英明
清少詞
三十のごといふ所なん、すべていみじうおいぎやう
むる也　たゞのぶの朗詠し給ふなほ
づきたりしなどいへば、ねたがりてわらひありくに、
障　たゞのぶの　のぶかたの
ちんにつき給へりけるおりに、わきてよびいで、か
たゞのぶをのぶかたの　清
少が朗詠を　足下　たゞのぶ
うなんいふ、なをそこをしへ給へといひければ、笑ひ
清少の
てをしへけるもしらぬにつぼねのもとにていみじう
のぶかたの　清少の　の
よくにせてよむに、おやしくてこはたぞととへば、ゑ
ぶかた　おかしき事を　たゞのぶ
みこゑになりて、いみじきことききこえん、かう〳〵
に習ひし事也
きのふぢんにつきたりしにとひきて、たちにたるなゝ
清少の
めり、たれぞとにくからぬけしきにてとひ給へれは
のぶ方
といふ、わざとさならひ給ひけん、おかしければこれ
のまれしてさへゆかしかりのふにまして也　○いふた宰相の中将の
だにきけば、いでゝものなど、○そなたにもきておが
徳見る事　常は清少のろすつかひてのぶ方に　あはぬに
むべしなどいふ、下にありながら、うへになどいは
と也　この朗詠をきけば　局に
するに、これをうちいづれば、まことはありなどい
后宮の
ふおまへにかくなど申せばわらはせ給ふ、またうち
右近　目サクハンとよむべし　名
の御ものいみなる日、うこんのさうくはん、みつな
のりの上字計也　光
にとかやいふものして　○職原抄　元者近衛中衛也

平城天皇御宇大同二年勅以二近衛一爲二左近衛一以二中衛一爲二右近衛一

たゝうがみ（のぶかたよりの文のさま也）にかきておこせたるをみれば（文章也）、さんせん（參ぜん也）とするを、けふあすは、御ものいみにてなん、三十（清少の返事也）のごにおよばずはいかゞといひたれば、かへりごとに、そのご（三十の）はすぎぬらん、朱ばい臣がめをゝしへけんとしには（四十にも五十にもあらんと也）、こゝにもと書てやりたりしを（清少の返事を）、又ねたが（のぶかたの）りて、うへの御前にも、そうしければ（漢書の古事を）、宮（中宮）の御かたにわたらせたまひて（帝の）、いかゞかゝる事はしりしぞ、四十九になりけるとしにこそ、さはいましめけれ（清少にとしの事を）とて、のぶかたはわびしういはれにたりと、いふめるはとわらはせ（天子の）たまひしこそ（のぶかたの事也）、ものぐるおしかりける君かなとおぼえしか　○前漢書列傳卅四朱買臣常艾（カリ）二薪樵一賣以給食擔二束薪一行讀レ書其妻亦負載相隨羞レ之求レ去買臣云吾五十當二富貴一今已四十餘女苦日待二吾富貴一報二女功一妻怒云如二公等一終餓二死溝中一何能富貴買臣即聽去

こきでんとは、閑院の太政大臣の女御とぞ聞ゆる、（別章也）

○閑院の太政大臣は小一條太政大臣忠平の息攝政公季公也その御むすめ從二位義子一條院の女御弘徽殿也

その御かたにうちふしといふものゝむすめ、左京といひてさふらひけるを、源中將（のぶ方也）かたらひてんなど人々わらふ、ころ宮（中宮の職也）のしきにおはしまいしに、參て（のぶ方）、時々は御との（宿直）ゐなどつかうまつるべけれど、さるべき女房などもてなしたまはねば（のぶ方を）、いと宮づかへおろかにさふらふ、とのゐ所をだに（宿直所さへしかぐ給はらぬと也）、給りたらんは、いみじうまめに（眞實に）さふらひなんなどいひゐたまひつれば、人々げになどいふほどに、まことに人はうちふしや（かの左京が事）をすむ所のあるこそよけれ（を秀句にして也）、さるあたりには、しげく（のぶかた）參給ふなるものをと、さしいらへたりとて（清少の）、すべてものきこえず（の立腹也）、かた人とたのみきこゆれば（清少を）、人のいひふるしたるさまに、とりなしたまふなど、いみじうまめだちて（實らしく）、うらみ給ふ、あなあやし（清少詞）、いかなる事をかきこえつる（そらとぼけ也）に、さらにきゝとめ給ふ事なしな

どいふ、（傍輩の女房にもいはせしと殿上人をさす也）かたはらなる人をひきゆるがせば、さるべき事もなきを、（いかる心也 然の字）ほとおりいで給ふさま（子細あらんと也）こそあらめとて、はなやかにわらふに、これもかのいはせやたまふならんとて、いとものしと思へり、（清少の陳じて也）さらにさやうの事をなんいひ侍りぬ、人のいふだに、にくきものをといひて、（きろうの、内へかほ入て也）ひきいれにしかば、のちにもなを人にはちがましき事いひつけたるとうらみて、殿上人のわらふとて、（うにさを也）いひ出たる也とのたまへば、（清少の詞）さてはひとりをうらみ給ふべくもあらざゝめる、あやしなどいへば、（のぶ方の少納言にいひつめられてうらみをはれ給ふ也）そのゝちはたえてやみたまひにけり、

●むかしおぼえてふようなるもの（むかしはいみじくいまは不用なる也）

（繧繝縁）うげんべりのたゝみ、（古）ふりてふし出きたる、（きぬのふし也）からゑ（からゑは書）の屏風のおもてそこなはれたる、（つぐ事ならぬもの也）藤のかゝりたる松の木、かれたる、地ずりのもの花かへりたる、（白きぬに青花のもんの色かへりたる也）（衛士繪師）ゑじの目くらき、（雨說）几帳のかたびらのふりぬる、（帽額）もかうのなくなりたる、（かもじの事也）七尺のかづらのあかくなりたる、（葡萄）ゑびぞめのおりものゝはひかへりたる、（槇の灰の色のさめし也）いろこのみのおいく（老衰）づをれたる、おもしろき家の木だちやけたる、（燒亡也）いけなどは、（恰）さながらあれど、（萍）（水草 茂）うきくさみくさしげりて（掃除する人もなくむかしのさまいまはかはりて不用也）

●たのもしげなきもの

（男女友たちの中にても也）心みじかくて、人わすれがちなる、むこのよがれ（夜離）がちなる、（老て下官なる也）六位のかしらしろき、空ごとする人のさすがに、（所いりもは也）人の事なしがほに大事うけたる、（末のまけたる）一ばんにかつすぐろく、（もりて也）六七八十なる人のこゝろ、（病氣）あしうして日ごろになりたる、かせふくにほあげたる舟、（する）經は（のたゆまんかと也）不斷經

●ちかくてとをきもの（祭禮宮中にてとり行へば也）

宮のほとりのまつり、おもはぬはらから（同腹）しんぞく（親族）の中　○もろこしもゆめにみしかばちかゝりき思はぬなかぞはるけかりける

（九折いまの七曲也）くらまのつゞらおりといふみち　しはすの晦日む月のついたちのほど

●とほくてちかきもの

ごくらく　舟のみち　おとこ女の中（心通ずれば遠方も近しと也）　○阿彌陀經

從レ是西方過二十萬億佛土一有二世界一名曰二極樂一又

曰去レ此不レ遠

（武藏）●井は

ほりかねの井　はしり井（走井近江井よりながれて早くながるゝをいふ）はあふさかなるがおかしき

やまの井、さしもあさきためしになりはじめけん、

（飛鳥井）あすか井みもひもさむしとほめたるこそおかしけれ

（二條萬里小路　催馬樂）○あすか井はやどりはすべしかけもよしみもひも（舍　水　氷）

（御馬草）寒しみまくさもよし

（山城）玉の井（烏丸東大炊御門の南）　少將の井（山城水無瀬の邊）　さくら井（常寧殿）　きさきまちの井　采

女まちの井　（イ本ちぬきの井）

（紀の守とよむべし）●受領は（諸國の守護國衙庄園の事を取行ふもの也）

紀伊の守　和泉　○秦徐福求二仙藥一來二是國一鄕人

爲二奇異人一故曰二紀伊一

國史云元正天皇靈龜二年四月甲子割二河內國大島

日根和泉三郡一始置二和泉監一

やどりつかさの權の守　○宿づかさとは院司の廳官

六位の相當也六位のやどりづかさの人が大ト國の

權の守をかぬれば權守にひかれて五位に敘せらる

ゝ也されば宿官の權の守を兼五位にて規摸なるよ

しをいふ　○職原　權守者近代多是遙授之官也參

議二三位中將少納言等必兼レ之又殿上六位藏人敘

位之時須レ辭即任二權守一又例也

（上國也）下野　甲斐　越後　筑後　阿波（下四ケ國同此やうな上國權守あり中下の國になし）　○下野の國府は

在二都賀郡一　甲斐の國府は在二八代郡一　越後の

國府は在二頸城郡一　筑後の國府は在二御井郡一筑後

地形似二木兎一　阿波の國府在二名東郡一

●大夫は

式部の大夫　左衛門大夫　史大夫　○大夫は五位の

惣名也此時多伊宇　太皇太后宮皇太后宮皇后宮中

宮この四職の大夫は馱以武と訓ずる也凡大夫と稱

する侍の面目也　○左衛門の尉六位相當也それが

五位に敘せられ位田給はる時に左近大夫左衛門大

夫などいふ也　○史大夫　八史は六位の諸大夫也

それが五位に敘し位田給はるを史の大夫といふ

六位藏人、思ひかくべき事にもあらず、かうぶりえ（敘爵する事也）

て、なにの（前の事也）大夫、權のかみなどいふ人の、板屋狹き

（もちて）家もたりて、（全）またくひがきなどあたらしくし、（庭せばき也　牛つなき也）車やど

りにくるま引入て、前ちかく本おほくして、うしつな

がせて、草などかはするこそいとにくけれ（おもひがけぬ首尾也）、紫がは（すだれの）
して（つり手也）、いよすかけ渡して、ぬの（布）さうじ（障子）などはりてす
まゐたるは、よるは門つよくさせなど、ことおこな（いひ付る也）
ひたるいみじうをひさき（生先也）ながく、こゝろづきなし（ゆくさきのたのみなき也）、
親の家、しうと（舅）はさら也、おぢ（伯父）あに（兄）などのすまぬ
家、そのさるべき人のなからん（そこにすむべき人もなき所など也）は、をのづからむつ
ましう、打しりたるずりやう（受領）、また國へゆきて（他國へ行て也）、い
たづらなる、さらずは（それならずは也）女院宮ばらなどの屋、あまたあ
るに、つかさまちいでゝのち、いつしかと、よき所た（さやうの家にすむべきほどの官にいたりすむもよしと也）
づねいでゝ、住たるこそよけれ、女のひとりすむ（又別の事也　後家又おと）
家（この留守也）などの、たゞいたうあれて、つゐぢなどもまたか（不全）
らず、池などのある所は、みくさゐ（水草居）、庭などもいど（最）
よもぎしげりなどこそせねども、所々すなごの中よ
り青き草みえ、さびしげなるこそあはれなれ、ものか
しこげに（見よき事也）なだらかにすり（修理）して、門いといたうかため（前段に門）、
きはぐしきは（よくさせなど事行ひたるといふ首尾也）、いとうたてこそ覺ゆれ、宮づかへ
人の里なども、おやども、ふたりあるはよし、人しげ

く出入、「おくのかたにあまたさまぐのこゑおほく（見まひの人女房などつとひしさま也）
きこえ馬のをとしてさはがしきまであれどかなし、（宮仕の余勢あれども父母なきはたよりなくかなしと也）
されどしのびてもあらはれても（おもひ人などの音つるゝさま也）、をのづから（自然）いで給
ひけるをしらでとも、またいつか參給ふなどいひ、
さしのぞく、こゝろがけたる人（あひ見んひまもやと心がけし人のさま也）はいかゞはと門あけ
などするを、うたてさはがしうあやうげに（女の心中也）、よなか（夜半）
までなど思ひたるけしきいとにくし、大御門（ミカド）はさし（鎖）
つやなどとはすれば、また人のおはすればなど（門番の答也）なま（生）
ふせ（防）がしげに思ひていらふるに（かのとひし人ないとはしげにふせうげに答る也）、人出ゆきなばとく（門）
させ、このころはぬす人おほかりなどいひたるに、
いとむつかしうちきく人だにあり、この人（客人）のとも（供）
なるものぞ、けぢかく（氣近也）いまやいづる（客人の）とたえずさしの
ぞきて、けしき見るものども（供のものゝ）を、笑ふ（わら）べかめり、ま
ねうちするも聞てはいかに（ふまれたる供人のするを亭主がた　しかる心）、いとゞきびしういひと
がめけん、いと色にいでゝ、いはぬも、思ふこゝろな（留守の女房のきのどくに思ふ心也）
き人はかならずきなどやする、されどすくよかなる（健也實めなる人）
かたは夜ふけぬ、みかど（御門）もあやうかゞなるといひてい（早くいぬる也イ）

二疑ル也
へたてなき人也
早かへられと
ぬるもあり　まことに心ざしことなる人ははやな
いふ也
深の字追やる心也
心やすきゆへ
どあまたゝびやらはるれど猶ゐあかせばたび〳〵
夜の
門番
ありくに、あけぬべきけしきをめづらかにおもひ
愚考昧爽の字か
門チ
て、いみじき御門をこよひらいさうとあけひろげて
いひ事也
門守りか
おやのまもるはなにくしと也
と、きこえごちてむちきなくあかつきにぞさすな
る、いかゞにくき、おやそひぬるは、なをこそあれ
まゝしき親の事也
ましてまことならぬは、いかにおもふらんとさへ、
兄弟
延喜ありと
つゝましうて、せうとのいへなども、げにきくには
也
是よりさしあひ
さぞあらん、よなかあかつきともなく、門いと心がし
のなき所也
こくもなく、なにの宮、うちわたり、とのばらなる人
々の出あひなどして、かうしなどもあけなから、
しのひおとこ也
ふゆのよをゐあかして、人のいでぬるのちも見出し
たるこそおかしけれ、あり明などはましていとおか
歸る人
し、ふえなどふきて出ぬるを、われはいそぎてもね
ねられぬまゝに下女なとに對し物かた也
られず、人のうへなどもいひ、歌などもかたりきく
まゝに、ねいりぬるこそおかしけれ、雪のいとたか
くはあらでうすらかにふりたるなどはいとこそおか
しけれ、また雪のいとたかくふりつみたるゆふぐれ

より、はしちかう、おなじこゝろなる人二三人ばか
り火桶中にすへて、ものがたりなどするほどに、く
らうなりぬれば、こなたには火もとほさぬに、おほか
た雪のひかりいとしろうみえたるに、火ばしもて灰
掻弄
などかきすさひて、あはれなるもおかしきもいひあ
人の來る體也
はするこそおかしけれ、よひもすきぬらんと思ふほ
どに、くつの音のちかうきこゆれば、あやしと見い
ふときたる也
だしたるに、とき〳〵かやうのおりおぼえなく見ゆ
來し人の詞
るなりけり、けふの雪をいかにとおもひきこえなが
何條也
障也
ら、なんでう事に、さはりその所にくらしつるよし
亭主の女あるじの答也
などいふ、けふこん人をなどやうのすぢをぞいふら
拾遺冬
んかし　○山里は雪ふりつみて道もなしけふこん人
をあはれとはみむ　兼盛
円坐
ひるよりありつる事どもを、うちはじめてよろづの
事を、いひわらひわらうださしいでたれど、かたつか
內
外
たのあしはしもながらあるに、かねの音のきこゆる
までなりぬれど、うちにもとにもいふ事どもはあか
昧爽
ずぞおぼゆる、あけぐれのほどにかへるとて、雪なに

の山にみてるとうちずんしたるは、いとおかしきもの也 ○朗詠雪 謝觀（梁の孝王鄒生枚叟などいふ文人をめし雪を賞せしさまたいまのけしきにひとしきこと朗詠したる也）曉入㆓梁王之苑㆒雪滿㆓群山㆒夜登㆓庾公之樓㆒月明㆓千里㆒
女のかぎりしてさもえゐあかさ（居明）ゞらましをたゞなる（かの人の來りしは面白しと也）よりはいとおかしう、すきたるさまなどを、いひあはせたる
（是よりものがたり也）村上の御時雪のいとたかうふりたるを ○醍醐第十四の子朱雀院同腹の弟也諱成明人王六十二代
（物どもの用器）やうきにもらせたまひて、むめのはなをさして月、いとあかきに、兵衛の藏人にたびければ ○村上天皇の御時源延元天德の比の兵衛藏人也藤原清正藤原元輔藤原脩敏天曆の比の兵衛藏人也
月雪花の時と奏したりけるこそ、いみしうめで（愛）させ給ひけれ、○白文集二十五寄㆓殷協律㆒五七言八句の駒の句に琴詩酒友皆拋㆑我雪月花時獨憶㆑君
（村上の勅定）歌などよまんにはよのつね也、かうおり（如是折）にあひてる事なんいひがたきとこそおほせらるれ、おなじ人（兵衛の藏人也）を

御ともにて、殿上に人さふらはざりけるほどた丶ず（村上の）ませおはしますに、すびつ（地爐）のけふりのたちければ、かれはなにのけふりぞ見てこよとおほせ（勅定）られたれば見て歸參てわたつみのおきにこがる丶ものみれば（沖爐にそへて也）あまのつりして歸るなりけりとそうしけるこそおかしけれ、（蛙の火にいれしとよそへし也）かへるのとび入てこがる丶なりけり
（御形）みあれのせんじ（宣旨）の ○後拾遺の作者大和の宣旨と同人なるべし、作者部類中納言惟仲女三條院皇后宮女房大和守義忠爲㆑妻故號㆓大和㆒河海に賀茂祭前日於㆓垂迹石上㆒有㆓神事㆒號㆓御形（ミアレ）㆒ 花鳥みあれは玉依姫の別雷をうみ給ひし所にや
（宣旨より上られし人形也）五寸ばかりなる殿上わらはのいとおかしげ（うつくしく也）なるをつくりて、みづら（びんづら也）ゆひさうぞく（裝束也）などうるはしくして、名かきて奉らせたりけるに、（禁中へ）ともあきらのおほきみとかきたりけるをこそ、いみじうせさせ給ひけれ（宮の定也）
宮にはしめて參（淸少の）たりけるころ、ものゝはづかしき事かずしらず。なみだもおちぬべければよる〳〵參て三尺の御几帳のうしろにさふらふに。繪などとり出て

見せさせ給ふだに、手もえさし出まじうわりなし、こ（はづかしき也）
れはとありかれはかゝりなどのたまはするに、たか（高）
坏也
つきに参たるおほとのあぶらなれば、かみのすぢな（ともし火也）（御宿直油と書　顕證）
どもなかなかひるよりはけせうにみえて、まばゆけ（心つかひ也）
れどねんじて見などす、いとつめたきころなればさ（寒するこ）
し出させたまへる御手のわづかに見ゆるに、いみじ
ろ手の赤くなる也
う匂ひたるうす紅梅なるは、かぎりなくめでたしと（いやしき児心也）
見しらぬさとびごゝちは、いかゞとかくる人こそよ
におはしましけれどおどろかるゝまでぞまもりまい（清少の歸らんと也）
らする、あかつきにはとくなどいそがるゝ（定子の詞也）かづらき
の神もしばしなどおほせらるゝをいかですぢかひ（夜ルまくはい）
かゝと辭退するをすれものに思しめさんとそのまゝ居る也格子明ぬ
ても御らんせんとてふしたれば、御かうしもまいら（格子あけよと也）
也
す、女官と参てこれはなたせ給へといふを女房きゝ（まつまて也）（女房たち定子の心を）
しりて也
てはなつを、まななとおほせらるればわらひてかへり（定子の清少に）
ぬ、ものなどとはせたまひのたまはするに、ひさし（さあらば早）
うなりぬれば、おりまほしうなりぬらん、さははや（清少の）
なりよと也
とてよさりはとくとおほせらるゝ、いざりかへるや（膝行の二字）

をそきとあけちらしたるに、雪はいとおかしけふは（格子を也明し御前の首尾也）（宮よりの詞）
ひるつかたまいれ、雪にくもりて、あらはにもある
まじなどたびたびめせば、このつぼねあるじもさの（たれともなし）
清少をすゝむる也
みやこもりゐ給ふらんとすゝむ、いとあえなきまで御（新参ものをあ）
まりまで召まつはすと也
前ゆるされたるは、おぼしめすやうこそあらめ、思
ふにたがふはにくきものぞとたゞいそかしげにいた（清少をすゝめて也）
さ思し召ん我にもあらずと也
せば、われにもあらぬ心ちすれば参もいとくるし
中宮の所の
き、ひたき屋のうへにふりつみたるもめづらしうお（巨也おほく）
かし、御前ちかくはれいのすびつの火こちたくおこ
して、それにはわざと人もゐず、宮はぢんの御火おけ（沈）
のおなじなし繪したるにむかひておはします上らう（梨地也）
○禁秘抄上﨟不ㇾ謂二是非一二三位典侍號二上﨟一着二
赤青色一候二陪膳一
陪膳に候し諸事取あつかふ人也
御まかなひしけるまゝに、ちかくさふらふつ
ぎのまにながびつにまなくゐたる人々からきぬきた（長すびつ也）（上勢）（背子）（着垂）
れたるほど也、なれやすらかなるを見るもうらやま（清少心）
しく、御ふとりつぎたちゐふるまふさまなど、

○田の員數に隨ひ民戸をさだめ御領とするを封戸（フコ）といふその所へ下し給ふ切手やうのものを御封といふ也その封を女官が取つく也

（臆せぬ體也）つゝましげならず、ものいひえわらふ（笑咲也）いつの世にか（うらやまき心也）さやうにまじらひならんと思ふさへぞつゝましき、（奥へよりて也）あふよりて三四人つどひて（集）ゑ（繪）など見るもあり。しばしありて、さきたかうをふこゑ（車の前駈の聲也）すれば、殿（道隆公）まいらせ給ふなりとてちりたるものどもとりやりなどするに、おくにひきいれて、（清少）さすがにゆかしきなゝめりと、御木丁のほころびよりわづかに見いれたり、（后宮の兄伊周也）大納言殿の參らせ給ふなりけり、御なほしさしぬきの紫の色雪にはへて（映也）おかし、はしらのもとにゐたまひて、（大納言殿の詞）きのふけふものいみにて侍れど、ゆきのいたくふりて、侍れば、おぼつかなさになどのたまふ、（后宮の詞山里は雪ふりつみて道もなしの歌也）みちもなしと思ひけるに、いかでかとぞ御いらへある、（伊周公）うちわらひ給ひて、あはれともや御覧ずると（けふらん人をあはれとやみんの歌にて下の句也）てなどのたまふ、御ありさまは、これよりはなに事かまさらむ、（伊周公をほめて也）ものがたりにいみじうくちにまかせて

いひたる事ども、たゞはさゝめりとおぼゆ、（伊周をみれば物語もたゞふまじと也）宮はしろき御ぞどもにくれなゐのからあやをふたつ、しろからあやとたてまつりたる、（着給ふ事也）御ぐしのかゝらせ給ふるなど、繪にかきたるをこそかゝる事はみるに、うつゝにはまたしらぬをゆめのこゝちぞする、女房と、（伊周公のさま也）ものいひたはふれなどし給ふを、いらへいさゝかはづかしともおもひたらず聞えかはし、そらごとなどのたまふ、かゝるをあらがひろんじ（論）などきこゆるは、め（目）もあやに（及ばすおとろかるゝさま也）あさましきまであいなくおもてぞあかむや、（清少の赤面也）御くだもの參などして、（伊周公）御まへにも（后宮も）參らせ給ふ、御木丁のうしろなるは（清少の事）たれぞととひ給ふなるべし、（伊周公の）さすがにこそあらめ、（たれがしのむすめと也）たちておはするを（清少のもとへ伊周の）ほかにやあらんと思ふに、いとちかうゐたまひて、（清少もとに）ものなどのたまふ、まだまいらざりしとき、（參内せぬ時也）きゝをき給ひける事などのたまふ、（實に思ふなとたはふれ給ふ也）まことにさありしなとのたまふに、御木丁へだてゝよそに見やり奉るだに（几丁のほころびより見入し時の事也）はづかしかりつるを、いとあさましうさしむかひきこえたるこゝち、（はづかしき也）うつゝともおほえず、行幸など見るに、車のかたにい

さゝか見おこさせ（清少を）給ふは、したすだれひきつくろひ、すきかげもやと、扇をさしかくす、猶いとわが心（清少の）ながらもおほけなく（無態氣也似合ぬ心也）いかでたち出にしぞと、あせ（汗溢）あへていみじきに、なに事をかきこえん（ものゝ申されぬ也）、かしこきか（恐がましくさ）げとさゝげたるあふぎ（ゝけし扇也）をさへとりたまへる（伊周公の）に、ふりかくべき（かほかくさんとて）かみのあやしさ（見ろしからんとの心づかひ也）ゝへ思ふに、すべてまことにさるけしき（いやと思ふ心やみえつらんと也）やつきてこそ見ゆらめ、とくたち給へ（伊周公の）なとおもへど、扇（清少扇也伊周の）を手まさぐりにして、繪はたがかきたるぞなどのたまひて、とみに（早速也）もたちたまはねば、袖（清少の）をおしあてゝうつぶしゐたるも、からきぬにしろい（白粉也）ものうつりて、まだら（かほの事也）にならんかし、ひさしうゐた（伊周）まひたりつるを、ろんなう（勿論）くるしとおもふらんとこ（周）ゝろへさせたまへるにや、これ見給へ（宮の）（后宮の伊周へ）、これはたがかきたるぞときこえさせたまふを、うれしと思ふに（清少の）（后宮の）たまひて見侍らん（伊周の）と申たまへば、なをこゝへとのた（伊周詞）まはすれば、人をとらへてたて侍らぬなりとのたまふ、いといまめかしう身のほどとし（清少三十はかりの時也）には、あはすか（似合ぬ也）たはらいたし、人のさうかな（草名）書たるさうしとりいでゝからんず　○上古は萬葉がき也のちに女文字になる草假名二色に見るはあしき也江談云天仁二年八月日向ニ小一條亭ニ言談之次問云假字手本何時始起乎又何人取作乎答云弘法大師作云々

たれにかあらん（伊周公詞也）、かれにみせさせたまへ（清少に）、それぞ世にある人の手はしりて侍らんと、あやしき事どもをたゞ出させんとのたまふ、一所にあるに、またさきうちおさせておなじなをしの人（公卿也）參らせ給ひて、これはいますこしはなやぎ（花やか也）さるがう事（猿楽也ざれ事）などうちし、ほめわらひけうじ、われもなにがしか、とある事かゝる事（いろ〳〵のものがたり也）など殿上人のうへなど申きこえ、なをいとへんげ（變化）のもの天人などのおりきたるにやとおぼえてしを、日ごろすくれば（のち〳〵はうゐ〳〵しからすとの詞也）いとさしもなきわざにこそありけれ、かく（清少心）みる人々も、家のうちいでそめけん（宮仕に出ていてめし也）ほどはさこそはおぼえけめ（はづかしからんと也）、とかくしてもて行に、をのづからおもなれ（面馴）ぬべし、ものなとおほせられて（后宮の清少に）、われをば思ふやと（おろかにはおもはすと也）とはせ給ふ、御いらへに、いかにかはとけいするにあはせて、だいはん所（臺盤所也）のかたにはなをた

かくひたれば、あなこゝろう空ごと（清少思ふとは偽ならん）するなりけり
（とのたはふれ也）よし〳〵とていらせ給ひぬ　〔奥義抄人の事を思ひ
くはたつるにははなひつればならずと云々　袖中抄
に顕昭云はなひるはなに事にもよからぬ事也　四
分律曰時世尊嚔（ハナヒル）諸比丘咒言ニ長壽ニ下略
（清少詞）いかでかそらごとにはあらむ、よろしうだにおも（大方にもおもはすと也）
ひきこえさすべき事かは、はなこそは空ごとしけれ（はなひたる事）
とおぼえてさてもたれがかくにくきわざしつらむと（推）
おほかた心づきなしとおぼゆれば、わがさる折をし（后宮の前にてはなひたる事也）
（猶）ひしぎかへしてあるを、ましてにくしとおもへど、ま
だうゐ〳〵しければ、（新参なれは也）ともかくも啓しなをさであけ
ぬれば、（御前より局へ）をりたる、すなはちあさみどりなるうすや
うにえんなる文を（后宮の）もてきたりみれば、「（后宮歌）いかにしてい
かにしらましいつわりを、（筆とり・よけ后宮のまかせかいふ詞也）空にたゞすの神なかりせ
ばとなん、御けしきはとあるに、めでたくもくちお
しくもおもひみだるゝになをよべ（かのはなひし人の事也）の人ぞたづねも
きかまほしき、（清少歌）うすきこそそれにもよらめ花ゆへに、（うすきははなひしにもさまたけらるへし）
（されとも、さ思しめすは身の不幸と也）
うき身のほどをしるぞわびしきなをこればかりはと

けいしなをさせたまへ、しきのかみも（職神也のろひする神也）をのづからい
とかしこしとて、参らせてのちもうたて、（のち〳〵もかゝろうたてし時たれ）おりしもな
（か鼻ひしそと也）どてさはた有けんいとおかし、

枕草紙旁註巻九

●したりがほなるもの（してもつたりがほの心也）

む月一日のつとめて、さいそ（最初）にはなひ（嚔）たる人（元日にはなひて忌ひ事なといふ）、きしろふ（競ひあらそふ也）たびの藏人に、かなしう（あはれむ也）する子なしたる人のけしき、除目にそのとしの一の國（上國の受領也）えたる人のよろこびなどいひて、いとかしこう（かたじけなき官になり給ふ也）なりたまへりなど人のいふいらへ（答也）に、なにかはいとことやうにほろびて（零落也國主の受領滿足せぬやうなれ共徳つく故悦ふ也）侍るなればなどいふもしたりがほ也、また人おほくいどみ（挑あらそふ也）たるなかに、えられ（撰れて也）てむこにとられたるもわれはとおもひぬべし、こはき（強）もの、け（物怪）てうじ（調伏）たるげんざ（驗者）、ゐんふたぎ（韵掩齒とも書　疾也詩の韵をふたきて下の句の末字を推量して勝負をする也）のあけとうしたる小弓ゐるにかたつかたの人、しばぶきをしまぎらはして（自慢したる也）さはぐに念じて（をしだまる也）をと（弓づるの射）たかうゐてあてたるこそ、したりがほなるけしきなれ、碁をうつにさばかりとしらで（さほどつよきとしらで也）ふくつけき（貪生の二字よくかましき心也）はまたこと所に、かゝぐり（かゝづらふ心也）ありくに、ことかたより目もなくして（勝たかる方の石の死ぬる也）、おほくひろひとりたるもうれしからじや（うれしからむと也）、ほこりかにうちわらひ、たゞのかちよりはほこりか也、ありありて（久しくありて受領になるうれしさを云也）受領になりたる人のけしきこそうれしげなれ、わづかにあるずんざ（從者）もなめげ（無禮）にあなづるも、ねたし（疾也にくしといふ心）と思ひながら、いかゞせんとて念じ過しつるに、われにもまさるもの（威勢有人也）ともの、かしこまり（恐れつゝしむ躰也）、たゞおほせうけたまはりなんとついせう（追從）するさまはありし人とやはみえたる（受領以前の人とはおもはれずと也）、女房うちつがひ（いまゝてなかりし女房もみゆる也）みえざりし調度さうぞく（裝束也）のわきいづる、受領したる人の中將になりたるこそ、もときんだち（公達の中將に心安く思ふ故それほとなし受領の中將はまれなる故したりがほ也）のなりあがりたるよりも、けたかうしたりがほにいみじうおもひたゞめれ、くらゐこそなをめでたきものにあれ、おなじ人ながら大夫のきみや、又侍從のきみなどきこゆるおりはいとあなづりやすきものを、中納言大納言大臣などになりぬるは、むげにせんかたもなくやんごとなく（各別の心也）おぼえ給ふ事の、こよなさよ（受領も大上國の守になりしはこよなしとゝ心也）、ほどほどにつけてはずりやうもさこそあゝめれ、あまた國にゆきて（功をつみ昇進する次第也）、大貳や四位などになりて、かんだちめ（宰相以上を上達部といふ也）になりぬればおもおもし　○大貳（相當從四位下）大貳少貳皆次官

也　令義解曰大貳本正五位上也　延暦十二年改爲ニ
從四位下一
受領はかきりありてほとに過てさまての事なしと也
されとさりとてほどすぎなにばかりの事かはある、
まれなる心也
またおほくやはある、ずりやうのきたのかたにてく
田舍へ　地下
だるこそ、よろしき人の幸には思ひてあふめれ、たゞ
人ニ位中將にてある人女ゆなとゝむしつかれ給ふ
のかんだちめのむすめにて、后になり給ふこそ、め
昇進
でたけれ、されどおのこはわが身のなりいづるこそ
女の位にのほるより也
めでたくうちあふぎたるけしきよ、法師のなにがし
僧綱の内に置
供奉などいひてありくなどは、なにとかはみゆる
ても供奉なとの位のほとは日ニたいぬ也
○延喜式云毎年正月於ニ大極殿一講ニ説金光明最勝
王經一時以ニ内供奉十禪師一爲ニ讀師一
經たうとくよみ、みめきよげなるにつけても、女に
かくあなとられこそすれ也　この官前に
あなづられてなり、かゝりこそすれ、僧都僧正にな
委し
りぬればほとけのあらはれたまへるにこそとおぼし
人の恐れつゝしむ躰也
まどひてかしこまるさまはなにかはにたる

●風は

あらしこがらし三月ばかりのゆふぐれにゆるくふき
たる花かぜいとあはれなり、八九月ばかりに雨にま
じりてふきたる風いとあはれ也、雨のあしよこさま
夏たゝなし衣服の事也　綿絹
にさはがしう吹たるに、夏とをしたるわたぎぬの　あ
生絹
せの香などかはき、すゝしのひとへに引かさねてき
夏の間の趣也
たるもおかし、このすゝしだにいとあつかはしうす
八九月の風冷かになりしたゝむところく心也
てまほしかりしかは、いつのまにかうなりぬらんと
格子
思ふもおかし、あかつきかうしつま戸などをしあけ
颯也
たるに、あらしのさと吹わたりて、かほにしみたる
たか　カンナツキ
こそいみじうおかしけれ、九月つごもり十月一日の
ほどの、空うちくもりたるに、風のいたうふくに、
黄なる木の葉どもの、ほろ〳〵とこぼれおつるいと
椋
あはれ也、さくらの葉むくの葉などこそおつれ、十
月ばかりに木だちおほかる所の庭はいとめでたし、
暴風
のわきのまたの日こそいみじうあはれにおぼゆれ、
立蔀　透也　ふしころびたる也　前栽也
たゞしとみすいがいなどのふしなみたるに、せんざ
倒
いどもの心ぐるしげなるを、大きなる木どもたふれ
えだふきおられたる事だにおかしきに、をみなへし
這伏
などのうへによろぼひはひふせる、いとおもはずな
格子の前の坪也　颯　黄葉ニ説也
り、かうしのつぼなどに、さときばをことさらにし

たらんやうに、こまぐ\とふきいれたるこそ（野分のやさしきさまとも思はれず也）あらか
りつる風のしはざともおぼえね、いとゞきぬのうへ
はくもりたる（よごれし跡也）をきて、くち葉のおりもの、うすもの（紗也）
などのこうちぎきて、まことしくきよげなる人の、よ
るはかぜのさはぎにねざめつれば、ひさしうねをき（朝ね也）
たるまゝに、かゞみうち見て、もや（母屋）よりすこしいざり（膝行）
出たる、かみ（髪）は風にふきまよはされたる、すこしうち
ふくだみ（そゝけたる也）たるが、かたにかゝりたるほどまことにめ
でたし、ものあはれけしきみる（野分のあしたの風景也）ほどに、十七八（よの女房也）ばか
りにやあらん、ちいさうはあらねど、わざとをとな
なゞどはみえぬがすゞしのひとへ（十七八の人の衣裳也）のいみじうほころ
びたる、はなもかへり（色のさめたる也）、ぬれ（野分のしぶきに）たるうす色のとのゐもの（ねまき也）
をきて、かみはおばなのやうなる。そぎすべして（長髪たつまへたる也）、
たけ（髪）ばかりはきぬのすそにはづれて、はかまのみ（袴ばかり着て上に何もきぬ也）
あざやかにて、そばより（十七八の女房の）みゆるわらはべのわかき人（何）
のねごめにふきおられたるせんざい（草花の）などをとりあつ
めおこしたてなどするを、うらやましげに（わらべの）をしはか（この花をかく）
りて、つきそひたる（したきなど思ふ心也）うしろもおかし、

◉こゝろにくきもの

ものへだてゝきくに、女房とはおぼえぬこゑ（主とおぼしき女のこゑ也）のしの
びやかに聞えたるに、こたへわかやかにしてうちそ
よめきてまいるけはひ（上の前へよそほひ也）、もの参る（上の御膳進る也）ほどにや、はしか
い（箸匙）などのとりませてなり（からくと）たる、ひさげ（提）のゑ（柄）のたふれ
ふすもみゝ（耳）こそとゞまれ、うちたるきぬ（のしめ也）の、あざやか（うつくしき）
なるに、さはがしうはあらで、髪のふりやられたる、
いみじうしつらひたる所の、おほとなぶら（高灯臺もともさで）はまいら
で、ながすびつ（長いろり）に、いとおこしたる火のひかりに、御
木丁のひものいとつやゝかにみえ、みすのもかう（帽額）の
あげたる、このき（鈎也）はやかなるも、けざやかに（あざやかに也）見ゆ、よ
くてうじたる（調也こしらへし也）火おけ（火桶）のはい、きよげにおこしたる火
によくかきたるゑのみえたるおかし、はし（階橋いづれにてもよし）のいとき
はやかに、すぢかひたるもおかし、夜いたうふけて、
人のみなねぬるのちに、と（外）のかたにて殿上人など
ものいふに、おくにごいし（笥）げにいる音のあまたきこ

えたる、いとこゝろにくし、すのこ（簀子也緣也）に火とぼしたる、
ものへだてゝきくに、人のしのぶるが、夜中などうち
おどろきていふ事はきこえず、おとこもしのびやか
にうちわらひたるこそ、なに事ならんとおかしけ
れ、

●しまは
うきしま（奥州浮島）　やそしま（出羽八十島くのしまとも）　たはれじま（肥後風流島）　みづしま（同國筑前とも）　松が（奥州）
うらしま　まがきがしま（同）　とよらのしま（長門豊浦）　たどしま（一本たくし）

●はまは
そとのはま（奥州卒土）　ふきあげのはま（紀州）　ながはま（伊勢）　うちでの（江州）
はま　もろよせの濱　○もろよせ川但馬の國ともし
ほ松葉集にしるす愚考もろよせの濱も但馬なるべ
し余が故友蓮池氏のなにがし但馬の國もろよせの
濱の人也うちよする浪のおなじくよるとてもろよ
せと名づけたるよしかたられしこの抄のたよりと
書ぬ

●うらは
おふのうら（生浦伊勢）　しほがまのうら（奥州）　しがのうら（江州）　なたか（紀州萬葉）
十一にあり八雲遠江　（紀州）　（紀州）　（名高）
のうら　こりずまのうら（攝州）　わかのうら　千里のはま

こそひろうおもひやらるれ

●寺は
つぼさか　○拾芥曰法華寺號二壺坂寺一南都道基上人
建二立之一
かさぎ　○同笠置大和國彌勒云々解脫上人建レ之
法りん　○同法輪寺虛空藏也大井河西廣隆寺道昌建
レ之
高野は弘法大師の御すみかなるがあはれなる　○す
む事は所がらぞといひながらかうやはものゝあは
れなるべき　元亨釋第一卷釋空海世姓佐伯氏讃州
人也父田公母阿刀氏夢梵僧入レ懷而有レ身在レ胎十二
月寶龜五年生小名曰二貴物一承和二年在二金剛峰寺一
三月廿一日結跏趺座而作二毘盧印一泊然入レ定七日
共二諸弟子一念二彌勒寶號一至二是日一氣絕蓋持二定身一
待二龍華一也年六十二延喜二十有一年冬十月賜二諡
弘法大師一
石やま　○元亨釋廿八近江州勢多縣有二一山一如意輪
觀自在靈應之地也　拾芥云近江石山寺丈六土佛二
臂如意輪也朗辨爲二聖武御願一

粉川　○元亨釋廿八寶龜元年建レ之紀州那賀郡風市(フシ)村也

志賀　ながらの寺とも歌によめるよし八雲の抄にあり　○拾芥云崇福寺近江志賀郡號ニ志賀寺一三井寺末也

●だらには　陀羅尼一尊勝陀羅尼 隨求陀羅尼の類あり

あかつき　陀羅尼は念念のためにとなふるものなれば一日の内にてあしたがよしと也

●どきやうは　讀經は後世のためなれば一日の罪障さんげして菩提を求るによしと也

ゆふぐれ　○大論秦言ニ能持一集ニ種々善法一能持令ニ不レ散不ニ失譬翻爲ニ惣持一　陀羅尼の義

●あそびは　遊興也　音樂の一興なるべし

よる人のかほみえぬほどあそびわざはさまおかしけれ　回旋來ニ左右一上下逐ニ東西一などの詩の心也

どもまりもおかし　○劉向別錄云蹴鞠(シウキク)者黄帝所レ作也或云起ニ戰國之時一託ニ黄帝蹴レ鞠之勢一也以練ニ武士一知レ有レ才也

小弓　揚弓　ゐふたぎ　韜持　ご　碁

●まひは

するがまひ　もとめこ　○するがの國うとば(有度)まに神女あまくだりて舞ひしを野翁のまなびつたへてまふをするが舞とて東遊びにする也求子も舞の名也

太平樂はさま(なりふり)あしけれどいとおかし、(四人してよろひを着て也)たち(太刀)などうたてあれどいとおもしろし、もろこしにかたき(敵)にぐしてあそびけんなどきくに、○前漢列傳十一上略初帝已定ニ關中一項王至怒欲レ攻レ之帝從ニ百餘騎一見ニ羽(エ)鴻門一亞父范增令下項莊拔レ劍舞上欲レ擊レ帝項伯常屛ニ蔽之一噲聞ニ事急一持レ盾直入怒甚發壯レ之賜以ニ巵酒彘肩(イノコ)一噲飮レ酒拔レ劍切レ肉食レ之下略

鳥のまひ　河海鳥樂迦陵頻也　○鳥の舞蝶の舞は宇多天皇の御時つくり給ふ日本の樂也

ばとう(拔頭)は、かしらのかみふりかけたる、まみ(眉)などはおそろしけれど、がくもいとおもしろし　呂ノ樂也　○この樂一人して舞也青原を髮のみだるゝごとくふりかけ冷じき面をきて舞也還城樂おなじ調子の樂也乞食調の樂也

らくそん(落蹲)は、　高麗一越調ノ樂也　ふたりしてひざふみて(ひざつく也)まひたる、こまかた(イ本狛桙)　こまの一越調也　○納蘇利(ナソリ)とおなじ五月六日の競馬の日雅樂寮奏する樂也

●引ものは
琵琶　さうの琴（箏）　○琵琶胡琴長三尺五寸象ル二三才一五行一四絃象二四時一推二手前一曰レ琵却二手後一曰レ琶　箏形似レ瑟而短有二十三絃一蒙恬所レ造也

●しらべは
ふかうでう　わうしきでう　そかうのしらべ（蘇合急）　うぐひすのさえづり（春鶯囀）（和名一越調）といふしらべ　さうふれん（青海波と同じ盤渉調）　○琵琶の風香調笛の黄鐘調也掃部頭貞敏四の調を定ぬ風香調合二笛黄鐘調一返風香調合二一越笛平調一黄鐘調合二笛平調一清調合二笛平調一盤渉調一○想夫憐といふ楽は女おとこをこふる故にあらずもとは相府蓮（相府蓮萬歳楽に同じ、平調の楽也箏はなし）なり晋の王倹大臣として家にはちすをうへて愛せし時の楽也

●ふえは
よこぶえいみじうおかし、とをうより（長笛賦云作近年遠とあり）聞ゆるが、やうやうちかうなりゆくもおかし、ちかゝりつるがはるかになりて、いとほのかに（仄）聞ゆるもおかし、車にても、かち（徒歩）にても、馬にてもすべてふところにさしいれてもたるも、なにともみえず（目にたゝぬ也）、さばかりおかしきものはなし、まして聞しりたるてうしなどいみじうめでたし、あかつきなどにわすれて（しのびてきたるおとこの忘れ置たる也）、枕のもとにありつるを、見つけたるも猶おかし、人のもとよりとりにおこせたるを、をしつゝみてやるもたゞ文のやうに見えたり、さうの（笙）ふえは、月のあかきに車などにて聞えたる（人の車にのりてゆき過たる）いみじうおかし、○説文笙正月之音物生故謂二之笙一三簧象二鳳之聲一
所せく（狹）、もてあつかひにくゝ（大きにしてかさ高ければ也）ぞ見ゆる、ふくかほやいかにぞそれもよこぶえもふきなしありかし、ひちりきはいとむつかしう　○説文篳篥筋管也巻二蘆葉一為レ頭截レ竹為レ管出二胡地一
あきのむしをいはゞ、くつはむしなどにてうたてけ（似テ鮮）ちかくきかまほしからず、ましてわろうふきたるはいと聞にくきに、臨時の祭の日（賀茂の）、いまだ御前には出はてゞ（楽屋よりしらべもて行心也）、ものゝうしろにてよこぶえをいみじうふきたてたる（横笛ノ調）、あなおもしろときゝまどふほどに、なからばかりより（の半分よりひちりきをふく也）うちそへて、ふきのぼせたるほどこそた

ゞいみじううるはしき、（身の毛の立ほど面白き也）かみもたらん人もみなたち
あがりぬべきこゝちぞする。やうやうことふえあは
せて、（天子の前に）あゆみいでたるいみしうおかし

●見るものは

行幸　まつりのかへさ（さまの也）　御賀茂まうで　○公事根源
云天祿二年九月廿六日攝政謙德公賀茂詣の事あり
攝關の人の賀茂詣のはじめなるべきこの事必賀茂
の祭の前日ある事也主人は乘車にて地下前駈（サク）あり
白妙の御幣（ヘイ）神寶（ジンホウ）唐櫃やうのものをかたげもたさし
む琴持笠もち深沓といふものをめしぐす上達部軒
をつらぬ社頭にて神拜あり

（十一月酉の日賀茂の臨時也）りんじの祭空くもりて、（小忌衣也）さむげなるに雪すこしうち
ちりて、かざし（挿頭）の花、青ずりなどに、かゝりたる（雪のかゝりたる也）え
もいはずおかし、たちのさやのきはやかに、（半臂緒）くろう
まだらにて、しろくひろうみえたるに、はんぴのをの
やうしたるやうにかゝりたる、すりばかまの（舞人地摺の袴を着す）中より、
ほこりかにおどろくばかりなるうちぎなど、（と花鳥にあり）すべて
めでたし、いますこしわたらせまほしきに、（一わたり有又わたり）つがひは
（てくろたいふ也）かならずにくげなるもあるたびは、（このたびは目がつかぬ也）めとまらぬされ
どふぢの花に（かざしの藤に見にくきかほのかくるゝ也）かくされたるほどはおかし、猶いま
すぎぬるかた見をくらるゝに、べいじう（陪從どもは柳に山ぶきさしそへてあさましと也）のしなをく
れたる、柳にかざしのやまぶきおもなく（面目なく也）みゆれども、
あふひたかくうちて、（打かけて也）かものやしろのゆふだすきと
うたひたるはいとおかし、（賀茂八幡の祭に四位五
位など十二人めしぐして神前にて東遊（大木）びをうた
はせる也それをべいじうといふ也　さしならぶ
さくらやまぶきつゝけども藤はあまたもなきかざ
し哉（朝臣のぶ寶）　（古今）千草振かもの社のゆふだすきひとひも
君をかけぬ日はなし

（是より前にいひし事を委いふ也）行幸にならずらふもの、なにかあらん、みこしにた（天子の輿にめされたるといふ事也）
てまつりたるを、見參らせたるは、あけくれおまへ
にさふらひつかうまつる事もおぼえず、かうがうし（神々しき也）
き、いつくしうつねはなにともなきつかさ、（官人）ひめま（東豎子）
うちきみさへぞ、やんごとなうめづらしうおぼゆる、
みつなのすけ中少將などいとおかし　○鳳輦（ホウレン）の御綱
を奉行する大舍人の助をいふにや中少將に近衞司

なれば前駈(セク)に侍りてゆゝしき躰也
祭のかへさいみじうおかし、きのふ（祭の日の事）はよろづの事うるはしうて（麗也行粧の暉麗也）、一條のおほぢ（大路）のひろうきよらなるに、日のかげもあつく、車にさし入たるもまばゆければ（眩）、扇してかくし（日影を）ゐなをり（居直）などして、ひさしう（祭のわたるを）まちつるも見ぐるしうあせ（汗）などあへしを、けふはいととくはてゝ、雲林院(ウリン)知足院などのもとにたてる車どもあふひかづら（葵蘰也）もうちなへて見ゆ　○雲林院は大徳寺の（故無品常康親王之舊居也）ほとりうぢゐ也知足院は關白忠實公の院號也この人の建立也舊跡つまびらかならず
日も出わたれど、空はなをうちくもりたるに、いかできかむと目をさましおきゐて、またるゝほとゝぎすのあまたさへあるにやと（京にはまれなるにとの心也）、きこゆるまで、なきひゞかせば、いみじうめでたしと思ふほどに、鶯のおいた（老）るこゑにて、かれ（時鳥）に似せんとおぼしくうちそへたるこそにくけれとまたおかし、いつしかとまつ（祭也）に、御社のかたより、あかききぬなどきたるものどもなどつれだちてくるを、いかにぞことなりぬや（神事は過しつとゝ也）といへば、またこんなどいらへて、御こし（輿）たごし（腰輿　齋院の乘らるゝとみえし）などもてかへる、これに奉りて（齋院ののりて也）おはしますらんもめでたく、けぢかく（下々の近くよる）いかで（は憚と也）さるげすなどの侍らふにかと、おそろしく、はるかげにいふほどもなくかへらせ給ふ、あふひよ（見物人の衣裝也）りはじめて、青くち葉どものいとおかしく見ゆるに、所の衆（藏人所の衆のきぬ也　夏の服也）の青色しらがさねをけしき計引かけたるは、うの花（白重の色卯の花に似たる也）がさねちかうおぼえてほとゝぎすもかげにかくれぬべうおぼゆかし　○なくこゑをえやはしのばぬほとゝぎす初うの花のかげにかくれて（人丸の歌也）
きのふ（祭の日の事）は車ひとつにあまたのりて、ふたあゐのなを（二藍直衣）し、あるはかりぎぬなどみだれて、すだれとりおろし、ものぐるおしきまでみえし、きむだちのさゐいんのえんか（垣下）にて、ひろさうぞく（規式の時ひろといふ略の時つぼといふ也）うるはしくて、けふはひとりづゝおさ〳〵しく（治定也）のりたるしりに（車の後に也）、殿上わらは（昇殿の人也）のせたるもおかし、わたりはてぬるのちにはなどかさしもまどふらん（もの見の人歸路を急ぐさま也）、われも〳〵とあやうくおそろしきまで、さきにたゝむといそぐを、かうない（車よりか様）

にないそぎそと也卜知の心也
制禁
そぎそ、のどやかにやれと扇をさしいでゝせいすれ
車副などの急也　氣の毒の心也
車そひ
どきゝもいれねば、わりなくてすこしひろき所にし
車を
ゐてとゞめさせてたちたるを、こゝろもとなくにく
の心也
あと車也
しとぞ思ひたる、きはひかゝる車どもを見やりてあ
車を
るこそおかしけれ、すこしよろしきほどにやりすご
して、みちのやまざとめきあはれなるに、うつぎが
さねといふものゝ、いとあら／＼しうおどろかしげ
に、さしいでたるえだどもなどおほかるに、はなは
苔
またよくもひらけず、つぼみがちにみゆるをおらせ
桂はしぼみ
て、車のこなたこなたなどにさしたるも、かつらな
しにけふの卯の花はおもしろきゝ也
どのしぼみたるがくちおしきに、おかしうおぼゆる、
うの花のしぼまぬも
ゆくさきをちかうゆきもてゆけば、さしもあらざり
宿近くなりし時はさもなくしぼむと也
つるこそおかしけれ、おとこの車のたれともしらぬ
車の後
がしりにひきつゞきてくるも、たゞなるよりはおか
女車と男車と
しとみゆる、ひきわかるゝ所にて、峰にわかるゝと
古今戀二
いひたるもおかし、○風ふけばみねにわかるゝしら
雲のたえてつれなき君がこゝろか　忠實
五月ばかり山ざとにありく、いみじくおかし、澤水も

げにたゞいとあをくみえわたるに、うへはつれなく
手た
草おひしげりたるを、なか／＼たゞさゆればしたは
えならざりける水の、ふかうはあらねど人のあゆむ
躍
につけてとばしりあげたるいとおかし、左右にある
垣れの枝、車
生垣也
車のきぬなど
かきの枝などにかゝりて、車のやかたにいるもいそ
の中へ
外
ぎてとらへておらんとおもふに、ふとはづれてすぎ
押
熱
ぬるもくちおし、よもぎのくるまにをしひしがれた
車の輪に逢の折たるが車のまはるたびに目に近きがやさしと也
るが、わのまひたちたるにちかうかゝへたる香もいと
おかし
別段也
いみじうあつきころ、ゆふすゞみといふほどのもの
ゆふぐれの體也
公達の
ゝさまなど、おぼめかしきに、おとこ車のさきおふ
體也
さき遂ぬ人も也
車の
はいふべき事にもあらず、たゞの人もしりのすだれ
あげて、ふたりもひとりものりて、はしらせていくこ
そすゞしけれ、まして琵琶引ならし、笛の音聞ゆる
車の
殘多き也
音樂に
はすぎていぬるもくちおしくさやうなるほどにうし
聞入て牛のしりがひのとくるもしらぬ也
琵琶を
のしりがひもしらぬにやあらん、かのあやしうかき
かきならすこともしらぬと也
しらぬさまなれど、おかしうこそものぐるおしけれ、
いとくろうやみなるに、さきにともしたる松の、けふ

りの香の車にかゝりたるもいとおかし
五日のさうぶのあきふゆすぐるまであるがいみじう（五月五日の事也）
しろみかれて、あやしきを引をりあげたるそのおり（菖蒲を引折取上たる也）
の名のこりて（イ本香也然るべし）、かゝへたるもいみじうおかし
よくたきしめたるたきもの、きのふおと、ひけふ、
などは、うちすぎにたるに、きぬを引かづきたる中に
（香の）けふりの殘たるは、いまのより（新しく燒しよりも）めでたし、月のいとあ
かきに、川をわたればうしのあゆむまゝに、すいし
やうなどのわれたるやうに、水のちりたるこそおか
しけれ

●おほきにてよきもの
法し　くだもの（菓）　家　ゑぶくろ（餌袋）　すゞりずみ、おと
この目あまりほそきは女めきたり、またかなまり（金碗）の
やうならんはおそろし、火桶　ほうづき（酸漿）　やまぶきの（陰嚢の二字）
はなびら（花）　馬もうしもよきはおほきにこそあれ

●みじかくてありぬべきもの
とみ（頓早速）のもゝぬふ糸　たうだい（灯臺）　げす女のかみは（髮のひきゝ也）、う
るはしくてみじかくありぬべし　人のむすめのこゑ

●人のいへにつきづきしきもの（似合しき心也）
くりや（厨料理の間也）　侍ひのざうし（曹子部屋の事也）　はゝき（帚）のあたらしき　かけ（懸盤也）
ばん（膳の事）　わらはめ（腰もと也）　はしたもの（みかは用人ひすましの類也）　ついたてさうじ（衝立障子）　三
尺の木丁　しやうぞくよくしたるゑぶくろ　からか
さ　かきいた（搔板）　たなづし（棚厨子）　わらうだ（圓座也）　ひぢおりたる（臂折廊曲り廊）
らう（下也）　ちくわうゑ（竹圏繪也）かきたる火おけ　ものへ行みちに、
きよげなるおのこの、たてぶみのほそやかなる、も
ちていそぎてゆくこそ、いづちならんと見ゆれ、ま
たきよげなるわらはのあこめ（衵）いとあざやかにはあら
ず、なへばみたる（柔　着なれし也）けいし（系履いとぐつ也）のつやゝかなるが、かはに
つちのおほくつきたるをはきて、しろきかみにつゝ（使わらはのもちたるもの也）
みたるもの、もしは、はこのふたに、さうしどもなど
いれてもてゆくこそ、いみじうよびよせて見まほし
けれ、門ちかなる所をわたるを、よびいるゝにあい（受敬）
ぎやうなく、いらへもせで（返事もなく也）いくものは、つかふらん（主人の事也）
人こそをしはからるれ、行幸はめでたきもの上達部
きんだち車などのなきぞすこしさうざうしき（事たらずさびしき也）
よろづの事（車のつゐでいふ也）よりも、わびしげなる車にさうぞく（其の裝束也）わろ

後生の事にはよくても
くて、ものみる人いともどかし、説經などはいとよ
句　強
あしくても也
し、つみうしなふかたの事なれば、それだにをあ
ながちなるさまにて、見ぐるしかるべきを、まして
車のあしきに乘べきより祭をみぬがましと也
まつりなどは見でありぬべししたすだれもなく、て
隨
しろきひとへにうちたれなどしてあゝめりかしたゞ
祭の料也こしらへの心也
その日のれうにとて、車もしたすだれも、したてゝい
分と思ふ心也
とくちおしうはあらじと出たちたるに、まさる車な
ど見つけては、なにしになどおぼゆるものを、まし
見ぐるしき車にては也
ていかなるこゝろにて、さて見るらんおりのぼりあ
車の
りくきんだちの車をしわけて、ちかうたつ時などこ
押入也　入
そ、こゝろときめきはすれ、よき所にたてんといそ
より立のびて也
がせば、とく出てまつほどいとひさしきに居入、た
ちあがりたなどあつくるしくまちかうするほどに、
垣下
齋院のえんがに參たる、殿上人所の衆、辨少納言な
車を　齋院
ど七重八重ひきつゞけて、ゐんのかたよりはしらせ
祭のはじまる也
てゝるこそ、事なりにけりとおどろかれてうれしけ
平縢中共
れ　○平城嵯峨帝爭二帝位一時嵯峨帝爲レ所レ願以二皇
女有智内親王一始立二齋院一至二土御門院元久元年

三十四代齋院ニ絕
水
殿上人のものいひおこせ、所々の御前どもに、す
飯也ゆづけの類也　棧敷
いはんくはすとて、さじきのもとに、馬引よするに、
時めく人也　雜色
おぼえある人の子どもなどは、ざうしきなどおりて、
馬の口とる也さはぐ體也　わびしきもの也
馬のくちなどしておかし、さらぬものゝ見もいれら
齋院の
れぬなどぞいとおしげなる、御こしのわたらせ給へ
さじきの也恐るゝ心也　つよく也
ば、すだれもある限取おろし過させ給ひぬるに、ま
又すだれを　むりに　車を
どひあぐるもおかし、そのまへにたてる車は、いみ
制也　たがひになにかといふ也
じうせいするに、などてたつまじきぞと、しゐてたつ
れば、いとわらひてせうそこなどするこそおかしけ
車の
れ、所もなくたちかさなりたるに、きよき所の御く
のりがへ也
るま、人給ひ引つゞきておほくくるを、いづくにた
ヒトダマイ
ゝむと見るほどに　○副車延喜式花鳥餘情ニ出し車を
ば公方より點ぜられてその人に給ふ故に人たまひ
といふ也
御前どもたゞおりにおりてたてる車どもを、たゞの
ひよんゝ心也
けにのけさせて、人給ひつゞきてたてるこそ、いとめ
でたけれ、をひのけられたるえせ車どもうしかけて、

所のあきたるへ車をやる也
所あるかたゆるがしもて行などいとわびしきなり、
的殊也　さやうにも也
きらきらしきなどをば、えさしもをしひしがすかし、
いやしき也
いときよげなれどまたひなびあやしくげすなどたえ
ずよびよせ、ちごいだしすへなどするもあるぞかし、
廊下のつぼれに也　とまらすまじき人の事也
ほそとのに、びんなき人なん、あかつきにかささゝ
人々の沙汰也　清少の事
せて出けるといひ出たるをよくきけば、わかうへな
りけり地下などいひても　○四位五位の間昇殿ゆる
さるゝを堂上といひ未昇殿をゆるされぬを地下と
いふ也又譜代昇殿ゆるされぬを地下ともいふ也、
人のゆるす地下の事也　ぬるの詞也
めやすく人にゆるされぬばかりの人にも非ざッめる
いな不審ぞと也　后宮
あやしの事やと思ふ程に、うへより御ふみもてきて
清少に
返したゞいまとおほせられたり、なに事にかと思ひ
文のもやう也
てみれば、大がさのかたをかきて、人はみえず手のか
ぎりかさをさゝせてしもに、「みかさ山やまのはあけ
しあしたより」とかゝせ給へり、猶はかなき事にて
清少心　后宮に
も、めでたくのみおぼえさせ給ふに、はづかしくこゝ
ろづきなき事は、いかで御らんぜられしと思ふに、さ
る空ごとの出くるこそくるしければ、おかしうてこ
よの紙に也
と紙に、雨をいみじうふらせて、しもに「雨ならぬ

あらぬうき名をいひふらされしと也
名のふりにけるかな」さてやぬれぎぬにや侍らむと
けいしたれば、うこんの内侍などにかたらせ給ひて
わらはせ給ひけり、
三條の宮におはしますころ　○勘物長保元年八月九
日自㆓職御曹司㆒移㆓御生昌三條宅㆒
五日のさうぶのこしざしなどもて參り　○腰ざし疋
絹の事也少女舞人などの腰にさしはさむきぬ也又
の説にたゞ菖蒲の輿也
女房の名也又御くしげど
藥玉參らせなどわかき人々御くしげどのなど、くす
のは局の名也　この系圖前に有
だまして、姫宮わか宮つけさせ奉らせ給ふ、いとお
麥のも
かしき藥玉、ほかよりも參らせたるに、あをざしと
やしにてするもの也　清少より后宮へ奉る也
いふものを人のもてきたるを、青きうすやうを、えん
いやしき青ざしを垣ごしに御覧
なるすゞりのふたにしきて、これませごしにさふら
するまでにさゝげ奉る也
へばとて參らせたれば、
后宮の御歌端午の日も我心なしりて慰む物をみせしと也清少の事也
皆人は花やてふやといそぐ日もわが心をば君ぞしり
青ざしつゝみしうすやうのはしに也
ける」とかみのはしを引やりてかゝせ給へるもいと
めでたし、
別段也
十月十餘日の月、いとあかきに、ありきものみんとて
ありきて

女房十五六人ばかり皆こき（濃紅のきぬ也）ゝぬをうへにきて、引返
しつゝありし中に、中納言の君（后宮の女房也）の紅のはりたるをき
て、くび（かみをゐりより内へ入たる也）より髪をかいこし給へりしかば、あたらし（あたらの心
也）きぞとて、よくも似給ひしかな、ゆげいのすけぞと（この官人あか装束なれ
ば紅の衣に似たると也）わかき人々にはつけたりし、しりにたちてわらふも
おかし、

大藏卿ばかりみゝとき人はなし　○勘物正光長德二
年藏人頭左中將四年十月大藏卿○公補卿任藤原正
光故關白太政大臣兼通六男母從四位上行左馬頭藤
原有年朝臣ノ女也

まことに蚊のまつげのおつるほども、聞つけ給ひつ
べくこそありしか　○列子江浦之間生二麼虫一其名
曰二蟭螟一群飛而集二於蚊睫（マツゲ）一中略離朱子羽方レ晝拭レ目
揚レ眉而望レ之不レ見二其形一觚（カクユ）愈師曠方擿（ウツ）レ耳俛首
而聽レ之不レ聞二其聲一唯黃帝容成子居二空桐之上一同
齋三月心死形廢（スタレ）徐以レ神視塊然見レ之若二嵩山之阿一
徐以レ氣聽レ之砰然聞レ之若二雷霆之聲一

しきのみざうしのにしおもてにすみし（清少の）ころ、大殿の（なりのぶ
の養父也）新中將との（宿直）ゐにて、ものなどいふに、そばにある人、

この中將に、あふぎの繪の事さゝ（密）めけば、いまかの（大藏卿）
君のたち給ひなんにをと、みそかにいひ入るゝを、そ
の人だにえ聞つけで、なに〳〵とみゝをかたふくる
に、とをく（大藏卿の）ゐて、にくしさのたまはゞ、けふはたゝ（座を立
まじと也）じとの給ふこそ、いかで（大藏卿の）聞給ひつらんとあさましか
りしか

すゞりきたなげに、ちり（塵のゐる心也）ばみ、すみのかたつかたに、
しどけなくすり（すりゆがみ也）ひらめかし、らうおほき（墨の功勞久しき也）になりたる、
（筆のかさ也つかひ古してもたしなむ心をほめて也）
かさしなどしたるこそ心もとなしとおぼゆれ、よ
ろづのてうどはさるものにて、女まかゞみすゞりこ
そ、心のほど見ゆるなンめれ、をき（筆置所のあはひ也）ぐちのはざめに、ち
りゐ（居也）などうち捨（麁相の心也）たるさまこよなしかし（見ぐるしき也）、おとこはま
してふづくゑ（文案）きよげにをしのごひ（拭）て、かさねならず（重硯ならずはと也）
は、ふたつかけごのすゞりの、いとつき〳〵しう、
まきゑ（蒔繪）のさまもわざとならねどおかしうて、すみ筆
のやうなども、人の目とがむばかりしたてたるこそ
おかしけれど、あれとかゝれと（ともあれかくもあれと也）、おなじ事とてくゐば（黑ぬり
の箱）
このふた（蓋）もかたし（片の一字）おちたるすゞり、わづかにすみの（墨はかり）

（ある心也）ちりのこの世にははらひがたげなるに、水う（ちりの）ちながして（上水入る事也）青地のかめのくちおちて、くびのかぎり（水入也）（水入の）あなのほどみえて、人わろきなども（見ぐるしき也）、つれなく人のまへにさしいでゝ（水入の）、人のすゞりを引よせて（是より又別の事也）、手ならひなどもふみをもかくに、その筆なつかひ給ひそといはれたらんこそ、いとわびしかるべけれ、うちをかんも人わろし（つかひし人の心也）、なをつかふもあやにく也（わるしと也なすまじき事なし）、さおぼゆる事もしりたれば（ゐてせんとする心也）、人のするもいはでみるに（わが硯を人のつかひなすをものいはで也）、などよくもあらぬ人のさすがに物かゝまほしうするが、いとよくつかひかためたる筆を、あやしのやうに（いやしき筆のやうに也）、水がちにさしぬらして、こはものややり戸か（こはき紙也）、なに（何やかや）ほそびつのふたなどにかきちらして（也・おゝ・插也）、よこさまにな（筆）げ置たれば、水にかしらをさしいれて、ふせるもに（筆のころりと）くき事ぞかし（したる也）、されどさいはんやは（あしくつかふを見ながらいはぬ也）、人の前にゐたるに、あなくらあふよゝ給へといひたるこそ（奥へより給へと也）、又わびしけれ、さしのぞきたるをみつけては（ものをかくものが）、おどろきいはれたるも（おもふ人にはかくす事もあるまじければおどろく）、思ふ人の事にはあらずかし（ましと也）

めづらしといふべき事にはあらねど、ふみ（消息）こそなをめでたきものなれ、はるかなる世界に（遠國）、ある人のいみじくおぼつかなくいかならむとおもふに、ふみをみればたゞいまさしむかひたるやうにおぼゆるいみじき事也かし、我思ふ事をかきやりつれば、あしこ（かしこ也）までも（文の）ゆきつかざるらめど、心ゆくこゝちこそすれ（心は先おちつくと也）、ふみといふ事なからましかば、いかにいぶせく（心もとなゝ也）くれふたがるこゝちせまほし（目くれ心ふたがる也）、よろづの事思ひ〳〵て、その人のもとへとて、こま〴〵とかきてをきつれば、おぼつかなさをも、なぐさむ事するに、まして返事見つれば、いのちをのぶべかッめる、げにことはりにや、

● 河は

あすか川（和州）ふちせさだめなくはかなからむと（爰川也早き心也）いとあはれ也、と川またなに事をさしもさかしかりけん（疑也）とおかし、音なし河（紀州）おもはずなるなどおかしきなッめり、大井河（山城）いづみ川（同）みなせ川（攝津）なのりその川（未勘）名とり川（奥州）もいかなる名をとりたるにかときかまほし、ほ

（備中）そたに川　（山城）なゝせ川　○河合　一條　土御門　近衛
御門　中御門　大炊御門　二條の末　河合　耳敏
河　東瀧　松崎　石影　西瀧　大井川
（夫々奥州）たまほし川　（銀河）あまの川　（河内片野の邊也）このしたにもあゝなり、たな
ばたつめにやどからむとなりひらのよみけんましてお
かし　○（いせものがたり八十二段目）御ともなる人さけをもたせて野よりい
できたりこの酒をのみてんとてよき所をもとめ
ゆくにあまの川といふ所にいたりぬみこにむ
まのかみおほみきまいるみこのたまひけるかた
野をかりてあまの川のほとりにいたるを題にて
歌よみて盃はさせとの給ひければかのむまのかみ
よゝみでたてまつりける「かりくらしたなばたつめ（織女妻といふ事也）
にやどからんあまのかはらにわれはきにけり」み
こ歌をかへすがへす（誦の字）ずじたまふてかへしえしたまは
ず

㊟むまやは（驛唐令三十里ニ一驛若地勢險阻及無ニ水草ニ處隨レ緣置レ之）　・
（江州奈志原）なしはら　（日くれにむまやどりにつきし心）ひぐれのむまや　（下野）もち月のむまや　（河内又）のぐ
（丹波）ちのむまや、（伊勢の野摩か）山のむまやあはれなる事を（少納言の）聞をきたり
しに、（なに事とも不考）またあはれなる事のありしかば、猶とりあつめ
てあはれ也、

㊟岡は
（山城）ふなをか　（大和）かた岡　（山城瀬岡）ともをかのさゝのおひ（生）たるが、（梁塵秘抄）
おかしき事也　（山城）人見の岡　（奥州）かたらひの岡　○この篠
はいづこのさゝぞとねりらがこしにさがれるとも（の採物の歌）
岡の篠　（すみよしものがたりに）手もふれでけふはよそにて歸なん人見の
岡の松のつらさに　（古歌に）さ夜ふけてかたらひの岡の時
鳥ひとりねざめの床に聞かな

㊟やしろは
（布留　和州）ふるのやしろ、（同龍田）たつたの社　（奥州の男部神社延喜式）はなぶちの社　（越後美久理神社同上）みくり
のやしろ　杉のみやしろ、しるしあらむとおかし（しるしの杉といふ故也人のしりたるものがたり略之）
○三諸山のふもとに社壇はなくしてたゞすぎむら
ばかり也神躰は素盞烏（スサノヲ）の尊の子大己貴（オホアナムチ）の尊男躰（ナンタイ）也
ことのまゝの明神いとたのもし、さのみ聞けんとや
いはれ給ふらむと思ふぞいとおかし　○ねぎことを（古今さぬき）
さのみ聞けん社こそはてにはなげきのものとこそな（となりなめとも）
れ○一宮記事任（ノマヽノ）明神在ニ遠江國佐野郡ニ猿田彦命也

ありどをし（和泉國和泉郡ニ在リ）の明神、貫之（貫之家の集にあり）が馬のわづらひけるに、こ
の明神のやませ給ふとて、歌よみて（參詣の時也）奉りけむに、やめ
給ひけん、いとおかし　〇貫之孝光天皇の末葉紀望
行の子也蕃名阿古久曾
このありどをしとつけたる心は、まことにやあらむ、
むかしおはしましけるみかどの（たれとはしれず神社考にも未ㇾ詳二何時一世とあり）、たゞわかき人をの
みおぼしめして、四十になりぬるをば、うしなはせ
給ひければ、人の國のとをきにいきかくれなどして、
さらに宮古のうちにさるもの（老たる者也）なかりけるに、中將な
りける人のいみじき、時の人にて心なッどもかしこか
りけるが、七十ちかきおやふたりをもちたりけるが、
四十をだにせいあるに、ましていとおそろしと、をぢ（畏）
さはぐ（騒）をいみじうけうある（孝の字）人にて、とをき所にはさ
らにすませじ、一日にひとたびみえではえあるまじ（まみえでの心也）
とて、みそか（密）によるよるつちをほりてや（家）をたてゝ、
それにこめすへて（老父母を）、いきつゝみる、おほやけ（公）にも人に
もうせ隠れたるよしをしらせて、などてか、家に
いりゐたらん人をばしらでもおはせかし（家にすむ分はそのまゝにもせよかしあやしき掟なりといふ心也）、うたてあ

りける世にこそ、おやはかんだちめなどにやありけ
む、中將など子にてもたりけむは、いとこゝろかし（何）
こく、よろづの事しりたれば（心ばへの賢也）、この中將わかけれど
ざえ（才也）あり、いたりかしこくて、時の人におぼすなり
ける、もろこしのみかどこの國（日本）のみかどをいかでは（謀）
かりて、このくにうちとらむ（討捕）とて、つねにこゝろみ（試）あ
らがひ（競）をしてをくり給ひけるに、つやつや（光）とまろ（圓）に
うつくしげにけづり（削）たる木の、二尺ばかりあるを、
これがもと、すゑいづかたぞと問奉たるに、すべて
しるべきやうなければ（皆人にて分別なかりし也）、みかどはおぼしめしわ
づらひたるに、いとをしく（中將の心）ておやのもとに行て、
かうなんありといへば、たゞはや川にたちながら（老父の詞也）（木ナ立ながら也）な
げ（投）いれみんに、かへりてながれんかたをすゑとしる
して、つかはせとをしふ、參りて（中將參内）わがしりがほに
してこゝろみ侍らむとて、人々ぐして（川邊へ同道也）なげいれた
るに、さきにして行に、しるしをつけてつかはした
れば、誠にさなり（さやう也）ける、五尺ばかりなるくちなはの、

おなじやうなるを、これはめおと(女男)て奉たる、またさらにえしらず、れいの中將行てとへば、ふたつならべて、お(尾)のかたに、ほそきずはえ(標)をさしよせんに、お(尾)はたらか(働)さんを、女としれといひければ、やがてそれを内裏のうちにてさしければ(さやうに也)、まことにひとつはうごかず、ひとつはうごかしけるに、またしるし(雌雄也)つけてつかはしけり、ほどひさしうして、なゝわだ(七曲)にわだかまり(蟠)たる玉のなかをとをりて、左右にくちあきたるが、ちいさきを奉りて、これにつなとをして給はらむ、このくにゝみなし侍る事なりとて奉たるに、いみじからむものゝ上手、ふようならん(不用さもなき智の上達部)そこらのかんだちめよりはじめて、ありとある人しらずといふに、またいきてかくなんといへば、おほきなるありをふたつとらへて、腰にほそきいとをつけ、またそれがいますこしふときをつけて(別の緒を申つぎにする事也)、あなたの口にみ(密)ちをぬり(塗)て見よといひければ、さ申て(中將帝へ)ありをいれたりけるに、みちの香をかぎ(嗅)てまことにいととう(最疾)、あなのあなたのくちに出にけり、さてそのいとのつらぬかれたるをつかはしたりけるのちになん、日のもとはかしこかりけりとて、のちのちにさる事もせざりけり、この中將をいみじき人におぼしめして(帝の)、なに事をしていみじき位(官位)をかたまはるべきとおほせられければ、さらにつかさくらゐもたまはらじ、たゞ老たる父母のかくうせて侍るをたづねて、みやこにすますする事をゆるさせたまへと申ければ、いみじうやすき事とて、ゆるされにければ、よろづ(諸人)のおや(中將の)いきてよろこぶ(もとへ)事いみじかりけり(かの老父也)、中將は大臣になさせ給ひてなんありける、さてその人の神になりたるにやあらむ、この明神のもとへまうでたりける人に、よるあらはれてのたまひける、

なゝわだ(七曲)にまかれる玉の(環)をゝぬき(緒貫)てありとをし(蟻通)ともしらずやあるらん」とのたまひけると人のかたりし

○ふるものは

ゆき　あられ(霰)　にくけれどみぞれ(霙)のふるに、ゆきのまじろ(眞白)にてまじりたるおかし、雪はひわだぶき(檜皮葺)いとめでたし、すこしきえがたになるほど、おほくはふ

らぬがかはら(瓦)のめごと(鏠目)に入て、くろうまじろにみえたるおかし、しぐれあられはいたや、霜もいたや、

●日は

入はて(擧也)ぬるやまぎは(薄暮黄昏の躰)にひかりのなをとまりてあかう(夕陽の躰也)みゆるに、うすきばみたるくもの、たなびきたるいとあはれ也　説文云日者實也太陽之精也程子云日月之爲ㇾ物陰陽發見之最盛者也　性理大全同この説古今の定論也

●月は　有明のよもすがら月の出さまをふたつ愛したる也

あり明、ひがしのやまのはにほそうていづるほどあはれ也○朱子云月躰(ハ)常圓無ㇾ闕(カクル)常受二日光一爲ㇾ明○もしほの説十四日十五日後也廿日の後をもいふ也とみえたり　續日本紀十五日以後號二晨月一

・●ほしは　星之爲言精也陽爲ㇾ日日分爲ㇾ星春秋緯辭也

すばる(昴星)　ひこぼし(牽牛)　明星あかぼしともいふ也　みやうじやう　ゆふつゞ　長庚星くれに西にあらはるゝ也　大白星ともいふ也　よば星にさへよばひほしとつきしなくはいかゞとたはふれし也

ひほし(流星)をだになからましかはまして

●くもは　説文雲者山川之出氣也

しろき　むらさき　くろきくもゝあはれ也、かぜふくおりのあま雲あけはなるゝほどのくろきくもの、やう〳〵しろうなりゆくも、いとおかしあしたにさるいろとかや、ふみにもつくりけり、月のいとあかきおもてにうすくもあはれ也　宋玉賦云朝爲二行雲一暮爲二行雨一

●さはがしきもの

はしり火　炭のとび火也　いたやのうへにてたつる(立)からすの時の、(句なき)さはぐ火　又の説齋のさばくるへし　ふと異本にあり　十八日清水にこもりあひた(通夜)る　火事の火也　清水寺寶龜九年四月沙彌延鎭建立也　詳二元亨釋廿八卷一十八日を觀音の日とする事　勝尾寺の觀音を妙觀といふ人寶龜十一年七月十八日より十八人して千手の像四天王等卅日に刻て八月十八日に十八人の工匠も妙觀もうせぬこれより惠日と定むる也

くらうなりて。また火ともさぬほどに、ほか〳〵より人のきあつまりたる。ましてとをき所。ひとのくにより家のあるじののぼりたるいとさはがし近きほどに火いできぬといふ、されどもえはつかざりける

ものみはてゝくるまのさはぐほど

蔑

●ないがしろなるもの　しどけなきものといふ心也
女官どものかみのあげたるすがた　かりそめにとりあげし躰也　から名のかは　石帯の装束の上帯
のおびのうら　○和名革帯以二其所一附金玉石角等一
爲レ名故有二白玉帯隱文一馬腦一紀伊石一出雲石一
越石一班犀一烏犀一等之名一
道德の聖のたちふるまひだらくさに顔相なるもの也
ひじりのふるまひ

●こと葉なめげなるもの　無禮の心也世俗になめたやつなどいふ心也
女みこの事也　祭文
宮の女のさいもんよむ人　舟こぐものども　雷鳴ノ時の　かんな
隨身の躰也とれり
りの陣の舍人　○西宮記雷鳴陣淸涼行事曰雷鳴時速
裝束殿上召二近仗一又召二内藏寮雷禊廐一云々
七月相撲の節の相撲とりの體也
すまひ

●さかしきもの　ほど〳〵よりかしこきもの也
今時の心也
今やうのみとせ子、ちごのいのりはらへなどする女　巫　兒君のため也
女
とも、ものゝぐこひいで、いのりのものどもつくる　祓の道具也　乞　幣など也
四手の紙
に、かみあまたをしかさねて、いとにぶき刀してきる　きれぬ心也
さま、ひとへにたつべくもみえぬに、さるものゝぐ　きれさうもなき也　幣などに也
と成にければ、をのがくちをさへひきゆがめて、を　無理にきる也
し、きり目おほかる物どもして、かけ竹うちきりな　四手の切目多き也　四手かくる竹也
どして、いとかう〳〵しう、したてゝ、うちふるひ　神々しく也　幣を
のる事どもいとさかし、かつはなにの宮、その殿の　みこのとはず語りに身ぼめするさま也
わが君いみじうおはせしを、かいのごひたるやうに　ものゝけのつよきを也
やめ奉りしかば、ろくおほく給はりし事、その人か　祿　外の驗者の
の人めしたれどしるしもなかりければ、いまに女を　事也どのみこの陰陽師をめしても也　我事也
なんめす、おんどくを見る事などかたるもおかし、　恩德
○釋日本紀云祓具人形解繩散米
げすの家の女あるじ、しれたるものそひしもおかし、　愚痴なる中のそふ事也
まことにさかしき人をしへなどすべし　女の心さかしければ愚なる男をもとく心也

●上達部は　公卿の事也攝政關白ニ公の事也　上達部の官職の規摸をいふ也
諸家ノ公卿ハ中納言になる時この官をやめ給ふに上達部は大中納言までも兼任あるが規摸也
東宮太夫　○職原云春宮太夫相當從四位下執柄息大
臣子息爲二大中納言一人兼レ之
左近衛右近衛の大將也この官上達部ばかり也諸家はなりがたき也
左右大將　○相當從二位非二譜第之花族一者不レ任レ之
多是大納言中譜第上﨟任レ之
大納言ハ上ノ事ナ下ヘ申下の申事を上へ申官也しかるゆへ天子喉舌
權大納言　權中納言　○大納言令四人相當正從三位寛平
チホイモノ申ノツカサナカノモノ申ノツカサ

の官とふ也
御字爲ニ正二人權一人ニ其後權官加增中納言令外官也
唐官古來有レ之　參議の中將なしたる也
宰相中將　○參議は陣の座にて物をよみ右筆する器
也中將は近衞のすけといふ也
三位の中將　○三位中將は大臣子若孫ニ者不レ任レ
之職原
中納言以上の人是ニ任ず
東宮權太夫　○東宮權太夫一人同ニ東宮太夫ニ
參議の侍從を兼たる也
侍從宰相　○侍從八人相當從五位下八人之內三人者
少納言兼ニ任之ニ
●公達は執柄大臣などの息也花族とも淸花ともいふ
辨にて頭を補するは規模也　別なし
頭の辨　頭中將　權中將　四位少將
○頭は藏人の頭也補ニ藏人ニ兼ニ辨官ニ是爲ニ至極之
朝奬ニ　爲ニ藏人頭ニ叙ニ三位ニ帶ニ中將ニ權中將　相當從四
位下　少將五位殿上人之中爲ニ譜第公達ニ者任レ之
叙ニ四位ニ時去レ職但叙留殊恩也近代每レ人叙留又四
位之後拜任常事也
五位の藏人にて少納言を兼たる也
藏人の辨　藏人少納言
スナイモノ申ツカサ　五位藏人
東宮のすけ　藏人兵衞佐

○亮一人從五位下名家四位有ニ人望ニ者任レ之坊中事
一向所ニ奉行ニ也　藏人兵衞佐五位の藏人が兵衞の
佐を兼るをいふ也職原に補ニ藏人ニ之日帶ニ延尉佐ニ
といふ是也
●法師は
律師　內供（ナイグ）內供奉と同じ　○律師准ニ五位ニ天武天皇十二年始置
之律抄解題云備云義解ニ一字ニ名ニ律師ニ一字者律之
字也　內供延喜式云每年正月於ニ大極殿ニ請ニ說金
光明最勝王經ニ時以ニ內供奉十禪師ニ爲ニ讀師ニ
●女には
倚侍につける官也　掌侍なるべし
內侍のすけ　ないし　○典侍（ナイシノスケ）四人相當從四位　掌（シカサドル）下奏請
宣傳撿ニ校女孺ニ兼ニ知內外命婦朝參及禁內禮式事ニ
掌侍四人相當從五位　掌同ニ典侍ニ唯不レ得ニ奏請宣
傳ニ也
●みやづかへ所は　諸家の女房の宮つかへ所也
禁中の事
也
內　后宮その御はらの姬宮、內親王の宮下おはします宮の事　一品の宮　一品　齋院、賀茂の也　つみ
佛道を思ひ給ふ故也
ふかければおかしましてこのごろはめでたし、村上の御女選子內親王などの事也　もうけ　春宮
の君也　天子の正妃也
の御母女御

●身をかへたらむ人などは、かくやはあらむと見ゆるもの（いやしき人の高くなり下官より高位にうつる心也）

たゞの女房にて（無官又地下の女房也）、さぶらふ人の御めのとになりたるが、からきぬもきず（背子前にくはし）、裳をだに（裳袴也）ようゐなく、はゞぎぬ（うちかけの姉也）にて御前にそひふして、御帳のうちを居所にして、女房どもをよびつかひ、つぼねにものいひやり（我局に用事をいひやる也）、ふみとりつがせなどしてあるさまよ、いひつくすべきだにあらず

雑色の蔵人になりたる（蔵人所の雑色也　六位也）、こぞ（去年歟又ては歟）の霜月のりんじの祭に、御琴もたりし人ともみえず、公達につれてありく（蔵人になりたる時のさま也）は、いづくなりし人ぞとこそおぼゆれ、ほかよりなりたる（雑色ならで外の人の蔵人に）などはおなじことなれど、さしもおぼえず

雪たかうふりて（是より筆のすさび也）、いまも猶ふるに、五位も四位も色うるはしく、わかやかなるが、うへのきぬ（袍）の色いときよらにて、かめのおび（石のおび也）のかたつきたるを、とのゐすがた（内の御番の姿也）にて引はこえて（引くはへたる也）、紫のもゆき（裳也）にはへて（映じて也）、こさまさりたる（紫の）をきて、あこめ（衵也袍の下にきるもの也）の紅ならずはおどろ〳〵しきやまぶき（表朽葉うら黄也）を出して、からかさをさしたるに、かぜのいたくふきて、よこさまにゆきをふきかくれば、すこしかたふきて、あゆみくるふかぐつ（深沓）はうくは（半靴）などのきはまで、ゆきのいとしろくかゝりたるこそおかしけれ、

ほそどのゝやり戸をしあけたれば（是より又別段也）、御ゆどのゝめだう（馬道也向ノ堂之渭也）よりをりてくる、殿上人のなへたる（柔也）なをしさしぬき、いたくほころびたれば（綻）、をし入などし北のぢんのかたざまに、あゆみゆくに、あきたるやり戸をすぐれば、ゑい（纓）を引こして、かほにふたぎてすぎぬる（后宮の方の戸あきたれば見やるまじき用意に纓のはしをかほにおほひて過る也）もおかし

●たゞすぎにすぎぬるもの

ほあげたる舟　人のよはひ　春夏秋冬

●ことに人にしられぬもの（しられさうにて人にしられぬもの也）

くゑにち（拾芥曰凶會日クヱニチ又悔日クヱニチとも書也この日を用るに付て用捨あり暦家にきたせこる故人にしられぬ日也）　人のめおや（老母也）の老たる

五六月のゆふかた、青き草をほそう（小兒の草合せなるべし）、うるはしくきりて、赤きぎぬきたるちご（又子はすさび也）の、ちいさきかさをきて、左（賀茂の消すがら子どものたはふれ也）

右にいとおほくもちて行こそ、すゞろにおかしけれ、
又別の事也
賀茂へまうづるみちに、女どものあたらしきおしき(ひらに)
ふかゝらぬ笠のたとへ也
のやうなるものを笠にきて、いとおほくたてりて、
起臥也田をうふるさま也
歌をうたひ、おきふすやうにみえて、たゞなにすと
しさりしゝうゆる躰也
もなく、うしろざまにゆくは、いかなるにかあらむ
おかしと見るほどに、ほとゝぎすをいとなめくうた
己よ也日本紀の字
ふこゑぞ、こゝろうき、ほとゝぎすよ、をれよ、かやつ
きやつよ也己鳴てぞ也
よ、おれなきてぞ、われは田にたつとうたふに、聞も
又ったひ出しうたひもの也
はてず、いかなりし人か、いたくなきてぞといひけん、
中高童生也はなすお高さわらは也
なかだかわらはおひ、いかでおどす人と、
又別也
鶯にほとゝぎすは、おとれるといふ人こそ、いとつ
前にもこの事あり　少納言
らうにくけれ、鶯はよるなかぬいとわろし、すべし
の了簡也　小兒の夜啼はあしきもの也す
よるなく物はめでたし、ちごどもぞはめでたからぬ、
べてといひしにあたりて也
八月つごもりがたうづまさにまうづとて、ほに出た
る田に、人おほくてさはぐいねかるなりけり。○應
神天皇十五年秦(ハタ)氏來レ自二支那一秦氏養レ蠶勤二機(ハタ)織一
造二帛綿(キヌワタ)一煖(ウヅマサ)二人膚一和訓近以爲レ氏天皇賞レ之賜二山城國
葛野(カドノ)郡太秦之地一或曰其形似二巴渦一故名二字豆麻

佐一作二廣隆一秦氏此地一立二秦始皇廟一故加二太字一
號二太秦一秦川勝建二立藥師寺一
眞實らしく也
さなへとりしかいつのまにとはまことげに　○(古今)きの
ふこそさなへとりしかいつのまにいな葉そよぎて
秋風ぞふく
近曾也五六月のゆふつかたとあるをうけて也　只今の躰也
さいつごろ賀茂にまふづとて見しがあはれにもなり
女どものとありし故也前の首尾也
にけるかな、これは女もまじらず、おとこのかた手(刀也か)
うれたる也
に、いとあかきいねのもとはあをきをかりて、かた
まの事也　稲の
なかなにゝにかあらん、もとをきるさまのやすげに
やすくいねかるためでたきもののうちにせ
めでたき。ことにいとせまほしく見ゆるや、いかで
まほしと也　并居
さすらん、ほをうへにてなみをる、いとおかしうみ
田家の躰也倡なみなやりてならび居るさまことなるとの心な
ゆ、いほりのさまことなる
るべし

●いみじくきたなきもの
わろき也
蚰蜒也
なめくぢ　えせいたじきのはゝき(帚)　殿上のがうし
和名云合子唐式云尙食(セウショク)局漆器三年一換供二毎節
薪一朱合等五年一換　按朱合俗所謂朱漆(スリ)合子也

●せめておそろしきもの
よるなるかみ、近きとなりにぬす人のいりたる、我

すむ所に入たるは、（女の心に似合たる也）たゞものもおぼえねばなにとも
しらず、○ぬす人の（清原元輔家集にありかゝる事なおもひしにや）入て侍りしまたの日かいねりを
こせて侍りし返しに「あさからず思ひそめてし衣
かはかゝるせにこそ袖もひぢけれ

●たのもしきもの

心ちあしきころ、僧あまたしてすほう（修法祈念也）したる思ふ
人の心ちあしきころ、まことにたのもしき人のいひ
なぐさめたる、もの恐しき折の親（子供女の心也）とものかたはら

是より別段也
いみじうしたて（むすめを）ゝ、むことりたるに、いとほどなくす
（ほどなく離別したる也）
まぬむこのさるべき所にて、しうとにあひたる、い
とをしとや思ふらむ、ある人のいみじう、時にあひ
たる人のむこになりて。たゞ一月もはか〴〵しうこ
でやみにしかば、すべていみじういひさはぎ、めのと（しうとのかたに女の）
などやうの物は、まが〳〵しき事ども（むこを曲々しくいひなす也）いふもあるに、
（あくるとし也）
そのかへるとしの正月に、（かのむこの）藏人になりぬ、あさまし
（かくうき中にいかでむこのたぬ悪さ事あれかしなどこそ思へなど）
うかゝるながらひに、いかでとこそ人はおもひため
（のろひしめのゝのれたがりていふ也）
れ、などいひあつかふは、きくらんかし、六月に八

の八講（法花の）給ひし所に、人々あつまりてきくに、こ
の藏人になれるむこの（かのむこ也）、れう（綾也又料也表）のうへ（めし料の心）のはかますわう（夏の下かさね也）
がさねくろはんぴなどいみじうあざやかにて（一覺）
語抄　蘇黄下襲表白裏紅打公卿禁色人常所ニ着用ニ
也又主上之着給云々同云若ニ大色下襲ニ時用ニ黑半
臂ニ紺地平緒紅梅地平緒云々（頓緒也）
わすれにし人の（見すてたる女也）、くるまのとみのおに（むこの藏人の）、はむびのを（女の心をなしはかり）
ゝ引かけつばかりにてゐたりしを（近く居る心也）、いかにみるらむ
と、くるまの人々も（供車の）しりたるかぎりは、いとをし（笑止がる也）
かりしを、こと人どもゝつれなくゐたりしものか（むすめがしらぬかほしてよくもゐたりとの評判也）
なと、のちにもいひき、なをおのこは、ものゝいと
おしさ、人のおもはん事はしらぬなめり、人のむす
めはいふべきにもあらず、宮づかへをすともとしわ
かう世中いたう（强）くつろぎ（甘）なれざらむはなをたゞ　○
よきといふ心をいひ残したる詞也
このすゑ猶詞の入し本あり余が傳來の本になければそのまゝに
さし置ぬ考べき人は異本をみるべき也

清少納言旁註卷十

●うれしきもの（さうしの事也）

まだみぬものがたりのおほかる、（第一の巻）またひとつをみて、（第二巻）いみじうゆかしうおぼゆる物語の二つ見つけたる、（一の巻ほどになき也）心をとりするやうにもありし、人の（破）やり（捨）すてたるふ（句）みをみるに、おなじつゞきあまた見つけたる、（別の事也）いかならむとゆめをみて、おそろしとむねつぶるゝに、（なに事ももあらずと也）ことにあらずあはせなどしたるいとうれし、よき人のおまへに人々あまたさぶらふ折に、むかしありける事にもあれ、いま聞しめし世にいひける事にもあれ、かたらせ給ふを、われに御らんじあはせて（わが方に目を見合てかたり給ふ也）のたまひいひきかせ給へるいとうれし、とをき所はさらなり、おなじ宮古のうちながら、身にやんごとなく（大切に思ふ也）思ふ人のなやむきゝていかに〳〵とおぼつかなくなげくに、（病平愈の音づれ也）おこたりたるせうそこ（得来）えくるもおかし、思ふ人の人にもほめられ、やんごとなき人などの、くちおしからぬものに（才智よろしきやうに也）おぼしのたまふ、ものゝをり、もしは人といひかはしたる歌のきこえてほめられ、うち聞（聞書などに書とめらるゝ也清少の身の上ニハなけれどさぞうれしからむとなり）などにほめらるゝ、みづからのうへにはまだしらぬことなれど、なを思ひやらるゝよ、（晴がましき人なるべし）いたううちとけたらぬ人のいひたる、ふるきことの（故事いしらぬ也）しらぬを聞出たるも嬉し、のちにものゝなかなどに（書物の中より也）見つけたるはおかしう、たゞかうこそありけれと、（この書を見ていはれけんとおもひ合て面白きと也）かのいひたりし人ぞおかしき、みちのくがみ、（みちのく紙に）しろきしき、たゞのも（てなく也）しろうきよきはえたるもうれし、はづかしき人の歌のもとするゑとひたるに、ふとおぼえたる、われながらうれし、つねにはおぼゆることも、また人のとふにもきよく（すきと也）忘れてやみぬるぞおほかる、とみに（急に也）ものもとむるにいひ出たる、たゞ見るべき文（書物也）などをもとめうしなひて、よろづのものをかへす〴〵（なにやかや也）みたるに、さがし（捜）いでたるいとうれし、ものあはせ（勝負など也）なにくれのいどむ（あらそふ也）事にかちたる、いかでうれしからざらむ、またいみじうわれはとおもひて、しりがほなる人はかり（たばかり也）（謀）えたる（得たる也）、女などよりもおとこはまさりてうれし、これ

（嶺也）
がとうはかならずせんずらむと、つねにこゝろづか（たばかる、人の方人にも）
（ならん人ときつかひせしがさもなきはうれしと也）
ひせらるゝもおかしきに、いとつれなくなにともお
もひたらぬやうにて、たゆめ（緩也）すぐすもおかし、にく
（むごい目也）（罪）（得）
きもの、あしきめみるも、つみまうらむと思ひなが
（かみゆひかうがいさししたゝめし事也）
らうれし、さしぐしむすばせておかしげなるも又お
かし、思ふ人はわが身よりまさりてうれし、（清少の遲參也）
（定子の）
御前に人々所もなくゐたるに、いまのぼりたれば、
すこしとをきはしらもとなどにゐたるを、御らんじ（これへ參れと也）（清少が通り道也）
つけて、こちにと仰られたれば、みちあけてちかく
めし入たるこそうれしけれ、御前に人々あまたもの
おほせらるゝついでなどにも、よの中のはらだゝし
う、むつかしうかた時あるべきこゝちもせでいづち
（遁世もせんと也）
も〳〵いきうせばや、思ふに、たゞのかみのいとし
ろうきよらなる、よき筆しろきしきしみちのくがみ（遁世心がやむと也）
などえつれば、かくてもしばしありぬべかりけりと（中宮のおまし 御也）
なんおぼえ侍る、またかうらいべりのたゝみのむし
（涼）（縁）（紋）（鮮）（へりの）
ろあをうこまやかに、へりのもんのあざやかに、くろ
（新しきに黒き紋ある也）（引）（撰）
うしろうみえたる、ひきひろげてみれば、なにかなを

さらにこの世はえ思ひはなつまじといのちさへおし（腹の立うさも忘らるゝと也）
（清少の）（后宮詞）（紙筆のはかなきもの）
くなんなると申せば、いみじくはかなきこともなぐ（清少は紙疊になぐさむ）（何人かおばすての月にな）
（にと也）
さむるかな、おばすて山の月はいかなる人のみるに
（ぐさむぞと也）
かとわらはせ給ふ
（やまとものがたりにあり）
わが心なぐさめかねつさらしなやおばすて山にて
る月を見てこのおばすてには俊賴顯昭のせんさ
くあれどもこゝの事ならねば略しぬ
（御前に）（清少命の祈念は疊紙筆なるはさて〳〵やすき事也）
さふらふ人もいみじくやすきそくさいの祈かなとい
（とわらふ也）（少）
ふ、さてのちに程へて、すゞろなることを思ひて、里（廿帖にや）
（清言は）
にあるころめでたきかみを二十つゝみにつゝみてた
（后宮より）
まはせたり、おほせごとにはとく參れなどのたまは（少納言なぐさむと云し詞をうけて也）
せて、これは聞しめしおきたる事ありしかばなん、
（わろき紙なれば命のぶるたすけにはなるまじと也）
わろかゝめれば壽命經もえかくまじげにこそとおほ
せられたり、いとおかし、むげに思ひ忘れたりつる（清少は）
事をおぼしをかせ給へりけるは、なをたゞ人にてだ（直人の詞さへうれしか）
（らんにましてや）
におりしましておろかならぬ事にぞあらぬや、心も（あるやの心也）（あま）
（りかたじけなさに）（啓すべきやうもなしと也）
みだれてけいすべきこともなければたゞ

（清少かけて申さんも畏なれ共也）かけまくもかしこき神（冥加恐のしき心也）のしるしには、（紙によせたり）つるのよはひになりぬべきかな　あまりにやとけいせさせ給へとてまいらせつ、だいばん所（后宮の詮議所也）のざうしぞ　○雜仕諸太夫侍の女任い之女嬬の類也　御使（使への躰なり）にきたる、あをきひとへなどとらせて、まことに（何）このかみ（草紙）をさうしにつくりてもてさはぐに、むつましき事もまぎるゝこゝちして、おかしうこゝろのうちもおぼゆ、二日ばかりありて、赤きゝぬきたる、お（五位にや）のこのたゝみ（清少の所への疊也）をきてこれといふ、あれはたれぞ（清少の）あらはなりなどものはしたなういへば、さしをきて（退の字内のものゝ詞也）いぬ、（行去也　清少）いづこよりぞととはすればまかりにけりとて（貴人いしかるゝ心也）とりいれたれば、殊さらに御座といふたゝみのさま（后宮の給りしと）にて、かうらい（高麗緣也）などいふきよらなり、心のうちにはさにやあらんとおもへど、なをおぼつかなきに、人どもいだしもとめさすれど（赤きぬきたる男を）うせにけり、（不審がり也）あやしがりわらへどつかひのなければいふかひなし、所たがへなどあらばをのづからもまたいひにきなん、（とりにこんと也）宮のほと（中宮のあたりへ）りにあないしにまいらせまはしけれど（也　案内也とひにやりたき也）なをたれかすゝろにさるわざはせん、おほせごとなゝめり（只宮の御ぞと也）といみじうおかし、（后宮の女房たち也）二日ばかり音もせねば（清少とひにやる也）うたがひもなく、左京（御衣下）のかみのもとにかゝる事なんある、さる事やけしき見たまひし、（しる様子也）しのびてありさまハ給ひて（その時の様子なうかゞひ給へと也）さることみえずはかく申たりとも、なちらしたまひそ（人にもなのたまひそと也）といひやりたるに、いみじうかくさせ給ひし事なり、（左京詞）ゆめゝまろ（左京が）がきゝたるとな、のちにもとあれば、されば（清少心）よとおもひしに、しるくおかしくて、文かきてまた（清少よりともなく也）みそかにおまへのかうらん（高欄）にをかせ（使）しものは、まど（見えぬ）（也恐也）ひしほどにやがてかきおとして（さの文な）、みはし（御階也）のもとにおちにけり

關白殿（正暦五年）二月十日のほどに、ほこゐんの積善寺といふ御堂にて一切經供養せさせ給ふ　○攝政殿の法興院の中に別に御堂立させて積善寺と名付させ給ふてその堂の供養いみじくいそがせ給ふ○拾芥曰法興院二條北京極東號㆓東二條㆒　愚考兼家公薨じてのちその館を寺として號㆓法興院㆒もと號㆓二條院㆒關白殿ハ道隆也兼家公の一男道長公兄也

女院宮（定子）ハ御前もおはしますべければ（積善寺へ）　○むめつぼの
女御藤原詮子（圓融院ノ后　一條院ハ母東三條院）右大臣兼家公のむすめ正暦二年十月
尼にならせ東三條院と號す后宮の院號これよりは
じまる

二月朔日のほどに、二條の宮（法興院すなはち東二條也）へ、いらせ給ふ、夜ふけて
ねふたくなりにしかば、なにごとも見いれず、つとめ（翌日）
て日のうらゝにさし出たるほどにおきたれば、いと
あたらしうしろうおかしげにつくりたるに（御殿の體也）、みすよ（御簾）
りはじめて、きのふかけたるなゝめり、御しゝこまいぬ（獅子　狛犬　この證）
など（もの、心前に委し）、いつのほどにやいりゐけんとぞおかしき、さ
くらの一丈ばかりにて（二月の氣色也）、いみじうさきたるやうにて、
みはしのひがしにふればいとゝうさきたるかな、む
めこそたゞいまさかりなゝめれと見ゆるは、つくりた（實の花にあらず作り）
るなめり（花なるべしと也）、すべて花のにほひなどさきたるにをとら（にてはしき色あの事也）
ず、いかにうるさかりけん（うるはしかりけんとほめたる詞也）、あさふらばしぼみなん（雨）
かしとみるぞくちおしき（作花を誠の花かと思ふは也）、小家などいふものゝおほ（二條の町屋々のけて也）
かりける所を（この殿閣ニ也）、いまつくらせたまへれば、木だちな

どの見どころあるは、いまだなし、たゞみやのさ（御殿宮中の間）
まぞけちかくおはしげなる（のせけき心也）、殿（道隆也）わたらせ給へり、あ
をにび（青鈍）のかたもん（堅文）の御さしぬき（指貫）、櫻のなをし（前に委し）に、紅
の御ぞ（衣也）みつばかりたゞなをしにひき重ねてそめし（直衣に袴にて下襲用らるゝもあれど只直衣にみと也）
奉りたり、御前より始て（后宮より女房までの衣裝也）、紅梅のこきうすき、おり
ものかたもん（めし給ふ也）、りうもん（立文）など、そのおりはこの八丈（ながきき）
といふたけたかはことになかりき（るもの也）、あるかぎりきた
れば、たゞひかりみちて、からぎぬ（何）はもえぎ（萌黄）柳紅梅な
どもあり、御前にゐさせ給ひて（后宮の御前に關白殿の）、ものなどきこえさ
せ給ふ、御いらへ（后宮の）のあらまほしさを、さと人（里すみの人に見せた）にわづ
かにのぞかせばや（しと也）と見奉り、女房ともを御覧じ（殿）わた（關白殿の）
して（關白殿の詞）、宮になに事をおぼしめすらむ、こゝらめでた（巨々等也多くめでた）
き人々（き也）をなべすへて（並居テ也）、御らんずるこそいとうらやま
しけれ、ひとりわろき人なしや、これ家々のむすめ（みななにがしがむすめ）
ぞかし（ぞ也）あはれや、よくかへりみてこそさふらはせた（思顧して也あはれみつかはせ給へと也）
まはめ、さてもこの宮の御こゝろをばいかにしり奉（關白殿のたはぶれの詞也）
て、あつまりたまへるぞ（女房ども）、いかにいやしくものおしみ（后宮の事也）

せさせ給ふ宮とて、（御）われはむまれさせたまひしより、いみじうつかうまつれどまだおろしの御ぞ（めしおろし也　衣）ひとつたまはぬぞ、なにかしりうごと（後言也　影ごとにいはむの前にて申と）には聞えなんとのたまふがおかしきに、みな人々わらひぬ、まことぞおこ（関白殿詞）なりとて、かくわらひいまするがはづかしなッどのたまはするほどに、うちより（禁中より也）御使にて、式部丞なにがし參れり〇御物云源則理（ノリマサ）正月十三日式部丞前大納言重光卿四男正暦四年藏人十九六年敍二中宮御給一

御ふみは大納言殿（伊周公　イニとり給ひてとも）より給ひて、殿に（関白殿に）奉らせ給へば、（関白殿の）ひきときて、いとゆかしきふみかな、ゆるされ侍らば（后宮たまふれて也）あけて見侍らむとのたまはすれば（関白殿詞帝の御父なれば也）あやしうとおぼい（后宮のいかゞとの給ふ也）たり、かたじけなくもありとて奉らせ給へば、とらせ（后宮の）給ひてもひろげさせ給ふやうにもあらず、もてなさせ給ふ、御用意などぞありがたき、すみのまより（イニみすのうちより）女房茵（使のものへ）しとねさし出て、三四人（ミタリヨタリ）御木丁のもとにゐたり、あなたにまかりて（関白殿詞　帝の文を父君の前にて宮ひらきかれ給ふ故也）ろくの事ものし侍らむとてたゝせ給ひぬるのちに、御ふみ御らんず、御返しは紅梅の（后宮）かみにかゝせ給ふが、御ぞのおなじ色ににほひたる、（后宮の）なをかうしもおしはかりまいらする人はなくやあらむ（いかやうの美事とは推量に及まじと也）こそくちおしき、けふはことさらにとて、殿の御かたより（御使への）祿はいださせ給ふ、（后宮よりの祿なれば也）女のさうぞくに、紅梅のほそなが（細長也前にくはし）そへたり、さかなどあれば、（酒肴なければ也）ゑはさまほし（酒に酔したきと也）けれど、けふはいみじき事の行幸に、（使の申わけ也今日は大事の供奉と也）あがきみゆる（后宮の御連枝也）させ給へと、大納言殿にも申てたちぬ、公達などいみじうけさうじ（つくろひて也）給ひて、紅梅のぞもをとらじときたまへるに、三の御前は、（后宮の…と也）みくしげどの也、（御匣殿前にくはし）ひめぎみよりも、おほきにみえ給ふ、うへ（関白殿の北の方）など聞えんにぞよかッ（たれのお上ともいひつべしと也）める、うへもわたらせ給へり、御木丁引よせて、あ（いかゞと思）たらしく參たる人々にはみえ給はねば、（新參ものにあひ給はぬ也）いぶせきこゝちす、（ふ心也）さしつどひ（より合し衆はと也）は、かの日のさうぞく（供養の日の裝束也）扇などの事をいひあはする（談合也）もあり、またいどみかはして、（衣裝の品をあらそふ也）まろは何にかあらんにまかせて（ありあひの衣服にせんと也）をなどいひて、例の君（いつもだ）などにくまる、（ますす人也）よさりまかづる人も（里亭へ退出也）おほかり、かゝることにまかッづれば、えとゞめさせ給はず（后宮のいゝまを給はると也）うへ（関白の上）日々

也、
にわたり、よるもおはしますゝ、公達などおはすれば、
にぎはしくて也
御前人ずくなく候はねば、いとよしうちの御ゝつか
后宮へ かの作り花也
ひ日々に參る、御まへのさくら色はまさらで日など
にあたりて、しぼみわろうなるだにわびしきに、あ
無徳也あしき心也
作り花なれば也
めのよるふりたる、つとめていみじうむとくゝ也 いと
さくら花つゆにぬれたるかほみればなきてわかれん人ぞおなしきと
ゝくおきてなきてわかれんかほに、心をとりこそす
詠吟也 后宮の
れといふをきかせ給ふてけり、雨のけはひしつるぞ
さくらは 關白殿
かしいかならむとておどろかせ給ふに、殿の御かた
番の人々也
より、侍のものどもげすなどきて、あまた花のもとに
作花見くろしきによりて也
たゞよりによりて、引たをしてとりてみそかにいき
て、まだくらからむにとれとこそ仰られつる、明すぎ
似合ぬ事也
にけり、ふびんなるわざかな、とく／＼と、たをしと
花のあしきをとらせ給ふを清少のいんじゝ也
るに、いとおかしくていかゞいはなんとかねずみ
給 素性の家の集にあり兼澄不審也
がことを、おもひたるにやとも ○後撰花山にて道
俗さけたうべける折に「山守にはいかゞいはなんた
かさごの尾上のさくら折てかざゝむ」作者部類源
兼澄陸奥の守信明の子寛和の比の人也
歌の心しるほどの人ならば也 清少心
よき人ならばいはまほしけれど、かの花ぬす人はた

花と 花ぬすむ口傳
そあしかゝめり、くでんしらざりけるよといへば笑ひ
ろもの 花を 清少心
て、いとゞにげてひきもていぬ、なを殿の御ゝ心はお
作花の莖ども也
かしうおはすかし、くき共にぬれまろかれつきて、い
清少 掃部司
かにみるかひなからましと見て人ぬ、かもりづかさ
二條院の格子上る也 主殿の女官也 掃除也
參て、御かうし參とのもりの女官御きよめ參はてゝ、
后宮の 后宮の詞
おきゐさせ給へるに、花のなければ、あなあさまし、
又后宮の清少
かの花はいづちいにけるとおほせらる、曉ぬす人あ
詞なりけて也
りといふなりつるは猶枝などをすこし折にやとこそ
后宮の 清少の詞見ずと也
聞つれ、たがしつるぞ見つやと仰らる、さも侍らずい
白丁などきたるか
まだくらくてよくも見侍らざりつるを、白みたるも
心もとなさに也
のゝ侍れば、花折にやとうしろめたさに申侍りつ
后宮詞 かく急にはとるまじと思ひし也 隱
ると申す、さりともかくはいかでかとらむ 殿のかく
よもやさや
させ給へるなゝめりとて、わらはせ給へば、いてよも
うにはあらじと也清少詞 后宮の詞
侍らじ春風のして侍なんとけいするに、かゝいはん
雨のわざに
とて、かくすなりけり、ぬすみにはあらでふりにこそ
花のあしくなりしゆへとの心也
ゝるなれ、
引拾遺人丸の歌
我ことや雲のうちにもおもふらむ、雨もなみだも

ふりにこそふれ」と仰らるゝ（后宮へ）もめづらしき事なら（后宮の上をほむる事也）ねど、いみじうめでたき、殿おはしませばねくたれ（ねみだれか）みの朝ほ也のあさがほも、時ならず（春は朝がほ時ならぬ也）や御らんぜんとひきいらる（はづかしがる體也）、殿のおはしますまゝに、かの花うせにけるは、いかにかくはぬすませしぞいぎたなかりける（寝ごい心也）女房たちかな、されど我（清少詞）しらざりけるよと、おどろかせたまへば、殿にはしらせ給はんと也されど我よりさきにこそと思ひて侍るめりつれといふを、い（さやうに）とゝく聞つけさせ給ひて（關白殿の）、さおもひつる事ぞよにこ（后宮の女也 足下清少也）と人いでゝ見つけじ、宰相とそこのほどならんと（后宮詞）をしはかりつとて、いみじうわらはせ給ふ、さりげなるものを、少納言には、春風におほせける（前の首尾也）と、宮ノ御前にうちわらはせ給へるめでたし、空ごと（春風のしはざといふ）おほせ侍（春風におほせければ詠吟せし也）る也（は僞ぞと也）、いまは山田もつくるらむと、うちずむせさせ（關白殿誦）給へるも、いとなまめきおかし、

山田さへいまはつくるをちる花のかごとは風に（貫之家集也）
おほせざらなむ

さてもねたく見付られにけるかな（關白殿の白狀也）、さばかりいまし（かくせよ）めつるものを（といひ付ゝ也）、人の所にかゝるしれもの（后宮の 愚痴ノ也 たはふれの詞也）ゝあるこそとのたまはす、春風は（殿の清少が詞をかんじて也）そらにいとおかしうい（んして也）ふなゝどずんぜさせ給ふ、たゞことには（后宮の）（詞常の詞に也うるはしき事をおもひ出せしとの感じの詞也）うるさくおもひよりて侍りつかし、けさのさまいかに侍らましとてわらはせ給ふを、こわか君さ（松君也明にあり）れどそれはいとくみて、あめにぬれたりなどおも（作花の面目なき心也）てぶせなりといひ侍りつると申給へば、いみじうね（殿下の）（雨にかゝりし花を見せしとねたく思ふ也）たがらせ給ふもおかし、さて八日九日のほどにまか（二月の）（退出也）づるを、いますこしちかうなしてなと仰らるれど（積善寺へ十日の行啓なれば也）、まかでぬ、いみじうつねよりもてりつ（○たるひる）かた花ノこゝろ（后宮の詞）ひらけたりや、いかゞいふとのたまはせれば秋はま（清少の答也）だしく侍れど、よにこのたびなんのぼることちし侍（われもく）るなど聞えさせたれど、出させ給ひし夜（積善寺へ行啓の夜也）、車のしだいもなく（のらむ次第もなく）まづくとのりさはぐが、にくければ、さるべき人、三人と猶この車にのるさまのいとさはがしく、祭のかへさなどのやうに、たふれ（仆）ぬべくまどふ、いと見ぐるし、たゞさはがれのるべき車なくて、え參らずは、そのづから聞しめしつけてたまはせ（車を）てんな

どわらひあはせて、(車を)たてるまへより(押凝て也かたまりて也)をしこりて、まど
ひのりはてて出て、(もはや是ばかりと也)かうかといふに、(清少のまたのらぬと)まだこゝにとい
(の返答也)らふれば、(中宮太夫以下也)宮司よりきて、たれ〳〵かおはするとと
ひきゝて、いとあやしかりける事かな、いまはみな
のりぬらむとこそおもひつれ、(是はなにとて也)こはなどてかくはを
くれさせ給へる、いまは得選をのせんとしつるに、
○得選三人也髪上采女兼レ之行幸之時持二大袋一
與二内侍一同車中略凡於二車寄一乘車女房近代之例也
況得選不レ可レ然事也行幸走内侍同車之時聽レ之近
代之事也
めづらかなるやなど、おどろきて(車を)よせさすれば、(清少)さは
(詞さらば外也)まづその御こゝろざしありつらむ人をのせ給ひて、(得選也)
つぎにもといふこゑ聞つけて、(清少ハ聲也)(宮司の詞也)けしからずはらぎた(腹立給ふ)
(なと也)なくおはしましけりなどいへばのりぬ、そのつぎに
はまことにみづからが車にぞありければ、火もいと
くらきをわびて、二條の宮に參つきたり、(后宮の)御こしは
いとくいらせ給ひて、みなしつらひゐさせ給ひに
けり、(后宮ハ清少を)こゝによべとおほせられければ、左京の允(ゼウ)小左
近などいふわかき人々まいる　○作者部類散位中原
經相女三條院女房三條小左近
人でとにみれどなかりけり、(清少はみぬ也)(車より)おるゝにしたがひ、い
かなるぞと(后宮の)おほせられけるもしらず、(清少は)(四人のゐものなれ四)あるかぎりお
(人みなおりて也辛也やう〳〵して也)りはてゝぞからうじて見つけられて、かばかりおほ
せらるゝには、(將也さの左京左近など)などかくおそくとてひきゐて參るに、
(つれて參る也清少の心也)みればいつのまに、かうはとしごろのすまゐのさま
(二條ノ院ナ)に、(すみなれさせ給ふとの心也)おはしましつきたるにかとおかし、(后宮詞)いかなれば
かうなにかとたづぬる計はみえざりつるぞと仰らる
ゝるに(清少)とかくと申さねば、(同中の人申上る)諸共に乘たる人いとわり
なしや、さいはて(最果)の(あとの車也)車に侍らむ人は、いかでかとくは
參侍らむ、(始也)(御厨子也あと車にのるもの也)これもほど〳〵えのるまじく侍りつるを、
みづしがいとおしがりてゆづり侍りつるなり、(后宮詞車奉)くら
う侍つる事こそ、わらひ〳〵けいするに、行事するも
の、(行ゆだんと也)いとあやしき也(行事の名也)またなどかは心しらざらむもの
こそつゝまめ、(うゐもん詞)うゐもんなどはいへかしなど仰らる、
されどいかでかははしり(走先立也卑下して也)さいだち侍らむなどいふも

（女房たちの）かたへの人にくしと聞らんかし、（いそぎてのらばさまがあし）さまあしうてかく（いらんと清少なしいらせ給ふ言葉也）乗たらむもかしこかるべき事かは、（車は乗次第の定りこそよけれと也）さだめたらむさ（御機嫌あしき也）まのやんごとなからむこそよからめとものかしげにおぼしめしたり、（次第々々車より也女房にまりぬしほどの待）お侍ほどのまちどほにくるしき（遠さにかと清少の理り也）によりてにやとぞ申なをす、御八講（積善寺の）の事にもあすわた（関白道隆の[illegible]也）（女院）らせおはしまさんとて、こよひ參りたり、みなみの院の北おもてに、さしのぞきたれば、（女房たち也）たかつきども（高坏也たうだい也）に火をとぼして、ふたりみたりよたりさるべきど（よき同志）ち屏風引へだてゝゐるもあり、木丁中にへだてたる（女房のきぬ間話也）もあり、またさらでもあつまりゐて、きぬどもとぢかさね、裳のこしざし（裳の腰あてた用意する體也）けさうずるさまは、（あすのはれにゆふ也）さらにもいはず、かみなどいふものはあすよりのちはありがた（女房達清少にかたる也）げにぞ見ゆる、とらの時になんわたらせ給へる也、などかいまゝで參給はざりつる、扇もたせてたづね（たれと）（もなく扇をもたせこして清少はこゝにかと尋し人ありと告る也）きこゆる人ありつなどつぐ、まてまことにとらの時（待也分別する時に也）かと（出立さはぐ也）さうぞきだちてあるに、あけすぎ日もさして出ぬ、にしのたいのからびさしになん、さしよせて（車た）のるべきとて、あるかぎりわたどの（渡殿也廊下也）へゆくほどに、まだうゐ〳〵しきほどなる、いま參どもはいとつゝましげなるに、にしの對に殿のすませ給へば、宮にもそこにおはしまして、まづ女房ども車にのせさせ給ふを御らんずとて、みすのうちに宮、しげいさ（淑景舍）（后の御妹也）、三四のきみ（高内侍儀同三司の母也）殿のうへその御おとうと（高内侍の妹也）三所、たちなみて（ならびて也）おはします、車の左右に、大納言どの（伊周公）三位の中將（隆家公）ふた所して、すだれうちあげ下すだれ引あげて、のらせ給ふ、みなうちむれてだにあらば、すこしかくれ所もやあらむ、四人づゝかきたてに（出立の次第に也）したがひて、それ〳〵とよびたてゝのせ奉り、あゆみ行こゝちいみじうまことにあさましうけせう（顯證也はれがましき心也）なりといふもよの常也、みすのうちにそこらの御めのとの中に宮の御前の見ぐるしと御覽ぜんは（はづかしくて也）さらにわびしき事かぎりなし、身よりあせ（汗也）のあゆれば、つくろひたてたるかみなどもあがりやすらむ（ぞゝけとする心也）とおぼゆ、からうじてすぎ行たれば車のもとに（伊周公などの）いみじう耻しげにきよげなる御さまどもして、うち笑みて見給ふもうつゝならず（ゆめのやうなりと也）、されどた

うれずそこまではいきつきぬる(不倒也)(車のもと也)とこそ、かしこきか
ほもなきかとおぼゆれど、みなのり(大路)(榻立)はてぬれば引い
でゝ(外へ)、二條のおほぢに、しちたてゝもの見ぐるまの
やうにて、たちならべたるいとおかし、人もさみるら
んかしと、心ときめきせらる、四位五位六位などいみ
じうおほう出入車のもとにきて、つくろひものいひ(女院の)
などす、まづゐんの御むかひに殿をはじめ奉て、殿(女院渡御ののち也)
上人地下などもまいる、それわたらせ給ひてのち。
宮(后宮)は出させ給ふべしとあれば、いと心もとなしと思(遅からむと思ふ也)
ふほどに、日さしあがりてぞおはします、御くるまご(后宮の)
めに、十五、よつは尼車、一の御車はからの車なり、(女院中宮の車すべて也)(一番也)(女院の也)
それにつゞきてぞあを車しりくちよりすいさうのず(四ッ)(後口)(水精)
ゞ(念珠)うすゞみのけさきぬなどいみじくて、すだれは(尼車の)
あげず下すだれもうす色のすそすこしこき、つぎに(紫也)
たゞの女房の十、さくらのから衣、うす色の裳、紅(第一の女院車)(尼車 又女房の十合て十五)(多分)
をしわたし、かとりのうはぎどもいみじうなまめ(は紅と也)(袿)(表着)
かし、日はいとうらゝかなれど、空はあさみどりにか
すみわたるほどに、女房のさうぞくのにほひあひて

いみじき織ものゝ、いろ／＼のから衣などよりもな
まめかしうおかしき事かぎりなし、關白殿その御つ(女院を)
ぎ／＼の、とのばらおはする限りもてかしづき奉ら
せ給ふ、さまいみじうめでたしこれら見奉て、めでさ(后宮の)
はぐ、この車どもの二十たてならべたるも、またおか(女房車の)(女院かたの人)
しと見るらむかし、いつしか出させたまはんなどま
ち聞えさするにいとひさし、いかならむと心もとな
く思ふに、からうじてうねめ八人馬にのせて引いづ(后宮出御の行列也)
めりあをすそごのもくんたいひれなどの風にふきや(青)(末濃)(裳)(褶帯)(領巾)
られたるいとおかし、豐前といふ采女は典藥のかみ、(采女の名也)
しげまさがしる人なりけり、えびぞめのおりもの、(蒲萄染)(織物)
さしぬきをきたれば、いと心ことなり、しげまさは、(女の馬上はさしぬきを着る也)
色ゆるされにけりなどやまの井の大納言はわらひ給(好色のかたをふくみてのたはふれ也)(道頼卿也)
ひて、みなのりつゞきてたてるに、いまぞ御こし出(何)(女院の)
させ給ふ、めでたしとみえ奉る御ありさまに、これ(けふの)
はくらぶべからざりけり、朝日のはなぐ／＼とさしあ(ありさまにくらべられずと也)
がるほどに、木の葉のいとはなやかにかゞやきて、(春のわか葉なるべし又旧注には金花をかざる也)

御こしのかたびら（四方のたれぬの也）いろつやなどきようさへぞいみじき御つな（后宮の御こしの綱を張りて也）はりていでさせ給ふ、御こしのかたびらのうちゆるぎたるぞ、まことにかしら（身の毛のよたつ事也）のけなど人のいふは更に空ごとならず、さてのちは髪（ぞやかみ立てのちそい）あしからむ人もかこちつべし（けしはうらみんと也）、あさましういつくしう（厳重也）、なをいかでかゝるおまへになれつかうまつらむと、わが身もかしこうぞおぼゆる（かたじけなうおぼゆる也）　御こしすぎさせ給ふほど、車のしぢども、人だまひに（前にくはし）かきおろしたりつる、またうしども（車）かけて、みこし（輿）のしりにつゞきたるこゝち（女院の後）の、いとめでたうけうあるさまいふかたなし、おはしまし（積善寺へ）つきたれば、大門のもとにこまもろこし（高麗唐）のがく（楽）してしゝこまいぬをとりまひ、さうのこゑ（箏）つゞみのこゑに、ものもおぼえず、こはいづくのほとけの、御國などにきにけるにかあらむと、そらに（天人の）ひゞきのぼるやうにおぼゆ、うちに（堂の内に）いりぬれば、色々のにしきのあげ（帷幔）はりに、みすいと青くて、かけわたし、へいまん（屏幔也まくの類也）など引たるほど、なべてたゞにこの世とおぼえず、御さじ（后宮の）きに、さしよせ（女房たちの車）たれば、またこの殿ばら（伊周公隆家卿など也）たち給ひて、とくおりよとのたまふ、（初より晴がましと也）のりつる所だにありつるを、いますこしあかうけせうなるに（顕證あらはの心也）　大納言殿（伊周公）いとものものしくきよげにして、御下がさね（襴）のしり（最長）いとながく、所せげ（せばき也）にてすだれ（車の）あげて、はやとのたまふ、（車よりおりよと也）つくろひそへたるかみ（女房たちのかみの）（もいけて也）、裳（からぎぬの）のなかにて、ふくだみまやしうなりたらむいろの黒さあかさ（髪の）さへ、みえわかれぬべきほどなるが、いとわびしけれど、はふともえおりず、（遠とゝ也）　まづしりなる（清少の）こそはなどいふほども、それもおなじこゝろにや（清少と同じく恥る也）（大納言どの女房の前た　女房）、りぞかせ給ふ、かたじけなし（の心也）などいふ、はち給ふかなとわらひて（大納言殿の詞也）立かへり、からうじて（清少）おりぬれば、（大納言どの清少もとへたれともな）よりおはしてむねたかなし
どにみせで、かくして（清少を）おろせと宮のおほせらるれば、きたるに（大納言殿詞おぼしめす、ひもなきとて也）おもひぐまなきとて、（車より）ひきおろしてゐて參（將也）給ふ、さきこえさせ給ひつらむ（后宮のさやう仰られつらんは忝と清少心也）と思ふも、かたじけなし、參たれば始めおりける人共の、ものゝみえぬべき（法事のみゆべき）はし（所のはし也）に八人計いでゐにけり、一尺と二尺（さきといはん文法也）ばかりのた

目ゝらしきぬの事也　后宮　清少なよき所に
かさのなげしのうへに、おはします、こゝにたちかく
句　大納言殿中宮へ申給ふ也
してゐて参たりと申給へば　いづらとて、木丁のこ
后宮
なたに出させ給へり、また御裳からぎぬの御ぞども
著　ながら也
奉りながらおはしますぞいみじき、紅の御ぞどもよ
后宮の装束にはいかゞと也　表青ヶ白
ろしからんや、中にからあや柳の御ぞ、ゑびぞめ五重
是ハのまたぬかせ給はぬから衣也　摺繪などのたぐひ也
の御ぞに、あか色のからの御ぞ、地ずりのからのうす
象眼唐衣の名也
ものに、ざうがんかさねたる御裳など奉たり、織物
后宮詞
の色さらになべてのににるべきやうもなし、我をば
女房たちに清少心
いかゞみると仰らる、いみじうなん候つるなども、
いふもいはれぬけつがうさと也　后宮の詞也待かれた
ことにいでゝは、よのつねにのみこそひさしうやあ
るかと也　是より后宮の御出の遅き故な御もつかたい也
りつる、それに殿の太夫のゐんの御ともにきて、人に
その衣裳にて又
みえぬるおなじ下がさねながら、宮の御ともにあら
むはわろしと、人おもひなんとて、殊にしたがさねぬ
の事　御堂殿の好色
はせ給ひけるほどに、をそきなりけり、いとすき給
はれがましき所也
へりなどゝうちはらはせ給へるいとあきらかにはれ
けんざいと也　宮によそ
たる所は、いま少しけざやかにめでたう御ッひたゐあ
ほか也　最初　縮目　かみのち
げさせ給へりける、さいそに御わげめの御ぐしのい

ゞみかる也
さいかよりて、しるくみえさせ給ふなどさへぞきこ
中宮ハ御座の間所の事也
えむかたなき、三尺の御木丁一よろひをさしちがへ
て、こなたのへだてにはしてそのうしろには、たゝ
枚　よこへしきたる也　縁　長押
み一ひらをながきさまにへりをして、なげしのうへに
后宮ハ女房也　出君
しきて、中納言のきみといふは、殿の御おぢのたゞ
藤氏家譜　法興院関白
きみと聞えけるが○九條師輔公の男兼家公と同母
の弟なれば道隆公の御伯父也
后宮ハ女房
御むすめの宰相の君とは、富の小路の左大臣の御ま
后宮の御まのほとりにゐし也
ご、それ二人ぞとにゐてみえ給ふ○従一位左大将
富小路顕忠公の次男左衛門の佐重輔のむすめ宰相
のきみ也
中宮ノ　中宮詞　殿上人
御らんじわたして、宰相はあなたにいきて、上人ど
宰相后宮ハ清少なめし
ものゐたる所みよと仰せらるゝに、こゝろ得し、こゝ
よせられん御心を心得て也　細流抄　さらばとて也
に三人はよく見侍りぬべしと申せば、さばとてめし
宰相の詞中納言・宰相清少と三人也
あげさせ給へば、しもにゐたる人々、殿上ゆるさるゝ
内舍人也童殿上などのなる官也
内舍人なゝめりとわらはせむとおもへるかといへば、
ウトネリ
むまざえのほとぞなどいへば　○宰相の君の父重輔
朝臣馬の頭なるゆへ殿上ゆるさるゝ内舍人馬ざえ

などたはふれの詞なり
そこにのぼりゐて（なげしの上だんの間也）みるは、いとおもだゝしう（面目らしう也）、かゝる事などをみづからいふは、ふきがたり（耽語也　身をふけりかたる也）などもあり、またきみの御ため（主君の御ため也后宮の事也）にとかろ／＼しうかばかりの人を（清少ごときのもの也）さへおぼしけんなどをのづからものしり世の中もどきなどする人はあいなう（あぢきく也）かしこき御事にかゝりて（恐れがましき事にかゝづらひいふ也）、かたじけなければある事などは、またいかゞはまことに（中宮の御ねんごろの清少が[illegible]也）身のほどすぎたる事もありぬべし、ゐんの御さじき所々の（是より法事の場の体也）御さじきども見わたしたるめでたし、殿は（后宮の方へ也）、先ゐんのおましに參給ひて、しばしありて、こゝに參給へり、大納言二所、三位中將は（隆家公也）　○權大納言伊周公廿一權中納言道賴公廿四

ぢん（陣）ちかう參給へりけるまゝにて、てうど（武官の調度弓やなぐひなど也）をおひて、いとつき／＼しうおかしうておはす、殿上人四位五位こちたう（おほく也巨の字）うちつれて、御ともに（女院へ）侍らひなみゐ（ならび也）にけり、いらせ給ひて（關白殿后宮へ）見奉らせ給ふに、女房あるかぎり、裳からぎぬ御くしげどのまでにき給へり、殿の上は

裳のうへに、こうちき（小袿也）をぞきたまへる、ゐにかきたるやうなる御さまどもかな、いまいらへ（今以來也　く窮屈なる日みじ）けふはと申給ひそ（といふなど也）三四のきみの御裳ぬがせたまへば、此中のしうには（后宮をさして主君なれといふ心也）御まへこそおはしませ、おましの前に、陣をすへさせ給へるはおぼろげの事かとてうちなかせ給ふげにとみる人もなみだ（戒涙也）ぐましきに、あか色のさくら（清少のさま也）のひとつからぎぬをきたるを御覽じて（關白殿の）、法服のひとつたらざりつるをにはかにまどひしつるに、是をこそかり申べかりけれ（少納言の赤色をたはふれての給ふ也）、さらばもし（かりたらば也）、またさやうのものを、きりしらめ（切調）たるにとのたまはするに、またさやうのものをきりしらめたるにとのたまはするに、またわらひぬ、大納言殿（伊周公也）すこししぞきゐ（退居）給へるが聞給ひて、清僧都にやあらんとのたまふ（清少のきぬなかるとのたはぶれ也）、一事としておかしからぬことぞなきや、僧都のきみ（隆圓の事右にくはし道隆公の子也）あか色のうすものゝ御衣、紫の御けさ、いとうすきいろの御ぞどもさしぬきなどきたまひて、かしらつきの青くうつくしきに（そりあたま也）、地藏ぼさちのやうにて、女房にまじ

りありき給ふもいとおかし、僧綱（僧正僧都律師などをいふ前にくはし）の中に、威儀具足して、おはしまさて見ぐるしう女房の中になどわらふ、父の（伊周公）大納言殿御まへより、松君（伊周の御子道雅公也二十三歳ばかりや）ゐて奉る、えび染の織物のなをし、こきあやのうちたる紅梅の織もの（表紅うら紫也）などき給へり、御（松君の）ともに例の四位五位、いと多かり、御さじきにて、女房の中にいだき入奉る、なに事のあやまちにかなきのゝしり（松君の）給ふさへ、いとはへ〴〵しき事（法事也）はじまりて、一切經をはすの花のあかきに一は（一蓮に經一巻づゝ也）なづゝに入て、僧俗上達部殿上人地下六位なにくれまでもて續きたるいみじうたうとし、大行道（出家の回る事）導師參ゑかう（回向）しばしまちて、まひ（伶人の舞也）などする、日くらし（終日）みるに、目もたゆくるしう、うちの御使に、五位の藏人參たり、御さじきのまへに、あぐら（胡牀）（しやうぎ也）たてゝゐたるなど、げにぞなをめでたき、夜さりつかた、式部丞のり（后宮へ御使に）まさ參たり、やがて夜さり（后宮禁中へ）いらせ給ふべし、御ともに（そのまゝ）さふらへとせんじ（則理に御供せよと也 宣旨）侍つとて、歸もまいらず（のりまさが奉請也）、宮（后宮）はなを、歸てのちに（のりまさ禁中へ歸てのちと也）とのたまはすれども、また藏人の辨參（道々のむかひ也）

て、殿にも（道隆公へも勅使也）御せうそこあれば、たゞおほせ（御門の）のまゝとていらせ給ひなゝどす ○源扶義（この時の辨也二人のうちなるべし）正暦二年三月廿五日補ニ從四位下左中辨藏人ニ右中辨正五位下源俊賢正暦三年八月廿八日補ニ藏人ニ

ゐんの御さじきより、ちかのしほがまなどやうの御せうそこ、おかしきもの（御くだもの等也）などもて參かよひたるなどもめでたし、

○みちのくのちかの志ほがまちかながらからきは人に逢ぬなりけり（續後撰の御歌也）

事（法事也）はてゝ、ゐん（女院）歸らせ給ふ、上達部などこのたびは（半分）かたへ（ほど也）ぞつかうまつり給ひける、宮はうちへ（還御には）いらせ給ひぬるもしらず、女房のずざ（從者）どもは、二條の宮に（還御な）ぞおはしまさんとて、そこにみないきゐて、までど〳〵（從者）みえぬほどに、よいたうふけぬ。うちにはとのゐもの（の寢道具也）もてきたらんと待に、きよく（經く）（すきとみえぬと也）みえず、あざやかなる（やうのはれ衣裳也）きぬのは身にもつかぬをきて、さむきまゝに（從者のこぬな）（宮御從者の内裏へ來るな也）、にくみはらだてどかひなし、つとめてきたるを、いかにかくこゝろなきぞといへば（すさへの詞也）、となふ（みなおなし）るごともさいはれだり（やうにいふとの心也）、またの日、雨ふりたるを、殿

大事の供養の日雨ふらぬによりて因果のよきが
はこれになん、わがすくせはみえ侍りぬる、しかば御
しれたるとの儀に詞也
落着して也おちつ
らんずると聞えさせ給ふも、御こゝろおちゐ、こと
く心也
はりなり、

● にうときもの
錫杖　九節ある故也この音をきけば一切の衆生に利益ある事をとき
九條しやくぢやう　念佛のゑかう　○錫杖經曰佛言
給ふ也
錫者軽也倚ニ依是杖ニ除ニ煩惱ニ出ニ三界ニ故也錫明也
得ニ智明ニ故錫醒也醒ニ悟苦空ニ三界結使ニ故略　○念佛
に觀念の念佛稱名の念佛あり廻向に往想廻向還想廻
向の二種　惠心云廻ニ所作ノ善ニ趣ニ向於彼ニ謂ニ之廻向ニ

● 歌は　和歌うたひものなど也
拾芥抄にもおほく風俗の歌ありおもし　古今このさうし七巻に
風俗(フゾク)の中にも、すきたてたる門　○我いほは三輪の山も
くはし今略也
とも戀しくはとぶらひきませ杉たてる門　一曲ある事也
内侍所御神樂の歌也　いまやう歌也
神樂歌もおかし、いまやうはながくてくせづきたる
○神樂譜に詳也　庭火　阿知女(アチメ)　採物(トリモノ)　大前張(サイハリ)
小前張(コサイハリ)　星歌　雜歌など也
● さしぬきは　さしぬきの事前にくはし裳は色ある也
濃　蒲萄　二藍
むらさきのこき　もえぎ　なつはふたあゐ　いとあ
うらのなきすゞしの羽名也蟬の羽色など
つきころ、なつむしの色したるもすゞしげなり
もいふ也そのたぐひなるべし

是も色也
● かりぎぬは　老若によりて色の差別あり　定ならぬ也
香染　赤色　表青
かうぞめのうすき、しろきふくさ、かいろ、松の
黄染也　青朽葉也　おもて白うらぶどう也　表白裏青　表うす紫うら青
葉色、なをば、さくら、やなぎ、また青ふぢ、おと
女の衣はに色よしあしありおとこは何色もよしと也
こはなにいろのきぬも

● ひとへは
緋の単衣也うへのきぬの下にきる紅の一重の事也
しろき、ひのさうぞくの紅のひとへあこめなど、かり
紅色の黄にみて也色ひとへ
そめにきたるはよし、されど色きはみたる紅のひとへな
りたる也
黄色きたる色也前にくはし
どきたるはいとこゝろづきなし、ねりいろのきぬも
きるはきれども也
白らしきがよしと也
きたれど、なをひとへはしろうてぞおとこも女もよ
ろづの事まさりてこそ、

● わろきものは
いたことの事也
詞のもじあやしくつかひたるこそあれ、たゞもじひ
貴　賤
とつにあやしくも、あてにもいやしくもなるは、い
清少みづからの事也
かなるにかあらむ、さるはかう思ふ人よろづの事に
言葉がよきあしきとて其人はしられじと也　さうに也
すぐれてもえあらじかし、いづれをよきあしきとよ
しるにかあらむ、されども人をしらじ、たゞさうち
口にまかせていふ計と也　雑義
おぼゆるもいふめり、なぎの事をいひてその事させ
んとすといはんといふを、ともじをうしなひてたゞ

いはんずる、さとへいでんずるなどいへばやがてい
とわろし、まして文をかきてはいふべきにもあらず（書物の事）
ものがたりさへあしうかきなどすればいひかひなく（作者の本意たがふ故也）
つくり人さへいとおしけれ、なを定本のまゝなど、
かきつけたるいとくちおし、ひでつくるまになどい（秘點秘傳兩說）
ふ人もあり、もとむといふ事をみむとみないふめり、
いとあやしき事をおとこなどは、わざとつくろは（おとこの詞もつくろはでもよしと也 女などの作もの語に女）
でとさらにいふはあしからず、わがこと葉にもて
のやうにやはらかにけあきと也
つけていふがこゝろをとりする事也

●下がさぬは（襲 右にくはし）

ふゆはつゝじ　かひねりがさね（うらおもて紅也）　すわうがさね（ふしがれにてそむる也）　○
胡曹抄　躑躅表蘇芳裏靑打三月著レ之　搔練云ニ火
色ニ白レ冬至レ夏　蘇芳表白裏濃打公卿禁色人常
所ニ着用ニ也

なつはふたあひ　しらがさね（四月十月のほか暑用にきる也）　○二あひ以ニ紅花及ニ
靑花ニ染レ之餝抄云苦熱之比着ニ用之ニ　○胡曹抄白
襲表裏白帶表更衣之時上下着レ之老者用レ之

●扇のほねは

ほを色はあかき（蒲黄色也）　むらさきはみどり（紫の地紙には骨はみどりよしと也）　○餝抄公卿宿
老人束帶時不レ論ニ夏冬ニ持ニ檜扇ニ直衣之時猶持レ之
年少之公卿炎天之時持ニ蝙蝠ニ云々

●檜扇は（二十九枚若の骨白糸　てとぢ糸のあまりを糸の花を置物にていとめの下より二三寸もつ所をのこすべし是桃花亭の御說也女房又各別）

むもん（無地也）　からゑ

●神は

松の尾　大寶元年秦都理建レ社而祭レ之是神號ニ大山
所神ニ即與ニ比叡山神ニ一躰也是祭四月上申日也貞
觀中始　延喜式第九神名帳山城國葛野郡松尾神社
二座

八幡この國のみかどにておはしましけんこそいとめ（人王十五代應神天皇也）
でたけれ　○宇佐緣起云王子御誕生是時自ニ龍宮城ニ
獻ニ御初衣ニ其形八足白幡御襁褓八枚其長八尺○筥
崎緣起云昔白幡四赤幡四自レ天降ニ于是故名ニ八
幡ニ公事根源にも委し　○廿二社次第八幡ニ所應
神天皇神功皇后玉依姫貞觀元年九月十九日行敎和
尙於ニ男山峯ニ建ニ立之ニ

大原野　賀茂はさら也（ことさらめでたしと也）　○文德帝仁壽元年二月始行ニ

此祭ニ春日社遠ニ於帝闕ニ故移ニ大原ニ其山曰ニ小鹽ノ
美后妃夫人有ニ參詣ニ故也　○公事根源云下賀茂御
祖上賀茂別雷　御祖神者號ニ玉依姫ニ賀茂健角身命
之女也猶書々にあり
稲荷春日前にくはしく記す
いなりかすがいとめでたくおぼえさせ給ふ、さほど
のなどいふ名さへおかし　○拾芥云佐保殿奈良湊海
公家冬嗣公家
内になにもなき宮也祭のときみこしをうつし來る所也
平野はいたづらなる屋ありしを、こゝはなにする所
仁徳の廟所也と聞えし
ぞととひしかばみこしやどりといひしもめでたし
○諸社記ニ平野祭神四座第一今木神日本武尊源家氏
神第二久度神仲哀天皇平家氏神第三古開神仁徳天
皇高階氏神第四比賣神
蔦
いがきにつたなどのおほくかゝりて、もみぢの色々
まちあへぬ心也
ありし、秋にはあへずと、貫之が歌おもひいでられて、
清少の　立やすらふ也　水守
つく〳〵とひさしうたゝれたりしがみこもりの神い
古今貫之
とおかし　○千早振神のいがきにはふくずもあき
長能の歌
にはあへずうつろひにけり　千早振あまの岩くら
信州戸隱の明神と同體と云也
をしひらき我にをかたれみこもりの神

辛崎江州
●崎は　伊香江州山城の境とみえし　駿河三穗
からさき　いかゞさき　みほがさき　○草わかしひ
たちのうみのいかゞさきいかゞあひみんたこのう
かげろふ日記にあり
らなみ　石山に參てかへるとていかゞさき山ぶき
の崎などゝいふ所を見やりてあしの中よりこぎ給
ふと云々
●屋は　四阿と書也四方へ雨だれのおつるやうにつくりし家
ちいさき屋也
まろや　あづまや
也御所つくりともいふ也　官人のしはぶき也
宣すさび也漏刻のものゝ事也　沓の地摺音して也
時奏するいみじうおかし、いみじうさむきに、よな
かばかりなどにごほ〳〵とこぼめき、くつすりきて
弓弦うち也　何がしの宮の　丑　三　子
つるうちなどして、なんけのなにがし時うしみつね
四　杭漏刻のつぼの箭をさす事也　子
よつ、など時のくゐさすをとなどいみじうおかし、ね
九　丑　八　皇たれし人はいふ也禁中にはいはぬ也
こゝのつ、うしやつなどぞ、さとびたる人はいへ、す
べてよるのみぞくゐはさしける　○禁秘抄奏レ時事
上古隨ニ陰陽寮漏剋ニ奏レ之近代指計藏人仰レ之丑杭
以後爲ニ明日分ニ○左近衛は亥の一刻より子の四刻
まで右近衛は丑の一刻より寅の四刻まで也
のどかなる日也　甚
日のうら〳〵とあるひるつかた、またいたう夜ふけ

て、ねの時などいふ程にもなりぬらんかし、（天子の御寝なりぬらんかしと思ふほどに也）おほと
のごもりおはしまして（上の）にやなど思ひ参らする程に、
おのこどもめしたるこそ、いとめでたけれ、よなかば
かりに、御ふえ（笛）の聲聞えたるいとめでたし、成のぶ（兵部卿）
（致平親王の男長徳り年左中將）
の中將は、入道兵部卿の宮の御子にて、かたちいと
おかしげにこゝろばへもいとおかしうおはす、伊よ
の守かねすけがむすめのわすられて（成のぶに）、伊よへ親のく（むすめ）
（もつれて也）
だりしほどいかにあはれなりけんとこそおぼえしか
○勸修寺の家堤の中納言兼輔にや伊豫の守の補任
みえず不審
（むすめの旅立日の）
曉にいくとて、こよひおはしまして（なりのぶの）、有明の月にかへ
り給ひけんなをしすがたこそ、そのかみつねにゐて（かのむすめ）、
ものがたりし人のうへなどわろきはわろしなどの給
（となりのぶと　物忌を實法にくすィんで也）
ひしに、ものいみなとくすしうするもの、、石を姓に
てもたる人のあるが、こと人の子になりて、平（タイラ）など（言種）
いへど、たゞそのもとの姓を、若き人々（女房也）ことぐさ
にて、笑ふありさまも、異る事なし、兵部とておか
（風流の方のありがたき心也）
しきかたなどもかたきかさすがに人などに、さしま
（兵部が風流ならぬを后宮ものたまへ）
じり心などのあるは、御前わたりもみぐるし

（ども告しらせぬと也）
などおほせらるれど、はらぎたなく（いぢわろき心也）しりつぐる（告）人も
（一條の南大宮の東二町ゝ拾芥にあり）
なし、一條の院つくらせ給ひたる一まの所には、つ
（心やさきおとこはゝよはさで也）（清少式部のみさしむかひ居る也）
らき人をばさらによせず、東のみかとにつとむかひ
て、いとおかしきに、小びさしに式部（女房也）のおとゞ（殿といふ心也）もろ
ともに、よるもひるもあれば、上も（后宮も）つねにもの御覽じ
にいらせ給ふ、こよひは（清少式部二人也）みなうちにねんとて、南の
ひさしにふたりふしぬるのちに、いみじうたゝく人（おとこの來て戸たゝく也）
のあるに、うるさしなど（清少式部）いひあはせて、ねたるさま（そら寢也）に
てあれば、猶いみじうかしかましうよぶを、あれお（后宮の）
こせ、そらねならむとおほせられければ、この兵部さ
て、おこせどいみじう（清少の）ねたるさまなれば、さらにお
き給はざめりと、いひにいきたる（上へ申に也）が、やがてゐつきて（そのまゝゐて也）
ものいふなり、しばしかと思ふに、夜いたうふけぬ、權
（なりのぶ也　戸たゝきし人也　兵部がなりのぶと）
中將にこそあなれ、こは（清少の）なに事をかくゐて（兵部が）はいふぞ
とて、たゞみそか（兵部）にわらふもいかでかしらん、曉まで
いひあかしてかへりぬ、このきみ（權中將をさしてそしろ詞也）はいとゆゝしかり
けり、さらにおはせんに（清少のもとへ）、ものいはじ、なに事をさ

兵部
はいひあかすぞなどわらふに、やり戸を明て女はい
㒵　前に小びさしといふ首尾也　清少
りぬ、つとめて例のひさしに、ものしふをきけば、あ
兵部心になりのぶたいへる也
めいみじうふるおりに、きたる人なん、いとあはれな
る、日比おぼつかなうつらき事ありとも、さはらで
きたらむは、うき事もみな忘れぬべしとは、などて
清少のあやしむ詞也　さきたといひも也
いふにかあらんを、よべも、それがあなだのよもすべ
てこのごろはうちしきり見ゆる人の、こよひもいみ
じからん雨にさはらできたらむは、一夜もへだてじ
清少心也　前の心の評判也
と思ふなゝめりとあはれなるべし、さて日ごろもみえ
雨の時也
ずおぼつかなくてすぐさん人の、かゝるおりにしも
こんをばさらにまたこゝろざしあるにはえせじとこ
おとこの心にてさま〳〵のしわざするものなればとの心
そ思へ、人の心えなればにやあらん、もの見しり思
也
ひしりたる女の心ありとみゆるなどをばかたらひて
猶外にいよ　所也　もとよりたよりとたのむ本妻をいふ也
あまたいく所もあり、もとのよすがなどもあれば、
雨のふる折也
しげうしもえこぬを、なをさるいみじかりし折に、き
雨の時にきたりしと女に心ふかくおもはせ
たりしことなどにもかたりつがせ身をほめられんと
て名聞にする男のしはざ　や也　ほめられんとするおとこなたすけ
思ふ人のしはざにや、それもげにこゝろなからむに
ていふ也
はなにしにかはさもつくりごとしてもみえんともお

是より雨の面白からぬ事をいひて月雪の時こそよけれと
もはん、されどあめのふる時は、たゞむづかしうけさ
いふ心也　おもし
までははれ〴〵しかりつる空ともおもほえず、いみじ
ろさ廊の局にてあふてり雨には興なしと也
きほそ殿のめでたき所ともおぼえず、ましていとさ
ほそどのならぬ所也
らぬ家などはとくふりやみねかしとぞおぼゆる、月
かたらひ來る人也　助字也
のあかきにきたらん人はしも、十日二十日、もしは
らむははつかしくてえあふまじき也　中絶して思ひ出た
一とせにても、まして七八年になりても、思ひ出たら
むはいみじうおかしとおぼえ、えあふまじうわりなき
所、人めつゝむべきやうありともかならずたちなが
らものいひてかへし、またとまるべからんをばとゞ
めなどしつべし、月のあかきばかりとをくもの思ひ
月の夜あひし昔でたさにむかしをおもひいづる心也
やられ、過にし事、うかりしもうれしかりしもおか
しとおぼえし事　たゞいまのやうにおぼゆるおりや
はある、こまのゝものがたりは、なにばかりおかし
きこともなく、ことばもふるめき、見所おほからね
ど　○こまのゝものがたり源氏の諸抄にもしれず
作者もしれずつたはらぬさうし也
こまのゝものがたりの詞にあるなるべし　もとくいたるあふぎ也
月にむかしを思ひいでゝ、むしばみたるかはほりと
りいでゝ、もとみしこまにといひてたてるかとあ

後撰にも大和ものがたりにもあり齊の管仲大雪にみちをまとへろに馬に任て行し故事也
はれ也　○ゆふされば道もみえねど故郷はもとみし
こまにまかせてぞゆく
月のあざやかなる　對して也
おめは心もとなきものと思ひしみたればにや、かた
時ふるもいとにくゝぞあるやんごとなきこともおもし
ろかるべきこと、たうとくめでたかるべきことも、あ
めだにふれば、いふかひなくくちおしきに　前の兵部が心を父判じたる也　なにかと
てぬれてかこちたらんげにかたのゝ少將もどきたら
んおちくぼの少將などはおかし　○おちくぼの物語
四札あり中納言の娘みめ心ばへすぐれしを繼母に
くみてひきゝ所にすませ落くぼの君と名づくそれ
をうこんの少將心ざし深く雨のよかよひそめしか
たのゝ少將と云人もこの君に心をかけし也うこん
少將えたるをかたのゝ少將もどきたると書しにや
前によべきのふの夜もなどゝいひし首尾也
それもよべおとゝひのよもありきしかばこそおかし
をちくぼの少將　清少心
けれ、あしあらひたるぞにくし、きたなかりけん、さ
らではなにか風などふき、あらくしき夜、きたるは
たのもしくておかしうてありなん　○かの右近少將
雨のふるよかよひそめまたの日もおはしぬ三日の
よにあたりし夜おちくぼの君につかふるあこぎと

いふ女さまかくくまへてもち飯など用意して待
に雨ふり出たれば少將こよひはえいくまじといひ
やり給へば「世にふるをうき身と思ふわが袖のぬ
れはじめなるよひの雨哉」とよみしに少將ねんじ
わびてあこぎに通ふ帶刀といふおとこをぐしてお
はしぬ帶刀が曹子にてまづ水してあしをすまさせ
し事ありこの心をおもひて書し也
雪こそいとめでたけれ、なをしなどはさらにもいは
ず、かりぎぬうゑのきぬ、藏人の青色などのいとひ
やゝかにぬれたらむは、いみじうおかしかりぬべし、
綠衫六位の袍也みどりの裝束也
ろうざうなりとも、雪にだにぬればにくかるまじ、む
かしの藏人などの人のもとなどに、青色をきて雨に
ぬれてしぼりなどしけるとか、いまはひるだにこざん
衛府
めり、たゞろうざうをのみこそ、かづきたんめれ　ゑふ
也近衛の袍官也ろうざうを
などのきたるは、まして おかしかりしものを、かく
雨にくる人は日ごろのつらさも忘るとは部が詞を
聞てあめにありかぬ人やはあらむずらん、　月出いと
何事もなけ
きゝて也
ありむよ、紅のかみのいみじうあかきに、たゞあら
れど御見まひになと書たる文也
ずともかきたるに、ひさしにさし入たるを、月にあ
てゝみしこそおかしかりしか、雨ふらむおりは、さ

月にみる興などはあらじとなり是より別の事　つれなきをうらみ
はありなんや、つねにふみおこする人、なにかはいま
たるおとこの心也　今は又もやらじと也
はいふかひなし、いまはなどいひて、またの日、をとも
夜明れば文もてきしものゝけさは文もみえねばさ
せねば、さすがにあけたてばさしいづる文のみえぬ
ひしと也　さひしきと也
こそ、さう〴〵しけれとおもひて、さてもきは〴〵
しかりける心かなといひてくらしつ、またの日あめ
甚也
いたうふる日までをともせねばむげに思ひたえにけ
りなどいひて、はしのかたにゐたるゆふぐれに、笠
待かれし心也
さしたるわらはの、もてきたるを、つねよりもとくあ
けてみれば、水ます雨のとあるを、いとおほくよみ出
古今かやうのはしくれを書
しつる歌どもよりもおかし　○まこもかるよどの河
しにや
水あめふれはつねよりことにまさるわが戀
雪ふるべくもみえずと也　寒つる空也　晴
たゞあしたはさしもあらずさえつる空のいとくらう
搔曇
かきくもりて、雪のかきくらしふるに、いとこゝろぼ
そく見いたすほどもなく、しろくつもりてなをいみ
隨身
じうふるに、ずいじんだちて、ほそやかにひゞしきお
家戸
のこの、からかささして、そばのかたなるいへのとよ
り入て、文をさしいれたるこそおかしけれ、ましてう

使の
ちほゝえむいとおかし、
端正の心也　威儀正しく見る
●きら〳〵しきもの　かゝある心也
大臣大將いづれも隨身をめしつれ御さき追せらるゝ也武官なればき
大將の御さきをひたる　○大將相當從三位唐名羽林
ら〳〵しかるべし
大將軍愚考大將職同大臣其位劣大臣
孔雀經の御讀經是より讀經御修法などの事をいふ也　○三世
佛母大孔雀明王義淨三藏譯三卷
法はずほう五大尊　○五大尊是五忿怒之曼荼羅金剛
界之圖也
秘藏記云不動尊黑色極忿怒也居盤石上幷在大火
炎如大劫火也云々　降三世　軍荼利　大威德
金剛夜叉　中央不動
裝官也
藏人の式部のざうの白馬の日、大路ねりたる
見物おほくてきら〳〵しき也
摺かりきぬ着る事きら〳〵しき也
御齋會左右の衞門佐すりきぬやりたる　○御齋會
公事根源云是は大極殿にて八日より十四日まで七
ケ日最勝王經を講せられて朝家を祈り申侍るなり
この經とりわけ國家を護持する功德あるによりて
としの初に講せらるゝにや　○延喜式四十六左衞
門式云御齋會凡正月講最勝王經所進衞士十五

人幷雜花一櫃ニ其種子稲五十束請ニ山城國ニ简備爲ニ十三荷ニ亦進ニ會所ニ凡正月講ニ最勝經ニ所進ニ梅柳八株ニ云々

（前にくはし）季の御讀經　熾盛光の御修法（シホ）　○熾盛光佛頂如來古德云是尊敎下令ニ日月星宿之光耀ニ天ト等上故放ニ熾盛光明ニ云々天變兵亂之時修レ之云々凡この法は山門四ヶの大秘法眞言一宗の深密也この佛の尊形は一身の毛孔（モウク）より光を散まし給ふ

（前にくはし）神のいたくなる折に、かんなり（雷陣）のぢんこそいみじうおそろしけれ、左右中將中少將などの御かうし（格子）のつら（面）に侍らひ給ふ、いとおかしげなれ、はてぬるをり大將おほせてのぼりをりとの給ふらむ、こんげんろくの御屏風こそおかしうおぼゆる名なれ　○坤元錄の山河などのさまを繪にかきし屏風也朗詠の覺明（コン）が註にも坤元錄の屏風の詩と所々に出たり異本近衞祿（ニロク）の屏風とあり近衞司の官人の叙爵を繪かける屏風ともいへり（イ漢書の御屏風）

かんなん宮の御屏風はおぼしくぞ聞えたる（又イ本ナ、シク也をとなしき心也）　月次の（年中行事を書たる也）御屏風もおかし　○舘娃宮ハ呉王夫差の西施を置し所也蘇州の硯（ケン）石山にあり西施故に名づけられし也そこにての榮花をかける也

かたたがへ（方違）などして夜ふかくかへる（筆すさび也）、さむき事いとわりなく（也）、おとがひ（頤）などもみなおちぬべきを、からう（辛勞也）してきつきて（我家に）、火桶引よせたるに、火のおほきにて、つゆくろみたる所なくめでたきを（をこりきりたる也）、こまかなるはいの中よりおこしいでたるこそいみじけれ、ものなどいひておこすこそにくけれ、されどめぐりにおきて、なかに火をあらせたるはよし、みな火をほかざまに（すみの上也）かきやり、すみをかさねをきたる、いたゞきに、火ども置たるがいとむつかし（あしきとの心也）（又別の事也）、雪いとたかくふりたるを、れいならずみかうしまいらせて（寒氣ゆへ格子おろしたる也）、すびつに火をこして、ものがたりなどしてあつまり侍らふに（女房ども）、少納言よ、香爐峰の雪はいかならんとおほせられければ（后宮の又白氏抄は一條の后の勅言とあり）（清少）　みかうしあげさせて、みすたかくまきあげたれば（かの詩の心ぞと心得給ひて也）わらはせ給ふ人々もみなさる事はしり、歌などにさへうたへど（朗詠する事也）おもひこそよらざりつれ　○香爐峰下新卜山

居草堂初成偶題東壁五首之内　日高睡足猶慵起小閣重衾不怕寒遺愛寺鐘欹枕聴香爐峰雪撥簾看下略

清少なほめて后宮にてはこの人ぞと也　又、の

〻をこの宮の人には、さるべきなゝめりといふ、陰陽

事也

師のもとなるわらはべこそいみじう物はしりたれ、

祓

はらへなどしに出たれば、祭文などよむ事、人はなを さいもんよむ事などはき

いと殺びしにそれ〳〵みたらぬさましきないふ也との〻けなどの絶入

こそきけ、そとたちはしりて、そゝき水もてかけさせ 主人

におちてに水そゝぐかしこき也例の法なしりて也

ともいはぬに、しありくさまのれいしり、いさゝかし

の詞ないれさせぬ也　さやうの人な也

うにものいはせぬこそうらやましけれ、さらむ人を

がなつかはんとこそおぼゆれ

三月ばかりものいみしに、かりそめなる人の家にい

きたれば、木どもなどはかばかしからぬ中に、柳とい 川楊といふも

ひてれいのやうになまめかしくはあらで葉ひろうみ

の也齊志付楊一名高皮木葉大於柳也

えて、にくげなるをあらぬもののなゝめりといへば、か

清少歌質の字

ゝるもあるなどいふに、「さかしらに柳のまゆのひろ

かしこげにといふ心也

春の面目なしと柳の葉のひろごりにくげなるをとがめて也

ごりて、はるのおもてをふする宿かな」とこそみ

て也

眉といふよりおもてとよみし也

是より又后宮の御せうそこの返しの事也

えしか、そのころまたおなじものいみしに、さやう

の所に出たるに二日といふひるつかた、いとゞつ

后宮のかたへ

れ〴〵まさりて、たゞいまも参ぬべきこゝちするほ

后宮の

どにしも、おほせごとのあれば、いとうれしくてみる

后宮の女房也　千載

あさみどりのかみに宰相のきみいとおかしくかき給

后宮の歌也

へり、「いかにしてすぎにしかたをすぐしけん、くら

にはくらしわふてふとあり

しわづらふきのふけふかな」となん、わたくしにはけ

宰相の自分の文に也

ふしもちとせのこゝちするを、暁にはとくとあり　とく参れ也　宰相

の君のたまはんだにおかしかるべきをましておほせ 后宮の

ごとのさまにはをろかならぬこゝちすれどけいせん かたじけなし

と申上るもをろかなりと也　清少返し　后宮の上にさへくらし

ことゝはおぼえぬこそ、「くものうへにくらしかねけ 宰相への

わび給ふな所がらとてくらしつるとの心也

る春の日を、所がらともながめつるかな」わたく

返事にはと也

しには、こよひのほども少将にやなり侍らんすらむ

深草の少将の世がたりなども〳〵へるに

や九十九夜をまちかねる心也后宮へ詞也御たはふれの給ふ也

とて暁に参たればきのふの返し、くらしかねけるこ

そいとにくし、いみじうそしりきとおほせらるゝ、

清少心也さやうの篠原もおもひわかりしと例のいひのこしたる詞也

いとわびしうまことにさる事も、

是も后宮より御せうそこありしものがたり也

清水にこもりたる比ひぐらしのいみしうなくをあは

后宮より

れときくに、わざと御つかひしてのたまはせたりし、

后宮の御歌

からのかみのあかきに「山ちかきいりあひのかねの

こゑごとに 清少を こふるこゝろのかずはしるらむもの
無減也これにます事なき也
を一こよなのながゐやとかゝせ給へる、かみなど
無禮也 式々の紙もなき心也とりあえず也 散花の花
のなめげならぬも、とり忘れたるたぐひにて、紫なる
びらなるべし
はちすのはなにかきて參らする、
シハスヘツカアマリヨカ 后宮にて 初夜
十二月廿四日、宮の御佛名の、そやの御導師きゝて、
聽衆の人也
いづる人はよなかもすぎぬらんかし、さとへも出、
もしはしのびたる所へも、夜のほどいづるにもあれ、
男女同車のさま也
あひのりたる道のほどこそおかしけれ、日ごろふり
佛名のあくる日也
たる雪のけさはやみて風などのいたうふきつれば、
垂水也軒のつらゝ也 地はむらぎえ
たるひのいみじうしたる、つちなどこそ、むら〳〵
しさま也 雪に
くろけれ、屋のうへはたゞをしなべてしろきに、あ
かほなかくすやうにいやしき家
やしきしづのやも雪にみなおもがくしして、あり明の
を雪にかくしたる也 雪 月の映じたるは銀なうすく
月のくまなきに、いみじうおかし、かねなどをしへぎ
押片たるやうなりと也 水精これもつらゝのくきのたとへ也
たるやうに、すいしやうのくぎなと、いにまほしき
軒に
やうにて、ながくみじかく、ことさらかけわたしたる
とみえて、いふにもあまりて、めでたきたるひに、
くるまのすだれのドにすそごのきぬいゝろをいふ也
したすだれもかけぬくるまの、すだれをたかくあげ

女の裝束也
たれば、おくまでさし入たる月に、うすゝろ紅梅し
紅の濃
ろきなど七八ばかりきたるうへに、こききぬのいと
光 映
あざやかなるつやなど月にはへておかしう見ゆるか
堅 文
たはらに、ゑびそめのかたもんのさしぬき、白ききぬ
衣色の事みな前にくはし考へし
どもあまたやまぶき紅なときこぼして、なほしのい
脱 垂
としろき引ときたればぬぎたれられて、いみじうこ
闕
ぼれ出たり、さしぬきのかたつかたは、とじきみの
外也
とに、ふみいだされたるなど、みちに人のあひたらば、
月のくるまの中へさし入しにはつ
おかしとみつべし、月かげのはしたなさに（車の）うし
かしき心也 中な
ろさまへすべり入たるを引よせ、あらはになされて
男いざれて也
わらふもおかし、りん〳〵として氷しけりといふ詩
誦也
を、かへす〴〵ずんじておはするは、いみじうおかし
ヤウヨク
うて、夜一よもありかまほしきに、いく所のちかくな
リントンテ
るもくちおし ○長安八月十五日夜賦公乘億 秦甸
之一千里凛々氷鋪漢家三十六宮澄々粉飾朗詠覺明
註凛々者氷貌也
里亭へ
宮づかへする人々の、出あつまりて、をのがじゝ、
その家のあるじにて聞こそおかしけれ、家ひろくき

よげにて しんぞく（親族也一門と相すむはいふに不及と也）はさら也 たゞうちかたらひなど（たゞの友人なすへてかたりたきと也）する人々は、宮づかへ人かたつかたにすへて（居て也）あらまほしけれさるべき折は、所にあつまりゐて、ものがたりし人の、よみたる歌、なにくれとかたりあはせ（なにのかのといひあはすん也）、人のふみなどもてくる、もろ共に見 返事かき、またむつましうくる人も（友だちにておもひ人にても也）、あるはきよげに（座 なかまへて也） うちしつらひていれ（かの見まひたる人の也）、あめなどふりてえかへらぬも、おかしうもてなし、まいらむ折は（何 宮づかへ人の主君の方へ也 主君へ参る用意の物などあ）、そのこと見いれておもはんさまにして出したてなどせはや（つかひよく仕立やりたきとの詞成べし 句きるべし）、よきん おはします御ありさまなどいとゆかしきぞけしからぬにやあらむ（宮仕人の内に参り付て上つかたのさまゆかしくきかまほしき也）

枕草紙旁註巻十一

●見ならひするもの

あくび（欠） ちごとも（されば欲が人事也 生不怪） なまけしからぬゑせもの（曲者よしなきものゝ高貴の人のまねするふ事也）

●うちとくまじきもの

あしと人にいはるゝ人（さやうの人は也世上の人の）、さるはよことしられたるよりは、うらなくぞ見ゆる（うらおもてなくみえて内心のおしき也）、舟のみち、日のうらゝかなるに、うみのおもてのいみじうのどかに、あさ緑のうちたるを引わたしたるやうにみえて（きぬのうちたるをへしやうなるゝ也）、いさゝかおそろしきけしきもなき、わかき女の あこめはかま（前 くはし）きたる、侍のものゝ わかやかなるなど、もろ共に櫓といふものをして、歌をいみじうたひたるはいとおかしうやんごとなき人（都の人也）にも見せ奉らまほしうおもひいくに、風いたうふき（是よりうちとけられぬ事をいふ）、うみのおもてのたゞあれにあしうなるに、ものもおぼえず、とまる（泊）べき所にこぎつくるほど、舟になみのかけたるさまなどは、さは（それほど）かりなでか（どに也 和の字）りつる海ともみえずかし、おもへば舟にのりてありく人ばかりゆゝしき（いましましき也）ものこそなけれ、よ

（舟の事）（大かたの）ろしきふかさにてだに、さまはかなきものにのりて
こぎ行べきものにぞあらぬや、ましてそこゐ（底意）もしら（ちひろ八尺曰尋それ千尋も合たる心也）
ず千尋などあらむにものをいとおほくつみ（積）いれたれ
ば、水ぎは（渥也）ゝたゞ一尺ばかりだになきに、げすども
のいさゝか（荒也）おそろしともおもひたらず、はしりあり（舟ばたを）
き、つゆあらくもせばしづみやせんとおもふに、お
ほきなる松の木などの二三尺ばかりにて、まろなる
を五六（イツヽムツ）ほう〳〵（放々）と投いれなどするこそいみじけれ、
やかた（篷庫 和名の字也）といふものゝかたにぞおはす（主人は）、されどおくな
るはいさゝかたのもし、はしにたてるものどもこそ
めくるゝ（眩 目のくるゝ也）こゝちすれ、はや（早緒櫓ヲ押ときにつくるもの也）をつけて、のどかにすげ（縮又）
たるもの（縋とも）ゝよはげ（弱）さよ、たえなば（早緒きれたらば也）なにゝかはあらむ、
ふと（不圖）落入なむを、それ（句）をだに（そのたのむ早緒もほそき心也）いみじうふとくなども
あらず、わが（少納言）のりたるは、きよげにつくりもかう（帽額）のす（透）
きかげ（影）、つま戸格子（やかた舟の）あげなどして、されどひとしう（水ぎは一尺ほど足の入たる舟とひとしうおもくはあらずと也）お
もげになどもあらねば、たゞ家の（舟のこと也）ちいさきにてあり、
こと舟（他の舟也）見やるこそいみじけれ、遠きはまことにさゝ
の葉をつくりてうちちらしたるやうにぞいとよう似

たる、とまりたる所にて、舟ごとに火ともしたるは、
またおかしう見ゆ、はし舟（大舟につくる舟也）とつけて、いみじうちいさ
きにのりてこぎありく、つとめて（晨）などいとあはれな
り、あとのしらなみは（世中はなにゝたとへんの歌を思ひよりし詞也）、まことにこそきえもてゆけ、よ
ろしき人はのりてありくまじき事とこそ、猶おぼゆ
れ、かち（陸）路もまたいとおそろし、されどそれは（地のうへなれば也）、いか（白）
にも〳〵つちにつきたればいとたのもしと思ふにあ
まのかつき（水部潜）したるは、うきわざ（業）也、こしにつきたるも
の（縄の事也）たえなばいかゞせんとなむ、おのこだにせばさて
もありぬべきものを、女（あま也少繰の字）はおぼろけのこゝろならじ、
おのこはのりて歌なんどうちうたひて、このたぐな（たぐ縄）（たぐるなはと云 女を海に入て男）
は（心也）をうみにうけありく、いとあやうく、うしろめた
くはあらぬや（か心もとなからぬかは也）、あまものぼらむとてはそのなはをな
ん（海中にて）ひく、（男の）とりまどひくり（繰）いる（入）ゝさまぞことはりな
るや、舟のはたを、（なさへてと入べしあまの息）はなちたる、きなとこそ、まこ
とにたゞみる人だに、しほたるゝに（ながるゝに也海の縁語）、おとし入て、
たゞよひ（漂）ありく、おのこは目もあやに（おどろかるゝ也）あさまし、さら

世にあさましきあまのわざたいふ也
に人のおもひかくべきわざにもあらぬ事にこそあゝ
めれ、
別段也あまの男だに恩愛はしるに右衛門の時の不孝ないふて心つと
右衛門のそうなるもの、ゑせおやをもたりて、人の
けられぬなをいふ也　としよりかたち見にくき親なも
面目なきやうに思ひしが
みるにおもてぶせなと見ぐるしうおもひけるが、伊
ちて也　親な
よの國よりのぼるとて、うみにおとしいれてけるを、
人のこゝろうかりあさましかりけるほどに、七月十
かのなき親に
五日盆を奉るとて、いそぐを見給ひて　○于蘭盆經
公事根源に
云以二百味飲食一安二于蘭盆中一施二十方自恣僧一云々
天平五年七月に初て于蘭盆を大膳職にそなふとみ
えぬ　むかし齊明天皇の時飛鳥寺にして須彌山の
かたちを作り于蘭盆をもうけしと也
道命阿闍梨　○右大將道綱の子天王寺の別當云々
後撰より詞花千載等すべて十代集の作者也
此詞續詞花集にも入　此の字に子の心をふくみて也不孝の心
わたつうみに親をしいれてこのぬしのぼんする見る
をひるがへし盆供なするを　あは
ぞあはれなりける」とよみ給ひけるこそ、いとおか
れみて也
しけれ
前の不孝に對して此一段の嗟勝な書たり　六波羅にや　父源
また小野殿の母うへこそは　普門寺といふ所に、八講
の能有ゞために法花八軸を講ずる也
しけるきゝて、またの日小野殿に人々あつまりてあ
翌日也

管絃の　詩文
そひし文　くりけるに　○小野殿は右大將道綱の事
名は昭子
也母うへは源の能有公の女なり
佛につかふまつる事也　今日の法の面白さ
薪こることはきのふにつきにしを、けふはをのゝえ
に斧の柄のくつるまでもありたきと也
こゝにくたさむ」とよみ給ひけんこそめでたけれ、
地の詞也當分の事に打聞てしるしとゞめもせぬとのこゝろ也
こともとつうちきゝになりぬるなゝめり
傳削あり　伊豆内親王也桓武天皇のむすめ也
又なりひらが母のみこのいよゝみまくとのたまへ
母上の文な
る、いみじう哀におかし、引あけて見たりけんこそ
古今に入　下官なれ共也
おもひやらるれ　○むかしおとこ有けり身はいやし
ながら母なん宮なりけるその母なが岡といふ所
山城也
にすみ給ひけり京にみやづかへしければまうづと
ひとり子のこと也
しけれどしば〳〵えまうでずひとつごにさへあり
ければいとかなしうし給ひけりさるにしはすばか
りにとみの事とて御文ありおどろきてみれば歌あ
り「おいぬればさらぬわかれのありといへばいよ
〳〵見まくほしき君かな」
別段也是も心とけられぬ事也　草紙也
おかしとおもひし事なとを、さうしにかきて置たる
吟詠する也　心ふかき歌な
にげすのうちうたひたるこそ心うけれ。よみにもよ・
たゞむざとよむ事也
むかし、よろしきおとこを、げすの女のほめていみじ

その男の心の
げすには
うなつかしうこそおはすれなどいへば、やがておも
ひおとされぬべし、そしらるゝはなか〳〵よし、げす
男はまして也
にほめらるゝは、女だにわろし、またほむるまゝに、
かた言まじりにほめらるゝは猶かなしく心とけられぬ也
いひそこなひつるものをば、
伊周公也　禁中へ参内也　恋文のものがたり也
大納言殿参給ひて、文の事など奏し給ふに、れいの
ひとりふたりとよむべ
夜いたうふけぬれば御前なる人々、一二人づゝうせ
し
て、御屛風木丁のうしろなどに、みなかくれふしぬれ
清少　こらへて也
ば、たゞひとりになりて、ねぶたきを念じて侍らふ
漏刻の司が申上ル也　夜あけしと清少の申也
に、うしよつと奏するなり、あけ侍りぬなりとひとり
天子の御ありさま也
ごつは、大納言殿いまさらにおほとのごもりおはし
大納言殿ハれ給ふ體もなしと也　あけぬ
ますよとて、ぬべきものにもおぼしたらぬを、うた
ろと清少が申たる事の後悔也
てなにしに申つらむと思へども、また人のあらばこ
ぎれぬと也　外にたれもなければま
そはまぎれもせめ、うへの御まへのはしらによりか
る詞也　大納言殿の后宮へ申上
ゝりて、すこしねぶらせ給へるを、かれを見たてまつ
后宮の御詞
り給へ、いまは明ぬるにかく、おほとのごもるべき事
天子の　前にくはし
かはと申させ給ふ、げになど宮も御まへにも、わら
ひ申させ給ふもしらせ給はぬほどに、おさめがわら

童にたさめがつこびらう也　童になつれ行むとて也
はの鶏をとらへてもちて、あす里へいかむといひて、
鶏な
かくし置たりけるが、いかゞしけん、いぬの見つけ
鶏の
てをひければ、廊のさきににげいきて、おそろしう
天子の眠も
なきのゝしるに、みな人、おきなどしぬ也、うへも
さめ給ふ也
たちおどろかれおはしまして、いかにありつるぞと
たづねさせ給ふに、大納言殿の聲明王の眠をおどろ
かすといふ詩を、たかう打出し給へる、めでたうおか
清少この詩の吟詠に感じて也
しきに、ひとりねぶたかりつる目も、いとおほきにな
朗詠禁中の部にあり
りぬ　〔雞人暁唱聲驚二明王之眠一鳧鐘夜鳴響徹二暗天
之聴一〕都良香
いみじき折の事かなと、宮も興ぜさせ給ふ、猶かゝる
其翌日也
事こそめでたけれ、またの日は、よるのおとゞにいら
清少の　大納言
せ給ひぬ、よなかばかりに廊に出て、人よべは、おる
殿の清少への御詞也　清少の装束の事也
ゝか、われをくらむとの給へば、裳からきぬは、屛風
何　大納
にうちかけていくに、月のいみじくあかくて、なを
言殿の装束也
しのいとしろう見ゆるに、さしぬきのなからふみく
少納言の袖ヲ大納言殿の倒るなとのたまふ也つれて也
ゝまれて、袖をひかへてたふるなといひて、ゐておは
ころぶなとのたまふ也

大納言の吟也
するまゝに、遊子猶殘りの月に行はとずんじ給へる
頭弁暁の題
またいみじうめでたし、〇佳人盡飾ニ於晨粧ニ魏宮鐘
大納言殿の
少納言が
動ニ遊子猶行ニ殘月ニ函谷鷄鳴賓島
かやうの事のでまじふとて、わらひ給へど、いかでか
いかでめでざらんとの詞也
闈也
乳母
猶いとおかしきものをば、僧都の君の御めのとみく
しげどのとこそ聞えめ、まゝのつぼねにゐたれば
〇東鑑第二治承五年閏二月七日癸丑武衛御誕生之
御被レ召ニ御乳母之青女ニ名今日者尼號ニ摩々ニ清少以後の事なれ共引證
かの男の詞也
おとこ、ある夜じきのもとちかく寄きて、からいめ
このうさ目をたれにかたらん
を見侍らひつる、たれにかはうれひ申侍らはんとて
と也
なん。なきぬばかりのけしきにていふ、なに事ぞと
かりそめに也おとこの詞也
かの
とへば、あからさまにものへまかりたりしまに、き
おとこの家也
寄居虫
たなく侍る所のやけ侍りにしかば、日比はがうなの
ちいさき貝の中すむ虫也ほかの貝に出されて人の家をかり住事也馬寮也
やうに、しりをさしいれてなんさぶらふ、むまづかさ
所は左右宮城内談天門掖北
火事の
御秣
のみまくさつみて侍りける家よりなん、出まうでき
隣也
夜晔也寝所の事也
て侍る也たゞかきをへだてゝ侍れば、よどのにねて侍
このおとこの子也
りける、わらはべもほとゞやけ侍りぬべくてなん、

取出さぬと也
いさゝかものもとうで侍らずなどいひをる、みくし
げどの聞給ひて、いみじうわらひ給ふ
清少の歌
みまくさをもやすばかりの春の日に、よどのさへ
まぐさの縁に淀野を
立入し也
などのこらざるらん
と書てこれをとらせたまへとてなげやれば、わらひ
いつれも
のゝしりて、そこらおはする人の家のやけたりとぞ
かの男にたはぶれて也かの男のこと
歌を
いとおしがりて給ふめるとてとらせたれば、なに
男の詞
短冊
の御たんざくにか侍らん、ものいくらばかりにかと
合力かと思ひて也
とらする人の詞也
いへば、まづよめかしといふ、いかでかかた目もあ
この男の無筆
の事也片目さへあかぬと也
きつかうまつらではといへば、人にもみせよ、た
頓也上の急てめせば也
ゞいまめせば、とみにてうへに參るぞ、さばかりめで
それほど也
たきものをえては、なにをか思ふとて、みなわらひま
是より后宮にての批判の詞也かのおとこ
どひてのぼりぬれば、人にや見せつらむ、里にいき
后宮の
摩々
啓
て、いかにはらだゝんなど御まへに參て、まゝのけ
かくの
いすれば、またわらひさはぐ、おまへにもなどかく
ことくわらふぞと又わらふをわらはせ給ふ也
ものぐるをしからむとてわらはせ給ふ、
別時也繼母繼子のものがたり也
おとこは、めおやなくなりて、おやひとりあり、い
繼

母への孝行な也
まゝ母の事
みじく思へども、こゝろわづらはしきさたのかた出
まゝ子なへたつる也不レ孝と書へし裝束
きてのちは、うちにもいれられず、さうぞくの事は
もとの母かたの人のもとへやりて也
めのとまた故うへ人どもなどしてせさす、にしひが
対也　客人もはぢぬ儀也
しのたいのほどに、まらふとにもいとおかしう、屛
住居のよき事也　傍輩つ
風章子の忌も、見所ありて、すまひたり、殿上のまじ
きあひの事也　天子
らひのほどくちおしからず、人々もおもひたり、う
の御意にも入て也　管絃也
へにも御けしきよくて、つねにめしつゝ、御あそびな
数也あい手の心也
どのかたきには　おぼしめしたるに、なをつねに、
外ざまはよげれども繼母にへだてらるゝなきのどくに思ふ也何
も　なげかしう、よの中心にあはぬこゝちして、す
好色也　繼母にうとく上の女房衆へもの事たのむ故人のうたが
きぐしきこゝろぞ、かたはなるまであるべき、上達
ひもあるほど也といふ心也　繼子の妹也
部のまたなきにもてかしづかれたる、いもうと一人
上達部の妻になりし妹の所へ行てなぐさむと也
あり、おもふ事をもうちかたらひなぐさめ所なりけ
又別の事也
る。ある女房の、遠江のかみの子なる人をかたらひ
女房也　この遠江の守の子の
てあるが、おなじ宮人を、しのびてかたらふと聞て、
二心也　前の女の　恨文也
うらみければ、おやなどもかけてちかはせ給ふ、い
おとこの詞也
みじきそらごとなり、ゆめにだにみずとなんいふは、
かの女房の清少へのものがたり也
いかゞはいふべきといひしに、

女房の歌のやうに清少のかはりてよみし也　遠江の名所のは
ちかへきみとをたふみの神かけて、むげにはま
しのびて少ははしくれを見たりと也　さあるまじき所にて人にあ
なのはし見ざりきや」びんなき所にて、人にものを
ひし也　女のむなさはぎ也
いひけるに、むねのいみじうはしりけるに、などかく
返事に也　又男の胸さはぐともみるべし
はあるといひけるいらへに、
清少の又代歌也逢坂をあふにそへて走井の水を見つくるといひ懸た
あふさかはむねのみつねにはしり井の、見つくる
りあふ時はけ付る人あらんとむなさはさすと也
人やあらむとおもへば」　まことや、　やがて君くだ
國へかのおとこの　遠江の
るといひける人に、
又代歌也我事は思召さればさげ給ふ事も簡々よりさかざりしと也
おもひだにかゝらぬ山のさせもぐさ、たれかいぶき
うゝみにくゆる心をふくみし也
には異本の文あれ共傳本の儘也
の里とつげしぞ
是まで、みなうちとくまじき心也
上衣也
●女のうはぎは
經紫緯白　經赤緯紫　萌黄前に表し　表白裏赤冬春　十一月より十二月
うす色　ゑびそめ　もえぎ　さくら　紅梅　すべて
色のたぐひ
●からぎぬは
經紫緯赤　表薄紫裏青　前にくはし　表黄裏青し
あか色　ふぢ　なつはふたあゐ　あきはかれ野
からぎぬの時かならずきるもの也
●裳は
大なみのごとく成織もの也　うは裳也大海とおなじ様もの也
おほうみ　しびら

前にくはし童女の裝束也
●かざみは　同
前に有
春はつゝじ　さくら　夏は青くち葉　表青丹のくゝみありうら青し　くちば　前にあり
紋を付織殖也
●おりものは
地ゝ色也　同
むらさき　しろき　地の色に織もんの事也
もへぎにかしはおりたる　紅梅
そのまゝことのほか見さめする也
もよけれどもなを見ざめこよなし
あやの地もんをいふ也
地もん也　●あやのもんは
あふひ　かたばみ　綾地也　あられち　綾地也うきもんの事也
かた一方へぬきたれし心にや
夏うすもののかたつかたの、ゆだけきたる人こそに
一方のぬきさげしにひか
くけれど、あまたかさねきたればひかれてきにくし、
れて也
わたなどあつきは、むねなどもきれて、いと見ぐるし、
むれのあはぬ也
夏冬のそめ色まじゆる事也
まぜてきるべきものにはあらず、猶むかしよりさま
ぬきたれず兩方のゆきのそろひたる也
よくきたる紐よけれ、左右のゆだけなるはよし、それ
所　狭　女のみにあ
ゑ猶女房の裝束にては、ところせかゝめり、おのこの
こにすと也
うまたかさぬるも、かたはかまおもくぞあらむ、○
行基の歌
猛爾太が修行に出しかた袴われぞぬひしかそのか
たばかま　裝束には上に絹の袴　下に布袴　二重
きる故片はかまと云々　又裝束の袴紐一筋にて前

後つらぬき傍にてむすぶ故傍袴と云々
むかしきよらなるさうぞくのおりもの、うすものなゝ
かたつかたをにくみなげくと也
どは、いまはみなさこそあゝめれ、いまやうにまたさま
今やうの衣服を着給はんは也
よき人のたまはん、いとびんなきものぞかし、かた
式部卿の宮の御すなどは、いまやうの衣服に見
ちよき公達の、彈正弼にておはするいと見苦し　○
ぐるしと也
勘物云源賴定一品式部卿爲平親王二男母左大臣高
明公女長德四年十月十五日任ニ右中將ニ元彈正大弼
〇彈正弼一人職員令云掌下巡ニ察内外一糺中彈非違上
宮の中將などのくちおしかりしかな
●病は
むねのけ　あしのけ　たゞそこはかとなくものくは
ぬ　〇胸者肺之位也　十四經發揮曰手大陰肺經起ニ
中焦上膈屬肺肺者附ニ著於背之上第三椎一　脚氣大
成論ニ脚氣病雖ニ總之曰レ氣古今所治實爲ニ多端一故千
金論ニ脚氣皆由レ感ニ風毒ニ所レ致也　經曰地之風寒暑
濕皆作ニ蒸氣一足常履レ之遂成ニ脚氣一
身のたけ
十八九ばかりの人、かみいとうるはしくて、たけば
ほど也
かりすそふさやかなるが、いとよくこえて、いみじう

最白 愛敬
いろしろうかほあいぎやうづきよしとみゆるが、歯
病惑 額髪 ひたくと也
をいみじくやみまどひて、ひたいがみもしとゝにな
濡
きぬらし、かみのみだれかゝるもしらずおもてあか
押 居
くてをさへゐたるこそおかしけれ　○内經　歯者腎
之餘氣也大成論曰歯乃骨之餘氣骨乃腎之所レ主呼
吸之戸門也
是よりむねやむものゝさまの也
八月ばかりしろきひとへなよらかなるはかま、よき
れたる
ほどにて、しをんのきぬの、いとあざやかなるを引か
うへに
けて、むねいみじうやめば、友だちの女房だちなど、
いつもかやう
かはるがはるきつゝ、いといとをしきわざかな、例もか
に也 事もなくおほやうに問也 むねや
くしやみ給ふなど、ことなしひにとふ人もあり、こゝ
む女な思ふおとこ也
ろかけたる人は、まことにいみじと思ひなげき、人
ちぎる中の事也 病人のそばへ延慮し
しれぬ中などは、ましてよるにもちかく
て也 又是より別
えよらず思ひなげきたるこそおかしけれ、いとうる
の事也 ものゝけ也
はしくながきかみを引ゆひてものつくとておきあが
りたるけしきもいと心ぐるしくらうたげ也うへも聞
貞念に經よむ也
しめして、御どきやうの僧のこゑよき給はせたれば、
見舞の女房也
とぶらひ人どももあまた見えきたりて、經きゝなど

はれがましき所也 祈念法師の
するもかくれなきに、目をくばりつゝよみゐたるこ
祈念法師の女中へ心をかくれば也
そ、つみやうらむとおぼゆれ

●いひにくきもの

口状の次第を始
人のせうそこおほせごとのおほかるを、ついでのま
終いふ事也 成長
ゝにはじめよりおくまでいといひにくし、返事また
の子也 好色の事也 親
申にくし、はづかしき人のものおこせたる返事、お
おもはずなる
となになりたる子の、おもはずなる事聞つけたるま
の前也 いけんはいひがたしと也 黒色亦色冬に相應也 みどり色夏
へにてはいといひにくし　四位五位は冬　六位はな
相應也 その品々の位のかはらぬがよしと也その色あひなど
つ、とのゐすがたなどもしなこそおとこも女もあら
のちがひしなあしきとてもいひがたしと也
まはしき事なゝめれ　○令諸王禮服下云二位以下五位
以上並淺紫衣又諸臣禮服下云三位以上淺紫衣四位
深緋衣五位淺緋衣六位緑衣　しかれ共中古以來近
代は三位以上紫或は黒し四位は黒五位は赤六位は
衣服の假名たるよしあしの事也
青しいづれも夏はひとへにし冬は裏あり
人の妻の事
家の君にてあるにもたれかはよしあしをさだむる、た
ちの上にてもあるべし
それだにものの見しりたるつかひ人行て、をのづから
家ぬしのやうすを批判せんと也
いふべかゝめれ、ましてまじらひする人はいとこよな
人の見ぐるしきたとへ也
し、ねこのうちにおりたるやうにて、人のかほにとり

つきてよしと見ゆる所は、目ごとにみれどあなおか
しと見ゆる、繪などはあまたたび見つれば目もたゝ（又かされてのたとへ也）
ずかし、近くたてる屏風の繪などはいとめでたけれ（又たと）
ど、見もやらず人のかほかはおかしうこそあれ、にく
（への事也）げなる調度の中にも、ひとつづゝよき所の、常にまほ
らるゝ、にくきもさこそはあらめとまほらるゝこそ
内匠のものくふこそいとあやしけれ、しんでんをた（寢殿）
（封也）てゝひがしのたいたちたるやをつくるとて、内匠ど
（常ならぬ人也）もゐなみてものくふを、ひがしおもてにいでゐてみ（清少の）
（汁物也）れば、まづもてくるやをそきとしるものとりてみな
（さいのいれしうつはものをすへそろへぬうちに一）のみて、かはらけはついすつべきに、あはせをみなく
（方あけきいだひろびくふ體也實の食は不用にくはぬかと思へばみな）ひつればおものはふようなゝめりとみるほどに、やが
（くふ心也みなくひうせし也）てこそうせにしか、三四尺ゐたりしもの、みなさせ（さやうにしたる也）
（番匠は皆さやうのならはしと也）しかば内匠のさるなゝめりと思ふ也、あなもたいなの（あら正體なやといふ心也）
ことどもや、
（たゞの雜談也）ものがたりをもせよ、むかしものがたりもせよ、さか（かしこげ）
（にそばから返答する事也）（他のものゝたりの邪魔にする事也）しらにいらへうちして、こと人どものいひまぎらはす

人いとにくし、ある所に中の君とかやいひける人の（女房也二ばんめのむすめ也）
もとに、公達にはあらねども、その心いたくすきた（攝家の御子にてもかくれ人也）（好色のこゝろ深きといふ）
（はれし人也）るものにいはれ、こゝろばせなどある人の、九月ば
かりにいきて、有明の月のいみじうてりておもしろ
き名殘は思ひ出らむと、ことの葉をつくしていへる（時の風景ともいひてかきくどく體也）
に、いまはいぬらんと遠く見をくるほどに、えいは（女の）（おとこの）
（思ふ事もいはず怨じうらむる心也）せえむずるほど也、いづるやうにみせて、立かへりた（おとこの女をしたふさま也）
てじとみあひたるかげにそひたちて、猶行やらぬや（おとこの）
（中の君に）うに、いひしらせんと思ふに、有明の月のありつゝも
とうちいひてさしのぞきたる　〇九月のあり明の（新拾遺集の三）
月のありつゝもきみしきまさば待こそはせめ
（月影の女の頭にはさしいらで五寸ばかりこなたまでさしたる體也避）かみのかしらにもよりこず五寸計さかりて火とぼし
（て也遠さかりての心也）たゞやうなる月の光をおぼされて、おどろかさるゝ（夜もあけけるかと）
（おとろく體也）心ちしければ、やをら立出にけりとこそかたりしか、（清少にかのおとこ）
（かたりし也）（イニ參まかでするにはとあり）女房のまかり出參する、人の車をかりたれば、心よそ（かす人の）
（用意の心也）ひしたるにほに、うちうちいひてかしたるに、牛かひ（いつもの主の時とちかひうしなしかる心也）
わらはの例のしうよりもしもにうちいひて、いたう

くるまぞひのおと
はしりうつも、あなうたてとおぼゆかし、おのこども
こ也
なとのむつかしげにいかで夜ふけぬ先においてて歸な
急用の時も
んといふは、猶しのぶこゝろをしはかられてとみの
いひやりにくしと也
事なりとまたいひふれん共おぼへず、なりとをの朝
少もさや
臣の車のみや、よなかあかつきわかず人の乘に聊か
うのふしやうなる事なしと也
下人を
さる事なかりけむ、よくぞをしへならはしたりしか
○高階氏系圖ニ　天武天皇の末從五位上左衛門權佐
トシタヾ
敏忠の息美濃守正四位下春宮亮業遠朝臣峯緒より
スケナリトヲ
七代の孫也
みちにあひたりける女車の深き所におとしいれて、
なりとをのうち
えひきあげでうしかひはらだちければ、わがずゞし
のものにいひ付て也
わかうしかひはまして常々飛けんと也
てうたせさへしければ、まして心のまゝにいましめ
別の事也
おきたるにみえたり、すき〴〵しくてひとりずみす
る人の、よるはいづらに有つらん、曉に歸てやがてお
後朝の文かくさま
きたる、またねぶたげなるけしきなれどすゞりとり
いふ事もなしとてざつ
也
よせ、すみこまやかにをしすりて、ことなしひにまか
ともかゝぬ心ばへ也
うちひろげとりつくろは
せてなどはあらず、心とゞめてかくまひろげすがた
ぬさま也
おかしうみゆ、しらきぬどものうへに、やまぶき紅な

衣のひだどもなど見ゆる
どをぞきたる、しろきひとへのいたくしぼみたるを、
文かくさま也
文を
しのぶ體也
うちまほりつゝかきたてゝまへなる人にもとらせ
ず、わざとたちて、小舍人わらはのつぎ〴〵しきを、
小舍人の文ちいに
身近く呼よせてうちさゝめきて、いぬるのちもひさ
しあと也
文かきしやうもしらせぬ心也
しくながめて、經のさるべき所々などしのびやかに
あしたの體也
くちずさびにしゐたり、おくのかたに御手水か
文机也
ゆなどして、そゝのかせば、あゆみ入てふづくゑにを
書物也
下にきぬ
しかゝりて、ふみをぞみる、おもしろかりける所々
もかされずに也
常は下に
はうちずんじたるにいとおかし、手あらひてなをし
ばかりうちきてろくをぞ空によむ　○禪祿の須か
きぬをかさぬれ共也
但法花經六卷目か如來壽量品第十六なるべし
文やりし所
まことにいとたうときほどに、近き所なるべし、あ
使のかへりしやうなけしきにてしらする也
りつるつかひうちけしきばめば、ふとよみさして返
事に心いるこそいとをしけれ
又別の事也
好色の人也
直衣
きよげなるわかき人のなをしも、うへのきぬも、か
袍
狩衣
りぎぬもいとよくて、きぬがちに、袖ぐちあつくみえ
さる所へ
たるが、馬にのりていくまゝに、ともなるおのこ、た

（主人のおほせを馬上なればみる／＼返ん書をとるにものいひにくきさま也）てぶみを目を空にてとりたるこそおかしけれ

（又別の事也）まへの木だちたかう庭ひろき家の、東西のかうしどもあげわたしたれば、すゞしげにすきてみゆるに、（夏のさま也）もやの四尺の几丁たて、まへにわらうだ（圓座也）を置て、三十（みそぢ）ばかりの僧のいとにくからぬがうすずみの衣うすものゝけさなど、いとあざやかにうちさうぞきて、かうぞめのあふぎつかひ、千手だらにによみゐたり、（ものゝけの祈によむ也）

○千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經一卷その中の陀羅尼は今眞言家に聲明とする也

ものゝけにいたうなやめば、うつすべき人（よりましに也）とて、おほきやかなるわらはの、かみなどうるはしき、すゞしのひとへあざやかなる袴ながくいざりいでゝ（膝行二字）よこさま（かのより）にたてる三尺の木丁の前にゐたれば、とざま（外也）にひねりのきて（ましのかたへかの祈念僧の見むくさま也）いとほそやかににほやかなるとこ（獨鈷）をとらせて、（チカ／＼とよりましをすがす心也）をゝと目うちひさきて（目を見はりて也）よむほそやかにもいとたうとし、けせう（顯證也外さまの女房たち也）の女房あまたゐて、つとひまもらへたり、ひさしくもあらでふるひいでぬれば、（間もなくよりましのふるふ體也）もとの心うしなひて、（行者も本心を失て也）おこなふまゝにしたがひ給へ、こほう（護法）もげにたうとし、せうとの（ものゝけになやむものゝ兄の事也）うちぎしたるほそやかなる冠者ども（往也前にくはし）のうしろにゐて、（冠者なり）うちわするもあり、（かの僧をうちはにてあふく也）みなたうとがり、てあつまりたるも、（よりましの事）れいの心ならばいかにまどはん、（よりましの心也）みづからはくるしからぬなどしりながら、いみじうわびなきたるさまの心ぐるしさを、つき人のしりつ人（靈にわつらふ人のしる人也）などは、らうたく覺えて、（よりましを）木丁のもと近くゐて衣ひきつくろひなどするほどに、よろしとて（靈氣さりて快氣也）御ゆなどきたおもてにとりつぐ程も、わかき人々は（雖未たるといへども猶）こゝろもとなし（心もとなしと也）

○禁秘抄云早旦供㆓御湯㆒主殿官人奉行釜殿進㆑湯須臾志女官二人取傳藏人爲㆓鳴絃㆒候㆓戸外㆒内侍申㆓其由㆒御盥一桶一ツ内侍候㆓御堀㆒典侍或上﨟女房進㆓御湯帷㆒奉㆓河藥㆒次典侍取㆓河藥器㆒拋㆑板于㆑時藏人鳴絃主殿官人稱㆑名主殿助藏人候之時或稱㆑名是毎日毎度事也○又御手水條云凡主上御座不㆑可㆑向㆑西之由見㆓江記㆒御手水可㆑向㆑北云々

盤（おもゆい膝也）ばんもひきさげながら、いそぎてくるや、ひとへなと（靈に煩ふ女の
さま也）きよげに、うす色のもなどなへかゝりてはあらず、い
ときよげなり、さるのときにぞいみじうことはりい
（鎮氣降伏して立去べきよしを也）はせなどして。ゆるして木丁（ものゝけのつきし女房木丁の内）のうらにとこそ思ひつ
（かと思ひしと也）れ、おさましうも出にけるかな、いかなる事ありつら
んとはづかしがりて、かみをふりかけて（彌かの僧加持して也）すべりいり
ぬれば、しばしとゞめてかぢすこしして、いかにさは
やかにて（僧の詞）り給へやとてうちゑみたるもはづかしげな
り。しばし侍らふべきを（退出する也）時のほどにも成侍りぬべけ
れば、まかり申ていづるを（菓飯のたぐひのものにや未詳）ほうちはうとうまいらせ
んなどとゞむるを、いみじういそげば、所につけたる（僧にいふ）
（詞也）上らうと思しき人の、すのもと（すだれの下也）にいざり出て、いとう
れしくたちよらせ給へりつるしるしに、いとたえか（ものゝけの堪がた
きに也）たく思ひ給へられつるを、（ものゝけのとだえてしるしある也）たゞいまをこたるやうに
侍れば、かへすぐ＼なんよろこびきこえさする、あす
ゝ御暇（觀音也）のひまにはものせさせ給へ（たちより給へと也）などいひつゝ、（句）
いとしうねき御ものゝけに侍るめるを、たゆませ給（ゆだんなはよ）
（からむ也）はざらむよく侍るべき、よろしくものせさせ給ふな
るをなん、悦び申侍ると、言葉ずくなにていづるはい
とたうとく、ほとけのあらはれ給へるとこそおぼゆ
れ、（又別の事也）きよげなるわらはの、（僧家の使もの也）かみながきまたおほき
やかなるが、かいな（腕）を出して、おもはずに、かみながき
が、うるはしき、（句）またしらかみむくつけゞなるなどお（おそろしき也）
ほくて、いとなげにて（僧のいとまなげにてあなたこなたする體也）こゝかしこにやんごとなきお
ぼえあるこそ、法しもあらまほしきわざなれ、（法師の）おや
などいかにうれしからむとこそをしはかられ、
●見ぐるしきもの
きぬのせぬひ（背縫）かたよせ（肩寄）てきたる人、またのけくびし（のけゑり也）
たる人
下すだれきたなげなる上達部の御車、例ならぬ人の（わづらひを見まふとて）
まへに子をゐて（つれて也）いきたる、誇きたるわらはのあしだ（下臈の事也）
はきたる、それはいまやうのもの也（いまは常の事也といふ心也）つぼさうぞく（前にくはしか）
（いどりすがたの事也　女房のさま也）したるものゝ、いそぎてあゆみたる、
（法しながら陰陽じにてはらへするもの也）法し陰陽師のかうふりしてはらへしたる、（また色く）
ろうやせにくげなる女の、かづらしたる（なかかもじしたる也）と、ひげかち
に、やせ＼／なるおのこと、ひるねしたるこそいと

見苦しけれ、なにのみるかひにふしたるにかあらん、
よるなどはかたちもみえず　よるはまくらならべても世上のなら　またをしなべて、さる事
ひなれば人の目にもたゝぬと也　おとこをさして也
となりゝにたれば我はにくげなりとて　おきゐるべき
さやうの見にくきは早朝に歸るがよしと也　こ
にもあらずかし、つとめておきゐるめやすし、なつ
の所に本文とみえたりよく考べし
ひるねしておきいぬる目やすし、なつ晝ねしておき
ゐたる、いとよき人こそ、いますこしおかしけれ、
あしきかたち也　ねおきのかほ也　あしくしたらば也
ゑせかたちは、つやめき、ねはれてようせずはほう
かほゆがみもせんと也寝起のさま也たゞひに見て見くるしからむと
ゆがみもしつべし　かたみに見かはしたらむほどの
也　はだへのすくゆへ
いけるかひなきにや、いろくろき人のすゞしひとへ
也　紅のうちたるきぬ也
きたる、いと見ぐるしかるかし、のしひとへもおな
色くろきもあまりはみえずと也　すゞしの
じくすきたれど、それはかたはにもみえず、ほその
事を又立かへりいふ詞なるべし　是よりこのさうし書し事也もの
とをりたればにやあらん、ものくろうなりて、文字
苦勞になりて也
もかゝれずなりたり、筆もつかひはてゝ、これをか
筆もつかひちびらして也
きはてばや、このさうしは目にみえ心に思ふ事を、
徒然のまぎれに也
人やは見んずると思ひて、つれ〴〵なるまどひのほ
人のうはさめきし事こ
ど、かきあつめたるに、あいなう人のためびんなき
の草紙にあれば也
いひすぐしなとしつべき所々あれば、きようかくし

世にもれしとの心也
たりと思ふを、なみだせきあえずこそ成にけれ　○
古今
まくらよりしる人もなき我戀をなみだせきあえず
もらしつる哉
是より此草紙書し由來也　内大臣伊周公の后宮へ料紙を進せられし
宮の御まへに、うちのおとゞの奉りし御さうしを、
一條の院也
也
これになにをかゝまし、うへの御まへには、史記とい
ふをなんかゝせ給へるとのたまはせしを　○史記正
義云司馬遷字子長左馮翊人也漢武帝時爲二太史令一
撰二史記百三十卷一父談亦爲二太史令一
清少の詞也　さらば清少に得さ
まくらにこそはし侍らめと申しかば、さはえよとて
するとの心也　卑下の詞也休字也昔事やなにやかやと也
たまはせたりしを、あやしきを、こじやなにやとつき
せず、おほかるかみのかずをかきつくさんとせしに、
分なき事の多しと也
いともおぼえぬこそおほかるや、おほかたこれは
撰出て也　色々の人のためになる事書た
世中におかしきことを、人のめでたしなど、思ふべき
事など、なほえりいでゝ歌などにも木草鳥虫をも、ひ
らばこそ也是はたゞ當座のたはふれと也　よ、書試たる
出したらばこそ、思ふほどよりはわろし、こゝろみつ
とも人にしられめと也
なりともしられめ、心ひとつにおのづから思ふ事を、
古き草紙の内にまじへ置　な
たはふれにかきつけたれば、ものにたちまじり人な
み〳〵の人耳とゞむべきにもあらずと也
み〳〵なるべきみゝをきくべきものかはと、思ひし

句 又是をよみし人心はづかしく面白きとのたまへども猶いかなら
に、はづかしきこともみえ人はのたまふなれば、いと
んとあやしきとの心也 よしなに事も人の批判が理りぞと也
あやしくぞあるや、げにそれもことはり、人のにく
わが心まゝの善惡
むをもよしといひ、ほむるをもあしといふは、心のほ
の評判なれば人のとかくいふも尤と也 詮ずる所はとりちらされて
どこそをしはかられ、たゞ人にみえけんぞねたき
人のみんがねたしと也
や、
異本のおくに
經房也
左中將また伊勢のかみときこえしとき、さとにおは
清少の里に也
したりしに、はしのかたなりけるたゝみにさしいで
しものは、このさうしのりて出にけり、まどひとり
經房の
いれしかど、やがてもておはして、いとひさしくあ
このさうしの事也
りてぞかへりたりし、それよりありきそめたるな
り、㈠又奥書に源經房朝臣西宮左大臣三男母九條殿
第五女侍賢聊同母弟伊勢守長德元年事也此草紙長
德元二年事多書加歟云々
さる事ともみえぬる本もあれども一向傳來の本の
まゝにしるしぬ

枕草紙抄

全

清少納言枕草紙抄卷一

加藤盤齋諱等空自號踏雪軒世姓加藤氏小字新太郎父名新五左衛門三十六而早世矣以故祖父忠兵衛撫養新太郎弟次郎九郎出家在乎八幡豐藏坊法諱孝雄醍醐山報恩院前大僧正寛濟之門流也次郎九郎弟小三郎出家而在乎相國寺號澄西堂三兄弟皆入法所感宿善之慣乎善仲善算之高蹤也盤齋祖父加藤忠兵衛者仕東照神君而在武勇載見分系圖矣盤齋遊四明悟三諦日師事勧學院僧正而精台教天性好和歌聞道於細川玄旨法印道遊軒貞德相傳之道統皆稀得焉又學神道卜部家于儒於昌三子筆道於藤木甲州高野春蕙子詩於石川丈山律於泉涌寺如周于法相於南京博覧無所不窺天台教相所諳誦也嘗講乎徒然草三百餘遍又作爲十三卷抄鋟梓盛行於世又著新古今和歌集増抄伊勢源氏大和三物語抄及百番謡増抄又百人一首抄方丈記土佐日記抄又暇日作草子名號影法師其積世俗言生死摸風景説人情抒私見此書在乎八幡豐藏坊盤齋恒無定居旅泊爲家風月爲生涯延寶二甲寅八月十一日終于尾州年四十有九往生淨土決定業之瑞祥神童來夢中以和歌示之云

已上　日本古今往生略傳（此書自竹軒治齋述治齋ハ延寳年中ノ人也盤齋同時）

（此文黒川家本ニ所載）

清少納言枕草紙抄一

此双紙を釋するに七の品をわけて一部の意を明らむべし第一本の差異第二先達の褒美第三大意第四作者第五題目第六本文第七難問目決なり

第一本の差異と云は此双紙差異まち〳〵にて傳寫の誤尤多し故に今数多の古本をあつめて吟味し就中傳来正しき本をもとゝし其餘の古本及び印本等を以て校合せしめ侍る者也尤後来の正本たるべき者歟則傳来の本の奥書云

往事所持之荒本紛失年久更借出一両之本令書寫之依無證本不散不審但管見之所及勘合舊記等注附時代年月等亦謬案歟

安貞二年三月日　　耄及愚翁在判

文明乙未之仲夏廣橋亞槐送實相院准后之本末兩冊見之由余書寫所示也嚴命難權驪禿毫彼舊本不及切句此新寫讀而欲容易故比拉之次加朱點畢

正二位行權大納言藤原朝臣教秀

右は傳来の本の奥書也勘物略之

又或古本の奥書云

右以官家之本一二見合之者也

寛正二年長月中旬

是則古本の奥書如斯此外永正弘治の年號計有本雖在之名署なき故に出所未詳或又壹両部傳寫の本あり或又新古の印本有これらの數本に依て校合吟味せしめ正本とする所也

第二先達の褒美と云は是亦二あり清少納言が才智をほむると此双紙をほむるとの二つなりその才智のやんごとなきを先達の褒美し給ひしことつくしがたしといへども少々しるして初學にしらしめん續世繼云かの皇后宮の女房肥後守元輔と申すがむすめ清少納言とてことになさけある人に侍りしがはつ年にまかりかよひなどして彼宮の事もうけ給りなれ侍き云々

爲長十訓抄云一條院雪いとおもしろくふりたりける朝はしちかく出させ給ひ御覧じけるに香爐峯のありさまいかならんと仰られければ清少納言御前に候けるが申ことはなくて御簾をまきあげたりける今の世迄もいみじき例にいひ傳へたり彼清少納言は天暦の御時梨壺五人の歌仙清原元輔女にてやまと言のは家

の風吹傳たりけるうへ心ざまわりなく優にて折に付たるふるまひいみじき事おほかりけり云々是則才智の程をいにしへより賞玩せられし事共也次に此双紙を先達の賞玩せられし事をいはゞ八雲御抄の學書の篇にのせ給ふのみならず所々に其詞を用ひ給ひし也兼好は是にもとつゐて徒然草を書且徃々に引のせられたり清巖茶話云枕草子は何さはうもなく書たる物也三巻ある也つれ〳〵草は枕草子をつぎて書たる物也云々これらは此双紙を先達の賞玩せられし事共也今亦按レ之伊勢大和源氏狹衣などにをさ〳〵おとるへきかは其外うつぼ竹取堤濱松のごときはさら也然共いせ源氏にくらぶれば賞ぶ人十分が一ならんあさましくも歎かしきかなげにそれも故ある事ならんかし

第三ニ大意と云は此双紙一部の趣向也抑此双紙の趣向を古來沙汰する人まれにして全教誡の書なる由を述記すものなし故に今つく〴〵と一部の趣を案じ略して是をいふに一部の大意詞花言葉を玩び有職故實をわきまふるのみならず全實義の教誡なりと見るべき事肝要なるべし

第四作者と云は此双紙清少納言が筆作なる事諸抄に分明なればみな人のしる所也但し少納言が系圖をあかさば清原氏系圖ニ云ク

○○天武天皇——舎人親王 神皇系圖云舎人親王子三原王清原姓祖云々 ——貞代王——
　├有雄——通雄 賜清原姓 ——海雄 筑前守 ——房則 豐前守
　├深養父 内匠允或人 從五位下 ——顯忠 下野守○顯忠或系圖ニ作ル泰光ニ未タ知ニ孰是ナルヲ
　└元輔 肥後守 歌人 ——女子 清少納言 歌人

作者部類ニ云ク清少納言ハ清原元輔カ女一條院皇后宮ノ女房後撰詞花千載續古今新古今玉葉續千載等の作者也 拾芥同之

第五ニ題目と云は此双紙の名を分別する義也按ニ當時ナはたゞ枕草子と計名づけしを後の人清少納言が字をうへてよぶなるべし清輔袋草子俊頼口傳などの例也又枕草子と云意は枕は歌枕の意也されば此双紙の體初にすこしいひ出して其心を次第に與へいひもて行故に歌の枕詞にひとしき義也又定家卿の僻案抄云全吾說とてまくらとはわれらと云詞也と申されき而字をまくらといふとぞ侍る云々古事記姓氏錄延喜式な

んにしてあつく堪がたき折なればよるといひて陰氣をもとめ暑氣をさけ性命を養ふ心也　月の比はさら也とはよるの納涼などに月あらばいよ〳〵氣色いみじからんと也たゞ夜暑をさけ性命をやしなふのみならず短夜の月に目も心もたのしまんはたゞよると計云よりも殊更におもしろきと也　やみもなをとはひたすらに月をいへばやみの夜の螢の賞玩むなしき程に是も捨がたきなさけの色誠にかたおちぬ文體也扨雨とつゞくる文體亦妙也　雨などゝはたゞにも雨夜は物靜にて心ある人は詩にも歌にもゝてなすぞかしまして夏の雨は五穀草木をやしなふのみならず暑氣を忘れ殊に螢の雨夜に亂れとぶ氣色尤おもしろかるべき事也　秋は夕ぐれとは是より三節やゝさむき時を云也併初秋にはなを殘暑あるにより夕ぐれと云也又は年の內にてはもはやおはりにおもむく比なればくれとも云也夕日はなやかにとは陰氣つよきに對しては日のかゞやきはなやかなる者也朝日のうるはしきも同じ意也　山の端いとちかくとは山は氣にしたがふ者なる故に天氣曇れば遠して見えずはるゝ時はちかふみゆる也夕日にかゞやいてちかふ見ゆると也　からすのねどころへとは朝夕の時分を忘れぬ鳥にて侍ればけしきおもひやるべしねぐらへいそぐさま也此時分をからす色時など歌によむも同じ意也三つ四つ二つとはみだれとぶさま也數の次第あながち心あるまじくやしゐていはゞ三天兩地の義ともいひ又は三四は七つ時の意四二は六つ時の義共いはめどあまりいりほがにやあらん　まひて雁とはからすとぶ比よりも夜ふかふなる時を云也まひてはまして也諸鳥いづれも友をしたふといへ共殊更雁ははる〳〵と越路を分來ば友をせちにし行をみだらぬ故につらねたると云也　いとちいさくとは初秋の末つかた初て渡る折はたかくとぶ故にちいさくみゆると也　日入はてゝ風の音とは是も夕ぐれに嵐のそよぐさまを云也尾花がすえいなばのほさきなどに夕風のそよぐ尤あはれ深し　虫のねとはあはれあさからず感情ふかきもの也鳥などは陽氣をうけて春さへづる也虫は陰分の物なれば秋をかなしみ其律平調にて秋にかゝるゝ音なれば時と相應の心也　冬は雪のふりたるとは是より四節き

はめてさむき時を云也物ごと此時分は皆おさめかくるゝ程に氣色ハそれとみるべきはなけれどたゞ雪のふるのみこそ餘の時にたぐひなければ言葉にもいひ難しと賞玩する也　霜などとは木がらしのあれたる所に霜しろふさえたる體也雪はとかくいひがたし霜は雪よりあさきものなればすこしいひのぶる品有よし也　又さらでもとは雪霜ふらねど冬のさむさはたえがたきにせめて霜雪は寒ながらも見るに慰ばそれに思ひ返すべけれ共霜雪の氣色もなくたゞにさむき計の時は埋火のたすけならでは興もなきと也　ひるになりてとは夜中ほどひえぬと也霜月より陽氣うごく故に晝つかたは少ゐたゝかなるとなり　すびつとは晝つかたさむけうすければ埋火もおろそかになる心也　わろしとはかやうの興なき折はせめてのまうけといひ又やがてくれのさむみといひ埋火のたへまなくつきそひてをくべきとの心也

(イ)齋部正通云春之言木牙發也　(ロ)漸也　(ハ)山際也麓には非ず山の端の心也　(ニ)事文類聚云立春日清朝北望ニ紫綠白雲ニ者爲ニ三元ニ素飛雲ニ

花鳥餘情序云あつまをもろ〳〵のうつはものゝうへにをき紫を萬の色の中にたとふるがごとし云々二郎百首　此心を　紫の色やかよふと大空にうかべる雲のむつましき哉　(ヘ)靉靆〻靉靆　(ト)神書註云夏之言熱也　(チ)正通云夜之言寄也　(リ)神代卷云其光彩瑕レ日註云次レ日之光明也　夏の夜もすゞしかりけり月影は庭白妙の霜とみえつゝ　ことならば闇にもあらなん夏の夜の照月影そ人たのめなる　(ヌ)月令云季夏之月腐草化爲螢云々格物論云初猶未レ如レ虫腹下已有レ光數日便變而能飛然後生ニ陰濕地ニ在ニ大暑前後ニ得ニ大火之氣ニ而化ニ此光明ニ也　(ル)堀川百首　匡房　五月雨に草の庵はくづれ共螢となるぞ嬉しかりける　六帖に思ばしと思ふ物から夏の雨ふりすてがたき君にも有哉　(ヲ)正通云秋之言野山緋也盧啓明秋晴詩殘雨收ル時歸ニ石燕ニ斷雲飛處渡ニ邊鴻ニ江流天色共浮レ碧霜葉夕陽相ニ映紅ニ消瘦黄花村落晩聲々砧杵月明中　(ワ)本草林禽部云烏有ニ四種ニ小而純黑小嘴反哺者慈烏也云々　(カ)増　益　勝　マシテ　(ヨ)張華禽經註云鴉鵜並音鴈冬則適レ南集ニ于水干ニ故字從ニ

干寒則翔北集山鷃故字從岸小者曰鴈大者曰鴻云々格物論云飛有前後行列綺語抄に此心を

夕間暮ねに行からす打むれていづれの山の嶺に飛らん　四五朶山粧雨色兩三行雁點雲秋云々朗詠　(タ)文選風賦云風生於土囊之口云々莊子云大塊之噫氣其名爲風云々河圖帝通紀云風者天地之使也　六帖に　貫之　風の音秋にも有哉久かたの天津空こそかはるべらなれ　(レ)韻會云或羽或毛或羸或介或鱗以虫爲象　韓文十九云以鳥鳴春以雷鳴夏以虫鳴秋以風鳴冬云々　(ソ)神書註云冬之言冷也　(ツ)六帖に　ふる雪は枝に暫しもたまらなん花も紅葉も絕てなき間に　大戴記云天地積陰温則爲雨寒則爲雪云々　(ネ)堀河院百首此心を　眞砂にはをくとも見えぬ夕霜の木の葉に白き山かげの庭　初學記云霜陰陽之氣也陰氣勝則凝而爲霜　(ナ)白樂天詩黄醅綠醑迎冬熟絳帳紅爐逐夜開　宋壺山詩一爐柴火三盃酒　(ラ)き文字にごる時は次第ある心也　後のつ文字を濁る時はてだて用意ある心也　方便遊仙窟　(ム)漸油斷なるとの心也末摘花抄にゆるびなきとは心ゆるしなき也無油斷也　(ウ)賞櫃　スビツ　或ハ火爐　(井)火桶　ヒヲケ

【三段】ころは、正月、三月、四月、五月、七月、八月、九月、十月、十二月、すべておりにつけつゝ、ひとゝせながらおかし　此段は上四季の詞に次で月なみの事を云也上の段は一年中の大綱をいひ此段は十二月の大略をいふ次の段は例日の事を云也段々のつゞき心を付て見るべし　正月とは年の始月の始にて公事しげき月也高きいやしき祝ひ月とてことぶく折なれば先あげたる也　三月とは三日の宴花の最中此月也　四月とは夏の初又は衣がへあるつき也　五月とはあやめの宴さみだれの郭公夕やみのほたるいみじき事共也　七月とは秋の初又は七夕祭此月也　八月とは月に名高き時也　九月とは菊の宴又は月もなをいみじき時也則ことなる物の段にも正月一日三月三日五月五日七月七日九月九日のことにめでたき品を書たりされば此外の四月八月十月十二月の四ヶ月の心をわきまへしるべし　十月とは冬の初にて霜がれの木々いとつれぐ\おほかるべし　十二月とは年の名殘又公事ど

もしげき折なればとりわきていみじき月也十二か月の内二月六月霜月をのぞきしは初の九の月にはおさ〳〵およぶまじきにや其味心を付べしすべてとはいひつゞくればいづれもすてがたしとかたをちぬ心也
(ノ)奥義抄云たかきいやしきゆき來故にむつび月といへるをあやまれる也 (オ)同云草木いよ〳〵おふる故にいやおひ月と云を誤り (ク)同云うの花月と云をあやまれり (ヤ)さなへ月と云を誤れり (マ)たなばたにかすとて文共をひらく故に云也 (ケ)木のは紅葉しておつる故に葉おち月と云を誤れり (フ)よなが月と云を誤れり 以上奥義抄の意也 (コ)神書云かみ根國へいたり給ふ月なればいふ也尤傳授ある事也 (エ)萬の事しはつる故云なるべし萬葉に極をはつると訓じたりこの月の訓色々穿鑿して見るに師走の義不レ足レ用義也

[三段]むつき(テ)一日はまいて(ア)そらのけしきうら〳〵とめづらしく、霞こめたる世にあるとある人は、すがたかたち心ことにつくろひ、(サ)君をも我身をもいはひなどしたるさま、ことにおかし。

是より下のつくろひありくもおかしといふ迄は一段の分也凡此段には例日の公事遊興を書たり九節に見るべきなり就中此段は元日のことぶきを云也

正月一日とはまづそらの長閑なるけしきを云也けふの政事はことしげふしてつきせぬ故にのどかなる景色を何となくいひし事尤也發端に春はあけぼのと云に相應する也 世にあるとある人とは官祿にあづかり時めく人を云也 すがたとは官位にしたがひて束帶するさま也 心ことにとはあら玉の年を壽心也

(テ)月と日と建始る折なる故につひたちと云歟 神代卷云與二月夜見尊一一日一夜隔離而住云々 説文云月一日始蘇故月初一日爲レ朔 (ア)夫木集此心を　から衣春立きぬと聞しより日のうら〳〵と成にける哉 (サ)初音卷に中々よし〳〵しくさうぞく有さまよりはじめてめやすくもてつけて愛かしこにむれゐつゝはがためのいはひして云々此おもかげかよふべし 古今賀部に そせい法師
萬代を松にぞ君をいはひつる千とせのかげにすまんと思へば

七日(二)雪まのわかな、あをやかにつみ、例は(三)さしもさるもの、めぢかゝらぬ所にもてさはぎ、白馬見んとて、里人は車(一)きよげにしたてゝ見にゆく、中御門のとじきみひき出る程、かしらども一ところにまろびあひて、さしぐしもおち、よういせねばおれなどしてわらふも又おかし、左衛門の陣などに殿上人あまたたちなどして舎人の弓共とりて馬ども驚かしてわらふを、はつかに見いれたれば、たてじとみなどの見ゆるに、とのもりづかさ女官などの行ちがひたるこそおかしけれ、いか計なる人、九重をならすらんなど思ひやらるゝに、内にてみるはいとせばきほどにて、とねりがかほのきぬもあらはれ、しろきものゝゆきつかぬ所は、まことにくろきにはに雪のむらぎえたる心地して、いとみぐるし、馬のあがりさはぎたるもおそろしくおぼゆれば、引いられてよくも見やられず　是第二節正月七日の公事を云也　例はさしもとはつねぐ\は野菜のいやしげなるものとて御前に出ね共今日は嘉例にて諸人わかなを奉りもてはやすと也　さる物とはわかなを云也　めぢかゝらぬとは上つかたの御まへの心也　もてさはぎと

は我も人も持𢵤げ或は諸共にとりはやす心也是迄昔なの事也　白馬見んとは是より白馬の事を云也　當官の人々は公役にまうづる故に見に行と云事なしたゞ前官或は致仕などの人々が行也　里人とは里の御所公務にあづからぬ人を云也　車きよげとは車にのるはたゞ人にあらずみかどの外戚のゆかり又は致仕の公卿など也年の初にてはれぐ\しければきよらに花やかなるさま也　中御門とは白馬を引まいる道筋へ見物の車を引よする心也　かしらどもとは門口にてはかならずせきあふ程にすそのすがたは見えずたゞかしらのみ見ゆる心也　さしぐしとは下女どもの立まどひ見るさま也　さへもんの陣とは中御門近衛の間陽明門などのむかひにて見る躰也　立などとはせきあふさま也　弓どもとりてとはわかき殿上人の随身が持たる弓にて馬を打驚かし興ずる心也　はづかにとはむかふの左衛門の陣よりおよびでしにはづかに見入る躰也　たてじとみとは馬を見るつゐでに内裏の御ありさまも見こしたる心也　いかばかりなる人とは見にあつまりし人々はいかなる方々なれば大内を

まどひもせでなれ〳〵敷めぐり見ありくぞと也又云その白馬などの公務にあづかる人はいかなる身ぞと羨みし心也　うちにてとは乗出し車の内よりみる人の詞也　とねりとはせきあふ故に装束もみだれたるさま也かの見物の車そへのとねりがきぬにてかほつゝみ立やすらひ見物せしがせきあふにより装束もぬげたる心也　しろきとは白張の袖を見ぐるしう着なす躰を云也　くろき庭とはたとへ也　馬のあがりとは おどろきさはぐ躰也　引いられとは馬のさはぐにつけて人々のあなたこなたとみだれさはぎ車を引退る也

(キ)荊楚歳時記云正月七日俗以二七種菜一爲レ羹服レ之則令三人無二萬病一　後成恩寺殿説云内藏寮并に内膳司より正月上の子日是を奉る也寛平年中より始れる事にや延喜十一年正月七日に後院より七種の若菜を供ず云々詳二世諺問答并根源等に見ゆ　光孝天皇　君がため春の野に出若なつむ我衣手に雪は降つゝ　仁和御せい　春日野の若なつみにや白妙の袖ふりはへて人の行くらん　(ユ)外記權記云白馬同參二中宮一給二酒饌於寮一云々　十節錄云正月七日看二白馬之姓一以レ白爲レ本天有二白龍一地有二白馬一是日見二白馬一即年中邪氣遠去不レ來也　一禪御說云天武天皇十年正月七日にみかど小安殿におはしまして宴會の儀あり是や七日の節會の始なるべからん　(メ)西宮記云蕃太子老親王大臣僧正等依二宣旨一乗板車上下通二用之一近代無二乗用之人一　車の作法かざり以下彈正式に見えたり　(ミ)今の下立賣にあたる也内裏の南面にあたりて春華門に至る筋也拾芥抄云春華門謂二之白馬陣一云々　(シ)閫閾　各トジキミ　爾雅云門限也　(ヱ)長恨歌云翹金雀玉搔頭　一禪云額にさす櫛也云々　(ヒ)拾芥云建春門東面謂二之左衛門陣一云々職員令云衛門府督一人掌二諸門禁衛出入禮儀以レ時巡撿及隼人門籍門牓事一　左衛門の官人の守りに伺候する所を陣と云也　(モ)禁秘抄云殿上人事公卿侍臣昇殿上古大臣仰レ之雜袍同仰レ之上古猶難レ叶事也凡員數廿五人具二六位一卅人是寛平遺誡也非職小舍人在二此外一云々

逍遙院殿說云四位五位六位までも昇殿をゆりたる人をば殿上人と申候也云々又は雲客とも云也

（七）續日本紀云文武天皇大寶元年六月始補内舍人九十人於太政官列見　職員令云掌帶刀宿衛供奉雜使若駕行分衛前後　（七）職原云可然侍任之攝關白給内舍人隨身時殊撰其器召仕之有本府小隨身等事今略之大將の下に屬して白張を着る者也　（ス）大舍人式云正月七日節會兵部省進弓矢舍人叩門其詞曰御弓事申給ト申内舍人姓名候止申　古事談云近衞人は弓矢を具ストイヘドモ武勇ニハ不及者也　（一）立蔀タテジトミ　（二）職員令云主殿寮頭一人掌供御輿輦蓋笠繖扇帷帳湯沐洒掃殿庭及灯燭松柴炭燎等事女官も如此也　（三）「ニヨクワン」ト讀トキハ内侍ナドノ義也「ニヨウクワン」ト讀時ハ刀自得選ナド也今ハ此義也　（四）九は陽數重は四町を云四九三拾六町の帝都也是天の三百六十日に象る也　玉篇云天子之門有九謂關門遠郊門近郊門城門皐門庫門雉門路門象天有九重　（五）馴　狎蕘　ナル、

（六）八日人々いはひして、はしりさはぎ車のをともつねよりは、ことにきこえておかし　是第三節正月八日のことぶきを云也此日は穀日とて五穀をつかさどり成就する日なればわれ人諸共に祝ふ心也又は御修法などへ參りさわぐさま也　（十八）詩林正宗三云八日爲穀其日晴所生之物育陰則災　けふは御齋會御修法女王祿位大元修法などの公事有

（七）十五日は、もちかゆのせくまいる、かゆの木（八）ひきかくして、家のごたち（九）女房などのうかがふを、うたれじとよういしてつねにうしろを心つかひしたるけしきもおかしきに、いかにしてげるにかあらん、打あてたるはいみじうけうありて、打わらひたるもいと（十）はへ〴〵し、ねたしと思ひたるもことはりなり、そこよりあたらしうかよふむこ君などの内へまへるほどを、心もとなく所につけて、我はとおもひたる女房の、のぞきけしき（イ）ばみおくのかたにた（ロ）ゝずまふを前にゐたる人は心えてわらふを、あなかまとまねきせいすれど、きゝ見しらずがほにて（ハ）おほとかにてゐ給へり、こゝなるものとり侍らんなどいひより、はしりうちてにぐれば、あるかぎりわらふ、おとこ君もにくからずあひぎやうづきてゑみたる、ことにおどろかず、かほすこしあかみてゐたるもおかし、又か（三）たみに打て、おとこをさへぞうつめる、いかなる心

にかあらん、なきはらだち、うちつる人をのろひ(ホ)まが〳〵しくいふもおかし、内わたりなど(ニ)やんごとなきも、けふはみなみだれて、(ト)かしこまりなし　是第四節正月十五日のことぶきを云也　もちかゆとはけふ御祝ひの供御也　まいるとはあつまり祝ふ心也　かゆの木ひきかくしとは此あつまる人々を家のごたち女房などをいはふとてうつ事也今も遠國にすること也　ねたしとはうたれたる人の心也　そこよりとはとりわけてむこ君をうつ事を云也そんでうそこより通ひ給ふむこ君ぞと女房達の云ことば也　内へまいる程とは内裏へまいり給ふ道にてうたんとたくむ心也　心もとなく所とはむこ君に心寄なる人の彳居るさま也　けしきばみとはきつかひにおもひ見ゐたる心也　まへにゐたる人とは彼けしきばみたる女房の前あたりにゐる人々の心遣ひするさまをわらふ也　あなかまとはうたんとする人のわらひさはぐをせいししづむる意也　きゝしらずとは聟君はかくとしらでおほやうにゐたまふ躰也　こゝなるとはうたんとてはかりごといひちかよる心也　あるかぎりとは見物の人おしなべて也　おとこ君とはむこ君の様躰ののどやかにもてなしいかりのかはもなくさわぎもせですこしはぢらふさまにもてなすおとなしき心遣を述べたり　又かたみにとは女房どち打あひ後には男にも打てかゝると也　いかなる心にかあらんとはその中にいかりなどする人あるを云也祝ひ事のならはしなるを腹たつる人はいかなる心なるらんと也　まが〳〵しくとは腹たて惡口などするさま也　内わたりとはけふの祝ひ事などはいかるまじき事ぞと上にいふ所の物なれぬ人をいましむる心也　やんごとなきかた〳〵もうつとて入みだれ興じ給へばなべてはゞかりなきことぞと也

(七)拾芥云主水司獻二七種御粥一云々公事根源云寛平の比より年毎に是を奉る云々　呉縣張成以レ粥祭ルレ土事詳二于歳時記一　(九)今日宮内省より奉る御薪と云義あり又門松の根にある木と云義ありそれにてうつ事也繩などを持てかくる同じ事也今もいなかにはする也因幡美作などに有よし也所の人はしりはりと云也　(九)禮記云后之言後也在二夫ノ後一故以レ女謂二後達一云々　御達白氏文集召使ひなどの

女を云と侍れど惣名なるべし（十）映（ハヘ）榮（ハヘ）光（ハヘ）
源語類案（イ）うかゞひのぞむ意也　源氏の抄には上の詞にしたがひて心得ると侍り（ロ）詞花集　床をしもあなかま夜半の蕃夢には人の見えもこそすれあなかまはかしましと云義也（ハ）おほときおほとか同じ心也大やうにのどかなる心也穩字也河海抄（ニ）互に也（ホ）狂言（マガコト）萬葉惡言（マガコト）延喜式（ヘ）無止事との義也上臈貴人を申也位高き人の事はさしをかれぬ物なればいくたびも云心と也孟津抄（ト）無畏（カシコマリナシ）おそれつゝしむ事なく緩怠なる意也

除（チ）目のほどなど、内わたりはいとおかし、雪ふりこほりなどしたるに、（リ）まうしぶみもてありく、（ヌ）四位五位わかやかに心地よげなるはいとたのもしげなり、老てかしらしろきなどが、人にとかくあんないいひ、女房のつぼねによりて、をのが身のかしこきよしなど、心ひとつをやりてとき聞するを、わかき人々はまねをしわらへど、いかでかはしらん、よきにそうし給へ、けいしたまへなどいひても、えたるはよし、えずなりぬるこそいとあはれなれ、是第五節春の除目を

云也正月十一日より十三日迄三ケ日の間にとりおこなはるゝ公事也　除目の程とは先内裏の其折ふしの有さまを云也即次に云所のさま也　雪ふりとはたへがたき時分を云也　四位五位とは下臈なれどわかければすえたのもしくたへがたきめにあひてもかひあらんと也　老てとは下臈の老はふれたるが執奏の人などをたのむ心也　をのが身とは内侍などにへつらひわが家の先例などを云心也　わかき人々とはかの老たる者がのぞむ有さまを若き人が笑てい也　いかでかはしらんとは其若き人の笑を老たる者がしらぬと也又云老たる人の下臈にてはふるゝ事のかなしくてひたすらへつらひ望むあはれさをわかき人がいかでそのせちなる心をしらんやと也　よきにとはたのむ詞也　えたるはよしとはけひし給て除目にあつかるは本ゐをとげてよしそれに及ばぬは本ゐなくあはれなるぞと也
（チ）善成公河海抄云春の除目を縣召といひ秋を京官と云也春はむねと外官を任せらるゝ外官とは外國の守介掾目に至迄縣召と云也京官とは京にある諸司共をむねと任せらるゝ故也つかさめしとは外國の諸司等をめして任官をさつけらるゝ故に云也

除目は天武天皇四年三月始之樣子委西宮記小右記等に見ゆ　(チ)雲圖抄云除目政始之後以吉日被始行限以三日御物忌之時執筆已下皆悉參籠以吉日先被始行御修法　(リ)江家次第云除目其日大臣參上著座納言以下執筥文云々第一硯筥第二筥第三諸人申文第四筥第五筥同前依申文多少有筥數云々　續文粹六云散位從五位上大江朝臣時棟誠惶誠恐謹言請特蒙天恩依安房國任中勤畢公文功　拜任丹後上野出羽國守闕狀云々望請特蒙天恩拜任件等國守闕一誇稽古之貴一知吏務之至時棟誠惶誠恐謹言　寛仁四年正月十五日これ申文の躰也書様闕字等法あり詳に見續文粹朝野群載等故略して舉也　(ヌ)職原云貴賤任次第叙之無殊子細法曹輩及侍叙四位隨分抽賞之儀也

(チ)三月三日、うら／＼とのどかにてりたる、(ワ)もゝの花いまさきはじむる、(カ)柳などいとおかしきこそさらなれ、それもまだ(ヨ)まゆにこもりたるこそおかしけれ、ひろごりたるはにくし　是六節桃のせくの事を云也　うら／＼とはけしきの長閑なるさまを云也　もゝの花とはめでたき物なるよし本文の侍ればけふ賞玩せらるゝ也いまさきはじむるとはあたらしくにほひ深きを用る意也　柳などゝはこれもけふ賞玩の物也　まゆにとは柳の目はらぬうちがよきと也　(ヲ)藤明衡云曲水宴唐國則周公旦爲濫觴本朝亦顯宗帝於權輿云　(ワ)覺明云初學記云仲春桃始華言二月花開三月其色盛也本草云是日酒漬桃花飲之除百病益顏色　拾遺賀に　たゝみね「三千年に成てふ桃のことしより花さく春にあひにけるかな　(カ)古今かへし物の歌に「青柳をかたいとによりて鶯のぬふてふかさは梅の花がさ　(ヨ)奥儀抄云「春の日の影そふ池のかゞみには柳のまゆぞまづは見えける　柳のはゝみどりにて人のまゆに似たればかくよむ也詩にも翠眉嫋黛など作れり又まゆといふに付てかひこのまゆにそへてもよめり　兼輔卿云「青柳の眉にこもれる糸なれば春の來るにぞいろまさりける

花も(タ)ちりたる後は、うたてぞ見ゆる、(ソ)おもしろくさきたる櫻を、ながくおくりて、おほきなるはながめにさしたるこそおかしけれ　是七節花ざかりなる

り後の字に心を付て見るべしちるざまは盛に次で
おもしろけれどもちり果て後は何の詮なき事也
ながくとは短くてはみぐるしき心也是則ひがし北
にうつしうへられたる花を賞玩ある心也
(タ)素性法師「花もみなちりぬる宿に行春の故郷
とこそ成ぬべらなれ　(ソ)瓶　甕カメ
(ツ)櫻のなをしに、(ミ)いたきうちぎきて、(ナ)まらふ人にもあ
れ、(ラ)御せうとの君達にもあれ、(ム)そこちかくゐて、もの
などうちいひたるおかし、とりむしの(ウ)ひたいつき、
いとうつくしうてとびありくおかし　是八節上の意
をうけて時分の装束折ふしのけはひなどして遊興
する事を云也　さくらのなをしとは花の時分の
装束也　まらふ人とは花見の比の御客也　御せう
とのとは中宮御兄弟など也　そこちかくとは御見
廻などにおはしまして御物語ある心也　とりむし
とはおさなき君達のよそほひを云也　とびありく
とはたはふれあそび給ふざまを鳥虫の縁にとびあ
りくと云也春のあそびなる故に装束もけはひも折
にしたがふよそほひ也

(ツ)覺悟抄ニ云櫻表白裏赤色冬春云々　萬水云常の
直衣の裏こき蘇芳なるを櫻色と云也(ネ)太袿　强
徃釋名云婦人上衣也　和名引ニ漢語抄ニ云作レ袿云
々源語類聚宮或は一の人又は家あるじなどなら
ではきぬ也大袿は衣の事也小袿は女房ならでは不
着也うちき大小有也　(ナ)客人　賓客　(ラ)兄セ
ウト　兄弟セウト　(ム)未詳　翠眉鵝眉などの
心ならんか歌など詠歟(ウ)蛩眉蝶眉などに人のま
ゆをよそへて云也ひたいとはまゆの義也朗詠云嬋
娟兩鬢秋蟬翼宛轉双蛾遠山色
(ヰ)祭の(ノ)比は、いみじうおかしき、木々のこの葉まだい
としげうはなうて、わかやかにあをみたるに、かす
みも霧もへだてぬ空のけしきの、なにとなくそゞろ
におかしきに、すこしくもりたる夕つかた、よるなど
しのびたるほとゝぎすの、とふ、そらみゝかとおぼ
ゆるまで、たど〳〵(ク)しきを聞つけ(キ)たらん、何心地かは
せん、祭ちかくなりて、(コ)あをくちばふたあひなどのも
のどもおしまきつゝ、ほそびつのふたに入、かみなど
にけしきばかりつゝみて、行ちがひもてありくこそ
おかしけれ、(ケ)すそご(フ)むらご(コ)まきぞめなど、つねよりも

おかしう見ゆ、わらはべのかしらばかりあらひつくろひて、なりはみなほころびたへみだれかゝりたるもあるが、(三)けいしぐつなどのをすげさせうらをさせなど、もてさはぎ、いつしかその日にならんと、いそぎはしりありくもおかし、あやしうおどりてありくものども、さうぞきたてつれば、いみじく(テ)ちやうざといふ法師などのやうにねりさまよふ、いかに心もとなからんほど〳〵につけて、(ア)おやうば女あねなどの、ともしてつくろひありくもおかし　是九節初夏の比祭の事を云也　祭の比とは四月酉の日賀茂の祭の比也　木々とは野山の氣色を云也　霞もきりもとは空の氣色を云也
春はかすみ秋は霧に隔つれ共夏は其隔なしと也
すこしくもりとは氣色にしたがひ郭公のいみじき事を云也郭公のおとづるゝ比曇がちの夕部也　とふとは郭公の問ひ渡るを云也　たと〳〵しとは初音を聞定めぬ心也　あをくちばとは時の色なる裝束を祭のはれに用意するさま也　ほそびつとはもとめ又はかりなどしてもて行心也　すそごとはこれらはつねにも用ひれ共時にしたがひて一入興ある心也　わらはべとは身をきよめの爲にかみあらひ湯などあみするにその間をもおそしとてわらべともが着物共もとりつくろはずしどけなく待かねありく意也　けいしぐつとは是も祭の用意にする心也　あやしうとは其日になりてわたる人々のありさま也いろ〳〵のことやうなつくり事する人のわたるごとくわらはべ共もねりさまよふ意也　いかにとはわらはべのねり渡るをゆかりの者が心もとなく思ひかいしやくする意也　凡是迄第三段の終也就中例日の事折節の興などを述たり然共初夏の比祭迄をいひて其外はもらしつ尤心あるべし

(ヰ)諸社記云欽明天皇御宇天下擧レ國風吹雨零爾時勅二卜部一令レト二賀茂神崇一也撰二四月中酉一馬繋鈴人蒙二猪影一而駈馳以爲レ祭天下豐年乘馬始二於此一兼敦云於二造社一者天武六年也於レ祭者自二欽明一被二始行一四月酉日也若溯日當レ酉者下酉行レ之　(ノ)比ノは卯月中の酉日の前後をさす也其折節の氣色風景よくうつし述られたり引事に不レ及しておのづから本文しられ待る也　(ク)覺悟抄云青朽葉表青丹裏青老者多着レ之四五月　(ヤ)同云二藍以レ三

赤花及二青花一染レ之毛久穀或生平絹非色人用レ之或公卿着レ之 (マ)ぬりおけと云物也源語 (ケ)下濃スソゴ (フ)村紺ムラゴ (コ)卷染マキゾメ (エ)系襭ケイシ或本けいしにくつと有 (テ)長者チヤウザ 僧綱也 (ア)拾遺に 源重之「親のおやと思はましかばよりてまし我子の子にはあらぬ物かは 「人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道にまよひぬるかな 諸本おほやうはと書り傳本おやうはと書り仍而用レ之

【九段】(サ)こと〳〵成物(ノ) 法師のことば(キ)、をとこ女のこと(ユ)ば、げすのことばには。かならずもじあまりたり

是より下のわらひ給ふと云迄第四段の分也すべてこと〳〵なる物と題にあらはしたるそのおもむきを品々述たり十二節に見るべき也就中此一節は詞のことやうなるを云也 こと〳〵なる物とは當段の題也同じからず品わかるゝ物事を云也又ふつゝかにいやしきもあり又はかりがたくあやしき心もありこれらを下にいはん爲に先詞のこと〳〵なる品をしらせたり 法師のことばとはかたつまる心也 をとこの詞とはつよき心也 女のことばとはやはらかなる意也 げすのことばとはたゞしからぬ意也すべていひかはす詞のことやうなるを云也 (サ)異事也 論語云夫子之求レ之也其諸異二乎人之求一レ之與 これら字彙殊也分也奇也尤也違也怪也 (キ)遍昭の、かゝる山のすの心も通ひ侍るべし (キ)遍昭の、かゝる山のすゑにもこもり侍りてしなんを期にてと后宮に答へ給ひし詞は大和物語に見ゆ永觀の病は是善知識也我苦痛によりて深くぼたひをもとむとの口すさみは著聞集に記されたり又栂尾の明惠上人の阿字の詞證空上人の四部の詞などつれ〳〵草書り思ひ合すべし (エ)はゝき木の品定宇治物語などにあまた侍る也しるすに不及又土佐日記におとこもすなる女文字とあるをおもふにをとこはつよく女はやはらぐ心なるべし (メ)玉鬘卷云此おはしますらん女君すぢことにうけ給はればいと忝なしたゞ何がしらが私の君と思ひまうしていたゞきになんさゝげ奉るべき云々すやつばらをひとしなみにはし侍りなんわが君をきさきの位におとし奉らし物をや云々是等大夫監が詞也いやしき心思ひ合べし
(ユ)思はん子を法師になしたらんこそは、いと心ぐるし

けれ、たゞ木(三)のはしなどのやうにおもひたらん、いと〳〵おしけれ、さうじ(四)の物のあしきをうちくひ、いぬるをもわかきはものもゆかしからん、女などのある所をも、などかいみたるやうにさしのぞかず(五)もあらん、それをもやすからずいふ、ましてげん(六)じやなどのかたは、いとくるしげなり、みたけ(七)、くま野、かゝらぬ山なくありく程におそろしきめも見、しるしあるきこえ出きぬれば、こゝかしこによばれ、ときめくにつけてやすげもなし、いたくわづらふ人(八)にかゝりて物(九)のけ(十)てうずるもいとくるしければ、こうじてうちねふれば、ねふりなどのみして、とがむるもいと所(十一)せく、いかに思はんと、これはむかしのことなり、いまやうはやすげなり ○是第二節法師の詞と云をうけて心つかひ身のつとめのことなるやうを云也 思はん子とは親のいとおしくおもふ子を法師にすればつゐにはよきことゝおもひながら當分は心ぐるしと也 たゞ木のはしとはたとへばきりかぶなどを目がけぬやうに世にもおもはれ身をもすてたると也 いと〳〵おしけれとは親のおもふ心也又云さやうにおろか成よとわきよ

り親を不便がる心也 さうじ物とは精進そさいの食事につゐて身のつとめことやうなるを云也 物もとはわかき法師戀路の趣いかにやと計思はんと也 女などのとは心に執着なく共見る程の事はあらんにそれを又世の人あしくいひ立る事あらんと也 ましてとはさいふわかき法師のみならず老たる出家にも色こそかはれくるしきわざあると也 げんじやとは阿闍梨驗者のるいを云也 いとくるしとは身持心遣ひいとくるしと也 みたけくまのとは修行の功を云也 しるしあるとは修法のしるしを人がしればいよ〳〵身も心もくるしきと也 ものゝけてうずるとは時めくにつけてやすげなき事を云也けしからぬ煩を調伏する事也 とがむるもとはおこなひつかれて少ねふるをさへいふなればその外の事はいか計きづかひをしてつとめずはと云心也 所せくとはかほどの事はあやまりになるべからね共所せばくいか計なんぎに思ふ程に法師の身となす事はいとおしきとの心也是則身の勤につゐて異なる故を云也 これはとは上の心をむすんで昔いまの法師のことなる結目ある事を云也

(ミ)雜阿含經云何名法師佛言若於色說是生厭離欲滅盡寂靜法者名於法師若於受想行識說是生厭離欲滅盡寂靜法者名法師 又一子出家すれば九族天に生と說棄恩入無爲眞實報恩者などゝあれば思はん子を法師にするとの心なるべし (シ)榾柮 小木也或云木頭 木斷 梵網經云若佛子信心出家受佛正戒故起心毀犯聖戒者不得受一切檀越供養亦不得國王地上行不得飲國王水五千大鬼常遮其前鬼言大賊若入房舍城邑宅中鬼復常掃其脚跡一切世人罵言佛法中賊一切衆生眼不欲見犯戒之人畜生無異木頭無異云々 古今「木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身は成ぬべら也 (ヱ)智度論云一身精進爲小二心精進爲大又勤精進則成佛道 身の精進佛の法のごとく身をもつ事也心精進とは佛の敎のごとく心をみがくを云也 (ヒ)驗者修驗者の行人をさす其源は役小角にて義學義玄義眞壽元傳統せり又聖寶は中興一派の祖也すべて此等の末流を指てけんじやと云也 (モ)御嶽 吉野金峯山也 神名帳云大和國吉野郡吉野水分神社吉野山口神社金峯神社 世に傳て云藏王權現は安閑天皇を祭ると云也是唯一家所談也又習合家沙汰云釋迦如來亦彌勒菩薩なりと云々「我戀のかねのみたけの鐘ならばみろくの世にもあはまし物を「夢さめん其曉を待ほどのやみをも照せ法のともし火 是等の歌習合の旨にてよめり今本文の心も修驗道の行人の事なれば習合の義がかなひ侍る也又下ニモ明之 (セ)本緣神代卷に詳なれば略之今の習合の義をあかさば江談抄云熊野三所伊勢太神宮御身云々本宮幷新宮太神宮也那智荒祭又太神宮救世觀音御變身云也又新宮藥師本宮彌陀那智千手云々亦神社考ニアリ (ス)調テウジ祈心也 (一)困コウジテ草臥意也 發覺淨心經載二十種睡眠過患能應此意也文繁故略之 (二)所せばきの中略也

(三)大進(四)生昌が家に、(五)宮のいでさせ給ふに、(六)東のかどは(七)よつあしになして、それより御こし(七)は入せ給ふ、北の門より女房の車ども、(八)ぢんやのゐねばいりなんやと思ひてか、しらつきわろき人も、いたくもつくろはず、(九)よせておるべきものと思ひあなつりたるに、びらう

けの車などは門ちいさければ、さはりてえいらねば、れひの(十)えんだうしきておるゝに、いとにくゝはらたゝしけれど、いかゞはせん殿上人(イ)地下なるも、陣にたちそひ見るもねたし　是第三節はをとこ女のことばと云をうけて男女の心遣ひ身のふるまひをあらはしたりつよくしてやはらぎなれて禮をわすれぬ心を敎たりそれよりとは四つあしの門より宮の出給ふたゞ人はならぬ事也　北の門よりとはたゞ人の出入する門なるがゆへに御供の女房衆はこゝより出ると也　陣屋のゐねとは生昌が家へ夜半に出御なれば近衛の陣に宿直する者どもはもはや内へいりてねぬらんと也　かしらつきとは御供の女房のつくろはぬ躰を云也　よせてとは生昌が家の車よせ迄車をよせておりんと打まかせておもふゆへにすがたもつくろはぬ意也　びらうけの車とはかざりなどありておほきなる車なればちいさき門にいりがたくて初のうちまかせたるおもはくとちがふ意也　いとにくゝとは供の女房達のおもはく也　門より外にておるゝやうに門をちいさふしてわがすがたをけやけくするよとはらたゝしうおもふ意

也　見るもねたしとは殿上人地下のかた〴〵にあたりてもおふ心也うるさきあまりにとがもなけれども見る人迄にくしと也

(三)職原云大進名家五位任レ之尤可レ擇二其人一也大進奉レ行宮中諸公事一如二禁中職事一仍非二器用一者不レ任レ之云々

(四)平氏系圖云

桓武天皇——葛原親王——高棟王——惟範——┬時望——珍材——┬惟仲 中納言従二位
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└生昌 播磨守正四位下藏人

勘物云長保元年八月九日自二職曹司一行二啓平生昌一へ時ニ中宮前大進前但馬守後正四位下播磨守經二文章生ヲ一云々　今按此行啓は長保元年六月十四日内裏燒亡ゆへなるべし本文宮の出給ふと云は又別の事也則勘物次に記レ之　(五)宮とは中宮也系圖此次に記レ之　(六)勘物云長保元年六月十四日内裏燒亡十六日行二幸一條院女院御所一也十一月一日女御入内七日中宮定子皇子誕生長保二年二月十日女御彰子立后宣旨之後退出廿五日立レ后十一月中宮定子入御十八日一宮御百日三月廿七日出二御生昌宅一是

則宮の出給ふ事の勘物如此也大鏡など見合すべしまぎらはしけれ共しれやすき事也　(七)中宮定子は宮の御母なれば御あひこしと見えたり　(八)北山抄云亥子時左陣每刻夜行丑寅刻右陣勤レ之物節一人申二宿申候由一云々　(九)檳榔毛車ひんらうしの木にてかざると又びんらうじ染の糸にてかざると云の兩說也　西宮記云檳榔毛太上皇以下四位已上通用非參議不レ立レ榻　裝束抄云檳榔毛庇執柄太閤之時或用レ之凡家太政大臣之時或用レ之云々今の意は西宮記の心にて侍るべし　(十)花鳥餘情莚道のうへの布簟に錦をしかれ云々道にしくむしろの上に布などにて侍る也　(イ)すべて四五位人昇殿を不レ聽を地下と云也職原の沙汰に委し

(ロ)御前にまいりて、有つるやうけい(ハ)すれば、こゝにても人は見るまじくやは、などかはさしもうちとけつると、わらはせ給ふ、されどそれはみなめなれて侍れば、よくしたてゝ侍らんにしこそ、おどろく人も侍らん　是第四節女房達の車よりおりたるざまを宮の御前にて申上ることを云也　こゝにてとは宮の仰也女房たちの打とけたるをいましめ給ふ意也

されど、は女房達の御斷也おほせのごとく打とけおもふはゆだんにて侍れ共殿上人地下のかたぐはかやうの御供車などつねにめなれ給へばさのみ立さはぎ見給ふべきにあらずきよらによくしたてたる行啓などには見給ふも斷ならめと也みな上の見るもにくしと云心を述たり

(ロ)中宮の御前也　(ハ)啓申上る心也

さてもかばかりなる家に、車いらぬ門やはあらん、見えばわらはんなどいふほどにしも、是まいらせんとて、御硯などさしいる、(ニ)いでいと(ホ)わろくこそおはしけれ、などてかその門せばくつくりてすみ給ひけるぞといへば、わらひて家のほど身のほどにあはせて侍るなりといふ、されど門のかぎりをたかくつくりける人もきこゆるはといへば、あなおそろしとおどろきて、それはうて(ヘ)いこくがことにこそ侍るなれ、ふるきしんしなどに侍らずば、うけたまはりしるべくも侍らざりけり、たまく此みちにまかり入にければ(ト)かうだにわきまへられ侍るといふ、その御みちもかしこからざめり、えんだうしきたればみなおち入て、さはぎつるはといへば、あめのふり侍れば、

げにさも侍らん、よし〳〵またおほせかくべき事もぞ侍る、まかり立侍りなんとていぬ　是第五節女房達の生昌が家作りをとがむる事をいふ也　見えばわらはんとは生昌が見え來たらばわらふべしといふ也　これまいらせんとは御車の內に有し御硯を生昌が取出し差上る心也　いでいとは女房達の詞也生昌に云かくる心也　わろくとは家作りの躰故實もしらぬたてやうやと云心也　わらひてとは生昌がゐしやくして返答する也生昌が意はおごらぬ所を專にする意也　されどゝは女房達の詞也身の程にあはせてとあるはことはりなれ共むかしの人も身のほどより門をたかくせし例もあれば門計の事は高くつくるとも難なかるべしとの意也　あなおそろしとは生昌が詞也女房達の古例迄を引ての給ふをこと〴〵しくおもふ意也　それはとは女房達のの給ひしふるき事をよく聞えたるとて生昌が自賛する心也　そのみちもとは女房の詞也進士の學びも愚かにましますべしそのゆへは女車のもと迄おとこのみだれ入るやうな不禮なる事あるほどにと云心也　あめのふり侍ればとは生昌が詞也たゞにはみだれ入るまじけれど雨ふればみだれかはしきもことはりなりと了簡する也　よし〳〵とは生昌の詞也

（ニ）發語の辭也　いで我を人などがめそ大船のゆたのたゆたに物おもふ比ぞ　（ホ）最白氏文集　（ヘ）前漢列傳四十一云于定國字曼倩東海郯人也其父于公爲縣獄史郡決曹決獄平羅文法者于公所決皆不恨郡中爲之立生祠號曰于公祠云々定國少學法於父父死後定國亦爲獄史郡決曹云々始定國父于公其閭門壞父老方共治之于公謂曰少高大門閭令容駟馬高蓋事我治獄多陰德未嘗有所冤子孫必有興者至定國爲丞相永爲御史大夫封侯傳世云　亦蒙求にも于公高門とてしるせり令義解の序にも見えたり本傳の文しげきゆへに略して記之　（ト）如此など云心也　かやうのむつかしき事を如此にわきまふと云意也　△其御みち　女らうの通り給ふ道筋もおそれぬとの意にや云々

何事ぞ、生昌がいみじうおぢつるはと、とはせ給ふ、あらず、車のいらざりつることいひ侍ると申て、おりぬ　是第六節前の事どもを宮の尋給ふ故に女房達

の中上らるゝ事を云也　おぢつるとはまへのあなおそろしなど云し事也　あらずとは女房の別の事にてはあらずと御いらへを申上る也　申ておりぬとは前の車のいらざりしを申たりとあらまし披露してつほねへさがる意也

(チ)善悪にわたる詞也ほむる時は善の意也忌時は悪の意也物の至極したる時心もあり今の意は至極の義也　(リ)下チリヌ　罷チリヌ

おなじつぼねにすむわかき人々などして、よろづの事もしらずねふたければ、みなねぬ、(ヌ)東のたいのにしのひさしかけてある北の(ル)さうじにはかけが(ヲ)ねもなかりけるを、それもたづねず、(ワ)家ぬしなればあんないをよくしりてあけてげり、あやしうかれはみたるものゝこゝろにて候はんにはいかゞとあまたたびいふこゝろにおどろきてみれば、凡帳(キチヤウ)(カ)のうしろにたてたるとうだひのひかりもあらはなり、さうじを五寸ばかりあけていふなりけり、いみじうおかし、さらにかやうの(ヨ)すき〴〵しきわざゆめにせぬものを、わが家におはしましたりとて、むげに心にまかするなめりと思ふもいとおかし、我かたはらなる人をおこして、かれ見給へかゝる見えぬものあめるをといへば、かしらをもたげて見やりていみじう笑ふ、あれはたそ(タ)けさうにといへば、あらず、家のあるじ、(レ)とさだめ申べき事のはべるなりといへば、門のことをこそ申つれ、さうじあけ給へとやはきこえつる、なを其事も申侍らん、そこにさふらはんはいかに〳〵といへば、いと見ぐるしき事さらにえおはせじとてわらふめれば、わかき人々おはしけりとてひきたてゝいぬる後にわらふ事いみじ、あけむとならばたゞまづいりねかし、(ソ)せうそこをいはんにはよりてなどは、たれかいはんとげにおかしきに、(ツ)つとめて御前にまいりて(ネ)けいすれば、さることも聞えざりつるを、よべのことにめでゝいりにたりけるなめりあはれあれを(ナ)はしたなくいひけんこそ、いとおかしけれとわらはせ給ふ

是第七節女房達の局へ生昌が見まふていひかはせし言葉のことなる次第を云也　おなじつぼねとは生昌が家居の事なれば女房達のつぼねもそれぞれになふしてひとつに居給ふ心也　わかきとは上らう中らうなど打まじりて也　それもしらずとはかけがねなどのしまらぬ事も心つかずいねたると

也　家ぬしなればとは生昌が見まほしに來りし心也　あやしうとは女房の詞なり　かれはみたるものとはくれがたに見し生昌が聲にてさふらふいかゞしてあけ來るととがむる聲にをどろきて奉輩の女房もおきゐがり見る心也　ひかりもあらは也とはあやしげな事のなき心也　五寸ばかりとは內へははいらぬてい也　さらにかやうのとは生昌は質朴なるものぞと打まかせおはしませばそれにひきかへわが家なればとて人をも憚らず心まかせに振舞ふかなと女房の心得ちかへて云義也　わがかたはらとは女房どちかたはらにねたる人をもおこしていひあやしむ心也　かゝるものとは生昌を云也　あれはたぞとはおこされし女房の詞也生昌に對してとがむる心也　あらずとは生昌が返事也　戸さだめにとは戸障子などのくるゝかけがねをしめに參りたると答る也　門の事とは女房の詞也晝いひし門のせばき事はいらへもせで今障子あけ給ふは何事ぞやととがむる心也　なを其事とは生昌が詞也障子をあけたる故もありなをまた門の事をも申侍らんと也　そこにさふらはんとは女房達を問ふ詞也　いかに〳〵とはたれ〳〵ぞと云心也　いとみぐるしき事とは女房の詞也か程の艶なる所へ來りたゝ其質朴の生昌なればたれ〳〵と問ひ給ふとも見ぐるしき程の情ある事はなるまじきぞと戲わらふ心也　わかきとは生昌が心也さてはなまめけるかたもあると心得て立のく義也　後にとは生昌かへりて後に女房達の笑心也　あけむとならばとは双紙の地の詞也或は女房の心に見ても通ずべし　障子をあくるはけさうの心有に似たりさもあらで徒にをとづれ來らば其儘局へいりはせで何とてためらふぞと也　せうそことは見廻の心也障子を明ながらいらぬにてこそはみまひとしれ侍るかく女房のねたる處へよる來らばいかなる人なり共けさうの心とおもはれんぞとうはさする義也　つとめてとは中宮の御前にて生昌が事を御うはさの詞也　さることもとは中宮の御詞也生昌がけさうの色も見え聞えぬはよべの門の返事などいひのこしたるをむねんにやおもひ入りくる物ならんそれをはしたなくいひわらふは心得ちがひぞといましめ給ふ心也誠にこと〴〵なる趣也

（ヌ）一禪の說に云南の寢殿に相ならべて西東に作りてをの〳〵中門などあるを西對東對と云也　東對の西の方に庇かけたる間あるとの心也　（ル）障子和名サウジ シヤウジ　（ヲ）鉤匙カケガネ　（ワ）それもたつねずと句を切てみるべし　（カ）春夏の間はひとへの絹すゞしなどかけらる秋冬の間はうらあるおりものなどかけらるゝ也　（ヨ）次第々々のみゆる心也　爰は用意して懸想のさまみゆる意也　（タ）懸想ケサウ　顯證同 あらは成心也　（レ）戸障子のしまりを見廻ししめさだむる事也　（ソ）消息セウソク　見廻音信ヲトヅル事也　▲野王案云消息者猶ニ斟酌一也　（ツ）早朝の事也　（ネ）ほゐなくおもふて心をうつす義也　（ナ）無半源語類聚云よはき物につよくあたるやうのこと也　又肖聞抄に强の字を書り同じ心也　又云いかにトハ局の見苦敷を卑下して云心歟女房のいらへも局の見苦しからぬ由を挨拶する心也

（ラ）姫宮の御かたの、（ム）わらはべのさうぞく（ウ）せさすべきよしおほせらるゝにわらはのあこめのうはをそひは、なに色につかうまつるべきと申を、又わらふもことはりなり、姫宮の御前のものは、れひのやうにてはに（ノ）くげにさふらはん、ちうせい（オ）おしきちうせいたか（ク）つきにてこそよくさふらはめと申を、さてこそは、うはをそひきたるわらはべも、まいりよからめといふを、なを例の人のやうに、かくないひ笑ひそ、（ヤ）いときんかうなるものをいとをしげにと（マ）せひし給ふもおかし　是第八節上につゞひて生昌が日比の事のうはさを書たり　さうぞくとは姫宮のわらはにたまはる裝束を生昌に調進せよと仰付らるゝこゝろなり　わらはのあこめのとは生昌が詞也　又笑ふもとは生昌を女房達のわらはるゝも尤と也地の詞也　例のやうとはなみ〳〵の色にてはわらはにはつきなからんと也　ちうせいおしきとは色のたとへ物也ふつがうなる物を色のたとへにするとの心也　まいりよからめとはおさなき姫君なれば衵の色のあるをこそしほらしくおほすべければわらはもそれを着て參らばいみじからんと也　なをれいのとは中宮の詞也つねていの人のごとくいひわらふぞとおほせらるゝ也　いときんかうとはゐんぎんしつはくな者なればおもはくことなるぞと女房達を制し給ふ也　是迄は生昌が云し詞うはさなどを

御前にて女房達の取沙汰し給ふこと也

(ニ)皇胤圖云

∴一條院 ― 敦康親王 一品式部卿 母中宮定子
　　　　 ― 女宮 號一品宮 母同敦康
　　　　 ― 女二宮 母同
　　　　 ― 後一條院 母彰子
　　　　 ― 後朱雀院 同
　　　　 ― 脩子内親王 同

大鏡云大姫君定子は一條院の十一にて御元服せさせ給ひしに十五にてや參らせ給ひけんやかて其年の六月一日に后に立せ給ふ中宮と申き扨關白殿などうせ給ひて後に男みこ一人女みこ二人うみ奉らせ給へりき女宮は入道殿の一品宮とて三條におはします女二宮は九條にてうせさせ給ひにき男親王式部卿の宮敦康親王とこそ申しか云々下略之

△定子の系圖の事

∴法興院攝政兼家公 ― 道隆 ― 女子定子
　　　　　　　　　　　　　― 女子三條御息所

(ム)生昌中宮へつかふまつる故にわらはべの裝束を用意し調進せよとの義也　(ウ)諸抄說々あり藻鹽草の一義云舞絹のやうなる物也上に打かくる物を云衵袍「アコメノウハオソヒ」(イ　姫宮と云よりはなり昌が申上る趣也　(ノ)あしからんと也　(オ)折敷ヲシキ　(ク)高坏タカツキ　ちうせいは塗色なり　(ヤ)勤考キンカウ　ゐんきんなる心也　(マ)制いましむる心也

(ヤ)中げんなるおりに、大進もの聞えんとありと、人のつぐるをきこしめして又(ミ)なでうことといひて、わらはれんとならんと、おほせらるゝもいとおかし、行てきけとのたまはすれば、わざといでたれば、一夜の門のことを、(フ)中納言に語り侍りしかば、いみじうかんじ申されて、いかでさるべからんおりに、心のどかにたいめんして申うけ給はらんとなん申されつるとて、又こともなし、一夜のことやいはんと心ときめきしつ(テ)れど、いましづかに御つぼねにさふらはんと、じゝていぬれば、歸り參りたるに、さて何事ぞとの給はすれば、申つる事をさなんとまねびけいして、わざとせうそこしよびいづべき事にもあらぬを、をのづからはしつかたつぼねなどにあらんにもいへかしとてわらへば、をのが心地にかしこしとおもふ

人のほめたるを、うれしとやおもふとてつげしらするならんと、のたまはする御けしきもいとめでたし

是第九節生昌がこと〴〵しく物申上んとて我自質のみいひしことなるさまを女房達御前にて啓し笑はるゝを中宮いましめ制し給ふ心也　ちうげんとは前をうけていふ前の御うはさあるなかばに生昌參りたると也　人のつぐるとは大進が詞取次申女房也　又なでうとは中宮の仰也生昌が何事やらんこと〳〵しく人をよびて申上んといふは又例のやうににげなき事をや申上わらはれんぞと也　行てとは女房達に行て大進が申ことを聞と也　わざととは其事計に女房達端居に出給ふと也　一夜のとは生昌が詞也過し夜御とがめ有し門の事于定國が事などを中納言に語侍しかばいみじうかんじてなを心靜にきかまほしき由申されたりと披露する心也　又こともなしとは地の詞也　一夜の事とは女房達の心也彼過し夜障子あけし事はいかさませうそこ計とはおもはれずさだめて懸想の心なるべし今またいひ出やしつらんと心ときめくと也　いましづかにとは生昌が詞也　我おもはくにありし事を披露申つれば今は罷立との義也　かへり參りたるとは女房達御前に歸參りたると也　さてとは中宮のたづね給ふ心なり　申つるとは生昌が申つる事をかやうになどゝまねし申上る心也けいしてと句を切べし啓してわらひ判するとの心也　わざとゝは女房達の批判する心也　をのがとは中宮の生昌をたすけて仰らるゝ詞也生昌が心にいみじうおもひし中納言がほめしをうれ敷やおもひひ露するならんと大やうにの給ふ心也是迄生昌がことやうなるさまをいひ述たり

(ヤ)中間と書也　(マ)何條と書也何事かと云心也又なでう事なきなど云は難ずべき事なきなど云心也　(ケ)きのふなどゝ云に同じ事也後漢書李充傳一日聞註一日猶昨日　(フ)公卿補任を考がふるに長保元年同三年の內の中納言は藤原時光同實資平惟仲等也この中の人をさして中納言にかたりしと云成べし　(コ)感カンジ考辭カムジ　(エ)源語類聚云時の一字をよむ也めくは付字也時に成たると云心也　(テ)辭して也いとまごひする事也

うへにさふらふ御ねこは(ア)、かうぶり(サ)給はりて、命婦(キ)のおもとゝて、いみじうおかしければ、(ユ)かしづかせ

給ふが、はしに出てふしたるに、めのとのむまの(メ)命婦、あな(ミ)まさなや入給へとよぶに、(シ)きかで日のさしあたりたるに、ねふりていたるをおどすとて、おきな丸いづら命婦のおもとこずはくへといふに、まことかとて、しれ(ヱ)ものはしりかゝりたれば、(ヒ)をびえまどひて、みすの内にいりぬ、(モ)朝がれいの御まへにうへはおはします、御覧じていみじうおどろかせ給ふ、ねこは御ふところに入させ給ひて、おのこども(一)めせば、藏人たゞ(セ)たか(ス)參りたるに、此おきな丸うちてうじて、いぬ(二)、しま(三)につかはせ、たゞいまと(四)仰らるれば、あつまりて(五)かりさはぐ、むまの命婦もさいなみて、めのとかへてん、いとうしろ(六)めたしと、おほせらるれば、かしこまりて御前にも出ず、犬ばかりいで、、瀧(七)口などしてをひつかはしつ　是よりなきなどはすれと云所迄御猫犬などにつゐてこと〴〵なる旨を云也是則第十節なり就レ中此には猫の事を云也　うへにとはうへのみつぼねうへの女房などゝいふがごとし内裏をさす也こゝは皇子姫宮などゝ見るべし　かうふりとは猫に命婦のおもとゝ云叙爵を給はりしと也　いみじうとは猫をさしてほむる心也

はしとは端居也　めのとゝは此むまの命婦を猫のめのとにつけられし故に如此かいしやくする也　あなまさなやとははしゐにおるをいやしめてしかる心也　きかでとはねこのさまを云也　おどすとはめのとの命婦猫をよびいれんためにおどす心也　おきな丸とは犬の名也　まことかとはめのとのいひしことを犬がまことゝ思ふと也　しれ物とは犬をさす　をびえとは猫のありさまを云也　あさがれいとはおましの所を云也　おどろかせ給ふとは御寵愛の猫がけしからぬ躰をみ給ひて驚かせ給ふと也　おのことは御けしきかはりて犬もめのともいましめをかうむる心也うへより藏人に仰奉らるゝ義也　あつまりてとは藏人どものあつまりて犬をかりをふ義也　めのとかへてんとはことゝ人を猫のめのとにつけてむまの命婦が爵をけづらんとの義也　犬ばかりとはめのとはさいなまるゝばかりにて犬のみをひやられたる心也
(ア)格物論云猫捕レ鼠獸斑文不レ一目睛旦暮圓及レ竪歛欽如レ綖其鼻端冷惟夏至一日暖云々　(サ)伊勢物語抄にうゐかうむりと云を叙爵元服の兩義とする說有

今こゝの義は叙爵也　(キ)令義解云謂婦人帶五位以上曰内命婦也五位以上妻曰外命婦也周禮注云男命夫女命婦命有爵命之義也　五位の叙爵を給はると也　おもとゝは内侍と書ておもとゝよむ也侍の字をも長恨歌におもとひとゝよめり　(ユ)小右記に云長保元年九月十九日内裏御猫産子女院左大臣右大臣有産養事有衛重垸飯納宮之猫乳母馬命婦時人咲之奇怪事也天以目若是可有徴歟未聞禽獸用人乳嗟乎　寛平御記云 元年二月十六日朕聞時猫消息曰驪猫一侯太宰少貳源精秩滿來朝所献於先帝愛其毛色之不類餘猫云々亦捕夜鼠捷於他猫先帝愛翫數日之後賜之于朕朕撫養五年于今每旦給之以乳粥豈帝取材能之翹挺因先帝所賜雖微物殊有情於懷育耳仍而日汝含陰陽之氣脩與竅之形心有心寧知我乎猫乃歎息擧首仰睨吾顔似咽心盈臆口不能言也　寵愛の事也寵、冊カシヅク　(メ)馬命婦下詳也(ミ)源語類聚云無正無路也さかなきなど云心也　(シ)威「ヲドス」　(ヱ)左傳云白癡不惠不辨豆麥云々おろかなると云心也　(ヒ)癒惑ヲビエマドフ　(モ)禁秘抄云朝餉二間云々源語類聚に朝干間二間也清涼殿につゞきたるあはひ也

(セ)清和源氏系圖云

⁂清和天皇——貞純親王——經基王——滿中
- 滿政
  - 忠重
  - 忠隆　藏人駿河守左衛門尉正五位下
  - 國隆

(ス)或本たゞたかなりなか參りたると有脇書なりなか此名見えずと云々　(一)挺打　ウチテウジ　打調　(二)犬と句を切べしいぬを嶋へながせと仰らるゝ也　(三)驅騷「カリサハグ」　(四)罪「サイナム」　(五)命婦の爵を取返し給はんと也　(六)心もとなきなど云心也　(七)西宮記云瀧口武者以名簿下給先試其藝依善射被定下藏人　勅仰諸陣陣宣書宣旨押陣　禁秘抄云員廿人無有官大略同所衆但白地不昇殿着布衣且暮候砌職原註其番所在清涼殿後艮邊也寛平御宇被置之云々

あはれいみじうゆるぎあるきつるものを、三月三日頭辨、柳のかづらをせさせ、桃の花かざしにさゝせ

櫻こしにさゝせなどしてありかせ給ひしおり、かゝるめ見んとはおもひかけんやとあはれがる、お(九)ものゝ折はかならずむかひさふらふに、(十)さう〴〵しくこそあれなどいふて、三四日になりぬ　是より犬をおひやりし跡にてつね〴〵のありさまをうはさある義也　あはれとは女房達などの詞也おきな丸つねに御前ちかふゆるぎありきつるものをとあはれむ心也　かづらをせさせとはおきな丸に人などのごとく花のかざしせられたると也　かゝるめみんとは花のかざしなどさせられたるいみじき折も侍りしにかく不便なる事あらんとはおもひよらざりしと云心也　おものゝとは供御などまいる折は御前にめされしに今はことたらぬと嘆する心也
(八)職事補任云藏人頭左少辨正五位下藤道兼　又云左近權中將藤實賢三代頭云々　(九)御膳「オモノ」是は内々の供御なるべし次第禁秘抄に見えたり不及引　(十)寂莫「サウ〴〵シ」河海　さびしうことたらぬ心也

ひるつかた、犬のいみじくなくこゑのすればなにそ(イ)の犬の、かくひさしくなくにかあらむときくに、よ(ロ)ろづのいぬどもはしりさはぎとふらひに行、(ハ)みかはやうどなるもの、はしりきて、あないみじ、いぬを藏人二人してうち給ふしぬべし、ながさせ給ひけるが、かへり參りたるとててうじ給ふ、(ニ)といふ、心うの事やおきなまろなり、たゞたかさねふさなんうつといへば、せいしにやるほどに、(ホ)からうじてやみぬ、門の外にひきすてつといへば、あはれがりなどする　是よりをひやられしおきな丸歸り來しを藏人の打侍りしかばうへに聞しめしてあはれみ給ふ事を書たり　三四日とはおきな丸追やられて後三日四日ばかりすぎての事也　なにぞの犬のとはなく聲を女房達の聞て下知せらるゝ義也いづくの犬がかくすさまじくほゆるぞとてみせ給ふ心也　よろづのとは犬どもなく聲につれあつまる心也　みかはやうどとは見せにつかはさるゝしも女也　あないみじとはみかはやう人が見て參りしやうを申詞也　心うの事やとは女房の不便がる詞也　せいしにやる程にとはうつ事をとゞめにつかはさるゝ間にはやおほく打たる心也門のほかにとは打たゝいて又外へすてたると聞し召あはれみ給ふ心也

(イ)いづこの犬ぞと云詞也うつぼ物語などにもかれはなにその人ぞと云同じ心也　(ロ)一犬吠レ虚萬犬嘷レ實など云古語をもて書たる文勢也　(ハ)御厠用人「ミカハヤウド」注下に詳也　(ホ)辛「カラウジテ」詩經に辛苦をたではらと讀り苦しむ心也

夕つかた、いみじげに(ニ)はれあさましげなる犬のわびしげなるが、(ヘ)わなゝきありけば、あはれまろかかゝる犬やは此ごろは見ゆるなどいふに、おきなまろとよべど耳にも聞いれず、それぞといひ、あらずといひ、口々に申せは、右近ぞ見しりたるよべとてめせ(ト)ば、參りたるに、これはおきな丸かと見せさせ給ふに、似て侍れども、これはゆゝしげにこそ侍るめれ、又おきな丸とよべば、よろこびてまふでくるものを、よべどよりこず、あらぬなめり、それはうちころしてすて侍りぬとこそ申つれ、さるものどもの二人してうたんには、いきなんやと申せば、心うがらせ給ふ、くらうなりて、ものくはせたれどくはねば、あらぬ物にいひなしてやみぬ　是より以下おきな丸うたれて後みぐるしくわびしげにさらぼひありくをうへ下共見まとひ給ふさまを書たり　夕つかたとは犬の御うはさのたへやらぬ折ふし也　いみじげにとは犬のありさまを云也おきな丸がうはさいまだたへぬ内にいづこの犬やらんわびしげなるいぬの見ゆるとの心也　あはれまろかとは此わびしき犬につけても丸をおぼし出す心也まろかのか文字歟「ウタカヒ」の心也　おきな丸とよべどとはわびしげなれ共よく似つればもしやおきな丸かとうたがひをなす心也　口々とはうたがひあらそう心也　右近とは證人にめし尋給ふ心也右近は久しくなれそだてつればみしりたる心なるべしその右近さへもみまがひつれば其外の人は見まがふもことはりぞと云心也　參りたりとは右近がめされてまいりたると也　似てとは右近が詞也　又とはおきな丸が事をいひて今の犬のちがふたるさまをいふ也　よべどとはいひて此犬はことい ぬぞと斷申心也　それはとは又おきな丸が事を今の犬の事を云也　二人してとははじめ藏人の打し事をいふ也　心うがらせ給ふとは中宮の御心也　くらうとは後に女房達の物どくはしこゝろむれどおそれちかづかぬゆへにいよ〳〵ことい ぬにいひなしたると也一たびうちて

うせられしゆへに畜生のはかなさはかならずおそれたゝずむもの也　（ヘ）腫「ハル丶」　（チ）片野少將季繩が女と云說あり妹と云說あり系圖下に注之（リ）或本によべとてしもなるをまづとみの事とてめせば參りたりと書たる本有是右近が局にありしをめして參りたる由の詞也今の傳本に無之ゆへに此詞をとらざる也

つとめて、（リ）御けづりくしに御てうづまいりて、御かゞみもたせて御覽ずれば、げにいぬのはしらのもとにつゐ居たるを、あはれきのふ、おきなまろをいみじう打しかな、しにけんこそかなしけれ、何の身にか此（ヌ）たびはなりぬらん。いかにわびしきこゝちしけんと、うちいふほどに、此ねたる犬のふるひわなゝきて、なみだをたゞおとしにおとす、いとあさまし、さはこれおきなまろにこそありけれ、よべはかくれしのびてありけりと、あはれにておかしき事かぎりなし、御か（ル）ゝみをもうちをきて、さはおきなまろといふに、ひれふしていみじくなく、御前にもうちわらはせ給ふ、人々參りあつまりて、右近內侍めしてかくなど仰らるれば、わらひのゝしるを、うへにも聞しめしてわたらせおはしまして、あさましう犬（ヲ）などもかゝる心ある物なりけりとわらはせ給ふ、うへの女房たちなども、きゝにまいりあつまりて、よぶにも、今ぞたちうごく、なをかほなどはれためる、もの（ワ）てうぜさせばやといへば、つゐにいひあらはしつるなどわらはせ給ふ、たゞたかきゝて、（カ）大ばんどころのかたより、まことにや侍らんかれ見侍らむといひたれば、あなゆゝしさるものなしといはすれば、さりともつゐに見つくるおりも侍らん、（ヨ）さのみもえかくさせ給はじといふなり、さて後、かしこまりかうじゆるされて、もとのやうになりにき、猶あはれがられて、ふるひなき出たりしほどこそよにしらずおかしくあはれなりしか、人々にもいはれてなきなどはすれ　是より中宮御前の庭に犬の侍りしにその犬になぞらへ彼おきな丸が事をいたはしく仰られじかばいぬその御ことばを聞うけてうれしげに見えければ中宮さてはおきな丸ぞとしろしめし試み給へばうたがひもなくおきな丸にて侍しゆへうへ下もろともにあはれにおぼしめす事を書又畜生なれども心あるおきな丸ぞといふ心も見えたり　御

けづりくしとは中宮御けさうなどめす折ふし也　はしらのとは御階などの柱の下也　あはれとは中宮の心詞也　何の身にかとは藏人打殺してあれば今は生をかへて六道四生の內いかなる生をかうけつらんぞと也　いかにとは犬の心をゝしはかり給ふ也　此ねたる犬とは今迄ことゝいぬとおぼしめしつるに御詞を聞えて氣色ばめるさま也　さばとはさればこそこれがおきな丸よいまだ死はせぬぞと仰ある心也　よべばとは初のうたれしにをびえ又もやすかしうたんかとあやしみよべ共かくれしのぶも斷ぞとあはれに思召さま也　さはおきな丸とは又かさねてよび試み給へばいよ〳〵うたがひなくうれしげにほゆる心也　御前にもとは中宮の御事也　右近內侍とは初見まどひし事を仰られん心也　うへにもとはみかどの御事也　あさましうとは御門の仰也　うへの女房とは禁中の女房なり后宮の女房院の女房などゝて別々也　よぶにもとはこのかた〴〵の犬の名をよび試み給ふ也　なをかほなどもとは中宮の詞也うたれてかほもはれつれば療治などせさすべきとの仰也　つゐにとは御門の仰也かほのかくはれまがひたるをつゐによびあらはし給ふとて與せさせ給ふ義也　たゞたかきゝてとは初しぬるばかりに打てとをくをひやりしかば其犬にはあるまじとうたがひて見侍らんと云也　あなゆゝしさるものとは女房の詞也初つらくあたりし人なればいみてかくす心也　さりともつゐにとは忠隆が詞也さやうにせいし給ふ共いつぞは見申さんとの心なり　さてのちとは犬のありさまをいふ地の詞也　猶あはれがられとは初より一入あはれみをかうむると也　よにしらずとはほかの犬はいざしらず此犬はこと成逸物かなとおほしめすと也なりしかのか文字哉の心也　人々にもとは逸物なればこそ人々にもいひはやされてあれと地の詞也又云けだものなれどもすくれたる心ある故に後迄も人々にいひ出しあはれしうおもはれんと也おろかなる人にあたりたる下の心あるべし　是まで十節の內に猫犬などの事に付てこと〳〵なるおもむきをいひ述たり

（リ）師輔公ノ遺誡ニ云先ツ起テ稱ヘ二屬星ノ名字七遍一次ニ取レ鏡ヲ見レ面見レ暦知二吉凶一次ヲ取二楊枝一向レ西洗フレ手　云々　次ニ

梳頭　(ヌ)六道四生二十五有の間死此生彼の理りなればいかなる所何の身にか成つらんとの心也　(ル)幟臥　領巾臥　(ヲ)禁中の女房上臈也　或は中宮の母上の女房也　(ワ)調の字也療治などする事を云也　(カ)禁秘抄云臺盤所三間北間朝餉方敷黄端疊東倚子其南女房簡入袋辛櫃朱塗也臺盤上有御膳棚二階檜火櫃一圍棊單棊等同殿上中間臺盤東黑染厨子上置菓子其南立馬形障子鬼間方奥一間出テ也疊中并南間紫端長押下二間是渡廊籠也南有布障子二間北遣戸一間蔀一間常不止二間際程副北立馬形障子西布障子其外號切簾一間懸遣戸御簾二間也抑々臺盤所東北障子到鬼間和繪也　(ヨ)畏「カシコマリ」おそるゝ心あり勘事「カウジ」勘當の義也　▲よにしらず以下少納言心によそしらず哀に思ひしと也

正月一日、三月三日はいとうらゝかなる、五月五日は(タ)くもりくらしたる、七月七日はくもりて、夕つかたはれたるそらに、月いとあかく、(ヒ)星のかずも見えたる、九月九日は(ソ)あかつきがたより雨すこしふりて、菊の露も(ツ)こちたくそぼち、おほひたる(ネ)わたなどもいたくぬれ、うつしの香もてはやされたる、つとめてはやみにたれど、猶くもりて、やゝもすればふりおちぬべく見えたるもおかし、よろこびそうするこそおかしけれ、(ナ)うしろをまかせて、(ラ)しやくとりて、御前のかたにむかひてたてるを、(ム)はいし、(ウ)ぶたうしさはぐよ　第十一節五節供に就てそらのけしきも時にしたがひ人の心もめづらかにしてこと事なるさまを云也　正月一日是五節供の初也其けしきは三段にのせしかばかさねて云に不及心成べし　三月三日とは是も上にいひしかば只五せくの次第を云迄の心なるべし　五月五日とは其折節の氣色を云也　七月七日とはこのみぎりは殘暑の白雨にて夜晝曇がちなれ共くれがたのはれて星合の詮ある事を云也　九月九日はあかつきがたとは是もせくのけしきを云也晨に雨すこしふり露もこちたく菊の枝たはゝなるよそほひ思ひやるべし　うつしの香とはきせわたにうつる香迄も賞玩せらるゝ心也或は菊の雨にそぼちつゝ風などにかほるをいふ也　つとめてとは曉ふりし雨のあけてはやみしかども猶雨雲おほひたるけしきぞと也　よろこびと

はせくのことぶきをまうす心也此詞重陽の朝のことぶきをいふのみならず、いづれも前のせく共にかよふ詞也　うしろをとは隨身に裾をまかするさまなり　はいしとは折々の節會の儀式をいふ也　(タ)天中節梅雨の比なればいつも降がち也詩瀟々踈雨洗二黃梅一と作るは此心也　(レ)銀燭秋光冷二畫屛一輕羅小扇撲二流螢一玉階夜色凉如レ水臥看牽牛織女星　(レ)六帖に　貫之「夕月夜久しからぬを天の河はやく七夕こきわたりなん　(ソ)菊爲二重陽一冐レ雨開朗詠　(ツ)河海云おほき心也殊外也ことごとしき也　(ネ)菊のきせわた事也兩說也なべてしれる事也後撰にとなりにすみ侍ける時九月八日いせが家のきくにわたをきせにつかはしたりければと云々　(ナ)隨身共が裾を弓にまひて持る事也　(ラ)江次第抄曰笏者備二忽忘一之義也在二君前一記レ事恐二忽忘一粘二紙笏上一記二其頭緒一今笏紙之意也式部判官記云笏長一尺二寸上廣二寸七分下廣二寸四分厚二分　式曰凡五位已上通二用牙笏白木笏一前詘後直六位已下官人用レ木前詘後方　(ム)拜「ハイシ」拜賀の心也　(ウ)舞蹈「ブタウシ」五節の舞のこと也　諸卿南庭に列座して右左右の儀式有則春庭樂に應ずる也有職の大事也

(井)今內裏のひんがしをば、北のぢんといふ、(ノ)ならの木の、はるかに(ク)たかきがたてるを見て、(オ)いくひろかあらんなどいふに、權中將の、もとよりうちきりて、(サ)定證僧都の(コ)えだあふぎにせさせばやとのたまひしを、(ケ)山しな寺の(フ)別當になりて、よろこび申すの日、近衛つかさにて此君出給へるに、高きけいしをさへはき給ひつれば、ゆゝしく高し、出ぬる後こそ、などそのえだあふぎはもたせ給はぬといへば、もの忘れせずとわらひ給ふ　十二節定證僧都のことやうなるすがたをいふ也清少納言見及びし事を其まゝ書たり　今內裏とは一條院の御時內裏炎上せしかばあらためつくられしを今內裏といふ也ならの木こゝにありしと也　いくひろかあらんとは人々うはさしたる心也　權中將とは此君のたはむれの給ふ心也　もとよりとはならの木を根もとより切て定證のえだあふぎにせばやと也の給ひしをのをもじやすめ字に見るべし　山しな寺とは藤氏の氏寺也權中將の枝あふぎのたはむれをのたまひしより

はるか後に山階寺の別當をもち給ふ義也　よろこび申すの日とは別當に補せられ拜賀などある時のこと也　此君の出給へるにとは權中將の拜賀に參會し給ふとの義也　高きけいしとは糸屣也定證僧都のありさまをいふ也　出ぬる後とは内よりまかでたまひし時也　など其えだあふぎとは定證のたかきすがたのいみじきていをみて權中將の亦たはむれのたまふ詞也　物わすれせずとは定證の詞也ほどのすき久しき事もわすれ給はぬ君かなと權中將にいらへ給ふ心也　是まで四段の内にて侍るすべて何れの章にも題のおもむきのごとくことごとくなる詮をいひのべたり其中の文章心遣ひ只あるかぎりのことくさのごときにもあらず底に心のこもり深くとをふして墨筆につくしがたき事のみ也

（井）勘物云ふ今内裏一條院長保元年六月十四日内裏燒亡十六日行ニ幸一條院女院御所ニ也同二年十月十一日行ニ幸新造大内ニ云々（至）今按考ニ諸記ニ未レ考ニ得長保元年内裏炎上事ニ且以ニ敎秀卿勘物ニ注レ之又林氏王代一覽に長保三年十一月内裏燒亡の由記せり不審元年と三年と兩度炎上ありや　（ノ）楢「ナラノキ」（オ）幾尋「イリヒロ」八尺曰レ尋　（ク）勘物曰權中將源成信

源氏系圖曰

村上天皇――致平親王四品兵部卿――成信従四位上左中將法名眞舜
　　　　　　　　　　　　　　　――致信従四位下右中將

（ヤ）勘物云長保二年三月十七日以ニ定證位ニ補ニ興福寺別當ニ云々　（マ）枝扇子は大ぼねを木の枝有所にて要の方にして法師の紐に懸る也楢木を用ゆるといひしは納凉の景物と云故も侍れば也　（ケ）大鏡云不比等大臣は山階寺を建立せしめ給へりそれによりかの寺には藤氏をいのり申に云々　榮花物語紫卷云十月山階寺の維摩會に參らせ給ひてはよろづをせさせ給うちに是はもとより藤氏の御はじめ不比等のおとゞの御建立の所なれば代々の一の人しりをこなはせ給ふ　拾芥云山階寺法相爲レ宗興福寺不比等和銅三年造ニ山階寺是也　（フ）一寺の統領を寺務別當と云也　（コ）職原曰元者近衞中衞也平城天皇御宇大同二年勅以ニ近衞ニ爲ニ左近衞ニ以ニ中衞ニ爲ニ右近衞ニ唐朝殊重ニ此職ニ統ニ領諸宿衞禁軍ニ故也本朝又爲ニ重任ニ

清少納言枕草紙抄卷二

【五段】山は、(イ)をぐら山、(ロ)三笠山、(ハ)このくれ山、(ニ)わすれ山、(ホ)いりたち山、(ヘ)かせ山、(ト)ひはの山、(チ)かたさり山こそいかなるらんと、おかしけれ、(リ)いつはた山、(ヌ)のちせ山、(ル)笠取山。(ヲ)ひらの山。(ワ)床の山は、わが名もらすなとみかどのよませ給ひけんといとおかし、(カ)いぶきの山(ヨ)あさくら山よそにみるこそおかしき、(タ)いはた山、(レ)おほびれ山もおかし、(ソ)臨時の祭のつかひなど、思ひ出らるべし、(ツ)手向山、(ネ)三輪の山いとおかし、(ナ)音羽山、(ラ)まちかね山、(ム)たまさか山、(ウ)みゝなし山、(ヰ)末の松山、(ノ)みのゝおやま、(オ)はゝその山、(ク)位山、(ヤ)きびの中山、(マ)あらし山、(ケ)更科山、(フ)をばすて山、(コ)をしほ山、(エ)あさまの山、(テ)かたゝめやま、(ア)かへるやま、(サ)いもせやま　是より下つかた地理を書しるすその地理の際に名所舊跡あまた侍れども折ふしのうたこと葉書などによせあるをおもひよるまゝに書のせて和歌のたよりとし侍るならんかしなを少納言がこのかず〳〵の山峯をえらびいでゝ書たる心はふかしぎのことなればたやすく墨筆に述べがたし別に口決の條あるもの也　山はとは是則此段の題にて侍れば當段の心もかくれなきもの也抑山は地上におゐてさきなるものなれば先山を初にいふ事也　ことに智者は山をたのしむなど本文も侍れば尤いちはやきもの也　かたさり山こそいかならんとはかたさりと名づけし事をいふなりかたさりはかたさがりと云心也　山はいづれも皆丸きかたちなるをこの山にかぎりてかたさがりの心をいひそめけんはおかしきとの心なるべし　とこの山はわがなもらすなとは天智天皇のあふみの釆女をめして御床をかさね給ひしをとこの山によせよませおはします御歌の心をいふ也　あさくら山よそにとはこれも名によせて云也朝はいづこもはれやかなるをこの山のみ朝くらき心にいひそめけんはおかしきと也又云あしたの雲霧立かくしよそに見こす心にてやいひ初けんとの心なるべし　おほびれ山もおかしとは是も名に付て云也八幡臨時祭の舞人の大比禮返しをまふよそほひなどをおほひれといふ名におもひよする心なるべし　三輪の山いとおかしとは神

代の昔より名づけ初しみわげの糸の事亦は百襲姫(モモソヒメ)
と契給ひし事などおもひよする心なるべし
(イ)山城嵯峨の奥也小倉山の事なべてしれゝる事也
又雄倉山大和にあり　(ロ)大和國也筑前にも同じ
名侍れ共今の義は大和の三笠山也　(ハ)八雲御抄
に木晴山(コノハレヤマ)奥州云々萬葉に古能久禮(コノクレ)山　大伴家持
「このくれの茂き尾上の時鳥鳴てこゆ也いましく
らしも　(ニ)六帖に「陸奥のちくまの川のあなた
なる人忘ずの山はさかしき　八雲に不忘山奥州云
(ホ)入立山　八雲に奥州　(ヘ)萬葉六　鹿背山(カセヤマ)
「山代のかせ山のまに宮柱ふとしきたてゝ高しら
す　(ト)可尋之　(チ)八雲に奥州也　(リ)歌枕に
伊津波多(イツハタ)山又五幡(イツハタ)山　越前　歸山の邊也　いせ　忘な
ん世にも越路の歸る山いつはた人に逢んとすらん
(ヌ)後瀨山八雲に若狹國云々　(ル)笠取山　同云
山城　(ヲ)比良山　同云近江　(ワ)鳥籠山(いさやかはイ)　近江
犬上郡　古今に「犬上のとこの山成なとり河いさ
と答へて我名もらすな　此歌有人あめのみかどの
あふみのうねめに給へると　かへしうねめの奉る
「山しなの音羽の瀧の音にだに人のしるべく我戀
めやも　(カ)伊吹山　近江又下野　(ヨ)朝暗山
攝州也　朝倉は筑前也　(タ)岩田山　山城　紀州
(レ)大帔山　淸輔抄ニ攝州　(ソ)諸社記ニ云ク臨時祭朱
雀院天慶四年十月五日始レ之云々略取　(ツ)手向
山　大和　(ネ)三輪山　同名義舊事紀に見へたり
(ナ)音羽山　山城　(ラ)待兼山　攝津　六帖に「つ
の國の待兼山の呼子鳥なけゝとかなしいふ人もな
き　(ム)忠見集ニ云むかしかたらひし人津の國玉坂
と云所に有けるを聞つけて罷りあひて云々　下略
之　(ウ)耳無山　大和　(井)末松山　奥州　(ノ)美
濃御山　濃州不破郡　(オ)柞山　可尋　(ク)位山
飛驒　(ヤ)吉備中山　備中　(マ)嵐山　山城　(ケ)更
科山　信濃　(フ)姑捨山　同　(コ)小鹽山　山城　(エ)
淺間山　信濃　(テ)可尋之　(ア)海路山　越前　(サ)
妹背山　紀伊大和

【六段】峯は、ゆ(キ)つるはのみね、あ(ミ)みだの峯、い(メ)やた
かのみね　此段は上の山類のつゞき也上の段にはう
たによせある山どもを書のせられたり此段歌によ
せなきみね共をかきのせられたり上の段とはうら
おもての義にとりなして見るべし

(キ)楪嶺　攝州　(ユ)阿彌陀峯　山城　公任集ニ「今よりはあみだの峯の月影を千代の坂迄頼むべきかな　又神樂岡緣起云東ニアタリテ如意嶽アリ云々是ヨリ六十四丈ヲヘテ南ニ山アリ天津峯(アツサ)ト云後世阿彌陀峯ト云云々(メ)拾遺賀　爲久「あふみなるいや高山の榊にて君が千代をば祈かざゝん

[七段]原は、(ミ)たかはら、(シ)みかのはら、(ヱ)あしたのはら、(こと)そのはら、(モ)はぎはら、(セ)あはづの原、(ス)なしはら、(一)うなひこが原、(二)あべのはら、(三)しのはら、此段は原を書のせられたり以上十のはらを書たり是迄山類を三段しるす此外にもあまた侍れ共例のもらすなるはみてるをかく心にや侍らん

(ミ)竹原　タカハラ　大和　(シ)甕原(ミカノハラ)　和泉　(ヱ)朝原　アシタノハラ　和州　(ヒ)曾原　ソノハラ　信濃　(モ)萩原ハギハラ　紀伊　(セ)粟津原　アハツノハラ　近江　(ス)奈志原　ナシハラ　大和　(一)筆髪子原六帖ニ山上憶良「なにしおへばいづれもかなし朝なくなでゝおふしゝうないこの原

(二)阿陪野原　攝州　(三)篠原　近江

[八段]市は、(十)たつの市、(四)つばいち(五)は大和に、あまたあ(六)る中に　(七)長谷寺にまふづる人の、(八)かならずそこにとゞまりければ、(九)觀音に御えむあるにやと、心ことなり、(イ)おぶさの市、しかまの市、(ロ)あすかの市、此段は市の事を記せり夫(ソレ)市は諸國交易の人つどふ所にていにしへ聖の御代より始れる事なれば歌によみ來る事も久しき也そのゆへに其名所共をしらせんとの心なるべし　たつの市とは名にしおふてふるき所なる故にまづ云なるべし　つば市は大和にと句を切べしやまとにありと云詞をもたせたり　あまたとは再尺の心也豐後にもあればそれに對して云也つば市はあまたある中にやまとのつば市が心ことなるぞと也大和の中にあまた有と見る義はあしき也長谷寺とはつば市の詮を云也かならずそこにとゞまるは長谷寺まうでの人ことさらにつば市にとゞまるをいふ也其ほとりにとまるべき所々あまた侍るにかならず爰にとまるやうになり來るは觀音に緣のある所ならんと也　心ことなりとは賞玩におもふ心也常の所のごとくにはおもはれぬといふ義也

是迄市五ところのせられたり

(十)神代卷には天高市に八十萬神つとひ給ふ由見ゆ後には神農或祝融作レ市(トイフ)　(四)辰市「タツノイチ」

大和　（五）椿市「ツバイチ」　大和　能因歌枕つばき市つば市云々豊後國風土記景行記等云採海石榴樹作椎之處曰海石榴市是は豊後のつば市也　（六）つば市大和にあまた此詞二義あり一にはつば市は大和に有が賞玩ぞと也　二には大和に市あまた有中に此つば市は賞玩ぞと也初の義は豊後のつば市に對して云也後の義は大和のあまたある市其に對して云也　（七）縁起曰長谷神河浦北豊山峯徳道聖人奉立一面觀音菩薩之利生道場也神龜元年公家被建立堂宇同四年三月廿日供養講師行基菩薩　（八）小右記云正暦元年九月八日參長谷寺于時至椿市令交易御明灯土器等參御堂修諷誦布廿端御明三萬灯云々　李部王記云延長八年八月作願文遙祈長谷寺觀音願御病平癒將造白檀觀音像乃奉鏡一面灯明十萬灯　（九）或本觀音のつげ有にやあらんと書る本有今は一向傳本のまゝ也　（十）（イ）志賀磨布「シカマノイチ」　播磨　（ロ）飛鳥市「アスカノイチ」　大和

〔九段〕淵は、（ハ）かしこ淵、いかなるそこの心を見えて（ニ）さる名をつきけんといとおかし、ないりその淵、たれにいかなる人のをしへしならん、（ヘ）あをいろの淵こそまたおかしけれ藏人などの（ト）身にしつべく、（チ）いな淵、（リ）かくれの淵、のぞきの淵、玉淵　此段より下は水遊をしるされたり　いかなるそこのとは淵の名に付て不審する心也此淵の底心いかなるかしこき事あればにやかく名づくるぞと也　ないりその淵とは是も名によせて自問する意也此ふちへ入なとはたれ人のいかなるものにいひをしへたるぞと也　あをいろの淵とは是も名によせて云也六位の藏人はなたの禁色をゆり着する者也さればあを色の淵は藏人のすがたによせ有やと也以上ふち七ところしるされたり

（ハ）かしこ淵　未考　（ニ）かしこ淵そこの心とうけし文體尤興有也　（ホ）舊歌未考　爲尹千首につれなくば身をしづめんとかこつよのそなたの月よないりその淵　（ヘ）在所可尋　澪標巻云六位の中にも藏人は青色しるくと云々　（ト）職原云六位藏人奉行禁中細々公事朝夕御膳等事稱之日下臈也四人分日令奉行故也六位職事又聽禁色至極臈者着麹塵袍是申下御服之儀也晴時雖下臈着之　（チ）南淵　大和　懐中抄「秋なればいな

淵山のきりぐ〳〵す聲よはり行暮ぞかなしき（リ）加久禮の淵　大和

十段 海は、(ヲ)水うみ、(ワ)よざの海、(カ)かはぐちのうみ、(ヨ)伊勢のうみ　此段は水邊のつゞきに海の名所を書のせられたり　水うみとは國中にたゝへて潮のあら海より愛ふかき心也　よざのうみとは是より以下鹽の海を云也四方に海侍れ共とり別て名高き所を思ひよるまゝあげたるなるべし

(ヲ)湖　ミツウミ　近江　(ワ)與謝海　ヨサノウミ　丹後　(カ)或本かはふちとあり　(ヨ)二見の海など成べし

十一段 渡は、(タ)しかすかのわたり、(レ)みつはしの渡り、(ソ)こりずまのわたり　此段も水邊のつゞきに名にふりし渡をあらまし書のせられたり是まで水邊三段あり上の山類三段有に應ずる文體也

(タ)三河國　源順集「行通ふ舟路はあれどしかすかの渡りは跡もなくぞ有ける　(レ)攝津國　伊平卿「もみぢばのうつろふみづの渡守風は行來にいとふのみかは　(ソ)つの國須磨の浦の事也

十二段 みさゝぎは、(ツ)うぐひすのみさゝぎ、(ネ)かしは原のみさゝぎ、(ナ)あめの陵　此段は天子の御廟をしらせたり是則國にゐてまづ諱をしるのことはり也御陵あまた侍る中に取別聖の君を擧たり又氏の神に祝れ給へる故にことに書しるしたるにやならん

(ツ)大和に鶯の岡と云所有其邊に垂仁の陵あり蓋し是をいふか可尋　又百舌鳥陵の事成べしいにしへは百舌鳥をうぐひすと訓じたると見えたり本草にも百舌鳥鶯と註あり然らば仁德天皇の陵也歷代を考がふるに外には鶯の陵といふ所なし云々

(ネ)拾芥抄云柏原桓武天皇在伏見山從東邊二町許入在稲荷南野水鏡云延曆廿五年三月十七日崩年七十葬柏原陵　(ナ)天智天皇在城州山階中山内府忠親卿云治十年十二月三日御門御馬にたてまつりて山しなへおはして林の中に入てうせ給ひぬいづくにおはすといふ事をしらず只御沓のおちたりしを陵にはこめ奉し也

十三段 家は、(ラ)近衞御門、(ム)二條、(ウ)一條もよし、(ヰ)染殿の宮、(ノ)せかゐ院、(オ)すが原の院、(ク)冷泉院、(サ)朱雀院、(マ)とうゐん、(ケ)小野宮、(フ)こうばい、(コ)あがたのゐど、(エ)東三條、(テ)小六條、(ア)こ一條　是より下の心にくきと云迄當段の内也凡此段には宮室の事を書述られたり口には例

の枕詞にまづやんごとなき御殿をあらまし書つらね奥には大内のいみじき事をまのあたり少納言が見及びしまゝに書のせられたり誠にうけるあだしきことのごときにはあらずいにしへの事をまのまへ見るやうに侍る事は少納言がかたみなれば一かたならず思ひ尤珍重すべき事なるべし今此段を見やすからしめんため八節にわけて釋し侍る就中此一節はまづやむごとなき御殿ども書つらねたり

(ラ)拾芥云近衛北烏丸東云々　(ム)拾芥云二條院ハ二條北堀河東天暦母后御領　(ウ)同云一條院ハ一條南大宮東二町謙徳公家又爲ニ法住寺大臣爲光家ト也　(井)拾芥云染殿正親町北云々　(ノ)清和院正親町ノ南京極西清和母后御在所　又神樂に大原やせがゐと云は大原郷に有清水の名云々　(オ)菅原院勘解由ノ小路南烏丸西一町菅贈太政大臣御所或云ニ參議是善家ニ也當時號ニ歡喜光寺ト北野祭日社氏來ニ此所ト取ニ枇杷ヲ供レ神云々　(ク)冷泉院大炊御門南堀河西嵯峨天皇御宇此院累代後院弘仁亭本名ニ冷然院ト云々而依ニ火災ニ改ニ然字ヲ爲レ泉天暦御記然者改ニ冷然ヲ爲ニ冷泉ト也　(ヤ)朱雀院累代後院或號ニ四條後院ニ三條ノ北朱雀ノ西四町四條ノ北西坊城ノ東　(マ)在所不詳　(ケ)小野宮大炊門南烏丸西惟高親王家定額傳領レ之清愼公傳領レ之　(フ)紅梅殿五條坊門北町西北野御子家或天神御所　(コ)井戸殿又縣井戸一條北東洞院西角云々大膳守きんひらのむすめどもあがたの井戸と云所にすみけりと大和物語に見ゆ　(エ)東三條四條院誕生所或重明親王家云々二條南町西南北二町忠仁公家貞信公大入道殿傳領長久四年四月晦燒失　古事談六云東三條者李部王家也彼王夢ニ東三條南面金鳳來舞ヲ仍李部王雖レ被レ存下可レ即レ位之由上不ニ相叶一而大入道殿傳領レ之後一條院乘ニ鳳輦ニ西廊切間令レ出給畢云々　(テ)北院楊梅北烏丸西又號ニ小六條ト小六條院御領今小六條殿　(ア)小一條近衛南洞院西師尹公家一云ニ山吹殿ニ清和天皇誕生所貞信公家

(サ)清涼殿の、うしとらのすみの所のへだてなる御さうじに、(キ)あらうみのかた、いきたるものどものおそろしげなる、手ながあしながをぞかゝれたる、うへの御つぼねの戸、をしあけたれば、つねにめにみゆるを、にくみなどしてわらふほどに、(ユ)かうらんのもとに、あ

をきかめのおほきなるすへて、櫻のいみじくおもしろきえだの五尺ばかりなるを、いとおほくさしたれば、かうらんのもとまでこぼれさきたるに、ひるつかた、[一]大納言殿櫻の[二]なをしのすこしなよらかなるに、こきむらさきのかた[三]紋のさしぬき、しろき[四]御ぞどもうへにこきあやのいとあざやかなるをいだして、參り給へり、うへのこなたにおはしませば、戸口のまへなるほそきいたじきにゐ給ひて、ものなどそうし給ふ、みすのうちに、女房櫻のからぎぬともくつろかにぬぎたれつゝ、[五]藤や[六]まぶきなど、色々にこのもしく、あまた、こはしどみのみすよりをし[七]出たるほど、[一]日のおましのかたには、おものまいるあしをと高し、[二]けいひつなどをし／＼といふこゑ聞ゆ、うら／＼とのどかなる日のけしきなどいとおかしきに、はて[三]の御ばんもたる藏人まいりておものそうすれば、ならの戸よりわたらせ給ふ、御ともに大なごん殿まいらせ給ひて、ありつる花のもとにかへりゐ給へり、[四]宮の御まへの御木丁をしやりて、なげしのもとに出させ給へるなど、たゞ何事もなくよろづにめでたきを、さふらふ人もおもふ事なき心地するに、[五]月も日もかはりゆけども、ひさにふるみむろの山の、と、いふふることを、ゆるゝかにうちよみ出してゐ給へる、いとおかしとおぼゆる、けふにぞ千とせもあらまほしげなる御ありさまなるや、是第二節禁中のいみじき所々をいひをしへ又ゆたかなる御代の御遊などを書つらねたり　清涼殿とは又御殿とも中殿ともまふす、つねのおまし也　北のへだてとは清涼殿の北に立らるゝ障子をあらうみの障子と申也　うへの御つぼねの戸とは女御宮などのまします御つぼねの戸をあけつればあら海の障子見ゆるさま也　にくみなどゝは常に見る所なれどもおそろしき繪ぞといひ戯る心也　かうらんとはうへの御つぼねの御縁御階などのてい也かめに花をいけさせて御覧じ給ふをそのあたり見しまゝに書つらねたり　さくらのなをしとは大納言の裝束をいふ也　うへのこなたにとは清涼殿のうしとらの間にましますと也　ほそき板じきとは御縁側などの事也　物などゝは公事或は折ふしの御物語などを大言納殿の奏聞し給ふ心也　みすのうちとは中宮のましますす御つぼね也　をし出したるとは

ぬきたれかいどりなどのはし〴〵のきぬがみすより外へ見えたるさま也　ひのおましのかたにとはつねの御座へ供御などさゝげ來る心也　あしをと高しとは供御さゝぐるよしを申て女官のはしりさはぐ心也　けいひつとはみかど日のおましへわたらせ給ふ時御さきはらふ心也　はての御ばんとは品々の供御を臺盤にそなへそろふ由を內侍などへ申入る意也　ならの戸よりとはみかど出御の御道筋をいふ也　御ともにとは御ものきこしめしにわたらせ給ふ御供に大納言殿參らるゝ心成べし　ありつるとは大納言殿御供つとめて又もとの所へかへり給ふ心也みかどはひのおましへ御ものゝために出御なれども御あとには宮のおはしますゆへにかへりて御伽などし給ふ心也　宮の御前の御木丁とは中宮定子の花を御覽じ給ふさま也　たゞ何事もなくとはうへに何の御心にかゝる事もなく御遊覽のてい也　さふらふ人もとは御花見にまかでし男女のよろこぶ心也　月も日もとはふるき和歌など口ずさみ朗詠し給ふ意也　けふにとは地の詞也思召まゝの御たのしみなれば幾年かはらずめでたき御代かなといふ心也

（サ）禁秘抄云清涼殿五間云々北有荒海障子南方手長足長北面障子宇治網代墨繪也二間與上御局之際立昆明池障子閑院無上御局仍荒海障子副二尺許爲路立之云々古今著聞集十云清涼殿の弘庇につ いたち障子をたてゝ云々又荻の戸の前なる布障子を荒海の障子と名付て手長足長など書たり其北裏は宇治の網代を書り清少納言が枕草子に此障子の事もみえたり一條院以往に書れたるとこそ（メ）高欄（ミ）伊周也中宮の御兄弟也下に委し（ヱ）堅紋指貫（ヒ）覺悟抄云白藤表うす紫うら紫二三四月より祭過迄は衣なくすゝして用べし（セ）同云青山吹表青うら黃此衣二月にも用之（ス）胡曹抄云押出事薄綿衣等袖不出妻是定例也是宮女房御所也云々褻時押出不出妻并裳要月五節之時押出禁中出妻并裳要月計也云々（一）晝御座　清凉殿之内（二）漢書孫伏伽傳云天子之居禁衛九重出也警入蹕云々江談抄云近衛司誡諸人之義也云々　雲圖抄賭弓下云御供膳儀外稱警蹕儀中時不稱（三）禁中にあり云々（四）宮とは中宮

也　(五)新勅撰冬部　前大納言「暮やすき日がすも月もひさにふる三室の山の松の下をれ
(六)はいせんつかうまつる人の、をのこどもなどめすほどもなく、わたらせ給ひぬ、御硯のすみすれとおほせらるゝに、めはそらにのみにて、たゞおはしますをのみ見たてまつれば、ほどとをきめもはなちつべし、しろきしきし、をしたゝみて、これにたゞいま(七)御ふること、ひとつふたつかけとおほせらるゝ、とにゐたまへるに、これはいかにと申せば、とくかきてまいらせ給へ、おのこはことくはへさふらふべきにもあらずとて、御すゞりとりおろして、とくとくたゞ思ひまはさで、(九)なにはつもなにもふとおぼえん事をと、せめさせ給ふになどさはをくせしにか、すべてをもてさへあかみてぞ思ひみだるゝや、春の歌花のこゝろなど、さいふ〳〵も、上らう二つ三つかきて、これにとあるに、
(十)としふればよはひはふりぬしかはあれど(十一)花をし見れば物おもひもなし、と、いふことを、君をしみればとかきなしたるを御覧じて、たゞこの心ばへどものゆかしかりつるぞと、おほせらるゝ　是第三節みかど

出御ありて花を御覧じ給ひ女房達大納言殿などに歌奉れとめすよしを書たりはいせんつかうまつる人とは内侍などの藏人にすべりし御膳をわたす間もなくすみやかにもとのおましへわたらせ給ひ歌をもよほし給ふと也　すみすれとは御詠歌をしるされん爲なり　めはそらにとは公卿女房達など花を見てましますが御門の出御ならせ給ふにより御けしき御すがたをうかゞひ見たてまつる心也　ほど遠き目もとはやう〳〵御ましさだまれば公卿女房達も心とけてかなたこなたへ心をうつする義也
　しろきしきしとは和歌のためにめしよせらるゝ心也　これにとは祗候の男女に歌奉れとの勅定ある心也　とにゐ給へるとは大納言殿は御みすより外にゐ給へば御氣色さへ見奉らでおもひならずとの心也　とくかきてとは御取次の女房などの云心也　とく〳〵たゞ思ひまはさでとは御門のおほせの心也なにはつのよしあしもくるしかるまじたゞ折ふしの興なればふと思ひ寄しまゝを申せとの御心也　などさはとは大納言の心也大納言のわが心にわれとふしんたしる心也つねは思はしからでも

歌のうかひやすきになにとて今はかほどおそくいでやらぬと思ふ内におもてをもはゆく心もいよいよみだれて歌のうかまぬ心也　春の歌花の心とは歌によむ所のおもむきをいひて大納言をせめ給ふ間に女房達の歌ははや奉られしとなり　これにとは此つぎにとていよ〳〵せむる心也　としふればとは大納言のとり用ひられし本歌也　君をしとは本歌の下の七文字をかへられたる作意をあらはしたり　たゞ此とはみかどの御批判ある心也　ゆかしかりつるぞとは大納言殿のよまれし歌のこゝろばへを御門のゆかしがり給ふと也叡感のある由也

(六)北山抄二云忌火御飯内膳司早旦以前御粥付二采女一於二大床子御座一供レ之用二御大盤一一脚一不レ稱二警蹕一或又稱警蹕未レ知得失一但不レ奏供了曰觸二女房一又不レ仰二退由一是無レ儀也仍以レ不レ稱可レ爲レ善歟陪膳或著二布袴一若四位不レ候者五位供レ之延喜之間希有例也今案正下五位若大臣子可レ供歟或又女房供レ之着服及有二月事一之者不レ候云々　禁秘抄云凡御膳大床子御膳朝夕近代一度供レ之朝餉御膳朝夕夜侍皆一度供レ之此御膳等近代主上不レ着又御膳三度是只女房サバヾカリ取レ之只内々稱二小供御一乳母沙汰供御三度所レ着也大床子御膳爾ハ時々必可レ有二着御一其作法藏人奏二御膳一時御直衣自二帳後一着二大床子一懸レ膝着レ之東向陪膳人警候昔正食レ之近代　只立レ箸計也云々　(七)外の字也　(八)男は詞すくななる物ぞと也九思一言などはいへど餘に辭退し給ふなと也　(九)難波のよしあしなどいへばよしあしの枕詞也　(十)古今春上二その殿の后のおまへに花がめに櫻の花をさゝせ給へるをみてよめる　前太政大臣「年ふれば齡は老ぬしかばあれど花をしみれば物思ひもなし　此昭宣公の歌のよそほひ今のけしきによくかなひ侍れは大納言殿の思ひよせられたる事記憶の强き事なればうへにも殊にいみじく思召す心也　古今にはよはひは老ぬとありこゝにはふりぬとあり　大鏡二云染殿の后の御前に櫻の花のかめにさゝれたるを御覽じてかくよませ給へるとぞ「年ふれば齡は老ぬしかは有ど花をしみれば物おもひもなし　此心をうけて大納言殿君を頌し給ふ義也

つゐでに、(一)圓融院の御時、御前にてさうじに歌ひとつかけと、殿上人におほせられけるを、いみじうかき

にく〳〵、すまひ(ハ)申人々ありける、さらに手のあしさよさ、歌のおりにあはざらんもしらじと仰ければ、わびてみなかきける中に、たゞいまの(ニ)關白殿の、(ホ)三位中將と聞えける時、「しほのみついづもの浦のいつも〳〵君をばふかくおもふはやわが」と、いふ歌のすゑを、たのむはやわがとかき給へりけるをなん、いみじくめでさせ給ひけるとおほせらるゝもすゞろにあせあゆる心ちぞしける、わかからん人は、はた、さもえかくまじきことのさまにやとぞおぼゆる、れいいとよくかく人も、あひなくみなつゝまれて、書けがしなどしたるもあり　第四節前には大納言殿の歌を御門のゆかしがり給ふ事を書り爰には道隆の歌を圓融院の愛給ふ事を書り是則大納言殿の父道隆公の事を思ひ出られての物語也　つゐでにとは前をうけていふこゝろ也次手に也　さうじにとはいにしへ圓融院のおほせられし趣也　さらにとは又圓融院の仰の趣也　歌の折にあはざらんをもしらじとはたゞいまの風情大やうによみたりとても外の人しるべき事ならず只一座の即興までぞとの意也　わびてとは人々のひげする心也　しほのみつとは萬葉の歌也三位中將此歌を本歌にし給ふと也　といふ歌の末とはたゞ今大納言殿の物語ある御詞也萬葉の歌のすゑよみかへてさうじにかき給ひしを圓融院かぎりなくめでさせ給ひしぞと御物語ある也　すゞろにあせあゆる心地ぞするとは晴がましう思召心成べしわかゝらん人巳下は地の詞也れいよくとはつね〳〵堪能の人もかやうに御所望の時ははれがましくもありおもひよらずも侍ればおもふほどにかゝれぬもあり又は書損ずる事も有ぞと也

(ロ)皇胤圖云

村上天皇
- 冷泉院 母中宮安子 師輔公子
- 致平親王
- 爲平親王
- 圓融院 母同冷泉 ― 一條院

大鏡云六十四代つぎのみかど圓ゆう院天皇と申き御いみな守平是村上のみかどの第五王子也御母冷泉院の同じ腹におはします　(ハ)イ亍　蹈踏　スマイ　(ニ)道隆公也下に傳あり　(ホ)公卿補任云藤道隆右大臣兼家公一男母從四位攝津守藤中正女

永観二年正月七日叙二従三位一右中将如レ元云々猶下に詳也 (チ)何怜 ハヤ 日本紀 感心しあはれむ心也

(ヌ)古今のさうしを、御前にをかせ給ひて、歌どものもとを仰られて、これがすへはいかにと仰らるゝに、すべてよるひる心にかゝりておぼゆるもあり、げによくおぼえず申いでられぬ事はいかなるぞ、(ル)宰相の君ぞ十ばかり、それもおぼゆるかは、まいて五つ六つなどは、たゞおぼえぬよしをぞけいすべけれど、さやはけにくゝおほせごとを、はへなくもてなすべきといひ、くちおしがるもおかし、しると申人なきをば、やがてよみつゞけさせ給ふを、さてこれはみなしりたる事ぞかし、などかくつたなくはあるぞと、いひなげく中にも、古今あまた書うつしなどする人は、みな覺えぬべき事ぞかし、第五節上のつゞきに歌の物語也よむのみならず古歌を覺ゆる事さへかたき由を述て人のはげみに敎とするなるべし則當代の事にて少納言が見ふれし有さま也 古今のさうしとは當今一條院の時中宮の女房達などをこゝろみ給ふ心也 歌どものとは一首の上の句ばかりを仰られて此下句はいかにとたづね給ふ心也 すべてよるひるとは人々歌をおぼえんとはげみたしなむ心也 宰相の君とはことによく覺えし人なれどその人さへおほくおぼへぬぞとわきなる人々のいふ心也 まいて五つ六つとは人々の心也宰相の君とともあはせいふ詞なれば心あきらにして見にくき文てい也よく味はふべし さやはとはさうやは也五つ六つ計おぼへたるはあまり無下なる事なれば御試の詮なく人々も口をしき事ぞと也 しると申人なきとは御尋の歌をおぼえぬ由申せば中宮下の句をよみつゞけ給ふ心也 さてこれはとは人々のわれとはぢくやむ心也 中にもとは地の詞也その人々の中にも古今を書うつしたる人などおほかるべきに忘れたるはほいなき事ぞと也又云すゑ〳〵の世迄も此心得にてまなぶべき事ぞと也

(ヌ)かな序云古の事をも忘れじふりにしことをもおこし給ふとて今もみそなはし後の世にもつたはれとて延喜五年四月十八日大内記きのとものり御書所のあづかり紀貫之さきのかひのさう官おふしかふちのみつね右衛門の府生みぶの忠岑らにおほ

せられて萬葉集にいらぬふるき歌みづからのをも奉らしめ給ひてなん云々眞名序云各獻ニ家集并古來舊歌一曰ニ續萬葉集一於レ是重有レ詔部ニ類所レ奉之歌勅爲ニ二十卷一名曰ニ古今和歌集一云々　本朝帝記云延喜五年四月十五日御書所預紀貫之撰ニ進古今和歌集一部二十卷一云々　猶下の卅五段集はと云題の所に注す云々　(ル)女房の名也下に宰相二人有一人は輔正の女也一人は藤原重輔の女也此二人の內成べし

(ヲ)村上の御時、(カ)宣耀殿の(ヨ)女御と聞へけるは、(ヌ)小一條の左大臣殿の御むすめにおはしましければ、たれかは聞えざらん。まだひめぎみにおはしける時、ちゝおとゞの聞へさせ給ひけるは、一には御手をならひ給へ、つぎには(レ)きんの御琴を、人よりことにひきまさらんとおぼせ、さて古今の歌二十卷を、みなうかべさせ給はんを御がくもんにはせさせ給へとなん、聞えさせ給ひけると、きこしめしをかせ給ひて、御物いみなりける日、古今をかくして、もてわたらせ給ひて、御几帳を引たてさせ給ひければ、女御あやしく思しけるに、御さうしをひろげさせ給ひて、そのとしその月、何のおり其人のよみたる歌はいかにと、とひ聞えさせ給ふに、かうなりと心得させ給ふもおかしきものゝひが覺えもし、わすれたるなどもあらでいみじかるべき事と、わりなくおぼしみだれぬべし、其かたおぼめかしからぬ人、二三人ばかりめし出て、(ソ)ごいししてかずをかせ給はんとて、聞えさせ給ひけむほど、いかにめでたくおかしかりけん、御前にさふらひけん人さへこそ、うらやましけれ、せめて申させ給ひければ、さかしうやがてすゑまでなどはあらねど、すべて露たがふ事なかりけり、いかでなをすこしおぼめかしく、ひがこと見つけてを、やまんと、ねたきまでおぼしける、(ネ)十卷にも成ぬ、さらにふようなりとて、御さうしにけうさんして、みとのごもりぬるもいとめでたしかし、いとひさしうありてをきさせ給へるに、なを此事さうなくてやまんいとわろかるべしとて、下の十卷を、あすにもならば、ことをもぞ見給ひあはするとて、こよひさだめんと(ナ)おほとなぶらまいりて、夜ふくるまでなんよませ給ひける、されど、つゐにまけ聞えさせたまはずなりにけり、うへわたらせ給ひて、のち、かゝる事なん

ど、人々、殿に申奉りければ、いみじうおぼしさはぎて、御ずきやうなど、あまたせさせ給ふて、そなたにむかひてなん、ねんじくらさせ給ひけるも、すき〴〵しくあはれなる事なりなど、かたり出させ給ふ、うへも聞しめして、めでさせ給ひ、いかでさおほくよませ給ひけん、我はみまきだにも、えよみはてじとおほせらる　第六節又村上のいにしへを大納言殿御物語ありし趣なり　むらかみとは村上天皇の御宇也まづ時代をあらはしたり　せんよう殿とは女御のおまし也弘徽殿などゝいふ心也　たれかとはみな〳〵承及びてかくれなきと也　またとは内へまいり給はぬ時也　きこしめしをかせ給ひてとは父大臣のおほせられし詞を御門のきこしめして御物いみの間に女御をこゝろみ給ふ事也　もてわたらせ給ふとは御門の持て渡らせ給ふ也　几帳以下は御門の女御を試み給ふ折のさまを云也　御さうしとは古今をひろげて御門のたづねこゝろみ給ふ事也　かうなりとは女御のかくといらへ給ふ心を云也　ものゝひがおぼえもしとは地の詞也女御の御おぼえざえのいみじきほどを御覧ずるにつけても猶いみじう思召て御門の御心みだるゝと也　そのかたおぼめかしからぬとは古今をよく覺たるをいふ也　御前にさふらひけん人とは御門の御前に也　せめてとは御門の女御をはげまし給ふ事をいふ也　さかしうとは女御のざえのやんごとなきを云也　するまでとは過半覺え給ふとの心也いかでとは御門の御心也　女御のおぼつかなく見え給はゞそれをしほにやめんと思召しゝが古今をなかばよみ給ひつれ共おぼめかしき事も侍らねば御門もかへりて興さめ思召と也　いとひさしうとは御殿ごもりし間を云也　猶此事とは古今の事也下の十卷とは最前よみ殘し給ふ次をば又女御にとひ給はんと也　程すぎなば姫君の見あはせ給ふ事もあるべきに今夜そのまゝよましめ給ふと也　うへわたらせ給ふてのちとは御門の女御を試み給ふての後日也　かゝるとは姫君の御うはさ也大鏡などにもかけるごとく村上のみかどの試み給ひし事也　人々殿にとは女房達などの父大臣の方へ參り申されし事也　いみじうとはおとゞの心也女房申さるゝを聞給ひて御娘の御事なればうれしく思召さは

ぎ御誦經などし給ひなを行末を祈りなどし給ふ心也　かたり出させ給ふとは只今大納言殿の物語せらるゝことゝ也或云みかどのかたり出させ給ふを中宮の聞召めで給ふと也我はみまきにだにもと中宮の御詞也

(ワ)扶桑畧記曰村上天皇諱成明醍醐天皇之第十四子也母關白太政大臣藤原基經四女皇后穏子延長四年六月二日丁亥降誕生於桂芳坊云々康保四年五月廿五日癸丑崩　(カ)大鏡云左大臣師尹此おとゞ忠平大臣五郎小一條のおとゞと聞えさすめり御毋九條殿に同じ大臣の位にて三年康保四年十二月うつり給ふことと云々御むすめ村上の御時のせんえう殿の女御かたちうつくしうおかしげにおはしけり内へまいり給ふとて御車奉り給ひければ我御身はのり給ひけれど御ぐしのすそはもやの柱のもとにぞおはしける一筋をみちのく紙にをきたるにいかにも筋見へ給はずとぞ申傳ためる御目のしりのすこしさがり給へるがいとらうたくおはするを御門いとかしこくときめかさせ給ひてかくおほせられける「生てのよしにての後の後の世もはねをかはせる鳥と成なん　御返し　女御「秋に成ことのはだにもかはらずは我もかはせるえだと成なん古今うかめさせ給へりときかせ給ひて御門こゝろみに本をかくして女御には見せ奉り給はで和歌はとあるをはじめにてまつのくことばを仰られつゝとはせ給ひけるにいひたがへ給ふ詞にても歌にてもなかりけり　宣耀殿麗景殿北七間四面

(ヨ)周禮天官云女御者御妻也女御掌叙御子王之燕寢云々本朝文武天皇の御宇に此號始と云々

(タ)藤氏譜云

忠平
- 實頼
- 師保
- 師輔
- 師氏
- 師尹 ― 女子せんよう殿

(レ)箏のことと瑟のことなどいひ琵琶などもことの内なればきんの琴といふと也今十三絃也　(ソ)

(ツ)碁石也　(ネ)𩮗散　キヤウサンシ歟　興散歟　ケウサンシ　(ナ)油火也

むかしは、ゑせものもみなおかしうこそありけれ、

此ごろかやうなることゝやは聞ゆるなど、御前にさふらふ人々、うへの女房ゝ、こなたゆるされたるなど參りて、くち〴〵いひいてなどしたる程は、まことに思ふ事なくこそおぼゆれ、(三)おひさきなくまめやかにゑせさひはひなど、見ていたらん人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて、なをさりぬべからん人のむすめなどは、さしまじらはせ、世の中のありさまも見せならはさまほしう、(二)內侍などにてもしばしあらせばやとこそおぼゆれ　第七節上の物語のつゞきにいにしへいまの世の人を批判し又は內へまいりたる女房のゆゝしきさまを書たる趣なり　むかし以下は女房のいふことば也　ゑせものとは一道を心得ことたらぬ人の事也かやうの人も一ふしおかしきぞと也　此ごろとはいにしへにをとる由を云詞也　まことに以下はすべて草子の地也淸少納言の敎を示さるゝ詞と見るべし　おひさきなくとは宮仕の人のすえ久しからぬがまめやかに宮つかへし世にあるがほなるをいふ詞也　見てゐたらんとはゑせ幸を願(チカヒ)見て居(ヲル)心なり　いぶせくとは拙て身しりぞく比に宮つかへさいはひえがほなるはおろかなる心なるかなとわきより見る人あなどりおもふと也　猶以下は上のごとくいへばとてひたすら宮つかへをいぶせきと云にあらず猶可レ然程々にまかせてわかきむすめなどには宮仕をさせ世中のありさま人のふるまひなど見せならはせよと也前のおひさきなき人のうらをいふ義也　世の中とは內の體也　內侍とは內侍は上らうにて殊更萬のおほやけごとにあづかりつとむる故にしばらくも內侍にてあらせたきと也(三)　曲　オヒサキ

(二)後宮職員令云內侍司尙侍(ナイシノカミ)二人掌下供二奉常侍一奏請宣傳檢中校女孺上兼知二內外命婦朝參及禁內禮式之事一

宮つかへする人をば、(五)あは〳〵しうわるき事に思ひゐたる男こそ、いとにくけれ、げにそもまたさることぞかし、かけまくもかしこき御前をはじめたてまつり、上達部、殿上人、四位、五位、六位、女房さらにもいはず、見ぬひとはすくなくこそはあらめ、(ウ)女房のすむさとも、(六)そのさとよりくるものども、おさめみかはやうどたびしかはらといふまで、いつかはそれをはぢかくれたりし、殿原などは、いとさしも

あらずやあらん、それもあるかぎりは、さぞあらん、うへなどいひてかしづきすへたるに、心にくからずおぼへん、ことはりなれど、内侍の(オ)すけなどいひて、おり〳〵うちへ參り、祭の(ク)つかひなどにいでたるも、(ヤ)おもたゝしからずやはある、さてこもりゐたるはいとよし、(コ)ずりやうの(ケ)五節などいだすおり、さりともいたうひなび見しらぬ事人にとひきくなどはせじと心にくきものなり　第八節女は親の深窓よりすぐに夫の家にむかへてこそ心にくからぬ宮づかへに出まじらへば人にも見られあからさまになりもてゆけばあしきと云人も侍れどそれはつねていのいやしき人の事也内へまいる人などは下々にもあはずあからさまになりもてゆくにもあらずことさら内のやんごとなき事をみきくほどにとかく宮づかへをし内侍などにまいりたきとの義也すなはち上の心を結ぶ也　宮つかへ以下はわろきと云をとこをいましめたる地の詞也　そもまたとはふかき事をばしらで一往の心にていふめれば斷ぞとすくふ地の詞也　かけまくもとは中宮宮などをほめたる心也　殿上人とは品おとりたる人々などはいふにたらね其それさへ目を止めて見侍るに忝じけなくも御まへをはじめ其次なる公卿上らうなどをつねわたりの人おかみ見奉る事は尤ぞと也　女房のずむさどもとは上臈の下女也　そのさとよりくるものとは宮仕の女房の里より來る下女也　殿原などはいとさしもあらずやあらんとは殿原には恥かくるゝならひぞと也　うへなどゝは諸大夫の妻に成を云也　かしづきとは寵愛也　内侍のすけとは彼諸大夫の妻内侍典侍に成て折々内參りするを云也　さて以下は内侍のすけの祭のつかひなどに外へ見ゆるさへいみじきにまして内侍のすけにて禁中にこもりゐたらんはいよ〳〵いみじかるべきと也　ずりやう以下宮づかへの女房の益ある事を云也五節の折につねていの人は何れをいかにとわきまへね其宮づかへの内侍はよくわきまへしらんと也　右是まで家の事をとり〴〵いひ述たり就中内裏のやんごとなき事をのぶる次でにその内にすまひ給ふ宮づかへの人までいみじき事をしらせたりよく心をつけて味はふべし

(ム)淡々アハ〳〵シ　あからさまにかろ〴〵しき

心なり　（ウ）長部長女官司也　水源　八雲御抄下女
也云々　伸源抄云おさうるめみかはたとておほき
なる桶に物を入ていたゝきてありくひさいめ也云
々　（ヰ）御厠用人ミカハヤウド　或御説に云長女
御厠用人ひすまし也家中に物を納ヘ……也不淨の
有を生好の絹二幅をぬひたれて雨の……此
丸をひぢに掛……也此女をひすましと云也　濕
（ノ）民氏河原　渡士河羅　同　渡守綱引の事也　又
或云漢語抄由がつたひしかはら云々　貫之白河夫
相國の歎の子日會序云草枕たひしかはらまで松の
千とせを君にとのみいのり云々　いやしき者をい
はんため成べし　（オ）禁秘抄云典侍四人也此職尤
重爲二御乳母一之人者諸大夫女聽レ之只人公卿侍臣
女也侍臣女作爲違體也　大臣子頗無レ例大臣孫少々
有レ例所謂國信女也只聽レ色只人不レ好二此職一專也
候二陪膳一着二禁色青色赤色一尤可二恐思一事歟　職員
令云掌侍二常侍一唯不レ得二奏請宣傳一若無二尚侍一者得二
奏請宣傳一　　ク）西宮抄云近衛府使參二射場一就二内
侍所一受レ之雖近代不レ着天皇御二南殿一云々内侍出上
卿昇云々近代典侍在二陣外一申二龍出一給レ禄召二所々

騎馬具武官二近衛使一使居二長橋一歌人立二東殿砌下一
給二御衣一舞人給レ布　賀茂祭に天子出御あるまへ
に使たつ其儀式は諸家記錄にのするといへ共絕て
久しき公事といひ傳寫魯魚の記錄といひかたぐく
以て委しからず心あらん人はみづから尋ね試み給
ふべし　（ヤ　面目らしきなど云ふ也
（マ）諸國受領に任せし人のむすめも五せつの舞姫
に奉る也

【十四段】　すさまじき物、ひるほゆる犬、春のあじろ、
しはすのあふぎ、三四月の紅梅のきぬ、ちごのなく
なりたるうぶや、火おこさぬ火をけすびつ、牛しに
たるうしかひ、はかせのうちつゞき女子うませたる、
かたゝがへにゆきたるにあるじせぬ所、ましてせち
ぶんはすさまじ　此より下のけだいとやいふべから
んと云迄又一段也すべて題のすさまじきといふ心
をいひ連たり亦八節に見るべし就中此一節思ひよ
るまゝにすさまじき事を書つらねたるなるべし
すさまじきとはおそろしき心もあり興なき心もあ
り物の似あはぬ事などをもいふ心なるべし　ひる
ほゆる犬とはけうとく似あはぬことゝ思ひやるべ
し　春のあじろ以下の三句心しれやすし　ちごの

なくなりたるうぶやとはかなしくけうなき心なるべし火おこさぬひをけもすびつも共にすさまじきと也　牛しにたる牛かひとは是もけうとき心なるべし　はかせのうちつゞきとはうらない[illegible]などしながら幾度も〳〵男子をうまで女子のみうませたらんはいかばかり與さめすさまじからんと也　かたゝがへにしは[illegible]のかたゝがへに外へ行て先にあるじまうけせぬはすさまじきと也ましてとはつねよりもせちぶんのかたゝがへにまうけせぬ所はなほすさまじきと也

〔フ〕金樓子云[illegible]犬[illegible]守[illegible]晨之[illegible]　東坡云[illegible]犬[illegible]不[illegible]吠之犬　犬は夜を守るもの[illegible]はゆるはすさまじきと也又庸蜀の南に日出る時に犬はゆる由柳文に見ゆこれにはあらず[illegible]は時をうしなふてつきなき心也　（卍）胡曹抄云紅梅は十一月より至二十二月[illegible]（●）[illegible]應アルジマウケ　[illegible]の事也

〔ヨ〕ひとの國よりをこせたる文の物なき、京のをもさこそおもふらめども。されどそれはゆかしき事もかきあつめ、よにある事をきけばよし、人のもとに、わざときよげにかきたてゝやりつる文の返事見ん、今はきぬらんかしとあやしくをそきとまつ程に、ありつる文のむすびたるもたてぶみも、いときたなげにもちなしふくためて、うへにひきたりつるすみさへ〔ミ〕きえたるをおこせたりけり、もしは御物忌〔テ〕とて、とりいれずなどいひてもてかへりたる、いとわびしくすさまじ、第二節文などの音信にも興なくすさまじきとやさしきせうそこするとの心得有事を敎ゆる義也　文の物なきとは田舍には何のおかしき事もすくなきものなればせめて土產のしるしなりともなくば思ひ入もあさく何興もなからんと也京のもとは京より田舍へやるは一ふしめづらしかるべきと也　人のもとにとは是は近き所へやる文のさまをさく〳〵としたると也或云使の者などが不念なる心云也こなたよりは淸げにしたゝめやるに返事はむをいましむる義也　もしはとは若物忌の時には封をもきらず取入もせねば遣たる文をむなしう持て歸りたるはわびしくてすさまじからんと也

〔ヨ〕他國の事也日本紀幷春日明神の託宣などに他國と書り　〔ミ〕狀の上書又は封じめなどの事也

（テ服紀令云穢所ヨリ來ル書狀ヲバ封目ヲ門戸ノ外ニシテ使ニトカセテ取入レバ不レ穢コナタノ奏者ハトクベカラズ文筥ニ入ル狀ヲモ彼使門外ニテ取出シテ封メヲトキテ出セバ不レ穢コナタノ奏者出セバ穢也折紙ヒネリ文ハ封ジメナキニ依テ穢セズ但文筥ニ入ヲバ門外ニシテ取出サスベシ云々

またかならずくべき人のもとに、車をやりてまつに、入くるをとすればさなゝりと人々出て見るに、車やどりに入てながえほうどうちおろすを、いかなるぞとゝへば、けふは外へ（ア）おはしますとて、わたり給はずとて牛のかざりひき出ていぬる、又家（△）ゆすりてとりたるむこのこずなりぬる、いとすさまじ、さるべき人のみやづかへするがりやりて、いつしかと思ふもいとほいなし、兒のめのとの、たゞあからさまとていぬるを、もとむれば、とかくあそばしなぐさめて、とくこといひやりたるに、こよひはえ參るまじとて、返しおこしたる、すさまじうのみにもあらず、にくさわりなし、女などむかふるおとこ、ましていかならん、まつ人ある所に、夜すこしふけてしのびやかに門をたゝけば、むねすこしつぶれて、人出してとはするに、あらぬよしなきものゝ、なのりしてきたるも、返す〴〵すさまじといふはおろかなり、

第三節いひかはす事のかなはず、待事のちがひなどして興なくすさまじき心を云也かならずとはいひかはせし約束など有心也　さなゝりとはそれなりと云心也待しあるじの詞也　車やどりはむかひにやりし車を引もどりてとりをく義也　いかなるとはあるじの問心也　けふはとはつかひの人答る心也　牛のかざりひきとはかざり裝束などをとりをく心也　出ていぬるとは牛飼などの立のく意也　また以下は是別の事なれども同じ待心をいふ也　家ゆすりてとは一家一門中の動き催してむかへとりたる聟の來ぬ心なるべし　さるべき人のとは是も別の事にて同じ心也　みやづかへとはやんごとなき人の內へまいり給ふなどをいひかはしいつしかさがり給はんなど待わびたる心なるべし　ちごのめのとゝは是も別の事也　とかくとはめのとが留守のほどにすかす心也　とくことははやくもどれよとてよびにやる心也　こよひはとはめのとがもどらぬよしの返事也　にくさわりなしとは

清少納言の寳のいたり恩愛の私なき所よく味はふべし　女などむかふるとは是も別の事也　ましていかならんとはいもせのかたらひはめのとなどまつよりもわりなくあらんと也　まつ人とはわりなき故を云也　すさまじといふは、おろかなりとは此すさまじはけうとき心也あまりはらたゝしくけうとき心なるべし

(ア)或本に外へおはしまさずとてわたりたまはずと有此義もおもしろく侍れども只ひとへに御本にまかせをくのみ(△)かげろふ日記いはく西宮の左のおとゞながされ給ふを見奉らんとて天下ゆすりてにしの宮へはしりまとふ云々　動ユスル　うごきさはぐ心也

中にもけんじやの、ものゝけてうずとて、いみじうしたりがほに、とこ(サ)やずゝ(キ)などもたせて、せみごゑ(ユ)にしぼり出しよみゐたれど、いさゝかさりげもなく、(シ)ごはうもつかねばうちつどひてねんじゐたるに、男も女もあやしと思ふに、時のかはるまでよみこうじて、さらにつかず、たちねとてずゝとりかへしてあれど、げんなしやとうちいひて、(ミ)ひたひよりかみざまに、かしらさぐりあげて、あくびを、をのれうちして、

よりふしゐる、第四節げんしやのものゝけ調ずる事をいふ也俗人のみならず出家のわざにも興さむる事あるとの心也　いみじうしたりがほにとは行者のいかめしきよそほひを云也いかさましるしみせんとする體成べし　いさゝかさりげもなしとはものゝけやまぬと也　ごはうとは護法のしるしなきと也　あつめてとはけんじやの同行或は一門どもあつまりともぐ\にいのりねんずる心也　さらにつかずたちねとは病者ましをたちのくる也　ずゝとりかへしとは侍児(ヨリマシ)にとこずゝなど持せて檀上にをきいのりしか其こうずるまでいのりしるしつかねば持たせしずゝもとりかへして檀よりをろす心也　げんなしやとはげんじやがみづからいひすてたる詞也　あくびををのれうちしてとはげんじやがたいくつしたるさま也病人のつかれをとひかいしやくするよりもまづげんじやがをのれとたいくつしたる心也　よりふしゐるとは驗者がかたはらへよりてふしたると也是すなはちいかめしげに振舞しかどもしるしなければ興さめたる事なるべし

(サ)獨鈷トコ　(キ)珠數スヾ　(ユ)經よむ聲蟬の聲

に似たる故にいふ也是後ばりによむ心也 （ヌ）譲法ゴハウ つかねばとは驗のつかぬと也 ○げんなしや以下寄ましが詞也つかれふしぬるとは寄ましがつかれふしたる義也 （ミ）詩經欠伸（アフビノビ）
除目につかさえぬ人の家、（シ）ことしはかならずときゝてはやうありしものどもの、外々なりつる、かたゐなかにすむものどもなど、みなあつまりきて、出入車のながえもひまなく見え、ものまうでするともにも、我も〳〵と參りつかうまつり、物くひ酒のみ、のゝしりあへるに、（ヱ）はつるあかつきまで、かどたゝく音もせず、みゝたてゝ聞ば、さきをふ聲々して、上達部などみないで給ふ、ものきゝによるより、さむがりわなゝきをりつるげすおのこなど、いと物うげにあゆみくるを、見るものどもはとひだにもえとはず、外よりきたるものなどぞ、（ヒ）殿は何にかならせ給へるなど問ふ、いらへには、何のぜんしにこそはと、かならずいらふる、（モ）まことにたのみけるものはいみじうなげかしとおもひたり、つとめてになりて、ひまなくをりつるものも、やう〳〵ひとりふたりづゝすべり出ぬ、ふるきものゝ、さもえゆきはなるまじき

、來年のくに〴〵を、手を折てかぞへなどして、ゆるぎありきたるも、いとおかしうすさまじげなり。
第五節除目にあづからぬ人の興さめすさまじき心をいふ也 つかさえぬ人のいゑとはまづすさまじきといふ事の標なり ことしはと云以下除目にあづかりし人〻事をうらやむ心をいふ也 外々なりつるとは諸國より參りし人々といふ心也なりつるはなりしなどゝいふ詞と同じ成の義にはあらず文章の詞也 かたいなかとはのぼりゐる人々をいふ也 出入車とは互に賀し語らふ心也 ものまうでとは田舍の人々のぼりしつゐでに都の諸社佛跡を拜見にまかる心也 物くひ酒のみとは饗應などする心成べし はつる曉までとは十一日より十三日までおこなはるゝ除目もはや果ぬれ共名出されぬ心をいふ也これ除目にあづからぬ人の心也 さきをふとは公卿職事などの除目はてゝ退下あるさまをいふ也 又云天子入御ませば御さきをふて其後に上達部出給ふと也 ものきゝに以下は除目にあづからぬ人の家よりうかゞひ見せにやりし者どもが立かへるさま也 みるものとは家の內より

みてゐたりしが召にもあづからず又うかゞひにやりし者もすご〳〵と歸れば家內の人いかにと問ふ事もせで只茫然として居たる心成べし　外よりとは他人のせうそこし訪ひ行かふさま也　いらへにとはこれは除目にあづかりたるどちのせうそこいらへ也　まことにとは除目にもれたる人の心をいふ也　つとめてにとは其役の人々退下するさま也　ふるきものゝとはやがてあづかるべき人のうへをいふ也　えゆきはなるまじきとは在國へ歸らずしてそのまゝ逗留などし待心成べし　いとおかしうとはわきより見る人の心也　すさまじげなりとは除目にもれて興さめたるけしきをわきよりあはれむ心也いとおかしうすさまじき心切成べし
(シ)拾遺云除目のあしたに命婦左近がもとにつかはしける　もとすけ「年ごとに絶ぬ泪やつもりつゝいとゞ深くは身をしづむらん　又云除目のころ子日にあたりて侍ける按察更衣のつぼねより松をはしにてたべもの出して侍けるに　もとすけ一引人もなくてやみぬるみ吉野の松はねのひをよそにこそきけ　かやうの歌などもおほく又まのまへ除目にもれし人など見し人なれば委しくかき載たりあはれ深き詞也　(エ)十一日より十三日までおこなはるゝ事也十三日のあかつき迄めしにあつからぬ心也除目の事前に注之　(ヒ)前司也　(モ)大臣をはじめ外記少納言等の役人を指也委西宮の記并抄小野右府記北山抄江次第などに見ゆ

よろしうよみたりと思ふ歌を、人のもとにやりたるに返しせぬ、けさうぶみはいかゞせん、それだにおりおかしうなどある返事せぬは、心をとりす、又さはがしうときめかしきところに、うちふるめきたる人のをのがつれ〴〵と、いとまあるまゝに、むかしおぼえて、ことなる事なき歌よみしてをこせたる、ものゝ(ス)折のあふぎ、いみじとおもひて、心ありとしりたる人にとらせたるに、其日になりて、思はずなる繪など書てえたる、(セ)うぶやしなひ、むまのはなむけなどのつかひに、ろくなどとらせぬ、はかなき(ソ)くすだま、(タ)うつちなど、もてありくものなどにも、猶かならずとらすべし、思ひかけぬことにえたるは、いとかひありとおもふべし、これはかならずさるべきつかひぞと、心ときめきしてきたるに、たゞなるは、まこと

にすさまじ　第六節歌綸かづけ物などの事につゐて折にたがひ興なき事をいふ也　人のもとにやるとはなさけふかき歌を讀遣(ヤル)也　かへしせぬとは情あさき心を示也　けさうぶみはいかゞせんとは艶書は聞もはゞかりのおほく返しもむづかしければせぬも斷ぞと也　折おかしうとはひたすらたはれたるにもあらず岩木ならぬなさけの色くるしからぬ程の返事計はありたきとの心成べし是則無下に返しなからんはすさまじきと也　又さはがしき所にとは時めき世の事にまぎらはしき方也　ふるめきたる人とは世をすてあるひは世にすてられし人也
むかしおぼへとはむかしの風情とおぼしき歌をよみをこせたると也是はむかふの時めく方へ興さむる事などいひやるなどの義なるべし　ものゝ折あふぎいみじとは祝儀の送り物旅行の餞別などにあふぎをせんと内々おもひをく心也　心ありとしりたる人とは世になさけらしきなど云心也むかふの人をさして云也　とらせたるにとは内々送らんと思ひ置とらせたると也　其日になりてとは其送りし日むかふの人より返したると也　思はずなる繪とはこなたにはあふぎを内々いみじき物と思ひ送り侍ればむかふの人あふぎはいまはしきとて其心の繪或は詞などを書てその日そのまゝ返せし心なるべし此等の心大和物語などにも見ゆ次に記す
うぶやしなひとはうぶやしなひもてゆく人也むまのはなむけとは餞別持てゆく使也これらの使にはむかふの人かならず祿給ふ故いかさまにもと心たのみし侍るべきに祿なくば尤すさまじかりぬべき也　はかなきくす玉うつちなどゝはわらんべのもてあそぶものなればはかなきと云也又云移りかはるせくごとの物なればしはしの心にてはかなきと云也　猶かならずとらすべしとはうぶや馬のはなむけなどはいふに不レ及はかなき事の使にも祿とらせよと也則次に其故を斷也　おもひかけぬとは此使には給はる程の事ならずと思ひわきまへ祿のこと心にかけぬ時に給はるは一きは規模あると也　これはさるべきとは使の人のおもはく也きたるはとはいかめしき使なれば祿なども給はらんやうにおもひ來たるにその沙汰なければ使の心いか計興さめすさまじからむと也

（大）大和物語云三條の右のおとゞ中將にいますかりける時祭の使にさゝれて出立給ひけり通ひ給ふける女のたえて久しく成にけるにかゝる事なんいでたつあふぎもたるべかりけるをさはがしうてなんわすれにけるひとつ給へといひやり給へりけりよしある女成ければよくてをこせてんと思ひ給ひけるに色などもいときよらなるあふぎの香などもいとかうばしうてをこせたりひきかへしたるうらのはしのかたにかきたりける　ゆゝしとていむ共今はかひもあらじうきをば是におもひよせてんとあるを見ていとあはれとおぼして返し　ゆゝしとていみける物を我爲になしといはぬはたがつらきなる　公任集宜方中將賀茂の使に出たちけるに具して花の形を作たりけるあふぎをすり袴にそへてやり給と云々（ヲ）袖中抄云　名におへばたのみぬべきをなぞもかく扇ゆゝしと名付そめけん　顯昭云昔は扇を人にとらするを忌事にて有ければゆゝしとはよみそめたり　（左）捿ウブヤシナヒ左傳ニ見ゆ

（セ）長命縷續命縷の事より始りたる由齋抄に說あり是漢朝の故事によれば耳心せず天照太神の素盞嗚尊と玉をとりかへ給ひし事などは惡神降伏の大事なれば五月五日續命縷の起とや申べからん世人本朝の故事をわすれたま〳〵遺事の侍るをもおほく漢朝の似たる事に引あはせし事我國の人としてはなげかしき次第成べし今くす玉の事に付て傍題ながらこれを辨ずるのみ又千載集に有枇杷の皇太后宮の御帳にあやめくす玉のこりし事あはれにも聞へつれ〴〵草などにもかゝれしかども是は清少納言此双紙かゝれし比より後の事なれば不及引摺くす玉のことは公事根源などに見えたり今も民間にめのわらはに送る花その遺風也衛下詳也

（ス）源語秘訣云卯槌也正月乙卯大學寮獻ニ杖八十枚一槌のさま卯杖同事也年中の惡氣を追ふ心に杖を用云々　西宮記云持統天皇三年正月乙卯大學寮獻八十枝漢官儀云正月卯日以ニ桃枝一作ニ卯杖一厭レ鬼也文德實錄云仁壽二年正月己卯諸衛府設レ杖逐ニ精鬼一也

これ又神代より（メ）起る事なるべし神書ニ其旨見ゆ

むことりて四五年までうぶやのさはぎせぬところ、おとなる子どももあまたようせずば、むまごなどもはひありきぬべき人のおやどち晝ねしたる、かたは

らなる子どもの心ちにも、おやのひるねしたるは、
より所なくすさまじくぞありし　第七節いもせの道
もよろしき折ふしをはからひしらねば興さめてす
さまじくみゆる物ぞと也　うぶやのさはぎとはな
れてより久々になれども子をうまぬ義也　おとな
る子どもとは成人し年たけたる子どももあまた有て
いづれもかたつかぬ心也　むまごなどもとはそ
の成人の子共に孫も出來べきほどの齡ぞと也　か
たはらなる子どもとはかの成人の子共を親のほと
りにねさするによりて子どもの心におやのそばに
ねたるをつきなくおもふべきと也
(×)神代巻云以下彼海濱產屋全用二鸕鷀羽一爲二草葺一
之而甍未合時兒御生上焉故因以名焉云々神代口決
云鸕安從レ口生レ卵以今插二鸕羽於產屋一云字當屋二云々
ねおきてあぶるゆゑはらたゞしくさへこそ覺ゆれ、
(○)しはすのつごもりの長雨、二日計の精進のけさいと
やいふべからん、八月のしらかさね、ちあへず成ぬ
るめのと　第八節とりませすさまじきことどもをあ
げたりよく人情風味をうつしえたるなるべし　ね
おきてあぶるゆとはよく寢入たる時に起かゝれよ
とて起さるゝ事也あぶるは沐也　はらたゝしくと
は起たる人の心也　しはすのつごもりの長雨とは
玉まつるよさといひ年を守るよさといひかた〴〵
長閑に有こそよかるべきに夜とゝもに降しきらば
尤冷じかりぬべし　一日ばかりとはわつか一日
の精進をしてことゞ〵しう潔齋などゝいふはつき
なからんと也八月のしらがさねとは時分たがひて
冷じき心也　ちあへずなりぬるめのととは御ちな
どのちのあがりたるは誠にけうさめ侍るべし　凡
此段そこばくの詞みな題の心をいひあらはして物
事のわるだめ心遣ひなどの数とせり見ん人はかり
知べし
○或抄云清少納言に冷じき物十二月の月夜冬の扇
冬の夢　水　老女の假粧　女の酔たる胡瓜老法師の酔
て舞酒なき神樂　又或抄云清少納言と紫式部とは
同時の人にていとみあらがふ心も有しにや十二月の
月夜少納言は冷じき物にいひしを色なきものゝ身
にしむといへり心々のかはれるにや清少納言枕双
紙には十二月の月夜と云詞なし異本に侍るか否の事
紫の日記に侍るといへる其儀歟　紫日記しはすの

望月の比月いとおかきに物語しけるを人みてあな冷じしはすの月夜にも有かなといひければ春をまつ冬のかぎりと思ふにはかの月しもぞ哀なりける

【十五段】たゆまるゝもの　(卍)さうじの日のおこなひ、とをきいそき、(〇)寺にひさしくこもりたる　此段は詞すくなふして心をのづからしれやすし　たゆまるゝ物とは此段の題也あく心もわりくるしむ心もあり心よはき心もありわれとほこる心なども侍べし　さうじの日とは月なみの忌日命日などのつとめ何となくげたひがち成物也　とほきいそぎとは長旅などいそぐとてもたゆまるゝもの也　寺にとは別行物いみなどにこもりながらもあくもの也

(卍)精進也　〇たゆまるゝものゝ段に寺にひさしくこもりたるをいひし事心有べし下の廿段心ゆく物の段に此說經のことは聞いれずなにかはつねに聞ことなればみゝなれてめづらしう覺へぬにこそはあらめ云々かやうの見置しこと侍る故にたゆまるゝといひしなるべし

【十六段】人にあなづらるゝもの、いゑの北おもて、あまり心よきと人にしられたる人、年老たるおきな、又あは〳〵しき女、つゐぢのくづれ　此段も詞すくなふして心をのづからしれやすし　人にあなづらるゝものとは此段の題也　心かくれなし　いゑの北おもてとは隱居をりゐのみ殿などの心也かのをりゐのみかどに車たつるやうやあるといひし心おもひ合すべし

【十七段】にくきもの、(×)いそぐ事あるおりにきて、ながごとするまらふど、あなづらはしき人ならば、後になといひてもをひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくゝむづかし　此段凡十八節に見るべし題の心もかくれなきなり就中此一節は人にまじらふにつゐてにくみうとまるゝ事をいひて心遣ひを教たり

(×)つれ〳〵草さしたる事なくて人のがり行はよからぬこと也用ありて行たりとも其ことはてなばとく歸べし久しくゐたるいとむづかし人とむかひたれば詞おほく身もくたびれ心もしづかならず萬の事さはりて時をうつすたがひのため益なしいとはしげにいはんもわろし心つきなき事あらん折は中々其由をもいひてん云々是則今の双紙にもとつ

ゐて書る也　則徒然草は此章を引用ひて述る者也
注の心に見て可なるべければ委注之
硯に髪の入てすられたる、又すみの中に石こもりて、きしきしときしみてなりたる　第二節一度にゐて題の心を云也よく物のありさまをうつされたり
にはかにわづらふ人の有に、げんざもとむるに、れいある所にはあらで、外に有、たづねありくほどに、まちどをにひさしきを、(三)からうじてまちつけて、よろこびながら(四)加持せさするに、此ごろもの丶けにあづかりてこうじにけるにや、ゐるまゝにすなはちねふりごゑになりたる、いとにくし　第三節沙門といへども時にあふたる心遣ひなければばうとましうにくき義をしらせたり　此ごろもの丶けに以下はげんじやのありさまをいふ也病家にせちにおもふをげんじやがはからず我困じたるまゝにねふりなどするはいとにくき形勢かなと云義也
(三)辛カラウシテ　(四)加持ハ真言家に行法也
なんでうことなき人の、すゞろにえがちにて、物い(二)たういひたる、火おけすびつなどに、手のうらうちかへし、皺をしのべなどしてあぶりおるもの、いつかはわかやかなる人などのさはしたりし、老ばみたる物こそ、火をけのはたに足をさへもたげて、ものいふまゝにをしすりなどもするらめ、さやうのものは、人のもとに来てゐんとするところを、まづあふぎしてこなたかなたあをぎちらし、塵はらひすてゝゐるもさだまらず、ひろめきて、かりぎぬのまへ下ざまにまくりいれてもゐるかし、かゝる事はいひがひなきものゝきはにやとおもへど、すこしよろしきものゝ、式部大夫駿河前司などいひしがせしなり　第四節身の立振廻に就てにくき事をいへり　なんでうことなき人とは何の功も徳もなき年老ひたる人也　すゞろにえがちにてとはつとめわきまへぬ事を閑置まゝに咲たりがほに詞おほなるを云なり　いつかはわかやかなるとは老ばめる人をいさめたる義也わかき人のさやうになきと決するにはあらねども文章のいきほひにかく書事和漢其例おほしその上若き人おほくはたしなみふかければおくする心有者也　すこしよろしきとはいやしき物の事にさへうつりやすき人の心なるにましてよろしく時めく人々などのする事は見る人ごとにゆるしまねば

んと也是則老たる人時めく人などは人の鏘世の掟ともなべて思ふめれば殊更に心遣ひしていたづらにけだいの身を年にゆるすべからずとの義成べし(十一)辛源語箋　心ならずなど云義也　(十二)物いたういひとは詞おほく品にやしき心也俗字也つよき意もあり　○式部大夫暖河前司いまだかうがへず可尋之

(十三)又酒のみてあめき、(十四)口をさぐり、ひげあるものはそれをなでゝ、さかづき人にとらするほどのけしき、いみじくにくしと見ゆ、又のめなどいふ成べし、身ぶるひをしかしらふり、口わきをさへ引たれて、わらはべのこう殿にまいりてなどうたふやうにする、それはしもまことに、よき人のさし給ひしを見しかば、心つきなしとおもふ也　第五節遊宴酒宴などの折も心遣ひ身のたしなみなき人のにくき事をかけり　口をさぐり以下は口鬚などを捜摩也不浄しき心を云也　又のめなどゝは酔たはれて人をもそゝのかし酔する心也　口わきをさへひきたれとは涎嘔吐などのごときえもいはれぬことし或は舌たれ唇ゆがめなどしていとけなきものゝごとく成也　よき人のさし給ひしを見しかばとは世にある人のさやうに有しを少納言まのあたり見られたる事などあるにやあしき人ならば心にかゝるまじけれどやんごとなき人なれば如此心つきなう悪しと也(十五)萬葉に「かしこしと云ものよりも酒のみてえひなきするぞまして有らし　又「たゞにゐてかたらひするは酒呑てえひなきするに猶しかず也　白樂天云勸ㇾ酒詩云莫ㇾ怪近來都不ㇾ飲幾回因ㇾ醉却沾ㇾ巾誰料平生狂ㇾ酒客如今變作ㇾ酒悲人ト　孟子云是猶下悪ㇾ醉而強ㇾ酒上云々又梵網經槃若論などの酒の失すべて儒佛ともにいましめたる事經典に分明也さるに依て清少納言も此段を記されたり兼好もこれにもとづゐて徒然に用捨して酒の事書れたり(十六)あめき　喚叫意　或本ニハあがきトアリ跑意歟共に通べし

物うらやみし、身のうへなげき、人のうへいひ、つゆばかりの(十七)事もゆかしがり、きかまほしがりて、いひしらぬをえんじそしり、またわづかに聞わたる事をば、われもとよりしりたる事のやうに、こと人にもかたりしらべいふも、いとにくし　第六節心さ

まのにくき品をいひて敎とする義成べし　いひしらぬ以上はうらむべき事にもあらぬをうちみねにむ心也　此一節はをろかなる人の心成べし
(〇)怨エンジ　ねたむ心なり

物きかんとおもふほどになくちこ、からすのあつまりてとびちがひ、さはぎなきたる、しのびてくる人見しりてほゆる犬はうちもころしつべし　第七節かみにをろかなる人の心ざまをいひしつゞきに又をろかなる心をいふかみは物のことはりをしれる人のうへをいひこゝは物のことはりをわきまへぬ物のにくき趣を云也

さるまじうあながちなる所に、かくしふせたる人の(七)いびきしたる、又みそかにしのびてくる所に、ながゑぼししてさすがに人に見えじとまどひ出るほどに、物にさはりて(八)そよろといはせたる、いみじうにくし、(九)伊與すなどかけたるをうちかづきて、さら〳〵とならしたるもいとにくし、(十)もかうのすは、ましてこ(イ)はじのうちをかるゝいとしるし、それもやをらひきあげて出入(イテイル)はさらにならず、又(ロ)やり戸などあらくたてあくるもいとあやし、すこしもたぐるやうにてあくるはなりやはする、あしうあくればさうじなど、こぼめかしうほとめくこそしるけれ　第八節こゝろ得であからさまに立ふるまふ人のにくき事を云也　さるまじう以下は忍ぶ人を思ひよりのなき所にしのはするに心得もなくいびきせしと也　みそかに以下是も心得なき振廻にて人にそれよといはるゝと也　こはじのうちをかるとはもかうの有簾にこはじのあたると也　さうじなどのとは心得なき人のやり戸あくるはさうじどもゝなりひゞく義也
(七)鼾イビキ　睡臥息也　(八)俗にそよりと云心也そよぐと云同じ義也　(九)伊與簾は土產の名物也今に貢之　(十)帽額簾モカウノス　伊與簾に帽額の附たるを云也端の紋と云義非也　西宮記云撤尋常御簾一改ㇾ簾以二鈍色細布一爲二端帽額一云々帽額と云物別有二下委一　(イ)鐍コハジ　鐶匙コハジ　(ロ)遣戸ヤリド　常に緣側などに有戸を云也

ねふたしと思ひてふしたるに、(三)蚊のほそごゑにわびしげになのりて、かほのもとにとびありく、はかせさへみのほどにあるこそ、いとにくけれ　第九節是も心なき物のにくきをいふ也前のからすいぬなどの

つゐでにいふべきを愛にいひたるは心あるべし第七節ににくきことゞ立居振舞をいひしかば其つゞきにかくささいなる物をさへはかせなどうとましければましてそれにくらぶべきならねども人としては立居に心すべき事ぞとしらせんためくらべものに云成べし、又云例のしどけなき心にもやあらん
(三)荘子云[illegible]　山谷詩云牛[illegible]
きしめく車にのりてありくもの、みゝもきかぬにや(〇)あらんと、いとにくし、我のりたるは、その車のぬしさへにくし　第十節前にいふ内の立居のみならず外をありく[illegible]にも心すべき事[illegible]ことに人をいましむるにはわれより先おもひはかるべき事心ある[illegible]
(〇)前車のくつかへるを見て後車のいましめとする心も通ひて聞ゆ
物がたりなどするに、さし出て我ひとりさいまぐるもの、すべてさし出ば、わらはもおとなもいとにくし、むかし物語などするに、我しりたりけるは、ふと出ていひくだしなどする、いとにくし　第十一節人にまじはり物語などする心遣ひをいひて教ゆる義也ひとりさし出るも或は人の詞中にふと指出るも共に悪きと也
ねずみのはしりありく、いとにくし、あからさまに(ロ)きたる子どもわらはべを、らうたがりて、おかしきものなどとらするにならひ、つねにきつゝ、ゐ入て、(ハ)調度やうちちらしぬる、にくし　第十二節是又思ひやりなきものゝ悪きをいふ前のからす犬などの章と同じ心也　ならひ馴習心也　ゐ入てとは居入て也いづこ迄もうちとけゆきてあふるゝ義也
(ロ)白地アカラサマかり初の事也　(ハ)調度テウド
家にても、みやづかひ所にても、あはでありなんとおもふ人のきたるに、そらねをしたるを、わがもと(◎)にあるものども、おこしによりきては、いぎたなしとおもひがほに、ひきゆるがしたる、いとにくし、(三)いまいりのさしこへてものしりがほにをしへやうなる事をいひ、うしろみたる、いとにくし、我しる人にてある人の、はやう見し女のこと、ほめいひ出などするも、すぎてほどへたることなれど、猶にくし、ましてさしあたりたらんこそ、おもひやられ、

されど、それはさしもあらぬなどもありかし、（ホ）はなひて、ふれふみする人、大かた人の家の男しうならでは、たかくはなひたるものいとにくし　第十三節心ある人の物事わきまへしらぬさまのにくきを云なり

家にてもとは私宅也　みやづかひ所とはおほやけ外ざま也　いぎたなしとはめしつかふもの丶心也女房のねごきをいぎたなしと云迄也　いままいりとは是又別事を云也　うしろみたるとは後見などのやうに振廻ふ也　我しる人にてとは是又一章ニして別事也我しる人とは程へてあひしまらふ人など成べし　はやう見しとはむかし馴てわかれたる心也　ほめいひ出などすゝもとは彼客人が古の我妻の事をほめて友の前にて噺し出る心也　ましてさしあたりとは只今の義也今謂る丶女房の事を褒ていひたらんはいか計にくかるべしとの義也　それはさしもとは地の詞也左様の事などはひかへていはぬ人も有と也　はなひてとは又一章にて別の事也　ふれとは物に觸ゝ義也　ふみとはふみといへる亦成べし　家の男とは一家の夫也　しうとは主君也畢竟不可成事故にくしと也

（ニ）今參イマヽイリ官職便覽ニ見ヘタリ（⦿）いぎたなし　ねごき事をいふ也（ホ）毛詩云寤言不レ寐願言則嚏云々　又四分律云時世尊嚏諸比丘呪願言ニ長壽一時有ニ居士一嚏及禮拜比丘一佛令ミ比丘呪願言ニ長壽一　容齋隨筆云今人噴嚏不レ止者必噀レ唾祝曰有レ人說レ我婦人尤甚　萬葉に「打ゝげきはなをぞひつる劔立身にそふいもが思ひけらしも　古今に「出てゆかん人をとゞめんよしなきにとなりのかたにはなもひぬ哉　袖中抄云今俗正月元日若早旦嚏即禱曰ニ千秋萬歲急々如律令一是緣也何只在ニ元日一哉尋常禱レ之　みなこれはなひることのゆへを記し侍る今の心は不禮の義をいふ事也

（へ）のみも、いとにくし、きぬの下にをどりありきて、もたぐるやうにする、（ト）犬のもろごゑになが〳〵となきあげたる、まが〳〵しくにくし　第十四節又有情の無心なる物を云よく人情をかふがへてにくき物の内にかゝれし事を味はふべし　まが〳〵しとはいまはしきとの心也、猛々惡々

（へ）蚤ノミ　齧レ人跳虫也　抱朴子云蚤虱攻レ君臥不レ獲レ安（〇此意を　慈鎭和尙「しるくぞの人は

中々なかりけりなれにし夫　我ぞしる聲

乳母の男こそあれ、女はされとちかくもよらねばよし、おのこゞをば、只わが物にして、立そひりやうじて、後見、いさゝかも此御ことにたがふものをばざんし　人を人とも思ひたらず、あやしけれど、これがとがを、心にまかせていふ人もなければ　所えいみじきおもゝちして、事をおこなひなどするに、小一條院をば、今内裏とぞいふ、おはします殿は、清涼殿にて、其北なる殿におはします　西東はわたとのにてわたらせ給ふ、常にまうのぼらせ給御前はつぼなれば、せんざいなどうへ、ませゆひて、いとおかし、二月十餘日の日の、うら／＼とのどかに照わたるに、渡殿の西の庇にて、うへの御笛ふかせ給ふ、高遠の大貳、御笛の師にて物し給ふを、こと笛二つして、高砂をおり返しふかせ給へば、猶いみじうめでたしといふもよのつねなる、御笛の師にて其事どもなど申給ふいとめでたし、御簾のもとにあつまり出て、見奉るおりなどは、わが身に芹つみしなどおぼゆる事こそなけれ　すけたゞは木工のぞうにて、藏人には成にたる、いみじうあら／＼しう、うたてあれば、殿上人女房は、あらはにとぞつけたるを、うたにつくりて　さうなしのぬし、おはりそこの種にぞありけると、うたふをば、尾張のかねときがむすめの腹なりけり、これを御笛にふかせ給ふを、そひにさぶらひて、なをたかふふかせおはしませ、え聞さふらはじと申せば、いかでかさりとも聞しりなんとて、みそかにのみ吹せ給ふを、あなたよりわたらせおはしまして、此ものなかりけり、たゞいまこそ吹めとおほせられて、吹せ給ふ、いみじうおかし、

第十五節初には世中並ての乳母の夫のにくきさまを何となふいひて末には高遠が御笛の師にて所えがほなるさまのにくき由をかけり是則にくきものと云題の心を書る也　めのとの男こそあれとは乳母の男こそにくきものにてあれと也則ちにくき故を次に述る也　女はされどもとは女子には乳母の夫が間ちかふよらねばにくからぬと也或云乳母が夫にちかづかねばよしと也　おのこゞをばたゞわが物にしてとは養君を乳母の夫がわが物のやうにするさまのにくきよしを云也　此御ことゝは養君の御事に也　これがとがとは乳母の夫が身の上の

答也　小一條院以下は前の詞をうけて實事を記す
也先御ましの所を記す文章の法也　小一條院とは
近衛の南洞院の西陽尹公の家を里內裏にし給ふ也
　その北なる殿におはしますとは南の御殿は清凉
殿也其北は常の御殿ぞと也其間の東西に渡殿有と
也　常にまうのぼらせ給ふとは參り給ふと云義也
御前とは清凉殿と常の御殿の間の坪を云也　うへ
の御笛吹せ給ふとは一條院の吹せ給ふ成べし　高
遠とは傳記次に記す　こと笛とは二管と云義也
御簾のもとにあつまり出て見奉るとは女房達の出
て見らるゝ義也　わが身に芹つみしとは高遠が事
を云也高遠いやしき身にて御門の御前ちかふまい
る事の辱を彼猛福太が事にたとへ云也是迄高遠が
いみじきさまをしるせり　すけたゝ以下は又高遠
がにくげなるさまを云也すけたゞは木工のぞうに
て藏人に成たるとは木工の允より藏人に轉任した
ると也　あらはにとぞつげたるとは互にいひあひ
てわらふ心成べし　うたにつくりてとはすけたゞ
が事を今樣のうたひものに作り口號義也　ごうと
は木工のぞうを云義なるべし木工のぞうより藏人
に成しゆへぞうなしとは成の字也　お
はりそこの種とはすけたゞが俗性を云也則次に子
細をかけり　尾張のかね時がむすめの腹とはすけ
たゞが外戚のかたにや　これをとは殿上人女房な
どのうたふ今樣ごとをふかせ給ふと也　そひにさ
ふらひてとは高遠が御門にそひて笛を連吹にする
義也　なをたかう以下高遠が詞也すけたゞが事を
調子高く吹給へと也　いかでか以下は御門の御心
也高遠がごとくあなどり思召さで忍び〳〵吹給ふ
義也　あなたよりとはすけたゞがあるかなきか御
覽じわたらせ給ひたる義也

(十)女　めの子　をんな讀にしたがひ兩義也　(一)
料（リヤウシテ）　領同　(二)讒（ザンシ）　(三)面持（チモ、チ）
　顏持と云同じ義也　(四)小一條院　九ノ卷ニ詳
也　(五)籬（マセ）　笆同　架同　藩架（マセ）
(六)藤氏家譜云
●●實頼（號小野宮）─齊敏（從三位參木）─高遠（太宰大貳正三位歌人　母播磨守尹文女）
大鏡公卿補任幷作者部類等見へたり傳略之　(七)
催馬樂高砂初段「たかさごのさいさゝこのたかさ
での　二段「をのへにたてる白玉椿玉柳イニ玉椿

三段「それもかもさむましもかもましもかと　四
段「ねりをさみおのみそかけにせん玉柳　五段
「なにゝしかもさんなにしかもなにしかも　六段
「こゝろもまたいけんゆりの花さゆりの花　七段
今朝さひたるいつ花にあひまし物をさゆり花の
右七段の歌を笛に吹給と也歌の義は抄見ゆ　（八）
芹　みし昔　芹つみし昔の人も我ごとや心に物
はかなはざりけん　顯昭云芹つみし昔の人とは家
々の髓腦にさまゞゝにいひたれど慥なる證文も見
えず尙献芹と云本文こそさもと聞え侍れ献芹の由
ならばさて有なん詞ぎよめの事ならばすでにおほ
けなきこゝろをおこすよしになりぬべし如何嗟職
の后事かけまくもおそろし又芹を御簾の邊に置事
も難信歟又小野僧正說法之條不審也就中行基敎ニ
化智光ニ事不審也件のまふくた丸たとひ十餘歲に
て發して歿後に行基爲ニ導師ニ者其後まふくた生ニ
人界ニ又受ニ智光之身ニ歟云々　今案未曆云袖中抄に
此芹つみし事を博く色々に沙汰して未ニ一決ニ也證
文に文選の献芹博物記の說など擧て略是に同心せ
られし也亦綺語抄無名抄等の詞ぎよめの者芹つみ

し和國の昔物語をおほけなきおそろしなどいひて
ニ信用ニ又奥義抄の紐繭太丸が芹つみつゝ姫君を
戀にしたりしも時節相違の義をいひ立て不ニ信仰ニ
かれといひ是といひ和國の昔の物語の義はみな浮
說のやうに成もてゆく只唐の献芹の義のみ證據に
成べきやうに見ゆるこそうたてあれ抑和歌の本意
は唐の故事のみにかぎらず和國のむかし語も折ふ
しごとによむならひぞかし況や本朝のいにしへよ
り中古風土記にのせ給ふ此迄口づから語傳ふる所
のかやうの說窠多なるぞやされば口傳の義參差區
々なればとて浮誕のうたがひをおもふべからずい
にし事の口說を後に書傳ふるは皆如レ此異說あり
て後日に見る人怪異浮虛の疑ある物ぞかしすべて
今本文の芹つみのことといづれのゆへと人とはゞ只
遠く唐迄なくとも大和の國のむかしの物語にまかせ
て釋し侍らんは親しからん歟只書つらねし古抄の
詞に繫縛せられずとも古人奥旨にて義理を味はふ
べき事肝要也今いふ事も詞は心をつくさねば略し
て今案を書しるす也　（九）勘物云長保比此名字藏
人不レ見云々　今ノニ職事補任ニ藤爲任　正曆　長保の

此藏人の由見えたり爲任をスケタヽと讀也若此人にや廣く可尋之爲任の系圖は小一條左大臣師尹公孫正二位大納言濟時卿の子也（十）職員令云木工頭一人掌營構木作及採材事助一人大允一人少允二人大屬一人少屬一人工部二十人使部二十人直丁二人駈使丁又木工式略之官位令云大允正七位下小允從七位上　誠にいやしき品也此品より藏人に成故あら〳〵しと云也（◎）つけたる　告語義也（△）おはりそこ　一本ニハおはりうこと有そ文字をうに作るそ字の時は兩義有おはりぞこの種とその文字をてにをはに見る一義あり又おはりにて句を切そこの種とよむ一義也そこおはり葉の種と云義也又うこは氏の子と云義歟（ロ）かねとき未考之

文ことばなめき人こそ、いとゞにくけれ、世をなのめに書ながしたる詞のにくさこそ、さるまじき人のもとにあまりかしこまりたるも、げにわろき事ぞ、されど我得たらんは、ことはり、人のもとなるさへにくゝ社あれ大かたさしむかひても、なめきは、など、かくいふらんと、かたはらいたし、ましてよき人などをさまうす物は、さるはおこにていとにくし、お、こしうなど、わろくいふいとわろし、わがつかふものなど、おはする、の給ふなどいひたるいとにくし、こゝもとに侍ると云もじを、あらせばやときく事こそおほかれ、あいぎやうなくと、ことばしなめきなどいへば、いはるゝ人は、聞ひともわらふ、かくおぼゆればにや、あまりてうろうするなど、いはるゝまで有人も、わろきなるべし、第十六節文など書やうこと葉つかひの事につゐて心遣ひなきもの、にくき品を云也　なめげとは無禮也我よりうずたかき方へ無禮なるさまを云也　世をなのめにとはをしなべてなひがしろにあなどる心也さるまじきとは同じ位よりも下つかたへやるにあまりゐんぎんなるは又あしきと也　されどさうあれど也わが得たるは勿論人のうへの事とてもにくかるべしと也　大かたとは世間體に相交りてなめげなるはあしく見ゆるとの義也　さるはおこにてとは左樣なる人は嗚呼なると也　わがつかふ者とは從者下人の詞遣ひを云也　おはする是一句也　の給ふ是一句也下人が主をなめげにいふ心也　こゝもとに侍るとはおはすると云詞のかへを教たり是等

の詞にてなめげには聞へぬぞと也　ことばしなめきとはことば遣ひを教ゆる義也　いはるゝ人はとはあいぎやうなくとゝ詞云なめげなどゝいひ教ゆる人也　聞人もわらふとはいひ教ゆる人をそばにゐて聞人が笑へると也　かく覺ゆればにやとは地の心也教へていへば結句はあざけるやうに思ふと也　てうろう嘲哢也　いはるゝまで有人もとは教ゆるひとをたゞに笑さへにくきに嘲哢すると迄云やからはいよ〳〵にくきとつのる文也

(◉)源語類聚云おかしき事也又あなづらはしきこといづれに付てもあしき事也(▲)或本いとにくしノ下ニゐなかびたる物などのさあるはおこにていとよしトアリ(▲)或本おはするを何とおはするトアリ(一)或本おほかれノ下ニさもいひつべき物には人間の愛敬なくとかう此詞はなめきといへば聞人もいはるゝ人もトアリわらふ以下同じ詞也

殿上人宰(四)相などを、たゞなのる名を、いさゝかつゝまじげならずいふは、いとかたはなるを、(三)げに能さいはず女房の局なる人をさへあの御許君などいへば珍かに嬉しと思ひて譽事ぞいみじき、殿上人公達を御前より外にては、つかさをいふ、又御前にても(一)のをいふとも、きこしめさんには、などてかは、丸がなどいはん、さいはざらんにくし、かくいはんに、わろかるべき事かは、ことなる事なきおとこの、ひきいれこゑして、えんだちたる、すみつかぬすゞり、

是十六節のうちこと葉つかひの惡きをいふ也　たゞなのる名とは實名なるべし　つゝまじげならずとはうはさいひ名などよび出す時實名をとなふるは故實にあらずと云心也　いとかたはなるとはつゝましげなくいふはかたをちなると也所々によりていひやう有と也　げによくさいはずとはよく心得ていふ人なしと也　女房のつぼねなる人さへ以下は女官の名をとなへよぶ心を教ゆる義也實名をいはずつかさを呼べと也　女房のつぼねなる人とは局に居る時はと也　珍かに嬉しと思ひて以下は女房のこゝろに思ふと也　殿上人きんだちとはかさねていひわくる故實を斷也　御前より外にてとはみかどの御前にては實名をとなへ御前より外にてはつかさくらひをとなへよぶと也、又御前にて物いふとも とは天子后宮などの御前にて物い

ふ事を敎たり　きこしめさんには何を切べし　などてかは何を切べし此三句は詞遣ひをいひをしへたり　いはんとは三句をうけてかくいへとの心也　さいはざらんにくしとはさやうにいはぬはにくしと也則敎ゆる所の三句の心也　かくいはんにとは再釋也　三句の心にて詞遣ひせんにわろき事あるまじきと也　ことなる事なき男とは貌色風儀艶ならぬとの心成べし是一章別の事也　ひきいれごゑとはおもひ入深いふ心成べし　えんだちとはうらみだつ心也艶に一ふしことさまある人のひき入ごゑにうらみだちたらむにこそおかしからめ　こと成事なきをのこのかくあらんは尤にくかるべき事也　すみつかぬすゞり又一章別の事也文章ならひ一轉して如此の事書加るは筆者の家風也よく人情をはかりて書たる成べし（一）官をよぶ時は參議といふ名によぶ時は宰相といふ也參議の異名の由職家の沙汰あり華庵云以二參議一稱二宰相一事不レ知二何世始一（▲）げに能ヲ或本ニきようトかけり同じ心成歟（▲）或本をのがどち物いふともトアリ　〇怨の字也だちは思ひだちけしだちなどの心也

女房のものゆかしうする、たゞなるだにいともおもはしからぬ人の、にくげにことしたる、ひとり車にのりてもの見んおとこ、(◎)いかなる物にかあらん、やン ごとなからずとも、わかきおとこどもの物ゆかしう思ひたるなど、ひきのけても見よかし、すきかげにたゞ一人か(×)ゝよひて、こゝ(〇)ろひとつにまもりゐたらんよ、あかつきに歸る人の、よべをきしあふぎふところ紙もとむとて、くらければさぐりあてん〳〵とたゞきわたし、あやしなど打いひもとめ出て、そよ〳〵ふところにさしいれて、あふぎ引ひろげて、ふた〳〵とうちつかひて、まかり申たる、にくしとはよのつねいとあいぎやうなし、おなじごと夜ふかくいづるひとの、ゑぼしのをつよくゆひたる、さしもかためずとも有ぬべし、やをらさながらさし入たりとも、人のとがむべき事かは、いみじうし(上)どけなうかたくなど、なをしかりぎぬなどゆがみたりとも、誰かは見しりて笑ひそしりもせん、とする人は、なをあかつきのありさまこそおかしくもあるべけれ、わりなくしぶしぶにおきがたげなるをしゐてそゝのかし、あけ過ぬ

あな見ぐるしなどいはれて、打なげくけしきもげにあかずものうきにしもあらんかしとおぼゆ　指貫なども、ゐながらきもやらず、まづさしよりて、よ一夜いひつる事のこりを女のみゝにいひ入、なにわざすとなけれど、おびなどをばゆふやうなりかし、かうしあけつま戸ある所は、やがてもろともにいでゆき、ひるのほどのおぼつかなからん事なども、いひ出にすべり出なんは、見をくられて名殘もおかしかりぬべし、なごりも出所あり、いときはやかにおきて(チ)ひろめき、たちて指貫のこしつよくひきゆひ、なをし(リ)うへのきぬ(ヌ)かりぎぬも袖かひまくり、よろづさし入を、つよくゆふにくし　第十七節男も女も惡き振廻心遣ひ有事を書り　女房の物ゆかしうするとは先にくき人をいひて次第に其段を述る也　たゞなるだにとは平生のさまと云義也　事したるとは事をなすさま也　ひとり車にのりとはたゞなるだに思はしからぬと云人のさまにや　やごとなからず共とはやんごとなからずともゆかしき人をと也　わかきをとことはゆかしう思ふて見る人也　すきかげにとは車の簾の透影也　かゝよひてはかゝやひてすき見ゆると也あかつきにかへる人とはたはれありく人の晨に立歸さま也　たゞきわたしとはほの聞き故にこぐしと尋ぬる心也　にくしとはよのつねいとあいぎやうなしとは地に判ずる心也たはれたる人の晨のていをよのつねにくしといふめれどそれはあいぎやうなき心ぞと判したり　おなじごとくはおなじ如ながら夜ふかにいづる人のゐぼしつよくゆひたるはにくしと斷りいふ心也　やをら以下再釋也　しどなう四度解(シドケ)なふゐぼしもかたむくともたれかとがめむとの心也　とする人とはまへのつくらふ人の上をさして二たび云也　ゐながらきもやらずとは名殘ををしむさま也　なにわざすとなけれどとは心をかくしたる文章味はふべし　いひ出にすべり出なむとはかへるさの名殘をしきさまよくうつし得られたり心もあきらかなり(◎)此所のにくき詞を前の心つきなき物の段にも書り尤にくき心つきなき其趣等しき也　(×)熒輝(カヤク)　カヤヨフ　五音相通也　(○)夕宵(ユウベ)　ヨベ中路也　(ト)四度解(シドケ)　いにしへは一年四ケ度の勘帳ありしと也諸國の任たる者より四ケ度の勘定帳

を勘解由へ達するを四声解と云也其勘定の未進など有をしどけないと云也今物事亂雜したるをしどけないと云は此義也土佐日記に解由なとゝき書しも此事也 (ト)西宮記云着貫主者巳下衆人其所レ用也古時有レ制臣下不レ用近代五位已上昇殿六位用レ之 (チ)西宮記云直衣王者以下及殿上聽ニ雜袍ニ者衣レ之殿上人舊例以ニ直衣ニ爲ニ衣常ニ袍近代不レ用レ之上臈者宜ニ衣下着ニ下襲ニ隨レ便不ニ常事ニ着ニ烏帽ニ之間披ニ直衣ニ家中事也不ニ私事ニ着不レ得ニ出行ニ式部丞家中及私行間着レ之更云々從殿上人頭未レ聽ニ新直衣ニ之前以ニ舊時袍若直衣ニ爲ニ宿衣ニ (リ)表衣ウヘノキヌ (ヌ)狩衣カリギヌ

あけて出ぬる處たてぬ人、いとにくし、第十八節かみの出てゆく人のつゞきに戸などある所出入に心遣ひせぬ人の惡き事を云て教とせり是則文の結び也 凡此一段十八節心遣ひ身の振廻折節の物事につゐてにくき品をよく見たて人情をうつされたり宜心をとめて味はふべし

十八段 心ときめきするもの、(ル)すゞめの子がひ、(ヲ)ちごあそばするところのまへわたりたる、よきたきものたきてひとりふしたる、からの鏡のすこしくらき見いでたる、よきおとこの車とゞめてあないしとはせたる、かしらあらひけさうじてかうにしみたるきぬきたる、ことに見る人なき所にても、心のうちはいとおかし、まつ人などある夜、雨のおし風の吹ゆるがすもふとおどろかる、 此段詞みじかふして心をのづからあきらかなりすべて一節に見るべし 心ときめきするものとは當段の題なりあやぶむ心うれしき心もあり心の動を云義心もあり すゞめのとはあやぶむ心をいふ也 兒あそばするとはあやぶむとうれしきとの心をいふ也 からのかゞみとはうれしき心をいふ也 よき男とはうれしくおもはゆき心也 かしらあらひ以下を別に見ても通ずる也又よきおとこの句につゞけて見るも可也學者用捨したがふべし心あきらか也

(ル)源語類聚云時の一字をときめくと讀也めくは付字也時に成たると云心也云々愛の義に少ことゝ也
(ヲ)格物論ニ云雀ハ小鳥也常ニ依レ人云々

十九段 すぎにしかたこひしきもの、かれたるあふ(イ)

ひ、(ロ)ひいなあそびのでうど、(ハ)ふたあゐ(ニ)ゑびぞめなどのさ(ホ)ゐてのをしへされて、(ヘ)さうしの中にありけるを見つけたる、又折からあはれなりし人の文、(ト)雨などふりてつれ〴〵なる日さがし出たる、(チ)こぞのかはぼり、(リ)月あかき夜　此段も詞すくなふして心おのづから明なり過にしかた戀しきものとは此段の題なり心分明也凡折ふしのうつり行にしたがひ調度やうのものまで餘情(ナゴリ)深き趣をのべられたり其文章殊に心を付て見るべし四季の物事にとりてもあはれ淺からぬ事をしるされたり又折からの一章は雜の心をいふ也　是なほ戀しかるべき事也　月あかき夜とはすへに此句を記されたる氣味いよ〳〵淺からぬもの也前にいひしごとく物によそへて戀しきのみならずしづかに月にむかひ物したらん心いかばかりにやと深く味はふべし　凡人の上にたつ人も世の務にたぐへておもひあはされぬべし道をつとむる人法をおこなふ身山里の奥[illegible]路の變いづれか月あかき夜をよそに見しや誠に詞みじかくて心長き趣也

(イ)公事根源云むかし夢の告侍しよりけふ人々葵桂のかづらかくる也賀茂松尾の社司前の日より所々へ奉る云々今のみあれの神事是也身にもかけ調度にもかくる事也それを守りにのこしおく也周防內侍がみすの葵のとよみしは家の集(ニ)かけり玉だれに後の葵はとまりけりと長明が四季の物語にも書る由侍るもみな清少納言の心より書る成べし(ロ)雛遊　ヒイナアソビ　(ハ)二藍前に注す　又名目抄云二藍四位已下夏下重色也　(ニ)覺悟抄云(ニ)葡萄染經(ハタテ)赤緯(ヌキ)紫又云表(ハ)蘇芳裏花田自(レ)冬至(レ)春　西宮記(ニ)云葡萄(ヘ)冬時用(レ)之打　微正記物語(ニ)云えびぞめの下がさねはえびつるの色したるもの也葡萄のうみたる色は紫黑色なるもの也此色をえび染と云葡萄と書てえびかづらとよむ也　葡萄(エビカヅラ)日本紀　(ホ)後撰秋下紅葉といろこきさいてとを女のもとにつかはして源の調君「戀る泪にぬるゝわが袖と秋の紅葉といづれまされる」切れ〴〵のやう成絹を云也漆こす絹紅をこす布などをも今さゐでと云も此事也(ヘ)障子　サウジ　障子にたてはさみし心也　(ト)書籍せうそこのやう成もの泣こもる詞也此心をつれ〴〵にもひとりともし火のもとに文をひろげ見ぬ

世の人を友とすと書し也　又韓退之符讀書城南詩
時秋積雨霽新涼入郊墟灯火稍可親簡編可卷
舒」朗詠云書卷展時逢故人」新古今に此心を
「言のはの中を鳴々詩れば昔の人にあひ見つる哉
(チ)蝙蝠を見て扇を作り初ける故かはぼりと云
也　(リ)爰に月あかき夜と書れし心より見れば十
二月の月をすさまじきとてすつるにはあらず或人
の評に心々のかはれると云たるは誠にかたをちぬ
判よく清紫二女の骨髓を感得せられし也

【二十段】こゝろゆくもの、よくかいたる女繪のこと
葉おかしうつゞけておほかる、物見のかへさに乘こ
ぼれてをのこどもいとおほく、牛よくやる(ヌ)もの〻車
はしらせたる、しろくきよげなるみちのく紙に、(ル)い
とほそうかくべくはあらぬ筆してかきたる、てうば
みに、てうおほくうちたる、川舟くだりさま、はぐ
(ヲ)ろめのよくつきたる、うるはしきいとの、ねりあは
せくりしたる、(ワ)物よくいふ陰陽師(カ)して、河原に出て
すそのはらへしたる、夜ねおきてのむ水、つれ〴〵
なるおりに、いとあまりむつかしくはあらず、うと
くもあらぬまらうどのきて、世の中の物がたり、此こ
ろある事のおかしきもにくきもあやしきも、これ
にかゝりかれにかゝり、おほやけわたくし(ヨ)おぼつか
なからず、聞よきほどに語りたる、いと心ゆく心
地す、社寺などにまふでゝ物申さするに、寺には法
師、社には禰宜などやうのもの〻、くらからずさは
やかに、おもふほどよりもとゞこほりなく、聞よく申
たる、凡是より下のかくやと思ひやらるゝもおかし
かりぬべしと云迄そこばくの詞皆當段の內也詞こ
とに事品侍れ共すべて題の心にそむかず今亦八節
にして釋之見む人の用捨いかんともはかりがた
し只愚按の分也就中第一節心ゆくものを取あはせ
書つらねられたり　心ゆくものとは此段の題也心
にかなふ義也慰意もありうれしき意も有すべて氣
味のよき事どもを云也如の字成べし　をのこども
おほくとは供のおのこ成べし　牛よくはしらせた
るとは舍人のいみじきを召具せられたるをいふ
よるねおきてのむ水以上の六章は心あきらか也い
づれも心ゆくもの也　つれ〴〵なるおりとはさは
がしくとも如此の心ならば慰べきにましてつれづ
れなる比來らん尤心ゆくべき也　これにかゝりか

れにかゝりとはおほやけわたくしかれこれの事に
つけて語る義也　くらからずさはやかにとは寺に
て法師社にて禰宜やうのものにさぞとおもひ打ま
かせたのみしにその甲斐なくば施主も心地よから
ず神佛もうけ給はぬにやと思はるべしそのごとく
にはあらでいふ事とゞこほりなくおもふ事のまゝ
なるやうに諷誦祝詞したらんは尤心ゆくべきと也
(ヌ)檀紙也　(ル)双六のこと也今東國にてうはみと
て打也てうとは重目の事也　(ヲ)文選註云黒齒國
在東海中其土俗以草染齒故曰黒齒云々今婦
人五倍子鐵のこと也　(ワ)職員令云陰陽師六人掌
占筮相地　(カ)令義解云祓者解除不祥也名越
の祓身會貴の祓などのこと也　(ヨ)天事　遊仙窟

公事

檳榔毛(タ)はのとやかにやりたる、いそぎたるはかろが
ろしく見ゆ、あじろははしらせたる、人の門の前な
どわたりたるをふと見やるほどもなく過て、ともの
人ばかりはしるを、誰ならんとおもふこそおかしけ
れ、ゆるゝゝとひさしくゆけばいとわろし、牛は、ひ
たひちいさく、しろみたるが、はらの下あしのしも、
おのすそしろき、馬はむらさきのまだらづきたるあ
しげいみじく黒きが、足がたのわたりなどに白き所
うすこうばいのけにて、かみおなどもいとしろき、げ
に、ゆふかみといひつべし、牛飼はおほきにて髮あ
かしらがにて、かほのあかみてかどゝゝしげなる、
(ソ)ざうしきずひじんは、ほそやかなる、よきをのこもな
を若き程は、さるかたなるぞよき、いたくこえたるは
ねふたからん人とおもはる、小舍人はちいさくてか
みのうるはしきが、すそさはらかに聲おかしうて、
かしこまりものなどいひたるぞ、りやうゝゝしき、

精はうへのかぎり黒く、ことはしろからん、第二節
車の事をいふ唐には六藝の中にこれを習ひ本朝に
は舍人の職にこれをつとむ最故有哉凡馬車に付て
心ゆく事をかけり牛馬ざうしき隨身舍人皆そのち
なみにいふ也ねこの一章はこれ又牛馬の縁に云成
べしかろゞゝしく見ゆとは檳榔毛の車はたゞ人は
のらぬ車なればいかにもおもゝゝしげにせよと
也　あじろとは是はたゞ人ものりゆけど品いやし
き人の行裝見ぐるしければはやく過てたれならん
とゆかしがらるゝほど成がおかしきと也　あし

げとは足の毛也　げにいふかみとは馬の白き髮はもとゆひなどにて結たるやうに見ゆるとたとへたる心也　よきをのこもとは大がらにたくましきもわかき程は雜色隨身が似合しきと也　ことはしろからんとはこと所は也

（ク）びろうげの車上に注す　（レ）格物論ニ云牛ハ大牲數種アリ赤色曰レ騂黄曰レ犉白曰レ㸜云々　（ソ）職原ニ云雜色ハ良家子補レ之　禁秘抄ニ云本員ハ數八人代々皆傳ニ藏人一仍公卿子孫又可レ然諸大夫多補レ之近比少々相交但多良家子不可說僧子幷不レ知物等補レ之尤不レ可レ然事歟雖レ爲ニ諸院宮判官代藏人一不レ可レ着ニ搢貫一只狩衣體也上古上卿仰レ之近代頭下ニ知藏人一々々仰ニ出納一下ニ名簿一　（ツ）隨身上に注す　（ネ）禁秘抄云小舍人六人近代及ニ十二人一歟此等事更非レ言ニ本意御成敗一一向頭藏人計也知ニ出納一如ニ鷄鬪一合事彼御時例也不ニ甘心一近年萬事雖レ廢彼等不レ見レ目近代好ニ華族一動存ニ無禮一尤不レ可レ然清涼殿御裝束時頻好ニ昇殿一予度々以ニ藏人一追下畢近代公事六位無ニ沙汰一偏只出納小舍人沙汰也誠雖レ爲ニ奉公者一終レ日潤屋躰也着ニ美服一又望ニ衛府志判官一尤不レ似ニ先例一昔多白張裝束也昔通衣冠狩衣況着ニ衛府裝束一近日事也可レ止小舍人召ニ加藏人下知一有ニ名符一歟可レ勘御冠師頭仰レ之給所別當召望名符下ニ給所一一切皆可レ准レ之小舍人多補ニ史生一　職原云小舍人以上皆有ニ重代經歷之輩一注 裝束白張狩衣立烏帽子乎殿上人之出納御倉等下雜事召使也

說經（セツキヤウ）の講師（カウシ）は、かほよき、講師の顏をまもらへたるこそ、そのとく事のたうとさもおぼゆれ、ひがめしつ(チ)ればふとわするゝに、にくげなるは、(ム)つみやうらんとおぼゆ、このことばは、とゞむべし、すこし年などのよろしきほどこそ、かやうのつみはえがたのことばかきいでけめ、いまはつみいとおそろし、又たうとき事道心おほかりとて、說經すといふ所に、さいそにいきぬる人こそ、なを此つみの心地にはさしもあらで見ゆれ　第三節說經の場にして清少納言のまのあたり見及びし事を記されたりすなはちせつ經の場へまうづる人々あるひはその間のよそほひなどにつゐて心ゆくことを云也　說經の講師は顏よきとはおほくの聽衆まもるによりにくげなるは心ゆかぬと也　かうしの顏をつとまもらへとは

聴衆の心也まもらへはまもり聞心也　ひがめしつればふとわするゝとは餘所見すれば說法を忘るゝほどに講師の顔を守り見居たれどにくげなる顔は其主も罪あらんと見し人の思ふ也　此ことばとゞむべしとは清少納言が心にして地の詞也顔柔和ならんは功徳も有べしにくげなる法師は却て罪咎を得られんなどゝいひて沙門を誹謗する詞をとゞむべしと誡たり　すこし年などのよろしきとは年長老したる義也　えがたとは得る事也かたは僻の助也　ことば詞也かやうのつみをえん詞をいひ出すは老ての事ぞと也　今はつみいとおそろしとは清少納言が心にして地の詞也いま老ばみすゞろにえがちに物いたういふなればみづからかへり見て尤つゝしむべき比ぞと也　又さいそは最初也さしもあらで見ゆれとは彼道心おほかる人なれば罪得るやう成心持はなきと也

(ナ)僻目ヒガメ　傍見也(ム)にくげなるはつみやうらんとは前生に忍辱の功徳もなくて慳貪の罪のむくゐや得らん如此顔にくげなるぞといふ心にや

藏人おりたる人、むかしはごせんなどいふわざもせず、その年ばかり、内わたりにはましてかげも見えざりける、いまはさしもあらざめる、藏人五位とて、それをしもぞいそがしうつかへど、猶なごりつれ〲にて、心一つはいとまあるこゝちぞすべかめれば、さやうの所にて一たび二たびも聞そめれば、つねにまうでまほしうなりて夏などのいとあつきにもかたびらいとあざやかに、うす二藍あをにぶの指貫などふみちらしていためり、ゑぼしに物いみつけたるは、さるべき日なれど、功徳のかたにはさはらずと見へんとにや、いそぎ來てそのことするひじりと物語して、車たつるをさへぞ見いれ、ことにつゐたるけしきなる、久しくおはざりける人などのまうであひたる、めづらしがりてちかくゐより、物語し、うなづき、おかしき事などかたり出て、あふぎひろうひろげて口にあてゝ笑ひ、さうぞくしたるずゞかいまさくり手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして、車のよしあしほめそしり、何がしにて其人のせし八かう經供養にといひくらべゐたるほどに、此說經の事は聞いれず、なにかはつねにきくことなれば、耳なれてめづらしう覺へぬにこそはあらめ、さはあら

で講師ゐてしばしあるほどに、さきすこしおはする車とゞめておるゝ人、蟬の羽(一)よりもかろげなる直衣(ナホシ)指貫(サシヌキ)すゞしのひとへなどきたるも、かりぎぬのすがたなるも、左様にては、わかくほそやかなる、三四人(ミタリヨタリ)ばかり、さふらひのもの、又さばかりしていれば、初めにゐたりつる人も、すこしうちみじろきくつろぎて、かうざ(二)のもとちかき柱のもとなどにすへたれば、さすがにずゝをしも見などして、ふしおがみ聞ゐたるを、講師もはへ〴〵しう思ふ成べし 是三節の内にして説法聽衆の差際(シナクヽリ)あることをいふ也說經の場に差(シナ)尊き人のまうで給へばさはがしきもしづまりていみじく心ゆく樣(サマ)ぞと云心を記されたり ごぜんとに御膳也藏人湊ニ御膳ニと有の事也 いふわざもせずとは藏人おりし人の義也 その年ばかりとは此一句を切べし藏人かけてゐる間を其年計と云也藏人の間計内わたりにて御膳奏するわざなどすると也 うちわたりにとは、藏人おりたる人の事を再釋する也 いまはさしもとはたゞいまは五位の藏人もいにしへの如く事しげふなくたゞ藏人の職つとむる時ばかりいそがしういにしへの名

殘迄にて有と也 こゝろひとつとは藏人の心也 さやうの所とは說法の場也 一たび以下藏人の意也夏とはたへがたき比も功德のかたへひかるゝ心ぞと也 ゑぼしに以下公事神事のある時を云也 さはらずと見へんとにやとは地の詞也いにしへは公事しげく藏人も隙なくことに物忌つけたる比かやうのいま〳〵しき寺などへははゞかりしが今は公事すくなく物忌の藏人さへ寺にまうづると諷したる心也 いそぎ以下は藏人のまうでたる由なり 其事するひじりとは物忌の時は法師にあはず物いはぬ格式也 車たつる以下は藏人の實に法を信ずる心ならぬ由を云也さへそのぞ文章心有べし ことにつゐたるとは事の次手などに來るやうの振廻ぞと也 ひさしくとは聽衆内に知音のありしかばこれと又物語すると也うなづき以下聽衆の内の知音と雜談の體也 なにがしにてとは何がしと云處にて也有し所をさす也 其人のとは導師を云也 なにかはつねにとは地の評也 さはあらでとはさやうにはあらで異なるやんごとなき人ぞと也 さきすこしおはするとは靜に警蹕(サキオヘセテ)なり 車と

は彼やんごなき人の車也　せみのはよりとは裝束をいふ　又さばかりしてとは又少時して參詣し人の入來り給ふさま也　はじめにとは先へまうでし人の時宜などする心也　さすがにずゞをしもみとはいまうで給ひし人のさま也　講師もとは地の詞也

(ラ)藏人前に注す　(ム)藏人おもの奏する事も前に見ゆ　(ツ)一たび二たびとは說經のこと也　(ヰ)覺悟抄云青鈍着花田濃色也云々　(ノ)日隱糸に准じて小忌を付る事有今その遺風に物忌の二字を書て付ること有云々　(△)ことについたる。事の次手と云心も有殊に着たると云心も有殊に着たるは着座の心也　(○)念珠にて傍を裝束の念珠と云也　(○)かいまさぐり　かきさぐる也　(○)手まさぐり　手すさむ心也　(オ)拾遺夏　大中臣能宣

鳴聲はまた聞ね其蟬の羽の薄き衣はたちそぎてける「覺悟抄云蟬羽衣うらのなきすゞしの惣名云々或は面檜皮色裏青云々四月用之　(ク)高座也

いかでかたりつたふるばかりと說出たるなり、ちやうもんすなどたふれさはぎ、ぬかづくほどにもなくて、よきほどにたちいづとて、車どものかた見おうせて、われどちいふ事も何事ならんとおぼゆ、見しりたる人をばおかしと思ひ、見しらぬは誰ならんそれにやかれにやなど思ひやり、めをつけて見をくらるゝこそおかしけれ、そこに說經しつ、八かうしけりなど、人のいひつたふるに、その人はありつや、いかゞはなど、さだまりていはれたるあまりなり、などかはむげにさしのぞかではあらん、あやしき女だに、いみじう聞めるものをば、さればとてはじめつかたは、かちありきする人はなかりき、たまさかには、つぼさうぞくなどばかりして、なまめきけさうじてこそはあめりしか、それもものもふでをぞせし、說經などはことにおほくも聞へざりき、此ころ其折さし出けん人の、命ながくて見ましかば、いかばかりそしりひはうせまし、これは三節の結び也聽聞の場でさはがしき人々のありさまいみじき人のかちありきして物もうでする事などをいひてかみの意を結ぶ義也　いかでかたり傳ふるばかりとゝはいかなれば如レ此說經などをかたり傳ふるやうにとゞこほりなく說給ふと云義也　ちやうも

んす以下は聽聞のみつるまでゐらんは人々さはがしからんとて半(ナカバ)に立さはぐ人の事をいふ也　われどちいふとは立さはぐ人のいふ詞也　そこに以下は集ゐる人の物語也　その人はありつやとは立さはぐ人などの聞とがめて委問ふ心也　いかゞはなどさだまりてとは委問はん爲に又居さだまると也　あやしき女だにとはいやしき女さへ心しづかに聞居たると也　さればとてとはさやうにあればとて也　はじめつかたとは昔を云也　かちありきする人はなかりきとは行儀たゞしくかちありきなどするいやしき事はなかりしと也　つぼそうぞくとは行儀正しくする義を云也　なまめきとは女の體を云成べし　それもとはつぼうさぞくけさうなどの人をさす　ものまふでとは參る計はくるしからじ説經聽聞などゝてわかき身宮づかへの人などのまふでこもりゐたらんはあしからんと也　此ころとは當時をいふ也　その折とはいにしへをいふ也　ひはうとは誹謗也

(〇)(ヤ)今のかいとりすがたと云事也

ぼたひといふ寺に、結縁八講(ケチエンハツコウ)せしが、聞にまふでたるに、人のもとよりとくかへり給へ、いとさう〴〵しといひたれば、はちすの花びらに、もとめてもかゝるはちすの露ををきてうき世にまたはかへるものかは」と、かきてやりつ、まことにいとたうとくあはれなれば、やがてとまりぬべくぞおぼゆる、さうちうが家の人のもとかしさも、わすれぬべし　第四節上にわかき身宮づかへの人などは聽聞にこもりゐる事然べからぬよしいひしかば、其斷を云也　かみには聽衆の中にかしかましう物語し立さはぎなどして聽聞を妨げし人の事或は又いにしへよき人などの説經の場へはまうで給はぬ事を云也こゝには又上の段のうらを斷侍る也心ありてこもり居たらんはくるしからじとにやみづからの菩提寺に籠りし事を記されたり　聞にまふでたるにとは清少納言みづから聞にまふでられたる也　人の許(モト)よりとは友のもとよりと也　いとさう〴〵しとは清少納言が籠りしをしたひたる義也　もとめてもの歌優曇花(ウドング)のえがたき心をよみたるなるべし尤籠り居る詮も聞へ侍る　まことにとは清少納言みづから思ふ通をいふ詞也佛の道がたうとくあはれなる

と也　さうちうが家の人のもとかしさもわすれぬべし或本にはさうちうか家のもとかしさもわすれぬべしとあり又本にはつねたうが家とあり共に未詳猶可レ尋レ之

(ヤ)拾芥抄云菩提樹院神樂岡東上東門院御領

(マ)千載集には此詞書と少遠りぼだいと云寺に結緣の講しける時聽聞にまふでたりけるに人のもと、よりとく歸りねと云たりければつかはしける云々

小白河といふ所は、(コ)小一條の大將殿の御家ぞかし、それにて上達部けちえんの八かうし給ふに、いみじくめでたき事にて、世の中の人のあつまり行てきく、をそからん車は、よるべきやうもなしといへば、つゆとともにいそぎおきて、げにぞ、ひまなかりける、ながへのうへにまたさしかさねて、三つばかりまでは、すこし物もきこゆべし、(エ)六月十よ日にて、あつき事世にしらぬほど也、池のはちすを見やるのみぞ、すこしすゞしき心ちする、(テ)左右のおとゞたちをおき奉りては。おはせぬかんだちめなし、ふたあゐのなをしさしぬき、あさぎのかたびらをぞすかし給へる、すこしおとなび給へるは、あをにびのさしぬきしろきはかますゞしげなりや　第五節かみの次手にこ白河にて八かうありしにいみじき心ゆく事なれば記されたる成べし　かんだちめとは上達部が執行給と也　露とともにとは早朝より行心也　みづばかりまではとは長柄をみつばかり置隔て聞ゆると也其より程へだてゝは聞へがたきと也　六月とは八かうの時をしらせたり　すこしすゞしき心ちすとは六月比の群集なればたへがたき事かぎりなけれども池の蓮にてすゞしく思ひ忘るゝは清少納言のなさけふかき心也　左右のおとゞとは左大臣殿右大臣殿除きておほかたまふで給ひしと也群集の由に見えたり　ふたあゐ已下は裝束をしるす　すこしおとなびとはおとなしく上らうめけるかた〴〵の事也　靑鈍已下又裝束の事也

(コ)小一條大將師尹公前に注す　(エ)寛和二年の六月中旬に八講ありしなり則下にさてその廿日あまり中納言の法師になりたまふあり是則義懷中納言寛和二年六月廿四日に花山院の御供して出家せられしことなれば此前かたのことを六月十よ日と云也　(テ)此時の大臣は公卿補任第六云左大臣正

二位源雅信云々右大臣正二位藤兼家云々

(ア)安親の宰相なども、わかやぎだちて、すべてたうとき事のかぎりにもあらず、おかしき物見なり、ひさしのみすたかくまきあげて、なげしのうへに上達部おくにむかひて、なが〳〵とゐたまへり、その下には殿上人わかき公達、かりさうぞくなをしなどもいとおかしく、ゐもさだまらず、こゝかしこにたちさまよひ、あそびたるもいとおかし、實方の兵衛のすけ、長明の(ユ)侍從など、家の子にて、いますこし出入なれたり、まだわらはなる公達など、いとおかしうておはす、すこし日たけたるほどに、三位中將とは關白殿をぞきこへし、(ミ)かうのうすもの〻ふたあゐのなをし、おなじ指貫、(シ)こきすはうの御はかまに、はりたる、しろきひとへのいとあざやかなるをき給ひて、あゆみ入給へる、さばかりかろびすゞしげなる中に、あつかはしげなるべけれど、いみじうめでたしとぞ見え給ふ、ほそぬりぼねなどほねはかはれど、たゞあかき紙を、おなじなみにうちつかひ持給へるは、なでしこのいみじうさきたるにぞ、(ヱ)いとよくにたる、まだ講師ものぼらぬほどに、かけばんともして何にかはあらん物まいるべし、(ヒ)義懷(ヨシチカ)の中納言の御ありさま、つねよりもまさりて、きよげにおはするさまぞかぎりなきや

是すなはち第五節の內也八かうの道場のいみじきあり樣をうつされたり　わかやきだちてとは年老ひ參議などにておはしますが上達部殿上人などの若輩なる聽衆のなみにつらなり給へるをいふ成べし　ひさしのみす以下の三句心あきらか也　家の子にてとは執柄の流をいふ也すなはち實方の朝臣長明の侍從などをさして云也　またわらはなるとはそのほか上達部殿上人もおはせしと也　すこし日たけたる程にとはいづれもは露と共にいそぎまかで給ひしが三位中將道隆公はすこしおそくわたり給ふと也　かうのうすもの以下裝束を云也心別義なし　さばかりかろびすゞしげなる中にとはいづれもの方々は御裝束も美麗になく輕々しくまします中へ道隆卿はいみじき御裝束にてわたり給ひしと也　ほそぬりぼねとはいづれも持給ひしあふぎの事を云也　まだ以下は點心調菜などのまうけをたてまつるよしを云也　義懷の中納言とは花山院の寵臣にておはしませば

いづれもより取わけいみじき御ありさまぞと也

(ア)藤氏系圖云

●●●山蔭―仲正―

―安親 參議正三位 母伊勢守源友貞女 長德二年三月六日薨歳六十七

公卿補任云中納言山蔭孫故從四位上攝津守中正三男母伊勢守源友時女云々　職事補任云一條院藏人頭散位從四位上藤安親寛和二年六月廿三日補前坊亮永延元十一月十一日任參議云々正暦三年參議正三位修理權大夫備中權守云

(キ)藤原家譜云

●●●師尹 小一條左大臣 ―貞時 濟時イ ―實方 母左大臣源雅信女

今昔物語廿四云今昔藤原實方朝臣ト云人有ケリ小一條ノ大將濟時ノ大納言ト云ケル人ノ子也一條院ノ御時ニ左近中將トシテ内ノ殿上人ニテ有ケルニ不思懸陸奥守ニ成テ其國ニ下テ云々行成卿と口論によりて奥州へ左遷の事古事談十訓抄其外諸記に詳也　作者部類云左中將藤實方侍從貞時子拾遺以下作者云々　(エ)長明　傳記系圖未見倘可尋

(メ)藤氏家譜云

●●●基經―忠平―師輔―兼家―道隆 母從四位上攝津守藤仲政女

天暦十一年癸丑生康保四年從五位下同十二月昇殿花山院永觀二年正月七日參議從三位一條院永祚二年五月八日詔關白十三日爲氏長者同廿六日更命攝政辭大將同六月朔給隨身内舍人二人左右近府生番長各一人近衛各四人聽牛車　(ミ)香薄二藍　(シ)濃蘇芳 コキスワウ　(エ)懸盤 カケバン

(ヒ)藤原家譜云

●●●師輔 九條右大臣 ―伊尹 謙德公 ―義懷 母三品代明親王女從四位上惠子女子

公卿補任云故攝政太政大臣伊尹公五男母中務卿四品代明親王女天祿三年正月七日從五位下圓融院永觀二年參木從三位花山院寛和二年權中納言從二位同六月廿四日於花山出家依天皇御出家也法名悟眞卅歳受戒後名寂眞寛弘五年七月十七日入滅五十二大鏡云又一條攝政殿の御おのこゞ花山院の御時みかどの御をぢにて義懷の中納言卿と聞えし少將たちの御おなじ腹よその御時はいみじうはなやき給ひしみかど出家せさせ給ひてしかはやがて我

もをくれ奉らじとて花山までたづね參りて中一日(ヒトヒ)はさめて法師になり給ひきいひむろといふ所にいとたうとうをこなひてぞかくれ給へしその中納言もむまごにはおはせしかど御心たましゐいとかしこくいうそくにおはして花山院の御時の政は只此殿と惟成の辨としてをこなひ給へればいといみじうし給ふぞかし云々

上達部(カムダチメ)の御名など、かくべきにもあらぬを、たれなりけんとすこしほどふれば、色あひはな〳〵といみしく、にほひあざやかに、いづれともなき中のかたびらを、是はまことに、たゞなをしひとつをきたるやうにて、つねに車のかたをみやりつゝ、物などいひかけ給ふ、おかしと見ぬ人なかりけんを、後にきたりつる車のひまもなかりければ、地に引よせてたてたるを見給ひて、實方の君に、人のせうそこつき〳〵しういひつべからんもののひとりとめせば、いかなる人にかあらん、えりて出おはしたるに、いかゞいひやるべきちかくゐ給へるばかり、いひあはせてやり給はむことばゝ聞えず、いみじくよそひして、車のもとにあゆみよるを、かつは笑(ワラヒ)給ふ、あとのかたによりていふめり、久しくたてれば歌などよむにやあらむ、兵衛佐(スケ)返し思ひまうけよなどわらひて、いつしか返事きかんと、おとなかんだちめまで、みなそなたざまに見やり給へり、げにけそうの人々まで見やりしもおかしうありしを、返事きゝたるにや、すこしあゆみくるほどに、扇をさし出てよびかへせば、歌などのもじを、いひあやまちてばかりこそは、よびかへさめ、ひさしかりつるほどに、をのづからあるべき事かは、なをすべきにもあらじ物をとそおぼえたる　第六節聽衆の車のかたへ仰てせうそこつかはされし事を書れたり　上達部とは地の詞也或云地に實方の事を云也たれなりけんとおもひ程ふる内にせうそこするものとてめされ出給ふと也　色あひはな〳〵といみじとは上達部の事を云也　いづれともなき中とはいづれもの中に目に立ぬ心也　是はまことにとはかたびらのすゞしげにはな〳〵しきさまを云也　つねに車のかたをとは上達部の車どもの方をのみ見ゐ給ふと也　見ぬ人なかりけんをとははな〳〵しければ皆々見まいらせしと也　たてたるを見給ひてとは花山院の御覽せし成べし

實方の君にとは實方の君に仰られしと地に斷云也實方を遣して仰らるゝと云義にはあらずたゞ誰成ともせうそこよくいひつべからん人をとめせばいづれもの中よりえらびて實方の啓せられしと也人のせうそことは花山院のめす御詞也　せうそこ消息也音問（ヲトヅレ）也　いかなるとは地の詞也えらまれ給ふ人はいかなる人やらんと思ひしとなり則實方のえらまれし使也　いかゞいひやるとは實方仰をかふむり下侍などにせうそこ云渡す由を地に云なり聽衆の車へいひつかはさるゝ由也　ことばゝ聞へずとは地の心也いひふくめ給ふ詞何事やらん聞えぬと也　いみじうよそひしてとは使の下侍が身をつくろふ意也　かつは笑ひ給ふとはこなたより見やりてわらふ也　あとのかたにとは使の下侍車のあとのかたへより供の者などにせうそこいひわたす心也　久しくたてればとは使の者しばらく待ゐると也　歌などよむにやとはこなたよりはかりて云ふ心也　返し思ひまうけよとはむかふの車の内より歌やよみてこすらむかねて返しの覺悟せよと也　返事きかんとはむかふより來るせうそこの返事を待義也　そなたさまとはむかふの車のかたをさす也（△）けさうの人々とは兒女房化粧せし人也女わらはまでなどゝ云心也　すこしあゆみくるとは使のもどる意也　あふぎをさし出てとは彼車のかたより使をよび返すさま也　歌などのとはこなたの人々あやしむ心也使を久しくまたせしほどに歌の文字も心もあやまりあるまじければ何とて又よびかへすらんとあやしみ待かねたる心なるべし（七）實方の兵衛佐也前に見ゆ（△）けさう　或説云懸想するむかふの人々までも見ると也則かの車の内をさして云也

ちかくまいりつくも心もとなく、いかに〳〵とたれもとひ給へどもいはず。權中納言見給へば、そこによりてけしきばみ申三位中將、とくいへあまり有心すぎてしそこなふなとのたまふに、（セ）これもたゞおなじ事になん侍るといふは聞ゆ、藤大納言は人よりもげにのぞきて、いかゞいひつるとのたまふめれば三位中將、いとなをき木をなんをしおりためると、聞え給ふに、うちわらひ給へば、みな何となくざとわらふ聲きこへやすらん、中納言、さてよびかへさ

れつるさきには、いかゞいひつる、これやなをしたる事ととひ給へば、ひさしうたちて侍りつれども、かくも侍らざりつれば、さは歸參りなんとて歸侍るをよびてとぞまふす、たれが車ならん見しりたりやなど、あやしがり給ひて、いざ歌よみて此日はやらんなどのたまふ程に、講師のほりぬれば、みなゐしづまりて、そなたを見るほどに、此車はかいけつやうにうせぬ、したすだれなど、たゞけふはじめたりと見えて、こきひとへがさねに、ふたあひ(ヌ)のおりもの、すはうのうすものゝうはぎなどにて、しりにすりたるも、やがてひろげながら(一)うちかけなどしたるは、何人ならん、なにかは人のかたほならん、ことよりはげにと聞へて、中々いとよしとぞおぼゆる　これ則第六節の內にして使の歸りし事をいふ也ちかくまいりつくとは使が歸りてこなたへ近づく心也　とひ給へどもいはずとは返事わすれてえ申さぬと也　權中納言見給へばとは義懷のもとへ使がよりて申さんとするさま也　三位中將とくいへとは道隆の使がわすれたるとは思召ずして興あらせんとて秘し申かとの義也彼徒然草などにいひしごとく

あまり興あらんとする事はあひなき物の心也　これもたゞおなじ事になんとは道隆卿への申上やうも分明ならぬ同じやうの事なめりとかたはらより云心也　藤大納言とは爲光卿の心もとなく思召たづね給心也いかゞいひつるとは返事をいかゞいひしぞと也　三位中將とは返事のやうを三位中將の聞給ひての給ふ也　いとなをき木をなんをしおりためるとは使が申し返事の趣也それを三位中將殿の仰せひろめらるゝと也　うち笑ひ給ふとは使がわすれてしどもなき返事申したるをいづれも笑ひ給ふと也　中納言とは義懷卿初使のよびかへされし故をとひ給ふ義也　ひさしうとは使が答へ也　かくも侍らざりつればとは返事を給はざりつればと也　よびてとぞとは使が立歸りしをよびかへしてなをき木をなんをしおりためると返事有しと使が答へ申也　たれが車ならんとはいづれも車の主をあやしみ給ふ心也　此日はやらんとはけふは歌よみ彼車の主へをくり慰まんと也　講師のぼりぬとはとかくする中に八講はじまるとて法師高座にのぼると也　そなたとはかの車のかたを見れば

いづちへやらん行うせたるとなり　したすだれとはかの車のよそほひを云也　なにかは人のかたほならんとはなみ〳〵ならぬ人ぞと也　ことよりとはたてならべし餘の車どもよりいみじきと也誠にかやうのゆかしげにしたてたる車にせうそこし歌などよみ送りけん事尤心ゆくべき事なるべし

(セ)掛物云爲光七月廿日右大將四十五

藤原氏家譜云

基經―忠平―師輔―爲光京極祖號一條法住寺

補任云右大臣師輔公九男母延喜第九皇女前齋宮四品稚子內親王天慶五年生天曆十一年正月七日從五位下云々貞元二年四月十四日任權大納言寛和二年七月廿日右大臣永延二年從一位正曆二年九月七日太政大臣同三年六月十六日薨年五十五移葬法住寺贈正一位諡恒德公封相摸國　大鏡に傳有今略之　(ス)後へたれて引るゝ義也　(一)片帆あしき心又は物事不足心也眞帆はよき心也

朝座のかうし(二)清範、高座のうへもひかりみちたる心地して、いみじくぞあるや、あつさのわびしきにそへて、しさすまじき事のけふすぐすまじきを、うちをきて、たゞすこし聞て、かへりなんとしつるを、しきなみにつどひたる車のおくになむゐたれば、いづべきかたもなし、朝の講はてなばいかて出なんとて、まへなる車どもにせうそこすれば、ちかくたゝんうれしさにや、はや〳〵とひきいであけていだすを見たまふ、いとかしかましきまで人ごといふに、おひかんだちめさへわらひにくむを、きゝいれずいらへもせで、せばがり出れば、權中納言や、まかりぬるもよしとて、打ゑみ給へるぞめでたき、それも(三)耳にもとまらず、あつきにまどひ出て、人して五千人の中にはいらせ給はぬやうもあらじと、聞えかけて歸にき、そのはじめよりやがてはつる日まで、たてる車の有けるが、人寄來とも見えず、すべてたゞあさましう、ゑなどのやうにて過しければ、ありがたく目出度、こゝろにくゝいかなる人ならん、いかでしらんと問けるを聞給ひて、藤大納言などは、何かめでたからん、ゆゝしき物にこそあなれ(四)と、の給ひけるこそおかしけれ、さてその二十日あまりに、中納言のほうしになり給ひにしこそ、あはれなりしか、さくらなどのちりぬるも、なをよのつねなりや、

(六)老をまつまのとだに、いふべくもあらぬ御ありさまにこそ見え給ひしか　第七節結願の比の事清少納言の見てずして下向せられしさまの事などを書れたり　あさゞのかうしとは八講の朝座の講也朝講夕講などゝて有し事也　ひかりみちたるとは清範の威儀道德の殊勝なる心をのべられたり　しさすまじき事とは八講半途にせずして必ずみつべきいはれを云也　けふすぐすまじきとはけふその結願ぞと也　すこし聞てとは清少納言みづからの事也結願満座以前に下向せんとする義也　いかで出なんとは講はてなば皆一度にさはぎつどひていかでたやすく出んとてまへかたに立出る心也　はやくゝとひきいでとは供の者共が八かうのすむと聞てわれ先にと車を引出すと也　かしかましとは立さはぐ事を云也　人ごといふわれもくゝ云義也人毎に云也　おひかんだちめとは立さはぐ人々をおひかんだちめがわらふと也　いらへもせでとはゐしやくもなくをし分て出る義也　權中納言とは義懐詞をかけてしづかなる内に出給ふもよろしとの給ふ也　耳にも以下少納言詞也　人してとは清少納言使を義懐のもとへやりそなたにも彼四部の五千人のやうにやがて歸り給はんと戲れ云也　そのはじめよりとは聽衆の車の中にあやしげにたてる車の侍りしを云也　ゐなどのやうにてとは人もとぶらひこずうごきもやらずさうぐしきさま也　心にくゝとはいづれもその車を見て心にくゝゆかしがる義也　藤大納言などゝはさやうにゆかしくは思召ずゆゝしくおもひ給ふとなり　さてその以下は義懐卿花山院の御供し出家せられし事をいふ也　さくらなどのとはたとへ也櫻の花などのちるはよのつねさだまりし事なればさのみおどろくにたらずたゞ此卿の世を捨花の袂をすみ染にし給ひし事はあるべき事にもあらずと也

(一)勸物云清範法相播磨國人號二清水律師一長德四年權律師　東齋隨筆云清範律師は播磨國人興福寺の法相宗也空晴僧都の法孫守朝已講の上足說法無双にて文殊の化身といはる不思議なる事あげて計ふべからず御堂入道殿實否をしり給はんとて佛事を修し百僧を請せらる僧の座には皆半疊を儲らる一の半疊に文珠と書たる札をへりの中に隱て百座に

敷まじへらる此律師吾座は候とてかき分て此半疊に座せられたり其後決定文珠の化身とはしり給へり卅八にて遷化清水寺の上綱と號せり　又大鏡云又清範律師犬のために法事しける人の講師に請せられていくを清昭律師同じ定の説法者なればいかゞすると聞にかしらつゝみてたれ共なくて聽聞しければ只今や過去聖靈は蓮臺の上にてほとほえ給ふらんとの給ひけるをされぱこそこと人はかく思ひよりなましやなをかやうのたましゐある事はすぐれたるみはうぞかしとこそほめ給ひけれ　（三）方便品云爾時世尊告二舍利弗一汝已慇懃三二請豈得レ不レ説汝今諦聽善思二念之一吾當下爲レ汝分別解説中此語上時會中有二比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等一即從レ座起禮レ佛而退所以者何此輩罪根深重及增上慢未レ得謂レ得未レ證謂レ證有二如レ此失一是以不レ住世尊默然而不二制止一爾時佛告二舍利弗一我今此衆無二復枝葉一純有二貞實一舍利弗如レ是增上慢人退亦佳矣　榮花物語云寛和二年六月廿二日の夜にはかにうせ給ひぬとのゝしる內のそこらの殿上人上達部怪しの衛士仕丁に至迄殘る所なく火をともして至らぬくまもなく求め奉るにゆめおはしまさず云々中納言や惟成の辨など花山に尋ね來りにけりそこに目もつゝらかなる小法師にてついゐさせ給へるものかあなかなしやいみじやとそこにふしまろびて中納言も法師になり給ひぬ惟成の辨もなり給ひぬ淺ましうゆかしうあはれにかなしとは是より外の事あべきにあらず彼御ことぐさの妻子珍寳及王位もかくおぼしとりたる也けりと見へさせ給ひてさても法師にならせ給ふいとよしやいかで花山迄道をしらせ給ひてかちよりおはしましけんと見奉るにあさましうかなしうあはれにゆゝしくなん見奉りけりかくて廿三日に東宮位につかせ給ふ云々　（六八）老をまつま（七）　此歌可レ考

七月ばかりいみじくあつければ、よろづの所あけながら、夜もあかすに、月のころはねおきて見いだすもいとおかし、やみも又おかし、有明はたいふもおろかなり、いとつやゝかなる板の、はしちかうあざやかなるたゝみ一ひら、かりそめにうちしきて、三じやくの几帳　おくのかたにをしやりたるぞあちきなき、はしにこそたつべけれ、おくの、うしろめ

たからん、よ人はいでにけるなるべし、うす色のうらいとこくて、うへはすこしかへりたるならずは、こきあやのつやゝかなるが、いたくはなへぬを、かしらこめてひききてぞねためる、こうぞめのひとへくれなゐのこまやかなるすゞしのはかまのこしいとながやかに、きぬの下よりひか（八）れたるも、まだとけながらなめり、そとのかたにかみのうちたゝなはりて、ゆらゝかなるほど、なが（九）さをしはかられたるに、又いづこよりにかあらんあさぼらけのいみじうきりみちたるに、ふたあひのさしぬき、有かなきかの色したるこうぞめのかりぎぬ、白きすゞし、紅のとほすにこそはあらめ、つやゝかなるが、霧にいたうしめりたれば、ゐぼしのをしいれられたるけしきも、しどけなく見ゆ、あさがほの露おちぬさきに、ふみかゝんとて、道のほども心もとなく、お（十）ふの下草などロずさびつゝ、我かたへゆくに、かうしのあかりたれば、みすのそばをいさゝかあげて見るに、おきていぬらん人もおかしう、露もあはれなるにやあらん　第八節折ふしの風景につゐておましのしつらひえならぬかたへ忍ぶ人のあるさまを記されたりいかさま清少納言身に對して有し事か又は見及びし事などなるべし情ふかく心ゆく事共也

七月ばかりとはかみに六月のころの事書し文のつゞき也　よもあかすとは殘暑たへやらねばしとみやり戸などあけながらいねあかすと也　月のころとは涼氣を引のみならず月の夜目さめて興有心也　やみも又おかしとは上にいひしごとく也　有明はたいふもおろか也とは夜もすがら月を友ないねんは又更にいふに及ばずと也さて其ごとくなる折ふしいとつやゝかなる板のはしちかうおましつらひ給ふかたの事を云也　かりそめにとは月のためすゞみのためなれば常にはあらざる也　あぢきなきとははしたなく見ゆると也　おくの句を切べし奥のかたにたつるはうしろめたしと也　よ人とは夜人也忍び契る人を云也　出にけるなるべしとは如此几帳押やりはしゐするは忍びつまの夜人が出て行たるならんと也　うす色のとは又夜の裝束を云也　うす色の句を切べしうす色のあやの小袖うらはいとこく有と云義也　うへすこしかへりとはおもての色やう〳〵うつろひかへりたる

やうなどの義也　きぬの下よりひかれとは衣の下より引出たるやうの心也　まだいづこよりにかあらんとはかのはしゐに髪たゝなはりゆらゝかなるかたへ忍び來る人有よしを云也或云よべ忍びし人の朝にかへる事を云也　二あひ以下裝束を云也心あきらか也　紅のとほすとは白きすゞしを紅の色がすき通すやう成と也　ゑぼしのをしいれられたるとはかたぶき着てしどけなき心を云也　あさがほの露おちぬさきにとははやく歸りて夕部の餘情の文などやらんとの心也　道の程も心もとなくとは人に逢むもしらず心あはたゞしき義也　我かたへ行にとは女の心也かの女房忍びし夫の朝に歸るさまを見やりて云義也我かたへは夫がかたへ也

(七)唐人句秋裳困レ人仍御レ扇曉風生レ竹却添レ衣（本ノマヽ）

(八)徒然草に女は髪のめでたからんこそめたつかめれと書しも是にもとづけるなるべし　(九)朝開アサボラケ　朝朗アサボラケ　(イ)萬葉十一に人丸「櫻麻のおふの下草露しあればあかしていゆけ母はしるとも　仙覺云さくらあさとは櫻いろなるあさのある也おふのかはら下野國云々

しばし見たれば、枕がみのかた、にほふに、むらさきの紙はりたるあふぎひろごりながらあり、みちのく紙のたたう紙のほそやかなるが、花かくれなゐか、すこしにほひうつりたるも、几帳のもとにちりぼひたる、人のけはひあれば、きぬの中より見るに、うちゑみてなげしにをしかゝりゐぬれば、はぢなどする人にはあらねど、うちとくべき心ばえ(ロ)にもあらぬに、ねたうも見えぬるかな(三)と思ふ、こよなきなごりの御あさゐかなとてすのうちになからばかり入たれば、露よりさきなる人のもどかしさにといらふ、おかしき事とりたてゝかくべきにあらねど、かくいひかはすけしきどもはにくからず、枕がみなるあふぎを、我もちたるてをよびてかきよするが、あまりちかふよりくるにやと、心ときめきせられて、ひきぞくだらるゝ、とりて見などして、うとくおぼしたる事など、打かすめうらみなどするに、あかうなりて人の聲々し、日もさしいでぬべし、霧のたへまま見えぬほどにと、いそぎつる文もたゆみぬるこそ、うしろめたけれ、出ぬる人も、いつのほどにかと見えで、萩の露ながらをし折たるにつけてあれど、えさし出

ず、香のかのいみじうしめたるにほひ、いとおかし、あまりはしたなきほどになれば、たち出て、我をきつる所もかくやと、おもひやらるゝも、おかしかりぬべし　これも八節の内にして後朝の名殘を云也　しばし見たればとは前の女房の夫を見をくり又跡を見廻す心也　枕がみは枕もと也匂ふ紫紙にて張(ハリ)し扇陸奥紙の疊紙などを忘置と也　人のけはひとは召つかふものゝ詰(ツメ)居(キ)る義也　打えみてとは彼いとまごひのやうすを女房が獨おもひつゞけて笑意也　ゐぬればとて押懸(オシカケ)などして詰居る義也　はぢなどゝは女房の心也召使者にてちかふまいれば辱(ハヂル)にはあらね共かやうの折を見へん事は餘りの事ぞと也　こよなきなごりのとは召使者がいふ心也あまり御なごりをしげにとのごもり給とていさめなぐさむる心也　露より先なる人とは夫を云也女房の召使者に答給ふ詞也　おかしき事以下は地の詞也かやうの好色の事なれど書のすべきにあらねどかたらふさまの情深くいとやさしければ書のせたりと也　枕がみなるあふぎとは忍びし夫のわすれ置たる扇を女房のとりかくす心也　あまりちかくよりくるにやと心ときめきとは扇をとりかくさんとするさまのおもはゆき心を云也　ひきぞくだらるゝとはとりかくさんとする手もとをひかゆる也　うとくおぼしたるとは互に恨事など疎じがほにもてなしてしか〳〵の事いふ内に程ふりしと也　あかうなりて以下は女房の心也　いそぎつる文とは男も女もたがひにはやく後朝の文やり歌など送らんとおもひしをそなはるとてくゆる心也　出ぬる人とは男をいふ也出て歸り給ひし跡かげも目たけ程ふるにしたがひて見えぬと也萩の露以下は男のかたを云也とくより文したゝめ露をふくめる萩の枝につけて送らんと思へども人の心をはゞかりなどしてためらふ心也　かうの香のとは過し夜のうつり香也　あまりはしたなきほどにとは過し夜の事思ひつゞけてこもりゐ侍れ共目もたけ過ぎ人やあやしむらんと閨を立出る義也　我をきつる所もとは我は男みづからいふゆふべ女のねやにてわがをきたりしを今ひとりねの床に思くらべいよ〳〵わすれがたくゆかしき心を云也　おかしかりぬべしとは地の詞也　右心ゆく物の段を八節に分て釋

し侍る何れも慰み心如事共なれば此段に記されたる也

(ロ)無越コヨナキ前に注す　(ニ)すのうち　簾中スノウチ

清少納言枕草紙抄卷三

廿一段　木の花は　こくもうすくも紅梅　櫻は花びらおほきに葉色こきが、枝ほそくて咲たる、藤のはな、しなひながく、いろこくさきたる、いとめでたし、卯の花は、しなをとりてなにとなけれど咲ころのおかしう、(ロ)郭公のかげ(イ)にかくるらむとおもふにいとおかし、祭のかへさに(ハ)紫野のわたりちかき、あやしの家どもおどろなるかきねなどに、いとしろうさきたるこそおかしけれ、あを色のうへにしろきひとへがさねかづき、あを(ニ)くちばなどにかよひていとおかし

此段は木に咲花の事をいふ也詞すくなければ章句をわけず一節に釋し侍る也　木の花とは　是則當段の題也諸木の花共おほしといへどもとりわけ心ある花どもはとの義なるべし則下の花どもの詞に心をつけてみるべし　こくもうすくも紅梅とは春とく咲花にて匂ひふかくいさぎよきはな也こきもうすきも共にすてがたきと也　櫻は花びらおほきに花のりんちいさきはあしき心也　葉色こきとは今鹽竈などいふ櫻のごとく葉の色も紅なるがよき

と也　藤の花是則いにしへも今も賞玩なる物也
卯の花とはこれより夏の花を云也　しなをとりと
は梅櫻より下品なると也　なにとなけれどゝは
何の賞玩すべき由もなけれど咲折ふしのいみじき
と也　郭公のかげにとは咲比のいみじき事を云也
祭のかへさとは賀茂の祭の歸さ也　あやしのと
はいやしき民の家居也　おどろなるかきねとはし
どけなき垣根にうるはしく咲たるはおかしきと也
又卯の花は垣根にうへ來る事尙しきにや歌にも垣
見草とよめり　あを色のうへにとは垣根の卯の花
を見たてたるさま也靑色の衣のうへに白き單衣を
かさねかづける女房などのさまに似たると也　あ
をくちばなどにとは是もたとへなり靑朽葉の衣は
表靑丹のくろみありて裏あをきと云々
(イ)柿本人丸「鳴聲をえやは忍ばぬ郭公初卯花の
陰にかくれて　(ロ)賀茂祭の事は前にしるす
(ハ)紫野　山城國也　(ニ)覺悟抄云靑朽葉靑丹ノ
黑ミアリ裏靑老者多着レ之四五月
四月のつごもり、五月ついたちなどのころほひ、橘の(ホ)
はのあをきに、花のいとしろくさきたるに雨のふり

たる、つとめてなどはよになくこゝろあるさまにお
かし、花の中よりこがねの玉かと見へていみじくあ
ざやかに見へたるなど、あさ露にぬれたる朝ぼらけ
の櫻にをとらず、ほとゝぎすのよすが(ヘ)とさへおもへ
ばにや、なをさらにいふべきにもあらず、梨花よに
すさまじくあやしきものにして、ちかふもてなさず、
はかなき文つけなどだにせず、あいぎやうをくれた
る人のかほなど見ては、たとひにいふも、げにその
いろよりしてあひなく見ゆるを、もろこしにかぎり
なき物にて、文(ト)にもつくるなるを、さりともあるやう
あらんとて、せめてみれば花びらのはしに、(チ)おかし
きにほひこそこゝろもとなくつきためれ楊貴妃みか
ど(リ)の御使にあひて、なきけるかほににせて、梨花一枝
春雨をおびたりなどいひたるは、(ヌ)おぼろけならじと
おもふに、猶いみじうめでたきことは、(ル)たぐひあら
じとおぼへたり、桐の花、むらさきにさきたるはな
をおかしきを、葉のひろごりざまぞうたてこちたけ
れど、又こと木共と、ひとしう(ヲ)いふべきにもあら
ず、もろこしに名つきたる鳥の、え(ワ)りて是にのみゐ
るらん、いみじう心ことなり、まいて琴につくり、

さま〳〵になる音の出くるなど、おかしとはよのつねいふべくやはある、いみじうこそはめでたけれ、木のさまぞにくげなれど、あふちの花いとおかし、かれ〳〵にさまことにさきて、かならず五月五日にあふもおかし　四月のつごもり以下橘の事をいふ也　四月のつごもり五月のついたちとはさみだれの降くらすころにて侍れば折ふしにつけつゝあはれなる心をしらせたり則雨のふりたるつとめてなどゝいふ皆あはれなる心をのべたり　こがねの玉とは橘の花の中に黄色なるしべのあるを云成べし朝つゆにぬれたる黄色のしべを玉と見なしたるべし　あさつゆにぬれたるとは橘のくらべものに朝露をける櫻をいへり尤やむごとなき賞玩也　郭公のよすがとは歌に多くよみ來りてしれたる事也　梨の花とは是より梨の花を云也　すさまじくとは愛すくなき心也　あやしくとはいやしきと也　ふみつけなどせずとは文付ざる也詩につくり歌よみなどして付ざると也　あいぎやうをくれたる人のとは愛敬なき人を梨のはなにたとゆると也　げにその色よりとは愛敬なき人よりも梨花の愛なく見ゆると也　もろこしにとはわが國にはかく愛なきものにおもへどももろこしにはことさら賞玩するをしらせたり　文にもつくるとは詩に作ると也　さりともあるやうあらんとはもろこしにことに賞玩する故あらんとおもひしゐて試る義也　はなびらのはしとは梨花に匂ひありて愛すべき事の侍るを試みしらせたり　楊貴妃とは唐の故事を梨花によせ詩に作り侍りしと也　みかどゝは玄宗皇帝也玄宗方士を使として楊貴妃を尋させ給ひしに方士蓬萊宮にいたり貴妃にあひたり其時貴妃の顏のうるはしきさまを白樂天長恨歌に記されその詞梨花によせられしかば今清少納言梨花の愛すべき事におもひあはせ例にのせられたると見えたり則その事の文段次にしるし侍るなり　猶いみじうとは餘の花に對してめでたくたぐひあらじと也　桐の花とは是より桐の花の事を云也　葉のひろごりとは花の色を葉にさへられてうたてしきと也　又こと木どもとひとしういふべきにあらずとは餘の木にくらべ云心也　もろこしに名つきたる鳥とは名ある鳥などゝ云心也　琴につくりてとは今に至るまで桐に

て琴作る事故有義なり　木のさまぞにくげなれどゝは是よりあふちの事を云也かれど〳〵にとはまばらにさく有さまを見たてし心也　五月五日にあふもおかしとは愛すくなき花なれ共いにしへより五月五日に用ひ來つればその時にあひていみじきといふ心成べし其本文ども次に記し侍る　（ホ）此心を「村雨の名殘の露や殘るらん風に玉ちる軒のたち花」又顯仲一我園の花橘の色みればこがねの鈴をならす成けり　（ヘ）此心を萬葉に「橘の花ちる里のほとゝぎすかた戀しつゝ鳴日しぞおほき　同十　八九「たち花の林をうへん子規つねに冬まですみにたりかね　（ト）東坡詩梨花淡白柳深青柳絮飛時花滿レ城惆悵東欄一株雪人生看得幾清明　李太白云梨花白雪香　（チ）弘賢楊玄琰が女楊貴妃なり則長恨歌に詳也是則貴妃死して以後方士に命じて魂魄のありかを尋ねしむるに方士かへりて仙宮の有さま奏せし心を愛へ引用ひられたり　（リ）長恨歌云梨花一枝帶ニ春雨一　含レ情凝レ睇謝ニ君王一　（ヌ）少緣オボロケ　（ル）本草綱目三十五云桐樹

有ニ四種一青桐葉皮青似レ梧而無レ子梧桐皮白葉似ニ青桐一而有レ子子肥可レ食白桐一名椅桐人家多植レ之與ニ岡桐一無レ異但有ニ花子一二月開花黄紫色禮云三月桐始華者也堪レ作ニ琴瑟一岡桐無レ子是作ニ琴瑟一者
（オ）禽經云雉鳳雌凰亦曰ニ瑞鶠一々者百鳥偃伏也羽虫三百六十鳳爲ニ之長一故從レ鳥從レ凡凡總也云々
韓詩外傳云鳳之象鴻前麟後燕頷雞喙蛇頸魚尾鸛顙鴛顋龍文龜背羽備ニ五采一高四五尺翱ニ翔四海一天下有レ道則見其翼若レ竿其聲若レ簫不レ啄ニ生虫一不レ折ニ生草一不ニ群居一不ニ侶行一非ニ梧桐一不レ棲非ニ竹實一不レ食非ニ醴泉一不レ飲云々　（ワ）書經註云嶧山之陽特生レ桐中ニ琴瑟一白虎通云琴者禁ニ止於邪氣一以正ニ人心一也　（カ）莊子云吾有ニ大木一人謂ニ之樗一其木擁腫不レ中ニ繩墨一小枝曲拳不レ中ニ規矩一者　（ヨ）證類本草曰五月五日俗人取ニ樗葉一佩レ之避ニ惡氣一和名樗云ニ阿布智一　（▲）白氏文集桐花詩　山木多蓊鬱茲桐獨亭々葉重ニ碧雲片一花簇ニ紫霞英一是時三月天載爲ニ天子琴一略此心にかなへり

池は　(タ)かつまたの池、(レ)いはれの池、(ソ)にえのゝ池、初瀬にまいりしに、水鳥の隙なく立さはぎしが、いとおかしく見えしなり、(ツ)水なしの池、あやしうなどてつけるならんといひしかば、五月などすべて雨いたくふらんとするとしは、此池に水といふものなくなんある、又いみじうてるべき年は、春のはじめに水なんおほくいづるといひしなり、むげになくかはきてあらばこそさもつけめ、いづる折もあるなるを、一すぢにつけゝるかなと、いらへまほしかりし　(ネ)さるさはの池、うねめの身をなげゝるを聞しめして、行幸(ユキ)などありけんこそいみじうめでたけれ、ねくたれがみをと人丸がよみけんほど、いふもをろかなり、(ナ)御まへの池、又何の心につけゝるならんとおかし、(ラ)かゞみの池、(ム)さやまの池、みくりといふ歌のおかしくおぼゆるにやあらん、(ウ)こひぬまの池、(ヰ)はらの池、たまもはなかりそといひけんもおかし、(ノ)ますだの池、

此段は池の名所を云也詞すこしなれば章句をわくるに及ばず尤面白き段也　池は　是則當段の題也　にえのゝ池とは此池の名にしをふやうに水鳥の侍りしこそおかしきと也魚鳥を贄(ニヘ)の供物とすれば池の名にちなみて云也　水なしの池是も名つけしゆへを造しらしむる也といひしかばとは清少納言の尋ねられしと也　いひしなりとは所の者などが答しゝを云也　むげに以下清少納言かさねて尋ねとがむる心を云也　一すぢとは此池にふるべき年はかはきてるべき年は水いづるを一向水なしの池とよばん事は本意にあらずとの心也　さるさはの池とは是は此池につゐていにしへの事を思ひよせていふ也　うねめの身をなげしとはならの御門の御時に采女の此池へ身をなげし事みなのべてしる事也　行幸とはみかどその由を聞召行幸ありて御覧給ふ義也　ねくたれがみとはかの采女の事を人丸がよまれしをいふにかぎりなくあはれなるとの心也　おまへの池是も名づけし故を尋ぬる心也　さやまの池みくりと云歌とは此池につゐてみくりとよみし歌を思ひいづるも哀ふかきと也　はらの池是もみくりの心の如く歌を思ひ寄たる義也

(タ)補注抄云かつまたの池をば八雲美作國に有と

おもへり是則彼國にかつまたの温泉有其故難能因歌枕には下總にも美作にも入たり抑不審故にみまさかの湯に罷下し時彼土民に尋侍しかどさる池有と申者侍らざりき爾或人申侍しはかつまたの池は奈良西京藥師寺の跡を申傳たりと云々尤以不審也
萬葉歌云「勝俣の池は我しるはちすなししかいふ君がひげなきがごと」 良玉集云物へ參ける道に昔のかつまたの池とていふ井の迹計見へけるに道濟「朽たてるいゐなかりせば勝俣の昔の池と誰かしらまし」此歌大和とおぼゆ云々 (レ)大和にあり (ソ)大和なるべし倚可レ尋 (ツ)大和成べし倚可レ尋 (ネ)大和物語云昔奈良のみかどにつかうまつる采女有りけりかたちいみじうきよらにて人々よはひけれどもあはざりけり其あはぬ心は御門をかぎりなくめでたき物になん思ひ奉りける御門めしてさて後も又めさゞりければかぎりなく心うしと思ひけりよるひる心にかゝりておぼへけれど御門はさしもおぼしめさずさすがに常には見奉りつれば猶世にあらるべき心ちもなかりければみそかに出て猿澤の池に身をなげてけり御門はかくともしろしめさゞりけるをことのつゐでに人の奏しければ聞しめしていといたうあはれがり給ひて池のほとりにおほん行幸し給ひ人々に歌よませ給ひける時人丸よめる「わぎも子がねくたれ髪を猿澤の池の玉もとみるぞ悲しき」
(ナ)御前池 上州 (ラ)鏡池 近江 「みさびゐぬ鏡の池に住をしはみづから影をならべてぞ見る」
(ム)狹山池サヤマノイケ 武藏 六帖「武藏なる狹山の池のみくりこそ引ばたへすれ我や絶する」(ウ)宗考 (ヰ)原の池 攝州 風俗上野歌 乎志加毛加毛佐只支井宿波良乃伊介乃也毛毛波萬奈加利曾於比毛須加利曾 (ノ)和州也

【廿三段】せちは　(オ)五月にしくはなし、さうぶよもぎなどの、かほりあひたるもいみじうおかし、九重の御殿の上をはじめて、いひしらぬたみのすみかまで、いかでわがもとにしげくふかんと、ふきわたしたる、なをいとめづらしく、いつかことおりはさはしたりし、空のけしきの曇わたりたるに、后宮などには、(之)縫殿より御くす玉とて、いろ〳〵の糸をくみさげてまいらせたれば、(◎)御帳たてまつるもやの柱の左

右につけたり、九月九日の菊を、あやしきすゞしのきぬにつゝみてまいらせたる、おなじはしらにゆひつけて、月ごろあるくす玉とりかへてすつめる、又くす玉は菊の折まで有べきにやあらん、されどそれはみな糸をひきとりて物ゆひなどして、しばしもなし、御せくまいり、わかき人々は、さうぶのこしざしさし、ものいみつけなどして、さま〴〵からぎぬか（せ）ざみ、ながきねおかしき折枝ども、むらごのくみして、むすびつけなどしたる、めづらしういふべきことならねどいとおかし　此段には五節の内にとりわけあやめのせくのおかしうあはれなる事をいへり　せちはとは當段の題也節會はあまたあるなかに五月五日の節供にしくはなしと也扨そのゆへを下にくはしくいひ述る也　九重の御殿とは禁中より百官迄をかねて云心也　いひしらぬとはいやしき民の人にいひしられぬうへを云心也　いかで我もとにしげくふかんとはわれも〳〵と花やかにせんとする心也　空のけしきとは五月のせくの比は必ずいづくもかくのごとくの天氣也　縫殿とは縫殿寮より職としてくす玉を獻る事也　御くす玉とは前に釋し侍る　御帳たてまつるとは帷几帳などたてまいらする程を云也　もやは母屋也御帳のかゝる母屋の楹に此くす玉を結ひつけらるゝと也　九月九日とは此くす玉の秋の比迄賞玩ある事をしらせんためにかく云也　あやしきすゞしのきぬにつゝみとは今の世の紙などにて草花の根をつゝむ心成べしあやしきはめなれぬうつくしき心成べし異本にはあやとすゞしにつゝみてと書り此分にても聞へ侍れ共今ひとへに傳來の本にまかせて釋し侍る也　おなじ楹にとは母屋の楹に九日の菊を結ひて藥玉ととりかへらるゝと也　又くす玉とは藥玉ののこさるゝよせある事を云也　糸をひきとりとは彼五色の糸をとりて花或は其折枝ばかり有心成べし　御せくまいりとは百官の今日の節供にまうで拜賀する心也　さうぶのこしさしとはまき絹の事也奥に詳也　ものいみつけとは賀茂祭の物忌成べし　から衣かざみとは裝束を云也刀に物忌つけ裝束にくす玉などかけしありさまを云也　ながきね菖蒲の根也　折枝は藥玉の枝也　むらごのくみとは糸にくみませたる心を云也　めづらし

うとはいにしへより今に至る迄ありふれさだまり來たる事なれば今更めづらかにいふべきならずと也卑下の心也

(オ)續日本紀十七云是日太上天皇詔曰昔者五日之節常用菖蒲(アヤメ)為レ縵比來已停二此事一從レ今而後非二菖蒲縵一者勿レ入二宮中一 (ク)職員令云縫殿寮頭一人掌下女王及内外命婦宮人名帳考課及裁二縫衣服一纂組事上云々 此司の中縫女采女などがくす玉をしたゝめ侍ると也 ⦿西宮記云糸所獻二藥玉二流一從二諸寺一典人所之結二付座母屋南北柱(コリ)一云々 或御記云延喜十三年五月五日糸所供二奉藥玉一如レ常云々

(ヤ)汗衫(カザミ) からぎぬにもをきるは下仕までもきるなりかざみは上臈のきる也衣の上に着する也

さて春ごとにさくとて、櫻をよろしうおもふ人やはある、つぢありくわらはべのほど〴〵につけては、いみじきわざしたるとおもひて、つねにたもとまもり、人に見くらべ、えもいはずけう有とおもひたるを、そばへたる小舍人わらはなどに、ひきとられてなくもおかし、紫の紙にあ(こ)ふちの花、青紙(アヲヤ)にさうぶの葉、ほそうまきてひきゆひ、又白紙(シロキ)をねにしてゆひたるもおかし、いとながきねなど、文の中にいれなどしたる人どもなども、いとえんなる返事かゝんと、いひあはせかたらふどちは、見かはせなどするおかし、人のむすめやむごとなき所々に御ふみ聞へ給ふ人も、けふは心ことにぞ、なまめかしうおかしき夕暮のほどに、ほとゝぎすの名(ケ)のりわたるも、すべておかしういみじ さて春ごとにさくとてとは又春の花に對してあやめのせくのいみじき事を云心也 よろしうおもふ人やはあるとはなべて櫻をよろしとおもふはつねの事なれ共亦心ある人はそれのみにあらず此あやめのせくのあやめくす玉をあはれにおもふと也是よのつねに一くらゐこえたる心を云也 つぢありくわらはべのほど〴〵にとはをさなきもの丶よもきさうぶをおびつくりばななどかけてうれしげにはしり遊ぶ心也 そばへたる小舍人わらはなどにとは小舍人がたはふれておさなきもの丶かけたるつくり花をとる心也 むらさきの紙とは樗(アフチ)の花紫なる故につゝむ紙も紫紙ぞと也 あをき紙とはさうぶの葉青ゆへに是もつゝむ紙同色を用る義也何れも枝を同じ色の紙につゝみ

その根もとを白き紙にてつゝむと也　文の中に入
とはあやめのねを文につゝみ歌などよみをくる義
也　いひあはせとは互に談合し返事する心なり
人のむすめやむごとなき所々とはなべての人のむ
すめうへつかたの女郎などへもけふは御文のとり
かはしあるこそなまめかしきと也　夕暮のほどに
とは其折しも郭公の聲そへていよ〳〵よのつねの
時にまされる事を云也是迄すべて五月五日のせく
のすぐれたる事をいひ述たり
(マ)新古今つぼねならびに住侍ける比五月六日も
ろ共に詠めあかして晨にながき根をつゝみて紫式
部につかはしける　上東門院小少將「なべて世の
うきに流るゝあやめ草けふ迄かゝるねはいかゞ見
る」返し　紫式部「何事とあやめはわかでけふも
猶袂に餘るねこそ絶せね」　かやうの類也　(ケ)元
方「立かへりたかとへばかも子規そのが名をのみ
名乗なるらん

[卅四段]　花の木ならぬは　(コ)かつら　(ヨ)ごえう　(エ)柹　(テ)楠
(ア)そばの木　しなゝき心地すれども、花の木どもちり
はてゝ、をしなべてみどりになりたる中に、時もわ
かずこきもみぢのつやめきて、おもひかけぬ青葉の
中よりさしいでたるめづらし　(サ)まゆみさらにもいは
ず。その物となけれど、(キ)やどり木といふ名、いとあ
はれなり　(ユ)さかき、臨時の祭御神樂の折などはいと
おかし、よに木どもこそあれ、神の御前のものとい
ひはじめけんも、とりわきおかし。くすの木は、木
だちおほかる所にも、ことにまじらひたてらず、おどろ
〳〵しきおもひやりなどうとましきを、(ミ)千枝にわか
れて、こひする人のためしに、いはれたるこそ、た
れかはかずをしりて、いひはじめけんとおもふにお
かし、(シ)ひの木、人ちかゝらぬ物なれど、みつ葉よつ
ばの殿づくりもおかし、五月に雨のこゑまねぶらん
もあはれなり、かえでの木、さゝやかなるにも、もへ
出たる木ずゑのあかみて、おなじかたにさしひろご
りたる葉のさま、花もいとものはかなげにて、むし
などのかれたるに似ておかし、あすはひの木、此よ
にちかくも見え聞へず、御嵩にまふでてかへる人な
どの、もてくめる、枝ざしなどのいと手ふれにくげ
に、あら〳〵しけれど、何の心ありて、あすはひの
木とつけゝん、あぢきなきかねごとなりや、たれにた
のめたるにかあらんとおもふに、しらまほしうおか

し、(ヒ)ねずもちの木、人のなみ〳〵なるべきさまにもあらねど、葉のいみじうこまかに、ちいさきがおかしきなり　(モ)あふちの木、やまたちばな、なしの木、(セ)しゐの木ときは木、いづれもあるを、それしも葉がへせぬためしにいはれたるもおかし、(ス)しらかしなどいふもの、まして深山木の中にもいとけどをくて、(ス)三位二位のうへのきぬそむるおりばかりこそ、葉をだに人の見るめれば、めでたき事おかしき事に、とりいひつべくもあらねど、(一)いづくともなく、(二)雪の降たるに見まがへられて、そさのをのみことの、(三)出雲の國におはしける御事をおもひて、(四)人麿がよみたる歌などをおもふに、いみじうあはれなり、いひごとにても、折につけても、一ふしあはれともおかしとも、聞をきつるものは、草も木も鳥虫も、おろかにこそおぼへね、(五)ゆづりはの、いみじうふさやかにつやめきたるは、いとあをうきよげなるに、おもひかけずにるべくもあらず、くきのあかうきら〳〵しう見へたるこそ、いやしけれどもおかしけれ、なべての月ごろは露も見へぬ物の、しはすのつごもりにしもときめきて、なき人のくゐものにもしくにやと、あはれなるに、又よ

はひのぶるはがため(一〇)のぐにもして、つかひためるはいかなるにか、(六)もみぢせん世やといひたるもたのもし、かしはぎいとおかし、(七)葉守の神のますらんもいとおかし、(八)兵衛の督・すけ、ぞうなどをいふらんもおかし、すがたなけれどすゐの木、からめきて、わろき家のものとは見へず　此段は〻う事どもをいへり　花の木ならぬは　是圓常時の題也前は花のうるはしきをいひ爰は花の見事ならぬひとへに木のみ賞玩有品々をしるしたり、しな〻き心地すれど〻は花の咲木にくらべては也されども花散て後若葉の花やかにもみぢめきたるは時をわかずめづらしきと也　まゆみさらにもいはずとは殊更に云程はなきと也　その物となけれど〻は其の木こそやどり木とて定めたる木はなけれど〻也　やどり木といふ名とはいづれの木にもやどりをひてその名をよばれしこそあはれなれと也又云桜木の木もしはらくの物なるにそれに又かりのやとりなせしよとあはれむ心也　さかきとは神木とて八幡臨時祭の御神楽に用ひらる〻事也　楠は木立おほかる所にもことにまじらひたてらずとはあれそびへたる

深山に有と也　おどろ〳〵しき思ひやりなどゝはすさまじくおもひしにこひするためしにいはれしは又やさしく見ると也　檜人ちかゝらぬ物なれどゝは、檜はけどをき深山におほき物也　みつばよつばの殿づくりとは檜は殿作りに用ひらるゝ事むかしよりためし有事也又幸草とて歌によまれしも此事也古今にて傳授事也　楓の木さゝやかなるにもゝへ出とは小木にも若楓のもへ出しなひたると也　花もいと物はかなげにとは楓の花は打なだれ虫の蛻に似てはかなき物也　あすはひの木とは未レ考なをたづぬべし　御嵩にまふでとは金峯山にまふでし人のつとにもて來ると也　何の心ありてとは名づけし心を不審する義也　たれにたのめたるにかとはあすはひのとなへ明日逢とひゞくゆへにたれにたのめたるかねごとならんあぢきなやと也　ねずもちの木人なみ〳〵なるべきさまにもあらねとは餘の木のごとくにあらぬと也　しゐの木ときは木はいづれもあるをとは葉がへせぬ木はしゐのみにかぎらぬを常盤木と歌などによみ來れるはあはれなると也　しらかしとは今も近き山にはなし人氣とをき深山に侍る也　三位二位のうへのきぬとは今に二位三位の衣を白橿の葉にて染也　いつとなくとは冬ばかりあらず常にうす雪などの降るに似たると也　そさのをのみことは素盞嗚尊也此尊の事紳書に詳也　いづもにおはしけるとは則其心後に注レ之　いひごとにてもとは語つたへ或は書つたへ也折につけてもとは時節の風景につけてもと云義也　聞をきつるとはいひごと又は折につけたる事をも清少納言が聞をきたる事ども也さるによりて草木鳥虫のよまで聞をき思ひよる事をとり〳〵書述られたり　ゆづり葉のとは是則草も木もおろそかに思はで聞をける事を述る義也つやめきとは葉につやの侍るを云也　おもひがけずにるべくもあらずとは葉の青きに莖のあかきを云也　なき人のくゐものとは十二月の晦日はなき人の來る夜とて玉まつる也その供物にゆづり葉をしくと也　又よはひのぶるはがためとは歯固也今の世正月に用ると同じ事也　つかひためるはいかなるにかとは用ひ來れる起を不審する心也　紅葉せん世やとは歌にも常盤木によみてたのもしく目

出度ものなればば正月に用ひ來るゝ此故ならんにや
と斷る心也　柏木いとおかし葉守の神のますらん
とは柏木は葉守の神のとよみ侍れば云也　兵衛の
かみすけぞうとは月卿雲客を草木になぞらへよぶ
事有有職家に委しく沙汰あり則末書首に記す柏木
の右衛門などのごとし　すがたなけれとは椶櫚の
木の見たて也よく聞へ侍る
(フ)桂カツラ　(コ)五葉松ゴエウ　(エ)柿カキ
(テ)橘タチハナ　(ア)㳖棱ソハノキ　(サ)檀マユ
ミ　(キ)東方朔傳云在レ樹爲二寄生一在レ地爲二䕺藪一
(ユ)榊サカキ　賢木サカキ　古語拾遺云掘二天香
山之五百箇眞賢木一云々　忌部正通云五百箇眞坂樹
者繁列之言不變之象　(メ)本草三十四二云其樹直正
童々若二幢蓋之狀一枝葉不二相礙一葉似二豫章一而大
如二牛耳一一頭尖經レ歲不レ凋新陳相換其花赤黄色實
似二丁香一色青不レ可レ食幹甚端偉高者十餘丈巨者數
十圍氣甚芬々爲二梁棟器物一皆佳云々　楠クスノキ
(ミ)拾遺「いつみなるしのだの森の楠の千枝にわ
かれて物をこそ思へ　(シ)神代卷云檜可下以爲二瑞
宮一之材上「此殿はむべもとみけり幸草のみつはよ

つはに殿つくりせり　(エ)楓カエデ　(ヒ)貞水ネ
スモチノキ　山海經　和名槇ネスモチノキ　(モ)あ
ふち　上に詳なり　(セ)椎シイ　(ス)白樫シラカ
シ　(ス)三位のうへの衣白樫の皮をせんじ染也
(一)後撰に「白樫の雪も消行足引の山路を誰かふ
み迷ふべき　(二)素盞鳴尊伊弉諾尊第三子也詳二
于日本紀一故略レ之　(三)風土記云所三以號二出雲一
者八束水臣津野命詔八雲立詔之故云二八雲立出雲一
四　人丸集に「足引の山路もしらす白樫の枝にも
はにも雪のふれゝは　此歌拾遺冬部にいれり
(五)楪ユツリハ　杜同　弓弦葉同　楪同　(〇)歯固
元三の事也高築六本に折敷をすへ一の臺に餅大根
橘を盛也それに楪をしく也委は掌中曆に見えたり
(六)六帖に　よみ人しらす「旅人に宿かすかのゝ
ゆつりはの紅葉せん世や君を忘れん　(七)袖中抄
云かしは木にこ守の神のましけるをしらでぞおり
したゝりなさるな　顯昭云葉守の神とは樹神也萬
の木をまつる神也さて葉をまもる神と云也　無名
抄云葉守の神とは木の葉を守る神の木にはおはす
る也　(八)河海云兵衛衛門を柏木と云と云々

（九）禁秘抄云橘延喜五年栽二東殿一清涼殿前有二此樹一御倚子時二御座一後栽是貞親王樹也又應和栽レ栽二中殿前一

廿五段 鳥は　こと所の物なれど、あふむ(ヘ)いとあはれなり、人のいふらんことをまねぶらんよ、郭公　水鷄　鴫　みこ鳥　ひは(ホ)　ひたき(ヘ)　山鳥(イ)は、友をこひて、鏡を見せたればなぐさむらん、いとわかうなくに、あはれなり、谷へたてたる程などいとこゝろぐるし、鶴(ロ)は、こちたきさまなれども、鳴聲雲井(ハ)まで聞ゆらん、いとめでたし、かしら(ト)あかきすゞめ、いかるが(ニ)のおどり、たくみどり(ホ)　さぎは、いと見るめもみぐるし、まなごゐなどもうたて、よろづになつかしからねど、ゆるぎ(ヘ)のもりに、ひとりはねじとあらそふらんこそおかしけれ、はこ鳥(ト)、水鳥は鴛鴦(チ)いとあはれなり、かたみにゐかはりて、はねのうへの霜をはらふらんなど、いとおかし、みやこ鳥(リ)　川千鳥は、友まどはすらんこそ、雁の聲(ヌ)は遠く聞えたるあはれ也、鴨は、羽の霜(ル)打はらふらんとおもふにおかし、鶯(ヲ)は文などにもめでたき物につくり、聲よりはじめて、さまかたちもさばかりあてにうつくしき程よりは、

（ワ）九重の内になかぬぞいとわろき、人のさなんあるといひしを、さしもあらじと思ひしに、十年ばかりさぶらひて聞しに、まことにさらに音もせざりき、さるは竹(カ)もちかく、こうばい(ヨ)もいとよく、かよひぬべきたよりなりかし、まかでゝ聞けば、あやしき家の、見所もなき梅の木などには、花やかにぞなく、夜なかぬもいまだなきこゝちすれども、いまはいかゞせん、夏秋の末まで、おひごゑに鳴て、むしくひなどようもあらぬものは、名を付かへていふぞ、口をしくすごきこゝちする、それもたゞ、すゞめなどのやうに、常にある鳥ならば、さもおぼゆまじ、春なくゆへこそはあらめ、年立歸る(タ)など、おかしきことに歌にも文にもつくるなるは、猶春の内ならましかば、いかにおかしからまし、人をも人げなふ、世のおぼへあなづらはしう成そめにたるをば、そしりやはする、鳶(トビ)からすなどのうへは、見いれ聞いれなどする人、世になしかし、さればいみじかるべきものとなりたればとおもふに、心ゆかぬこゝちするなり、祭のかへさ見るとて、雲林院(レ)知足院(ソ)などの前に、車をたてたれば、郭公もしのばぬにやあらん、なくに、い

とようまねび似せて、木高き木ども中に、もろ聲になきたるこそ、さすがにおかしけれ、ほとゝぎすは猶さらにいふべきかたなし、いつしかしたりがほにも聞へ、歌に、卯の花花橘などにやどりをして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへなり、五月雨の短夜にねざめをして、いかで人よりさきにきかんとまたれて、夜ふかく打出たる聲の、らう〳〵しう、あひぎやうづきたる、いみじう心あくがれ、せんかたなし。六月になりぬれば、をともせず成ぬるすべていふもおろかなり、夜なくもの、何も〳〵めでたし、兒どものみぞ、さしもなき　此段は鳥どもの事をしるせる也　鳥は　是亦例の題也　こと所のものとは鸚鵡は唐の鳥なる由の義をいふ也　人のいふらんことゝはあふむよく物いふ由本文ある也　郭公とは賞玩のものなればまづ名を書つらねてすゑにいみじき事どもを述る也　山鳥は友をこひてとは山鳥に鏡を見すればをのが影を友の鳥とおもひなぐさむらんと也　いと若うとは鏡見てなぐさむはわか〳〵しきと也初心なる心也又愚なる義也　鶴はこちたき樣とはすがたのこと〴〵しきを云心也　なく聲雲井遠とは鶴の聲雲井に聞ゆるをいふ事本文あり　ひとりはねじとはまなこひのさまこゑなどうたてけれども友をしたひめとりをこふ心をおかしと云也　川千鳥友まどはすらんこそとはあはれおかしきなどの詞をかくしたり　鴈の聲は遠く聞へとは是も歌などによみしごとく雲井はるかに鳴渡るもの也　鶯は文などにもとは詩經に出于幽谷遷于喬木止于九隅などいひあるひは禮記にも仲春倉庚鳴など聖經にもあまた見へ其外の詩話にもかぎりなくのせたり　聲よりはじめとは鳥鳴嚶嚶と云心也　歌にもこゑのにほひなどよめる也　さまかたちとは金衣公子にほひ鳥などいひて賞玩せらるなり　九重の内になかぬぞいとわろきとは鶯は草ふかき中にすむもの也鶯はいなかの谷のすなれどもとよみしも草深き中にそだつとの義也　さなんとは左樣になん侍ると人がいひ聞せしと也　さもあらじとは清少納言わかき比聞てうたがはしく思ひしに十年ばかり中宮定子に仕へ内裏に侍りしかども聞ざりつるとなり　さるはとはよすがなく聞へぬも斷りならぬど内裏の竹紅

梅などのたより有にもなかぬと云義也　まかでゝ聞ばとは里へまかり出て聞けば也あやしのとはいやしき所にはおほく鳴事をみづから試みわきまへたる義也　夜鳴ぬもとは鶯は雁郭公などのごとく夜なかぬぞほゐなきと也　いまだなき心地とはいまだ初音出さぬ以前のこゝちせらるゝとなり　夏秋のするまでとは鶯をとろへたるを云也　おひごゑとは老聲也聲のをとろへたるを云也　むしくひとはいやしきものゝよびかへたる由の名也鶯が木の葉のうらに有虫などひろうを云心也　春なくゆへこそはあらめとははるの季に鳴初るものなればこそ春のものとてもてはやさるゝを夏の比をとろへ虫くひとよばるゝ迄ぞうたて有と也　歌にも文にもとは鶯の詩歌あげてはかりがたし　猶春の内ならましかばとは春の内ばかり鳴ものならば殊に面白く持はやす興有べき物をと也　人をもとはたとへ也いやしげなる人はそしりても甲斐なき心にたとへて鶯の事を云也是鶯のすぐれたる鳥なればすこし失ある人の心にかゝるとの義也　鴟烏とはこれもくらべものに云也心かくれなし　されば いみじかるべきものとなりたればと思ふにとは鶯はいみじきものに極りたるに心ゆかぬ事のあるとの義也　祭のかへさとは賀茂の祭のかへるさ也　車をとは清少納言みやつかへの間の事成べし　郭公もしのばぬにやとはほとゝぎすが鶯をはゞからず鳴との義也又云老聲の鶯がほとゝぎすの初聲をはゞからず鳴と云義も有べし　郭公は猶さらにとは前にいひし郭公をこゝにくはしくいふ也　いつしかしたりがほにとは初音をはやく聞を賞玩にすればわれ人とく聞たるやうにもてなすとの心成べし　歌にとは卯花花橘などの蔭にかくるゝとよみたる歌おほく有也　ねたげなるとはかくれ鳴ぬをねたむ心ばへ也　五月のみじかき夜とはいづれも郭公のいみじき詮を云心あきらか也　六月に成ぬればをともせずとは鶯のごとく時分すぐるまでをひ聲になかずしばしの間時をたがへず鳴やむは名殘ありてなをなつかしき心をいふ義也ことに夜も鳴なればいよ〳〵めでたきと也　何も〳〵とは雁鹿などをこめて云心也　兒供のみぞとは子どもの夜啼するはうとましきとの義也此段も前に草も木

も鳥虫もおろかにこそおぼへねといふ心をゝしひろめ云也
(大)山海經ニ云青羽赤喙能言モノイフ名曰ニ鸚鵡一云々　異域志云鸚鵡西域靈禽兩趾向レ前云々　(小)鵑とハ
(◎)六帖に「寢覺一おもひかね柴折くぶる山里を猶さびしとやひたき鳴也　(イ)清輔奥義抄云「山鳥のおろのなかおに鏡かけとなふへにこそなによそりけめ　此歌心得がたし此かゞみの事或物にはむかし隣の國より山鳥ををくりて帝にたへなる由を申けれどすべてなかざりけるを或女御ともをはなれてなかぬならん鏡をかけて見せ給へと申ければ籠に鏡をかけたりけるに影を見て鳴けりとあり心ゆきても覺へず籠にかけたらん鏡をおろのなかおにかゞみかけといはん事もおぼつかなし或說には山鳥は夜になればめとりは山のおをへだてゝべちくにぬるにあかつきになりてをとりの尾をもたげて見るにめとりあるところのかゞみにて見ゆる也このゆへに山鳥のかゞみといふ事は云也と申これはさもときこゆ云々　(ロ)本草綱目四十七曰鶴大ニ於鵠ニ長三尺高三尺餘喙長四寸丹頂赤目赤頰青脚修頸凋尾粗膝纖指白羽黑翎亦有ニ灰色蒼色者一嘗以ニ夜半一鳴聲唳ニ雲霄一雄鳴ニ上風一雌鳴ニ下風一聲交而孕　詩經云鶴鳴ニ于九皐一聲聞ニ于天一　(ハ)俗ににうないすゞめと云て頭赤き雀也　(ニ)源順和名云鵤和名伊加流加似レ鵲而小頭レ鵲觜白聲者也又斑鳩和名同レ上俗にまめましと云鳥也地に下てをとりあゆむ鳥也
(ホ)本草四十八云巧婦鳥自レ關而東謂ニ之巧雀一或謂ニ之女匠一自レ關而西謂ニ之襪雀一或謂ニ之巧女一燕人謂ニ之巧婦　江東謂ニ之桃雀一亦曰有レ呼ニ鷦性拙織性巧一故得ニ諸名一　(ヘ)ゆるぎ森　近江也「夜もすがらゆるぎの森の鷺すらもひとりはねじとあらそふ物を　(ト)梟ハフクロウ八雲抄ニ定家も不知之鷹うつくしき鳥云々雄略天皇御時美作國つるぎ山といふ所に相見乙人といふ人の婦子をおゐて山中を行とて鷲にとられてはやこくとよびじにゝ死にたりける故にはこ鳥と云也はこははやこといふ心也云々　(チ)此心を　源親房「かたみにや上毛の霜を拂らんともねのをしの諸聲に鳴
(リ)伊勢物語の抄ニ見ニ略之　(ヌ)人丸「秋風に山とびこゆる雁がねのいやとをさかり雲がくれつゝ

（ル）此心を注ニ歌に一指ならふ己が羽風の生けさ
ら許にそふ物ニ鵲や鳴らん　（オ）本草云ニ春後即
鳴ニ黄鸝熱時光其共音圓滑如ニ織機色一故ニ呼テ為ニ時
之鳥也　梅理會前云流好白鶯鳥形ノ倒ニ歌云一
更可嘩高枝雪ニ低枝聲ニ春悠一相[illegible]時　曾牽文
宗ノ鶯詩云自ニ朝出ツ谷ニ飛ニ入梅一春色靄時白鳳々着
有ニ遺音ヲ長不ニ[illegible]明年可レ年長梅而　（ソ）田舍の卑
ふかき所に住ムりとも其ゆへに一聲は山谷の谷の
すなれ共だみたる樣はなかぬ成けり　（カ）市置の
東庭に竹臺など侍れば竹にも鳴のあるも也　（ヨ）
廣保御記云式部大輔直幹朝臣梅一株[illegible]東
北庭ニ引前日所レ栽紅梅一本[illegible]清涼殿東北庭ニ云
々　又[illegible]に植られしも紅梅也これらを
さしてこうばいもよくかよひぬべきたよりといふ
也（タ）ついたちの日をせい「叢玉の年立か
るあしたよりまたるゝものは鶯のこゑ　貫之「よ
たらしくあくることよひを百年の春の初と鶯ぞなく
盧蘇州[illegible]東方欲ニ曉花氣[illegible]相映亦可ニ見云々
律ニ[illegible]新春早晚[illegible]ニ春云々　（ン）淳和天皇之
離宮在ニ紫野ニ也後僧正遍昭[illegible]レ補レ之（ア）舊地

不ニ分明ニ或云鴨河邊云　賀茂にも詳也（ツ）うつ
ほ物語八に一部[illegible]花橘にやどれば[illegible]五月雨もと
きはなるべき　[illegible]に一夕されば[illegible]の河原
の川風に[illegible]はせる千鳥[illegible]也
【第六段】あてなるもの、うす色にしらがさねのかざ
(ﾃ)み、かりのこ、けずりひのあまづらに入て、あたらし
(ﾅ)きかなまりにいれたる、すいさうのずゝ、藤の花、
梅の花に雪のふりたる、いみじううつくしき兒の、
覆盆子(イチゴ)などくひたる　此段はことばすくなふして心
[illegible]きらか也　あてなる物と[illegible]也うつくし
きたへなる事を云[illegible]　うす色にしらがされ
のかざみとは薄紅のひとへ衣(ス)にかざみをかさねう
つくしくすきとをる事を云也　かりの子とは今の
世の鳥の子と云[illegible]也　けずりひとは干物(ヒノモノ)けづ
りたる物也今の世の折餅(ヘギ)の類なり　あまづらとは
[illegible](ツク)[illegible]云通(アケヒ)[illegible]　かなまりとは[illegible]也今の
世の鉢やうの物也彼甘葛(アマヅラ)をけづり干(ヒ)の甘物にして
かなまりにいれのせたるいさぎよくうつくしきと
也　すいさうのずゝとは水精の[illegible]珠也[illegible]相通也
(ニ)みな音によなふる事を　如レ此相通にやはらげいふ

は歌書のならひわが國の風也　藤の花　梅の花に雪のふりかゝりたる、いづれもうつくしくいさぎよきもの也　うつくしき兒のいちごなどくひたるとは是も花車にいさぎよき心也

(ネ)汗衫カサミ前に詳也　(〇)眞木柱にかりの子いとおほかるを御覽じてかんじ情ありとやうにまぎらはしてわざとならず奉れ給ふな　或説に鴨の子也鴨の子を似せてしたる菓子也今の代に鶏卵など云類也　(ナ)和名云日本靈異記云其器皆鋺俗云二鋺奈萬利一今按鋺字所レ出未レ詳但唐韻ニ椀烏管反ニ鋺利一質レ用ニ金椀二字一也椀即盌ノ字見ニ玩器中一又云說文云盌小盂也字亦作レ椀碗也音成云末ニ俗云ニ毛比一

[廿七段]　むしは、すずむし　ひぐらし、てふ、松虫、きりぎりす、はたおり、われから、ひをむし、螢、みのむし、いとあはれ也、おにのうみたりければ、おやに似て是もおそろしき心あらんとて、親のあやしききぬひききせて、今秋風吹ん折にぞ、こんずるまでよといひをきて、にげていにけるもしらず、風のをときゝしりて、八月ばかりになれば、ちゝよちゝよとはかなげになく、いみじくあはれなり、ぬかつきむし又あはれなり、さる心に道心おこして、つきありくらん、又おもひかけず、暗き所などに、ほとめきありきたるこそおかしけれ、蠅こそ、にくきものゝ内にいれつべく、あいぎやうなき物はあれ、人々しう、かたきなどにすべき物のおほきにはあらねど、秋など、たゞよろづの物にゐ、顔などにぬれ足して居などよ、人の名につきたるは、いとうとまし、夏むし、いとおかしうらうたげなり、火ちかふとりよせて、物語など見るに、さうしのうへなど、とびありくいとおかし、蟻は、いとにくけれど、かろびいみじうて、水の上などを、たゞあゆみにあゆみありくこそ、おかしけれ、七月ばかりに、風いたう吹て、雨などさはがしき日、大かたいとすずしければ、あふぎもうちわすれたるに、あせの香、すこしかゝへたるきぬのうすきを、いとよくひきゝて、ひるねしたるこそおかしけれ　此段は虫の事を云也　虫は、是例の通なり　鈴虫、蜩　蝶　松虫　蟋蟀　促織　われから　蜉蝣　螢

これらはうたにもよみいみじうあはれふかきものなればいづれをわきてとはえらふべきにもあらずとりぐにあげられたり　ひを虫は蜉蝣也　ぬか

つき虫叩頭虫也次に記之　蠅の見たて尤あきらか也　にくき物の中には蠅のにくき故を斷也人々しうとは數ならぬ虫なれば蠅の虫のなみ〳〵にあひてにしいふべきならずといやしむる義也人の名につきたるとはもろこしに甘蠅など云人侍ればうとましき名なりと云義也夏むしとは今の世夏の燈火にとび入虫也あはれなるもの也　蟻はいとにくけれとは人のはだへをさし食物の香をしたひ來るまことによく見られたる詞也　七月ばかりにとは此一章むかしのつゞきに心得がたし或說に云風の事いひ出しは白樂天が秋風蛾ノ秋虫鳴と詩に作て虫の心も侍ればいふにやいとほがにやあらんと云只一徃了簡に申侍るのみ云々　そも〳〵此抄はむかしより人々の手ふれぬ少納言の詞を注釋し侍れば不レ及事いりほがなる注なども侍り又こゝろよからぬおもむきもかず〳〵侍らむすれども今始て數百年すたれし枕双紙の道ひらきの抄なれば此後に博才の人有て笑ひ且はつみするとてもわが仇にあらず、わが心ざす道に來るなかしこき友人とも思ひ侍りなましねがはくは無我正路の赤心にてわれ人後々百歳まで此双紙の受用にならん事をおもひ侍るのみ猶疑を闕て後學を待つにしかじ

（圭）蓑蟲に八雲の御說とて鬼の子みのむし有宜考知之　寂連法師一ちぎりせん親の心も知ずして秋風たのむみのむしの聲　又或云鬼とんぼといふもの有そのとんぼのうみけるかいこが變じてみの虫と成べし　（ロ）和名云叩頭虫傳咸叩頭虫賦云虫之細微者觸レ之輙叩レ頭（和名類聚抄本無之）　つきとはぬかつき也

（イ）惜蒼蠅賦云蒼蠅吾嗟ニ爾之爲レ生既無ニ蜂蠆之毒尾一又無ニ蚊虻之利觜一幸不ニ爲レ人之畏一胡不レ爲レ人之喜ニ爾形至眇云々　又云敲レ頭撲レ面入レ袖穿レ裳或集ニ眉端一或沿ニ眼睫一　事文類聚四十九惜蒼蠅賦詳ナリ　（ロ）甘蠅トイフ名列子ニ見エタリ　（ハ）本草四十云一名飛蟻穴レ地而居蟄レ本而食囚レ濕營レ土大爲ニ物害一初生爲ニ蟻蝝一至レ夏遺レ卵生レ翼而飛云々　（ニ）七月ばかりに風いたう吹て是も蟻のつゞきなるべし本草に能知ニ雨候一と侍れ蟻の雨風の氣にしたがひあせの香ある帷とのもとへ香を引來る事を云たる歟　又云奥の九十八段に風の段ありそこにあるべき詞にや若書

寫の誤歟諸本如レ此此處にかけり

【廿八段】　にげなきもの、かみあしき人の白きあやの衣きたる、しらがみたるかみに、あふひつけたる、あしき手をあかき紙に書たる、げすの家に雪の降たる、又月のさし入たるも、いと口おし、月のいとあかきに、やかたなき車におひたる、又さる車にあめ牛かけたる、老たる女のはらたかくて、あばきありく、又わかき男もちたるいと見ぐるしきに、こと人のもとに行とて妬たる、老たる男の、ねまどひたる、又さやうにひげかちなる男の、しゐつみたる、はもなき女の梅くひてすがりたる、げすの紅のはかまきたる　此段は詞おほししなしな事しけくまぎらはしく侍るゆへ文段をわけて釋し侍る也下のなにがし殿の人やさふらふなどいひたるおかしと云迄當段の分なり凡て七節に見るべし就中此一節はかれこれとりあはせてにげなき事を云也　にげなきものとは當段の題也物の似合ぬ事を云也俗にふつがうなどいふは此心也　髮あしき人とは女は髮のめでたきものにいひなししに髮あしく侍るが白き衣きつれば髮のしなあらはに見へ侍ればうとましく似げなき心地し侍るべし　しらがみたる髮是も同じやうの心也　あしき手をあかき紙とはこれ又うとましくにげなき事也あかき紙はきよらなる紙の義也　げすのとは心なきものゝわたりには月の夜雪のあした何のせんなき事也　月のいとあかきにやかたなき車とはさすが月に愛をなしありく人なれどもやかたもなき車に乘たらんはのらぬにしかじとなり尤にげなき車也　又さる車とはさやうの車にと前をうけし詞なり　あめ牛とは牛の下品なる故なり　老たる女のとは年に似合ぬ見ぐるしき事なり　又若き男とは是も時分に似合ぬ事なり　こと人とはその男忍び妻の有心なり　老たる男のねまどひたるとはわかき忍ひ妻などのかたにて寢わすれなどするは人目尤似げなかるべし　しゐつみたるとは鬚(ヒケ)くろにすさまじげなる口つきにてしほらしき椎などつみたらんは尤似合ぬ事也　はもなき女のとははのぬけなどせし女也老女のみにかぎらず若き女も歯のあしき事有也女は梅などこのみくふものなればよく世事人情まで切磋せられし趣也　げすとは刀自得選(トジエリ)い類成べし是則内侍更衣などのごとくにはあらてにげなき心地也

此ごろは、それのみこそあめれ、ゆげひのすけのやかう、かりぎぬすがたもいといやしげなり、人にをぢらるゝうへの衣はたおどろ〳〵しく立さまよふも、人見つけば、あなづらはし、けんざのものやあると、たはむれにもとがむ、六位藏人、うへの判官とうちいひて、よになく、きらきらしきものにおぼへさす人、げすなどは、此世の人とだにおもひたらず、目をだにみあはせで、わななく人の、内わたりのほそ殿などに、しのび入ふしたるこそ、いとつきなけれ、空たきものにしみたる、几帳に打かけたるはかまの、おもたげにいやしう、きら〳〵しからんもと、をしはからるゝなどよ、さかしらにうへのきぬわきあけねずみのをのやうにて、わがねかけたらん程ぞ、にけなき、やごとなの人々なり、此つかさのほどは、ねんじて止めてよかし、五位の藏人もほそ殿に、人とあまたゐて、ありくものども身やすからずよびよせて、ものなどいふに、きよげなるおのこ、小舍人わらはなどの、よきつゝみふくろに、きぬどもつゝみて、指貫のこしなどうち見えたる袋に入たる、弓やたてほこたちなど、もてありくを、たがぞととふに、つゐ居て何かし殿のといひて、行ものはいとよし、けしきばみ、やさしがりて、しらずといひ、物もいはでいぬるものは、いみじうぞにくきかし、月夜に、むな車ありきたる、きよげなる男の、にくげなるめもちたる、ひげぐろに、にくげなる人の年老ひたるか、物語する人の見もてあそびたる、このもりつかさこそ、なをおかしき物はあれ、しも女のきはさばかりうらやましき物はなし、よき人に、せさせまほしきわざなり、わかくてかたちよからんが、なりなどよくてあらんは、ましてよからんかし、年老ひて物の例などしりて、おもなきさましたるも、いとつきづきしうめやすし、殿もりづかさのかほ、あいぎやうづきたらんをもたりて、さうぞく時にしたがひもからきぬなど、いまめかしうて、ありかせばやとこそおぼゆれ、男は又、ずひじんこそあゝめれ、いみしくびびしうおかしき公達も、隨身なきは、いとしら〳〵し、辨などおかし、よきつかさと思ひたれども、下かさねの、しり短くて、隨身なきぞいとわろきや　是第二節五位六位のしないやしげににげなきさまを云也　此頃はそれのみとは前にいひし事をそれのみ

と云也此ごろは前にいひし事のみならず。五位六位の上にもにげなき事はべると也　靫負介とは弓箭を帯て禁中警固の官人也　やかうとは夜行よる禁門を廻り行て警衛する義也或云野郊いやしき事云義也云々　人にをぢらるゝうへのきぬとは黒色の装束にて兵仗を帯するゆへにいふ心也　けんきとは嫌疑也　あやしむ心也　たはふれにもとは假物にも人影を見てとがむる心也　うへのはうくわんとは外官の六位などの侍ればそれにはあらで禁中宿直する六位藏人判官と云義也　覺へさす人とは判官をさして云也　げすなどゝは彼六位の藏人などより下﨟の人は六位の藏人判官をいみじうおもひおそるゝ義也　わなゝく人のとはおぢわななかるゝ程の人と云義也則藏人判官をさして云也　細殿とは殿上なれば判官などのいやしき人の忍びふすはにげなきぞと也　はかまのおもたげにとは花車なる几帳にふときぬあらき布などのはかまをかけをかむはいやしさきらきらしからんと也　さかしら所によりて心かはるべしかしこだてする義也　うへのきぬわきあけとは布衣など成べしねずみのおとこはすその短きにとゝ也　此つかさとは六位の判官を云也　とゞめよかしとはいやしげに侍るつかさなれば此つかさをやめよと也又云かやうにいやしきつかさのほどはにげなき内わたりのしのび事をとゞめよと誡むる心も侍る歟　五位の藏人どもとは五位の藏人に進むなど殿上に宿直して其あたりを過る人に物いひかはす心也　ありくものどもとはそのほとりを通る人身やすからず心けひする義也　よびよせて物など云とは彼藏人どもがよびかくる義也　きよげなるおのこ小舍人わらはとは親王大臣などの倍臣成べし　きぬどもとゝは装束など成べし　さしぬきのこしとは袋の中の装束がもれ出見ゆる義也　ゆみやたて頭下は大將の調度也　たがぞととふとは藏人などが問義也　何がし殿のといひてとは子細有がほにせずうらゝかにいらふはよしと也　けしきばみとは心ありげにもてなしながら兎角物もいはで行おのこ小舍人はにげなく心にくきと也　月夜にむな車とは空き車といふ義也から車の事也　きよげなる男とは心あきらか也　ひげぐろとはにくげに年打

より物語などしつゝちごを寵愛するはうるさげににげなかるべし　との守つかさ以下女官の事と云也　しも女とはとのも司の載官の女房也是はうらやましき心もなしと也　よき人にせさせまほしきとはとのも司の官によき人をせさせまほしきといふ義也前へ戻ていふてには也　わかくてとはよき人のうへに又一くらいよき事を云也若くかたちもよくはましてと也　年老てとは若きは勿論年老てもいみじきと云義也　おもなきさまとははづる心ばへ也、もたりてとは妻にもちてと也　もからきぬとは裳唐衣漢綢の製作の装束也　或云唐衣は十二一重などの装束也實は袴のうへに着るもの也いまめかしうとはほめたる心也　男は又ずいじんとは隨身などめしつれらるゝかぎりはいみしきと也　君だちもとは公達は家の子にて身もとよろしく殿上をせらるれども隨身なくてあしきと也　よきつかさとは辨官をよきつかさとおもひつれば下かさねのしり短く隨身などもなく見くるしきと也
(ホ)花鳥餘情云左右衛門を靭負といふ云々　古へは彈正左右衛門各々其司所を守しが淳和天皇の比より檢非違使の廳を置給ひしより諸官皆此廳に接する故宮城諸門の閉闢禁中の外非違の畑火などを役とする也是を靭負尉といふ也　職原云朝家置此職以來衛府追捕彈正糺彈刑部判斷京職訴訟併皈二使廳一仍爲國之要樞一歷代以爲二重職一者也　此衛府といふ中に靭負尉有也その装束は延喜式近衛式に詳なり事繁ければ略之　(へ)或云赤装束と云々
夜行老の事下に詳也　(ト)勘解由判官宮城使判官なと侍れ其それにはあらず殿上の六位檢非違使尉をうへの判官といふ也　(チ)禁中の廊をいふ也
(リ)賢良　サカシラ　かしこだてする義也
(ル)禁秘抄云主殿寮六人云々主殿司美麗妾也公人内可レ稱二神妙之輩一云々　後宮職員令云殿司尚殿一人掌二供奉[illegible]燈油火燭薪炭之事一典殿二人掌同二尚殿一女孺六人（一）則殿司の女孺をさしていふ也　禁秘抄云女孺近代不レ著レ衣只小袖唐衣也以二左近妾一御調度獨レ手上二格子一奉レ仕是藏人等如在不當故也御所中掃除指油從女孺所レ知也　(ヲ)弘安禮節云隨身猶攝政關白十人大臣大將八人納言參議六人中將四人少將二人諸衛督四人佐二人云々

これ随身御免の数の定ゝ也前にも注することく凡随身に両様あり本府の随身小随身是也小随身は家々に御免なけれとつれらるゝ也本府の随身は御免なくてはつれられぬ事也此本府随身御免は尤規模也猶子細あり中少将諸衛督佐なとにて花族のかた〳〵の御免かうふらぬをさして公達も随身なきはわろきと云也此心をうけて兼好徒然草に一人の御有様はさら也たゝ人も舎人なと給はるきはゝゆゝしと見ゆ其子むまこ迄ははふれにたれとなをなまめかしそれよりしもつかたはほとにつけつゝ時にあひしたりかほなるもみつからはいみしとおもふらめといと口おしと書しは愛の義を述へたる心也

(ワ)職原云辨七人左右大辨二人左右中辨二人左右少辨二人又中少辨之間權官一人必任レ之仍謂二之七辨一 職員令云左大辨一人掌下管二中務式部治部民部一受二付庶事一糺二判官内一署レ文案勾レ稽失知中諸司宿直諸國朝集上若右辨官不レ在則併行レ之右大辨一人掌二管兵部刑部大藏宮内一餘同二左大辨一云々

しきの御ざうしの、西おもてのたてじとみのもとにて、(カ)頭辨の、人とものをいと久しういひ、立玉へればさし出てそれはたれぞといへば、辨内侍なりとのたまふ、なにかはさもかたらひ給ふ、(ヨ)大辨見えばうちすてたてまつりて、いなむものをと云ば、いみしくわらひて、たれかゝる事をさへいひきかせけん、それさなせそと、かたらふなりとの給、いみしく見へて、おかしきすぢなどたてたることはなくて、ただあるやうなるを、みな人さのみしりたるに、なほおくふかき御こゝろさまを、みしりたれば、をしなべたらずなど、御まへにもけいし、またしろしめしたるを、つねに(タ)女はをのれをよろこぶもののために、かほつくりす、士はをのれしれるひとのために、しぬといひたると、いひあはせつゝまうしたまふ、とをた(レ)あふみのはまやなぎなど、いひかはして、有に、わかき人々はたゞいひにくみ、みぐるしきことどもなどつくろはずいふに 是より以下第三節なり此間には他の事をいはずひたすら頭辨の身のふるまひ心操(コヽロサマ)などをしるして後進の人鑑とする心なるべしその中ににげなき事かつ〳〵侍るのみ 職の御さうしとは中宮の御座の御殿也御物忌などの時ましますなり さし出でとは清少納言の出て見られ

し義也　辨内侍とは頭辨のいらへ也　辨内侍と物をいふといらへ給ふ義也　何かはとはかさねて清少納言のとひ也　大辨見へばうちすてたてまつりてとは少納言の詞也　辨内侍と心有がほのふるまひをとがめていへる心成べし　いみじくわらひてとは頭辨がわらはるゝ義也　たれかかゝる事とは頭辨の詞也　辨内侍が職の事にとりなし陳じもてなす義也　いみしくとは頭の詞也　すむなどたてたるとはおかしき筋にとりたてゝはみへずたゞ職の事などをかたらひ給ふやうにみゆると也　みな人しりたるとはおなじく頭の詞也　猶おくふかきとは、陳じもてなし給ふを清少納言のみしりたるといふ心也　又さしろしめしたるとは頭の辨の色好みの事を中宮の兼てしろしめしたると也　つねにとは此人のかくふかき心をつねゞ御前にもしろしめしたるにつゐて古きためしを引て地にほむる心也引事は史記に見へたり頭書に注す　いひあはせつゝとは御前にも人々もろともにおほせらるゝ心也　とをたあふみのとは　風俗などのうたひものなるべし同可考　わかき人々とは物事になれぬ若き人々はねたみおもふと也

（カ）行成卿成べし　職事補任云藏人從四位下藤行成長德元八廿九補右衞門權佐同二年正月廿五日兵部大輔四月廿四日權左中辨云々　（ヨ）職事補任云右大辨藤原忠永延二年二月廿七日補レ之永祚元年七月十三日任ニ參議ニ大辨如レ元　又云右大辨藤原有國永祚二年八月十四日補　これらの人成へし拗物侍らぬ故ニ决しかたし　（タ）史記列傳二十六云豫讓ハ晉人也事ニ智伯ニ士爲ニ知レ己者ニ死女爲ニ說レ己者ニ容今智伯知レ我々必爲報レ讎而死以報ニ智伯ニ則吾魂魄不レ愧矣云々下略　（レ）遠江トヲタアフミ萬葉なとにとをたあふみとよみたる也今の本文の頭に風俗哥なるべしと注す

此君こそ、うたて見にくけれ、こと人のやうに、どきやうし、うたうたひなどもせず、けすさまじなどぞしる、さらに、これかれに物いひなどもせず、丸は、めはたてさまにつき、まゆはひたいにをひかり、はなはよこさまにありとも、たゞ口つきあいぎやうづき、をとがいの下、くびなどおかしげにて、こゑにくからざらん人なむ、おもはしかるべきとはいひながら、猶かほのいとにくげなるは、心うしとのみのたまへば、まいて、をとがひほそく。あいぎ

やうをくれたらむ人は、あいなうかたきにして、御前にさへぞ、あしざまにけいする。ものなどけいせさせんとても、そのはしめいひそめし人をたつね、しもなるをもよびのぼせ、つぼねにも来ていひ、さとなるにはふみかきても、みつからも、おはして、をそくまいらば、さなん申たると申にまいらせよなど、のたまふ、その人のさふらふなどいひ、いづれど、さしもうけひかずなどぞおほにする。あるにしたがひ、さだめず、何事ももてなしたるをこそ、よきにはすれど、うしろみ聞ゆれど、わがもとの心の、ほんじやうとのみぞ、のたまひつゝ、あらたまらざるものは心なりとのたまへば、さてはばかりなしとは、いかなる事をいふにかとあやしがれば、笑ひつゝ中よしなど、人々にもいはるゝ、かうかたらふとならは、何かはづる、見へなどもせよかしとのたまふを、いみじくにくければ、さあらん人は、え思はじとの給ひしによりて、え見へたてまつらぬといへは、げににくゝもぞなる　此君とは頭辨也北則前に若き人々のとり／＼に見ぐるしき事などといひたるといふ心を、今又拠に評判する義也　讀經以

下佛の道にもうときと云心也　欲うたひ以下今やう[illegible]などもおろそかなると也　けすさましとはく[illegible]けんどんなし義也　これかれにとは常に詞すくなう物事しつかにおはする心也先はとは頭辨の給ふ事を[illegible]にいひ出し侍ずる義也先は自稱する[illegible]也　めはとは目の事也[illegible]辨の色ごのみの詞也

おもはしかるべきとはいひながらとは前のこのみのごとく成をよきとはいひながらも又顔のみにくきは心うしとの給ふ義なりまいてとは何となく顔の見にくきさへ心うしとの給へはましてこのみのをとがひなどあいなくはと云義なり　御まへにとは中宮の御まへにてもあしざまに御取沙汰し給ふ心なり　物などけいせさせんとは上へ物申上給ふ時も見にくき女房には取次もさせられぬ心なるべし　そのはじめいひそめし人とは初心におもひよりし差門よき女房などをいつもよび出し取次とし給ふ義なり　しもなるとは仕をやめさがりゐる事なり　つぼねとは女房の局なりそれへわざ／＼いたり給ひておほせらるゝ義なり　さとなるとは宮つかへの女房しばらく里にある程を云なり　さ

なん申たるとまふしにとは何かしと申女房をまひらせよと仰付らるゝ心なり　其人のとはこと人も侍ればそんてう其人に仰られよと傍の人の云義なり　さしもうけひかずとは左やうに承引なきとなり　あるにしたがひさためずとは後見のいさめし詞也　うしろみきこゆれどとは後見いひ聞せつれどもと也　わがもとのとは元来の生れつきぞと云義也　ほんじやう本性なり　さてはばかりなしとは傍なる人々がとがめていふ心なり本性のまゝにゆるし給はゞ何をか憚りとし給ふべきやと云義也

中よしなど人々にもいはるゝとは頭辨の答なり人々にも中よしなどいはれ如此あひかたらふうへは何とてはづべきぞと也　見へもせよとは見もせよとなり是はゞからぬ義なり　いみじくにくげなればとは姿貌のみにくきをいふ義なり則清少納言が詞なり　さあらん人はとは見にくき人の事なり

えおもはじとのたまひしによりてえ見へ奉らぬとは清少納言が詞なり　げににくゝもぞなるとは清少納言がことばのおもむきを頭辨のにくむ心なりげにと云詞に心を付て見るべし

（〇）師輔公遺誡云始レ自ニ衣冠ニ及ニ于車馬ニ隨レ有用レ之勿レ求ニ美麗ニ不レ量ニ己力ニ好ニ美物ニ則必招ニ嗜欲之謗ニ徳至力堪何事有哉　〇論語云過則勿レ憚レ改註自治不レ勇則悪日長故有レ過則當ニ速改ニ云々下略

さらばなみへそと、をのづからみつへき折も、をのれ顔ふたぎなどして、まことにみ給はぬも、まごころ(イ)に、そらごとし給はざりけりとおもふに、三月つごもり頃、冬のなをしの、きにくきにやあらん、うへのきぬがちにて、殿上のとのゐすがたもあり、つとめて日さし出るまで、式部の内侍(オモト)と、こびさしにねたるに、おくのやり戸をあけさせたまふて、(ロ)うへの御前宮の御まへ出させ給へればおきもあへずまどふを、いみしくわらはせ給ふ、からきぬを、たゞかざみのうへにうちきて、とのゐ物もなにも、うづもれながらあるうへに、おはしまして、陣より出入ものなど御らんず、殿上人のつゆしらで、よりきてものいふなどもあるを、けしきなみせそと、わらはせ給ふ、さてたゝせ給ふに、ふたりながら、いざとおほせらるれど、いまかほなとつくろひてこそとてまいらず、いらせ玉ひて、猶めでたきことども、いひ

あはせてゐたるに、南のやり戸のそばに、几帳の手のさしいでたるにさはりて、すだれ(三)の少しあきたるより、くろみたる物のみゆれば、のりたかが、ゐたるなゝめりと思ひて　みもいれで猶こと事どもをいふにいとよくゑみたる顔の、さし出たるを、のりたかなゝめりとてみやりたれば、あらぬ顔なり、あさましとわらひさはぎて、木丁ひきなをしかくるれど、頭辨(六)にこそおはしけれ、みへたてまつらじとしつるものをといと口おし　さらばとは左程にあらば也前をうけていふ頭辨の心なり　なみへそとはなま心得の人はみへ給事も無用と云義なり　そのれ顔ふたぎてとは頭辨の顔をふさぎて清少納言がみにくきすがたをみまじきとのこころなり　まごころにとは　眞心なり頭辨のうへをおもふ義なり　冬のなをしとは十二月四季の裝束侍る故に冬春にわたる裝束なれば更衣の頃やゝあつふしてきにくきと也　式部のおもととは式部の内侍なるべし　おくのやり戸をあけさせ給ふてと云以下は中宮宮の御まへの出給ふとてあけ給ふ心也　おきもあへずまどふとは式部のおもとと清少納言と目のさし出るまでねまどひたるさま也　わらはせ給ふとは宮の笑はせ給ふ

となり　からきぬをとはあは〳〵しう裝束する義なり　とのゐものもとは夜のしとねもしたためぬ心也　おはしましてとに宮のおはしましてなり　つゆしらでとは宮のましますをしらでなり　よりきてものいふとは殿上人が式部の内侍清少納言などへせうそこいひたはふれこどなどいふ心なるべし　けしきなみせそとは宮の詞也われここにあるけしきをせそとなり　さてたたせ玉ふとは宮の奥のかたへ立入給ふ義なり　ふたりながらとは式部内侍清少納言をめす心也　いまかほなどとは内侍少納言が眉などをし侍らんとなり　いらせ給ひてとは中宮のいらせ給ひてあとにて此宮のやむごとなき程をうはさし侍る義なり　南のやり戸以下清少納言がみしさまをいふなり　なをこと事どもをいふにとはこと物語などし侍りてありとなり　のりたかなめりとは頭辨をみちがへたる心なり　みへたてまつらじとしつるものをとは餘の人と思ひてかくれざりしが頭辨にてわたらせ給にば初よりかくれてみへ奉らじ物をと悔む心なり

(イ)擲物云長保二年三月事歟　(ロ)うへの御前は

中宮定子也宮の御前は敦康の宮并女宮二所をも稱り侍るべし　(◎)のりたか未考(八)頭辨上に註す

もろともにゐたるひとは、こなたにむきてゐたればかほもみへず、立出て、いみじくなごりなくも、みつるかなとのたまへば、のりたかと思ひ侍れば、あなづりてぞかし、などかはみじとの給ひしに、さつく\とはといふに、ねおきたる顔なむいとよきといへばある人のつぼねにゆきて、(三)かいばみして、又もしみへやするとて、きたりつるなり、又うへのおはしつる折からあるをば、えしらざりけるよとて、それよりのちは、つぼねのすだれ、うちかづきなどしたまふめり　もろともに見たる人とは式部の内侍なり　こなたにむきて顔もみへずとは式部の内侍が此方むきて居し故頭辨にかほみへざるとなり　なごりなくもとは清少納言が前に居て中宮のみたるとなり　のりたかと思ひしは少納言が詞也　思ひあなどりてみへられしとなり　などかとは頭辨の詞なり　かくれたりともいかでみざるべきとなり　さつく\とは清少納言がいらへなりさやうにつく\とみる事はあまりけやけしとなり　女はねおきたる顔とは頭辨の詞也　又もしみへやするとにや女房達のねおきたる顔のみへやするかとてかいばみし給ふ心なり　又うへのおはしつるとは中宮などのわたらせ給ふをしらざりしと也　それより後はとは頭辨の入室ふ由なり

(二)神代巻云覗其私屏　或は垣間見と書くひそかにのぞきみる義也かいばみかいまみ同じく通音也

殿上の(六)なだいめんこそ、猶おかしけれ、御前にさふらふ折は、やがてとふもおかし、足をともして、くづれいづるを、うへの御つぼねの東おもてに、みゝをとなへて聞に、しる人のなのりにはふとむねつぶるらんかし、又有ともよくきかぬ人など、此折に聞つけたらんは、いかがおぼゆらん、なのりよしあし、ききにくしなど、さだむるもおかし、はてぬなりと聞は(×)どに、瀧口のゆみならし、くつの音そゝめきいづるに、藏人の、いとたかくふみこぼめかして、うしとらのすみの、高欄に、たかひざまつきとかやいふ、ゐすまゐに、御まへのかたにむかひて、うしろさまに誰々か侍ると、とふほどこそおかしけれ、ほそうたかうなのり、また人なさふらはねはにや、なたいめん

つかふまつることのよしそうするも、いかにとゝとへば、さはる事ども侍に、とて聞て、かへるを、まさひろはきかずとて、君達のをしへければ、いみじうはらたちしかりて、かうがへて、滝口にさへわらはる、みづし所のおものだなに、くつをきて、いひのゝしらるゝをいとおかしがりて、たが沓にかあらん、えしらずと、主殿づかさ、人々のいひけるを、やゝまさひろが、きたなきものぞや、とりに来ても、いときはがし

四條兄よりなたいめんの事につゐてまさひろがふるまひのにげなき事を云なり　なたいめんとは名謁をいふ殿上にとのゐせる侍臣たがいに名をとはれてなのる事也　やがてこふもとは侍臣の名をとふ事なり　くづれいづるとはなのりはてゝまかづる義なり　うへのみつぼねとは清涼殿の二間をうへの御局にしつらふなり　萩の御座のかたはらの二間を上の御局と申侍る也　ふとむねつぶるらんとは心ときめく義なり　又有ともとはおほくある中に行状徳功もなき人のなのりを聞ては人々の心にもいかゞばかり思はんとなり　名謁よしあしとは名謁すうのさはやかに聞ゆるとをどろにきこゆるなどを評判する義なり　はてぬとは果畢なり　実の一刻に宿直に奉する人のなどのはてたる由成べし　耳ならしとはよそではひつくろふ心也　ふみこぼめかしとは昔の事しいふ也　うしとらのすみとは西北隅の角也　これ〳〵か侍るとは每事のとりをこなふさまなり　人々さふらはねばにやとはさはる事の侍りて名對面つかふまつらぬよし藏人奏するなり　と聞てとはさはる事侍りて名謁なき由を人々聞て皆々かへりたるとなり　きかずとてとはまさひろはきかざりしを君達のつげ給ふとなり　はらたちしかりてとはわれは聞ざりしをはらたつる義也　かうがへてとは君たちも名對面のさはる故をつく〴〵考てみる義なり　滝口にさへわらはるゝとはまさひろがをくれたゝずまふを滝口の者が笑となり　みづし所とは御厨所なり俗に臺所など云ふ心なり　いひのゝしらるゝとは人々にとがめらるゝ心なり　主殿司とは人のいひけるを主殿司がいひあらはしたるとなり　とりに来てもとはまさひろがとりかへりつれども人々の笑ひのゝしる事やまぬ由也

中宮定子也宮の御前は[illegible]の宮[illegible]宮二所をも[illegible]り侍るべし　(四)のりたか未着(六)頭辨上に註すものへともにゐたるひとは、こなたにむきてゐたればかほもみへず、直出て、いみじくなごりなくも、みつるかなとのたまへば、のりたかと思ひ侍れば、あなづりてぞかし、などかはみじとの給ひしに、さつくぐゝとはといふに、女はねおきたる(三)顔なんいとよきといへばある人のつぼねにゆきて、かいばみして、又もしみへやすきとて、きたりつるなり、又うへのおはしつる折からあるをば、えしらざりけるよとて、それよりのちは、つぼねのすだれうちかづきなとしたまふめり　ものへともにゐたる人とは[illegible]侍なり　こなたにむきて顔もみへずとは式部の内侍が此方むきて居し故頭辨の方へみへざるとなり　なごりなくもとは清少納言が顔を残らず頭辨のみたるとなり　のりたかと思ひとは少納言が詞也　思ひあなどりてみへられしとなり　なとがとは頭辨の詞なり　かくれたりともいかでみざるべきとなり　さつくぐゝとは清少納言がいらへなりさやうにつくぐゝとみる事はあまりけやけしとなり　女はねおきたる顔とは頭辨の詞也　又もしみへやするとは又女房達のねおきたる顔のみへやするかとてかいばみし給ふなり　又うへのおはしつるとは中宮宮などのわたらせ給ふをしらざりしと也　それより後[illegible]とは頭辨[illegible]主ふ由なり

(二)[illegible]　或は垣間見と書くひそかにのぞきみる義也かいばみかいまみ同じく通音也

殿上の(六)なたいめんこそ、[illegible]おかしけれ、御前にさふらふ折は、やがて[illegible]おかし、足をともして、くづれいづるを、うへの御つぼねの東おもてに、みゝをとな[illegible]聞に、しる人のなのりにはふとむねつぶるらんかし、又有ともよくきかぬ人など、此折に聞つけたらんは、いかがおぼゆらん、なのりよしあし、ききにくしなど、さだむるもおかし、はてぬなりと聞ほどに、[illegible]日のけみなるらし、[illegible]の音そゝめきいづるに、蔵人の、いとたかくふみこぼめかして、うしとら[illegible]すみの、高欄に、たかひざまつきとかやいふ、ゐすまゐに、御まへのかたにむかひて、うしろさまに誰々か侍ると、とふほどこそおかしけれ、ほそうたかうなのり、また人々さふらはねばにや、なたいめん

つかふまつらぬよしそうするも、いかにとゝへば、さ(三)はる事とふ中に、また聞て、かへるを、まさひろはきかずとて、君達のなしければ、いみじうはらたちしかりて、かうがへて、瀧口にさへわらはる、みづし(四)所のおものだなに、くつをきて、いひのゝしらるゝをいとおかしがりて、たが沓にかあらん、えしらずと、主殿つかさ、人々のいひけるを、やゝまさひろが、きたなきものぞや、とりに來ても、いとさはがし

四節是よりなたいめんの事につゐてまさひろがふるまひのにげなき事を云なり　なたいめんとは名謁をいふ殿上にとのゐせる侍臣たがいに名をとはれてなのる事也　やがてとふもとは侍臣の名をとふ事なり　くづれいづるとはなのりはてゝまかづる義なり　うへのみつぼねとは清涼殿の二間(フタマ)をうへの御局にしつらふなり　晝(ヒル)の御座のかたはらの二間を上の御局と申侍る也　ふとむねつぶるらんとは心ときめく義なり　又有ともとはおほくある中に行状德功もなき人のなのり(ナノリ)を聞ては人々の心にもいかゞばかり思はんとなり　名謁よしあしとは名謁やうのさはやかに聞ゆるとをどろにきこゆるなどを評判する義なり　はてぬとは果畢(クワンヒツ)なり其の一調に音樂を奏する次第などのはてたる由成べし　弓ならしとはよそほひつくろふ心也　ふみこぼめかしとは沓の音をいふ也　うしとらのすみとは南殿艮(ウシトラ)の角也　たれ／＼か侍るとは職事のとりをこなふさまなり　人々さふらはねばにやとはさはる事ありて侍らで名對面つかふまつらぬよし藏人奏するなり　さ聞てとはさはる事侍りて名謁なき由を人々聞て皆々かへりたるとなり　きかずとてとはまさひろはきかざりしを君達のつげ給ふとなり　はらたちしかりてとはわが聞ざりしをはらたつる義也　かうがへてとは考へて名對面のさはる故をつくゞ考てみる義なり　瀧口にさへわらはるとはまさひろがをくれたゝずまふを瀧口の者が笑となり　みづし所とは御厨所なり俗に臺所など云ふ心なり　いひのゝしらるゝとは人々にとがめらるゝ心なり　主殿司とは人のいひけるを主殿司がいひあらはしたると也　とりに來てもとはまさひろがとりかへりつれども人々の笑ひのゝしる事やまぬ由也

（ホ）北山抄云、府大將以下一員近衛供奉裝束同ニ行幸ニ其外宮司衆ニ中少將ニ若帶ニ弓箭ニ供奉人御之後王卿名對面宮司問レ之諸衛不レ脫ニ弓箭ニ着ニ壇座ニ中宮行啓の時に供奉の公卿名乘する事有也　（ヌ）瀧口の弓たらし　藏人のふゑこほめかすいづれも下に注す　（チ）まさひろ　方弘也　系圖七の卷に注す　（リ）御厨子所　ミツシドコロ　食物を調する所也　（リ）拾芥抄云御厨子所四位殿上人爲ニ別當ニ以ニ民部大輔五位ニ爲ニ預ニ也在ニ後涼殿西廂ニ以ニ內膳內藏造酒大膳及諸御厨衛府御贄ニ供ニ朝餉及朝夕御膳ニ用ニ土器ニ有ニ別當所衆ニ有ニ年預ニ熟食進ニ月奏ニ

若くてよろしきをのこの、げす女の名いひなれてよびたるこそいとにくけれしりながらも、何とかや、かたもじはおぼへでいふはおかし、宮づかへ所の局などによりて、夜などぞ、さおぼめかんは、あしかりぬべけれど、とのもりづかさ、さらぬ所などは、さふらひ藏人所にあるものを、ゐて行てよばせよかし、てづからはこゑもしるきに、はしたものわらはべなどは、されどよし　五節男女のもの　いひ　わたるけはひにげあるとにげなきとの品をいひて敎ゆる心也

げす女とはわかうよろしき男ながら上﨟にもあらばこそ、げす女をけやけくよびつけたらんは尤にげなかるべき也　しりながらもとは心得を敎ゆる義なり　宮づかへとは女房のつぼねなどの事也　さおぼめかんはあしかりぬべけれどとは上﨟のつぼねにて片文字におぼめかんはあしかるべけれどもよばでかなはずば主殿司の者などをしてよぶべきとなり　さらぬとは宮づかへのつぼねにあらぬ所なり　さふらひとは瀧口の侍などなり　藏人所に是も藏人所の侍の事なり　ゐて行てとはつかはしてと云ふ心なり　はしたものわらはべとは下女童などは前のごとくかたもじに呼もくるしからじとなり

若き人と兒はこえたるよし、ずりやうなど、おとなたちたる人は、ふときいとよし、あまりやせからめきたるは、こころいられたらんと、をしはからる、よろづよりは、牛飼わらはの、なりあしくてもたるこそあれ、こともの ども は、されどしりにたちてこそいけ、さきにつとまもられいくもの、きたなけなるは心うし　車のしりに、ことなる事なきおのこどもの、つ

れだちたるいとみぐるし、ほそらかなるおのこ、ずいじむなどの、みへぬべきが、くろきはかまのすそこなるかりきぬ、はなにもうちなればみたる、はしる車のかたなどに、のどやかにてうちそひたるこそ、わがものとはみへね、なを大かたなりあしくて、人つかふはわろかりき、やれなど、時々打したれど、たれとなれば、みてつみなきは、さるかたなりや　六節人のしなにつゐて傾合しきとにげなきとの心を云也　こえたるとは肥うるはしき心也　ふときとはたくましき心也　こころいられとは心煎也せは〳〵しき心也　さきにつとまもられとは牛飼は先にゆくものなれば一人目にたつ心也　ことなる事なきとはすがたもみぐるしく立振舞も物なれぬ人の車副べし　ほそらか成男とは花車なるすがたの心也　くろきはかまとは如此の装束を着なれてとなり　はなにもとは車の端にも従ひたればみたると也　わがものとはみへねとはつね〳〵のごとく打とけずいかめしくみなす心也　やれなどとはよき牛飼に車をやれなどとて時々うたせたると也　うちしたれとはうたせたれと云義也　牛をおはする心也

たれとなればとは其如くよき牛飼に車やらせなどするは誰ぞとなればさる御かたなりと云心也其御かたはみとがむべきつみとがなしと自問自答に少納言みられし御方の事を云也名をさゝねば今いづれと定がたし並中宮の御父道隆公が又は此前のつづきにいひし頭弁行成卿などをさしてさる御かたといひしにや、みな人よく考て知べし

つかひ人なとこそはありて、わらはべのきたなげなるは、あるまじくみゆれ、いゐにゐたる人も、そこに有人とて、使にても、まらふどなどのいきたるにも、おかしきわらはのあまたみゆるは、いとおかし、人の家の門の前をわたるに、さふらひめきたるものなどして、(ヨ)ひめきたる男、つちにおるものなどして、おのこゞの十ばかりなるが、髪おかしげなる、ひきはへ、でもこはきねたるも、またいつゝ六つ計なるが、髪はくびのもとに、かひくゝみて、(タ)つらいとあかうふくらかなる、あやしき、弓しもとだちたるものなど、さゝげたるいとうつくし、車などとゞめていだきいれまほしくこそあれ、又さていくに、たきものゝ香のいみじくかゝへたるこそ、いとおかしけれ、

よき家の中門あけて、檳榔毛車の、しろうきよげなるに、はしすはうの下すだれの、にほひいときよげにて榻に打かけたるこそ、めでたけれ、五位六位なとの、下がさねの尻はさみて、さゝのいとしろき、かたにうちをきなどして、とかくいきちがふに、又さうぞくしつぼやなぐひ、をひたるずいじんの、出入したる、いとつき〴〵し、くりや女のいときよげなるが、さし出て、何がし殿の人やさふらふなど、いひたるもおかし　七節前のつゞきに人のしなのにげなき事を云也　然とも前節とはすこし心こと也そのむねは本文をみて心得べし　つかひ人などこそはありてとは召使者なと有家に見童子のきたなげなるは似げなくあるまじくおぼゆると也　いゑにゐたる人とは人などつかひ門をかまへたる人の子どもをきたなげにしてをくはあるまじき事ぞと也　そこにある人とて使にてもとはそんでうそこ〳〵よりの使などたゞぬ家といふ義也かやうに時めく人の家にても子共のきたなげなるはみをとさるべし又おかしげにうつくしくそだてたらんはおくゆかしからんといふ心をふくめてかけり能味べしまら

ふとなどのいきたるにもとは是も使の来る心と同じ趣なり使を得客をまうくるは時めく人をいはんため也　人の家の門の前とは是はつかう人はいやしげなれども子共のそだてさまおかしげなるを云也　かみおかしげなるとは子の髪をいふ也本文の心あきらか也　車などとゞめてとは清少納言子どもをみて愛する心なり　又さていくにとはいだきいれつれ行などするにおもひよらぬたきしめの香のするはいみじきと也これらはおもひよらぬ事のにげなき裏を斷なり　よき家のとはこれも前の車の次手におもひかけず車のみへしを云なり　中門とはおもひよらぬ所をしらせたり　五位六位とは車の供奉の人をいふなり　隨身の出入したるとは規模の隨身を供につれ給ひけるよとみへてつきつきしきとなり　人やさぶらふとは供奉の者名たまふをくりや女がよび侍る也　是迄にげなきものゝ段七節にわけ注釋し侍る也當段ことばながく侍れは細の心をうしなはず能〻みるべき事肝要なるべし

(ヨ)[illegible]ヒメキ　めきは時めきなどいふに同じ付字也

いやしき心を云也又夷ヒナメキひなめきの略也　いなかびたる心也　(タ)笏シヤク事林云笏大頭二分小頭一分半　とがの者をうつ道具也　(レ)さゝみいとしろきとは物忌などつけてかざし持つ義成べし　(◉)西宮記云諸衛將佐行御出之時負蠻胡籙蠻胡籙は矢を入る物也　(ソ)目屋女　今のはしたざうしの類也

清少納言枕草紙抄卷四

[廿九段] 瀧は　(ヒ)音なしの瀧　(マ)ふるの瀧は、(ケ)法皇の御覽じに　おはしましけんこそ、めでたけれ。(フ)なちの瀧は、くまの野にありと聞が、あはれなるなり。(コ)とゞろきの瀧は、いかにかしかましく、おそろしからん　此段は詞すくなふ侍りて心もあきらか也　瀧は例の題なり此瀧のみとりおきて尋られし事心有義なり　凡瀧にかぎらず此双紙一部の中に或は名所或はことわざに至まで皆此とりわけえらびあげられし事必有事共なり　ありと聞がとは此か文字輕く見るべし　いかにかしましくとはとゞろきといふ名により戯れいふなり各名所首に注之
(ヤ)音無瀧ナトナシノタキ比叡ニ、いかにしていかによからんをの山の上より落る音なしの瀧　(マ)ふる瀧、フルノタキ大和　萬葉に　古へもかく聞つゝや忍びけん此ふる河の清き瀬の音を　(ケ)花山院三山御巡禮御參有し給ふ時御歌ありて山也　(フ)那知ナチ　紀伊熊野　夫木に　花山院　石はしる瀧にまがひてなちの山高根をみれば花の白雲　(コ)

轟瀧トドロキ　奥州今市

三十段　かはは、あすか川(キ)、淵瀬もさだめなく、はかなからんとあはれなり。大井河(テ)、泉河(ア)、水無瀬川(サ)、(キ)みゝと河、又河ことをさしもさかしうきゝけんと
おかし、音なし川(ユ)、おもはずなるほどおかしきな
めり、ほそだに川(メ)、玉ほし河(ミ)、貫河(シ)スキ、さはだ河(エ)は、さ(ヒ)
いばらなどのおもひはすゝなるべし、なのりその
かは、名とり河(セ)も、いか成名を、とりたるにかと、
聞まほし、吉野河(ス)、あまの河(ニ)、この下にも、あるな
り、七夕つめに宿からんと、業平(三)がよみけんも、ま
しておかし　此段は詞すくなう侍れどもおかしき段
なりかみの段につゞひて河どもを書つらねられた
り　かはは是題當段の趣なり　あすか川とはうつ
りかはりやすき由歌によみ來る事ことふり侍るな
り　はかなからんどはつねなき心をいふなり　何
事をとはみゝと河といふにちなみていふなり　お
もはずなるとは音なしとはいへどもおもひよらず
川をとの鳴ナルとなり　ぬき河さはた河などゝは催馬
樂の歌に侍るなり則委後にしるすなり　なとり
河是も名を取といふ心を云義なり　この下にもと
は天上のみならず此下界にも有といふ心なり　七
夕つめとは是はたなばた天上の銀漢アマノカハをよそへて河
内の名所をよまれしを思ひ出らるゝ故にましてお
かしと云なり

(エ)飛鳥川アスカガハ大和　源順集に「世の中を
何にたとへん飛鳥川定めなきよに瀧つ水の泡
(テ)大井河オホヰガハ山城　(ア)泉河イツミガハ山城
(サ)水無瀬河ミナセガハ山城山崎　耳敏河ミヽトガ
ハ山城　八雲御抄ニ耳敏河山城云々拾芥抄ニ云朱雀
門南二條南列樹　夫木に　貫之「百敷の大宮ちか
きみゝと河流て君を聞渡る哉　(ユ)音無川　紀伊
(メ)細谷川ホソタニガハ備中　(ミ)玉星河タマホシカ
陸奥　(シ)催馬樂註秘抄云貫河の瀬々の手枕やは
らかにぬる夜はなくて親さくるつま　貫河は美濃
國に伊豆貫河と云所有いつを略して云へり云
々　(エ)同云澤田河袖つくばかりやあさけれど
はれあさけれど國の宮人やたかはしわたす　澤
田河國のみやこはみかの山城國三かの原に有所の
名なり云々　(ヒ)廣恩寺殿云催馬樂は昔諸國より
御調物を大藏省へおさめし時民の口ずさみにうた
ひける歌なれば催馬樂と名くるなり馬をもよほす

といふは御調物をおほすな馬をかりもよほす心なり（セ）名取河ナトリカハ奥州　（ス）吉野川、ヨシノカハ和州　（一）天河アマノカハ河内伊勢物語云みこの給ひける交野を狩て天河のほとりに至るを題にて歌よみて盃させとの給ひければ彼むまのかみよみて奉りけり　狩くらし七夕つめに宿からんあまのかはらに我は來にけり　（二）三代實錄云業平者故四品阿保親王第五正三位行中納言行平之弟也云々下略之

卅一段 橋は、あさむつの橋、ながらの橋、あまびこのはし、はまなの橋、ひとつ橋、假寢（ウタヽネ）の橋、佐野の舟橋、歌しめの橋、（◎）轟（トヽロキ）の橋、小河（ヲカハ）の橋、かけ橋、せたの橋、木曾路の橋、ほり江の橋、（三）かさゝぎの橋、行あひの橋、やますげの橋、一すぢわたしたるたな（○）橋、心せばければ、名を聞におかしきなり　此段は橋の名所をいふなり　あさむつの橋は飛驒國にあり　ながらの橋攝津國に有　あまひこの橋飛驒にあり　濱名の橋遠江にあり　ひとつ橋尙可尋　假寢橋大和に有　佐野舟橋上野にあり　うたしめの橋大和にあり　とゞろきの橋美作にあり　小川の橋奥州に有　かけ橋尙可尋　勢田の橋近江國にあり　木曾路の橋信濃國也　堀江の橋攝津也　山菅（ヤマスゲ）の橋下野也　たな橋未考　一すぢ渡したる由は當時見及びし比一すぢわたせる成べし或又古歌に一すぢわたす由よみけるにや委可尋之

（三）鵲の橋カサヽギノハシ八雲御抄にはつの國と云々　夫木には周防土佐と云々　いつれか究めがたし（◎）或說に轟橋近江なり云々（○）たな橋　かうらんのやう成物したる橋歟又云たなに似たる橋と云々駒の足をれまへのたなばし藻鹽又あめにあるひとつたなばしの事藻鹽に說あり今略之　これらの說いづれの名所ともさだかならず

卅二段 里は、あふ坂の里、ながめのさと、いさめの里、人つまの里、たのめの里、あさふの里、夕日の里、とをちの里、伏見の里、長井の里、妻取（ツマトリ）のさと、人にとられたるにやあらん、わがまうけたるにやあらん、いづれもおかし（△）　此段は里の事をしるされたり心あきらかなり　里は是則當段例の題也　逢坂里近江なり　ながめの里可尋之　いさめの里は伊勢國は去來見（イサミ）里とてありこれなるべし駒とめ

ていさみの原とよみしは是なり　人つまの里八雲にも在所見へず　たのめの里信濃國にありたのめの里に年をふるかなとよみしなり　あさふの里未詳尙可考　夕日の里丹後に夕日浦有此所歟可尋　とをちの里大和にあり　伏見の里山城に有呉竹の伏見とよみしなり　なが井の里つの國にあり小夜も長井のとよみし是なり　つまとりの里奥州古川といふあたりに侍るなり　人にとられたるにや巳下は里の名にちなみいふなり心あきらかなり

(▲)おかしトアル下或本ニハあさがほの里とアリ

卅三段　草は、(イ)さうぶ、(ロ)こも、(ハ)あふひ、いとおかし、(ニ)祭の折、神代よりして、(ホ)さるかざしとなりけん、いみじくめでたし、ものゝさまも、いとおかし、(ヘ)をもだかも名のおかしきなり、心あがりしけんとおもふに、(ト)みくり、(チ)ひるむしろ、苔、(リ)こたに、(ヌ)雪まのあを草、(ル)かたばみ、あやのもんにてあるも、ことものよりはおかし、あやふ草は、岸のひたひにおふらんも、げにたのもしからずあはれなり、(ヲ)いつまで草はおふる所、いとはかなくあはれなり、岸のひたひよりも、これはくすれやすげなり、まことの(ワ)いしばいなどには、えおひずやあらんとおもふぞわろき、(カ)ことなし草は、思ふ事なきにやあらんとおもふもおかし、又(ヨ)しのぶ草、いとあはれなり、やのつま、さし出でたる物のつまなどに、あながちにおひいでたるさま、いとおかし、(タ)よもぎいとおかし、道芝、(レ)つばなもおかし、(ツ)はまちの葉はましておかし、(ソ)まろこすげ、(ネ)うき葉、淺茅、(ナ)あをつゞら、(ラ)とくさといふものは、風にふかれたらんをとこそ、いかならんと、おもひやられておかしけれ、(ム)なつなならしはいとおかし、(ウ)はすのうき葉の、らうたげにて、長閑にすめる池のおもてに、おほきなると、ちいさきと、ひろごりたゞよひて、ありく、いとおかし、とりあげて、物をしつけなどして見るも、よもにいみじうおかし、(ヰ)妙法蓮花のたとへにも、花は佛に奉り、實はずゝにつらぬき念佛して(ノ)往生極樂の緣とすればよ、又花なき比、みどりなる池の水に、紅に咲たるもいとおかし、(ク)翠翁紅(スイオウコウ)とも、(フ)詩に作りたるにこそ、(キ)やへむぐら、(ヤ)山すげ、(ケ)やまゐ、ひかげ、(コ)濱木綿(ハマユフ)、(エ)あし、(テ)くずの、風に吹かへされて、うらのいとしろくみゆるおかし　此段は詞多少(ソコバク)侍れ共

心あきらかなり　草は是則此段の題なり　祭の折とはあふひかつらをかくる賀茂祭の事なり　ものゝさまもとは、あふひのありさまを云なり　をもだかとは名にちなみていふなり、面高(オモダカ)の心に聞え心あがりやせんとなり　かたばみあやのもんとは綾の織紋にかたばみをするなり　あやぶ草未考倘可尋之　いつまで草壁に生る蘿に似たるものなり　ことなし草とは是も名によせていふなりおもふ事くさもなく又あしきことぐさもなしといふ心にて名づけたるかとなり　しのぶ草とはいまも軒(ノキ)妻(ノツマ)或は朽木の株(エヌ)などに有也　よもぎとはよもぎがもとの露など歌によみあはれふかきものなり　道芝とは今の野原の芝也　濱茅　とくさとは長く茂れる木賊(トクサ)の原に風ふけばよく鳴物也　薺ならしとはなつなは子日にあひてとりはやすなどおかしき事也　はすのうき葉とは水に浮たる葉也のび長せぬ葉の事也　物をしつけとは今もはすの供御などといふの類也　よもにとはいづく迄も如レ此する風俗ぞと也　妙法蓮花以下は例を引て蓮をほむる也則花實の益ある事をしるされたり　又花なき比とは諸の草木茂みて花まれなる比なり或云櫻のみなちりうせてなき比と云義と云々いづれもくるしからぬ説也　翠翁紅の詩後にしるすなりはすの見たて拜詞のさま尤也よく味ふべし　くずとは今の山家にある葛つるなり葛のうら風などよみし心をいふ也葛の葉はうらしらけたる物なり

(イ)菖蒲セウブサウブ五音相通也　(ロ)菰コモ　(ハ)葵アフヒ蜀葵と云物有　(ニ)賀茂祭也前に注す　(ホ)常の葵にあらず俗にいふ日向葵と云もの也　このゆへにものゝさまもいとおかしと云也則證歌侍る下の草の花と云段にしるし侍る也　(ヘ)澤瀉ヲモタカ　(ト)莎草ミクリ　(チ)蛇牀子ヒルムシロ　(リ)苦丹(コタニ/クタム)　又云蘿の類なり　(ヌ)好忠百首歌　源順「あかねさす朝日に消る雪まよりきやしすらん野へのわか草　(ル)酢漿草カタバミ　(ヲ)壁生草イヅマデグサ　(ワ)今の白壁などなり　(ヨ)垣衣シノブ　(タ)蓬草　艾草ヨモギ　(レ)葽ツバナ　茅花同　(ソ)濱茅ハマナ　(ツ)荊三稜マロコスゲ　(ネ)浮萍ウキクサ　(ナ)鞭草アヲツヽラ　(ラ)木賊トクサ　(ム)薺ナツナ　(ウ)

蓮ハス　(ヰ)玄義云妙者妙名不思議法者十界十如權實之法也釋云十界諸法本來本妙法其體微妙法也蓮花とは前に云所の妙法の體也生淤泥中不染淤泥妙法在妄情中不染妄情全如蓮花是其譬喩也云々　(ノ)大品經云雨天花作花散佛菩薩云以如是花供如是佛寶塔品云以此寶花散佛供養方便品云乃至以一花供養於畫像漸見無數佛　曼殊室利校量數珠經云其數珠體種々不同校量乃至槵子掐一遍得福千倍蓮子得福萬倍牟梨曼陀羅呪經云數珠此乃是引攝下根牽課修業之具也云々　(ク)五車勻翠紅トアレ𪜈翠翁紅トハ事文ニモ見ヘザルナリ可尋　(ヤ)八重葎ヤヘムグラ　(マ)麥門冬ヤマスゲ　(ケ)山藺ヤマヰ　(フ)蘿日本紀私記蘿比加介　(コ)濱木綿ハマユフ　(エ)蘆アシ　(テ)葛クズ　萬葉十二「みづくきの岡の眞葛を吹かへす折しるこらが見へぬ比かも

卅四段　草の花は、(ナ)なでしこ、からのはさら也、やまともめでたし、(ニ)女郎花、桔梗、あさがほ、かるかや、(イ)菊の、ところ〴〵うつろひたる、つぼすみれ、(ロ)りんだうは、えださしなど、むつかしげなれど、こと花どものみな霜がれはてたるに、いとはなやかなる色あひにて、さし出たる、いとおかし、又わざと、とりたてゝ、ひとめかすべきにもあらぬさまなれど、(ハ)かまつかの花、らうたげなり、名ぞうたてげなる、雁の來花とぞ、もじにはかきたる、(ニ)かにひの花、色はこからねど、藤の花にいとよく似て、春と秋とさく、おかしげなり、夕がほは、花のかたちもあさがほににて、いひつゞけたるに、いとおかしかりぬべき、花のすがたにて、にくゝ、實のありさまこそいと口おしけれ、などてさはた、おひいでけん、ぬかづきなどいふものゝやうにだにあれかし、されどなを(ホ)夕がほといふばかりはおかし、しもつけの花、(ヘ)あしの花、さらに見所なけれど、みてぐらなどいはれたる、心ばへあらんとおもふにたゞならず、もえしもすゝきにはをとらねど、水のつらにて、おかしうこそあらめとおぼゆ、これにすゝきをいれぬ、いとあやしと人いふめり、(ト)秋の野をしなべたるおかしさは、すゝきにこそあれ、ほさきすはうにいとこきが、朝霧にぬれてうちなびきたるは、さばかりの物やはあ

る、秋(◎)のはてぞいと見所なき、色々にみだれ咲たりし花のかたちもなく、ちりたる後、冬のすゑまで、かしらいとしろく、(チ)おほどれたるもしらで、むかしおもひ出がほになびきて、かひろきたてる人にこそいみじうにためれ、よそふる心ありて、それをしもこそ、あはれともおもふべけれ、萩は、いと色ふかくえだたをやかにさきたるが、朝露にぬれて、なよ〳〵とひろごりふしたる(リ)小男鹿のわきてならすらんも、心ことなり、から葵は、とりわきて見へねど、(ヌ)日のかげにしたがひてかたぶくらんぞ、なべてのくさ木の心ともおぼへで、おかしき、花の色はこからねど咲山吹には、岩つゝじもことなる事なけれど、(ル)折もてぞ見ると、よまれたる、さすがにおかし、さうびは、ちかくて、枝のさまなどはむつかしけれどおかし、雨などはれ行たる水のつら、くろぎのはしなどのつらに、(ヲ)みだれさきたる夕ばへ　此段は前段のつゞきに草の花の事をしるされたり　草の花は是則當段の題なり前段は花の事をいはずひとへに草と計云なりこゝには花の事を專云也　撫子とは兩種ある事をしらせたり　からのとは今の石竹といふものなり　やまとゝは川原などにある桃色ひとへの花さくものなり　菊のところ〴〵うつろひとはうつろふからに色のまさればなどよみし心なり　りんだうとはりうたんの事也　ひとめかすべきにもとは草々と　ひとしう云べきならずといふ心なり

名ぞうたてとはかまつかといふ詞をわびしくおもふとなり鎌柄(カマツカ)などゝいへる心にや文字には雁(カリ)の來(クル)花と書ていとやさしきといふ義なり　かにひの花とは今の世も岩藤とて人の愛する草花なり　夕がほとは今の瓢(ヒサゴ)といふものゝ出生る草なり　實のさまとは瓢の生たるさまを云なり　しもつけの花とは今の世の小手まりと云物なり　みてぐらとは幣帛也神代より葦芽(アシカビ)などおほく用ひられしとなり

もえしもとは異本にはもしもとあり是則萌出る事を云成べしもしもといひては少心得がたき歟

是にすゝきとは薄の賞玩をいはんためなり　秋の野以下賞玩の詮を云なり　ほさきすはうとは薄の穗こがれ色なるをいふなり　さばかりの物やはある是迄秋の野最中の景をうつすなり　秋のはてそいと見所なきと云以下ははての秋霜がれの野風情

を述べられたり尤あはれなる詞なり　かしらいとしろくとはすゝきの穂の白く見ゆるを云也　かびろきたてる人にこそとはかろ〳〵しく取ひろげたる人の體に準られてそれにしもあはれますとなり　萩は色ふかくとは風情あさからぬ心をいふなり　小男鹿のわきてとはふるき歌などにも此風情をよみし事多し　からあふひとは今の世に日向葵といふ物なり　花の色はこからねど咲とは岩つゝじのさきし色をいふと云々又云花の色はこからねど咲と云は山吹にかゝる詞なりされど山吹をいふにあらずと云々　山吹には岩つゝじとはくらべていふ也岩つゝじは黄紅の花ひとへに咲よく山吹に似たるもの也　さうびとは薔薇なり人里ちかく有物なればちかくてと云なり　むつかしけれどゝは荊などありて枝茎のいとむつかしく見ゆるなり　水のつらとは岸などより池の面にしなひたる心なり　くろ木の橋とは皮つきの木にてわたしたる橋を云也これ迄みな草花の事をいふなり引歌ふる事次にしるす

(ナ)異名集云石竹撫子「唐國にありけることはいざしらず東のおくにさける石竹　むかし東國に鳥田の時主といふ勇士あり家の後の山に一つの石ありかの石に靈あり人をなやますかの時主件の石を射すなはち箭たち畢ぬこの花撫子也これは花かさなりてさくと云々　瞿麥ナデシコ和ノ是ナリ石竹ナデシコ唐ナルベシ　(ニ)靈魂志云何文者漢ノ人也有二一女子一容貌美幸夭薨閉目見二其塚一苗成二菊花一故名二菊花女一亦名二女苗花一新撰萬葉女倍芝ト書ケリ源順詩云花色如二蒸粟一　(イ)古今人の家なりける菊の花をうつしうへたりけるをよめる貫之「咲初し宿しかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ　(ロ)本草十三曰龍膽葉如二龍葵一味苦如レ膽因以爲レ名宿根黄白色下抽レ根十餘條類二牛膝一而短直上生レ苗高尺餘四月生レ葉如二嫩蒜一細莖如二小竹枝一七月開レ花如二牽牛花一作二鈴鐸狀一青碧色冬後結レ子苗便枯俗呼二草龍膽一又有二山龍膽一味苦濇其葉經二霜雪一不レ凋「りうたんの花の色こそ咲初れなべての秋は淺茅生のすゑ　(ハ)雁來草カマツカ俗或は葉雞冠といふものあり　(ニ)拾遺物名に　いせ「わたつみの沖なかに日のはなれ出てももゆと見ゆるはあまのいさりか　(ホ)此心をうけ

て夕がほの卷に云きりかけたつ物にいとあをやか
なるかづらのこゝちよげにはひかゝれるにしろき
花ぞをのれひとりゑみのまゆひらけたる遠方人に
物申とひとりごちたまふを御隨身ついゐてかの白
くさけるをなん夕がほと申侍る花の名はひとめき
てかうあやしき垣根になん咲侍ると申云々下略
(ト)すゝきをしなみふれるあは雪ともよみますほ
のすゝきともよめりほさきすはうの意は長明無名
抄にも書り　(◎)古今に　平貞文「今よりは植て
だに見じ花すゝきほに出る秋はわびしかりけり
(チ)髮のすそなどのみだれたるやうのていを云な
り　(リ)萬葉に　家持「我岡に小男鹿きなく初萩
のはなつまとひにき鳴小をじか　後撰にいはくあ
きのうたとて　つらゆき「行かへり折てかざゝん
朝な〳〵鹿立ならすのべのあき萩　同　貫之「小
男鹿の立ならすをの、秋萩にをける白露我もけぬ
べし　(ヌ)千載に　基俊「あふひ草てる日は神の
心哉影さすかたにまつなびくらん　此歌は後の歌
なれども本文の心によくかなひ侍るゆへしるすな
り　今も青柳にあしを用て作れるなり

卌五段　集は、(ヲ)古萬葉集、(ワ)古今、(カ)後撰　此段は和歌

の集のいみじきをしるされたり凡古より和歌の集
は私にも撰び家のをも集め勅を奉りてゑらびなど
する事世々にふりたりされはそれらの中に勅撰こ
そいみじけれと也勅撰の中にも此三代集は就レ中
いみじきと也　集はとは是例の題也　古萬葉集と
は萬葉集は三代に首尾せしにより最初の集を古萬
葉集云也眞名序云平城天子詔ニ侍臣ニ令レ撰ニ萬葉集一
云々玄覺律師云是則相ニ當大同御時一乎或人云此集
者聖武天皇御時之撰歟其故者彼帝御時和歌盛興之
由見ニ古今序一隨能令レ作ニ和歌一又天平元年正月十
四日奏ニ諸歌一云々如ニ此等一者聖武御時相當但至ニ
平城之號一者凡以ニ聖武幷桓武大同之朝一號ニ平城
帝一也見ニ國史一云々今既有ニ如レ此明證一何又背レ之
好立ニ異儀一還懷ニ迷惑一乎　次撰者或稱ニ山上臣憶
良一或稱ニ橘大臣一或稱ニ藤原眞楯一或稱ニ大伴家持一云
々凡萬葉集の時代撰者等先達の評論まち〳〵に侍
れ共文段ながければ略之也委は教長卿の注仙覺の
抄家々の傳授切紙などを考てしるべき也　古今と
は仲實古今目錄云延喜五年四月十八日卷軸肇就以
備ニ叡覽一眞名序云詔ニ大内記紀友則御書所預紀貫

之前甲斐少目凡河内躬恒右衛門府生壬生忠岑等各獻ニ家集並古來舊歌一曰ニ續萬葉集一於レ是重有レ詔部ニ類所レ奉之歌一勅爲ニ二十卷一名曰ニ古今和歌集一云々これにも奏覽日限異說侍れどもしばらく略之

後撰とは後拾遺集序云むらかみのかしこき御よにはまた古今和歌集にいらざる歌はた卷をえらびいでゝ後撰集となづく云々　中納言入道抄云於ニ昭陽舍ニ被レ撰レ之時被レ下ニ宣旨ニ云謙德公藏人少將奉レ行云々天曆五年辛亥十月於ニ梨壺ニ以ニ藏人少將伊尹ニ爲ニ和歌所別當ニ和歌所根元是也坂上望城源順紀時文大中臣能宣淸原元輔等撰レ之奏覽日無ニ所見一

(▽)拾芥抄云萬葉集廿卷四千三百十五首長歌二百五十此內也或說與五十首或二人部立錯亂不レ定奈良天皇御宇左大臣橘諸兄公撰レ之私勘左大辨家持同撰レ之聖武天皇勅云々　京極中納言入道抄云時代事近代歌仙等多雖有ニ喧嘩相論事等ニ云々撰者又無ニ慥說ニ先達疑殆の事を今更に決すべきにはあらね共愚案兼て了簡せしは時代は聖武の勅製也平城をならと申す流例繁多也其上聖武の朝の證例數々也今且略之又撰者は橘諸兄大伴家持兩人の撰と心得てまし此外說々是非得失いまだ不分明也

(ロ)貫之集ニ云延喜の御時やまと歌しれる人はいまむかしの歌たてまつらしめ給ひて承香殿のひんがしなるところにてえらばしめ給ふ云々　拾芥云古今集廿卷千百首或千九十九首云々榮花物語云むかし高野女帝の御代天平勝寶五年には左大臣橘諸兄卿諸卿大夫にあつまりて萬葉集をえらばせ給ひだいこの先帝の御時は古今廿卷えりとゝのへさせ給ひて世にめでたくせさせ給ふ只今迄廿よ年なりいにしへのいまのふるきあたらしき歌えりとゝのへさせ給ひて世にめでたうせさせ給ふ此御時には其古今にいらぬ歌をむかしのも今のも撰せさせ給ひて後にせんすとて後撰集といふ名をつけさせ給ひて又廿卷せむせさせ給ひけるぞかし云々下略

(◎)拾芥云後撰集廿卷千四百二十首或千三百五十六首

卅六段 歌の題は、みやこ、くず、みくり、こま、あられ、さゝ、つぼすみれ、ひかげ、こも、たかせ、をし、淺茅、しば、あをつゝら、なし、なつめ、あさかほ　此段は歌の題をしるされたり抑歌の題はあまた侍るを是のみこゝに擧られたる事いかにと

をしはかるべし今こゝに擧られたる題は則前段萬葉古今などの中にある題のむづかしきを知せたる也　前段のうつりにて侍ればおもしろきつゞき也

▲都萬葉八十一十三十八後撰ニモ讀り　▲葛　同十二廿に有古今後撰にも有　▲莎草　同斷　▲駒　萬葉十一　▲霞　萬一古廿　▲篠　萬二七古　▲壺菫　萬八十七　▲日陰　萬四　▲薦　萬十一古後ニモ　▲高瀬　萬　古　後　▲鴛鴦　萬廿　後　▲淺茅萬六七十　▲芝　萬　後　▲青鞭草萬　▲梨　古今　▲棗　古今　▲槿　後撰

【卅七段】おぼつかなきもの、十二年の山ごもりのほうしの、女おやしらぬ所に、やみなるにいきたるに、あらはにもぞあるとて、火をもともさで、さすがになみゐたる、今いできたるものの、心もしらぬに、やむごとなき物もたせて、人のがりやりたるに、おそくかへる、ものいはぬ兒の、そりくつがへりて、人にもいたかれずなきたる、くらきに、いちごくゐたる、人のかほしらぬ物見　此段は詞すくなう侍れば心もしれやすしおぼつかなき物とは常段の題也俗に心もとなきなど云義也　十二年の山こもりとは山門におゐて三年の山こもり十二年の山ごもりと云事あり　めおやとは母親也　しらぬ所とはひそかなる所といふ義也　火をもともさでとは幽なる灯などは侍れども燭などはあきらかにたてぬ心成べし是則人の見るめおぼつかなかるべし　いまいてきたるものとは今將て來者也いてのて文字すんでよむべし人の勾引して來るいままいりの事也　やんごとなきものとは大切なる物の心也尤おぼつかなかるべし　ものいはぬ兒とは二三歳迄のみどり子也まことにやるせなくおぼつかなきもの也少納言の恩愛仁心おもひやられ侍る　くらきにいちごくひたるとは蟲なども侍り或はいばらなども侍れば云にやかやうの物おほく有べきを此いちごのみにかぎりてしるされしは心あるべし又くらき時はいづれの事もおぼつかなかるべし然ども此段の文のいきほひ食事の大切なる物をいふとして兒のつゞきにて侍ればいちごをいはれしは宜成べし

【卅八段】たとしへなきもの、夏と冬と、夜とひると、雨ふると日てると、わかきと老たると、人のわらふ

とはらたつと、黒と白と、(ア)あゐときはだと、雨と霧と、火と水と、肥たる人痩たる人、髪ながき人と短き人、おもふ人とにくむ人と、おなじ人ながらも、心ざしある折とかはりたる折は、まことにこと人とぞおぼゆる　此段は心あきらかに侍れども詞おほき故に五節にわけて見るべし　たとしへなきとは譬なき也相違の心也則當段の題也就中此一節はかれこれとりあはせていふなり心おのづから明か也

(ア)藍アヰ黄栢キハダ

ときは木おほかる所に、からすのねて、夜なかばかりに、いねさはがしく落まろび、木つたひてねをびれたる、かた聲になきたるこそ、ひるのみゐめにはたがひておかしけれ　第二節からすの愛なきものにも夜晝の折にふれ時によりておかしき事も侍ればその愛なき時とおかしき折とのたとしへなきをしらせたり

忍びたる所には、(イ)なつこそおかしけれ、いみじうみじかき夜の、(十)いとはかなく明ぬるに、露ねずなりぬ夜ぞ、よろづみな明ながらなれば、すゞしう見わたされたり、猶今すこしいふべき事のあれば、かたみにいらへなどするほどに、たゞゐたるうへより、(ロ)からすのたかくなきて、ゆくこそ、いとけ(ヘ)ぜうなる心ちして、おかしけれ　第三節夏のあつきに夜の涼しさのたとしへなき心を云なり又前節からすの事をいひしうつりにこゝにも折にふれからすのおかしき心を云なり　忍びたる所にとは此一句肝要也夏の夜ははかなくみじかう思ふに露いねずして明がたすゞしきをもしりなどするはつねの事には更にあるべからずたゞ此わりなきいもせの忍び路にのみ侍るといふの心を書て其あいだにことぐ\くたとしへなき義をあらはしたり

(イ)夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月宿るらんなどよめば殊に忍ぶかたにてはいとゝおかしかるべし(十)朗詠に　人丸「夏の夜はねぬに明ぬといひ置し人は物をや思はさりけん

(ロ)萬葉十二「朝からすはやくな鳴そわがせこがあさけの姿見れば悲しき(ヘ)顯證あらはなる義也

又冬の夜、いみじくさむきに、おもふ人と、うづもれふして聞に、かねの音のたゞ物のそこなるやうに、聞ゆるもおかし、鳥のこゑも、はじめははねのうちに口

をこめながらなければ、ものふかくとをきが、つぎづぎになるまゝには、近く聞ゆるもおかし　第四節又の字心をつけ見るべし前段に夏の事をいひしゆへ此所には又冬の事をいふ是則第一節に夏と冬といひしたとしへなきもの、心ををしひろめ云義なり　いみじくさむきにとは此一句肝要なり堪がたき寒苦をもしのぐは情の道のみなり　うづもれふしとは宿直物にうづもれながらといふ心なり　かねの音とはかねはしも夜にさえ聞ゆる物なれば寒夜のたへがたき心もしられ侍る也　鳥のこゑもとはかのきつにはめなてとよみしごとくうるさき心侍れば此段の初にわらふとはらたつとにくむとおもふ人といひし詞によく相應の心也みな是そこにたとしへなき義を一々こめて云也　つぎ〳〵なるまゝにとはわりなき心のたとしへなき義をしらせたり

けさう人にてきたるは、いふべきにあらず、たゞうちかたらふも、又さしもあらねど、をのづからきなどする人の、簾の内にてあまた人々ゐて、物などいふに、いりてとみに歸りけもなきを、ともなるおのこわらはなど、さしのぞきけしきみるに、(一)をのゝえもくちぬべきなめりと、いとむつかしかめれば、ながやかに打あくびて、みそかにとおもひていふらめども、(二)あなわびし、ぼんなうくなうかな、いまは夜半に
はなりぬらんなどいひたる、(三)いみじう心つきなし、かの云ものは、ともかくもおぼへず、此ゐたる人こそ、おかしう、見聞つる事も、うするやうにおぼゆれ、又さばと、色に出ては、えいはずあると、たかやかにうちいひ、うめきたるも、(四)下行水のほどいとおかし、たてしとみ、すひがいのもとにて、雨ふりぬべしなど聞へたるもいとにくし、よき人公達などのともなどのほどはよろし、それよりくだれるきはゝ、みなさやうにぞある、あまたあらん中にも、心ばへ見てぞ、ゐてありかまほしき、

第五節是又おもふ人とにくむ人とのたとしへなき事をいひ且亦人をつかひ人につかはる心ばへををしへたり　いふべきにあらずとはけさうの人は必ず長ゐするものなればいふに及ばぬと極めたる義なり　たゞうちかたらふとは何となくつねていの友の事なり　又さしもあらねどゝは常の友のごと

くにはあらでかり初をとづれなどに立入人の事なり　さしのぞきとは簾の内を見る心なり　をのゝえもくちぬべきとはまつ間のひさしきをいはんためなりかの晋の王質がをのゝえもくつるばかり程へしがごとく久しきとなり　いとむつかしかめれとは簾の内の人の長居を供の者が苦む心也　ながやかに打あくびとは供の者が退屈して欠(アクビ)するさま也　みそかにとはひそかに供の者がつぶやきいふとなり　ぼんなうくなうかなとは下々のいふ詞よくうつしえられたり誠に如此に侍る也　見聞つる事もうするとは供の者がくるしむを聞て見つ聞つせし輿もさめうせたるやうに侍ると也　又さはとは又或供の者はさばかり色に出し口にあらはしていはず下心にせかれおもふ者もあると也　たかやかにとは前のぼんなうくなうなどゝいひしものをさして云也　畢竟いふもいはぬも共にせかるゝ心ぞとなり　下行水とはわきかへりせきあまる心ぞと也　雨ふりぬべしとは供の者が口々に主を早くかへらせんとて雨もふりぬべしなどいふ心なりともなどのほどはよろしとはさのみ悪口もいはずしとやかに侍るとなり　それよりくだれるとは諸衛のすけ受領の人などの供はみな〳〵前のごとくいやしくみだれがはしき事を云となり　あまたあらんとは、地の詞也召つかふ人あまたあらん中にも心ばへを見とゞけて供にはつれらるべき事ぞといひをしへたり上より此かたすべてたとしへなき心はなれ侍らずよく〳〵味べし

(▲)霊異記云王質石室山見數童子圍碁與質一物如棗核人含之不飢局未終斧柯爛盡既歸無復時人云々　(⊙)煩悩苦悩ボンナウクナウくるしむ心也　(卍)源氏引歌に　心には下行水のわきかへりいはでおもふぞいふにまされり

卅九段　ありがたきもの、しうとにほめらるゝむこ、又しうとめにおもはるゝよめの君、ものよくぬくるしろがねのけぬき、しうそしらぬ、人のずさ、露のくせかたはなくて、かたちこゝろさまもすぐれて、世にあるほどいさゝかのきずなき人、おなじ所にすむ人の、かたみにはぢかはしたるとおもふが、つゐに見へぬこそかたけれ、物語集など書うつすに本にすみつけぬこと、よきさうしなどは、いみじく心してかけ

ども、かならずこそ、きたなげになるめれ。男女をばいはじ、女どち契深くしてかたらふ人の、中よき人難し、つかひよきずむざか、ひねりうたせたるに、(ヒ)あなめでたと見へてをこせ　此段は詞おほく侍れば心見わけがたくて事まぎらはしう侍ればよく心をとゞめて文段を味ふべし凡下のかならずまいり給ふといふ迄當段の內也　其中におゐて例のごとく五節にわかちて釋し侍る也就中此一節はありがたき事をとりあつめ云也ありがたきものとは當段の題也難レ有と云義也まれ〳〵なる心を云也　しうとゝは舅也　しうとめとは姑也　しろがねのけぬきとははがねのなきはぬけぬもの也　しうとは主君也　ずさは從者也　つゆのくせかたはとは露程も僻片輪なき也世にあるほどとは世にながらへある程也又云世間にある程の人と云義也　おなじ所にとは傍輩あるひは友どちなどの心成べし　かたみにはぢかはしとはたがひにたしなみはじらふ心也　つゐに見へぬこそかたけれとはわが本情のさがのつゐに露計も見へぬこそ有がたけれと也　物語とはこまの〻物語竹取の物語のたぐひを云也

集とは萬葉集古今集などのたぐひ也　本にとは正本にても寫本にても墨のつきやすきもの也　男女をばいはじとは男女の中はいふに及ばずと也又云男女の中の契はすゑとぐるめればさしをいていはずと也　女どちとは女房達の互にあひかはらずしたしき事はありがたきと也　つかひよきずさかとはよく心にしたがふ從者なり　ひねりうたせとは手足などをひねりうたする事也　これもまれ成事なり

(ヒ)葵卷にわが御かたにわたり給ひて中將の君といふに御あしなど餘りすさびておほとのごもりぬとあるもこゝの心をうけてかゝれし成べし

內のつぼね、ほそ殿は、いみじうおかし、かみの小蔀あけたれば、風いみじう吹入て、夏もいとすゞし冬は雪あられなどの風にたぐひて入たるも、いとおかし、せばくて、わらはべなどののほりゐたるも、あしければ、屛風のうしろなどに、かくしすへたれば、こと所のやうに、聲たかく笑ひなどもせでいとよし、晝などもたゆまず、心つかひせらる、よるはまいて、いさゝかうちとくべきやうもなきが、いとお

かしきなり、沓の音の夜一よ聞ゆるが、とゞまりてたゞおよびひとつしてたゝくが、その人なり、問ふと聞ゆるこそ、おかしけれ、いとひさしうたゝくに、をともせねば、ねいりにたるとやおもふらんとねたく、すこし打身じろくをと、きぬのけはひも、さなゝなりとおもふらんかし、あふきなどつかふもしるし、冬は火桶に、やをらたつる火箸のをとも、忍びたると聞ゆるを、いとゞたゝき、はらへば、聲にてもいふに、かげながらすべりよりて聞時もあり、又あまたの聲にて、詩をずし歌などうたふには、たゝかねどまづあけたれば、こゝへとしも思はざりける人も、立とまりぬ、いるべきやうもなくて、立あかすもおかし、御簾のいと(○)青くおかしげなるに、几帳のかたびらいとあざやかに、すそのつますこし打かさなりて見へたるに、なをしのうしろに、ほころびたへずきたる、公達六位の藏人の、あを色などきてう(ア)けばりて、遣戸のもとなどにそばよせてえたてらず、へいのかたにうしろをして、袖打あはせて立たるこそおかしけれ、又指貫いとこう直衣のあざやかにて、色々の衣どもこぼしいでたる人の簾ををしいれて、なから入たるやうなるも、外より見るは、いとおかしからんを、いときよげなる硯ひきよせて文かき、もしは鏡こひて、びんなどかきなをしたるは、すべておかし、三尺の几帳をたてたるに、もかうのしもは、たゞすこしぞある、外にたてる人と、内にゐたる人と、物いふかほのもとにいとにくゝあたりたるこそ、おかしけれ、(▲)たけのいとたかく、みじかからん人などやいかゞあらん、なをよのつねの人はさのみあらん　第二節殿上にて夏冬夜晝などの折ふしにつけつゝありがたきよそほひ或は内のやむごとなき人々のけはひなどの有がたき事共を云也　内つぼねほそ殿とは中宮女御のまします御つぼね也前に見へたり　ほそ殿は廊下也　夏もいとすゞしとは冬はことの外寒き心也夏の甚あつき時もすゞしきと也　冬は雪あられとは夏のみならず冬もいみじく面白き事有ぞと也　せばくてとはほそ殿の心をうけて云也

わらはべなどののぼりとはとのも司下わらはなどのまいり居る義也　かくしすへたればとは忍びてかくすにはあらず前にいひしごとくみかはやう人などはうへつかたにかくれ侍るゆへ今のわらは

のかくるゝも此心なり　こと所のやうにとは廣き所にてはこゑ高に笑ひ物語などもする也このつぼねほそ殿はせばければこと所のやうにこゑ高にならてよく侍ると也　ひるもたゆまずとは以下はわらはの伺公して油斷せぬ事を云也　夜一よ聞ゆるがとゞまりてとは夜の靜なるよそほひをいはんため也　たゞおよひしてとは是より御つぼねへ人の訪ひ來るありさまを云也　その人なりとは訪ひ來るは何がしなるべしと內にゐる人のはかりしれる由也　いと久しうたゝくにとは訪ひ來る人の意也　おもふらんとねたくとは內なる人の心也　媚ましくおもふらんと也　すこし打身じろくとは內なる人のしつまりゐれ共身じろく音は外へも聞ゆらんと也　あふぎ以下も內にしづまりゐる人のけはひを云也　いとゞたゞきとは來りし人のひたすらたゝくと也　はらへばとはせきばらひなどする心也　聲にてもいふとは初は外を憚りゆびにてたゝき次にはせきばらひなどすれども心つよくあけぬ故にたへかねてこゑにてもいふと也　かげながらすべりよりとは內の人の戸をあけずして聞居義也

是迄は人の音信折しづまりかへりてはありかたきものなるによく靜にして居るは、尤まれ成と云義を書り又あまたの聲にて以下はこと心を云なり詩をずし歌うたふ賑はしき所をすぐる時はよばぬとても入ずして見過しがたきとなり前の心とうらおもてなり前はそこへと心ざし來て扣どもあけず爰は思よらで通る時にこのましげにうたひ遊ぶ故過がてにて立とまる義なり是則見過す人はありがたき心をいふなり　いりぬべきやうもなくとは知音ならざるは勿論たとひ知音なりとてもよばぬ所へは入べきやうなしこのゆへにこゝへとしも思はざりける人と云也　みすの以下は御局の押出のいみじきほどに公達藏人などのたゝすまふけはひのありがたき事を云也　几帳のかたびらとは冬は絹をかけ夏はかたびらをかけらるゝ也　すそのつまとは押出など也　なをしとは公達藏人の裝束を云也　うけばりとは仰付らるゝ事をうけがふさま也

またさしぬきいとこうと云より以下は簾の內へせうそこいひ入る事などを書り　指貫いとこうあざやかとは消息申入給ふ公達の裝束をいふなり　色々のとは公達のけはひを云なり　とよりみると

は、外より見るなりかたはらより見る義なり　いときよげなると云よりは簾の内の女房のけはひを云なり又云簾をし入たる人のけはひと見ても通ずべし。もかうとは帽額なり簾にも注に侍るなり　にくゝあたりとは内外の人几帳のきはに立て物いふ時人のかほにあたると也　よのつねの人とはせいのたかゝらずひきからず大底の人といふ義なり　さのみぞあらんとはよのつねの人のみなれば顔にあたりがちなるぞとなり

(〇)四月一日に御簾をかけかへ奉る也青ばのすなどよむは此事なり　今夏の心をいふによりてあをくおかしと云なり　(ア)諸ウケバル受張ウケバル相當の心を云なり(▲)春長高き人と短き人立向ひて物語せんはいかゞあらんと云儀もあり

まいて臨時(チ)の祭の(カ)でうがくなどは、いみじうおかし、(キ)主殿の官人などの、ながき松をたかくともして、くびはひき入てゆけば、さきはさしつけつばかりなるとおかしう、あそび(ク)笛ふきたてゝ、心ことに思ひたるに、公達の、日のさうぞくして、たちとまり物いひなどするに、供の随身どもの、さきをしのびやかにみじかう、己が公達のれうにをひたるも、あそびにまじりて、つねに似ずおかしう聞ゆ、なをあけながら歸るを、まつに、公達のこゑにて、あらたにをふる(ヌ)とみ草の花とうたひたる、(コ)此たびは、いますこしおかしきに、いかなるまめ人にかあらん、すくゝゝしう、さしあゆみていぬるもあれば、わらふを、しばしやなど、さ、夜をすてゝいそぎ給ふ、とありなどいへば、こゝちなどやあしからん、たふれぬばかり、もし人などやをひてとらふると見ゆるまで、まどひ出るもあり　第三節臨時祭のでうがくの職事舞人などの事をいふなりいづれもゝゝめでたくつねにありがたき事どもなり　でうがくとは賀茂八幡の臨時祭のでうがくなり尚次注に委注之　ながき松とは松明なり　くびはひき入とは賀茂のは霜月にて寒き比なれば其さむきさまをいふ成べし　さきはさしつけつばかりとは松明のさきもしかゝゝ見廻はさねば物にさしつかんとするをもしらぬてい也　笛ふきたてゝとは試樂のさまをいふなり　心ことにとは樂はいつも侍れ共臨時の御神樂とあれば常のより心こと成と也　公達のとは試樂の舞人にま

いり給ふ人々なり　つねにゝずとは常のありきに警蹕するよりもけふは花やかにはへありて見ゆるとなり　なをあけながらとは終夜の神事にて侍ればあけがたにみな〳〵歸給ふなり　あらたにおふる富草の花とはうたひものなるべし未考　此たびとは此舞の番にはおもしろかりしと也　わらふとはまめ人のはやくまかづるをわらふ心也　しばしやなどさ夜をすてゝとは同じ舞人のとゞむる義也しばしやと句を切べしなどさ句を切べしなどさやうにとゞむる心なり　夜をすてゝはいまだ明はてもせでといふ義なり　と有などいへばとは地の詞なりこゝちなどやとはいで行まめ人を云なりなにとやらん心地あしくたふるゝやうに見るとなりれぬのぬ文字畢ぬ也　もし人などやとは地の詞なりあはてゝまかづるさまは若とらへんとて人の追をにぐるやうにとび出てまかづると也

(ヲ)大鏡云式部卿の宮の侍從と申ぞ寛平の天皇常に狩を好ませおはしましゝ御供にはしりまいりて侍り賀茂のつゝみのそこ〳〵なるに侍從殿鷹使せ給ひていみじう興にいらせ給へる程に俄かに霧立て世間くらがりて東西も覺へずくれのいぬるとやとおぼへてやぶの中にたふれふしてゐなゝきまどひ候ほどに時中ばかりや侍りけん後にぞ承ればかもの明神あらはれおはしまして侍從殿に物申させおはしましける程なりけり其ことはよに自記し置れて侍るなれば中々申さじしろしめされたらむあはそかに申べきにも侍らず扨後六年ばかり有てかもの臨時の祭はじまりけん位につかせおはしましゝ年ぞおぼへ侍る其日酉の日にて侍りければやがて霜月のはての酉の日にては侍るぞ云々猶九卷注有　(カ)公事根源云先祭日に試樂調樂など云事有當日の儀式御禊庭の座など石清水に同じ社頭の義はてゝ使舞人歸參てかへり立の儀有孫廂に御障子をたつ御引直衣に御草鞋をめす額間より出御させ給ふ階の間の通の庭南北二行に座をしきて使舞人つくうしろに本末の神樂の所作人陪從近衛召人つく出御有て公卿めしあれば簀子長階に候す階の下に頭已下つきて使舞人をめす勸盃ありて神樂有庭燎より初てあさくら其駒までうたふ庭火にももろ歌あるべければ人長さはうあり御神樂はてゝ

綠ある云々江次第に詳にのせられ侍れ共事長く侍ればしるしがたし此ゆへ略して公事根源ばかりしるし侍るなり　(キ)職員令云主殿寮頭一人掌供御輿輦蓋笠繖扇帷帳湯沐洒掃殿庭及燈燭松柴炭燎等事助一人允一人大屬一人少屬一人殿部四十人使部二十人直丁二人駈使丁八十人　江次第云若及昏黑者主殿官人奉炬火於庭中相分入自瀧口弁仙華門　(ク)大鏡云一條院の御時の臨時祭に御前のことはてゝ上達部たちの物見に出給ひしに外記のすみの程過させ給とてわざとはなくて口すさびのやうにうたはせ給ひしが中々いまに侍りしとみ草の花手につみいれて宮へまいらんのほどを例のにはかはりたるやうに承りしかばとをき程に老のひがみゝにこそはとおもひ給へしを此按察の大納言殿もしかぞの給はせける殿上人にてありしかば遠くてよくもきかざりきかはりたる笙のめづらしうさまかはりておぼへしはあの殿の御事なりしかばにや又もきかまほしかりしかとさもなくてやみにしこそ今に口おしくおぼゆれとこそのたまふなれ此大臣殿たちの御おとゝ大納言いうにおはしましき云々大かたそのほどにはかたぐ\につけつゝいみじき人々のおはしましゝ物をやといへば此頃もさやうの人はおはしまさずやはあるとさぶらひのいへば此四人の大納言達よ齊信公任行成俊賢など中君達は又さらなり云々これらの同時代の事共考へ見ればば本文の心も明めやすく又此枕双紙の實記なる事も猶證明にしれ侍るなり本文と此大鏡とよく引合て味はふべし　(ケ)十五體通云とみ草とよみ草いづれも稲の事にて候云々　又藻鹽に檜下云富草但稲をも藏玉にやがて富草とかけりされ共いねはとくさとよみ是はとみ草とよめり云々　(コ)成恩寺殿云まめなると云詞又まめ人などいへるは皆實なる心なり

しきの御ざうしにおはしますころ、木立などはるかに物ふり、やのさまもたかうけとをけれど、すゞろにおかしうおぼゆ、母屋はおにありとて、南へへだて出して、みなみのひさしに、御木丁たてゝ、またひさしに女房はさふらふ、近衛の御門より、左衛門の陣に參り給ふ、(天)上達部(小)のさきども、殿上人のは、みじかければ、おほさき、こさきと、きゝつけてさは

ぐ丶あまた丶びになれば、その聲ども丶みな聞しられて、それかれぞといふに、又あらずなどいへば、人して見せなどするに、いひあてたるは、さればこそなどいふもおかし　第四節中宮のしきの御曹司におはしまして女房達をめし興せさせ給ふ事のいみじくありがたきさまを云なり　しきの御ざうし前に注す　おはしますとは中宮の御座す比なり　木立とは前栽のけしきを云なり　やのさまとは御殿のよそほひを云也　母屋にはおにありとはおくふかうたてこめし所などには鬼ありとて女房わらはなどのをそる丶事有ものなり　またひさしにとは南おもての御殿に木丁をたて丶又その庇にみなみな居給ふ心也母屋をそれてはしゐにちかよる義なり　近衛の御門とは上達部のまうのぼり給ふ道すぢ也　左衛門陣前に注す　みじかければとはさきをふ聲みじかきとなり　おほさきこさきとは本府の随身と小随身との品をいふ也前にも詳に注す　あまた丶びになればとは公事のたび／＼さきをふ事侍れば下々も馴て聞しりそれがしのさき聲ぞくれがしのさき聲など口々にいひはかる義なり又云

それかれぞとは女房達のいひはかり給ふ義なり
人して見せとははからふばかりにては實否決しがたき故人を見せにやる義なり
(大)おほさきとは本府の随身など御免ありて所せくみありきのをもだ丶しくさきをふ事を云也
(小)こさきは小随身ばかりつれらる丶公達のはふれにたるさまにさきをふ事を云也　▲また　或本にまごびさしトアリ

有明のいみじう、きりわたりたる庭に、をりてありくを聞召て、御前にもおきさせ給へり、うへなる人々のかぎりは、をりなどしてあそぶに、やう／＼あけもてゆく、左衛門陣にまかり、見んとてゆけば、われも／＼とをひつきてゆくに、殿上人あまた聲して、なにがし、一聲秋とずして參る音すれば、にげ入て物などいふ、月を見給ひけりなどめで丶、歌よむもあり、夜も晝も殿上人のたゆる折なし、上達部まかでまいり給ふに、おぼろけにいそぐ事なきは、かならずまいり給ふ　第五節大かた前節と同じ心なり夜も晝もいみじうめでたき心をのべて當段ありがたきといふ本意を結ぶなり　きりわたりたる庭とはしきの御ざうしの南庭也　御前とは中宮なり　うへなる

人々とは內にさふらふ人々をさしてすべてうへなる人々と云也此中に中宮の女房達もこもり侍る　左衞門陣とは公事にまうのぼる人或は調樂などはてゝまかづる人を見ると也　殿上人あまた聲してとは調樂の舞人の聲あまた聞ゆる中に何がしとかやいふ人と云義也　一聲秋とは何がし殿のうたひ給ふ詩なり　にげ入て物などいふとは左衞門陣へ見に行たりし女房が殿上人のずし參らるゝを聞て御ざうしへにげ入そのやうすを申心なり　月を見給ひけりなどとは參る殿上人に女房がとひかけし義なり　めでゝ歌よむもありとは殿上人がめでゝ月を見たる由の歌よむと也　たゆる折なしとは中宮のましまず御ざうしへまいり給ひて興じにぎはひ給ふとなり　まかでまいり給ふとは公事はてゝまかで給ふ時も公事にまうのぼり給ふ折も御ざうしへまいり給ふとなり　おぼろけにいそぐ事なきはかならずまいり給ふとは少々の事の分にてはかならずまづ御ざうしへ參り給ふとなりみなこれ中宮の時めき給ふありがたきさまをいふ也少納言も此時にあひ奉り君臣上下目出度ありがたき體也

(〇)江談云池冷水無三伏夏松高風有一聲秋　朗詠云夏日閑避暑源英明云々朗詠の題の詩を今こゝへ誦せられしとなりいにしへは如此の名詩は折節の興にうたひたるとなり去ば朗詠も其いにしへよりのうたいし詩歌を公任後にあつめられし也

四十段　(一)あぢきなきもの、　わざとおもひたちて、みやづかへに出立たる人の、　ものうがりてうるさげに思ひたる、人にもいはれむつかしき事もあれば、いかでか、まかでなんといふことぐさをして、出ておやをうらめしければ、　また參なんといふよ、とり子の、かほにくさげなる、しぶ〱におもひたる人を、しのびて聟にとりて、　おもふさまならずと　なげく人　此段は詞すくなうして心もあきらかなり　あぢきなきとは當段の題なりくるしみ悔る心なりすべて當段此心をいふ　わざと思ひたちとはすゝんで出る心也　ものうがりてとは宮つかへせずともあるべき程の人がわざとすゝみ出て宮つかふはものうきとおもふべしうるさげにおもひたるとはくるしみ悔る義なり　人にもいはれとは人にとかくいはるゝとなり　いかでまかでんとはもはややみやつかへに

まいるまじきと口ずさみなどいひすてゝさがる義なり　おやをうらめしければとはさがりまかで侍れ共さすがおやのもともすまひにくければ又宮づかへに參らんと云義なり心かろき人のさまなり心かろき人には必あぢきなき事がちなり　とり子とは養子などをいふなりこれも心かろき人のうへを云なりにくげなる貌は初に見へ侍る事なれ共かろ〴〵しう事とげては後あぢきなかるべし　じぶ〳〵に思たるとは初より心がゝりなれ共堪忍したる義也　なげく人とは親の心にあぢきなう思と也

（ア）无道 アヂキナシ 日本紀幷舊事紀　无狀 アヂキナシ 古語拾遺　神書の說に天下國家一人萬民まですべて道なくさがなき心にては國も家も亂れ身心やすからねば口に食すれ共心五味をわきまへぬゆへにあぢきなしと云也

【四十一段】いとをしげなきもの、人によみてとらせたる歌の、ほめらるゝ、されどそれはよし、とをありきする人の、（×）つぎ〳〵えんたづねて、文えんといはずれば、しりたる人のがり、なをざりにかきてやりたるに、なまいたはりなりと、はらたちて、返事もとらせで、◎むとくにいひなしたる　此段も心あきらかなり　いとをしげなきもの當段例の題なり强てにくむべき事にもあらず只假初に愛なき事をいふ也　人によみてとらせたる歌とは人の代作をよみてえさせたる心なり　ほめらるゝとは彼歌を他の人見てほむる義なりしかれども代作にてわがよまぬ歌なれば下心には愛なくうれしげなし　されどそれはよしとは此事はほめられてもさのみふかふ愛なきといふほどの事にはあらぬとなり　とをありきする人とは遠國へ下る人なり　つぎ〳〵えんたづねてとは下る國のつぎ〳〵に御ゆかりなど侍らば下る次手に文を屆むと云なり　文えんとは下る人とゞけんといひこす義なり　しりたる人とは友が知音へ文ことつくる義なり共文に下る人の事などたのむよし書てやるとなり　なまいたはりとは文得し人のおもはくなり彼文になをざりに書やれるを見てはら立おもひのぼる比は返事もやらずあまさへ無益の事に文をこせしなど愛なくいはれんはいとをしげなかるべし

（×）つぎ〳〵きの字濁てよむべし次第の心なり前

に委しく注せり（◎）むとく無徳也益なきとい
ふ心なり或云无足の通音なり詮なき心なり

【四十二段】心ちよげなるもの、卯杖のことぶき、神樂
の人長、池の蓮の村雨にあひたる、御靈會の馬おさ、
又御りやうゑのふりはた　此段は事はむつかしき事
侍れども心はあきらか也　心ちよげなるものとは
心いさみする義なり俗に氣味よきなどいふ心なり
是則例の當段の題也　卯杖の祝とは正月上卯日行
ひ給ふ公事なり誠に造物御杖のやういみじくめで
たう見へ侍れば尤心ちよげなるもの也　神樂の人
長とは內侍所の御神樂の事なり人長は神樂をつか
さどりをこなふ人なり委次に注す人長の鳴高など
いましめ才男めす次第いとこゝちよげ成ものなり
池の蓮のとは暑氣の比村雨をびたらん蓮はいか
ばかりすゞしくも心ちよからんとなり　御靈會は
祇薗の祭祀なり六月十四日にあり馬のおさとは走
馬勅樂など侍ればその走馬のおさは心ちよげなる
となり　又御りやうゑのふりはた今の世も祭禮に
鉾をさしてふる事なり祇薗の祭禮のさしほこは此
比五十年ばかり事たへ侍るなり古き町老たる人は
いまに覺へ侍る云々
（ヤ）卯杖の事は二卷すさまじき物いふ段にしるす
このゆへに略之　（マ）禁秘抄云自二一條院御時一十
二月有二御神樂一但多隔年行レ之近代毎年有レ之云々
江次第云次御拜兩段再拜女官引レ綱鳴レ鈴次主上
遷二御圓座一次將以二御劔一授二內侍一退下殿上人着
座本末着座次勸盃三獻頭以下相分勤レ之藏人所雜
色取二瓶子一次人長起行事先鳴高次名對面次人々令
起云々人長起召二才男一數人一々進奉仕畢人長退次
左井八利次朝倉地下陪從歌次其騎人長起舞此間人
長給二腰挿一云々又十二月次第略之（ケ）公事根源
云此祭の日は禁中はことなる事なし馬長などもよ
ほしつかはさるれども御覽はなし祇園の社は貞觀
十一年に託宣のこと有て山城國にはうつし奉りし
にや云々御靈會の時四條京極にて粟の御飯を奉る
蘇民將來の由緒とぞ承る是十四日也又臨時祭は十
五日なり圓融院の天祿元年御靈會始る下略

【四十三段】とりもてるもの、くゞつの小鳥、除目に
第一の國えたる人、御佛名の又の日、地獄繪の御屛
風とりわたして、宮に御らんせさせ給ふ、いみじう

ゆゝしき事、かぎりなし、これ見よ〳〵と仰らるれど、さらに見侍らじとて、ゆゝしさに、うへやにかくれふしぬ、雨いたうふりてつれ〴〵なりとて、殿上人うへの御つぼねにめして、御遊びあり、道方少納言琵琶いとめでたし濟政君のさうの琴、行成笛　經房少將の笙のふえなど、いとおもしろう、ひとわたり遊びて、琵琶ひきやみたるほどに、大納言殿の、琵琶のこゑやむて、物語せんとする事、をそしといふことを、ずし給へりしに、かくれふしたりしもおき出て、つみをそろしけれど、猶物のめでたきは、えやむまじとてわらはる、御こゝろのすぐれたるにはあらねど、折の殊更につくり出たるやうなりしなり　下の惡く

てやみにしかといふ迄當段の内なり六節にわけて釋し侍るなり今第一節とりあはせてとりもてるものをいふ也　とりもてるものとは賞玩の義也　くゞつの小鳥とは生ながらくゞつに入て送りたらんは賞玩成べし　除目に第一の國えたる人とは受領の國上中下大小の品あり其中よき人舊老を上の國の受領とする事なれば尤賞玩也　御佛名以下佛名の翌日御つぼねにて朗詠などの侍りし事を書り

地獄繪の御屛風とは御佛名の時たてられし屛風を取おさむる時中宮の御覽有と也地ごく繪とは地獄のかたを繪やうにせし成べし　これ見よ〳〵とは宮の女房達に仰らるゝ義也　うへやとは奥のみつぼねの事成べし　清少納言などやうの女房達也　雨いたうふり以下は御つぼねの御遊をいふ也　びはの聲やむて物語せんとする事とは詩をうたひ給ふとなり時に應じたる詩をずし給ふゆへいとゞ賞玩の心ぞと云義也　かくれふしたりしもとは初かくれし少納言女房などたへがたくおき出て聞となり　つみはをそろしとは初地ごくゑの屛風はゆゝしとて見ずして此管絃は面白きとておき出て聞によりつみをそろしといふ也　御こゝろのとは大納言殿のずし給ふ聲なり　折のことさらにとは琵琶のやみたる折しも其心をうたひ給ふゆへ此時ことさらにつくりたる詩のやうに有しと也

(キ)北山抄云十九日御佛名事今日以後三ケ日間擇吉日始行云々　江次第云承和十三年十月廿七日格白十二月十五日迄十七日三ケ夜云々仁壽三年十一月十三日格改定從十九日迄廿一日三ケ

夜云々貞觀十三年九月八日格應レ安二置一萬三千畫佛像七十二鋪一事元興寺大法師賢灌奏狀先師故律師靜安承和年中奉レ勅爲二國家一禮二拜佛名一始行二內裏一漸遍二天下一云々　裏書云佛名經曰若有二善男子善女人一聞二是三世三刧諸佛世尊名號一歡喜信樂云々寶龜五年十二月始行方廣悔二過於宮中一承和五年於二清涼殿一修二佛名懺悔一限以音靜安法師亦爲二道師一依二佛名經說一普禮二一切十方三世諸佛一三塗苦息國豊レ民云々下略　（ク）榮花物語云十二月の十九日になりぬれば御佛名とて地獄の繪の御屛風などとうでゝしつらふも目とゞまりあはれなるに折しも雪いみじうふりければをくりむかふといひをきたるもげにとおぼへたる云々　（ケ）職事補任云源道方正曆六年正月十一日補二少納言一從五位上云々　源氏系圖云

宇多天皇―敦實親王九宮―雅信號一條又鷹司―時仲絃管達人又鞠從二大納言號綾小路―濟政笛和琴箏郢曲鞠長母參木安親女長久二年卒
　　　　　　　　　　　―寬信
　　　　　　　　　　　―重信正二左大臣―致方
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　―道方正二民部卿中納言母師輔女長久五九出家

（コ）職事補任云源濟政長保二年正月廿七日阿波權守從五位下同四年二月卅日從四位下　（ナ）公卿補任云藤原行成故太政大臣伊尹公孫但爲レ子　右少將義孝一男母中納言源保光卿女永觀傳系圖略レ之大鏡有　（ニ）經房　次下注　（ヌ）大納言殿伊周公也　（ネ）白氏文集云潯陽江頭夜送レ客楓葉荻花秋瑟々主人下レ馬客在レ船擧レ酒欲レ飲無二管絃一醉不レ成レ歡慘將レ別別時茫々江浸レ月忽聞水上琵琶聲主人忘レ歸客不レ發尋レ聲暗問彈者誰琵琶聲停欲レ語遲

（ウ）頭中將の、そゞろなるそらごとを聞て、いみじういひおどし、なにしに人と思ひけんなど、殿上人にてもいみじうなんの給ふと聞にも、はづかしけれど、誠ならばこそあらめ、をのづから聞なをし給ひてんなど、わらひてあるに、（ク）黑戶のかたへなどわたるにも、聲などする折は、袖をふたぎて、つゆ見をこせず、いみじうにくみ給へば、（▲）ともかうもいはず、みもいれですぐす　第二節前につみはをそろしけれど猶物のめでたきはえやむまじと戲れいひしを頭中將の聞てまことゝ思ひ見かぎられたるをはづかしう思ふ由を書たり　そゞろなるそらごとゝは別にいひ

しつみはをそろしけれど猶物のめでたきはえやむまじとの詞をうけ云義なり　いみじういひおどしとは中將のおどさるゝなり地ごく繪の屛風はいみて音樂はめでたき物とおもふ人は後の世おそろしき事ぞといひておどしはぢしめる義也　なにしに人と思ひけんとは何とて人間を常住のものとおもふぞや四大假和合老少不定の身なる物をといひおどさるゝ義なり　聞にもはづかしけれどゝは女房達の心なり　誠ならばこそあらめとは眞實にいはゞこそおそろしくもはづかしくもあらめたはぶれしそらごとなれば中將の聞なをし給ふ事も侍らむと也　わたるにもとは女房達の行にもと云義也　聲などゝは中將のゐ給ひて聲のする時ははぢて袖にて顏などふたぎみやらぬよそほひなり　にくみ給へばとは中將のみかぎり給へばとかくの事も申されぬとはづかしくて打すぐる義なり
(ウ)勘物云齊信卿正暦五年八月廿八日藏人頭廿八長德二年四月廿四日任ニ參議ー卅　當段中將と云ふ所々は皆此齊信卿なり又源中將は經房なり各系圖下注す　▲又云此第二節には則光と少納言との中を頭中將のいひおどし給ふをそら言の給ふと斷たる由を書り　(ク)清涼殿の西北に藤壺有それへ通給ふ口を云にや大鏡云此時に藤壺のうへの御つほねの黑戶はあきたると聞侍るはまことにや又徒然草にも黑戶は小松御門位につかせ給ふて昔たゞ人におはしましゝ時まさな事せさせ給ひしを忘れ給はで常にいとなませける間なり御薪にすゝけたれば黑戶といふとぞ

二月つごもりがた、(ケ)雨いみじうふりて、つれ〳〵なるに御物いみにこもりて、さすがにさう〴〵しくこそあれ、物やいひにやらましとなんの給ふと、人々かたれど、よにあらじなどいらへてあるに、(コ)日一日しもにゐくらして參りたれば、夜のおとゞにいらせ給ひにけり、(サ)長押の下に火ちかく取よせて、さしつどひて、(シ)へんをぞつく、あなうれしとくおはせなど、見つけていへど、すさまじき心ちして、なにしにのぼりつらむとおぼゆ、すびつのもとに居たれば、又そこにあまたあつまりて、物などいふに、何がしさふらふと、いとはなやかにいふ、あやしくいつの間に何事のあるぞと、とはすれば、主殿司なり、只こゝ

もとに入つてならで申べき事なんといへば、さし出てとふに、是中將殿の奉らせ給ふ、御返事とくといふに、いみじくにくみ給ふに、いかなる文ならんとおもへど、たゞいまいそぎ見るべきにもあらねば、いね、今聞へんとて、ふところにひき入ていりぬ、なを人の物いふ聞などするに、則たちかへりきて、さらばそのありつる御文を給はりて、ことなん仰らるゝ、とく〳〵といふが、あやしくいせの物語なるやとて見ればあをきうすやうに、まんなに、いときよげに書給へり、心ときめきしつる御事にもあらざりけり

(セ)蘭省ノ(ス)花時錦ノ帳下と書て、すゑはいかに〳〵とあるをいかゞすべからん御前の御座さば御覽せさす(ツ)べきを、これがするしりがほに、たど〳〵しきまんなに書たらん、いと見ぐるしなど、思ひまはすほどもなく、せめまどはせば、たゞそのおくに、すびつにきえたるすみのあるして、

(ラ)草のいほりをたれかたつねん」とかきつけて、とらせつれど、又返事もいはず　第三節中宮御物いみの折まいりこもり給ふ女房達の御なぐさみ事をいふ又

中將殿より送られし詩に返歌ありし事などを書りそれを修理介とりもちて物語し又うへにも聞召をのこ達も扇にかきつけて持などし給ひ事をしるされたり詩歌の取かはし優に侍れば上下共にかくとりもたれしもことはりなるべし　御物いみとは中宮の御物いみなり　こもりてとは女房達が御伽にこもらるゝとなり　物やいひにやらましとは中宮の少納言が里にゐるゆへにせうそこ仰下されんとの給ひし由を女房達が少納言に語らるゝ義なり　人々かたれどゝはすなはち女房達のかたられしと也　よにあらじよにあらじなどいらへてあるにとは少納言の詞なりわれを中宮よりめされんと有し事を女房達ゝ語られしにさはあらじと少納言が女房達へいらへたるこゝろ也　日一日下にゐくらしてとは少納言みづからの事を云也　夜のおとゞにとは中宮の御寢なりたると也　さしつどひとは女房達の御よづめひけて寄あひ慰給ふと也　あなうれしとくおはせとは少納言を見てよろこぶ心也　すさまじき心ちとは少納言のおもはくなり中宮ははやく御寢なりてましまさぬにまいりしはけうと

く覺ゆるとなり　物などいふは物語するとなり　なにがしさふらふとは中將殿よりの使が案內をいふ義なり　あやし以下は女房達の心をいふなり　たゞこゝに以下は使の詞也　御かへりとくとは女房達の御返事をとく給はれと使がいふなり　いみじくにくみ給ふにいかなる文ならんとは頭の中將のにくみ給ふに何とて文給はらんとあやしがりて少納言のいはるゝ詞なり　いね今聞へんとは使にまづ歸れ今に此方より返事せんとなり　なを人の物いふ聞(き)などとは少納言の文ふところに入て奥へいられし跡にて使が又來りて返事を催促する義也　則たちかへりきて　とは使がかさねて返事の催促に來りし義なり　ことなんは返事なくば先の文をとりかへして來よと中將の仰らるゝと使がいふなり　あやしく以下は少納言の詞なり返事をいそぐゆへに何事ならんとあやしくおもふと也　心ときめきしつるさまにもあらざりけりとは初のごとくあやしう心ときめくやうにはあらで優に詩ををくれられしと也　蘭省花時とはをくられし詩也則頭書に記し侍るなり　いかゞはすべからんとは少納言の詞なり　御前のおはしまさばとは御寢なりし後なればかくいふ義なり　これがするとは返事のやうすを案ずる義なり　せめまどはせばとは使が返事を催促するとなり　草のいほりとは詩の心をうけて歌を返す義なり　たれかたづねむとは物いみにこもりさう〴〵しき折に人のとひ來ぬ心をもたせたり　又返事もいはずとに再報をせぬと也

(ケ)いせ物語に時は彌生のついたちあめそぼふると書り此折は春雨ふりしきるものなり　(コ)禁秘抄云夜御殿四方有ニ妻戸一南大妻戸一間也帳同ニ清涼殿一枕東疊御座敷也御枕有ニ二階一奉レ安ニ御劔神璽一ヲ皆有レ覆蘇芳也御劔東南帳四角有ニ灯樓一又帳南西北敷レ疊爲ニ女房座一　上御局夜御殿みな清涼殿の中の間なり　(サ)承塵　長押ナゲシ上下にあり今は下の長押成べし　(シ)逍遙院殿說云文字のつくりと篇とをわけてつくりをかくして篇を以て何といふ文字といひあつるをいふと云々　(セ)白氏文集十七云廬山草堂夜雨獨宿寄ニ牛二李七庚三十二員外一丹霄携レ手三君子白髮垂レ頭一病翁蘭省花時錦帳下廬山雨夜草庵中終レ身膠漆心應レ在半レ路雲泥迹

不レ同唯有二無生三昧觀一榮枯一照兩成空　此詩は白樂天廬山の草堂に雨夜獨宿して都の友に寄られし詩なりかの友人の都にありて朝につかへ榮達にほこるありさまなり此心をいま女房達の有さまによそへていひやられしなり幸ひ雨夜の興に乘じたる義なり　(ス)蘭省 雖レ爲二官之惣號一近代稱二辨官一也 職原太政官　彼の蘭省の花盛の時に錦の帳の下に時めき給ふといふ心なり　(ソ)眞名マナ漢字をいふ也　(ラ)草庵とは則詩の下句廬山雨夜草庵中といふ心をやはらげてよみ返すなり蘭省の花盛錦帳の下も假の榮花なれば草庵の中にして無生三昧の眞理を觀念せんにはしかぬといふ心をうけてよみやはらげられたるなり　覺明云言白氏初仕二趁朝廷一後住二廬山下一

みなねて、つとめていと早局(トクツボネ)にをりたれば、源中將(リ)の聲にて、こゝに草の庵やあると、をどろ〳〵しういへば、あやしなどてか、さ、人氣なきものはあらん、玉の臺(ル)ともとめ給ふましかば、いらへてましといふ、あなうれし、しもにありけるよ、うへにてたづねんとしける物をとて、夜部(ヨベ)ありしやう頭中將の宿直所(トノヰドコロ)に人々しきかぎり六位まであつまりて、萬の人のうへ、むかしいまとかたりいでゝ、いひしつゐでに、猶此もの、むげにたへはてゝ後こそ、さすがにえあらね、もしいひいづることもやと、まてど、いさゝか何ともおもひたらず、つれなきがいとねたきを、今あしとも、よしとも、さだめきりてやみなん、むつかしとて、みないひあはせたりしことを、只今は見るまじとて、入給ひぬとて、主殿司がいひしかば、又をひ返して、たゞ袖をとらへて、東西をさせず、こひとりてもてこずは、文をかへしとれと、いましめて、さばかり降雨(フルアメ)のさかりにやりたるに、いとゝく歸り來り、これとてさしいでたるが、ありつる文なれば、返してけるかとて、うち見たるに、あはせて(ニ)をめけば、あやしいかなる事ぞとて、みなよりて見るに、いみじきぬす人(ヨ)かな、猶えこそすつまじけれとて、見さはぎて、これがもとつけてやらん、源中將つけよなどいふ、夜ふくるまでつけわづらひて、なん、やみにし、此事はゆくさきも、かならずかたりつたふべき事なりとなん、みなさだめしと、いみじうか

たはらいたきまで、いひきかせて、御名(オナ)をば、いまは草の庵となん、つけたるとて、いそぎたち給ひぬれば、いとわろき名の、すゑの世まであらんこそ、くちおしかるべけれ　源中將の少納言がつぼねへ行て夜部のやうすをとりもちがほに物語し給ふ事を書り　みなねてとは女房達のいねしとなり前をうけていふなりかさねて返事ももてこず夜もふけ侍れば少納言も女房達ともろともにいねたる義也　局にをりたればとは少納言みづからのうへをいふなり　草の庵とは夜部のいみじき返しを則主の異名によばるゝ也　なとてかさ人げなきとは少納言のいらへの詞也　玉の臺とは草の庵といふに對していふなり　おなうれししもにありけるよとは少納言が局に有を源中將の此物語せんとて悦(バ)れし心也　うへにてとは定て御前にさぶらはれんずる程に御前にて物語し歌の心も尋ねんと思ひしと也　夜部ありしやうとは是より源中將の物語なり　むかしいまとは古今の歌人の噂なり則與の口をしきものといふ段に此意みへ侍る也　此ものむげにたえはてゝとは少納言を噂し給ふ義也梨壺歌仙元輔

が女なれば倚其遺風を傳へしが此もの身まかりなば家の風もたへはてゝ後の世は秀歌を聞まじければ今の間に家の風よまんを聞まほしきとねがふ心也　もしいひいづる事もやとは少納言が返歌をよみてこしやすらんに先をくりみよといふ義也　いさゝか何ともおもひたらずつれなきがとは清少納言に對して源中將の語らるゝ詞なり直宿所に有し人々が返歌を待居つるに少納言のつれなう何共思ひたらず使を歸されしを人々のねたく思ひつると語らるゝなり　こよひあしともよしともさだめきりてとは返しの歌をきゝてその品をさだめむと也　むつかしとてみないひあはせとは大事におもひみなあつまり評判してをくりし物をといふ義也　主殿司がいひしかば使が歸りてありのまゝにいひしと也　又をひ返しとはかさねて使をやられし義なり　こひとりとは返事をこひとれとなりしからずは初の文をとりもどせよと使を詈などしてやる義なり　ありつる文とは此方より遣しつる文なればそのまゝもどしつるかとなり　源中將つけよ

どゝは頭中將六位などの評判して源中將をさしづする義なり　つけわづらひてやみにしとは中將も諸人もつけわづらひしとなり　此事はとは此ごとくいみじき事は後世の教にかたりつたへんと人々がいひ定められしと源中將の委くかたられしなり　御名をばとは源中將の詞なり少納言に對しての給ふなり　いそぎたち給ひぬれとは物語すぎて源中將の歸りたまふとなり　いとわろき名のするゐの世まであらんこそとは少納言みづから謙退の意にて實はわがめいぼくと思はれし義なり

(リ)源氏系圖云

醍醐天皇—高明親王 號源姓西宮

　　—忠賢 兵衛佐
　　—俊賢 權大納言
　　—經房 中納言 母師輔公女
　　—女子

公卿補任云參議正四位下源經房故左大臣高明公四男母右大臣師輔公五女寛弘二年六月十九日任參木中將如レ元藏人頭云々　職事補任云長保三年八月廿五日補左近權中將　(ル)榮花物語玉臺卷「くもりなくみがける玉の臺には塵もゐがたきものにぞありける」此歌の心などかよひ侍べし　(レ)額をあはする事なり書翰に接レ眉ともいひ屬レ字とも云なりみな額をあはせむかふ事なり或云聲をあはする事成べし云々　(ロ)財寶の盗人にはあらずわりなき心ある事を何事にても盗人といふなり俗におかしきをくせ者などいふ心なり

といふほどに、修理介則光(二)いみじき悦び申になん、うへにやとて、參りたりつるといへば、なぞ京官(ツカサメシ)(三)なども聞へぬに、何になり給へるぞととへば、いな誠にうれしき事の夜部侍しを、心もとなくおもひあかしてなむ、かばかり面目(メイボク)ある事なかりき、とて、初ありける事ども、中將の語給へるおなじ事どもをいひて、たゞ此返事にしたがひて、こかけをし、ふみしすへて、さるものありとだに思はじと、頭中將の給へば、あるかぎり、かうようしてやり給ひしに、たゞに來りしは、なかなかよかりき、もてきたりしたびは、いかならんとむねつぶれて、まことにわろからんは、せうとのためも、わろかるべしとおもひしに、なのめにだにあらず、そこらの人のほめかんじて、せうとたち、これ聞けとの給ひしかは、下心地には

いとうれしけれど、左様のかたには、さらにえさふらふまじき身になん、侍ると申しかば、ことくはへよ、きゝしれとにはあらず、たゞ人に語れとてきかするぞと、の給ひしなんすこし口をしき、せうとの覺へに侍しかど、これがもとつけ心見るに、いふべきやうなし、ことにまたこれがかへしをやすべきなど、いひあはせわろしといはれては、中々ねたかるべしとて、夜中までなんおはせしは、身のためにも、人のためにもいみじきよろこびには侍らずや、京官に少將のつかさえて侍らば、何ともおぼゆまじくなんどいへば、げにあまたして、さることあらんともしらで、ねたくもあるべかりけるかなと、これになんむねつぶれて覺へし、このいもうとせうとゝいふことをば、うへまでみなしろしめし、殿上にもつかさの名をばいはで、せうとゝぞつけられたる、物語などしてゐたるほどに、まづとめしたれば、參りたるに、此事仰られんとなりけり、うへのわたらせ給ひて、かたり聞へさせ給ひて、をのこどもみなあふぎにかきつけてもたるなど、仰らるゝにこそ、あさましう、なにのいはせけることにかとおぼへしか、さて

後ぞ、袖几帳などとりのけて、おもひなをり給ふめりし　といふほどにとは前をうけて云則前のつゞきも　うへにやとて參りたりとは少納言がかたへ夜部の事いはんとて來る由なり　なぞ以下は少納言が詞なり　いな誠に以下のりみつが參りし故を云なり　うれしき事とは則光が詞なり夜部少納言のよみ返されし歌を人々のほめ給ひしかうれしきとなり則光は少納言と心有人なれば如ㇾ此思ふ由なり　こかけをしふみすへてとは頭中將のの給ひし詞をいふなり少納言が返事の劣れる氣色あらばをとしめ思はんとなり　あるかぎりとは前にいひしごとくみな〳〵むつかしき迄念入たしなみやられたるとなり是少納言を心にくゝおもふ故なり　たゞにきたりしとは使が初のたび歸りたる義なり　もてきたりしとは後のたび返しもて來りし時の事也　わろからんとはあしき返事あらば中將のいひかけ給ふせんもなくして聞傳へむ人々の口ずさみにも惡くいはんは心憂からんとなり　なのめにだにあらずとは一段よき返事ぞといふ義なりそこらの人とは宿直所にあつまりし人々の感じあ

へると也　せうとたちとは頭中將の詞なり源中將修理介などにむかひて聞給へとの給ふなり　いとうれしけれとは則光が詞なり　えさふらふまじとは得ぬと也義なり　ことくはへよとは頭中將の詞なり返しをせよといふにもあらず又少納言よりの歌を聞わけよといふことにもあらずたゞ傳へ置て人にかたれよと計にきけとの給ふと也　すこし口をしきとはのりみつが心也頭中將のかくあなどりの給ふをくちおしくおもふと也　これがもとつけとはあなどるを口おしく思ひて彼少納言が歌の上句つけんと案ずれどもいでぬとなり是が返しをやとは別に返歌をせんと思へどもそれも中々いひがたきとなり(二)　京官に以下修理介が悦び來りし故をいひて前の心を結ぶなり　げに以下は少納言の答なり　あまたしてさることとあらんとはみな〳〵寄合評判して送り給ふともしらでと云義也　ねたくもとは慰の妨よとねたましう侍りしと也　このいもうとせうと以下は地の詞也　此いもうとせうとといふ物語のゆへを中宮にも天子にも聞召たると也　物語などしてゐたる以下は又少納言が詞なり修理介と此事物語する内に中宮のめして又御前にても此事御噂ありしとなり　うへわたらせ給ひとはみかど入御まし〳〵て中宮へ御物語あそばす義なり　そのこどもとはみかどの仰の趣なり殿上の人々感じあひてもてはやす由なり　あさましうとは少納言謙退の心を云なり　なにのいはせける事とは何人の上聞にまで入れしぞとなり　さて後にぞとはみかど御物語すぎて中宮の御几帳の內へ入りおはしますさまを云なりまのあたり少納言見られたる義なり是迄そこばくの詞みなとりもてる事をいふ第一節の內なり

(二)敍陸說官召者秋除目也號二京官一除目春除目者號二縣召一各拜任之輩召レ之奏者太政官廳秋者於二外記廳一而仰レ之仍稱二官召一八月也　(三)介義解云左右近衛少將從五位下職原云少將五位殿上人中爲二譜第公達一者任レ之敍二四位一時去レ職但敍留者是殊恩也近代每レ人敍留又四位後拜任又常事也三位少將者執柄息常被レ任レ之又藏人頭時爲二少將一是古例也又辨官兼レ之公達中有二才名一人事也近代殊執レ之少納言兼任又希例也　(四)又云草の庵の作意をねたくやおぼしけん氣遣しにと也

かへる年の二月廿五日に、宮のしきの御曹司に、出させ給ひし御供にまいらで、(四)梅壺にのこりゐたりし又の日、頭中將のせうそことて、きのふの夜(五)くらまにまふでたりしに、今夜方のふたがれば、方たがへになんゆく、まだあけざらんに歸りぬべし、かならずいふべき事あり、いたうたゝかせで、まてとの給へりしかど、局に一人などてあるぞ、こゝにねよとて、(六)みくしげ殿、めしたれば、參りぬ、ひさしうねおきておりたれば、夜部いみじう人のたゝかせ給ひし、からうじて、おきて侍しかば、うへにかたらば、かくなんと聞へさせ侍しかども、よもをきさせ給はじとて、ふし侍にきとかたる、心もとなの事やとて聞ほどに、主殿來て、頭の殿の聞へさせ給ふなり、唯今まかづるを、(七)聞ゆべき事なんあるといへば、見るべき事ありて、うへゝなんのぼり侍る、そこにてといひてやり、つぼねはひきもやあけ給はむと、心ときめきして、わづらはしければ、梅壺の東面の半蔀あけて、こゝにといへば、めでたくてぞ、あゆみ出給へる、(八)櫻のなをしのいみじうはな〴〵と、うらの色つやなどえもいはず、きよらなるに(九)ゑび染のいとこきさしぬきに、藤の折枝、おほうつくしうおりみだりて、紅の色(十)打目など、かゞやくばかりぞみゆる、しだひに白き薄色など、あまた下重たる、せばきえんに、かたつかたは下ながら、すこし簾のもとちかく、寄居給へるぞ、誠に繪に書物語(十一)のめでたき事にいひたる、是にこそはと見へたる、御前の梅(十二)は、西は白く東は紅梅にて、すこしおちがたになりたれど、猶おかしきに、うら〳〵と日のけしき長閑にて、人に見せまほし、簾の内にましてわかやかなる女房などの、髪うるはしく長くこぼれかゝりなど、そひゐためるやうにて、ものゝいらへなどしたらんは、いますこしおかしう、見所ありぬべきに、いとさだ(十三)過ふる〴〵しき人の、髪なども我にはあらねばや、所々わなゝきちりぼひて、おほ(十四)かた色ことなるころなれば、あるかなきかなるに、うすにびあはひも見へぬ、うはぎぬどもなどあまたあれど、露のはへも見へぬに、おはしまさねば　裳もきず、うちぎすがたにてゐたるこそ、物そこなひにて、口おしけれ、第四節事の品おほく侍れどもすべて大意とりもてる物の詮を

いふなり少納言が優才のほどを人々のしたひとり持給ひし事どもをいふなり　宮とは前注す中宮定子の御事をいふなり　職の御曹司とは二月すゑつかたなれば職の御座へうつり給ふと也　せうそことてとは消息とて使が來りしと云義也　きのふ以下はせうそこの詞なり　今夜方のふたがればとはきのふのくらまにまけで給ひしといふ故を書り今夜は則きのふのせうそこの詞なる故今夜と云なり畢竟はくらまへ方たがへにまふで給ひし義なりまだあけざらんにとは未明歸べきと也　いたうたゝかせでとは早く戸を開く用意し待給へといひてせうそこありしとなり　局に一人などてあるぞとは少納言にむかひてみくしげ殿のの給ふ詞なりひさしうとは少納言ねすぐしてなり　よべいみじう以下は少納言がつぼねに置し下女が詞也　うへにとは少納言へ此由を申せと頭中將の仰られしとなり、よもをきさせ給はじとは下女がおしはからひて夜も深ければ申入たり共をきいで給ふまじ明日申あげんとていねたるとなり　心もとなの事やとは少納言の詞なり　主殿司來てとは下女が詞を

聞聞に又頭中將より使來りしと也　唯今まかづるとは唯今西京へ罷歸侍るが少納言にあふて聞ゆべき事有といひ來し給ふとなり　見るべきとは少納言の返事なり　つぼねはとはあるじなき所にいたり給はんと氣づかふ由也　めでたくぞあゆみ出たまへるとは頭中將のいみじきさまをほめて云心なり　櫻のなをしの以下は頭中將の裝束をいふなり　誠に以下はたとへていふなり　御前の以下は時節の景氣をいふなり　人に見せまほしとは中將の儀(ヨソホヒ)といひ折からのけしきといひかた〴〵やんごとなきさまなれば人に見せまほしきと也　簾の內以下はよき女の事をいひて身のをとろへたるにおもひくらべ卑下する義也　いとさだ過とは身のうへを云也　うすにび以下は裝束を云なり　おはしまさねばとは頭中將のいまだおはしまさぬ間なれば裳をきずに侍るとなり　物そこなひとはみだれがはしきすがたなれば身のさまもいよ〳〵方のほどもあしくなりぬるとなり又云裳をきずとり亂したるさまなれば人目にたはれたるやう見るめれば物そこなひといふなり

（四）拾芥云凝花舍西梅壺飛香舍北五間四面
（五）拾芥云鞍馬山城毘沙門天延暦十五年田村丸造
（六）禁秘抄云御匣殿別當是非女御更衣之儀只御所中沙汰人也上古不絕有之內藏寮外御服裁縫所也後冷泉院御　拾芥云御匣殿貞觀殿后町北　此みくしげ殿とは中宮の御妹なり系圖下にあり（〇）局より御前へ出るとの義なり　（七）花鳥餘情云下はかうしはた板などをうちて上にしとみをつりて外へあぐる樣にしたるをいふ車にもはじとみとて有うへのしとみばかりあぐるを半蔀と名づけたるなり　（八）常の直衣の裏こきすはうなるを櫻色といふなり前にも注し侍る　（九）ゑび染前に詳なり
（十）砧などにて打しつやの事なり　（イ）下にいふ物語たぐひなりこまのゝ物語うつぼ物語などをいふ成べし　（ロ）禁秘抄云梅壺梅西白梅東紅梅之由在清少納言記是少納言規摸なりさしも順德院は賢君にてましますその御記に清少納言が記と書給ふ事尤手柄なり是則他のあたしき物語の類にあらざる證據なり　（ハ）源語類聚云中央四十を中齡にして比過たるなり半齡過たるなり年のよりたるなり　（ニ）鈍色の薄はげたる心を云也

しきの御ざうしへなんまいる、ことつけやある、いつかまいるなどの給ふ、さても夜部あかしもはてゞ、さりともかねて、さいひてしかば、まつらんとて、月のいみじうあかきに、（ホ）西の京といふ所よりくるまゝに、局をたゝきしほどからうじて、ねをびれておき出たりしけしき、（ヘ）いらへのはしたなさなど、語てわらひたまふ、無下にこそ、おもひうむじにしかなど、さるものをばきたるなど、げにさぞありけんと、（チ）いとおしくおかしくもあり、しばしありて出給ひぬ、外より見む人はおかしう、内にいかなる人のあらんと思ひぬべし、おくのかたより、見いだされたらんうしろこそ、外にさる人やとも、覺ゆまじけれ　しきの御ざうしへなんまいるとは、頭中將の詞なりことつけやあるとはしきの御ざうしの女房達へことつけやあるかと問ひ給ふなり、いつかまいるとは中將の詞なりいつ職へ參り給はんと問ひ給ふ義なり　さても以下は中將の詞なり　夜部あかしもはてゞとは方たがへの歸さに夜深く局へゆきし事をの給ふなり、たゞきしほどゝは久しくたゝけは程

ふりからうじて、しも女おきいでたるとなり　さるものとは中將の詞なりいらへなどはしたなくしたるを仰らるゝなり　げにさぞありけんとは少納言の心なり　いとをしくおかしくもとははるぐ〳〵來り給ふをむなしく返しまいらせいらへなどもはしたなくせし事を云なり　しばしありて出給ひぬとは少時物語してやがてしきの御ざうしへ行給ふとなり　外よりといふよりは地の意なり此梅壺の簾の內にてかく物語し給へば外より見きかん人はおくゆかしかるべしとなり　おくのかたよりとは物語し給ふ所の奥のかたより見たらん人は簾より外にて見る人のごとくならずとなり畢竟は口より見聞む人は分明ならねばゆかしからんが奥よりは分明に見ゆればゆかしうもおもはじとなり

(ホ)人皇五十代桓武天皇延曆三年十一月に大和の國添上郡平城の京を去て山城の國乙訓の郡に都を立て長岡の京と號す同じき十三年十月に又長岡の京を立て葛野郡宇多村へ都をうつさる今の平安城是也今の大宮通より西を西の京といひ大宮通より東を東京といふなり其時の大裏は大宮より西八丁北南は二條より一條の間十町なり眞名伊勢物語に長安と書てにしの京とよませたり洛陽はひんかしの京なり　(ヘ)返答いらへ　(△)あかしもはてゞとは少納言が夜べ我を待あかしもはてゞと中將の恨み給ふ心也

暮ぬれば參りぬ、御前に、人々いとおほくつどひて物語のよきあしき、(リ)にくき所などをぞ、定めいひしろひすごし、なかたゞなどがこと、御前にも、をとりまさりたることなど仰られける、まづこれは、いかにと、とくことはれ、なかたゞがわらは、老のあやしさを、せちに仰らるゝぞなどいへば、何かは、琴なども、(ヌ)天人下(オル)るばかりひきて、いとわかき人なり、(ル)御門の御むすめやはえたるといへば、なかたゞがた人共所を(ヲ)えて、さればよなどいふに、此ことよりは、ひるたゞのぶが參りたりつるをみましかば、いかにめでまどはましとこそ、おぼゆれと仰らるゝに、人々扨まことに、常よりも、あらまほしうこそなどいふ、まづそのことこそ、啓せんとおもひて、參り侍りつるに、物語の事にまぎれてとて、ありつる事を語聞へさすれば、誰も〳〵見つれど、いとかう縫

たる糸針目までやは見通しつるとてわらふ、西の京といふ所の、あれたりつる事、もろともに見る人あらましかばとなん、おぼへつる、垣などもみなやぶれて、こけおひてなどかたりつれば、宰(ワ)相の君のかはらの松は、ありつやといらへたりつるを、いみじうめでゝ、西(カ)のかた都門をされる事、いくばくのちぞと口ずさびつる事など、かしかましきまで。いひしこそ、おかしかりしか、第五節中宮の御前におゐてそのこ達の品定め侍しかば少納言の參り給ひて中將のいみじき事をいへり　參りぬとは梅つぼより職の御ざうしへまかりし事也　なかたゞがわらはとはなかたゞが方人の詞也　何かは以下は女房達の詞なりなかたゞ老のあやしさをいふにはあらず琴などもよくひきし人ぞとなり　いとわかきとは老のあやしきにはあらずやさしき人ぞとなり　御門の御むすめやはえたるとはたはふれていふ義なり　此ことよりはとは中宮の詞なりなかたゞが事よりは晝たゞのぶがよそほひこそいみじけれと仰らるゝなり　人々とは女房達の中宮へ御いらへ申さるゝ詞なり　まづその事とは少納言が詞なり

頭中將の事を啓せんとおもふ程に餘の事にまぎれしと也　ありつるとは中將の梅壺の東南おもてにてのよそほひの事をかたり出す也　たれも〳〵とは御ざうしへ中將の來り給時誰もみな〳〵見まいらせしにとなり　いとかう以下は女房達の詞也　西の京以下は少納言が詞也　中將と語りしやうをいふなり　あれたりつることゝは中將のあれたりつることゞも語給ひしかばと云義也　もろともに見る人あらましかばとなんおぼへつるとは中將の心なり思ふ人ともろともに見たらんはいかばかりおかしからんといふ意なり　垣などもとは又中將の詞を語なり中將の如此の給ひしかば少納言が又宰相の君のかはらの松はありつやと問ひかへす義也　いみじくめでゝは中將のめで給ふ也　西のかた以下は彼中將の朗詠せし事までいひ出し中宮へ御物語申也　かしかましき程におかしう侍りしと少納言の唯今中宮へ啓せらるゝをいふ地の詞也
（リ）仲忠俊景が孫也　うつぼに中將宰相中納言迄に成し人也　俊景か琴の曲をよく傳へられし也　（ヌ）本朝月令云淨御原天皇御吉野宮日暮

彈レ琴有レ興俄爾之間前軸之下雲氣急起疑如ニ高唐ノ
神女髣髴應レ曲而舞獨入レ瞻他人無ニ見人ニ擧レ袖五
替謂ニ之五節ト云々　是則天人也　樂書云琴動ニ天
地ヲ感ニ鬼神ヲ天人をるゝばかり琴引たる事うつぼ
の俊景の卷におほく見へたり　（ル）うつぼ物語七
云又殿も仲忠をころし給はゞや見給はずはこそあ
らましかそれも琴一聲かい引て聞せ奉らましかば
にくみもはて給はざらましさりし時だにあやまた
ず成にしものをいとよくさりぬべき折も有しかば
御門の御むすめも給はらずや有ける　同十卷ニ云心
とゞめて琴つかうまつりしに仲忠の朝臣に一の內
親王すゝしの朝臣にまさよりが九にあたる女給ふ
べき由せんじ下りにし云々　（ヲ）齊信タゝノブ前ニ見
ゆ　（ソ）宰相の君　女房の名也　（カ）長恨歌ニ云西
出ニ都門ヲ百餘里六軍不レ發无ニ奈何一トモスルヿ　これらの古
ことをうそぶきたる義也

さとにまかでたるに、殿上人などのくるをも、やす
からずぞ人々いひなすなる、いたうあまり、心にひき（△）
いりたるおぼへはたなければ、さいはん人もにくか
らず、又夜も晝も來る人をば、なにかはなしなども、か
くや、來歸さん、まことにむつましくなどあらぬも、
さこそは來めれ、あまりうるさくもあれば、此たび
は出たる所をば、いづくともなべてにはしらせず、左
中將經房の君、濟政の君などばかりぞしり給へる、
左衞門のぞうのり光が來て、物語などするついでに
きのふも宰相中將殿の參り給ふていもうとのあらん
所、さりとも、しらぬやうやあらじと、いみじうとひ
給ひしに、さらにしらぬよし申しに、あやにくにし
て、問ひ給ひし事などいひて、ある事あらがふはい
とわびしうこそ有けれ、ほど〳〵ゑみぬべかりし
に、（ヨ）左の中將の、（▲）いとつれなくしらず顏にてゐ給へり
しを、彼君に見だにあはせば、わらひぬべかりしに、
わびて臺盤のうへにあやしきめのありしを、たゞく
ひにくひまぎらはししかば、ちうげんに、あやしの
くひものやと、人も見けんかし、されど、かしこうそ
れにてなん、そこととは申さずなりにし、わらひなま
しかば、ふようぞかし、まことにしらぬなめりと、
おぼしたりしも、おかしうこそなどかたれば、さら
になの聞へ給ひそなどいひて、日比久しくなりぬ、六

節少納言が方へ君達のかたらひ至り給ふを他人の

名たてがましういふによりて其斷を云なりさるに依中將にもしのびかくれてあはぬなるべし又すゑには則光が深き情をもだしがたくや思ひけんそれにしたがひかたらふ事を云なり是則何となく他事をいふさまなれ共人々の少納言をかたらひとりもたれし事なりみづからのうへを時めかしういふべきにあらねば何となくゐだし事のやうにいふ成べし又云いにしへの契かたらふは今時のごとく野躰(ヤテイ)にあらず心正直(スナホ)に情の色ふかきを詮とする故に身のめいぼくに侍ればにや歌の詞書にも契ける男のなど女のみづからかけるも侍り家集物語などにかくみづから書來(キタ)ればひたすらいやしうたはれたる心にはあらざるべしされば今の少納言かくのごとく書れし事もあやしくおもふべき事には侍らぬにや云々　さとにまかでたるとは少納言の里へさがられし事也　いとうあまり心にひき入たるおぼへはたなければとはわがこゝろにたはれしおぼへはなきとなり虛事(ソラゴト)をいはれんは心わづらはしからねば尤いふ人にくからぬと也　又夜も晝もとは夜來る人とても晝くる人とても訪ひくる人に留守などゝいひて逢ぬ事は無下なればとなり是則少納言みづからのうへを斷り亦賓客の禮を敎ゆる義なるべし　あまりうるさくもあればとは親疎にかぎらず訪來(トヒクル)は虛言も出來(イデキ)てうとましき成べし　なべてにはしらせずとはをしなべては居所をしらせぬとなりたゞ經房濟政などの友に計しらせ給ふとなりのりみつがいきてとはかくれゐる所へいたりてなり　きのふも以下は則光が詞也　いもうとゝは少納言をいふなり頭中將にかくれしをのり光に頭中將の問ひ給ふ義なり　さらにしらぬよし申しゝにとは則光が頭中將へあらがひたる由なり　あやにくにしひて問ひ給とは中將疑て强問(シイ)はれたると也　事などいひては則光が只今噂いひてなり　ある事あらがふはいとわびしとは則光が只今了簡していふ詞なり實(シツ)に知たる事をしらぬと僞るはわびしきとなり　ほど〳〵ゑみぬべかりしとはわが心にもやう〳〵あらはすばかりにおかしかりしと也しらずがほにてゐ給へりしをとはしら〳〵しうもてなし給ふかほを見るにもいとゞおかしかりしとなり　わびてとはあまりおかしければわびしうた

へがたさに戯て臺盤の上の和布をとりくふてまぎらはすとなり　ちうげんにとは啀の中間にかやうの物取くふを人々あやしうおもふらめども是にてまぎらはしたるとなり　そことは申さずとは少納言のあり所を申さゞりしとなり　わらひなましかばふようとは傍人のわらひなどするは無用ぞとなり　まことにしらぬなめりとおぼしたりしとは中將の實にしらぬと思召欺かれ給ふはおかしきと也　さらにとは少納言が詞なり又是迄則光が詞なり

猶々かくし給へと云心なり

(△)莊子に内外の分を安じ榮辱の境を忘るといひし心も通ひ侍る又衆惡レ之必察焉衆好レ之必察焉といふ心も通ずべし

(ヨ)經房なり則左中將經房と本文有是なり系圖前にしるす　(▲)見だにあはせばとは顔を見合せばおかしからんとなり

夜いたくふけて、門をおどろ〳〵しうたゝけば、何のやうに、心もとなふ、とをからぬ門をたゝくらんと聞て、とはすれば、瀧口なりけり、左衞門のか(タ)みとて、文をもてきたり、(レ)みなねにたるに、火ちかくとりよせて見れば、あす御讀經の結願にて、宰相中將の、御物いみにこもり給へるに、いもうとのあり所、申せ〳〵とせめらるゝに、すぢなし、さらにえかくし申すまじきなん、とや、聞せ奉るべき、いかにおほせにしたがはんとぞいひたる、返事もかゝで和布一寸ばかり紙につゝみてやりつ、さて後に來て、一夜せめたてられ、すゞろなる所にゐて、ありき奉りし、まめやかにさいなむに、いとからし、さてなど、ともかくも御返のなくて、そゞろなる和布のはしをばつゝみて給へりしかば、とりたがへたるにやといふに、あやしのたがへ物や、人のもとに、さる物つゝみてをくる人やはある、いさゝかも心得ざりけると見るがにくければ、物もいはで、すゞりのある紙のはしに、

かづきするあまのすみかはそことだにゆめいふなどやめをくはせけん」、と書て出したれば(ツ)、歌よませ給ひつるか、さらに見侍らじとて、扇かへして、にげていぬ　夜いたくふけてとは以下少納言の心なり凡

是より頭中將の少納言が居所をのり光に問ひ給ふ事を云なり則光も頭中將への返事をいかゞせんとて少納言へ尋ねしかば少納言和布を遣したり則光

その意をえざりしかば少納言歌をよみてその心を述られたり　心もとなふとをからぬ門とは端居ちかき家つくりなればさほどおどろしうたゝかずともといふ心なり　左衛門のかみとてとは左衛門督よりとて文もて來りしとなり是則光が文なり　あす以下は文の中のやうすなり則光が文の詞なり　すぢなしとは御返事の申べきすぢなきとなり　とやとはしかじゝとや中將へ聞せ奉るべきかと也　いかに仰にしたがはんとは則光が少納言に尋問ふ義なり　返事もがゝでとは少納言の詞なり　さてのちにきてとは少納言方へのりみつが來りて也　一夜せめたてられとはのりみつが中將にせめられしとなり　ゐてありきとは中將とつれだちこゝかしこを尋ぬる由にもてなしたるとなり　など以下は少納言をとがめうらむる心也かやうにさいなまれからきめ見るにともかうもいふべきやうの詞はをしへ給はらで和布を給はりしはとりちがへ給へるにやと也　あやしの以下は少納言の詞也　則光が詞に應じて又とがめかへしその心を歌にてことはる也　かづきするあまとはわが身の事を云也

ゆめいふなとや　夢にもいふなとなり又云努々いふなとなり　めをくはせけんとは初其方夢ばかりもいはで臺盤の上の和布をくはれしごとく此度又いかにもしていひ給ふなといふ心なり此心にて和布を遣し侍るを則光心得ざりしなり歌の心はいろじゝの說侍れ共且略レ之心を付て味はふべし　歌よませ給ひつるやとは則光が詞也

（タ）令義解云左右衛門督相當改爲ニ從四位下一前も注す　（レ）江次第云季御讀經春秋二季請ニ百僧於南殿一讀ニ大般若經一其內定ニ御前僧廿口於御殿一讀ニ仁王經一納言參議各一人着ニ南殿一行レ事自餘皆候ニ御殿一貞觀御時每季行レ之元慶天皇踐祚之後二季修レ之　公事根源云季御讀經二月八月に大般若經を百敷にて講ぜらる四ヶ日の事にて第二日には引茶とて僧に茶を給ふ事有天平元年四月八日にはじめらる貞觀の比ほひは每季行はれけるとかや

○後拾遺云陸奥守則光藏人にて侍ける時いもせなといひつけてかたらひ侍けるに里へ出たらん程に人々尋んにありかなつげそといひて里にまかり出て侍けるを人々せめてせうとなればしるらんとあ

るはいかゞすべきといひをこせて侍ける返事にめをつゝみて遣はしたりければ則光心もえでいかにせよと有ぞとまかで來てとひ侍りければよめる清少納言「かき捨る蜑のありかをそこなりと夢ゆふなとやめをくはせけん　(ソ)返歌をえせぬゆへにもたる扇を贈り去ると也

かうかたみに、うしろみかたらひなどする中に、何事ともなくて、すこし中あしくなりたるころ、文おこせたり、びんなきことなど侍るとも、猶ちぎり聞へし事は、わすれ給はで、よそめにても、さぞとは見給へとなんおもふと、いひたり、つねにいふ事はをのれをおぼさん人は、歌などよみてえさすまじき、すべてあたがたきとなんおもふべき、今はかぎりありて絶なむと思はん時は、さることはいへなど、いひしかば、此返(ツ)しに、くずれよるいもせの山の中なればさらによし野の川とだに見じ」といひやりたりしも、誠に見ず(ネ)やなりにけん、(ナ)かへりこともせ(ラ)ずなりにき、さてかうふりえて、とをたあふみのすけなどいひしかば、にくゝしてこそ、やみにしか　此には則光ゝ少(シ)不和になり

侍れ共則光が猶したひ來る事をいひて前のとりもてる事どもの心を結ぶなり　かうかたみにとは少納言則光と相互に後見しかたらふ也　文おこせたりとは則光が文こしたると也　びんなきことなどゝは文の中の詞なり則のり光がいひこしたる趣なり少々のとゞかぬと思召事有共久々のちなみをむなしうし給ふなと也　さぞとは見給へとはそれぞと問ひ給へとなり　いひたりとは如レ此文にいひこしたりといふ義也　つねにいふ事以下は少納言の詞なり則光が常々いひしことはとなり　をのれとは則光が身のうへを云なり　さることはさやうの事はいへとなり歌の事をいふなり　いへなどいひしかばとは常々如レ此いひしほどに此たび少ふし有事のちなみに歌をよみて送るなりしかれども實に中絶むとの心にてはなきとなり　くづれよるいもせの山とは二人の中をいもせ山にたとへたりいも山せ山とわかれ吉野川を中に隔て絶々なるやうに侍れ共此方には其隔つる川ありとも思ひ侍らじとなり歌の心は甚深なる物なれば墨筆にはつくしがたし心をすなほにしてよく意味を知らるべ

し　さてかうふりえてとは則光除目にあづかり遠江介になりて彼國へくだりしかば何事も詮なくむなしう侍しとなり是迄六節の内なり　右此段すべてとりもてる物といふ事の意をいふなり文章長きゆへに六節にわけて釋し侍る是則例の見やすからしめんためなり其中に不足の事いりほがなる義理のみ侍らんつれ共初學をめぐむの心にて如斯くだくしきことをも書つらね侍れば廣才の人のとがむべきほどの事にもあらざらんかし

(ツ)いもせ山　紀伊國なりいも山せ山の中をながるをいもとせの川といふ也　川上は吉野川なり此山の因縁諸抄侍れば略之　(ネ)叙爵の事也　(◎)風土記云近江始書淡海自帝都近有大江故改近江又遠江始書遠淡海此國有大江自帝都遙遠故名遠江　上國也　(ナ)職員令云上國守一人介一人掾一人目一人史生二人其職掌皆同大國官位令云介從六位上

清少納言枕草紙抄卷五

[四十三段] 物のあはれしらせがほなるもの、(◎)はなたる間もなく、かみつゝ物いふ聲、眉ぬく、扨その左衛門の陣にいきて後、里にいでてしばしある程に、とく參りねなど仰ごとのはしに、(イ)左衛門の陣へいきしあさぼらけなん、つねにおぼし出らるゝ、いかで、さつれなく打ふりてありしならん、いみじくめでたからんとこそ、思ひたりしかなど仰られたる、御返事に、かしこまりのよし申て、わたくしにはいかでかめでたしとおもひ侍らざらん、御前にもさりとも、(ロ)中なる乙女とは、御覽じおはしましけんとなん、おもひ給べしと、聞へさせたれば、(ハ)立歸りいみじくおもふべかめるなり、たがおもてぶせなる事を、いかでか啓したるぞ、たゞ今夜のうちに、よろづのことをすてゝ參れ、さらずは、いみじうにくませ給はんとなん、仰事あれば、よろしからんにてだにゆゝし、まいていみじくとある文字には、命も身もさながら、すてゝなんとて、まいりにき、しきの御(二)ざうしにおはしますころ、西の庇にて(三)不斷の御讀經ある

に、佛などかけたてまつり、法師どものゐたる、こそ、さらなることなれ、 爰より下のうへもわらはせおはしますと云迄一段なり詞おほく侍れば八節に分てみるべし物のあはれしらせがほなるものとは則當段の題なり外の見聞さまのあはれなる事どもを書り はなたる間もなくとは是すなはち外より見聞處のあはれなるさまなり 眉ぬくとは是も見所痛ましくあはれげなり 扨てその左衛門の陣にいきてとは前の有がたき物の段にいひしごとくやう〳〵明もて行(ユキ)左衛門の陣にまかり遊びし事あり其時は少納言內にさふらひし時なり今は仕をやめ里に有時の事なり故に後里に出てと云なり おほせごとゝは中宮の仰ごと也 はしとは仰書(オホセガキ)の狀の端になり 左衛門陣以下は御ふみの中やうす也いみじくめでたからんとは少納言里にあるをめでたくおもふかとなり 御返事とは少納言より中宮へ奉る御返事なり かしこまりの由申てとは御前へ參らで里にありし故を陳申上る義なり 立歸りいみじくおもふべかめるとは中宮よりかさねてめす義をいふなり よろしからん以下亦少納言の心

也 職の御ざうしにおはしますとは中宮の御事也

(◎)或本にはなたりしたるかつ鼻かみつゝ物いふけはひわさびくふ眉ぬくもトアリ (イ)めでたき物の段に有明のいみじうきりわたりたる庭などにおりてありくを聞しめして御前にもおきさせ給へりうへなる人はみなおりなどしてあそぶにやう〳〵あけもて行左衛門の陣まかりてみんとてゆけば我も〳〵とおひつきて行に殿上人あまたして何がし一聲の秋とずむじて入をとすればにげ入て物などいふ聲月見給ひけるなどめで給ふもあり夜も晝も殿上人のたゆる夜なしと云々則此事也 (イ)五節の舞妓の建春門を經て左衛門の陣へ集り粥などくふ事有いにしへは舞妓の曉參とて儀式有それを爰に左衛門の陣にいきし朝ぼらけとは云なり

(ハ)源語類聚面伏面目(オモテブセ)をうしなふなどいふ心也

(ロ)舞妓其の並なる乙女と思ゐかといふ下心也五節の舞妓にいづる事面目なき事にはあらぬ由也其趣乙女卷にも惟光が娘を五節に出しけるに心にもあらざる由みへたり (ニ)常の御看經なり是殊なる定法なき歟禁中御抄云凡六齋日十八日本命日

必可ニ精進一云々但旦暮持ニ念珠一念佛ナドハ不レ可レ然事也眞言法華經其外御用御經可レ有ニ御誦習一師御持僧中可レ選ニ其人一御事也云々如レ此の義に准じてしらるべし　扨その以下すべて此一章は少納言のそのかみ五節の折左衞門の陣に有しを中宮の今に思召出られて御文の端にかきて里住ひの所へ仰やらるゝ義なり

二日ばかりありて、縁のもとにあやしきものゝ聲にて、猶その御佛供のおろし侍なんどいへば、いかでか、まだきにはと云なるを、何のいふにかあらんと、立出てみるに、老たる女の法師のいみじくすゝけたるかりばかまの、つゝとかやのやうに、ほそくみじかきを、おびより下五寸ばかりなるころもとかやいふべからん、おなじやうにすゝけたるをきて、さるさまにていふなりけり、あれは何事いふぞといへば、聲ひきつくろひて、佛の御弟子にさふらへば、御佛供のおろしたべむと申を、此御ばうたちのおしみ給ふといふ、はなやかにみやびかなり、かゝるものは、打うむじたるこそあはれなれ、うたてもはなやかなるかなとて、こと物はくはで、たゞ佛の御おろしをのみくふが、いとたうときことかなといふけしきをみて、などかこと物もたべざらん、それがさふらはねばこそとり申侍れといへば、(ホ)くだものひろきもちいなどを、物にとり入てとらせたるに、無下になかよくなりて、よろづの事を語る、(ヘ)わかき人々、いできて、男やある、いづこにかすむなど、口々にとふに、おかしき事そへごとなどすれば、歌はうたふや、まひなどするやと、問ひも果ぬに、夜はたれとかねん、ひたちの介とねん、寢たるはだもよし、(ト)これがすゑいとおほかり、又(チ)男山のみねのもみぢば、さぞ名はたつ〳〵と、かしらをまろかしふる、いみじくにくければわらひにくみて、いね〳〵といふいとおかし、是に何とらせんといふを聞せ給ふて、いみじう、など、かくかたはらいたき事は、せさせつる、えこそきかで、みゝをふたぎてありつれ、其きぬひとつとらせて、とくやりてよと、仰らるれば、これ給はするぞ、絹すゝけたり、白くてきよとて、なげとらせたれば、ふしおがみてかたにぞうちかけてまふ、ものか、まことににくゝてみな入にし、後にはならひたるにやあらん、つねにみへしらがひてありく、やがてひたちの

介とつけたり、きぬもしろめず、おなじすゝけにてあれば、いづちやりにけんなどにくむ、(上)右近の內侍の參りたるに、かゝるものなんかたらひつけてをきたゝめる、かうじてつねにくることゝてありしやうなど、(子)故兵衛といふ人して、まねばせて聞せ給へば、あれいかで見侍らん、かならずみせさせ給へ、御とくいなゝり、更によもかたらひとらじなど笑ふ、其後又尼なるかたわの、いとあてやかなるが、いで來るを、又よび出てものなど問ふに、これははづかしげに思ひて、あはれなれば、例のきぬ一つたまはせたるを、ふしおがむはされどよし、扨打なき悅びていでぬるを、はや此ひたちの介、いきあひてみてけり、其後いと久しくみへねど、たれかはおもひいでん　第二節

御ざうしの邊へ乞食の尼がまいりてあはれげにふるまへるさまのうとましき事をかけり　二日ばかりとは前の文に少納言召れて內へまかりし事をいへりそれをうけてそのまかりし日より二日ばかり以後にとなり　緣のもとゝは西の廂の緣の下也　御佛供とは不斷經の佛餉の殘なり　何のいふにかあらんとは少納言の心なり何ものゝ何事をかいふぞと也　つゝとかやとは筒をみる如く成との喩事也　さるさまとはさやうのさまにてと前をうけていふなり　あれは以下少納言尋問ふ也　聲ひきつくろひとは尼が聲つくろふと也　佛の御弟子以下は尼が答也　かゝる以下は地の詞なりかやうの者は饑を倦じて何にても給はらんといふべきに佛の物のみ給はらんといふはうたてみやびかなるいひやうかなとなり　などか以下は尼が詞也　こどものとは佛餉の餘殘ならぬ常の食物なり　とり中侍れとは佛供を給はると也　無下になかよくとは馴たる義也　よろづの事を語るとは尼が物語する也　わかき人々とは若き女房達也　おかしき事そへことゝは伎藝やうのことをするとなり則尼がするなり　歌は以下女房の詞也　夜は以下は尼がうたひ物也　これがするいとおほかりとは地の詞也　うたひ物のするゑ長々と有しかどもらすと也　又男山以下も尼がうたひしこと也　かしらをまろかしとは尼が頭をふりうたひしと也　いみじくにくければとは女房達の心也　是に何とらせんといふとは尼に物とらせんと女房達のいふを中宮の聞せ給

ひて也　いみじう以下中宮の御詞なり　これ給はらするぞとは女房達の詞也　かたにぞうちかけてまふとは尼が悦ぶさまなり　にくゝて皆人にしとは尼がなれ〳〵しきさまをうとむ心なり　後にはならひたるにやあらんとは尼が馴習ひたると也　ひたちの介とは尼がうたひし詞を異名として呼と也　いづちやりにけんとはとらせし絹をいづちやりけん着ざるとなり　右近内侍の参りたるとは里より内へまいりたるとなり　かゝるものなんとは尼が事を女房のかたらるゝ也　故兵衛といふ人してとは故兵衛といふ女房に彼尼がやうすをまねばせてみするとなり　あれいかでか見侍らむとは内侍が詞なり故兵衛のまねばるゝ事いまだみざるとなり　よもかたらひとらじとは常にまいり御とくいとみゆれば更にわたくしのわたりへはかたらひよする共来るまじきと也　その後とは又こと〳〵なり　はづかしげにとはをのが身を憚る心あるとなり　されどよしとは初の尼がごとくなめげにあらでよきとなり　扨うちなき悦びて以下は異尼が衣(キヌ)を給り悦泣て罷歸となり　はや此ひたちの介とは初の尼又なれ〳〵しうまいりて侍ると也　其後いと久しく見へねとは彼かたわ者が事也　誰かは思ひ出でんとは彼初の尼が事を誰も思ひ出ぬと也

(ホ)菓子クダモノ　〇ひろきもちい　今の世のはなひら餅の類也　(◎)男やあるとゝひ肌よしなどうたはせしゆへわかき人と書る文章相應してみへ侍る歟　(へ)これがするいとおほかりといひてするをいはずかくしたりいかさまおかしき詞あるべし今いかにと知がたし　(卍)是もそのかみの口ずさみ成べし　(ト)片野少將が女也　作者部類云右近右近少將季綱女云々　又藤原系圖に云ク

●●●眞作 巨勢丸五男 ─ 三成 ─ 兵雄 ─ 千乘 ─ 元繩
季繩 右近將監従五上 一世號片野
守樹
茂樹 或扶樹弟
女子 歌人 右近穏子太后女房
女子 歌人
或此女子兩人季繩ノ女

チ）作者部類云兵衛内侍後撰一新千載一云々系圖未レ考

扨しはすの十餘日のほどに、雪(チ)いとたかうふりたるを、女官(リ)どもなどして、物のふたに入つゝ、いとおほ(ヨ)くをくを、おなじくは、庭にまこと(▲)の山をつくらせ侍らむとて、さぶらひめして仰ごとにてといへば、あつまりてつくるに、殿もり司の人にて、御きよめ(◎)に參りたるなども、みなよりていとたかく(ル)つくりなす、宮(ヌ)つかさなどまいりあつまりて、ことくはへ、ことにつくれば、所の衆(ヲ)三四人參りたる、主殿司の人も、廿人ばかりになりにけり、里なるさぶらひめしにつかはしなどす、けふ此山つくる人には、祿給はすべし、雪山にまいらざらん人には、おなじからず、とゞめんなどいへば聞つけたるは、まどひまいるもあり、里遠きはえつげやらず、つくりはてつれば、宮つかさめして、きぬ(ワ)二ゆひとらせて、緣になげいだしたるを、一づゝとりによりて、おがみつゝ、こしにさして、みなまかでぬ、うへのきぬなどきたるは、さてかりぎぬにてぞある、是いつまで有なんなど、人々の給はするに、十餘日は有なん、たゞ此比のほどを、あるかぎり申せば、いかにとゝはせ給へば、む月の十五日までさぶらひなんと申を、御前にも、えさはあらじとおぼすめり、女房などはすべて年の内つごもりまでもあらじとのみ申に、あまりとをくも申てけるかな、げにえしもやはあらざらむ、朔日などぞ申べかりけると、下にはおもへど、さばれさまでなくともいひそめてん事はとて、かたうあらがひつ　第三節以下は雪の山つくらせ給ふ事をしるされたり　仰ごとにてとは中宮の仰付ぞと女房達の申つがるゝ義也　ことくはへとは下知などして手に〳〵作る義なり　里なるはさがりゐる侍をもめしにつかはし給ふとなり　聞つけたるはとは祿給はらんなどゝ仰あるを聞及びし侍はとく參るとなり　里とをきとは私宅の遠きは告やらねばおのづからしらで參らぬも侍るとなり　つくりはてつればとは雪の山作りはてつればとなり　宮つかさとはかやう祿物の下知は中宮職の者が掌る事なれば宮づかさに仰付らるゝ也　うへの衣など着たるはさてとはうへのきぬ着たるによりその人には狩衣をかづけなどし給ふと云義なり　かり衣にてぞあるとはう

への衣の義再釋するなり　いつまで有なんとは雪の山いつ迄あらんと評判し給ふ義は十餘日以下は女房達の中あげらるゝ義也　いかにといはせ給ふとは少納言が心を問ひ給ふ也さむ月の十五日とは正月十五日の比迄侍るべしと少納言の啓せらるゝ也　あまり以下少納言下心のをもむきをかゝれたりかたうあらがひつとは人々と論ぜしと也

(チ)雪山舊例の事　御記云應和三年閏十二月廿日令ニ右衛門志飛鳥部常則推（作）雪山於女房小庭ニ今日切手賜ニ常則及其所雜色仕者三人ニ各有レ差花山院後凉殿の南の壺に雪山作らせ作文有し事小右記にみゆ寛和元年正月十日の事卷少に書あるいへるは長德二年の後長保二年の前也云々（リ）ニヨウクワントヨムベシ（ヌ）是則深雪見參の義なるべし　○公事根源云初雪見參〇〇初雪のふる日群臣參内し侍るを初雪見參と申也〇〇代天皇延曆十一年十一月よりはじまる初雪にかぎらず深雪の時は必諸陣見參をとるといへり此事絶て久し又一條院の御時より此かた雪山といふ事有清少納言記に見えたり云々　（ル）雪山抄云年内雪賈レ催所衆瀧口參薦等令ニ參レ堂必可レ參太内弘徽殿也里内依ニ便宜ニ藏人下知修理職儲ニ屋具ニ雪不足時被レ召ニ諸司頭寺ニ於行幸レ之瀧口相具来レ可レ及レ取天上殿舍上拂レ雪所衆作ニ雪山ニ瀧口於ニ棟板雪ニ所衆作レ山瀧口上萬三人所衆上萬三人立レ庭奉行持ニ柏振ニ藏人頭候ニ其子ニ奉行多直衣藏人候ニ便宜所ニ傳レ事修理職作レ之但此事上古不レ見自ニ中古ニ事也事始大略一條院御時以後也清少納言記在ニ其子細ニ初日上參近代絶畢其日御ニ六位藏人ニ令ニ見參ニ藏人以布衣衣冠宿衣直衣ニ御ニ御レ之内侍傳 御藏 人進ニ見參ニ給ニ藤内藏寮官人大藏寮官各給之　女房藏人已上絹一匹主殿持絹女官乃布四端下各二段御厨子所得選各一匹刀自各三段此外御厠人長女内豎主殿官人史生安主内侍部令史諸陣府生番長舍人依レ差給レ之（〇）延喜式主殿式云毎日早朝頭率ニ餘下ニ掃ニ治御前及官掖所々是則主殿寮の朝ぎよめなり前にも記す（ヌ）職員令云宮内省管ニ職ニ寮四司十三ニ卿一人掌下出ニ納諸國調雜物春米官田及奏ニ宣御食產ニ諸方口味事上大輔一人少輔一人大丞一人少丞二人大錄一人少錄二人史生十八省掌二人使部六十人直丁四人　是ら官人がまかでたる成べし或云宮内省の人にはあら

ず春宮坊の官人なるべし　（ル）下知などする義也（ヲ）、禁秘抄云藏人所衆員廿人也又有官不レ可レ過ニ一人ニ譽拂日月飾席引役又諸御裝束奉仕之時昇殿佛名名謁籍上簀子ニ廿人內少々召仕近候レ壺流例也或給ニ所々公役ニ又上日給也　職原云六位侍可レ然之輩補レ之　（ワ）禁秘抄にみへたり前にあり

廿日のほどに、雨などふれどきゆべきやうもなし、長(タケ)ぞすこしをとりもて行、しら山（ヨ）の觀音、これ消(キヤ)させ給ふなと祈るも、物ぐるをし、さてその山作りたる日、式部丞忠隆御使にて參りたれば、茵(シトネ)さし出して、物などいふに、「今日雪の山つくらせ給はぬ處なんなき、御（レ）前の壺にもつくらせ給へり、春（ソ）宮にも弘（ツ）徽殿にもつくらせ給へり、京（ネ）極殿にも作らせ給へりなどいへば　こゝにのみめづらしとみる雪の山ところ〴〵にふりにけるかな」、と、かたはらなる人していはすれば、たび〳〵かたぶきて返しはえつかうまつらざりける、さしあざれたり、御簾の前にて人々にかたり侍らんとて、立にき、歌はいみじくこのむと聞しに、あやし、御前に聞召て、いみじくよくとて思ひつらんとぞの給はする　こゝには式部丞が御使に參り

御所々にもこと〴〵く雪の山作せ給ふと申しかばその返事に少納言が歌よまれし事をしるされたり

　廿日のほどとは雪の山作り給ひしより四五日後なるべし十二月廿日の比なり祈るもとは心底に念願する義也　さてとは是より又初の作りし日の事を云也　御使とは御門よりの御使なるべし今日の雪の御見廻にせうそこし給ふ義成べし　物などいふにとは御せうそこ啓して後に物語などする由なり　今日雪の山とは以下たゞたかゞ詞なり　御前の壺とは御門の御前のつぼなり　こゝにのみとは中宮の御かたのみ此雪の山はあるとおもひしにとなり　所々とは御門春宮弘徽殿京極殿の御所々の事を云なり　歌ふりにけるとは雪の降事をいひて雪山をかなたこなたに作らせ給ひてことふりたるといふの義をもたせたり歌の心はあきらかなり

　かたはらなる人してとは少納言の直にはいはで女官などにいはせしと也　かたぶきは頭をかたぶけて感吟する義なり　えつかうまつらざりけるとは式部丞が即座に返歌ならざりしとなり　さしあざれたりとはたはふれごとなどいひて興じたる

よしなり　歌はいみじくこのむと聞しにあやしとは少納言の詞なり式部丞は歌よむと聞しに此返歌せざるはあやしきとなり　御前に以下は中宮の仰なり又云御門の聞召てなり　よくとてとは式部丞が此歌を秀歌と思ひてや有つらん返歌せざるほどにとなり

(ヨ)宇佐縁起云白山權現八幡大菩薩大靦權現也第四十四代元正天皇養老年中越前國與加賀國坑有高巖名白山有寶池湛流水不常處已奇異也大師和尚神融於此地澄心水誦念經咒奉備法味所言定有佛神之居歟奉見色身之躰念願可現本地其時阿彌陀如來也相進波上次十一面觀世菩薩光明徹水底然而言我昔爲日本國現天神第七代伊弉諾伊弉冊尊今住此峯欲利一切衆生權現是也觀音說法之山也云々下略神社考引傳記云白山妙理權現者觀音薩埵之垂迹自在吉祥之化現也小白山大行事者妙理菩薩之輔而觀音之化也大己貴者妙理菩薩之弼而西刹教主阿彌陀也號之白山三所權現云々弘仁十四年立此宮　神名帳云加賀國石川郡白山比咩神社云々これ習合の說也今本文も習合の心なれば本文の心にまかせて注し侍る唯一の說はもらし侍る　(〇)忠隆　前に藏人忠隆とあり其人成べし　(ソ)職原云東宮春宮是一也　令義解云東宮謂太子所居也　左傳正義云四時東爲春萬物生長在東西爲秋萬物成就在西以此君在西宮太子常處東宮也本文に云所の春宮は三條院にてまします大鏡云つぎのみかど三條院のみかどゝ申き御いみないさだ是冷泉院第二の王子也御母贈皇后宮超子と申き太政大臣兼家の第一の女子なり此みかどは貞觀元年丙子正月三日生れさせ給ふ寛和二年丙戌七月十日東宮にたゝせ給ふおなじ日御元服なり御歲十一寛弘八年辛亥六月十三日位につかせ給ふ御年卅六世をたもたせ給ふ事五年云々　(ツ)大鏡云太政大臣公季のおとゞ只今の閑院のおとゞにおはしますこれ九條殿の十一郎北方の宮はらにおはします御子の女をぞ北の方にてはおはしましゝその御はらに女君一ところおとこ君ふた所女君は一條院の御時の弘徽殿の女御今におはします云々

藤氏譜云

●公季 師輔公十男 ―實成 [illegible]
―親賢
―信[illegible]
―如源 [illegible]
●―女子 [illegible]

拾芥云弘徽殿[illegible]御局[illegible]弘徽殿ノ御局是御行ナド有所也女御更衣可ニ參上一（ネ）爲光公也系圖如レ左

●師輔―伊尹 謙徳公
―兼通 忠義公 堀川
―兼家 法興院 東三條 道隆ハ是中宮定子御父 道隆也上ニ記レ之
―爲光 恒徳公 法住寺
京極祖 ●―公季 仁義公

大鏡云[二]太政大臣爲光のおとゞ是九條殿の御九郎君大臣位にて七年法住寺のおとゞと聞へさす正暦三年六月十六日にうせ給ひにき御年五十一後の御いみな恒徳公と申き御子おとこ七人女君五人おはしき

つごもりがたに、少しちいさくなる様なれど、猶いと高くてあるに、ひるつかた(三)縁に人々出ゐなどしたるに、常陸介出で來りなど最久しくみへざりつるといへば「何か、最心憂き事の侍りしかばと云に、如何に何事ぞと問に、猶かく思ひ侍し也とて、長やかに讀いづ、うらやましあしもひかれずわたつ海の、いかなるあまにもの給ふらん」と、なむ思ひ侍しといふを、にくみわらひ「人の目も見入ねば、雪山にのぼりかゝづらひありきて、いぬる、後に右近の内侍に、かくなむどいひやりたれば、などかは、人そへて爰には給はせざりし、あれが、はしたなくて、雪の山までのぼりつたひけんこそ、いと悲しけれとあるを、又はらふ

こゝには前のひたちの介が雪の山の折にも參り歌などよみたる事をいふなり　つごもりとは十二月の晦日なり　ちいさくとは雪の山が少ちいさくみゆるとなり　などいとひさしく以下は女房達の詞なり　なにか以下は常陸介が詞也　何事ぞととふにとは女房達かさねて問ふなり　なをかく思ひしとは又ひたちの介が詞也　歌は海士に尼をかくして始終海士の縁より詞をつゞくるなり　うらやま

しとは前のかたわなる尼が事をうらやむなり　あしもとは葦の事によせわが足の勞(ツカレ)たる心を云也　わたつ海とはあまといはん爲なり　うらやましといふも同じ義なり　あまとは海士によせて前の尼の事を云也　もの給ふとは藻の事によせて賜の事を云なり前の尼に給はりし絹の事なりすべて歌の意はわれをすてゝ尼をめぐみ給ふは心うき事なればまいり侍らぬとうらみたる心をよめり　にくみ笑ひとは常陸介がくねる心を女房達のにくみ笑ふと也　人の目も見いれねばとは恨みくねるをも人々の目にかけぬと也　こゝにとは右近の內侍がかたへと也　あれがとはひたちの介が事をいふ右近が詞也　いとかなしけれとはかれがうらみしことのはをも聞いれねばいかばかり彼が心悲しからんと也　又云雪の山そこなひやせんとかなしく思ふと也　又笑ふとは少納言女房達などの笑らふと也
(三)など、句を切べし何(ナニ)となどいひて問ふ義也
扨雪の山は、つれなくて年もかへりぬ、つゐたちの日の、夜又雪(イ)おほく降(フリ)たるを、うれしくも、降(フリ)つみたるかなと思ふに、これはあいなし、初のきはをきて、今のをばかきすてよと仰らる、うへにて局へいととうをるれば、さぶらひのおさなるもの、ゆのはのごとくなる、とのゐぎぬの袖のうへに、あをきかみの松につけたるをゝきて、わなゝき出たり、そはいづこのぞととへば、(キ)齋院よりといふに、ふとめでたくおぼへ、とり參りぬ、まだ御とのごもりたれば、母屋にあたりたる御格子をこなはんなど、かきよせてひとりねむじあくる、いとおもし、かたつかたなれば、きしめくにおどろかせ給ひてなどさはするとの給はすれば、齋院より御ふみのさふらはんには、いかでかいそぎあけ侍らざらむと申に、げにいととかりけりとて、おきさせ給へり、御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌二つを、卯つえの樣(サマ)に、かしらつゝみなどして、山たちばな、ひかげ、菱門冬(ヤマスゲ)などうつくしげにかざりて、御文はなし、たゞなるやうあらんやはとて御覽ずれば、卯づえのかしら裹みたる、ちいさきかみに、「山どよむをのゝひゞきをたづぬればよはひの杖の音にぞありける、」御返しかゝせ給ふ程も、いとめでたし、齋院には、是より聞へさせ給ふ御返も、なを心ことにかきけがし、おほく御よう

ゐみへたる、御使に、しろきをり物のひとへ、すはうなるは、梅なゝめりかし、雪のふりしきたるに、かづきてまいるもおかしう見ゆ、このたびの御返事を、しらずなりにしこそ、口おしかりし

こゝには雪の山の年立歸る迄有事をいふ其つゞきの又のあした齋院より卯槌をまいらせ給ひし事を云なり　是はあひなしとは初の雪こそあらがひの事など侍れば愛せらるれ今の雪はしばらく愛なきとなり　かきすてよとは雪の山をためし給ふゆへに後の雪をはらはるゝ也　うへにてとは中宮の御座御曹子を云なり是より少納言の詞なり　つぼねとは少納言の局なり夜は中宮御座のほどに宿直して早朝に局へさがるとなり　さぶらひ以下は齋院の御使の事をいふなり　ゆのはのごとくなるとのゐぎぬとは御使の侍が裝束也　あをきかみとは卯槌をつゝみし物也　松につけたるとは子日の松につけて有義なるべし　松をきてとは袖の上に置て也　わなゝき出たりとは寒氣にとく來れるさま也　そはとはそれはいづかたよりの奉り物ぞと少納言の問はるゝなり　ふとめでたくおぼへ以下は少納言詞なり　まだ御とのごもりは中宮いまだ起させましまさぬとなり　母屋以下は少納言の心なり則中宮の御寢なる御帳の間なるべし　おどろかせ給ひとは中宮の御目のさめたる由なり　などさはするとは女宮のすべき事少納言何とてさやうの事するぞとなり　齋院より以下少納言の啓せらるゝ詞なり　げにいととかりけるとは中宮の仰なり　御文とは彼あをき紙に包みしを御文かと思召ひらかせ給ふ也　たゞなるやうあらんやはとは御ふみのなきはいかさま御歌などやあらんと御心付事也　山どよむをのゝひゞきとは伐木の詩の心をうけたる歌なり山どよむとは山は不變の象長生なる故にいふなり則卯槌を伐所の縁なり　をのゝひゞきとは山に樹神のひゞきの常住不變に有と等閑におもひしが此たびよく〳〵尋試れば樹神のひゞきにはあらで今此君が齢のつえ伐音ぞとしられ侍るとなり山の不變常住なるごとく君の齢を祝する心也　御返しとは中宮の御返歌し給ひしとなり　齋院には是より聞へさせ給ふ御返とは齋院には又中宮の御返歌に再返あらんと案じ給ふ由なり　心ことにとは秀歌をと思召おほく草案清書など有

となり　御使に以下は齋院よりの侍に祿給ふ事をいふなり　雪のふりしきたるにかづきてまいるもおかしとは時に應じて白きひとへすはうなどの色は雪中の梅花のやうにみなさるゝとなり　此たびの御返事とは中宮の御返歌を聞もらしたると也
(イ)勘物云長德元年正月一日乙卯雪降云々 ▲一條院年號次第は　永延元年御即位　同二年　永祚一年　正曆元二三四五　合五年　長德元二三四合四年　長保元二三四五　合五年　寬弘元二三四五六七八　合八年　都合廿五年御在位歟以レ是引合セテミルベキナリ(キ)未レ詳皇胤圖を按ずるに規子内親王選子内親王などは圓融院の御いもうと其比の齋院なりこれらの御方にや又簾中抄には選子内親王圓融院の時の齋院に立給ふと云々圓融院より今一條院迄の間齋院立給ふは選子内親王なればい今云も選子内親王の御事成べし

雪の山は、まことに、こしのにやあらんとみへて消げもなし、黒くなりて、みるかひなきさまはしたれど、かちぬる心地して、いかで十五日待つけさせんとねんずれど、七日をだにえすぐさじと、猶いへば、いかでこれ見果むと、みな人おもふほどに、俄に、内へ三(一)日に入せ給べし　いみじう口おしく、此山のはてをしらでやみなむ事と、まめやかにおもふほどに、人もげにゆかしがりつるものをなどいふ、御前にも仰らる、おなじくは、いひあてゝ御覽ぜさせんとおもへるかひなければ、御物の具はこび、いみじうさはがしきに、あはせて、木守といふものゝ、築地のほどにひさしさしてゐたるを、縁のもとちかくよびよせて、此雪の山いみじう守りて、わらはべなどにふみちらさせず、こぼたせでよく守りて、十五日までさふらへ、その日にあたらば、めでたき祿給はせんとす、わたくしにも、いみじき悅ひいはんなどかたらひて、つねに(三)大盤所の人、げすなどにこひて、くるゝを、くだ物や何やと、いとおほくとらせたれば、うちゑみていとやすき事、たしかに守り候はん、わらはべなとぞ、のぼり侍らむといへば、それをせいして、きかざらんものは、ことの由を申せなど、いひ聞せて、いらせ給ひぬれば、(二)七日までさふらひて出ぬ、そのほども、是がうしろめたければ、おほやけ人、すまし、

おさめなどして、たへずいましめにやり、(三)七日の御節供のおろしなどをさへ、やりたれば、おがみつる事など歸りては、笑ひあへり

雪の山あらん程を待ぬる間に中宮内へ入せ給ふ故木守りにおほせて雪の山を守らせし事をしるせり　こしのにやとはたとへいふなり前のしら山に祈るといふに應ずる文也　黑くなりてとは雪も程ふれば後黑くなるなり　かちぬるとは少納言の意也　七日をだにえすぐさじとは女房達の意なり正月二日三日比に如レ此いふと也　いかで以下は地の詞也　内へいらせ給ふとは中宮の内へまいり給ふとなり　いみじう以下は少納言が心なり　人もげにとは女房も同じ心ぞとなり　御前とは中宮なり　おなじくは以下は少納言の意を述らるゝなり心あきらかなり　御物の具はこびとは中宮の内へいらせまします間とのゐ物などの類なり　あはせとはとりあはせてなり　木守りとは栽木の番などするもの成べし　さふらへとは守り候へなり　めでたき錄給はせんとは中宮より給はらんとなりわたくしにもとは少納言自分にも物とらせんとなり　こひてとはくだ物や何やの食物なりそれを木守りにとらせしとなり　うちゑみ以下は木守りが諸意をいふなり　それを以下は又少納言のいひ付也　事のよしを申せとは中宮仰のよしを木守にいひ付らるゝ上にも猶又童部のぼらば此方へ其由申來れと也　いひ聞せてとは木守りにいひふくむる也　入せ給ひぬればとは中宮内へいらせ給ひしと也　七日までさふらひて出ぬとは少納言内へ御供に侍りて七日にわが里へさがりたるとなり　そのほどもとは二日より七日までの間も氣づかひたると也　いましめにやりとは木守りが方へ警につかはすと也　おろしとは供御の餘殘也　おがみつるとは木守が頂戴せしさまを使のおさめが歸て申由也

○越路なり越路の雪のごとく成と也　(一)勘物云入内事無ニ所見一若密儀歟（上）大盤所前にみえたり　(二)勘物云七日中納言實資卿叙ニ正三位一拜賀式御曹司中宮已無レ人令レ啓宜レ曰レ出　(三)七日御粥など也前にしるす

さとにても、まづあくる、則これを大事にしてみせにやる、十日のほどには、五日まつばかりはありと

いへば、嬉しくおぼゆ、又晝も夜もみせにやるに、十三日の夜雨いみじうふれば、是にぞ消ぬらむといみじう口おし、いま一日二日も待つけてと、夜もおきゐてなげゝば、聞人も物ぐるをしとわらふ、人の出てゆくに、やがておきゐて、げすおこさするに、さらにおきねば、にくみはら立れて、おき出たるを、やりてみすれば、(四)わらふだの程なん侍る、木守いとかしこうまもりて、(三)わらはべもよせ侍らず、明日明後日までもさふらひぬべし、祿給はらんと申といへば、いみじう嬉しくて、いつしかあすにならば、いと〻く歌よみて、物に入てまいらせんと思ふも、(五)いと心もとなうわびしう、まだ暮きに、おほきなるおりひつなどもたせて、是にそのしろからん所、ひたものいれてもてこ、きたなげならん所は、かきすてゝなど、いひくゝめてやりたれば、いととくもたせてやりつるものを、ひきさげて、はやううせ侍にけりといふに、いとあさまし、おかしうよみ出て、人にも語つたへさせんと、(六)うめきずむじつる歌も、いと淺ましうかひなくなりぬ、いかにしつるならん、きのふまでさばかり有けん物を、夜のほどに消ぬらん事と、(七)いひくむずれば、木守が申つるは、昨日いとくろう成まで侍りき、祿給はらんとおもひつる物を、給はらずなりぬる事と、手を打てさはぎ侍りつるなど、いひさはぐに、内より仰ごと有て、扨雪はけふまでありつやと、のたまはせたれば、いとねたう口おしければ、年の内朔日までだにあらじと、人々啓し給ひしに、昨日の夕暮まで侍しは、いとかしこしとなん、おもひ給へる、けふまではあまりの事かなん、夜のほどに人のにくがりて、とりすて侍るにやとなん、をしはかり侍と、けいせさせ給へなど聞へさせつ

雪の山十五日迄あらんとの用意歌などよみ侍ゐる程に十四日の夜俄にみなつき侍れば少納言も驚き中宮にも尋ね給ふ由を書れたり　さとにてもとは少納言七日過て私宅へまかでし事なり　まつあくるとは夜のあくるとひとしくみせにやる義なり　十日のほどにとは正月十日なり　十三日とは正月十三日なり　これにぞ以下は少納言の意なり　おきゐて起居なり　人もとは人もみて物ぐるはしとおもふとなり　人のおきてゆくとは晨に人々の御さうしへゆくに少納言の下女そへてみせにやらる

〻也　やがておきてとは少納言のやがてとく起てなり　げすおこさするとはみせにやらんとておこす義なり　さらにおきねばとは下女がおきかぬるさまなり　にくみはら立てとは下女がにくげに腹だつと也　又云下女のおきかぬるをみて少納言の腹だつと也　おき出たるとは下女がやう〳〵起出たるとなりやりてみするとは雪の山をみせにやるなりこれ則十四日の事なり十三日の夜雨ふりし故十四日にいととくみせにやるなり　わらふだ以下は下女みしやうすを歸りて申なり　さぶらひぬべしとは雪の山消ずしてあらんと也　いみじう以下は少納言の心なり歌よみてとは雪の山のあらがひ侍し意を詠じて雪を器に入れそへ参らせんとおもふ用意なり　まだくらきにとは十五日の晨なり雪の山を取にやるなり　是にしろからん以下は下女にいひ付る義なり　やりつるものとはおりひつなり　引さげてとはむなしく持返りたるとなり　はやうせ侍にけりとは使の下女が詞なり雪の山はとくにおはしまさぬとなり　いとあさましとは少納言の心なり　おかしうよみ出てとは歌の事なり

以下少納言悔の詞なり　いかにしつるならん以下は不審する義なり　夜の程にきへぬらん事とは消ぬる事を惜む義なり　こもりが申つる以下は木守がいひし様子を使の下女が申なり　手をうちてとは夜の間に消失ぬるゆへ望みし詠もいたづらに成ぬとのこりおほかりつると也　などいひさはぐとは使の下女が申さまなり　内よりとは中宮の仰言なり三日に内へ入せ給ふにより内よりといふなり　扨雪はけふまで以下は仰の詞なり　いとねたう口おしとは少納言の詞なりきのふまで侍しに今夜の内に何者が如レ此みなにせしぞとおもふにねたましう口おしきと也　年のうち以下は少納言の中宮への御返事なり　いとかしこしとなんおもひ給へるとはけふすでに雪なしとてもゆふべまで侍ればよくいひあてしと思召給へとなり　けふまではあまりの事にかなんとはさしづの日迄あらんはあまり十分にていかゞあらんづれば少は不足なるもよからんかとなりされど人々の我を悪にや夜の間に取捨つらんとおしはかるとなり　けいせさせ給へとは中宮へ少納言の里より御返事なり　聞へ

させつとは御取次の女房へ也
（四）和名類聚云孫愐曰蒲圓草褥也此間云ニ圓座ニ一云ニ和良布太一　（五）折櫃也　御膳具を入る櫃の蓋など成べし或本云おもひつと書り此義もおもしろく侍るおもひつは折櫃なり源語類聚云折櫃に入て献物なり　（六）吟誦ウメキズンジ　詠歌の氣にあはぬ心をも云なり　（七）いひ悔る心なり
扨廿日、參りたるにも、まづ此事を御前にてもいふ、みなきえつとて、（八）ふたのかぎりひきさげてもてきたりつる、（九）ぼうしのやうにて、則まうで來りしが、淺ましかりし事、ものゝふたに、小山うつくしうつくりて、しろき紙に、歌いみじうかきて、まいらせんとせし事など啓すれば、（十）いみじくわらはせ給ふ、御前なる人々もわらふに、かう心にいれて思ひける事を、たがへたれば、つみうらん、誠には、四日の夜侍どもをやりて、取すてさせしぞ、返事にいひあてたりしこそいとおかしかりしか、その翁いできて、いみじう手をすりていひけれども、仰ごとぞ、かのよりきたらん人に、かうきかすな、さらばや、うちこぼたせんといひて、（十一）左近のつかさ南の築地の外に、みなとりすてゝけり、いとたかくておほくなん有つると、いふなりしかば、げに廿日までもまちつけてまし、えうせずば、今年の初雪にもふりそひなましといふ、うへも聞召て、いとおもひよりがたくあらがひたりなど、殿上人などにも仰られけり、さてもその歌を語れ今はかくいひあらはしつれば、おなじ事かちにたるなり、語れなど御前にも仰られ、人々もの給へど、何でうにかさばかりうきことを承ながら、啓し侍らんなど、まめやかに心うがれば、うへもわらはせ給ひて、まことに年比はおほくの人なめりとみつるを、是にぞあやしとおもひしなど仰らるゝに、いとゞつらく、うちもなきぬべき心地ぞする、いであはれいみじき世中ぞかし、後にふりつみたりしゆきを、うれしとおもひ侍しを、それは愛なしとてかきすてよなど、仰ごと侍しかと申せば、げにかたせじとおぼしけるならんと、うへもわらはせおはします。　廿日に少納言内へまいり雪の山有つるほどの事用意などを啓すれば中宮にも十四日の夜ひそかに雪の山とり捨させ給ひし事を互にあかさせ給ふ事をかけり是すべて雪の山の心を結ぶの文なり少納言心にい

みじういひあて興ある事に思ひしを今一夜の內に本意なく成ぬれば少納言心うき事に思ひていとゞつらくなど書れたり此ゆへに當段の題物のあはれしらせがほなると書出したる下に雪の山の事をかゝれたりよく題の心をうしなはずしてみるべし　廿日參りたるとは少納言里より內へまうのぼりし義なり　まづ此事とは雪の山の事なり　みなきつとは十五日の朝雪の山とりにつかはしたるやうを啓するなり　ぼうしのやう以下は少納言前かたのやうす又は內々の用意の心を啓せらるゝなり　まうできたりしかとは雪の山つくられし時物のふたに入てはこびし事をおもひ出していふなり　物のふたに小山うつくしうとは小山のごとくうつくしうつくり奉らんと內々用意せしとなり　いみじくわらはせ給ふとは中宮にわらはせ給ふとなりかう心にいれて以下は中宮のあかし給ふ義也　如レ此心にいれふかくおもふ事を假初の事と思召取すて給ひしとなり　つみうらんとは妄語僞語の罪をそろしとて懺悔し給ふ心なり　四日の夜とは十四日の夜なり　返事にとは少納言より中宮への御返事なり則前にみへたり　その翁とは前の木守なり雪の山をこぼたせにつかはされし時木守が制したる義なり　仰ごとぞとはみかどの仰ごとなり　かのよりきたらん人以下は少納言が方へ如レ此事を聞するなど也　さらばやうちこぼたむとは木守によくいひふくめ雪の山こぼつとなり　えうせずばとはうちこぼたずば廿日も過ぎ年の初雪降迄もあらんと也　うへも聞召とはみかどに聞召なり　いとおもひよりふかくとは少納言が志をの給ふ也　何でうにか以下少納言詞なり　さばかりとはこぼたせ給ふ事を云なり　うへもとは是もみかどの御事なり　年比はおほくの人なめりとはみかどの御詞なり日比は人なみ〱に覺召御覽せしに此度の事につゐて只ならずあやしく思召となり　いとつらくとは以下少納言が心なり　後にふりつみたりしとは少納言かさねて前かたのやうすをみかどへ啓する義なり　げにかたせじ以下はみかどの仰なり汝がいひしごとく勝せじとて中宮のさせ給ふならんと仰られ笑せ給ふと也　爰迄そこばくの文第三節の內雪の山事をいひし也　右一段三節の文す

べて物のあはれしらせがほなる事どもを書連たり
就中第三節雪の山の章詞しげく文長く侍ればよく
題の心を含てみるべき也
(八)前のおりひつの蓋なり或は今の世のひろぶた
の類歟　(九)綿帽子のやう成となり　(十)如レ此
にといふ義也　(ア)左近衛の職の者と云義なり大
中將にはあらず府生番長の官也

【四十五段】(一)目出度もの、(イ)(ロ)からにしき。(ハ)かざり太刀、
つくり佛のもく、色あひよく、はなぶさながく咲たる
藤の松にかゝりたる、(ホ)六位の藏人こそ猶めでたけれ、
いみじき公達なれども、えしもき給はぬあやおりも
のを、心にまかせてきたる、(ヘ)あを色すがたなどいとめ
でたきなり所衆(ト)雜色只の人の子どもなどにて殿原の
四位五位六位も、つかさ有が、下にうちゐてなにと
みえざりしも、藏人に(チ)なりぬれば、えもいはずぞあ
さましくめでたきや宣旨などもてまいり、(リ)大饗の折
の、(ヌ)あまくりのつかひなどにまいりたるを、もてな
しきやうようし給ふさまは、いづこなりし、あまく
だり人ならんとこそ、おぼゆれ、御(ル)むすめの女御后
おはします、又まだしくて(ヲ)姫君など聞ゆるにも、御書
の御使にて參りたれば、御ふみ取いるゝよりうちは
じめ、しとねさしいづる袖口など、あけくれみし物
ともおぼへず、下がさねのしりひきちらして、ゑぶ
なるはすこしおかしうみゆ、御手づから御盃など
さし給へば、わが心にもいかにおぼゆらん、いみじう
かしこまり、べちにゐし家の子公達をも、けしきばか
りこそよういし、かしこまりたれ、おなじやうにうち
つれありくよ、うへのちかうつかはせ給ふさまなど
みるは、ねたくさへこそおぼゆれ、御ふみかゝせ給
へば、御すゞりのすみすり、御團(ウチハ)などまいり給へ、
われつかうまつるに、三年四年ばかりのほどを、な
りあしく物の色わろく、ねたきものかなとよろしう
てまじらはんは、いふかひなき物なり、かうふりの
期になりて、をるべき程のちかくならんだに、命よ
りはまさりておしかるべき事を、臨時の御給はりな
ど申て、まどひをるこそいふかひなくおぼゆれ、昔
の藏人は、今年(ワ)の春夏よりこそ、なきたちけれ、い
まの世にははしりくらべをなんする、(カ)はかせのざえ
ある人は、めでたしといふもおろかなり、顏もいと
にくげに、下らうなれども、世にやんごとなきもの

におぼはれ、かしこき人の御前にちかづき參り、さるべき事など問はせ給御書(ゴシヨ)の師にてさふらはゞ、うらやましくめでたくこそおぼゆれ、願文もさるべき物の序(ジヨ)などつくり出して、ほめらるゝもいとめでたし　此段心あきらかなり事品おほく侍れども文すくなきゆゑすべて三節にして釋し侍るなり就中此第一節は彼此とり合せて目出度事をいひ末に藏人の朝庭に侍る目出度さまを云也　目出度物とは當段の題なり花美なる物殊勝なる事祝賀などの意をいふなり實はみな一理なるべし　からにしき蜀江の錦の類也みかどの御しとね幄帳(トバリ)にも用ひ殊に神の御戸代(ミトシロ)にかけ奉る物なれば目出度物といふ初に書しるさるゝ成べし　六位の藏人以下は六位の禁色をゆるされ内つかたちかう宿直し奉るさま美麗なるをいふなり　あをいろすがたとは麴塵(キクジン)の袍なり是則天子の御服なりそれを聽着するなり　たゞの人の子以下は同じ五六位にても藏人の頭かけねば規模ならずといふ義なり　下にうちゐては藏人頭の下座(グサ)に同じ五六位がつくとなり　大饗以下は大臣大饗などの時も藏人のいみじく目出度事をいふなり大饗の次第後書しるす　きやうようとは饗應なり　いづこなりしとは何人が如レ此の御もてなしにあづからん藏人頭なればこそしか侍れいづくよりの天人ぞと請問するこゝろ也　あまくだり人ならんとは藏人のゆるし色をよそほひて御使に參るさまを天人のやうなるとなり　御むすめ以下は是も藏人の御使にまいる御方の事を云なり　又まだしくて姬君とは攝政家の御息女のいまだ女御后に立給はぬ時とてもめでたきとなり　御みふとりいるゝとは御使に參りし先にてとり入るゝ義なり　うちはじめとは御ふみ取いるゝ女房より打はじめいづれもみなれず美麗なるさまぞとなり　袖口などゝは茵をもて來る女房達のさまなり　下がさねのしりひきちらしとは御使の藏人の體なり御手づからとは女御后或は姬君などの御使に饗應し御盃給はる意なり　わが心とは御使の心にも有がたく思ふべしと也　べちにゐし家のことは攝家の御家禮の公達を云なり　けしきばかりこそよういしとは御家禮衆の御使に來給ふは他家の如く隔心に侍らねばけしきばかりの饗應用意ぞとなり

おなじやうにうちつれありくとは御家禮に隔心なき由なり殿上にてはなべてかしこまれども御使の時は御家禮の心やすきといふ詮を再釋するなり是則上の文をうけて釋する義なり或又下の文にかけてみる時は藏人と藏人ならぬ公達との殿上にての有樣をいふ也　うへの近くつかはせ給ふとは藏人はちかく召つかふ故に藏人ならぬ公達のねたくおもふとなり　御ふみかゝせ給へば以下は近習の事を云也　われつかうまつる以下は藏人ならぬ公達のうへをいふなり　畢竟藏人と藏人ならぬ公達の優劣をいふなり　かうぶり以下は藏人下事をいふなり藏人を除て受領などにうつるはかなしきとなり是藏人の近習の詮をいふ義なり　りんじの所々の御給りとは臨時の除目などなり　或むかしの藏人とはむかし今のかはりめをいふなり　春夏よりこそなきたちけれとは來年の除目に藏人頭になるべき人はことしより心操容儀をつゝしむと也　はしりくらべとは官職をかろ〳〵しく思ひて競望する義也　はかせ以下は文章得業の人の事を云なり藏人の沙汰と別なり　かしこき人とはみかど春宮

などを申なり　願文もとは願文あるひは實錄勅選集の序を文章の人書ことといにしへよりの流例也　（イ）藻鹽草にあはれは又めでたしと云心もありこれほめたると同心なり又愛したる心もあり多はほめたる也神書の傳にいはく日神天石窟を出給ひし時天上初晴衆面明白なりし心を目出度といふと云々　（ロ）蜀江錦呉翳漢翳の義成べし今に神衣靈府等に用る也　古語拾遺云秦酒公進仕蒙レ寵詔聚二秦氏一賜二於酒公一仍率二領百八十種勝部一蠶織貢調充二積庭中一云々　鎭座本紀云駈仙蹕比錦蓋覆日繩曳云々　此外神宮朝廷の御用延喜式儀式帳等にのせられ尤目出度物也　（ハ）西宮記云餝劒東宮及參議已上節會時着レ之　東山左府御說云餝太刀節會及御禊行幸供奉公卿臨時祭使等着レ之　（ニ）或本つくり竹のもへゐ色あひふかくとあり共に以て心得がたし傳寫の誤なるべし如レ例傳本のまゝ也（ホ）六位藏人前九段註　職原云六位職事又聽二禁色一至二極﨟一者著二麴塵袍一是申二下御服一之儀也　（ヘ）靑色すがたとは麴塵袍を云なり世に山鳩色といふは是也又黃櫨染とも云なり紋桐に竹鳳凰なり下黃にて

上青なり柳の色に似たり故に青色すがたといふ也
（ト）禁秘抄云員數八人代々[illegible]子
孫又可レ然諸大夫多補レ之雖レ爲ニ[illegible]人一
不レ可レ着ニ指貫一只狩袴[illegible]也上[illegible]
下ヨ知藏人一藏人御ニ出納ニ下一[illegible]
簿一自ニ御所一下[illegible]上ニ事
或内侍宣レ之（チ）宣旨は[illegible]
書て上卿につかはす是を口宣といふ其書樣の[illegible]
方にあるを口宣案といふ上卿其口宣を[illegible]
別に一通を寫し外記或は史に下知す外記史亦一通
を寫して年月の下に自の官位姓名を記し[illegible]人
につかはすこれを宣旨云なり[illegible]し
げく有ゆへ略之[illegible]
旨といふは大[illegible]の宣旨なるべし西宮記云大[illegible]
事宣旨内侍宣ニ[illegible]以下一
員陣ニ宮門一（リ）江次第云[illegible]中門外一[illegible]
人降ニ南階一當ニ座下方一[illegible]
階前ニ再拜訖相[illegible]
記云上下會集[illegible]
客列立辨少納言在[illegible]

[illegible]着ニ本座一主人便着レ
[illegible]座諸卿着座除ニ大臣一之外一人
着ニ北[illegible]着獻盃時同ニ非參議一
[illegible]盃二獻後居ニ[illegible]飩一
三獻[illegible]起レ座獻盃五獻後
主[illegible]四獻[illegible]燒藥甘栗ニ云々凡二
宮の大[illegible]は式事しげく且故實のみ
な[illegible]耳（ヌ）西宮記云給ニ蘇甘栗一事以ニ六
位[illegible]使向ニ左大
臣[illegible]大二小二甘栗子十五六籠土八中八已上
[illegible]外居ニ一荷一使ニ藏人一青
[illegible]向ニ大臣家一云々
下路（ル）親王攝家華族等諸家のむすめに渡る心
也（ヲ）これは攝家に限る歟（ワ）競望の義也
（カ）文章博士の官人及び世の博達の士をも兼て云
[illegible]令云大學寮博士一人掌下教ニ授經業一課
試學生[illegible]助教二人掌同博士學生四百人掌ニ分受ニ經
業一云々[illegible]院[illegible]云紀傳ノ儒トテ菅家江藤氏ノ儒
者[illegible]ズル[illegible]學士トテ文道ニツキテ尊崇ノ官
也當時ハ[illegible]野一流儒業ヲ遂タル人任之尤賞

翫之職也儒家ニアラザル人ハ不ニ任候ニ官也 （ヨ）
天子を申す也聖體賢王など、中殷也 禁秘抄云寛
平小式巳時召ニ侍讀ー次御膳也云々御學問可レ涉法之
時更不レ可レ及ニ時刻涉法ー事也侍讀無ニ朝行中間稀ー
主上卷ニ御簾ー有ニ諷習ー （タ）法式は文粹群書等に
みへたり不レ及ニ引載ー
法師のざえある、すべていふべきにあらず、持經者
の一人してよむ(一)よりも、あまたが中にて、時などさ
だまりたる御讀經などぞ、なをいと目出度なり、く
らふなりて、いづら御讀經油をそしなどいひて、よ
みやみたるほど忍びやかにつゞけゐたるよ 第二節
法師出世間の身にめでたき事どもをかけり 法師
のざへとは道智兼ていふ心成べし 持經者以下は
讀誦の法師を云也 時などゝは日中日沒などの義
也 忍びやかにとは小音に誦ずると也
(二)前にみえたり
后のひるの行啓(三)、御産屋(オホンウブヤ)、宮はじめの(三)さほかしく、
こまいぬ(四)大床子(五)など持まいり、御帳のまへにしつら
ひすへ、内膳(六)御竈(ヘツイ)渡し奉りなどしたる、(七)姫宮など聞
へし只人と社(コソ)露みへさせ給はぬ、一の人の御ありき、
春日まふで(八)、ゐびぞめ(九)のおりもの、すべて紫なるは、
何も〳〵目出度こそあれ、花も、糸も、紙も、むら
さきの花の中には、かきつばたぞすこしにくき、色(十)
はめてたし、六位の宿直すがたのおかしきにも、紫
のゆへなゝめり、廣き庭に雪のふりしきたる、今上一(イ)
の宮また童(ワラハ)にておはしますが、御叔父(ヲヂ)(ロ)に上達部など
の、わかやかにきよげなるにいたかれさせ給ひて、
殿上人などめしつかひ、御馬ひかせて御覽じあそば
せ給へる、おもふことおはせじとおぼゆる 第三節
彼此とりませて目出度事共を擧られたりいづれも
心明らかなり 御うぶやとは御産屋の御祝義を云
也 みやはじめとは皇子の内へいらせ給ふ義なり
御誕生は里にて有御いみあきて坊に入せ給をいふ
なり 御へついとは、皇子のましますの所の厨屋(クリヤ)な
り今の御臺所の用意也 姫君など聞えしとは宮は
じめの御方姫君にてましませばかろ〳〵しき人々
は憚りて露みへぬとなりたゞ人とは御一門の外は
といふ義なり ゐびぞめ以下はきぬ物の色花など
をとりませていふ心あきらかなり 紫なるは何も
〳〵めでたくとは紫は赤と黒とをまじへ赤色は

君黑は臣に象とり一青臣合體の色なりされば目出度といふなり　六位のとのゐすがたとは常のなみ〳〵の六位にはあらず禁色聽（キンジヤユリ）たる方々成となり此ゆへに宿直すがたとはいふなり近習の義也　廣き庭の雪則上にいひし意なり　今上一の宮以下は敦康親王のいみじき御ありさまを少納言内ずみの間にみし事を記されたり　今上とは一條院の御事なり　一の宮とは中宮定子の御腹敦康親王の御事なり　御おぢとは中宮定子の御はらからなり系圖にみやすく記し侍る此事を終りに書て御産屋（ウブヤミヤ）宮はじめの文に應じて當段の日出度心を結び侍るなり（二）后の渡御を云なり或は中宮の外へ出給ふを云也　（三）東宮に立給ふ時の義なり或は中立の定り給ふも宮はじめと云なり今は東宮なるべし　（四）駒犬（コマイヌ）也宮社の座に駒犬を置事大甞會元日なとに隼人司の禁外の門を警固すると同じ心也皆是邪氣をはらふ義也日本紀延喜式及譜家記に多くみへたり

（五）儀式の御膳を聞召時大床子にて供ふる也

（六）内膳は内證方の膳を奉行する官也　職員令云内膳司奉膳二人掌下惣ニ知御膳一進食先嘗事上典膳二人掌下造二供膳一調ヲ和庶味一寒温之節上令史一人膳部四十人掌造二御食一使部十人直丁一人駈使丁二十人一調度式列は延喜式内膳年料下にみへたり　御竈オンヘッヒ延喜式　（七）職原云執柄必蒙二一座之宣旨一故稱二一ノ人一又云二一ノ所一　是今攝家なり本府の隨身を具せられ時めく御ありさまなり榮花物語大鏡などに御ありきのいかめしきめでたきさまみへ侍るつれ〳〵にも此所うつして書出したり　（八）大鏡云春日の行幸はさきの一條院の御時よりはじまれるぞかしそれに代々おさなくおはしませどもかならず有べき事にてはじまりたるれいに成にたればば大宮御こしにそひ申させ給ひておはします云々前一條院の御時にも大入道殿の幸行申をこなはせ給ひけるにや云々是則關白の春日詣なり行幸にそひ參り給ふも同じ心也　（十一）禁色を聽着する義をいふ也　（イ）今上一條院也前注す一宮も敦康親王なり前に注す又後へニモアリ

（ロ）中宮定子の御兄弟は敦康親王の叔父也

●道隆──┬──伊周正二右ㇾ辨儀同三司內大臣　母高二位業忠女
　　　　└──道賴母守仁王女

—隆家 正二權中納言 母同伊周公
—周頼 從四木工頭 母伊豫守奉孝女
—周家 從四下大舍人
—好親 右少將從四下
—頼親 左中將從四下
—隆圓 僧都君母同伊周 下ニ傳アリ
—女子 中宮定子母同
—女子 淑景舍女御母同
—女子 帥宮御休所
—女子 御匣殿
—女子 母對御方

此中宮同腹の御兄弟をさして御叔父の上達部といふ也

【四十六段】なまめかしき物、ほそやかにきよげなる公達の直衣すがた、おかしげなる童女の、うへのはかまなど、わざとにはあらで、ほころびがちなるかざみばかり着て藥玉などながくつけて、高欄のもとに、あふぎさしかくしてゐたる、わかき人の、おかしげなる夏の木帳の下うちかけて、白き綾ふたあひひきかさねて、手習ひしたる、うすやうのさうしむらごの糸して、おかしくとぢたる、柳もへたるに、青きうすやうに書たる文つけたる、ひげこのおかしうそめたる、五葉の枝につけたる、三重がさねのあふぎ、五重はあまりあつくて、もとなど、にくげなり、よくしたるひわりご、白きくみのほそき、あたらしくもなくて、いたくふりてもなきひはたやに、さうぶうるはしくふきわたしたる、青やかなる御簾の下より几帳のくち木形のあざやかにて、ひもの風に吹なびかされ、つやゝかなるも、いとおかし、夏のもかうのあさやかなる、すのこのかうらんのわたりに、いとおかしげなる猫の、あかきくびつなに、白きふだつきて、いかりの緒くひつきてひきありくも、なまめいたる五月の節の、あやめの藏人、さうぶの鬘の、あかひもの色にはあらぬを、ひれくたいなどして藥玉を、みこ上達部などの、たちなみ給へるに奉るも、いみじうなまめかし、とりてこしにひきつけて、ぶたうはいし給ふもいとおかし、火とりのわらは、小忌の公達も、いとなまめかし、六位のあを色のとのゐすがた、りんじのまつりの舞人、五節のわらはなまめかし　此段はことばしげく事品おほく侍ればよく

付て見るべしまぎらはしき段なり凡こゝより下シモの遠くこそえいくまじけれと云迄當段の內なり人皆にわけてみるべし就中此一節はかれこれとりまぜて題の心を云也　なまめかしき物とは是當段の題なり花車風流にみゆる事を云なり又めづる心也　くす玉などつけてとは五月五日に縫殿より奉るくす玉をうへより給はり童女のひぢにながく付てよそひありき又はおはしまのもとに扇にて顏さしかくしやすらふさまいとなまめかしきとなり　した打かけとは下へたれたる帷子をうへゝ打あげて風をもとむる心なり　うすやう以下は調度の類を云なり　柳もへたるとは同じ色の紙にて文短冊などつけて人の方へ遣りたらんも又に得たらんもなまめかしからむと也　靑やかなる御簾以下は女御更衣などのおはします所のさまを云也　夏のもかう以下も女宮姬宮などの御方の事を云也　緒とは手がひのねこ也前に猫の事侍る其心を得てみるべし
　五月の節以下に藥玉のことぶきを云也　奉るとは縫殿より献る藥玉を公達に給はるそれを[illegible]れ承りて取渡す義なり　とりて以下は公達の頂戴してぶたう拜するなり　ひとりのわらはとは薰鑪を持者をいふなり　小忌の公達とは靑摺唐衣を着日蔭などつけし舞人のさまなり　りんじの祭賀茂八幡の臨時祭前に見えたり

(ハ)縉　具綿ナマメク女郎花の歌の心なり又生ナマメク　なま〳〵しう首尾せぬ心なり　(ニ)檜扇の兩方の上三枚宛をうすやうにて包み色々の糸にてとおして末をあはび結びにしたるなり　(〇)檜破子　檜破籠ヒハリゴ　(ホ)白組シロキクミ　(ヘ)禁秘抄云四面有二几帳一夏生スヽシ以二胡粉一畫二葦雀一冬朽木形云々　朽木の形を繪に書也　(ト)上に斷る也　(チ)碇イカリ　(〇)菖蒲を奉る女藏人なり　昔武德殿にて五日の節會行はれて騎射の事有其時宮內省典藥官人あやめを献ず又內侍藥玉を太子以下に給時藥玉を右の肩に打懸て左の腰へ垂て二の緒を分て腰に結て各拜舞する也云々　(▲)火取童女小忌公達以下の帳臺試の所に注す江次第に詳也　(十)六位の靑色すがた臨時祭の舞人前に注し侍るなり(〇)五節の童以下にしるす

(二)宮の五節出させ給ふに、(三)かしつき十二人、こと所に

は、女御みやす所の御かたの人出すをば、わろき事にすると聞に、いかにおぼすにか、(二)宮の女房を十人出させ給ふ、今二人は、(三)女院淑景舎の人、やがてはらからなりけり、(四)たつの日の青ずりの唐衣汗衫をきせ給へり、女房衆にだにかねてさしもしらせず、殿上人にはましていみじうかくして、みなさうぞくしたちて、くらふなりたるほどに、持來て着す、(五)あかひもいみじうむすびさげて、いみじうやうしたるしろききぬに、かたきのかたは、ゑにかきたる、をり物のからきぬのうへにきたる、まことにめづらしき中に、わらはゝいますこしなまめきたり、下つかへまでつゞき立出ぬるに、殿上人上達部おどろき興じて、をみの女房とつけたり、をみの公達は外にゐて物いひなどす、(六)五節の局を日もくれぬ程に、みなこぼちすかして、いとあやしくてあらする、いとことやうなる事なり、其夜まではなを、うるはしくこそあらめとの給はせて、さもまどはさず、几帳どものほころひゆひつゝ、こぼれ出たり　第二節前の臨時祭の舞人

　五節のわらはめなどいひし詞のつゞきに宮より五節の舞妓を出させ給ふ事を云也　宮とは中宮也

こと所とは攝家清花などの所へはとなり今の女院詮子淑景舎のみやす所に對していふ義なり　わろき事にするとは臣下の方へ女院みやす所の舞妓出し給ふ事はあしきといふ義なり出すべきゆへなくて強て出し給ふは人口あしくいひなすと也　いかにおぼすにかとは女院に何と思召ゆへの有やらんとなり是御おぼへ他にことなればかやうの事もおはしますといふ義なり　みやの女房とは中宮の女房達なり　女院とは詮子なり　淑景舎とは定子の御いもうとなり此御二方より十二人の數を滿て給ふとなり則本文に女院みやす所といふはこれなり

　やがてはらからとは女院舞姫と淑景舎の舞ひめとは兄弟ぞとなり　たつの日以下は宮の出し給ふ舞妓の裝束用意のさまを云なり　くらふなりたるほどゝはかくし忍ぶさまをいふなり　下づかへまでとは刀自得選のやからも供に出る心成べし　上達部以下は宮より舞妓の出たるをみて興ずる義をいへり　をみの公達とはその日着座の公達をいふなり　みなこぼちとは舞果ぬればやがて舞臺かりやなどたゝむとなり　其夜までとは辰の日の夜迄

こそかりやをもあらせまほしきと宮の仰なり　さもまどはさずとはこぼち荒するといへ共さはぎ給はぬ義也

（一）中宮也系圖前にしるす倘下にも有　（二）愛册アシツキ　（三）系圖後にしるす　（四）舞姫の裝束丑日は赤色の唐衣寅日は青色の唐衣辰日は青摺衣赤紐日蔭鬘などの内たつの日の裝束を着せ給ふと也　（五）三箇重事一禪云小忌といふは神事の衣服なり白き布をはりて山藍と云草にて樫木を摺物也大かた狩衣のごとし赤紐といひて紗をたゝみてあふみむすびをし泥繪などかきて右の肩に二すちとりつくる事あり又日蔭のかつらといふは白き糸をあげまきにして左右八筋或十二筋など冠の左右の角にまとひてたるゝ事ありこれは蘿といふ草をば日かげぐさといふ神代に此草を鬘にしたる事日本紀にみへたりさがりごけといふ物なり是は草木などは清淨なるによて神代のかざりに用る心也是に又心葉といひて梅の枝四寸ばかり成をいとにてむすびて日かげのかつらをつくる事有半臂下がさねなど常のごとし小忌のひらをば白地にぬひ物したるをいふ此小忌は私に用意して着する也國司をかねたる次將衛府の佐などこれを用ふ其外は諸司の小忌出納の小忌といひてかたのごとく布に青摺したる物なりそれをばたゞ袍のうへに打かけて着するなりいづれも山藍にてすれる物なれど臨時の祭舞人の着するをば青摺と名づけ大嘗會の時は小忌といふ也小忌青摺大かたは同事なれど裁縫のかはれるなり　（六）五節の舞の次第の事下に詳也

（七）小兵衛といふが、あかひものとけたるを、これをむすばゝやといへば、實方の中將よりてつくろふに、たゞならず、「（マヽ）あし引の、山井の水は、こほれるを、いかなるひもの、とくるなるらん」と、いひかく、年わかき人の、さるけせうのほどなれば、いひにくきにやあらん、返事もせず、そのかたはらなるおとな人たちも、うちすてつゝ、ともかくもいはぬを、みやつかさなどはみゝとゞめて聞けるに、久しくなりにける、かたはらいたさに、ことかたよりいりて、女房のもとによりて、などかうはおはするなどぞ、さゝめくなるに、四人ばかりをへだてゝゐたれば、よくおもひえたらんにも、いひにくし、まして歌よむ

としりたらん人の、おぼろけならざらんは、いかでかと、つゝましきことはわろけれ、よむ人はさやはある、いとめでたからねど、ねたふこそはいへと、つまはじきをしてありくも、いとおかしければ、「(ヌ)うす氷あはにむすべる、ひもなれは、かざす日かげもゆるぶばかりを」と、辨のおもとゝいふにつたへさすれば、消入つゝ、えもいひやらねば、などかゝゝと耳をかたぶけて問ふに、すこしことゞもり(ラ)する人の、いみじうつくろひ、めでたしと聞せむとおもひければ、えもいひつゞけずなりぬるこそ、中々はぢかくす心地してよかりしか、をりのぼる送りなどに、なやましといひ入ぬる人をも、の給はせしかば、有かぎりむれたちて、ことにも似ず、あまりこううるさげなゝめれ

第三節前につゞゐて五節の舞の時實方少納言の歌よまれし事など記されたり「あし引の山井　是則實方の歌なり山井とは里の井のごとくならで氷のむすんで解ぬものなり少辨によそふる心なり山井の水の人の手ふれぬごとく此小兵へも底井ふかくあるべきにいかなる人の手ふれしにやかく紐のとくるとゝがめし心なり是則人の懸想する事あれば紐のとくるといふゆへの本文をふくみてよめる歌成べし　年わかき以下は小兵衛が返歌なかりしを斷る義なり少納言の詞也或又地の詞ともみえたり　おとな人とは年比なる人の義なり　久しくとは返歌まつほど久しかりしと也　かたはらいたさにとは少納言の心也たれもゝゝ返歌せざるゆへたへかぬる心也　ことかたとは脇よりひそかにちかよりていふ義也　などかうはとは少納言の詞なり　四人ばかりとは舞姫四人を隔つるとなり　よく思ひえたらんとは歌を卑下する心をしるせり　しりたらむとはしられたらん人といふ義也　實方の朝臣ほどの歌よむと人にもしられたる人の實方へおぼろげならん歌遣むは甲斐なき事ぞといふ義なり　よむ人はさやはあるとはよく讀人はさやうに憶せぬとなり　ねたうこそはいへとは人々が云由なり　つまはぢきをしてとは、々此やうすをみて返歌なきとのゝしるさまなり　うす氷あはにとは前の歌の言葉の縁にて假初に結びし紐なれば舞かざすゆへにゆるぶとなり扱下の意はあはにとはあはれの義をもたせ

たり身を卑下する心なり哀に數ならぬ身にしあればいみじう時めき給ふ公達の目かげをふれてわれながら下紐もゆるぶやうなるとなりしかれども實にとくるにはあらずたゞゆるぶばかりぞとなりばかりといふ詞に心をつくべし敬みもふかくけさうの心もやむ事なきむねこもり侍るまことに心ふかき歌也よく〳〵味はふべし　きへいりつゝとは憶するよし也　などか〳〵とは小兵衛の小辨に尋問ひ給ふ由なり　すこしことゞもりとは小辨が少言葉どもりたると也　下のぼるをくりなどになやましとは附隨がふ人の義成べし女房達などを云にやの給はせしとは此歌をの給ふと也　あるかぎりとはなやましき人々達の給ふなれば其外の人々あるかぎりむらがりてほむるとなり　ことにもにずとは有べきことのやうにもあらずほめらるゝ義なり　あまりこそうるさげなめれとは少納言の心なり

（ヤ）小兵衛前故兵へと有是同人成べし　（マ）後拾遺云一條院御時皇后宮五節奉り給ひけるにかいつくろひつかうまつりける人のつけて侍ける赤紐のとけていかにせんといひけるを聞て結びつくとてよみ侍ける　藤原實方朝臣「足引の山井の水は氷れるをいか成紐のとくる成らん」實方の事　勘物云實方正暦二年九月右中將元右馬頭五年九月八日左中將長徳元年正月十三日陸奥守其夜昇殿九月十七日申ニ赴レ任由一居ニ御前一叙ニ正四位下一古事談云一條院御時實方與ニ行成一於ニ殿上一口論之間實方取ニ行成之冠一投ニ弃小庭一退散行成無ニ纏氣一靜喚ニ主殿司一取ニ寄冠一撰レ砂着レ之云坐ニ左道一公達哉主上自ニ小蔀一御覽行成者可ニ召仕一者也而被レ補ニ藏人頭一實方著ニ歌枕一被レ任ニ陸奥守一於ニ任國一逝去云々系圖には前にしるす　（ケ）千載云一條院の御時皇后宮五節奉られける時辰の日かしづき十二人わらはしもつかへまで青摺をなんきせられたりけるに兵衞といふが赤紐のとけたるをむすばゞやといふを聞て中將實方朝臣よりてつくろふとて「足引の山井の水はこほれるをいか成紐のとくるなるらん」と云を聞て返事に讀侍ける　皇后宮清少納言　うはゞ氷あはにむすべる紐なればかざす日影にゆるぶ計ぞ　（フ）吃ドモリ

舞妓(マヒヒメ)は、(一)すけまさの馬頭(ムマノカミ)の女、染殿(ソメドノ)の式部卿の宮のうへの御おとうとの四の君の御腹、十二にて最おかし、はての夜もをひかづきいくもさはがず、やがて仁壽殿よりとをりて、清涼殿の御前の東のすのこより、舞妓をさきにて、うへの御局へまいりしほど、おかしかりき　第四節前につゞゐて五節の舞妓の事をいふなり　はての夜とは辰の日などなり　をひかづきとは追重り行體也　さはがずとは追行共女房なれば物靜成と也

(一)菅原氏譜云

輔正(スケマサ)北野宰相 傳下ニアリ ―女子 母ハ四君ト號

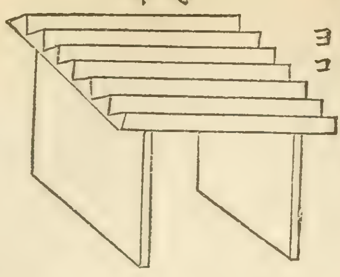
(二)細太刀のひらをつけて、きよげなるをのこのもてわたるも、いとなまめかし、紫のかみをつゝみてふむじて、ふさながき藤につけたるもいとおかし、内裏は、五節のほどこそ、すゝろにたゞならで、みる人もおかしうおぼゆれ、主殿司(トノモヅカサ)などの、色々のさいくを、ものいみのやうにて、(三)さいしきつけたるなどもめづらしくみゆ、清涼殿のそりはしに、もとゆひのむらご、いとけさやかにて、いでゐたるも、さまぐ\につけておかしうのみぞある、うへのざうし、人のもとなるわらはべも、いみじき色ふしとおもひたる、ことはりなり、山(二)あひ日かげなど、やなひばこに入(三)て、かうふりしたるをのこもてありく、いとおかしう見ゆ、殿上人の、(一)直衣ぬぎたれて、扇やなにやとひやうしにして、つかさまれどしきなみぞたつといふ歌を、うたひて、つぼねどもの前わたるほどは、いみじく、そひたちたらん人の心地も、さはぎぬべしかし、まひて、ざと一度にわらひなどしたる、いとおそろし、(三)行事の藏人の、かひねりかさね、物よりことにきよらにみゆ、しとねなどしきたれど、中々えものぼりゐず、女房の出たるさま、ほめそしり、此ごろはことなるめり、(三)帳臺の夜行事の藏人、いときびしうもてなして、かいつくろひ、二人わらはよりほかは、いるまじとて、おさへておもにくきまでいへば、殿上人など、猶これ一人ばかりはなどの給ふ、うらやみあり、いかでかなどかたくいふに、宮の御方の女房二十人ばかりをしこりて、ことぐ\しういひたる、藏人なにともせず、戸をおしあけてさゝめきいれば、あきれて、いとこはすぢなき世かなとて、たてるもおかし、それにつきてぞ、かしづきどもゝみない

る、けしきいとねたげなり、うへもおはしまして、いとおかしと御覽じおはしますらんかし、(ほ)わらはまひの夜は、いとおかし、燈臺にむかひたるかほども、いとらうたげにおかしかりき第五節初には前のつゞきに五節の折の事共をいひ後には內ずみの人々女房達のなまめかしきさまをいふ也　細太刀以下五節の役人の調度なるべし　むらさきの紙とは舞人のかざす物を云是則䕺花を似たる藤の花也　色々のさいくとは是も役人よそほひの物なり　もとゆひのむらご以下は五節の公達童女のさまをいふなり　山あひ以下裝束もてはこぶ事を云なり　やなひはこ次にみゆ　殿上以下は是も五節の時祿給ひおほ神酒たうべなどして樂みありく樣を云也　そひたちたらんとはなれしたがふ人もなまめきめでゝ心をうごかすとなり是等は五せつの時の事のいひのこせし事をかさねて云也　行事の藏人以下は藏人の有さま五節の時のやうすをいふ又宮の女房達のいみじきありさまなどをかけり　茵などしきとは藏人舞殿の東戸の下に立て床子を用ゆる事なり又云舞妓の茵の事なり　女房の出たるさまとは茵火取を持出たる童女をいふなり　帳臺の夜行事とは帳臺長橋に進向して闌入をいましむるなり　いときびしうとは兎入の外にはいれぬといふの義なり　二人わらはより外とは火取童女一人茵持の童女一人此二人より外にはいれぬなり　殿上人以下は舞殿の邊へ參り見むといふ義なり　うらやみありとは藏人が禁じ斷る詞なり　宮の御方の女房とは中宮の召つかう女房達のいみじきさまを云なり　ことゞ〵しういひたるとは女房のゝしり通るさまなり　あきれて以下は藏人がさまを書るなり　それにとは女房達の入給ふにつき隨ひて下々も入しとなり　うへもとは中宮なり　わらは舞以下は又五節のわらはは舞の事をいひて前の五節の舞の事を結ぶなり

(○)東山左府御說云蒔繪細劍常所レ用之物無文丸鞆帶必用レ之白地平緒小忌之外不レ用レ之これやむことなき時の調度也　(い)江次第云殿內四角各卜二五節所一殿垣下四角各設二假切懸一自二淸涼殿東廂北階下一到二承香殿坤角一假作二長橋一云々　(ろ)前に注する也　(は)柳宮なり硯短尺鞠冠裝束等の類をす

ゆる臺なり柳をもつて造るなり上のけたの本三角にして重半の義あり御短尺をすへて進上の時冷泉家には重にこしらへらるゝなり又三光院殿傳には吉事には半にし追善などの凶事には重を用るなり又すゆる物をたてにすへ横にすゆる義有也

柳筥圖　横。



けた半の圖なり

重は八ツにも十にもすべし

(に)うたひ物成べし未レ考　(ほ)行事の藏人帳臺夜行等は　(へ)江家次第云天平十五年五月癸卯宴二群臣於内裏一皇太子親舞五節中丑日張臺試寅日御前試同童女御覽常寧殿西塗籠内帳臺上敷二長筵一其上可レ敷二舞姫座一其前各立二白木燈臺一本一舞殿戸下立二床子一脚一東帳臺坤角引レ幔爲二小歌座一北廂塗籠内爲二大師宿所一大歌候二同殿東假座一殿上人勤二垣下一殿内四角各卜二五節所一殿垣下四角各設二假切懸一自二清涼殿東廂北階下一到二承香殿坤角一假作二長橋一時尅五節舞姫參二入於玄輝門一諸大夫四人執二几帳角一殿上人付二童女傅等一如レ例前例用二半靴一近代不レ見除二大歌垣下行事藏人一之外不二束帶一五節皆參之後奏二其由一主上出御 御直衣御奴袴御沓 經二假長橋幷承香殿南簀子同馬道后町廊常寧殿馬道等一入二御於師壺寢一殿上侍臣指二脂燭一設候近習公卿兩三供奉若不二出御一者執柄人幷藏人頭行事藏人立二舞殿東戸下一開閤 用二床子一 舞閤禁二闌入一 理髮童女除二從下一仕外不レ可レ入頭若行事藏人之外不レ能レ伺二戸外一 舞姫等次第參入經二馬道一入二舞殿戸一先童女一人持二火取一次童女一人持レ茵次舞姫下仕等取二几帳三本一相從理髮相具次火取童入レ戸即歸次茵 童敷レ茵居二帳臺下一 次舞姫居二茵上一 北面西上 次几帳一本立二其後一 自餘早歸 次大歌移二作於后町廊邊一次大歌小歌發レ聲如レ恒次舞姫舞畢次第退出如レ初云々同御前試事十一月中寅垂二清涼殿東廂御簾一其内南第三間逼二御簾一鋪二

毯代ニ立ニ御倚子ニ立ニ廻御屏風ニ其南北邊鋪レ帖ニ參少隨レ仰爲ニ女房候所ニ若皇后參上者同第四間設ニ御座ニ掃部寮立ニ大床子二脚ニ立ニ廻御屏風ニ若內親王參上者南第二間設レ座立ニ廻御屏風ニ其內鋪レ疊二枚加ニ茵一枚ニ孫廂邊ニ灯樓綱ニ次掃部寮御屏風從ニ第二間ニ至ニ第五間ニ又南北妻各立ニ一帖ニ其內鋪ニ滿長筵ニ鋪ニ圓座五枚ニ每ニ舞姬座前ニ立ニ灯臺ニ圓座灯臺用レ所但師前不レ立ニ灯臺ニ南第一間鋪ニ兩面端帖ニ爲ニ舞姬來[illegible]座ニ件間懸ニ灯樓近代不レ見南廊壁下長橋內鋪ニ黃布端帖ニ爲ニ大歌人座ニ時尅先五節師參入着座次舞姬參上其路軒廊并承香殿馬道仁壽殿東一門露臺長橋等藏人頭進ニ向長橋東ニ禁ニ陪從等闌入ニ兒入之者理髮一人童女二人[illegible]鋪筥等也陪從・一人持ニ几帳ニ下仕二人又殿上上戶不審[illegible]開等不レ開同加ニ制止ニ前例雖ニ藏人頭ニ猶上膈一人隨レ罪而陸國經任時初二人從ニ罪黃鐘者[illegible]ニ長橋東妻ニ早歸爾者敷ニ於來集[illegible]上ニ几帳者立ニ重於來集座東簀子ニ心中記レ之不レ令ニ[illegible]亂ニ舞姬參畢者又次第出ニ几帳ニ舞姬着ニ御前座ニ畢者又返ニ南是爲レ有ニ事煩ニ也大歌人參入着座入レ自ニ仙華門ニ侍臣着盃雜色以下並送レ之主殿寮入レ自ニ瀧口ニ捧レ炬列ニ立庭中ニ舞姬着座大歌發レ聲舞姬舞內侍示下可レ返ニ御歌ニ之由上以レ扇叩ニ長押ニ藏人頭問レ之仰曰御歌返世次事畢藏人頭問曰誰曾大歌人等各稱ニ其名ニ退出次舞姬退下云々

無名(ムミヤウ)といふ琵琶の御琴を、うへのもて渡せ給へるを、かきならしなどすといへば、ひくにはあらず、緒などを手まさくりにして、これが名よ、いかにとかやなど聞へさするに、たゞいとはかなく名もなしと、の給はせたるは、猶いとめでたしとこそ覺へしか、淑景(シゲイ)舍(サ)などわたり給ひて、御物語のつゐでに、丸(マロ)がもとに、いとおかしげなるさうの笛こそあれ、故殿の、えさせ給ふを、僧都の(一)君の、それは隆圓にたうべ、をのれがもとに、めでたき琴侍りそれにかへさせ給へと申給ふを、聞も入給はでこと事をの給ふに、いらへさせ奉らんとあまたゝひ聞へ給ふに　猶物もの給はねば、宮の御前の(二)いなかへしとおぼいたるものをと、の給はせける御けしきの、いみじうおかしき事ぞかぎりなき、此御笛の名を、僧都の君も、えしり給はざりければ、たゞうらめしとぞおぼいためる、これはしきの御ざうしにおはしましし時の事なり、うへの御まへに、いなかへしといふ御笛のさぶらふな

り、御前にさらふ物どもは、御琴も御笛も、みなめづらしき名つきてぞある　第六節こゝには樂器の事に付てなまめかしき義を云なり　かきならしなど以下中宮の御心なり少納言にいひ給ふ義なり　引にはたらで以下は少納言の御琴に携儀云也　只いとはかなくとは中宮の御詞なり　名もなしとは則琵琶の名を以て何となう卑下し給ふ心のやさしげになまめかしき義をいへり　しけいさとは淑景舍の御やす所なり中宮の御いもうとなり　丸とは淑景舍みづからの給ふ詞なり　故殿とは御父道隆公なり　僧都の君とは是も中宮の御連枝なり　りう圓にたうべとは丸がもとに有との給ふさうの笛事を隆圓僧都聞給ひてその笛はりう圓に給はれ其代にわが所持の琴を奉らんかの笛と替給はれと淑景舍へ僧都の君啓せらるゝ義なり　聞も入給はでとは淑景舍の聞入給はぬとなり　いらへさせ奉らんとゝは淑景舍の御返答をうけ給はらんとて僧都の君たび〳〵いひ給ふとなり　みやの御前の以下淑景舍の御詞なりみやとは中宮なり　いなかへしとは否不替(イナカヘシ)笛の名なり中宮の御方に有となり　おぼひたるとは淑景舍のおぼしめしたるとなり　最前より僧都へいらへ給はぬ故を斷りたまふなり淑景舍の御心には中宮御方に有否不替の事と思召しを僧都は其御心に通し給はで淑景舍の否と仰らるゝと心得給ふ義なり　の給はせける以下地の詞なり淑景舍の御氣色のいとおかしうなまめかしきとなり　此御笛の名とは非名運なり　たゞうらめしとは僧都の君の心也　淑景舍の御答の旨通じ給はでうらめしと思召と也　これは以下地也

〔八〕補物云隆圓隆家兄弟正暦四年權少僧都十五不レ經二律師一寛弘八年四月權大僧都卅二長和四年二月卒卅七云々　系圖前にあり世に僧都の君といふ也　(◎)江談云不不替(イナカヘシ)是笛名也唐人貴レ之千石買云伊奈加倍志値云不[illegible]渡以レ之爲レ名云々

〔 〕琵琶は、玄上、牧馬、井手、〔 〕井げう、無名など、又和琴なども、〔 〕くちめ、〔 〕しほがま、二貫(フタヌキ)などぞ聞ゆ、水龍(スイロウ)、小水龍、宇陀法師、釘打葉二(クギウチハフタツ)、なにくれなどおほく聞へしかど、わすれにけり、〔 〕きやうでんの一の

たなにといふごとくさは、頭中將こそし給ひしか、うへの御つほねの御簾の前にて、殿上人、日ひとひ◎笛吹あそびくらして、まかてわかるゝほど、まだ、御格子はまいらぬに、おほとなふらをさし出たれば、とのあきたるがあらはなれば、びわの御ことを、たゞさまにもたせ給へり、くれなゐの御ぞどもの、いふも世のつねなる、うちき、又はりたるなども、あまた奉りて、いとくろくつやゝかなる御びわに、御ぞの袖を打かけて、とらへさせ給へるだに、目出度に、そばより御ひたひのほど、白くけさやかにて、わづかにみへさせ給へるは、たとふべきかたぞなくめでたきや、ちかくゐ給へる人にさしよりて、なかばかくしたりけんは、え、かうはあらざりけんかし、あれはたゞ人にこそありけめといふを聞て、道もなきをわりなくわけまいりて啓すれば、わらはせ給ひて、われはしりたりやとなん。仰らるゝとつたふるもおかし　第七節糸竹の御遊の折の、なまめかしきことをしるされたり、前のつゝきなれば、初に樂器の名物をいひ後には中宮の御前のいみじうなまめかしき事をいへり　いふことくさとは、くちすさみう

たひものゝ義なり、頭中將のうそぶきうたひ給ふと云義成べし　日ひとひとは終日也　まかでわかるゝとは退散也　御格子以下は中宮の御ましのさまをいふなり御かうしまいらぬ内に御灯さゝげつれば御簾の中も透見ゆる心成べし　たゞさまとは徒さまなりもたせ給ふとは中宮の持せ彈し給ひしと也　くれなゐ以下は中宮の御裝束を云なり　いふも世のつねなるとは中々云もおろなるとなり御裝束をほむる心なり　うちき又はりたるなどもとは砧にて打たるもあり又張物にしたるも侍るとなり　奉りてとはよそひ給ふ義なり　いとくろくとは御琵琶の色をいふ也黑色に光のあるうへゝ、紅の色々なる衣の打かゝるさまを云なり　とらへさせ給へるとは琵琶の事なり　そはよりとは御琵琶かゝへ給ふ傍よりなり　ちかく以下はこなたより中宮の御よそほひを見いれし人の心を書けり　ちかくゐ給へる人とは中宮のそばにならび居る人の事を此方より評判するさまなり　◎なかばとは半なり物の傍より半にいふ義なり　かくしたりけん傍の女房の姿隱したる體なり　えかうとはえかくの

ごとくはあらじと評判する義なり畢竟中宮の事をほめ奉てたゞ人には違給ふといふ義なり　あれはたゞ人にこそありけめとは半見ゆるもいみじく見ゆれどもその御方はたゞ人とみへしぞと見入れし人々がいひし義なり。いふを聞てとはさやうにいふを少納言の聞ておほく壷居給ふ中をわけ參りて有しやうを中宮へ申上るとなり　わらはせ給ふとは中宮のわらはせ給ふなり　われはしりたりやとは中宮の少納言に仰らるゝ御詞なりそのほむるもいかで知たるやとなり又云ほめし人々を知りたるかとなり　つたふるもおかしとは女房達とり〴〵にかたり興じいひ傳ふるとなり

(○)掛物云玄上牧馬井手渭橋無名琵琶柄目鹽竈二貫和琴水龍小水龍笛宇多法師和琴釘打葉二笛　○玄上　玄象　禁秘抄云玄上累代寶物也置二中殿御厨子一根源様人不レ知レ之撥部頭貞敏渡唐之時所レ渡比巴二面其一歟紫檀直甲也大宋人曰紫檀者大様不レ可レ過二六七寸一直甲之條不レ信云々但此甲非二只物紫檀一也凡此比巴云レ躰云レ聲不可説未曾有物也爲二靈物一人爲レ跡之時有二貴人一如何跡ニハスルゾト云人ニ夢二皆著二直衣一人也靈物中越レ佗以二不淨手一不レ可レ取昔無レ覆自二近比一有二沙汰一有二覆并臺紫唐綾無文也臺摺レ貝此琵琶靈驗內裡燒亡之時飛出撥面文消所々有二赤色一不レ知二其繪一代々有二沙汰一未レ決俊房曰良通云比巴稱二玄上一彼撥面文也不レ可レ違彼唐人打レ毬形也或曰玄象吞二青鯑之水一所謂號二玄象一又玄上宰相獻二延喜帝一仍號二玄上一兩說也但妙音院入道付二玄上說一歟　師時記云玄上繪様於二馬上一打レ毬者指二毬於腰一舞形也　江談云謂玄上牧馬元者何時云々玄象牧馬者延喜聖主御琵琶歟下畧云々又朱雀門鬼盜二取玄上一事略之　古事談云村上聖主明月之夜於二清涼殿一玄上引澄玉フ所ニ盧空申云大唐琵琶博士廉承武候云々昔廉承武琵琶有レ二貞敏ニ給內候申云々玄上者作琵琶之其一也又云牧馬與二玄上一双名物也時人不レ辨二勝劣一云々　○井手江談云井手云琵琶高名者也延喜孫十五宮子爾愛宮申人琵琶傳レ今在二宇治寶藏一拾芥同　或本ゐゝへとあり井上の事歟井上は和琴也　今比巴の事なれバ井手なるべし故傳本に隨かふ況や掛物にも井手と侍るものをや然らは或本はあやまる成べし　(キ)渭橋　江談云渭橋一爲二堯(ケウ)又高名琵琶也三條式部

御實物也拾芥同之　○無名　江談云令傳ニ在御所ト
無名云高名琵琶上東門院寶物令レ持給之間清政三
位三條亭令ニ渡給之間燒亡燒了云々　拾芥云或
說蟬丸琵琶云　一和琴　舊座本紀云猿女君祖天
鈿女命採ニ天香山竹ニ其虛節間彫ニ風孔ニ通ニ和氣ニ名
世號レ笛類是也亦天香弓與並叩レ絃今世謂ニ和琴ニ其
緣云々下略　（ク）朽目　拾芥云朽目或朽葉入ニ寬
褐袋ニ　（シ）塩竈　拾芥云承平四年九月五日入ニ目
錄ニ云々　○二貫　拗物前ニアリ　○水龍　江談云
橫笛者大水龍小水龍天曆御時寶物也拾芥同之（
宇多法師　江談云寬平法皇御和琴也云々　拾芥云
寬平法皇貴重候有ニ此名ニ　或說云以レ檜作レ之一
條院御時內裏燒亡之時燒失　○釘打　拗物前ニ
アリ　（葉二　江談云葉二者高名橫笛也號ニ
朱雀門之鬼笛ニ是也淨藏聖人吹レ笛深更朱雀門鬼來
聲感レ之自レ獲此笛乎給ニ件笛ハニ其後次第傳レ之在ニ
入道殿ニ後ニ一條院御在位之時以ニ藏人業ニ召ニ此笛ニ
藏人不レ知ニ笛名ニ只ハフタツ參ラセサセ給ヘト申
入道殿何事可レ承仁齒二ツコソエカクマジケレ
若此葉二笛歟トテ令進給云々拾芥云又號ニ青葉ニ
歟　（◉）小野宮右府記云長保二年十一月十五日新
宮之後朝ニ御南殿ニ同右大臣以下管絃人着ニ御前
草墪ニ次召ニ書司ニ々々女孺取ニ宇陀法師ニ出レ自ニ
御障子ノ南ニ召ニ主殿司ニ又絃竹次々取出皆書司女官役
之入夜前例ニ或書司女官取ニ出和琴ニ已後次々
絃竹近衞次將等取ニ之間　一　（△）西宮抄云納殿累代
御物在ニ宜陽殿ニ例御物納ニ藏人所ニ下略今云樂器
共宜陽殿に有也

(イ)御めのとの大輔の、けふの日むかへくるに、給はする扇どもの中に、かたつかたには日いとはなやかにさし出て、旅人のある所、井手の(ロ)驛のたちなどいふさま、いとおかしうかきて、今かたつかたには、京のかた(ハ)雨いみじうふりたるをながめたる人などかきたるに、あかねさす、日にむかひても思ひよ、都ははれぬながめすらむと、御に御手づからかゝせ給ひしあはれなりき、さる君を置奉りて、(ニ)遠くこそえいくまじけれ　第八節中宮の和歌の道にも優におはしましま す事をいへり　御めのとの大輔とは一品宮の御乳人名也　周家の君のつまなり　けふの日むかへくるとは御乳母のつくしへ下向すべき日限をさしいふとてけふの日むかへくるといふなり則一品宮

中宮へ御暇乞にまいらるゝ義なり　給はする扇どもとは御乳人の大輔へ中宮より餞別に扇を給はする事なり　中にとは其扇どもの中にとなり則御めのとに給はる扇の繪やうを云なり　旅人のある所とは田舍のけしきを繪かひたるとなり　いまかたつかたとは片面(カタヲモテ)には京のけしきを繪かひたるとなり　あかねさす以下は中宮の御詠なり　あかねさすとは片面いなかに日のさし出る所をよみ給ふなり　都ははれぬとはいまの片面の京の方に雨のふるけしきをよみ給ふなり如レ此彼方此方晴曇につけてもいかにと思出てわすれ給ふなど也かくの給ふ方には日夜露のわするまもなければせめて如レ此けしきあらん時はいかに詠めゐるらんと思ひ出よと示し給ふ御歌の心成べし　御手づからとは中宮御自筆にて扇に書給ふと也　さる君以下は少納言の褒美奉らるゝ心をしるされたり遠くこそとははなれがたきとなり　右八節ともに皆題のなまめかしき物といふ心をはなれ侍らずよく／＼本意をうしなはざるやうにみるべし

（イ）大鏡云今はたゞ兵部大輔周家の君計ほのめき給ふなり小一條院の御宮達の御乳母の夫にて院の格勤してさふらひ給ふいとかしこし亦井手少將とありし君は出家とか云々　今御めのとの大輔といふは中宮御兄弟周家のつまなり系圖前ニ見ゆ　（ロ）是も中宮御兄弟也右中將従四位下好親の事なり則號二井手少將一也　（ハ）詞花集つねに侍ける女はうのひうがの國へくだりけるに餞し給ふとてよませ給ける　一條院皇后宮あかねさす日にむかひても思ひ出よ都は晴ぬ詠すらんと　是周家のつくしへ行給ひしにや又その妻の御乳母も下りしとや（ニ）遠くこそえいくましけれとは御乳母夫婦の心を云なり或云少納言さきの人の事をおもふて我身のうへに引かけ云也少納言も四國のかたへあそばれし由見えたれば也

清少納言枕草紙抄卷六

【四十七段】ねたき物(イ)

人のもとに、これよりやるも、人のいひたる返しも、かきてやりつる、後に文字一つふたつなどは、おもひなをしたる。とみの物ぬふに、かしこふぬひはてつとおもひて、はりをひきぬきたれば、はやうしりをむすばざりけり、又かへさまにぬひたるも、いとねたし　(ロ)みなみのゐんにおはします比　西の對に(ハ)殿のおはしますかたに、宮もおはしませば(ニ)しんでんにあつまりゐて、さう／＼しければ、ふれあそびをし渡殿(ホ)にあつまりゐなどしてあるに、これたゞいまとみの物なり、誰も／＼あつまりて、時かはさすぬいてまいらせよとて、ひらぬきの御ぞを給はせたれば、南おもてにあつまりゐて、御ぞかた身づゝ誰かとくぬひ出ると、いどみつゝちかくもむかはず、ぬふさまもいと物くるをし(ヘ)命ぶのめのと、いととくぬひはてゝうちをきつる、(ト)ゆたけのかたの御身をぬひつるか、そむきさまなるを見付ず、とぢめもしあへず、まどひをきて、立ぬるか　御せあはせんとすれば、はやうたがひにけり、わらひのゝしりて。これぬひなをせといふを、たれがあしうぬひたりとしりてかなをさん、あやなどならばこそ、うらをみざらん、ぬひたがへの人のげになをさめ、無紋の御ぞなり、なにをしるしにてか、なをす　誰かあらん、たゞまだぬひ給はざらん人に、なをさせよとて聞もいれねば、さいひてあらんやとて、源少納言新中納言などいふ人の、物うげにぬひ給ひしを、かほ見やりて居たりしこそ。おかしかりしか、これはよさりのぼらせ給はむとて、とくぬひたらん人を、おもふとおほせられしか

此段心あきらかなり二節にみるべし就中此一節にはせうそこ或物縫事などにつゐて始ましき意をかけるなり　ねたき物とは當段の題なり忌意にくむ意怒こゝろなど侍るなり　人のもとにとは句を切べし凡人のもとへ文つかはすにも又返事やるにもといふ義也　これよりやるもとは句を切べし此方より態とつかはす義也　人のいひたる返しも句を切べし　かきてやりつる以下わざとやる文と人の返事と兩方へ通ずるなり　文字ひとつふたつなどはおもひなをしたるとは詞出要などを書なをすとなり是忌憚義なり　とみの物ぬふ以下は女の務に付

て怒意を云なりとみとは頓なりいそぐ義なり、かしこふとは俗によくせしなどゝ云義なりさかしき心也　はやうとは始よりと云意也　みなみのゐん以下は少納言まのあたり見及びし事を書り則前にとみの物ぬふといひし詞の實をあらはすなり　おはしますとは中宮一品宮などの行幸し給ふ也　寢殿にあつまりとは御留守の女房達の事也　これたゞいま以下は南院よりの御下されし由也　南おもてとは寢殿の南面なり女房達のそこにあつまりぬはれしゝ也　命ふのめのと以下は命婦がぬひたがへし事を云なり　立ぬるとは立退なり　御せあはせんとは御裳の背を合するとなり　わらひのゝしりとは女房達寄合て笑罵と也　たれかあしうとは命ふがぬいちがへしを他の女房達ぬいなをすまじとあらがふ義也　あやなどならばこそうらをみさらんとは綾は裏表よく見ゆるとなり　無紋の御ぞなりとは綾のごとくならねばぬいたがへし人の誤りしも斷ぞとなり　たゞまたとは只又なり是始の人の事なり又云但未なり是更の人の事なり　さいひてとはさやうにいひてやまんやと云意なり　源少納言以下は縫なをさるゝ由を云なり　これはよさり以下は御ぞの御用の故を斷りいふなり或又女房達の態を試み給ふ義なり地の詞なり

(イ)嫉　妒　猜ネタム　徐氏曰女無二善惡一入レ宮見レ妒士無二賢不肖一入レ朝見レ嫉害レ賢曰レ嫉害レ色曰レ妒詩經註以レ色曰レ妒以レ行曰レ忌云々　大學媢疾以惡レ之註媢忌也　婦妒曰レ妒夫妒曰レ媢　(ロ)拾芥云南院六條北烏丸西小一條院御領　又云南院四條北壬生西是忠親王家　此兩所の內威べし今はいづれとはかりがたし但六條の南院小一條院の御領と侍ればこれにや侍る歟又大和物語にも宇多院南院の花を愛せさせ給ふ由みへたり是は四條の南院歟猶よく考知へし　(ハ)道隆公なり前に注す　(ニ)寢殿前に注す　(ホ)禁秘抄云　渡殿二行各二疊敷二黃端一公卿在二殿上一之日不レ論二花族一諸卿非色又著レ之不レ然之時可レ然之人不レ著レ此北副二高欄一立二布障子二一間立レ柱打付書二打也一向二下戸一横女官戸ヨリノ路ヲ通立二障子一馬形號二波禰馬一也　其西南二一間有二遣戸一其下一間籠下女居住云々　(ヘ)命婦のめのと未考　(ト)弓手の肩の行なり　弓長七尺餘を云なり　天下はくくむ神のみそなれはゆたけにそ

たつみつの廣前

みすまじき人に、外へやりたる文とりたがへてもて行たるねたし、げにあやまちてげりとはいはで、口かたふあらがひたる、人めをだにおもはずば、はしりもうちつべし　面白き萩薄などをうへてみるほどに、なかびつ(ヌ)もたる者、鋤など引さげて、只ほりに掘ていぬるこそ、わびしうねたかりけれ、よろしき人などのある折は、さもせぬものを、いみじうせいすれど、たゞすこしなどいひていぬる、いふかひなくねたし、(ル)受領などの家に、さるべき所の下部などの來て、なめげにものいひ、さりとて我をばいかゞ思ひたるけはひに、いひ出たる、いとねたげなり　みすまじき人の、ふみをひきとりて、庭におりてみたてる、いとわびしうねたく追て行ど、すのもとにとまりてみるこそ、とびも出ぬべき心地すれ、すゝろなる事腹立て、おなじ所にもねず、(ヲ)みしくりいづるを、しのびてひきよすれど、わりなく心ことなれば、あまりになりて、人もさばよかなりとへゞじて、かいくらみてふしぬる、後いとさむき折などにたゞひとへきぬばかりにて、あやにくがり、おほかたみな人もねたるに、さすがにおきいらんあやしくて、夜のふくるまゝに、ねたくおきてぞいぬべかりけるなど、思ひふしたるに、おくにも(ワ)外にも、物うちなりなどして、たそろしければ、やをらまろびよりて、きぬ引あぐるに、空ねしたるこそ、いとねたけれ、なをこそこはがり給はめなどうちいひたるよ

第二節召つかひものゝ事夫婦又は忍ひかたらふ人などにつゐて、ねたき心をいふなり　げにあやまちてとは召つかふものゝあやまりながらあらがふ事侍るはいよ〳〵ねたきと也　ながひつもたるものとは長櫃持者なり仕丁(シテウ)などを云なり　よろしき人とは貴人などの來ておはします時は謹むべき事ぞと制すれ共をのが主のいひ付しにまかせほりゆくはねたきとなり　さるべき所とは上﨟高官の方なり　下部などの來てなめけに物いひとは下部がをのが主の云付ケしまゝに無禮なることばのねたき義を云なり　みすまじき人とは忍ぶ中の文を友の奪ひ取見る事のねたきを云也　すのもと簀の下なり又透垣(スイカヒ)の下なり　すゝろなるとは夫婦の中又忍ぶ中などにいさゝかの事を恨みくねるはねたきといふ義なり　同じ所にもねずとは契りし中のうらむる意を云なり　みしくりとは

身を退(シリゾク)よぐゑ心なり　しのびてひきよするとはつまり密にとらへしたふ義なり　心ことなれとは恨みそむけるとなり　あまり以下はとらへしたへ共つれなくいとはるゝゆへに男かうらむる心なりさまであまりよぎはめされなどでち怨ずる義なりかいくらみふしぬるとは床をよけてつれなく獨臥心なり　いとさむき以下はうらみられし人の方をはかりいふなり　物うちなりとは夜更凛敷(ヨフケスサマシキ)さまを云なり　きぬひきあくるとは彼獨臥たる女の衣を引あけ歸よしをつげんとすれば空ねさへしたるとなりすべて忍びの中などにして　たがひに如レ此恨みくねる事いもせ川のたへぬながれの詞つゞきに侍れば淀まずみる事作者の本意ならんかし

(ヌ)長櫃ナガビツ　(ル)新撰萬葉集云無禮云々なめしなめけ同事也　(ヲ)身をうごかす義也　(ワ)源語類紫にしつかになりやはらなる心也　(○)うちいひたるよりも案詞の下ニ或本ニハ細殿にまうでて局にゐたりしにあやしき下﨟共のうしろを通るがせつゝゐなみたりしこそねたかりしかいみじき心おこして參りしに川の音などのおそろしうくれはしをのぼる程などおぼろけならずこうしていつしか佛の御顔をおがみ奉らんと思ふに白ききぬきたる法師みの虫などやう成もの共あつまりて立ぬかつきなどして露ばかり所せかぬけしきなるは誠にたふしもしつべき心ちこそすれいとやんことなき人などの參り給へる御局の前計をこそはらひなとぞすれよろしき人はせいしわつらひぬめり頼みし人の師をよびていはすれば其元少しされなどいふ程こそあれあゆみ出ぬれば同じやうになりぬさはしりながらも猶さしあたりてさる折々いとねたきなりはらひえたるくしあかにおとし入たるもねたし　右如件あり　又一本ニハ　心つきなき物ト云段の末に右の詞有以上三本の詞の次第如此也

四十八段かたはらいたきもの

まらふ人などにあひて物いふに、奥のかたにうちとけごと人のいふを、せいせで聞心地、おもふ人の、いたくゑひて、おなじ事したる、聞居たるをもしらで、人の上いひたる、それはいかばかりならん、つかひ人なれど、かたはらいた(カ)し　旅立たる所、ちかき所などにて、げすどものざれかはしたる、にくげ

なる兒を、をのれが心地にかなしと思ふまゝに、うつくしみあそばし、これが聲のまねにて、いひける事などかたりたる、ざへある人の前にて、ざえなき人の物おぼへかほに、人の名などいひたる、ことによしともおぼへぬ我歌を、人にかたり聞せて、(◎)人のほめし事などいふも、かたはらいたし、人のおきて物がたりなどするかたはらに、あさましう打とけてねたる人、まだ音もひきとゝのへぬ琴を、心ひとつやりて、さやうのかたしりつる人のまへにてひく、いとゞしう、すまぬ聟の、さるべき所にて舅にあひたる

此段は詞すくなふして心もあきらかなり　かたはらいたきとは風情なき事を云なり是則當段の題也　打とけでとゝは無正ごとの類也　聞心地とは賓主ともに聞ゐたらん心地は風情なきと也　おもふ人の以下は酒に醉たる人の片はらいたき事を云也是歌の心を以てかける也　聞居たるをもしらで以下は人の身の上を取沙汰する事の風情なくみゆるを云也　聞居たるとは他人の聞居ると也　それはいかばかりとは人のうへいふ事をさす也　つかひ人とは下々の義也下々にても人の上取沙汰するは風情なきとなり　旅立以下は人の取沙汰のみならずざれくるふも風情なきとなり　にくげなる兒以下は親の一向子を愛して愚にみへ風情なき心をいふなり　これが聲のまねとは兒が聲のまねをするとなり　ざえある人以下は人のまじはりに愚なる者の風情なき義をいひて數みの心をしめす也　ことによしともおぼへぬ以下はわがよみし歌に就て愚なる人の必ず知レ此有べき事を云なり　是皆謙退の禮德を敎ゆる義なり　人のおきて以下は交友の席にて無下に打ねたる人の風情なき心をいふなり　まだ音もひきとゝのへぬ以下藝術に付てをのれをかへりみぬ者のかたはらいたき事を云也　いとゞしう以下聟舅の中に風情なき事を云なり　すまぬとは妻の所に住馴れぬ義なり是夫婦の間とゝのふらざればこゝろよからざる義を敎へたり

[illegible]語類聚云左禮非ニ本道一事也

四十九　あさましき物　さしくしすりてみがくほど、物にさ(ヨ)へておりたる、車の(タ)うちかへされたる、さるおほのかなるものは、所せくひさしくなどやあらんとこそおもひしか、たゞ夢の心地してあさましうあやなし、人のために、はづかしうあしき事つゝ

みもなく、兒もおとなもいひたる　かならず來なん
とおもふ人を、夜一よ待あかしてあかつきがたに、
たゞいさゝかわすられてねいりたるに、からすのい
とちかく、からとなくに、うち見あげたれば、(ヒ)ひる
になりたる、いとあさまし、てうばみにどうとられ
たる、無下にしらずみずきかぬ事を、人のさしむか
ひて、あらがはすべくもなくいひたる、物うちこぼ
したるも、心地いとあさまし　(ツ)賭弓にわなゝく／＼
ひさしうありて、はづしたる、箭のもてはなれて、
こと方へ行たる　此段心あきらかなり　あさましき
物とは常段の題なり下の詞にてあさましきと云心
わきまへやすし此段をよく味はひてあさましきと
いふ詞をつかふべき也　さし櫛すりてとは鈿をし
たゝめうへのみがき計にてあやまり折たらんは淺
間布と也　車のうちかへされたる以下は舍人牛飼
などの淺ましき事をいふ也　所せくひさしくとは
とくかたづけもせで所狹久しくあらんはあさまし
きとなりたゞ夢の心地とは乘たる人の意也　人の
ため以下は人前にしてあさましき事をかけり　か
ならず以下は忍びかたらふ中にしてあさましき事
をいへりたゞいさゝか忘れてとは待うむしたる意

也　てうばみは重込なり双六に有事也　無下に以
下は物語などにつゐて無下に聞ず見ざる人にはい
ひかたりても詮なく淺ましきといふ意をかけり
物うちこぼしたるの一章心あきらかなり　のり弓に
わなゝくとはあやぶむ意なり　はづしたることか
たへ行たる是等みなあさましき義を云也
(ヨ)穩同心也みな大やうなる義也　(タ)所
狹也源語　(レ)筒成恩寺殿の說双六の筒也　(ソ)公事
根源云賭弓是は天子弓場殿にのぞみて弓を御覽ず
る也仲春に弓をみる事は禮記などにも侍にや堋を
つき的をかけて左右近衛左右兵衛四府の舍人ども
の射侍也左右大將射手を奏せらる勝の方はまけの
方に罰酒をおこなふ又勝の方は舞樂を奏す大かた
近衛の官領にてあれは事はてゝ後大將射手に祿を
たふ是をかへりあるしといふなる饗行はぬ大將は
左右なく參內せぬ事にて度々の召につきてまいる
とかや又殿上の賭弓とて臨時に弓を御覽ずる事有
それは殿上の侍臣どもの射侍る也　江次第云賭弓
正月十八日以射禮後朝被行云々四人立其後射
之者在南若二人射了後退出次者歩進又待次者到

來一其退出路左近者自二射場北砌一退右近者自二弓場東面北間小蔀下一退若弦斷者垂レ袖跪レ地取二斷弦一挿二懷中一以二替弦一掛レ之當二弓場柱一張レ之先弦引次當下於二雨三度一鳴レ之後斂レ膝更立上略　近衛式云凡十八日賭射射手官人近衛惣十人必備二將監一當日錄二交名一奏聞凡賭射取レ箭近衛八人分爲二二番一々別四人不レ帶二弓箭一云々

五十段　口おしき物、（ク）御節會佛名に（ネ）雪降で、雨のかきくらし降たる、節會などに、さるべき折の御物忌にあたりたる、いとなみ、いつしかと思ひたる事の、さはること出來て、にはかにとまりたる、いみじうする人の、子うまで年比ぐしたる、あそびをもし、みすべき事もあるに、かならずきなんと思ひて、よびにやりつる人の、さはる事ありてなどいひて、こぬ口おし、男も女も、みやづかへ所より、おなじやうなる人、もろともに寺へまふでものへも行に、このもしうこぼれ出て、よういはけしからず、あまりみぐるしともみつべくはあらぬに、さるべき人の、馬にても車にても行あひ、みずなりぬるくちおし、わびては、すき〳〵しからん、げすなどにても、人にかたりつべからんにてもがなとおもふも、けしからぬなめりかし

こゝより下の右兵衛佐中將にておはせしかたり給ひしと云意當段の內也詞おほく事品しげゝれば十七節にわかちて釋し侍るみやすからしめんが爲也就中此一節はかれこれとりあはせていへり、口おしきとは常段の題也心あきらか也御節會とは三節會の事也諸記に詳なり　佛名とは十二月の佛名經の御法事なり前にしるす御節會佛名の比は寒天にてかならず雪ふるなりそれに雪はふらで雨ふりくらしたるは折節に似合ぬけしきぞとなり節會などにとは此一章心あきらか也　いとなみいつしかとは饗應などよういの程に障の有を云なり　いみじうする人のとは夫婦の中に妻の子うまぬ事を云なりいみじうとは寵愛する心也、あそびをもしみすべき事とは友などを待意なり　男も女も以下は花やかなる物まうでに道のほどにて人々しき方の見かけぬは口おしきとなり　おなじやうなるとは甲乙なき義なり　このもしうとははなまめける心なり　よういはけしからずあまりみぐるしともみつべくはあらぬにとは宜しく花やかなる義なり　さるべきとはやむごとなき人なり　馬

にても車にてもとはさるべき人の馬車也　わびてとはさるべき人はみかけねばせめてげす成共みて人に語れよかしといふ心也
(ツ)公事根源云抑此節會は天子紫宸殿に渡御なりて群臣百官酒を給て宴會有儀也　持統天皇四年正月に公卿を内裏にめしてとよのあかりするとありは宴會と書てはとよのあかりとよめり大かたのせちゑの名にて侍にや豐明節會には限べからず神武天皇の御宇にも群臣をつとへて酒給し事は日本紀にみえたれ共是などをも事の發りとは申べきか云々元日節會白馬節會踏歌節會是を三節會と申なり此外に豐明節會侍る今本文にいふ節會は元日の節會なるべし儀式は西宮記同抄北山抄江次第三節會次第及家々記錄に詳なり文繁ければ不及引　(ネ)忠見集云　罪とがを目にしみへねばふる雪のきえん朝をみるばかりなりふる雪は今夜さむげにみゆれ共罪も共にはつもらざりけり
五月の御さうしのほど、しきにおはしますに、ぬり(ナ)こめのふたまなる處を、ことにしつらひしたれば、例さまならぬもおかし、朔日より雨がちにて、曇くらす、つれづれなるを、ほとゝぎすのこゑ尋ありかばやといふを聞て、我もわれもと出たつ、賀茂の奥に、何(ラ)さぎとかや、七夕のわたる橋にはあらで、にくき名ぞ聞へし、其わたりになん、日ごとになくと人のいへば、それは日ぐらしなりといらふる人もあり、そこへとて五日のあした、みやつかさ車のあないひて、北の陣(ム)より、さみだれはとがめなき物ぞとて、さし寄て四人ばかりぞ乘て行、うらやましがりて、猶今ひとつしておなじくはなどいへば、いなとおほせらるれば、聞もいれずなさけなきさまにて行に、馬場(ムマハ)(ヰ)と云所にて、人多くさはぐ、何事するぞと問へば、手つがひにて、ま弓いる也、しばし御覽じておはしませとて、車とゞめたり、右近の中(ノ)將みなつき給へるといへど、さる人もみへず、六位などの立さまよへば、ゆかしからぬ事ぞ、はやく過よとて、行もてゆけば、道も祭の比おもひ出られておかし　第二節これより下つかたに女房達の郭公聞に賀茂の奥へ行事をいへり爰は出給ふさまを云也　五月の御さうしとは夏の御物いみ也　しきとは上に注すぬりこめのまへふたまとは佛など安置ある所なりこのゆへに例ざまならぬと云也　朔日以下は時節をしる

すなり　われも〳〵とは中宮の女房達也　そこへとは賀茂の奥さぎの橋の本へ行かんと也　北のとは北の陣より車さしよせ乘ると也　しがゐなきとは命婦三位などは兵衛陣より外にて乘る法なれどもけふ五月雨ふればそれより內へ引入れ乘る也　うらやましがりとはゆかざる女房達の云意也　いなとおほせらるればとは中宮は御さうしにおはしませども一品の宮など出でさせ給ふにやこのゆへにいなと仰らるゝとかける成べし　聞もいれずとは供奉の者が女房達のうらやむを聞いれぬとなり　てつがひとは競馬の事也　右近の中將とは近衛司の者が務る事也　つき給へるとは列座につゐて次第する事など有を云也　さる人もみへずとは近衛中將はみへずたゞ六位の民など許たゝずみ居るとなり　祭の比とは四月の日祭なり
（ナ）土殿交廊のごとく成所なり今の世物置などいふ心也　（ラ）賀茂の奥に何さきとは私に案ずるに賀茂の奥に鵲(カサヽキ)川と云所有にや古歌に　鵲の川風立ぬ七夕の紅葉とばかり渡やかくらんとよめるはもし此所の事にやいづれの國共在所しれずたゞ今の

本文の詞と此歌の詞とよくかなひ侍る故しるす後人よく可考知云々又片岡社の邊に浮橋と云所有云々　（ム）延喜式云凡乘輦車出入內裏者妃限曹司夫人及內親王限溫明後涼後命婦三位限兵衛陣但嬪女御及孫王大臣嫡妻乘輦限兵衛陣　（ヰ）袖中抄云五月三日は左近荒手結也四日は右近を荒手結也五日は左近の眞手結也六日は右近眞手結也荒手結の日はいての近衛舍人水干ばかまにくゝりをあけて褐の尻を女の中ゆひたるやうに引出て其上にむかばきを結なり眞手番の日は紅の下のはかまおり物のさしぬきにくゝりをあげずそばをはさみて褐の尻を冷より前さまに引たをりて前にはさめりされば此眞手番の日をひおりの日とはいふなり云々同横源同　定家卿說云まて弓の手結に舍人どもまさしく褐をひおりてきたるをひおりといはんたがはず聞ゆ荒手結にも同じすがたなれどあら手結はかたのやうなる事にてまてつがひをむねとしたればとの事ありて聞ゆ　私云右ひおりの日の沙汰を專とせらるゝ法なれ共手つがひの事に便侍る故委記之　類聚國史云承和元年五月乙卯天皇

御二武徳殿一覧二四府馬射（ウマツカヒ）一丙辰五御二観親王以下五位所レ貢競馳馬一戊午五御二同殿一令二四衛府馳一畫二種々馬藝及打毬一之同六年五月乙卯是端五之節也天皇御二武徳殿一観二騎射一

かくいふ所に、あきのぶの朝臣家あり、(オ)そこもやがてみんといひて、車よせてをりぬ、ゐ中だち事そぎて、(キ)馬のかたかきたるさうし、あじろ屏風(ク)みくりのすだれなど、ことさらにむかしの事をうつしたるやのさまは、はかなだちて、はしちかくあさはかなれど、おかしきに、けに、かしかましとおもふばかり、なきあひたる郭公の聲を、御前に聞しめさず、さはしたひつる人々にもなどおもふ、所につけてはかゝることをなんみるべきとて、稲といふ物おほく取出て、わかき下女（シモヲムナ）とものきたなげならぬ、そのわたりの家のむすめ　おんななどひきゐてきて、五六人してこかせ、又みもしらぬ、くるべきもの、二人してひかせて、うたうたはせなどするを、めづらしくてわらふに、郭公の歌よまむなどしつる、わすれぬべし　第三節賀茂へいたり給ひて彼所の遊興をしるせり　かくいふ所とはさぎの橋の邊也　ゐなかだち以下はあきのぶ朝臣の住居のさまを云也　むかしの事とはいにしへはよろづことそぎたればむかしの事をうつしたると云也　ほとゝぎす以下は中宮の御事のこり給ふ女房達の事などを略する義なり　いねとは稲也　稲こくは秋の事なり五月の比稲こくといふは少心得がたきにや又云いにしへは刈し稲を束ね置て要用にしたがひて扱（コキ）揉（スリ）てつかふとなりされば今の稲こくとは去年の稲を扱揉などするとも也こかせは稲を扱也　みもしらぬとは見しらぬと云義也　穀を摎春の事なり

（オ　高階氏系圖云

- 成忠　侍從一條院　改眞人朝臣
  - 助順　内藏頭正四下
  - 信順　左中辨從四下
  - 明順（アキノブ）　五位藏人東宮學士　三事左中辨從四上
  - 道順　右兵佐木工頭
  - 積善　彈正少左少辨
  - 淨昭　法橋
  - 女子　歌人高内侍

（ク）淨舟卷にもまたいとあらゝしきにあじろ屏風など御覧じもしらぬしつらひにて風もことにさはらず云々　竹などにてくみたる屏風なり　（ヤ）

三稜草の莚にてあみたるすだれなり

から繪にかきたる懸盤などして、ものくはせたるを、見入る人なければ、家あるじいとわろくひなびたり、かゝる所に來ぬる人は、ようせずは、あるもなどせめいたしてこそまいるべけれ、むげにかくては其人ならずなどいひて、とりはやし、この下わらびは手づからつみつるなどいへば、やがて女官などのやうに、つきなみてはあらんなどいへば、とりおろして、例のはひぶしにならはせ給へるおまへだちなればとて、とりおろしまかなひさはぐほどに、雨ふりぬべしといへば、いそぎて車にのるに、さてこの歌はこゝにてこそよまめといへば、さばれ道にてもとなどいひて、卯花いみじくさきたるを折つゝ、車のすだれそばなどに、ながき枝をふき、さしたれば、たゞ卯の花がさねを、こしにかけたるやうにて見へける、供なるをのこどもの、いみじうわらひつゝ、あじろをさへつきうがちつゝ、こゝまだし〳〵と、さしあつむなり、人もあはなんとおもふに、更にあやしき法師あやしのいふかひなきもののみ、たまさかにみゆる、いとくちおし　第四節あきのぶ朝臣のもてなし又は歸るさのさまなどの事をいへり

からゑとは唐繪の懸盤也是則あきのぶの饗の義也　家あるじとはあきのぶの詞なり又云女房達の心也　ようせずとは饗をよく調する力なくば有にまかせこひ出しなどしてまいるべき事ぞと也　無下にかくてとは少しも聞しめさではかやうの所へ來り給ふ人々とはおぼへぬと也　女官などゝは刀自得選ひすまし御厠用人のごとくにはあるべからずと女房達の申されしと也　則女官に對していふ也にようくわんとよむべし　例のはいぶしはあきのぶが詞なり　雨ふりぬべくとは供の者の詞也　いそぎ車にのるとは歸さもよほす也　さてこのうたとは女房達の乘てたくみし郭公の歌の事也　さはれとはさはあるべけれどゝなりかたはらの女房のいふ詞也　たゝ卯の花がさね以下車の風流なるをみたてたるさまなり卯の花がさねの衣を與にかけたるやうなるとたとふる義也　こゝまだしとはのこらず花をさす心なり　人もあはなんとは心ある人にみせなんとおもふにそのかひなく侍るとなり

（マヽ）女官の義前に記之

ちかうきぬれば、さりともいとかうでやまんやは　此

車のさまをだに、人にかたらせてこそやまめとて、一(フ)條殿の料にとゞめて、侍從殿やおはします、ほとゝぎすの聲聞て、いまなん歸侍るといはせたる、つか(ヨ)ひたゞいままいる、あが君〳〵となんの給へる、さぶらひに聞ひろげて、いそぎたちて、指貫たてまつりつといふに、まつべきにもあらずとて、はしらせて、(エ)土御門ざまへやらするに、いつの間にかさうぞきつらん、帶は道のまゝにゆひて、しばし〳〵とをひくゐ、供に侍雜色(サブラヒザウシキ)三人ばかり、ものもはかではしるめる、とくやれどいとゞいそがしく、(〇)土御門にきつきぬるにぞ、(テ)あへぎまどひておはして、まづ此車のさまをいみじくわらひ給ふ、うつゝの人の乘たるとなん、さらにみへぬ、猶をりてみよなどわらひ給へば、供なりつる人どもゝ、けうじわらふ、歌はいかにか、それきかんとのたまへば、いま御前に御覽せさせてこそはなどいふほどに、雨まことにふりぬ、などかことみかどのやうにあらで、此土御門しも、うへもなくつくりそめけんと、けふこそいとにくけれなどいひて、いかでかへらんずらん、こなたざまはたゞをくれじとおもひつるに、人目もしらずはしられつるを、(キ)あらいかゝ事こそいとすさまじけれとのたまへば、いざ給へかし內へといふ、ゑぼうしにてはいかでか、とりにやり給へなどいふに、まめやかにふれば、笠なきをのこどもゝ、たゞ引にひきいれつ、一條より笠をもて來るを、さゝげて、うちみかへり〳〵、此たびはゆる〳〵とものうげにて、うの花ばかりを取おはするもおかし

第五節歸さの道にて一條殿へ音信ありし事雨にあひ給ひし事などをいへり、ちかうとは內裏ちかうなりたると也　さりとも以下女房達のいへる意也　つかひたゞいま參るとは取次の人一條殿へ披露する義也　あが君〳〵とは一條殿悅びて請候せむと思召の給ふ詞也　さぶらひに聞ひろげとはおましなど明しつらひ給ふさまなり　さしぬきは一條殿の裝束し給ふさま也　たてまつりつといふとは女房達の使が立歸りて云義也

まつべきにもあらずとは女房達の意なり一條殿のいでむかひ給ふべきを待居事ならずとなり　さうぞきつらん以下は一條殿のをひしたひ出て來り給ふ事を云也　とくやれどいとゞいそがしとは一條殿の輿の事也　まづ此事のやうとは卯の花かざしたる車なれば一條殿興じ給ふ義也　猶おりてみよとは車の內にて一品宮の女房達へ仰らるゝ義成

べし　歌はいかにとは、侍どもの詞也　いま御前に御覧せさせてよとは女房達の詞なり御前は中宮なり中宮御さうしにてしきにまします由此段の初に侍るなり　などか以下は土御門といふにちなみて戲ごとする義なり心あきらか也　いかでかへらんずらんとは雨のふるゆへに如何がしてかへらんと也女房達の詞なり　こなたざまとは一條殿の詞なりたゞ追ひつかんとばかりにて身すがたもかひつくろはず侍れば直に内へまいらんはすさまじきとなり　いざ給へとは女房達の詞なり直に内へまいり給へと誘引する義也　烏帽子とは一條殿の詞なり　とりにやりて給へとは女房達の詞也　笠なきをのことは車のともの人なり　一條より笠をもてきたるとは一條殿の御方より笠持て御むかひに來りしと也　さゝせて出下は一條殿の御館へ立歸給ふ事をいふなり　此たびはゆる〳〵とは初は走り追ひ付給ひしが此度の歸るさはゆる〳〵とし給ふとなり　ものうげにてとは藤侍從の雨にふられて歌のもよほしもむなしくして歸り給ふ事を云なり

(フ)勘物云公信恒德公六男母讃岐守公女長德元年九月十九日侍從十九同年十月右兵衛佐長保元年閏三月少納言同年九月一日右少將卅三二年十一月七日聽禁色

爲光─母京極女一條
─誠信從三位參木
─齊信傳與ニアリ
─道信歌人右中將
─公信母伊尹公女

左兵衛佐少納言藏人頭春宮大夫別當正三位中納言　萬壽三年五月十五日薨　(コ)おましの事也　(エ)土御門は一條より下第三の筋則今の長者町といふにあたるなり　(〇)延喜式云凡乘レ車出二入宮城門一者妃已下大臣嫡妻已上限二宮外一四位已下及内侍者聽レ出二入土門一但不レ得レ至二陣下一　(テ)嚔咳闘絶するさまなり　(△)一本あゝいかんトアリ

さてまいりたれば、ありさまなど、とはせ給ふ、うらみつる人々えじ心うがりながら、藤侍從、一條の(ア)大路はしりつるほど語るにぞ、みなわらひぬる、さ

ていづら歌はととはせ給ふ　かう〳〵とけいすれば、くちおしの事や、うへ人などの聞むにいかでかおかしき事なくてはあらん、そのきゝつらん所にて、ふとこそよまゝしか、あまりぎしきことさめつらんぞ、あやしきや、こゝにてもよめ、いふかひなしなどのたまはすれば、實とおもふに、いとわびしきを、いひあはせなどするほどに、藤侍從の、ありつる卯の花につけて卯の花のうすやうに　ほとゝぎすなくね尋ねに君ゆくと、聞かばこゝろをそへもしてまし」返しまつらんなど、つぼねへすゞり取にやれば只、これしてとくいへとて、御硯のふたに、紙など入て給はらせたれば、宰相の君かき給へといふを、なをそこになどいふほどに、かきくらし雨ふりてかみもおどろ〳〵しうなりたれば、物もおぼへず、たゞおろしにおろす、しきの御ざうしはしとみをぞみかうしにまいりわたしまどひしほどに、歌の返り事もわすれぬ、たゞ今、なを其御返事奉らんとて、とりかゝるほどに、人々上達部など、かみの事申しにまいり給ひつれば、西おもてにゐてもの聞へなどするほどにまぎれぬ、人はた、さしてえたらん人こそしらめとてやみぬ、大かた此ことにすくせなき日なり、どうじて、いまはいかでさなんいきたりしとだに、人に聞せじなどぞわらふを、今も、などぞいきたりし人どものいはざらん、されどもさせじとおもふにこそあらめと、物しげにおぼしめしたるもいとおかし、されど今すさまじくなりにて侍るなりと申す、すさまじかるべき事かはなどのたまはせしかば、やみにき

後にまいり給ひて歌などよみ給ひし事をかけり、第六箇女房達の車内へ歸り參り給ふこと又一條殿

さてまいりたればとは郭公聞歸りし女房達也　とはせ給ふとは中宮の問ひ給ふ也　うらみつる人とは初ゆく時にひとつしておなじくはなどいひて跡にのこりし女房達のことをいふなり　みなわらひぬるとは初の怨じ恨む人々も道すがらのさまなど打聞てうらみを解笑ひ興じたりしとなり　さていづら歌とは中宮の御詞なり　かう〳〵道すがらのやうすを物語申すなり　くちおしの事以下は中宮の御詞なり　おかしき事とは歌の事なり　その聞つらんとは郭公の事なり　げにとおもふにとは女房達の詞なり中宮の仰のごとくいふかひなきことなれどもよき歌よまんとすればわびしきと也　いひあはせとは女房達の歌の事をいひあはする義な

り　藤侍従のありつるとは公信朝臣與をさまさず　そのまゝよみ給ひしなり　ほとゝぎす　此歌公信の歌なり心あきらか也　聞かばとはわが聞ば也郭公の聲聞事をもたせたり　返しまつらんとは女房達の詞也まつらんは奉らんなり　たゞこれしてとくいへとは中宮の仰なり　宰相の君とは女房なり女房達の宰相に歌の返し書給へと申さるゝなり　なをそこにとは宰相の詞なり少納言へ對しての給ふなり　かきくらし以下は雨雷など歌の妨となりし事を云なり　たゞおろしとは御かうしまいらする事なりさはがしき義なり　すこしやむとは雨雷なり　くらくとは日もくれたるとなり　とりかゝるとは女房達の返歌せんとてとりかゝられしとなり　人々上達部以下は又歌を妨げらるゝ事を云なり　西おもてにゐてとは上達部の御見廻にまいり給ひし挨拶に出し義なり　人はたさしてとは返歌せぬゆへを斷るなり一條殿の何がしにとてさしむかひ給はらむこそことさらに返しせんずらめと也　大かた以下は歌のなかりし故をかさねて斷りいふ也　いまはいかでさなん郭公聞に行し事を人につゝめと女房達のいひ給ふ義也　歌のなき事をはづる義也　今もなどそれいきたりし人とはいかにつゝむとも行し人々のいひもらさんとなり　されどもさせじとは中宮の御詞なりされどもとは前をうけて歌のなき義を救ひ給ふ心なりさせじとは道すがら儀式ばみ歌なふして歸りし事を云なり畢竟歌あらんとおもふ人のおもはくををしはかりの給ふなり　されどいますさまじく以下は女房達の詞なり　中宮仰の通にはさふらへ共當分返しさへ侍らぬはすさまじきとなり　すべて是までは郭公尋ねに行歌もよまで歸しは口おしきといふ心をいへり

（ア）拾芥云北極大路弘十二丈幷次四大路廣各十丈左右京式同一條の大路も十丈の内なるべし　（サ）驚々オドロ〳〵シ茨同おそろしき義也　（キ）動ドウの字なりゆすりとよむ心なり

二日ばかりありて、その日の事などいひ出るに、宰相君いかにぞ、手づからおりたるといひし下わらびはと、のたまふを聞せ給ひて、おもひ出る事のさまよとて、わらはせ給ひて、紙のちりたるに、「下わらびこそ

戀しかりけれ」とかゝせ給ひて、もといとへと仰らるゝもおかし、「郭公たづねて聞し聲よりも」、とかきてまいらせたれば、いみじううけばりたりや、かうまでだにいかでほとゝぎすの事をかけつらんと、わらはせ給ふもはづかしながら、何かこの歌よみ侍らじとなん、おもひ侍るものを、物のおりなど、人のよみ侍るにも、よめなどおほせられば、えさふらふまじき心地なんし侍る、いかでかは、もじのかずもしらず、春は冬の歌をよみ、秋は春のをよみ、梅の折は菊などよむやうは侍らん、されど、歌よむといはれ侍りしすゑ〴〵は、すこし人よりまさりて、其おりの歌はこれこそ有けれ、さはいへどそれが子なればなど、いはれたらんこそ、かひある心地もし侍らめ、露とりわきたるかたもなくて、さすがに歌がましく、我はとおもへるさまに、さいそによみいで侍らむなん、なき人のためにいとおしく侍るなど、まめやかにけひすれば、わらはせ給て、さらばたゞ心にまかせよ、われはよめともいはじとのたまはすれば、いとこゝろやすくなり侍りぬ　第七節こゝには前の郭公の歌の時にちなみて中宮少納言の連歌又和歌よみがたく大切なる事をいへり　二日ばか

りとは前の郭公聞に行し日より後二日なり　その日とはまへをさすなり　宰相君いかにぞとは宰相の少納言にいひかけ給ふ詞なり聞せ給ひとは中宮の聞召てなり　おもひ出るとは中宮折節御意にうかひしとなり　下わらびの御歌の心あきらかなり　もといへとは歌の上の句なり中宮の仰なり　郭公の歌心あきらかなり上下よく心通じたり　いみじう以下は中宮の御詞なり　かけつらんとは心にかけつらんなり　はづかしながらとは少納言の詞なり　この歌よみ侍らしとは卑下の心なり　えさふらふまじきこゝちなんし侍るとはつねていの歌よまむよりはたゞえよみさふらふまじくおもふとなり　いかでかは以下は歌よむ大法を云なり　侍らんとはいかで侍らんの出要(テニヲハ)なりかやうのそむけるほどの事はせまじとなりされど以下は此道の大切に家の風の吹傳らん事をおもふ由をしるせり　その折の歌以下は後をゝしはかりていふ也　さすがに歌がましくとは卑下なふしてよむ心をいへり　さいそは最初なり人に先立義なり　なき人とは親先祖をいふ也いま少納言の身にしては元輔へ忠孝の意なり　まめやかにけいすとは實をつく

して中宮へ啓するとなり　わらはせ給ふ以下は中宮の聞召わけてゆるし給ふ義なり　心にまかせよとは少納言が心にまかせよなり　われはよめともいはしとは中宮の仰なり　いとこゝろやすくとは少納言の詞なり

今は歌のこと、おもひかけ侍らじなどいひてある比、庚申(カウシン)(二)せさせ給ふとて、内大臣殿いみじう心まうけせさせ給へり、夜うちふくるほどに題いだして、女房に歌讀せ給へば、みなけしきだちゆるがしいだすに、宮の御まへにちかくさふらひて、物けいしなどこと事をのみいふを、おとゞ御覽じて、などか歌はよまではなれ居たる、題とれとのたまふを、さることうけ給はりて、歌よむまじくなりて侍れば、思ひかけ侍らず、ことやうなる事、まことにさる事やは侍る、などかはゆるさせ給ふ、いとあさましきことなり、よしこと時はしらず、こよひはよめなどせめさせ給へど、けぎよう聞も入でさふらふに、こと人どもよみ出して、よしあしなどさだめらるゝほどに、いさゝかなる御ふみをかきて、給はせたり、あけて見れば「もとすけが後といはるゝ君しもやこよひの歌にはづれてはをる」とあるを見るに、おかしき事ぞたぐひなきや、いみじくわらへば、何事ぞ〳〵と、おとゞものたまふ「その人の後といはれぬ身なりせはこよひの歌はまづぞよまゝし、つゝしむ事さふらはすは、千歌なりとも、これよりぞ、いでまふでこましと啓しつ　第八節まへのつゞきに少納言家の風をせちに思はるゝ由をしるされたりこれ誠に祖業を承繼る孝のいたりなり　今は歌のこととは前の詞をうけていふ心なり中宮のゆるし給ふ故に思ひかけぬとなり　心まうけとは御心の内に饗應のよういある義也　みなけしきだちとはいつれも女房達のいかさまよまんとけしきだつさまなり　ちかくさふらひてとは少納言みつからの事なり　物けいしとは物語の心なり　おとゞ以下内大臣殿少納言をとがめ給ふ義なり　さることは中宮のゆるし給ふ事を云ふなり　ことやうなることゝはおとゞの詞なり中宮のゆるし給ふとはことやうのめづらしき義ぞとなり　けぎやう聞もいれで少納言の詞也　こと人ども以下女房達の歌を一品宮中宮などの御批判ある由なり　いさゝかなる御ふみとは中宮より清少納言に給はりしとなり色紙やうもの成べし

もとすけとは元輔なり少納言の父なり歌の心あきらかなり少納言を勵まし給ふ心なり。その人とは元輔なり此返歌則少納言即座なり心もあきらかなり尤家の風をかなしみ父が道をつゝしむ事やんごとなき心ばへなりこれよりぞとは御催し侍らずともといふ義なり是家風に付て口をしき事を云なり

〔ユ〕老子經云庚申夜著人眼則三尸九虫以爲レ災也拾芥云庚申人腹中有二三尸一爲二人大害一常庚申之夜上告二天帝一記二人罪過一絶二人生籍一庚申之夜不レ寢則不レ得レ上レ天 庚申經 又云心まうけトハ　歌の趣向をおもひまうけ給ふ義也

しきにおはします比、八月十餘日の月あかき夜、右近の内侍に琵琶ひかせて、はしちかくおはします、これかれ物いひわらひなどするに、廂の柱によりかゝりて、物もいはでさふらへばなどかうをともせぬ、〔一〕物いへさう〳〵しきにとおほせらるれば、たゞ秋の月の心を見侍るなりと申せば、さもいひつへしと仰せらる、御かた〴〵公うへ人など、御前に人おほくさふらへば、ひさしの柱に寄かゝりて、女房と物がたりしてゐたるに、物をなげ給はせたる、あけて見れは、おもふべしやいなや、題ならすはいかゞととはせ給へり、御前にて物語などするつゐでにも、すべて人には一におもはれずば、更に何にかせん、たゞいみじうにくまれ、あしうせられてあらん、二三にてはしぬともあらじ、一にてをあらんなどいへは、〔ヌ〕一乘の法なりと、人々わらふ事のすぢなめり、筆紙給はりたれば〔ミ〕九品蓮臺の中には、下品といふともと、かきてまいらせたれば、むげにおもひくんじにけり、いとわろしいひそめつる事は、さでこそあらめとのたまはすれば、人にしたがひてこそと申、それがわろきぞかし第一の人に又一におもはれんとこそ思はれけめと、おほせらるゝもいとおかし　第九節中宮月見給ふ時の御物がたりなどをしるされたり　職におはしますとは、中宮のおはしますと也　これかれ以下は御まへにして女房達の有樣を云也　よりかゝり物もいはでとは少納言みつからのさまを云也　なとかう以下は中宮の詞也少納言の有樣をとがめ給ふ義也　たゞ秋の月以下は少納言の詞也　月の心を見侍るとは風情を味ひあはれむ也　さも

いひつべしとは中宮の御詞なりさもあらんと也　御かた〳〵とは中宮御腹の宮々をいふなり　公達うへ人とは中宮の御はらからの君だちをいふ也　庇の柱によりかゝり以下は又みづからのうへをいへり　物をなけ給はせたるとは中宮より御ふみなど給はりし義なり　おもふべしやいなや題ならずはいかゞとは御ふみの詞なり題を下されねは歌をよまぬが今夜の月はよき題ならずやいかにして歌よまぬぞとの義なり　御前にて以下は少納言心のたしなみつゝしみを云なり　物語などゝは歌のみならず常々の話(モノカタリ)にも並々にてはあらじとなり　二三とは二等三等とをとる義なり　しぬともとは不レ為ともなり人よりをとりては世につかへ人にましはる事せずともあらんとなり　一にてをあらんとは才德諸人の上にあらんとおもふ義なり　一乘以下は女房達の詞なり二三にをちずたゞ一にてあらむといふ詞にしたがひてそれは一乘の法問のごとく無二亦無三の氣なると戯にたとへ云義なり　筆紙給はりたれはとは是に題ならずはいかゞととがめ給ふ歌をかけとなり　九品以下は少納言の書て奉られし詞なり一乘といふにちなみていふ卑下の心なり上品には及びがたけれは下品といふ共人なみ〳〵にしたがひをらんとなり　むげに以下は中宮の仰なりおもひくんじはおもひうんじ也　いひそめつるとは初一にといひし詞をうけてのたまふ義なり　さてこそとはさやうでこそあらめ也　人にしたかひてとは人の詞にしたがひてなり又云人の氣に隨ひあさましき下品なり共と申侍るといふ義なり則清少納言の詞也　それがとは中宮の少納言が意を判し給ふなり何ゆへ人の品にしたがひつゝ下品迄をいふぞや只第一の人にさへ一と思はるれば其外の下品の人のうへは取にたらざると仰らるゝ義なるべし超越の氣味なりこれはすべて我身のうへ口おしき事をいへり

(十)うつほ物語十七云八月十七日はかりの月のやう〳〵たかくなり御まへのやり水せむさいさま〳〵におもしろく虫のねも哀に風も凉しきト有さま也　(一)後撰に「秋の夜の月の光は清けれと人の心のくまはてらさす　又「月影はおなし光の秋の夜をわきてみゆるは心成けり　詞花に　花山院

「秋の月に心のあくかれて雲井に物をおもふ比哉」かやうの歌の餘情を思ひよりてかける文なるへし　(メ)法華經方便品云十方佛土中唯有二一乘法一無レ二亦無レ三除二佛方便說一　(ミ)無量壽經惣分二三輩一十六觀經開作二九品一蓮華臺說相彼經に詳也

中納言殿まいらせ給ひて、御扇奉らせ給ふに、隆家(一)こそいみじきほねをえて侍れ、それをはらせてまいらせんとするを、おぼろけの紙は、はるまじければ、もとめ侍るなりと申給ふ、いかやうなるにかあると、とひ聞へさせ給へば、すべていみじく侍る、さらにまだみぬほねのさまなりとなん、人々申、まことにかばかりのは見へざりつと、ことたかく申給へば、さで扇のにはあらで、くらげ(シ)のなりと聞ゆれば、これは隆家がことにしてんとてわらひ給ふ、かやうの事こそ、かたはらいたき物のうちに入つべけれど、人ごとなおとしそと侍れば、いかゞはせん

第十節前の物語のつゝきに中納言殿の扇の物語の事をかけり是則口おしかるべきことならねばその由を斷るなりたゞ物語のつゐでにおかしき事なればしるされたり　まいらせ給ひてとは中宮の御方へまいり給ふ也　もとめ侍るとは世によき紙侍らば求うけてはらせ奉らんと也　いかやう以下は中宮の詞也　すべていみじくとは御前の人々の詞也　まことに以下隆家の詞成べし　さて扇にはあらてとは御前の人々公達などの詞成べし　くらげのとはありがたきこゝろを云也　これは以下中宮の仰也　かやうのことゝは此一節に口おしき心侍らねばその由を斷りいふ也　人事とは中宮の仰也人のうへのことをかたはらいたきさまいひおとしめなと也此故にこゝにいれしも口おしきといふ心もみへたりいかゞはせんとかけるは此心なるべし

(一)隆家系圖前詳に記す　(シ)海月も骨にあふなといへる諺も侍ればそれにちなみかける成へし是大切なる事をいはん爲なり

雨のうちはへふるころ、けふも降に、御使にて式部のぞう信經(ア)まいりたり、例のしとねさし出したるを、つねよりもとをくをしやりてゐたれば、あれはたれがれうぞといへば、わらひて、かゝる雨にのぼり侍らは、あしがたつき、いとふびんに、きたなげ(ヒ)になり侍りなんといへば、などけんぞくれうにこそはな

らめといふを、これは御まへにかしこうおほせらるゝにはあらず、信經があしがたの事を申さらましかは、えのたまはざらましとて、かへす〴〵いひしこそおかしかりしか、あまりなる御身ぼめかなとかたはらいたし　第十一節式部せう信經と少納言と戲言の有事をかけり信經が興を起したるやうにいふを、口おしのいひごとやといふ義也　御使とは內より中宮への御使成べし　例のしとねとは前にみえたり　つねよりもとをくとは常の時も憚りしかぬ也　今は殊更雨ふり侍れは猶しかざると也　あれはたがれうぞとは少納言の詞なり信經をとがめ問ふ心也　かゝる雨以下は信經の詞也　などけんぞくれうとは又少納言詞なりあしがたといふ詞ニ應じてけんぞくれうといふこれ滑稽心也　これは御まへに以下は式部ぞうが詞也　かへす〴〵いひしとはわが辨才のやうにくり返しいふと也これら口おしきいひごとかなといふ義也　あまりなる以下式部丞が詞也又云少納言の詞なり信經のわがざへのやうにかへす〴〵いふを御身ほめかなと云なり
（ヱ）藤氏家譜云

○兼輔 號堤中納言 ―― 雅正 刑部大輔 從五位下 ―― 爲長 陸奧守 從五位上
- 通經 從五位上
- 心經 從五位下
- 信經 從五位下 越後守

（〇）勘物云信經長德元年正月十一日藏人廿七右兵衞尉二年兵部丞三年正月式部丞　（ヒ）眷屬料ケンゾクレウ家禮衆の爲の用意の義也

はやう大后宮オホキサキノミヤ（モ）に、ゐぬたきといひて名たかきしもつかへなんありける、美濃守にてうせにける、藤原の時柄、（セ）藏人なりける時、しもづかへともある所に立寄て、是や此高名のゐぬたきなど、さもみへぬといひける、いらへに、それは時からもさもみゆる名なりといひたりけるなん、かたきにえりても、いかでかさることはあらむと、殿上人上達部までも、けうある事にのたまひける、又さりけるなめりと、今までかくいひつたふるはと聞へたり、それ又ときからがいはせたるなめり、すべて題いだし、かうなんふみも歌もかしこきといへば、げにさもある事なり、さらば、題出さん歌よみ給へといふに、いとよき事、ひとつは何せん、おなじうはあまたをつかうまつら

んなどいふほどに、御題は出ぬれは、あなおそろし、まかり出ぬとてたちぬ、手もいみじうまなもかんなもあしうかくを人のわらひなど、すれは、かくしてなんあるといふもおかし、作物所(ツクモトコロ(ス))の別當する比、たれがもとにやりけるにかあらん、物の繪やるとて、これかやうにつかうまつるべしと、かきたるまんなのやう、文字のよにしらずあやしきを、みつけてそれが、かたはらに、是がまゝに、つかうまつらば、ことやうにこそ、あるべけれとて、殿上にやりたれば、人々とりてみて、いみじうわらひけるに、おほきにはらだちてこそ、うらみしか　第十二節時柄か滑稽をこのみ和歌よむさまにもてなしていさといはれてにけ笑はれなとする事の口おしき事をいへり　はやうとは昔なり崩し給ふ大后宮の御時を云勘物系圖後書にしるす　ゑぬたきは下つかへの名也　是や此高名のゑぬたきとは時柄か尋る詞なりゑぬと云を不ㇾ得といふ儀にとりなして云也　それはときからもとは下つかへとものいらへなりときから早(トク)からなりとくよりこゝに不ㇾ得といふ義也時柄か名をとりなしてゑぬたきか侍らぬ心をいへり　かたきにえりてとはわさと相手にえりまうけたりともかくは申されまじとなり　又さりけるなめりとは地の詞也　それ又以下も地に論する心なり時柄かいまにいひ傳へてのこしをひたるとなり　すへて以下は又時柄か常々の事を書り　題いたしとは何事によらす一事の題を出しかくのことく文の沙汰にても歌の噂にてもかしこきといひてほむる事侍れはと也　けにさもある事なりとは時柄か詞なり自賛憍慢の心なり　さらは題出さんとは皆過し事を當時少納言の語らるゝ義なればこの題出さんと云よりいにしへの事を云ふ也　いとよき事とは人々のとも〳〵に歌を催して時柄によませんとする義なり　あなおそろしとは時柄がさまなり　手もいみしうとは時柄は手もきはめてあしかりしとなり　かくしてとは如此にげまどふといふ義なり　たれがもとゝは時柄が役目の事をいひ付る義なりそれにそへ書してやるとなりあやしきを見付てとは人々の見付てなりそれがかたはらとは書付の傍なり　これがまゝにとは書付の面しか〳〵聞へぬを打任て畫ばあしからんといふ心なり　おほきに以下は時柄がさまを云なりこれらは時柄が口おしきむかしがたりなり

（モ）勘物云中后宮安子康保元年四月廿四日崩三十八　系圖云
師輔――女子 中宮從三位安子 母同二兼家一邦經女
村上后冷泉圓融母后天慶三年四月廿七日爲二女御一天德二年十月廿七日中宮應和四年四月廿九日崩卅八贈二皇太后又重大皇太后宮一
（セ）勘物云時柄康保五年正月廿八日美濃守元兵庫頭東宮大進天延二年六月廿七日攝津守從四下長德二年五月三日藏人兵部少丞一任補二作物所別當一　補任などにもみへすに勘物をしるされし事此道の大幸なる者歟尙後の人可二考知一　（ス）拾芥云作物所在二進物所西一有二別當預二麪食一同書所內豎道遙院殿說云金銀細工人の居る所なり

淑景舍春宮にまいり給ふほどの事など、いかゞはめでたからぬ事なし、正月十日、まいり給ひて、宮の御かたに御ふみなどは、しげうかよへど、御對面などはなきを、二月十日、宮の御方にわたり給ふべき御せうそこあれば、つねよりも御しつらひ、心ことにみがきつくろひ、女房などもみなよういしたり、夜なかばかりにわたらせ給ひしかば、いくばくもなくてあけぬ、登華殿（二）の東の二間に、御しつらひはしたり、つとめていと〻く、御かうしまいりわたして、曉、殿うへひとつ御車にて參り給ひにけり、宮御ざうしの南に、四尺の屛風、西東にへだて〻、北むきにたて〻御たゝみ御しとねうちをきて、御火桶ばかりまいりたり、御屛風の南、御帳のまへに、女房いとおほくさふらふ、こなたにて御ぐしなどまいるほど、しげいさは見奉りしやと、とはせ給へば、まだいかでか、積善寺（三）供養の日、たゞ御うしろばかりをなんはつかにと聞ゆれば、その柱と屛風とのもとによりて、わがうしろよりみそかに見よ、いとうつくしき君ぞとのたまはすれば、うれしさまさりて、いつしかとおもふ　十二節淑景舍のめでたくいみじきことをしるされたり詞おほく事しげ〻れは悉口おしき義には侍らねども委く書載られたり其中に口おしき義ども數々見へたり宜心をつけてみるべき也　淑景舍の事前に見へたり　春宮とは三條院なり是も前に見へたり　正月十日まいり給ひてとは淑景舍の入宮也勘物後書にしるす　宮の御方とは一品の姬宮也　宮の御方にわたり給ふべきとは一品の宮へ渡御まし〳〵て御對面あるべきとなり　夜な

かばかりとは二月十日の夜半に渡御し給ふとなり

　登華殿以下はしつらひおましの事を云なり　あかつきとは十三日の晨なり　殿うへとは關白道隆公と中宮と御同車にて一品の宮の御かたへいらせ給ふとなり　宮は御さうしの南とは一品の宮の御ありさまを云なり女房いとおほくさふらふとは一品の宮の女房達なり　こなたにて御くしまいるほどとは一品の宮の御化裝の間に少納言へ仰らるゝ義なり　しげいさは見奉りしやとは淑景舍の姫君をこれよりさきにみまいらせしかと尋ね給ふなり

　またいかで以下は少納言の御いらへなり　積善寺とは道隆公の御願也　委次に來暦をしるし侍るべしその供養の時御後すがたをすこし見まいらせしとなり　其柱以下は一品宮の御詞なり少納言に見よとてをしへ給ふ義なり　うれしさ以下は少納言みづからの趣をいふなり

(二)勘物云信經記云二月十八日渡二御登花殿一仰二掃部寮一敷二莚道一午刻供二朝膳一未刻渡御頭中將美信朝臣持二御劍一於二南妻一有二侍臣盃酒事一申刻還御シ玉フ　(三)榮花物語見果ぬ夢の卷に月日もすきもていきて正暦三年になりぬ云々かくて攝政殿の法興院のうちに別に御堂たてさせ給て積善寺と名づけさせ給てその御堂くやういみじくぞいそがせ給大鏡にもさて積善寺のくやうの日この入道殿のかみに侍りしはいとめづらかなりしわざかなと云々　榮花に攝政殿とあるは道隆の御父兼家公なり兼家公の御願の法興院の内に又別に積善寺を道隆の御建立あるなり大鏡に此入道殿といふは道隆の御事也　積善寺供養の事は抄の十三にうれしき物と云段に見へたり

(四)紅梅のかたもん、(五)うきもんの御ぞとも、くれなひのうちたる御ぞ、三重がうへに、たゞひきかさねて奉りたる、紅梅には、こききぬこそおかしけれ、今は紅梅はきても。ありぬべし、されどもへぎなどのにくければ、くれなひには、あはぬなりとのたまはすれど、たゞいとめでたくみへさせ給ふ、たてまつりたる御ぞにやがて御かたちのにほひあはせ給ふぞ、なをことよき人も、かくやはおはしますらんとぞゆかしき、(六)扨いざりいらせ給ひぬれば、やがて御屛風にそひつきて、のぞくを、あしかめり、うしろへたきわさと、

聞へごつ人々もいとおかし、御障子のひろうあきたれば、いとよくみゆ、うへはしろき御ぞとも、紅のはりたる、ふたつばかり、女房の裳なめり、ひきかけておくによりて、東むきにおはすれば、たゞ御ぞなとぞみゆる、しげいさはきたにすこしよりて、南むきにおはす、紅梅どもあまた濃うすくて、うへにこきあやの御ぞ、すこしあかきすはうの織物のうちき、もへぎのわかやなるかた紋の御ぞたてまつりて、扇をつとさしかくし給へり、いといみじく、げにめでたくうつくしとみへ給ふ、殿はうす色の御直衣、もへぎの織物の御指貫、くれなひの御ぞども、御紐さして、ひさしの柱にうしろをあてゝ、こなたざまにむきておはします、めでたき御有さまどもをうちゑみて、例のたはふれ事をせさせ給ふ、しげいさの、繪にかひたるやうに、うつくしげにてゐさせ給へるに、宮いとやすらかにいますこし、おとなびさせ給へる御けしきの、紅の御ぞにほひあはせ給ひてなをたぐひは、いかでかと見へさせ給ふ　第十三節淑景舍の君の御裝束關白殿の御ありさまをいへり

紅梅のかたもん以下これは殿の上中宮御裝束奉る由を述られたりくれなひのうちたるとは砧などにて打たるきぬなり　三重がうへにとはかさねの間にめし給ふ義なり　奉りたるとはめしたるとなり　今は紅梅はきてもありぬべしとは二月の初比なればおほくなみ〴〵にきるべき時にぞとなり又云紅梅は着ずともあらむとの給ふ義なり是みづからめすまじきとの給ふ義をいへるか　此義ならばきてのて文字濁るべし初の義ならば清でよむべし　くれなひにはあはぬなりとはもへぎよりも紅のすぐれてとりあはぬ心也　御かたちのにほひとは御ぞの光(ツヤ)と御すがたのつやと相映(アヒエイ)ヽ(ヤク)義也　なをことよき人もかゝやとはしげいさの君の事をおもふにも此君のごとくにやあらんずらんとよそへおもふ心也　扱いさりいらせ給ふとは淑景舍の君の渡御の義也　そひつきてのぞくとは少納言幷に女房など也　あしかめり以下はのぞくを制する心也　うへはしろきとは中宮の御よそひ也紅のふたつばかりとは女房の裳などもみへたるさまを云也　東むきにおはすとは中宮の御事成べし　紅梅とも以下は淑景舍の御さうぞくを述られたり　紅紅どもとは御下がさね也　うへに以下は御うはきぬをいふなり　殿とは道隆公也　うすいろ以下の道隆公

の御さうぞくを云なり心あきらかなり　しげいさ以下は一品の宮としげいさの君とを論じて甲乙わゐだめがたき由を述られたり
(四)前に注すかたもんは諸織片織とて侍るをいふ義成べし　(五)浮紋も唐織のごとく織紋を浮たるを云なり　(六)膝行イサユクと讀り

御てうづまいる、かの御かたは、(八)宣耀殿(九)貞觀殿をとり、からひさしのこなたのろうにぞ、女房六人ばかりさふらふ、せばしとて、かたへは御をくりしてみな歸にけり、櫻のかざみもへぎ紅梅など、いみじくかざみながく、しりひきてとりつきまいらする、いとなまめきおかし、織物のから衣ども、こぼし出て、(十)すけまさの馬頭のむすめ少將の君、(イ)きたの宰相のむすめ、さいしやうの君などぞ、ちかくはある、あなおかしとみるほどに、こなたの御てうづは、(ハ)番の(ロ)うねめの、あをすそごのもからきぬ、ぐんたいひれなどして、おもてなどいとしろくて、下づかへなど、とりづきてまいるほと、これはたおほやけしう、からめいておかし　第十三節翌朝ありさまをしるされたりかの御かたとは淑景舎の君の內にましますす時御手水奉るさまをいひて此御所にては式々にも侍らぬ由をいへり　せばしとて以下は此御所のやうすをいふなり　かたへとは御てうづなど奉る童女下づかへなどは返し給ふとなり　櫻のかざみもへぎ紅梅とはしもつかへにはあらでかざみのごとくよそほひし人々の御手水など奉られしと也　織物のからきぬどもこぼし出てとは少將君さい相の君のさうぞくを云也　ちかくはあるとは近習ぞと也　こなたの御てうづとは此御所にてまいらする御手水はそれ〴〵の役人もそろはぬといふ心なり　番のうねめとはたゞ當日の番の釆女のみ捧奉るといふ義なり　あをすそこ以下はうね女のさうぞくを云なり　おもてなどいとしろくとは眉などつくりたる顏をいふなり　おほやけしうとは宮の御所へ淑景舎のいらせ給ふゆへおほやけしく見へ一きは柄(カラ)のある心地すると也
(八)宣耀殿　前に注す　(九)拾芥云貞觀殿常寧殿北俗云御匣殿在二此殿一　(九)宣耀殿貞觀殿の事前に見えたり　(十)菅原氏譜云
∴通眞(菅家)──淳茂(右中辨)─在躬(左少辨勘解由長官)─輔正(現神北野殿是也)

補任云菅輔正右中淳茂孫勘解由長官在躬朝臣一男母從五位上常陸介菅景行女正暦三年二月十五日叙ニ從三位ニ時朱雀院御遺賞式部大輔如レ元寛弘六年十二月廿四日薨八十五　（ロ）後宮職員令云其貢ニ采女ニ者郡少領以上姉妹及形容端正者皆申ニ中務省ニ奏聞　禁秘抄云陪膳采女尤可レ然事也近代漸所レ令ニ零落ニ無レ極尤可レ有ニ沙汰ニ事也陪膳采女典侍御レ之應和例也　（ハ）和名云裙裳「裙帶附」釋名云上曰レ裙下曰レ裳和名モ白氏文集云青羅裙帶裙帶此間云如レ字

領巾ヒレ幟同　下に詳なり

御膳（ヲモノ）おりになりてみくしあげまいりて、藏人どもまかなひのかみ、おけてまいらするほどに、へだてたりつる屛風もをしあけつれば、かいまみの人、かくれみのとられたるこゝちして、あかずわびしければ、御簾と几帳との中にて、はしらのもとよりぞ見たてまつる、きぬのすそ裳などは、みなみすのそとにをし出されたれは、殿のはしのかたより御覽じ出して、たそや（一）かすみのまより見ゆるはと、とがめさせ給ふに、少納言が、物ゆかしがりて侍るならんと申させ給へば、あなはづかし、かれはふるきとくいをいとにくげなる、むすめ、ともだちどもこそ見侍れなどのたまふ御けしき、いとしたりがほなる、あなたにもおものまいる、うらやましう、かた〳〵のはみなまいりぬめりとて、聞しめして、おさな女におろしをたに給へなど、たゞ日一日さるかう事をのみし給ふほどに、（ニ）大納言殿　（ホ）三位中將、（ヘ）松君もゐてまいり給へり、殿いつしかといだきとり給ひて、ひざにすへ給へる、いとうつくし、せばき緣に、所せき御さうぞくのしたがさねなど、引ちらされたり、（チ）大納言殿は、（ト）もの〳〵しうきよげに、中將殿はいとらう〳〵しく、いづれもめでたきを見奉るに、殿をばさるものにて、うへの御すくせこそ、いとめでたけれ、御わろうだなど聞へ給へど、陣につき侍なりとて、いそぎ立給ひぬ　第十四節御一門御はらからなどいづれも〳〵すくせいみじうめでたきおましのさまをいひ又しげいさの少納言がかいまみすと聞召はづかしみ給ふ事をかけり是則少納言が身にとりて思召のほど口おしき心をかける義也　おもの以下は朝の御膳献る事をいへり心あきらかなり　かいまみの人とは女房のかいまみせし事を云なり　きぬのすそもなどとはのそき見たる女房達のきぬのも

れ見ゆる義なり　殿の以下は關白殿の見とがめ給ふ義也　かすみの間よりとは御簾几帳の間にもれ見ゆる義也　少納言が物ゆか　ゞりとは中宮の御詞也　あなはづかし以下は關白殿の御詞也　いとにくげなるとは戯れの給ふ心也　むすめ友だち以下は關白殿の重て仰らるゝ詞なり女友達共こそ珍敷思ひて我をみる事も侍らめと也　したりがほなるとは我顔(ノゾキミ)なる心なりもとより得意の少納言が關白殿を覗見參らするを今更にとにくみ給ふ女友達のみ參らせたくおもふは珍しき心にてさもあるべしとしたり顔にの給ふを清少納言の口おしくおもふとなり凡此段に此淑景舍の入内の事なが〳〵としるされしわきて口をしき義は侍らずたゞ此少納言が噂し給ふ事の口おしき義をいはんためなり　あなた以下は淑景舍のましますかたを云なり　かた〳〵のはみなまいりぬめりとは、御客がたには最早御膳過ぬめりとて亭主がたに聞(オロシ)めす義也　おさな女とは童女也　おろしとは下なり　大納言殿以下は御はらから御一家の人々の來り賀し給ふさまのいみじき事をいへり　いだきとり給ひてとは

道隆公の御孫松君を懐給ふとなり大納言殿はもの〳〵しうとは伊周公の御事を云也　中將殿はいとらう〳〵しくとは隆家の御事を云なり　殿をばさるものにてとは道隆公のうへは申に及ばずと云義なり　うへの御すくせとは中宮の御果報のほど宿世めでたきと也　御わらうだとは伊周公隆家卿などのせばき緣にましますす故に圓座奉らんと也　陣につきとは公達の詞なり天事(オホヤケゴト)の御職務侍るとて辭し立退給ふ義也

(〇)古今　貫之「山櫻霞の間よりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ」(ニ)此大納言殿は周尹公也　(ホ)三位中將は隆家也　(ヘ)松君は伊周の子道雅也　いづれも傳系圖左にみへたり

●●●道隆─┬伊周─┬道雅
右中辨儀同三司淳和院別當内大臣正二位辨頭　母高二位業忠女長德二四廿四坐事左遷大宰權帥卅三同三年四五歸京寬弘七正廿八薨卅七號帥内大臣
道雅　從三位左京大夫　母源重光卿女
├道頼　爲兼家公子權大納言正三位　母山城守守仁王女長德九六薨廿五號山井
└隆家　信濃守長德二四廿四左遷出雲國同三年四五被召返大宰帥大藏卿兵部少輔左兵衛權亮皇后宮介按察使正二權中納言　母同伊周長久五正一薨號大炊帥

榮花物語云大殿の大納言殿の大姫君小姫君いみじくかしつきたてゝ内春宮にとおほし心さしたり此大千代君は國々あまたしりたる人の山井といふ所にすむかむすめおほかるむこに成給ひぬ三四君をば更にも聞へさせ給はず大殿此君をばいみじくおもひ聞えさせ給へり大納言殿これをばよそ人のやうにおぼして小千代君をはいかで〳〵これとくなしあけんとぞおぼしためる　大鏡に委く傳あり文なかければもらし侍る也大鏡兼家道隆の下を見るべし

しばしありて、式部丞(ヌ)なにがし、御使にまいりたれば、おものやどり(ル)の北によりたる間に、しとねさし出てすへたり、御返はけふはとくいださせ給ひつ、まだしとねもとりいれぬほどに、春宮の御使に、周頼少將まいりたり、御文とりいれて、渡殿はほそきえんなれば、こなたのえんにしとねさし出たり御文とりいれて、殿うへ(ヲ)宮など御覽じわたす、御返はやなどあれど、とみにも聞へ給はぬを、なにがしが見侍れば、書給はぬなめり、さらぬおりは、まもなく是よりぞ聞へ給なるなど申給へば、御おもてはすこしあかみながら、すこしうちほゝゑみ給へる、いとめでたし、とくなどうへも聞へ給へば、おくざまにむきて、かゝせ給ふ、うへちかくより給ひて、もろともにかゝせ奉り給へば、いとゞつゝましけなり、宮の御かたより、もへぎの織物のこうちきはかま、をし出されたれば、三位中將かづけ給ふ、くるしげにもちてたちぬ、松君のおかしげに物のたまふを、誰も〳〵うつくしがり聞へ給ふ、宮の御子たちとてひき出たらんに、わろくは侍らじかしなど、のたまはするを、實などかさる御事の今までとぞ、心もとなき、ひつじの時ばかりに、筵道(ニ)まいるなどいふほどもなく、うちそよめきいらせ給へば、宮もこなたにいらせ給ひぬ　第十五節内よりの御使の事還御の比などをしるされたり大底何れも心あきらかなり

おものやどりの北によりたるとは式部丞が御返しを待居る所なり　とりいれぬとは式部丞に出されしゑとね也　春宮以下は又御使のまいりしことをかけり心あきらかなり　渡殿以下はまた御使の少將の待居らるゝ所を云ふなり　殿うへ宮など御覽じわたすとは道隆公中宮一品宮などの御披露の心なり　何がしが以下はしげいさの君の御詞なり御返事をそきよしの御ことはり也　御おもて以下は

地なり　とくなどうへも聞へ給へはとは御返事を早くし給へと中宮のすゝめ給ひ或はもろともに御文の詞など加へ給ふ義なり　宮の御かたよりもへぎとは少將へ給ふかつけ物は一品の宮より出し給ひたるとなり⊛三位中將かつけ給ふとは隆家卿の取つゐて使の少將に被給る義なり　くるしげにとは俗に無二冥加一などいふ心なり辱なさのあまる義なり　松君以下物語のほどの事をいへり　おかしげにとは四五歲の比成べし　宮の御子たちとは淑景舍の君の御挨拶の御詞なるべし宮々の御子といひて出したり共あらがふまじき威おはします君ぞと仰らるゝ義なり　げになどか以下は中宮の御詞なり宮の御子と仰らるゝにつけて春宮淑景舍の御子の御沙汰なき事を尋ね給ふ義なり是淑景舍の仰にしたがひて思召つけらるゝ心なり實などかとは前をうけたる詞なり　さる御事とは御子の御沙汰なり　今までとぞとは今迄聞へおはしまさぬはいかなる御事ぞやと也連なきと云義也　ひつじの時以下淑景舍の還御をいふ義なり　宮もこなたにとは一品宮の立遊らせ給ひてやがて道のおましへ帰り入せ給ふとなり

（ヌ）式部丞は信經朝臣の由勘物に前に見えたり（ル）御膳宿所は大盤所の内にある所なり　（ヲ）周賴少將は道隆公の息中宮の兄弟なり系圖前に詳なり（▲）或本は殿のうへ宮と書る本有若此義隨は殿のうへは道隆公の御うへ也宮は中宮也（一）莚道前に注す又圖は雲圖抄に見へたり

やがて御帳に入せ給ひぬれば、女房もみなみおもてにみなそよめき出ぬめり、らうに殿上人いとおほかり、殿の御前に宮つかさめして、くだものさかなめせよ、人々ゑはせなど仰らるゝ、まことに皆ゑいて、女房どものいひかはすほど、かたみにおかしとおもひためり、日の入ほどにおきさせ給ひて、山井大納(ワ)言めしいれて、御うちきまいらせ給ひてかへらせ給ふ、櫻の御直衣に、くれないの御ぞの夕ばへなども、かしこければとゞめつ、山井の大納言は、いりたゝぬ御せうとにても、いとよくおはすかし、にほひやかなるかたは、此大納言にもまさり給へるものを、世の人はせちにいひ(ロ)おとし聞ゆる(十)こそ、いとおしけれ、(⊙)殿大納言、山井大納言、三位中將、內藏頭(△)など、みなさふらひ給ふ、宮のぼらせ給ふべき御使にて、

(ヲ)むまの内侍のすけまいりたり、今夜は、えなどしふらせ給ふを、殿聞せ給ひて、いとあしきこと、はやのぼらせ給へと申させ給ふに、又春宮の御つかひし(ヨ)きりにあるほど、いとさはかし、御むかへに春宮の侍従などもまいりて、とくとそゝのかしきこゆ、まづさば、かの君わたし聞へ給ひてとのたまはすれは、さりともいかでかとあるを、なを見をくり聞えんなど、のたまはするほどもいとおかしうめでたし、さらば遠きをさきにとて、まづ淑景舎わたり給ひて、殿などかへらせ給ひてのぼらせたまふ、道のほども、殿の(タ)御さるかうことにいみじくわらひて、ほど〳〵(レ)うちはしよりもおちぬべし　第十五節淑景舎の還御ましますあとを賑はし給ひ人々女房達などにも三寸給はる事をかけり且又淑景舎のいまだ還御ましまさぬ時に中宮ものぼらせ給へとて御使の來るよしをかけりこれ前節還御の時の事をつふさにしるす心成べし(ミ)やがて御帳に入せ給ひとは中宮のしげいさの御かたを送りて立歸らせ給ひし義也　女房も南おもてにみなそよめき出ぬめりとは中宮の御前へまいると也　らうにとは廊におはします殿上人には關白殿の酒菓子など給はると也　まことにみなゑいてとは殿上人女房達もみな酔たると也　日の入ほどにおきさせ給ひてとは中宮の終夜の御もてなしにつかれさせ給ひて少御寝ありし事をいへり　御うちきまいらせ給ひていらせ給ふとは中宮より御衣を道頼卿へかつけ給ふを云也　かへらせ給ふとは道頼卿の給はりて歸り給ふよしなり　櫻の御直衣以下は山井大納言の御よそほひを云也　かしこければとどめつとは御志たうとくおはしますゆへに留置と也　いりたゝぬとはひとつ腹の御兄弟にてなきと云義也　にほひやかなるとは情ふかく優にましますは伊周公にもまさり給ふとなり　世の人以下地の詞なり心明か也　宮のぼらせ給ふべきとは淑景舎のいまだ御滯留の間に御門よりの御使なり中宮と淑景舎と御同道にてのぼらせ給へと也　今夜はえなどゝは中宮の御心なりえのぼらせ給ふましきと難澁し給ふとなり　殿とは關白のいさめ給ふ意なり　又春宮の御使以下は御むかへのまいりて宮を催し奉る義なり　まづさばとは中宮の詞なり先さあらばなり　かの君とはしげいさの君なり　わたし聞へとはのぼり給ひ

てあとに中宮ののぼり給はんと也　さらばとは淑景舎の君のまづのぼらせ給ふ由也　殿などゝは關白殿御公達なども皆歸らせ給ひて後のぼらせ給ひしと也　凡第十二節より爰十五節迄心一貫也　淑景舎のいみじき事をいひて宮々姫君方もたゞ人にてましますは程は口惜きと云心をかけり

(ワ)山井大納言は前にもしるす道頼卿なり親父兼家公猶子にし給ひ又母も中宮などとは別腹にて侍るゆへいりたゝぬ御せうとにてといふ也よく系圖幷に榮花物語など引合てみるべし　(ヲ)殿大納言伊周公也　(ロ)山井大納言　道頼卿也　(ナ)三位中將　隆家卿也　(△)內藏頭　賴親なり　いづれも道隆公の御息中宮の御兄弟也系圖前に詳也

(カ)源氏家譜云

●文德天皇——能有（仁壽三正賜源姓　號近院右大臣）——當季（從五上）
　　　　　　——仲舒（從四下）——時明（文藏左馬權頭　從四下）——方基（從五下　伊賀守）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　——方弘（文藏前阿岐守）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　——●女子（內侍　號大馬）

作者部類云馬內侍大和守馬權頭時明女一條院皇后宮女房　(ヨ)中宮の侍從未考　(レ)花鳥云淸凉殿のきりめむだうに板を打わたしてかよふを云也

殿上より梅の花のみな散たる枝を、これはいかゞと云たるに、たゞはやく落にけりといらへたれば、その(イ)詩をずして、黑戸に殿上人いとおほくゐたるを、うへの御前に聞せおはしましてよろしき歌など、よみて出したらんよりは、かゝることはまさりたり、かしこういらへたりとおほせらる　第十六節殿上より梅の花をみせ給ふに歌よまずしていらへし事の口おしき心を云りされども時にあひたる詩を誦したればうへにも興じ給ふ事をいへり　いかゞといひたるにとは人々の少納言にとふ也歌をよませんための心成べし　はやく落にけりとは少納言のいらへ也　その詩を誦しとは少納言のいらへられたる詩を殿上人の吟唱すると也　うへの御前以下は中宮の少納言を褒し給ふ義也　又云前節と當節は別の事には侍らじ前節に宮のぼらせ給ふ道のほどうち橋よりもおちぬべきよそほひを殿上人のみて梅の花の落たるを以て女房達の落給はんとするをわらふ心成べしそれを少納言さとりてはやく落にけりといらへしは辨才のさときいはれ也さてその梅花

の詩などずし答へしはいみじきごえなれば中宮にも感じ給ふなりすべて殿上人のみて落ぬべきと笑れし事の口をしき心を當段にかゝれし成べし
(イ)其詩とは其心の古詩を誦たる義也今いづれの詩と知がたし

二月晦日、風いたくふきて、空いみじくくろきに、雪すこしうち散たるほど、黒戸に主殿司(ロ)來て、かうしてさふらふといへば、よりたるに、公任の君、宰相中將殿のとあるをみれば、ふところがみに「すこし春(ハ)あるこゝちこそすれ」とあるはげに、けふのけしきにいとよくあひたるを、これがもとはいかゞつくべからんと、おもひわづらひぬ、誰々かとゝへば、それ〳〵といふに、みなはづかしき中に、宰相中將の御いらへをば、いかゞことなしびにいひいでんと、心ひとつにくるしきを、御前に御覽ぜさせんとすれども、うへのおはしまして御殿こもりたり、主殿司はとく〳〵といふ、げにをそくさへあらんは、とり所なければ、さばれとて、「空さむみ花にまがへてちる雪に」わなゝく〳〵かきてとらせて、いかゞみ給ふらんとおもふに、わびし、これが事をきかばやとおもふにぞ、しられたらばきかじとおぼゆるを、(ニ)俊賢中將など、猶内侍に申てなさんとさだめ給ひしとばかりぞ、右兵衛佐、中將にておはせし、かたり給ひし

第十七節前節の詩をずし歌よみたらんよりはなどゝいへる次手にかける詞也少納言は歌よくよむと人にもしられて内侍にも申なさんなど公にて噂侍りしかども其事もなくむなしくやみにし事の口惜き心をかける義成べし　二月晦日とは前につゞみて文の勢を見るに淑景舍入宮の後なるべししからば長德元年の二月晦日成べし　主殿司以下は主殿の司の者が使にまかりし義を申也　よりたるにとはうけ取に寄義也　公任の君宰相中將殿とは公任よりの使ぞとなりすべて此詞歌の前書也　すこし春ある此歌心あきらかなり則俊賢より送られし歌の句なり前の詞書をとりあはせみるべし　とあるは以下歌の意を判ずる義なり中宮の御方にて少納言并に人々の詞也　たれ〳〵以下は返歌すべき人をえらぶ心なり　宰相中將の御いらへ以下は少納言のことばなり　ことなしひとは詮なきといふ義なり　御前に御覽ぜさせんとは中宮へ御目に

かけ御批判にあづからんと少納言のおもはるゝ由なり　うへのおはしましてとはみかどの渡御し給ひ夜のおとゞへ中宮のまいり給ふと也批判をうくべき方もなく爲方(センカタ)なき心をいへり　とく〳〵いふとは主殿司が事をいそぐ義也　さばれとはよしあしはともあれと云義也　空さむみ此歌の心前の歌の心にかよひて聞へやすし前の歌の詞書とよく見合せ味はふべし　わなゝく〳〵とはあやぶむ意にて卑下の義也　いかゞ以下俊賢の方にての批判を心もとなくおもふ義也　しられたらば聞じとおぼゆるとはよく歌よむと世にしられたらば心もとながりはせまじとなりわが身人にもしらるゝ程の歌をえよまねば世の噂いかにと聞たくおもふとなり是深く家の風を嗜む心なり　俊賢中將以下は俊賢の少納言が事を取持掌侍(ナイシノスケ)などにもなし給はらんとの噂を殿上にてし給ふとなり　右兵衛佐以下は右兵衛佐の少納言に語り給ひしと也　これ噂ばかりにて其實侍らぬは口おしき事也　凡當段の初第一節口おしき物と書るより爰に至迄第十七節當段の內なりいづれも〳〵題の口おしき物といふ詞をはなれぬ義なればみん人此本文の長く注釋の描きに惓(ウム)で大意をとり失ふべからず云々

（ロ）勘物云長德元年八月參議右兵衛督云々

藤氏家譜云

●實頼號小野宮 ─ 敦敏 ─ 佐理
　├ 頼忠從一位關白太政大臣 ─ ●公任頭正二大納言號四條和漢朗詠作者

公任の傳大鏡榮花物語などにみへたり　大鏡に齊信公任行成俊賢など中君達は又さらなりともいへり　（ハ）すこし春ある　空さむみ　此連歌いづれの集にのれり共みへず　（ニ）公卿補任云源俊賢太宰權帥高明公三男母右大臣師輔公三女長德元年八月廿九日參議從四位下右兵衛督如レ元元藏人頭權大中辨右兵衛督　源氏家譜云

●醍醐天皇 ─ 高明親王號西宮左大臣
　├ 忠賢兵衛佐
　├ ●俊賢權大納言母師輔公女 ─ 顯基中納言
　│　　└ 隆國號宇治
　├ 經房
　└ 女子

清少納言枕草紙抄卷七

五十一段　はるかなる物、

千日のさうじはじむる日、(イ)はらひのお、ひねりはじむる日、(◉)陸奧國へ行人の、相坂の關こゆるほど、むまれたる兒の、おとなになるほど、(ロ)大般若の讀經、ひとりしてよみはじめたる、(ハ)十二年の山ごもりのはじめてのぼる日　此段二節に見るべし心あきらか也　就中是第一節也彼是取あつめて題の心を云也　はるかなる物當段の題也　千日のさうじとは加行別行潔齋精進など也　是は修法の間の遙を云也　ひねりはじむとは是は女業成就の程の杳を云也　陸奥以下は行程の遙なるをいふ也　大般若以下は修法の間の遙なるをいふ也　十二年以下は山門の法儀成就する程の遙なるをいへり

(イ)名目抄云半臂束帶之時略襴凡縫腋之法也缺レ腋時付レ襴公卿小忌時如レ此　(◉)後拾遺に陸奥にまかり下りけるに白河の關にてよみける　能因法師「都をば霞と共に立しかど秋風ぞ吹しら河の關」是も遙なる程をよめり　(ロ)大般若經六百卷大唐玄弉三藏翻譯也　(ハ)前に注す

(ニ)まさひろは、いみじく人にわらはるゝ物かな、おやなどいかに聞らん、供にありくものども、いと人々しきをよびよせて、何しにかゝるものにはつかはるゝぞ、いかゞおぼゆるなどわらふ、ものいとよくするあたりにて、下がさねの(◉)色うへのきぬなども、人よりはよくできたるを、しそくさしつけやき、あるは是はこと人にきせばやなどいふに、げに又詞づかひなどぞあやしき、里に宿直物とりにやるに、男二人まかれといふに、一人して取にまかりなんものをといふに、あやしの男や、一人してふたりが物をば、いかでもたるべきぞ、一ますかめに二ますはいるやといふを、なでう事としる人はなけれど、いみじうわらふ、人の使のきて、御返事とくといふを、あなにくの男や、かうまどふ、釜土に菽やくべたる、此殿上の墨筆は、何ものゝぬすみかくしたるぞ、飯酒ならばこそ、ほしうして人のぬすまめといふを、又わらふ、(ホ)女院なやませ給ふとて、御使に參り歸りたるに、院の殿上人はたれ〳〵か有つると、人のとへば、それかれなど、四五人ばかりいふに、又はとゝへば、さ

てはいぬるひとどもぞありつるといふを、わらふも又あやしき事にこそはあらめ、人まに寄きて我きみこそまづ物きこへん、まづ〳〵人のゝたまへる事ぞといへば、何事ぞとて、几帳のもとにさし寄たれば、むくろこめにより給へといふを、五たびこめにとなんいひつるとて、人々わらはゝる、除目の中の夜さしあぶらするに、燈臺の打敷をふみてたてるに、あたらしきゆたんなれば、つようとらへにけり、さしあゆみてかへれば、やがて燈臺はたふれぬ、（へ）したうづはうちしきにつきて行に、まことに道こそしん動したりしか、頭つき給はぬほどは、殿上の大盤には人もつかず、それにまさひろは大豆ひともりをとりて、こざ（チ）うしのうしろにて、やをらくゐければ、ひきあらはして、笑はるゝ事ぞかぎりなきや　第二節まさひろが愚拙事をいへり是則心のはるかなる義也迂遠にして事情に不親切心也　人にわらはるゝとは愚なる事をいひて人に笑はるゝと也　親などいかにきくらんとはまさひろが親聞てうとましからんと也　供にありくとはまさひろが供也　いと人々しきとはおとなしくさかしき者をよびてまさひろが如くに愚なる人に何とて使はるゝぞと他の人より問ふ心也　ものよくするあたりとは呉服所など成べし　しそくさしつけやきとは卒忽の事を云り　あるは或也　こと人にきせばやとはきすべきと云人にはきせできすまじき人などに着するやうの義也又云妻にはきせで他の思ふかたなどへやれる心成べし　里にとのゐ物とは宿直番の時着物など取につかはす様の拙き事をいへり　あやしの男以下まさひろが詞也　一ますかめとは一升入瓶に二升いらぬ如く有との喩也　なでう事としる人はなけれどゝは他の人は何事としらねどまさひろがいひざまおかしければ聞程の人々が笑となり　人の使とは他所よりまさひろが方へ使の來る事也　あなにくのとはまさひろが詞也　かうまうとは如此急ぎまどふは釜土に萩や煎ながら來りつるかと也是せは〳〵しき故を云也　此殿上のすみ筆とは宿直所の墨筆の見へぬを尋ねまはりて返事かゝむとする義也　飯酒ならばこそ以下は是も拙き心也急ぐ使を待せ墨筆尋ねゐる心は尤愚成義也　女院以下是もまさひろが拙きを人々笑ふ由也　又はと

とへばとは又まだ侍り給ふ人はたれ〳〵と問ふ也　さてはとはまさひろが答也　又あやしき事にこそはあらめとはまさひろが愚なるをしりつゝ笑ふ人も怪しくけうときと也　人まに以下は是又いふ事の愚なるをいへり人まは人の前なり　わが君こそまづ物きこえんとはまさひろが物申侍らんといふ義也　何事ぞとて以下女房達などの詞也或は少納言のみづがら聞れしにや　むくろごめとは身ちかう寄て聞給へといふ義なるべしまさひろ云誤て五たいこめといひたるを人々の笑はれしと也　除目以下はまさひろ愚鈍にして卒忽なる事の侍るをいへり　除目の中の夜とは正月十二日也十一日より十三日迄の間三ケ日行はるゝ也前に詳にしるす　打敷とは燈臺の下に置褥にかくる物也　つようとらへにけりとは強く引懸る義成べし　さしあゆみてかへればとは打敷の引懸たるもしらで油さして立退義也　とうだい以下は燈臺は倒れながら打敷をしたふづに引かけありく樣也　道こそしんどうとは震動して騷がしかりしと也　頭つき給はぬ程以下は是もまさひろが公務の時魯鈍に心のはるかなる義を云り　頭とは頭辨也　つき給はぬとは大盤所に頭辨着座せぬ已前也　ひきあらはしとは隔を引あけなどして見あらはし笑と也　右すべてまさひろが愚拙にして物事のはるかなる心をいへりよく双紙の本意を味はふべし

(ニ)源氏家譜云

- 能有 號近院右大臣
  - 當季 從五少納言
    - 仲舒 但馬出羽守從四下
      - 致明 前和泉土佐守
      - 時明 左馬權頭從四上
        - 方基 從五下伊賀守
        - 方弘 文範前阿波守 致明爲子
        - 女子 歌人馬内侍

前に馬内侍の所にも注し侍りぬ　(ヘ)紙燭（シソク）

(ホ)紹運錄云東三條院詮子也圓融院后一條院御母法興院入道二ノ女母ハ攝津守藤原中正女也正暦二年院號廳出家長保二年失給四十六歲系圖ニ有レ前　大鏡云贈后宮の御ひとつ腹のいまーどころの姫君は圓融院の御時梅壺の女御と申て一の御子むまれ給へりき其みこ五にて東宮に立せ給ひ七にて位につかせ給ひにしかば御母女御との寛和二年ひのへいぬ七月五日后に立せ給ひて中宮と申き此みかどを一

條院と申き其御母后入道せさせ給ひて太上天皇とひとしき位にて女院と聞へさせき一天下をあがままにしておはしましゝ此父おとゞの太郎の御ひとつ腹の道隆のおとゞ内大臣にて關白せさせ給ひき下略 榮花物語云霜月になりぬれば神わざなどしげき比にて世の中もいとさはがしうてすぎもて行しはすにも成ぬればおほやけわたくしわかぬ世の急ぎにて所わかずいとなみたりかゝる程に女院ものせさせ給ひてなやましう思しめしたり殿御心をまどはして思召まどはせ給ふはかなくおぼしめしゝに日比のなればわが御心地にいかなればにかと心細うおぼさるうちにもれいならぬさまにおもほしの給はせし物をいかゞおはしまさんとおもほしめすよりやがておものなども御覽いまさせ給はず萬におぼししめりたるを御めのとたちもいかゞ見たてまつる中宮若き御心なれど御ことをさま〴〵にいみじうおぼさる殿今はくすしに見せさせ給ふべきなりいとおそろしゝなり下略 ◎之女院御なやみの事也 (へ)和名云釋名云足衣也和名之太久頭東山左府記云權頭履服之時用レ之練貫上﨟及顯職之人用レ之平絹下﨟及老者用レ之 (ト)震動 振動シンドウ (チ)小曹子 コザウシ ㊎むくろごくめ軀籠と書歟打寄擧こゝろ成べし

五十三段 關は、相坂の關須磨の關、鈴鹿の關、くきたの關、白川の關、衣の關たゞこへの關ははゞかりの關とたとしへなくこそ覺ゆれ、横走りの關、清見が關、見るめの關、よしな〳〵の關こそ、いかに思ひ返したるならんと、いとしらまほしけれ、それをなこそのせきといふにやあらん、逢坂などをまでおもひ返したらんは、わびしかりなんかし、足柄の關 此段詞すくなうして心もあきらかなり 關は是當段の題也すべてせきの名所をしるされたり 相坂の關近江にあり 須磨の關攝津國にあり 鈴鹿ノ關伊勢國にあり 久岐田關伊勢にあり菊多剌關奥州にありくきたの關兩說也 白川の關奥州に有 衣の關陸奥にあり たゞこへの關未考之 はゞかりの關奥州にあり たとしへなきとはたゞこへとはゞかりとの名にちなみていふ也比がたき名ぞと也 よこはしりの關駿河國にあり 清見が關駿河國にあり 見る目の關近江國に有 よしな〳〵の關とは陸奥に

有いかに思ひ返したるとはよしな／＼と思返し云捨たる由の關の名こそ如何にとしらまほしけれと也　しらまほしとはよしな／＼といひ初し來歴をしらまほしきと也　それを無古曾關とはひとつせきに兩名ある由をわきまへしらせたり　無古曾關歌枕相州の由しるされたればよしな／＼の關共云なこその關共いひかへ侍れどもひとつぞとしらせたり逢坂なよしな／＼なこそといへるに逢といふ事を頼むははかなく侘しきと也なこそは無來りてと云義なれば逢坂の逢と云事に對していへり其心を歌にもよめり

（ヨ）月令章句云關在レ境所以ニ察レ出御レ入也　（◎）詞花集　和泉式部「諸共にたゝまし物をみちのくの衣の關をよそに聞かな　（タ）後拾遺ニ　源師賢「東路のなこその關も有物をいかでか春の越てきぬらん」「逢坂は越にし物を今はたゞなこその關の名こそおしけれ　（▲）足柄の關　伊豆に有　▲たゞこゆるといふはいとやすきにはゞかるとは又たとしへなきと也．

【百十三段】（ヒ）森は、おほあらきの森、しのびの森、こゞゐの森、こがらしの森、しのだの森、いくたのもり、うつぎの森、きくたの森、いはせの森、立聞の森、ときはの森、くろつきの森、神なびの森、うたゝねの森、うへつきの森、いはたの森、かうたての森といふが、耳とゞまるこそあやしけれ、森などいふべくもあらず、たゞ一木あるを、何につけたるぞ、戀の森、こはたの森、卯月のつごもりに、長谷寺にまうづとて、（◎）淀の渡りといふものをせしかば、舟に車をかきすへて行に、菖蒲こもなどの、すゑみじかく見へしをとらせたれば、いとながゝりけり、こもつみたるふねのありきしこそ、いみじうおかしかりしか、高瀬の淀には、（ツ）これをよみけるなめりと見へし、三日といふにかへるに、雨のいみじうふりしかば、さうぶかるとて、かさのいとちいさき（ソ）をきて、はぎいとたかきをのこわらはなどのあるも、屏風の繪にいとよく似たり

此段には森の沙汰をいへり心あきらか也　森は當段の題也　大荒木森山城にあり　忍森河內國にあり　こゝゐの森伊豆にあり　木嵐森駿河國にあり　信太森和泉國にあり　生田森攝津國にあり　うつきの森　きくたの森未考　岩瀨森大和にあり　立聞の森未考　常磐森山城にあり　くろつきの

森末考　神並森攝津國に有　假寢森末考　愛太森山城にあり　うへつきの森末考　岩田森山城にあり　かうたての森末考　耳とゝまるとは名におふせねば耳とまるとなりたてならぶやうの名にて侍れど只一木あれば其名あやしきとにや戀の森山城又伊賀に有　木幡の森山城に有　卯月の晦日以下はこはたの次手に淀の渡りにてまのあたり見し事の興ある義をしるされたり　淀の渡りといふものとはいにしへより歌に名高き淀の渡りと云事せしかばと也　車をかきすへて行とは舟にかきすへて也或本には輿をかきすへて行と侍る也　すゑみじかくとは水より上はすゑみじかう見へ水の下はながきもの也　これをよみけるなめりとは古の歌どもをおもひ寄し心也則後書に記す三日以下は歸京の時の事をしるされたり　屛風の繪とはけしきの見たてをたとへいふ義也やさしき喩也月次の屛風の心也

(レ)字彙云森音參衆木貌平地に同木の茂るを林といひ諸木相まじへて茂れるを森といふ也是森と林の分別也　(ソ)唯一木あるとは諸木の有をこそ森といふなれ唯一種の木をば森とはいひがたしと也

(◉)長谷寺　聽道上人の建立也前に見へたり

(〇)淀　山城久世郡　(メ)高瀨の淀　河內茨田郡

(ツ)六帖に「こも枕高瀨の淀にかるこものかるとも我はしらで賴まん」　(ネ)拾遺天曆御時御屛風に淀渡りする人かける所に　壬生忠見「何方に鳴て行らんほとゝぎす淀の渡りのまだ夜深きに」此森共八雲御抄注し給はず其外の諸家の髓腦にも見へず博學の人可レ考

五十四段 湯は、(ラ)なゝくりの湯、◎ありまの湯、たまつくりのゆ　此段も詞少う侍れば心隱れたることなし前に地理をいひ淀の渡りの次手なれば湯の名所を少々記されたり　湯は是例の當段の題也　七久里湯常陸國にあり又云信濃に有と云々　有馬湯攝津國に有今の俗或は湯の山と云是也　玉造湯陸奧國

(ラ)本朝湯の濫觴の事　伊豫風土記云湯郡大穴持命見二悔恥一而宿奈毗古那命欲レ活而大分速見湯自レ下樋持度來以二宿奈毗古奈命一而浴二漬者一暫間有二活起居一然詠曰眞暫寢哉踐健跡處今在二湯中石上一也凡湯之貴奇不二神世時耳一於二今世一染二疹痾一

萬牛爲ニ除レ病存身一之要藥也天皇等於レ湯幸行降座五度也 (⊙)攝津國風土記云有馬郡又有鹽之原山此近在ニ鹽湯一此邊因以爲レ名久牟知川右因レ山爲レ名山本名功地山昔難波長樂豐前宮御宇天皇世爲ニ車駕幸ニ湯泉一作ニ行宮於湯泉一之手レ時採ニ材木於久牟知山一其材木美麗於レ是勅云此山有レ功之山因號ニ功地山一俗人彌誤曰ニ久牟知山一又曰始得レ見ニ鹽湯等ニ云々土人云不レ知ニ時世之號名一但知ニ嶋大臣時一耳 (▲)ありまの湯ノ下ニ或本ニ奈須の湯つかさの湯ともの湯トアリ

【五十五段】つねよりもことに聞ゆる物、元三の車の音、鳥の聲、曉の(サ)しはふき、物の音はさらなり 此段も詞少しにて心明か也 常よりも殊に聞ゆる物とは例の題也常に聞ふれし事なれ共折節の感情によりて殊更に聞ゆるぞと也 物の音とは糸竹金石匏土革木の類也 是等の音も時によりて常より異に聞事有ぞと也、

(ヤ)謦シハブキ嗽

【五十六段】繪にかきてをとるもの なでしこ(マ)、さくら、(ケ)やまぶき、物語にめでたしといひたる男女のかたち 此段も詞すくなうして心あきらか也

(マ)瞿麥ナデシコ前ニ記ス (ケ)萬葉には山吹花と書り本朝には古來欵冬の字をやまぶきとよめり漢學の人はそれは誤也除醾こそやまぶきの事なれといへり凡かやうの事まゝある事なれば今の注釋におゐて是非得失論するに不レ及こと也 (▲)なでしこトアル下ニ或本ニさうふト云詞アリ

【五十七段】かきまさりするもの、松の木、秋の野、山里、山路、鶴、しか、冬はいみじくさむき、夏はよそにしらずあつき 此段も心明か也前の段には專ら繪の事のみをいひ此段には前の續なれば初に繪の事をいひて後には寒暑のかき增る事をいへり故に前段の題には繪にといふ爰には繪といはずしてたゞかき增るとのみ題に書り、かきまさりとはいやまさる心也又は書義も侍れば兩義をもたせたり松の木、秋の野、山里、山路、鶴、鹿、是等は繪に書まさる心にていへり 冬はいみじく寒き夏はよそに知ず暑き 此二句はいや增る心にていへる也

(▲)山路ノ下或本ニ柳らんトアリ

【五十八段】あはれなる物

孝ある人の子(イ)、鹿の音(ロ)、よき男のわかき、御嵩さう(ハ)じしたる、いてゐたらん、曉のぬか(ニ)などあはれなり、むつまじき人の目さまして聞らん、おもひやり、まうづるほどのありさま、いかならんとつゝしみたるに、たいらかにまうでつきたるこそ、いとめでたけれ、ゑぼうしのさまなどぞ、なを人わろき、なをいみじき人と聞ゆれど、こよなくやつれてまうづとこそはしりたるに、右衛門佐宣方(ホ)は、あぢきなきことなり、たゝきよき衣をきてまうでんに、なでうことかあらん、かならずよもあしくてよと、御嵩の給はじとて、三月晦日に、紫のいとこきさしぬき、白き青山吹の、いみじくおどろ〳〵しきなどにて、隆光(チ)が主殿亮(トノモノスケ)なるは、青色の紅のきぬすりもとろかしたるすいかんはかまにて、打つゞきまうでたりけるに、かへる人もまうづる人も、めづらしくあやしきことに、すべて此山道にかゝるすがたの人見へざりつと、あさましがりしを、四月晦日に、歸りて、六月十餘日の程に、筑前の守うせにしかはりになりにしこそ、げにいひけむにたがはずもと聞へしか、これはあはれなる事にはあらねども、御嵩のつゐでなり　こゝより下の心ひとつに

まもりゐたらんよと云迄當段の內也詞長く心も深き故に三節に分て釋し侍る也就中今此第一節には初に一言二言枕詞をいひて次には御嵩さうじのあはれなる由をいへり　あはれなる物とは即當段の題也殊勝なる義也又哀傷の義也本文皆此意をかけり心を付べし　孝ある人の子とは人の子の孝行なるは殊勝なるぞと云義也　鹿の音とは哀傷の意をいへり　よき男下は御嵩まうでの殊勝なる義をいへり　むつまじき人の聞らんとは友の聞おもひやりの程迄を歎むと也又云友の聞らんをよき男が思ひやると也、まうづるほどゝは路次の形裝也、なを人わろきとはよき人はなをやつれてあしく見ゆると也　右衛門佐以下御嵩まうでの次手に宣方がまうでざまのあはれなる事をかけり是又殊勝の心を云成べし　あぢきなきとは宣方がいふ所の詞也尋常の人のやつれ詣るはあぢきなきと也たゞ清き衣をきてまうでんになでう事かあらんとは宣方が詞也尋常の人々は清よらにしてまうでね共宣方は清にせむとおもふ義也　むらさきの以下は宣方が裝束也　隆光以下は又隆光がまうづる樣の美々し

きを云也　靑色以下は隆光が裝束をいへり打つゝきとは宣方に打つゞき也　すべて此山道以下はめづらしくあやしきゆへを斷る也尋常やつれし姿のみ見馴てかやうの優々しきさまはいまだ見ぬ故也　四月晦日に歸てとは宣方が下向也　六月十餘日以下は隆光がのぼりて御嵩の利益有事をいへり　いひけんにたがはずとは宣方があぢきなきとて淸らにしてまうでしときのいひけん詞にたがはず也　これは以下地の詞也題の心にあらぬ事の由を斷りたる義也

(イ)經云孝者天之經也地之義也民之行也儞雅善事父母爲孝(ロ)「奥山に紅葉ふみ分鳴鹿の聲聞時ぞ秋はかなしき」(ハ)御嵩の事前に釋し侍る又聊便あらん爲に左の事をしるす　眞崇禪師述金峰山神通云古老相傳之昔漢土有金峰山金剛藏王菩薩住之而彼山移滄海而來金峰山則是彼山也　(ニ)稽首ヌカツク額突同　禮拜する義也

(ホ)源氏家譜云

●敦實親王仁和寺宮─雅信號土御門又一條
─寛信
─重信正二左大臣─致方正四下左大辨
─道方正二中納言
●─宣方ノブカタ從四上左中將母高明公女
─桑方讃岐守
─女子

(チ)勘物云隆光主殿助長保三年正月藏人年廿九藤氏家譜云

●高藤──定方從二左大臣─朝頼從四上左大辨
─爲輔權中納言正三位─宣孝正五下中宮大進
●─隆光タカミツ主殿頭是筑前越前備中備前等守右宮大進左京大夫藏人式部大輔

(△)或本いていたらんト云一句なふして其間ニ如此の詞あり　定たる人くしたるもあはぬ夜なくへだつるをくるしき事にこそ思ふべかんめるを男の外にきゝひしく隔なして一人ゐて打をこなひたる曉のぬかの程いみじう哀也トアリ　(○)うつほ物語十一ニ云春の初より人つゝしみて御嵩くに野まうでやん事なき上達部おり立て山ふみし給へるとかけり

(ヨ)九月晦日、十月朔日、たゞあるかなきかに聞わけたるきり〴〵すの聲、雞の子いだきてふしたる、秋ふかき庭の淺茅に、(◎)露の色々玉のやうにてひかりたる、(タ)河竹の風にふかれたる夕暮、曉に目さまして聞たる夜なども、すべておもひかはしたるわかき人の中にせくかたありて、心にしもまかせぬ、山里の雪、男も女も淸げなるが、黑き衣きたる、廿六七日計の曉がたまで、人と長閑に物語して、ゐあかして見れば、あるか無かに心ぼそげなる月の、山の端より、はつかに見へたるこそ、いとあはれなれ、秋の野、年打過したる僧たちの、おこなひしたる、荒たる家に葎はひかゝり、蓬などたかくおひたる家に、月のくまなく赤き、いとあらふはあらぬ風の吹たる、正月に寺にこもりたるは、いみじくさむく、雪がちにこほりたるこそおかしけれ、雨などのふりぬべきけしきなるは、いとわろし　第二節折節物事のあはれなる差々をかけりいづれも心明らか也　九月晦日以下は哀傷の意をいへり　雞の子とは殊勝なる心をいへり　秋ふかき以下は殊勝に愛ふかき心也　河竹以下は殊勝なると哀傷なるとの心をかねていへり　吹れ

たる夕暮何を切べし　目さまして聞たる何を切べし　夕暮明かた夜半のねさめいづれも〳〵あはれ成と也　わかき人の中にとは戀路の切なるあはれさをいへり　山里の雪とはほめ愛する意也　男も女もきよげなるとは色白く光めける人の黑き衣着たる事を云也是服衣の心成べし　廿六七日はかり以下は殊勝の心をいへり　秋の野哀傷のこゝろにていへり或又殊勝にも侍る歟　年打過したる以下は殊勝なる義也　あれたる以下は哀傷の心也　正月に寺以下は殊勝なる心也此章は以下の長谷にまうづる事を起す枕詞也然共此章はすべて寺こもりをいひ以下よりは長谷の事計別してかけり

(ヨ)月令執虫咸俯いへるに同し心也　元眞集に「露むすふ秋果かたのきり〴〵す草の根ごとに寒くこそなけ」(◎)家持集に「松陰の淺茅がうへの白露をけさすて玉にぬく物にかも」(タ)尋常の河ぞひに生る竹をも河竹といへば同し事成べけれ共此本文の勢は少納言内すみして御溝の河竹の事を思ひよりて書ける成べし御溝の河竹の事はつれ〴〵

草にかけり可考之　(△)葵卷に八月廿餘日の有明なれば空の氣色も哀すくなからぬにと書しも此心也　(レ)いせ物語に「葎をひて荒たる宿のうれたきはかりにもおにのすたく成けり」是則集に「尋ぬべき人も覺へぬ我門の夜は葎のねこそさすらめ(▲)荒たる家以下詞或本には荒たる家の蓬ふかく葎はひたる庭に月のくまなくあかく澄上りてみゆる又さやうの荒たる板間よりもりくる月あかうはあらぬ風の音池有所の五月長雨の比こそいと哀なれさうふこもなどおひひろこりて水も綠なるに底も一つ色に見へ渡りて曇たる空をつく〴〵と詠暮したるはいみじうこそ哀なれいつもすべて池有所は哀におかし冬も氷したる朝などは云べきにもあらずわざとつくろひたるよりも打捨てみ草かちにあれあをみたるたへまより月影ばかりは白々とうつりて見へたるよすべて月影は如何なる所にてもあはれなりトアリ

(◎)初瀨などにまうでゝ、つぼねなどするほどは、くれはしのもとに、車引よせてたてるに、おゐばかりしたるわかき法師ばらの、あしだといふ物をはきて、いさゝかつゝがもなく、おりのぼるとて、何ともなき經のはしをよみ、倶舍の頌をすこしいひつゞけありくこそ、所につけておかしけれ、我のぼるはいとあやうく、かたはらによりて高欄おさへて行ものを、たゞ板敷などのやうにおもひたるもおかし、局したりなどいひて、沓どももてきておろす、きぬかへさまにひき返しなどしたるもあり、裳唐衣など、こは〴〵しくさうぞきたるもあり、深沓半靴などはきて、廊のほどなど沓すりいるは、內わたりめきてまたおかし、內外などのゆるされたるわかき男ども、家の子などまた立つゞきて、そこもとはおちたる處に侍めり。あがりたるなどをしへゆく、何ものにかあらん、いとちかくさしあゆみ、さいだつものなどを、しばし人のおはしますに、かくはまじらはぬわざなりなどいふを、實とてすこし立をくるゝもあり、又聞もいれず、我まづ、とく佛の御まへにと行もあり、つぼねに行ほども、人のゐなみたる前を通行は、いとうたて有に、犬ふせぎの中を見いれたる心ち、いみじくたうとく、などて日比もまうでず過しつらんとて、まづ心もおこさる　第三節長谷にまうづる事を

かけり則前節に寺にこもりと云つゞき也　はつせとは長谷寺也前に詳也　局などするとは局に籠る義也　くれはしとは榑(クレキ)の階(ハシ)也　おゐとは笈(オイ)也　何ともなき經のはしとは聞なれぬ心也　所につけておかしけれとは爰迄は修行者のまうづるさまをいへり、わがのぼるとは女房のまうづる事也或は少納言自らいふ義也　局したりなど以下は下向し局をいづる義を云り局したり一七日の參籠滿足したるといふ心也　かへさまとは物さはがしくとりたがへたる人の義也　さうぞきたるとはとりつくろへる人の事を云也　内わたりめきてとは禁中のやうに侍ると也　内外など以下は女房の供の士家の子の事をいへり内外とは内證外さまをかねてつかうる義也　立つゞきてとはまうづる女臈に立つゞき供する義也そこもと以下は供の男の詞也　おちたる所とは卑(ヒキ)所と云義也　何ものにかあらん以下傍にも又詣る人の侍るさまを云り　いとちかくさしあゆみとは傍の人が女房達のあたりちかうよる義也　しばし以下は供の男が傍の人々にいひかくる義也　かくはましらはぬとは道通るに男は左により女は右によりて同じやうに連行ぬ事ぞ少よげ給へといふ義也　すこしたちをくるとはよぐる心也　又きゝもいれず以下は無下なる人の事をいへり　局に行程も以下は御前にてのさまをいふ也　犬ふせきとをりゆけばとは參詣の人々の通由也　犬ふせきの中以下は少納言自の詞也佛前のやうすを見れば日頃おもひしより尊く侍るゆへいままでまうでさりし事を悔ゆる義也　まづ心もおこさるとは見わたすより殊勝に侍ると也

⊙うつぼ物語共に云かくて樓にのぼり給べき程のくれはしは色々の木をまぜ〳〵につくりて下より流るゝ水は涼しくみゆべくつゝるとかけるも初瀬の事也

(ソ)和名云彙名苑云屐一名足下和名阿師太

(ツ)俱舍論卅卷あり龍樹菩薩の作なり卽ち龍樹の傳高僧傳に見えたり俱舍頌と論とあり今世間に行れて侍る也

(ネ)東山左府說深履(フカクツハ)政之時用レ之

(ナ)同說半靴無レ毯着下袴乘馬時公卿已下侍已上着レ之　餝抄云深沓政若深雪之時用レ之無レ革旋有レ緣無文紫革半靴直衣衣冠布衣騎馬之時用レ之花氈錦討如二靴沓一

燈明常灯(ラ)にはあらで、うちに又人のたてまつりたる、おそろしきまでもへたるに、佛のさら〳〵と見へ給へる、いみじくたうとげに、手ごとに文をさゝげて、禮版にむかひて、(ム)ゐぎちかふも、さばかり(ウ)ゆすりみちて、是はとりはなちて聞わくべくもあらぬに、せめてしぼり出したるこゑ〴〵の、さすがに又まぎれず、千檀(井)の御心さしは、何がしの御ためと、わづかに聞ゆ、おゐうちかけて拜奉るに、こゝにかうさふらふといひて、樒の枝を折て、もてきたるなどのたうときもなをおかし　此には長谷寺の御前にての事をいへり前のつゞき也　年ごとに文とは諷誦願文などを捧げまうづると也　禮版にむかひゐぎちかふもとは願文捧る人が禮版の下論義の座ちかふ參りて動居と也　是はとりはなちて聞わくべくもあらぬとは論義の耳とをきゝと也　さすがに又まぎれずとは論義の聲々の中に願文奉る聲のまぎれず聞ゆると也　千壇以下は願文よみあぐる義也　おゐ打かけておがみとは修行の法師などの拜む義也　樒の枝とは願文などつけて奉る也

(ラ)長谷寺燈明の事前に委く注し侍る也　(ム)論義也中略なり　(ウ)動滿ユスリミチ群集する義をいへり　(井)千壇　布施の義也志の廣大なるを千壇と云也布施は譯言也梵には壇波羅密と云也

犬ふせぎのかたより、法師よりきて、いとよく申侍りぬ、幾日ばかりこもらせ給ふべきなどとふ、しか〳〵の人こもらせ給へるなどいひきかせていぬる、すなはち火桶くだ物などもてきつゝかす、はむざう(ノ)に手水など入て、(キ)たらひの手もなきなどあり、御供の人は彼坊になどいひて、よびもて行は、かはり〴〵ぞ行、ずきやうの鐘のをと、我餘波ときけばたのもしくきこゆ、かたはらに、よろしき男の、いとしのびやかに(サ)ぬかなどつく、立居のほども、心あらんときこへたるか、いたくおもひ入たるけしきにて、いもねずおこなふこそ、いとあはれなれ、打やすむほどは、經へたかくは聞へぬほどによみたるも、たうとげなり、たかく打出させまほしきに、まして鼻などを、けさやかに聞にくゝはあらで、すこし忍びてかみたるは　何事をおもふらん、かれをかなへばやとこそ覺ゆれ　こゝには局に籠りし人の見聞し事をかけり　法師の寄來てとは局のもとへ寄來ると

也　いとよく申侍りぬとは申文願文の通をよく啓白せしと也　幾日ばかりとは法師が問ふ詞也　しか〳〵の人こもらせ給へりなどゝは籠る方より答る詞也　いひ聞せていぬるとは地の詞也　いぬるとは法師が立退義也　すなはち以下は調度を持來り局に籠る人へ借義也　御供の人以下は法師の詞也局は狭ければ一兩人は局にのこりてみな〳〵は宿坊に居給へといひ渡す義也　ずきやうの鐘のをとゝは地の詞也諸行無常乃至寂滅已樂の響を観じて佛の結縁利益よとたのもしきと也　かたはらによろしき男以下は男のおこなひ侍るさまいみじく殊勝に見へたる事をかけり　鼻などをけさやかにとは感涙などして鼻かむ義也　何事をおもふらんとは感涙などしてぬかつくは君父の爲か妻子のためなどを祈或は訪ひ侍るか又はわがぼだいを祈るやらんいとあはれに見ゆれば其願ひをかなへ得させたきと也

(ノ)和名云説文云匜移尓反一音移和名波邇佐布柄中有レ道可二以注一レ水之器也俗用二楾字一所レ出未レ詳但和名之義或説云有三柄半挿二其内一故呼爲二半挿一

也　(ク)手盥角盥の類也　(ヤ)禮拜の義也

日比こもりたる、晝はすこしのどかにぞ、(コ)はやうはありし法師の坊に、男ともわらはべなど行て、つれ〳〵なるに、只かたはらに、貝をいとたかくにはかに吹出したるこそおどろかるれ、清げなるたてふみなどもたせたる男の、(テ)ずきやうのものうちをきて、(ツ)堂童子などよぶこゑは、山ひゞきあひてきら〳〵しう聞ゆ、鐘の聲ひゞきまさりて、いづこならんときくほどに、やんごとなき所の名うちいひて、御産たいらかに敎化などする處に、いかならんと、おぼつかなくねむせらるれ、これは只なる折の事なめり、

こゝには常禮の時籠り詣つるさまの殊勝なる事をいへり此次には又正月などに籠るさまを云り　日比とは尋常なみ〳〵の時也　晝はすこしのどかにとは靜なると云義也まうづる人すくなうして寺も坊もしつか成と也　はやうはありしとはもとの坊へ供の者などが行しと也　貝をいとたかくとは坊に法事のあらん時は貝吹坊中へ告知しむる義也　清げなるたて文以下は又申文さゝげ來る事をいへり堂童子とは次に見ゆ　山ひゞきあひてとは高き

峰にて侍れば谷々に應響(コタヘヒヾキ)あらはに聞ゆると也　鐘の聲ひゞきまさりてとは此鐘はやんごとなき御方の申文まいる由山中へ告知しめんとの心也　御産たいらかに以下は申文の趣を啓白念誦する義也

これは以下地の詞也

(マ)最前よりなといふ心也まへかたの事をいふなり　(ケ)ずきやうの物とは布施物也　(フ)江次第云堂童子行二華筥一北上﨟堂童子行二講義座一下﨟者行二凡僧講師一南上﨟行二僧綱座一下﨟行二聽衆座一次散華立二佛前一云々堂童子收二華筥一退出

又云堂童子一人捧二白杖一前行稱レ警次堂童子一人持二短冊櫃一次小綱一人次探題受前行堂童子等留二堂後中戸壇下一櫃堂童子入レ自二中戸一進二机下一一拜以レ櫃置二机上一經二西長床後一退出　すへて法會の時に事をおこなふ法師を云と也

正月などには、たゞいとものさはかしく物望みなどする人の、隙なくまうづる見るほどに、おこなひもしやられず、日のうちくるゝにまうづるは、籠る人なめり、小法師ばらのもたぐべくもあらぬ屏風などの高き、いとよく進退(エ)し、たゝみなどほうどたてをくと見れば、只局に出て、犬ふせきに簾をさら〳〵とかくる樣などぞ、いみじくしつけたるはやすげなり、そよ〳〵とあまたおりて、おとなだちたる人の、いやしからず忍びやかなる御けはひにて、かへる人にやあらん、その內あやうし、火の事せいせよなどいふもあり、七八(ナヽツヤツ)ばかりなるおのこゞの、あひぎやうづきおこりたる聲にて、さふらひ人よびつけ、物などいひたるけはひもいとおかし、又三ばかりなる兒の、ねをびれて、うちしはぶきたるけはひもうつくし、乳母の名、母などうち出たるも、これならんといとしらまほし、夜一よいみじうの(サ)ゝしりおこなひあかす、ねもいらざりつるを、後夜などはてゝ、すこし打やすみねぬるが、耳に、その寺の佛經を、いとあら〳〵しう、たかく打出てよみたるに、わざとたうとしともあらず、修行者だちたる、法師の讀なめりと、ふとうちおどろかれてあはれに聞ゆ、又夜などは、かほしらで人々しき人のおこなひたるが、あをにびの指貫のはたばりたる、白き衣どもあまたきて、子どもなめりと見ゆる、若き男のおかしう打さうぞきたるわらはなどして、さふらひの者どもあまたかしこ

まり、(キ)いねうしたるもおかし、かりそめに屏風たてゝぬかなどすこしつくめり、顏しらぬはたれならんといとゆかし、しりたるは、さなゝめりと見るもおかし、わかき人どもは、兎角つぼねどもなどのわたりにさまよひて、佛の御かたに目見やり奉らず、(三)別當などよび出て、打さゝめき物語して出ぬる、ゑせものとは見へずかし　こゝには正月などに長谷寺にまうで籠るは常よりやうかはりさゞめきにぎはひて更にあはれに見ゆる心をかけり　物曁みとは現世を祈る心也　おこなひもしやられずとは菩提の勤もさはがしくてならぬと也　小法師ばら以下は籠り處をしつらふさまをいへり　進退しとは取振廻の自由成をいへりそよ〳〵以下は籠りし間滿て下向するさまをいへりその內あやうしとは局の內也下々にいひ付る義也　七八ばかりなるおのこゝ以下も又籠りし方の事をいへり心あきらか也又三ばかりなる兒以下是ゝ又籠所の人々の事を云りねをびれは寢ほるる義也　これならんとは何かしの籠所としらまほしと也　夜一よ以下は勤行人の事をいふ也　耳に其寺の以下法師後夜をつとむる事をいへり　又夜などは顏しらて以下はいみじき人のおこなふさまを云り　いねうとは闇遠渴仰して伺公する義也　かりそめにとはおこなひの間しばしかこう義也　ぬかなどすこしつくめりとは彼人々しき人の屏風などかこへる內にしておこなふさまをいへり顏しらぬとは見しらぬ方といふ義也　わかき人以下は又こもり人の中にわかき人々の遊興するさまをいへり佛の庭殊勝の地にて似合ぬ遊興にて侍れどもさすがなまめきたる。世にある人なればゑせ事する人とは見へぬと也これはあはれなる事にはあらねども事の次手に書る義也

(エ)進退とは自由なるを云ん爲也　(テ)愛敬アイギヤウ　(ア)おこりたるとは慍聲也　(サ)高聲に諸經誦文などつとむる義也　(キ)闇遠イネウ　闇遠渴仰など云尊崇する心也　(ユ)僻エセモノ

二月晦日、三月朔日ころ、花ざかりに籠りたるもおかし、きよげなる男どもの忍ぶとみゆる、二三人、さく(〇)ら青柳などおかしうて、くゝりあげたるさしぬきのすそも、あてやかに見なさるゝ、(メ)つき〳〵しき男に、さうぞくおかしうしたるゑぶくろいだかせて、こと

ねりわらはども、紅梅もえきのかりきぬに、色々の衣すりもとろかしたる、はかまなどきせたり、花などおらせて、侍めきてほそやかなるものなどぐして金皷打こそおかしけれ、さぞかしと見ゆる人もあれど、爭しらん、打過いぬるもさうざうしければ、氣色を、見せましものをなどいふもおかし、かやうの所にて寺籠、すべてれいならぬ所に、つかうひとのかぎりしてあるは、かひなくこそおぼゆれ、なをおなじほどにて、ひとつ心におかしき事も、さま〴〵いひあはせつべき人、必一人二人、あまたもさそはまほし、そのある人のなかにも口おしからぬもあれども、目なれたるなるべし、男などもさ思ふにこそあめれ、わざと尋ねよびもてありくめるはいみし　こゝには花の頃まうづる人々の事をいへり名高き初瀬の花なれば其頃まうでん事やさしくもあはれにも侍るとなりこゝ迄第三節目の終也長谷寺にまうづる事をこと〴〵く詳にいふ也　忍ぶと見ゆるとは現世を祈り物望みの方也人目を忍びまうづるがと也　二三人以下は同行のさまを云也　つき〴〵以下は供のやうすをいふ也　侍めきて以下は侍のをとなしうしほらしき者をも召つれたると也　ほそやかとは花車にしほらしき心なり　こんくとは金鼓也玉磬金鼓など打鳴らし拜む義也　さぞかし以下は地の詞也さぞ故ある人とは見ゆれど誰人とさだかにしらぬと也　打すきていぬるとは彼二三人同行のきよげなる男の下向する義也　さう〳〵しけれとは行ひもせで下向するは無下に見ゆるとなり　けしきを見せまじものをとは傍より見居たる人のいふ心也初よりいと忍ぶと見へしに傍より人の見るけしきをやはゞかりつらむとく打過いぬるは殘多きとの心也　かやうの所以下は上來長谷寺にこもる事共を結ぶ義也兼又假初に物へ行にも伴ひのありたき事を云り　すべて例ならぬとは惣じて他所へまかつる時にと也つかう人のかぎりしてあるはかひなくこそおぼゆれとは我扶持せる者計にて友同行のなきは甲斐無と也　なをおなじほどにてとは同心の友を伴ふべき事々云り　そのある人の中にもとは詣でゝまします人々の中に口おしからぬ同じ心なる友も侍るめれどそれはみなめなれ澤山におもひて有やらんかやうの時の伴ひにも見へ

ぬと也男などもとは地の詞也女の心のみならずと也　わざと尋ね呼もてありくとは男女にかぎらず友をもとめつれありくはいみじきと也　右すべて當段あはれなる物の內也いづれも〳〵題の本意を失べからず云々

(ミ)櫻靑柳皆裝束の色也いつれも前に注す　(メ)鷹の餌を入る物也昔も今も大身小身に依ず物へ行には鷹すべしと見えたり西宮記に着ニ行騰餌袋一と云は是也　(シ)紅梅もえぎ之も裝束の色也前に注す　(エ)しぼりの樣に染其摺磨などして色繪書などしたるを云也(ヒ)金鼓　コンク和名比良加禰　最勝王經云妙幢菩薩於ニ夢中一見ニ大金鼓一云々　江次第云次打ニ金鼓一唄師發ニ音聲一定者隨レ音徐行云々

五十九段　心つきなき物

祭、(モ)みそぎなど、すべて男の物見るに、たゞひとり乘て見るこそあれ、いかなる心にかあらん、やんごとなからずともわかきおのこなどのゆかしがるをも引のせよかし、すきかけにたゞ一人かゝよひて、心ひとつにまもりゐたらんよ、いかばかりこゝろせばく、けにくきならんとぞおぼゆる、ものへもいき、寺へ

もまうづる日の雨　つかふ人などの、我をばおぼさず、何がしこそ、たゞ今の時の人などいふを、ほの聞たる、人よりは、すこしにくしとおもふ人の、をしはかりごとうちし、すずろなるもの恨みし、われさかしがる　此段詞すくなうして心あきらか也　心つきなき物とは例のごとく當段の題也　そひ寄思ひ付の無心を云也　祭とは賀茂祭也　御祓とは河原の祓六月祓など也　いかなる人にかあらむとは心付なき人をとがむる義也　やんごとなからずともとはよき友のなくばせめて若き男の物ゆかしとおもひたるなど伴へよかし一人ありきするは心つきなき事ぞと也　すきかけとは車の下簾の透陰より すきとをし見ゆる義也　いか計り以下は地の詞也　ものへもいき寺へもまうづる日の雨とは心明らか也おもひ立事むなしうして寄付なき心也使ふ人とは召使者也　我をばおぼさずとは疎し給ふと也　何がしこそ只今の時の人とは傍輩の時めくを嫉主君へ不足の心をつげゆく義也　ほの聞とは主君たる人の聞し義也是則心づきなかるべし　人よりはすこしにくし以下は世中並々の人どち心つきなき

方の侍るを云なり　人よりとはなべての人よりはにくましき人と也　をしはかりことゝは世の人おが事を荒いひ角や思はんなどゝおしはかりごとすると也　すゝろなるもの恨みしとは少の物事に付ても恨闘ハ顏に取振廻人を無禮にするは心つきなしと也

○當段を或本は遥前に載せて詞も少しちかへり今傳本ニある一條みえそぎ以下の七行半の詞はなくして「ものへいきと云より以下の詞は同じ通也　又傳本ニ「われさかしがるト云迄にて終る也或本ニハわれさかしがるト云後にまだ多少の詞有その詞如レ左心あしき人の養たる子見るはそれが罪にもあらねとかゝる人にしもとおほゆるにやあらんあまた有か中に此君をば思ひおとし給ひてやにくまれ給よなどあらゝかにいふ兒は思ひもしらぬにやあらんもとめてなきまどふ心つきなめト長に成てもおもひうしろみもてさはく程に中々成事こそおほかめれ侘しくにくき人に思ふ人のはしたなくいへとそひつきてねんころにいさゝか心あしなといへば常よりも近くふして物くはせいとおしかり其事となく思ひたるにまつはれつゐせうし取持てまとふ宮仕人のもとにきなとする男のそこにて物くふこそいとわろけれくはする人もいとにくし思はん人のまつなど心さしありていはんをいみたるやうに口をふたきてかほをもてのくへきにもあらねばくゐおるこそあらめいみしうゑひなとしてわりなく夜ふけてとまりたり共更にゆつけたにくはせし心もなかりけりとてこすはさて有なん里にて北おもてよりト出してはいかゝせんそれたに猶そある　右如件あり亦此猶ってあるト云つゝきに初瀬にまうてゝト云詞有其詞傳本ニハねたき物ト云段ニ載せたり故ニ今爰にはしるさすねたき物ト云段にて見るべし凡ッ學者ノ好む所に隨はん爲に諸書の異説具に記し侍る也

六十段　侘しげに見ゆる物

六七月の午未の時ばかりにきたなげなる車にゑせ牛かけて、ゆるがし行もの、雨ふらぬ日はりむしろしたる車、降日はりむしろせぬも、年老たるかたは、いと寒きおりも暑きにも、げに女のなりあしきが子をおゐたる、ちいさき板屋のくろきがきたなげなるか、雨

にぬれたる、雨いたくふる日、ちいさき馬に乗て前(ス)駈したる人の、かうふりもひしけ、うへのきぬも下かさねも、ひとつになりたる、いかに侘しかるらんと見へたり夏は(一)されどよし　此段もむつかしき事なし　侘しげに見ゆる物とは當段の題也堪がたき心也　六七月の午未の時とは暑氣難レ堪時也　きたなげなる車　ゑせ牛共に見くるしく難レ堪義也　雨ふらぬ日はりむしろ以下同じ心也　年老たる以下は老年の人寒暑に堪がたき義をいへり　けす女以下は貧乏の侘しきさま也　ちいさき板屋とは是も貧乏の住家のさまをいへり　ちいさき馬とは是もみぐるしき義也　かうふりとは裝束も調ひ侍らず冬は肌寒くして心身共に苦しう侘しからんと也　(ロ)たゞみぐるしき牛といふ迄也むつかしく沙汰するにおよばず　(ス)前駈とは供奉の人をいふ也

(一)夏はされとよしとは雨にぬれてもくるしからぬと也」

六十一段　あつげなる物

隨(二)身の長(チヤウ)のかりきぬ、なうの(三)袈裟(ケサ)、出居(テヰ)の少將、いみじう肥たる人の髮おほかる、きんの袋(フクロ)、六七月のずはうの(四)阿闍梨(アサリ)、日中の時などおこなふ、又おなじころあかゞねのかぢ(五)　此段も心あきらか也　あつげなる物とは則當段の題也　心あきらか也隨身の長のかりきぬとは裝束のあつげなる義を云也猶次書にしるす　のうの袈裟とは又出家の裝束に就て云也　なうは納也出家を納僧と云也　出居の少將とはこれは事(ワザ)に就て暑意を云也暑氣の頃出居の座の奉行する人を云也　いみじう肥たる人とは人の身に就て云也六七月のずはうの阿闍梨とは修法に就てあつき心を云也　日中の時などとは六時の中の日中の時也　又同じ比あかゞねのかぢとは業に就て云也六七月の酷暑なれば銅にかぎらず鐵とても熱かるべけれどもとりわけ銅の名にちなみて熱きをいはん爲也

(二)近衞隨身の上臈を番長といふ今隨身の長と云は此番長の事也　職員令には番長四人と侍る秦(ハタ)氏下毛野氏なとの中より撰び進む也　褐の衣冠(イクワン)を着或は狩衣に花を着て服する也　隨身の沙汰前にも注し侍る也　(三)智度論云佛意欲レ令下弟子隨二順道行一捨中世樂上故讚二十二頭陀一如初度五比丘白レ佛

當レ着ニ何等衣一佛言應レ著ニ衲衣一　十誦律云一ニハ有ニ施主衣二無ニ施主衣三往還衣四死人衣五糞掃衣此自有ニ五種一一道路弃衣二糞掃處衣三河邊弃衣四蟻穿破衣五破碎衣又有ニ五種一一火燒衣二水漬衣三鼠咬衣四牛嚼衣五妳母弃衣已上衣天竺人諱忌故弃レ之以不ニ任用一義同ニ糞掃一故共納成レ衣名ニ糞掃衣一也悲華經云袈裟聖人表式隨ニ順寂滅行慈悲心一離レ欲者之所レ應レ服云々又云佛於ニ寶藏佛前一發レ願成佛時袈裟有ニ五種功德一云々略　○江次第五月最勝講下云次出居次將等參上昇殿自ニ青瑣門一帶レ劍持レ笏如レ恒　又云式部彈正着ニ出居座一行事左右相分少納言辨外記史同着ニ此座一　(四)菩提資糧論云阿遮梨夜隋言ニ正行一南山云能糺ニ正弟子行一故　梵語には阿遮梨耶といふを後に闍梨と稱し誤る也　(五)かちとは鍛冶の事也鍛冶とはかねを打延錬鍛ものを中略してかぬちといふ也それを又訛てかちとはいふ也然を漢學の人本朝の義訓をしらで鍛冶の二字は假治の字形の似たるを誤用てかちと稱すといへり是尤のやうに侍れど義訓をしらぬ故也ふるき神書幷に延喜式などに鍛冶鍊師と書てかぬちと訓せり本朝にはあなにへやと神のの給ひしより音に應じ響にしたがひ義理侍る是を義訓といふ也本朝の音をしらぬ人は日本の沙汰はおぼつかなかるべし

【六十二段】　はづかしきもの

色このむ男の心の内いさぎよき、夜ゐの僧(六)、みそか盗人の、さるべきもの、くま〴〵にかくれゐてみるらんをば、たれかはしるべき、まぎれにふところに物なとひきいるゝ人もあらんかし、それはおなじ心に、おかしとやおもふらむ　此段は詞おほく侍れば二節に分て見るべし就中此一節には略せる詞也次第二節には具なる詞也是則初に其事をあげて後にその心を詳に述る義也　はづかしき物とは例の題也心明らか也色このむ以下は情深くして正しき心をはづる義也　夜居の僧とは夜もすがらつとめをこなひて宿直するを云也則はづかしき義下に見ゆ　みそか盗人以下盗人の心をはかりて云義也　まきれに以下は常底の蔵に物かくしなどするは同じやうに侍らぬと云義也　おなじ心にをかしとやおもふらんとは共に興じおかしきと也

(六)東山左府說云夜居護持僧候ニ二間一加持二間有

観音ニ夜居僧加持所也天台座主寺長吏東寺長者云々　○みそか　竊　密　夜居の僧は、いとはづかしきもの也、若き人々あつまりゐて、人のうへをいひわらひ、そしりにくみもするを、つく〳〵と聞あつむらん心のうちはづかし、あなうたてかしかましなど、おとなびたる人の、けしきばみいふをも聞いれず、いひ〳〵てのはては、みな打とけて、ねいりぬる後もはづかし、男はうたておもふさまならず、もどかしう心づきなきこと有と見れど、さしむかひたる人を、すかしたのむるこそはづかしけれ、ましてなさけあるこのましき人にしられたるなどは、をろかなりとおもふべくももてなさずかし、心の内にのみもあらず、又みなこれが事はかれにかたり、かれが事はこれにいひ、かたみに聞すべかめるを、我ことをばしらでかう語るをば、猶人よりはこよなきなめりとやおもふらんと、おもふこそはづかしけれ、いであはれ又あはじとおもふ人にあへば、こゝろもなきものなめりと見へて、はづかしくあらぬ物ぞかし、いみじくあはれに、心くるしげにみすてがたき事などを、いさゝか何事とも思はぬも、いかなる心ぞとこそは淺ましけれ、さすがに人のうへをばもどき、物をいとよくいふよ、ことにたのもしき事もなき宮づかへの人などをかたらひて、たゞにもあらずなりぬるありさまなどをもしらでやみぬるよ　第二節前節にいひし夜居の僧のはづかしき也　夜居の僧とは前にいひし夜居の僧の事を具にいふ故をかさねて述る義也　若き人々とは若き女房達也　聞あつむらんとは女房の詞を夜居の僧が聞あつむると也　あなうたて以下はおとなびたる人の叱義也　いひ〳〵てのはてとは人こと云盡しての後也　みな打とけてねぬるとは夜居の僧の心をゝしはかりていねてもわすられずはづかしきと也　男はうたて以下は前節に色このむ男と云ひし事を具に述る義也　おもふさまならずとは女房などの心のごとくならでもどかしきと也是男の優なる故也　さしむかひたる人をすかしとはさしむかへばいか成人も捨てずして賺慰めたのもしげなるとも　まして以下はさしかひたる常底の人よりまさりて情ある方にしられたるはおろかにおもはぬと也　おもふべくもてなさずとはおろかにもてなしおもはぬと也大切にする義也　心の内にのみも

あらず以下はさがなき人の事をいふ也　心の中にのみとは心中におもふのみならず詞にいひあらはしなどするさがなきさまなり　我ことゝは我身の擧動をばしらて人の事のみかなたこなたへ語ると也　猶人よりはこよなきなめりとは人の事のみいひ巡る者のおもはく也うちとけ語り聞せば我をこよなくおもふらんと也又云むかふの聞人が語りし者をこよなくおもふかこよなくはおもはじと也　とおもふこそはづかしけれとは地の詞也　いであはれ以下は中絶し人にかさねてあへ共はづかしからぬと也　是則むかふの人の不屆なる故也　いでとは發語の辭なりあはれは思ひ竟めたる心也うらめしき人なれは思ひ竟めてあはじとおもふゝ也　心もなきものなめりと見へてとはむかふの人無下に心なき人なればはづかしからすといふ義也是則もとは心ありがほに見なさるれど今はあはじとおもひうとむゆへに心なき人ぞと見へてはづかしからぬと也　又云心なきものとは自のうへ也我心に又あはじとおもひ切しをむかふの人はしらで我疎く侍るを見て心絶て侍るとは見しらで初のごとくあるべきとむかふの人がおもふはかへりてはづかしくありぬべきと也此説の時は見へでのて文字濁るべしあらぬのぬ文字も畢ぬの心也ふのぬにはあらず　いみじくあはれに以下は情をしらぬ人のうへを云也心あきらか也　さすがに人のうへをばもときとは情しらぬほどの人はかならず人のうへはもどかしく物事を云と也　ことに以下は情をしらぬ人か宮仕の女房を戀想して頓て忘れたる心を書り　たのもしき事もなきとは　苗のなき女房をと也　たゝにもあらずとは懷姙なとしたるをもしらであからさまになされたる義也　しらでとは男がつれなふしらで也

六十三段　むとくなるもの、鹽干(六)のかたにおる大船、髪みじかき人の、鬘とりおろしてかみけづるほど、大なる木の風に吹たふされて、根をさゝげてよこたはれふせる、(七)すまひのまけてゐるうしろで、(八)ゑせものゝずさかうがへたる、翁のもとゞりはなちたる、人のめなどの、すゝろなる物えんじしてかくれたるを、かならず尋ねさはがん物をとおもひたるに、さしもあらず、のどかにもてなしたれば、さてもえ旅立ゐたらねば、心と出きたる、なま心をとりしたる人の

知たる人と、心なる事いひむつかりて、ひとへにもふさしと見しろくを、ひきよすれどしゐてこはかれば、あまりになりては、人さばれとて、かいくらみてふしぬる、後に、冬などは、ひとへきぬばかりを、ひとつきたるもあやにくかりつるほどこそ、さむさもしられざりつれ、やう／＼夜のふくるまゝにさむくもあれど、おほかたの人もみなねたれば、さすがにをきてもえいかでありつるおりにぞ、よりぬべかりけると、目もあはず思ひふしたるに、いとゞおくの方より物のひしめきなるもいとおそろしくて、やをらよろぼひよりて、きぬをひきゝたる程こそむとくなれ、人はたけく思ふらんかし、そらねしてしらぬかほなるさまよ、こまいぬしくまふものゝ、おもしろがりはやりて、出ておどる足音、修法は、佛眼真言なとよみたてまつりたる、なめかしくたうとし　此段詞おほけれども心あきらか也むとくなる物とは當段の題也無レ詮義無レ益ことゞもを云也　臘干のかたにおる大船とは無詮義をいへり　髮みじかき以下も無詮心也　大なる木以下は無益心也　すまひ以下は無詮義をいへり　ずさかうかへたるとは從者の心操を判ずる義也　翁のもとゞりはなちたるとは壯年の比の親髮は其詮有べけれと老果て落髮なとしたらんは無益事也　人のめなど以下は女のさがなき心にて男にむかひ物えんじ心かろく家など出て悔むこと侍るをかけり　すゝろなる物えんじとは少の事にもくねり恨む義也　かくれたるとは男にかくれ心かろく家など出し義也　かならず尋ねさはがんとは男がたつねさはかんと也　さしもあらずのとかにとは男のさはがぬ義也　さてもえ旅立ゐたらねばとは女のさまを云なりさてもので文字濁るべしさうありてもえこそ他國へも行やらぬと也　心と出きたるとはかやうのはかなきさまなるもわが拙き心より出きたると也　なま心をとりしたる人とは女が同じやうの友といひ悔む心なり　ひとへにもふさしとは男が一人はねまじ我をよばひなどせんずらんと女のおもふ義也　見しろくをひきよすれどとは女の身しろくを男が引よすると也　しゐてはこはかればとは女はあながちにこはがると也　人さはれとは男のさあらはとてとり退

て一人ふしたると也後に冬などゝは男のふした
る後に女のはかなきさまを云也　あやにくがりつ
るほどこそとは宵の中はねたましさの深きゆへ寒
さもおぼへざると也　さすがにをきてもえいかて
とは夜更るにしたがひ寒くなれども男のかたへも
えいかず身しろき居ると也　よりぬべかりけると
目もあはずとは女の意におもふ由也　いとゝおく
の方より物のひしめきとは戸障子天井などの風に
なり鼠やうのものゝあるを云也　きぬをひきたる
程こそむとくなれとは女のあはれに一人臥する事
はすゞろに物えんじの心からぞといふ義なり　人
は以下男の心つよくもてなすさまを云也　こまい
ぬしくまふものとは師子舞やうものなり　おもし
ろがりはやりて出ておどる足音とは見物する傍の
人がともにおどり出て足拍子なとふむは師子舞の
ごとく興あらぬ事なればむとくなる事ぞと也　修
法は佛眼眞言とは正法に不思議なき心にて至て高
上の眞言なれば愚なる者はなめかしげにおもひて
むとくなるやうに侍ると也
(土八)韋應物か詩に野渡無レ人舟自横といひけん心

も同し趣也　(七)相撲也うしろでとはうしろ影也
負て引籠うしろかげは無益義也　(◉)ゑせ者　此
ゑせ者は愚にかたく無人也其心から後者の是非善
惡を考へ心操樣躰など批判する尤無益の事成べし
(八)或云修法以下の一章は若百卅四段か或は百四
段の内の詞歟當段の内には少心得かたき歟云々
○佛眼　亦佛母尊ト名ク一切諸佛菩薩ノ功德ヲ此
一尊ニ惣ル也曼陀羅國ニハ佛眼尊住二中央一佛菩薩
諸天圍遶シ玉フ也新佛開眼モ此尊ノ功德ヲ修スル
ナリ　瑜祇經云時金剛薩埵對二一切如來前一忽然現
二作一切佛母身一住二大白蓮一身作二白日暉一兩目微笑
二手住レ齊如レ入二奢摩地一從二一切支分一出二生十恒
河沙俱胝佛一一々佛皆作二禮敬一本所レ出二生於刹那
間一一時化二作一字頂輪王一皆執二輪印一　眞言家の
次第にも如此但少說相異也云々(▲)又說云こまい
ぬしくまふものとは以下みな舞人のうへを云傍
より見る人が足拍子ふむにはあらざるべき歟こま
いぬしうよくまねびまふ者が心からおもしろがり
はやり出ておどれともみづからはそのさまも拍子
の次第もしられず慰にもならねばおもしろがりは

やり出てもむとく成との心成べき歟

清少納言枕草紙抄卷八

六十四段 はした(イ)なきもの、こと人をよぶに、われかとてさしいてたるもの、まして物とらする折は、いとゞをのづから、人のうへなどうちいひ、そしりなどもしたるを、おさなき人の聞とりて、その人のあるまへに、いひ出たる、(ロ)あはれなる事など人のいひてうちなくに、げにいとあはれとは聞ながら、泪のふつと出こぬ、いとはしたなし、めでたき事を聞には又すゝろにたゞ出きにいてくれ　こゝより下の藤大納言後に聞て笑ひけうじ給ひけりといふ迄當段の内なり詞おほく意もむつかしき段なれば十一節に分て釋し侍るなり就中今此第一節には大底人の心つかひにつゐてはしたなき由をいふなり　はしたなき物とは當段の題なり不似合意を云なり則不都合などゝいふ同じ義也　こと人をよぶにとは聞ちかへ思ひちがへなどして我かとさし出たらんははしたなき心ぞと也　いとゞをのつから以下は人の噂なといひ褒貶などする折稚人のあるをも

憚からずいふに其稚人聞とり人に語りなどすればはしたなき心地ぞとなり　あはれなる事などゝは憂の時あはれに聞ながら感涙の出こぬははしたなきとなり　めでたき事以下はこれ又悦の折なれば泣べき事にあらねど泪の出くるははしたなく似合さる義ぞとなり

(イ)伊勢物語故郷にいとはしたなくて有愚見抄半の字をはしたとよむ云々又强の字をはしたなしとよむ云々牡丹花説强の字をはしたなしとよむに叶へりよはきものにつよくあたる事をはしたなしと云心なり常にも女の物いひこは〳〵しきをはしたなきといふ云々　實證の説はしたなきとははしたなといふ詞なり女在な事を女在なきなどいふに同し　凡いせ物語の末書の心如レ此似合さると云義大綱成へし　源語類聚云はしたなきよはき物につよくあたるやうの事なり又はしたなめと云はくるしむる心なりはしたなげにいひてなとゝ云ははじしむる心なり云々　無半ハシタナシ非常同　(ロ)あはれの詞兩義あり前見是は哀傷の心なり

八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院御棧敷のあなたに、御輿をとゞめて、御せうそこ申させ給ひしなど、いみじうめでたく、さばかりの御ありさまにて、か(ホ)しこまり申させ給ふか、(ヘ)よにしらずいみしきに、誠にこぼるれば、けさうしたるかほも、(ト)みなあらはれて、いかに見ぐるしかるらん、宣旨の御使にて、(チ)齊信の宰相中將の御棧敷に參り給ひしこそ、いとおかしう見えしか、たゞ隨身(リ)四人、いみじうさうぞきたる馬そひの、ほそうしたてたるばかりして、二條の大路ひろうきよらにめでたきに、馬をうちはやして、いそきまいりて、すこしとをくよりおりて、そばのみすのまへにさふらひ給ひし、(ヌ)院の別當ぞ申給ひし、御返しうけ給はりて、又はしらせ歸まいり給ひて、御こしのもとにて、そうし給ひしほど、いふもをろかなりや、扮うちわたらせ給ふを、見たてまつらせ給ふらん、女院の御心おもひまいらするは、とひ立ぬべくこそおぼへしか、それには、ながなきをして、わらはるゝぞかし、よろしききはの人だに猶此世にはめでたきものを、かうだにおもひまいらするもかしこしや　第二節前のめでたき事に泪の出くるといふつゞきに女院のめでたき御ありさまを見たてま

つれば泪のいでゝ侍りし事をしるされたり是日出度析の泪なれば尤はしたなき義なり　八幡の行幸とは一條院の行幸歟委次にしるす　女院とは詮子東三條院なり　御棧敷とは行幸を御覽ある棧敷なり　御輿とは一條院の御こし也　御せうそことは一條院より女院への御せうそこ也　さばかりの御ありさまとはみかど一條院のやむごとなき御位にて女院をかく敬ひ給ふを拜み奉れば泪こぼれ有かたくおぼゆるとなり　宣旨の御使とは八幡宮へ奉らせ給ふ宣命の御使なり　齊信以下は女院の御かたへ御せうそこの御使の由を云なり心あきらかなり　すこしとをくよりとは女院の御棧敷のとをくよりおりかしこまり申す意なり　院の別當ぞ申給ひしとは女院への執奏は道兼卿のし給ひしとなり　御返しとは女院よりの御返答なり　うけ給はりてとは齊信卿の承りていそき立歸みかとへ湊せらるゝ義なり　扱うちわたらせ給ふとは行幸なるよそほひを女院の見給ふ御心の內はいかばかり嬉しくもいみしくも思召さんと也　それは以下地の詞なりはしたなき義をいふ也　よろしききはの人とは親王攝關などさへめでたきにましてみかとの御事なればかくありがたくおもふもかしこきとなり　かしこしとはかたじけなきなどいふ意なりほめたる心も侍るべし

（八）勘物云長德元年十月廿二日石清水行幸還御勘物に如レ此侍る故具に記し畢ぬ然共諸家の記錄等に長德元年の行幸見へず不審何れの家記に有と云事をしらず但永延元年に行幸有し由は公卿補任榮花物語なとに見へ侍れは若これをや勘物に覺ちかへ長德元年と記されたる歟脩御記など廣く考て實否を正すべき也　又當社行幸の始は圓融院の天元二年三月に有し由諸社記簾中抄等に見えたり　又當社の來歷は下の神はといふ段に注すべし　（ニ）女院は東三條院なり前に見えたり　（ホ）畏カシコマリ敬心なり　（ヘ）化裝ケサウ　（ト）宣命を捧け奉る使なり　江次第云宣命召二內記一於二小板敷一令レ進二宣命一上卿付二職事一奏聞入レ宮御覽了返給上卿取二副宣命於笏一召二使於小板敷一自二御座西小間一給レ之又云上卿奏二宣命一召二使於小板敷一給レ之使取レ笏給レ之早晩不レ定使退預二宣命於藏寮官人一又社頭儀

云使着レ座副ニ宣命於笏ニ再拜次讀ニ宣命ニ次再拜畢召ニ神主ニ給ニ宣命ニ社司申ニ返祝ニ使立レ座これらの事を勤るを宣旨の使といふなり（チ）齊信の傳別に見えたり此齊信朝臣使に立給ふが道にてみかとより女院へ御使にまいり給ふ由なり（リ）江次第ニ云若使爲ニ檢非違別當ニ者馬副八人府隨身四人火長四人雜色十二人取物四人之外或加者督長四人云々

（ヌ）顯光卿歟或は道兼公歟宜レ考レ之

（ル）關白殿の、黑戸より出させ給ふとて、女房のらうにひまなくさふらふを、あないみしのおもとたちや（ヲ）、おきなをばいかに（ワ）おこなりとわらひ給ふらんと、わけいてさせ給へば、戸口に人々の、色々の袖口して、御簾をひきあけたるに、（カ）權大納言殿、御くつとりてはかせたてまつらせ給ふ、いとものものしうきよげに、よそほしけにしたかさねのしりながく、所せくてさふらひ給ふ、まづあなめでた、（ヨ）大納言ばかりの人に沓をとらせ給ふよとみゆ、山井の大納言、そのつぎつぎ、さらぬ人々、くろきものを、ひきちらしたるやうに、（カ）藤つぼのへいのもとより、登花殿（ヨ）のまへまで、ゐなみたるに、いとほそやかにいみしうなまめかしうて、（タ）御はかしなど引つくろひ、やすらはせ給ふに、（レ）宮の大夫殿の、（ソ）清涼殿のまへにたゝせ給へれば、それはゐさせ給ふまじきなめりと見るほどに、すこしあゆみ出させ給へば、ふとゐさせ給ひしこそ、なをいかばかりの、むかしの御おこなひのほどならんと、見たてまつりしこそ、いみじかりしか、（ツ）中納言の君の忌の日とて、くすしがりおこなひ給ひしを、たべそのずゝ、しばしおこなひて、めでたき身にならむとかとて、あつまりてわらへど、なをいとこそめでたけれ、御まへにきこしめして、（ネ）佛になりたらんこそ、これよりはまさらめとて、うちゑませ給へるに、又めでたくなりてぞ見まいらする、大夫殿のゐさせ給へるを、かへすがへすきこゆれは、例のおもふ人とわらはせ給ふ、まして此後の御あり（ナ）さま、見たてまつらせ給はましかは、ことはりとおぼしめされなまし　第三節前の詞に女院の目出度事をいひし次手に關白殿の目出度いみじきさまをいふなりすえにはずゞとりおこなひ關白を羨むを人々わらひ侍れど御まへにはいみじくおぼしめす由をいひて題のはしたなきといふ義を結ぶなり

又宮大夫殿清涼殿の前にたゝせ給ひて關白殿とまじらひ給ふ事のはしたなき事などをかけり　關白殿とは道隆公を指ていふ成べし　あないみし以下は關白殿の詞也　いかにおこ也とわらひ給ふらんとは數年に及まで官職をけがしたるさまを謙退ある義也　權大納言とは御子伊周公なるべし　いともの〳〵しうきよけに以下は權大納言殿の身のうへを云なり　まづあなめでた以下は又關白殿のいみじきよそほひをいふなり　山井大納言とは兼家公の猶子にし給ふ道賴卿也　そのつぎ〳〵とは家子公達の事を云なり　くろきものとは裝束の色を云なり公卿上達部の裝束なり　いとほそやかに以下は大納言殿のうへをいふなり或又なみゐ給へる公達の上を云なり云々　宮の大夫殿とは中宮大夫成べし則道長公を指歟　それはゐさせ給ふまじきとは宮の大夫殿の關白の出させ給ふ所におはさじとなり　すこしあゆみ出させ給へばとは關白殿の少あゆみ出給へば宮の大夫殿もふとおはしましたるとなり　なをいかはかりの以下は關白殿の宿世いみじくおはす心をいふ成べし　中納言の君とは中宮に宮つかへ給ふ女房の名なり　忌の日とは每月に六ヶ日の物いみ成べし　たゞそのずゝ以下は女房達の詞なり中納言殿の珠數をたはむれにうはひ取の心成べし　めでたき身にならんとか以下は人々女房達の嘲笑義をいふ也　なをいとこそめでたけれとはわらひしにも似ず關白殿は目出度おはしませばとなり是少納言と女房達との心の不都合成由なり　御まへにとは中宮の御前に沙汰ありしとなり　これよりとは此浮世の少時の爵祿のめでたきを究たらんよりは後の世をいのり佛に成たらんこそ目出度かるへきと也　又めでたくなりてぞとは中宮の御詞にて關白の目出度を徧知となり　大夫殿のゐさせ給へるとは關白殿の御出の時ふとおはせし事を云なり　かへす〳〵聞ゆれはとはふとおはせし事の難レ有などゝかさねて申上る義なり　例のおもふ人とは中宮の常に心やすくおぼしめす女房と大夫殿のはしたなかりし事を笑せ給ふなり　まして以下は地の詞なり後にめでたくおはしませし事をいひて今の心を結ぶ成べし

(ル)道隆公をさす傳は前に見えたり　(ヲ)侍者ナモト御許同女房をいふ前ニ見ゆ　(ワ)嗚呼ナニおかしき事なり又あなつらはしき事いつれに付てもあしき事なり　(ヲ)勘物云伊周正暦三年權大納言傳系圖前見えたり　(ソ)補任并系圖云道頼兼家公爲二六男一實道隆子兼家公爲二養子一云々　系圖は前に見えたり　見果ぬ夢云新中納言の北方山井と云所にすみ給へは山の井の中納言とそ聞ゆると云々
(カ)拾芥云飛香舍西一藤壺弘徽殿西或五間四面
(ヨ)前に見えたり　(タ)元元集云神語破者古語天杵鉾云々いにしへははせと云也はかせはかしは後々の轉語成へし　(レ)勘物云御堂正暦二年權大納言中宮大夫如元これすなはち道長公也　(ソ)禁秘抄ニ云　凉殿五間北一間母屋爲二御路一次御帳間第三ノ間大床子第四奥有二御厨子一第五四季御屛風母屋有二日記御厨子一　(ツ)中納言の君勘物なし尙よく考へし　(ネ)梵云二佛陀一譯云レ覺所謂自覺覺他覺行圓滿今略稱レ佛　般若灯論云何名レ佛於二一切法一不二顚倒一眞實覺了故名レ佛又云於二無体法中一覺二了無餘諸法平等覺一故名爲レ佛　菩薩本行經云佛者諸惡永盡諸善普會無レ復二不善一諸根寂滅六度無レ極智慧滿具二權方便一隨レ時敎化有二大神力身紫金色三十二相八十種好一六通淸徹前知二無窮一却觀二無極一現在靡レ所レ不レ知三達遐鑒有二如レ此德一故號レ佛也佛のめでたき事如レ此擧て記しかたし　(ナ)道長公後々御さかえを云成べし　(ラ)めでたき身にならんとかとは關白殿の目出度事をうらやみてかとの心なり

九月ばかり夜一よ降あかしたるに、せんざいの菊の(ラ)露こぼるばかり、ぬれかゝりたるもいとおかし、すいかひらもんすゝきなどのうへにかひたる蜘蛛の巣の、こぼれのこりて、所々にいともたへさまに、雨のかゝりたるか、しろき玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれにおかしけれ、すこし日たけぬれば、萩などのいとおもげなりつるに、露のおつるに枝のうちうごきて、人も手ふれぬにふとかみざまへあがりたる、いみじういとおかしといひたる、ことと人の心地には、つゆおかしからじと思ふこそ、又おかしけれ　第四節折につけつゝ庭の氣色なと詠むるに人とおれとおもむきことにしてはしたなく侍

る義をいふなり是則不ニ都合ニ心なり　九月以下時節のあはれなる比をかけり心あきらかなり　せんざいとは前栽なり　こぼれのこりてとは露がこぼれのこりてなり　いともたえさまにとは蜘蛛の糸破れ絶さまに侍るとなり　しろき玉をつらぬきたるやうなるとは蜘蛛の糸にをける露を見たてたるさまなり　すこし日たけぬればとは早朝には露おもげなれ共日の高るにしたかひて露もきへかてに成萩の枝もかろくなるとなり　ふとかみさまへあがりたるとは露のおもきも次第に輕く成て上へ枝のはねあがり露も彌散亂るゝ氣色をとなり　こと人とは他の人なり如斯の氣色を感せぬ情うすき人はつゆおかしからじとおもはれはしたなきとなり（ラ）後撰の題しらすの歌ニ「菊の花長月毎に咲くれは久しき心秋やしるらん「名にしおへは長月毎に君か爲垣ねの菊は匂へとそ思ふ（ム）透垣スイカ井竹なとにてすかしたる垣也　（⊙）羅ウスモノのごとく紋の有薄をらもんすゝきといふ也　（ウ）拾遺ニ伊せ「うつろはん事だに惜き秋萩におれぬ計もをける露かな　古今に「折て見はおちそしぬへき秋萩の枝もたわゝに置るしら露

（ヰ）七日のわかなを　人の六日にもてさはき取ちらしなどするに、見もしらぬ草を子供のもてきたるを、なにとかこれをばいふと、とみにもいはず、いさなどこれかれ見あはせて、（ノ）みゝな草となんいふと云ものゝあれば、むべなりけり、きかぬかほなるはなどわらふに、又おかしげなる草のおひたるをもてきたれば、「つめとなをみゝな草こそつれなけれ、あまたしあればきくさもまじれり」と、いはまほしけれど、聞入べくもあらず　第五節七草の中にみなれぬ草の侍るを問と答ぬさまのはしたなく侍る由を云也　七日のわかなの事前に見えたり　見もしらぬ草とは清少納言幷に人々の見なれぬ草ぞとなり　なにとかこれをはいふとゝは草の名を問ふ詞なり　とみにもいはずとは子供が頓に答ぬとなり　いさなどこれかれ見あはせとは子供はめなれめづらしからねばいづれかとひ給ふぞとおもひかれこれとうかゞひ見る義なり　みゝな草とは尋ねらるゝ草の名を答る也　むべなりけりとは少納言の詞なりみゝな草といへば尤宜なるとなり　きかぬかほなるはな

どわらふとはみゝな草ならばきかぬかほなるも尤
むべなりとわらふどなり　又おかしけなる草とは
見しらぬ草ぞとなり　つめとなを以下は少納言の
興に催されてよまれし歌なり　つめどゝは草を摘
に積重る義をもたせたり　歌の心はかくれたる所
なしみゝなくさは聞いれでつれなけれ共あまたあ
る中なれは又おかしき草のまじり有ぞと也　とい
はまほしけれどゝは子供にいひかけたう侍れどゝ
なり　聞入べくもあらずとは子供の事なれば聞い
るまじくおもふとなり是はしたなき心なり
（キ）七日のわかなの事前に委しく註し侍るなり
（ノ）みゝな草　七種の內歟「芹なつな五行たひら
か佛の座すゝなみゝなしこれを七くさ芹五行なつ
なはこへら佛の座すゝなみゝなし是や七くさ
二月官廳（オ）に、定考といふ事するは、何事にあらん、
公事などはかけたてまつりてする事なるべし、そう
めいとて、上にも宮にも、あやしきものなど、かはら
けにもりてまいらする、頭辨の御もとよりとて、主殿
司ゑなどやうなる物をしろきしきしにつゝみて、梅
の花のいみじく咲たるにつけて、もて來る、繪にやあ

らむといそきとりいれてみれは、（ク）へいだんといふも
のを、二つならべてつつみたるなりけり、そへたる
たて文（キ）に、けもんのやうにかきて、進上へいだん一
つゝみ、例によりて進上如レ件、少納言殿（マ）にとて、月日
書て　みまなのなり（ケ）ゆき（コ）とて、おくに此おのこは、
みづからまいらんとするを、ひるはかたちわろしと
てまいらぬなりと、いみしくおかしけに書給ひたり、
御前に參て御覽ぜさすれば、めでたくもかくれたる
かな、おかしうしたりなどほめさせ給ひて、御文は
とらせ給ひつ、かへり事はいかゞすべからん、此へ
いだんもてくるには、物などやとらすらん、しりたる
人もがなといふをきこしめして、惟仲（サ）がこゑしつる、
よびてとへとのたまはすれば、はしに出て左大辨（ス）に
ものきこへむと、侍していはすれば、いとよくうる
はしうて來り、あらず、わたくし事なり、もし此辨
少納言などのもとに、かゝる物もて來る下部などに
は、するゝ事やあるととへば、さる事も侍らず、たゞと
ゞめてくひ侍る、なにしにとはせ給ふ、もし上官のう
ちにて、得させ給へるかといへば、いかゞはといらふ、
たゞ返しを、いみじうあかき、うすやうにみづからも

てまうでこぬ下部は、いとれいたうなりなんみゆるとて、めでたき紅梅につけてたてまつるを、すなはちおはしまして、下部さふらふとのたまへば、出たるに、さやうのものぞ、うたよみしておこせ給へるとおもひつるに、びゝしくもいひたりつるかな、女すこしわれはとおもひたるは、歌よみかましくぞある、さらぬこそかたらひよけれ、まろなどにさる事いはん人は、かへりてむしんならんかしとの給ふ、則光成康などわらひてやみにし事を、殿のまへに、人々いとおほかりけるにかたり申給ひければ、いとよくいひたるとなんの給はせしと、人のかたりし、これこそみぐるしき、我ほめともなりかし　第六節有職の事を云て其次手に頭辨の歌をよみがたく思召由をいへり是則はしたなく不ㇾ似合ㇾ事なれ共普通に歌を嫌ひ給ふにはあらず此道を大切におぼしめす故なり則前にも少納言が家の風を大切におもひ歌よむまじといひし心とひとしきにやされは終にこれ、そみぐるしき我ほめともなりかしといへる也
二月とは二月十一日列見卯月七日擬階奏八月十一日の定考此三ヶ度は同じ公事なる故本文に二月といふ也則其次第委く後書にしるす　官の廳とは太政官の廳なり　そうめいとは素麺なり　かはらけとは土器なり　頭辨とは行成卿なるべし　主殿司とは主殿の官人を御使にしてなり　梅の花とは梅の枝につけてなり　繪にやあらんとは少納言の心也　進上如件少納言殿とは男文の法令のことく認て頭辨より清少納言かたへ戯に贈られしなるべし　少納言殿とは清少納言をあてゝ云なり　みまなのなりゆきとはこれは頭辨の自の身をみまなのなりゆきと假云成べし此おのこは以下文の詞也　いみじうおかしけにとは戯事を興有やうにもてなし書給ふとなり　御まへとは中宮の御前なり清少納言則持參披露せらるゝ義なり　めでたくるとは中宮の褒興し給ふ御詞なり文章手跡などほめ給ふ心也　おかしうしたりとは餅餤のつゝみやう花につけしさまをほめ給ふ心なり　かへり事はいかゞすべからん以下は清少納言の詞なり　聞召てとは中宮の聞召てなり　はしに出てとは少納言の端居に出て惟仲を呼るゝ義なり　左大辨は惟仲なり　さふらひしていはすればとは侍に呼つかすると

なり　あらずとは天事にはあらず私に呼といふ義なり　もし此辨少納言以下は清少納言の惟仲に謂はるゝ詞なり　する事やあるとは物かづけなどする事やあるかとなり　さる事も侍らずとは惟仲が答なり　たゞとゞめてくひ侍る餅餤を留て賞玩するとなり　なにしにとはせ給ふとは惟仲が少納言へとひ返してなを其禮儀を奏示すなり　いかゞはといらふとは少納言の答なり上官にあらず頭辨よりみまなりゆきと書送られしかば此なりゆきが分限に相應の返事を尋ると也　たゞ返しを以下は少納言の心也　紅梅とは紅梅の枝につけて返しをたてまつるとなり　すなはちおはしましてとはそのまゝ頭辨の少納言が方へおはしませしとなり　下部さふらふとは使のものに返事は歌などあるかと尋ね給はん爲に下部さふらふとの給ふなり　出たるにとは下部が罷出て少納言の返事を奉りし心なり　さやうのものそうたよみして以下は頭辨の詞なり左樣の物の返しには歌をよみおこす事の侍るにびゝしうはれがましき事をしつるものかなもし歌よみこしなばいか計むつかしく侍らんとなるべし　女すこしとは常體の女のうへを評判しの給ふ義なり　まゐなどにとは頭辨みづからの卑下なり　かへりてむしんならんかしとは頭辨の詞をうけて少納言の歌よまざる故を斷なり無心ならんとの給ふゆへをしるにより返しに歌も思ひよらざりしとなり　則光以下は歌の噂に因て前方の事をしるされたり　則光とは前に歌を得よまで去し事なりされを關白殿の御前にて物語申されしと也　いとよくいひたるとは殿の少納言をほめ給ふ詞なり則光に歌よみかけしをほめ給ふ心なり　人のかたりしとは女房達などの物語に只今せらるゝこそ我心にはしたなくおぼゆるとなり　扨當節大意は餅餤の返しに歌をよまざる事のはしたなき風情をくれ〳〵斷に成べし

〇公事根源云定考八月十一日是は書六位以上の加階をする人はかの藝能行跡格勤をえらひて榮爵を給けるなり上卿官の東の廊の座につきて事を行ふ次に朝所に就て三獻の儀式あり次に宴穩の座につく又各三獻ありかざしの花を上卿以下の冠にさす大臣は白菊納言は黄菊參木りうたん其外はみ

な時の花をさすつくり花にあらす大かたは二月の列見に同し式兵の兩省より諸司の輩の上日を選成する事を列見といふそれをかきあつめて奏するを擬階奏といふ此人々をえらひ出して定め侍るを定考とは申なり定考と文字にはかきて侍れと考定とさかさまによみ侍るか口傳にて侍なり　西宮記云定考今日宮中定考也但百官人依去年仕上日式部兵部依考與位六位已下二月令列見選成人等四日奏成選短冊奏授位也同日請印位記同日召給位記是皆一事也上卿着東廊召使申時上卿以下起座於造曹所着靴次史文請印外記置式宮定考上卿以下着朝所一獻三獻後居粉飲數巡後居餅餤官掌申裝束之由辨少納言降立上卿以下一々下揖出着宴座一獻二獻三獻立着各出北戶脱靴着東廊史申裝束之由參本以上着穩座一獻盃三獻召史生雅樂寮發物聲補部動座雅樂着座補頭見參六位一史獻盃事了略說江次第云考定廳事朝所宴座穩座等皆用列見儀そのやうすは選叙令考課令なとに詳也繁ゆへ略之　(ク)和名云揚氏語漢抄云裏餅中納煮合鵝鴨等子弁雜菜而方截名餅腹腹肴也　(ヤ)花紋ケモン花形やうに書たるを云なり　(マ)あなかち誰とさして云にあらさるへし只辨少納言は職事たるゆへに少納言と書成へし戯事にいふ義なれはなり　(ケ)兼倶自筆の姓氏錄與書には美麻那とかけり今いつれの家に此氏を傳へ侍るやらん存亡しらさる也　(フ)なりゆきも假に儲て云歟或云頭辨行成卿戯の興にし給ふ故自の名行成をなりゆきと戯れ書給ふにや云々

(サ)平氏家圖云

◎高棟王 賜平姓 大納言 ─ 惟範 中納言 ─ 時武王 右京大夫 權中納言 ─

─ 眞材 大宰大貳 ─ 珍村 美濃守 ─ ◎惟仲 從二位中納言宰人

補任弁系圖云平惟仲内藏頭大學頭勘解由長官參木左大辨中宮大夫太宰權帥中納言從二位寛弘二年五月廿四日於大宰府薨六十二母備中國賀河郡司女

榮花物語云東三條院の院にて御賀あり御屏風の歌ともいとさま〳〵にあれと物さはかしうて書とゝめす成にけり家のこの君達みな舞人にていみしうみかども行幸せさせ給ひ春宮もおはしまして殿

の家司ともみな喜したる中にも有國惟仲を大殿いみじきものに思召たり有國は左中辨惟仲は右中辨にて世のおほへ才なとも人よりことなる人々にてをの〳〵此度も加階していみしうめてたし（キ）惟仲也　職事補任云平惟仲正暦二年正月廿六日補内藏頭三月廿五日辭頭　（ユ）薄様ウスヤウ紙なり

（メ）橘氏系圖云

好古 従二大納言 ― 敏政 蔵人三河守 正五下中宮亮 ― 則光 従四上陸奥守 蔵人吉原祖

などてか、つかさえはしめたる六位爵に、しきの御さうしの、たつみのすみのつゐちのいたをせしぞ、さらに西東をもせよかし、きた五位もせよかしなどいふ事を、いひ出て、あぢきなき事どもを衣などにすゝろなる名どもを付けんいとあやし　きぬの名に、ほそながをはさもいひつべし、なぞかさみはしりなかといへかし、おのわらはのきるやうに、なぞからきぬはみしかききぬとこそいはめ、されと、それはもろこしの人の着ものなれば、うへのきぬのはかま、さいふべし、下かさねもよし、又おほくちながさよりはくちのひろければ、（ト）はかまいとあぢきなし、さ（チ）しぬきもなぞ、あしのきぬ、もしはさやうのものは、あしふくろなどもいへかしなど、よろずの事をいひのゝしるを、いであなかしかまし、（リ）いまはいはし　ね給ひぬといふ、いらへによゐの僧のいとわろからん、よ一夜こそなをのたまはめと、にくしとおもひたる聲さまにて、いひ出たりしこそ、おかしかりしにそへておどろかれしか　第七節前節物語のつゞきに女房達の物語のはしたなき事をいへり　などてかとは物語に不審する詞なり　つかさえはしめたる六位爵とは除目の儀式のはしまりし事を云なるべしつゐぢのいたをせしぞとは巽ノ垣ノ下ヨリ幕立ツ二版位一ニといふ義なり猶後書にしるす宜ク考レ之ヲまた五位もせよかしとは六位ばかり巽の方のつゐちの版位につき侍りて五位はしからざる事をいふなりこれらはみな物語の次手にとり〳〵にいひ慰心なり女房達の口々に物いひて批判あればはしたなきと云題にしるされたるなるべし　あぢきなき事ともとははしたなき物語をさしていふなり　衣キヌなどにすゝろなる名どもとは

則今いふ所のほそなかかさみからきぬなど也　ほそながとは直衣の後の長きものなり未通女のきるかり衣なり或は后女御なども着給ふ也　さもいひつべしとは名におふじて細長ものぞとなり　なぞがさみはしりながといへかしとは名にをふせぬ衣のさまなる由を云也かさみとは衣のうへにきるうすきもの也　上﨟わらはのきるものなり或は袖なくてうへに打かけきるほそながのやうに侍るゆへ今の詞にしりながといへかしとかけりなぞからきぬとは上はかりきて下は裳なる故に今の詞にみじかきぬとこそいはめといへり　さればそれはもろこしの人のきるものなれはとはからきぬといふ名を斷る義なりもろこし人のきるものなればから衣といふは理ぞとなり　うへのきぬのはかまさいふへしとはうへにきるものなれば名にしおふたる物ぞと也　下かさねもよしとはこれも名にしをふたる物ぞとなり　大くちとはこれ名にをふしてよきとなりされども大口袴と云名あぢきなきとなりさしぬきもなぞ以下は是も着物のさまにおふせぬ名なる由を云なり　よろつの事をいひのゝしると

は色〳〵の物語せらるゝとなり　いでおなかしまし以下は同じ女房達の中よりもはやいね給へと申さるゝ義なり　いらへにとは又同じ女房の中より返答する心なり　よゐの僧のいとわろからんとは夜居の僧のかしましからんつれともいと興ある事なればなを終夜語給へとなり　にくしとは夜居の僧をも憚からず又夜一よいねずして語らんなどいふ心のはしたなきをにくしとおもふとなり　そへておとろかれしとは興さめはしたなき義なり

（◎）凡叙位除目の儀式は天事の肝要官家の故實なればたやすく沙汰しがたき者也今その胴貫をしらんとは思はゞ西宮北山等の諸家の記錄及び職者傳授を得て知べし今非業の沙汰は憚りあれはもらし侍りぬ見ん人心を得て味いふべし云々　（ロ）汗衫は大帷とも云なり冬は白く夏は紅なり袖單小袷なとあり夏は汗衫と云なり則上﨟のうへの衣なり西宮記云裝束條云女親王對面總角著汗衫半臂下襲表袴玉帶等云々唐令云諸給時服夏則汗衫一領云々前にも往々に見えたり　（ハ）唐衣　上下通し用ゆるなりすそに裳を別に着する故上はかりの服な

れは短きなり別にも見えたり （ニ）袍を服する時表袴をも着するをうへのきぬのはかまと云也 則ち表袴の事成べし 名目抄云表袴縵服束帶小忌皆用之餝抄云表袴夏冬無差別禁色人有文宿老人文藤圓若人霰窠文藏人頭聽禁色之殿上人五位六位藏人等着霰文晴時浮文常堅文云々西宮記云表袴古時無堅文近代多有之帝王及童子不用堅文雖下臈掲焉之日尚用浮文袴也 胡曹抄云表袴事縮線綾霰地窠文帝王及童子必用之公卿壯年人聽禁色人常用之又一日晴宿老人着用裏十五歲以前濃打堅文藤丸公卿聽禁色人常用之裏紅打染袴織物或唐綾唐綺等其文多窠霰藤丸文隨下臈着用其色不定常平絹非參議以下常所着也表白裏紅打也云々

（ホ）名目抄云下襲裾也 凡下重の色は夏冬變れり則ち下重の尻を裾と云なり上古はわかたざりしを中古より別にして下重と裾とをわかつなり 餝抄云下襲寸法事假令大臣一丈四五尺大納言一丈二三尺中納言一丈二尺參議八尺四位七尺[illegible]但近年無存寸法之人只以長爲先且又隨人高下可斟酌其長短歟後堀河院御時雖被定寸法不拘但法歟檢非違使別當已下裾可載先例也應德次第曰尻長四尺余御裝束被減云々建久御記曰御下襲尻四尺余御裝束被減云々略時節の色着用の次第等西宮記胡曹抄に見えたり （ヘ）和名抄云大口袴唐令云靡善樂舞兩人白系布大口袴和名於保久知乃八賀萬一云表袴 名目抄云大口生平絹幼年用白長年紅將貫得近日過老着精強大口 餝抄云大口紅生平絹或紅張但近代不用也宿老之人或白張絹云々 西宮記云袙大口袴表袴中隔上下可同色不得交紅茜色若人可用茜色也 うら表ともに紅の平絹を用ゆるなり （ト）西宮記云布袴儀例上着近年法官人着之檢非違使別當着布袴而近代或以綾絹爲袴未知可否愚按近年法官着布袴謂表衣下襲許之歟別當着謂布之袴歟此中可非一同可被尋之 或云此布袴の事を和文にいふにはあらざるべし下袴の事なるべし云々 餝抄云下袴宿老之人白下袴壯年用紅下袴云々 （チ）和名抄云奴袴和名佐師奴枳波加萬 餝抄云奴袴色淺深隨年隨官可斟酌也禁色之人織物不然

人志々羅平絹紕年之人夏着太交薄物或鳥多須岐等生織物白交奴袴高貴之人着之自十月維摩會比至四月御禊前用練指貫自四月御禊日至十月十日比生指貫云々

(一)故殿の御ために、月ごとの十日、(二)御經佛供養せさせ給ひしを、九月十日、職の御さうしにてせさせ給ふ上達部殿上人いとおほかり、淸範(三)講師にて、とくことゞもかなしければ、ことにものゝあはれふかゝるまじきわかき人も、皆なくめり、はてゝ(五)酒などのみ詩ずむしなどするに、(四)頭中將齋信の君、月秋として身いまいつくにかといふことを、うち出し給へりしかば、いみじうめでたし、いかでかはおもひ出給ひけん、おはします所にわけまいるほどに、立出させ給ひて、めでたしな、いみじうけうのことにいひたる事にこそあれと、のたまはすれは、それをけいしにとて、物も見さして參り侍りつるなり、なをいとめだくこそおもひ侍れと聞えさすれば、ましてさおぼゆらんとおほせらるゝ、わざとよびもいで、(六)をのつからあふ所にては、(四)などかまろを、まつにちかくはからひ給はぬ、さすかににくしなど、おもひたるさまにはあらずとしりたるを、いとあやしくなん、さばかり年比になりぬる(七)とくいの、うとくてやむはなし　殿上などに、あけくれなきおりもあらば、何事をおもひ出にせんとの給へば、さらなりかたかるべき事にもあらぬをさもあらん後には、えほめたてまつらざらんか、口おしきなり、うへの御前なとにて、(八)やくとあつまりて、ほめ聞ゆるに、(九)いかでかたゞおほせかし、かたはらいたく、こゝろのおに出きて、いひにくゝ侍なんものをといへば、わらひて、などさる人しもよそめよりほかに、ほむるたぐひおほかれとの給ふ、それがにくからすこそあらぬ男も女も、けちかき人をかたひきおもふ人の、いさゝかあしき事をいへば、はらたちなどするか、わびしうおぼゆなりといへばたのもしげなの事やとのたまふもおかし

第八節故殿の御忌物にて哀なる折ふしに若人々酒のみ詩をずしなどはしたなき事を書り其中にも齊信朝臣は時に應じて　いみじき詩を誦せられし事をかけり故殿とは　道隆公なり、十日とは長德元年四月十日に薨し給ふゆゑ月ごとの十日に佛事を修し給ふとなり　則中宮定子の勤給

ふ義なり清範講師前に見えたり　はてゝとは佛事果てなり　酒のみ詩ずむしとは止福の後のありさまを云ふなり此酒呑詩ずむしといふ詞の内に若人々のはしたなきさま侍へし文には見えね共其心あらはなり又此次の詩の評判の所にも其趣侍べし月秋として身いまいづくにかとは詩の詞なりいみじうめでたしとは地の詞なり　おはします所にとは中宮御座のかたへ啓せんとてまいり給ふ義なり立出させ給ひてとは中宮の立出て齊信朝臣に仰かけらるゝ義なり　めでたしな以下中宮の御詞なり　それを以下は齊信の詞なり其由を存知よりて啓しに參りに侍るとなり　なをいとめでたくこそおもひ侍れと聞えさすればとは御前の女房達などの挨拶の心にて地の詞なり心をかろく見るべし猶々目出度聞へ侍ると中宮齊信の中を挨拶の心なり　ましてさおぼゆらんとは中宮の御詞なりわさと以下は常に齊信の敬の遠さかり給ふを中宮の此詩の興に因て事の次手に恨み給ふ心成べし御從父兄弟なからなれはかく親おはす成べしわざとよびもいでとは御せうそこなき由の御恨なり

をのつからとはわざとせうそこなくはせめて自然と逢所にてはまめやかにかたらひ給ふべき事など也さすかににくしなどおもひたるさまにはあらずとしりたるとは是も中宮の詞なりかく疎々しくおはしませどもさすかにくみ疎給ふふりにはあらぬと辨へ知ながら年比の隔心に遠々しくおはしませはあやしう思召となり　とくいのうとくてやむはなしとは日比親き人中絶し疎々敷成て止果る道はあるまじきとなりなきおりもあらばとは殿上にまうのほり給ふ事なくは何ことをおもひ出にせんや幸殿上にのほりおはせしに何とて疎々しく侍るぞと仰せらるゝ義なり是迄中宮の齊信を恨み給ふ御詞なり　さらなり以下齊信の御いらへなりさやうの故には侍らす殊更にかしこき御位なれは敬み遠さかり奉るといふ義なり　かたかるべきにもあらずとは仰のごとくせうそこ申上る事かたかるべきことに侍らぬとなり　さもあらん後にはとは親しうせうそこつかうまつりてあらん後にはといふ義なりえほめたてまつらざらんか口をしきなりとは人のおもはくを探て中宮の御事をほめ申事など

成まじきとなり　うへの御前とはみかどの御前なりいかでかたゞおぼせかしとは中宮の御事ほめたてまつるを何となうたゞほめ奉るとばかりみかどにも人々もおぼせよかしとおもふ義なり　かたはらいたくこゝろのおにいできてとはほめ奉る内にかたはらいたう氣味あしく人をうたがひさぐる惡心出くるとなり是迄齊信の御せうそこ申上ぬゆゑを斷給ふ詞なり　わらひてとは地の詞なり　なとさる人しも以下は中宮の御詞なり何とさやうの人もといふ義なり　よそめとは人の噂大底なみにほむるはよそめよりほむる義なりよそ目より外とは大底の外に下心ある義成べし　それがにくからすこそあらめとは下心ありてほむる人も有べけれ共それをにくしと聞とがむる人あるまじとなり　男も女もけちかき以下は齊信の詞なりけちかきとはしたしき心をいふなり　いさゝかあしき事いへばとはかたひきする人がけちかゝらぬうとき方の事を聊あしさまにいへばはら立などするによりけちかきやうにせうそこ申上ぬとなり　たのもしげなの事やとは中宮の仰なり齊信の其申されやうの分にては理がつまらねばたのもしうなきとなり　又云かたひきなとする人によそへていはるゝは賴まれぬと云心成べし

（一）故殿とは道隆公なり　（二）扶桑略記云長德元年四月六日壬午關白正二位藤原道隆依レ病入道年卅三中宮並東宮女御行二啓彼里第一廿一日丁亥子尅入道關白藤原道隆薨二南院一　扶桑略記の說如レ此亦紹運錄並公卿補任などには十日に薨去の由載せられたり又系圖には十四日に薨去と有いつれも難レ決歟其中略記の說支干迄を記し侍る故其說宜からんか然共清少納言此殿の姬君に仕へし人なれは十日と書きたる義も捨かたし但本文のまゝ十日と心得をくべし　（三）清範律師　前見ゆ　（四）齊信の傳前に見ゆ　職事補任云從四位上藤齊信正曆五年八月廿八日補二右近中將一長德二年四月廿四日任二參木一中將如レ元　（五）本朝文粹十四云爲二謙德公修二報恩善一願文　管三品　嗟呼人命不レ定吾生難レ知彼金谷醉レ花之地花每レ春匂而主不レ歸南樓翫之人月與レ秋期而身何去況寵深者思又深榮甚者悲又甚云々上下略　朗詠には金谷と云より何去と云迄を

誦するなり文の心を明めん爲上下の詞をしるすなり　(六八)眞帆マホ　前に注す　(◎)いせ物語にあま雲のよそにも人の成行かさすかに目には見ゆる物から　(七)源語類聚云得意知音といふ心なり(八)同云やくとは所役してなり役義に結あつまる義なり　或本にやゝトアリ漸歟　(九)心のおに讓德公　我爲にうとき心の付からにかつは心のおにも見えけり　物うたかひしとやかくとさがなき事を思ひめくらするを心の鬼と云なり經にも面貌似テ菩薩ニ心ハ如シ夜叉ノ云へり

頭辨のしきに參り給ひて、物がたりなどし給ふに、夜いとふけぬ、あす御ものいみなるにこもるべければうしになりなばあしかりなんとて、參り給ひぬ、つとめて(イ)藏人所のかうや(ロ)紙引かさねて、後のあしたはのこりおほかるこゝちなんする、夜をとをして、むかし物語も聞えあかさんとせしを、鷄のこゑにもよほされてといといみじうきよけに、うらうへに事おほくかき給へる、いとめでたし、御かへりに、いと夜ふかく侍りける鳥の聲は、(ハ)まうさうくんのにやと聞えたれば、立歸、まうさうくんのにはとりは、かんこくくわんをひらきて、三千の客わつかにされりといふは、相坂の關の事なりとあれば、(ニ)夜をこめて(ホ)鳥のそらね(◎)ははかるとも、世にあふさかの關はゆるさじ、心かしこき關守侍るめれと聞ゆ、たちかへり、(ヘ)相坂は人こえやすき關なれば鳥もなかねどあけて待とか、とありし文どもを、はじめのは、(ト)僧都の君のぬかさへつきてとり給ひき、後〳〵のは、御前にてさで相坂の歌はよみへされて、返しもせずなりたる、いとわろしとわらはせ給ふ、さてそのふみは、殿上人みな見てしはとのたまへば、まことにおぼしけりとは、これにてこそしられぬれ、めでたき事など人のいひつたへぬは、かひなきわざぞかし、また見くるしければ、御文はいみしくかくして、人に露見せ侍らぬこゝろざしのほどをくらぶるに、ひとしうこそはといへば、かう物(チ)おもひしりていふこそ、猶人々にはにずおもへど思ひくまなく、あしうしたりなど、例の女のやうにいはんとこそ、おもひつるにとて、いみじう笑給ふこはなぞ、よろこびをこそ聞えめなどいふ、丸か文をかくし給ひける、又なをうれしき事や、いかにこゝろうくつらからし、いまよりもなを、たのみきこ

えんなとの給ひて、後に經房の中將、頭辨はいみじうほめ給ふとはしりたりや、一日のつゐでに、ありし事などわたり給ふ、おもふ人々にほめらるゝは、いみじくうれしなど、まめやかにの給ふもおかし、うれしき事も、ふたつにてこそかは、ほめ給ふなるに又おもふ人の中に侍りけるをなどいへば、それはめづらしう、今の事のやうにも、よろこび給ふかなとの給ふ　第九節前の物忌のつゞきにしきにおはします時の事をかけり頭辨と少納言の歌よまれし事それを又殿上にて沙汰侍し事などしるせり　頭辨とは行成卿なり　しきにまいり給ひてとは中宮御はします職の御曹司にまいりて也　夜いといふけぬとは頭辨のこゝろ也　あす御物いみとは內の御物忌成べし　こもるべければとは御佛にこもり給ふ義成べし　つとめてとはあけの晨なり頭辨の心なり　藏人所　かうや紙　おの／＼次書にしるす　後のあしたとは後朝なり夜部の事をしたふ趣を紙屋帋に述しるさるゝ義なり　のこりおほかるとは夜部の物語の興を殘多く思ふとなり　鷄の聲にもよほされてとは丑になりなばあしかりなんとて夜部の歸給ふ事を云義なり　いといみじう以下は地の詞なり　御かへりにとは少納言方より頭辨への御返事なり　まうさうくんのにやとは頭辨の鷄の聲にもよほされてとの給ひし下心を少納言の聞得て故事をいひ顯はされたり　まうさうくんの鷄はかんこくわんをひらきて以下は　頭辨の使にいひおこし給詞なり言その孟嘗君の鷄が鳴て函谷關を通りしといふ下心は別の義に非ず只爰許の相坂の關を越てあひかたらはんと戯れいひおこし給ふ義なり相坂の關とは世の人目を憚る心にいへり　とあればとは如此侍るかへしにとなり少納言の詞なり　夜をこめて此歌少納言の秀逸世になべて知所なり心も前書の通あきらかなりたとひ函谷の關はゆるし通すともそなたの下心にの給ふ相坂の關は中／＼世間にゆるすまじと云心成べし　心かしこき關守侍るめれとは歌の心をうけし文の詞なりかしこき世人なれば假令孟嘗君ほどの智謀有其中／＼ゆるすまじきぞと也　立歸とは又使が來りてなり　あふ坂は此歌頭辨の詠なり心は鷄が鳴ぬ間は通さぬ關さへ有に相坂の關は鷄鳴ぬ內も通り侍

るなれば尤(イト)心やすき事ぞとなり　文どもとは此歌の後にまたよみかはせし言の侍りしと見えたりはじめのとは此両首の歌なるべし　僧都の君とは隆圓僧都前に見えたり　ぬかをさへとは戴敬などして取給ふ心なり　のち〳〵のとは此歌の後の歌なるべし秀歌ならねば書とゞめぬ心なるべし　御前にてさでとは此両首の後の歌文共は御前にさうでかくしをき給ひてとなり　相坂の歌はよみへされて以下は御前にてわらはせ給ふ義なり　さて其文とは後〳〵のはといひし詞のごとく後によみし歌文の詞などなりそれを初は見ぬ由の給ひて相坂の歌の後はよみへされたるとは笑はせ給ひしか頓てあかして相坂の歌後にもまだ有し文をみなみつるぞとの給ふ義なりまことにおほしけり以下少納言のこゝろなり後にもまたことのはの有しをまことにおぼしめししれりとはあかし仰られたるにてこそしるれとなりめでたき以下は少納言のこゝろを地のことばに云なり歌も人のうへも　めでたきことはいひつたへても甲斐あることぞとなり　まだ見くるしければとは後〳〵のは少納言心に不足におもひ藏(カクシ)たるとなり　こゝろさしの程とはめでたき事をのこし見すると不足なるをかくしたると情のほどひとしからんとなり　かう物思ひしり以下はわらひし人々の心なり　猶人々にはにずとはなみ〳〵ならぬぞと兼ておもひしれ共となり思ひくまなく以下は同じくわらひし人々の斷(コトハリ)の詞なりおもひわくるくまもなく侍べれはにやよみへされて侍るはと例の並(ナミ)〳〵の女のやうにいひ笑はん事ぞとあかし興じ給ふ義なり　こはなぞとは以下少納言の詞なりこは何ぞかくしてさやうにの給ふを心うくつらからんや身にとりてはよろこびにてこそ侍れとなりすなはちつゞきに丸か文をかくし給ひけるうれしきなどいふ文勢よく味はふべし　いまよりもなをたのみきこえんとはあしき歌文などをいよ〳〵かくして人に見せ給ふまじと頭辨の少納言へ頼み聞え給ふ心成べし　の給ひて後にとは御前の人々が頭辨の頼み聞え給ふ由をかたりの給ふとなり初は經房頭辨なとのいみしうほめひけらかし給ふを少納言不足の由申されしかば頭辨も實もと思召いまより後たのみ聞えんとの給ひし後にこ

そ初いみじうほめのゝしり給ふとははかりしられたれとなり　ありし事などかたり給ふとは世の中にありふれし事又少納言の身のうへにあり過し事などを御前にて御物語あるとなり或又人々寄合給ふ時頭辨の語給ふと見ても通すべし又經房の物語とも可なるべし思ふ人に以下は物語の詞なり心あきらかなりうれしき事もふたつにてとは少納言の詞なり世間なみにほむるとおもふ人のほむるこそうれしけれと也　それはめつらしう以下は頭辨なとの詞なり少納言の詞をとがめてそれはめつらしう今更のやうにの給ふかなもとより實やかに思ふゆへほむるものを日比はおもはで今更思ひ入ほむるやうによろこび聞え給かなと云義なりこれら凡たがひの思ひ寄の不二相似一義いへば彼題のはしたなき物といふ意を含みたると見えたりよく〳〵題の意を考て和文を見わくべきこと肝要なり

(十)藤氏家譜ニ云ク

○伊尹 謙德公 ―― 義孝 母老四上 惠子女王 ―― 行成 母中納言源保光女

公卿補任ニ云藤行成故太政大臣伊尹公孫　但爲レ子右少將義孝一男母中納言源保光卿女長保三年八月廿三日任二右大辨一大和權守等如レ元藏人頭　大鏡ニ云今の侍從大納言行成卿世の手本とのゝしり給ふは此殿の御おのこゝ云々また地下におはせし時藏人頭に也給ふなれいとめつらしきことよな其比は源民部卿殿は職事までおはしますに上達部になり給ひければ一條院此つきには又たれかなるべきト問はせ給ひければ行成なんまかり成べき人に候とさうさせ給ひけるを地下のものはいかゝ有へからんとの給はせければいとやんごとなきものに候地下などおほしはゞからせ給ふまじゆくすゑにもおほやけに何事にもつかまつらんにたへたるものになんかくやうなる人を御らんしわかぬは世のためあしき事に侍りせんあくをわきまへおはしませはこそ人に心つかひはつかうまつれ此きはになさせ給はさらんはいとおしき事にこそさふらはめと申させ給ひければ道理の事といひなから成給ひにしそかしおほかたむかしは前の頭の擧によりて後の頭はなる事にて侍しなり下略

(イ)藏人所前に見ゆ　(ロ)源語類聚云紙屋紙なり

昔北野紙屋河にてすき初たる故の名なり玉かつらにかうや紙と有も同事なり（△）史記列傳第十五云孟嘗君名文姓田氏文之父曰靖郭君田嬰云々初田嬰有子四十餘人其賤妾有子名文孟嘗君招致諸侯賓客及亡人有罪者皆歸孟嘗君齊湣王二十五年復卒使孟嘗君入秦々昭王即以孟嘗君爲秦相人或說秦昭王曰孟嘗君賢而又齊族也今相秦必先齊而後秦々其危矣於是秦昭王乃止囚孟嘗君謀欲殺之孟嘗君使人抵昭王幸姬求解幸姬曰妾願得君狐白裘此時孟嘗君有一狐白裘直千金天下無双入秦獻之昭王更無他裘孟嘗君患之徧問客莫能對最下坐有能爲狗盜者曰臣能得狐白裘乃夜爲狗以入秦宮藏中取所獻狐白裘至以獻秦王幸姬々々爲言昭王々々釋孟嘗君孟嘗君得出即馳去更封傳變名姓以出關夜半至函谷關秦昭王後悔出孟嘗君求之已去即使人馳傳逐之孟嘗君至關々法鷄鳴而出客孟嘗君恐追至客之居下坐者有能爲鷄鳴而鷄盡鳴遂發傳出出如食頃秦追果至關已後孟嘗君出乃還略（ニ）後拾遺云大納

言行成物語なとし侍けるに內の御物忌にこもれはとていそきかへりてつとめて鳥の聲にもよほされてといひをこせて侍けれは夜ふかかりける鳥の聲は函谷關の事にやといひにつかはしたりけるを立かへり是は逢坂に侍とあれはよめる　清少納言

夜を籠て鳥のそらねははかるともよにあふ坂の關はゆるさし　玄旨說云はかるとはたばかる心也逢坂の關はゆるさしとは逢事をゆるさしとなり惣の心は明なり扨函谷關と相坂とをやすらかに一首によみ出ける事上手のしわざなり古歌にもおほし伊勢物語にはよにあふ事かたきといへる歟宗祇の說凡人の歌を見るに我心に一道面白きと思ふ心にしめて其外に心をやらぬ故に古人の歌のいかめかしきをもかたはらになすもの也されはわかいひ出る事も道廣からす侍にやそのほと〳〵にめくらして道のたゝすまひをおもふべしとぞ承りし云々（ホ）凡逢坂に鷄をよみならはす事は四境祭の事より初るとなり　奥義抄云よの中さはかしき時四境祭とて帝王のし給ふ事なり庭鳥にゆふをつけて四の關に

いたりてする祭なりあふ坂は其一の關なり云々四境とは東は相坂南立田北は有乳西は穴生四關とは相坂鈴鹿龍田須磨也須磨の秡は神供海入鈴鹿は鹿に付て放つ逢坂田龍田は鷄也　袖中抄云逢坂の夕付鳥にあらはこそ君か行衛を鳴〳〵も見め顯昭云夕付鳥とはには鳥を云なりよの中さはかしき時四境祭とておほやけのせさせ給ふに鷄に木綿をつけて四方の關にいたりて祭る也逢坂の東の關なれはかく讀り云々　右逢坂に鷄をよむ因緣かくのことし　(〇)後撰奧義抄云「天の戸をあけぬ〳〵といひなして空明しつる鳥の聲かな　これはもろこしに孟嘗君といひける人おほやけにたかひ奉りて隣國ゝにけて行けるによなかばかり函谷關にいたりぬ彼關は鷄の聲を聞て後に關の戸をはあくるところにてよふかくいつへきやうもなかりけれはあひしたかへるものゝ中に鷄の聲まねふ人のありけるしてなかせたりけれはあけぬ也とて關の戸をあけたるよりにけて行にける事のあるを思ひてよめる也　この後撰歌そらねとよみ初し和歌にも證歌にも成侍へけれは書加しなり　(ヘ)相坂は人こへやすき世間流布の公任家集に見えす若公任集に廣略の本有歟抑又家集にもれたる歌歟博覽の人辨へ知べし師說には公任歌にまがひなきと云々　(ト)僧都の隆圓僧都なり系圖傳記前に見えたり道隆公の子中宮定子の御兄弟なり　(チ)おもむくまなきとはおもふかひなといふ心なり源氏園卷にもおもひくまなくと書り　(リ)經房の系圖前に見えたり

(ヌ)頭辨とは行成卿なり系圖前に見えたり

五月ばかりに、月もなくいとくらき夜、女房やさふらひ給ふと、聲〳〵していへば、出て見よ例ならずいふは誰ぞと仰らるれは出てこはたそおどろ〳〵しう(ヲ)きはやかなるはといふに、物もいはで、みすをもたげて、そよろとさし入を(ワ)くれ竹の枝なりけり、おいこの君にこそといひたるを、(カ)聞て、いざやこれ殿上に行てかたらむとて中將、(ヨ)新中將、六位どもなど有けるはいぬ、頭辨はとま(タ)り給ひて、あやしくいぬるものともかな、御前の竹を折て歌よまんとしつるをしきに參りて、おなじくは、女ばうなどよびて出てをといひてきつるを、くれ竹の名をいとくいはれて、いぬるこそおかしけれ、たれがをしへをしりて

人のなべてしるべくもあらぬ事をばいふぞなどの給へば、竹の名どもしらぬものもなまめかしとやおぼしつらんといへば、まことぞえしらじなどのたまふまめことなどいひあはせてゐ給へるに、(レ)此君とせうすといふ(ソ)詩を誦して(ツ)又あつまりきたれば、殿上にていひぎしつるほゐもなくては、などかへり給ひぬるぞ、いとあやしくこそありつれとの給へば、さることは何のいらへをかせん、いと中〳〵ならん、殿上にてもいひのゝしりつれば、うへも聞召て、けうぜさせ給ひつるとかたる、(ネ)辨もろともに、かへす〳〵おなじことをずむして、いとおかしがれば、人々出て見る、とり〳〵にものどもいひかはして、かへるとてなをおなじことをもろ聲にずんじて左(ナ)衛門の陣に入まで聞ゆ、つとめていととく少納言の命婦といふか、御文まいらせたるに、此事をけいしたれば、(ラ)しもなるをめして、さる事やありしととはせ給へば、しらず何ともおもはでいひ出侍しを行成(ユキナリ)朝臣のとりなしたるにや侍らんと申せば、とりなすとてもと、うちゑませ給へり、たれがことをも、殿上人ほめけりときかせ給ふをば、さいはるゝ人をよろこばせ給ふ

もおかし　第十節少納言くれ竹の事につゐて此君などいふ詩の心を申されしを殿上にもうへにもほめ興し給ふ事をかけり少納言心には初よりさまで興を催さんとにはあらず只假初(カリソメ)に申されしをうへ殊更に興し給ふかわが心とははしたなく侍りし由なり是も前のごとく人の心とわが心と不㆓相似合㆒義歟　こゑ〳〵してとは頭辨中將新中將などの音信らるゝ義なりこれは中宮の御はします御曹司にての事成べし　出てみよ以下は中宮定子の少納言に仰付らるゝ義なり　出てこはたそとは少納言の出て尋らるゝ心也　物もいはでとは頭辨中將新中將などのさし入給ふ事を云なり　くれ竹の枝なりけりとは少納言詞なり御簾をもたげてそよろとさし入たるをくれ竹の技といひしなり　おいごの君とは頭辨の事成べし兼家公の爲には甥孫(オトマゴ)なり　いざや以下は中將新中將などの詞なり頭辨はとまり給ひてとは其儘直宿(トノヰ)に留りおはしましてとなり　あやしくいぬるものともかな以下は頭辨の詞なり歌よまんとしつるとは歌よまんとおもひまうけ誘引せしにとなりしきにまいりてとは中宮御座の曹司

に行て女房達も誘引(イサナヒ)てとも〳〵に歌よまむと也くれ竹の名をいとゝくいはれてとは少納言にまうけし事をとく察せられて本意なくおもひ中將の歸られしとなり　たれかをしへ以下は頭辨の詞なり此竹の技を折歌よまんとまうけし事人のしらぬ事なるをいかにしてとくしり給ふぞと問ひ給ふ義なり　竹の名どもしらぬものも以上少納言の詞なり此竹の名ほとの事しらぬ者をもなまめかしき人と思召かそれほどの事しらぬ人は侍らじと云心なりまことぞえしらじとは頭辨の詞なり竹を折歌よまんとまうけし事誠にたれもしるましとなり　是則頭辨の心は竹を折歌よまんとまうけし事を人はしらじとの給ふ少納言の心は只竹の名を此君といふ事を人はしらじをとの給ふ心得られしかの趣不二相似寄一はしたなき義なり也まめことゝは實の事なり頭辨のまうけ給ひし歌よまんとありし實事を語りあらはし給ふとなり　又あつまりきたればとは初の中將などの又來り給ふとなり殿上にて以下は中將に對して頭辨のの給ふ詞なり　さることには何のいらへをかせむとは中將の詞なり少納言のくれ竹の技と申されし詞にはいか成答をかすべき更に及がたくて立歸り殿上にても語り侍し由物語せらるゝなり　辨もろともにとは頭辨中將もろ共に此君といふ詩など吟唱するなり　おかしがれはとは中將達の歸しを笑ひ侍る義なり　人々出て見るとは御内の人々何事をか興ずらんと出て見る由なり　とり〳〵にものともいひかはしてかへるとは種々の挨拶物事いひおほせて立歸となり　なをおなしことゝは竹の詩を誦してなり　左衛門陣に入までとは詩を誦する聲が左衛門陣に行つく迄聞えしとなり　つとめてとは翌朝なり　少納言の命婦とは清少納言にはあらす別人なり命婦とは女官の名なり　御文まいらせたるとは少納言の命婦よりまいらせたる心成べし　此事とは則前の次第なり　しもなるを召てとは少納言のつぼねにあられしを中宮よりめして問はせ給ふとなり　しらずとは少納言の御答なり歌の事御まうけ共しらずたゞ竹の事のみ申侍しを頭辨行成朝臣のよく取成(トリナシ)て申上(アゲ)られつらんとなり　とりなすとても以下は中宮の御詞なり假令(タトヘ)取成(ナス)とてもまづよく思ひより侍り

しとて咲せ給ふなり　誰がことをもとは誰が事をしも殿上人達のほむると御心もとなく聞せ給へばさいはるゝ其方の事よと中宮の喜せ給ふとなり凡當節におゐて題のはしたなきといふ義文の內往々見え侍るなり又少納言は行成の取成にやといひて謙退し中宮は亦さいはるゝ人をと喜び給ふ是上下の徳義所謂君子有レ義といふの類成べし
(ヲ)そよそよろいつもしつかなる義なりひそかなるも同事なり　(ワ)和名類聚云笛竹漢語抄云吳竹也和語云久禮大介似レ葦而節茂葉滋者也　(カ)中將　經房歟系圖前に見えたり　(ヨ)新中將　公信歟系圖前に見えたり是まさしき殿の勢なり爲光公の御子兼家公の勢なり　(タ)順徳院御抄云東庭竹臺近代木工寮役歟天徳內匠寮作ニ吳竹架一これらをさして御前の竹といへる成へし　(レ)本朝文粹十一藤篤茂賦ニ修竹冬青一云凡竹之爲レ物也藍羅前レ葉碧玉抽レ竿晉騎兵參軍王子猷種而稱ニ此君一唐太子賓客白樂天愛而爲ニ我友一上下略　朗詠には晉騎兵と云より吾友と云迄をうたふなり今文の心のたすけと思ひくわしくしるすなり又事文類聚云王徽之字子猷云々嘗借ニ居空宅中便令レ栽レ竹或問レ之徽之但嘯詠指レ竹曰何可ニ一日無ニ此君一耶　(ソ)期キシチギルト讀なり　約束する事を云也　(ツ)本意ホヰ　(ネ)辨　前に見ゆ　(ナ)左衛門の陣前にあり
(ラ)しもとは淸少納言の局に有時を云なり

(ム)圓融院の御はての年、みな人御ぶくぬきなどして、あはれなる事を、おほやけよりはじめて、院の人も(ウ)花のころもになどいひけん世の御事など、思ひいづるに、雨のいたうふる日、藤三位のつほねに、みのむしのやうなるわらはの、おほきなる木の、しろきに、たて文をつけて、これたてまつらんといひければ、いづこよりぞ、けふあす御物忌なれば、御しとみもまいらぬぞとて、しもはたてたる蔀のかみより入て、さなんとはきかせたてまつらず、物いみなればえみずとて、かみにつゐさしてをきたるを、つとめて手あらひて、その卷數とこひて、ふしおがみてあけたれば、くるみいろといふ色紙のあつごえたるを、あやしとみて、あけもて行ば、らう法師のいみじけなるが手にて、
(ノ)これをたにかたみと思ふに都には、葉かへやしつる

しゐしはのそで、とかきたり、あさましくねたかりけるわざかな。たれかしたるにかあらん、仁和寺僧正のにやとおもへど、よもかゝる事のたまはじ、なをたれならん。藤大納言ぞかの院の別當におはせしかば、そのしたまへる事なめり、これをうへの御前宮などに、とうきこしめさせばやとおもふに、いと心もとなけれど、なをおそろしういひたる物忌をしはてんとねんじくらして、又つとめて、藤大納言の御もとに、此御返しをしてさしをかせたればすなはち又返事して、をかせ給へりけり　第十一節圓融院の御物忌の内いづくよりともなく歌贈られしを誰か彼かとせし人を推量すれどもあたらざる事のはしたなき事をかけり　圓融院とは村上天皇第五皇子御母は中宮安子六十二代にあたらせ給ふ安和二年九月に御即位永觀二年八月に讓二位于華山帝一正暦二年二月十二日崩し給ふ御年卅三なを委別書に記す　御はての年とは諒闇のはつる年の事なり正暦三年の比なり　院の人もとは圓融院にみやつかへし人々の事成べし此比は冷泉花山圓融の三院おはしませ共圓融院は院中にして政を聞召などし給へはおほやけよりはじめて院の人もと書る文勢圓融院の宮つかへ人を云成べしみのむしのやうなるわらはとは次下にいふ所の刀自が供の者なり雨に蓑着て來るさまを云也　おほきなる木のしろきとは椎柴の枝に歌を付て持て來る成べしそれはいづこよりぞ以下は藤三位のめしつかふ女房などの請取義なり　けふあす御物忌とは今明日にかぎる御物いみなればと也　しとみもまいらぬとはひらかぬ事なりさなんとはきかせたてまつらでとは披露せぬとなり　物いみなればえみずとは御文を只今御物忌なれば見給はぬといひて先使斗かへす心なりかみにつゐさしてとは蔀のうへに挿てをくとなり　つとめてとは又のあした也　その卷數とこひてとは結願し給へなど僧綱を請する心也　ふしおがみあけたればとは結願廻向など過て蔀をあけつればとなり　あやしみてとは今初て見付しとなり　あけもてゆけばとは件の色紙をひらきみればと也　これをたに此歌一條院の御製なり意は圓融院の御別をかなしみ給ふ餘御ぶくのあきゆくをも餘波を

しく思召御製なり　これをたにとは鈍色の御服をめし諒闇にこもりましますをさす成べし　かたみとおもふにとは此方にはせめて是こそ故院の御かたみと思ひしたひ奉るにとなり　都にはとは九重大内をさし給ふ心なりいつくともなき里山家などよりこしたるやうにもてなし給ふゆゑなり　葉がへやしつるとは服をぬぎ色ある衣をや着つらんとなり　しゐしばの袖とは二三位のうへの衣を椎柴しらかしなどにてそむる故の給ふ成べし　とかきたり以下は藤三位などの此歌を見ていへる詞なり　仁和寺僧正とは寛朝僧正成べし則圓融寺の僧綱にておはせしなり此僧正やし給ふかと疑ふ義なり　藤大納言とは顯光卿成べし此比は中納言にて侍しかど近時大納言に成給ふゆへ大納言と書たる成べし則其時別當にておはせしなり　そのしたまへるとは此別當のし給ふかと疑ふ也是不㆓相似合㆒はしたなき事也　うへの御前宮などにとはみかと或は敦康宮などなり　いと心もとなけれどとは最早人の啓しやしつらんと心もとなきとなり　みな藤三位の心成べし　なをおそろしういひたる物いみとはをもく〳〵しう謹むべき物忌などいふ心なり　又つとめてとは又次のあしたなり　藤大納言のもとには藤大納言も同じ所に此度の御服にこもりましませば其ほとりにをくとなり　又返事してをかせ給へりとは再報なり藤大納言はし給はねど藤三位の返しを內へ奉り給ふやらん再御かへし侍りし由なり院の別當なればうちつけてし給ふらんとおもふに又御もとにをく返しにさへ再御返し侍れば藤大納言の所爲と究めおもふも斷なり

（ヤ）大鏡云六十四代次のみかと圓融院天皇と申き御いみなもりひら是村上の御かとの第五王子也御母冷泉院の同じ腹におはします此みかと天德三年已未三月二日生れさせ給ふ此みかとの東宮にたゝせ給ふほとはいときゝにくゝいみしき事どもこそ侍れなこれは皆人のしろしめしたるなれは事もなかし止め侍りぬ安和二年己巳八月十三日にこそは位につかせ給ひけれ御歳十一とぞさて天祿三年壬申正月三日御元服御歳十四よをたもたせ給ふ事十五年腦ありて御出家法名こんからほうと申き正暦二年二月十二日うせさせ給ふ御歳三十三云々

榮花物語云院も入道せさせ給ひにしかば圓融院にすませ給へは云々　又云かゝるほとに圓融院の御腦ありていみしう世のゝしりたり云々日比有て正暦二年十二日にうせさせ給ひぬこゝらのとし比なれつかうまつりつる僧俗殿上人判官代泪をなかしまとひたりいはんかたなし　(マ)見果ぬ夢云かくて此圓融院の御さうそうむらさき野にてせさせ給その程の御ありさま思ひやるべしかくて月日も過もていきて正暦三年になりぬあはれにはかなき世になん二月には故院の御はてあるべければ天下いそきたり御はてなとせさせ給ひつよの中のうすにひなとはてゝ花の袂になりぬるもいとものゝはへ有さまなり　(ケ)古今哀傷部に「深草のみかとの御時に藏人の頭にて夜ひるなれつかうまつりけるを諒闇に成にければ更に世にもましらすしてひえの山にのほりてかしらおろしてけり其又の年皆人御ふくぬきてあるはかうふり給はりなと喜ひけるを聞てよめる　僧正遍昭「皆人は花の衣に成ぬなりこけの袂よかはきたにせよ　(フ)大鏡云栗田殿の女君は故一條院の御乳母の藤三位の腹にいてきおはしましたりと云々　道兼公の妾と見えたり系圖追而可考之又榮花物語にも傳あり　(コ)椎柴の枝なるべし(エ)承塵などの上に掩置心也　(テ)胡桃色クルミイロうら白くおもて香色也　(ア)後拾遺哀傷部に圓融院法皇うせさせ給ひて又の年の御はてのわさなとのころにやありけん内に侍ける御乳母の藤三位のつほねにくるみ色の紙におひ法しの手のまねをしてかきてさしいれさせ給ひける

一條院御製　「是をたに形見と思ふを都にははかへやしつるしゐ柴の袖

(サ)源家譜云

敦實親王 一品式部卿號仁和寺 天暦四年二月三日出家
- 雅信 號土御門 右大臣
- 寛信
- 重信
- 寛朝 仁和寺大僧正東寺一長者法務號廣澤僧正

榮花物語云仁和寺の僧正と聞ゆるは土御門の源氏の大臣の御はらからにおはす仁和寺のみこと聞えける御子におはす云々又或説ニ師輔公の御子の深覺僧正にや侍らむ此人も仁和寺の法務僧正にて其う

へ歌人にて侍れは此人をさす成へし　(キ)公卿補任を案するに正暦二年中納言從二位藤顯光九月廿一日左衛門督爲使別當云々如此侍れ共使の別當とある故顯光にてあるましき歟尚宜考之　(エ)疾(トウ トク)早同　(メ)念ネンジ忍同　堪忍なり　ねんしわひといふはこらへかぬる事なり

それをふたつながらとりて、いそき參りて、かゝる事なん侍しと、うへもおはします御前にてかたり申給ふを、(三)宮はいとつれなく御覽じて、藤大納言の手のさまにはあらで、法師にこそあめれとのたまはすれば、さはこはたれがしわざにか、(シ)すき〳〵しき上達部僧(ヱ)綱なとは、たれかはある、それにやかれにやなど、(ヒ)おほめきゆかしがり給ふ、うへこのわたりに見えしにこそは、いとよくにためれと、うちほゝゑませ給ひて、今一すぢ、御づしのもとなりけるをとり出させ給へれは、いであな心う、これおぼされよ、あなかしらいたや、いかで聞侍らんと、たゝせめにせめ申て、うらみ聞(キコエ)て、わらひ給ふに、やう〳〵おほせられ(モ)出て、御使にいきたりけるおにわらはゝ、(モ)大盤所の刀自といふものゝ供なりけるを、小兵衛がかたらひ出したるにやありけんなと、おほせらるれは、宮もわらはせ給ふを、引ゆるがしたてまつりて、などかくはからはせおはします、猶うたがひもなく、手をうちあらひて、ふしおかみ侍し事よ、わらひねたがりゐ給へるさまもいとほこりかに、(ハ)あひぎやうづきておかし、さてうへの大盤所にも、わらひのゝしりてつぼねにおりて、此わらはたつね出て、文取いれし人に見すればそれにこそ侍めれといふ、たれが文を、たれがとらせしぞといへば、(ニ)しれ〳〵とうちゑみて、ともかくもいはで、はしりけり、藤大納言後に聞て笑ひ興じ給ひけり　前につゞひて見るべし十一節の内なり　それをふたつながらとは初の歌も後の又の返しもともにと也　いそき參りてとは藤三位の内へ參りて啓せらるゝなり、宮はいとつれなく御覽じてとはそれとあかし給はずよそ〳〵しうもてなし給ふ義なり　藤大納言の手のさまにはあらで以下は宮の御詞成べし　さばこはたれがしわざにか以下藤三位の詞也　うへ此わたりに見えしにこそ以下はみかどの御詞なりみかどの御厨子の内なる文を取出し給ひて此手など似たりやと仰らる

ゝ義なり　いであなこゝろう以下は藤三位の詞なりあなこゝろうとは歌を贈り給ふ方しれぬを切に思はるゝ義也　おぼされよとはわか心をおぼしやらせ給ひて御聞されよとなり　あなかしらいたや以下も同じ心也　やう／＼おほせられ出てとはみかとのありのまゝに仰らるゝ義なり　御使にいきたり以下は前の使の事をも仰らるゝ心なり　刀自が供とは刀自の召つるゝ下童ぞとなり　小兵衛がかたらひ出したるとは小兵衛といひし女房の申つゐでやられしとなり　宮もわらはせ給ふとは初はよそ／＼しうつらくの給ひしかどみかどのあかさせ給ゆへ宮も今はとも／＼にわらはせ給ふとなり引ゆるがし奉りとは御ぞなど引ゆるがし奉る義なり　かくはからせとは如此謀せ給ふとうらみ奉る心也猶疑がひもなく以下は藤三位の御製を拜せられしやうすを啓せらるゝなり　わらひねたがり以下は地の詞成べし此わらはとは前のおにわらは也
文とりいれし人とは藤三位の本にて文をうけ取し人なり　見すればとは彼使のおにわらはを見すればとなり　それにこそとは文請取し人が件の御使にてさふらふといふ義なり　たれか文以下はおにわらはに問ひ給ふ義なり藤三位の問はせらるゝ成べし　しれ／＼とうちゑみとはおにわらはもおかしがり去行義也　藤大納言以下は地の詞成べし
重て此事を聞ておかしがり給ふとなり此詞を味はふに文をば藤大納言の奉りて書給ふと見えたり凡此節は歌の作者のしれぬを彼か是かと推量共あたらざる事のはしたなき心をいへり　右此段は詞長して心深段なれば十一節に分て注侍るいづれも／＼題のはしたなき物と書出したる心を失はずして見るべきこと肝要なるべし

(ミ)春宮をさす成へし或敦康親王歟　(シ)次第スキ／＼シキ方便同前に見ゆ　(ヱ)令義解云僧綱者謂僧正僧都律師也云々　玄蕃式云凡僧綱者必簡其人奉勅定之云々凡僧綱勘知大寺雜事云々　三代實錄云貞觀六年二月十六日制定僧綱位階云々
(ヒ)おほつかなき心なり　(モ)順德院御抄云刀自御膳宿臺所各別也衣唐衣躰也結中但近代只衣結中着唐衣是一向御膳役者也臺所女官御裝束物沙汰不可口入供御但近日兼刀自　(セ)小兵衛

前見ゆ　(ス)ほがらかになど云も同し心なり
(一)愚癡シレシレかしこくつゝみ顔もせておろかに打あらはるゝを世にしれ〳〵しきといふなり

六十五段　(三)つれ〴〵なるもの、(二)所さりたる物いみ、目おりぬすご六、(四)除目につかさえぬ人の家　雨打降たるはましてつれ〴〵なり　この段は詞おほからずして心もかくれたる所なし　つれ〳〵成物とは當段の題なりしづかにさびしき心なり　所さりたるものいみ方違或しきの御物忌寺社などに籠る事なりこれさひしき心也　目おりぬ双六とは双六に賽の目おもふやうにおりざるはさびしき物なりむかふの相手はいさみすゝめどもこなたにはつれ〳〵なる心おもひやるべし除目につかさえぬ人の家とは叙爵にもれたる人の家物しつかにさびしき事思ひやるべし前にも　十四段除目につかさえぬ人の家とかけりそれは又すさまじき心にいへりいつれも〳〵やるせなき心おもひやるべし　雨うちふりたるましてつれ〳〵なりとはたゞにも雨天は閑寂にましてつかさえぬ家にはいよ〳〵物がなしうもさびしうも侍らんとなり

(二)徒草ツレ〳〵閑寂同　兼好法師かつれ〳〵草に近代末書多しそれらにつれ〳〵と云義委く記せり今注するに不及歟　(三)づれ〳〵に寺社なとにこもりたるもおかしといひ又卅二段に物いみの事かけるなと皆此段よりながれ出たる也　(四)除目の次第まへに見えたりつかさえぬ人の家の心も前十四段に注し侍る也　(五)此心を「つれ〳〵もとなかめに我は成にけりつれなき空にふる心地して

六十六段　つれ〴〵なぐさむもの、(イ)物がたり、(ロ)碁双六、(ハ)三四ばかりの兒の、物おかしういふ、又いとちいさきちごの物がたりしたるか、ゑみなどしたる、菓物、男のうちさるかひ物よくいふか來るに物忌なれどいれつかし　此段も心あきらかなり　つれ〳〵なぐさむ物とは當段の題也　心別義なし　物がたりとは談話也　碁双六別義なし三四はかりの兒とは恩愛の中のみならす情ふかき人の心には是にしく有べからす　又いとちいさき兒とは同じ比の兒と見てもくるしからじ又二歳ばかりの兒の事なるべし　男のうちさるかひとはうちは文章の詞なり

さるかひはさうある甲斐なり男の男らしくしほらしう物などうちいひたるはさる甲斐あるといふ義也　物忌なれどいれつかしとは物忌にはなべての人をいれねどもさるかひある人ならばよびいれて語まほしきとなり幸物忌のつれ〴〵を慰の心成べし

（イ）貴賤親疎をへたてず武きもやさしきも心を慰つれ〴〵を忘るゝは物語にしくはあらし　（ロ）和名抄云博物志云堯造二圍棊一音期字亦棊世間云五一云舜之所レ造也中興書云圍棊堯舜以敎二愚子一也

（ハ）同云兼名苑云双六子名六采今按簙奕是也簙音博俗云須久呂久萬葉に「一二の目のみもあらす五六三四さへありけり双六のさい　說文云博局戲六箸十二棊古者烏曹作レ博尹文子曰博塞二關寶之宜得二周遍路一

〔六十七段〕　とり所なきもの、　容にくげに心あしき人、みそひめのぬれたる、これいみじうわろきこといひたると、よろづの人にくむなる事とていまとゞむべきにもあらず、又あと火のひばしといふ事などてか世になきことならねば、みな人しりたらん、實書出人の見るべき事にはあらねどこの草紙を見るべきものとおもはざりしかば、あやしき事をもにくき事をも、たゞおもはんことのかぎりをかゝんとて、　ありしなり

（▲）此段は詞おほからず侍れども、しれがたき事侍る歟　とり所なきものとは例のごとく當段の題なり用ひられぬ心成べし容にくげに心あしき人とは容醜きのみならず心惡きは誠にとり所なかるべし、みそひめのぬれたるとは未考之　これとは文の詞なり　いみしうわろき事とは人のうへのわろき事などふと何となくいひ過してはとりとゞむべきやうなきとなり又云いみじうわろきとは此草紙をさす　いひたるとは此草紙はわろき事いひたるとて假令諸人が惡共いま止べきにあらで書しるすと也　いまとゞむべきにあらずとはやむべきにあらずとなり　又あと火のひばしとは今俗にいふ葬送の門火の事成べし　ひばしとはそれを燒火箸成べし　なき事ならねとは無事に非ずといふ心なり世に有ふれし事と云義なり　實書出とは此草紙に書出なり　人の見るべきにあらねばとは興すべき事ならねば人の玩べき事な

らすとなり　此さうし以下は卑下の心なり　あやしき事とは前のこれいみじうわろきと云に應じてかけり　にくき事とはよろづの人にくむなる事と云に應じてかけり　たゞ思はん事のかぎりとは題に取所なきと書出せしに任せ其心を思ひ寄まま書しるしたるとなり

（へ）或云糊をひめともいふなり御衣にひめ付しを雨なとにぬれし心にやとり所なき物と云題の義成べし　（ケ　周禮云喪設二門燎一　顔氏家云喪出之日間前燃レ火云々　これ本文にいふあと火の事なり今も傳へて民間にする事なり又日本には神世むかしより女神の火神に焦れて神去り給ひしゆへを用ひてする事なり是等の奥義神道におゐて口傳のある事なり今略之　（▲）終の段云此さうしは目に見え心におもふ事を人やは見んすると思てつれ〴〵なるまとひの程書あつめたるにあひなく人のためひんなきいひすくしなとしつべき所々あれはきようかくしたり云々心ひとつにをのづから思ふ事をたはふれに書付たれば物にたちまじり人なみ〳〵なるべきみゝを聞へき物かはとおもひしにはつかしきなともみる人はのたまふなればいとあやしくぞあるやげにそれもことはり人のにくむをもよしといひほむるをもあしといふはこゝろの程こそをしはかられたゝ人に見えけんぞねたきや

此詞と見合て心得へし

（一）世繼の物語云おぼしき事いはぬはげにぞはらふくるゝ心地しけるかゝればこそむかしの人はものいはまほしくなればあなをほりてはいひいれ侍りけめとおほへ侍る云々此心とひとしき文勢なり

清少納言枕草紙抄巻九

六十八段　なを世にめでたきもの、臨時祭(イ)のおまへ(ロ)ばかりの事は、何事にかあらん、試樂(ハ)もいとおかし、春(ニ)は空のけしき、のどかにてうらうらとあるに、清涼殿の御まへの庭にかもりつかさ(ホ)のたゝみどもをしきて、使(ヘ)は北面、舞人は御まへのかたに、これらはひが事にもあらん、所の衆(ト)どもつゐかさねどもとりて、前ごとにすへわたし、べいしう(チ)も、其日は御前に出いるぞかし、公卿(リ)殿上人はかはるがはるさかづき取て、はてにはやくかひといふ物、男などのせんだにうたてあるを、御前に女ぞ出てとりける、おもひかけず人やあらんともしらぬに、ひた(ヌ)きやよりさし出ておほくとらんとさはくものは、中々うちこぼして、あつかふほどに、かろらかにふと取出ぬるものには、おくれてかしこき、おさ(ル)め殿に火焼屋をして、とり入るこそおかしけれ、かむもりつかさの者とも、疊とるやおそきと、主殿寮の宮人ども、手ごとにはゝきをとり、すなごならす、

(ヲ)承香殿のまへのほどに、笛を吹たてひやうしうちてあそぶをとくいでこなんと待に、うとは(ワ)まうたひて、(カ)竹のませのもとにあゆみ出て、(ヨ)みことうちたるほどなど、いかにせんとぞおぼゆるや、(タ)一の舞のいとうるはしく、袖をあはせて、二人はしり出て西にむかひてたちぬ、つぎつぎいつるに、あしぶみをひやうしにあはせては、(レ)はんひのをつくろい、かうぶりきぬのくびなどつくろひてあやもなきこまやまなどうたひて舞たちたるは、すべていみじくめでたし、(ソ)おほびれなとまふは、日ひとひみるともあくまじきを、(ツ)果ぬるこそいと口おしけれど、(ネ)又あるべしとおもふはたのもしきにみことかきかへして此たびやがて、竹のうしろからまひ出てぬぎたれつる樣(ナ)どものなまめかしさは、いみしくこそあれかひねりの下がさねみだれあひて、こなたかなたにわたりなどしたるいで更にいへばよのつねなり、此たびは又もあるまじければにや、いみじくこそはてなんことは、口おしけれ上達部などもつゞきて出給ひぬれば、いとさうざうしう、口おしきに　こゝより下のうちたるもおかしといふ迄當段の內なり詞おほきのみならず心も

簡省にして尤むつかしき段なり凡七節に分て釋し侍る見やすからんためなり　なを世にめてたきもの是は當段の題なり前にめでたき物と云段を擧し故になをと云成べしすへ迄此題のめでたき物といふ心をうけてみるべし以下七節の内此第一節は臨時祭の事をかけり　臨時の祭の御まへとは賀茂八幡を兼ていへり以下に賀茂の臨時祭侍れば先大綱を述る義なり　試樂とは八幡臨時祭の試樂なり前にしるし侍るなり　春は空のけしきのどかにてとは八幡祭の時分をいふなり三月なり清涼殿以下は御前の次第をしるせり委後書に載たり　これらはひがことにもあらんとは此臨時祭は將門亂逆を祈給ふ報賽にて凶例なる故めでたき段にしるすはひが事ならんとなり　所の衆とは藏人所の衆なり四五位藏人など壁のもとの地下に候して叄着のよしを奏し衡重を居る事あり　べいしうとは陪從なり使の人に供奉するものをいふなるべし　公卿殿上人はかはる〱さかづき取てとは三獻五獻の式例ありいづれも〱儀式後書に委舊記〻載侍る今非業の家しるべき事にあらざる故なり　はてにはやくかひといふ物以下は御前の儀式果さまにをのこわらは女などの物とも取捨事を云り其體のかまびすしきをかけり　かろらかにふと取出ぬるにはおくれてかしこきとはおほくとらんとひしめくものは却ておくれかろらかにそよろと取ものはかしこきと也　かんもりつかさとは掃部寮なり以下は掃部寮主殿寮の官人の役事をしるすなり　承香殿とは仁壽殿の北清涼殿よりはひがし此まへの際清涼殿の庭上にて舞あるなり舞はてぬれば此承香殿の馬道をへて建春門に出るなり　うとはまうたひて以下舞の始るやうをしるせり心明なり袖をあはせて二人はしり出てとは本末の舞人なり神樂に本末とて二度つゝ舞うたふ事侍るなり　つぎつきとは庭燎よりはじめ朝倉其駒までうたひまふゆへにいまつぎ〱いづるにと書り　あしぶみ以下は舞人の出さまによそほひつくろふ體をいふなり　おほびれとは大比禮なりおほひれかへしの舞なり　はてぬるこそいと口おしけれとはおほびれかへし果ぬればみな〱退出するなり　又あるべしとは還立の事也　みこときかへしてとは内裏へ

歸參して預り奉る御琴を先渡義なりかきかへしは舁還也此たびやかて竹のうしろからまひ出とは呉竹臺の下より舞人進出求子などまふなりいてさらにいへはよのつねなりとは此儀式をほむる詞也いとさう〳〵しう口おしきにとは臨時祭のはてしさまをいふなり是迄八幡の臨時祭なり口おしきにとに文字ををくは下の詞へうつる出要なれ其下には賀茂祭の事をいふ故第二節に分て註するなり

(イ)江次第云臨時祭起天慶五年四月廿七日石清水臨時祭平將門亂逆報賽也使播磨守源允明朝臣舞人十人歌曰新タル八幡ノ宮ノ石清水ユク末トヲク仕マツラン天祿二年三月八日臨時祭其以後每年祭之試樂前卅日調樂先二日試樂 諸社記云臨時祭之事朱雀院天慶五年四月十五日始之又云圓融院天祿元年祭之又云天祿二年三月八日亥卯始而八幡臨時祭事左近中將源忠清朝臣爲使云々 (ロ)江次第云下清涼殿東庇御簾孫廂南第三間供御座敷二色綾毯代其上立殿御倚子御座南間以南賛子敷幷長橋敷管圓座爲公卿座其長橋上第一圓座差退東敷之長橋南地二行敷黃端帖爲殿上人座押年中行事障子若后宮內親王參上給時押昆明池障子以御沓鞋置御膳棚舞人陪從參集樂所公卿候殿上藏人度々奏見參藏人奉御命出納召舞人陪從參集瀧口戶下主上出御着御々倚子藏人頭歸出殿上告御出成之由於公卿公卿着御前座殿上人自宣華門着座主上召人藏人頭徽音稱唯昇候依御氣色又徽音唯稱退下着淺履經侍臣座後幷長橋末又手渡御前到瀧口戶下告召成由於行事藏人飯經呉竹臺東入仁壽殿露臺自南第一間復座陪從自瀧口戶進入發物聲進寄栟櫚下舞人進寄呉竹臺若被仰舞者藏人頭奉仰渡御前如前舞二人進入露臺出自當御前間南北間進立御前舞八柏子次他舞人等次第相分進立駿河舞畢自上退到竹臺下紐右進出御前舞求子如前畢自下退舞人出畢陪從反歌退出公卿以下退略 同云又同云御前座事御裝束畢第三間立侍御倚子有打敷云々庭中裝束如式藏寮居衝重飯盒居之

(ハ)公事根源云試樂は調樂ともいへりまつ音樂をとゝのへこゝろむる心なり云々前にも注す (ニ)

江次第云岩清水臨時祭三月中午日有二二午一時用二下午一但除二國忌日一云々　（ホ）かもりと稱する事古語拾遺云掃守連遠祖天忍人命供奉陪侍作レ箒レ蟹仍常鋪設遂以爲二職號一曰二蟹守一今俗謂二之借者一彼詞之轉也　姓氏錄曰掃守首振魂命四世孫天忍人命之後也雄略天皇御代監二掃除一賜二姓掃守連一（ヘ）江次第云奉レ仰召レ使以下徒跣經二公卿座後幷二石橋一進自二庭中北一渡到二瀧口一仰二召由於行事藏人一更歸經二仁壽殿露臺內幷南第一間一飯出レ自二仙華門一使以下着レ座　（ト）同云一獻使料藏人頭勸レ盃雜色取二瓶子一陪從座五位藏人勸レ盃藏人所衆執二瓶子一　又曰大臣着二穩座一殿上五位二人取二衝重一居レ之　（チ）同云陪從座勸レ盃四位瓶子所衆第一陪從放レ盞之後勸レ盃早還箸下陪從發二歌笛聲一立二挿頭華臺一云々　（◉）錦貝ヤクカイ盆貝同　蜀江の錦に貝の紋あるを四角に切て椀飯饗膳等の下にしかるゝなりそれをやくかいと云なり　（リ）河海云火燒屋　炬舍　火爐同順和名　助鋪同　花鳥餘情云火炬小子二人あり山城國葛野の郡秦氏の童女をとる由延喜式にみえたり神供なとしたゝむる所なり

（ヌ）拾芥云納殿累代御物納レ之在二宜陽殿一恒例御物納二藏人所一綾綺殿紙御屏風在二仁壽殿一頭藏人雜色爲レ預以二藏人雜色出納小舍人一爲二預人一　（ル）江次第云藏寮撤二饌物等一掃部撤レ座主殿掃除　（ヲ）拾芥云承香殿仁壽殿北九間四面　（ワ）うたひ物なり　（カ）籬マセ笆同架同　竹臺の邊を過るよし江次第にみえたり・（ヨ）御琴を持練出たるをうちたると云なり　（タ）一の舞とは第一番の舞と云義なり江次第云一舞二人先進上臈者出レ自二露臺南四間一下臈者出レ自二第二間一拍子後次舞人亦如レ此一（ナ）半臂　前にみえたり　（レ）催馬樂云　初段　山城のこまのわたりの瓜つくりなよやらいしなやさいしなや瓜つくり〳〵われ　二段　瓜作りわれをほしといふいかにせんなよやらいしなやさいしなやいかにせん〳〵われ　三段　いかにせんなりやしなまし瓜たつまてにやらいしなやさいしなや瓜たつま瓜たつまてに　此歌をうたふなり又歌の義理は成恩寺殿の注侍れ共事しけゝれは略するなり（ソ）大比禮返　舞の曲なり　（ツ）昇歸カキカヘシ儀式　江次第六詳也　（ネ）搔練下襲　前に見えた

り
賀茂の臨時祭は、還立の御神樂なとにこそなぐさめらるれ、庭火の煙のほそうのぼりたるに、かぐらの笛の、面白ふわなゝきほそうふきすましたるに、歌の聲もいと哀れにいみしく面白く、さむくさえこほりて、うちたる衣もいとつめたう、扇もたる手のひゆるもおほえす、才男ともめして、とひきたるも、人長の心よげさなどこそいみじけれ、さとなる時はたゞわたるを見るに、あかねば御社まて行て見る折もあり、おほきなる木のもとに、車たてたれば、まつのけふりたなびきて、火のかけに、はんひのをぬきのつやも、晝よりはこよなくまさりて見ゆる、はしの板をふみならしつゝ、聲あはせてまふほどもいとおかしきに、水のながるゝおと、笛の聲などのあひたるはまことに、神もうれしとおぼしめすらんかし　第二節賀茂臨時祭のめてたきを書りかへりたちとは次日又内裏におゐてある儀式なり昨日の儀式に少ことなれ共大概同事なり賀茂の臨時祭にはもとより還立の儀侍れども八幡の臨時祭にはもとは還立の儀侍らず一條院の比にや行れけん此ゆへに今少納言八幡のにはいとさう／＼しう口おしき賀茂の臨時祭は還立の御神樂などにこそなぐさめらるれといへりよく前説の詞と當節の詞味はひつゞくべし　庭火の烟以下御まへのさまをかけり心いちしるし文章の幽艷なる事よく味はふべし　さむくとは十一月に有事なれは時節のやうすを云なり　扇もたる手とは舞人の事なり　才男とは舞の役人なり　人長とは樂人の中の頭をいふなりまふべき時刻になれば人長座を起て才男ども召て舞しむる也　さとなる時は以下地の心なり或は少納言自いふ心にも侍べしたゞわたるをみるとは里に侍れは内裡の儀式は見ずたゞわたるはかり見侍るとなり　あかねばとはわたるばかりにては飽足ぬゆへ御社迄行て見るとなり　御社とは賀茂の社なり　車とはいにしへはたゞ人も車に乘たるなり所謂物見車と云もの也　はんひのを衣のつやとは舞人のきらあるさまをいふ　はしの板とは賀茂神前の御橋也　水のなかるゝとは同じく神前の川水の事なり　笛の聲などのあひたるとは笛の音流水の響に相和したるとなり　神もうれしとは物の音の調和したるは神明佛陀も

感應あるよしなればいふなり

(ラ)諸社記云臨時祭宇多帝寛平三年十一月廿四日庚午日於二賀茂明神一有二走馬事一　勅使右兵衛督藤原高經奉二男廿人一參二上下社一歌舞　大鏡云又七はかりにや元慶六年はかりにや侍りけん式部卿宮の侍從と申ぞ寛平の天皇常に狩をこのませおはしましゝ御供にはしり參て侍り賀茂の堤のそこ〳〵なるに侍從殿鷹つかはせ玉ひていみしうけうにいらせ給へる程ににはかに霧立て世間くらかりて東西も覺えすくれのいぬるとやとおぼえてゆふの中にたふれふしてわなゝきまとひ候ほとに時中計や侍けん後にそいねれはかもの明神あらはれおはしまして侍從殿に物申させおはしましける程なりけりその詞世に日記しをかれて侍るなれは中々申さししろしめしたらんあはそかに申べきにも侍らす扨後六年はかり有て賀茂の臨時の祭はしまりけん位につかせおはしましゝ年そ覺え侍る其の日とりの日にて侍りけれはやかて霜月のはての酉の日にては侍るそ　公事根源には寛平元年十一月とあり又使は時平公と云々　儀式は江次第十巻に詳也今略之

(ム)江次第云今案還立儀至二近代一所レ行也但御前召二東遊等一事近代不レ行レ之但賀茂臨時祭還立有二庭燎御神樂等事一　(ツ)庭燎ニハヒ　神樂に庭燎燒事は神代の遺風也日本紀舊事紀等に詳也　(ヰ)神樂作法云和琴笛時笛カキ笙ノマヘハカタカキ笙ナル時篳篥音取ヲ吹云々　(ノ)笛はと云段に臨時祭の日いまた御前には出はてで物の後にてよこ笛をいみしう吹たてたるあな面白と聞まとふ程になから計よりうちそへて吹のほせたる程こそ唯いみじううるはし云々　(オ)十一月の比なれはさえこほるなり　(ク)才男サユノオ　前に見えたり　(ヤ)人長ニンチヤウ　前に見えたり　神樂作法には人長は天鈿女命始也云々　(マ)松明ツイマツ　(ケ)西宮抄云夫於二律遊一者用二平調一於二呂遊者一用二双調一至二他調一隨レ時用レ之但律呂遊以レ歌爲レ本樂曲相交反聲於二和琴一先常陸同音數度次甲斐各々獨唱二風俗等一也　(ケ)少將　勘物なし重て可考之

(フ)少將といひける人の年ごとに舞人にて、めてたきものにおもひしみけるになくなりて、(コ)上の御社の一の橋のもとにあなるをきけば、ゆゝしうせちに物おも

ひいれじとおもへど、なを此めでたき事をこそ、さらに、えおもひすつまじけれ、八幡の臨時の祭の名殘こそいとつれ〴〵なれ、などて、歸て又舞わざをせざりけん、さらはおかしからまし、祿をえて、うしろよりまかづるこそ口おしけれなどいふを、うへの御前に聞めして、あすかへりたらんあしで、まはせんなどおほせらるゝ、まことにやさふらふらん、さらばいかにめでたからんなど申、うれしがりて、宮の御前にも、なをぞまはせさせ玉へと、あつまりて申まどひしかば、その度かへりて舞しは、うれしかりし物かな、さしもやあらざらんと、うちたゆみつるに、舞人まへにめすを聞つけたる心地、物にあたるばかりさはぐも、いとものくるおしく、下にある人々、まどひのぼるさまこそ、人の臣者殿上人などのみるらんもしらず、もをかしらにうちかづきてのほるを、わらふもことはりなり　第三節なを前のつゞきに少將の舞人にていみじうめでたかりける事をかけり又八幡の臨時祭の還立の舞など始りしめでたき心をかけり　めでたきものに思ひしみけるとは少將の舞体を世の人めでたくおもひしみたると也　なく

なりてとは少將死して後に思ひ出す義也　上の御社とは上賀茂の社也　一のはしとは神前の橋也　そこにて翁のあるを聞ばと也　ゆゝしうせちに思ひいれじとは一のはしの本神の御前にてなき人の事などおもふはいま〳〵しきに切に思ひ入じと敬し侍る心なり　なをこのめでたき事とは少將のいにしへめでたきまひぶりは敬め共わすられぬとなり是まで少將の事をいへり　八幡以下は還立の事なり　などてか歸て又舞わざをせざりけんとは是則前にいひしごとくいにしへは八幡祭に還立なかりし義を云なり　さらば左あらば也還立あらばおもしろからんとなりからましのし文字清でよむべし又云からましのし文字濁ても一義侍る此時はさらばといふ詞されぱといふ義なりさればおもしろからずと云心なり　祿を得てうしろよりまかづるとは舞はなくてたゞ祿物ばかり給はりて退をいふなり女房達などの詞歟　うへの御前に聞しめしとはみかどの聞召して也　あす歸たらんあしてとは使舞人が歸參せば還立の舞をさせんと仰らるゝなり　まことにや以下女房連の詞也　宮とは中宮な

人給二人長一祿匹絹次各々退出す　(テ)物くるおしとはあやしきさまの物くるひのやう見え侍らんとなり夕顔にあな物くるおしの物おぢやといふも同しく物狂はしき義なり　(ア)釋名云上曰裙下曰裳袴のうへ着る裳なり此裳をきぬの袖かつきかとおもひとりちかへかつく義なり

故殿(サ)などおはしまさで、世中に事いでき、物さはがしくなりて、宮又内にもいらせ給はず、小二條(キ)といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里にゐたり、御前わたりおぼつかなさにぞ、猶えかくてはあるまじかりける、(ユ)左中將おはして物語し給ふ、けふは宮に參りたれば、いみじく物こそあはれなりつれ、女房のさうぞく、(メ)もからきぬなどの、折にあひたゆまず、おりしうてもさふらふかな、御簾のそばのあきたるより見いれつれば、八九人ばかり(ト)いでき、(ミ)朽葉のからきぬ、(シ)うす色のも、(エ)しをんはぎなど、おかしうゐなみたるかな、御前の草のいとたかきを、などか(モ)これはしげりて侍る、はらはせてこそといひ(ス)つれば、露をかせて御らんぜんとて、(セ)ことさらにと宰相の君の聲にて、いらへつるなり、

るべし　その度かへりてまひしはうれしかりしとはみかと仰のごとく還立の舞ありしとなり　さしもやあらんとはさでしもなり其まゝいにしへの通にてあるまじと思ふ義なり　聞つけたる心地とは女房達の心地也うれしうおもふ義なり　物にあたるばかりとはこれも女房達の喜さま也　下にある人々とは局或は里などに有し人の事なり　もをかしらにとは裳を上に着とするさまなり是いそきまどふ義をいへり

(ツ)上の社とは今の上賀茂なり　延喜式神名帳曰山城國愛宕郡賀茂別雷神社亦若雷云々　風土記曰可茂社稱可茂者日向曾之峯天降座神賀茂建角身命也神倭石余比古之御前立座而宿座大倭葛木山之峯自彼漸遷至山城國岡田之賀茂隨山城河下座葛野河與賀茂河所會至座迴見賀茂川而言雖狹小然石川淸川在仍名曰石川瀨見小川自彼川上座定座久我國之北山基從爾時名曰賀茂也々（下略尚下の神の段に有）　(コ)前に還立の所に委く見えたり　(ヱ)江次第云内藏寮以祿幸權昇立小板敷前次藏人頭以下取先使舞人次陪從内藏官

おかしくもおぼえつるかな、御里居(サトヰ)いと心うし、かゝる所にすまひゐせさせ給はんほどは、いみじき事ありとも、かならずさふらふべきものに、おぼしめされたるかひもなくなど、あまたいひつる、かたりきかせたてまつれとなめるかし、まいりて見給へ、あはれげなる所のさまかな、露臺(一)の前にうへられたりけるぼうたん(二)のからめきおかしき事などの給ふ、いさ人のにくしと思ひたりしかば、又にくゝ侍しかばといらへきこゆ、おいらか(三)にもとてわらひ給ふ、げに、いかならんとおもひまいらする御けしきにはあらで、さふらふ人達の、左大殿(四)のかたの人、しるすちにてありなど、さゝめきさしつどひて、物などいふに、しもよりまいるをみてはいひやみ、はなちた(五)てたるさまに見ならはすにくければ、まいれなどあるたびのおほせをも過して、げにひさしうなりにけるを、宮の辨(六)には只あなたかなたになして、そらことなども出くべし、例ならずおほせ事などもなくて、日比になれば、心ぼそくてうちながむるほどに、おさめ文をもてきたり、おまへより、左京(七)の君して忍びて給はせたりつるといひて、こゝにてさへひきしのぶもあまり也、人づての仰事にてあらぬなめりと、むねつぶれてあけたれば、紙にはものもかゝせ給はず、山吹(八)の花びらを、たゞ一(ヒトツ)つゝませ給へり、それに、いはで(九)おもふぞとばかりかゝせ給へるをみるもいといみじう、日比のたへま、おもひなげかれつる心もなぐさみてうれしきに、まつしるさまをおさめもうちまもりて、御前にはいかにもの、折ごとに、おぼし出聞えさせ給ふなる物をとて、たれもあやしき御ながゐとのみこそ侍るめれ、など(十)がまいらせ給はぬなどいひて、こゝなる所に、あからさまにまかりてまいらんといひて、いぬる、後に御返事かきてまいらせんとするに、此歌のもと、さらにわすれたりといとあやし、おなじふることといひながら、しらぬ人やはあること、もとに覺えながら、いひ出られぬはいかにぞやなどいふを、聞て、ちいさきわらはのまへにゐたるが、下行水(十一)のとこそ、申せと云たる、などてかくわすれつるならん、これにをしへらるゝもおかし

第四節宰相の君の折節にかなひたる歌の物語の事

又宮の御せうそこのいみじき事　或は小わらはのよく歌をおぼへし事などの折にあひてめでたき

由をかけり其次手に宮の思召入少納言身に對していみじう辱(カタチケナ)き心などをも述られたり末には又少納言宮の御かたへ參られしに宮御物語有し事などかゝれたり此際詞長ければ細に釋し侍る也よく心をつけて見るべし　故殿などおはしまさでとは道隆公薨し給ひて後と云義也　世中に事いでき物さはかしくなりてとは伊周(コレチカ)隆家(タカイヘ)など檢非違使に圍(カコ)まれ左遷(サセン)し給ふ時のありさま物惣に侍りしなり　宮又内にもいらせ給はすとは中宮并に一品の姫宮成べし中宮と伊周隆家とは御兄弟なるゆゑ中宮此忩(サワキ)につゐて内にもおはしまさぬと也中宮は伊周左遷の事を憤給ひて御髮をおろし給ひしなり　何ともなくてうたてありしとは何事共わきまへすうたてかりしとなり少納言の心也　御前わたりとは内わたりといふに同じ心也　左中將おはしましてとは清少納言方へおはしませし也　宮に參りたればとは中宮の御方へ左中將の參り給ひし事を語り給ふなり　いみじく物こそあはれなりとは中宮の御里すみのやうす也　女房のさうそく以下別義なし心あきらか也且文章の艶なる事は今更いふに不レ及

也見いれつればとは左中將の見いれ給ひしと也　八九人ばかりとは女房達八九人計色々の裝束にて中宮の御前にゐ給ふとなり　などかこれしげりて侍る以下左中將の草ふかきをとがめ給ふ心なり　露をかせて以下は宰相の君の詞也　御らんぜんとてとは中宮の御覽ぜんとてなり　おかしくもとはことさらにこそとよみし餘情を思召しよらせ給ふ故おかしと云也　御里居以下は中宮仰の趣を左中將の物語せらるゝなり　いみじき事ありともとはのかれがたき用あり共參べき事ぞと也少納言の事なり　おぼしめされたるかひもなくとは中宮の少納言をおぼしめす甲斐もなきと也　あまたいひつるとは女房達もとり〴〵申されしと也　かたりきかせたてまつれとなめるかしとは少納言かたにて物語せよと中宮の仰せられしと也　まいりて見給へとは少納言に左中將のの給ふ義なり　露臺の前に以下は又內裏の事を次手に物語し給ふ義なるべし露臺の前に牡丹など唐めかしうへさせ御覽せし折も侍りしか今世中物惣して御里住ひの心うき事よと何かの御物語有し義なり　いさ人のにくし

と思ひたりしとは少納言の詞成べし人とは內わたりの人々なりにくしとはうとみ隔つる義なり內におはします時に參り侍りしかば左大臣方(カタ)の人々のにくみ隔つる故に自(ミヅカラ)も又その方の人々をにくゝ思ひ侍りし故內へもまいらず宮の御前うと〳〵しうなり侍るとなり　いらへ聞ゆとは中將へ少納言返答なり　おいらかにもとてわらひ給ふとは中將のわらひ給ふ義なり　げにいかならん以下は少納言の詞なり前に惡(ニク)くてまいらぬといひし故を重て委く述る也　げにいかならんと思ひまいらする御けしきにはあらでとはうへの御けしきはその前と別にかはり給ふやうすも侍らねどゝなり　さふらふ人達とは內に伺候(シコウ)の人々なり是左大臣殿がたの人々なるべし　しるすぢにてとは伊周公と道長公と關白の事につゐて爭(アラソヒ)侍りしを道長公の家禮(ケライ)の人々が殿上にて噂する義なり　下よりまいるを見てはいひやみとは少納言里より參るを見ていひやむとなり少納言は中宮の女房道隆公伊周公の家の子也これに依て左大臣殿方の人隔心していひやみはなちたてたるさまするなり　にくけれどとは左大臣殿方の人々の振廻がにくければとなり　まいれとあるたびのおほせをも過してとは內におはします間の仰をも過してとなり　げにひさしうなりにけるとは內にましませしよりこのかた只今御里住ひまで實久(ゲニヒサ)しう成となり　宮の辨とは一品の宮の女房なり　そらごともいてくべしとは辨の內侍がそらごとなどをとりもちひられんとなり　例ならず以下は宮より御使をも下されぬゆへ心もとなく思ふよしをかゝれたり　おさめ文をもてきたりとは宮より少納言方へ給ふ御せうそこなり　御前より左京の君してとは御使のおさめが詞なり　こゝにてさへ忍ぶもあまりなりとは世のさはがしく道長公の威勢をはゞかりなどして里へ出てもしのぶとなり　人つての仰事にてあらぬとは少納言の心なり　あけたればとは御文を披きたればなり　山吹の花びらとは口なしの色と歌にもよみ侍ればいはでおもふもといふよせにおくいせ給ふ也　いはでおもふの歌後書にしるす也　日比のたへま以下は少納言の心を述らるゝなり　まづしるさまとは使のおさめがしるさま也少納言をうちまほりて語る

義なり　御前にはいかに以下はおさめが詞也心あきらかなり　こゝなる所にあからさまにまかりてまいらんとはおさめが近所へまだ少用ありとて行義也　御返事以下は少納言自の心を述らるゝ義也　此歌とはいはておもふぞとかゝせ給へる歌の本を忘しとなり　おなじふることといひながらとはなべて我人のいひふれし古言をしらぬ人やはあるとわが心をとがめし義なり　こゝもとにおぼえながらとは近比迄覺へつるを今はわすれしとなり今時も歌物語などするにある事なり　少きわらはとは少納言使者にや又むすめ侍しかばそれにもやあるべし　下行水のとは歌の本をかのわらはがいふなり是又勸學院のすゞめのごとく少納言に馴從ひたるしるし誠にやむごとなき義なり是迄宰相の君のことさらにこそと答給ふ歌の事宮の御せうそこの歌のこと又童女の歌覺えしことなどのいみじう侍りしをめでたく思ひて當段にかゝれし成べしよく題をふまへてみるべし

(サ)道隆公薨去の事長德元年四月十日の由前に委しく記す長德元年三月道隆公病により關白を辭して飾を落し奏聞して御子の伊周公を關白とし給ひていくほどもなく四月十日に薨し給ひし後道長公を東三條院の御はからひにて關白になし給道長公天事をほしひまゝにし給ふ故伊周公嫡流なればこゝろよからずおもひ叔姪の間宜しからざるなりあくる二年に花山院近國巡禮の後都へ歸りて鷹司の四の君といふ姫君に密通し給ふを伊周わが通ふ三の姉姫かとおもひ弟の中納言隆家卿にかたられしかば隆家謀て花山院をねらひ法皇の馬に乘り三の君の方へ通ひ給ふ道にて月の夜法皇を射奉りしかは其矢法皇御袖より腋に立たり法皇逆し給へ共此恥を思召し仰出されねとも此事世にかくれなかりき又大元の法は世に大切なる事を伊周此比おこなひ給ひしかば道長公此事を聞付是は女院關白等を調伏し給ふゆへなり其上花山院を射侍り罪科色々の事などを女院へ申ふくめて同じき四月に道長公のはからひとして源賴光同賴親等に禁中を守らしめ檢非違使をつかはして伊周隆家の宅を圍しめ其官位をけづり伊周を筑紫へ流し隆家を出雲へ流すなり中宮は同腹の御兄弟如此になり給ふをうらめしく思召て御髮をおろし給ふ此間の事物さはが

しう侍りしゆへ本文に事いでき物さはがしくなりてとかけるなり榮花物語大鏡扶桑略記等の書に廣く記され侍れども文長きゆへ其大略の心を爰に注し侍る也　(キ)小二條　拾芥云後賢卿家師尹公家御堂殿已下大二條殿傳領二條南東洞院東南北二町或號ニ山吹殿ト二條后高子宅又或本に小一條とあり拾芥云小一條近衛南洞院西師尹公家一云山吹殿清和天皇誕生所貞信公家云々小二條小一條共に山吹殿といふなれは今の本文兩説成べし但し小二條は傳本ごとくにうつし侍るなり　(ユ)左中將　此左中將は齊信卿なるべし公卿補任を按するに長德二年より長保四年の比迄齊信卿左中將を兼し給ふよしみえたり　(メ)もからきぬ　裳唐衣　(ミ)くちはのからきぬ　朽葉唐衣

(シ)うす色のも　薄色裳　(ヱ)しをん　紫苑

(ヒ)はき萩右いつれも裝束の事前に段々注し來れり故略之　(モ)後撰ニ　よみ人しらず「おほかたにをくしら露も今よりは心してこそ見るへかりけれ

(セ)大和物語に「鵲のわたせるはしの霜の上をよはにふみ別こと更にこそ此歌の心を取にはあらしたゞ詞の緣を取迄也こと更にこそとは態と云義なり　(ス)御前の女房達成へし　(一)露臺は內裡に大極殿の昇殿を露臺といふ又說關白の宿直にまいらせ給ふ所を云云々　玄旨法印說三ヶ重事に云宮廳の內也云々　續世繼に漢の文帝露臺を作れりと書しは史記漢孝文帝の露臺を作られし事を云成へし長阿含經にも見えたり畢竟やねのなき廊下或は參會の場を云と也　六花集に「玉敷の露の臺も時にあひて千代の初の秋は來にけり　(二)牡丹　ホウタン瓢簞　ホウタン兩說なり　(三)おいらか誠にと云心也人のいふことを實もとうけ聞と同じ心也　(四)左大殿　長德二年七月廿日藤道長轉ニ左大臣ニ今日正二位今日本位上﨟顯光任ニ右大臣ニ仍テ敘レ之廿一日大將如レ元八月九日辭ニ大將ヲ以ニ童六人ヲ爲ニ隨身ニ十月九日停レ童爲ニ左右近府生ニ各一人近衛各四人 公卿補任　(五)よそ目なとして其事にあらぬやうにもてなす義なり　(六)一品の宮につかへし女房なり小式部などゝ歌をよみかはせし人なるべし　(七)心もとなき物の段云こき殿とは閑院の太政大臣の女御とぞ聞ゆるその御方にうちふ

しといふものゝむすめ左京といひてさふらひけるを源中將かたらひてんなと人々わらふ比宮のしきにおはしましに參りて時々は御とのゐなとつかうまつるべけれどさるべきさまに女房なともてなし給はねはいと宮つかへをろかにさふらふ云々此左京といひし女房なるべし　(八)山吹の花ひらとは山吹色の口なしにしてなといふもいはておもふといふ義なりされば今の山吹の花びらもくちなしにしてと云義を此花ひらにふくめたるなり　齋宮家集ちかきほとに渡らせ給ひてをとつれきこえ給はねは女三宮より「隔けるけしきをみれば山吹の花心ともいひつへき哉　おほん返し　女御四宮「いはぬまをつゝみし程に口なしの色にやみえし山吹のはな「「山吹の花色衣ぬしやたれとへとこたへず口なしにして　これらも山吹を口なしといふ縁にとりなす心なり　(九)源氏引歌に「心には下行水のわきかへりいはでおもふぞいふにまされる此歌の第四の七文字をとりて山吹の花ひらに書給ふとなり　(十)白地アカラサマ假初なと云と同し心なり　(イ)下行水とは前の歌の第二の七文字なり此七文字をとなへてわらはか少納言へ告るとなり

御返事まいらせて、すこしほどへて參りたり、いかゞと、例よりはつゝましうて、御几帳にはたかくれたるを、あれはいま(十一)まいりかなと、わらはせ給ひて、にくき歌なれど、此折はさもいひつべかりけりとなん思ふを、見つけでは、しばしえこそなぐさむまじけれなどのた(十二)まはせて、かはりたる御けしきもなし、わらはにをしへられたりし事など、けいすれば　しみじくわらはせ給ひて、さる事ぞ、あまりあなづるふることは、(ロ)さもありぬべしなど仰られて、(ハ)つゐでに、人のなぞ〳〵あ(十三)はせしける所に、かたくなにはあらでさやうのことにらう〳〵しかりけるか、左の一番はをのれいはん、さおもひ給へなどたのむるに、さりともわろき事はいひ出じと、えりさたむるに、そのことばをきかんいかになどとふ、たゞまかせて物し給へ、さ申ていと口おしうはあらじといふを、げにとおしは(ニ)かる、日いとちかうなりぬれば、なを此事の給へ、ひさうにおなじ事もこそあれといふ(ホ)を、いさしらず、さらばなたのまれそなど、むづか

ればおぼつかなしと思ひながら、其日になりて、みなかた人の男女ゐわけて、殿上人など、よき人々おほくゐなみて、あはするに、左の一番にいみじうよういして、もてなしたるさまの、いかなる事をかいひいでけんと見えたれば、あなたの人もこなたの人も、心もとなくうちまもりて、なぞ〳〵といふほど、いと心もとなし、(天)天にはり弓といひ出たり、右の方の人は、いとけうありとおもひたるに、こなたの方の人は、物もおぼへず、あさましうなりて、いとにくゝあひぎやうなくて、あなたによりて、殊更にまけさせむとしけるをなどかた時のぼどに思ふに、右の人おこに思ひて、うちわらひて、やゝさらにしらずと口ひきたれて、さる、かうしかくるに、かづさせ〳〵とて、さゝせつ、(かい)いとあやしき事是しらぬ物誰かあらん、更ににがすましとろんずれと、しらずとはいひいでむは、などてまくるにならざらんとて、つぎ〳〵のも此人に論じかたせける、みじう人のしりたる事なれど、おぼえぬ事には、さこそはあれ、何しかはえしらずといひしと、後にうらみられて、つみさりける事を、語出させ給へば、おまへなるかぎりは、さはおもふべし、口おしくおもひけん此方

の人のこゝち、きこしめしたりけん、いかにゝくかりけんなどわらふ、是はわすれたる事かは、みな人しりたる事にや　是より第五節也宮の御方へ少納言まいられしかば宮御けしきめでたうおはしましていろ〳〵御物語ありし事を書けりすべて前の詞につゞけて見るべし　御返事まいらせてとは清少納言より宮への御返事奉り頓て宮の御方へ參られしと也　いかゝと例よりはつゝしましうとは少納言中絶して參られし故憚思ふとの義なり　あれはいま參りかな以下は宮の御詞なりいままいりとはうゐ〳〵しう見ゆるよし戯れ仰らるゝ義なり　にくき歌なれどゝは心には下行水の歌をさす也　此歌は思ひ寄ある歌なれば常躰の大かたなる人に書贈らんはにくき歌なれと此度其方(ソナタ)にはさもいひ贈りつべかりなんと思召となり　見つけではしばしえこそなぐさむましけれとは几帳にかくれしゆへ御對面なくては御心慰(ナグサ)まぬとなり　かはりたる御けしきもなしとは憚り思ふに似ず御情(ナサケ)の色まへ〳〵と同し事ぞとなり　わらはにをしへられし事とは前の歌の本をすれし時の事なり　少納

言御物語せる〻なり　さる事ぞあまりあなづることゝ以下は宮の御挨拶なり　つゐてに以下は宮の謎の御物語なり　らう〳〵しかりけるか謎に功者なる人がなり　在の一番とは功者成人の云義なり　さりとも以下は殘る人々の心なり功者めける人なればあしくはあるまじとみな〳〵思ふよしなり　其ことばをきかんとは謎の言を聞かんとなり　たゞまかせてとはわれにまかせ給へと功者人がいふ義なり　げにとおしはかるとは尤とみな〳〵同心しさもあらんなど思ふ義なり　日いとちかうなりぬればとは約束の日限ちかづくとなり　なを此事の給へとはみな〳〵彼座頭の謎を猶心もとなう聞まほしく思ふ義なり　ひさうにとは秘藏に思ふ謎も人の謎と同じやうの事侍らんとなり　いさしらず以下功者人の腹立などしていふ心なり　人の事はいざしらずわれは同じやうの謎などは更にいはじとなり　なたのまれそとはあやしくばわれをたのむべからずとなり　おぼつかなしとはみな〳〵覺束なうあやぶみながら是非なく約束の日になりぬとなり　みなかた人の男女ゐわけてとは

左座右座の方人兩方にゐわかれてなり　左の一番とは彼功者人のさまなり　あなたの人とは右方なり　こなたとは左味方也各互に心もとなく思ふとなり　天にはり弓といひ出たりとは功者人がいひし謎なり　右の方の人はいとけうありとはめづらかにむつかしき謎と思ふ義也　こなたの方の人は物もおぼえずあさましうとは左の味方の人は天にはり弓といふ謎をめづらしくおもはぬ由なり　あなたによりてとは味方の人々座頭をうとみ取去義なり　殊更にまけさせんとは彼座頭計負させんと思ふ義なり　右の人おこに思ひてとは左の人々のさまあしく思ふよし也　やゝしらずとは天にはり弓をえ解ぬと也　口ひきたれは開口して去義也　かうしかくるとは如此しかくると也　かづさせ〳〵とてさゝせつとは數おほくさせよとて味方より彼座頭に讓る義なりさゝせつさうでさせしと云心なりさ句を切るべし　いとあやしきことこれしらぬものたれかあらんとは地の詞なり　さらにに がすましとは口ひきたれて去人をとらへて是非とも解よとせむる心なり　しらずとはいひいでんは

以下の詞勝負を批判する義なりしらずとはは文字かろくみるべししらずとはいはずや既にしらずと云ひ出んは何とてか負にならざらんとなり　つぎ〳〵のも此人にとは後々の謎も此座頭殿にいよ〳〵讓り勝せるとなり是まで謎の御物語の首尾なり　いみじう以下は宮の御詞なりかくれなき謎をわすれて解ざりし事を引例として少納言が下行水の歌を忘れしをすくひて挨拶し給ふ也　何かはえしらずといひしとは彼負し人を同じ味方の人々がうらみさいなむとなり　語出させ給へばとは宮の御物語あればなり　おまへなるかぎりとは宮の御前の人々なり　さは思ふべし口おしく思ひけむとは負方にうらみ罪なむも斷也たれもさやうに思ひ口おしからんとなり　こなたの人の心ちとは左の方の人々の心なり前に座頭の人を蔑如あしく思ひし事を云也　聞召たりけんとは少納言の聞召してさぞにくう思召すらんと女房の挨拶の詞なるべし

是はわすれたる事かは以下物語の首尾を結んで今の歌の事に取合する義なり宮の詞なり又云地の詞なり

(◎)今郎　イマヽイリ　令義解延喜式等見ゆ　(ナ)前にありし下行水の歌の事也　(ロ)謎　ナゾ　(ハ)かたくな　頑愚と書也おろかにかたましきなり　(◎)良々　ラウ〳〵シおほとかにやはらき義也いま時おとなしく上らうめかしと云に同じ心也或又物功者なる心もあり　(ニ)秘藏　かくしつゝむ心也　(ホ)むつかり　しかる心也　(天)或人云天にはり弓とかけて月と解也又虹とも解へき歟といへり今案月と解しは尤也弓はり月ともいふなればそのよせある事也釋名云弦月月之半名也其形一旁曲一旁直若レ張二弓弦一也云々

正月十日、空いとくらふ雲もあつくみえながら、さすがに(○)日はいとけさやかに照たるに、ゑせもの丶家の後、(チ)あらはたけなどといふもの、土もうるはしうしいでたる、かたつかたはあをく、いまかたえ(ヌ)たはなをからぬ、桃の木わかだちて、いとしもとがちにさこくつや丶かにて、すはうの日かげに見えたるか、ほそやかなるわらはの、かりきぬはなげやりなどして、かみはうるはしきか、のぼりたれば、ひざは肥たるをのこゞ、半靴はきたる木の本に立て、我によき木

きりてゐてなどこふに、又髮おかしげなるわらはべの、あこめどもほころびがちにて、袴はなへたれど色などよき、うちきぎたる、三四人、卯づちの木のよからんきりておろせこゝにめすぞなどいひて、おろしたれば、はしりかひとりわき、われにおほくなどいふこそおかしけれ、くろきはかまきたる男、はしり來てこふに、まてなどいへば、木のもとに寄て、ひきゆるがすに、あやうがりて、さるのやうにかひつきて、をるもおかし梅などのなりたる折も、さやうにぞ有かし　第六節冬枯の晶苑などの春たちかへりうるはしうめでたきけしき宮人里人の寵愛する事をかけり　空いとくらふとは霞がちなる義也　雲もあつく見えとは雲の厚く立重るとなり　さすかに日はいとけさやかにとは空くらふ雲厚く侍れども冬の天のごとくにはあらで日も長閑に光そふと也　ゑせものとは凶者也世に直ふらぬ人を云ふなり　あらはたけ以下の文章その景色うつりてあらはにみるやうに侍るよく味はふべし　かたつかたはあをくとは陽氣をうけし方より先花はめぐむ故かたかたはあをきに陽氣の方は早つぼむと也

すはうのとは桃のつぼむ初は蘇芳色に見ゆる也　ほそやかなるわらは以下桃の枝などを手折事を云り　かりきぬはなげやりとは脫すて或は袖を脫かけなどする義也　ひざはこえたるとは膝の肥滿たる人のえのぼらぬ心をいへり　又髮おかしげなるわらはべ以下は宮つかへの小わらはの卯槌求むる事をいへり心別義なし　ほころびがちとはしどけなきさまをいふなり　卯槌の木とは桃の枝を用ゆるなり卯槌の事前にみえたりこゝにめすとは何がし殿の御用なると云義也　おろしたればとは何を切べしのぼりしわらはが卯槌の木を切ておろしたればとなり　はしりかひとりわきとは走寄われもわれもと取分る義也　くろきはかまきたる男とは長とはのぼりしわらはが云心なり　木の下によりての卯槌の木取に來る事をいふ也　までなどいへばとは件の男がぼりじわらはをおどしなどする心なり　あやうがりとはわらはの事也ひきゆるがすとは猿のごとく木に懷つくさるのやうにかひつきとは梅の實の生し時も義なり梅などのなりたる折とは是冬がれの物さびしきに引かへ如此侍ると也

空のけしきも苑のさまも艶にのどかなれば大人小兒も情さへうきたち殊更にめでたうみえし躰を其儘述し文也時節の風景をよく思ひ入て見るべし (チ)荒畠アラハタケ 曠畠同 (リ)枝の標の差出たるは笞杖などのやうに侍るなり俗に繼樹などいふ同じ心なり (ヌ)南枝北枝之梅開落已異と云の文勢なり (〇)うちき (〇)卯槌 をのゝ前に見えたり (ヌ)園就カヒツク 懐付同 いつれもいたきつく心なり (ル)居ヲル懐付てはたらかさる義なり 又下ヲル これは園就て木より降下心なり 又折ヲル、枝を手折義なり

清氣なる男の、双六を、日ひとひうちて、なをあかぬにや、見じ(ヨ)かきとうだいに火をあかくかゝげて、(◉)かたきのさい、こひせめて、とみにもいれねば、(タ)どうを盤のうへにたてゝ、まづかりきぬのくびの、かほにかゝれば、かた手してをし入て、いとこはからぬゑぼしをふりやりて、さいいみじうのろうとも、うちはづしてんやと心もどげなにうちまもりたるこそ、ほこりかにみゆれ、碁をやんごとなき人のうつとて、紐うちとき、ないがしろなるけしきに、ひろひをくに、をとりたる人のゐすまゐも、かしこまりたるけしきに、ごばんよりはすこしとをくて、をよびつゝ袖の下いまかた手にてひきやりつゝ、うちたるもおかし

第七節 碁双六を打荒おもふ事もなげにほこりかほなるさまの目出度見ゆるよしをかけり是詩歌の家の風下心に刺れとも上面はのどやかにいふ類なり 清氣なる男とは碁双六を樂み色好みの人のほこりか成さまを含云成へし 日ひとひうちなをあかぬにやとは荒心をいへり是一字の褒貶嚴重なる詞なり 火をあかくかゝげとは終夜も如レ此有事をこめし文也 こひせめてとはかまびすしくさいの目を乞義なり とみにもいれねばとは賽を手に持少時乞目を咒咀など相手がする義なり どうを盤のうへにたてゝとは筒を盤の上に置て其間に身づくろいするさまなり かほにかゝればとはかりきぬの衣紋をうしろへをしのけゑぼうしも頂へひきさげほこりかに尾籠千萬なる體をかけりさいみじうのろうともこは咒咀し賽なりともわが勢にて乞目を打出さんとなり こゝろもとなげにうちまもりとは互に挑み危む心也 ほこりかに見ゆ

れとは地の詞なり始終にかけて評判する心有所謂一字の褒貶也よく心を付べし　碁をやんごとなき人のうつとて以下は碁に荒人の事をいへり　紐うちときてとは　袴の紐など解尾籠なる義をいへり　ないがしろとは傍の人も相手をも蔑如に侮る義なり是れ碁にやん事なき人の上手顏して打荒む體なり　ひろいをくとは石を給置なり　をとりたるとは下手なる人なり　かしこまりたるとは　おそれたる心なり　袖の下いまかたてにてひきやりつゝとは及びこしに打により袖の下を用捨しかたてにて袖をひきかゝへてうつとなりその打さまのゐさましきはをとりたる故なればなり凡碁双六ともに打すさみ何心もなげに目出たう見ゆる由を書て下心にはけしからず誡めたる心見えたり

(ヨ)短檠ミジカキトモシノダイ　短灯臺同　(◉)かたき　きも字清濁兩義なりすんでよむときは敵と云義なり相手を指なりにごりてよむは樫の釆なり樫にて刻みし釆なり　釆サイ和名　賽サイ　催馬樂　(タ)筒ドウ　催馬樂大せりは國のさたもの小芹こそゆてゝもむまし是や此せんはむさんたの木のゆしの木のはんむしのかめの筒尾角の賽豹賽と兩めんかすめうけたる切とをし金はめはん木五六かへしの一六のさいや四三さいや　いにしへは如此色々物にて賽をせられしと見えたり

六十九段 (ラ)おそろしげなるもの、(ム)つるばみのかさ、やけたる所、(キ)水ふき、(ノ)ひし、髮おほかる男の首あらひてほすほど、栗のいが　此段は詞すくなうして心もあきらかなり　おそろしげなる物とは當段の題なり　つるはみのかさとは橡の實を蓋へる殼也殼に角侍る故といふと也　やけたる所とは回祿の地也少納言現在に内裡度々炎上侍りし也　水ふきとは芡實といふものなり和名を水ふきといふなり髮おほかる男の首あらひてほすとは男は海老わげに結ふか常の姿なりそれを亂れさはく體はおそろしきとなり又女をもいふべきに男をのみいふことはいかゞはと思ふに女房のすべらかせしは常の姿なりされば髮のこぼれかゝりともいひ亂れ髮のめでたきなど古來いひならはせば女とはいはで只男とのみいふ成べし

(ラ)恐懼　オソロシ　(ム)本草綱目云橡實橡斗皀

斗櫟梂柞子芧栩櫟柞木也實名ニ橡斗ー皂斗謂ニ其斗ー剡剜象レ斗可ニ以染レ皂也其葉如ニ槠葉ニ而文理皆斜旬ニ四五月ー開レ花如ニ栗花ー黄色結レ實如ニ荔枝核ー而有レ尖其蔕有レ斗包ニ其半ー截ニ其仁ー如ニ老蓮肉ー（ウ）

清少納言存生の間に有し燒亡を考るに永延元年に都火災あり正曆元年に西寺燒けたり同四年に禪林寺燒同五年に高野大搭燒長德元年に攝政內大臣の二條の第幷に鴨院等燒亡又太政大臣殿の家も燒亡又右近府廳東西穀倉院燒亡同二年北野に火事有此ぶん一條院の御宇也又三條院の長和三年に內裡燒同四年又燒けたりこれらの火事は少納言現在に見られし事なるべしされば今の本文にもおそろしき物やけたる所とかけるなり又やけたる所は忌のかかる故にもいへるにや　拾芥云貞觀六年造レ式之日具レ狀請ニ官裁ニ右大臣宣旨依ニト食ー者謹依ニ宣旨ニ可レ忌ニ七箇日ー之狀卜食得レ乙合レ依ニト所忌ー也

（キ）下に見えたり

【七十段】きよしと見ゆるもの、かはらけ、あたらしきかなまり、疊をさすこも、水を物に入るすき影、あたらしきほそひつ

此段も別義なく心あきらから也きよしと見ゆるものとは例のごとく題なりかはらけ土器也　かなまり金椀也　疊をさすこもとは疊に刺新敷薦なり　水を物に入るすきかげとは深き水は影見えず器物に入れは必すき見ゆる也　あたらしきほそびつとは女に似合たる見たて也　いつれも器物につゐていふ此故に影をもみゆると書しにや

（ヤ）日本紀神代下云以ニ玉鋺ー來當汲水　和名云金椀日本靈異記云其器皆鋺俗云俗云賀奈萬利今案鋺字所レ出未レ詳古語謂レ鋺爲ニ萬利ー宜レ用ニ金椀ニ二字ー也神書傳言萬利之訓丸之義也云々

【七十一段】きたなげなるもの、鼠のすみか、つとめ（コ）て、手をそくあらふ人、しろきつきはな（ケ）、すゝはなしありく兒、あぶら入る物、すゝめの子、あつきほとに、ひさしくゆゝ見ぬきぬのなへたるは、いづれも〳〵きたなげなる中に、ねり色のきぬこそ、きたなけれ　此段も別義なし　きたなげなる物とは題也心あきらか也　鼠のすみかとはきたなき詮開えたり、つとめてとは朝起きて遲く手水つかふ人の事なり　しろきつきはなとは唉など吐く義なり

すゝはなしありく兒　あふら入る物　すゞめの子　いづれも別義なし　ゆゝみぬきぬとは洗濯せぬ衣の事なり　ねり色のきぬとは練貫の衣白光侍る故少の垢めもみえ殊更きたなげに侍るといふ義なり　(マ)內則云凡內外鷄初鳴咸盥漱衣服斂枕簟灑掃室堂及庭布席各從其事　(ケ)醫書白噗を吐と侍事成べし　(フ)內則云升降出入揖遊不敢噦噫嚏咳欠伸跛倚睇視不敢唾洟　禮に戒しむる所なり

【七十二段】いやしげなる物、式部のぞうのしやく、黒き髮の筋ふとき、布屛風のあたらしき、ふりくろみたるは、さるいふかひなき物にて、中々何ともみえず、あたらしくしたてゝ、櫻の花おほくさかせて、ごふんさすなど、色どりたるやり戸、づし、なにもゐなかものは、いやしきなり、むしろばりの車のすそ、けびいしのはかま、伊豫簾のすぢふとき、人の子に、法師子のふとりたる、まことの出雲むしろのたゝみ　此段も別義なく心あきらか也　いやしけなる物とは當段の題也　式部のそうのしやくとは式部省の叙爵なり式部の省にて式部の官人の沙汰する叙爵は六位以下の官位のみにかきる故その級いやしければ當段にあけらるゝなり黒き髮の筋ふときとは尤いやしき物なり俗に馬の尾髮なといふも野卑心也　布屛風とはいにしへは絹或は布などにて張りたるとなりそれに繪を書きたるなり　さるいふかひなきものとは中々何とも見へねばよきとの心也　あたらしく以下は櫻の花繪かき彩なとしたる新きは目にたつ故にいやしく見ゆるとなり　やり戸つし以下は田舍の家作り調度などのいやしげなるものをいふなり　むしろばりの車のすそとは莚張りの車の下すだれの事なり　けびいしのはかまとはあかき裝束など夜行のさまいやしき物なり　伊豫簾のすぢふときとは伊豫簾は名物なり太篠にてあみたるはいやしきとなり　人の子に法師子のふとりたるとは男の子などは世にまじらへは目にたゝず出世の身法師などのたくましきはいやしきとなり

(コ)式部の官人の職は矩模也その司職不比等の令並延喜式などに詳也爰にいふは式部省にてその官人が沙汰する叙爵の事をいへり是六位以下を沙汰

する故なり　(エ)傳物志云燒錫成胡粉又和牡蠣爲胡粉事有也考工記云繪工之事後素切云々　(テ)御厨子ミヅシ　又云二階の事歟　(・)論語云子欲居九夷或曰陋如之何子曰君子居之何陋之有　(ア)西宮記云板車上下通用之近代無乘用之人莚及種々車任意乘之　又云天祿四年十一月八日女御懐子於東河有除服其儀御檳榔毛車其上張莚懸鈍色簾並下簾襲等御祓之後取張莚懸替簾等即以歸御云々　(サ)檢非違使淳和天皇天長年中初置之則兵衛兼之著赤狩衣白布袴云々

(キ)民部式云出雲國絹二百三十七匹四尺鹿草廿張席三百枚云々　堤中納言物語云出雲むしろにまれいきの松原のほとりにいてくるつくしむしろにもまれトモアリ　(△)いよすの事歌にもよみ得る也

【七十三段】　むねつぶる物

競馬見る、もとゆひよる、おやなどの心地あしうして例ならぬけしきなる、まして世の中などさはがしきころ、萬の事おぼえず、又物もいはぬ兒の、なき入て乳ものます、いみじく、乳母のいたくにもやまてひさしうなきたる、例の所などにて、殊に又いちじるしからぬ人の聲きゝつけたるはことはり、人などの、其うへなどいふに、まづこそつぶるれ、いみじくにくき人の來るも、いみじくこそあれ、よべ來る人の、今朝の文をそき、聞人さへつぶる、思ふ人の文とりて、さしいでたるも又つぶる　此段も詞少おほけれ共むつかしき事なし　むねつぶるゝものとは當段の題なり氣の物事に付きて動顚するをいふ也　今も俗にいふ詞なり　競馬とは五月眞手番の事なり前に委しく註し侍るもとゆひよるとは今時ももとゆひをひねりみるに中より切れば胸つふるゝなり　おやなどの心ちあしうして以下は子の心にしてやるせなくむねつぶるべし　まして世の中なとさはがしきころとは世中靜なれば彼方此方の醫師をも求め思ふまゝの療治も成侍るべけれとも物惣なれば醫師も求がたく我も所を去などしておもふまゝの療治も盡しかたきとなりこれ則少納言の現在物惣に侍し事の事實也　又物もいはぬ兒以下は親乳母などの心にしてむねのつぶるゝ義なり　例の所とは常に行て語慰所也又は忍ひかよ

ふ方なと成べし　いちじるからぬ人の聲とは聞なれぬ人聲といふ義なり　聞つけたるはことはり何を切べし聞つけたる人の聲は心時めくもことはりぞと云義なり聞つけぬもともに心ときめきむなさはぎするとなり　人などのそのうへなどいふにとは何を切るへし物ごしにても面談にても人のうへを取沙汰するは何事ならんとむねつぶるゝとなりしたしきにもうときにも此道理ある事也　いみじく以下心あきらかなり　よべくる人の今朝の文のをそきとは忍ひ來る人のあしたに歸し道すがらいかにやと心もとなきにをそく左右をする心成べし　思ふ人の文取てさし出たるとは使の取次程も待遠にてあはやとむねさはく心なり

(ヒ)競馬の事前に詳也　(モ)小兒の醫書に鳴啼の論治あり多くは肺肝の所爲なり

【七十四段】　うつ(ル)くしきもの

ふりにかきたる兒の顔、すゞめのねずなきするにおとり來、(ヲ)又へにつけてすへたれば、おやすゞめの、虫などもてきて、くゝむるも、いとらうたし、二(フタツ)ばかりなる兒の、いそぎてはひくる道に、いとちいさきちりなどありけるを、目ざとにみつけて、いとおかしげなるをよびにとらへて(ヲ)、おとなゝどにみせたるいとうつくし、あまにそきたる兒の、目に髮のおほひたるをかきはやらでうちかたぶきて、ものなどみるいとうつくし、たすき(カ)がけにゆひたるこしのかみの、しろうおかしげなるも、見るにうつくし、おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし、おかしげなるちごの、あからさまにいだきて、うつくしむほどに、(ヨ)かひつきてね入たるもらうたし、(タ)ひゐなのでうど、蓮(ハチス)のうき葉の、いとちいさきを、池より取あげて見る、葵(アフヒ)のちひさきも、いとうつくしく、(レ)何も〳〵ちいさきものは、いとうつくし　いみじう肥(コヘ)たる兒の、二ばかりなるか、しろううつくしきか、二藍(フタアヰ)のうす(ソ)ものなどきぬながくて、たすきあけたるか、はひ出くるもいとうつくし、八九十(ヤツコヽノツトヲ)ばかりなる(ツ)おのこの、聲おさなげにて、文(フミ)よみたるいとうつくし、鷄(ニハトリ)のひなの、足(アシ)高(タカ)にしろうおかしげに、きぬみじかなるさまして、ひよ〳〵とかしかましくなきたて、人のしりにたちて、ありくも、又おやのもとに、つれだちてありく

見るもうつくし、雁の子さりのつほ（ネ）　此段は詞少しおほくむつかしき事侍れども心のあきらかなる段也　うつくしき物とは當段の題なり　ふりにかきたる皃の顔とは今の世姫瓜などいひて眉作ものをいふなり　すゞめの子とは前にはきたなき物の内にかけり生々しうよごれたる義にていふ成べし是ちかく見る心なり今の心はすゞめの子のちいさきさまのしほらしきをうつくしう思ふ義なり近ふれず遠みる心なるべし　へになどゝは今の世鷹などとまらするとまり木のやうなる物にとまらせてをく心なり　二ッばかりなる皃以下心あきらかなりをゆびは小ゆびなり　あまにそぎたるとは皃の髪をまへのかたをのこしたる事なり　是等はしほらしき心を以てうつくしきと云也　たすきかけとは說々おほし　玉手繦とて袍の上に玉をかざりかくると云々女は是をかけ帶といふ口傳　又一說御ぞのなかきやうなるもの袴着の調度云々　おほきにはあらぬ殿上わらはとはいとけなき殿上人なり　おかしげなる皃のあからさまにいたきてとはいとおしげにおもひてかり初にいだくとなり　うつくしむとは慈愛する義なり　かひつきとはいだきつくくしきと云也　蓮のうき葉　葵　別義なし　何も〳〵とは前にいひし事共のちいさく愛らしき由を結義なり扨又下にこえたる皃といふゆへに先前の文を結ふ成べし　いみじうこえたる皃とはうるはしう肥あぶらつきたる義也　たすきあげたるとは是前の手繦と同じ事也　八九十ばかりとは八歲の年より學文に入る也　文よみたるとは讀書などする由也　鷄のひな以下別義なし　きぬみじかなるとは羽のみじかきをいふ也　又おやのもとにとは親鳥の羽下にそひありく義也　さりのつぼとは舍利を瑠璃の壺などに入るを云也

（ル）珍　ウツクン可愛同　（ヲ）柄へ　止木也　（ワ）剃ソキ　そると同し事也通音也　（カ）手繦　日本紀　古語拾遺　襷　タスキ　䙑同　木綿たすきの事にはあらす尤此たすきかけ神道の秘傳の内也　（カ）源氏なとにもこのたすきかけの事を傳授事にさ汰せらるれども大やうの事は下にしるすされ共古來大切にする所はあからさまいひかたく侍れは

略する也尤口傳、(ヨ)懐付　カヒツキ　園附　同

(タ)雛の調度　(レ)何も〳〵ちいさきものはいとうつくしと所心を付へし　(ソ)二藍薄物フタアヒノウスモノ　衣の名也前にみえたり　(ル)八歳より讀書なとしはしむる也委く其次第禮記に見ゆ八歳より十四歳まで小學と云學問所にして諸藝をならひ十五歳より大學の學問所に入て物の道理天下國家の政道をならひ工夫して三十計迄つとめ仕ゆる事有　(ネ)舎利壺也　サリノツホ　佛舎利を瑠璃の壺などに入る事也

七十五段　人ば(ナ)へするもの

ことなる事なき人の子の、(ホ)かなしくしならはされたる、(ム)しはぶき、はつかしき人に物いはんとするにもまつさきにたつ、あなたこなたにすむ人の、子どもの四五なるは、あやにくだちて、物など取ちらしてそこなふをつねはひきいられなんとせいせられて、心のまゝにもえあらぬか、親の來る所えて、ゆかしがりけるものを、あれみせよや母など引ゆるがすにおとなゝど物いふとて、ふとも聞いれねば手づから引さがし出て見るこそいとにくけれ、それをまさなとばかりうちいひて、とりかくさで、(▲)さなせそ、そこなふなとばかり、ゑみていふおやもにくし、われゑはしたなくもいはでみるこそ、心もとなけれ　此段別の子細なし　人ばへする物とは當段の題也人の前において所ゑがほなる義也　ことなる事なき人とは常體の人と云義なり野卑なる心也　かなしくならはされたるとは慈育し物事よく敎などしたるは人中にて映あると也　しはぶき以下ははづかしき人に物いはんとするはおもはゆくて心地はへ有てしはぶきまつ出くると也　あなたこなたとは隣家などの義也　あやにくとはすまじき事是非共にするを云也常はひきいられなんとは常〳〵は叱製する義也　心のまゝにもえあらぬとは彼あやにくなる子が製せられ心のまゝならぬ義也　親の來るとは子の親が來れば其子所えたり顔なる義也　ゆかしがりける物をとはとりちらせし物をいふなり　おとなゝど物いふとは母は物語して聞ぬとなり　手づから引さがしとは子が引さがし取出しなどする義也　いとにくけれとは人の見てにくしとおもふ心なり　それをまさなとばかりうちいひて

とは親が子を制する心なりしかと叱もせで大やうなる體なり　とりもかくさでとは取ちらす物を取かくさでと也　ゑみていふ親もにくしとは笑ひ顔して叱(シカル)ぶんにて子が戚(チヂ)ねばさやうにあるらんは親迄もにくゝ侍るとなり　われえはしたなく以下は亭主などの身として强てしかられぬ故を云なり　(山)映　ハヘ　榮同　光同　いつれもはへとよむ前に見えたり人はへとは人の前にてはへある心なり　(水)後拾遺に小式部内侍なくなりてむま子ともの侍けるを見てよみ侍りける　和泉式部「留置て誰を哀と思ふらんこはまさらなんこはまさりけり　後撰　兼輔「人の親の心はやみにあらねど子を思ふ道にまとひぬる哉　(◉)病源論云欬嗽(シハフキ)肺寒則成也　河間云無レ痰有レ聲謂ニ之咳ニ無レ聲有レ痰謂ニ之嗽ニ　(△)柳市田勸學文云父母養ニ其子ヲ而不レ教ヘ是不レ愛ニ其子ヲ也雖レ教而不レ嚴是亦不レ愛ニ其子ヲ也

七十六段　名(一)おそろしき物、あをふち、(二)谷のほら、はたいた、くろがね、(三)つちくれ、(四)いかづちは、名のみならず、いみじうおそろし、(五)はやち、ふさうくも、ほこほし、(六)おほかみ、牛(ウシ)はさめらう、ろうのをさ、いにすし、それも名こそは、みるおそろし、なはむしろ、がうたう、萬(ヨロヅ)におそろし、(七)ひぢかさ雨、(八)くちなはいちこ、いきすたま、おにところ、おにわらび、(九)むばら、(十)のらたち、(十一)いりすみ、ほうたん、うしおに　此段も心むつかしき事なし名おそろしき物とは當段の題也　あをぶちとはたゞ淵と計いはゞおそろしかるまじきか青淵といへばおそろしく聞ゆると也　谷のほらとは洞とばかりいはゞ耳にたつまじきを谷といひつゞくればおそろしく侍ると也はたいたとは旗楯也或云機板云々　くろかねとはおそろしく聞ゆる物也　つちくれとは是も土と計云ば常也つちくれといふはおそろしく聞ゆる也　いかつちは名のみならずとは雷は名もおそろしけれ共名計には侍らず其聲も冷しきと也　はやちとは暴風也四季に渡るべけれど取わき秋が冷しき心也　ふさうくもとは不祥の雲也倘可考之　ほこほしとは破軍星の事なり云々　おほかみとは狼也　牛はさめらうとは未レ詳(タナラ)或人云小目(サメ)牛大牢(ウシタイ)の事成へし云々　ろうのをさとは籠長(ラウノヲサ)也囚獄司を云也　いにすしとは未詳或云虹の事にや云々猶可尋之　なはむし

ろとは是も莚と計は常也縄莚とはこと〳〵しくおそろしきと也　强盗又萬におそろしとは惡人なればぬすみばかりにかぎらぬといふ心也　ひちかさ雨とは諸說後書に委見えたり　くちなはいちごとは名のおそろしきなり　いきすたまとは生靈の事也　鬼ところ鬼わらびこれら鬼といふ名のおそろしき義也　むはらからたち別義なし　いりすみとは五刑の內也墨今の世簽印と云事也　ほうたんとは瓢簞也ひさごといはでほうたんといふは詞つよくおそろしく聞ゆる故なるべし　うしおにとは今も世話にいふ詞也佛敎に說し牛頭馬頭の刹鬼なるべし

（一）前におそろしきものといふ段侍る故こゝの心を差別して名のおそろしきと書り心得見るべし

（二）青淵　アヲフチ　名所にはあらずたゞ青き淵と云迄也　（三）和名云辨色立成云塊土片也土塊和名豆知久禮　（四）穀梁傳云天之怒者雷也　山海經云澤有雷神龍身而人頰鼓其腹則雷　搜神記云扶風楊道和於田中霹靂擊之道和以鋤格折其左肱遂落地不得去色如丹目如鏡毛角長三尺狀如六畜似獼猴　起世經云佛告諸比丘或有外道來問汝云何因緣故虛空中有此聲耶汝應答云有三因緣更相觸故雲聚空中有音聲出何者爲三一空中風界與地界相觸著故便有聲出二於雲中風界與彼水界相觸著即便聲出三於雲中風界與彼火界相觸著故即便聲出所以者何譬如樹枝相揩即有火出此亦如是　神代卷云伊弉諾尊拔劍斬軻遇突智爲三段其一段是爲雷神云々　於神道雷之沙汰有甚深微妙之奧旨今略之　舊事古事同之　（五）和名抄云暴風史記云暴風雷雨漢語抄云八夜知又乃和木乃加世　（六）本草綱目云狼大如狗蒼色鳴聲則諸孔沸云々　（七）袖中抄云「いもか門行過かてにひちかさの雨もふらなん雨かくれせん　顯昭云此歌にひちかさ雨といへるはひが事也是は萬葉集の歌也彼集にはひさかたの雨といへり考萬葉第十一云「いもか門行過かねつひさかたの雨もふらぬかそをよしにせん　源氏物語云須磨　風いみしく吹いてゝ空かき暮ぬ御はらへもしはてす立さはきたりひちかさ雨とかふりていとあはたゝしければみな歸給ひなんとするにか

さも取あへず云々　六帖曰「いもか門行過かねつひちかさの雨もふらなん雨かくれせん　此歌は萬葉の歌をやはらけたる歌也第三句のひさかたをひちかさと書たるなりひちかさ雨と云物不可有也　催馬樂妹門歌曰「妹門せなか門行過かねてや我ゆかはひちかさの雨もふらなんしてのたをさ雨やとりかさやとりやとりてまからんしてのたをさ此歌も萬葉の歌を本たいにて作れりと見えたり六帖の歌の定也催馬樂譜は一條左大臣雅信公の作られたれば萬葉の後の事なれば彼集にたがひたらんは不可用也　綺語抄云ひちかさ雨とは俄に降雨を云　無名抄云ひちかさ雨とは俄に降雨を云べきにや俄にて笠も取あへぬほとにて袖をかづく也是はひちをかさと云也　童蒙抄云ひちかさ雨とは俄に雨降て袖をかつくを云とぞ云侍りける　已上袖中抄の説如此也源氏并諸抄大略如此繁故に略するなり　(八)地楊梅　クチナハイチゴ　(九)茨　ムバラ　(十)枳殼　カラタチ

【七十七段】みるにことなる事なき物、文字にかきてこと〳〵しき物、いちご、つゆ草、水ふき(廿)、くるみ(ノ)、文章博士(オ)、皇后宮權大夫(ク)、山もゝ、いたどり(サ)は、まして、とらのつえと書たるとか、杖なくともありぬべきかほつきを　此段殊に別義なし　見るにことなる事なきとは以下當段の題なり此段詞長き題なり其物の質(スカタ)を見れば何の興もなくて文字に書て見ればいかめしく侍るとなり　いちご覆盆子と書也　つゆ草何の見所もなき物なり鴨頭草と云字を書は如何さまにもこと〳〵しげに思はるゝ也　水ふき芡實と書也　くるみ胡桃實と書也　いづれも〳〵其質(スカタ)より文字にかけばこと〳〵しう侍るなり　文章博士とは從五位下の相當にて地下也されども文章博士などゝ文字に書しはいみじうみゆると也　皇后宮權大夫とは是は納言の人の兼(カヌル)職也是も文字こと〳〵也　やまもゝ楊梅と書也　いたどり虎杖と書也今其故をしるせる也　つえなくともとは虎のすさまじき顏つきなる物を名とするさへ有に杖といふ字さへとりそへ書侍ればます〳〵こと〳〵しう思へ共其草はことなる事はなきぞとなり

(廿)本草綱目三十三云芡實芡莖三月生ㇾ葉貼ㇾ水大ニ干荷葉ニ皺(ヨリ)文如穀蹙衂如ㇾ沸面青背紫莖皆有ㇾ刺

其莖長至丈餘中亦有孔有絲嫩者剝皮可食五六月生紫花々開向日結苞外有青刺如蝟刺及栗毬之形花在苞頂亦如鷄喙及蝟喙剝開內有斑駁軟肉裏子纍々如珠璣殼肉白米狀如魚目深秋老時澤農廣收爛取其子藏至困石以備歉荒其根狀如三稜煮食如芋　（ノ）本草綱目果部云胡桃此果本出羌胡漢時張騫使西域始得種還植之秦中漸及東土故名之時珍曰此果外有青皮肉斷之其形如桃胡桃乃其核也　（オ）職原抄云權大夫一人同納言參議及三位以上兼之名家雖有其例不打任事也近代尤被擇其人類聚國史百七云桓武天皇天應元年乙亥始置中宮職　續日本紀云光仁御宇天應元年夏五月始置中宮職　（オ）職原抄云文章博士二人紀傳道儒士之撰也異朝殊重之居此職者必轉于參議也又詔勅等委學士所書也本朝同雖主文章於詔勅者內記之所掌也文章博士は史記漢書以下の史官歷代の書幷に詩文の書讀む人也是紀傳の役也菅原大江日野南家の人の職とする所也　（ヤ）本草綱目云虎杖言其莖虎言其斑也田野甚多狀如大馬蓼莖斑而葉圓云

々

七十八段　むつかしげなる物、縫物のうら、猫のみゝのうち、鼠のいまだ毛もおひぬを、すの中よりあまたまろばし出たる、うらまだつかぬ革ぎぬの縫め、まことにきよげならぬ所のくらき、ことなる事なき人の、ちいさき子どもなとあまたもちて、あつかひたる、いとふかうしも、心さしなき女の、心地あしうして、ひさしくなやみたるも、おとこの心のうちには、むつかしげなるべし　此段も別義なく心あきらかなり　むつかしげなるものとは當段の題也世話にむさげなる物と云義也　縫物のうらとは衣の裏は奇麗になきもの也　猫のみゝのうちとは是もむさき物也　鼠のいまだ毛もおひぬとは鼠の赤き子の事也　革衣とは革帶の類なり　ことなる事なき人とは並々にやう〳〵世をいとなみわたる成べし　ちいさき子共などあまたもちてとはやう〳〵いとなみわたる人の子どもおほく持あつかふはむさき事のみ也　いとふかうしも心ざしなきとは情の淺き義也　こゝちあしうしてとは愛ふかき女はこゝちあしき時もさすがむさくは侍らじを是

は恩愛のあさき故男の心にさへむつかしからんと也まして他人はさこそむつかしからんといふ心をこめて見るべし
(二)西宮記云皮衣臨時祭舞人歸路服黒枯皮衣　昔は如此の時皮衣を用ひられしと也

清少納言枕草紙抄卷十

七十九段　ゑせもの丶所うるおりの事、正月のおほね、行幸の折の、ひめまうち君、六月十二月の晦日の、よをりの藏人、季の御讀經の威儀師あかけさきて、僧の文どもよみあげたる、いとらう〳〵し、御讀經、佛名などの、御さうそくの所のしう、春日祭の舍人ども、大饗の所のあゆみ、正月の藥子、卯杖の法師、五節のこゝろみのみくしあけ、節會御はいせんのうねめ、大饗の日の史生、七月のすまひ、雨ふる日のいちめ笠、わたりする折のかん取　此段十五章ありいづれも心あきらかなり其中口の十三章は天事也終の二章は通じて世間のうへを云なり　ゑせ物の所うる折の事とは當段の題なり何事にても一道にかたをちなるをゑせものと云なり偏なる心なるべし
正月おほねとは常はさしもいやしげなる物なれど正月の祝には所えたる物ぞとなり　行幸の折の姫まうち君とは內侍司の被官の東豎子とて行幸の時おかしき馬にのりて供奉する三子の事なり是も常にいらぬ物なれば行幸の時所うるゑせ物なり　六

月十二月の晦日のよをりの藏人とは兩度の御祓の御贖物を取行はるゝ時藏人奉行していかめしく所え顏成と也　季御讀經の威儀師とは二月八月兩度百敷にて大般若經を講せらる四ケ日の事にて第二日には引茶とて僧に茶を給ふ事あり天平元年四月八日に初めらる貞觀の比ほひは毎年行はれけるとかや威儀師は其役者なり下官の法師なれとも今日は所えがほなると也　佛名とは十二月十九日より廿一日まて有御佛事なりあるは一夜侍し例も有也仁壽殿の御本尊をうつして御帳の中にかけ南の額の間に又南北に机をたてゝ佛像塔形をゝく佛前に香花などをそなへ庇には地獄繪の御屏風をたつ公卿庇に着給ふ初中後夜各御導師かはるなり御導師終夜佛名となへければ延喜の御代などは夜御殿にて和琴をかきあはさせ給ひけるとかや此佛名といふは三世の諸佛の名號をとなへて六根の罪を滅する心なり其功徳はかりなき由佛名經にみえたり寶龜五年十二月より始承和の比は毎年佛名三ケ日の間は諸國にて殺生禁斷の由格にみえたり　春日祭の舎人とは奈良の春日祭也二月十一月兩度也上の申日を用ゆ先未の日使たつ近衛の中少將是をつとむ其時に供奉する舎人共がいかめしく所え顏なると也　大饗の所のあゆみとは正月二日に二宮の大饗とて侍る公事也其饗應に着さまをいふ成べし二宮は東宮中宮を申也王卿以下本宮に參して拜禮の事有次に玄輝門の東西の廊にして饗につく先中宮の饗につき次に東宮の饗につく三獻の儀式あり天長七年正月に群臣皇居を拜し奉る衾を賜又皇太子を賀すと有たへて久しき事と見えたり又大臣大饗とて侍る事も有前にも註し侍るなり　正月のくすり子とは元日より元三の間屠蘇白散の御藥を奉る其時に藥子とて少女のいまだ嫁せさるを求めて是を用ゆる也屠蘇は少兒より呑と云本文有故少女を撰て先呑しむ也此藥子鬼の間よりすゝみはしの几帳のもとにさふらふ女官典藥を召て御藥をもよほす一獻に先屠蘇を酒に入て藥子にのましめ次に銀器に入て藥の頭取て配膳につたふ主上座をたゝせ給ひて夜の御殿の南の戸より入給ひて御ぬりごめの東の方に向ひてたゝせ給ふ陪膳御盃を持てまいらす是も屠蘇は東の戸に向て呑由本文侍る故な

り五十二代嵯峨の天皇の弘仁年中に始由記錄に見えたり　夘杖の法師とは正月上夘日に有公事也又夘槌共云此杖にて邪氣逐心也天子へ系所より奉る法は前に詳也今の本文に法師とあるは眞言天台の驗者より奉るを云成べし賀茂より世間へ贈るは一尺餘の削木に葵をかけて侍る、倶利賀羅龍の心を表するにや　又五節の試みのみくしあけとは霜月中の丑日五節帳臺の試と云事有試の儀なる故帳臺にして御覽ある也舞姬五人參る時儀式どもあり扨天子帳臺に出御なる程亂舞あり又翌寅日は常寧殿にて御覽ある也殿上の淵醉に今樣朗詠などうたひ三獻果て亂舞有后宮女院など淵醉あるはけふあすの程也此試みの程に御髮などをかゝる事侍る是を五節の御髮と申にや常はしからざれば所得たる有さまぞと也　節會はいせんのうねめとは三節會の度々に御膳供奉る折釆女取迎て御帳の上にすへ供おはれば却て草墩につく也尤所得顏なる由也　大饗の日史生とは外記史生也召にあづかり勸盃など侍るなり階卑き者の所得がほなる儀あきらかなり　七月のすまひ是も常に賞翫れぬ卑者共が所え顏成と也是迄十三ヶの章は天事を云背題のゑせ物の所得る折と云義書載られしなり下の二章は別義なし題の義にかなふ心もあらはなり

(イ)和名云　根正白而可食之和名於保禰俗用大根二字江次第云內膳供御歯固具采女傳取之自第三間御几帳上付女藏人女藏人傳陪膳　大根一杯　荒串刺二坏　下略　異名集云加賀御草大根年貝記「さき草の中にもはやきかゝみ草やかて御調に備へつるかな　正月朔日大内にて餅のうへにをく大根也云々　(ロ)江次第云公卿列立櫻樹南莚近衛引陣開門少納言率大舍人出鈴印寄御輿掃部供莚道主殿撤帊參議中將進開御輿戶傳內侍劒置輿中御前次乘御東西東豎子執御揮鞋云々西宮抄女叙位下にも東豎子の事見えたり此東豎子は姬まうち君也　(ハ)江次第云六月晦日十二月准之神祇官奉荒世和世御贖事謂之節折御装束　西宮抄云當日晚景所司供奉藏人催神祇官召文武人主殿掃部縫殿等御装束於御殿時刻出御中臣節折藏人縫司宮主文人等候縫殿官人昇豆、豆志余呂比御服付女官人女官授中臣女中臣

ふ也大甞の事記錄文しけきゆへことごとくは記しかたし江次第西宮記等に詳也（チ）江次第云供御藥正月元日三日弘仁年中始之舊年十一月廿日以前陰陽寮進勘文二通一通御忌勘文御八卦也一通藥童子勘文年并色見此勘文被定御陪膳女房奉仰之人求童女未嫁之者年齡符合藏人仰內藏寮令給其裝束料又被仰尚藥女房又被定命婦藏人各二人藥殿請御藥并雜器請奏十二月十九日藏人率諸司向大藏省野倉出藥晦日藏人定後取押於殿上北壁角柱（⊙）卯杖の事前にみゆ尚西宮記江次第等に委し　（リ）江次第云次三獻陪從發歌笛聲次盃巡不定次所雜色以下三人取圓座敷使并舞人陪從座前殿上四位二人五位一人勸盃次給挿頭華五位藏人一人跪長橋下取挿頭華次第獻之上達部突片膝挿笏取華渡座挿使冠左方舞人同之右掖笏左廻退出　如此挿の花を給間をみくしあけと云成べし　（ヌ）江次第云采女撤御盤臺盤杷自御膳宿出陪膳采女留着草墪以御盤受杷自西階給內膳官人內膳入自月華門供御膳遲供時內膳別當公卿起座催之正以下令史等叉手前行膳部相從正令史留立版令史稱警蹕膳部等八人相並登南階第一級采女等迎取供之可出入自御膳宿間敷供御膳間采女磬折立但陪膳居御帳上供畢却着草墪一獻采女供御酒第二采女持盞出自御膳間西邊立柱南東面御飲畢進自同間受御盞出自西間（ル）西宮抄云居餛飩二獻後召史生下臈辨進跪二間去母屋第二三柱三度膝行揖畢云史生召佐ム云々御云史生召史稱唯歸本座召官掌二度官掌立砌下史仰云史生メセ官掌微唯稱退出史生以下列座再拜着座云々三獻後雅樂發音聲主人執盃進大辨座出穩座史生蘇云々下略　（ヲ）七月のすまひ江次第西宮抄等に詳也前にもみえたり文しけき故略之　（ワ）市女笠イチメカサ　藺にてあめる笠のうへを手拭やうのものにて結びて着るなり今時のことくしめ緒なしにうへを縈ふて頤にて結ひ待るなり市に立女の顏をかくさん爲なり今のあみ笠と云物のことくにしてしめ緒なきものなり又あみ笠の着やうは近頃のさまなり

八十段　くるしげなるもの

(カ)夜なきといふ物する兒のめのと、思ふ人ふたり持て、こなたかたなに恨みふすべられたる男、こはき物のけにあづかりたる驗者、げんだに早くばよかるべきをさしもなきを、さすがに人わらはれにあらしと、ねんずる、いとくるしけなり、わりなく物うたがひする男に、いみじうおもはれたる女、一の所に時めく人もえやすくはあらねど、それはよかめり、心いられしたる人　此段心あきらかなりくるしげなるとは當段の題なり六章ながらくるしげなる心をはなれずみるべし　夜なきとは小兒の病なり乳母の心尤苦しげなり　思ふ人ふたり持とは女を二人いひかはしたる男の心尤くるしげなるとなりけんじやとは護摩加持を修する法師なり

一の所に時めく人とは關白家の臣下なるべし關白を一の人とも一の所ともいふ也時めく人は出頭し隙なき心なり恳もくるしげなる義推量べし心いられしたる人とは生れつきせは〳〵しき人を云なり

(カ)小兒の醫書に夜啼の論ありおほくは元氣虛薄し心神の不足より起る事とみえたり　(ヨ)關白を一ノ人といふなり前にもみえたり職員令に委し

(タ)煎イル　心いられとはせはしき義なれは煎の字成へし釜土に薪やくべたりしと呂弘かせはしき人をいひし事侍れは煎の字の義よくかなひ侍る歟

【六十一段】うらやましきもの

經などならひて、いみじくたど〳〵しくて、わすれがちにて、返す〳〵おなじ所をよむに、法師はことはり、男も女も、くる〳〵とやすらかによみたるこそあれ、かやうにいつの折とこそ、ふとおぼゆれ、心地などわづらひてふしたるに、打わらひ物いひ、思ふ事なげにてあゆみありく人こそ、いみじくうらやましけれ、稻荷におもひをこして參りたるに、中の御社のほど、わりなくゝるしきをねんじてのぼるほどに、いさゝかくるしげもなく、をくれて來とみえたる者どもの、たゞ行にさきにたちてまうづる、いとうらやまし、二月午の日の曉にいそぎしかど、申のなからばかりあゆみしかは、巳の時ばかりに成けり、やう〳〵あつくさへなりて、まことにわびしう、かゝらぬ人も世にもあらんものを、何しにまうでつらんとまで、涙おちてやすむに、三十あまりばかりなる女の、つぼさうぞくなどにはあらで、たゞ

引はこへたるが、丸に七度まうでし侍るぞ、三度はまうでぬ、四度に事にもあらず、ひつぢには下向しぬべしと、道に逢たる人にうちいひてくたりゆきしこそ、たゞなる所までは、目もとまるまじき事の、かれが身に、たゞいまならばやとおほへしか　此段詞多し二節に分て註し侍るなり就中第一節には佛の勤に經など習らふ事又神まうでの道の勞などにつゐて人の健なるをうらやむ義を記されたり　うらやましき物とは則當段の題なり羨字なり　經などならひてとは佛經を讀誦の爲に俗人の習らふ義なり　かいす〱おなじ所をよむとは俗人のなれぬこと故たど〱しうわすれかちなるを云なり　法師はことはりとは出家は不レ及レ云と也　男も女もとは俗人のよく覺えたるを云なり　かやうにいつの折とは覺えかぬる人が早晩かのよく覺えし人のごとくくる〱とやすらかによまんと羨心なり　心地などわつらひてとは頓時に人の打笑ひ物などいふを聞は羨となり　稲荷以下は少納言參詣の時の事なるべし　中の御社の程わりなく苦しきとはむかし稲荷の社山の奥に有しゆへ岡のほるとなり

いさゝかくるしげもなくとは達者なる人の參詣する躰をいふなり　串のなからばかりとは早朝宿を出日の八ツに成迄の半分道を歩となり　巳時ばかりとは神前へ參りつきし時をいふなり此比は少納言月輪の住家より參られしにや　かゝらぬ人も世にもあらんとは我年の比にて如此苦しまぬ人さへ世には有物をとなり述懐の心なり　三十餘以下は勇健なる人のうへを云なり　たゝ引はこへとは衣裝のすその引長きをふき返しかひどりなどしたる躰の美麗なるをいふなり　丸は以下彼女房の云詞なり　七度まうでとは今日の中に七度參りするを云なり　三度はまうでぬとは最早三度は參り畢ぬとなり　四度は事にもあらずとは殘る四度はいとやすきとなり　未には下向すべしとは未刻には下向せんと云なり則巳の時ばかりに神前にていひたる詞なるべしたゞなる所までは目とまるまじとは大形の人なればめはとまらねど餘達者成人なれば目を止め羨み侍しとなり

（レ）稲荷の事前にみえたり　（ソ）中社は倉稲魂を崇祭今の稲荷山の峯也　（ツ）初午は昔當社の鎮座

元正天皇の御宇に影向まします時二月初の午の日也さるに依て此日の祭禮をつとむる由諸氏の說也

男も女も法師もよき子持たる人いみじう羨まし、髮ながくうるはしうさがりはなど目出度人、やんごとなき人の、人にかしづかれ給ふもいと羨まし、手よく書歌よく讀て、物の折にもまづとり出らるゝ人、よき人の御前に、女房いとあまたさふらふに、心にくき所へつかはすべきおほせ書などを誰も鳥の跡などのやうにはなどかはあらん、されど、下などにあるをわざとめして御硯をろしてかゝさせ給ふ、うらやまし、さやうの事は所のおとなゝどになりぬれば、まことに、難波わたりのとをからぬも事にしたがひて書を是はさはあらで、上部達のもとへ、又はじめて參らんなど、申さする人のむすめなどには、心ことに上よりはじめて、つくろはせ給へるを、あつまりて、たはふれにねたがりいふめり、ことふみ習らふ、又さこそはまだしきほどは、かれがやうに、いつしかとおぼゆめれ、內、春宮の御乳母、うへの女房の、御かたぐ〳〵ゆるされたる、三昧堂たてゝ、よひあかつきに祈られたる人、双六うつに、かたきのさいきゝたる、誠に世を思ひ捨たるひじり　第二節人のよき子を持事姿より藝能などのうるはしき事或は官を得て時めく事或はさて行ひ繁む事又は世をやすくいとひなどせし事彼是うらやましき品々を九章かゝれたり　男も女も法師もとは子の事なりよき子と云詞肝要なり誠に人の世にある俗子孫相續するを道の肝要とするなり桑門のごとく强て子孫を斷絕するは格式の制する所にして仁義の罪人なり況や神國に生れ其苗裔たらん人をや此故によき子持たる人をいみじううらやましと云なり　髮ながくとは髮の長き姿なり姿貌に付て云なり此心をうけて兼好も目たつかめれといへり　やんごとなき人とは智德いみじき人官祿きはめたる方などを云心なり　手よく以下は藝能に就ていふなり　よき人以下は手よく書といふ心を推廣め云なりよき人高位上つかたをさすなり　心にくき所とは才智ある人の所なり　誰も鳥のあとなどのやうにはなとかあらんとは手あしきを鳥の足なと云なりされは鳥の跡のごとくは可レ書と卑下也　何れもの女房衆並々にかくと也　されど以下は手のいみじき人のう

へをいふなり下の座にあるをよひ出されて書程の人は殊更すぐれたる故なり　御硯をろしてとは上の御硯をたまはりかゝさせ給ふは矩模なるとなり　さやうの事とは心にくき方などへの仰書の事をいふなり　所のおとなとは女房の中の上臈を云なり　難波わたりのとをからぬとは文章の事に就て難波のよしあしとりまじへ唐日本の故事迄を書認となり　又云難波とは手の善悪をいはんためなりおとなになりぬれば手の善悪をいはで事に随ひ書となり　とをからぬとは善悪の程遠からぬ義なり並々といふ心成べし　是はさはあらでとは下にありて召さるゝ人は上臈にもあらず年若き今良なれど手跡才やんごとなきゆへ召て仰付らるゝなり　上達部のもととは上達部のもとへつかはさるゝ文なり　又はじめてまいらん以下は人の女の方への文をかゝしめ給ふ義なり　心ことに上よりはじめてつくろはせ給へるとは文やる向の人を耻思召由也　あつまり以下は御内の女房達か彼文かく人をねたむ心なり偏執の氣味なり是迄能書才人のうらやましき事を云なり　ことふみとは異文なり異國の學問を云或云琴文歟　又さこそはまだしき程とは習らひ得る間の心をいふなり　内春宮以下別義なし　御方〳〵ゆるされたるとは御前へ罷出事をゆるさるゝ義なり御ゆるしなければ不レ出なりこれ矩模の事なり　三昧堂とは世にゆゝしき方のし給ふ事なりかたきのさいとは敵の賽なり双六の相手を敵と云なり或云樫木にて作りし賽なり　誠に世を思ひ捨たるひじりとは世のほだしもなく心よう出家せし人のうへを云なり是迄第二節なり　右はいづれも〳〵題のうらやましき物と云詞をわすれずみるべし

(ネ)今も女房の髪のうるはしきをは色よきといふなり　葉色と書歟　(ラ)名義集云三昧此云二調直定一又云正定亦云二正受一圭峰禪師疏云不レ受二諸受一名爲二正受一遠法師云夫稱二三昧一者何専レ思寂想之謂也思専則志一不レ分想寂則氣虚神朗虚則智恬其照神朗則無二幽不一レ徹斯二乃是自然之玄符用レ一而致レ用也云々法華三昧云於二道場中一敷二高好座一安二置法華經一部一云々　又高倉院も法華三昧堂をたてゝ行ひ給ふ由兼好つれ〳〵に書れしなり　大

鏡云わか身思ふさまになりたらは三昧堂たてんと御心の由におぼしくはたてたりけるとこそは承はれ上下略　是は入道殿の御詞なり

八十二段　とくゆかしき物

まきぞめむらご、くゝりものなどそめたる、人の子うみたる、男女とくきかまほし、よき人はさらなり、ゑせもの、げすのきはだに、きかまほし、除目のまたつとめて、かならずしる人のなるべき折も、きかまほし、思ふ人の文おこせたる　　此段別義なし　とくゆかしき物とは當段の題なり早床敷なり後にはしからねど先初は頻に床敷心なり　まきぞむらごくゝり物とは卷染村濃の今の世のしぼりの類也　人の子うみたる以下心あきらかなり　よき人とは時めく人なりゑせものははふれたる人也　除目のまたとは又のあしたなりまたのた文字清べし或云いまだの心なり濁べしいまだ除目にあづからぬ故早朝より床敷となり　しる人とは知音の人なり初のごとく清ても同じ心歟但初の義は前の日はならで又のあしたにはあつかりたるやらんとゆかしうおもふ心なり　後の義は除目に必すあづかる筈の人がいまだ我番にならぬ程の心なり

八十三段　心もとなきもの

人のもとに、とみの物ぬいにやりて待程、物見に急出て今や〳〵とくるしうゐ入つゝ(ム)あなたをまもらへたる心地、子うむべき人のほど過るまで、(ウ)さるけしきのなき、とをき所より、思ふ人の文をえて、かたくふんじたる、そくいなど、(ヰ)はなちあくる程、心もとなし、物見に(ノ)急出て、ことなりにけりと、白笞(シロキシモトノ)など見付たるに、近やりよする程、わびしうをりてもいぬべき心地こそすれ、しらじと思ふ人のあるに、前なる人に(オ)をしへて物いはせたる、いつしか待いでたる兒の、いかもゝかなどの程になりたる、行するゐいと心もとなし、とみの物縫に、くらき折、針にいとつくる、されどそれはさるものにて、有ぬべき所をとらへて、さし入ぬを、いでたなすげそといへば、さすがになどてかはと思ひがほにえさらぬにて、さゝへそひぬ、何事にもあれいそぎて物へ行おり、まづわがさるべき所へ行とて只今をこせんとて出ぬる、車まつ程こそ、心もとなけれ、大路いきけるをさなりけるとよろこびたれば、外ざまにいぬるいと口おし、まして物

見に出んとて有に、ことはなりぬらんなといふを聞こそ、佗しけれ、子うみたる人の、後のこと久しき、物見にや、又御寺まうでなどに、諸ともにあるべき人をのせにいきたるを、車さしよせてたてるが、とみにものらで、待するもいと心もとなく、打すてゝもいぬべき心地する、とみにいりずみをこす、いと久し、人の歌の返しとくすへきを、えよみえぬ程いと心もとなし、けさう人などは、さしもいそぐまじけれど、をのづから又さるべき、折もあり、又まして女も男も、ただにいひかはすほどは、時のみこそはとおもふほどに、あひなくひが事も出くるぞかし、又心地あしく、物おそろしきほど、夜のあくる待こそ、いみしう心もとなけれ、待はぐろめのひる程も心もとなし　此段は奥にいたりて心詞むつかしき段なりよく心を待て見るべし今八節に分て釋し侍る見やすからんが爲なり就中此第一節には十五章有各心もとなき品異なるのみ詞にいたりて分明也とみの物縫にやりとは急衣裳を或人の方へ誂へて待間心もとなしとなり　物見とに賀茂の祭など見る心なり　ゐいりとは棧敷に居入て今や〳〵と待程の心もとなきとなり　子うむべき人とは産婦を云なり　程過るとは臨産の月の過るを云也　とをき所よりとは他國より親戚の文を便宜に得てなり物見に急出てとは物見の事有とて人々ののしるにつけて何事とはしらね共諸共に急出る義なり　ことなりにけりとは畢也にけりと云義なり目を悦はしむる物見にはあらで罪人を刑するを人々のさはき見るとなり或云事成にけると云義なり事を只今成と云義なり是いまた見ぬさきには心もとなきとなりちかくやりよするとは楉木に犯人をしばりつくるを云也　おりてもいぬへきとは車より下てもいぬへきと思ふなり罪人のいましみを見る目のおどろ〳〵しうむつかしければかく思ふなり　しられじとおもふ人とはわか密言をしらさじと思ふ人なりさやうの人の居前にて人に物をしへいはするは彼人の聞もせんかと心もとなきよしなり　行すゑとは何事もなく早晩成長せんと待心なり　くらき折とは日暮などになり　されどそれはさる物にてとは暮時分針に糸付るは心もとなきとなり　則次の詞に糸つくるやうすを叙云なり　ありぬべぎ

所とは針の穴の有べき所をとらへて糸をさし入るゝなり　いでたゞなすげそとは傍より見る人の詞なり日暮ぬれば先只止めて灯をともしてせよと云心なり是もどく心也　さすがになどてかはとは針にさしかぬる人の心なりもどかしげに人はいへどもなどてか指得ざらんと思ふ由なり　えさらぬにてさゝへそひぬとは遂に指得ぬ故傍の人がいひしごとく暮さにさへられたるとなり　或云傍の人が心もとなう思ひ手をさゝへそへて教へたるさま也

何事にもあれ急て物へ行おりとは惣じて外へ出る時と云心なり我人通していふなり　まづわがとは車の主が我行事を聞て可レ借と云心なり　只今をこせむとは他の人が車を只今借べきといひてかへりしがをそくゝれば心もとなきとなり　大路以下は待人の心をかけり　事はなりぬらんとは見る事成就し過ぬるなどいふを聞ていよ／＼車を待詫ぶる由也　もろともにあるべき人とは同車すべき人をのせにやりつれば久しうまたせしが心もとなしとなり　人の句を切へし歌をこせし人と返しする人とを兼て見るべし　けさうの人以下は歌の返しを待かぬる心もとなきをいへり　又さるべき折もありとは急べき折も有となり或はえよみえぬ折も有となり　又ましてとは歌の返し待よりまさりて心もとなき事となり其由以下の詞にいへり　たゞにいひかはすとは假物にいひかはしかたらふ程なり　時の間とは少時出逢かたりなどせしにうき名もたち懐姙なども有しと也是則氣づかひ心もとなき義也　又心地あしく物おそろしき程とは煩の時は氣血不順にして物おそろしき物也或又雷電風雨の烈しき夜などは明日を待程尤心もと無也　まつはぐろめとは五倍子鐵汁を付仕舞迄の間よくつけるかと心もとなしと也ひるは仕舞事を云也

（ム）源氏紅葉賀に此御事の極月も過にしかこゝろもとなきに此月はさりともと宮人も侍聞へ内にも御心まうけあるにつれなくて立ぬ御物のけにやと世の人も聞へさはぐを宮いとわびしう此事により身のいたづらに成ぬべき事とおほしなげくに御心地もいとくるしくてなやみ給ふ中將の君はいととおもひあはせて御すほうなとわさとはなくてところ／＼にせさせ給ふ世中のさためなきにつけ

てもはかなくてやみなんと取あつめてなけき給ふに二月十日あまりの程に男みこ生れ給ひぬれは名殘なく内にも宮人もよろこび聞へ給ふトあり心もとなき義同し作例なり是は源氏に藤つほの御産の程過る事をいへる義なれはいまの本文にいる事にては侍らねと心もとなき物子うむ人の程過ると云詞に便あれは記し侍りぬ　(ウ)伊勢物語云むかし男有けり身はいやしなから母なん宮なりけるその母長岡といふ所にすみ給ひけり子は京に宮つかへしけれはまうつとしけれとしは〳〵えまうてすひとつ子にさへありけれはいとかなしうし給ひけりさるにしはすはかりにとみの事とて御文ありおとろきてみれは歌なり「老ぬれはさらぬわかれのありといへはいよ〳〵みまくほしき君かな　かの子いたう打なきて詠る「世の中にさらぬ別のなくもかなちよもといのる人の子のため　此心にて少納言のかゝれしとみえたり　(ヰ)粘ソクイヒ屬飯　同　(ノ)和名抄云唐令曰笞大頭二分小頭一分半和名之毛度又云杖皆削去節目長三尺五寸計りみな犯人を扣罪なふ道具也　令義解云凡杖皆削去節目謂笞杖亦准此也長三尺五寸訊囚及常行杖大頭徑四分謂雖訊笞罪囚猶用四分杖也小頭三分笞杖謂用之笞刑之杖也大頭三分小頭二分柳長四尺以下三尺以上楷長一尺八寸以下一尺二寸以上其決杖笞者臀受拷訊者背臀分受須數等謂假犯杖九十應拷三度者每拷臀背分決十五之類也　此しもとにて打たゝく事を異朝漢の景帝の時に議して云文帝肉刑を除て輕刑の名有といへとも法をつかさとる者笞にて多くたゝく故重罪にことなる事なし其上おほかたたゝき殺さる或は死せされ共かたわ者となりて用にたゝす今より定て笞五百を三百とし三百を二百とせよといへり其後またあらためて三百を二百とし二百を一百とす景帝又箠令を定む箠の長さ五尺ふとさ一寸の竹なり末のほそさ半寸其ふしをけつりすつ笞にあつるもの臀をうつうつ人をかへす一人してうたしむ手の草臥てあたりのつよからさる事を用てなり又本朝には罪の限り程産物を出し贖て笞罪にかゆる事あり是則本朝神代の遺風にして異國にことなる由なり
(ヲ)つれ〳〵云犯人を笞にてうつ時は拷器によせ

てゆひつくるなり拷器のやうもよする作法も今はわきまへしれる人なしとそ　よするとはしはり付る作法也　(オ)五十日百日(ク)胞衣エナ俗にのちのものと云なり　(ヤ)煎炭イリズミ　俗にをこしすみと云なり　(■)源氏夕顔に物の足をとひし〳〵とふみならしつゝうしろよりくる心地す惟光とくまいらんなんとおほすありかさためぬものにてこゝかしこ尋ける程に夜のあくる程の久しさはちよをすくさん心地し給ふトアリ同し作例なり

故殿の(ヌ)御ぶくのころ、六月三十日の御祓といふ事に、出させ給ふべきを、(ミ)しきの御ざうしは方あしとて、官のつかさのあひたん所に、わたらせ給へり、其夜はさばかりあつくわりなくやみにて、何事もせばう(ケ)かはらぶきにて、さまことなり、例のやうには格子などもなくたゞめぐりて御簾ばかりをぞかけたる、中々めづらしうおかし、女房庭におりなどしてあそぶ、前栽には、萱草といふ草をませゆひて、いとおほくうへたりける(コ)花きはやかに、かさなりて咲たる、むべ〳〵しき所の前栽にはよし、(エ)時づかさなどは、たゞかたはらにて、鐘の音も例には似ず聞ゆるを、ゆかしがりて、わかき人々二十餘人ばかり、そなたにゆきてはしりより、(テ)たかきやにのぼりたるを、これより見あぐれば、うすにびのもからきぬ、おなし色のひとへ重ね、紅のはかまどもをきて、のぼり立たるは、いと(ア)天人などこそ、えいふまじけれど、そらよりおりたるにやとぞみゆる、おなしわかさなれど、をしあげられたる人は、えまじらて、うらやましげにみあげたるもおかし、日暮てくらまぎれにぞ、過したる人々みなたちまじりて、右近の陣へ物見に出来て、たはふれ笑もあめりしを、かうはせぬ事なり、上達部のつき給ひしなどに、女房どものほり、上官などのゐるしやうしを、皆打とをしそこなひたりなど、くるしがるものもあれど、聞もいれず、やのいとふるくて、かはらぶきなればにやあらん、あつさの世にしらねば、御簾の外に夜もふしたるも、ふるき所なれば、(キ)むかでといふもの、日ひとひおちかゝり、(ユ)はちのすのおほきにて、つきあつまりたるなど、いとおそろしき、殿上人日ごとにまいり、夜もゐあかし、物いふを聞て、あきはかりきや、太政官の地の、今やかうのにはとならん事をと、すじ出たりし

人こそ、おかしかりしか、秋になりたれど、かた(三)へすゞしからぬ風の、所からなめり、さすがに虫の聲などは、聞えたり、八日ぞかへらせ給へば、七夕祭(タナバタマツリ)などにて、例より(四)ちかう見ゆるは、程のせばければなめり、宰相の中將忠信、宣方(ノブカタ)の中將(五)と參り給へるに、人々出て物などいふに、つゐてもなく、あすはいかなる詩をかと云に、いさゝか思ひめぐらしとゞこほりもなく、人間(ニンゲン(ヒ))の四月(ウツキ)をこそはと、いらへ給へる、いみじうおかしきこそ、すぎたる事なれど、心えていふはおかしき中にも、女房などこそ、さやうの物わすれはせね、男はさもあらず、よみたる歌をだに、なまおぼへなるを、誠におかし、內なる人も、外なる人も、心得ずとおもひたるぞ、ことはりなるや　第二節故殿の御服の比中宮官の廳のあきたる所におはしますあひたの事をかけり又追の心もとなき義は詞の中におほく見えたり筆者心もとなき大意は宰相の詩の嗜に就て心もとなきと云義成べし　故殿の御ぶくとは道隆公長德元年四月十日に薨去し給ふ此御服也　御祓といふ事に出させ給ふべきとは中宮の水無月祓に出給ふにやせばうかはらぶき以下は太政官の廳のやうすを云也　女房達とは中宮伺公の女房達也　前栽以下は宮の廳の前のやうすを云なり　時つかさとは漏刻の者の類なり　鐘の音とは時司の鐘なり　例には似ずとは內裏にて聞しとは引かへて程ちかう聞ゆる由なり　わかき人々とは女房達なり　たかき屋とは高樓なり　うすにび以下女房の裝束なり　天人とは譬へ云なり高樓に居る故其縁にて喩(タトヘ)云なり　をしあげられたる人とは同し女房の中にても上臈を云義なり　うらやましげにとは上臈のうらやみ見る心なりかろ〴〵しく身をふるまう事ならねはわかき女房達をうらやむとなり　過したるとは晝を堪忍し過したるなり日暮には上臈も立まぎれ出給ふ由なり　かうはせぬ事とはおとなしき女房の諌めいふ詞なり　上達部のつき給ひしなどにとは上達部の着座する所へ女房ののぼり遊ふとなり　聞もいれずとは若き女房達の聞もいれずして遊び荒む心なり　かはらぶきなればにやあらん以下は宮の廳のさまを云なり　殿上人日ごとに參りとは中宮へ御見舞などに參り或に直宿などし給ふ義也　秋はかりきやとは太政

官の廳のあれたる事をいはん爲なり物の荒るゝ事秋にしくはなしされば秋より外に此宮の廳の野郊とならん事をはかりきやはかりはせざりしかとなり前に屋のいひとふるくてかはらぶきなればにやと書つゞけし文勢(ブンセイ)をよく味はふべし是則はかりしらぬといふは題の心もとなきと書し義也　所からとは官の廳のむさ〳〵とし侍れば涼しうも侍らぬとなりむつかしげなる所は必ず涼しからぬ物なり　八日ぞかへらせ給ふとは中宮御服の此御曹司官廳などに御庵(オハシマセ)しか此文月八日には內へかへり入せ給ふと也則文月の六日にいふ詞なり　例よりちかう見ゆるとは官廳にて七夕(タナバタ)祭る體を云なりせばき所より空を見れば近(チカク)見ゆる物也　參り給へるとは中宮へ御見廻に參り給へるなり　人々とは中宮の女房達なり　おすはいかなる詩をかとは明日七夕祭りの詩はいかゞ作り給ふぞと女房達が忠信宣方へ尋問ふ心なり　いさゝか思ひめぐらしとゞこほりもなくとは忠信のすみやかに返答し給ふ由なり　人間の四月とは忠信の詞なりいふ心は我は天上七夕の事は思ひよらずたゞ人間界の四月をこそ思ひわすれねとなり是則道隆公薨去の事を忘れぬとなりいみじうおかしとは殊勝に思ふとなり女房達の感ずる心なり　過たる事とは人間の四月道隆公の事は過たる事なれ共忘れず心得ての給ふは殊勝なるとほむる義なり　中にも女房などこそ以下は忠信をほめ感ずる義を云　物わすれはせねとは女は心はかなきゆへむなしく過給ふ人の御事を忘れかね思ひ暮し侍る物を中々忠信の男の身にて道隆の御事を忘れずの給ふよと感ずるなり　心得すとは只今道隆の御事は思ひよらざりしにとなり內外の人は思ひよらねば只何の詩ならんと心もとなきさまにて有しとなり

(× 道隆公の御喪服なり中宮定子着給ふなり

(◎)職御曹司　シキノミザウシ前に見えたり　○此祓を名越祓とも水無月大祓とも云也　令云凡六月十二月晦日大祓東西文部(ヤマトカウチノフヒトベ)上祓刀(ノツトヲ)讀祓詞訖百官男女聚集祓所中臣宣祓詞卜部爲解除　公事根源云大はらへといふは百官こと〳〵く朱雀門にあつまりて祓をし侍るなり六月十二月二たび有天武天皇の御時よりはしまる解除(ハラヒ)は觸穢なとの

時にあり神事を行時は臨時にもつねにあれとも此大祓は百官一同にあつまりて祓をするなり又けふは家々に輪をこゆる事あり　「みな月のなこしの祓する人はちとせのいのちのぶといふなり　此歌をとなふるとそ申つたへ侍る然るに法性寺關白の記には「思ふ事みなつきねとてあさの葉をきりにきりてもはらへつる哉　此歌を詠すべきとみえたり　神祇式第八云六月晦大祓十二月准之集侍親王諸王諸臣百官人等諸聞食止宣天皇朝廷爾仕奉留比禮挂伴男手襁掛伴男靫負伴男劒佩伴男伴能八十伴男乎始氐官々爾仕奉留人等乃過犯家牟雜々罪乎今年六月晦之大祓爾祓給比淸給事乎諸聞食止宣云々東文忌寸部獻横刀時呪西文部准此謹請皇天上帝三極大君日月星辰八方諸神司命司籍左東王父右西王母五方五帝四時四氣捧以祿人請除禍災捧以金刀請延帝祚呪曰東至扶桑西至虞淵南至炎光北至弱水千城百國精治萬歳萬歳萬歳　此時に齋部祓具司中臣祝詞を宣事あり其次第とも事しけく神道の大事共也中臣祓相傳の時沙汰するなり　（ケ）瓦葺カハラフキ　（フ）和名云兼名苑云萱草一名忘憂萱音喧漢語抄云和須禮久佐俗云如環藻二音云々　又菊葱とも書也　（コ）俗にきつかりと云心に同し義也　（エ）職員令云漏尅博士二人掌率守辰丁伺漏尅之節守辰丁二十人掌伺漏尅之節以時撃鍾鼓　義解云漏尅博士權相當從七位下五位六位其任之者[illegible]下の十四巻に見ゆ　（テ）鐘鼓なとつれる所なるべし樓臺にはあらざるべし　（ア）毘婆沙論云諸趣最勝故光明照耀故名天也　大智度論云有四種天一名天謂今國王稱天子二生天謂四天王等已上天也三淨天謂人中生諸聖人也四生淨天即上界生諸聖人也　今本文にいふ天人は四王天以上の光明を帶たる世界の人を云なり　（サ）右近の陣　前に見えたり　（キ）和名云兼名苑云蜈蚣一名蝍蛆一名百足和名無加天　（ユ）同云説文云蜂䖟螫人虫也　和名波知　（メ）太政官廳は八省院の東宮内省の西主計寮の北に有　（ミ）古今三夏と秋と行かふ空の通路はかたへすゞしき風や吹らん　（シ）藤氏家譜云

魚名 正二 左大臣 五代 ── 山陰 從三 中納言 ┬ 有頼 從五 但馬守
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 └ 兼三 從四 六奧守 ── 祐之 正五 伊勢守
　　　　　　　　　　　　　　　 └ 忠信 正曆四十二出家號美濃三位 從三位信乃美濃守母中務卿惟道女云々

(ヌ)宣方の中將　傳系圖前に見えたり　(ヒ)人間の四月　詩賦の詞のやうに見え侍れ共未レ考ニ得之一或又古語を尋ぬる迄に不レ及只道隆公の薨去の時分を忘れかたきと云心にてすみ侍るへししゐて古語を尋ねん人の爲に作例をしるし侍るへし　白氏文集十六云　大林寺桃花「人間四月芳菲盡山寺桃花始盛開長恨春歸無ニ覓處一不レ知轉入レ此中來」

此三月三十日、細殿の一の口に、(モ)殿上人あまたたてりしを、やう〳〵とすべりうせなどして、たゞ頭中將(セ)源中將(ス)六位一人殘て、萬の事いひ、經よみ歌うたひなどするに、あけはてぬなり歸なんとて、露は別の(一)涙なるべしといふ事を、頭中將打出給へれは、源中將も諸ともに、いとおかしうずむじたるに、いそぎたる七夕かなといふを、いみじうねたがりて、曉の別のすぢの、ふとおぼへつるまゝにいひて、わびしうも有わざかなと、すべて此わたりにては、かゝること思ひまはさずいふは、口おしきぞかしなといひて、あまりあかく成にしかば、かづらきの(二)神今ぞすぢなきとて、わけておはしにしを、七夕の折此事をいひ出ばやとおもひしかど、宰相になり給ひしかば、かならずしも、いかでかは、其程に見つけなどもせん、文書て主殿司(トノモツカサ)してやらんなどおもひしほどに、七日に參り給へりしかば、うれしくて、その夜の事などいひ出ば、心もそへ給ふ、すゞろにふといひたらば、あやしなどうちかたふき給はん、さらばそれには、ありし事いはんとて有に、露おぼかめで、いらへ給へりしかば、誠にいみじうおかしかりき、月比はいつしかとおもひ侍しだに、わが心ながらすき〳〵しとおぼへしに、いかで、さはた思ひまうけたるやうにの給ひけん、もろともにねたがりいひし中將は、おもひもよらでゐたるに、ありし曉の事は、いましめらるゝはしらぬか(三)とのたまふにぞ、げにさしつなどいひおとこはちやうけんなどいふ事を、人にはしらせず、此君と心得ていふを、何事ぞ〳〵と、源中將そひつきてとへど、いはねば、彼君になをこれのたまへとうらみられて、よき中なれば聞せてけり、いと

あへなくいふ程もなく、ちかうなりぬるをば、押小(四)路の程ぞなどいふに、我もしりにけると、いつしかしられんとて、わざとよび出て、碁盤侍るや、まろもうたんとおもふはいかゞ、手はゆるし給はんや、頭中將と、ひとし碁なり、なおぼしわきそといふに、さのみあらば、さだめなくやといらへしを、彼君にかたり聞へければ、うれしくいひたる所こひ給ひし猶す(五)ぎたる事わすれぬ人はいとおかし

第三節前の節につゞゐて宰相中將の事をいふなり前節の時分と別なる故分て釋し侍るなり大意は題の心もとなきといふ義をはなれずよく心得見るべし　此三月とは前に六月といひし其まへの三月なり　殘てとは細殿に殘り居てなり　歸なんとは頭中將などの退散せんとなり　露は別のとは別るゝ心をいはん爲に此詩をうたふなり　いそぎたる七夕かなとは女房の詞なり露は別の涙の詩は七夕の別を賦したる詩なれば三月の比は時節相應せぬと云義なり　いみじう以下は宰相中將の詞なり女房の尤めしをねたがりてなり　曉のすぢの以下は別の詩を誦せし趣を斷云也　あまりあかくとは詩の事をいふ程に明はなるゝと也　七夕の折とは前節にいひし七夕の比也　此事とは三月にすじ給ふ詩の時分に應ぜざりし事を七夕の折いひ出て笑はんと思ひしと也　いかでかはその程に見付なともせんとは宰相に成給へばおほやけに御いとまなく又官職やんごとなければ中將にておはせし折のやうに心やすからねば女房達の逢見る事も必ずと定がたきと也　文かきて以下は女房の心也　七日に參り給へりしとは宰相の七夕の日中宮の御方へ參り給ひしと也　うれしくてとは女房のうれしく思ふ由也　其夜の事とは三月の夜也　心もそへ給ふとは露は別の涙といひし夜の事を只今わざといひ出なば下心などありてやと宰相の心をそへ給はんと也　あやしなどやうちかたぶき給はんとはふといひいでなば忌れなどして不審に思ひ給はんとなり　それに有し事とは宰相の身の上に有し事を申へしといひかくる義也　露おほめかていらへ給ふとは宰相の憶し給はて何事にてもの給へと答へ給ふ由なり　月ころとは三月より此かた七夕の折迄月比と也女房が待まうけし趣をいふ也　わが心から

とは女房の心ながらとなり　思ひまうけたるやうにとは宰相の露おほめき給はぬさまをいふなり　もろともにねたかり云し中將とは三月に詩の事に就て女房をねたかりし中將宣方なり　思ひもよらでとは宣方は三月の事を思ひよらでとなり　ありし曉の事とは三月の事を女房かいはるゝぞと敎給ふなり則忠信の宣方へ敎給ふなり　げにさしつとは宣方の返答なり　人にはしらせすとは源中將宣方にはしらせず　此君と心得て云とは忠信と女房とは心得て物語するなり　源中將はそひつきてとへとは細殿にて女房に問へといはねば退出の道すがら忠信に恨み問ふ義なり　彼君とは忠信なり　よき中なれば聞せてげりとは忠信の女房と物語のやうすをいはれしとなり　ちかうなりぬるとは女房の里の家ちかく來りたるとなり　押小路の程とは忠信の宣方へ敎へらるゝ義なり我もしりけりとは宣方の詞なり　いつしかしられんとはつゐにはしられんとなりいつにてもつゐには立寄らんと云心なり　わざとよび出て以下は只今歸るさによび出るにはあらず或時に態と來りよび出る由なり

碁盤以下は宣方ゝ詞なり　さのみあらばさだめなくやとは女房の詞なり　かの君にかたり聞ければとは後に宣方の忠信へ語り給ひしとなり　うれしくいひたる所こひ給ひしとは忠信の返答なりよくぞ碁の事を所望せられたるといふ義なり　なをすきたる事以下は地の詞なり　すきたるは碁を數寄たるなり　凡忠信と女房との物語を宣方の心もとなう思はれし義なれば當段の中に書れしなり

(モ)弘徽殿の南北に廊有それを細殿と云細殿の第一の戸を云なり源氏に三の口といふも此間の事なり　(セ)頭中將前に有忠信卿なり　(ス)源中將宣方卿なり　(一)菅家文草五云七月七日代ニ牛女一惜レ曉更各分ニ一字一應レ製云々　年不ニ再秋一夜五更料知靈配曉來情露應ニ別淚一珠空落雲是殘粧髻未レ成恐レ結レ橋思レ傷ニ鵲翅一嫌レ催レ駕欲レ啞ニ鷄聲一相逢失間分寸三十六句一水程　朗詠にはみぎの詩の胸句を詠せらるゝなり　覺明法云白氏六帖曰鮫人出ニ水中一寄ニ宿人家一臨レ去泣而出レ珠盈レ盤以與ニ主人一曰泉客慷慨以泣レ珠文集云頭變ニ雲髮一言織女以レ露爲ニ別淚之珠一以レ雲爲ニ總角之髮一云々　(二)拾遺十八いは

く大納言朝光下らうに侍ける時女のもとにしのひてまかりてあかつきにかへらしといひけれは　春宮女藏人右近（二）岩橋の夜の契も絶ぬへしあくる佗しきかつらきの神今案此歌小大君の家集にも見えたり　かつらきの神の因緣袖中抄奥義抄なとに委しく此神かたちみにくきを耻てよる〳〵久米路の岩橋をかけ給ひし事をよめり世の人なべてしれる事なれば略し侍るなり　（三）ちやうけん漢の張騫が銀河を尋行仙女に逢し事を只今の七夕天河なとの沙汰に思合せていふなり　（四）拾芥云二條瘂小路云々或押小路云々　（五）數奇　スキタルコト　或云過たる事なり初の義は淸んてよむ心なり後の義はき文字濁る心なり

宰相になり給ひしを、うへの御前にて、詩をいとおかしうずむじ侍りし物を、蕭會稽の古廟を過しなども、誰かいひ侍らんとする、しばし、ならでもさふらへかし、口おしきになど申しかば、いみじうわらはせ給ひて、さなんいふとて、なさじかしなど、おほせられしもおかし、されど、なり給ひにしかば、まことにさう〴〵しかりしに、源中將をとらずと思ひて、ゆへだちありくに、宰相の中將の御うへをいひ出て、いまだ三十の（七）ごにおよばすといふ詩を、こと人には似ず、おかしうずじ給ふなどいへば、などかそれにおとらん、まさりてこそせめとてよむに、更にわろくもあらずといへば、わびしの事や、いかであれかやうにずんせてなどの給ふ、三十のごといふ所なん、すべていみじう、あひぎやうつきたりなどいへばねたがりてわらひありくに、陣につき給へりける折に、わきてよび出て、かうなんいふ、猶そこをしへ給へといひければ、わらひてをしへけるもしらぬに、つぼねのもとにて、いみじくよく似せてよむに、あやしくてこはたそといへば、ゑみ聲になりて、いみじき事聞えん、かう〳〵、昨日陣につきたりしに、とひ來て立にたるなり、誰ぞと、にくからぬけしきにてとひ給へればといふも、わざと、さならひ給ひけんおかしければ、これだに聞ば、出て物などいふを、宰相の中將のとく見る事、四方にむかひて、おかむべしなどいふ、下に有ながら、うへになどいはするに、これをうちいづれば、誠には有などいふ。御前にかくなど申せば、わらはせ給ふ　第四節女房

達の忠信宣方の朗詠し給ふ事を品定する由をかけり其品定の心もとなきといふ義にて當題の中に書れしにや武又前節に忠信宣方の事をいひしつゞきなれば書つゞけられしにや何れの心にても心もとなきと云題の義は詞の中におほく含めり心をつけて見るべし　宰相になり給ひし以下は忠信の宰相になり給ひしかば今迄のごとく中宮のかたへも參り給ふまじと餘波をしがる義なり宰相は顯職にて隙なきゆへなり　うへの御前とはみかど中宮のおはします內へ參り給ひて詩を面白くずし給ひしにとなり　蕭會稽とは友に寄たる詩なりこれらの詩をも今より誰か誦せんぞとなり　しばしならでもとは宰相にしばしならずおはしましてとなりみな是前かたの事などいひて女房達の餘波をしむ義なり　いみじうわらはせ給ひてとはうへの笑せ給ひて女房達がさやうにいふとても宰相になさではならぬぞと仰らるゝ義なり　されどなり給ひにしとは如此餘波をしめ共つゐに成給ふとなり　誠にさうぐしかりしとは忠信の今迄のごとく內へ參り給はねばさびしかりしとなり　源中將をとらずとは宣方はいまだ宰相になり給はねば內へも參りゆへだちありき給ふとなりゆへだちとは宰相の中將の御うへとは忠信の事を少納言の噂せらるゝ義なり　こと人には似ずとは宣方に對して忠信をほむる心なりこと人は宣方にあたりて云義なり畢竟忠信の宣方よりよく朗詠し給ふ義をいへり　などかそれにをとらん以下は宣方の詞なり　さらにわろくもあらすとは少納言の詞なり殊更にわろくは侍らねどいみじうなきとなり　わびしの事や以下は宣方の詞なり　三十のごといふ所なんすべていみじとは少納言の詞なり宣方はかやうにずんせてはとの給へ共猶忠信の誦じ給ふ三十のごの所こそまさりていみじけれといふ義なりねたがりてとは宣方をりけるとは忠信の參內の折に傍へよびて少納言が贔負の女房が聞てねたがるとなり　陣につき給へ彼朗詠を習はるゝなり是則宣方贔負の女房に聞せんためなり　わらひてをしへけるもとは忠信の笑ひてなり少納言の習はるゝ趣向を聞てわらひ給ふ義なり　しらぬにとは彼女房はしらぬとなり　つ

ぼねのもとにてとは彼女房の局の前にて宣方の聲に似せて少納言の誦せられしとなり　あやしくてとは宣方かと思ひて彼女房があやしむとなり　ゐみ聲になりてとは少納言の返答なり　かう〳〵とは忠信に習し事の趣をあかし給ふなり　たれぞとにくからぬけしきにて以下は女房の尤めしさまを少納言の批判せらるゝ心なり　わざとさならひ給ひけんとはにくからぬけしきにてとひ給ふと只今ほめていふも別の心にあらず日比宣方に馴て其人を誰との給ふけはひのさまならんと思ひておかしきとなりこれだにとは宣方中將のまねをしてだに出て聞ゆかしがり給ふにまして宰相忠信の德儀を見るにつけてはおがみもすべき事ぞと云義なり少納言の彼女房にいはれし詞なり　下に有ながらとは宣方の參內せで下に居給ふ時と云義なり　うへになどゝは宣方御前におはしますと彼女房に僞りいひ聞せてなり　これをとは彼宣方の聲に似せて詩を誦じつれば女房がのぶ方の參內し給ふとて悅ぶとなり　御前にかく申せはとは中宮へ少納言の如此物語申しあぐれは興ぜさせ給ふとなり　凡忠信宣方の朗詠し給ふを何れがよろしからんと評につゐて心もとなき題の中にかゝれし成べし或又彼女房が宣方にたはふるゝけはひあれば其下心心もとなきと云義成べし

(六)朗詠云　交友序後江相公「蕭會稽之過ニ古廟一託締ニ異代之交一張僕射之重ニ新才一推爲ニ忘年之友一覺明注云會稽大守蕭氏憶ニ其賢一遊ニ吳季札古廟一故曰ニ異代之交一云々　(七)三十のごにおよはずとは不レ及ニ三十期一と云句にや本文に詩とあれ共未考得詩ならば七言の句成べし七言の句を切て本文にいふ成べし五言の句にして見れは未レ覃ニ三十期一書成べし或又序か賦などの詞にや序賦の詞をも詩といへる例おほく侍るなり今疑しきを闕て後の學者を俟のみ

內の御物忌なる日、右近のざう官みつ(八)何とかやいふものして、たたう紙に書ておこせたるを見れば、さんぜんとするを、けふあすは御物いみにてなん、三十のごにをよばすは、いかゞといひたれば、返事に、其期は過ぬらん、朱買臣(九)がめををしへけん年にはしもと、書てやりたりしを、又ねたがりて、うへの御前

にもそうしければ、宮の御方にわたらせ給ひて、いかでかゝる事はしりしぞ、四十九になりける年こそ、さはいましめけれとて、宣方は、わびしういはれにたりと、いふめるはと、わらはせ給ひしこそ、物ぐるおしかりし君かなと覺へしか　第五節前節のつゞきに宣方へ彼女房の心入有さまの心もとなき義をかけり　內の御物忌とは禁中の御物忌なり　おこせたるとは宣方より中宮へ披露の趣かき少納言迄おこせし成べし　さんせんとする以下は宣方よりの文の詞なり中宮へ御見舞に參せんとすれ共今明日うへの御物忌故御見廻申あげぬとなり　三十のごにをよばずはいかゞとは宣方の述懷して書れし文章なり最前より忠信の三十の期とずじ給ふをいみしとの給へば我等はそれに及ばぬ身にて御見廻申事中々如何侍らんとなり　返事にとは少納言よりの返事になり　そのごは過ぬらんとは三十の期は過給はんと返事に云なり宣方よりの文の趣は忠信の誦し給に及ばぬ身にては參るもいかゞと云義なり返事には朗詠の事はいはで其詩の詞に三十の期と云に對して宣方の齡の程戯れいふ義なり　朱買臣とは後書にみえたり是則少納言返事の詞なり御文の詞に三十の期に及ばずと侍れ共宣方の御齡はやう〳〵たけ過て朱買臣か妻を敎へしごとく五十計にも近つき給ひなんと戯れいひ送る義なり　又ねたがりとは前に宣方を贔負して少納言をねたがりし女房なり又と云字心を付べし　うへの御前とは御門の御前にてねたがりし女房が返事のやうすを奏せしとなり　宮の御方にわたらせ給ふとは御門の中宮へ渡御まし〳〵て彼女房が奏せし事を御物語有と也　いかでかゝる事はしりしぞとは宣方が齡をいかで少納言はしりけるぞとなり御門の御詞なり　四十九になりける年こそとは宣方四十九ならば朱買臣にもたとへめいまた四十の比なる物をとなり　わびしういはれにたりとは少納言にわびしういはれしとなり　いふめるは彼女房がいふめるはとなり是迄御門の御詞なり　物くるおしかりける君かなとは少納言の戯れていひし事を彼女房が御門へ奏し人々にもいひ觸るれば物くるをしき君かなとなりこれすなはち女房が宣方を贔負していひ廻れば其下心心もとなきと云義なり

（△）職原云元者近衛中衛也平城天皇御宇大同二年勅以近衛為左近衛以中衛為右近衛云々　職員令云督一人掌下檢校兵衛分配閤門以時巡檢車駕出入分衛前後及左兵衛名帳門籍事上佐一人大尉一人少尉一人大志一人少志一人醫師一人番長四人兵衛四百人使部三十人直丁二人　（八）みつ何とは實名を聞もらしてしれぬ義なり　（九）前漢書六十四云朱買臣字翁子呉人也家貧好讀書不治産業常艾薪樵賣以給食擔束薪行且誦書其妻亦負戴相隨數止買臣毋歌嘔道中買臣愈益疾歌妻羞之求去買臣笑曰我年五十當富貴今已四十餘矣女苦日久待我富貴報女功妻恚怒曰如公等終餓死溝中耳何能富貴買臣不能留即聽去其後買臣獨行歌道中負薪墓間故妻與夫家俱上冢見買臣饑寒呼飯飲之後數歲買臣從上計吏為卒將重車至長安詣闕上書書久不報待詔公車糧用乏上計吏卒更乞匄之會邑子嚴助貴幸薦買臣召見說春秋言楚詞帝甚說拜買臣為中大夫與嚴助俱侍中云々上拜買臣會稽太守上謂買臣曰富貴不歸故鄉如衣繡夜行今子如何買臣頓首辭謝詔買臣到郡治樓船備糧食水戰具須詔書到軍與俱進初買臣免待詔常從會稽守邸者寄居飲食拜為太守買臣衣故衣懷其印綬步歸郡邸云々其故人素輕買臣者入視之還走疾呼曰實然坐中驚駭白守丞相推排陳列中庭拜謁買臣徐出戶有頃長安廐吏乘駟馬車來迎買臣遂乘傳去會稽聞太守且至發民除道縣吏並送迎車百餘乘入呉界見其故妻妻夫治道買臣駐車呼令後車載其夫妻到太守舍置園中給食之居一月妻自經死買臣乞其夫錢令葬悉召見故人與飲食諸嘗有恩者皆報復焉居歲餘買臣受詔將兵與橫海將軍韓說等俱擊破東越有功徵入為主爵都尉列於九卿云云

弘徽殿とは、（十）閑院の太政大臣の女御とぞ聞ゆる、その御方に、うちふしといふものゝむすめ、左京といひてさふらひけるを、源中將かたらひてんなど、人々笑ふころ、宮のしきにおはしましに參りて、時々は御とのゐなど、つかうまつるべけれど、さるべきさまに女房など、もてなし給はねば、いと宮つかへをろかにさふらふ、宿直所をだに給はりたらんは、

いみじうまめにさふらひなんなど、いひ居給ひつれば、人々實などいふほどに、誠に人はうちふしやすむ所の有こそよけれ、さるあたりには、しげく參り給ふなるものをと、さしいらへたりとて、すべて物聞へず、かた人とたのみのみ聞ゆれば、人のいひふるしたるさまに、とりなし給ふなど、いみじうまめだちてうらみ給ふ、あなあやし、いかなる事をか聞へつる、さらに聞とゞめ給事なしなどいふ、かたはらなる人を引ゆるがせば、さるべき事もなきを、ほ〔ロ〕とをり出給ふさまこそあらめ、とて、花やかにわらふに、是もかのいはせや給ふならんとて、いと物しとおもへり、更にさやうの事をなんいひ侍ぬ、人のいふだに、にくきものをといひて、引入にしかば、後にもなを、人にはぢがましき事いひつけたると、うらみて、殿上人のわらふとて、いひ出たるなりとのたまへば、さては、一人をうらみ給ふべくもあらざめる、あやしなどいへば、其後はたへてやみ給ひにけり

第六節前節のつゞきに宣方の事をかけり宣方の左京に心有由憂名(ウキナ)立ければ宣方聞て少納言のもらせしにやと恨み給へば少納言其斷をいひて我は洩し侍らぬを如何なる者のいひなしにや心もとなしと云義なり　御宿直とは源中將宣方の宿直せられんとなり　女房などもてなし給はねばとは中宮の上臈達の有やなしやに思召との不足なり則ち時々はと云より源中將の詞なり　宿直所をだに給はりたらんは以下宣方の述懐の心を申さるゝなり宿直まふす居所さへしか〳〵定め給はらぬとなり　まめにさふらひなんとは心うれしからんとなり又云心まめに宿直まうしさふらはんとなり是迄宣方述懐の詞なり　人々實などゝは女房が宣方の述懐を聞て尤と挨拶するとなり　誠に以下は少納言の詞なり　うちふしやすむとはうちふしのむめ右京が事を下にふくめて宿直所の事に取なして云なり　さるあたりとはうちふしやすむ所の有あたりにはしげく參り給はんとなり　さしいらへたりとてとはうちふしやすむ所の有こそよけれといらへしを宣方の心にかゝりけるにや少納言に物もの給はで恨みられしとなり　かた人とたのみ聞ゆればとは宣方の少納言を方人と頼み思はれしに中々人のいひふるしたるやうにとりなしていはるゝよと深く

恨み給ふ也　あなあやしとは少納言のいらへ也　いかなる事をか聞へつるとは自が何事をか申聞へつるぞと陳しらるゝ義也更に聞とゝめ給ふ事なしとは中宮も更に何の聞とゝめ給ひし事の侍らぬと也　かたはらなる人とは奉犕の女房䄂など引て陳ずる事の證人にする心也、さるべき以下は傍なる女房が證人に成挨拶する義也　さるべきとは何をいひ給ふふしも侍らぬを恨み給ふさまは有ましき事ぞと也　これもかのいはせや給ふならんとは證人の詞も彼少納言がいはする物ならんとうたがひ恨みられしと也　更にさやうの事をなんいひ侍ぬとは宣方向ひて少納言の陳じ詰る詞也いひ侍りぬにやよく吟味し給へ自はいひ侍らぬぞといふ義也　人の云だにとは少納言の猶斷の詞なり後にもとは後日に也　なを人に以下は宣方の後日に又恨み給ふ義　殿上人の笑とていひ出たるとは皆人々が此事をわらふとて殿上人のいひ出て噂すると也　のたまへばとは宣方のの給へば也よくてにをはを考て心を見るべしむつかしき詞つかひ也　さては以下少納言の詞也皆人々が笑ふと殿上人達の噂するなれば自一人を恨み給ふべからずと也さてはと云詞前へあたりて募る心也　あやしとは我一人を恨み給ふは故こそ侍らめ其故を聞てはあやしう心もとなしと陳じ問詰る義なり　其後以下は宣方の少納言に陳じ詰られて恨みを散じられたる由也

右六節ながら題の心もとなきよし聞へたる歟

(⊙)弘徽殿は前に註す今は女御の御系圖を註するなり

(十)藤氏家譜云

師輔
- 伊尹　謙德公
- 兼道　忠義公
- 兼家　法興院
- 爲光　恒德公
- 公季　閑院祖太政大臣従一位諡仁義公
  - 實成　正二大納言
  - 女子　従二位義子一條院女御弘徽殿

大鏡云太政大臣公季のおとゝ只今の閑院のおとゝにおはします是九條殿の十一郎北の方の宮はらにおはします御子の女をそ北方にてはおはしましゝ其御腹に女君一所男君二所女君は一條院の御時の弘徽殿の女御今におはします云々前にも見えたり

（ロ）煩熱　ホトヲリ　怒る時は煩熱し面の色もあ
かく成物也　（ハ）更に聞とゝめ給ふ事もなしトハ
少納言の虚言を宣方の聞留給ふ事もなくてとなり
【八十四段】むかしおぼへてふようなる物、うけんべ
りのたゝみのふりて、ふしいできたる、からゑの屛
風の、おもてそこなはれたる、藤のかゝりたる松の
木かれたる、地ずりのものはなかへりたる、繪師の
目くらき、几帳のかたびらのふりぬる、もかうのな
くなりぬる、七尺のかづらのあかくなりたる、ゑび
染の織物のはひかへりたる、色このみの老くづおれ
たる、おもしろき家の木立やけたる、池などはさな
がらあれど、うき草みくさしげりて　此段かくれた
る義なし彼是十章見へ侍る皆よく題の旨にかなへ
り　むかしおぼへてふようなる物とは當段の題な
りはやういみじかりし事の忘られね共今は用に
たゝぬといふ心なり　からゑの屛風のおもてそこ
なはれたるとは日本繪はそこなはれても書つぐと
いふ事あり唐繪はさはなりがたければ不用なると
也　地ずりとは地白き衣に花田色の紋を摺付るを
云なり　花かへりたるとは色のさめたるをいふな
り昔はねりの衣に摺紋を付し尤色のさめやすきも
のなり　七尺のかづらとは女房の長鬘なり程久
しうなれば赤み侍る物なり　ゑび染の織物のはひ
かへりたるとは是も色のかはりたる義なり　色こ
のみの老くづおれたるとは用にたゝぬ心あきらか
なり　おもしろき家の木立燒たるとは燒し所はい
つこも不用なりといへ共むかし覺えてと云題なれ
ばおもしろき家と云詞肝要なり　池などはさなが
らあれどゝは面白き家居木立は燒失てたゞ池のみ
殘り侍れどもそれも浮萍水草生茂りて掃除する人
もなくむかしのさまに異なれば不用なるとなり
（ハ）繧繝縁　ウケンベリ　（ニ）帽額　モカウ　多
見へたり　（ホ）和名云蘇敬曰又有柃灰燒柃木葉
作之並入染用今案俗所謂椿灰等是也　（ヘ）古
今第十七「今こそあれ我も昔は男やまさか行時も
有こし物を　又「古の賤のをたまきいやしきもよ
きもさかりは有し物なり　又第十九に
【八十五段】たのもしげなきもの、心みじかくて、
人わすれがちなる、聟の夜かれがちなる、六位の頭
しろき、そらことする人の、さすがに人の事なしが

ほに、大事うけたる、一番にかつすく六、(リ)六、七、八十
なる人の、心ちあしうして日比に成ぬる、風吹に帆
あげたる船、經はふだん(ス)經　此段の詞八章あり皆よ
く題のたのもしげなき事を記されたり　たのもし
げなきものとは當段の題也心あきらかなり　心み
じかくてとは男女の中にても朋友の交りにても志
すえとをらて早く忘るゝ人を云なり　短の夜かれ
かちなる此句と上の心みじかくての句と一聯の句
のやうに見え侍れども傳本のごとく別章に分ち侍
るなり　六位の頭しろきとは六位の人徒らに年老
て叙爵の度も洩されたるは行末の齢程なうしてた
のもしげなきとなり　そらことする人とは常に僞
がちなる人なり　さすがに人の事なしがほにとは
人の事肝煎顔に大事も心やすけに請合などすれ共
僞がちなる人なれば末もとげず頼もしげなきとな
り　一番にかつ双六とは賭双六に三番或は十番又
は百壹などいひてうつに初は勝つれど中程にはい
かゞすへまでかたん事おぼつかなう難レ決ければ
一番勝も頼もしからぬとなり　六七八十とは六十
七十八十歳程の人々の事なり老少不定といひなが
ら老人の病氣日頭に成ぬるは殊更頼母しげなきと
なり　風吹に帆あげたるふねとは危見え頼母しげ
なき物なり　ふだん經とは朝夕になれて澤山に思
ひ却て頼母しう思はぬ心なり
(ト)古今十四戀部　右のおほひまうち君すます成
にければかのむかしをこせたりける文ともを取あ
つめて返すとてよみてをくりける典侍藤原よるか
の朝臣「頼めこし言の葉今は返してん我身ふるれ
はをき所なし　返し近院右大臣「今はとて返す言
の葉拾置てをのか物から形見とやみん　(チ)夜離
(リ)人間七十古來稀也杜子美 老眼早覺常殘レ
夜病方先衰不レ待レ年白氏文　(ス)不斷經

八十六段　ちかくてとをき物、宮のほとりのまつ
り、(ル)思はぬはらから、しんぞくの中、(ヲ)くらまのつゞ
(ワ)らをりといふみち、しはすのつごもり、正月の一日
のほど　此段四章あり　ちかくてとをきものとは當
段の題なり心別義なし　宮のほとりのまつりとは
一郷一村に氏神産靈など崇秘奉て年に一度づゝの
祭禮をするはちかくてとをきものなり　おもはぬ
はらからしんぞくのなか此二句を二章にせし義あ

り今一章にして見るべしおもはぬ兄弟思はぬ親族の中はちかくて遠きものなり　くらまのづゝらをりといふ道後書にしるす　しはすのつごもり正月の一日のほどとは一夜をへだつるはちかけれ共去年今年と限るは遠き心なり程の字肝要なり

(ル)唐も夢に見しかは近かりき思はぬ中ぞはるけかりける　(ヲ)九折ツヽラヲリ縈折同文選にみえたり　源氏若紫に高き所にて爰かしこ僧坊どもあらはにみおろさるたゞ此つゝらをりのしもにトかけるも此道の事を云なり　(ワ)小大君家集に「いかにねておくるあしたに云事ぞ昨日を去年と今日を今年と

[八十七段](ヨ)とをくてちかきもの　ごくらく、(カ)舟のみち、おとこ女の中　此段の詞三章なり　とをくてちかき物とは常段の題なり　ごくらくとは極樂なり　阿彌陀經に過十萬億佛土有世界名曰極樂と說たれど觀無量壽經には譬如壯士屈伸臂頃即生西方極樂世界と說或は阿彌陀佛去此不遠とも說ばとをくてちかき物の内にいふ也　舟のみちとは萬里の海上も一帆の順風には程なく行物なればば遠くて近き義分明也　おとこ女の中とは虎ふす野邊鯨よる浦波までも心だに通すればちかしとなり又云恨みかこちて遠さかる中も打とけかたらへばしたしう近しとなり

(カ)阿彌陀經云爾時佛告長老舍利佛從是西方過十萬億佛土有世界名曰極樂其土有佛號阿彌陀今現在說法舍利佛彼土何故名爲極樂其國衆生無有衆苦但受諸樂故名極樂云々　拾遺二十「極樂をねがひてよみ侍ける　仙慶法師「極樂ははるけき程と聞しかとつとめていたる所なりけり　(ヨ)後拾遺八云あからさまにゐ中へまかると女のもとにいひつかはしたりける返事にはしと聞と關こゆるなとあれば遠き心ちこそすれといひて侍ければつかはしける　祭主輔親「相坂の關地こゆ共都なる人に心のかよはさらめや　又女にむつまじく也て程なく遠き所にまかりければ女のもとより雲井遙にいくこそあるかなきかの心地せらるれといひ侍ける返事に遣しける「逢事は雲井はるかに隔つ共心かよはぬ程はあらしを　是等の心にてとおくて近き物男女の中と書る成べし

清少納言枕草紙抄卷十一

【八十八段】 (イ)井は、ほりかねの井、(ロ)はしり井は。相坂なるがおかしき、(ハ)山の井、さしもあさきためしになりはじめけん、(ニ)飛鳥井、みもひもさむしと、ほめたるこそおかしけれ、(ホ)玉の井、(ヘ)少將井、(ト)櫻井、(チ)后町の井、(リ)千貫の井、此段は前の山の段池の段の類に等し

九章あり　井は當段の題なり稱名につき讀し歌などに就ておかしき井どもを書載られしとなり　ほりかねの井とは掘かぬると云詞の縁おかしきとの心なり又云銀などを掘得たるやっにもおぼへておかしき稱ぞとなり　はしり井とは井より涌出早く流るゝ水を云なり　相坂なるがおかしとは相坂の關路を人の往來するにつきて走といふ心かなひておかしきと也　又云走居て逢ふと云心も侍りておかしきと也　山の井とは古來淺ためしに讀ならはすなり此故にあさきためしになりはじめけんと云なり　みもひもさむしとは飛鳥井の所のさまを催馬樂にほめうたひしがおかしきとなり　玉の井とは實を以て名つけしは其德有にや又は玉を掘得たるにやと云心也　少將井とは官を以て名つけし故興有心なり又は祇園の事などおもふにもいみじきとの義成べし　櫻井とは花を以て名つけしが風流にゆかしきとの心なり　后町の井とは是も優しう聞へなつかしきとの心なり又大內御門の近邊に侍ればいみじきといふ心も有べし　千貫の井とは深さまに名つけしのみならず其分量までをいへるがおかしきとなり云々

(イ)掘兼井武藏國にあり　(ロ)走井近江なり走井はところ〳〵にあれども相坂なるかおかしきとなり　(ハ)山の井　ところさだまらずいつかたにても山にある井をいふなり「くやしくもくみ初てけりあさけれは袖のみぬるゝ山の井の水　(ニ)催馬樂に「飛鳥井にやとりはすへしおもかけもよしみもひもさむしみまくさもよし　同注秘抄云飛鳥井は大和國飛鳥河のあたりなり又東京の二條萬里小路に飛鳥井と云處あり其子細未詳かけもよしは木の陰涼しきなりみもひもは寒水なりみまくさは駒にかふ草なり　(ホ)玉の井　大和又は近江と云々　(ヘ)少將井　拾芥云烏丸の東大炊御門の南云々　今烏丸大炊御門下町に遺

跡あり（ト）櫻井　山城或は大和にあり（チ）后町井　禁中五舍の前に有常寧殿の傍なり（リ）千貫の井　未考

【八十九段】受領は、紀伊守、和泉　此段は國の受領のいみじきを云なり二章也　受領はとは如レ例當段の題なり　紀伊守とは南海の上國にして五畿內に隣る國なれば此國の受領は矩模なる由なり　和泉とは五畿內の受領なれば餘の大上國のごとく矩模成義なり但山城等の四ヶ國は五畿の大上國なれば納言參議兼レ之二三位も任レ之されば六位受領の身にしては山城已下の四ヶの大上國を除て和泉守に任ずるは尤矩模なると云心なり和泉の守は五畿の內なればなり

（ヌ）受領とは國守を云なり　職原云神武天皇即位之初繼二神代之蹤一都二日向國宮崎宮一此時天下草昧封域未レ定東征之後初平二中州一定二都於大倭國橿原宮一爾來闢二四門一朝二八方一歷代因准漸開二諸道一十代崇神天皇十年遣二使於四方一所レ向皆以臣伏同年十月更令二四軍一進二發第十三代成務天皇四年始定二國造一同六年始二國坑國造一乃國司名也後改云レ守也（ル）紀伊國キノクニト讀なりキイノクニトハ不レ讀誤なり　民部式云紀伊上七郡正稅公廨各十七萬五千束和名云紀伊國國府在二名草郡一行程上四日下二日管七田七千百九十八町五段百步正公各々十七萬五千束本稻四十六萬八千八百十八束雜稻十一萬八千十八束云々（ヲ）舊事紀云和泉國造元河內國靈龜元年割置二芳野監一則改爲レ國　類聚國史云元正天皇靈龜二年四月甲子割二河內國大鳥日根和泉三郡一始置二和泉監一民部式云和泉國下大鳥和泉日根三郡　和名云和泉國國府在二和泉郡一行程上二日下一日靈龜二年割二河內國大鳥日根兩郡一置二此國一管三田四千五百六十九町六段三百五十七步本稻二十二萬七千五百束云々

【九十段】やとりつかさの權のかみは、下野、甲斐越後、筑後、阿波　此段は廳官の受領を兼て上階する事を云なり五章あり　やどりづかさのこんのかみとは先當段の題なりやどりつかさとは院司の廳官六位の相當なり　權守は大上國の權守五位相當なり六位の廳官の人が大上國の權守を兼れば權守にひかれて五位に叙せらるゝなりされば廳官の權

守を兼五位にて矩模なる由をいへり　下野とは東山道の內の上國なり　甲斐とは東海道の內の上國なり　越後とは北陸道の內の上國也　筑後とは西海道の內の上國也　阿波とは南海道の內の上國なり各上國にて權守あり此權守五位を廳官が兼るとなり又此東西南北の四道におゐて此五ヶ國を書載られたる事條々の子細有別に難閒口決の條傳之
（ワ）職原一禪追加院廳下有廳官諸廳官任諸國介掾假令猶東鑑曰廳官肥後介中原景良皆是自六位諸大夫叙爵次第也　（カ）職原云凡國司者補當五位已下也然而雖四位已上或隨其望應其選古今之例也云々權守者近代多是遙授之官也參議二三位中將少納言等必兼之又殿上六位藏人叙位之時預者即任權守又例也納言以上貶謫之時任諸國權守也仍常儀參議兼國任納言之日即正之云々　（ヨ）舊事紀云下毛野國　案風土記の說昔彼國に野原あり狹野といふ其中に一河あり狹野中河と名つく渡瀨共いふ其河より西に附し國を上毛野國といひ河の東に附し國を下毛野國と云なり是則本朝古例義訓の名なり　和名云國府在都賀郡行程上三十四日下十七日管九田三萬百五十五町八段四步正公各々三十萬束本穎百八萬六千九百三十五束雜穎三十八萬六千九百三十五束云々民部主稅式說同之　（タ）和名云甲斐國國府在八代郡行程上二十五日下十三日管四田萬二千二百四十九町九段二百五十八步正公各二十四萬束本稻四十九萬八千九百三十八束雜稻萬八千九百三十八束五把五分　民部主稅式同之　（レ）和名云越後國國府在頸城郡行程上二十四日下十七日管七田萬四千九百九十七町五段二百七步正公各三十三萬四十五束本穎八十三萬三千四百四十五束雜穎十七萬三千四百四十五束民部主稅式同之　神代口訣云越洲者越角鹿坂稱也　（ソ）筑後國風土記云筑後國者本與筑前國合為一國昔此兩國之間山有峻狹坂往來之人所駕鞍韉被摩盡土人曰鞍韉盡之坂神代口訣云筑紫洲者地形似木菟釋日本紀云此地形如木菟之體故名之也木菟鳥之名此云都久和名云筑後國國府在御井郡管十田萬二千八百餘町正公各二十萬束本穎六十二萬三千五百八十二束雜穎二萬三千五百八十二束　民部式云筑後上十

郡云々（ツ）民部式云阿波上九郡主税式云正税公廨各二十萬束　和名云國府在名東郡云々行程上九日下五日管九田三千四百十四町五段五十五歩正公各三十萬束本穎五十萬六千五百束

九十一段　大夫は、式部大夫、左衛門大夫、史大夫、六位藏人、（ネ）思ひかくべき事にもあらず、（テ）かうふりえて、何の大夫權守などいふ人の、（ム）板屋せばき家もたりて、又小檜垣などあたらしくし、車やどりに車ひきたて、前ちかく木おほくして、牛つながせて草などかはするこそ、（ヰ）いとにくけれ、庭いときよげにて、（ノ）紫かはして伊豫簾かけわたして、布障子などはりてすまひたる、夜は門つよくさせなど、（オ）ことおこなひたる、いみじう（ヌ）をひさきなく（ヤ）心づきなし、親の家しうとはさらなり、おぢあになどのすまぬいゑ、其（コ）さるべき人のなからんは、をのづからむつましう打しりたる、受領又國へ行ていたづらなる、さらずは、（ケ）女院、（フ）宮はらなどの、屋あまた有に、つかさまち出て、後いつしかと、よき所尋ね出て住たるこそよけれ、女の一人すむ家などは、たゞいたうあれて、築地などもまたからず、池などの有所は、みくさゐ、庭などもいとよもぎしげりなどこそせねども、所々沙の中より靑きくさ見へ、さびしげなるこそあはれなれ、物かしこげに、なだらかに（エ）すりして、門はいたう（テ）かため、きはくしきは、いとうたてこそおぼゆれ　是より奥のさはた有けんかしと云まで當段の內なり詞長して容易見分がたし此故に三節に分て注し侍る就中是第一節六位の人の任する官に就ていみしき差をいへり末には文を轉じて其住家の體をいへり其所におゐて斷るべし如此の作例多し所謂神代卷に竪横の說有源氏に幷の卷有されば今此段大夫と云題の下彼是の事をまじへて云やうなれ共畢竟六位の人の身の上に付ていひもてゆく事なれば、大夫と云題の心をはなれぬと知べし是則神代卷横の說源氏並卷の氣味あひなり　大夫は當段の題なりたいうとよむへし八省の丞などの五位に叙したるを式部大夫など云なり又四職の（太皇太后宮職　皇太后宮職　皇后宮職　中宮職）大夫はたいふと稱する習なり　式部大夫とは八省の內式部省の丞は六位相當なり此丞が五位に叙せられ位田を給はる時に式部大夫と云尤矩摸の選

なり左衛門大夫とは左右近將監左右衛門尉左右兵衛尉など六位相當なりそれが五位に叙せられ位田給はる時に左近大夫左衛門大夫など云なり左衛門大夫は顯職にして其仁を撰事古例なれば只今書載られし也　史大夫とは八史は六位の諸大夫なり其中左大史殊に重職なりそれらが五位に叙し位田給はるを史大夫と云なり凡六位の諸大夫が五位に叙せらるゝ中に式部左衛門史などの大夫殊更に矩摸なれば書れたる者なり　六位藏人おもひかくべき事にもあらずとは六位なれ共藏人に補せらるゝはいみじき事成故思ひ懸べき事にもあらずと云則ち諸家の大夫に對していふ心なり　板屋せばき家以下は今迄六位にて有し人の住家なれ共五位叙爵の後はさまかはるやうに覺えていみじうにくげなると云心なり是より下は文を轉じて大夫の住ひたるさまを書るなり（前に釋するごとく源氏丼卷の作例也）親の家しうとはさらなりとは親舅より傳領したる家は板屋せばき家のごとくにあらねば云ふに不レ及となり又云親舅の家を傳貰は定れる事なれば不レ及レ云と也　おぢあになどのすまぬ家とは伯父兄などの他國へ行死去せし跡に其子のなき家をば親戚甥弟などが傳領し下知するとなり　受領又國へ行いたづらなるとは六位巳下の受領の人が任國へ行住家の徒に荒たるは見苦しきぞとなり　さらずはとはさなくはと云義也　女院宮はらとは女院の被官或は宮腹の皇子の被官にて京に居ればやがてよき家の明たる所へ移住まふて受領のゐるは見ぐるしうはなきとなり　女の一人すむ家巳下は受領の人が任國へ行跡にて徒に荒たる屋に女房の留守して居さまを云ふなり

（ネ）六位なれども藏人に成は昇殿聽るゝ故地下の諸大夫が及びなければ思ひかくべきにもあらずとかけり　（ナ）かうふりえてとは五位の叙爵に預りて也　（ラ）何大夫　式部大夫左衛門大夫史大夫などを云也　（ム）權守　大上國の權守從五位下に叙せらるゝ人を云也　（ツ）源氏夕顔卷云此家のかたはらにひかきと云物あたらしうしてかみはしとみ四五けむばかりあけわたしてすだれなどもいとしろうすゝしげなる云々　（ヰ）いとにくけれ　こゝにてはほむる心也　（ノ）紫の緣したる伊豫簾也

(オ)ことおこなひ　いひ付下知する義なり　(ク)地下の諸大夫六位にて諸國受領をへめぐれ共年老ぬる迄何大夫何權守にもえならねは苗なく心つきなしと也　(ヤ)心つきなし　心につかぬと云義なり望みうらやまぬとなり兼好是等の所を感得せるにや徒然草にもそれより下つかたは程につけつゝ時にあひしたり顔なるもみつからはいみじと思ふらめどいと口おしとかけるも此所をうけて書ると見へたり　(マ)其さるべき人　其親舅の家を讓得べき子をさして云也　(ケ)女院　女院の御腹の皇子の方へ仕へて官を待と也　(フ)宮はら　中宮の御腹の皇子方へ仕へ居て時節を待となり　(コ)物かしこげに　受領の人の任國へ行留守の事を物かしこけに下知し置心なり　(エ)すりして　修理してなり破損の所を修理して置義也　(テ)門はいとうかため　關貫樞錠などして用心密しう仕置心也

宮つかへ人の里なども、親二人あるはよし、人しげく出入、奥のかたにあまたさまゝゝの聲おほく聞へ、馬のをとしてさはがしきまであれど、かなし、されど(ア)忍びてもあらはれても、をのづから出給ひけるをしらでとも、又いつか參り給ふなどいひに、さしのぞく心がけたる人は、いかゞはと門あけなどするを、うたて、さはがしうあやうげに、夜半までなど思ひたるけしきいとにくし、大御門はさしつやなどゝはすれば、(サ)まだ人のおはすればなど、なまふせかしげにおもひていらふるに、(キ)人出行なばとくさせ、此頃は盜人いとおほかりなどいひたる、いとむつかしうち聞人だにあり、此人の(ユ)ともなるものども、此かく(メ)いまや出ると、たへずさしのぞきて、けしき見るものどもをわらふべかめり、まねうちするも、聞ては、いかにいとゞきびしういひとかめけん、いと色に出ていはぬも、思ふ心なき人は必ずきなどやする、されど(ミ)すくよかなるかたは、夜ふけぬ御門もあやうかなるといひて(シ)ぬるもあり、誠に志ことなる人は、(ヱ)はやなど、あまたた(ヒ)びやらはるれど猶居あかせば、度々ありくに、あけぬべきけしきをめづらかに思ひて、いみじき御門を、今(モ)夜らいさうとあけひろげてと聞へごちて、あぢきなく曉にぞさすなる、いかゞにくき親そひぬるは、なをこそあれ、ましてまことならぬは、いかに思ふらんとさへつゝましうて、せうとの家なども、げに聞に

はさぞあらん、夜半曉ともなく、門いとかしこく(七)もなく、何の宮内わたり殿ばらなる人々の、出あひなどして、格子などもあけながら(八)、冬の夜を居あかして、人の出ぬる後も見出したるこそおかしけれ、有明などはましていとおかし、笛など吹て出る(一)ぬるを、我はいそぎてもねられず、人のうへなどもいひ、歌などかたり、聞まゝに、ねいりぬるこそおかしけれ、(二)雪のいとたかくはあらで、うすらかに降たるなどは、いとこそおかしけれ、又雪のいとたかく降つみたる夕ぐれより、はしちかう、おなじ心なる人(三)二三人ばかり、火桶中(四)にすへて、物語などする程に、くらうなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪のひかり、いとしろう見へたるに、火箸して灰などかきすさびて、あはれなるもおかしきも、いひあはするこそおかしけれ、宵も過ぬらんとおもふ程に、沓の音のちかう聞ゆればあやしと見出したるに、時々かやうの折おほえなく見ゆる人なりけり、けふの雪をいかにと思ひ聞へながら、なんてう事(五)にさはかり、其所にくらしつるよしなどいふ、けふこん人をなどやうのすぢをぞいふらんかし、晝より

有つる事どもをうちはじめて、萬の事をいひわらひ蒲さしいてたれど、かたつかたの足は下ながら有に、鐘の音の聞ゆるまでなりぬれど、内(六)にも外にもいふ事どもは、あかずぞおぼゆる、あけぐれ(八)の程に歸とて、(九)雪何の山にみてるとうちずんじたるは、いとおかしきものなり、女のかぎりして、さもえゐあかさざらましを、たゞなるよりはいとおかしう、過たるありさまなどをいひあはせたる　第二節

前節につゞゐて受領諸大夫などのむすめ女房の住居たる家のさまを云也　宮つかへ人とは前にいふ受領諸大夫の女子女房が内まいりし宮つかへするなり　親ども二人あるはよしとは受領の留守の家に親共二人ながら有はよきとなり或は女房ばかりすみ或は留守の時も宮づかへに參りて家を徒に荒するはあしき心を云なり　人しげく出入以下は受領の留守の間も親有所へは人々の來ると也　かなしとは憂心なり夫留守の内なれば女房の心には人の出入しげきを憂思ふ由也〳〵されど以下は來し人に女房が挨拶いはでかなはぬ時の侍る義を云なり　心がけたる人とはしたしき人也互にこゝろにかけてむつまじき友、又は緣者などの來さまを

云なり　いかゞはと門あけなどするとは留守なれどいかゞは苦しき御入さふらへなどいひて門あくる心なり　うたてさはがしうあやうげにとは親は苦しからじとてよび入れ共女房の心には憂けに思ふ由なり是夫の留守なればなり　大御門はさしつや以下は從者に女房のいひ付ける詞なり　けしき見るものとは亭主方の者が客人の今や立かと思ひけしきを覗き見る義也　わらふべかめりとは供の者が退屈げなるさまの亭主がたを從者共が眞似し笑らふと也　聞てはいかにいとゞきびしういひとがめんとは眞似し笑を主方者が聞侍らば尤腹立んとなり　いと色に出ていはぬもとは人の來るを憂げに色に出ていはね共それも心には憂げに思ふと云ふ義なり地の詞なりいはぬも有共心には憂思ふと云詞を添へて見るべし　思ふ心なき人は必ず來などやするとは心にかけて思ふ人こそ訪ひ來れ思はぬ人は來ぬ物なれば心に憂思ふ人は僻事ぞとなり　是も地の詞也　されど以下は心つよき亭主の事を云なり　誠に志ことなるとは隔なき客人の事を云なり　度々ありくにとは客の詞なり度々夜

遊ひに來共守門の者心よげに閉開するをいみじうめつらかに思ふ由なり彼業信朝臣の從者をよく誡置たる心と同じ義なり　いかゞにくき親以下は地の詞成べしいかゞとは地にうかゞひて云心なり世の人はいかゞ思ふもしらねどにくき親共の居家へは行にくき物ぞと云義也　ましてまことならぬとはにくげなるおやの有さへ行にくきをまして眞實に應答はぬ所へは猶敬まれ隔心する物ぞとなり　せうとの家とは伯父兄などの家を預り住まふ所へ訪ひ行は其伯父兄が聞て妄かはしう人の出入すると思はんと遠慮せらるゝ義なり是則訪ひ來る人の心なり　夜半以下は何の指合憚る事もなき方へむつましき人々の訪ひ來賓主相互に興を催し遊ふ家のさまを云なり　我はいそぎてもねられずとは受領の留守する女房の詞なり夫は留守なれ共親の住み給ふ故殿原の來りて遊び興じ給へば面白おぼへて女房の寢られぬと也　人のうへなどもいひとは召仕下女どもと夫の他國住ひの物憂からん事など云義なり　沓の音以下は夜更て又殿原の來るさまを云なり　けふの雪以下は只今來りし殿原の云

詞なり　けふの雪の興有に疾參るべきをそんでう其事にさへられ其所に目を離し難く參りたる由を斷云也　けふこん人以下は亭主がたより云詞なり此雪の道もなき所をよく〳〵こそ出おはしましつれとて晝より遊び慰みしさまを只今の客に語る心なり　薦さし出たれどとは薦指出して是へあがり座し給へといへ共あがらず緣端に腰かけて居さまなり　歸とてとは殿原の歸さまに朗詠せらるゝがいみじきとなり　女のかぎりとはをなじ心なる人二三人有とても女計にては終夜あかし居られまじきを如レ此殿原の來り遊興し給ふゆへ、それを見聞てこそは終夜あかし居と云心なり　たゞなるよりとは徒の字なり徒にあらんは甲斐なかるべきにうれしくも侍る事かなと云義なり　過たるありさまなどをいひあはせたるとき只今朗詠して歸り給ふ有さまを見るに就ていにしへ村上の御時藏人の雪月花の時と奏し給事などのいみじかりしやうに想像て過去し例迄を女房のいひ合さるゝとなり
(ア)忍ひても　御簾こし几帳などこしになり
(サ)また人　いまた人のおはしますと守門の者かいふなり　(キ)訪ひ來る客が歸らはとく大御門をさせよと女房がいひつくる義なり　(ユ)此人のとも　客人の供なり　(メ)此客は　訪ひ來る客人を云也　(ミ)すくよか　健けんどんに心つよき義なり　(シ)ゐるもあり　住る事なり　(ヱ)はやなど　最早立歸給へなどゝいふ中は志の疎遠隔てあらぬ故なり　(ヒ)やらはる　追也をひやる心なり　(モ)らいさう詩の詞なり　(セ)かしこくもなく　きひしうもなきとなり　(ス)門の明ちらしてあるを見出したる義なり　(ニ)つれ〳〵に九月廿日の比ある人にさそはれ奉りて明るまで月見ありく事侍しにおほし出る所有てあないせさせて入給ひぬ荒たる庭の露しげきにわざとならぬ匂ひしめやかにうちかほりて忍ひたるけはひいと物哀れなりよき程にて出給ひぬれど猶ことざまの優におぼえてものゝかくれよりしばし見ゐたる妻戸を今すこしをしあけて月みるけしきなり頓てかけこもらましかば口をしからまし跡まで見る人ありとはいかでかしらんかやうの事はたゞ朝夕の心つかひによるべしと書るも此所よりもとつきか

ける文と見へたり　(二)雪のいひと高く　此所よりうけて徒然草の三十一段もかけるにや又齋院より御文持來る所などより三十一段を書る其見えたりいづれも兼好は枕草紙をよく見られしと聞へたり(三)女房の聞し心なる友どち二三人寄合て也(四)女房の居る座敷には燭もたてず埋火のもとに雪を愛して居る心なり　(五)拾遺冬部に題しらずかねもり「山里は雪降つみて道もなしけふ來ん人を哀とは見ん　(六)女房達の有方をさして內と云なり　(七)客などの居表の方を外と云也　(八)あけぐれ曉時分を云也　夕ぐれなとの類なりくの字濁るべし　(九)朗詠雪下「曉入梁王之苑雪滿群山夜登庾公之樓月明千里　白賦謝觀○覺明云文選雪賦註梁孝王雪朝引鄒生召枚叟遊菟園下時令葉木層此賦は白賦と云て彼是しろき事をのみ作れる賦也　即唐の謝觀と云人の作なり其賦の中に此の二句は月雪の事をいひていみしき佳句なれば本朝にして朗詠し來るを四條大納言公任卿の朗詠集の雪の部には選集し給ひしなり　梁の孝王は漢の武帝の親王なりその親王雪の朝には鄒生枚叟など云才人を將いて菟苑と云所に至りまして雪を翫ひ給ひしさまが只今の氣色とひとしう侍る故殿原達の晨に歸とて朗詠し給ひたる由なり最面白きけしき想像べし

村上の御時、雪のいとたかうふりたるを、(イ)やうきにもらせ給ひて、梅の花をさして、月いとあかきに兵衛(ロ)の藏人にたびたりければ、(ハ)月雪花の時と奏したりけるこそ、いみじうめでさせ給ひけれ、歌などよまんにはよのつねなり、かう折にあひたることなん、いひかたきとこそ仰られけれ、おなじ人を御ともにて殿上に人さぶらはざりける程、たゝずませおはしますに、すびつのけぶりの立ければ、かれは何の煙ぞ、見てことおほせられければ見て歸參りて、「わたつみのおきにこがるゝ物みれは、あまのつりしてかへるなりけり、とそうしけるこそおかしけれ、かへるのとび入て、こがるゝなりけり　爰迄第二節の內なり過たる事を女房達のいひ合らるゝとは、此詞を云なり　村上以下心あきらかなり　月雪花の時とは詩の心を以て何となう勅答し給ふを御門のいみじう思召しとなり　歌などよまんにはよのつね

なり以下も御門の御詞なり　おなじ人を以下はつねに又藏人の歌よまれし事を物語する義なり是れは又異時事と見えたり　かれは何の煙ぞとは御門の御詞也　わたつみの此歌藏人の詠なり煙を見てことと仰られしに因てわたつみとよみ出せる也海には煙のたつ故也　おきとは燼を讀入たる也あまのつりしてかへるとは蛙を讀入たるなりすべて歌の心は聞へたる趣なり　かへるのとび入て以下は地の詞なり

(イ)樣器ヤウキ　(ロ)職事補任を考れは村上天皇の御時源延光天德の比兵衛藏人なり又藤原濟正天暦の比右兵衛佐藏人なり又藤原元輔藤原齊敏なと天暦の間の藏人なり此等の内成べし歌によつて作者を考知べし　(ハ)白氏文集二十五寄殷協律五歳優游同過日一朝消散似浮雲琴詩酒伴皆拋我雪月花時最憶君幾度聽雞歌白日亦曾騎馬詠紅裙呉娘暮雨蕭々曲自別江南更不聞　朗詠には胸を諷はるゝなり

(ニ)みあれのせんじの、五寸ばかりなる、殿上わらはのいとおかしげなるを作りて、(ホ)みつらゆひ、さうぞくなど

うるはしくして、名書て奉らせたりけるに、ともあきらの大君と書たりけるをこそ、いみじうせさせ給ひけれ、宮に初て參りたるころ、物の恥しき事かずしらず淚もおちぬべければ、夜々參て、(ヘ)三尺の御几帳のうしろにさふらふに、繪などとり出て見せ(チ)させ給だに、(ト)手もえさし出まじうわりなし、是はとあり、かれはかゝりなどの給はするに、(リ)たかつきに參りたる、(ヲ)御とのあぶらなれば、(ヌ)かみのすぢなども、中々晝よりは(ル)けせうに見へて、まばゆけれど、ねんじ見てなどす(ラ)いとつめたきころなれば、さしいださせ給へる(ワ)御手の、わづかに見ゆるが、いみじうにほひたるうす紅梅なるは、かぎりなくめでたしと、見しらぬ(カ)さと人心地には、いかゞと、かゝる人こそよにおはしましけれと、おどろかるゝまでぞ、まもりまいらする、曉にはとくなどいそがるゝ、(ヨ)かつらきの神もしばしなど仰らるゝを、いかでかすぢかひても(タ)御覽ぜんとて、ふしたれは、御格子もまいらず、女官參りて、是はなたせ給へといふを、女房聞て、はなつをまなど仰らるれば、わらひてかへりぬ、物などとはせ給ひのたまはするに、久しうなりぬれば、おりまほしうなり

ぬらん、さはやとて、よさりはとくと仰らるゝ、いさりかへるやをそきと、明ちらしたるに、雪いとおかし、けふは晝つ方まいれ、雪に曇てあらはにもあるまじなど、度々めせば、此つぼねあるじも、さのみやこもり居給ふらんとする、いとあへなきまで(ツ)、御前(ネ)ゆるされたるは、おぼしめすやうこそあらめ、思ふにたがふはにくき物ぞと、たゞいそがしにいたせば、われにもあらぬ心地すれば、參るもいとくるしき、火焼やのうへに、降つみたるもめづらしう(ラ)おかし、御前ちかくは、例のすびつの(ム)火こち(ウ)たくおこして(井)、それにはわざと人もゐず、宮はぢんの御火桶(オ)のなし繪したるに、むかひておはします、上らう御まかなひし給ひけるまゝに、ちか(ク)くさふらふ、つぎのまにながびつにまな(ヤ)くゐたる人々、から(マ)きぬきたれたる(ケ)程なり、やすらかなるを見るもうら(フ)やましく、御ふとりつぎ、たち(コ)ゐふるまふさまなど、つゝましけならず、ものいひゑわらふ、いつの世にか、さ(エ)やうにまじらひならんと、思ふさへぞつゝましきあふよりて三四人つどひて、繪など見るもあり　第三節前に受領の女子女房など内へまいり宮仕せしと云心をう

けて少納言のみづからのうへを書れしなり是則六位諸大夫の題にもとづゐて書加られしなるべし　みあれのせんじとは御形宣旨殿よりと云義也此女官は少納言のために局親にて有しと見へたり以下此詞に局あるじと云は此義なるべし　五寸ばかりなる殿上わらはとは奉られし人形の事を云也　いみじうせさせ給けれとは中宮の興させさせ給ふとなり是則少納言の宮仕に參りて見られし事なれば書載られし也　宮に初て參りたる比とは少納言初て中宮の御方へ宮仕に參られし時の事を書り曉にはとくなどいそがるゝとは晨になれば早く出參れと召るゝ義なり　かつらきの神もとは夜は又暫時々々と召留置るゝ義なり是則夜晝となく御恩顧し給ふ事の忝よしをかけり　いかですぢかひてもとは夜迄はいかゞと少納言の辭退申るゝ義なり　御格子もまいらずとは夜迄おはします體を云なり　女官參りてとは上﨟の參られて御格子をはなち御寢あれと申さるゝなり　女房聞てとは女孀が聞て御格子參らぬ故を返答するなり　はなつをまなどおほせらるればとは女孀が詞なり御格子はなつをま

てしばしなど仰らるゝ故扱はなち奉らぬと云なり わらひてかへりぬとは女官上﨟が立退給義なり 物などとはせ給ひとは中宮の少納言と物語し給ふ夜のさまを云也 久しうとは夜も深更になり明がた近もおはしませば少納言が下たく思はん程にはや下よ宵さりはとく参れなど仰らるゝ義也 いさりかへるとは少納言の局へ下られし義なり 明ちらしたるとは局の戸障子を明わたす由なり 是則終夜待りて晨に下たる義なり 雪いとおかし以下ははや朝より中宮の御使給りてめさるゝ由を云なり 此つぼねあるじとは御形宣旨殿も少納言をすすめて疾参り給へと使給はる由を云也 われにもあらぬ心地とは少納言の身を卑下してか様に思召るべき我身にもあらねば人の思はん程推量れて参るもくるしきとなり 火焼屋以下内の御殿に雪の降ていみじう覺へし事をかけり 御前ちかく以下は中宮の御前の體を云也 それにはわざと人もゐずとは御門の入御あるべきための御まうけなれば人もゐぬと也又云只御座敷をあたゝめん爲の置火なれば人もよらぬと也 いつの世にか以下は少納言のうらやましき心を述らるゝなり皆是少納言の初て宮仕に参られてうゐ〳〵しき事を述ふる義なり

(ニ)御形宣旨ミアレノセンジ 是則權巻にある齋院宣旨の類成べし御形は則ち齋院の宮のしろしめす事なれば齋院につかふまつる女官をみあれのせんじと云なり 花鳥云みあれは玉依姫の別雷をうみ給ひし所を云にやさて御生とも書則かたちをあらはし給へる故に御形とも書り神舘は糺と御祖とのあいたおきみちといふ所に有と云り 河海云賀茂祭前日於二垂迹石上一有二神事一號二御形一御阿禮御生也 (ホ)神代巻云結髪爲レ髻縛レ裳爲レ袴 同口訣云爲レ髻者髮結二左右一 釋云ミツラ用レ組束レ髮也 (ヘ)中宮の少納言に見せ給ふ義也 (ト)手も 少納言の手也 恥憚る心なり次の詞に中宮の袖口のにほひある由を書り文の勢見合し味はふべし (チ)とあり 兎有角ゐ有の義なり中宮の少納言へ敎へ給ふ心なり (リ)高築タカツキ (◎)御土油オホトナフラ オホトノアフラ (ヌ)すべらしたる髮の筋なり (ル)顯證ケセウ ケンショウ物のあらはなる心也 (ヲ)御手の 中

宮の御手なり　(ワ)紅梅　袖口の色光を云なり　(カ)さと人　少納言みづからの卑下なり　(ヨ)かつらきの神　中宮の仰なり夜もしはしと留トメ給ふ心なりかつらきの神の事前に有　(タ)女官ニヨクワンとよむべし上臈なり　(レ)膝行イサリ イサル　(ソ)さのみや左様にのみと云義なり害ふも面白き日書達少納言の参られず里にこもり居らるゝを御形宣旨殿の進スヽめ給ふ詞也　(ツ)無レ敢アヘナク河海　(ネ)おほしめすやう中宮の思召やうこそあらめと也　(ナ)思ふにたがふは思ひまうけて待事の相違するは誰とても腹立物ぞと也　(ラ)こちたく　おほきぶ也殊外也こと〳〵しきなり　河海　(ム)宮　中宮なり　(ウ)ぢんの火桶　沈木の本にて作れる火桶なり桐火桶の類にや　(ヰ)なし絵　梨絵也又蒔絵とも云なり　(ノ)上らう　女官の上臈也　禁秘抄云上臈不レ謂二是非一二三位典侍號二上臈一着二赤青色一候二御陪膳一也云々小上臈不レ謂二善惡一公卿女號二小上臈一着二織物并表着一也侍臣女依レ儀公達女勿論諸大夫公卿孫或爲二小上臈一或爲二中臈一也可レ依二時ニ交ル宮二歟云々　(オ)御まかない　候二陪膳一諸事御介カイ錯シヤクし奉る故ちかくさふらふと也　(ク)人々　中臈以下下臈などの女房達也　(ヤ)古參の女房の狎れ奉るさまのやすらかなるをと也　(マ)少納言の心なり　(ケ)御ふ　御封也田の貢數に隨ひ民戸を定め御領とするを封戸と云也其所へ下し給ふ切手やうの物を御封とはいふなり則ち其御封を上臈の女官が取次役なり　不比等の令に御侍二人掌下供奉ノ內侍宣傳撿二校女孺一兼知内外命婦朝參及禁內禮式之事上ヲ　奏請宣傳といふはすなはち御封取次義なり　(フ)つゝましけならすとは憶せぬさまのきら〳〵しきを云なり　(コ)ゑわらふ　咲笑エミワラフなり　(エ)あふよりて臭寄て也口より臭をいふのみにあらずいつこにてもこなたより彼カナタ方をさしていふ時もあふよりてと云なり只今は古參の女官達が二三人彼方に寄合て絵を見る義なり

しばし有て、(テ)さきたかうをふ聲すれば、(ア)殿まいらせ給ふなりとて、ちりたる物ども、取やりなどするに、臭に引ヒキイリ入て、さすがにゆかしきなめりと、御木丁のほころびより、わづかに見いれたり、(サ)大納言殿の参らせ給ふなりけり、御直衣指貫の紫の色、雪にはへて、

おかし、柱のもとに居給ひて、昨日けふ物いみにて侍れど、(キ)雪のいたく降て侍れば、おぼつかなさになどの給ふ道もなしと思ひけるに、いかでかとぞ御いら(ヨ)へあなる、打わらひ給ひて、あはれともや御覽ずるとてなど、のたまふ御ありさまは、是よりは何事かまさらん、物語に、いみじう口にまかせていひたる事ども、たがはざめりとおぼゆ、宮はしろき御ぞどもに、紅の唐綾二つ白唐綾と奉りたる、御髮のかゝらせ給ふるなど、繪に書たるをこそ、かゝる事は見るに、うつゝにはまだしらぬを、夢の心地ぞする、女房と物いひたはふれなどし給ふを、いらへいさゝか、はつかしとも思ひたらず、聞え返し、そらごとなどのたまふ、かゝるを、あらがひろんじなど聞ゆるは、めもあやにあさましきまで、あひなくおもてぞあかむや(ス)御くだものまいりなどして、御まへにもまいらせ給ふ、御几帳のうしろなるは、誰ぞととひ給ふなるべし、さすがにこそあらめ、たちておはするを、つかへにやあらんとおもふに、いとちかう居給ひて、物などのたまふ、まだまいらざりし時、聞をき給ひける事などのたまふ、誠にさありしなどのたまふに御几帳へだてゝ、よそに見やり奉るだに、はづかしかりつるを、いとあさましう、さしむかひたる心ち、うつゝともおぼへず。是も第三節の内につゞひたる詞なり但少納言初て内参りの比大納言殿のおはしまして侍りしに少納言恥しうおもはゆく有し由をかけり　しはし有てとは前に雪の降たる日少納言を召出し遊興させさせ給ふ由をかけり其時大納言殿のおはしましたるとなり　奥に引入てとは少納言のはづかしう思ひ奥の間へかくれ御几帳などより覗居らるゝ體なり　昨日以下大納言殿の詞なり中宮へ對しての給ふなり　道もなし以下は中宮の御返答なり　打わらひ給ひとは中宮の笑給ふ也　あはれとや以下は大納言殿の中宮へ對しての御挨拶なり　是より以下は地の詞なり　宮以下は中宮の御儀をいふなり　女房と物いひたはふれなどし給ふとは大納言殿の戯れ興じ給となり　いらへとは大納言殿へ女房達のはづかしげもなう御返答申さるゝとなり　聞へ返しとは大納言殿の詞をかへす心也　そらごとなどの給ふとは大納言

殿の御詞をかへし疑がふ義なり　皆女房達の狎ひ奉たるさまを云なりかゝるをあらがひろむじとは大納言殿の爭論じ給ふとなり　めもあやに以下は地の詞也　誰ぞととひ給ふとは少納言などの御几帳の後にかくれ居らるゝを大納言殿の尋問ひ給ふ由也　たちておはするとは女房達が大納言殿のもとへ立寄おはしますは御用のため仕にやあらんと思ふにさはなくてちかう居給ひて御物語し給ふぞとなり又云大納言殿の立ておはするを御門　參り給ふにやあらんと思へばさはなくて少納言がもとちかう寄居給ひて物などの給ふとなり　まだ參らざりし時とは少納言の中宮の御方へ參らざりし初の比也　聞をき給ひけるとは少納言が事をはやう聞置給しなどゝ大納言殿の仰らるゝ也　御几帳へだてゝよそに見奉るだにはづかしとは少納言の詞也初御几帳ごしに見奉るさへおもはゆく侍りしを近寄物など仰かけ給ふは夢の心地すると也
（テ）さきたかうをふ　警蹕の事なれ前に詳なり
（ア）關白殿道隆公をさして云なり中宮の御父前に委し　（サ）伊周公なるべし中宮の御せうとなり勸

物侍らねば決しかたし　（キ）道もなし　引歌前に見えたり　（ユ）あなる　あんなるとよむべし
（メ）御菓子　オホンクダモノ
行幸（ミ）など見るに、車のかたにいさゝか見おこさせ給ふは、下簾引つくろひ、すきかげもやと、扇をさしかくす、猶いと我心（シ）ながらもおほけなく、いかで立出にしぞと、あせあへていみじきに、何事をか聞えん、かしこきかげと、さゝげたるあふぎをさへ取給へるに、ふりかくべき髮の、あやしささへ思ふに、すべてまことにさるけしきやつきてこそ見ゆらめ、とくたち給へなど思へど、扇を手まさぐりにして、繪はたが書たるぞなどのたまひて、とみにも立給はねば、（ニ）袖をおしあてゝ、うつぶし居たる、もからきぬにしろい物うつりて、まだらにならんかし、久しうゐ給ひたりつるを、（ヒ）ろんなうくるしと思ふらんと、心得させ給へるにや、是見給へ、これはたが書たるぞと聞へさせ給ふを、うれしと思ふに、給ひて見侍らんと申給へば、なをこゝへとのたまはすれば、人をとらへてたて侍らぬなりとのたまふ、いといまめかしう、身の程年にはあはず、かたはらいたし　是も三

節の内なり但行幸見給ふ御供に少納言の初々しき比参りてはづかしかりし由をかけり　車のかたにとは中宮の物見車御棧敷などのかたへ大納言殿のせうそこにおはしまして少納言が侍る方を見おこし給ふとなり　下簾以下は少納言のはぢらへる體を云なり　何事をか聞えんとは恥かしさに何のいふべき事をもおぼへぬとなり　かしこきかげとは恐がましく思ひてさゝげたる扇をさへ大納言殿の取給ひしかば恥かしき事せんかたなきとなり　ふりかくべき髮のあやしさとは恥かしさのせんかたなきまゝ髮ふりかけなどすれは我ながらあやしう思ふとなり皆少納言の心也　さるけしきやつきてこそ見ゆらめとはとく立給へかしと思ふ心の氣色にやいでぬらんとなり　扇を手まさぐりとは大納言殿の扇などを翫(モテアツ)ひ物語などして居給ふさま也　袖をおしあてとは少納言のはぢらへる體なり　久しうゐ給ひたりつるをとは大納言殿の久しう居給ひつるを少納言が迷惑(メイワク)にくるしう思はんとなり　心得させ給へるにやとは少納言が氣色を中宮の察し給へるにやとなり　是見給へとは中宮の大納言殿を呼かけ給ふ義なり　うれしとおもふにとは少納言の心なり中宮のよびかけ給ふにより大納言殿の我傍(ソバ)を立退(タチノキ)給はんとうれしう思ふにとなり　給ひて見侍らんとは大納言殿の詞なり其繪を是へ給はりて見侍らんとなり　猶こゝへとは中宮の詞なり猶とは重(カサネ)てと云心なりこゝへとは此方(コナタ)へおはしまして御覧あれと云心なり　人をとらへてとは又大納言殿の御いらへなり少納言を嘲しの相手にとらへて侍ればといふ義なり是則今參(イママイリ)の少納言がはぢらひくるしがるを興じ給ひてとらへたゝさせ給はぬとの義なり　いといまめかしう以下は少納言の心なり大納言殿の左禮(サレ)事の身に應せぬと卑下の詞なり

(ミ)朝觀の行幸文は諸社の行幸なとを云也　一條院の御宇に節々侍りしなり　(シ)恥る時は汗出る物なりのこらす汗に成たる心なり　(エ)しろい物白粉なり眉には白粉が浮ひて侍るゆへ物にうつりやすきなり　(ヒ)無論　ロンナウ　ロナウ　勿論など云に同し

人のさう(モ)がな書たる草紙(サウシ)、取出て御覧ず、誰(タレ)にかあら

ん、かれに見せさせ給へ、それぞ世に有人の手は、見しりて侍らんと、あやしき事どもを、只出させんとのたまふ、一所にあるに、さきうちおはせて、おなじ直衣の人參らせ給ひて、今すこしはなやぎ、さるかう事など、うちしぼめわらひけふじ、我も、何かしがとある事、かゝる事など、殿上人のうへなど申聞ば、なをいとへんげのもの、天人などのおりきたるにやとおぼへてしを、日ごろ過ぬれば、いとさしもなきわざにこそ有けれ、かく見る人々も、家の內、出そめけん程は、さこそはおぼへけめ、とかくしてもてゆくに、をのづからおもなれぬべし　是も第三節の內なり但少納言うゐ〳〵しき時に人の手跡を評判させいひ誤あやしき事もあらば笑ひ興じ給はんと侍りし事の憂かりし由をかけり　御覧ずとは中宮の御覧ずる也　誰にかあらんとは此草紙の手跡は誰にかあらんと也　かれにとは少納言に見せていはせよと大納言殿もおはしまして諸共に仰らるゝ心也　あやしき事共とは少納言に興がる事をいはせんとの御催し也　又さき打おはせてとは直衣着給ひし公卿の又一人中宮へ來り給ふと也　是は今少し以下公卿の儀を云也　我も以下は公卿の詞也少納言がうゐ〳〵しがる樣を我身のうゐ〳〵しかりし時に引比べ語り慰め給義也　かく見る人とは只今少納言を笑ふ人々も初は少納言と同じ事ぞと也

（ヒ）さうかな　草假名なり上古は萬葉書日本紀の假名のごとし後に今の女文字になる是を草假名と云成べし草文字とひらかなと二品に見るはあしゝ花鳥云今の世の假名は弘法大師始作之以前假名は如日本紀萬葉歌等書樣也日本紀假名は聲書之萬葉集は以音與訓義書之　河海云江談云天仁二年八月日向小一條亭言談之時問曰假名手本何時始起乎又何人所作哉答云弘法大師御作云々件事無所見但太后自筆假名法花經供養之時被行御八講之師南北英才相遞爲導師高名淸範慶祚等之叢名振富樓那之辨才之後源信僧又勤奉言也弘法大師云傳傳習諸眞言梵字悉曇等密法之后寄四敎門法門作イロハニホヘト讃給以來一切法門聖敎史書經傳不離此讃文字イロハノ字色匂ト云心也不說他事只以一事令講人々皆驚耳之由所傳聞也古人日記中在此事者

又問云然者作弘法大師御時以往無假名歟日本紀中假名日本紀在之由慮外全見如何答云此事尤理也雖然只付倭言令書也猶イロハニ者彼時始歟云々　以上源氏抄略述　（モ）警蹕なり　前に見ゆ

（セ）さるかう事　さるかやうの事と云詞なり

（ス）神變奇特有人を云なり　佛菩薩或は神人仙客などをもこめて云心なり

物などおほせられて、我をば思ふやと問せ給ふ御いらへに、いかにかはとけいするにあはせて、臺盤所の方に鼻をたかくひたれば、(一)あな心憂、そらごとするなりけり、よし〳〵とていらせ給ひぬ、いかでかそらごとにはあらん、よろしうだに、思ひ聞へさすべき事かは、はなこそは、そらごとしけれとおぼゆ、抑もたれが、かくにくきわざしつらんと、大かた心つきなしとおぼゆれば、我さる折も、をしひしき返して有を、ましてにくしと思へど、まだうゐ〳〵しければ、ともかくもけいしなをさで、あけぬればをりたる、すなはち(二)淺緑なるうすやうに、えんなるふみをもて來り、見れば「いかにしていかにしらましいつはりを、そらにたゞすの神なかりせば、となん御けしきは有に、めでたくも、口おしく思ひみだるゝに、なを夜部の人ぞ、尋ねも聞まほしき、「うすきこそそれにもよらぬ花ゆへに、うき身のほどをしるぞ侘しき、猶(三)是ばかりは、啓しなをさせ給へ、し(四)きの紙も、をのづから(五)いと賢しとて參らせて、(六)後もうたて、折しもなどてさはた有けん、いとおかし

是迄第三段の内なり少納言うゐ〳〵しき比中宮の物の給ふに御返答申せし事をかけり其子細詞の中に詳なり　物など仰られてとは少納言に中宮の物語など仰らるゝ次手になり　我をば思ふやとは中宮少納言へ問ひ給ふ詞なり　御いらへとは少納言の申上らるゝ御返事なり　いかにかはとはいかでをろそかに思ひ奉べきぞと云義なり　啓するにあはせてとは申上る時に臺盤の方に何者やらんたかう嚔あはせつるとなり　あな心憂とは中宮の詞なり嚔は不祥の由いひ傳へ侍れば少納言が詞僞と聞えたりあな心憂の事やと仰らるゝなり　いかでか以上少納言の詞なりいかでかそらごとを申侍らんと也　よろしうだに思ひ聞へさすべき事かはとは

不祥事を告奉る程の鼻ならば宜事をも告聞奉るべきがさは侍らねば鼻こそ虚言し侍れと云義也　扨もたれか以下は少納言の嚏人をかこたるゝ心也　我さるおりもをしひしき返してとは尋常さやうの嚏たる時侍れば彼方よりも嚏返侍るが今は殊ににくしと思へどいまだ初々しければ默止侍ると也　あけぬればをりたるとは朝に里へ下たるとなり　すなはち以下は中宮より少納言が里へ御使の有由をかけり　いつわりを此歌中宮の御歌なるべしたゞすの神なかりせば人のいつはりをもえしらじが神あればこそしれとなり少納言が虚言を神かけてたゞすと戯れ給ふ心也　となん御氣しきはとあるとは女房詞也中宮の御心ばせかやうに侍ると也　めでたくも以下は少納言の詞なり中宮御歌を褒奉る心なり　口おしくとは虚言と仰せらるゝは本意なう口おしきと也　夜部の人とは彼嚏人が恨めしければ誰成らん聞まほしきとなり　うすきこそ此歌少納言の歌なるべし　うすきとは葩の薄事をいひて下心は我身宮仕に參り初々しき心をよめり　よらぬとはよらぬ物なれ共と云心なり　花ゆへとは鼻をもたせたり　うきみとは花の緣に實の事をいひて下心はわか身を云なり　凡歌の正義は少納言の初々敷比にて機緣もうすく侍れば僞かと中宮の思召も斷なれ共只今の義はそれにはあらで彼嚏人ゆへぞとなり又云うき身とは嚏人を云此義通する也　右三節ながら大夫はと云題の心を離れ侍らず大夫の住家或は大夫の女房又は大夫の女子などの事迄をいひもてゆくといへ共皆大夫と云に就ての事也又少納言自身の事を書れしも六位諸大夫の娘なる故當題の下に書載られしなり

（二）袖中抄にいはく　出てゆかん人をとゞめんよしなきにとなりのかたにはなもひぬかな　顯昭云はなひるはなに事にもよからぬ事なり年始にもはなひつればいはひ事をいひていはふなりされば人のものへいかむするはしめにとなりの人のはなひむを聞てもくるしからむ人は立歸べきなり　毛詩には　嚏云人導レ我　又願言則嚏　四分律云時世尊嚏諸比丘呪願言二長壽一時有二居士一嚏及禮二拜比丘一佛令二比丘呪願言二長壽一　今案今俗正月元日若早旦嚏即稱曰二千秋萬歲急々如律令一是緣也何只在二元

口哉尋常觸之又萬葉云「うちなけきはなをそひつる劒たち身にそふいもか思ひけらしも　此歌は思ふ人來んとてはなひると見へたり又云「まゆねかきはなひひもときつまらんやいつしか見んと思ふわれをば　これも同心也　奥義抄云はらへするにはなひるをもせん事なり或物云人の事を思ひくはだつるにはなひつればならずといへり　(二)四季にしたがひ料紙の色かはるゆへ春のころと見えたり　(三)猶是はかり　少納言より奉らるゝ御返事の詞なり斷言義なり　(四)しきの紙　四季の料紙也　(五)いとかしこし　當季の色料紙が折しも有合せしかばいとかしこう書て奉りしとなり　(六)後もうたて　只今はかしこう有合せつるが以後はかやうの料紙有まじければ中々只今恥に成べきといふ心にや

【九十二段】(◎)上達部は、(イ)春宮大夫、(ロ)左右の大將、(ハ)權大納言、(ニ)權中納言、(ホ)宰相中將、(ヘ)三位中將、(ト)春宮權大夫、(チ)侍從宰相　此段は上達部の規摸なる事をかけり　上達部とは公卿の中にをゐて攝關の餘流を上達部といふなりさるによりて補任せらるゝ官職諸家の公卿より規摸なる由を書れたると見えたり

(◎)公卿を上達部と云なり　(イ)職原云春宮大夫相當從四位下執柄息大臣子孫爲大中納言人兼之諸大夫之納言以上無拜任之例坊中事大夫管領也權大夫一人同前但諸大夫納言有兼任之例猶不爲可也　今案此職も重き故諸家の公卿は中納言に成時此官を止め給を上達部は大中納言になりても兼任有なり　(ロ)職原云大將相當從三位非諸家之華族者更不任之多是大納言中譜第上﨟任之於執柄息者超次第所任也又多積任左也云々又任大將人其職掌大略同大臣只守位次着座許也其內外作法不混餘人者也　左右の大將は近衛府相當從三位なり此官は上達部計也諸家は難成由也略抄　(ハ)職原大納言下云寛平御宇爲正二人權一人其後權官加增云々凡當官者入臣之重職也可昇大臣之人任之云々　宇多天皇の寛平九年正員二人の外菅家を權に任し給ふ延喜以來或二人或三人有永觀元年に於て始て正四人權二人を置るゝ也其後又有加增云々　(ニ)職原云中納言

権官古来有之云々凡任当官者参木労二十年以上検非違使別当大辨宰相摂政関白子為二位三位中将者納言以上殊可撰其人之官也　中納言八数上古は不定大宝年中に三人あり其後権官あり或十人有或八人有事侍るなり　(ホ)宰相中将　宰相は参議の中将を兼たるを宰相中将と云也是文武兼帯尤重き官也　職原云中将華族四位任之執柄息若一世二世源氏中納言時兼之凡人兼之實例公是也非常之極也清華之人参議時兼之中絶宗兼帯為無念之儀也二位三位中将非大臣子若孫者不任之至二位中将者　息外希例也　(ヘ)三位中将　職原の説に見えたり　(ト)春宮権大夫春宮大夫の下に見えたり　(チ)職原云侍従八人相当従五位下八人之中三人者少納言兼任之其餘者公達任之諸大夫中常不任之又大中納言参木以上有兼任之例　侍従にして宰相に任するは上達部の故なり

【九十三段】君達は、(リ)頭辨、(ヌ)頭中将、(ル)権中将、(ヲ)四位少将、(ワ)蔵人辨、(カ)蔵人少納言、(ヨ)春宮亮、(タ)蔵人兵衛佐　此段も前段の心と等し　君達とは三家の流を云なり是則摂関の餘慶君達の規模なり委は後の引文に見えたり

(リ)職原云公達者三家等華族也称三家者中院閑院華山院此外大炊御門流以此三流為華族公達也但当時雖皇子皇孫賜姓昇大臣大将者執柄息中雖不遂先途令相続将相者即又清華勿論事歟近代依無其人三家頻成英雄之思者也云々凡公達諸大夫之號起於執柄之事也云々執柄一門及可然人々子孫謂之公達縦雖累代家門之人不失其名號歟　(ヌ)頭辨は七人有其中の頭を頭辨と云なり　職原云辨七人左右大辨二人宮中事大辨所執行也仍為重職名家譜第依清撰任之華族中有才名之輩参木之時兼之為規模無文才人不居之乎左右中辨二人左右少辨二人名家譜第任之多者先補五位蔵人乃任辨也蔵人帯之顕清撰也　(ル)職原云中将権中将相当従四位下　延喜式中将凡出居侍従十二人聴昇殿云々天平神護元年に中将一人を従四位下の官として置給ふ或は大同三年に置云々中将は武官なれ共近衛として公用を資に不足なるゆへ出居侍従十二人を置

ニ中將ノ職を勤る也則ち中將と稱する故正員を頭中將とも云也此頭中將に任する事の規模なる趣は宰相中將の所に宿中將是なり　(ヲ)權中將　同斷
(ワ)令義解云左右近衞少將從五位下大同二年置レ之職原云少將五位殿上人中爲二譜第公達一者任レ之敍二四位一時去レ職但敍留者是殊恩也云々　(カ)藏人辨　藏人にして辨を帶たるは清撰の由頭辨の所に見ゆ　職原云又公達爲二中少將侍從一之輩有二稽古一之人望補二此職一是有レ表二其才一也不レ練二習舊章一不レ稟二受口傳一者尤可レ有二斟酌一也云々　(ヨ)藏人少納言　藏人の少納言を兼たるを云也上古は少納言三人相當從五位下にて重職也しが嵯峨天皇弘仁年中藏人所を置給ひしより少納言の職傍になれりそれに依て五位の藏人少納言を兼帶するを藏人少納言と云也是又辨藏人と同し階なれば公達の中に任する也　(タ)職原云春宮亮一人相當從五位下名家四位有二人望一者任レ之坊中事亮一向所レ奉行一也權亮一人華族中少將兼之　今案名家の四位の人先途とする職を公達は必任之事也　(レ)藏人兵衞佐　五位の藏人が兵衞佐を兼るを云也職原に補二藏人一之日帶二廷尉佐一と云是なり兵衞佐は公達の不レ望事なれ共藏人にして兵衞佐を兼帶するは凡人のならぬ事なり　右官職の沙汰筆墨に未レ追職原抄講談の時委しく申侍るのみ略抄

【九十四段】法師は、律師、内供　此段は法師の位階云也　律師内供のみを記されし事子細有
(ソ)本文四段に思はん子を法師になしたらんこそはいと心くるしけれ唯木頭なとのやうに思ひたらんいと／＼おしけれと書し心より見るべし此味ひを兼好もとく／＼と見得たるにや品位のねかはしき事を書つゝきに法師はかりうらやましからぬ物はあらじと徒然に書出せりさるにより此段の淺官のみ書し心もあらはれて尤殊勝に覺得せられ侍るなり難問に傳之　(ツ)官班記云律師南京善性元興寺僧文武天皇二年三月十八日任二律師一始也云々律師は准二五位一也天武天皇朱鳥元年正月請二三綱律師及大官大寺知事佐官幷凡僧一以俗供養云々是則本朝律師の始也　寶雲經云具二足十法一名二律師一一善解二毘尼所起一二善解二毘尼甚深處一三善解二毘尼微細

事四善解毘尼此事得彼事不得五善解毘尼性重戒六善解毘尼制重戒七善解毘尼制起因緣八善解聲聞毘尼九善解辟支毘尼十善解菩薩毘尼 律鈔解題云佛言善解一字名律師一字者律字也 (ネ)續日本紀三十二云寶龜三年三月丁亥禪師秀南云々或持律或足稱或看病或著聲譽充供養並終其身當時稱爲十禪師其後有闕擇清行者補之 延喜式云每年正月於大極殿講說金光明最勝王經時以內供奉十禪師爲讀師云々官班記云當時者山門三口園城七口各爲相傳之職歟 今案內供奉十禪一つなり內に侍り供養する故內供奉とと云歟十口の故に十禪師と云成べし

【九十五段】女は、內侍のすけ、ないし 此段は女の差を云なり女は階高してだに心の拙なきものなれば世に淺ましく思はるゝをまして品賤女はいよ／＼心根の拙からん程推量るゝとなりさるによりて階たかき內侍こそいみじけれと云心にや法師とは裏表の心なり

(ナ)職員令云典侍四人掌同尚侍唯不得奏請宣傳若無尚侍者得奏請宣傳中務式云典侍四人典藏二人並准從四位 禁秘抄云典侍兩人也此職尤重爲御乳母之人者諸大夫女聽之其人公卿侍臣女也侍臣女生公達體也大臣子頗無例大臣孫少々有例云々 (ラ)ないし 尚侍の事なるべし此職掌も令に見へたり前大夫と云段の第三節の後書に引のせ侍る故今略之 中務式云尚侍二人准從三位 禁秘抄云尚侍大略可准更衣等云々

【九十六段】宮つかへところは、內、后宮の其御腹の姫君、一品宮、齋院は罪ふかけれどおかし、まして此比はめでたし、春宮の御母、女御 此段は諸家の女房が宮仕に參る所を云也 罪ふかけれどとは佛道をいみ後の世の事を勤め給はぬ義を云也 此比はめでたしとは村上の御女選子內親王の事を云也 五代の間齋院也 壽七十二歲云々

(ム)內 すべて中宮を云なり則后宮其中侍る也

(ウ)其御腹 中宮のうみ給ふ姫君也 (キ)一品宮 內親王の宣下おはします宮の御事也 (ノ)齋院 是則賀茂の齋院なり齋院の事はよく人のしれる事なり延喜式に詳なり又歷代の次第は簾中抄の上卷に詳なりいづれも事長ければ略するなり ([illegible]) 春

宮の御母　春宮とは儲君なり前見えたり御母とは女御更衣などの儲君を産給ひしを申なり其御方は時めき給ふゆへ仕へ所によきとなり（△）女御の御事前に見えたり天子の正妃なり

(オ)九十七段　したりがほなる物、正月一日のつとめてさいそに、はなひたる人、きしろふたびの藏人に、(ク)かなしうする子なしたる人のけしき、除目に、其年の一の國えたる、人のよろこびなどいひて、いとかしこうなり給へりなど、人のいふいらへに、何か、いとことやうにほろびて侍るなればなどいふも、したりがほなり、又人おほくいどみたる中に、えられてむこにとられたるも、我はと思ひぬべし、こはき(サ)もの、けてうじたるけんじや、ゐふたきの明道士(ケ)たるに、弓はるに、かたつかたの人、しはぶきをしまぎらはしてさはぐに、ねんじておとたかういてあてたるこそ、したりがほなるけしきなれ、碁をうつに、さばかりとしらで、ふくつけさは、又こと所に(三)かくゝりありくに、ことかたより目もなくして、おほくひろいとりたるも、うれしからじや、ほこりかにうちわらひ、たゞのかちよりは、ほこりかなり、有々て、ずりやうになりたる人のけしきこそ、うれしげなれ、わづかにあるずむざも、なめげにあなづるもねたしと、いかゞせんとて、ねむじ過しつるに、我にもまさるものどもの、かしこまり、たゞおほせうけ給はらんと、つゐせうするさまは、ありし人とやは見へたる、女房うちつかひ、見へざりし調度、さうぞくのわきいづる、受領したる人の中將になりたるこそ、もと公達のなりあがりたるよりも、けたかうしたりがほに、いみじう思ひためれ、位こそ猶めでたき物にはあれ、同じ人ながら、大夫の君や、侍従の君など聞ゆる折は、いとあなづりやすき物を、中納言大納言大臣などになりぬるは、無下にせんかたもなく、やん事なくおぼへ給ふ事の、こよなさよ、程々につけては、すりやうもさこそあめれ、あまた國に行て、(エ)大貳や四位などになりて、上達部になりぬれば、おも〳〵し、されど、さりとて程すぎ、何ばかりの事かはある、又おほくやはある、受領の北方にてくだるこそ、よろしき人の、さいはひには思ひてあめれ、たゞ人の上達部のむすめにて、后になり給ふこそ目出度けれ、されど、おのこはわか身

のなりいづるこそ、めでたく打あふぎたる氣色よ、何法師などの、何がし供奉などいひありくなどは、何とか見ゆる、經たうとくよみ、みめ清げなるにつけても、女にあなづられて、なりかへりこそすれ、僧都僧正になりぬれは、佛のあらはれ給へるにこそと、おぼしまどひて、かしこまるさまは、何にかは似たる　此段十章ありいづれも心あきらかなり　したりがほなる物とは常段の題なり俗にしてもつたりがほなると云義なり下の十章みな此心を述たり　さいそにはなひたる人とは元日に嚔て壽萬歳急々如律令などいはひたるは我身がちにしたり顔なるとゝ云心なり　きしろふたひとは我人競望時なりかやうの時子を藏人になしつれば親の心にてもたり顔なるとなり　よろこび以下は友達の賀儀を云心なり　いらへにとは一の闕得たる人の返答也何か以下返答の詞なり何事をかかしこきと申べきかやうに零落の身となり侍りてもとゝ云義なり是則身がらいみじき人が叙爵に遲く預るを不足する氣味なり是我身を慢じたればしたり顔なる義なり又人おほくいどみ　此章心あきらかなり　こはき物のけ以下も心明らか也　ゐふたきとは掩韻也明道士たるにとは明經道の博士が侍る前にてといふ心なりたるにはあるになり　弓はるとは古詩集の韵字に矢をあてゝ矢のあたる字を韵に踏て應レ勅詩を作るなりそれを射るを弓はると云なりかたつかたの人とは左右に番て勝負を爭故なりおとたかうとはきはやかに射あてたる義なりしたり顔なる心明らか也　さばかりとしらでとはつよきとしらでなり　ふくつけさはとは下手なる人が上手の程をわきまへしらで力を入る心をいふ也ことかたより目もなくとは下手の石を殺す義也たゞのかちよりはほこりかなりとは平生底の人に勝たるよりも如此の人を鬪て勝たるがほこりかなるとなり是則したりがほなる物なり　有々てとは叙爵とだへして後受領に成たる嬉しさをかけり其心別義なし　わづかにあるずむさとは召仕從者も主が威勢ある故無禮に人を云なり　あなづるもとは受領の人が賤しめて外の人々を憍慢となり　ねたしとはほかの人が嫉み思へどせん方なう過しほどに我より上の人も媚たるとなり　我にもまさる

ものとは我より賢げなる者が俄に敬まひ畏也　ありし人とは敍爵いぜんの人とは見へずゆヽしきさまぞとなり　女房うちつかひ以下はゆヽしきさまをかけりすべてとだへしたる人の受領になり俄にゆヽしき體のしたり顔なる由をいふなり　受領したる人以下は公達い中將とたゞ人の中將に成たるとをくらべ云なり　受領したる人とはたゞ人なり　もと公達とは家の子を云なり　なりあがりたるよりもとは家の子の受領など經へあがりたるよりも只人の受領が中將になれば有まじき事のやうに思ひてしたりがほなるとなりもとより家に生れ來る公達は中將をいとやすき事におもふ故なり　位こそ以下は公達の身にしていふ心なり　同し人ながらとは同じ人なれ共侍從大夫の官を經歸はあなどりやすきとなり　中納言以下は上﨟に成給へば同じ人なれ共畏れ憚るとなり　程々につけてとは受領只人の身にしていふ心なり分々に隨ひ侍れば受領の身にても同じ斷ぞと云義なり　あまた國に行て以下は只人の功を積昇進する次第を云なり　おも〳〵しとは日比地下にて侍しが上達部につらなり昇殿聴ゆへにおも〳〵しうしたりがほなると也　程すぎ何ばかりの事かはあるとは地下の人の先途とする官なれば年老て進む故程過何計の事と云なり　又おほくやはあるとは只人の昇殿は稀々の事なれば容易難成事ぞとなり　受領の北方以下はたゞの寵幸を得てしたり顔なる事を云也　たゞ人の上達のむすめとは地下人三位中將にて有人の娘が内へ參り女御などヽ冊かれ給ふ事なり是頭時めきしたりがほなる義なり　されど猶男以下はすべて男女いうへを比べ云心なり女の女御后となるも目出度けれ共猶男の昇進したるさまがしたり顔なるとなり　法師以下は僧綱のしたりがほなる事をいふなり　何とかは見ゆるとは僧綱の內におゐても供奉などの位の程は目にたヽぬと也　みめ清げなるとは供奉の僧が美目よきに就てもなり　女にあなづられとは女官などにさへ侮るヽと云心なり　なりかヽりとは供奉の僧が侮るヽを腹立る心なり　僧都僧正とは昇進すれば侮りし人々が敬ひ尊む程にいみじうしたり顔なると云心也　凡是迄都て十章有おの〳〵したりがほなると云題の趣

を述られたり

（オ）はなひたる専前大夫に見えたり（ク）其年當年といふ義なり大上中下の國の品に隨て一二三の次第有一の國は當年の内大上國と云義なり（◎）えられて　撰て也（ヤ）强コハキ　つよき心なり（マ）古き詩の韵字を掩ふたきていひ當るを勝とするなり其跡にて謝策の及第有也源氏の抄物に委し不及引（ケ）職原云博士一人相當正六位下唐名大學博士明經道之極官也　職員令云大學寮博士一人掌下教二授經業一課中試學生上云々（フ）源語類聚云貧生　遊仙窟　福付と注よくかましく我方へ物を取付る心なり云もてゆけば同じ心なり（コ）かくゝり　諸本如レ此未詳（エ）令義解云大貳一人本正五位上也延暦十二年改爲二從四位下一

【九十八段】風は、あらし、木がらし、三月ばかりの夕暮に、ゆるく吹たる花風、いとあはれなり、八九月ばかりに、雨にまじりて吹たる風いとあはれなり、雨のあしよこさまに、さはがしう吹たるに、夏とをしたるわたきぬの、あせの香などせしが、かはき、すゝしのひとへに、引かされてきたるもおかし、此すゝしだに、いとあつかはしう、すてまほしかりしかば、いつのまにかうなりぬらんとおもふもおかし、曉格子妻戸などをしあけたるに、嵐のさと吹わたりて、かほにしみたるこそ、いみじうおかしけれ、九月晦日十月一日の程の空打曇がほに、風のいたう吹に、黄なる木の葉どもの、ほろ／＼とこぼれおつる、いとあはれなり、櫻の葉椋の葉などこそおつれ、十月ばかりに、木立おほかる所の庭は、いとめでたし、暴風の又の日こそ、いみじうあはれにおぼゆれ、たてじとみすいがひなどのみだれたるに、前栽どもも心ぐるしげなるを、大なる木どもたふれ、枝吹おられたる事だにおしきに、をみなべしなど、うへによろぼひはひふせる、いと思はずなり、格子のつぼなどに、さときはを、殊更にしたらんやうに、こま／＼と吹いれたるこそ、あらかりつる風のしはざともおぼへね、いとゞきぬのうへはくもりたるをきて、朽葉のおり物、薄物などのこうちききて、まことしく清げなる人の、夜は風のさはぎにねざめつれば、久しうねおきたるまゝに、鏡うち見て、母屋よりすこしいさり出たる、髪は風に吹

まよはされて、すこしうちふくみたるに、かゝりたる程まことにめでたし、物あはれなるけしき見る程に、十七八ばかりにやあらん、ちいさうはあらねど、わざとおとななどは見えぬが、すゝしのひとへの、いみじうほころひたる花も(ホ)かへりぬれなどしたる、薄色の宿直物をきて、髮は尾花のやうなる(ヘ)そぎ、すゑもたけばかりは、きぬのすそにはづれて、袴のみあざやかにて、そはよりみゆるわらはべの、わかき人のねこめに(ト)吹おられたるせんざいなどを、とりあつめおこしたてなどするを、うらやましげにをしはかりて、つきまとひたるうしろもおかし　此段には餘の事をいはず專ら風の事のみをかけり就レ其風の品々を書載られつれ共節を分て注するに不レ及たゞ詞に追て釋し侍る也　風はとは當段の題也　あはれなりとはあらし木がらし花風ともにあはれなると云詞を兼て見るべし　八九月以下は嵐の噂なり　夏とをしとは夏を過したる衣服の事なり　すゝしのひとへとは重陽の節迄帷子單衣を用ゆる故なり　いとあつかはしうとは夏の間の趣を云なり　曉以下は朝嵐のさまを云なり　九月晦日以下

は風の事をいふなり　櫻の葉椋の葉とは此二色輕く落る物なり　暴風の又の日とは此風の吹時は冷じけれ共其跡のけしきは興有によりいみじと云なり　たてじとみ以下は其氣色を遁るなり興有さま詞の面にあらはなり　いとおもはずとは大木に和なる女郎花のはひふせる思寄ぬとの心なり　しわざともおぼへねとは物の曲々の優しう興あるさまをみれば野分のあらき所將とも思はれぬと也　いとゞ以下は家主の又の朝に彼氣色を見居たるさまを云なり　きぬのうへはくもりとは衣の色あざやかになき心なり冬の衣裝の體を云なり或云ね[illegible]の宿直物の垢つける心にや　十七八以下は艶なる女の庭に下て遊ふ體をかけり　わさとおとななとは見へぬとはおとなは態とひかへて庭へ下ぬとなりされ共此十七八計の人は小童の遊ぶさまを愛して庭に下出られしとなり　すゝしのひとへ以下は十七八の人の裝束のさまを云なり　髮は尾花とは尾花のふさやかになびけるごとく髮の侍ると也　すゑもたけはかりとは髮の長き心也　きぬのすそにはつれとは衣裝の傍よりはつれ見ゆる心なり

わらはへの句を切べし若き人が前栽の木の根落葉を取集め起立などするを見て小童かうらやむさまなり　つきゝとひたるとは小童か彼若人に就添體なり

(テ)嵐アラシ　(ア)凩コカラシ冬吹風を云なり　(サ)雨脚アメノアシ詩文多　(イ)九月の末に草木黄落よし月令に見えたり　(ロ)格子のつほ　格子の前の坪也　(ハ)颯サツト　風の音也　(ホ)花もかへり　紅の色花田色などのさめたる義なり　(ヘ)剃ソキ　理髪したる體なり兒の間髪か長けれ共元服以後は髪の先を剃故なり　うつほ物語十九云花田のいとうすき唐綾の袙にかゝりたる御ぐし尾花の末のやうなりいとなまめかしき御かたちなり云々　(ト)根籠ネゴメ　根なからなり

[九十九段]　心にくきもの、ものへたてゝ聞に、女房とはおぼへぬ聲の、忍びやかに聞へたるに、こたへ若やかにして、うちそよめきて參るけはひ、(チ)物まいる程にや、(リ)はし(ヌ)かひなどのまぜてなりたる、(ル)ひさ(ヲ)げのえのたうれふすも、耳こそとまれ、うちたるきぬのあざやかなるに、さうがしうはあらで、髪のふりやられたる、いみじうしつらひたる所の、おほとなぶらはまいらで、ながすびつに、いとおこしたる火のひかりに、御几帳の紐のいとつやゝかに見へ、御簾の(ヲ)もかうのあげたる、このきはやかなるも、けさやかに見ゆ、(ワ)よくてうじたる火桶の、灰きよげにおこしたる火に、よく書たる繪の見へたるおかし、(カ)はしのいときはやかに、すぢかひたるもおかし、夜いたうふけて、人のみなねぬる後に、(ヨ)外のかたにて殿上人など物いふに、おくに(タ)碁石けに入るをとの、あまた聞へたるいと心にくし、(レ)すのこに火ともしたる、ものへたてゝ聞に、人の忍ぶるが夜半などうちおどろきて、いふことぞきこへず、男もしのびやかにうちわらひたるこそ、何事ならんとおかしけれ　此段九章あり各其品異なれ共題の心にくきと云義を書つらねたるなり　心にくき物とは當段の題なり　奥心もこもり侍るなり　物へだてゝとは物ごしになり　女房とはおぼへぬとは内わたりの女房の住まふ所に男の聲する由也　こたへわかやかにしてとはわかき召仕の女房などのいらへして參る由なり　物まいる以下も物ごしに聞心なればつゞひ

て見るも宜しく又別に見てもくるしからじ心はあきらかなり　うちたる衣以下も陪膳の女房などの氣味侍れば前につゞけ見ても可ならんか　さうがしうはあらでとはすべらかせし髪のみだれがはしうあらでなり又云髪をふりのくるとてさうがしうせぬとなりこれらは物隔てたる内の體を云成べし　いみじうしつらひたる所以下は冬の夕の御座のさまを云也　よくてうじたる以下も冬の夕のしつらひと見えたり前の詞につゞけて見るもよし分て見るもくるしからじ何れも心あきらかなり

(チ)物まいる御膳參る義也　(リ)和名云唐韻云筯匙也字亦作レ箸纂要云一名挾提和名波之　(ヌ)說文云匕所ニ以取ニ飯也纂要云一名匙和名賀比云々　(ル)提　銚子と對の物也　(ヲ)柄　(◎)帽額　前に詳也　(ワ)よくてうしたる火桶と云迄玉章の分は前のものへたてゝ聞と云し詞よりいひもて來る義なり其味ひ心をつけて見るべし　(カ)前の人の家につき／＼しき物と云段にひじをりたる廊と有則此はしの義也尤心にくう義ましけなる物也　橋の字階字も用べし　(ヨ)筥ヶ碁筥と云也　(タ)菅子　(レ)成信中將の兵部と夜の物語を少納言の聞れし事など思ひやるべし

[百段] 嶋は、(イ)うき嶋、(ロ)八十嶋、(ハ)たはれしま、(ニ)水しま、(ホ)松か浦しま、(ヘ)まがきのしま、(ト)豐浦の嶋、(チ)たとしま

此段に嶋を記されたり就レ中此八の嶋を擧られしこと心あるべし其故如何と計がたし但如レ例稱に因み文字に隨ひて與有嶋を擧られたると下簡するのみ後世の學者清少納言の奥義を蠡測あらば補ひ給ふべし　うき嶋とは浮と云詞おかしき歟　八十嶋一の嶋を八十と云文字に隨ひておかしき歟　たはれ嶋とは男女ならで風流と云詞がおかしき也　水嶋とは瀾の中に水嶋と云も興有心也　又不レ見と云やうにも聞ゆるにや　松が浦嶋とは松の故有にや或又待と云心にや何れも興有により擧られし成べし　まがきの嶋籬といへば優しう物ゆかしき心成べし又云云々　豐浦の嶋とは文字に隨ひて饒なる心なる心を用ひられし歟　たとしま未レ明　(イ)浮嶋　夫木には陸奥又駿河と注す

(ロ)袖中抄に顯昭云やそ嶋と云事二つの樣あり一には出羽國に八十嶋と云所侍り一には八十嶋と云也それは一所をさすにあらすあまたの嶋を云也云々或書に風土記をひきて云堀江ノ東に八十頭嶋と云所有それは昔女八兒をいたひて其江にて網をかけて鳥を取けるに水鳥の七十八かゝりて飛けるに此網はりける女もひきあげられたりけるが共に江に落て死にけれは鳥の頭七十八の頭二くはへて八十頭有けれはやそしまと云と侍れと慥にはしらず云々 (ハ)闕疑抄云風流嶋(ニクタハレシマ)肥後にあり云々 (ニ)萬葉に 長田王「蘆北の野坂の浦に舟出して水嶋にゆかん波たつなゆめ」夫木に肥州とあり (ホ)夫木に陸奥云々松嶋 松がうら浦嶋同し事なり 千載にも顯昭法師「波間より見ゆる氣色そ替ぬる雪ふりにたる松かうらしま (ヘ)笆嶋(マカキノシマ)陸奥 (ト)豊浦嶋 長門 六帖に忠岑「よそに見し豊浦の嶋の二心有としきけは更に頼ます 此嶋に奥津平津とてふたつ嶋有故二心とよめるなり (チ)たく嶋歟出雲也

【百一段】濱は (リ)そとの濱、(ヌ)吹上の濱、(ル)長濱、(ヲ)打ての濱、(ワ)諸寄の濱、(カ)千里の濱こそひろう思ひやらるれ 此段濱の事を記されたり此七の濱も興有名にて侍る故擧られたる成べし そとの濱とは外(ソト)と云心にや 吹上の濱とは風の力にて出來にやと云心成へし なが濱とは長きと云名のおかしき成べし 打ての濱とは波より打出たるにやと云心成べし 諸寄の濱とは何ものも殘らず寄來(ヨリクル)心にやと云心成べし 千里の濱以下詞に聞えたり皆是名に因(チナミ)て興有濱を書れしにや云々

(リ)卒都濱陸奥也 (ヌ)吹上濱紀伊又駿河 (ル)長濱伊勢 (ヲ)打出濱近江 (ワ)諸寄濱但馬 (カ)千里濱紀州

【百二段】浦は (ヨ)おふのうら、(タ)鹽竈の浦、(レ)しかの浦、(ソ)名高のうら、(ツ)こりすまの浦、(ネ)和歌の浦 此段浦のおかしきを記されたり是も名のおかしき緣を取けしきのよき浦などを擧られしと見えたり

(ヨ)生浦(オフノウラ)伊勢 (タ)鹽竈浦陸奥 (レ)志賀浦近江 (ソ)名高浦紀伊 萬葉に人丸「紀國の名高の浦による波の音たかしかもあはぬ子故に (ツ)

徵須磨浦攝津　（ネ）和歌浦紀州

【百三段】　寺は　（チ）つぼさか、（ラ）かさぎ、（ム）法輪、（ウ）高野は、（ヰ）弘法大師の御すみかなるが、あはれなるなり、（ノ）石山（オ）粉河、（ク）しが　此段は寺どもを記され其心前篇の名所共を擧られし趣と等しかるべし今一々に愚案の了簡を附る迄に不及只若の心に任せて少納言の本意如何にやと計知るべし前篇の了簡も一向僻案なるべきのみ云々

（チ）拾芥云法華寺又號壺坂寺千手南都道基上人建立之　泉州にあり　（ラ）同云笠置大和國彌勒云々解脫上人建之　（ム）同云法輪寺虛空藏大井河西廣隆寺末道昌建立　（ウ）拾芥云高野紀伊國傳法院在此內號金剛峯寺　御幸寛治二年二月十五日云々　（ヰ）弘法大師傳記　元亨釋書　詳なり（ノ）拾芥云近江石山寺丈六土佛二臂如意輪朗辨爲聖武御願　寛治三年十二月廿一日御幸　（オ）同云粉河寺紀伊國等身千手　（ク）同云崇福寺近江志賀郡號志賀寺天智天皇御願三井寺末

【百四段】　（マ）陀羅尼はあかつき、讀經は夕ぐれ　此段詞すくなければ其心有べき段なればよく味はひ見るべし前の寺の沙汰につゞひて書る文なり　凡此段は朝暮の勤を云なり陀羅尼は祈念祈禱のために唱ふる物なれば一日の內にて晨に唱ふる物ぞと云義也　讀經は夕ぐれとは後世菩提の爲に經卷を讀誦する物なれば一日の內に作れる罪咎を今日の暮に懺悔滅罪して菩提を求むる心也是則現當二世世間出世の福德を修する心なり猶重々の奥義有云々

（ヤ）隨求尊勝千手大日などの陀羅尼の類なり

【百五段】　あそびは　夜人のかほ見えぬほと、あそびわざはさまあしけれとも（マ）鞠もおかし、（ケ）小弓、（フ）ゐんふたき、（コ）碁　此段心あきらかなり　夜人のかほ見へぬ程とは戯れ事をして遊ぶはほの闇き時がよきとなりあらはになければ興ある義也彼心もとなき物の段に女房達の太政官廳にて戯れ遊び給ひしも闇き程也亦大夫と云段に同じ心なる人二三人火桶の下にて遊れしも夜の程なり是等の傍例を以て案ずるに戯れ遊ぶ時分黄昏にしくはなきと見えたり此一章は遊びの時分を云なり　あそびわざ以下は遊興の事品をいふなり

(マ)劉向別錄云蹴鞠者傳曰黃帝所レ作或曰起ニ戰國ノ時ニ託ニ黃帝ニ蹴レ鞠之勢ニ也以練ニ武士ニ知レ有レ才也今士無事得レ使レ蹹レ鞠有ニ書ニ十五篇ニ雅經卿御說云仁皇三十九代天智天皇朝渡云々　元興寺に大なる槻木あり是をかゝりとして天智天皇大臣鎌足入鹿などして御鞠有けり云々　古今著聞十一云蹴鞠の逸遊者前庭之壯觀也文武天皇大寶元年に此興始まりけるとかや白妙の上絲樹之景ニ六對凍殿翼相當感興難レ盡者也云々　(ケ)雀小弓の事也　(フ)掩韵前に見えたり　(ゴ)棊の事前に見ゆ

【百六段】まひは　するが舞、求子、太平樂は、さまあしけれど、いとおかし、太刀などうたてあれど、いとおもしろし、もろこしに、かたきにぐしてあそびけんなど聞に、鳥のまひ、ばとうは、髮ふりかけたる、まみなどは、おそろしけれど、樂もいとおもしろし、らくそんは、二人して、ひざふみて舞たる、こまかた　此段は舞のおかしき品を記されたり　するが舞もとめ子東遊の舞なるべし　太平樂はさまあしけれとは四人して鎧を着太刀を帶鉾を負鉾を横たへ劍を援持て舞なり太刀などうたてあれとは此さまを云なりもろこしにかたきにぐしてとは此舞の起故を云なり唐太宗功を建るの時諸臣劍を持て舞たりし事なり　ばとうとは一人して舞也青糸を髮の亂るゝごとく振懸冷じき面を着て待れはまみなどはおそろしと云なり　がくもいとおもしろしとは此調子乞食調にして呂の樂なり　らくそんとは納蘇利と同じき平調の樂なり二人して脊を曲膝を突てまふなり

(エ)舞譜に太平樂ニやう有上古の太平樂は具足を著なり今のは襖に指貫を着て鉾を負ざるなり　太平樂は破陣樂也太宗爲ニ秦王ニ破ニ劉武周ニ軍中相與作ニ秦王破陣樂曲ニ及レ即レ位宴會必奏レ之新樂府註

(テ)鳥舞　賀殿と同しく壹越調の樂也鳥舞蝶舞は宇多天皇の御時作り給ふて日本の樂なり云々是則呂律相兼たる舞樂なり　(ア)援頭バトウ　還城樂と同じく乞食調の樂なり云々　(サ)落蹲ラクソン納蘇利と同じく平調の樂なり五月六日武德殿の騎射はて、打毬の事あり唐人の裝束にて馬に乘て毬子を走しむるを打毬と云其時奏する樂を打毬樂といふ

落蹲も六日競馬の日雅樂寮奏レ之云々　南宮譜云昔善舞ニ此曲ー者伴[illegible]古樂小曲なり

百七段　ひきものは　琵琶、さうのこと　此段彈物の品を記されたり琴瑟和琴をいはずして琵琶箏計を擧られし事心有義なり別條に記レ之
(キ)琵琶註云琵琶胡琴長三尺五寸象ニ三才五行ニ四弦象ニ四時ー推手前曰レ琵却手後曰レ琶取ニ鼓時ー以爲レ名　(コ)箏箏譜云形似レ瑟而短有ニ十三絃ー柱高三寸　風俗通云本秦聲也或曰蒙恬所ニ造制ー云々　一說云秦人薄義父子爭レ瑟而分レ之因以爲レ名　或云秦始皇時破ニ廿五絃ー爲ニ十三絃ー今箏是也昔以レ竹造レ之其後以レ桐造レ之也張籍祭ニ韓昌黎ー詩云公既相邀留坐語ニ於階楹ニ乃出ニ二侍女ー合彈ニ琵琶箏ー

百八段　(ヨ)しらべは　(ユ)ふかうでう、(ミ)黃鐘調、(シ)蘇合の急、(ヱ)鶯のさへづりといふしらべ、(ヒ)相府蓮　此段は呂律の調を記されたり前段につゞゐたる文也　しらべとは五音十調の調和するを云也　ふかうでうとは風香調也　黃鐘調とは律也徵なり　蘇合の急とは蘇合香の急なり是則盤渉調の樂にて律なり急とは樂每に序破急と云事侍る也　鶯のさへづりといふしらべとは春鶯囀なり壹越調呂律兼たる調なり
相府蓮とは平調の樂なり舞はなし
(ヨ)南宮譜云夫於ニ律逆ー者用ニ平調ー於ニ呂逆ー者用ニ双調ー至ニ于他調ー隨レ時用レ之但律呂逆以レ歌爲レ本示曲相交返轉云々　(メ)風香調　是則前段の琵琶の調を云義なり　或書云黃鐘調は笛の黃鐘調也琵琶の風香調也琵琶の黃鐘にはあらぬか凡琵琶は風香調也風香調に秘曲あり楊眞操流泉啄木等也仍以ニ此兩調子ー知レ先琵琶の黃鐘調は笛の平調に合する也揚論頭實後四調を定たり風香調合ニ笛黃鐘調ー返風香調合ニ一越笛平調ー　黃鐘合ニ笛平調ー　淸調合ニ笛平調盤渉調ー是也今世に此外返黃鐘調笛大食調双調笛ノ一越調平調笛ノ盤渉調云々　今案琵琶の風香調と笛の黃鐘調と合たる故に今の本文にもつゞけて書り又琵琶と笛との兩段の間にいふ調なれば獨餘調を云にあらじ琵琶笛の心をはなれずして見るべし　(ミ)文選長笛賦云十二畢具ニ黃鐘ー爲レ主註ニ善云呂氏春秋曰黃帝命ニ伶倫ー爲レ律伶倫制ニ十二

簫聽鳳鳥之鳴以別十二律以此黄鐘之宮故黄鐘宮律之本也翰云六律六呂爲十二黄鐘律官聲也宮爲君故爲主也　シ　蘇合香は青海波と同盤渉調の樂なり此蘇合の樂の急也　花鳥云延喜六年十一月十日御賀先奏萬歳樂次蘇合次皇麞破保曾呂俱世利犲越也急賀利夜須云々　（ヱ）河海云壹越調大曲新樂名天長寶壽樂春鶯囀也　南宮横笛譜云昔善舞此曲者有左大臣源信朝臣及巨勢式人等仍承和御時　勅信朝臣以此曲令傳習之成康親王合于御笛傳於淸涼殿前觀之者無不感泣（ヒ）韻府云千頃詩笛曲有想夫憐名不雅客曰南朝製曲號相府蓮語訛爾即王儉蓮幕事　白氏文集六十八想夫憐詩云玉管朱絃莫急催客聽歌送十分盃長愛夫憐第二句請君重唱夕陽開　兼好つれ〴〵草さうふれんと云樂は男女をこふる故の名にはあらずもとは相府蓮文字のかよへるなり晉の王儉大臣として家に蓮をうへて愛せし時の樂なり是より大臣を蓮府といふ　今案相府蓮は皇麞萬歳樂に同平調の樂舞は無也

百九段　（モ）笛は　よこぶえ、いみじうおかし、とをうより聞ゆるが、ちかうなりもて行もいとおかし、近かりつる聲、はるかに聞へて、いとほのかなるもいとおかし、車にてもかちにても馬にても見へず、さばかりおかしき物はなし、まして聞しりたる調子など、いみじうめでたし、曉がたに忘れて枕のもとに有たるを、見つけたるもおかし、人のもとより取におこせたるを、をしつゝみてやるも、たゞの文のやうにて見えたり、（ス）さうのふえは、月の曉に、車などにて聞へたる、いみじうおかし、所せくもてあつかひにくゝぞ見ゆる、ふく顔やいかにぞ、それは横笛も吹なしありかし、（二）ひちりきは、いとむつかしう、秋の虫をいはゞ、くつは（三）虫などにゝて、うたてけぢかく聞まほしからずまして、わろう吹たるはいとにくきに、臨時の祭の日、いまだ御前には出はてゞ、物のうしろにて、横笛をいみじう吹たてたる、あな面白と聞まどふ程に、なからばかりより、打そへて、吹のぼせたるほどこそ、たゞいみじうるはしき、かみもたらん人も、みな立あがりぬべきこゝちぞする、やう〳〵琴笛あはせて、あゆみ出たる、いみじうおかし　此段は笛の品を記されたり前段につゞゐた

る文なり　車にても以下はほのかに聞故を云なり
或云笛は少物なれば取あつかふに目にたゝずして
おかしきとなり　さうのふえ以下心あきらかなり
所せく以下は笙の笛は其器横笛より大にして持
扱にくきぞと也　ふく顔やいかにとは笙を吹時は
面貌にをほひ侍る故いかにぞやと云なり　それは
よこぶえもとは顔をゝふは笙のみにかぎらず横
笛も吹なしやうにて顔をかくすやうに侍るぞと也
ひちりき以下心明らか也　秋の虫をいはゞとは
篳篥の聲を秋の虫にたとへていはゞと也　出はて
ゝとは樂屋より調もて行義なり　なからばかりよ
りとは初に横笛にて音取を吹後に篳篥を打合せ吹
也なからは横笛吹調ふる半也　吹のぼせたるとは
篳篥を吹上る義也　たゞいみしう以下女などの立
上り見る心なり　あゆみ出たるとは祭の舞人が歩
み出る義なり
(モ)説文云七孔笛也羌笛三孔　風俗通云武帝時丘
仲作笛笛滌也所以滌邪穢納之雅正長尺四寸
七孔笛韻一定諸絃歌皆從笛出或云黄帝時伶倫作
之　(ス)釋名云簫肅也其聲肅々而清也編小竹
管為之參差不齊象鳳之翼　臨川王氏云簫大者
二十三管長尺四寸小者十六管長尺二寸　白虎通云
笙者太族之氣象萬物之生故曰笙有七正之節
焉有六合之和焉天下樂之故謂之笙　釋名云笙
生也象物貫地而生也大笙十九簧小笙十三簧女
媧作笙　今案簫笙ともにさうのふえと訓す但簫の
ふえ今の本文にかなふ歟　(一)律書圖云大篳篥小
篳篥云々遊山窟長一尺八寸吾四寸八分云々　是胡
國より起る聲なり　(二)蟋蟀虫

百十段　見るものは(三)行幸、祭のかへさ、御賀茂詣、(四)臨時の祭空曇てさむげなるに、雪すこし打散て、かざしの花、(五)青摺などにかゝりたる、えもいはずおかし、太刀のさやのきはやかに、くろうまだらにて、白くひろう見へたるに、半臂の緒のやうしたるやうに、かゝりたる、摺袴の中より、ほこりかに、驚くばかりなる褂など、すべてめでたし、今すこしわたらせまほしきに、使はかならずにくげなるもあるたびは、目もとまらぬ、されど藤の花にかくされたる程はおかし、猶いま過ぬる方見をくらるゝに、陪從の階をくれたる、柳に

挿頭の山吹、(七)おもなく見ゆれども、葵いとたかくうちて、(八)賀茂の社のゆふだすきと、うたひたるはいとおかし　此段は物見のいみじき品を記されたり七節に分て其品々を断釋し侍る也就中此第一節には先見る事の名をつらねて次に其品を述られしなり行幸　祭のかへさ　御賀茂詣　臨時祭是等の四句は先見る事の名を書つらね次下に壯觀の品を云なり　空曇以下は臨時祭の事を云なり是則詞つゞきなれば也　半臂のをのやうしたるとは半臂の緒の有さまに應じて雪の降懸りたるとなり　摺袴の中よりとは摺袴着たる者共の際より御着たる君達の出給ふ體なり　使とは祭の使なり　藤の花にかくされたるとは挿頭の藤花にて醜顏もかくさるゝとなり　過ぬるかたとは祭の使舞人の過行方也階をくれとは官位卑義なり　柳に挿頭の山吹おもなくとは使の人は藤花を挿てゆゝしく侍るが陪從共は柳に山吹を挿添てあさましく侍るとなり(二)關白の賀茂詣なり四月朔日の比定有由なり其儀式江次第臨時五に委く見えたり　事繁ければ洩侍る　(四)臨時祭　前委しく載たり今の臨時祭と

云は霜月酉日賀茂の祭を云なり　(五)青摺とは小忌の事なり山あゐにてすれる衣なり大かた神事の時用之なり　(六)賀茂八幡の祭に四位五位なと十二人を召具して神前におゐて東遊をうたはせらるゝなりそれを陪從と云なり通例近衛の官人か役なり　(七)挿頭の花の事　夫木に　信實朝臣「挿ならふ櫻山吹つゝけ共藤はあまたもなきかさし哉

(八)古今に「千早振かもの社の木綿たすきひとひも君かかけぬ日そなき

(九)行幸になずらふるもの、何かあらん、御輿に奉りたるを、見まいらせたるは、あけくれ御前にさふらひ、(イ)つかうまつる事もおぼへず、かう(十)〴〵しういつくしう、常は何ともなきつかさ、(ロ)姫まうち君さへぞ、(ハ)やむ事なうめづらしうおぼゆる、みつなのすけ、(ニ)中少(ホ)將などいとおかし　第二節行幸のいみじき物見なる由を述られたり　何かあらんとは見る物の中には行幸にましたる事何事かあらんやあるまじきとなり　御輿に奉りたるとは天子の御輿にめされたると云義なり　つかうまつる事もおぼへずとは常々の心とは違となり　常は何ともなき以下は平生

用られぬもの丶時にあひたる事を云なり則前のゑせ物の所うる折と云にも此心見えたり (九)紅葉賀朱雀院の行幸に神無月の十日あまりなりよのつねならずおもしろかるべきたびの事なりけれは御かた〳〵物見給はぬ事を口おしがり給ふ又行幸卷に其志は次に大原野の行幸とて世に殘る人なく見さはく云々 今案是等行幸を見る事のいみしき例に侍るべし (十)神々敷カウ〳〵シカ (イ)最ーツクシウ みなおそれつ丶しむ心なりゆ丶しき義なり (ロ)東竪子の事なり前に詳なり (ハ)みつなのすけ 御輿に御綱侍る其役のもの歟或姫まうち君の名歟云々 (ニ)中將少將などは近衞司なれば前經に侍りてゆ丶しき體なり

祭の歸さ、いみじうおかし、昨日は、よろづの事うるはしうて、一條の大路のひろうきよらなるに、日のかげも、あつく、車にさし入たるも、まばゆければ、扇してかくし、居なをりなどして、久しう待つるも、見ぐるしうあせなどもあへしを、けふはいととく果て、雲林院知足院などの門に、たてる車ども、葵桂も、うちなへて見ゆ、日も出わたれど、空はなをうち曇たるに、いかできかんと、目をさましおきゐて待る丶、郭公あまたさへ有にやと聞ゆるまで鳴ひゞかせば、いみじうめでたしと思ふ程に、鶯の老たる聲にて、かれに似せんとおぼしく、打添たるこそにくけれど、又おかし、早晩と待に、御社の方より、赤衣など着たる者どもなど、つれだちて來るを、いかにぞ、ことなりぬやなどいへば、またこんなどいらへて、御輿手輿など、もてかへる、これに奉りておはしますらんも、めでたく、けぢかくいかでさるげすなどの、さぶらふにかと、おそろしく、遙けにいふ、程もなく歸らせ給ふ、葵よりはじめて青草葉どもの、いとおかしく見ゆるに、所の衆の青色、白襲をけしきばかりかけたるは、卯の花垣根ちかう覺へて、子規も、かげにかくれぬべう覺ゆかし、昨日は、車ひとつにあまた乘て、二藍の直衣、あるは狩衣などみだれ着て、しだれ取おろし、物くるおしきまで見へし、君達の齋院のえむがにて、ひろさうぞくうるはしくて、けふは、ひとつづ丶、おさ〳〵しく乘たるしりに、殿上わらはのせたるもおかし、渡果ぬる後には、などかさしもまどふらん、我も〳〵と、あやうくおそろしき

まで、さきにたゝんといそぐを、かう(九)ないそぎそ、のどやかにやれと、扇をさし出てせいすれど、聞も入ねば、わりなくてすこし、廣(ヒロ)き所に、しゐ(十)てとゞめさせて、たちたるを、心もとなく、にくしとぞ思ひたる、競(キホヒ)かゝる車どもを、見やりてあるこそおかしけれ、すこしよろしき程に、やり過して、道の山里めき哀(アハレ)なるに、うつ木垣根といふものゝ、いとあら〳〵しう、おどろかしげにさし出たる枝どもなどおほかるに、花はまだよくもひらけ果(ハテ)ず、つぼみかちに見ゆるをおらせて車のこなたかなたなどにさしたるも、桂などの、しぼみたるが口おしきに、おかしう覺ゆる、行(ユク)さきを、ちかう行(ユキ)もてゆけば、さしもあらざりつるこそおかしけれ、男の車の誰ともしらぬが、しりに引つゞきてくるも、只なるよりはおかしと見ゆる、引わかるゝ所にて、嶺(リ)に別るゝといひたるもおかし　第三節賀茂祭の歸さのいみじき物見なる事を述られたり　昨日の以下は先(マツ)祭の當日のさまを云なり　車にさし入たるとは一條大路などにたてる物見車なり　まばゆけれとは晴(ハレ)がましき體を云なり　日も出わたれど以下は翌(アクルヒ)日の事を云

なり或云祭の日の早朝ノ氣色なり　早晩とまつにとは祭の渡るを待義なり　事なりぬやとは神事は過つるやと見物の人が問ふ詞なり　まだこんとはいまだ不レ來ルぞと赤裝束の者が答るなり　御輿不レ及レ注レ之　手輿は官家の輿也　いかでさるげすなどのさふらふにかとは御輿のもとへ下々の近寄は憚有と云義なり　程もなくとは待し程は盛に思しかど頓て果てぬると云心なり　葵以下は見物の人々の衣裝供奉の輩の裝束のさまを云なり　昨日は車ひとつにあまた乘てとは翌日の歸さまを昨日にくらへて云なり　けふは以下翌日の歸さまなり　わたり果ぬる後以下は地の詞なり　かうないそきそ以下は歸る人々の下知する義也　心もとなくに惡(ニク)くしとは待人や有らんと心もとなう惡まんと也　競かゝる車共を見やりて有とは彼車を停居たる人が見やる義なり是より以下は停まれる車の歸(カヘサ)の遊輿をかけり心あきらかなり　さしもあらざりつるとは最前のごとく所狹(セク)はあらぬとなり　しりに引つゝきてとは彼停居(トヾイ)たる女車の跡に男車の引續て行は輿有となり是則前の心もとなくにくしと云詞

に應ずる文なり　只なるよりはおかしとは急亂て行よりも優しき風情ぞとなり　引別るゝ所とは女車と男車と引別るゝ岐にてなり
（ヘ）國史云天長九年四月癸酉鸞駕幸二紫野院一御釣臺院一司獻レ命陪從文人賦レ詩御製和成賜レ祿有レ差新撰二院名一爲二雲林亭一承和十一年八月癸巳幸二北野一駐二蹕於雲林院一閲二覽池塘一賜二宴群臣一日暮還宮元慶八年九月十日丁卯權僧正法印大和尚位遍昭奏言雲林院者故無品常康親王之舊居也親王出家爲二沙門一貞觀十一年二月十六日以二此院一付二屬遍昭一曰深草天皇給レ此居レ之天皇登霞常康落レ髮昊天罔レ極徳猶難レ報レ恩願永爲二精舍一令レ學二天台之教一伏思元慶寺永賜二年分度者三人一傳二天台之法門誠度之道一請以爲二元慶寺別院一成二親王之心願一矣院中雜事擇下遍昭門徒中堪二幹事一者上令二其勾當一勅依レ請聽レ之　前にも略して釋し侍りぬ凡雲林院は淳和天皇の離宮なり仁明天皇に處分し奉りぬ次に常康親王傳領本堂は彼親王堂なり其後御願寺として天暦に實性僧都別當に補せられなとして殊に尊敬有き今紫野大徳寺の前にうちいと云所有是なん其舊跡と云傳へ侍る又雲林院をうりんゐんとよむならひ也　（ト）知足院　前に見ゆ猶委可レ尋レ之　（チ）引歌前にしるす人丸の歌也又元眞集に「卯の花の蔭にかくれて今日迄そ山子規聲もおしまぬ　（リ）垣下エンガ　（ヌ）義式の時をひろといひ略する時をつほといふなり　（ル）如此カク　（ヲ）強シヰテ　（ワ）古今戀部二　たゞみね「風吹は峯に別るゝ白雲の絶てつれなき君か心か　（カ）またこん　清濁兩説なり濁時は未レ來頓て來んと云義なり清時はとだへして又來んと云義なり前へ一列行共猶又來と云心なり

五月ばかり、山里にありくいみじくおかし、澤水も實、たゞいと青見へわたるに、うへはつれなく草おひしげりたるを、中々たゞ、さ行は、下はえならざりける、水の、ふかうはあらねど、人のあゆむにつけて、とばしりあげたる、いとおかし、左右にある垣に、枝などにかゝりて、車の屋形に入も、急てとらへておらんと思ふとおもふに、ふとはづれて過ぬるも口おし、蓬の、車に押ひしかれたるが、輪のまひたちたるに、近かけたるもいとおかし　第四節五

月の比青葉の茂みを分ありくはいみじき見物なる由をかけり　うへはつれなく草おひしげりとは山際の澤水なれば渡る人稀にして草も茂るとなり　下はえならざりけるとは底は淸てえもいはれず潔となり　左右にある垣にとは垣にある木の枝に車の衣などのかゝる義なり　近かけたるとは艾の莖を車の輪に引懸たるを輪が廻あがれば車の内より近見ゆるとなり是則優しき見物なり

(△)いみじうあつき比、夕涼みいふ程、ものゝさまなど、物おぼめかしきに、男車のさきをふは、いふべき事にもあらず、たゞの人も、しりの簾あげて、二人も一人も乘て、はしらせて行こそ、いとすゞしげなれ、まして琵琶ひきならし、笛の音聞ゆるは、過ていぬるも口おしく、さやうなる程に、牛の鞦もしらぬにやあらん、かのあやしうかきしらぬさまなれど、おかしうこそ物くるをしけれ、いとくらうやみなるに、さきにともしたる松の煙の、彼車にかゝりたるもいとおかし　第五節夕涼みしありく車のおかしき見物なる由を云なり　夕涼みいふ程とは夕涼と云時の程と云義なり　しりの簾とは車の後の簾なり是則前にあそびは夜人の顔見へぬ程といひしと同じ義なり　過ていぬるも口おしとは殘おほき義なり　牛の鞦もしらぬにやあらんとは舍人共が樂に聞入て鞦の解などするもしらぬにやとなり　かのあやしうかきしらぬさまとは琵琶を彈さまをもしらぬ義なり　おかし以下は外より舍人を見る者の心なり　物くるをしとは舍人のあやしき體を云心也

(△)いみしうあつき比夕涼みいふ程トアル所ヲ或本ニハいみしきあつき晝扇の風もぬるし氷水に手をひたしてもてさはく程にト有又一本ニハたとしへなき段の内に有今の傳本見えす　(ヨ)彼泉大將定國卿の隨身忠岑に松ともさせ夜牛にふみわけて左大臣へせうそこしおはせし程の事なども思へるよそひなり

五日のさうぶの、秋冬過るまで有が、いみじう白みかれてあやしきを、引折あけたる、その折の名殘てかゝへたるもいみじうおかし、よく燒しめたるたき物の、昨日おとゝひけふなどは打過たるに、衣を引かづきたる中に、煙の殘たるは、今のよりも　めでたし　第六節御座の飾の目とまる事を云是則見る物と

云題の義なり　引折とは簾を擧(アクル)とて菖蒲が折(オル)ると
なり　よく燒しめたる以下は夜御座(ヨルノオマシ)或は匂の間(ニホヒマ)な
どの儀(ヨツホヒ)なり此章見る事を專(モハラ)いはね共目留る儀炳焉(イチジルシ)
きなり
(タ)千載に入し辨乳母か折ならぬねをとよみ江侍
從かあやめの草は有ながらと返したるも此心也
月のいとあかき夜、川を渡れば、牛のあゆむまゝに、
水精などのわれたるやうに、水の散たるこそおかし
けれ　第七節月影の流にうつる氣色の見物なる由を
かけり其心別義なし　牛のあゆむとは車にて月の
夜川を渡れば靜に水をふみ分けて月影のよくうつ
る氣色なり

百十一段　おほきにてよき物、(ヒ)ほうし、(ソ)くだもの、
家、餌(ツ)袋、硯、墨、男の目、あまり細は女めきたり、
又かなまりのやうならんは、おそろし、火桶、(ラ)ほう
づき、(ム)山吹の花びら、馬も牛もよきは大きにこそあ
れ　此段おほきにてよき物を云なり小とてもあるに
任する物なれども大なるを用ゆるにしかぬ物共
なり
(レ)法師　帽子爾說也　(ソ)果物クダモノ　(ツ)餌
袋エブクロ　前に詳なり　(ネ)椀カナマリ　同斷
(ラ)酸漿ホウヅキ　兼名苑　(ム)酴醾ヤマブキ　本草
綱目　葩ハナヒラ

百十二段　みじかくて有ぬべき物、(ウ)とみの物縫糸、(井)
燈臺(トウダイ)、げす女の髮、うるはしく、みじかく有ぬべし、げす
人のむすめの聲　此段の詞題の通に別義なし、げす
女の髮とは必短をよしと云義にはあらず短とても
苦しからぬと云心也上﨟の髮は短ければ殊更あし
きが下司(ゲス)女は苦しからぬとなりされど美(ウルハシ)くは有た
き由なり　人のむすめの聲とは聲の卑(ヒキ)有たきとゝ云
心なり
(ウ)とみの物縫事前にも有其所にて思ひ合すべし
(井)短檠の事なり光を遠見んには高く置がよき由
日光の喩に纂蹠には書給へ共今の義はそれとは心
かはり侍る短檠の所用を云なり是萬方の爲にする
灯臺に非ず只一分の所用には高きより短きかよき
なり

清少納言枕草紙抄巻十二

百十三段　人の家につき〴〵しき物、(イ)くりや、(ロ)侍のざうし、箒の新しき、(ハ)かけばん、(ニ)おほきやかなる童女、(ホ)よきはしたもの、つゐたてさうじ(ヘ)三尺の几帳、しやうぞくよくしたる(ト)ゑふくろ、からかさ、かきいた、たな、(チ)づし、ひさげ、てふし、(リ)ちうのはん、わらうた、こんのたれ布、ひぢおりたるらう、ちくわうゑ(ヌ)書たる火おけ、ものへ行道に、きよげなるをのこの、たて文のほそやかなる持て、いそきて行こそ、いづちならんと見ゆれ、又きよげなるわらはべなどの、あこめいとあさやかにはあらず、なへばみたる、けいしのつや〳〵かなるか、かはに土おほくつゐたるをはきて、しろき紙におほきにつゝみたる物、もしは、箱のふたに草紙どもなど入て、もて行くこそ、いみじうよびよせてみまほしけれ、門ちかなる所の前わたりをよびいるゝに、あひぎやうなく、いらへもせでいくものは、つかうらん人こそ、をしはからるれ　此段は詞おほく心も尤むつかしき段なり、よく〳〵見わけて釈すべし凡此段

を八節に分て注し侍るなり就中第一節には家居調度召使者或は消息などあるさま彼是取合せてつき〳〵しき事を廿一ヶ條擧られたり　人の家につき〳〵しき物とは先例のごとく當段の題なりつきづきしとは次第とも書又方便ともかけり畢竟人の家に似合しう有たき物と云義なり　くりやとは厨庖なり　さふらひのざうしとは侍曹司なり番所など云心なり　おほきやかなる童女とは召使者なり　よきはしたものとは半者也　かけばんとは懸盤なり　ちうのはん中盤成べし　つゐたてさうじとは衝立障子也　三尺の几帳　装束よくしたる餌袋傘提銚子かき板紺の垂布箒のあたらしき棚厨子圓座以上十四ヶ條調度のつき〳〵しうあるべき義を擧られたり　ひぢおりたるらうとは折曲廊下也　ものへ行道以下は外より消息持行る家はいみじう難ならんと思はるゝものなり　又きよけなるわらはべとは是も消息持通ふ便なり　あこめ以下はわらはの装束を云なり　けいしは系履なり糸の履なり　しろき紙に下使のわらはが持し物を云ふなり　門ちかなる所のまへわたりをよび入ると

はわらはか持行ものを見まくほしさに呼かくる心也　つかうらん人とは使の主をいふ也使の者か愛敬なきゆへ其主の情あさきほど迄推量思ふとなり

(イ)和名云説文云厨庖屋也庖断理魚鳥者謂之庖丁俗云倉厨也和名久利夜　(ロ)一禪の御説侍のざうしは殿上の曹を云　云々　(ハ)懸盤カケハン　(ニ)刀自得選い豊成べし　(ホ)御厠用人ひすましの類を云なり　(ヘ)禁秘抄云四面有几帳帷夏生以胡粉畫葦雀冬樗木形云々几帳は三尺四尺の物なり臣下にもむかしは用ひたるにや人の家につき／＼物の段に載せられたり前にも見えたり又云三尺几帳御座北柱内立云々　(ト)餌袋エブクロ前に見へたり　(チ)御厨子所也食物を調する所公私ともに稱する名也　(リ)中盤チウノバン六角八角なとに作る懸盤のごとし　或御記云采女調和若菜羹供進釆女又以供進餘羹給時臣盛中垸置中盤　(ヌ)ちくわうゑ　或云竹王繪ト書る本有作り繪と有を書誤れるにや作り繪なれば綵色繪の事なり竹王繪とは難心得歟

(ヨ)行幸はめでたきもの、上達部公達、車などのなきぞ、

少しさう(タ)ぐしき、萬の事よりも、わびしげなる車に、さうぞくわろくて、もの見る人いともどかし、(レ)説經などはいとよし、(ソ)つみうしなふかたのことなれば、それだになをあながちなるさまにて、見ぐるしかるべきを、(ツ)まして祭などは、見て有ぬべし、下簾もなくて、しろきひとへ、うちたれなどしてあめりかし、只其日のれうにとおもひて、車も下簾もしたてゝ、いと口おしうはあらじと出立たるに、まさる車など見つけては、何しになどおほゆるものをましていかばかりなる心地にて、さで見るらん、おりのぼりありて公達の車おしわけて、ちかうたつ時などこそ、心ときめきはすれ、よき所にたてんといそがせは、とく出て侍ほど、いとひさしきに、居入たちあがりなど、あつく苦しく、間ちかうするほどに、(ナ)齋院のえん(ラ)がに參りたる、殿上人、所衆、辨、少納言など、七重八重引つゞけて、院のかたより、はしらせてくるこそ、事なりにけりと、おどろかれてうれしけれ、物見の前にたてゝみるもいとおかし、殿上人の、物いひにおこせなどし、所々の御前どもに、(ム)水飯くはせつゝ、棧敷の下に馬引よするに、おぼえ有人

の子どもなどは、(ウ)ざうしきなどおりて、馬の口などしておかし、さらぬもの丶、みもいれられぬなどぞいとおしげなる、御輿(ミコシ)のわたらせ給へは、(井)簾もあるかきり取おろし、過させ給ひぬるにまどひありくもおかし、其前にたてる車はいみじうせゐするに、などて立まじきぞと、しゐてたつれば、いとわらひてせうそこなどする、こそおかしけれ所もなく立かさなりたるに、よき處の御車人たまゐ、(ノ)ひきつゞきて、おほくくるを、いつこにたゝんと見るほとに、御前ともたゝおりに下てたてる車ともを、(オ)たゞのけにのけさせて、人たまひまでたてつゞきてたてるこそ、いとめでたけれ、をひのけられたるゑせ車どもの、牛かけて、所あるかたゆるがしもて行など、いとわひしけなり、きら〳〵しうよきなどをは、えさしもおしひしがすかし、いときよげなれどまだひなびあやしく、げすなどたえずよびよせ、兒いだしすへなとするもあるぞかし　第二衍物見車裝束供人などのつき〴〵しうありたき事をかけり　行幸はめてたきものとは先發端也　上達部公達車なとのなきとは中少將諸衛の介などの行幸供奉の體を云なり　萬の

事以下は物見車のわびしきを云なり　説經などはいとよしとは八講など後世の事には餘美々(アマリビヽ)しからでもよしとなり　つみうしなふかたのことゝは善根福德を修し勤る事なればとなり　あながちなるさまにてとは强(アナガチ)なるさまにてまうでんは見ゝるしからんとなり　ましてとは前の事より募(ツノル)心なり見てありぬへしとは見人有べしとなり祭を見るのみにあらす見物の車をも互に見る人の有べきとなり　しろきひとへうちたれとは簾もなくわびしけなる車のさまなり　只其日のれう以下は分際に應して用意せし車の事を云なり　何しにとは其日のれうに用意せし人の心を云なり　我心には何しにまさらしとむかふの車を見下す義なりましてとは前のわびしげなる車の事を云也　さで見るらんとはさう見くるしき車にて見るぞと也侘(ワビ)しきくるまにて見る人をとがめて書し文也　おりのぼりとは車より降昇(オリノボリ)する公達の車のゆゝしきさまをいふなり　心ときめきはすれとは近く立寄(ヨスレ)はよしあしの分別(ワイダメ)見えて心ときめくとなり又云公達の車のいみじきを引よせて外の車どもをもしわけはらひのけ

などするは心時めくと也　よき所とは物見に宜所也　とくいでゝ待ほどゝは宜所に居とすれば早く行て久しう待となり　居入とは押込義也　立あがりとは人より立のびて見る義也　齋院とは賀茂の齋院也　えんが垣下なり　院のかたよりとは齋院のかたよりなり　事なりにけりとは事成にけりなり祭の早初る義なり　殿上人の物いひにおこせとは彼方此方へせうそこする義なり　所々の御まへとは物見の棧敷にて上にも下にも水飯を服用ある義なり　おぼへ有人の子とは時めく人の子也　ざうしきなどおりてとは舍人雜色ども下立て馬の口引なをし色めくさまなり　さらぬものとははふれにたる侘しき人のうへをいふ也　御輿とは神輿なり　簾もあるかぎりとりおろしとは棧敷車なとのすたれを下義なり　過させ給ひぬるとは神輿渡り過させ給へば也　まどびありくとは徘徊する義なり　其前にたてる車とはわが徘徊する前に外の車を立させじと制する義なり　なとてたつまじきぞとは外の車の爭義也　いとわらひてせうそこなどするとは相互請應などして所を爭心なり　よき所の車とは時めく方の車なり　人だまひとは人給ひなり乘替の車なり　御前どもとは物見の正面の御まへにたてる車どもを引のけて彼よき所の車を引入る義也　ゑせ車以下はわひしげなる車の甲斐なきゆへを云也　きら〳〵しう以下は美麗なる車の甲斐ある由をいふ也　まだひなびあやしく以下はまたは又なりゑせ車にも似ずきら〳〵しうも侍らず又一品ある車ぞといふ義也　ひなびとは野けなる心なりされども下女などもたへず召寄兒童めなども見えわたるとなり　凡此一節は家につき〳〵しう有たきは物見の車といふの義を詮にしるされたり

(ヨ)車駕行幸同蔡邕獨斷ニ云天子所レ至曰レ幸者宜レ幸也世俗謂レ幸爲ニ僥倖一々々謂ニ所レ不レ當レ得而得者一車駕所レ至臣民被ニ其德澤一以僥倖故曰レ幸　書言故事九云車駕所レ至地曰ニ僥倖一　(タ)さう〳〵しきは事たらぬ心となり　(レ)說經說法同し事なり八講なとの心なり　(ソ)罪障懺悔の道なれはといふ義なり　(ツ)賀茂の祭なり前にあまた見えたり　(ナ)花鳥餘情ニ云賀茂齋院の野宮は紫野にあり云々

嵯峨天皇弘仁元年置ニ齋院司一以ニ皇女有知內親王一爲ニ齋王一　神祇式云凡天皇即レ位定ニ賀茂大神齋王一仍簡ニ內親王未レ嫁者一ト定（ラ）後撰齋院のみそきの垣下に殿上の人々まからて曉にかへりてむまかもとにつかはしけるとあり今の義も垣下成べし（ム）水飯　湯つけの事なり又酒肴など饗應するを水驛と云なり是は驛路にて馬に水人には酒肴などもてなす心にて水驛と云なり水飯も其心なるへしされは今の本文に馬の口なとしてと云も水驛せし心成べし　又源語類聚云すいはんは干飯の類なり水漬湯漬ともあり水飯は今の世にひめと云てくう物なり如ニ湯漬一云々　（ウ）雜色サウシキ前に委く見えたり隨身舍人なと給はりし殿上人と見えたり（ヰ）わたり過ぬる義なりつれ／＼草に棧敷ふよう也と書しは此心をうつしていふ成べし（ノ）花鳥餘情云ニ出車一をは公方より點せられて其人に給ふ故に人給ひと名つくる也　河海云人給ヒトタマヒ人給は乘替也云々　源語類聚云ニ人給車出車とて公方より點せられて其人に給故に人給車と云也副車ともいふ云々　（オ）根合卷云高松にはひきつゝき

物御覽するもいとめてたし女房車のりこほれて事なりて所もなきによそほしく花やかにてもとよりある車ともおしけちてたちならひ御覽する清少納言かいひたるやうにめてたしと見ゆ上下略　清少納言の車あらそひの事は此段の本文なりこれを用ひて赤染衞門も根合の卷に書るなり源氏の車あらそひもこれらの心に等しき事侍るなり

細殿（オ）にびんなき人なん、曉に笠さゝせて出けると、いひ出たるを、よく聞ば我うへなりけり、地下（ク）などいひても、めやすく、人にゆるされぬばかりの人（サ）にもあらざめる、あやしのことやと思ふほどに、うへより御文もてきて、返し唯今と仰られたり　何事にかとおもひて見れば、大かさの形を書て、人は見えず、たゞ手のかぎりかさをとらへさせて、しもに、（コ）みかさ山のはあけし朝よりと、書せ給へり、なをはかなき事にても、めでたくのみおぼえさせ給に、はづかしく心つきなき事は、いかで御覽ぜられしとおもふに、さるそらことなとの出くるこそ、くるしけれど、おかしうて、こと紙に雨をいみしうふらせて、下に、あめならぬ名のふりにけるかな、（・）さてやぬれ

きぬにはなり侍らんと、けいしたれば、右近の内侍などにかたらせ給ひて、わらはせ給ひけり　第三節折ふし興にもせうそこなどにもとりあへす歌よみ手なと書女房の侍るは家の内つき〳〵しうおもはるゝといふ義をかけり少納言身のうへの事にて自賛のやうなれども女のわらはの教の爲に何となく思ひ寄(ヨル)まゝの物語なるべし加様の所よく氣を付て歌人の本意を失はさるやうに見るべし云々　びんなき人とは無レ便なりあやしみとがむる氣味なり　いひ出たるをとは女房達のいひ出て取沙汰有となり　よく聞ばとは少納言のよく〳〵聞れしとなり　我うへなりけりとは少納言身の上の取沙汰ぞとなり則此次にさるそらことといふは此義也　地下(チゲ)など以下はびんなき人の身の程をいふなり地下とは細殿(ホソドノ)を出し人は地下と見えたり誰と名はしれかたし　めやすくとは見をとされ見あなどられぬ心成べし　人にゆるされぬばかりの人にもあらさめるとは非レ不レ聽(スルニハサン)二于人一(ニ)人のめやすくゆるす心なり　あやしの事やとは地下なからも人のめやすくゆるせし人なれは細殿に來り給ふをびんなしといふべきにはあらずあやしのいひ事やとなり　うへよりとは御前よりといふ義なり少納言の方へ給はる義なり　大かさのかたとは大きなる傘の形を繪に書てなり　人は見えすとはかざす人も持人もかゝぬなり　たゞ手のかざりとはたゞ手にてとらへし所計(バカリ)書たると也　下(シモ)にとは繪の下にとなりみかさ山のはあけし朝より此詞を繪の下に文字にて書給ひしと也彼びんなき人傘をさゝせて朝に出し故を仰られん爲にみかさ山のはあけし朝よりと繪と詞とにことはり述べて少納言かたへ仰下されたる義なり　なをはかなき事にても以下少納言の詞なりうへの御優(ヤサシ)き程を褒(ホメ)奉る義なり　はつかしくとはびんなき人に忍ひかたらふと取沙汰有故なり　心つきなき事とは心につかぬ事となりそらことなれは覺えのなきといふ義なり　さるそらことなどの出くるとは忍ひ契るにはあらでたゞせうそこなどいひ來り給を忍び契やうに人々の沙汰し給へばその斷(コトハリ)をいはん爲さるそらことゝいふなり　くるしけれどと文字眼(マナコ)なり前のはかなき事といひし詞へも應ずるなりはかなき空言にて迷惑な

からも優き事を仰下さるゝ故おかしうて御返事つかうまつるとなりよく出要(テニヲハ)を味はふべし　雨をいみじうふらせてとは雨の降さまを繪に書て也　下にとは繪の下に也　雨ならぬ名のふりにけるかなとは此詞を繪の下に書となり傘の詞にちなみて雨ならぬ名と云也わが名をいひふらされたるを雨にもたせいふなり　扨やぬれぎぬにはなり侍らんとは是も文の詞なりぬれぎぬとは戀のうき名をさして云なり雨傘の事ゆへぬれきぬのうきあだ名を立らるゝにてこそ侍れとなり畢竟實(マコト)にて侍らぬよしの斷なり　右近の內侍以下は御まへにて御覽じ興ぜさせ給ふ義なり

（オ）廊(ホソドノ)廊下の事なり前にも見えたり　（ク）凡四五位の間昇殿聽るを堂上といひいまだ昇殿を聽ぬを地下といふ也又譜代昇殿を聽ぬ家々をも地下と云なり　（ヤ）前漢書註如淳曰上者尊位所ㇾ在也但言ㇾ上不㆔敢言㆓尊號㆒耳　事物紀原云司馬遷作㆓史記㆒凡指㆓斥君尊㆒皆依違不㆓正言㆒稱曰ㇾ上　今うへと書るも此文法也前にもうへと多書り　（マ）拾遺集云おなし少將かよひ侍ける所に兵部卿致平のみこまかりて少將のきみおはしたりといはせ侍けるを後に聞てかのみこのもとにつかはしける「あやしくも我ぬれ衣をきたる哉みかさの山を人にかられて　此歌藤原義孝の歌なり今の本文にうへよりみかさ山のはあけし朝とかゝせ給はるは此義孝の歌の心をうつして少納言か身の上を仰らるゝ義なりされば少納言か御返事にも扨やぬれ衣には成侍らんとかへし申されたり又みかさ山のはあけし朝よりとあるはいつれの集に侍るやらんいまたかうかへ侍らず今案におしはかるに連歌と見えたり則少納言の雨ならぬ名のふりにけるかなと申されしは付句なるべし又三笠山に雨なとよみし證歌あまた侍る也後拾遺におとこのものいひ侍ける女を今は更にいかしといひて後雨のいたくふりけるにまかりけると聞てつかはしける和泉式部「みかさ山さしはなれぬと聞しかど雨もよにとは思ひし物を　詞花集源仲正「三笠山さすかにかけにかくろへてふるかひもなきあめの下かな　これら本歌にはあらねと詞の證歌なれはしるし侍ぬ　（ケ）ぬれ衣　無實を云なり　伊勢物語に「名にしおは

はわたにそ有べきたはれ島波のぬれ衣よるといふなり　九禪抄云ぬれ衣とは無實の事なり聖廟の御歌「天下のかるゝ事のなければはやきてし沾衣ひるよしもなき　愚見抄云沾衣とはなき名のたとへ也　今案聖廟御歌大鏡見ゆ少しちがへり　後撰に朝綱朝臣「まめなれとあた名は立ぬ風流島寄白波をぬれ衣にして　源氏紅葉賀内侍はまばゆけれとにくからぬ人故はぬれをたにきまほしかるたくひもあなればにやいたうあらかひ聞へさせす　むかし筑前守なる人の女を父は内の宮仕にと思ふけるを繼母海士男をたのみて女に通ふ體をして海士衣を女に夜な〳〵着せて父に見せければ父大にいかりにくみて女をころしてけりある夜父の夢に見へて女の歌　「ぬききする其たはかりのぬれ衣は長き泪のためしなりけり　是沾衣と云因緣なり

▲今案三笠山のはあけし朝よりとは上の句成へし三笠山山の端あけし朝よりと有しを山の字を一字古來より書落せるにや

三條の宮におはします比、五日の菖蒲のこしさしなど持てまいり、くす玉まいらせなどす、わかき人々、御匣殿など藥玉して、姫宮若宮つけさせ奉らせ給ふ、いとおかしきくす玉、外よりもまいらせたるに、あをさしといふものを、人のもてきたるを、あをきうすやうを、えんなる硯のふたにしきて、これ、ませごしにさふらへばとてまいらせたれば、「みな人の花やてふやといそく日も、わがこゝろをば天ぞしりける、と紙のはしをひきやりて、書せ給へるもいとめでたし　第四節爰には菖蒲藥玉など付らるゝ家居のつき〴〵しう侍る義をかけり　三條の宮とは中宮第三の腹の姫宮三條の御殿におはしませば三條の宮と申なりそこに中宮渡御有の時なり　御匣殿は女房の名也　つけさせ奉らせ給ふとは姫宮若宮の御插或は御帳などにつけてまいらせ給ふとなり則御匣殿のし給ふとなり　外よりもとは彼方此方より奉る義なり　あをさしとは今の世も青麥の芽にてする也今日の御祝儀の藥玉などに取そえ姫宮若宮を祝ひ奉りて捧る成べし　ませこしとは籬越なりあをざしは野底なるものなればたゞませこしに御覽する迄にさゝけ奉ると也今の世も貴人に物奉るは御目にかくると云なり「みな人の此歌中宮の御

詠成べしみな人とは宮つかへの人々をさして仰らるゝ也　花やてふやとは姫宮若宮を花や蝶やと册(カシヅキ)祝ひ奉ると也　いそく日もとは姫宮若宮早く御位にもつき后にも立給ふを待いはふ心なりもの出要(テニヲハ)よく味はふべしみな人のいそく心もわが心をも同じ趣ぞとなり日もわがとうつる腰(コシ)のてにをはなればー首の大意此もの字よりあらはれ侍るべし　わが心とは中宮の御心の内なり　天ぞしりけるとは御門のしろしめさんと也　凡歌の心はみな人祝(コトフキ)て御さかへをいそく心もわか心も同し事なれば御門の仰出されんやうに随ひまいらせんとみかどに打まかせて詠給ふ心なりかみのはしとは前のうすやうの紙なり　ひきやりてとは引壊(ヒキヤリ)てなり　かゝせ給へるもいとめでたしとは藥玉やうの物奉る折ふしの興に取あへず歌などよみ給ふは人の家につき〴〵しう思はるゝ義にて書る成べし

（ケ）勘物云長保元年八月九日自二式御司一移二御生(ス)昌三條宅一二年五月ナリ　（フ）こしさしの事前にも見えたり色々異說侍れ共畢竟庄絹の事なり少女舞人なとの腰にさしはさむ絹なり腰着(コシサシ)と書なり

（コ）中宮定子の御腹に若宮一所姫宮二所おはします御系圖傳記等まへに見えたり　（エ）艶(エン)美麗(ミヤビヤカ)なることろなり

十月十餘日(カムナツキトヲカアマリ)の、月いとあかきに、（テ）ありきて物見んとて、女房十五六人ばかりみなこききぬをうへにきて、引返しつゝ有し中に、中納言の君の紅のはりたるをきてくびよりかみを、かいこし給へりしかば、あたらしきぞとはそ、よくも似給ひしかな、（ナ）ゆげひのすけとぞ、わかき人々には、つげたりし、しりにたちてわらふもしらずかし　第五節月(モテナス)のあかき夜衣かぶり物見ありかんは月を玩本意なければ女房の家の内に侍りて靜に月見むこそ家の内つき〴〵しからめと云義なりつき〴〵しからぬ心をいひてうらにつき〴〵しき心を含めたる義なるへし　中納言の君とは女房の名なり　くびよりかみをかいこしとは衣を首(カシラ)に被(カツル)る義なり　あたらしきそとは俗にあたら事と云義なり女房の靭負介に似たるをあたら事と惜む義なり　ゆげひすけとは是もたとへていふ也靭負介は赤裝束なれば紅の衣に似たる由を云也わかき人々にはつげたりしとは若き女房達互に中

納言の君の事を告となり　しりにたちわらふとは
異名などよびてわらへ共中納言の君しられぬとな
り
テ　貫之集に一照月を見さらましかはうは玉の夜
は物へもゆかすそあらまし　かやうの心をや思ひ
出て月あかき夜のありきする成べし　(ア)今も女
のかつく衣をかつき共いひ打はをれるをかい取な
といふと同し心也　(サ)前のにけなき物の段にも
ゆけいのすけのやかうといへり　西宮抄院宮雜事
下云御隨身勤夜行云々御隨身は武士の靭負介な
りされはいやしきゆけいの介か夜行するさまに似
給ひしはあたら事かなといふ義なり
(キ)成信の中將こそ、人の聲いみじうよう聞しり給ひ
しか、　おなじ所の人の聲などは、つねにきかぬ人
は、さらにえ聞わかす、殊に男は、人の聲面をも見
わき聞わかぬ物を、いみじうみそか成も、かしこ
う聞わき給ひしこそ、(ユ)大藏卿ばかりみゝとき人はな
し、まことに、(メ)蚊のまつげにおつるほどをも、聞付
給ひつべうこそありしか、しきの御さうしの、
西おもてにすみし比、おほひ殿の新中將、宿直にて

物なといふに、そはにある人、此中將に、扇の繪の
事いへとさゝめけは、今彼君の立給ひなんにをと、
みそかにいひ入るを、其人だにえ聞つけで、何とか
〳〵と、耳をかたぶくるに、遠く居て、にくし、さ
の給はゞ、けふはたゞしとの給ふこそ、いかで聞給ひ
つらんと、あさましかりしか　第六節殿上御曹司な
どに耳とき賢き人の宿直するはつき〳〵しき物ぞ
と云義なり殊に中少將は武官にて非常を禁しめ殿
上を守る役なれば遲鈍なる人は殿上御曹司の守り
にもつき〳〵しからぬ故なり前節にしりに立てわ
らふもしらずと云詞につゞゐて耳とき人の宿直つ
き〳〵しう侍る由を書り　成信の中將とは勘物後
にしるす　人の聲以下は成信の耳とき故を云な
り　おなし所の人の聲とは常々馴添人の聲なり
つねに聞ぬ人はさらにえ聞わかずとは常々人の聲
をよく聞しらぬ人は馴添といへども覺束なきとな
り　殊に以下は尋常の男の見しり聞しらぬ事を比
云なり　いみしう以下は重て成信の事をいひて又
下の大藏卿の事を起す文なり　まことに蚊のまつ
け以下は大藏卿のうへを云なり　西おもてにすみ

し比とは中宮曹司にましゝます時女房達少納言など西おもてに侍しとなり　おほい殿とは道長公成信の養父なり　新中將は成信なり　そばにある人とは清少納言が傍にゐられし女房達なるべし　此中將にとは成信の新中將になり是則ちそばにゐられし女房が少納言へいひ懸る詞なり　扇の繪の事とは其故知がたし只成信へみそかに此扇の事をいふと計心得すむ事也　いま彼君とは大藏卿をさして云なり扇の繪の事を大藏卿にはかくす義なり是則ち傍なる女房へ少納言の密にいはるゝ詞也　其人だに聞つけでとは傍にちかふ居たる女房のえ聞ぬと也　遠く居てとは大藏卿の遠く隔て居ながら少納言の密に云るゝことを聞給ひたると也　さのたまはゞけふはたゞしとは大藏卿の詞なり　我に心置て藏し隔て給はゞ爰を立去まじとの給ふなり

いかで以下は少納言の詞也　大藏卿の耳聽事を感する義なり　あさましかりしとは少納言面目なきとの義なり

(キ)勘物云源成信兵部卿致平親王男母左大臣雅信女長徳四年十月左中將元民部太輔長保元年正月禁色二年四月從四位上中宮入內御堂猶子三年二月出家廿三　系圖は初卷に見えたり　(ユ)勘物云正光長保二年藏人頭左中將四年十月大藏卿

藤原氏系圖云

師輔
- 伊尹
- 兼通（忠義公　號堀河）
  - 顯光　從一位左大臣
  - 時光　中納言從二位
  - 朝光　正二位大納言
  - 遠光　在京大夫從四下
  - 親光　右兵衛佐正五下
  - 正光　參木從三位母有年女長和三年
  - 用光　從四下
  - 女子　圓融母皇子
  - 女子　同后娟子

公卿補任藤原正光故關白太政大臣兼通公六男母從四位上行左馬頭藤有年朝臣女長保六年二月廿六日參木大藏卿如元元藏人頭同十月廿一日從三位松尾平野北野社行幸行事賞 前後略　(メ)列子湯問篇云江浦之間生麼蟲一其名曰焦螟一群飛而集於蚊睫一弗相觸一也栖宿去來蚊弗覺也離朱子羽方晝拭眥揚眉而望之弗見其形一䚦俞師曠方夜擿耳俛首而聽之弗聞其聲一唯黃帝與容成子居空桐之上一同齋三月心死形廢徐以神視塊然見之若嵩

山之阿ニ徐以レ氣擬研然聞レ之若ニ雷霆之聲一

硯きたなげにちりばみ、墨のかたつかたに、しどけなくすりひらめかし、らうおほきになりたるか、さしなどしたるこそ、こゝろもとなしとおぼゆれ、よろづのでうとは、さる物にて、(ヱ)女はかゝみすゝりこそ、心の程みゆるなめれ、をきくちのはざめに、ちりゐなどうちすてたるさまこよなしかし、男はまして文机淸げにおしのごひて、重ねならずは、ふたつかけごの硯の、いとつき〴〵しう、蒔繪のさまも態とならねどおかしうて、墨筆のさまなども、人の目とむばかり、したてたるこそおかしけれ、とあれどかゝれど、おなし事とて、黑箱の蓋もかたしおちたる、すゝり、わづかに墨のゐたる、塵の(ヒ)此世にははらひがたけなるに、水うちながして、あをじのかめの口おちて、くひのかぎりあなのほど見えて、(モ)人わろきなども、つれなく人の前にさしいづかし、人の硯を引よせて、手ならひをも文をもかくに、其筆なつかひ給ひそと、いはれたらんこそ、いとわびし(セ)かるべけれ、うちをかんも人わろし、猶つかふもあやにくなり、さおぼゆる事もしりたれば、人のするもいはて見るに、などよくもあらぬ人の、さすがに物かゝまほしうするが、いとよくつかひかためたる筆を　あやしのやうに、水がちにさしぬらして、こは、ものややりとか、なにほそひつのふたなどに、書ちらして、よこさまになげをきたれば、水にかしらはさし入て、ふせるもにくき事ぞかし、(ス)されど、さいはんやは、人の前にゐたるに、あなくらあふより給へといひたるこそ、又わびしけれ、さしのぞきたるを見つけては、おどろきいはれたるも、思ふ人の事にはあらずかし

第七節調度などを用意する樣のつき〴〵しき事を云り其次手に男女の調度用意に取あつかふさまを述べ或は女の住所の事などをもしるして敎とする心成べしいつれも下心つき〴〵しき趣をしるす心を付て見るべし　ちりばみとは塵込なり塵のつもる心なり　しとけなくすりひらめかしとは研曲る義なり　さゝし上のさ文字は文章のやすめ字成べし下のさ文字左の字なりさやうにしたると云義なり　心もとなしとは塵ばみ墨ゆかめなとはしつれと年勞をつみかやうに遣ひ古たるは殊勝に思はれなから今迄の成事心元なしとなり　よろづのでうどはさる物にてとは前を結んで下を起す心なり　女はかゞみすゞりとは取別女の調度のつき

〳〵しからんは硯鏡のうへに心も見ゆるとなり
をき口とは奥口なり女房の住所奥口塵ためなどに塵すてたるはいみしきとなり女房に端居ちかふ出るははしたなきゆへなり此一章は女房の調度の事をいふ次手に住所のつき〴〵しからん事を云なり　男はまして以下は男の調度の事を云なり　かさねならずはとは重ね硯あらずはと云義なり　態とならねととは自然と古めかしきが殊勝に見ゆる義也　とあれどかゝれどとは莵もあれ角もあれと云て物事にかまはぬ人のうへを云也　黒箱以下かまはぬ人の硯さまを云也心あきらか也　人の硯を引よせ以下は調度の次手に人の硯をつかふ心遣ひを述たり　其筆なつかひ給ひそとは硯の主がつかふ人に云かけたらんはつかふ人の心侘しきと也　うちをかんも人わろしとはつかひし人の心を云なり其儘止むも人のみるめ面目なきとなり　猶つかふもあやにくとは聞なからつかふはあやにく侍ると也　さおほゆる事もしりたれは以下は心なき人の他の硯を遣ひ荒む事を云り前には硯の主が心なき由をいひ爰には又遣ふ人が心なきよしを云也

さおほゆるとはさやうにおぼゆる事もしりたるとなり前をうけて云也　人のするもとは我硯を人のつかひなすを物いはで見る義なり　よくもなき人とは心なき人也　いとよくつかひかためたるとは主かよくつかひかため置たる義也　こは何を切べし是はと云詞成べし　ものやとは器やゝり戸か何やと云詞也彼是におほく書散す義なり　よこさまとは筆をなげ置心なり　水にかしらはさし入とは硯の水に筆の首のぬるゝ義なり　されどさいはんやはとはあしくつかふを見ながらえとがめぬ心なり　人の前に以下は硯の次手に物書などする時傍に居人の勢心遣ひを云なり　あなくらあふより給へとは物書前に打おほふ人を云也　さしのぞきたるをとは物書をさしのぞく義なり　見付てとは物書人が見付て也　おどろきいはれたるとは見付驚てかこつ心なり　おもふ人の事にはあらすかしとは思ふ人ならばかくす事も有まじければ驚かこちなどせまじとなり
(シ)労らう功労あると云義なりかやうの調度はあたらしきより持なれたる殊勝に侍るとなり　(ヱ)

貫之集云もろまさの頭中將あつまへ下る女にくしのはこ錦なとてうしてやり給にとあり（ヒ）青磁絲色の燒物水入なるべし湯湯よみ成也
（モ）人わろき　人目わろきと云ふこゝろなり
（セ）あやにく　なすましき事を強てせんとする心也愛敬つきてにくき心成へし（ス）奥おくはあなたなれはあなたへより給へといはんとてあふより給へと云なり

めづらしといふべき事にはあらねど、文こそなをめでたき物なれ、はるかなるせかいにある人の、文をいみじみく覺束なく、いかならんとおもふに、みれば、たゞ今（一）さしむかひたるやうにおぼゆる、いみじき事なりかし、我おもふ事を書やりつれば、あしこまでも行つかざるらめど、（二）心ゆく心地（三）こそすれ、（四）文といふ事なからましかは、いかにいぶせく、くれふたがる心地せまし、萬の事、思ひ〳〵て、その人のもとへとて、こま〳〵とかきてをきつれば、おぼつかなさをも、なぐさむ心地するに、まして返事見つれば、命をのぶべかめる、げにことはりにや　第八節前のつゝきに文消息の時々にあらんはいみじかるべきと云心なり人の世に有ならひ遠國の便を時々たがへず聞得たらんはいみじう嬉しからまし是則文と云事の有故なり文の出くるもすゝり紙の有故なれば尤かやうの調度は人の家につき〳〵しう有へき物ぞと云義に畢竟歸するなり

めづらしとは文のいみじき事を前にもいひ世の人もなべていひなれし事なれば今更いふも珍しからぬ義なり　はるかなるせかいとは遠國の義也　文を見ればとはわかかたへ來る文を見れは也　我思ふ事以下は此方よりやる文義なり　行つかざるらめどゝは身は行ねどゝ云義なり　文と云事以下は文の惣躰の德を云て題の心をあらはす成べし　萬の事以下は重ねて文の德を具に云なり萬の事と云詞肝要なりよく〳〵心を付べし君臣の勤も父子の恩愛も兄弟朋友の音信もまして夫妻戀慕の艶書なども此文と云物有てこそ互の密意をも通すべけれと云心を含て萬の事といひ命をのぶるなど書る成べしよく文の心を味はふべし

（一）朗詠云鶴籠開處見二君子一書卷展時逢二故人一
（二）王昌齡詩云故園今在二灞陵西一江畔逢レ君醉不

レ逢小弟鄕莊ニ衙漁獲獵一封書寄ニ數行啼一　（三）心もとなき義なり　（四）くれふたかる　思ひに胸をふさくゆへ外をもくれふたかるやう成と也　岑參起ニ安西節度判官一時途中詩云故園東望路漫々雙袖龍鍾淚不レ乾馬上相逢無ニ紙筆一憑レ君傳語報ニ平安一

【百十四段】（五）むまやは、（六）なしはら。（七）ひぐれのむまや、（八）もちづきのむまや、（九）のぐちのむまや、（十）山のむまや、あはれなる事を聞をきたりしに、又あはれなる事の有しかはなをとりあつめてあはれなり　此段は別の心なし前段人の家につき〴〵しき物と云段につゝゐて驛令の事をかけり詞すくなければさせる義なし就レ中山のむまやあはれなる事を聞し由少納言現在聞れし事と見え侍れども今何事と考へしりがたし後學の人考へ得侍らば記し給はるべきのみ其外別の心なからん歟

（五）唐令云諸道須レ置レ驛者毎ニ三十里ニ一驛若地勢險阻及無ニ水草一處隨レ緣置レ之日本にて驛を置給ひしは人皇十五代神功皇后十五年始造ニ驛路一也

（六）奈志原　大和　（七）未詳　（八）望月驛下野歟

（九）野口驛　河内也　信實の歌に「しらさりし野口の里に宿かりて道のしはふに今そ朝たつ

（十　未考　重之家集に一霞晴て空に見かける月影をやまのへといひなおとしつ　若此所を續るにや尙可尋之

【百十五段】岡は、（イ）舟岡、（ロ）かた岡、（ハ）鞆岡は、さゝのおひたるかおかしき事也、（ニ）かたらひの岡、（ホ）人見の岡

此段も別の事なし前段驛路のつゞきに岡の事を思ひ寄まゝにしるされたり　岡はとは例の題なり其外別義なし猶後書に注すべし

（イ）舟岡山城　（ロ）片岡大和　（ハ）神樂譜に此さゝはいつこのさゝそとねりらかこしにさかれるとも岡のさゝ云々所は未考染塵秘抄にも所を記し給はぬ也　（ニ）陸奥なり「小夜更てかたらひの岡の子規獨ねさめの床に聞哉　（ホ）未考但住吉物語に「手もふれてけふはよそにて歸なん人見の岡の松のつらさよ

【百十六段】社は、（ヘ）生田の社、（ト）龍田の社、（チ）はなふちの社、（リ）みくりのやしろ、（ヌ）杉のみやしろ、しるしあらんとおかし、（ル）事の任の明神いとたのもし、さのみ聞けんとや、いはれ給はんとおもふぞ、いとおかしき、（ヲ）蟻通の明神、

貫之(ワ)が馬のわづらひけるに、此明神(カ)のやませ給ふとて、歌よみて奉りけんに、やめ給ひけんいとおかし、此蟻通とつけたる心は、まことにやあらん、むかしおはしましける御門の、たゞわかき人をのみ思召て、四十になりぬるをは、うしなはせ給ひければ、他の國の遠きにいきかくれなどして、さらに都のうちに、さるものなかりけるに、中將なりける人の、いみじき時の人にて、心なともかしこかりけるが、七十ちかき親二人を持たりけるが、四十をだにせいあるに、ましていとおそろしと、をぢさはくを、(ヨ)いみじうけうある人にて、遠き所にはさらにすませじ、一日に一度見ては、えあるましとて、みそかに夜々、家の内の土をほりて、其内にやをたてゝ、それにこめすへて、いきつゝ見る、おほやけにも人にも、うせかくれにたる由をしらせてあり、(タ)などてか家に入ゐたらんをば、しらでもおはせかし、うたてありける世にこそ、此おやは、上達部などにや有けん、中將などを、子にてもたりけんは、いと心かしこく、萬の事しりたりければ、此中將も若けれど、さえあり、いたりかしこくて、時の人におぼすなりけり、唐のみかと、此國(レ)の帝をいかではかりて、此國うちとらんとて、つねに試みあらがひごとをして、をくり給ひけるに、つや〳〵とまろに、うつくしげにけづりたる木の、二尺ばかり有を、是が本末いづかたぞと、とひ奉りたるに、すべてしかるべきやうなければ、みかとはおほしめしわづらひたるに、(ツ)いとおしくて親のもとに行て、かう〳〵の事なん有といへば、たゞはやからん川に、立ながらよこさまになげ入見んに、かへりてながれんかたを、末としるしてつかはせとをしふ、まいりて、(ソ)我しりがほにして、こゝろみ侍らんとて、人々ぐしてなげ入たるに、(ネ)さきにして行かたに、しるしをつけて、つかはしたれば、誠にさなりけり、五尺ばかりなる(ナ)くちなはの、おなじやうなるを、是をいつれか、雄雌とて奉りたる、又さらにえしらず、れいの中將行て問は、二つならべて、尾のかたに細き蘖をさしよせんに、尾はたらかさんを、雌としれといひければ、やがて、それを内裏のうちにてさしければ、まことに一つはうごかさず、一つはうごかしけるに、又しるしつけてつかはしけり、程ひさしうて、七わたにわだかまりたる玉の、中はとをりて、左右に口

あきたるかちいさきを奉りて、これに緒とをして給らん、(ラ)此國にみなし侍る事なりとて、奉りたるに、いみじからんもの丶上手、ふようなりと、そこらの上達部殿上人よりはじめて、世に有とある人しらずといふに、又いきてかくなんといへば、大なる蟻をとらへて、二つ計がこしに、ほそき糸をつけ、又それがいますこしふときをつけて、あなたの口に、(ム)みちをぬりて見よといひければ、さ申て蟻を入たりけるに、蜜の香をかぎて、まことにいとう、穴のあなたの口に出にけり、扨その糸のつらぬかれたるを、つかはしたりける、後になん、日本はかしこかりけりとて、後々にさる事もせざりけり、此中將をいみじき人に思召て、何事をして、いかなる位をか給はるべきと、仰られければ、更につかさくらひをも給はらじ、只老たる父母の、かくうせて侍るを、尋ねて都にすまする事を、ゆるさせ給へと申ければ、いみしうやすき事とて、ゆるされにければ、萬の人の親、これを聞てよろこぶ事いみじかりけり、中將は大臣になさせ給ひてなんありける、扨其人の、神になりたるにやあらん、此明神のもとへまうでける人に、夜あらはれての給ひける、「七わだにまがれる玉の緒を貫て、ありとをしとは、しらずやあるらん、との給ひけると、人の語りし

此段は岡のつゞきに社の事を書り詞はおほけれどもその心あきらかなり　社は當段の題なり　ふるの社　生田の社　龍田の社　花淵の社　みくりの社此五つの社別の義なし來歷後書にしるし侍べし　杉のみやしろとは三輪の社を云ふなり　しるしあるらんとはしるしの杉などよめるゆへなり　ことのまゝの明神いとたのもしとは事の任と云にちなみてたのもしといへる成べし　さのみ聞けんとは人の祈事を事の任に聞給ふと也　ありとをしの明神以下は蟻通明神の縁起を記されたり世の人なべて知る事なり　貫之が馬のわつらひける以下は貫之が詣でし時の事をしるせり　此蟻通と云より以下縁起也別義なし
(ヘ)延喜式神名帳云攝津國八部郡生田神社名神大月次相嘗新嘗　忌部口決云稚日女尊伊弉諾尊兒攝津國八部郡生田神社　神功皇后紀云伐新羅之明年二月稚日女尊誨之曰吾欲居活田長峽國因以海上五十狹茅令祭　(ト)神名帳云大和國平郡郡龍田

坐天御柱國御柱神社二座並名神大月次新嘗　日本紀云天武天皇四年夏四月遣小紫美濃王小錦下佐伯連廣足祠風神于龍田立野　舊事本紀云伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薫滿哉乃吹撥之氣化爲神是謂風神也號曰級長津彥命次級長戸邊神　（チ）はなふちの社未考　延喜式神名帳に陸奥宮城郡に鼻節神社有若此事歟尙可尋之　（リ）神名帳云越後國沼垂郡美久理神社有本緣未詳也　後日穿鑿すべし　（ヌ）杉のみやしろ　三輪の社なり神書には見へね共萬葉其外の歌に讀り古今に「我庵は三輪の山本戀しくはとふらひきませ杉立る門　此歌は三輪の明神の御歌と申傳たり又貫之集大神まつりにまうてたる「いにしへのことならすして三輪の山こゆるしるしは杉にそ有ける　神名帳云大和國城上郡大神大物主神社　又山邊郡大國魂神社又石上坐布留御魂神社　神代卷云大巳貴神之幸魂奇魂今欲何所往耶對曰吾欲往於日本國之三諸山故即營宮彼所使就而居此大三輪之神也　（ル）神名帳云遠近國佐野郡己等乃麻知神社　一宮記云事任明神在遠江國佐野郡猿田彥命也或云大巳貴命也　社記云一名小國神社也遠州周智郡大己貴命者欽明天皇御宇十六年乙亥春二月十八日出現于這所爾來奉崇小國一宮無不欽仰奉仕也若遂可社頭造修達天聽則勅使奉行之畢厥功　今案神名帳と社記の説と差異有　（△）古今に「禰宜ことをさのみ聞けん社こそはてはなけきの森と成なめ　（ヲ）神名帳和泉國和泉郡阿理莫神社　緣起は此本文に具也

（ツ）紀氏系圖云

孝元天皇――彥太忍信命――屋主忍雄命――武雄心命――武內宿禰（六代帝之大臣景行天皇三年於紀伊國生賜紀姓自武內十四代）

――梶長（正三中納言）――興道（從四下右兵衛尉）――本道（從五下藏人）――望行（歌人）

――貫之（童名內教坊阿古久曾土佐守木工頭右京內膳從五上御書所預）
　　――宗定（伯耆守）
　　――文定（伊世守）

或說云貫之はむかし初瀨の觀音の示現によりて紀文幹のまうけたる子なりやかて觀音の御夢想にて貫之わらはの時初瀨にて內教坊と號す云々　（カ）貫之集にいはく紀伊國に下りて歸りのほりし道に

てにはかに馬のしぬべくわつらふところに道行人々立とまりていふこれはこゝにいまする神のしたもふならん年比社もなくしるしも見へねどうたてある神なりさき〳〵かゝるには命をなむまうすといふにみてくらもなければはなにわさもせて手あらひて神おはしけもなしや抑なにの神とかきこへんととへはありとほしの神といふをきゝてよみて奉りける馬の心ちやみにけり「かきくもりあやめもしらぬ大空にありとほしとも思ふべしやは　東齋隨筆云今案蟻通の明神の事は和泉國を罷のほる時大鏡幷古事談と云抄物にしるせれとも貫之か家集には過へからす故今彼集を書のせ侍り又蟻通と云因縁は清少納言枕草子にあり云々上下略　(ヨ)孝善事父母を云　(タ)などてか以下地の詞なり　(レ)此國　日本をさしていふなり　(ソ)いとをしく賢心なり　(ツ)まいりて　禁中へ參りてなり　(ネ)つかはしたれは　唐へつかはしたれはなり　(ナ)和名云蛇毒虫也和名倍美一云久知奈波　(ラ)此國　唐をさして云　(ム)和名抄云說文云蜜甘飴也野王按蜂採百花醞釀所成也俗云美知

百十七段　降ものは、雪、あられ、みぞれはにくけれと、雪のましろにてまじりて降おかし、雪は檜皮ぶきいとめでたし、すこしきえかたになるほど、又多くはふらぬが、かはらの目ごとに入て、くろうましろに見えたる、いとおかし、しくれ、あられは板屋、霜も板屋　此段は降物のいみしき事を云へり前段社の檜皮葺の上などに雪のふりていみじう見えしゆへつゞひて書るにや又強次第なくとも思ひ寄まゝに書たる見るべし降物とは當段の題也　凡當段心注に不及あきらかなりよく詞の心を味はふべし風躰すゞろに眼前うかみ侍るやうなり

(一)大戴禮云天地積陰温則爲雨寒則爲雪　五經通義云陽則散爲雨水寒則凝爲雪霜皆從地而升者也　(二)左傳云凡雹皆冬之愆陽夏之伏陰也　陸佃云陽散陰爲霰陰包陽爲雹形似半珠其粒皆三出雪六出成華雹三出成實　(三)文選註云霙雨雪相雜也　詩經小雅云如彼雨雪先集維霰　(四)和名云霎雨小雨也漢語抄云之久禮　字彙云冬陰小雨　(五)六帖にあられ「霰ふり板間風ふきさむ

き夜にはたやこよひも我獨ねん

百十八段　日は、(六)入はてぬる山きはに、光の猶とまりてあかう見ゆるに、薄黄みたる雲の、たなびきわたりたる、いとあはれなり　此段は前段降雨のつゞきに日のいみじき事を書り心あきらかなり

(六)同　日　貫之「詠れはくるしき物を山のはに入日はやさしはやくもれなん」「我おもふ君ならんとや山のはに入日を見つゝいてゝゆかめや

百十九段　月は、有明、(七)東の山の端にほそうて出程哀也　此段も前段の日に序詞なり是より下四段は相つゝゐて天象の沙汰なり　月は當段の題也　有明句を切べし月は有明に有かいみじう願はしとなり　東の山の端とは有明ならぬ時も東の山の端出るけしきいみじう侍るとなり有明の終夜久しう見ゆると出端の暫時詠めといづれもくゝ心ある月のもてなしなり學者心を付べし

(七)續日本紀十五日以後號晨月云々　貫之集に「出てくる山もかはらぬなか月の有明の月の影をこそみれ　古今に「おそく出る月にも有哉足引の山のあなたもおしむへらなり　歐陽詹翫月詩序云月之爲翫冬則繁霜大寒夏則蒸雲大熱雲蔽月霜侵肌蔽與侵俱害翫秋之於時後夏先冬八月於秋季始孟終十五於夜又月之中稽於天道則寒暑均取於月數則蟾兎圓兇埃不流大空悠々嬋娟徘徊撙華上浮升東林入西樓肌骨與之疎涼神氣與之淸冷云々

百廿段　(八)ほしは、(九)すばる、(十)ひこぼし、(イ)みやうじやう、(ロ)ゆふづゝ、(ハ)よばひ星をたに、なからましかば、まして　此段は星のおかしき事をかけりよばひ星をだにとはよばひ星だになりをはやすめ字なりよばひ星と云名の侍らずはいよくめてたからんと云義なり餘の星に對していふ心成べし

(八)前漢天文志云星者金之散氣其本曰人　孟康曰星石也金石相生人與星相應　春秋說題辭云星之爲言精也陽之榮也陽爲日日分爲星故其字日生爲星也　俱舍論云其形皆圓最小唯一俱盧舍其最大者十六由旬云々　阿含經云最大星城郭縱廣一由旬最小星縱廣二百步云々　(九)宿耀經云昴星六星

火神也 (十)爾雅註云牽牛一名河鼓云々 (イ)兼名苑云歲星一名明星和名阿加保之 纂疏云初諸尊斬温突血成赤霧天下陰闇直達天漢化爲三百六十五度七百八十三磐石是謂星度之精也氣化爲神號曰磐裂是謂歲星之精云々 (ロ)兼名苑太白星一名長庚暮見於西方爲長庚 纂疏云裂生根去是謂熒惑之精去生磐筒男是謂太白之精 (ハ)兼名苑云流星一名奔星云々 六帖 ほし「宵ことに立も出なん夕つゝの月なき空の光とおもはん「月かけにはかくれにけりあかほしのあかぬ心に出てくやしき

百廿一段 (ニ)雲は、しろき、むらさき、黒き雲もおかし、風吹おり(◎)のあま雲、明はなるゝ程の黒き雲のやう〳〵きえて、しろふなり行もいとおかし、朝さる(ホ)色とかや、文にも作けり、月のいとあかき面に、薄(ヘ)雲あはれなり 此段は雲のおかしき事を云也別義なし 風吹おりのあま雲とは黒雲の品を云也吹風にたなひゐて雲の脚はやきけしきなり明はなるゝ以下も黒き雲の品なり天開の氣色なり 朝さる色とは朝にさうある色と云義なり 文とは唐の文なり和漢の博士の作れる文章をさしていふなり 月のいとあかき以下は月にかゝるうす雲のおかしきとなり此あはれはほめたる心なり

(ニ)六帖 雲 貫之「立ねとやいひもやらまし白雲の問人もなき宿に入らなん (◎)同「うらふれて物におもひそあま雲のたゆたふ心我おもはなくに 同 たゝみね「風吹は嶺にわかるゝ白雲の絶てつれなき人の心か (ホ)同「かすか山朝ゐる雲のしら〳〵にわか戀まさる月に日ことに 文選宋玉賦云朝爲行雲暮爲行雨云々 (ヘ)六帖に「我せこかふりさけ見つゝ歎らん清き月夜に雲たな引て 古今序云如望秋月遇曉雲 此段をうつして兼好かつれ〴〵草にも花はさかりに月はくまなきのみ見る物かはとかけり今本文のうす雲といふ詞尤面白き風景なり

百廿二段 (ト)霧は、川霧 此段詞すくなう侍れば一段と立るにおよぶましけれど是又別事なれば一段を立侍る也殊更深山の霧よりもながるゝ上にたつ霧

の水煙いとおかしければなり

(ト)爾雅云天氣下地不應曰霧地氣上天氣不應曰霧陰陽亂爲霧氣蒙冒覆地之物也　老子經云在天爲霧露在地爲泉源云々

[百廿三段]　さはかしきもの、はしり火、板屋のうへにて、からすの齋のさばくふ、十八日、淸水にこもりあひたる、くらうなりて、まだ火ともさぬほどに、外々より人のきあつまつりたる、いとさはがし、ましてとほき所他國より家のあるじののほりたる、いとさはがし、ちかきほどに、火いできぬといふ、されども、えはつかざりける、物見はてゝ、車のかへりさはぐほど

此段は文を轉して書り　さはかしき物とは當段の題なり心あきらかなり　はしり火炭の飛火などなり　遠所他國以下は田舍人の參籠する義なり今の世を巡禮と云者など參るさまのさはがしきにひとしきなり　ちかき程に火いてきぬとは近隣の失火なり　されどもえはつかさりけるとは火すでにつく所はさはがしと云迄なきとなり近して火つかぬ所こそさはがしけれとなり　物見以下心明らかなり

[百廿四段]　ないがしろなるもの、女官どものかみあげたるすがた、から繪のかはおびのうら、聖の擧動

此段も別義なし　ないがしろなる物とは當段の題也無禮に侮る心なり　女官とは女孺の輩なり　かみあげたるとは髮を取あけ假初に結などしたる義なり　聖とは道德ある出家は麁行に侍る者なり

(チ)和名曰革帶以其所附金玉石角等爲名故有白玉帶隱文帶馬腦帶波斯馬腦帶紀伊石帶出雲石帶越石帶斑犀帶烏犀帶散斑帶等之名其體有純方丸鞆褊上等之名革帶是其惣名也　からゑとは唐繪を蒔繪にしたるなり

[百廿五段]　ことばなめげなるもの、宮のめのさいもんよむ人、舟こぐものども、雷の陣の舍人、すまひ

此段も心あきらかなり　題のことばなめげとは物いひの無禮なる義なり　宮のめとは宮の部なり宮守祝子の輩と云義なり或又宮の女なり神子などなり　舟こぐとは渡守鹿子なり　雷の陣の舍人とは六月の比雷の聲三たび高くなれば大將以下近衛の次將迄弓箭を帶して御殿の孫庇に候して御門を守

護し奉るなり將監以下はみな簑笠をきておなじく南殿の前の庭にさふらふ雷の聲とゞまれば陣を解儀式あり此間に舍人の詞なめげなる事有と也　すまひとは相撲取の詞無禮成ものなり

(リ)祭文祝詞の類なり　(ヌ)西宮記云雷鳴陣清涼行事云雷鳴時速裝束殿上召近仗又召內藏寮雷祓麻云々大聲三度以上則節依宣旨立昌泰三年七月一日南度立　大將已下帶弓箭候御前孫庇大臣大將帶弓箭不着綏額間左右左北右南大將在前西上左自北昇左大將自南着無妨雨漏時以圓座爲大將座宰相中將着大將下云々將監以下立御前向東着簑笠兵衛立南庭盛時召加御前持長戟敷雷鳴御座鳴盛時分陣遣后殿外衛督佐候殿上者帶弓箭候簾中解陣大將召左將監各稱唯着笠西面立庭中召右如左儀大將仰云陣解將監等稱唯左召大殿昇二音稱唯仰云下於右如前將監等立本列奉近衛出次將出云々

百廿六段　さかしきもの、いまやうの三歳子、兒の(ル)祈し祓などする女ども物の具こひ出て、いのり物どもつくるに、紙をあまたをしかさねて、いとにぶき刀して切さま、ひとへにたつべくも見えぬに、さる物のくとなりにければ、をのか口をさへ引ゆがめてをし、切目おほかるものどもしてかけ、竹うちわりなどして、いとかう〳〵しうしたてゝ、うちふるひ祈事どもいとさかし、かつは何の宮のその殿のわか君、いみじうおはせしを、かいのごひたるやうにやめ奉りしかば、祿おほく給はりし事、其人彼人めしたれど、しるしもなかりければ、今に女をなんめす、御とくを見る事などかたり、おほかるもあやし、げすの家の女あるじ、しれたるものそひしもさかし、まことにさかしき人を、をしへなどすべかし

此段詞おほかれどかくれたる義なし　さかしきものとは當段の題也　ほど〳〵よりかしこげなるを云也　いまやうとは今樣なり今時など云に同し義なり　兒の祈し以下は兒若子などの爲に神子が祓祈禱するさまのさかしき故を云なり　女ともとは神子を云なり　物の具とは祓の贖物なり或は祓の壇上に用ゆるもの共なりつくるとは作なり幣太麻など認むる義也　紙をあまたをしかさねとは四手

の料也　いとにぶき刀とは切かぬる小刀などにて切義なり　さる物のぐとはさやうの物の具にすればなり　をのが口をさへ引ゆがめとは鈍刀に力を入押切さまなり　切目おほかるとは四手の切目おほきを云也　かけとは懸なり四手を竹などに付る義なり　うちふるひとは幣を打ふりて也　かつは以下神子が自贊なといふさま也　何の宮とは何かしの姫宮若宮と云心なり例を引て自贊するなり　かいのこひたるやうにやめ奉りしとはいみしき煩なやみなどを祈の力にてすきと除奉りしとなり　其人彼人とは外々の驗者のしるしなかりし由を語る義なり　今に女なんめすとはそれより此かた今にわが御祈に參ると云義也　げすの家の女あるしとは下々の婦なり以下は下々の婦のさかしき事を云也　そひしもさかしとは愚癡なる男に添ふ女と云義也　まことにさかしき人ををしへとは凡女の心さかしう侍れは賢き男さへも敎へもどくなれはしれたる人はましてそふ樣のさかしからんとなり

(ル)令義解云祓解二除不祥一也　相秘訣云祓者蘇二息本分一靈一消二除色相萬病一名レ之曰二波羅伊一

聖德太子訣釋云解除者成二就百願一治二療萬病一是則不老妙術也不死良藥也故言語之最頂諸法之心地萬行之源是也　祭文本紀云三世怨敵者隔二於坑一不レ近萬人惡念者越二於坑一遠滅凡三災七難如二以レ湯消レ雪百毒九横如二以レ水滅レ火萬惡千害如二以レ火燒レ毛也然則惡鬼別二萬里一七難近不レ起萬福來近生此一座祓以除二百日之難一百座之祭文拾二千日之咎一云々　凡祓の濫觴は神代に伊弉諾尊小戸の祓除し給ふ事有又素盞烏尊根國へ逐去給ふ事なとより始る也其後天孫降臨の時稻穗を取て天地の間雲霧を拂ひ給ひしかは天地淸明に成たる由風土記に見えたりそれより神前に散米といふ事も侍るなり凡祓の次第には神道家にして色々の事しけき傳授共侍れはこゝに略するなり　(ヲ)釋日本紀云祓具人形解纒散米　神代口訣云於二祓具一令レ置二人形解索散米一者災移二人形一禍如二索解一如二散米一祓除儀也　或記云御幣八本串長六寸計用レ竹方寸紙三重麻三條長三寸計挾レ之八足前端上可レ立レ之人形八枚胸畫二人形一長二寸計散供黑米紙錢入二小土

器御幣前右置之人形御幣上左解縄御幣下左云々　此外にも祓の具さま〳〵の事ども侍れ共事しげゝれはもらし侍りぬ強ち本文の害にもならぬ故なればなり此祓の具の外に大解除の料物三科祓の用物諸祓の具あけて數ゆべからず今幷に略す

【百廿七段】身をかへたらん人などは、かくやあらんと見ゆるもの、たゝの女房にてさふらふ人の、御乳母(ワ)になりたるか、唐衣もきす、もをだにようゐなく、はゞきぬにて、御前にそひふして、御帳の內を居所にして、女房どもをよびつかひ、局にものいひやり、文どもとりつがせなどして、あるさま、いひつくすべくだにあらず　此段別義なしされども詞おほき故二節に分て釋し侍るべし就中此一節は女の身をかへたるさまを云也　身をかへたらん以下は當段の題なり身をかへたらんとはいやしき人の尊くなり下官より高位にうつると云義なり　かくやとは如此なり　畢竟人の立身などしたる時いみじうゆゝしう見ゆる由なり　たゝの女房とは無官或は地下などの女房也　よういなくとは賤ければ上臈の装束をよういなかりし由なり　御前にそひふしとは養君の御そばなり　局に物いひやりとは部屋への私用に女房達をつかふと也　文とりつかせとは是も女房達をつかふ義なりいひつくすべくたにあらずとは身をかへしよりおも〳〵しきさま更にいひつくしがたく見ゆるとなり

(ワ)神代巻云彦火々出見尊取他婦人爲乳母湯母及飯嚼湯坐人凡諸部備行以奉養焉于時權用他婦以乳養皇子焉此世取乳母養兒之縁也　同纂疏云取他婦人者內則云擇於諸母與可者必求其寬裕慈惠温良恭敬愼而寡言者使爲子師其次爲慈母其次爲保母皆居子室今取乳母等亦可擇有婦德者乳母謂以乳哺兒者湯母謂掌湯藥之人飯嚼謂嚼食哺兒湯坐人謂洗浴兒者也諸部者凡諸女居子室而各有職者或如縧繦除不淨等也養子之道母自乳者是禮也然後世或亦有用他婦故擧其始也　乳母の御帳の內にして女房どもよひつかふとは纂疏に釋する所の湯母已下の諸部なるへし

雜色(カ)の藏人(ヨ)になりたるめでたし、去年の霜月の臨時(タ)の祭に、御琴(レ)持りしは人とも見えざりしに、公達と

つれ立てありくは、いづくなりし人ぞとこそおぼゆれ、外よりなりたるなどは、おなじ事なれど、さしもおぼへず、雪たかう降て今もなをふるに、五位四位も色うるはしう、わかやかなるか、うへのきぬの色いときよらにて、かめのおびのかたつきたるを、宿直(トノヰ)すがたにて引はこへて、むらさきの指貫も、雪にはえてこさまさりたるをきて、衵(アコメ)のくれなゐならずは、おどろ〳〵しき(ソ)山吹を出して、からかさをさしたるに、風のいたく吹て、よこさまに雪をふきかくれは、すこしかたぶけてあゆみくるに、(ツ)深沓(フカクツ)半靴(ハウクワ)などのきはまて、雪のいとしろくかゝりたるこそおかしけれ、細殿遣戸をしあけたれば、御湯殿(オホンユドノ)の(ネ)めむだうより、おりてくる(ナ)殿上人の、なへたる直衣指貫(ナフシサシヌキ)の、いたくほころびたれは、色々のきぬどもの、こぼれ出たるを、をし入などして、北の陣のかたざまに、あゆみ行に、あきたる遣戸の前をすぐれば、(ラ)ゑいを引こして、かほにふたぎてすきぬるもおかし　第二節男の身をかへたるさまを云也雑色の藏人になりたるとは雑色にて有し人が藏人の宮になるとなり是身をかへたる義なり　去年の霜月以下は雑色の時より身

をかへし迄のさまを述へ斷る義也　御琴持りしとは臨時祭の時御琴を雑色所衆などか昇持事侍る也　人とも見えざりしとは賤しめたる義なり　公達以下は藏人に成たる時のさまを云也外よりなりたるとは兼て見知らぬ雑色の藏人に成たる人を云義なり　さしもおぼへずとは雑色の藏人に轉じたるやうには見えぬとなり　雪たかう以下もなを藏人のいみじきさまを云也是雑色の身をかへてゆゝしき躰なり　五位四位とは四五位の間に藏人を懸る故也　うへのきぬ以下は裝束のさまを云也　宿直すがたとは昇殿近習のいみじきをいはんため也　むらさきのさしぬきとは是も昇殿のさまを云也西宮記に五位已上昇殿六位用レ之と云此心也　細殿の遣戸をしあけたればとは女房達の遣戸をあけて藏人の出入するさまを見る躰也　ゑいを引こしてかほにふたぎとは遣戸の前に女房達のきら〳〵しう見給ふ躰をおもはゆく思ひたる心成べし

(カ)雑色　五巻見ゆ　(ヨ)藏人　二巻見ゆ　(タ)臨時祭　九巻見ゆ　(レ)御琴持同　右是等は前に委ければ重ねて不レ及レ述也　(ソ)覺悟抄　花山吹表

薄朽葉裏黃冬至春夕ゞ山吹トモ云云々　（ツ）深沓半靴　前に見えたり　（ネ）和名曰辨色立成云馬道向堂之道也※多字　（ナ）此殿上人は御湯の役をつとむる人を云成べし禁秘抄云早旦供御湯主殿官人奉行近代多兒五位也釜殿運湯須麻志女官二人取傳藏人爲鳴絃候戶外內侍中具由御船一桶二內侍候御垢典侍或上﨟女房進御湯帷奉河藥次典侍取河藥器拋板子時藏人鳴絃主殿官人稱名主殿助藏人候之時或稱名是每日每度事也云々　（ラ）字書曰纓冠纓也　禮記云玄纓紫自魯桓公始焉

百廿八段　たゞ過にすぐる物、帆あけたる舟、人のよはひ、春夏秋冬　此段心あきらかなり、たゞ過にすぐる物とは當段の題也　たゞ過とは一向に過行てたゆみなき心也　帆あけたる舟とは器に就て題の心を云也　人のよはひとは人の身のうへに就て云也　春夏秋冬とは時節の轉變の速なる義を云也（ム）李遠句云輕舟短棹唱歌去水遠山長愁殺人李涉詩孤一夜東皈客又遠浦皈帆等の詩あり　（一）人丸集「ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島かくれ行舟をしぞおもふ　拾遺沙彌滿誓「世の中を何にたとへん朝ぼらけこき行舟の跡のしら波　（ツ）いせ物語に「行水と過るよはひと散花といつれまてゝふ事を聞らん　唐詩選響云高歌一曲掩明鏡昨日少年今白頭　（ヰ）六韜云春道生萬物榮夏道長萬物成秋道斂萬物盈冬道藏萬物靜盈則藏々則復起莫知所終莫知所始　淮南子云聖人不貴尺之璧而重寸之陰時難得而易失也　古今に「取とむる物にしあらねは年月を哀あなうと過しつるかな

百廿九段　ことに人にしられぬ物、人の女おやの老たる、くゐ日、五六月の夕かた、青き草をほそううるはしくきりて、あかきぬきたるこちこの、ちいさきかさをきて、左右にいとおほく持て行こそ、すゞろにおかしけれ、賀茂へまふづる道に、女どもの、あたらしきおしきのやうなるものをかさにきて、いとおほくたてりて、歌をうたひ、おきふすやうに見えて、たゞ何すともなく、うしろざまに行は、いかなるにかあらん、おかしと見るほどに、時鳥をいとなめくうたふ聲ぞこゝろうき、ほとゝぎすよ、をれよ、かやつよ、おれなきてぞ、我は田にたつとうたふ

に、聞も果す、いかなりし人か、いたく鳴てぞといひけん、なかたかわらは、おひいかでおとす人と、鶯に郭公はおとれるといふ人こそ、いとつらふにくけれ、うぐひすはよるなかぬいとわろし、すべて夜なくものはめでたし、兒どもぞは、めでたからぬ、八月晦日かた、太秦にまうづとて、ほに出たる田に、人いとおほくてさはぐ、稲かるなりけり、さなへとりしいつの間にとは、まこと、げに、さいつころ、賀茂にまふづとて、見しか、あはれにもなりにけるかな、是は女もまじらず、男のかた手に、いとあかき稲の本はあをきを、かり持て、刀か何にかあらん、本をきるさまの、すげげに、めでたきことに、いとせまほしく見ゆるや、いかでさすらん、ほを上にてなみをる、いとおかしう見ゆ、いほりのさまことなる　此段も心あきらかなり　ことに人にしられぬ物とは當段の題なりしられさうにてしられぬはことにと云也　人のめおやの老たるとは母親の事也母親は外さまに知れぬ心成べし或云人の女句を切へしおやの老たる句を切へし人のめもことに人のしられぬ物也又親の老たるもことに人のしらぬものなれ

は一事にはあらさるべし云々　くゑ日とは晦日なり　五六月以下は小兒の芝くらへの事を云成べし或又五月の早苗取比の事は人々しれ共刈田の比のあはれふかきは人に知られぬと云心にや　ちこのちいさきかさきてとは賀茂の道すがら子ともの戯れ遊ぶさまをいふ也　おきふすやうに見えてとは田を植るさまをいふ也うつむき前より植て後へしりぞき〱植る也　時鳥をいとなめくとは郭公を歌にうたふか賤しげなる風體なるとなり　郭公よをれよ以下は田夫の歌也　をれとは己よなり又云居よなり　かやつよとは俗にきやつと云心也下々の者は人をさしてきやつと云なり　おれなきてぞとは鳴て居よと云義也又云己は鳴となり歌の心は田夫ながらも時鳥を愛して鳴て居よ我は田にやすらひて慕ひ聞にと云心成べし　聞も果すとはうたふ半に思ひ出す事有由なり少納言の心也　いかなりし人とは田夫さへ如此慕ひうたふにいかなる人か強な鳴そなどゝいひたるぞととがむる義なり　鶯に時鳥はおとれるといふ人こそいとつらにくけれとは少納言の詞也　鶯は夜なかぬとは時鳥のい

みじきをいはん爲なり　すべて以下は少納言の了簡せらるゝ詞なり　八九月以下は苅田の事を云なり　さなへとりしいつの間にとは歌の心を思ひ寄ていよ〳〵感ふかき由也　まことけにとは誠に實もと思ひ感ずると也　さいつころとは前に五六月の夕かた有詞をうけたる文なり　あはれにもとは只今の躰を云義なり　是は女もましらずとは苅時のさまを云なり五月に植る折は女が植しが苅時は女はなくて男計ぞとなり　刀なか何にかあらんとは鎌などのいやしげなる物なれはやはらかに書る文也　すげげにとは鎌にて苅さまはすげなう見ゆる也　いかてさすらんほをうへにてなみをるとは苅し穂の上田夫のやすらひゐる心也　いほりのさまことなるとはこれも田の中の庵成べし或又民の庵歟ことなるはことそぎて人にしられぬ心成べし（ノ）悔日　陰陽の徳を失なふ日也此日を用ゆるに付て用捨有暦家に沙汰せさる故人にしられぬ日そといふ心なり　（オ）貫之集に一時鳥なくなる聲をさなへ取てまうちをきて哀とそきく　（ク）拾遺　大伴坂上郎女「郭公いたくな鳴そ獨ゐていのねられぬに聞はくるしも　（ヤ）按するに應神天皇十五年に漢朝より秦の始皇の子孫融通王と云人來朝せり又仁德の御宇に養蠶機織事をする天皇これを賞して山城葛野郡太秦の地を給はる扨其績糸の積り重る故號宇豆萬佐と給はる此人の領所なれは太秦と書てうつまさとゝなふるなり扨其後秦川勝聖德太子の命を請て其地におゐて蜂岡寺を立て阿逸多の像を安置すこれ則今の太秦廣隆寺なり　（マ）古今秋上「昨日社さなへとりしかいつの間にいなはそよきて秋風のふく　（ケ）近曾ロ　（フ）貫之集田まもる家ほある所「苅穂にて日さへへにけり秋風に早稲田かり金はやも鳴なん

百卅段　いみじくきたなき物、なめくち、ゑせ板敷のはゝき、殿上の合子　此段別義なく心あきらかなり　いみじくきたなき物とは當段の題なり
（コ）帚はゝき　（エ）和名云合子唐式云尙食局漆器三年一換供毎節料朱合等五年一換今案朱合俗所謂朱漆合子也

百卅一段　せめておそろしきもの、夜雷神、ちかき隣に盜人の入たる、我すむ所に入たるは、たゞ物もお

ぼへねは何ともしらず、ちかき火又おそろし　此段も心あきらかなり　せめておそろしき物とは當段の題なりせめてとは責強也　我すむ所に入たるはたゝ物もおぼへねとは何のわきまへもなき心也　(テ)元輔集ぬす人の入て侍し又の日人のかいねりをゝこせて侍し返しつかはしゝに「あさからす思ひそめてし衣かはかゝるせにこそ袖もひちけれ　少納言父か家に盗人の入しを思ひて書し成るべし

百卅二段　たのもしきもの、心地あしき比、僧あまたして修法したる、思ふ人の心地あしき比、まことにたのもしき人の、いひ慰めたる、物おそろしき折の、親どものかたはら、いみじうしたてゝ聟取たるに、いと程なくすまぬ聟の、さるべき所なとにて、しうとにあひたる、いとおしとやおもふらん、ある人の、いみじう時にあひたる人の聟になりて、只一月もはか〳〵しうもこで、やみにしかば、すべていみじういひさはぎ、乳母などやうのものは、まが〳〵しき事なといふも有に、其かへる年の正月に、藏人に成ぬ、淺ましうかゝるなからひに、いかでとこそ、人は思ひためれなど、いひあつかうはきくらんかし

此段は詞長けれども心あきらかなり二節にわけて釋し侍る就中第一節おもふ人の心地あしき折にとひなくさむる事又女子童などの親のもとに寄事又聟舅の間の心遣ひの事などにつゐてたのもしき故をしるせりたのもしきものとは當段の題也心別義なし　心地あしき比とは物心ぼそき折をしらする文なり心すくやかなればたれもあるべき事のやうにおもふか心ちあしき時は一入身にそむとの義なり　物おそろしき以下は女童の心にては物事おそろしき時親の本をたのもしくおもひ立寄力とするなり　いみしう以下聟舅の間の事を云なり　程なくすまぬとは頓而離別したる義なり　いとおしとは舅か密に心たのみして思ふ由なり若聟が思ひなをす事もやとたのみをかけいとおしむ心成べし或又聟がいとおしむ心成べし云々　ある人とは少納言見及びし事を記さるゝなりたれと考がふべからず　時にあひたる人とは世のおぼへある人と也則ち舅の事成べし　こでとは女にそはで也そひこでと云義也　いひさはぎとは舅の方にさはくと也乳母とは女の乳母なり　まが〳〵しき事なといひ

とは聟をあしくいふ義なり　藏人に成ぬとは聟が藏人に補せられしとなり淺ましう以下は舅の方取沙汰し餘情(ナゴリ)あるさまを地の詞にて云也　いひあつかうとは舅の方にいひあつかうと也　きくらんかしとは聟の方にも聞らんと也地に判したる詞歟

(ア)一本心地あしき比番僧あまたしてずほうしたる心地なとのむつかしきころまこと〴〵しき思人のいひなくさめたる　如此侍るなり心は同じ事なれ共詞少しちかひ侍る故記し了ぬ

六月に、人の八講し給ひし所に、人々あつまりてきくに、(ヨ)此藏人になれる(ロ)聟の、れうの、うへのはかま、すはうがさねくろはんひなど、(ハ)いみじうあざやかにて、わすれにし人の車のとみの緒といふ物に、半臂のをゝひきかけつばかりにて、ゐたりしを、いかに見るらんと、車の人々も、しりたるかぎりは、いとおしかりしを、こと人どもゝ、(サ)つれなくゐたりし物かななど、後にもいひき、なを男は、ものゝいとおしさ、(キ)人の思はん事はしらぬなめり、世中に獨いと心うき物は、人ににくまれんことこそあるべけれ、誰てふ物くるひが、我人にさ思はれんとはおも(ユ)はむ、されど、しぜんに宮つかへ所にも、をやはらからの中にても、思はるゝ思はれぬが、あるなるいとわびしきや、よき人の御ことはさらなり、げすなどのほども、をやなどのかなしうする子は、目立(メタテ)見たてられて、いたはしうこそ、おぼゆれ、みるかひあるはことはり、いかゞおもはざらんとおぼゆ、ことなる事なきは、又これをかなしと思ふらんは、親なれはぞかしと、あはれなり、をやにも君にも、すべてうちかたらふ人にも、人に思はれんはかり、めでたき事はあらじ　第二節前の詞につゞひて人の心操を評判したのもしきとたのもしからぬとの品を云なり　人々あつまりてきくにとは地の詞也　此藏人とは前の聟を云なり聟のれうのとは聟の料也聟のめされしと云義也　わすれにし人とは聟のわすれにし人と云義也其聟の妻成べし　引かけつばかりとは彼離別せし女の車に男の衣をおぼへす引かけんとせし躰也　いかに見るらんとは地の詞也　車の内よりいかに見るらんと也　車の人々とは車の供の人々也　いとおしがりしとは半臂(ハンピ)のかゝらんずるを見て笑止(セウシ)にいとをしむ心也　こと人どもゝ

つれなくとは傍の人々の半臂のかゝる事を告知さずつれなく侍る由を云也是則ち人の心を判じながら女のたのもしき事を云也　なを男以下は地の詞也女はかくたのもしく思へども男はわが方よりの情もおろそかに又は人の思はくをも知ぬと也　世中に以下はにくまるゝと思はるゝとの心操を判じて思はるゝはたのもしきと云義を述たり　いと心うきとはたのもしからぬ由を云也　我人にさ思はれんとは思はんとは我身を人ににくみ思はれんとは思はしと也思はんとは思はんや思ひはせまじと云心也　されどゝは前をうけて下をこす義也　しせんに以下は人ごとににくまれじとは思へ共世の俗人の機にて自然と親疎好悪の品侍ると也　思はるゝ思はれぬがあるとは思はるゝは親み好る心也思はれぬとは疎み悪心也　よき人以下は人の品につゐて思ふ心を述る也　よき人の御事はさらなりとは世中に時めく人は親類同朋の間思ふとにくむとのかぎりあると也　げすなど以下いやしき人のうへを云也　かなしうするとは恩愛深き心也　いたはしうとは外よりもいたはり思ふ由也　見るかひあるはことはりとは其子の行状をいみじう見るかひあるはかなしうするもことはりぞと也　いかゞ思はさらんとは親のかなしむ心を地の詞に推量りていふ也　ことなる事なきとは淺ましき子の事を云也　親にも君にも以下はすべて前の詞を結ぶ義也　いづれにも思はれんこそたのもしからめと云義成べし

(◉)覺悟抄云蘇芳下襲表白瑩裏濃打公卿禁色人常所ニ着用スル也　又主上之着給前の八巻にも詳なり
(ロ)同云又著ニ大色下襲一時用ニ黒半臂紺地平緒紅梅地平緒ニ云々　(△)車の早緒なり　頸結事を云なり　(サ)通鑑綱目四十九云強面猶レ言ニ顔厚一云々　(キ)「思ひしる心のなきをなけく哉うきをいとふは君ひとりかは　(ユ)孟子告子云有レ人ニ於此ニ越人關レ弓而射レ之巳談笑而道レ之無レ佗疏レ之也其兄關レ弓而射レ之則巳垂ニ涕泣一而道レ之無レ佗戚レ之也　これらの心も同し趣なり

男こそ猶いとありがたく、あやしき心地(メ)したる物はあれ、いときよげなる人をすてゝ、にくげなる人を、もたるもあやしかし、おほやけ所にいりたちする、おとこ、家の子などは、あるが中に、よか

らんをこそは、えりて思ひ給はめ、をよぶまじからんきはをだに、めでたしとおもはんを、しぬばかりも思ひかゝれかし、人のむすめまた見ぬ人などをも、よしと聞をこそは、いかでともおもふなれ、かつ、女の目にもわろしとおもふを思ふは、いかなる事にかあらむ、かたちいとよく心もをかしき人の、手もようかき歌をもあはれによみておこせなどするを、返事はさかしらにうちするものから、よりつかすらうたげに、うちなきてゐたるを、見すてゝいきなどするは、あさましう、おほやけはらたちて、けんぞくの心地も、心うく見ゆべけれど、身のうへにては、露心くるしきを思ひしらぬよ、萬の事よりも、情あるこそおとこはさら也、女もめでたく覺ゆれ、なげの詞なれど、せちに心にふかくいらねど、いとおしきことを、いとおしとも、あはれなるをは、けにいかにおもふらんなど、いひけるを、つたへて聞たるは、さしむかひていふよりもうれし、いかで此人に思ひしりけりとも、見えにしかなと、つねにこそおぼゆれ、かならずおもふべき人、とふべき人はさるへき事なれば、とりわかれしもせず、さもあるましき人の、さしいらへをも心やすくしたるは、うれしきわざなり、いとやすき事なれど、更にえあらぬことぞかし、おほかた心よき人の、まことに、かどなからぬは、男も女もありがたき事なめり、又さる人もおほかるべし、人のうへいふを腹たつ人こそ、いとわりなけれ、いかでかはあらん、我身をはさしをきて、さばかりもどかしく、いはまほしきものやはある、されどけしからぬやうにも有又をのづから聞つけて、恨もぞする、あひなし、又おもひはなつまじきあたりは、いとおしなどおもひとけば、ねんじていはぬをや、さだになくは、打出わらひもしつべし、人のかほにとりわきてよしと見ゆる所は、度ごとにみれども、あなおかしめづらしとこそおぼゆれ、繪などあまたゝび見れば、めもたえずかし、ちかふたてる屏風のゑなどは、いとめでたけれども、みもいられず、人のかたちは、をかしうこそあれ、にくげなるでうどの中にも、ひとつよき所のまもらるゝよ、見にくきも、さもこそはあらめと、おもふこそわびしけれ　第三節大(オホ)底(ムネ)男女の心つかひにつゐてたのもしき義を云り男以下はすべて男のこゝろ持の大綱を云なり　きよ

げなる人をすてゝとは清く美しき女をすてゝとなり　おほやけ所以下は禁中女院などにまいるおのこはよき女をえらびて持べき事ぞとなり　をよふましからんきはとはいや高き女蔵女官などなり　人のむすめ以下は婚姻事につゐてよき女ときく時は男の心もたのもしからん由をいへり　かつ女の目にもわろしとおもふ以下はなべて女の目に悪女と見ゆるを戀おもふ男はいか成事ぞとなり　かたちいとよく以下はよき女の事を云なり如此よき女を見すてゝあしき女のかたへゆくは淺ましきとなり　おほやけとは男の方を云成べし只公界の義なり　身のうへとは男の身のうへにはと也　萬の事よりもとは姿才なとよりも情の色こそと也　なげの詞以下情の色あるへき品を述るなり心あきらか也　いかて此人にとは陰にて情らしくいふ人になり　思ひしりけりとも見えにしかとは人のうへをおもひしりなさけらしく云人にまみへん事もかなと也　かならず以下は筋目のある情よりも思ひよらぬ方の情のたのもしき由を云なり心あきらかなり　又さる人もとは前を結ぶ詞なり或又下を起す詞也下へかけて見るべし云々　人のうへいふを腹たつとは他の人の噂をいふ時それを傍に居て聞人がねたみはらたちなどする義なり　我身をはさしをきてとは我身のうへを取さたするは腹たつるも理なれど我身のうへはさしをきて人のうへをさばかり腹立もどかしげにいふものやはあるかと也　すべて嫉妬のむまれつきなる人をとがめて云義なり　されどけしからぬやう以下は地の詞也是又人の噂を陰にていとおしみ情ふかくいふもけしからず聞ゆるとなり噂する人をほめ腹立人をそとしめ又噂する人をおさへ互に抑揚褒貶の文章なりよく味はふべし　又をのつから聞つけて恨もぞするとはうはさいふ人をうらむべしとなり噂にいはれし人がうらむる義成べし　又おもひはなつまじきあたりはいとおしなどおもひとけばねんじていはぬをやとは物事つゝしむ人は心にいとをしと思ふ事もあらはにいはず心に念しおもふと也　さだになくはとはさうだになくはと云義なり是は思ひはなつ人の心を云なり但人の事をはらたちなとするはあまりの事なり思ひはなたず或はうちいでわらひ

などする人はたのもしき情ぞと也　人のかほ以下は物事見るにつけて心の色もうつりかはる義をいふ也　人のかほにとりわきてよしと見ゆるとは心のとまる所のあるは毎度見あかぬ心なるべし心あきらかなり　繪など以下は無情の物をいひて有情の人にくらべいふなり　屛風の繪などはめでたけれどもとは是も非情のめでたき物なるも有情の人にしかぬよしを云なり　人のかたち以下は前の繪の事をいひし義を結ぶ心也　にくげなるでうどの中以下は是調度の見にくきと人の見にくきとのうへをくらべいふなり凡目とまるにも見にくきにも人にまさる物なき由なり人のまさる故は萬物の靈にて有情なれは好も惡も各たのもしき本性侍る心成べし

(メ)にくげなるをもたるとは下の屋と云段成信卿の兵部がおかしきかたも有がたく侍るを忍び給ふと書しと同し心なり兵部と云女房はおかしきかたのすくなかりしと見えたり　凡此男こそ以下の一節はは丶木々の卷の品定によく似たり源氏には女の事をかけり今の本文には男の品を論したり此文の味ひといひ詞つ丶きと尤やんことなき者なりされば先人の評せしごとく淸紫二女の筆力誰か優劣をいはん但是非甲乙を存せん人は却古人奥旨を究めぬ故成へし或又學者の偏執ともいふべきにやこのゆへに兼好も一向此枕草紙を摸して徒然草をか丶れしと見えたり是先人の優劣を見ぬ類成べし

清少納言枕草紙抄卷十三

【百卅三段】うれしきもの、まだ(イ)見ぬ物語(ロ)のおほかる、一つを見て、いみじうゆかしとのみ思ふが、のこり見出たる、さで心おとりするやうもありかし、人の(ハ)やり捨たる文を、つぎて見るに、同じつゞき、(ニ)あまた(ホ)くだり見つゝけたる、いかならんと思ふ夢を(◎)見て、おそろしとむねつぶるゝに(ホ)、事にもあらず、合せなどしたる、いとうれし、よき人の御前に、人々あまたさふらふ折に、むかし有ける事にもあれ、今きこしめし、世にいひける事にもあれ、語らせ給ふを、我に御覧じ合せて、のたまはせいひ聞せ給へる、いとうれし、遠所は更なり、同じ都の内ながらも、身にやん事なく思ふ人のなやむ聞て、いかに／＼とおぼつかなく歎に、(ヘ)おこたりたるせうそこ、えくるもうれし、思ふ人の、人にもほめられ、やんごとなき人などの、口おしからぬものにおぼしのたまふ、物の折、もしは、人といひかはしたる歌の聞へて、ほめられ、打聞などに書入らるゝ、みづからのうへには、まだしらぬ事なれど、猶思ひやらるゝよ、いたう打とけたらぬ人の、いひたる、古き事のしらぬを、聞出たるもうれし、後に物の中などにて、見つけたるは、おかしう、たゞ是にこそ有けれと、かのいひたりし人ぞおかしき、陸奥國紙(ト)、しろき色紙(チ)、ただのも、しろうきよきは、えたるもうれし、はづかしき人の、歌の(リ)もとすゑとひたるに、(ヌ)ふとおぼへたる、我ながらうれし、つねにはおぼゆる事も、又人とふには、清く忘れて、やみぬる折ぞおほかる、(ル)とみにて物もとむるに、見出たる、徒見るべき文などをもとめ、うしなひて、萬ものをかへす／＼見たるに、さがし出たる、いとうれし、物あはせ、なにくれと、いどむ事にかちたる、いかでかうれしからざらん、又いみじう我はとおもひて、したりがほなる人、はかりえたる、女どちよりも、男はまさりてうれし是がたう(ヲ)は、かならずせんと思ふらん、つねに、心づかひせらるゝもおかしきに、いとつれなく、何とも思ひたらぬやうにて、(ワ)たゆめ過すもおかし、にくきものゝ、あしきめ見るも、(カ)つみはうらんと思ひながらうれし、(ヨ)さしぐしむすばせて、おかしげなるも、又うれし、思ふ人は、我身よりもまさりてうれし、△　此段三節にみるべし就レ中此第

一節の内に嬉しき品を十三章書れたり何れも心明らか也　世にいひける事とは世の人のいひふるゝ事也　かたらせ給ふとは中宮などの語せ給ふとなり或は中宮とさしてみず何れにても上つかたと見たるもよし　身にやんごとなく思ふ人とは我身の大切なる人といふ心也　人にもほめられとは並て人に褒らるゝ也　やんごとなき人などの口おしからぬものにとはよき人の褒事を云也　物の折とは物事の折節なり　みづからのうへとは褒られし人の自はしらぬとなり或云少納言自推量ていふ義なり　うちとけたらぬ人とは隔心(キャクシン)有人と云義也　物の中とは書物などの中に見得たる由なりとみに以下は急て物を尋出し得たる嬉しさを云なり　徒(タヾ)見るべき文以下は心靜に見るべきとおもふ書物などを捜得たる義なり　物あはせとは賭(カケ)勝負の事を云なり　したり顏なる人とは物ごと上手顏して慢ずる人なり　はかりえたるとは上手顏する人を謀勝たるは嬉しきと也　女どちよりも男はまさりて嬉しとは男は爭事に氣强ものなれば云也　是がたうとは上手顏の人を謀勝故を云也　せんずらんとはしたり顏なる面持をせんずらんとなり　いとつれなく以下は彼謀勝人の方便なり　さしぐしむすばせてとは髮上刺櫛などを取結び認る義なり

(イ)まだ　末(イマヾ)なり　(ロ)或本ニ　また見ぬ物語のおほかる又ひとつを見ていみしうゆかしと覺ゆる物語の二見付たる心をとりするやうにも有かし　如此あり心同しきか　(ハ)破捨(ヤリステタル)なり　(ニ)行(クダリ)

(◉)大鏡云いみしき吉左右の夢もあしさまにあはせつればたかふとむかしより申つたへて侍る事也云々　(ホ)貴人をさして云也　(ヘ)病のおこたえ由の文なり快氣と云心なり　(ト)檀紙なり前に見えたり　(チ)前に見えし村上の御時宣耀殿の女御の歌の本末をよく覺へ給ふと有し同じ心也此心をうけて兼好もつれ〳〵草に記憶の自讃をのせられたり　(リ)もとする　上の句下の句なり神樂の本末には侍らず　(ヌ)不斗(フト)不圖同　(ル)此一章を徒(タヾ)見るべき以下を分て二章に見る義侍れども頓に求むるも徒に求るも共に尋捜す事なれば今ニ章に書寫し侍る也　(ヲ)是黨(コレガタウ)　(ソ)ニ綏(ダユム)

(▲)或本ニ　さしくしすらせたるにおかしけなる

又うれしトアリ　△或本うれしトアル下に猶詞有如左　又もおほかる物を日比月比しるき事有てなやみわたるかおこたりぬるもうれしトアリ

御前に、人々所もなく居たるに、今のぼりたれば、すこし遠き柱もとなどにゐたるをとく御覽じつけて、(三)こちこと仰られたれば、みちあけて、いとちかふめし入られたるこそ嬉しけれ、御前に人々あまた、物仰らるゝついでなどにも、世の中の、腹たゝしう、むつかしう、片時あるべき心地もせて、(四)いづちも〳〵、いきもうせなばやと思ふに、たゞの紙のいとしろうきよらなる、よき筆、白き色紙、みちの國紙などえつれば、こよなう慰て、さばれ、かくても、しばし有ぬべかりけりとなん覺え侍る、又かうらいべりの疊の、(五)莚あをうこまやかにあつきが、へりの紋いとあざやかに、くろうしろう見へたる、(六)引ひろげて見れば、何かなをさらに此世はえ思ひすつまじと、命さへおしくなんなると申せば、(七)いみじく、はかなき事にも、なくさむなるかな、姨捨山の月は、いかなる人の見るにかと、わらはせ給ふ、(八)さふらふ人も、いみじくやすきそくさいの祈かななどいふ、さて後に程へて、すゞろなる事有て、さとにある比、めでたき紙を、二十つゝみにつゝみて給はせたり、仰事には、とく參れ、などのたまはせて、是は聞召おきたる事有しかばなん、わろかめれば壽命經もえ書まじけにこそと、仰られたる、いとおかし、無下に、思ひわすれたりつる事を、おぼしをかせ給へりけるは、猶たゞ人にてだにおかし、まして、おろかならぬ事にぞあらぬや、心もみだれて、けいすべきかたもなければ、たゞ「かけまくもかしこき神のしるしには、つるのよはひになりぬべきかな」、あまりにやとけいせさせ給へとて、參らせつ、大盤所の雜仕ぞ、(九)御使に來る、青き綾のひとへなどとらせて、誠に此紙を、さうしにつくりなっとて、もてさはぐに、むつかしき事もまぎるゝ心地して、おかしう心のうちもおぼゆ、二日ばかり有て、赤衣(アカキヌ)きたる男の、疊を持來、これと云、あれは誰ぞ、あらはなり、などものはしたなういへば、さしをきていぬ、いづこよりぞととはすればまかりにけりとて、取入たれば、殊更に御座といふ疊のさまにて、かうらいなどいと淸らなり、心の中には、さにやあらんと思へど、なをおぼつかなさに、人とも出し、

求めさすれどうせにけり、あやしがりわらへど、つかひのなければ、いふかひなし、所たがへなどならば、をのづからも、又いひに來なん、宮の邊にあないし(ホ)に、まいらせまほしけれど、さもあらずは、うたてあ(チ)へじとおもへど、猶誰か、すゝろにさるわざはせん、おほせごとなめりと、いみじうおかし、二日ばかり音もせねば、疑なくて、左京の君のもとに、かゝる事なんある、さる事や、けしき見給ひし、忍びて有樣(アリサマ)の給へ、さる事見えずは、かく申たりとも、なちらし給ひそと、いひやりたるに、いみじうかくさせ給ひし事なり、ゆめ〳〵丸が聞へたるとなく、後にもとあれば、さればよと思ひしゝしるく、おかしうて、文を書て、又みそかに、御前のかうらんにをかせしものは、まどひしほどに、やがてかけおとして、御階のもとにおちにけり　第二節少納言自のうへに有し事を書れたり中宮の思召入(イレ)の辱嬉き由なり　御前とは中宮の御前也　今のぼりたればとは少納言參られし義也　とく御覧じつけとは中宮の少納言御覧じつけしと也世の中の腹たゞしうとは世の中の事態に付て腹たつ事有時に中宮の訪ひ慰め給ふ由を云也

又かうらいべり以下は中宮の御座の邊の目出度さまを見奉ればそれに心慰て世をえ思ひ捨てぬとなり　いみじくはかなき事以下は中宮の御詞也　いかなる人の見るにかとは少納言は如レ此はかなき事にだに慰むとあるをいかなる人なれば慰めかねて姨捨山の月を見しぞと仰らるゝ義也　やすきそくさいの祈かなとは高麗緣(カウライベリ)の疊などにて心を慰め命をも延ぶると少納言の云るを笑ひ戯るゝ義也　里にある比とは少納言里に有比なり　給はせたりとは中宮より給ふと也　聞召をきたるとは前にいひしこよなうなくさむと有し詞をうけてのたまふ也　わろかめればとは惡敷紙ぞと也　壽命經もえ書まじとはわろき紙なれば心を慰め命を延ぶる助にもなるまじきぞと云義也　無下に以下は少納言忝心を自遜らるゝ也　ましてをろかならぬとは中宮の御事也　かけまくも　此歌少納言の歌也すべて一首の心は中宮御恩惠の忝さに心も慰み齡をも延ぶると也　かみとは中宮の御恩惠を神の驗によそへて紙を讀入たり又かけまくもと云も皆紙に詞の緣有歟　あまりにやとは身に對して餘忝と云心

也青き綾のひとへは御使へ少納言より贈られし被(カヅケモノ)也　むつかしき事もまぎるゝとは慰む由を述ふるなり　あれは誰ぞあらはなりとは少納言の尤めらるゝ義なり　心の中にはさにやあらんとは中宮より給ふにやあらんと少納言の心の中に推量らるゝ義なり　もとめさすれどとは赤衣着たる男を尋求と也　宮の邊以下は中宮の御方へ尋ねにつかはしたき由なり少納言の了簡なり　左京の君とは中宮の女房也　かゝる事なん有以下は少納言より問ひにやらるゝ詞也　いみじうかくさせ給ひし以下は左京の方よりの返事なり　さればよ以下は少納言の詞なり　文書てとは御禮の詞なとおかしう書て御階の高欄に置されしとなり　やがてかけおとしてとは庭へ落散て御覧なかりしとなり

(ヨ)此地來也コチコ　(タ)何地イヅチ　(⊙)或本ニかうらいはしトアリ端(ハシ)の字なり緣と同し心也　(レ)引ひろけ　物の隔を引あくる義なり　(▲)或本ニ思ひはなつましトアリ離(ハナツ)の字なり同じ心なり　(ソ)古今第十七雜上　題しらず　讀人しらず「我心なくさめかねつ更級や姨捨山に照月を見て　姨捨山は信濃也　(▲)或本ニ　さて後に程へて心から思ひ亂るゝ事有て里に有比トアリ　(ツ)雜仕は諸大夫侍の女任レ之女孺の類なり　(ネ)案内アナイ　(ナ)敢アヘ　(ラ)不レ堪(アヘ)とは不レ堪意なり

關白殿、二月十日の程に、法興院(ム)の積(サク)善寺(キ)といふ御堂にて、一切經供養せさせ給ふ、女院、宮(ノ)の御前も、おはしますべければ、二月朔日の程に、二條の宮へいらせ給ふ、夜ふけてねふたくなりにしかば、何事も見いれず、つとめて、日のうらゝかにさし出たる程に、おきたれば、いとしろうあたらしう、おかしげにつくりたるに、御簾よりはじめて、昨日かけたるめり、御しつらひ、師(シ)子狛犬(コマイヌ)など、いつの程にや、入ゐけんとぞおかしき、櫻の一丈ばかりにて、いみじう咲たるやうにて、御はしの東に有は、いととう咲たるかな、梅こそ、只今盛なめれと見ゆるは、作りたるなめり、すべて花の匂ひなど、露まことにをとらず、いかにうるさかりけん、雨ふらば、しぼみなんと見るぞ口おしき、小家(イヘ)などいふもの丶おほかりける所を、今作らせ給へれば、木立などの見處あるはいまだなし、唯宮のさまぞ、けちかくおかしげなり

第三節爰より下の御心おこりもことはりなりと云迄第三節の内にして其大意積善寺供養の事を記されたり此折に少納言宮仕にさふらはれ嬉しき心を此段に書れし義也　二條の宮とは兼家公の御所の内に中宮入御の御殿をしつらひ給ふ成べし　いらせ給ふとは中宮の入御有義也　ねふたく以下は少納言の詞也　つとめて以下は翌日其御殿の飾を見たるさま也　小家などいふものゝとは小家おほかりし所を引替て此積善寺並に御殿を作られしと也　(ラ)勘物云正暦五年云々榮花物語云攝政殿の法興院の中に別に御堂たてさせ給て積善寺と名つけさせ給てその御堂の供養いみしくそいそかせ給ふ云々上下略大鏡にも此事見えたり　(ム)拾芥云法興院二條北京極東二町本號東二條大入道殿第後爲堂云々此中に積善寺有しとなり　(ヰ)女院　詮子なり圓融院の后一條院母后東三條院なり御系圖前に詳なり　(ノ)宮　中宮なり

殿わたらせ給へり、(オ)青鈍の堅紋の御指貫、櫻の直衣に紅の御ぞ、三つばかりを、たゞ直衣に引かさねてぞ奉りたる、御前よりはじめて、紅梅のこきうすき、織物堅紋りうもんなど、(▲)有かぎり着たれば、たゞひかりみちて見ゆ、唐衣は、萠黄、柳、紅梅などもあり、御前にゐさせたまひて、物など聞へさせ給ふ、御いらへなどのあらまほしさを、里人に、わづかにのぞかせばやと見奉る、女房どもを御覧じわたして、宮に何事をおぼしめすらん、こゝらめでたき人々を、なべすへて御覧ずるこそ、いとうらやましけれ、獨わろき人なしや、是家々のむすめぞかし、(さ)あはれ也、よくかへり見てこそ、さふらはせ給はめ、扨も此宮の御心をば、いかにしり奉りて、あつまり參り給へるぞ、いかにいやしく物おしみせさせ給ふ宮とて、我は生れさせ給ひしより、いみじうつかうまつれど、まだ、おろしの御ぞ一つ給はぬぞ、なにか、しりうごとには聞えんなど、の給ふがおかしきに、みな人々わらひぬ誠ぞおこなりとて、かく笑いまするが、(こ)はつかしなとのたまはする程に、内より御使にて式部丞何がし參れり、御文は、大納言殿寄給ひて、殿に奉らせ給へば、引ときて、いとゆかしき文かな、ゆるされ侍らば、あけて見侍らんと、の給はすれば、あやしうとおぼいためり、かたじけなくも有とて、

奉らせ給へば、とらせ給ひても、ひろけさせ給ふやうにもあらず、もてなさせ給ふ、御用意などぞ、有がたき、御簾の内より、女房しとねさし出て、三四人御几帳のもとにゐたり、あなたにまかりて、祿の事物し侍らんとて、たゝせ給ひぬる後に、御文御覧ず、御返しは紅梅のうすやうに書せ給ふが、御ぞの同じ色に、匂ひ通ひたる、(イ)猶かうしも、おしはかり參らする人は、なくやあらんとぞ口おしき、けふは殊更にとて、殿の御方より、祿は出させ給ふ、女の裝束に紅梅の細長そへたり、さかなくとあれば、醉さまほしけれど、けふはいみじき事の行幸に、(ロ)あが君ゆるさせ給へと、大納言殿にも申てたちぬ、君達など、いみじうけうじ給ひて、紅梅の御ぞ共、をとらじと着給へるに、三の御前は、御匣殿なり中姫君よりおほきに見へ給ふて、うへなど聞えんにぞ、よかめる、うへもわたらせ給へり、御几帳引よせてあたらしく參りたる人々には見へ給はねば、いぶせき心地す、さしつどひて、彼日の、さうぞく、扇などの事をいひあへるも有、又いとみかはして、丸は何か、たゞあらんにまかせてをなどいひて、例の君なとにくまる、夜さりまかづる人もおほかり、かゝる事にまかづれば、えとゞめさせ給はず、うへ日々にわたり給ひ、夜もおはします、君達などおはすれば、御前人すくなくさふらはねば、いとよし、内の御使日々に參る

第三節の内なり但爰には關白殿并姫君達の御儀のいみしき事をかけり、殿とは關白道隆公也　青鈍以下は關白殿の御裝束を云なり　御前とは中宮なり　紅梅以下は姫君達并女郎迄の御裝束の儀をすべて云心也　御前に居させ給ひとは關白殿の御前に中宮居させ給ひてとなり　里人に以下は少納言詞なり　女房共とは召仕の女房也　よくかへりみてこそさふらはせ給はめとは女房達を宮のよく恩顧し給ふとなり　扨も以下は關白殿詞なり戲言の心成べし　いかにしり奉りてとは宮仕の女房達に對していへる義なり　何かしりうごとゝはうしろ言にはいはしと云義也　誠ぞおこなりとは關白殿の御詞成べし　かくわらひいまするとは關白殿の笑ひおはしませしと也　はづかしなどのたまはするとは宮のの給義也　内よりとは御門よりと也　ゆるされ侍らばとは關白殿の御詞なり　あやしう

とおぼいためりとは宮の御心なり　奉らせ給へばとは關白殿の中宮へ捧奉り給ふとなり　とらせ給ひて以下は中宮のとらせ給ふ粧を云なり　しとねとは御使の座する茵なり　三四人とは御前に有女房達なり　あなたにまかりて以下は關白殿の御詞なり　祿の事とは御使に給はる祿物の事を關白殿より仰付られんとなり　御文御覽ずとは御門よりの御文を中宮の御覽ずるとなり　御ぞ以下は中宮の御粧を褒奉る心なり　匂ひ通ひたるとは薄様の色と御ぞの色と匂ひ通ふとなり　女の裝束とは祿の品を云なり　さがなくとは酒宴なくてはさがなしと御使に仰らるゝ也　ゑはさまほしけれどゝは献盃下されたう侍れど行幸の事侍れば聽し給へとて式部丞が辭退するなり　君達とは中宮の御連枝也　三御前とは中宮の御妹なり中姫君とは中宮なり　おほきにてとは御匣殿の事なり　うへなどゝは誰人の御うへなどゝ申てよからんとなり　うへとは道隆公の御うへなり　あたらしく參りたる人々とは新參の女房達なり　彼日のさうぞくとは供養の當日の裝束などの事を新參の女房達さしつどひていひあへるとなり　いどみかはしとは裝束の品を見かはしてなり　例の君などにくまるとは例の物爭する女房などは更に惡るゝとなり夜さりまかづる人とは政所の御方の女房達が中宮の御座へ夜さりおほく參らるゝとなり　之とゝめ給はずとは政所の御方に女房達をえ制し給はぬとなり　うへとは關白殿の御うへなり君達などゝは中宮御連枝のおはすればつき〳〵の女房達もおほくて賑はしきとなり　内の御使とは御門よりも毎日御使有となり是則中宮の御方のいみじき体を云なり

(オ)胡曹抄云靑鈍花田萩色也云々　(△)或本りうもんなとゝ云下に詞有如レ左　其折は此八丈といふたけたかはことになかりきトアリ　(ヤ)あはれ也　ほめたる義なり　(マ)勘物云源則理正月十三日式部丞前大納言重光卿四男正暦四年藏人十九六年叙中宮御給

源氏家譜云

○○醍醐天皇─┬─克明親王
　　　　　　└─●代時親王(三品中務卿)─┬─重光(權大納言)─●則理(但馬守)
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　├─保光
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└─延光

職事補任云永祚二年九月一日補ニ右近少將ニ從五位下正暦六年正月七日從四下　(▲)或本　猶かへしもトアリ　(フ)あか君　我君なり

御前の櫻、色はまさらで、日などにあたりて、しぼみわろうなるだに口おしきに、雨の夜ふりたる、つとめて、いみじうむとくなり、いと〻くおきて、なき(ミ)てわかれけん顏に、心をとりこそすれといふを、聞せ給ひて、げに雨のけはひしつるぞかし、いかならんとて、おどろかせ給ふ程に、殿の御方より、侍のものども、げすなどあまた來て、花のもとにたゞ寄によりて、引たをし取て、みそかにいきて、まだくらからんにとれとこそ、仰られつれ、明過にけり、ふびんなるわざかな、とく〳〵たをし取に、いとおかしくて、(ヌ)いはゞいはなんと、(ミ)かねずみが事を、思ひたるにやとも、よき人ならば、(▲)いはまほしけれど、彼花ぬすむ人は、誰ぞあしかめりといへば、笑ひて、いとゞにげて、ひきもていぬ、猶殿の御心は、おかしうおはすかし、枝どもに(▲)ぬれまつはれつきて、いかに見るかひなからましと見て入ぬ、かもんづかさ參りて、御格子參る、主殿の女官、御きよめなどに參り果て、おきさせ給へるに、花のなければ、あな淺まし、彼花はいづちいにけると仰らる、曉に花盜人有といふなりつるは、なを枝などを、すこし折にやとこそ聞つれ、誰かしつるぞ、見つやと仰らる、さも侍らず、いまだくらくて、よくも見侍らざりつるを、しろみたるもの〻侍れば、花を折にやと、(シ)うしろめたさに申侍つると申す、さりともかくはいかでかとらん、殿のかくさせ給へるなめりとて、笑せ給へば、いでよも侍らじ、(ヌ)春風のして侍なんと啓するを、かくいはんとてかくすなりけり、ぬすみにはあらで、ふりにこそふるなりつれと、おほせらる〻も、めつらしき(モ)事ならねど、いみじうめでたき、殿おはしませば、ねくたれの朝がほも、時ならずや御覽ぜんと、引いらる、おはしますま〻に、かの花うせにけるは、いかにかくはぬすませしぞ、いとわろかりける女房達かな、いぎたなくてしらざりけるよと、おどろかせ給へば、されど我よりさきにとこそ思ひて侍るめりつれと、忍びやかにいふを、いととくき〻つけさせ給ひて、(セ)さ(ヌ)思ひつる事ぞ、餘にこと人出居て見つけし、宰相とそことの程なんと、をしはかりつとて、いみじうわ

らはせ給ふ、さりげなるものを、少納言は春風におほせけると、宮の御前に、うちゑませ給へるめでた(一)し、そらことをおほせ侍るなり、今は山田も作るらむと、打ずんせさせ給へるも、いとなまめきおかし、扨もねたく見つけられにけるかな、さばかりいましめつる物を、人の御方に、かゝるしれもの(二)丶有こそとのたまはす、春風は空におかしうもいふかな丶ど、ずむせさせ給ふ、たゞことにはうるさく思ひよりて侍かし、今朝のさま、いかに侍らましとて、わらはせ給ふ、小若君、(三)されどそれは、いととく見て、雨にぬれたりなどいひけり、おもてぶせなりといひ侍りつと、申給へば、いみじうねたがらせ給ふもおかし

同じく三節の内なり但爰には二條の宮の庭の作花の事をかけり　御前の櫻とは御前の坪に植られし櫻なり是則作花なり　なきてわかれむ以下は少納言詞也　げに雨のけはひ以下は中宮の御詞也　殿の御方より以下は作花を取捨られし故をかけり　いとおかしくてとは少納言心におかしくてと也　よき人ならばとは花を掘取者が心有人ならば歌の心をもいひ懸べけれ共賤しき者と見へつれば默止(モダシ)たる由なり猶殿の御心以下は少納言詞なり殿の作花取捨させ給ひし御心のいみじくおかしからんとなり　おきさせ給へるとは中宮の起給ふと也　曉に花盗人ありといふなりつる以下は少納言へ中宮の御懸給ふ御詞なり　さも侍らず以下は少納言の返答なり　さりとも以下は又中宮の御詞なり　いでよも侍らじとは重て少納言の返答なりよも殿の匿給ふ事は侍らじとなり　かくいはんとてとは中宮の御詞なり少納言が春風の歌をいひ興せんとてよも侍らじとかくすなりと察し給ふ心なり　引いらるとは假粧の爲に引入給ふなり　おはしますま丶にとは殿のおはしまして花の事を吟味し給ふ義也　是則戯れ僞て仰らる丶義也　されど以下は少納言などの女房達が斷(コトハリ)町(サヽヤク)詞也掘取男共が女房達の起給はぬ先にと謀(ハカレ)ばせんかたなかりしと云義也　いと丶丶聞つけさせ給ひてとは殿の斷町を聞付給ひしと也　餘にこと人出居て見付しとは掘取時の次第を餘所ながら見し人が有と也宰相そこととは宰相の君と少納言とは掘時に見えしとの仰也是皆殿の女房達を吟味し給ふ御詞也　いみしう笑せ給ふ

とは宰相少納言が見ながら花ぬすまれし事よと笑はせ給ふ心なり　さりけなるとは中宮の御詞なり　そらことをおほせ侍るとは實に春風の所爲とは思はねども興を催さんとてそらことに課せたるとなり　打ずんぜさせ給へるとは殿の誦じ給ふとなり　扨も以下は殿の掘取させられし故をあかし給ふ義なり　いましめつるとは掘者によく仰含められしにとなり　人の御方にとは中宮の御方になり　かゝるしれものとは宰相少納言を指ての給ふなり　たゞ事には以下中宮の御詞なり　今朝のさまいかにとは中宮の殿へ尋ね給ふ義なり　小若君以下は殿の御返答なり　おもてぶせなりとは殿の小若君と如ㇾ此仰られたる趣を中宮へ御物語し給ふ也　ねたがらせ給ふとは中宮のねたがらせ給ふと地に斷るなりすべて上來は作花の事をいへり心を付て見るべし

(ユ)拾遺に　よみ人しらす「櫻花露にぬれたる顔みれは泣て別れし人か戀しき　(メ)素性家集に花山にて人々酒たうへけるに「山守はいはゝいはなん高砂の尾の上の櫻折てかさゝん　後撰集には詞書少しちかへていれり花山にて道俗酒たうべける折にトアリ　(ミ)かねすみ　未詳　今案源兼澄にや作者部類に源兼澄は陸奥守信明の子加賀守從五位にて寛和の比迄人拾遺後撰續後拾遺等の作者也凡今の本文に素性が歌を引てかねすみが詞のやうにかけり前に兼澄が歌にいはゞいはなんとよめる事有にや抑又素性此歌をよみし時兼澄も同しく花山に侍りて物せられし事有しにや猶可尋之

(▲)或本あしかめりノ下ニ猶詞有如ㇾ左「くてんしらさりけるよといへはト有　(▲)或本になからましとアル下ニ猶詞有如ㇾ左「思へともかくもいはて見て入ぬるトアリ　(シ)こゝろもとなき由なり

(ヱ)春風は花のあたりをよきて吹なとよめば今春風におほせらるゝなり　(ヱ)則引歌の山田さへの歌の意なり　(モ)わきも子かねくたれ髪と人丸のよめり　(セ)宰相の傳此卷の次下ニ見えたり

(ス)某ソコ　足下ソコ　(一)貫之家集ニ「山田さへ今は作るを散花のかことは風におほせさらなん元眞集に「風にのみおほせつれども櫻花今日は心と散果ぬべし　(一)僻者と云に等しき也　(▲)或

本ニおかしうト云ヲかしこふもトアリ　(三)小若君は松君なり傳前に見えたり

扨八日九日の程にまかづるを、今すこしちかうなしてなど仰らるれど、(四)出ぬ、いみじうつねよりも、長閑に照たる晝つかた、(五)花の心ひらけたりや、いかに〳〵とのたまはせたれば、(六)秋はまだしく侍れど、よに此度なん、のほる心地侍るなど、聞へさせつ、出させ給ひし夜、車の次第もなく、まづ〳〵と乘さはぐかにくければ、さるべき人、三人と、猶此車に乘さまの、いとさはがしう、祭の歸さなどのやうに、たうれぬべくまどふ、いと見ぐるしきに、只さばれ、乘べき車なくてえ參らずは、をのづから聞召つけて、給はせもしてんなど、笑ひあはせて、たてるまへより、をしこりてまどひ乘果て出てかうことといふに、まだしこゝにといふめれば、(九)宮司寄來て、誰々かおはするそと問ひ聞て、いとあやしかりける事かな、今はみな乘給ひぬらんとこそ思ひつれ、是はなどてかくはをくれさせ給へる、今は、(一〇)得選をのせんとしつるに、めづらかなるやなと、おどろきて寄さすれば、さはまづ、その御心さし有つらむ人を乘給ひて、次にもといふ聲を聞付て、けしからず腹きたなく、おはしましけりなどいへば、乘ぬ、其次には、誠にみづからが車にそ有ければ、火もいとくらきをわびて、二條の宮に參りつきたり、御こしはとくいらせ給ひて、みなしつらひゐさせ給ひにけり、こゝによべと仰られければ、(十)左京のせう小左近(イ)などいふ若き人々まいる、人ごとに見れど、なかりけり、おるゝに隨ひ四人づゝ、御前に參りつどひてさふらふに、あやしなきか、おりはてゝぞからうして見付られて、かばかり仰らるゝには、などかくをそくとて、引ゐて參るに、見れば、いつの間に、かうは年比のすまひのさまに、おはしましつきたるにかとおかし、いかなれは、かう何かと尋ぬるばかりは、見へざりつるぞと仰らるゝに、とかくと申さねば、もろともに乘たる人いとわりなしや、さいはらの車に乘て侍らん人は、いかでか、とくは參り侍らん、是も程々、えのるまじく侍つるをみつしか、いとおしがりて、ゆづり侍りつるなり、くらう侍りつる事こそ、わびしう侍りつれと、笑々啓するに、行事する者のいとあやしきなり、又などかは、心しらさらん、ものこそつゝまめ右衛

門などは、いへかしなど仰らる、されど、いかでかは、はしりさいだち侍らんなどいふも、かたへの人、にくしと聞らんかし、さまあしうて、かく乘たらんもかしこかるべき事かは、さだめたらんさまのやん事なからんこそよからめと、ものしけにおぼしめしたり、おり侍るほどの、待とをに、くるしきによりてにやとぞ、申なをす　同じく第三節の內なり但二條の宮より中宮并女房達の積善寺へ移りおはしますさまをかけり　まかづるとは積善寺へ移りまかづる義なり　仰らるとは中宮の仰らるゝなり　花の心ひらけたりや以下は中宮の御詞なり　秋はまだしく侍れど以下は少納言の詞也　出させ給ひし夜以下は中宮の積善寺へ移入給ふ夜供奉の車の物忩(モノサハ)がしきさまを云也　まだしこゝにといふとは少納言のいまだ乘らぬ由をいはるゝなり　誰々か以下は宮司が詞也　さはまづ以下は少納言詞なり　けしからず腹きたなくおはしましけりとは車を遲く參らせしと少納言の腹立せられし心を聞て宮司が諌斷義なり　みづからが車とは少納言の乘れる車なり　よべとは中宮の少納言を呼と仰らるゝ也

人ごとに見れどゝは少納言を左京などの尋ねらるゝ義なり　あやしなきがとは少納言が見へぬとて中宮のあやしみ給ふ心なり　見付られてとは少納言の見付られてなり　引ゐて參るとは左京の引將(ヒキ)て中宮の御前へ參らるゝとなり　見ればとは少納言の御餝(シツラヒ)を見ればとなり　いかなれば以下中宮の御詞也　とかく申さねばとは少納言遲かりし故を申されぬと也　もろともに乘たる人いとわりしやとは地の詞也或は少納言詞とも見へたり　見つしがいとおしがりてゆつり侍りつるとは殿(ヲク)れて車に乘る女房達が少納言を見付讓乘しとなり　行事するものゝいとあやしきなりとは中宮の車の行事を誡(イマシ)め給ふ心なり　いへかしとは少納言をまづ乘よといへかしとなり　されど以下は少納言謙退の心を啓して右衛門行事などを取成捄(スク)はるゝ心也　さまあしうて以下も卑下の心なり或云車の次第さまあしき由を中宮の慍(イキトホリ)給ふ義なり　さだめたらんさまとは車の次第よく定たることこそよけれとなり　おり侍る程の待どをにとは車が一度に參り着て下(オリ)侍るに程經し故遲々出る由少納言の斷啓(コトハリケイ)せらる

ゝなり
(四)出ぬ　此ぬの字不ぬにあらず畢ぬのぬなり
(五)花の心開けたりや　此詞は詩歌の語と見へたり追て可考　(△)或本ひらけさるやトアリ　(六)秋はまたしく　此詞も同前　(七)押聰チシコリ　(九)中宮職幷二三宮職一の被官を云成べし　(⊙)禁秘抄云得レ選三人也又變上乗女兼レ之近代華族過レ法而女房大略無二差別一色也行幸之時持二大袋一與二内侍一同車不レ可レ然事第一也但不レ然不レ可レ叶二公平一故無沙汰也凡於二車寄一乗車女房近代例也況得選不レ可レ然事行幸走内侍同車時聽レ之近代事也　(十)左京　前に見えたり　(イ)作者部類云散位中原經相女三條院女房三條小左近後撰の作者也　(△)或本　さいはうの車トアリ　共に不詳さいはらは最殿と云心歟尚可尋之　(△)或本　わふ〳〵トアリ　(ロ)右衛門　女官なり

御經の事に、あす渡らせおはしまさんとて、今夜参りたり、南院の北面にさしのぞきたれば、高つき共に火をともして、二人三人四人、さるべきどち、屛風引隔てつるもあり、几帳中に隔てたるも有、又さらでもあつまり居て、きぬどもとぢ、かさねもの、こしざし、けさうずるさまは、更にもいはず、かみなどいふものは、明日より後は有がたけにぞ見ゆる、寅の時になん渡らせ給へるなり、などか今まで参り給はざりつる、扇もたせて、尋聞ゆる人有つなど、つぐまて、誠に寅の時かとさうぞきだちてあるに、明過日も指出ぬ、西の對の唐庇になん指寄て、乗べきとて、有かぎり、渡殿へ行程に、まだうゐ〳〵しき程なる、今良どもは、いとつゝましけなるに、西對に殿のすませ給へば、宮にもそこにおはしまして、先女房共車に乗させ給ふを御覧ずとて、御簾の内に、宮、(ロ)淑景舎、三四の君、殿の上、其御(八)おとうと三所、立並ておはします、車の左右に、大納言殿、三位の中將二所して、簾うちあけ、下簾引あけて、乗せ給ふ、皆打むれてだにあらば、少しかくれ所もやあらん、四人づゝ書立に隨ひて、それ〳〵と、よびたてゝ乗せ奉り、あゆみ行心地、いみじう誠に淺ましう、けせうなりといふも、よのつねなり、御簾の内に、そこらの御乳母の中に、宮の御前の見ぐるしと御覧せんは、更に侘しき事かぎりなし、身よりあせのあゆ

れば、つくろひたてたる髪なども、あがりやすらんとおぼゆ、からうして過行たれば、車のもとに、いみじうはづかしけに、清けなる御さまどもして、打ゑみて見給ふも、うつゝならず、されど、たうれず、そこまではいきつきぬるこそ、かしこき顔もなきかとおぼゆれど、皆乗果ぬれば、引出て、二條の大路に榻立て、物見車のやうにて、立並べたるいとおかし、人もさ見るらんかしと、心時めきせらる、四位五位六位など、いみじうおほう出入、車のもとに來て、つくろひ物いひなどす、(ハ)先、院の御迎に、殿をはしめ奉りて、殿上人地下(ニ)なども參りぬ、それ渡らせ給ひて後、宮は出させ給ふべしとあれば、いと心もとなしとおもふ程に、日さしあがりてぞおはします、(ホ)御車ごめに十五、四つは尼車、一の御車は、唐の車なり、それにつゞきてぞ、尼の車、後口より水精の珠數、うす墨のも、けさ衣などいみじくて、簾はあげず、下簾も、うす色のすそすこしこき、次に、たゞの女房の十、櫻の唐衣、薄色の裳、紅ををしわたし、かとりのうはきども、いみじうなまめかし、日はいとうらゝかなれど、空は淺綠に、霞渡れる程に、女房の裝束の匂ひあひて、いみじき織物の、色々の唐衣などよりも、なまめかしうおかしき事かぎりなし、關白殿其御次々の殿原、おはするかぎり、もてかしづき奉らせ給ふさま、いみじうめでたし、これら見奉り、めでさはく、此車どもの二十、立並べたるも、又おかしと見るらんかし、早晩出させ給はむなど、待聞へさするに、いと久し、いかならんと心もとなく思ふに、(ヘ)からうして、うねめ八人馬にのせて、引いづめり、青(ト)すそごの裳、裙帶領布(チ)などの、風に吹やられたるいとおかし、ふせんといふ采女は、典藥頭重正がしる人なりけり、えび染の織物、指貫を着たれば、いと心ことなり、重正は色ゆるされにけりなど、山の井の大納言は笑ひ給ひて、皆乗つゞきてたてるに、いまぞ御こし出させ給ふ、めでたしと見へ奉る御有さまに、是はくらぶべからざりけり、朝日のはなぐとさしあがるほどに、(リ)木の葉のいとはなやかにかゝやきて、御こしのかたびらの色、つやなど、きようさへぞいみじき、御つなはりて出させ給ふ、御こしの惟の打ゆるぎたる程、誠に頭の毛など、人のいふは更にそらことならず、さて後はかみあしからむ人も

かこちつべし、淺ましういつくしう、猶いかで、かゝる御前になれつかうまつらんと、我身もかしこうぞおぼゆる、御こし過させ給ふ程、車の榻もど、人給ひにかきおろしたりつる、又牛共掛て、御こしの後につゞきたる心地の、目出たう興有さま、いふかたなし　是も第三節の内なり但女院御幸の行粧幷に中宮より御迎車の出給ふ事などをかけり　あす渡らせおはしまさんとは女院の明日御幸有らんと也　參りたりとは九日の夕部に少納言など參られしとなり　二人三人以下は女房達の形勢をいふなり　などか今まで參り給はざりつる以下は女房達が少納言にいふ詞なり　つぐまでとは告迄なり迄は心なし只告と云義なり　指寄て乘るべきとは御迎の女房の車成べし　宮にもそこに以下は中宮御連枝の御迎の女車を見給ふ義なり　左右に大納言殿以下は車の次第などを吟味し給ふさまなり　御簾の内に以下は見苦敷御乳母などを御簾の内より中宮の御覽せば佗しからんとなり　御さまともしてとは大納言殿などの殿原も同じく御迎に出給ひて女房達を見給ふ故耻づる心なり　榻立て以下は御幸を待居さまなり　それ渡らせ給ひて後とは關白殿などの御迎に出給ふ後に中宮も御出有べきと也　御車ごめとは中宮の御車ごめなり供奉の車の事なり　一の御車とは中宮の御車なり　早晩出させ給はんとは女院御幸を待居心なり　うねめ八人以下は女院の御幸有由を云也　ふせん以下は八人の釆女の中にふせんがいみじき事をかけり　御こしとは女院の御輿なり　是はくらぶべからずとは是に比ふべき例なきとなり　木の葉以下は御幸の形勢のいみじき由をかけり心明らかなり　頭の毛とは身の毛立と云心なり　さで後とはさう有後と云義なり地の詞なり　猶かゝる御前になれつかうまつらん我身もとは少納言の宮仕嬉しき心を書れたり此詞當段の本意なり此嬉しき義侍る故積善寺供養の事を委く記されたる成べし御こし過させ給ふ程ゝは女院の御輿のおはします迄と云義なり　車の榻共とは御迎の車なり　御こしのしりにとは女院の御輿の後に引つゝひて御迎の車も積善寺へ入せ給ふとなり

（一）南院　道隆公御殿なり其邊に積善寺を立給ふ

となりこれにより道隆公の稱號を南院と申なり
(ロ)宮　中宮なり　淑景舍三四君　皆中宮の御連枝なり前に詳なり　(ハ)殿のうへ　高階成忠朝臣の女なり
高階氏譜云
●●高市親王此間十代成忠前ニ詳ナリ
─助順內藏頭正四下
─信順藏左中辨從四下
─明順右藏東宮學士三事左中辨從四上
─道順右兵佐木工頭
─積善彈正少左中辨
─淨昭法橋
─女子高內侍歌人伊周ノ母

此女子と有は道隆公の室なり則本文に殿のうへと有是也此御兄弟の中を其御おとうと三所と云なり猶前ニも記し侍る　榮花物語云此中納言殿幸不幸八にわつらはしと覺へたる人の國々おさめたりける彼をのこ丶女こ共あまた有けるむすめの有か中にいみしうかしつき思ひたりけるを男あはせんなと思ひけれと人の心のしりかたうあやうかりければ只宮仕をせさせんと思ひて先帝の御時におほやけ宮仕に出したてたりければ女なれとまななといとよく書ければ內侍になさせ給ひて高內侍とそいひける此中納言殿萬にたはれ給ひける中に人より殊に心さしありておほされければ是をやがて北の方にておはしける程に女君達三四人男君三人いてき給ひにければいとゝいみしき物におほしながら猶御たはふれはうせさりければ此御子共といはれ給ふ君達あまたに成給へと猶此むかひ腹のいみしきものに思ひきこへ給へるうちに母北の方のさえなどの人よりことなりければにや此殿の男君達も皆御年のほどよりはいとこよなうそおはしける云々上下略　(▲)或本物ニいひなしとすと有下ニ猶詞有如レ左る中にあきのふの朝臣の心ちそらをあふきむねをそらひたりトアリ　(ニ)昇殿ゆるさぬ諸大夫を云なり或譜代の地下もあり職原に詳なり　(ホ)車籠也クルマゴメ　(ヘ)釆女　前に詳なり　(ト)下濃スソゴ　(チ)裙帶　領巾共に前に見えたり　(◎)或本ニ木の葉ヲなきの花トアリ

おはしましつきたれば、大門のもとに、高麗もろこしの樂して、師子狛犬をどりまひ、箏の音鼓の聲に、

物もおぼへず、こはいづくの佛の御國などに、來にけるにかあらんと、空にひゞきのぼるやうにおぼゆ、内に入ぬれば、色々の錦のあげばり(リ)に、御簾いと青くて懸渡し、屏幔(ヌ)など引たる程、なべてたゞに此世とおぼへず、御さじき(ル)にさしよらせたれば、又此殿原立給ひて、とく下よとのたまふ、乘つる所だに有つるを、今少しあかうけせう(ヲ)なるに、大納言(ワ)殿、いとものものしくきよげにて、御下襲のしり、いとながく所せげにて、すだれ打あげて、はやとのたまふ、つくろひそへたるかみ、裳唐衣の中にてふくだみ、あやしう成たらん、色の黑さ赤ささへ、見へわかれぬべき程なるか、いとわびしけれと、はふともえおりず、まづ後なるこそはなどいふ程も、それもおなじ心にや、しりぞかせ給ふ、かたじけなしなどいふ、恥給ふかなと笑ひて立歸(ヨ)、からうしておりぬれば、よりおはして、むねたかなどに見せで、かくしておろせと、宮の仰らるればきたるに、思ひくまなきとて、ひきおろしてゐて參り給ふ、さ聞へさせ給ひつらんと思ふも、かたじけなし、參りたれば、初めたりける人共の、物の見えぬべきはしに、八人ばかり出居にけり、一尺と二尺ばかりの高さの長押の上におはします、こゝにたちかくしてゐて參りたりと申給へは、いづらとて、几帳のこなたに出させ給へり、まだ御もかうの御ぞも奉りながら、おはしますぞいみじき、紅の御ぞ共よろしからんや、中に唐綾の柳の御ぞ、えび染の五重の御ぞに、あか色のからの御ぞ、地摺の唐のうすものに、さうかんかさねたる御裳など、奉りたり、織物のいろ、更になべてのに、にるべき樣もなし、我をばいかが見ると仰らる、いみじうなん候つるなども、ことに出てはよのつねにのみこそ、久しうや有つる、それは、殿の大夫(ソ)の、院の御供に來て、人に見へぬる、同じ下襲ながら、宮の御供にあらんはわろしと、人思ひなんとて、殊に下襲縫せ給ひける程に、をそき成けり、いとすぎたまへりなどゝ、うち笑せ給へる、いとあきらかにはれたる所は、今少しけさやか(ツ)に、めでたう、御ひたひあげさせ給へりける、さいしに御分めの御くしのいさゝかよりて、しるく見へさせ給ふなとさへぞ、聞へんかたなき、三尺の御几帳一よろひを、指ちがへて、こなたの隔にはして、其後には疊一ひら(ネ)をながさまにへりをして、なげしの上にしきて、中納

言の君といふは、殿の御おぢの、右兵衛督忠君と聞へけるが御女、(ラ)宰相の君とは、富小路の左大臣の御孫、それ二人ぞ上にゐて見へ給ふ、御覽じ渡して、宰相はあなたにいきて、上人どもの居たる所見よと仰らるゝに、心得て、こゝに三人は、よく見侍ぬべしと申せば、さばとてめしあげさせ給へばしもゐたる人々、殿上ゆるさるゝ内舍人なめりと、笑はせんと思へるかといへば、(ム)むまさゑの程ぞなどいへば、そこにのぼりゐて見るは、いとおもだゝし、かゝる事などをみづからいふは、(ウ)ふきかたりなどもあり、又君の御ためにも、かろ〳〵しう、かばかりの人をさへおぼしけんなど、をのづから、物しり世中もどきなどする人は、あひなう、(井)かしこき御事にかゝりてかたじけなけれとある、かたじけなき事などは又いかゞは、誠に身の程にすぎたる事も有ぬべし、院の御さじき、(ノ)所々の御さじきとも、見渡したるめでたし、殿は先、ゐんの御座敷に參給ひて、しばし有てこゝに參り給へり、大納言二所、(オ)三位中將は(ク)陣ちかう參りけるまゝにて、調度をおゐて、いとつき〴〵しうおかしうておはす、殿上人、四位五位、こちたう打つれて、御供にさふらひなみゐたり、入せ給ひて見奉らせ給ふに、女房有かぎり、裳から衣、御匣殿までに着給へり、殿の上は、裳のうへにこうちきをぞき給へる、繪に書たるやうなる御さまどもかな、(ヤ)今いらへけふはと申給ひそ、(マ)三四の君の御裳ぬがせ給へは、此中の主君には、わが君こそおはしませ、御座敷の前に、陣をすへさせたまへるは、おぼろけの事かとて打なかせ給ふ、實と見えて、みな人も泪ぐましきに、赤色の櫻の、五重の唐衣を着たるを御覽じて、法服の一つたらざりつるを俄に、まとひしつるに是をこそかり申べかりけれ、さらばもし又、左樣の物をきりしらめたるにとの給はするに、又笑ひぬ(ケ)大納言殿少ししそき(フ)居給へるが、聞給ひて、清僧都のにやあらんとの給ふ、一事として、おかしからぬ事ぞなきや、僧都の君、赤色のうす物の御衣、紫の御袈裟、いとうすき色の御ぞとも指貫など、着給ひて、頭つきの青々うつくしきに、地藏菩薩のやうにて、女房にまじりありき給ふもいとおかし、僧(コ)綱の中に威儀具足して(エ)おはしまさで、見ぐるしう女(テ)房の中になど笑、父の大納言殿、御前より松君ゐて

奉る、えび染の織物の直衣、濃綾の打たる紅梅の織物など着給へり、御供に、例の四位五位いとおほかり、御座敷にて、女房の中にいだき入奉る、何事のあやまちにか、なきのゝしり給ふさへ、いとはへ〳〵し

是も第三節の内なり但女院入御まし〳〵て饗應し給ふ御事并に御一門榮花のさまを書り　おはしましつきたればとは女院の御輿積善寺へおはしましつきたればとなり　大門以下は積善寺の結構を云なり　こはいづくの佛の御國などに來にけるにかあらんとは少納言の詞なり或は地の心共見へたり　内に入ぬればとは御堂の内に入ぬれば也　さしよせたればとは女房達の車を指寄たればと也　此殿原とは大納言殿三位殿などなり　乘つる所だに有けるをとは女房達の云詞なり最前御迎に出時乘し所だに晴々しきを今下よと有所は猶顯證に侍るとなり　大納言殿以下は殿原のおはしませば晴がましきと云心なり　はやとのたまふとは女房達はや下よと大納言殿ののたまふなり　つくろひそへたる髪とは女房達の粧の車の内にてあしう成らんと耻る心なり　はふともえおりずとは匍匐臥共え下まじう耻かしきとなり　まづしりなるこそとは車の内にして先後なる女房に下給へと讓る心なり　それもとは後にある女房も同じ心にはづかしければ下ずして退くとなり　かたじけなしなどいふとは女房達の詞なり大納言殿に憚るとの心なり　はぢ給ふか大納言殿の詞なり　からうしておりぬとは晴がましく苦しきとなり　寄おはしてとは又大納言殿の女房達の本へ指寄おはしましてなり　むねたか以下は大納言殿のの給ふ詞なり　來るとは大納言殿の來ると仰らるゝなり　思ひくまなきとは思ふ甲斐なきとなり　引おろしてゐて參り給ふとは女房達を車より下し將て參り給ふとなり　さ聞へつらんもかたじけなしとは中宮の仰を大納言殿の傳給へば女房達が忝しと申さるゝ義なり　物の見へぬべきはしとは法事みゆべき所の端なり　おはしますとは中宮のおはしますとなり　こゝにたちかくしとは女房達を隱置てなり　ゐて參りたりと申給へばとは大納言殿の中宮へ申給ふなり　いづらとは中宮の御詞なり　まだ御裳以下は中宮の御裝束を云なり未だは未なり唯今召給

ふと云義なり　紅の御ぞ共よろしからんやとは紅の御そは並て着給へば宜しからぬとなり　中に唐綾以下は世にかはりて中宮の御形勢の目出度事を云なり　我をはいかか見るとは中宮の御粧を女房達に問給ふ心なり　いみじう以下は女房達の御返答なり　ことに出てとは言に出ては尋常の事ぞとなり　褒に絶たる義なり　久しうや有つるとは中宮の御詞なり女房達の遅く參られし程の久敷由を仰らるゝ義なり　それは以下女房達の遅かりし趣を理申上らるゝなり　御供に來て人に見へぬるとは御供に見へしと云詞なり　同じ下襲以下は女房達の詞なり並々の裝束にて中宮の御供に侍らんはあしかるべきとなり　人思ひなんとは大夫殿を耻る心なり是則女御倫子の御父なれば中宮の御方とは上下共に挑耻らふ心有なり　いとすぎ給へり以下は中宮の仰らるゝ義なり程久しければ法會も漸過給ふとなり　いとあきらかに以下は中宮の御粧を褒奉る義なり　三尺の几帳以下は中宮御聽聞の御座敷のさまを云なり　中納言の君以下は中宮の御近習にましますみ女郎のさまをかけり　御覽じ渡してとは中宮の御覽じ渡してなり　宰相はあなたにいきて以下は中宮の御詞なり　心得てとは少納言指心得て申上らるゝとなり　こゝ三人とは中納言の君宰相の君少納言三人なり　さばとてめしあけさせ給とは長押の上の間へ召上給となり　ゐたる人々以下は女房達の戯れいふ心なり　うどねりとは賤しき者をいはんとの喩也　馬さゑの程とは又ことと女房の返答なり內舍人も馬さゑだにあれば召上らるると云義なり　そこにとは長押の上檀の間なり　かゝる事以下は少納言の自の事を如此いふは憚有由卑下の義なり　あひなう以下は世の中もとく人がいふ趣なり　かたじけなき事などは以下少納言の答らるゝ趣なり自の卑下を自問自答せらるゝ義なり　院の御座敷以下は彼方此方の御飾のさまを云なり　こゝにとは中宮の御座へおはしますとなり　陣ちかふとは法會の陣ちかふ參りおはしますとなり　御供とは女院の御供なり　入せ給ひて見たてまつらせ給ふとは關白殿の入せおはしまして見給ふと也　殿の上とは關白殿の上也　今いらへけふはと申給とは殿の御詞成べし悅ひ思

召す心をの給ふ義なり　わが君とは中宮也　打なかせ給ふとは殿の御悦びに堪かね給ふ義なり　着たるを御覧じてとは少納言の着たるを僧都の君の御覧じてなり　法眼の以下は僧都の君の詞也　是をこそかり申べけれとは少納言裝束を借り可申と戯れの給ふ心なり　きりしらめたるにとはさやうの衣を裁縫(タチヌヒ)持來給かとなり　又笑ぬとは僧都の戯言を聞て皆人笑らはれしとなり　清僧都のにや有らんとは是も戯れの御返答なり清少納言衣を借らんとの給ふ故清僧都のにやと仰らるゝなり　僧都の君以下は隆圓僧都の御裝束のさまをいふなり心あきらかなり　父大納言殿以下は松君道雅公の事を云ふなり父大納言殿とは伊周公なり　ゐて奉るとは將て奉るなり御手を將(ヒキヰ)て參る義なり　えび染以下は松君の御裝束を云なり　御供にとは松君の御供なり　何事のあやまちとは松君の啼給ふ故を斷書るなり

(リ)帽額(モカウ)の類成べし　(ヌ)幔(ノボリ)と計も云なり公事の度ごとに引るゝ物なり四半の旗程の物に四の角に紐を付て引張也　(ル)棧敷　座敷　兩說なり下にも有同斷　(ヲ)顯證(ケセウ)　はれかましき意なり　(ワ)伊周公なり　(ヨ)むねたか　系圖可考　(タ)地を摺て繪を書なり　(ソ)勘物ニ云御堂云々　是則道隆の御弟道長公なり御堂の關白と申なり　(ツ)際次(サイシ)物の極の義なり

(ネ)藤氏家譜云

師輔
- 伊尹
- 兼通
- 兼家
  - 道隆
    - 賴隆　從五下　丹後守
    - 有道　右兵佐　從四上
    - 賴定　兵部丞
    - 朝壽　仁和律師
    - 禪智　山
    - 女子　大納言　俊賢室
    - 女子　和泉守時明室　中納言中宮女房
- 遠量　貞信公爲子正四上右兵督五
- 忠君　藏人安和元卒　母同兼家

忠君は道隆公の伯父なり其忠君の女と道隆公とは從父兄弟(イトコ)なり大鏡に忠君の傳も侍るなり

(ラ)同云(クク)

時平━顯忠　撿別從一左大將大大臣號富小路康保二年四月廿四日薨六十贈正一位
　├元輔　五藏頭參木正四下
　│　├致貞　因幡守從五上
　│　├致重　内藏助從五上
　│　├心譽　權僧正
　│　├快公　大僧都
　│　└女子　宰相中宮女房
　└重輔　從五下左衛門佐右馬頭藏人

是則富小路顯忠公の御孫の系圖なり其傳は榮花物語大鏡等に見えたり　(ム)馬さゐ　馬の所用をしれると云心なり是則ち宰相の君の父重輔朝臣馬頭なるゆへ殿上ゆるさるゝ内舍人馬さゐなといへり　皆戯れ言なり　(ウ)浮氣吹　(ヰ)畏れかましきと云心なり　(ノ)前のごとく兩説なり　(オ)勘物云權大納言伊周廿一　權中納言道頼廿四なり　(ク)同云右中將隆家十五正曆五年の補任八月廿八日伊周任内大臣同日道頼任權大納言可量知也　(ヤ)今以來なり　今より以來今日の嬉しさを例にせんとの義なり　(マ)給ひそ　給ふぞなり此詞の傍例榮花物語に多し　(ケ)伊周公なり　(フ)退　(▼)僧綱前に見ゆ　(コ)行儀の事なり

(エ)松君の御父伊周公なり　(テ)前に見ゆ

事始りて、一切經を蓮花の赤に、一はなづゝに入て、僧俗、上達部、殿上人、地下六位、なにくれまで、もてつゞきたる、いみじうたうとし、大行道導師參り、ゐかうしはじまりて、舞などする、日くらし見るに、目もたゆくくるしう、内の御使に五位の藏人參りたり、御さじきの前に、胡床立て(エ)居たるなど、實ぞ猶めでたき、夜さりつかだ、式部丞則理(ヒ)參りたり、やがて夜さりいらせ給ふべし、御供にさふらへと、宣旨侍りつとて歸も參(モ)らず、宮は、猶かへりて後にとのたまはすれ共、又藏人の辨參りて、殿にも御せうそこあれば、たゞおほせのまゝとて、いらせ給ひなどす、院の御さじきより、ちかの鹽竈などやうの御せうそこ、おかしき物など、もて參りかよひたるなども、目出たし　是も第三節の内なり但供養の始りしさま幷に内より御迎の參りし事などをかけり　一花つゞに入とは經を一花に一卷つゞ入持となり　蓮は作り物にせる花なり　舞などするとは樂をするとなり　日くらし見る以下は地の詞なり　内の御使とは御門よりの御使なり　胡床立てゐたると

は御使の藏人がさま也　夜さり以下は御門より御迎を進じられし義をかけり　御供にさふらへとは中宮還御の御供つかうまつり候へとなり　歸も參らずとは式部丞が待居義なり　宮はなをかへりて後とは御迎の式部丞などを歸し後緩々と還御有べきとなり　又藏人の辨參りとは重ね〳〵御迎の來るとなり　殿にも御せうそこあればとは關白殿へも御門より御せうそこ有しとなり　たゞ仰のまゝとは御門の仰に任せて還御有べきとなり　ちかの鹽竈などやうの御せうそことはこがれ思召由の御文成べし

(ヌ)敷床子の類なり塵する物なり今も公事節給ふなり　(ヒ)則理　前に見ゆ　(モ)職事補任ニ云源扶義正曆二年三月廿五日補二從四位下左中辨藏人一中宮權亮同五年八月廿八日任二參木一中宮權亮如レ元　又云右中辨正五位下源俊賢正曆三年八月廿八日補二藏人一太皇太后權亮同四年正月七日從四位下長德元年八月廿九日任二參木一云々　此二人此時分藏人辨にて有しなり

事果て、院かへらせ給ふ、院司上達部など、(セ)此度はかたへぞつかうまつり給ひける、宮は内へ入せ給ひぬるもしらず、女房のずさともは、二條の宮にぞおはしますらんとて、そこにみないきゐて、(ス)まてど〳〵見えぬ程に、夜いたうふけぬ、内にはとのゐ物もてきたらんと待程に、きよ〳〵見え聞へず、あさやかなる衣の、身にもつかぬを着て、さむきまゝに、いひにくみはらたてどかひなし、つとめてきたるを、いかにかく心なきぞなどいへば、となふることもさいはれたり、又の日雨ふりたるを、殿は是になん、(ニ)わがすくせは見え侍ぬる、いかゞ御覽ずると聞へさせ給へる、御心おこりもことはりなり　▲是も第三節の内なり但女院中宮の還御の事并に女房達二條の宮へ移還給ふ事などを書り　院とは女院なり　かたへぞつかうまつり給ひけるとは御幸の時は儀式を備ふれ共還御にはかたへ仕まつるは略せる義なり　しらずとは女房達のしらざりしとなり　女房のすさとは中宮の女房の從者なり　待ど〳〵とは女房達中宮還御を二條の宮にて待となり　内にはとのゐもの持て來たらんとまつとは中宮禁中へ還御有て女郎達も御供にて參り給へ共從者の女房はそれをし

らで二條の宮に待居により內の女郎達の翌日從者を待給ふと也　あさやかなる衣とは晝の裝束也　いひにくみとは內の女郎の從者共が來ぬを腹立し給心也　つとめて來るとは翌日從者共が參りたるとなり　いかにかく心なきぞとは二條の宮に有し女房達從者などにむかひていふ義なり　となふることゝは返答にも同じやうにいふとなりさきへ歸給ふ女郎達の還御の由を告知しもし給はで心なき事ぞと云義なり　又の日供養の翌日なり　殿とは關白殿なり　是になむ我すくせ見へ侍ぬるとは關白殿供養の日雨降ざりし事を嬉しう思召あまり自讃し給ふと也　御心おこりもことはりなりとは地の詞なり自賛し御心奢有も尤斷ぞと云義なり是迄第三節の分すべて積善寺供養の時の事實共なり

右此段三節を分て注し侍れ共いづれも皆題の嬉しき物といふ心をいひもて來ると見るべき事肝要なり

（セ）院司の被官　職原抄に見えたり　（ス）宿直物

（一）宿世　前生の事なり　△或本にことはりなりト有下猶詞有如レ左　されと其折めてたしと見奉りし御事とも今の世の御事ともに見奉りくらふるにすへてひとつに申へきにもあらねば物うくておほかりし事共も皆とゝめつとあり

清少納言枕草紙抄巻十四

[百卅四段] たうとき物、(イ)九でうのさくぢやう、(ロ)念佛(ハ)のゑかう　此段は詞すくなうして心もかくれたる事なし　たうとき物とは先此段の題なり　九でう以下二句なり事は次にみゆ

(イ)尊タウトキ　(ロ)眞言宗の八祖の内不空三藏の作に九條錫杖と云物有それに曲を附聲明とするなり其文云當願衆生十方一切無量衆生聞錫杖聲懈怠者精進破戒者持戒不信者令信慳貪者布施瞋恚者慈悲愚癡者智惠憍慢者恭敬放逸者攝心具修萬行速證菩提當願衆生十方一切邪魔外道魍魎鬼神毒獸毒龍毒虫之類聞錫杖聲摧伏毒害發菩提心具修萬行速證菩提當願衆生十方一切地獄餓鬼畜生八難之處受苦衆生聞錫杖聲速得解脱惑癡二障百八煩惱發菩提心具修萬行速證菩提過去諸佛執持錫杖已成佛現在諸佛執持錫杖現成佛未來諸佛執持錫杖當成佛故我稽首執持錫杖供養三寶故我稽首執持錫杖略之

(ハ)念佛に觀念の念佛稱名の念佛有廻向に往想廻向還想廻向の二種あり今の念佛の廻向は觀念稱名を兼て見るへし　觀念經云若能念佛者若能觀佛者當知此人與文殊師利等无有異　大悲經第二云若復有人但心念佛一生敬信我説是人當得涅槃果盡涅槃際云々　觀無量壽經云念佛衆生攝取不捨　六波羅密經云云何少施功德多耶以方便力小分布施廻向發願與一切衆生同證无上正等菩提以是功德无量无邊猶如小雲漸遍世界惠心釋云廻所作業趣向於彼謂之廻向云々

[百卅五段] 歌は、風俗フゾクの中にも(ニ)杉たてる門、(ホ)神樂歌もおかし、(ヘ)いまやうはながうてくせつきたり　此段はうたひ物をしるされたり題に歌とあるは和歌の義にあらす謠ウタヒモノの義なり　杉たてる門とは下のおかしと云詞をかねて見るへし　いまやう以下は面白からぬをいふなり或本にいまやう歌はながうたくせついたりと有未詳孰是タナルコトヲニゾ

(ニ)杉たてる門　風俗のうたひ物なり　(ホ)神樂歌　神樂譜に詳なり庭火ニハヒ阿知女アチメ採物トリモノ大前張サイハリ小前張星歌雜歌なと也　(ヘ)今様イマヤウ　朗詠早歌なとのことく風俗とは別なり

百卅六段　(ト)さしぬきは、紫のこき、もへぎ、(チ)夏はふたあひ、いとあつき比、(リ)夏むしの色したるもすゞしげなり　此段より下つかた六七段裝束調度の事をかけり就レ中此段は指貫の色を云なり

(ト)指貫の事は前に見えたり爰には指貫の色あひを云なり　(チ)夏はふたあひとは時節に相應の色となり　(リ)夏虫の色とは蟬の羽の衣などを云なり裏なきすゞしの惣名なり

百卅七段　(ヌ)かりきぬは、(ル)かうそめのうすき、白ふくさ、あか色、(ヲ)松の葉色、(ワ)あをば、(カ)さくら、(ヨ)やなぎ、(タ)又あをふぢ、男は何色のきぬをもきたれ　此段は前につゝゐて狩衣の色のいみしきを云也　男は何色とは男の裝束には何の色もくるしからぬが女の衣は色によりてよしあし侍ると云義なり指貫狩衣は男の衣類なれば其次手に女の衣に比心なり

(ヌ)狩衣　是も色を云也　(ル)香染　就二老若一有二淺深一　(ヲ)松の葉色松重の事　歟表松裏紫　(ワ)青朽葉の事成へし　(カ)表白瑩裏葡萄染或表張レ之臨時祭主上內宴第一大臣等着也　(ヨ)柳表白裏青打自レ冬至レ春　(タ)青藤は表薄紫裏青白藤とは異なり　右は胡曹抄徹正記說東山左府御說等を考得て註し侍る

百卅八段　ひとへは、しろき、(レ)ひのさうぞくの紅のひとへ、(ソ)あこめなど、かりそめにきたるはよし、されど色きばみたるひとへなどきたるは、いとこゝろづきなし、(ツ)ねり色の衣どもきたれど、なをひとへはしろうてぞ、男も女も萬の事まさりてこそ　此段も前の衣類につゝゐて單物の色を云なり　されどゝは前をうけて云なり白きひとへも紅のひとへも新はよしふるくて色の黄ばみたるは見苦しきとなり　ねり色以下は彼黃みたる衣に似たる色をいひて善惡を辨するなり

(レ)緋裝束也　(ソ)衵前にあり　(ツ)白き絹なとの練たる其まゝの色なり

百卅九段　わろき物は、ことばのもじあやしくつかひたるこそあれ、唯もじ一つに、あやしくも、あてにも、いやしくもなるは、いかなるにかあらん、さるはかうおもふ人、萬のことにすくれても、えあらじかし、何れをよきあしきとはしるにかあらん、さりとも人をしらじ、たゞさ、うちおぼゆるもいふめり、難義の事をいひて、そのこと、させんとすと、い

はんといふを、と文字をうしなひて、たゞいはんずる、里へいでんずるなどいへば、やがていとわろし、まして文をかきてはいふべきにもあらず、物かたりさへあしう書などすれば、いひかいなく、つくり人さへいとおしけれ、なをす定本のまゝなど書つけたる、いと口おし、ひでつくるまになど、いふ人もありき、もとむといふ事をみんと皆いふめり、いとあやしき事を、男などは、わざとつくろはで、ことさらにいふはあしからず、わがことばにもてつけていふが、心をとりする事なり　此段は言つかひ文字のてにをはのあしきやうをしるして教ゆるなり　わろき物とは題也　ことばのもじ以下いひあつかう詞の誤をとがめてたゞす心なり　かうおもふ人とはとがめたゞす人なり　さりとも人をしらじとは人の才の程ははかりしられぬとなり　難義の事とはたゞむつかしき談合など云義也　そのことさせんとすとは談合などにいふ詞也　といはんといふをと文字をうしなひとはといはんのと文字は前の詞をうけていふ文字なるをたゞいはんと計いへばわろきぞとなり　里へいでんずるなどいへばやがていとわろしとは里へいでなんとすると云義なり　是までは詞つかひのわろきを云なり　まして以下は書物のうへに誤などのあるを云なり　あしう書なすとは書寫の人の誤をいふなり　つくり人さへとは書寫の誤が作者の誤となる由なり　なをす定本のまゝなと書つけたるとは後の人などの校合して誤の疑はしきに脇書なとする義なり　ひでとは秘傳なるべし　男など以下は男のかける文にはあてつけし詞侍りてもくるしからずと云義なり或又男のいふ詞を書所はつくろはでそのまゝ書がよきとなり　わがことばとは作者の詞にとりなして書はわろきとなり女などの作る物がたりに男のいひし詞をわが詞のごとくやはらかに書んはこゝろをとりするとなり

百四十段　下かさねは、冬はつゝし、かひねりかさね、すはうかさね、夏はふたあひ、しらかさね　此段も前の衣類の沙汰につゝゐて下襲の事を記されたり心別義なし

(ツ)下襲の事は十二卷に見えたり爰には下襲の夏冬の色あひを云なり　閑曹抄云躑躅表蘇芳裏青打

三月着之台記躑躅下襲表蘇芳裏紅打云　(ネ)搔練表裏紅打或裏張又云火色自冬至春　餝抄云凡無止事之晴着之　(ラ)胡曹抄云蘇芳表白瑩裏濃打公卿禁色人常所着用也又主上之着給　餝抄云蘇芳四季着之無難但夏生綾若薄物　(ム)以紅花及青花染之　餝抄云若熱之比着用之
(カ)胡曹抄云白襲表裏白瑩衣更衣時上下着之又老者常用之　餝抄同之

【百四十一段】(ヰ)あふぎのほねは、ほを色はあかき、むらさきはみどり　此段は扇子の色を記されたり　ほを色の地紙にはあかきほねむらさきの地紙には緑色の骨が取あひたると云義なるべし
(キ)餝抄云公卿宿老之人束帯之時不論夏冬持檜扇直衣之時猶持之年少之公卿或炎天持蝙蝠云々　(△)ほを色蒲黄色歟未詳

【百四十二段】ひあふきは、むもん、から繪　此段は前のつゞきに檜扇の模樣を云なり別段に不及事なれど傳本にまかせて別段とするなり
(◉)むもん　無紋　(◎)からゑ　唐繪

【百四十三段】(ノ)神は、松尾、八幡、此國のみかどにておはしましけんこそいとめでたけれ、行幸などに、なぎの花のみこしに奉るなど、いとめでたし、大原野、賀茂はさらなり、稻荷、春日いとめでたくおぼえさせ給ふ、さほ殿などいふ名さへおかし、平野はいたつらなる屋のありしを、こゝはなにする所ぞととひしかば、みこしやどりといひしもめでたし、いがきに蔦などのおほくかゝりて、紅葉の色々有しも、秋にはあへずと貫之が歌、思ひ出られて、つく〴〵とひさしうたゝれたりしか、みこもりの神、いとおかし
此段は神々のいみじき事をしるされたり凡式内式外の神社おほき中に是等の神はやんごとなき神なれば勅使奉幣などもたへせず帝都防護の神なれば今の本文にも記されたるなるべし　神は是常段の題なり　松尾以下の神體鎮座等は後に註す
八幡この國のみかどゝは人皇十五代にあたらせ給ふ應神天皇を崇秘奉る故にいふなり　賀茂はさらなりとは就中賀茂の明神は殊更めでたうおはしますとなり　春日いとめでたくとは春日太明神は天孫補佐の神明にして藤氏擁護の祖廟なり天照太神高皇產靈尊の三種の神寶御附屬の時春日太明神へ

の勅命など尤難有目出度事共なり委は三部の本書に見えたり　平野とは攝津國なり今山城の平野は攝津國より遷宮有しと云々　いたつらなる屋とはあれたる拜殿やうの物あるとなりそれを離宮といひて祭禮の神輿をうつし奉る義成べし　いがき以下は少納言參詣の時の氣色を述らるゝなり

（ノ）神代口決云神者嘉牟嘉美也略云嘉美神慮如明鏡之照萬物不捨一法不受一塵也在天者神在萬物者靈在人眞心也萬物之靈人之心淸明則神也儒書云陽之精氣曰神陰之精氣云靈

（オ）舊事本紀云大山咋神此神者坐近淡海國比叡山亦坐葛野郡松尾　神名帳云山城國葛野郡松尾神是則大己貴命の御子也云々

（ク）諸社記云石淸水神靈次第之事本社依爲八幡第一應神天皇也第二神功皇后也父神仁天坐須程爾仲哀天皇第二多流邊介禮共神功皇后討三韓時坐胎中母神與利即位之賜故爾第二神功止須流也第三仲哀第四仁德天皇也云々此注兼右之註秘中之深秘也云々公事根源云人皇十六代の御門應神の御事也仲哀天皇の第四の皇子御母は神功皇后なり胎中天皇共又は譽田天皇とも名付奉る天下をしろしめす事四十一年百十一歲の寶壽をたもたせ給欽明天皇の御代に始て神と顯て筑紫の肥後國菱形池と云所に跡をたれ給ふ人皇十六代譽田八幡丸也と託宣ありき譽田は本の御名八幡は垂跡の號後は豐前國宇佐宮にしつまり給ひしかは云々又神託有て御出京の義ありきやがて彼寺に勸請申さるされ共勅使なとは猶宇佐にまいりき淸和の御時は大安寺のご僧行敎宇佐にまうてたりしに靈告有て今の男山石淸水にうつり住せ給ふしか有し後は行幸も奉幣も石淸水に有一代一度宇佐へも勅使を奉らる　又八幡と云御號の事は宇佐緣起云天皇打取三韓令歸吾國冬十二月被定置之御產所被造內裏同十四日辛卯被懸御手於彼槐枝之時王子御誕生此時自龍宮城獻御初衣其形八足白幡御襁褓八枚其長八尺等武內懷奉拜覲　筥崎緣起云昔白幡四赤幡四自天降于此故名八幡植松而爲標至今猶在なり（⦿）諸社記云行幸事圓融院天元二年三月廿七日始行幸儀中抄同之

（ヤ）諸社記云大原野垂迹同春日社仁壽元年辛未二月依太皇太后宮御祈山城國

葛野郡大原野爾宮柱廣知立春冬乃御祭始賜之又
時代及願主異說アリ今略ス（マ）諸社記云別雷神
社一座號上社御祖社二座號下座亦社氏說御祖
社稱中賀茂河合社稱下賀茂日本紀曰日向襲峯
天降坐神賀茂建角身命也申須後仁大和國葛木山峯爾
宿坐須其後山城國岡田賀茂爾移坐須在川名石川
瀬見小川建角身命之女子玉依比賣瀬見乃小川爾遊
遊志賜布時自川上一矢流下取テ置床邊多利之爾
玉依比賣懷胎產賜布御子乎別雷止申此神乃父乎不
知故爾七日七夜亦云神魂命樂乎調豆酒乎醞色豆我
父多流人爾奉乎指賜邊須由乎外祖建角身命止仰豆禮介流
爾我父波天爾有利止豆屋乃甍乎宇加乎天爾登利賜志與利
別雷神止波申也云々　建角身命之傳紀神系等神武
紀姓氏錄舊事紀并諸家記に詳也今略之又降臨の
時前驅なといみしき事侍れはさら也云歟（ケ）
神名帳稻荷神社三座下社大山祇女中社倉稻魂上土
祖神　卜定記云辰巳乃方仁當天倉稻魂乃垂迹阿利夫
此神和百穀於播玉故仁名奉神代乃昔與利此峯爾向玉母
不知只三峯仁顯玉之和人皇十三代元明天皇和銅四
年辛亥二月十一日仁垂迹之識仁諸人哀憐乃御心深久

蒼生作物和草乃片葉末天百乃災於禳玉山城國風土
記曰稱伊那利者秦中家忌寸等遠祖伊呂具秦公
積稻梁有富裕仍用餅爲的者化成白鳥飛翔
居山峯伊那利生遂爲社名至其苗裔悔先過
而抜社之木殖家禱祭之其木蘇者得福殖木枯者
不福（フ）春日四所第一殿武雷命第二殿齋主命第
三殿天兒屋根命第四殿姫神是即太玉命之女也其餘
三殿神系詳于紀傳故略　又神代卷に天兒屋根命
の日出度事共あり　（コ）拾芥云佐保殿奈良濱海公
家冬嗣大臣家　（エ）諸社記云山城國葛野郡平野祭
神四座第一今木神日本武尊源家氏神第二久度神
哀天皇平家氏神第三古開神仁德天皇高階氏神第四
比賣神云々　或說今木一座久度古開相殿一座比賣
神一座縣社天穗日命是則四姓遠祖與云々　（テ）瑞
籬（ア）古今集に貫之「千早振神のいかきに
はふ葛も秋にはあへす紅葉しにけり　（サ）籠守明
神をみこもりともいふと見へたりされは長能が歌
に「千早振天の岩くらをしひらき我にを語れみこ
もりの神　籠守の明神は　信州戸隱の神と同體也

百四十四段

崎は、（キ）から崎、（ユ）いかゞ崎、（メ）みほが崎、

此段は崎の名所を記されたり別義なし
(キ)唐崎カラサキ近江志賀郡　(ユ)いかゞ崎近江山城の堺宇治の邊にや　蜻蛉日記云石山に參りて歸とていかゞ崎山吹の崎など云所を見やりてあしの中よりこき給ふと云々　(メ)三保崎駿河

【百四十五段】屋は、まろ屋、あづま屋、時奏するいみじうおかし、いみじうさむきに、夜半ばかりなどに、ごほ〳〵とごほめき、くつすりきて、つる打ならして、なんけのなにがし、時うしみつ、ねよつなど、はるかなるこゑにいひて、時のくひさすをとなど、いみじうおかし、ねこゝのつ、丑八つなどこそ、さとびたる人はいへ、すべて、よるのみぞ、くゐはさしける　此段は四節に見るべし就中此第一節は屋の事を云次手に漏刻の事などいふなり云々又前の家は名所の家居御殿などをいふ、爰の屋は並て丸屋東屋などのさまをいふなり畢竟建連る字を家といひ一軒の居を屋といふと心得へし　時奏する以下は東屋に宿直する漏刻の者の事をいふなり是則東屋などの次手の文章なるべし　くつすりとは沓の地をする音なり　つるうちとは夜行の藏人靭負介

など弓箙を帯してありく義なり　うしみつとは丑の三刻なり　ねよつとは子の四刻なり　時のくゐとは壺水の箭なり　子九とは子の時は夜の九つなり　丑八とは丑の時は夜の八つなり
⊙漏刻司也職員弁職原などに見えたり　(シ)近衛司の夜行の事なり左近衛は亥の一刻より子の四刻迄右近衛は丑の一刻より寅の四刻までなり扨其刻に至りて履をすり弓弦を打鳴し何家の何某と名謁て丑三つ子四つなど奏する事侍るを近衛司の宿直と云なり前に北山抄を記し侍る委は北山西宮江記等に見ゆ　朝候日高冠額披夜行沙厚履聲忙朗詠
(ヱ)漏刻策畱冝香　鷄人曉唱聲驚明王之眠鳧鐘夜鳴響徹暗天之聽

日のうら〳〵とある晝つかた、又いたう夜ふけて、子の時などいふほどにも成ぬらんかし、おほとのごもりおはしましてにやなど、思ひまいらする程に、男どもめしたるこそ、いとめでたけれ、夜半ばかりに、御文の聲聞へたる、又いとめでたし　第二節是も丸屋東屋などの内にして有事のいみじきさまを述らるゝなり心は明なり　御文の聲とは讀書誦經な

どし給ふ聲なり

成信の中將は、(ヒ)入道兵部卿の宮の御子にて、かたちいとおかしげに、心ばえもいとおかしうおはす、伊與守かねすけ(モ)がむすめの、わすられて、いよへおやの下りしほど、いかにあはれなりけんとこそおぼへしか、曉にいくとて、今宵おはしまして、有明の月に歸給ひけん直衣すがたなどこそ、そのかみつねにゐて物語し、人のうへなど、わろきはわろしなどの給ひしに、物いみなど、くすしうするものゝ名を姓にてもたる人のあるか、(セ)こと人の子になりて、平などいへど、たゞそのもとのさうを、わかき人々ことくさにてわらふおりさまも、ことなる事なし、兵部とて、おかしきかたなどもかたきか、さすがに人などにさしまじり、心などのあるは、御前わたりも、みくるしなど仰らるれど、腹きたなくしりつぐる人もなし、(ス)一條院つくらせ給ひたる、一まの所には、つらき人をばさらによせず、(二)東のみかどにつとむかひて、いとおかしき小庇に、式部のおとゞもろともに、夜も晝もあれば、上もつねに物御覽しにいらせ給ふ、今宵はみな内にねんとて、南のひさしに、二人ふしぬる後に、いみじうたゝく人のあるに、うるさしなどいひあはせて、ねたる樣にてあれば、猶いみじうかしかましうよぶを、あれおこせそらねならんと仰られければ、此兵部きておこせど、いみじうねたるさまなれば、更におき給はざめりといひにいきたるが、やがてゐつきて物いふなり、しばしかとおもふに、夜いたうふけぬ、(四)權中將にこそあなれ、こは何事をかくゐてはいふぞとて、たゞみそかにわらふも、いかでかしらん、あかつきまでいひあかしてかへりぬ、此君いとゆゝしかりけり、更に寄おはせんに物いはじ、何事をさはいひあかすぞなどわらふに、やり戸をあけて女はいりぬ

第三節一條院のつくらせ給ふ一間所の事をいふとてそこにて成信中將の兵部に懸想し給ふ事をかけり　わすられてとは成信にわすられしとなり　曉にいくとてとは兼輔か女の曉に伊與へ旅立義なり　今宵おはしましてとは旅立前の夜成信のおはします義なり　物いみなど以下は成信の評判し給ふ人の事を云義なるべし凡是迄は成信のかたち心ばへなどをいひて其心にて人をえらひ色好み情ふかき故を述るなり　兵部とは女

房なり畢竟此事をいはんために先成信の兼輔か女をわすれ給ふ事又當時の人の善惡を品定し給ふ事などをかけり皆文章の序例也　さすがに以下は懸想の心ある女房をうへの嫌ひ給ふ由を云也　腹きたなくしりつぐる人もなしとは此兵部の事はしか〳〵人も交はず御前にも見苦しう思召見給ふ事もなきと云義なり　一ま所とは御休み所の心成べし

式部のおとゞもろともにとは式部のおとゞと云女房と清少納言ともろともに侍る成べし　二人ぶじぬるとは式部と少納言と二人なり　いみじうたゝく人とは成信の兵部がかたへ來りてたゝき給ふ義なり　うるさしなといひあはせてねたるとは式部少納言の心なり　あれおこせ以下はうへの聞つけ給ひて式部少納言などおこせと仰らるゝ也　此兵部きておこせどゝは式部少納言のもとへ來て起すと也　いひにいきたるかとはうへゝ申に行たると也　やがてゐつきてとは成信の忍ひ給ふもとへ居つきて物語するとなり　しはしかとおもふに以下は少納言の心なるべし　たゞみそかにわらふとは式部少納言の笑ひたる由也　歸りぬとは成信の歸給ふ義なり　此君ゆゝしかりけり以下は式部少納言などの詞なり　更に寄おはせんにとは成信はゆゝしきいろめける人なれば歸るさに式部少納言のねたる所へも立寄給はんに更に物いふましと式部少納言の相圖せらるゝ心也　何事をさはいひあかすとは成信、兵部との終夜の物かたりを式部少納言の不審せらるゝ心なり　女はいりぬとは成信の歸給ひつれば兵部も內へいりぬるとなり

（ヒ）成信の系圖前ニ有傳も前の十二卷ニあり其所に入道兵部卿の系圖も見へたり

（モ）藤氏系圖に

良門 勸修寺祖 ── 利基 從四上 右中將 ┬ 兼茂 ── 女子 兵衛
　　　　　　　　　　　　　　　　　　└ 兼輔 從三位中納言 號堤

此兼輔の事にや不審伊輿守の補任も見えず女子の系圖も侍らね共且く記レ之尙宜レ考レ之若本文のかねすけと有は兼茂の書誤にや但系圖に兵部を兼茂か女にしつるは書寫の誤にや今の本文にも兵部とあるは系圖に見えし兵衛が事なる歟抑又兼茂か女の兵部を兼輔が養子にせしにや旁以不レ詳然共此義便なきに侍らすよく可レ考合也（セ）さう姓也（ス）

一條院前に見えたり（二）式部のおとゝ　女房也ト和泉式部なとにや（　）權中將　成信也

つとめて例のひさしに物いふを聞ば、雨いみじう降おりにきたる人なんいとあはれなる、日比おぼつかなうつらき事ありとも、さでぬれてきたらんは、うき事もみな忘(ワスレ)ぬべしとは、などていふにかあらんを、よべも昨日(キノフ)の夜も、それかあなたの夜も、すべて此比うちしきり見ゆる人の、こよひもいみじからん雨にさはらできたらんは、猶一夜もへだてじとおもふなめりと、あはれ成べし、さて日比も見えず、おぼつかなくてすぐさん人の、かゝる折にしもこんをは、更に又心ざしのあるにはえせじとこそおぼゆれ、人の心々なる物なればにや、物見しり思ひしりたる女の心ありと見ゆるなどをは、かたらひて、あまたいく所もあり、もとよりのよすがなどもあれば、しげうもえこぬを、猶さるいみじかりし折に來りし事など、人にもかたりつがせ、身をほめられんとおもふ人のしわざにや、それも無下に心ざしなからんには、何しにかは、さもつくり事しても見えんとも思はん、されど、雨の降時は、たゞむつかしう、今朝まではれぐ〵しかりつる空ともおぼえず、にくゝていみじき細殿のめでたき所ともおぼへず、まいていとさらぬ家などは、とく降やみねかしとこそおぼゆれ、おかしき事、あはれなる事も、なきものを　第四節前の心をうけてかけり兵部は雨のふるに男の來るをいみじき事におもへるを少納言それを聞て評判せらるゝなり雨に來るのみいみじきといひがたし月雪の折に來たらんこそめでたかるべけれといふ心を末までに委く記されたり　物いふを聞ばとは兵部が物いふを少納言の聞ばとなり　あめいみじう以下は兵部の詞なり　なとていふにかあらんとは兵部が詞をきゝて少納言の不審に思はるゝ由なり　よべも以下は兵部のかたへ雨の降夜打續て男の來る事を云て不審を散するなり　さて日比も以下は少納言の趣を述て前の心を判する也　かゝる折とは雨の降折をいふなり　えせじとこそおぼゆれとは雨に來るのみ一向情深(ヒタスラナサケ)く志ある人と我はえ思ひはせじとなり思はぬとなり其故を次下に斷(コトハ)るなり　人の心々とは男の心々にてと云心なり　物見しり思ひしりたる女とは兵部がやうに物事思ひや

り雨の折來るを一入感心する義なり　かたらひてあまたいく所とは男の心區々(マチマチ)なれば物見しり思ひしりある女をかたらふて殊更に通ふ方も有へしと也　畢竟雨にくるを感ずる女房には態(ワザ)と降時に男が來るべしと云義なり　もとよりのよすがとははやう語らひ音信(オトツレ)などしたる方の事を云なり　猶さるいみじかりし折とは雨の降時などに行しはいみじうおもはれん爲成べしと了簡して判する義也　それも以下は人はほめられんとする男を助ていふ義なり　されと雨の降時以下はすべて雨のおもしろからざる事をいひて兵部の心を抑(オサヘ)て自(ミツカラ)の趣向(オモハク)月雪の折こそいみしけれといふ義なり則次下に斷る趣なり

月のあかきはしも、過にしかた、行すえまで、おもひのこさるゝ事なく、心もあくがれ、めでたくあはれなる事、たぐひなくおぼゆ、それにきたらん人は、十日廿日一月、もしは一とせも、まいて七八年ありて思ひ出たらんは、いみじうおかしとおぼへて、えあふまじう、わりなき所、人めつゝむべきやうありとも、かならず立ながらも、物いひてかへし、又とまるべからんをば、とゞめなどもしつべし、月のあかき見るはかり、物のとをく思ひやられて、過にしことのうかりしも、おかしとおぼへしも、たゞ今のやうにおぼゆる折やはある、(二)こまの、物語は名にばかり、おかしき事もなく、詞もふるめき、見所おほからねど、月に(三)むかしを思ひ出て、むしばみたる(四)かはぼりとり出て、(五)もとみし駒にといひて、たてるかとあはれなり、雨は心もなき物と思ひしみたればにや、片時降も、いとにくゝぞある、やんごとなきおもしろかるべき事、たうとくめでたかるべき事も、雨だにふれば、いふかひなく口おしきに、何かそのぬれてかこちきたらんが、めでたからん、(六)片野の少將もときたる、(七)おちくほの少將などは、おかし、それも、よべおとゝひの夜もありしかばこそ、おかしけれ、(八)あしあらひたるぞにくしきたなかりけん、さらでは、何か、風などのふく、あら〳〵しき夜きたるは、たのもしくてうれしうも有なん、雪こそいとめでたけれ、(九)わすれめやなどひとりごちて、忍びたることはさらなり、いとさあらぬ所も、なをしなどはさらにもいはず、かりきぬうへの衣、藏人の青色などの、いとひや

ゝかにぬれたらむは、いみじうおかしかるべし、ろうさうなりとも、雪にだにぬれなば、にくかるまじ、むかしの藏人は、夜など人のもとなどにも、たゞ靑色をきて、雨にぬれても、しぼりなどしけるとか、今は晝だにきざゞめり、(十)たゞろうさうをのみこそ打かつきためれ、(十一)ゑぶなどのきたるは、まいていみじうおかしかりし物を、かく聞て、雨にありかぬ人やはあらむずらん、月のいみじうあかき夜、紅ゐの紙のいみじうあかきに、たゞあらずとも書たるを、ひさしにさし入たる月にあてゝ見しこそ、おかしかりしか、雨ふらん折はさはありなんや、つねに文おこする人の、何かはいふにもかひなし、今はなどいひて、(十二)又の日をともせねば、さすがにあけたてば、さし出る文の見えぬこそ、さう〴〵しけれとおもひて、さてもきは〴〵しかりける心かなといひてくらしつ、又の日雨いたうふる、ひるまでをともせねば、むげに思ひたへにけりなどいひて、はしのかたにゐたる夕くれに、笠さしたるわらはのもてきたるを、つねよりもとくあけて見れば、水ます雨のとある、いとおほくよみ出したる歌どもよりはおかし、たゞ今朝はさしもみへざりつる空の、いとくろうかきくもりて、雪のかきくらしふるに、いと心ぼそく、見いだすほどもなくしろうつもりて、猶いみじう降に、隨身めきてほそやかにびゝしきおのこの、からかささして、そばのかたなる家のとより入て、ふみをさしいれたるこそおかしけれ、いとしろきみちのくに紙、しろきしきしのむすべたるうへにひきわたしけり、墨のふとこほりにければ、すそうすになりたるをあけたれば、いとほそくまきてむすびたる、まきめは、こま〴〵とくぼみたるに、墨のいとくろううすく、くだりせばにうらうへ書みだりたるを、打返しひさしう見るこそ、何事ならんと、よそにて見やりたるもおかしけれ、まいてうちほゝゑむ所は、いとゆかしけれど、とほうゐたるは、黑き文字などばかりぞさなゞめりと覺ゆるかし、ひたいかみながやかに、おもやうよき人の、くらき程に文をえて、火ともす程も心もとなきにや、火桶の火をはさみあげて、たど〳〵しげに見ゐたるこそおかしけれ

四節の內なり月雪の折の目出度よしをいひて前の雨をいふかひなしと書し詞を結ぶ義なり　月のあかき以下は少納言のこゝろ

を述らるゝなり　きたらん人とはかたらひ來人なり　思ひ出たらんとは久しう中絶して思ひ出來らんははつかしうおもはゆくてえあふまじう思ふ由也　たゞいまのやうにおぼゆる折やはあるとはたゞいま月のあかき夜かたらひ來る人に逢たる目出度さにむかしのうかりし事もうれしき事も遠く思ひ出られ侍ると云義なり　折やはあるとは月の時ならで又思ひ出らるゝ折やはある有まじきとなり　こまのゝ物語以下は月をいみじといひたる證例に書のせられたり　雨は心もなきとは是より又少納言の詞なり　何かそのぬれてかこち來らんとは前の兵部が心を判じとがむる義なり　片野少將以下は雨にありきし人の事をも證例にいふなり　それもとはおちくぼの少將雨にありきしかどもそれはたゞ少時の事なり兵部がいふごとくよべおとゝひ打つゞきふる雨にありくにては侍らぬと斷る義なり　あしあらひたるとはおちくぼの少將の雨にありきて足あらひたる義なるべし　さらでは何か以下是又風の吹折に來らんは雨よりまさらんと云心なり　雪こそいとめでたけれとは是より又雪の

折のいみじき事をいひていよ／＼雨のめでたからぬ由を斷るなり　なをし以下は雪降るに裝束打はへて來る人のめでたき由を云なり　むかしの藏人以下は又雨の方を助ていふなり　人やはあらんずらんとはむかしの藏人の事などを聞たる人が雨にありきぬらんと云義なり　月のいみじうあかき以下は少納言の趣月のめでたき事を論ぜらるゝなり　たゞあらずとは此いみじき月にたゞにはあらじと書る消息をおこせて興を促す義なり　つねに文おこする人以下は雨のさはりと成ておもふ人の消息も絶事有義をいへり心は明かなり　たゞ今朝以下は又雪のめでたき事をいふなり前には雨ふれはせうそこつかはす障となる事をいひ爰には雪の降時は障にもならず却て興を添ふとの心なり前の雨の折に消息有しとうら表を云義なり畢竟兵部が雨の義を抑ゆる心也　墨のふところほり以下は書面のやうを云なり　うちほゝゑむとは文を得たる人が文章を見てゑむとなり　いとゆかしけれどゝは傍より見たる人の心なり　とをうゐたるとは傍より見たる義なり　ひたいがみとは額髪なりこれも艶

なる姿にて文見ゐたるを傍より見たる義なり　凡第三節の一條院の一間所にいねし時兵部が方へ成信の忍び給ひし事よりいひもて來る文なり屋といふ題に屋の事はなきやうに侍れ共初に一間所の事をいひし次手にそのとりあはせにいふべき事なれば如レ此いひ述るなり和漢かやうの作例有事なり大底四節には兵部が雨をいみじうおもひたる義を抑て月雪のめでたき事を論せり第三節迄は題の屋といふ事を専一に述られたりよく心得て見るべし

（二）こまの丶物語の事は源氏の諸抄にもしれぬ由先達沙汰し給へり只古き物語にて誰の作共見へす其本も傳らざる也　（三）月にむかしを思ひ以下はこまの丶物語の詞なるへし　（四）蝙蝠　扇を云前ニあり　（五）後撰集に「夕されは道も見えねと古郷はもときし駒にまかせてそ行與義抄ニ云むかし齊の管仲大雪に道をまとへるに馬にまかせて行たる事也云々　（六）片野少將　季縄也系圖右近の內侍が所に見ゆ前にあり（七）おちくほの少將未考是等の事もこまの丶物語の類と見えたり　（八）あしあらひたる是も雨夜のにくき故を云也いつれも〳〵ふるき物語の心をうけて書ると見へ侍る　（九）古今よみ人しらす「紅の初花染の色ふかく思ひし心われ忘れめや　（十）伊勢物語にこれをかのあてなる男きゝていと心くるしかりけれはいときよらなるろうさうのうへのきぬを見いてゝやるとてトアり愚見抄にろうさうは緑衫なり六位の袍なりみどりの裝束なり　（イ）衛府　近衛司の早官なり府生の事前に見ゆ　（ロ）あけたては戶などあけ立やすらふ心なり心もとなくて消息やあるかと窺望む體なり

【百四十六段】（ハ）きら〳〵しき物、（ニ）大將の御さきをひたる、（ホ）孔雀經の御讀經、御修法は（ヘ）五大尊、（ト）藏人の式部のさうの（チ）白馬の日大路ねりたる、その日靭負介のすり衣やりたる、（リ）そんしやうわうの御修法、季の御讀經、（ヌ）熾盛光の御修法、（ル）神のいたうなる折に、雷陣こ（ヲ）そいみじうおそろしけれ、左右大將中少將などの、御かうしのつらにさふらひ給ふ、いとおかしげ也、はてぬる折、大將おほせて、のぼりをりとの給ふらん　此段は詞おほくて見にくければ八節に分て釋

し侍るなり　就中第一節には朝廷の公事に就てきら〳〵しき義を云なり　大將の御さきをひたるとは隨身舍人の警蹕を稱する義也徒然草に舍人など給はるきはゝゆゝしと書たるも是事なり　孔雀經以下は御讀經御修法などの事を云也　白馬の日おほちねりたるとは見物おほく侍て晴かましうきら〳〵しき事也　すりきぬやりたるとは是も殊更目に立てきら〳〵しきと也　そんしやうわう以下の三句も御法會の事也すべて御法會は聽衆群集してきら〳〵しき義也雷陣の事前十二卷に記し侍りぬ
（ハ）端正　キヨ〳〵シ日本紀　（ニ）大臣大將いつれも隨身をめしつれ御さきをはせらるゝなり大將は武官なれは殊更きら〳〵しきとなり　警蹕　サキナフ前驅　唱道　隱聲同さきをふとよむ　（ホ）孔雀明王尊の修法也此明王の尊容圓光相如孔雀舞羽故爲其名住慈悲相具四辟云々時函佛母大孔雀明王經三卷有天竺三藏不空の飜譯也佛說大孔雀王咒經三卷唐三藏法師義淨奉制譯孔雀王咒經一卷姚秦龜茲三藏鳩摩羅什譯同二卷梁扶市三藏僧伽婆羅譯大金色孔雀王咒經一卷失譯人名今附秦錄佛說大金色孔雀王經一卷同前經云若讀誦者若受持者若書寫者皆得安樂所求遂願如前廣說乃至自身及諸眷屬壽命百年矣略　（ヘ）五大尊亦金剛ト云　▲不動明王常住金剛慈護金剛　▲降三世明王吽迦羅金剛最勝金剛　▲軍荼利明王甘露金剛　▲大威德明王持明金剛　▲金剛夜叉明王調伏金剛　金剛頂經云由此眞言設作無間罪謗一切如來及方廣大乘止法一切惡作尙得成就一切如來印由金剛薩埵堅固體故現生速疾隨不得一切最勝成就乃至護得如來最勝悉地　疏曰一發言聲塵界悉感一指纔動佛亦不違斯思字義无災不除試觀圓輪无禾不與者也　（ト）藏人の式部のさうトハ藏人が式部のさうの役を務む成べし是則用代官故也江次第云外記申代官式部乃輔丞兵部輔丞代官給卒上宣誡　一省輔丞必用代官以催正員爲違例云々　（ケ）白馬の事前あり江次第に詳也　（◉）摺衣　スリキヌ　（リ）家函尊勝大明王經一卷西天譯經三藏傳法大師施護譯佛頂尊勝陀羅尼經一卷大唐京兆杜行顗譯同一卷罽賓國沙門佛陀婆利譯同一卷大唐三藏沙門義淨譯　經云阿難此尊

勝大明王是世間母一切衆生咸同其子阿難若善男子善女人得聞如是尊勝大明王能受持讀誦者是人无始已來所有罪業皆得除滅一切吉祥而能增長見者歡喜所作成就云々　經云爾時世尊告帝釋曰有陀羅尼名爲如來佛頂尊勝能淨一切惡趣生死苦惱上下略　（ヌ）槐函大威德金輪佛頂熾盛光如來消除一切災難陀羅尼經一卷施護譯佛說熾盛光大威德消災吉祥陀羅尼經唐特進試鴻臚卿三藏沙門大廣智不空奉詔譯經云我今說過去娑羅王如來所說熾盛光大威德陀羅尼除災難法若有國王及諸大臣所居之所及諸國界或彼五星陵逼羅睺彗孛妖星照臨所屬云々作諸障難者云々念此陀羅尼一切災難皆消滅不能爲害上下略　此尊法は山門四ケの大秘法眞言一宗の深密の法なり凡此佛の尊形は一身毛孔より光を散滿し給ふ委は行法記に見えたり　一字心咒經云食法日星宿鬼神諸毒等不能障碍上下略　（ル）雷カムナリ　前に見ゆ　（○）雷陣同前

近衞祿の御屛風こそおかしう覺ゆれ、かんなんきうの御ひやうふは、おぼしくぞ聞えたる、月次の御屛風もおかし　第二節公事次手に禁中御屛風の事を書り凡かやうの御調度をかざり立らるゝ時は其形勢端正しきといふ義なり

（ヲ）近衞祿の御屛トハ近衞司の官人の叙爵を繪かける御屛風なり大中少將以下帶武具さまをかける圖なれはきら〳〵しき也　（ワ）かんなんきうとは館娃宮也吳王夫差の西施を置給ひし宮也蘇州の硯石山にあり西施故に名付られたり吳國には美人を娃いへり其宮殿花麗にしてそこにて榮花ありし體を繪にかける御屛風なるへし云々　劉禹錫集云館娃宮在郡西南硯石山旁有採香徑云下吳王遣美人採香於此上蘇州圖經云響履廊吳王所作以楩柟木板藉地西子行則有聲　（カ）月次の御屛風とは十二月の公事の次第を繪にかける御屛風を云なり十二ケ月の公事の次第は拾芥抄年中行事の篇にあり其作法は延喜式西宮記同抄江次第北山抄等に詳也又略して公事根源にも書給へり事なかう侍れは漏しぬるのみ

方違なとして、夜ふかくさむき事、いとわりなく、おとがひなどもおちぬべきを、からうしてきつきて、（ヨ）火桶引よせたるに、火のおほきにて、露くろみたる

所もなくめでたきを、こまかなる、灰の中よりおこし出たるこそいみじう嬉しけれ、又物などいひて、火のきゆらんもしらずゐたるに、こと人のきて、炭いれておこすこそいとにくけれ、されどめぐりにおきて、中に火をあらせたるはよし、皆火を外さまにかきやり、すみをかさねおきたるいたゞきに、火どもをきたるが、いとむつかし　雪のいとたかう降たるを、例ならず御かうしまいらせて、すびつに火おこして、物語などして、あつまりさふらふに、少納言よ、香爐(ヨ)峯の雪は、いかならむと仰られければ、御かうしあけさせて、御簾高くまきあげたれば、わらはせ給ふ、人々も皆さる事はしり、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ、猶此宮の人には、さるべきなめりといふ　第三節初にはすびつに炭つく事をいひて末には雪の降りたるに香爐峯の古事を少納言に仰られしに優しう御返答申て興を催し、折の端正しう侍る義なり　きつきてとは方違の所へ來つきて也　人のきて炭いれておこすこそいとにくけれとは炭をつぎかけていとゞ滅なんとする火を惡くとりなをす心なり　すみどもかさねおきたる以下はおこりかぬる故をいふなり　いとむつかしとは心地よからぬと云義なり初に火桶の火のおほきなるを嬉しう心地よげに思ひたるうらをいふなり　あつまりさふらふとは宮の御方に少納言幷に女房達などのあつまりさふらはれたる義なり　少納言よ以下は宮の御詞なるべし　いかならんとは此雪の景色と香爐峯とは如何ならんと仰らるゝ義なるべし　御かうし以下は少納言その詩の心を以て御返答せられしさまなり　さる事以下は少納言謙退して書れたる義地の心なり　猶此宮の人以下も其時の人々云ひし詞なり

(圖)拾遺雜に「夏は扇冬は火桶に身をなしてつれなき人に寄もつかはや　(ヨ)白氏文集十六云　香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁五首云々日高睡足猶慵起小閣重衾不怕寒遺愛寺鐘欹枕聽香爐峯雪撥簾看匡廬便是逃名地司馬仍爲送老官心泰身寧是歸處故鄉何獨在長安　此詩は五首の内第四の詩なり朗詠には胸句計を入たり覺明註云白氏及暮年建寺於其傍雍州記曰望楚山有三磴道名香爐峯

(ヒ)陰陽師のもとなるわらはへこそ、いみじう物はしりたれ、祓(ソ)などしに出たれば、祭文などよむ事、人はなをこそ聞、そと立はしりて、しろき水いかけさせよともいはぬに、しありくさまの、例しり、いさゝか主に物いはせぬこそうらやましけれ、さらん人をかな、つかはむとこそおほゆれ　第四節前香爐峰の古詩をしるといふ次手に陰陽師のわらはか例の事しりてさかしけなる義を云なり則陰陽師の祭文をよみ祓を修するさまきら〳〵しきもの也　祓などしに出たればとは陰陽師が祓に行なりそのつれにわらはを伴ふ義也　そと立はしりとはわらはが立つゝゐて祓を修する助をする義なり　さらん人をかな以下は地なりさやうの賢き者をこそつかひたらめと也　前節の猶此宮の人にはさるべきなめりといひしに應する義なり

(レ)陰陽師前にあり　(ソ)祓並祭文の事も前に見えたり

三月はかり、物いみしに、かりそめなる人の家にいきたれば、木ともなどのはか〳〵しからぬ中に、柳といひて、例のやうに、なまめかしうはあらで、葉ひろう見えて、にくげなるを、あらぬ物なめりといへば、かゝるもありなどいふに「さかしらに柳のまゆのひろこりて、春のおもてをふする宿かな」とこそ見えしか　第五節前の陰陽師がわらはのさかしきにつゝゐて物いみに行し家主の柳の事を賢告るを少納言の歌にて返答せられし問答のさかしけなる躰をかけり是則時にとつてきら〳〵しき義也　葉ひろうてとは柳は緑の間かいみじきなり葉ひろうなればにくきとなり或又楊の事にや　あらぬ物なめりとは少納言の詞なりかゝるもありとは家主の詞也　歌は少納言の作也　さかしらとは色々の説侍れ共畢竟かしこげになどゝ云義なり　おもてをふするとは面伏也春の面目なき宿かなとなり柳の緑にてあらんこそ春めきて宿もおかしうおぼへめど如此ひろごりてにくげなれば柳のやうには侍らで春の矩摸もなき宿哉となり畢竟柳を尤めていふ心なるへし

(ヲ)其比又同じ物いみしに、さやうの所に出たるに、二日といふ晝つかた、いとつれ〳〵まさりて、只今もまいりぬべき程にしも、仰事のあれば、いとうれし

くて見る淺みとりの紙に、(ム)宰相の君、いとおかしく書給へり、「(ウ)いかにしてすぎにしかたを過しけん、くらしわづらふきのふけふかな、となん、わたくしには、けふしも千歳(ヰ)(チトセ)の心地するを、曉にはとくとあり、此君の、の給はんだにおかしかるべきを。まして仰事のさまには。をろかならぬ心地すれど、啓せん事とは、おぼへぬこそ「(ノ)雲のうへにくらしかねける春の日を、所からともなかめつるかな、わたくしには、今夜(ヨヒ)のほども、少將にやなり侍らんすらんとて、あかつきにまいりたれば、きのふの返し、くらしかねけるこそいとにくし、いみじうそ、しりきと仰らるゝ、いとわびしう、誠にさる事も清水にこもりたる比、日ぐらしのいみじうなくをあはれと聞に、わざと御使してのたまはせたりし、唐(カラ)の紙のあかみたるに、「(オ)山ちかき入あひの鐘の、こゑごとに、こふる心のかずはしるらん、ものを、こよなのながゐやと書せ給へる、紙などのなめげならぬも、とりわすれたるたぐひにて紫なる(ク)蓮花(ハチスノハナ)に書てまいらする　第六節前の歌物語の次手に宮より歌を給はりし事其御返しの歌などを記されたり是則みつからのうへの事なればきらく

しき心なり　其比とは前に三月ばかりと書し同時分也　さやうの所とは是も前をうけていふなりまいりぬべき心地とは宮の御方へ少納言の參らんとおもはるゝ心也　仰ごとゝは宮の仰事なり則少納言へ給はる御せうそこ也　いかにしてこの歌宮より給はる御歌なり心はあきらかなり清少納言まいらで御徒然に暮し給ふ趣なり　わたくしとは少納言自稱なり　けふしもちとせとはけふの日を待あかさんだに久しう千とせのやうにおぼゆるとなり少納言は如此おもふに御せうそこには明の曉にとく參れとあるは待どをにおぼゆると云義也　此君とは宰相の君なり明の曉に參れと宰相の君の丶給ばそれは世にあるべき事のやうにもおもふめれどうへの仰事なればかほど迄思召はおろかならず辱(カタジケナ)きとなり　けいせん事以下は御返歌の卑下也雲のうへに此歌少納言の宮へ奉られし返歌なり上句には宮の御歌の心をうけていふなり下の句には自の心を述るなりさしも目出度雲の上にだにも暮しわつらはせ給ふとある永日なれば我賤き里すまひは暮しかねぬるも所からなればいやまさり侍る

と云心成べし畢竟宮は少納言參らねば永日を暮しわつらはせ給ふ由なり少納言は又宮の御方へ參らで里に侍るは所からにて徒然に侍ると云趣なるべし　わたくし以下は少納言の詞なり待かぬる心なるべし　曉に參りたればとは宮の御方へ次の晨少納言の參られし事なり　きのふの返し以下は宮の御詞也　いみじうぞしりきとは宮の暮しわづらはせ給ふ故を少納言はようぞ知たるとなり　いとわひしとは少納言の心なりおしつけて中宮の暮しわつらはせ給ふと讀給しをよくぞしりたると尤給へばわびしう侍ると也　誠にさる事以下は日比宮の少納言を待給ひし事をいひて今の事を斷云義也　清水にこもりたる比とは清少納言のはやう清水寺に參籠せられし比也　わさと御使してとはうへよりわさと御使せうそこの御使を給はるとなり　山ちかき此御歌は中宮の少納言へ給りし御歌なり清水寺に籠りて入あひの聲を聞ば我こふる心の數々は鐘の數にておもひしれとなり入あひのあはれをふくめて便なふゆかしく思召御心成べし　ものを以下は文の御詞なりこふる心はおもひしるらん物を

と歌をうけたる詞なり　紙などの以下は少納言の清水寺にて紙もとりあへす御返事申されし由を述らるゝなり　書てまいらするとは御返しなり此御返し歌にや詞にや今の本文もらされたり凡誠にさる事といふより爰迄ははやう有し事を物忌の時の事を云證例に書載られたるなり是等の事共は清少納言のみづからのうへにはれ〴〵しき事なればきら〳〵しきと云段に載らるゝ成べし

(ラ)次下に千載集をしるし侍るなり時代考へし

(ム)前に宰相の君とあり菅原の輔正のむすめなり此故二たび系圖をしるさす　(ツ)中宮定子の御作也其由千載に見ゆ　(ヰ)「別ては昨日けふこそ歸つれ千歲を過る心地こそすれ　(ノ)千載集に一條院御時皇后宮に清少納言はしめて侍りける比三月はかりに二三日まかり出侍けるにかの宮よりつかはされて侍りける　皇后宮定子「いかにして過にし方を過しけん暮しわふてふ昨日けふかな　御返し　清少納言「雲のうへも暮しかねける春の日を所からとも詠つるかな　中宮定子の御歌本文には暮しわつらふとあり千載集には暮しわふてふとあ

り雨說なからしるし侍る　(×)拾遺二十哀傷部題しらす　讀人しらず「山寺の入相の鐘の聲ことにけふも暮ぬと聞そ悲しき　(◎)紫色の紙にてつくれる蓮の花ひらなり

十二月二十四日、宮の御佛名の半夜の御導師聞て、出る人は、夜なかはかりも過ぬらんかし、里へもいてもしは忍ひたる所へも、よのほどいつるにもあれ、あひのりたる道の程こそおかしけれ、日比降つる雪の、けさはやみて風などのいたう吹つれば、たるひのいみじうしたり、土なとこそむら〳〵くろきなれ、屋のうへは、たゞをしなべて白きに、あやしきしつの屋も雪にみなおもかくして、有明の月のくまなきにいみしうおかし、かねなどをしへぎたるやうなるに、水精のくきなどいはまほしきやうにてながくみじかく、ことさらにかけわたしたると見えて、いふにもあまりてめてたきに、下簾もかけぬ車の、簾をいと高くあけたれば、おくまでさし入たる月に、薄色紅梅白きなと、七八ばかりきたるうへに、こききぬのいとあざやかなるつやなど、月にはへておかしう見ゆる、かたはらに、えび染のかた紋の指貫しろききぬども、あまた、山吹紅などきこぼして、直衣のいと白きひもをときたれば、ぬぎたれられていみじうこぼれ出たり、指貫のかたつかたは、としきみのもとにふみ出されたるなど、道に人のあひたらば、おかしとみつべし、月影のはしたなさに、うしろざまへすべり入たるを、引よせあらはになされて、笑ふもおかし、りん〳〵として氷しけりといふ詩を、返々ずんじておはするは、いみじうおかしうて、夜一よもありかまほしきに、行所のちかくなるも口おし　第七節月の夜雪の朝ありくさまのきら〳〵しきさまをかけり　宮の御佛名とは宮の御方にて行ひ給ふ佛名懺悔也　出る人とは聽衆の人か半夜の勤を聞て退出する義なり　あひのりたるとは車に乘たる由なり　日比降つる雪とは佛名の次の晨の躰を云也　有明の月以下は是も佛名の廿日餘明方にある月を云なり　かねなどゝは氷に月のうつるを銀のやうにみゆるとたとへ云なり　水精のくきとは垂氷が水精の莖のごとくみゆると喩云なり　下簾もかけぬ車以下は佛名聽聞の人のありく躰を云なり　おくまでとは車の奥迄月影のさし

入となり　薄色以下は車の內にある人裝束月にはへて見ゆる義なり　かたはらにとは同車の人の事を云なり　こほれ出たりとは簾の外へ直衣がこほれいつるとなり　月影のはしたなさとは車の內へさし入てきら／＼しうみゆる故にはしたなきと云也　うしろざまへとは車の內にて月影のさゝぬ方へ退く心也　引よせとは車を人々のある所へ引よせしとなり　あらはにとは車の內をあらはに人に見えじとなり　ずんじてとは車の內にて此詩をうたひ給ふなるべし　いみじう以下は前にいひし事を少納言の現(マノアタリ)に見てあかす目出度おもはれし由なり是則みし事のきら／＼しき趣なり

(ヤ)御佛名の事前に委く見えたり　(マ)垂氷(タルヒ)　(ケ)濵(シタヽル)　(フ)押折(ヲシヘギ)　(コ)蓋(クキ)のやう成となり　(エ)下簾　出衣(ダシギヌ)の事なり　(テ)胡曹抄云薄色經(タテ)紫緯(ヌキ)白云々　(ア)えひ染前にあり　(サ)胡曹抄云花山吹表薄朽葉裏黃只云山吹　(キ)又云紅ハ紅梅ヨリ色コキナリ　(ユ)朗詠云秦甸之一千餘里凛々氷鋪漢家之三十六宮澄々粉飾織錦機中已辨相思字擣衣砧上俄添怨別之聲覺明

註凛々氷貌言一千里間月光似氷云々

宮つかへする人々の、いてあつまりて、君々の御事めで聞へ、宮の內外(ウチト)のはしの事共、かたみに語あはせたるを、をのが君々、その家あるじにて聞こそおかしけれ、(メ)いゑひろく清げにて、しんぞくはさらなり、(ミ)たゝうちかたらひなどする人々は、宮づかへ人かたつ方に(シ)すへてあらまほしけれ、さるべき折は、ひと所にあつまりゐて物語し、人のよみたる歌なにくれと語あはせ、人の文などもてくるもろともに見、返事かき、又むつましうくる人もあるは、清げにうちしつらひていれ、雨など降てえかへらぬもおかしうもてなし、まいらん折は、その事見いれておもはんさまにして、いだしたてなどせばや、よき人のおはします御ありさまなど、いとゆかしきぞ、けしからぬ心にやあらん　第八節宮女のましはりのきら／＼しかるへき事をいふなり　君々の御事とは主人の御ことなり　宮の內外のはしとは宮々の御內證外さまの事を互に語あふとなり　をのが君々とはその語あふ人ともの主君なり　家あるしにてとは其女房達を饗(モテナス)時の亭主(イヘアルジ)が彼女房達の物語するを聞し

義なり　いゑひろくとは家居などよき方のことにも通すべし一門の事をいふなり　しんぞくはさらなりとは一門親屬端正は殊更いふに及ばぬとなり　うちかたらひなどする人以下は親屬ならぬ宮仕人を傍にすへてまじはりかたらひたきとなり　さるべき折とはしかるべき折はとなり　ひと所に以下心あきらか也　まいらん折とは宮仕に參らん折なり　よき人以下は上つかたの端正ありさまを云て今の證例に引前の心を結ぶ義なり

(ヌ)いゑひろくとは家主の家居よきは供の者共噂いひ取沙汰しても家主くるしからしとなりあしきを評判せられ聞ゐたらんは心うかるへきとなり

(ミ)親族　(シ)すべて濁時は總て清む時は居てなり初の心は總聚義なり後の心は着座する義なり

【百四十七段】　みならひするもの、(ヱ)あくび、兒ども、なまけしからぬゑせもの　此段心あきらかなり題の心を得て味はふべし三句ながら別義なし

(ヱ)醫書呵欠者胃也多レ血多レ氣則必呵欠と云へり

【百四十八段】　うちとくまじきもの、あしと(ト)人にいはるゝ人、さるはよしとしられたるよりは、うらなくぞ見ゆる、(モ)舟の路、日のいとうらゝなるに、海の面のいみじうのどかに、淺緑の打たるを引わたしたる(サ)やうに見えて、いさゝかおそろしき氣色もなき、わかき女の袙はかまきたる、侍のものゝわかやかなるなどもろともに、櫓といふ物をして、歌をいみじううたひたるは、いとおかしうやんことなき人にも、みせ奉らまほしう思ひいくに、風いたうふき、海のおもてのたゝあれにあしうなるに、ものもおぼへず、とまるべき所に(ス)こぎつくるほど、舟に波のかけたるさまなどは、さばかりなごかりつる海とも見えずかし、おもへば舟に乘てありく人ばかりゆゝしきものこそなけれ、よろしき深さにてだに、さまはかなき物に乘てこぎ行べき物にぞあらぬや、まいて、そこひしらす、千尋(ニ)などあらんに、物をいとおほくつみ入たれば、水ぎはゝ、たゞ一尺ばかりだになきに、げすともの、いさゝかおそろしともおもひたらず、はしりありき、露あらくもせば、沈やせんとおもふに、大なる松の木なとの、二三尺ばかりにてまろな

るを、五六ほう〳〵どなげ入などするこそいみじけれ、屋形といふ物にぞおはす、(一)されどおくなるはいさゝかたのもし、はしにたてるものどもこそ、めくるゝ心地すれ、(二)はやをつけて、のどかにすげたる物のよはげさよ、かれが絶なば、何にかはならん、ふとおち入なんを、それだにいみじうふとくなどもあらず、我乗たるは、淸げにつくり、も(三)かうのすきかけ、つま戸格子あけなどして、されどひとしうおもげになどもあらねば、たゞ家のちいさきにてあり、こと舟見やるこそいみじけれ、遠はまことに篠の葉を(四)つくりて、打ちらしたるやうにぞいとよう似たる、とまりたる所にて、舟ごとに火ともしたるは又おかしうみゆ、はし舟とつけて、いみじうちいさきに乗てこぎありく、つとめてなどいとあはれなり、跡(五)の白波は誠にこそ消もてゆけ、よろしき人は、乗てありくまじき事とこそ、猶おほゆれ、陸地も又いとおそろしかなれど、されどそれは、いかにも〳〵地につきたれば、いとたのもしと思ふに、まいて、海郎のかづきいるは、うきわざなり、腰につきたるをの、絶ましなば、いかにせんとならん、男だにせましかばさでも有ぬべきを、女は猶おぼろけの(六)心ならじ、舟に男は乗て、歌なんど打うたひて、(七)拷繩を海にうけありく、いとあやうくうしろべたくはあらぬにや、海士ものぼらんとては、其繩をなんひく、取まとひくり入るさまぞ、ことはりなるや、舟のはたをおさへて、はなちたるいきなどこそ、誠にたゞ見る人だに(八)しほたるゝに、おとし入て(九)たゞよひありくおのこは、目もあやに淺まし、更に人の思ひかくべきわざにもあらぬ事にこそあめれ

此段七節に見るべしみな題のうちとけぬ心を云なり就中第一節人の意にうちとけられぬ事又は舟の上海士の業などにつゐて打とけぬ故をいふなり　うちとくまじきものとは當段の題なり心やすからぬ義なり。あしと人にいはるゝ人とは意わろき人には誰も〳〵打とけて心やすく思はぬとなり　よしとしられたるとは善人と世にしらるればいよ〳〵身持心遣ひを嗜て打とけられぬに一向あしき人としらるれば却て氣づかひなきとなり惡人の事を他の人が評判する義なり　舟の路以下は舟の上のうちとけられぬ事を云也　淺綠のうちたるとは淺綠色の衣の打たるを見

るごとく海の面が侍しとなり長閑なる氣色なり　わかき女以下は艶なるさまをいはんため也　風いたうふき以下は初の氣色の變ずるをいふなり是打とけぬ義なり　舟に乗て以下は前の假初に乘る遊興の舟だに心とけぬを渡海の世路はいとゆゝしと云義を述るなり心あきらか也　我乘たるとは少納言の乘られし舟なるべし　もかう以下は船屋形の體を云也　遠とは遠く隔て見ゆる舟の事也　陸地以下は陸地の事を比云て海上のいよ〳〵おそろしき故を云也　まいて以下は海上のおそろしき次手に海士の業を云也是皆心のうちとけぬ義なり　さでも有ぬべきとはさうても有べきとなり男の業にはさもあらんと也　女は猶おぼろけの心ならしとは女の心のうちとけできづかふ事少縁ならじとなり　うしろべたくとは男の心に也　とりまとひとは男の繩を搒引擧るさまなり　舟のはたをおさへてとは女が浮て舟のはたを抑て息を吐なり　しほたるゝとはあはれに泪を流すとなり　おとし入てとは女房を海におとし入て也　更に以下地の詞なり凡打とけられぬといふ心おもひあはすべし

（ヒ）うらなくは裏表なくといふ心なり裏表なう打とけられぬあしき人と云なり　（モ）兼好つれ〳〵に舟路のいぶせき事を書しも此心をうけてかゝれたると見えたりよくあぢはふべし　（セ）朗詠云翠帳紅閨萬事之禮法雖レ異舟中浪上一生之觀念是同又云家去ニ江河南北岸一心通ニ上下往來船一和琴緩調臨ニ潭月一唐櫓高推入ニ水烟一　（ス）元元集云丹後國風土記曰復至ニ竹野郡船木里奈具村一即謂ニ村人等一云此處我心奈具志古事平善者云ニ奈具志一云々などかりつると云詞は平善日和と云心なり　（一）字書云八尺曰レ尋　（二）櫓を推時に付る繩を早緒と云なり　（三）帽額の事前に見えたり　（四）今の世も小兒の戲に笹の葉にて船をつくり池なとに浮めて遊事侍る　（五）拾遺集に沙彌滿誓「世中を何にたとへん朝ほらけこき行舟の跡のしら波　（六）少縁　畢竟此の心はやすき心にはあらしと云義也　（七）搒繩とはたぐる繩と云訓なり海士のたくなはと讀るも此事なり　（八）大神宮儀式帳云亦種々乃事忌定給支人打乎奈津止云鳴乎鹽垂止云云々延㐂式齋宮下にも如レ此ありされは鳴事をしほ

たるゝと云也　(九)朗詠に　海人詠「白波のよするなきさに世をつくすあまの子なれは宿も定めす」(十)右衛門のぞうなるものゝ、ゑせなる男親をもたりて、人の見るにおもてぶせなりと、見ぐるしう思ひけるが、伊與の國よりのぼるとて、海におとし入てけるを、人の心うがり、淺ましがりけるほどに、七月十五日(イ)盆を奉るとて、いそぐを見給ひて、道命阿闍梨(ロ)「わたつ海に親をし入てこのぬしの、ぼんする見るぞあはれなりける、」とよみ給ひけるこそ、いとおかしけれ、又小野殿の、(ハ)母うへこそは、普門寺(ニ)といふ所に八講しける聞て、又の日、(ホ)小野殿に人々あつまりて、遊し文つくりけるに(ヘ)「薪こることはきのふにつきにしを、けふはをのゝえこゝ(ト)にくたさん、」と讀給ひけんこそ、めでたけれ、こゝもとは、うち聞になりぬるなめり、又業平が(チ)母のみこの、(リ)いよ〳〵見まくとの給へる、いみじうあはれにおかし、引あけて見たりけんこそおもひやらるれ　第二節海のことを云次手に右衛門尉がおやを海に沈めて其玉祭せんとすれども本より不孝第一の者なれば打とけられぬと云義なり　ゑせなる男親とは年よりて容醜心も僻義なり彼瞽叟のごとくにはあるまじけれど思ひ合すべし　のぼるとてとは右衛門尉がのぼるとて也　海におとし入とは親を海へ沈めしとなり　人の心うがり見聞ほどの人が心憂事に思ふとなり　ぼんを奉るとは右衛門が沈めし親の爲に盂蘭盆會を勤るとなり　道命阿闍梨とは後に傳あり此道命の右衛門が不孝の事を痛しくあはれみて讀給ふ歌を次手に記す成べし　わだつ海歌の心はあきらか也　又小野殿以下は右衛門がごときには引かへて目出度方の事を記して前の右衛門が輩を誡る心なるべし是皆褒貶の文章教誡の道なり　八講しけるを聞てとは母うへの御父源能有公の御爲に八講侍し成べし　又の日とは八講結願の翌日なり　人々とは御一家の人々寄會給ひて八講の竟宴ある義なり　薪こる此歌母上昭子の作なり薪こるとは八講に薪の行道といふ事ありそれをよむなり畢竟佛につかうまつる事なり　をのゝえとは薪と云につゐて斧の柄と云なり又小野をよみ入たり畢竟久しう侍るともあくまじきとの心なるべしすべて歌の心は八講を勤め尊靈につかうまつりしは既に昨日までに

て盡にしかばけふは其餘波をしたひていつまでもあらまほしきとの心なり是則父尊靈へ孝行ふかき義也　こゝもとゝは地の詞なり是等のめでたき事もかきつたへ置殘しなどもせねば只當時一座の話なり果て人の敎誡も徒事と成と云義なり　又業平以下は是も親子の昵く打とけたる事をいひて右衞門が輩を誡むる義なり　いよ／＼みまくとは伊豆内親王の業平をかなしみ給ふごとく父父たるの道を前の右衞門がしらぬと云義にて書り事は伊勢物語にあり　引あけてとは母うへよりの文を業平の引あけて見給ひけん心こそいかばかり忝なう侍りて千世もと祈給ひけめと云心なり是則業平の子子たるの道右衞門がやうに打とけられぬものにては侍らぬとなり題の打とけぬものとあるを心得見るべし

(十)右衞門のそう未考當時の受領補任など考て見るべし　(イ)佛說孟蘭盆經云佛告目連十方衆僧七月十五日僧自恣時當爲七世父母及現在父母厄難中者具飯百味五果汲灌盆器香油挺燭牀敷臥具盡世美以著盆中供養十方大德衆僧云々其有供養此等自恣僧者現世父母六親眷屬得出三塗之苦應時解脫衣食自然若父母現在者福樂百年若七生父母生天自在化生入天華光時佛勅十方衆僧皆先爲施主家呪願云々時目連比丘及大菩薩衆皆大歡喜目連悲啼聲釋然除滅是時目連母即於是日得脫一劫餓鬼之苦云々善男子若比丘比丘尼國王太子大臣宰相三公百官萬民庶人行慈孝者皆應先爲所生現在父母過去七代父母於七月十五日佛歡喜日僧自恣日以百味飯食安孟蘭盆中施十方自恣僧願使現在父母壽命百年無病無一切苦惱之患乃至七世父母離餓鬼苦生人天中福樂無極是佛弟子修孝順者應念々中常憶父母乃至七生父母年々七月十五日常以孝慈憶所生父母爲作孟蘭盆施佛及僧以報父母長養慈愛之恩若佛弟子應當奉持是法　公事根源云天平五年七月に始て孟蘭盆を大膳職にそなふと見えたり昔齊明天皇の御時飛鳥寺にして須彌山の形を作り孟蘭盆會をまうけられけるとかや

(ロ)藤原氏系圖云

●道綱 東宮傅右大將 大納言正二位
├兼經 中將正三位 右兵衛佐
├兼宗 從五下 武藏守
├兼綱 右少將
●├道命 天王寺別當阿闍梨歌人 母中宮少進近廣女
├齊祇 權少僧都
└女子 歌人

大鏡云道綱卿後には東宮傅になり給ひてふの殿とぞ申めりしいとあつしくて大將をもじし給ひてきその殿今の入道殿の北政所の御はらからをすみ奉り給ひてむまれ給へりし君宰相中將兼經道命阿闍梨きはめたる和歌の上手にておはしける云々作者部類にもみえたり

（ハ）源氏系圖云

●文德天皇──能有 仁壽三正賜源姓 號近院右大臣
●
●
●
●
●
●
●
●
●
└女子 貞信公室正五下昭 子母昭宣公女

右是則小野殿の御母なり又小野宮の御事は皆人のしれる事なれ共爰の便に略して記すなり　大鏡云太政大臣實頼是忠平の一男におはします小野宮の大臣と申き御母寛平法皇の御むすめ云々　（ニ）普門寺　六波羅のにや尚可尋之　（ホ）拾芥云小野宮大炊御門南烏丸西惟高親王家定頼傳領之清愼公傳領之初小野惟高親王の御所なる故後にも其所を小野宮といひ又實頼其處を傳領し給ふゆへ實頼をも小野宮と云なるべし　（ヘ）拾遺二十爲雅朝臣普門寺にて經供養し侍て又の日これかれ諸共に歸侍にけるつゐでにをのにまかりて侍けるに花のおもしろかりければ　春宮大夫道綱母「薪こる事は昨日につきにしをいさをのゝえはこゝにくたさん　今案拾遺と今本文と作者異なり兩說歟　（ト）奥義抄云法花經をは薪をとり水を汲て千年迄つかへて後え給ひたれば昨日此法をはさとり得てしかは薪こる事はつきにきとはよめるなりをのゝえくたすとは樵夫の仙宮に入たりし事なり久しき事によむ也されはこゝにてよをつくしてんといへり

（⊙）業平の傳三代實錄有前にみえたり　（チ）帝子

傳云

∴桓武天皇—●伊登内親王　三品母藤市子天皇晏駕之後爲尼

愚見抄云業平の母は桓武の皇女伊登内親王なり

（リ）伊勢物語云むかし男有けり身はいやしながら母なん宮なりけるその母なかをかといふ所にすみ給ひけり京にみやつかへしければまうつとしけれとしば〳〵えまうてずひとつ子にさへありければいとかなしうし給ひけりさるにしはすはかりにとみの事とて御ふみありおとろきてみれは歌なり「老ぬれはさらぬ別の有といへはいよ〳〵みまくほしき君かな」かの子いとう打なきてよめる「世の中にさらぬ別のなくもかな千代もといのる人の子のため」古今十七にも如此にしていれり但詞書少しつゝちかへり同じ心なり

おかしと思ひし歌などを、さうじに書て置たるに、げすのうちうたひたるこそいと心うけれ、よみにもよむかし、よろしき男を、下す女などのほめて、いみじうなつかしうこそおはすれといへば、やがておもひおとされぬべし、そしらるゝは中々よし、げすにほめらるゝは、女だにいとわろし、又ほむるまゝに、いひそこなひつるものをば▲　第三節下﨟の知ぬ事をしたり顔なるは打とけぬ心ぞと云義なり　心ふかき歌をうちうたひとは打誦したる義なり　かろ〳〵しく片言がちに誦したるは心うきと也　よみにもよむかしとはげすが和歌を唱よむも打とけずおもほゆる由なり皆他の人より打とけず思ふ義也　よろしき男以下はやんごとなき人を賤者がほむるは却て打とけずおもはるゝとなり　やがておもひおとされぬべしとはよろしき男が世の人々におもひおとされんとなり　そしらるゝとはげすには謗らるゝがよきとなり　又ほむるまゝにとはげすのほむるはてにをはのあはぬ事にて却てほめらるゝ人の害ぞとなり

（ヌ）大納言殿參り給ひて、文の事など奏し給ふに、例の夜いたう更ぬれば、御前なる人々、一二人つゝうせて、御屏風几帳のうしろなどに、みなかくれふしぬれば、只獨になりて、ねふたきをねんじてさふらふに、丑四つとそうするなり、明侍りぬなりと、獨ごつに、大納言殿、今更におほ殿ごもりおはしますよとて、ぬべき

ものにもおぼひたらぬを、うたて何しにさ申つらんとおもへ共、又人のあらばこそまぎれもふさめ、うへの、御前の柱に寄かゝらせ給ひて、少し眠せ給へるを、かれを見奉り給へ、今は明ぬるに、かくおほ殿ごもるべき事かはと、申させ給ふ、實など、宮も御前にも、わらひ申させ給ふも、しらせ給はぬ程に、小女が童の、鶏をとらへて持て、あす里へいかんといひて、かくし置たりけるが、いかゞしけん、犬の見つけてをひければ、廊のさきに、にげいきて、おそろしう鳴のゝしるに、皆人おきなどしぬなり、上も、うちおどろかせおはしまして、いかに有つるぞと尋させ給ふに、大納言殿の聲明王の眠を驚と云詩を、たかううち出し給へる、めでたうおかしきに、只一人ねふたかりつる目もいと大きになりぬ、いみじき折の事かなと、宮も興ぜさせ給ふ、猶かゝる事こそめでたけれ、又の日は、夜御殿にいらせ給ひぬ、夜半ばかりに、らうに出て人よべは、おるゝが、我をくらんとの給へば、裳唐衣は、屏風にうちかけていくに、月のいみじくあかくて、直衣のいとしろうみゆるに、指貫のなかからふみくゝまれて、袖をひかへて、たうるなどいひて、ゐておはするまゝに、遊子なを殘月に行と、ずんじ給へる、又いみじうめでたし、かやうのことめでまどふとて笑給へど、いかでか、なをおかしきものをば　第四節大納言殿の文談に夜深て上にも下にもねふたくて打とけぬ心なり或又前節におかしき歌よろしき男をげすなどのほむるはわろきよしをいひしつゝきなれば大納言殿の時に興ある詩を誦し給ふを少納言のいみじくおもひほめらるゝは還て大納言殿をそこなうと云心なるべし是則少納言の身を卑下しつゝ打とけしらぬ事をほむると云義にて當段の中に記されたるなるべし　まいり給ひてとは内へ參り給ひて也　奏し給ふとは御門中宮宮などおはします所にて奏し給ふとなり　只一人になりてとは少納言只一人の御宿直つかうまつるとなり　丑四つとは漏刻司が奏するなり　おほとのごもりとは大納言殿のおほとのごもる由を少納言の申さるゝ義なり　ぬべき物にもおぼひたらぬとは夜も早明ければ寝まじと少納言のいらへらるゝなり　うたて以下少納言の詞也　さ申つらんとは少納言の心なり明侍りぬと申

せし事をうたてしくおもふとなり　又人のあらば御前に宿直の女房達の侍らねはまぎれても寝られぬとなり　うへのとは御門の眠せ給ふ事をいふなり　かれを以下は大納言殿の宮へ啓し給ふ詞也　實とは宮の御返答なり　しらせ給はぬとは御門の眠給ひて中宮宮なとのわらひ給ふをしらせ給はぬとなり　小女が童とは小女が召つかふ下童なり　廊のさきとは御門の御座の邊階廊の底迄鷄がにげ來りしとなり　おそろしうとは物に追るゝ時は常の聲のやうに侍らで冷じきなり　うへもおどろかせ給ふとは柱に寄かゝらせ眠せ給ふが此鷄の聲にて驚悟させ給ふとなり　大納言殿以下は詩にて御答し給ふ由なり　たゞ一人とは少納言只一人御前にさふらはれしが今の詩を誦し給ふ事の折にかなひて目出度ければねふたき目も悟しとなり　又の日以下は翌日の事を次手に云なり　夜のおとゞにいらせ給ふとは今夜は早く御寢あると云義なり　廊に出て人よべばとは少納言の里へさがらんとて從者を召心なり　我おくらんとは大納言殿の少納言を送らんとの給ふなり　裳唐衣以下は少納言自の裝束の事を云なり　直衣以下は大納言の裝束の儀を云なり　袖をひかへてとは少納言が袖を大納言殿の引かへ給ひてなり足を指貫に絢て倒としたまふゆへ袖に取付引かへたまふとなり　めでまとふとは少納言の彼詩を妙美思ひめでまどはるゝとなり　笑給へどゝはかやうの事はなべて人のしれる事なればめでまどふべき事にもあらずとて大納言殿のわらひ給ふとなり是則少納言初々しき事をめでまどふ打とけぬと云題の心なり　いかでか以下は少納言の詞なり

(ヌ)此比の大納言殿と云は道隆卿なるべし淸少納言内すみの比兼家公攝政にて賴忠公關白道隆公正二位の大納言也其由傳記幷公卿補任等に見えたり或は伊周公成べし云々　(ル)中宮定子なり　(ヲ)御門をさす一條院也　(ワ)小女　前に見えたり

(カ)朗詠禁中部云漏刻策　都良香「鷄人曉唱聲驚明王之眠」鳧鐘夜鳴響徹暗天之聽」　覺明註云鷄人漏刻官名也鳧鐘鳧氏鑄鐘也漏刻策文鷄人漏刻官名也「朝候日高冠額抜夜行沙厚履聲忙」　註連句也菅○朝候者臣下朝王宮夜行內裡之行也　是等の

詩を誦し給ふと也今の本文に便ある故全文を具に記し侍る（ヨ）裳　○唐衣　○直衣　○指貫　以上裝束前に見えたり（レ）朗詠云曉賦　賈島「佳人盡飾二於晨粧一魏宮鐘動遊子猶行二於殘月一函谷鷄鳴覺明註云佳人美人也後宮三千女曉到飾二顏色一謂之晨粧二云々文選曰殘月晨明月也　▲第三節の末第四節の首此間に或本には多少の詞あり傳本には見えす今後に記して諸本の傳を殘し侍る見ん人の好む所に任すへきのみ其詞如レ左　左右の衛門のさうを判官といふなつけていみしうおそろしうかしこきものに思ひたるこそやかうし細殿なとにいりふしたるいとみくるしかし布のしろ袴几丁に打かけうへの衣のなかく所をきをわかねかけたるいとつきなし太刀のしりにひきかけなとしてたちさまよふはされとよしあを色をたゝつねにきたらはいかにおかしからんみしありあけそと誰いひけん▲　右如レ件異本有レ爰第四節と前第三節との間鱗形のしるしを附侍る見やすからしめん爲也心得へし

僧都の君の、御めのと、御匣殿とこそは聞へめ、そのつぼねにゐたれば、男ある板敷のもとちかく寄來て、（ソ）からひめを見さふらひつる、誰にかは、うれへ申さふらはんとてなんなきぬばかりのけしきにていふ、何事ぞととへば、あからさまに、物へまかりたりし間に、きたなく侍る所の、燒侍にしかば、日比はがうなのやうに、人の家どもに、尻をさし入てなんさふらふ、廄司のみま草つみける家よりなん出まうで來て侍る也、只垣を隔て侍れば、夜殿に寢て侍りけるわらはべも、ほど／＼燒侍ぬべくてなん、いさゝか物もとうで侍らすなどいひ出るを、御匣殿も聞給ひて、いみじうわらひ給ふ「みま草をもやすばかりの春の日に、よどのさへなど、のこらざらなんと書て、是をとらせ給へとて、なげやれば、笑ひのゝしりて、そこらおはする人の家のやけたりとぞ、いとおかしがりて給ふめりとて、とらせたれば何の御短策にか侍らん、物いくらばかりにかといへば、まづよめかしといふ、いかでか、かた目もあきつかうまつらではといへば、人にも見せよ、只めせば、とみにて上へ參るぞ、さばかり目出たき物を得ては、何をか思ふとて、皆わらひまどひてのぼりぬれば、人にや見せつらん里にいきて、いかに腹たゝんなど、御

前に參りてけいすれは、又笑ひさはぐ、御前にも、など、かく物くるをしからんと、笑はせ給ふ　第五節げす男が燒亡にあひて悲むに御匣殿より短策給りしかば祿など賜しるしにやと思ひ悦ひ持行しが人に見せたらましかばいか計相違に思ひ腹立らんとて女房の打とけず思はるゝと也或又男が燒亡にあひて心のうちとけぬ故に當題に記されたり
僧都の君とは隆圓なり前に見ゆ　そのつぼねとは御匣殿のつぼねなり　男とは道隆公の卑官なるべし　ある板敷は或板敷なり　からひめ以下は男の詞なり　何事ぞ以下は御匣殿の女房達の詞なり
あからさま以下は男が燒亡にあふたるやう語義なり假初に外へ行し間に私宅が燒たるとなり　家よりなん出まうでとは厩司の家より燒出たると也
只垣を隔てとは此男が家と厩司の所と只垣一重隔る程の近隣なれば寢屋の小童共も去かぬると也
みま草　此歌みくしけ殿の作なり心は明らか也
みま草をもやすとは厩司より火の出し事を云也
春の日とは燒し比を云ひて日に火をもたせたり
よどのとは草の縁語によど野といひて寢所の燒し事を云なり　是をとらせ給へとてなげやればとは御匣殿の少納言に仰らるゝ義なり　わらひのゝしり以下は少納言御匣殿の仰の趣を男に語り短策を傳へらるゝ義なり　何の御短策にか侍らんとは男が詞なり心得ぬ事なればあやしう思ふよしなり是打とけぬと云題の心也　物いくらばかりとは家より調度に至る迄幾何の物を燒て心憂中にかやうの御歌などゝは如何したる事にや打とけぬと云義なり男が詞なり　まづよめかしとは少納言の詞也
いかでか以下男が詞なり　人にみせよ以下は少納言の詞なり　めせばとは上の少納言など召ば參ると也　さばかりめでたきものとは少納言の男を僞寄しての給ふなり　のぼりぬれはとは少納言幷に女房達の上へ參らるゝ義なり　人にやみせつらんとは男か短策を人にや見せつらんとなり是心もとなう打とけぬ義なり　又わらひさはくとは御前にて女房達の聞て笑はるゝとなり
(ソ)僧都の君の御めのと御匣殿とこそは聞へめ
今案云此文勢を見て時代傳記等を考合するに不審甚だ多し僧都の乳母をみくしけ殿と名つけしやう

に文勢はみへ侍れ共大鏡幷系圖等には僧都の御兄弟に四の女君をみくしけ殿と申由みへたりされば僧都の御乳母とをみくしけ殿とは申べからす然らは今此本文の文勢いかゞ了簡するぞといふに答云僧都の君の御乳母何某と少納言と彼四姫君御匣殿と申御方の局に居侍らふ比と云文勢なるべし如此了簡して見侍れば本文の心も通し時代傳記等にも不ニ相違一して煩なかるべし一往に文勢計にて見ればは如レ右の難義侍るなり尤此義大切の事なり學者よく思べし重而系圖を考出す是を以て知べし

道隆──伊周
- ─大姫君定子
- ─淑景舎三條院ノ女御
- ─三御方冷泉ノ帥宮ノ妃
- ─四御方御匣殿
- ─女子小一條ノ后歟
- ─道頼山ノ井
- ─隆圓僧都ノ君

此外略レ之尙前にもみゆ

大鏡に云さて其宮（帥）のうへ（三ノ御方）のさしつきの四の御方は御くしけ殿と申し御かたちいとうつくしうて式部卿の宮の母代にておはしましゝもはやうせ給ひにき　又今案云大鏡に式部卿の宮の母代と侍れば本文ニ御乳母御くしけ殿と云は式部卿宮の御乳母御くしけ殿と云義歟此義によらば隆圓僧都の式部卿の御乳母みくしけ殿におはしましゝ比少納言もゐたればと云心也僧都の句を切べし式部卿の御乳母の御くしけ殿と申御局に僧都の君わたらせおはします時にゐ侍ればと云心なるべし此義も通じて面白く侍る也　（ツ）辛カラヒメ　辛目同　うきめと云と同じ心なり詩經にも辛苦とあり（ネ）寄居虫カウナ　海邊にある小貝也歌にもよめり　（ナ）馬寮の掌事は職員令延木式なとにみえたりこゝへ不レ及レ記但其所を考拾芥云馬寮左右宮城内談天門北掖　（ラ）取出トウデ　とう侍らす取出さぬと云義なり　（▲）物いくらはかりとは又云物給はると心得て問ふ心なり

男は、めおやなくなりて、親ひとりあるいみじくおもへとも心わづらはしき北のかた出きて後は、内にもいれたてず、さうぞくなどの事は、乳母又こうへの

人共なとしてせさす、(◎)西東の對の程に、(ム)まらふとにもいとおかしう、屛風障子のゑも、見所ありてすまひたり、殿上のまじらひのほと、口おしからず人々も思ひたり、上にも御氣色よくて、常にめしつゝ、御あそびなどのかたきには、思召たるに、なをつねに物なげかしう、世の中心にあはぬ心地して、すき〴〵しき心ぞかたはなるまで有べき、上達部の、またなきにもてかしづかれたる、いもうと一人あるばかりにぞ、思ふ事をもうちかたらひ、なぐさめ所なりける、(ロ)

▲第六節 繼母繼子の間の事をかけり是則題の打とけまじき物と云の心なり　心わづらはしき北のかたとは繼母の事を云なり内にも入たてずとは繼子を隔つる心なり　さうぞくとは繼子の衣類洗濯の事也　又こうへとははやう死せし母の召仕し人をたのみてせさするとなり　西東の對とは繼子が母屋にもえあらで西東の對を補理て部屋に住となり　まらふとにもいとおかしとは客人などを耻ぬ程にみゆるとなり　殿上のまじらひのほど口おしからずとは繼子の位なともおとらず外さまにては世の人の愛するとなり　うへにもとは御門にもなり　御あそひなとのかたきとは御遊びの折此人ならでは興ありがたく思召と也　なをつねに物なげかしうとは外ざまには如レ此いみじうおもはれし人なれど繼母に隔らるゝ故なを物なげかしう世の中心にあはで打とけぬと也　すき〴〵しき心ぞかたはなるまであるへきとは繼子の便すくなうおもひ故上の女房などに物事たのむさまは色好みの方に僻するやうにみゆるとなり　上達部のまたなきにもてかしづかれたるとは繼子の妹が或上達部の妻にて侍しが其所へ行てまゝしき中の憂さをはらし慰となり

(ム)或本まこうとゐなとトアリ不レ知ニ孰是一(◎)西東の對以下は後の妻を客人のことくもてなししつらひをく義をいへり云々　(ロ)或本なぐさめ所なりけると云つゞきに少し詞あり如レ左　▲定澄僧都にうちきなしすいせひ君にあこめなしといひけん人もおかしみしあわうと誰かいひけん　右如レ件あり又一本には此詞を少しちがへて四段のこと〲なる物と云所の奥に書り其詞も今此に記し侍る亦如レ左　定澄僧都にうちきなしすくせ君に

あこめなしといひけん人こそおかしけれ　右如件あり今の本に漏し侍る學者の心々に任て用ゆべし

或女房の、遠江守(トホタフミノカミ)の子なる人をかたらひてあるが、おなじ宮人を、忍びてかたらふと聞て、恨みければ、親などもかけてちかはせ給ふ、いみじきそらごとなり、夢にだにみずとなんいふは、いかゞいふべきといひしに「ちかへ君とを(八)たあふみの神かけて、むげに(三)濱名のはしみざりきや」、びんなき所にて人に物をいひけるに、むねのいみじうはしりけるを、など、かくはあるといひける、いらへに「あふ坂はむねのみつねにはしり(六)ゐの、みつくる人やあらしとおもへば」まことや、やがては下(クダ)るといひける人に(一)「おもひだにかゝらぬ山のさせもくさ、誰かいぶきの里とつけしぞ　第七節男の二心ありげなるを女が疑ふ事又便(タヨリ)あしき所にて思ふ人に逢たる事なとを書り是則題に云所の打とけまじき義也　子なる人をかたらひとは遠江守の子の何がしと云人と契を結びしとなり　おなじ宮人とは女房と同し宮仕人なり　忍ひてかたらふとは男が忍ひてかたらふとなり　恨みければとは前の女房が男の二心を恨みて也　親などもかけてちかはせ給ふとは男が女房に恨られて親を誓(チカヒ)に云となり　いみじきそら言以下男が異人に忍はぬ由を斷る趣なり　いかゞいふべきとは男が如レ此斷(コトハリ)をいひ諍陳(アラソヒチン)するに重ねていかゞいふべきと女房が少納言へ談合する義なり　ちかへ君此歌は女房の代作に少納言の讀れしなり　ちかへ君とは男になを神かけて誓ひ給へとなり　とをたあふみとは任國の神かけてとなり則親(オヤ)は遠江守なればそれをもたせていふなり　はま名の橋は遠江の國なり無下に見ぬ事を尤むるにはあらず正しく異人の方へ忍ひ通ふとみへたると云心也　濱名とは遠江守に緣語なり橋は通ふと云下心を含めたる意なりすべて歌の心は無下に虛事(ソラゴト)には侍らず忍ひ通ひ給ふと見ゆればなを神かけてちかひ給へしかあらではうちとけぬと云義なるべし　ひんなき所以下は異時(コトトキ)に又前の女が思ふ人に逢し事をいふ也　びんなき所とは便あしき所と云義なり　人にとは思ふ人になり前の女房の事を次手にいふ義なれば思ふ人は遠江守が子を指ていふ成べし　むねのいみじうはしけるとは女房が胸のさはぎたると也

などかくはあるとは男が怪む心なり　いらへにとは答なり男が怪み侍らば此歌をいひて答へよとて又少納言の讀て與へられしと也　逢坂とは思ふ人に逢事をもたせてひんなき所の人目しげき義を云也　はしりゐとは逢坂にあり胸のはしる事をいひて下の句のみつくると有詞の枕とする也　みつくるとははしり井の水といふ緣語を取て人の見つくる事をよめりすべて歌の心は便なう人目しげき所にて物語すれば見つくる人やあらんと思ひて胸さはきし侍るとなり是則世の憚を忍びて打とけぬ義なれば當題に記されたり　まことや以下も前の男と女房の事成べし　やかて下るとは件の男が遠江國へ下るに女房の餞別に送りし心也　おもひたに此歌も少納言の代作にて女房へ與へられしにや思ひだにかゝらぬ山とは我事は思ひかけ給はねばにや頓て下り給事も兼てしかくとも聞へさりしに誠や頓て下り給ふはとうらみたる義なり　させもくさとはうらみにくゆる心をふくめたり　たれかいぶきとは其方だに思ひかけていひ聞へ給はねば誰が告知すべきぞとなり畢竟歌の心は男の等閑にて懇に女房へいひきこへぬを恨むる心なり又云女房の我をもつれ下るべき事成にしからざるはおもひかけぬ故ぞと云心なり　誰とは思ひかけ給はゞつれんといひ給ふべきがさもなきに何人がいぶきの里と付けるぞとわか身をさせも草にもやしていぶきの里をかこつ心也　いぶきと云詞に言と云心をもたせたりさとゝ云詞に誘引と云心を含めたり　つげしぞげ文字濁るときは告義初の說なり淸む時は名付し義後の說なり　凡此歌幷詞書を味はふに等閑なる男を恨みたる心なればうちとくまじき物と云段に入られし成べし　右七節ながら當段の內なり何れもくく題のうちとくましき物と云心をわすれずみるべき事肝要なり

(ハ)或本ニとをつあふみとあり同し事なり　くをたあふみの神とは當國ノ神祇をあながちにどれとさすには非ずたゞ神といふに遠江守をもたせてよめる心成へし　(ニ)扶桑略記ニ云ク遠江ノ國濱名ノ橋長サ五十六丈廣サ二丈三尺高サ一丈六尺貞觀四年修造ス廿餘年既ニ以テ破壞ス勅ノ給ニ彼國正稅稻一萬二千六百三十束ヲ改メ作ル焉　濱名橋の初て掛りし事未レ考ヘ重て考記すべし

歌枕云水海より北の山きは也橋本より三里餘北なり古は濱名を海道にせられけり（ホ）催馬樂註ニ云走井は逢坂にある所也云々（ヘ）袖中抄云「かくとたにえやはいふきのさしも草さしもしらしなもゆる思ひを」顯昭云えやはいふきとはいふきの山によせてえやはいふきと讀る也此いふきの山美濃と近江のさかひなる山にはあらす下野國のいふきの山也能因坤元義に出也　考六帖云「あちきなやいふきの山のさしも草をのか思ひに身をこかしつゝ「契りけん心からこそさしま草さしも思はぬことにやはあらぬ「下野やしめつの原のさしま草をのか思ひに身をややくらん　奥義抄云いふきのたけは常に火のもゆれはかくよむなり云々　和語抄云「なをさりにいふきの山のさしも草さしも思はぬ事にやはあらぬ」六帖にありいふきの山は下野に有此山にさしも草おほく生たりさしも草とは差蒿又云さしも草とはよもぎを云又よもきに似たる草とも云々　能因歌枕云さしも草とは屋の軒におふる草也又云かきの上の草を云　綺語抄云さしも草は菅を云今案さしも草はとかく申たれとも慥ニ無ニ所見ニ和名には黃連をかくま草と讀たるに綺語抄にはよもきをかくも草と云り能因歌枕に雨のふりたるをかくも草といふと云り大に心得ぬ事也　以上袖中抄の肝要披書如レ此　丹山御說に伊吹山は近江美濃兩國の名所也さしも草は此山によみならはせりさせもといふも同し草也蓬にあらすと云說あれ共蓬に用與云々いふきもえいひがたきとの義也今案木居云右は何れも實方の歌の注なり袖中抄の義は實方の歌のいふきを下野の由沙汰せられたり丹山の御說には近江の伊吹なる由注釋し給へりされは實方の歌いふきは下野近江兩說成へし今本文のいふきは近江の伊吹をよめるにや遠江へ下る人におくりし歌なれは近江の伊吹山道すからなれは其緣したしく侍るか又いまにおゐて江州の伊吹山に蓬の類おほく生出る也　八雲御抄云蓬はさしも草と云非レ蓬似ニ蓬草一ともいへり　定家卿假名遣云敢やは伊吹蒿草とあり

清少納言枕草紙抄卷十五

百四十九段 女のうはぎは、(イ)うす色、(ロ)ゑび染、(ハ)もへぎ、さくら、(ニ)紅梅、(ホ)すべて、薄色の類 此段の題に女のうはぎはといひし心をうけて是より以下の四五段は女房の裝束のうへを云なりうはきとは上衣なり うす色以下は前に見えたりすへて薄色のるいとは花車なるかたを賞玩する心成べし

(イ)胡曹抄云薄色經紫緯白云々 (ロ)同云蒲萄染表蘇芳裏花田云々 又云經赤緯紫歟云々 (ハ)同云萌木濃赤香云々 又云薄萌木 (ニ)同云櫻表白裏赤花冬春云々 (ホ)同云紅梅十一月至二十二月一蕾紅梅表紅梅裏蘇芳裏增紅梅裏紅 右の染色織糸等前にも注し侍る

百五十段 からきぬは、(ヘ)あか色、(ト)ふぢ、夏はふたあひ、秋は(チ)かれ野 此段も女房の裝束をいへりから衣の事は前にも出侍れ共こゝには唐衣の色を云なり前とは意こと也 あか色以下の色あひも前段のごとく花車に美麗なる方を用ゆる心歟

(ヘ)同曹抄云赤色經紫緯赤云々(ト)同云藤表薄紫裏青藤原同レ之也三四月云々 (チ)同云枯野云々木屑云表黃裏薄青或は白も有り表は必黃也

百五十一段 もは、(リ)おほうみ、(ヌ)しひら 此段女房の裳に用ゆる織物をしらせたり裳は唐衣の時必す服するなり

(リ)おほうみ うは裳なり水波のことく成織紋の有物也 (ヌ)しひら うは裳也是も大海のやう成織物也 延喜式褶襞レ袴之衣也匂書袴褶騎服也

百五十二段 (ル)かざみは、(ヲ)春はつゝし、(ワ)さくら、夏は(ヨ)青朽葉、くちば 此段汗衫の春夏に隨ひて色の差別有を云なり

(ル)汗衫カザミ前ニ見ゆ (ヲ)つゝし 同前 (ワ)櫻 同前 (カ)胡曹抄云青朽葉表青丹黑裏青

(ヨ)朽葉クチバ加レ常

百五十三段 おりものは、(タ)むらさき、(レ)しろき、(ソ)もへぎにかしはおりたる、(ツ)紅梅もよけれとも、なを見ざめこよなし 此段も同心也おりものとは唐織の類也もへきにかしはとは模樣を云也其外は色あひを云也

(タ)織物とは紋を織付る類を云なり (レ)むらさき しろきとは地の色のよきを云なり (ソ)もへ

きに柏葉とは地の色と織紋とを云なり　(ツ)紅梅も地の色を云なり

百五十四段 綾の紋は、葵、かたばみ、あられぢ、夏うすもの、かたつかたのゆだけきたる人こそにくけれど、あまたかさねきたれば、ひかれてきにくし、綿などあつきは、むねなどもきれていと見ぐるし、まぜてきるべきものにはあらず、猶むかしより、さまよくきたるこそよけれ、左右のゆだけなるはよし、それも猶女房の裝束にては、ところをかめり、おのこのあまたかさぬるも、かたはかまおもくぞあらんかし、きよらなるさうぞくの、織物うすものなど、今はみなさこそあめれ、今やうに又さまよき人のたまはん、いとびんなき物ぞかし、かたちよき公達の彈正弼にておはするいとみぐるし、宮中將などの、口おしかりし哉　此段も前のつゞきなれば織物などの紋を云也　あふひ葵也　かたばみ鳩酢草なり　あられぢとは霰地　夏うすもの以下の詞は上來女のうはきはと云迄の六段にかゝる詞なりすべて裝束の着やうをかけり　かたつかたのゆだけきたるとは暑氣の頃肩を脱義なり　あまたかさねとは上古はしからされとも中古にはあまた重ねたる時は片肩脱たれなどもしたる故にやにくけれどあまたかさねきたればひかれてきにくしと書るなり　綿などもあつきとは是は冬の衣を接へ着たるを云なり　むねなどもきれてとは衣紋の亂るゝ義なり　まぜてとは夏冬の衣を取まじへ用る義なり夏冬の衣は絹の織やう染色など分別有事なり　猶むかしよりさまよくとは夏冬の衣を分別し常晴の時に相應するやうに着用せよと云心なり　左右のゆだけなるはよしとは脱たれず左右の行揃ひたるはよきとなり　それもなをとはむかしの左右揃へ着たるさまもよけれとも猶又今時女房の脱垂る事も有は所に依へきと云義なり　をりめりとは於レ所異なりと云義なり　おのこ以下は女房のみならす男もむかしと今やうと異なる由を云なり　今はみなさこそあめれとは夏冬の折織物薄物の衣の差別もなく重ね着るとなり　今やうに又さまよき人のたまはんとは公達宮なとの今やうの衣を服し給はんは便なきと也、彈正弼にておはするいとみくるしとは下

臈は目にたゝぬと彈正弼は式部卿の宮の御子にておはしませは古風をわすれ今やうの体ならんは便なう口惜きとなり　右是迄裝束の噂なれは別に段段を立るに及ばね共傳本の題に任て六段ながら別々に記し侍りぬ
(ネ)綾の紋とは織物の次手に綾の地紋を云なり
(ナ)葵アフヒ　鳩酢草カタハミ　地紋によきとなり
(ラ)霰地アラレチ　是も地紋なり地紋の上に織付る紋を浮紋と云也葵かたはみは浮紋と云義もあり
(ム)夏うすもの　是より以下の詞は裝束の着樣を云なり上來六段を摠る心成べし　(ウ)片袴カタハカマ　行基の歌とて「猛福太か修行に出し藤袴我そぬひしか其かた袴　裝束には上に絹のはかま下に布の袴二重着る故に片袴と云云々　又裝束の袴紐一筋にて後前つらぬき傍にて結ぶ故傍袴と云兩説なり　(ヰ)勘物云源頼定一品式部卿爲平親王ノ二男母ハ左大臣高明公女長德四年十月十五日任ニ右中將ニ元彈正大弼
源氏家譜ニ云ク

村上天皇—冷泉院 母師輔女
　—致平親王
　—爲平親王 一品式部卿母同冷泉或高明女
　　—憲定
　　—頼定
　—具平親王

公卿補任ニ云ク源頼定一品式部卿爲平親王ノ二男母ハ左大臣源高明公女　永祚二年正月七日ニ從四位下天曆年中賜ㇾ姓列ㇾ臣正曆三年八月廿八日彈正大弼同四年十一月十五日昇殿長德四年十月廿二日ニ右中將長保元年正月三十日ニ備前守同三年正月廿四日ニ從四位上八月廿五日左中將同六年正月廿四日大和權守寬和年六月十九日ニ藏人頭云々　(ノ)宮中將とは爲平親王の御子なる故宮の中將と云なり

百五十五段　やまひは、(シ)むねのけ、(セ)あしのけ、只そこはかとなく物くはぬ、十八九ばかりの人の、髮いとうるはしくて長ばかりすそふさやかなるが、いとよくこへて、いみじう色しろう、顏あひぎやうつきよしとみゆるか、はをいみじくやみまどひて、額髮もしとゝになきぬらし、髮の亂れかゝるもしらず、面あかくておさへゐたるこそおかしけれ、八月ばかり、白きひとへ、なよらかなるはかまよきほどに

て、紫苑のきぬのいとあざやかなるを引かけて、むねいみじうやめば、友だちの女房達など、かはる〴〵きつゝ、いといとおしきわざかな、例もかくやなやみ給ふなど、事なしびに問ふ人もあり、心がけたる人は、誠にいみじと思ひなげき、人しれぬ中などは、まして人目おもひて、よるにもちかくもえよらず、思ひ歎きたるこそおかしけれ、いとうるはしくながき髪をひきゆひて、物つくとて、おきあがりたるけしきも、いと心ぐるしくらうたげなり、上にも聞しめして、御どきやうの僧の聲よき給はせたれば、とふらひ人共も、あまた見來て、經聞などするも、かくれなきに、目をくばりつゝ讀ゐたるこそ、つみやうらんとおぼゆれ　此段は病の品をいへり凡病はいづれを別て書べきにはあらねど就中是等の病は女の身の上にくるしき心にて書る成べし　長ばかりとは身の長ほど長き義なり　あひぎやうつきとは艶なる女房の心なり西施が事などを思ひやるべし　八月以下は胸をやむ女房の体を云なり　いといとおしき以下は友達の女房の詞なり　事なしびにとは大やうに問ふ心なり　心がけたる人とは念比なる友達なり　人しれぬ中とは契る中の事なり　よるにもえよらずとは病人の傍へ寄も人目を遠慮するとなり　物つく以下は物のけの煩を云なり　上にも聞しめしとは官女などの煩なれば上にも聞しめして護法の法師を給ふとなり　とふらひ人とは女房の訪ひ給ふとなり　かくれなきとは隱家もなくはれがましきとなり　目をくばりとは上﨟女房のかたへ法師共が目をやる心なり　讀ゐたるとは祈禱の經を讀なり

(ク)胸氣ムネノケ　心痛也　(ヤ)脚氣ミタリカクヒヤウト云　うつほ物語に源中納言嵯峨に參りてみたりかくひやういたはり侍りてと云しも此事也　(マ)いせ物語にかさも取あへてしとゝにぬれて云々　闕疑抄云しとゝはひた〳〵とぬるゝ也　實澄云しとゝ云詞の始めは萬葉の歌に「秋霧にしとゝにぬれてよふこ鳥みふねの山を鳴わたる見ゆ　(ケ)胡曹抄云紫苑表青薄色裏青　徹正記說云面紫裏蘇芳

百五十六段　いひにくきもの、人のせうそこのながき、よき人の仰ごとのおほかるを、つゐでのまゝに、はじめよりおくまでいひにくし、返事又申にくし、はづかしき人の、物おこせたる返事、おとなになり

たる子の、思はずなる事聞つけたる前にてはいといひにくし、(一)四位五位は冬、六位は夏、とのゐすがたなとも、しなこそ、男も女もあらまほしき事なめれ、家の君にて有にも、誰かはよしあしを定むる、それだに、物見しりたるつかひ人行て、をのづからいふべかめり、ましてまじらひする人は、いとこよなし、猫の土におりたるやうにて、人のかほにとりつきて、よしと見ゆる所は、日ごとにみれどあなおかしと見ゆる、繪などはあまた度見つれば、目もたゝずかし、近く立る屏風の繪などは、いとめでたけれど、見もやらず、人のかたちはおかしうこそあれ、にくけなるてうとの中にも、一つつゝよき所のつねにまもらるゝ、にくきも、さこそはあらめとまもらるゝこそわひしけれ　此段六節に見ゆべし就中第一節にはせうそこの請答のいひにくき事親子の中にいひにくき異見など有事或は人の差降又は姿貌などに就ていひにくき義を書り　よき人とは貴人などを云也　おとなになりたる子とは成長せし子なり　おもはずなる事とは好色の道などに荒む意なり　まへにてはいといひにくしとは子の前にて對面にはいひにくしとなり　四位五位以下は人の位階差降に就て云なり四位五位は冬とは四位五位の裝束の色は冬の氣に應ずると也　六位は夏とは六位の緑色は夏の頃相應すると也如レ此相應の裝束の宿直すがたの時はよし是に引ちかへ四五位は夏六位は冬など宿直したるはあしゝとなりされどもそれをあしゝ共いひにくし男も女もたゞその階位こそ大切にあらまほしき事なれと云義成べし畢竟位階を大切にすれば儀の折にあはぬをあしきとはいひがたきとなり　家の君以下は顔躰に就ていひにくき義をかけり　家の君とは人の妻の事なり　誰かはよしあしとは人の妻は外へ見へぬものなれば誰人か貌儀の好惡を定めいはんぞとなり　それだにとは家の君さへなり　つかひ人とは召仕人なり　をのつからいふべかめりとは家君の好惡を噂するとなり是則いひにくき事なれとも必す人ごとに云ならはすとなり　まじらひする人とは宮仕をして世に接はる女房などなりかやうの世に接らふ人は猶々人に噂せらるれ共是非なきとなり　ねこの土におりたる以下は人の見苦敷事を譬云なり猫は化裝な

どいふ事をするとはいへ共手足に土を付けありくごとく人の顔躰にも好所悪所侍れ共さすがいひにくき事なれば日ごとにまもり居る迄ぞとなり　ゑなどとは又重ねて譬を云なり繪などはめでたう書ても又見苦書(ミグルシウカキ)てもあまり目にたゝぬとなり　人のかたちはおかしうこそあれとは繪などとはちがひて殊更目にたつと云心なり　にくげなる以下も又調度にたとへ云也　或又喩にあらずたゞ調度の事を云と見ても可なり一つつゝよき所の常にまもらるゝとは一曲(ヒトフシ)の愛らしき所あれは常に目につき侍るとなり　にくきもさこそはあらめとは悪調度(アシキテウド)なれ共打もやられでつかふはさこそ見にくしと主も思ふらめど傍よりはあしく共いひにくしとなり
(フ)次第(ツヰテ)　(コ)令諸王禮服下云二位以下五位以上並淺紫衣又諸臣禮服下云三位以上淺紫衣四位深緋衣五位淺緋衣六位深緑衣　今案上古の法は如斯なれ共中古以來近代は三位以上紫或は黒を用ゆ四位は黒五位は赤六位青なりいつれも夏はひとへにし冬は裏ありされは今の本文に四位五位は冬と書るは黒赤の裏ある衣が冬の時分に相應するとなり黒は則ち冬の色なり赤は冬あたゝかに見えて相應すると云心成へし又六位の緑色のひとへなるはすゞしげに侍れは夏のとのゐすかたといへる條勿論歟予併案如レ此猶後學の深旨を待のみ

(ニ)工匠(タクミ)(コ)の物くうこそ、いとあやしけれ、しんでんをたてゝ、東の對(ヒンガシタイ)(テ)たちたる屋をつくるとて、工匠(タクミ)どもゐなみて、物くふを、東おもてに出ゐて見れば、まづ持來(モテク)るやをそきと、しる物とりてみなのみて、かはらけはついすへつべきに、あはせをみなくゐつれば、(ア)おものはふようなめりと見るほどに、(サ)やがてこそう(キ)せにしか、三四人居(ミタリヨタリ)たりしもの、みなさせしかば、たくみのさるなめりとおもふなり、
事どもや　第二節當時(ソノカミ)少納言の見し事に就ていひにくき義を記されたり是即ち定りて云にくき事にはあらねど折節少納言の意にいひにくかりし故當段に載せられし成べし　しんでんをたてゝとは寢殿をたつるとて東の對の屋の普請(フシン)の時にと云心なり　屋をつくるとてとは匠か業を勤るとて也　出ゐて見ればとは折節少納言の出居(イツク)て見られしとなり　まづ持來るや以下は工匠が急き騒(サワヒ)て無二正體一

物くふさまを云なり　持來る(モテク)とは食物なり　しる物とは汁の類なり或汁器(ハシルノウツハ)なり飯丼に肴菜(カウサイ)も揃(ソロ)へすへぬ間に取亂れくふ野卑なるさまを云なり　かはらけはつゐすへつべきにとは飯器(ハンキ)汁器(シラキ)などの土器(カハラケ)を膳にすゆる程の間は少時(シハラク)の事なるをそれを待得ずして無(ク)二正體一くふとなり　あはせをみなくゐつとは取あはせてくふべきを打亂(ウチミダシ)てくひたる心なり　やがてこそうせにしかとはくひ過るとそのまゝ我さきにと退散せしとなり　たくみのさるなめりとは一人のみならず三四人有し工匠がみなさやうにせしかばさては工匠の風俗(ナラハシ)ぞと思ふとなり　あなもたひなの事とは少納言の不便に思はるゝ心なり正體なやと云心なり是即物くふさまの淺ましきを見て不便(フビン)に思ひ其禮儀をもしらせたく侍れ共いひ甲斐なき者なればいひにくきと云心成べし又云いひしらせたき事ながら女の身としてはいひにくきとなり此趣なる故當段いひにくきと云次手(ツイテ)に書載らるゝ成べし
(コ)内匠頭にはあらす其被官のいやしき者を云なり　(エ)寢殿(シンデン)　前に見ゆ　或は新殿云々

(テ)東對(ヒンカシノタイ)　對屋東西にあり前に註し侍る　(ア)御膳(オモノ)　こゝにては膳の事なり常におものと云は饌味調ふるを云なり　(サ)不用(フヨウ)　俗にいらぬ物なと云心なり　(キ)退散(ウセニシ)　うつほ物語十四云しもの御あはせなともて參れりとあり皆食物の事を云へり

物語もせよ、むかし物語もせよ、さかしらにいらへ打して、こと人と物いひ、まぎらはす人、いとにくし、或所に、中の君とかやいひける人のもとに、公達にはあらねども、其心いたくすきたるものにいはれ、心ばせなどある人の、九月ばかりにいきて、有明の月のいみじうてりて、おもしろき餘波(ナゴリ)は、思ひ出られんと、ことの葉をつくしていへるに、今はいぬらんと、遠く見送るほどに、えいはせえんずるほどなり、出るやうに見せて立歸、立蔀(タテシトミ)あひたる、かけのかたにそひたちて、(ニ)なを行やらぬやうも、いひしらせんと思ふに、(ヌ)有明の月のありつゝもと打いひて、(ル)さしのぞきたる、(ヲ)かみのかしらにも、よりこず、五寸ばかりさがりて、火ともしたるやうなる月の光、もよほされて、おどろかさるゝ心地しければ、やを

ら立出にけりとこそ、語しか　第三節忍ふ人の思ふ事恨むる事などのいひにく由をかけり　物語をもせよとは人々寄合ていふ心也　さかしらにとは人々の中にかしこけに請(ウケ)あひて物語はせず却て他の物語する邪魔(ジヤマ)など云義なり是則物語のいひにくき義を記して次下に或所の物語を記されたり　中の君とは女房成べし　公達にはあらね共とは家の子にてなきとなり　其心いたくすきたるとは好色の心深きと云義なり　ことの葉をつくしとはいにしへ今の事時節の風景などを艶にいひそへかきくどく心なり　今はいぬらむとは中の君の詞なりつらく落ぬさまなりされども男の歸を見送る由なり　えいはせえんずるほどなりとは男がおもふ事もえいはで恨佗ぶると云心也　出るやうにみせてとは男が出去やうに見せて又立歸るとなり是中君のつれなきを猶したふ心なり　いひしらせんとは中の君にしらせんとなり　うちいひてさしのぞきとは男が是非共としたふさまなり寄こずとは中の君が出來ぬとなり　おどろかるゝとは明がたに成し心なり

（ユ）いせ物語に「行やらぬ夢地をたどる袂にはあまつ空なる露やをくらん　（メ）小町家集に「長月の有明の月の有つゝも君し來まさは待こそはせめ　（ミ）上頭(カミノカシラ)上の邊なり　（シ）廿日あまりの月の五寸はかりなるは明かたの時分なり

（ヱ）女房のまいりまかでには、人の車をかる折も有に、いと心よくかしたる顔にうちいひてかしたるに、牛(ウシ)飼童(カイワラハ)の、例のし（ヒ）もしよりも、しもざまにうちいひて、いたうはしりうつも、あなうたてとおほゆかし、男どもなどの、物むつかしげなるけしきにて、いかて夜更(ヨフケ)ぬさきに、（モ）おいて歸なんといふは、（セ）猶しうの心をしはかられて、とみの事なりと又いひふれんともおぼへず、業遠朝臣(ナリトヲアソン)（ス）の車のみや、夜半曉(ヨナカアカツキ)わかず、人の乘に、いさゝかさる事なかりけん、よくぞ、をしへならはしたりしか、それに道にあひたりける女車の、ふかき所におとしいれて、え引あけで、牛飼の腹立ければ、我從者(ワカズサ)して、（一）うたせさへしければ、まして心のまゝに、いましめおきたるに見へたり　第四節人の從者など雇使ふに心あしく物むつかしがりする者には用が云にくきと云心にて當段に入られたり又

さやうの者をつかふ主人も推量(ナシハカ)られて用がいひにくきと云義も有べし　いと心よそひし以下はかす人のうへを云なり　牛飼童以下は人の從者のあしき故を云なり　おのこ共とはやとひし男共也　猶しうの心をしはかられとはかしたる主の心迄をおもひやらるゝと也　とみの事なりと又いひふれん共おほへずとは急速の折とても又用の事がいひやられぬとなり　さる事なかりけんとは牛飼童のむつかしげに見えぬ由なり　それに以下業遠の從者のいみじき事をかけり　女車とは道にて行逢たる女車なり　牛飼の腹立とは女車の牛飼なり　我從者してとは業遠の從者にいひつけて扶助(タスケ)やられしとなり　まして以下は地の詞なり人に雇れてだに實に働にまして主の業遠の下知なれば心地よけに動きしも常々の制戒の程思ひやられて見えしとなり

(ヱ)參退マイリマカンデ　まかでヲまかんてとよむへし　(ヒ)仕丁　下仕シモシ　(モ)追オヰテ　牛を追ふ事を云なり　(セ)主シュ　主君なり

(ス)高階氏譜(ニク)云

天武天皇——高市親王 太政大臣 ——長屋王 號佐保左大臣 正二左大臣
—桑田王 從五上 ——礒部王 三河守 從五上 ——石見王 從五上
—峰緒 從四上右中辨承和十一賜高階眞人姓 ——茂範——師尙 從四上右中將
—良臣 正四下宮內卿 ——成忠 侍讀一條院從二 ——敏忠 從五上左衞門權佐 ——業遠(ナリトウ) 美濃守丹波守正四下春宮亮

(一)打きウチサヘ

すき〲しくて、獨ずみする人の、夜はいつらに有つらん、曉(アカツキ)に歸て、やがておきたる、まだねふたげなるけしきなれど、硯とりよせ、墨こまやかにをしすりて、ことなしひにまかせてなどはあらず、心とゝめてかく、(二)まひろけすかたおかしう見ゆ、白ききぬどものうへに、(三)山吹紅などをぞきたる、しろきひとへの、いたくしぼみたるを、打まもりつゝ、かきはてて、前なる人にもとらせず、わざとたちて、小舍人(コトネリ)わらはのつき〲しきを、身ちかくよびよせて、打さゝめきていぬる後も、久しくながめて、經のさるべき所々など、(四)忍びやかに、口すさひにしゐたり、おくのかたに、御てうづるゆなどしてそゝのかせば、

あゆみ入て、文机にをしかゝりて、文をぞ見る、おもしろかりける所々は、打ずむじたるもいとおかし、手あらひて、直衣ばかりうちきて、鉢をぞそらによむ、まことにいとたうときほどに、ちかき所なるべし、ありつる使うちけしきばめば、ふとよみさして、返事に心いるゝこそいとをしけれ　第五節我從者なれ共いひにくき事の有由をかけり其いひにくき事は色好みの道なれは也　すき／＼しとは色ふかき心をいはん爲なり　ことなしひにまかせてなどはあらずとは事なきさまにはもてなさずとなり是則人目はゞかる體をいはん爲なり　しぼみたるを打まもりとは文かきつゝ物案じ顏に衣の妻などを見居たるさまなり　かきはてゝとは文を書果て也　前なる人にもとらせずとは長などには心を置て艷書を持せやらぬ義なり是當段のいひにくき心なり　よびよせてとはよびよせいひくゝめやると云義なり　打さゞめきていぬるとはわらべがいさみ行義なり　ながめてとはわらべの行跡を其主が見る由なり　經のさるべき以下は艷書やりしを經などよみ勤などするさまにもてなしたるとなり　おくのかた以下は晨に皆起出て手水など奉る心なり　あゆみ入てとは彼色好みの人が奧の間へ行となり　鉢とは禪祿の類成べし　ちかき所なるべしとは艷書やりし方は近所なればにや使が程なく歸りたるとなり　ふと讀さしてとは鉢をよみさして返事を見んとする義なり凡いひにくきと云心詞の中にあらはに見えたり

(一)衣なとの妻すその打ひらきてかきをさゝぬさまを云なり　(二)(三)山吹紅　おの／＼衣の色なり前に見えたり　(四)御てうづるゆ　調進する湯也早旦の御行水なり貴人は早旦に湯をめして神明佛陀を拜し咒文陀羅尼をとなへ給ふ事侍る故なり

淸げなるわかき人の、(五)直衣も(六)袍も(七)狩衣も、いとよくて、きぬがちに、袖口あつく見えたるが、馬に乘ていくまゝに、供なるおのこ、たて文を、目をそらにて取たるこそ、おかしけれ、前の木立たかう、庭廣き家の、東西のかうし共あけわたしたれば、凉しげにすきて見ゆるに、母屋に、四尺の几帳立て前に(八)蒻をきて、四十餘計の僧の、いときよげなるが、うす黑の衣、うす物の袈裟など、いとあさやか

に、うちそうぞきて、香染の扇打つかひ、千手多羅尼よみゐたり、物のけにいたうなやめば、うつすべき人とて、おほきやかなるわらはの、髪などうるはしき、すゝしのひとへ、あざやかなるはかまながくきなして、いざり出て、よこざまにたてる几帳の前に居たれば、外ざまにひねりむきて、いとほそう、にほやかなる、とこをとらせて、をゝと、めうちひさきて、よむ、多羅尼も、いとたうとし、けせうの女ばう、あまたそひゐて、つどひまもらへたり、久しくくもあらで、ふるひ出ぬれば、もどの心うしなひて、おこなふまゝに、したかひ給へる、佛の御心もいとたうとしと見ゆ、せうとのうちきしたる、ほそ鬼者どもなどの、うしろにゐて、うちわするもあり、皆たうとがりて、あつまりたるも、れいの心ならば、いかにはづかしとまどはん、みつからは、くるしからぬ事としりながら、いみじうわびないたるさまの、心ぐるしげなるを、つき人のしり、人などはらうたくおぼへて、几帳のもとちかくゐて、衣ひきつくろひなどす　第六節色好みの人の物へ行道にて供の男を思ふ妻の方へ文など持せやる事のいひにくきをかけ

り又物のけを祈る時よりましが口はしりておかしういひにくき事どもあめく由をかけり皆是當段いひにくきと云題の心を述られたり　清げなるわかき人とは色好みの人を云義なり　いくまゝにとは物へ行々いひ付る義なり　目をそらにとは供男が仰ひて承るに艶書を渡し妻の方へなどゝいふ事はいひにくきと云義なり　前の木立以下は物のけを祈る事なり　物のけにいたうなやむとは女房が悩むとなり　うつすべき人とは物のけをうつすよりましの人なり　外ざまにひねりむきとは驗者がよりましの居る外さまの方へ向て祈る義なり　多羅尼もいとたうとしとは前の千手多羅尼に對して云義也前の千手多羅尼はたゞ何となく祈禱によみ今の多羅尼は物のけをうつす修法なれば更にたうとく覺しとなり　けせうの女房とは物のけわつらふ女房の召使人々をいふなり　まもらへたりとは祈るさまをみる心なり　ふるひ出とはよりましがふるひ出るとなり　もとの心うしなひておこなふとは行者が五体投地して祈る義なり　したがひ給へるとは驗の有事を云心なり　れいの心ならばとは

よりましが口ばしるを尋常の本性のことく思はゞ聞人もはづかしからんとなり　みづからとはよりましが事なり　つき人のしりとはよりましが口ばしりくるしげに云事をつかれたる人は心覺へ有てしれると也　人などはらうたく覺へとは見る人達はいたはしくおもひよりましを介抱する心なり

(五)直衣　前に見えたり　(六)袍　ウヘノキヌ　名目抄云位袍又號二表衣一深紫淺紫深緋淺緋緑黄衣

(七)同云狩衣或布衣　(八)繪　ワラウタ　圓座の事なり前にも見ゆ　(九)千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經と云物一卷あり其中の陀羅尼は今眞言家に聲明とする所也又其經文に云く復白レ佛言世尊若諸人夫誦二持大悲心咒一者得二十五種善生一不レ受二十五種惡死一也云々亦妃后婇女孝敬向レ王諸龍鬼神擁二護其國一雨澤順レ時果實豐饒人民歡樂又若家内遇二大惡病一百怪競起鬼神邪魔耗二亂其家一惡人横造二口舌一以相二謀害一室家大小内外不レ知者當下千眼大悲像前設二其壇一至心念二觀世音菩薩一誦二此陀羅尼一滿中其千遍上如レ上惡事悉皆消滅云々佛告二阿難一若爲二富饒種々珍財資具一者當レ於二如意珠手一若爲三種々不レ安求二安穩一者當レ於二羂索手一若爲二腹中諸病一當レ於二寶鉢手一若爲三降二伏一切魍魎鬼神一者當レ於二寶劍手一若爲レ降二伏一切大魔神一者當レ於二跋折羅手一若爲レ摧二伏一切怨敵一者當レ於二金剛杵手一若爲二一切處怖畏不レ安者一當レ於二施無畏手一云々衆生濁亂法滅時婬欲火盛心迷倒棄二背妻聟一外貪染晝夜邪思无二暫停一若能稱二誦大悲咒一婬欲火滅邪心除我若廣讃二咒功力一一劫稱揚无二盡期一云々　以上經に說所の陀羅尼の功德如レ斯其陀羅尼は世の人みな誦してしれる事なれは爰にしるさす但其功德をしらせんかなめ略して經文を記し侍る

(十)膝行出　イサリイツ　(◎)獨鈷　トツコ

(△)鳴々チヽ　唱ふる聲のひゞきなり　(圓)ひさきふさき也同音相通なり目打ふさぎてとなふる義也

(⊙)顯證　ケセウ　ケンシヨウ　はれかましくいちじるくあらはるゝ心を云詞也　(㊀)本性もなきと也　(◇)一本護法もけにたうとしトアリ佛の御心と有義可ならん歟　(㊉)或本せうとのうちきしたる以下皆たうとかりてト云迄詞ちがへり則ち如レ左　せうといとこなともみな〳〵いけしたりた

うとかりてト有其餘は同し詞なり何れか可なる事をしらす且疑を闕のみ

かゝるほどに、よろしとて、御ゆなどいふ、北面に(イ)とりつぐ程をも、わかき人々は、心もとなく、ばんも(ロ)引さげながら、いそひてくるや、ひとへなどきよげに、うす色の裳など、なへかゝりてはあらず、いときよげなり、申の時にぞ、いみじうことはりいはせなどしてゆるしつ、几帳の內に有とこそ思ひしか、淺ましうもあらはに出にけるかな、いかなる事ありつらむと、はづかしがりて、髮をふりかけてすべり入ぬれば、しばしとゞめて、加持すこしして、いかにぞや、さはやかになり給へりやとて、打ゑみたるも、(ハ)はづかしけなり、しばしさふらふべきを、時のほどにもなり侍(ニ)ぬへければと、まかり申て出るを、しばし、ほうちはうだうまいらせんなど、とゞむるを、いみじういそき歸所に、つけたる上らうとおほしき人、簾のもとにゐさり出て、いとうれしく立よらせ給へりつるしるしに、いとたへかたく、思ひ給へられつるを、たゞ今おこたるやうに侍れは、返々なん悅ひ聞へさする、あすも、御いとまのひまには、物させ給へなどいひつゝ、いとしうねき御物のけに侍めるを、たゆませ給はさらなん、よく侍べき、よろしく物せさせ給なるをなん、悅ひ申侍ると、ことばすくなにて、出る程いとたうときに、佛のあらはれ給へる(ホ)とこそおぼゆれ、淸げなるわらはの、髮ながき、又おほきやかなるが、鬚はおひたれど、おもはすに髮う(ヘ)るはしう、したゝかに、むくつけげなるなどおほくて、いとまなげにて、こゝかしこに、やんごとなき覺へあるこそ、法師も、あらまほしきわざなめれ、おやなど、いかにうれしからんとこそ、おしはかるれ　是も六節內なり但し爰には物のけにつかれし女臈の本腹の由を云なり　かゝるほどによろしとてとは驗者の力にて本腹し給ふとなり　御ゆとは女臈の御行水まいる義なり　わかき人々は心もとなくとは御物のけは去たりとはいへ共ちかき女房達などはいまだおそろしう思ふとなり(ロ)ひとへなど以下は御盤持て御湯殿に參る女房の裝束を云なり　申の時以下はよりましを放ち宥事を云なり　几帳の內に有とこそ思ひしかとは物のけ煩し女臈の詞なりあらはに出て祈られし事を耻かしう思

はるゝ義なり　又云よりましが辱る義なり　いかにぞやとは驗者か問ふ心なり　はづかしげなりとは女﨟のはづかしげにて返答もいひにくき心なり　是則當段いひにくき物と云題の本意なり　しばし以下は驗者の詞なり　しばしほうちはうたうまいらせんとは女﨟の驗者に布施供養をひかんと仰らるゝ義也　いみじういそくとは驗者かいそき歸となり　つけたる上らうとは今の世の育添などの類なり　いとうれしく以下は主の女﨟の本腹し給ふ禮を云義也　あすも御いとまのひまには物させ給へとは驗者に又見廻加持し給へと云義也　よろしく物せさせ給ふなるをなん悦ひ申とは驗者の力にて本腹し給ふを悦ふと云義なり　いとたうとき以下は地の詞なり行者の褒心なり　淸けなるわらは以下の詞別義なく心あきらかなりされども當題のいひにくき物と云義心得かたき歟只傳本のまゝに寫し置侍る宜しく題の心に引合せて見るべし

(イ)禁秘抄云早旦供御湯主殿官人奉行釜殿運湯須麻志女官二人取傳藏人爲鳴絃候戸外內侍申具由御般一桶二內侍候御垢典侍或上﨟女房進御湯雑奉河藥次典侍取河藥器拋板于時藏人鳴弦主殿官人稱名主殿助藏人候之時或稱名是每日每度事也云々　又御手水條云凡主上御座不可向西之由在江記御手水可向北也云々　御湯御手水なとは北面にしてめす由有職の沙汰あり　(ロ)盤バン　(ハ)六時の勤の時也申の時と前に侍れは日沒の勤の時成べし　(ニ)ほうちはうたう　未詳　(ホ)或本いはく又おほきやかなる　かひなを出しおもはすにかみなかきかうるはしき又しらかみむくつけゝなるなとおほくてトアリ考合せて心を味はふへし　(ヘ)蠢ムクツケシ　貪同　白氏文集　おそろしき心なり

百五十七段　見ぐるしき物、衣のせぬひ、かたよせてきたる人、又のけくひしたる人、下簾(ト)きたなけなる、上達部の御車、例ならぬ人の(チ)まへに、子をゐていきたる、袴きたるわらはの、あしだはきたる、それは今やうのものなり、つぼさうぞくしたるものゝ、いそぎてあゆみたる、法師陰陽師のかみ(リ)、かうふりして、はらへしたる、又色くろうやせにくげなる女の、(ヌ)かづらしたると、鬚がちにやせ〳〵なる男と、ひる

ねしたるこそ、いとみぐるしけれ、何の見るかひにふしたるにかあらん、夜などは、かたちも見えず、又をしなべて、さる事となりにたれば、我はにくげなりとて、おきゐるべきにもあらずかし、つとめておきいぬる目やすし、夏晝寢しておきゐたる、いとよき人こそ、今すこしおかしけれ、ゑせかたちはつやめきねはれて、ようせずは、ほうゆがみもしつべし、かたみに見かはしたらん程の、いけるかひなきや、色黒き人の、すゞしひとへきたる、いと見ぐるしかし、のしひとへも、同じくすきたれど、それは、かたはにも見ず、ほそのとをりたればにやあらん

此段題のごとく見ぐるしき事共を記されたり其品々詞に見えたり　衣のせぬひとは着物の背の縫目なり　又のけくびとは衣の襟と首との間をとりのけて着たるを云なり　例ならぬ人とは貴人或は隔心成方などをいふ心なり　子をゐていきたるとは隔心なる人の前へ幼稚子をつれ來るは見ぐるしき物なり　袴きたるわらはとは下﨟の義なり　それは今やうとは當時をしなべて袴着てあしだはきたるとなり　つぼ裝束とは女房の抱取すがたなり抱取すがたにて走あゆむは見ぐるしき者なり　法師陰陽師とは陰陽師の入道なり　かづらしたるとは長鬘などかけたるを云也　夜などはかたちも見へずとはあしきかたちも夜は見へねば晝のごとく見ぐるしからぬとなり　又をしなべてさる事となりにたればとは夜枕を竝ぶる事は世の並てする俗なれば見にくき人も目にたゝぬとなり　つとめてとくおきいぬるとは朝に早く起ぬるはよきとなりいぬるのい文字心なしいのねられぬなど云いの字の心なり詞のやすめ字なり　夏晝寢以下は重ねてよき人あしき人の晝寢のすがた顔を論じて見ぐるしき心をしらするなり　ゑせかたちとはあしき貌なり　つやめきねはれてとは紅粉白粉なども光うせてきらめきねはるとなり　ようせずはとはあしくせば寢顔の見ぐるしからんとなり　かたみにとは男女の互に見る義なり　色黒き以下は衣に依て色黒き人に似合と不似合との見ぐるしき義を云なり　すゞしとは透通る故色黒き人は肌透て見くるしきとなり　のしひとへとは熨目の單衣なり　ほそのとは染糸にて筋を織付たる義成へし染色に

まぎれて肌の見へぬ心也　凡是迄當段見ぐるしき事を記されたり扨此下に有ものくろうなりて以下の詞を或本には當段の内につゞけて書り就ニ其心ニ按ずるに此双紙を見ぐるしきと云心にて當段見ぐるしきに此下の詞をかゝれたるにや又傳本にて題の詞物もなくして巻軸にものくろう以下の詞を記されたり所詮何れの本に随がふとも此下の詞は此双紙の跋(ハツ)と見へたり

(ト)下簾　前に見えたり車の出衣(タシキヌ)と云物なり

(チ)袴にあしたはきたる不都合に見くるしき心明らかなり是上代なればいまた今時のごとくには侍らで少納言時代に今やう事とていやしめられしなり　(リ)法師陰陽師のかみかうふりして此句讀かみにて句を切べし頭の字なり　(ヌ)すべらかし長かもしと云ものかけたるをかつらしたると云なり

▲或本ふくいとくろき男の白はり着たるトアリふくいトハ俗ニ云ふつくりと肥色黒き心なり

ものくろうなりて、(ル)文字(モジ)もかゝれずなりたり、筆もつかひはてゝ、是を書果(カキハテ)ばや、此双紙(サウシ)は、目に見へ心におもふ事を、人やは見んずると思ひて、つれ〲なるまとひのほど、書あつめたるに、あひなう、人のためびんなきいひ(ヲ)すぐしなどしつ(ワ)べき所々もあれば、ようかくしたりとおもふを、泪せきあへずこそなりにけれ、宮の御前に、(カ)内大臣(ウチノオトヾ)の(ヨ)奉り給へりけるを、これに何をかゝまし、上の御前には、史記(タ)といふ文をなん、かゝせ給へると、の給はせしを、枕にこそはし侍らめと、申しかは、さはえよとて給はせたりしを、あやしきを、こよやなにやと、つきせずおほかる紙のかずを書つくさんとせしに、いと物おぼへぬ事ぞおほかるや、大かた是は、世中におかし(レ)き事を、人のめでたしなどおもふべき事、猶えり出て(ソ)歌なども、(ツ)(子)(ナ)(ラ)木草鳥虫をもいひ出したらばこそ思ふほどよりはわろし、心見になりともしられめ、たゞ(ム)心ひとつに、おのづから思ふ事を、たはふれに書付たれば、物に立まじり、人なみ〲なるべきみゝを聞べき物かはとおもひしに、はづかしきなども見る人はの給ふなれば、(ウ)いとあやしくぞあるや、げにそれもことはり、人のにくむをもよしといひ、ほむるをもあしといふ人は、(ヰ)心の程こそをしはからるれ、たゞ人に見へけんぞねたきや（落）此詞は枕双紙一

部の後序と見えたり　物くろうなりてとは料紙の皆書果てくろみたる義也又云物事苦勞に覺ゆる心なり是を書果てばやとは心に有事を書盡に不及と云義なり是迄は此双紙を書終故を云なり此双紙以下は書集る間の心を云也必人やは見んずるとは人には見へましものをと云心なり　びんなきいひすぐしとは人の物學びする便にはならで世の戲事のみいひもてゆきたるとなり　泪せきあへずとは此双紙の世に漏て本意なきを悔ゆる心なり宮の御前以下は此双紙を書初し起を云なり　奉り給へるとは料紙を進せられしとなり　これに何をかゝましとは中宮の少納言へ給はるべきが何事をか書ぞと仰らるゝ義なり　史記といふ文をなんかかせ給とは中宮の御詞也御門には唐の史記と云文を書寫させ給ひしか少納言もさやうの文を書べきにやと尋させ給ふ義也　枕にこそはし侍らめとは少納言の詞なり身をはなたぬとの心を枕にとは申さるゝなり　さばえよとは中宮の御詞なりさうあらば給はらんとなり　あやしきをとは此双紙を卑下する義なり　大かた是はとは一部に書載せたる大綱を云也　世の中におかしき事とはいにしへの龜鑑に成事ではあらで只今世の中に有おかしき戲事を書となり　猶えり出てとは歌木草鳥虫など少許なれば面白きふしもあらじ猶撰出て書のせ侍らば見所も有べきにと云義なり　心見になりともしられめとは猶撰出て侍らば世の人試みそれぞともしらめとなり　物に立まじりとは古き物語歌双紙やうの物にまじへらるべくもあらぬとなり　みみを聞べき物かはとは世の人がおかしき事そとはきかで思ひおとし侍らんとなり是迄少納言一向に謙退せられし心なり　はづかしきなども以下は此双紙を賞玩する人も侍ればそれも少納言心にはあやしう如何成事か善惡を見出し給ふらんと氣つかふ心をかけり　げにそれもことはりとは褒貶するも理ぞと打任せて立却て其人の心の程推量となり〽人のにくむ以下は毀譽も正しからぬ義を云也　たゞ人に見へけんぞねたきやとは毀譽は兎もあれ只此双紙の世にふれんこそ本意にはあらねと愼み制する心なり　已上最初の大綱第六に本文釋すといひしは是迄の義なり於其釋義而あたらざる事入ほがな

る義など數々侍へけれとも上代の物を杳末世に初て試み釋すれば誤有べからざるにはあらじたゞわが門人の物學ひする助にもならんかしと少納言の旨に任せて譽も毀もよしあしの外に打遣侍るのみ都て一部の註釋畢　又第七に難問口决の僅は爰に灑し侍るなり

(ル)はてゝの下のて文字清濁兩說なり清時は筆の切れ損する心なり濁時は筆紙はいまたあれどももののくろうなりて侍れは心に思ふ事をえ書おふせぬと云義なり　(ヲ)こと〳〵なる物と云段に生昌か艶なる心もなくむくつげにことやうなる由をいへり又とりもてる物の段に則光か歌をえよまてにげし事をいへり又はるかなる物の段に昌弘がおろかにして人にわらはれし事をいへりかやうの類おほく記せる故に人のためひんなきいひすくしとかける成へし　(ワ)泪せきあへすこそなりにけれト云ヲ或本ニ心より外にこそもり出にけれトアリ詞ことなれと心は同しかるべし　(カ)宮の御前　中宮の御前也　(ヨ)内大臣　中宮の御兄伊周公也傳系圖前ニ見えたり　(タ)司馬遷か史記百卷今世に流布する本也　(レ)世中におかしき事前に有し佛の供を食たりし尼か事雪の山の爭の事なとをさしておかしきと云成へし　(ソ)歌　和歌也此双紙の中に書のせし歌の事なり其歌は卷ことに見へたり　(ツ)木　卄四段ニ木はトアリ　(ネ)草　卅二段草はトアリ　(ナ)鳥　卄五段ニアリ　(ラ)虫　卄七段ニアリ　(ム)心ひとつトハ禮記に孤陋寡聞トいへる詞などをうけて卑下する義也　(ウ)世間の毀譽は善惡によらすと云心也　(ヰ)たゞ人に見えけんそれたきやト云つゞきに或本には如斯の詞あり「左中將またいせの守と聞へし時さとにおはしたりしにはしのかたなりしたゝみさしいてしものはこのさうしのりて出にけりまとひとりいれしかとやかてもておはしていとひさしくありてそかへりたりしそれよりありきそめたるなめりとぞ　以上如此の詞侍る也されと今の傳本に見えねは抄には不レ用也好む人の便にとおもひて後に記し畢ヌ

○是より以下異本に有詞を記し侍る也

▲一本に　渡りは(イ)と云次に　たちは(ロ)　玉つくり

▲同牛飼は(ハ)　おほきにてと云次に

法師はことすくなる、男だにあまりつき〳〵しきはにくし、されど、それはさでもやあらん、女はおほとかなる、したの心はともかくもあれ、うはへは(ホ)こめかしきはまづらうたけにこそ見ゆれ、いみしきそらことを人にいひつけられなどしたれど、(ヘ)みち〳〵しくあらがひわきまへなどはせで、たゞ打泣などしてゐたれば、見る人をのつからくるしうてことはるかし、女のあそびは、ふるめかしけれども、らんごそふとにすくろくはしじき、へんつくもおかし、

▲(ト)たのもしき物と云次に

(チ)したいの人の指貫きたるこそ、いとたい〳〵しけれ、前にひきあてゝまつすそをみなこめいれて、腰はうちすてゝ、きぬの前をとゝのへはてゝ、こしをよひてとる程に、うしろさまに手をさしやりて、さるの手ゆはれたるやうにほときたてたるは、とみの事に出たつへくも見へざめり

(イ)脇書に渡り十二段也　抄の二の巻にあり　(ロ)たち舘なり　(ハ)王造　陸奥也　(ニ)脇書牛飼はおほきにてトハ廿段の心ゆく物と云題の下に有詞也　抄の二の巻ニアリ　(ホ)こめかしき　こめきこゝしら皆同し心なり巨の字なり亦委の字も書なりほめたる詞なり大やう成心なり　(ヘ)道々ミチ〳〵シク　密々同　(ト)脇書ニアルたのもしき物トハ百卅二段なり抄の十二巻にアリ　(チ)したい辭退歟

▲又一(一)本に(二)清しと見ゆる物と云次に

夜まさりする物

こき(三)かいねりのつや、むしりたるわた、女はひたいのはれたるか、かみうるはしき、(四)きんのこゑ、かたちわろき人のけはひよき、ほとゝぎす、瀧のをと、

▲同本に

日影におとる物、夜おとりする物

紫の織物、藤の花、すべてそのるいはみなおとり、紅は月夜にそわろき、

▲同本に

聞にくき物、

聲にくけなる人の物いひわらひなとうちとけたるけはひ、ねふりて陀羅尼よみたる、はくろめつけて物いふ聲、ことなる事なき人は物くひつゝもいふそかし、華篥習ふ程、

▲同本に

明治四十一年十一月五日印刷
明治四十一年十一月八日發行

定價金參圓也

校訂編輯者 室松岩雄

發行者 東京市麴町區飯田町五丁目八番地
目黑和三郎

印刷者 東京市神田區三崎町三丁目一番地
小西幸吉

印刷所 東京市神田區三崎町三丁目一番地
日本印刷株式會社

發行所 東京市麴町區飯田町五丁目八番地
國學院大學出版部